

気づいたら大自然 小心者の異世界闊歩

yomi読みonly

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とあるギルメンが、いまわの際にかつての思い出とともに、叫んだある一言。

それを最後に、全てをあきらめようと意識を投げ出したら…次の瞬間に気がついたのは…

というオバロの世界を元にした、完全捏造作品です。

プロローグとアプローチの関係で、某お骨さまとは微妙にずれた時間軸で、異世界に転生します。

もちろん、宝物殿などのものは所持していないので使えず最後に口グアウトした時に所持していた「無限の背負い袋」内のアイテム類しか持つておらず、貨幣も同じ…ギルドにほとんどは置いてあるため、主武装のゴッズアイテムはギルドの霊廟のアヴァターラに残されたまま、なので、アイテムボックス内のものみ、設定が魔法戦士（魔法剣とかじゃなく魔法と剣のスイッチタイプ）なので、戦い方もそんな感じ、第一線というより2線級とのことなので、戦士職とのレベルバランスを考えて位階は第8位階まで、超位魔法は使えないという設定にしております。

目次

プロローグ	1
―序章― 拜啓、闇の中から	29
第01話 初めての朝	42
第02話 初めての交流	49
第03話 初めてのメッセ友	65
第04話 初めてのおどり喰い	77
幕間 フォーサイトの受難 “おぞましき邂逅、奇跡の生還”	95
帝国編	
第05話 歩み寄る悲劇の前触れ	127
第06話 アルシエの混乱	139
第07話 アルシエの苦悩、そして家出?	148
第08話 初めての救済(前編)	171
第09話 初めての救済(後編)	183
第10話 エルフたちとの身の上話	197
第11話 初めての武技発動	214
第12話 アルシエ、某館に招待される。	235
第13話 初めての招待	252
第14話 初めてのアルシエとのお茶会	276
第15話 みんなでこっそりナザリック	292
第16話 アルベドさんの謹慎終了	314
第17話 アルシエ、帝国から脱走する?	342
第18話 ようこそカルネ村!	361

第19話	カルネ村で過ごす夜、そして迎える朝	384
―番外―	在りし日の、A・O・G	403
第20話	フォーサイトの決心！そして恩返し	419
第21話	NPCちゃん起動！	436
第22話	その名はフレイラ	463
第23話	もう1人の「ヤシチ」	485
第24話	ヤシチ：お仕置きへのサポート	493
第25話	フォーサイト、人質の救出に協力	509
第26話	新たなるリーダー：そしてその結末。	533
第27話	突撃！夜のカルネ村！	565
第28話	決闘！ 血まみれゴブリンの大將軍！	602
第29話	その剣客の名は…、そして新たなる訪問者。	622
第30話	カルネ村行き、前夜。	640
第31話	カルネ村行き、当日早朝。	658
第32話	カルネ村行き、当日AM	675
第33話	カルネ村到着。お昼前	689
第34話	カルネ村到着。お昼どき―I	712
第35話	カルネ村のお昼どき―II	734
第36話	夜ふけのカルネ村：そして森へ。	756
第37話	森での騒動：そしてお持ち帰り	777
墳墓潜入前、修行編		
第38話	みんなで特訓、レベリング！「3つの扉」	794
第39話	みんなで特訓、レベリング！「難度90の壁」	808
第40話	みんなで特訓、レベリング！「装備の選択？」	836
第41話	みんなで特訓、レベリング！「次は難度93」	856

	第42話	みんなで特訓、レベリング！	「お昼と食休み」	880
911	第43話	みんなで特訓、レベリング！	「イメチェン、ブレイン」	
	第44話	みんなで特訓、レベリング！	「雷精」前編	936
	第45話	みんなで特訓、レベリング！	「雷精」後編	965
1000	第46話	みんなで特訓、レベリング！	「帰還！カルネ村」	
探索 大墳墓編				
	第47話	いざ！合流の地へ！		1038
	第48話	モモンの問いかけ	ワーカーの選択	1063
	第49話	グリンガムの運命		1085
	第50話	老公の処遇		1113
	第51話	想い出と、そして丸呑み		1140
	第52話	対戦！フォーサイトVSハムスケ！		1161
	第53話	支配者に賄賂、それは武技大辞典！		1190
	第54話	ルールの取り決め、初戦の相手は…		1216
	第55話	先鋒1 シャルティアVSシェイド	(前編)	1237
	第56話	先鋒2 シャルティア	VS ベル(中編)	
1295	第57話	先鋒3 シャルティア	VS ベル(後編)	1325
1354	第58話	先鋒戦 シャルティア	VS ベル(エピローグ)	
	第59話	次鋒1	コキュートス VS ベル(序編)	1385
	第60話	次鋒2	コキュートス VS ベル(前編)	1406
	第61話	次鋒2	コキュートス VS ベル(後編)	1438

第62話 両陣営、インターバル。

プロローグ

時は、西暦2138年…、場所は日本のとある地域、とは言っても、今の日本という国は結局、どこであろうと変わらず、色々と終わっているという認識の者は多い。

自分はそれでも恵まれている方だという認識はある、下を見れば、数えきれない程の「貧困層」と呼ばれる者達は存在しているのだし、もちろん自分より恵まれている者らも同様に多いのだが…

「貧困層」なのに恵まれているとはどういうことなのか…、そもそもの歴史は伏せられているが、かつて、自分がプレイしていたゲーム、ヘY G D R A S I L 〓 というゲームで知り合ったギルドメンバー、リアルでは大学教授をしていたという人が教えてくれた話では、今の若年層には決して知らされない、伏せられた歴史があつたという。

時は西暦2000年を20年も過ぎていないくらいの時、それは起きた。

そもそもの始まりはいつももあるような災害だつたという、ただの津波。

皆が皆、そう思っていたソレは…あつという間に地を飲み込み、濁流で家々や、あらゆる建造物を押し流した、そして、とうとうソレは到達してはならない建造物にまで及ぶ。

その当時は絶対安全とまで言われていたらしい、今となつては信じられない妄想という認識が浸透しているが…その時は誰もが、そうなればどうなるかなど、知識としては知っていたが、実際に起きるといふ想定をしている者はいなかったのだという。

その建物は、原子力発電所。
起きると危惧された現象はメルトダウン

あつという間にその津波という暴力は、ソレを飲み込んでしまい、被害が甚大になった。

かろうじて、中で働いていた人達の力、使命感、命を投げうってまで被害を押しとどめようという精神を持つ者たちがなんとか爆発という致命的な危機を回避させてくれた…そのたった一つの思い。

——その偉業のお陰で自分たちはなんとか救われたが、残されたのは核燃料、もちろん放射能に汚染されている…それを長い間、原子力発電所が復旧するまでは…と、とにかく先延ばしにしていた時の権力者たちは、最終的に、海に流すか、地に埋めるか…という究極な選択を選ばざるを得ず…結局「海に流すのは下策」とばかりに地中深くに埋めたらしい。

もちろん、核燃料だったもの…すでにソレは汚染物質であることに変わりはなく、嚴重でとにかく強固な容れ物に「その液体」を人力ではなくロボットにそれを行わせ、汚染されたロボットごと、地下深くにソレらを埋めたということだ。

そして、日本という国は誰もが知るように地震大国と呼ばれている。

そんなものを地面の下、地下深くに埋めて、数百年、数千年、無事で居られると誰が考えたのだろうか…？

地の底に埋めたことで、その土地以外に住んでいる者達は、時を追うごとに心の中から危機意識…そんな事件が起きたこと、そんな危ないモノが地の底に埋まっているという事実すら頭の中の記憶から薄れさせていった。

そして、月日が流れた西暦2092年、ついに大地震が起きてしま

い、地の底で眠っていた脅威が目を覚ました。

それまでも大小、様々な地震があった、きっとそれも要因の一つだろう、全ての要素が重なり合い、引き金となったのがその大地震だったと言っていたのはその大学教授、アバター名は「死獣天朱雀」さんの談であった。

地下深くに埋められていた核燃料の汚染物質を入れていた容器の損壊：それも1つや2つどころではない：掘り下げて確かめたわけではないらしく、詳細は分からないという話だったが、恐らくほとんどの容器からソレらは地面に浸透してしまっただけらしい。

そこからは難しい話になって、詳しくはわからなかったが、朱雀さんいわく、大自然の循環によって、地面から地下水にまざり、地下水から時間をかけて地上近くまで染み出てきたソレは、植物や、食物などを通して広がる。

植物に浸透したということは、光合成などによって、浄化されないまま少しずつではあるが、大気にまで広がっていく。

無論、根から吸い上げた汚染物質を取り込んでしまった樹々たちも無事では済まず、それらから先は汚染されて行く事自体を、誰も止められずにいたのだそうだ。

そして、ついには空まで汚染された世界。

そこまで行ってしまったら後は加速度的に汚染は広がり、止められるものではなかったという。

もちろん植物や野菜なども気が付いたら手遅れおなるのは当たり前だろう。

学者たちはしきりにそうなる前に警告は発していたらしいが、それは時の権力者によって「市民たちに動揺を与えないため」という「お為ごかし」で、情報操作をされ

地位のある者、資金力のある者、国にとって重要であろう者らなどを厳選して、逃げ場所へ「シエルター」を作り始めた。

その「シェルター」は、特に大きな規模で建造され、まだ汚染されていないなかった地域（海を隔てた先の土地、北海道や、沖縄など）から健康的な土壌から水から何から、あらゆるものを（恐らく事故直後の：まだ広がっていない時期から）運び込み、さらには特別な濾過、蒸留がされた純水を作り出せるようにと、そういう技術、装置を作り出すのにも余念はなく、いつから準備していたのであろうかと思わせる程、その区域での生活には全てがあり、全てに於いて完結して、すべて自給自足できるようにと、技術の粋を集められ、そうして作られた「絶対安全」な領域を、人類は完成させた。

後にその区画にできた一帯を人は「アークロジ」と呼ぶことになる。

最初に話した「貧困層」と言われる者達は、そのアークロジの「外」に住まざるを得なくなった者たちの総称。

更にアークロジの「内側」に住む健康的な生活を送る者達全てを当てた言葉。

それが「富裕層」だ。

そこに住めた者達は無論、権力者だけではなく、その施設を作るために巨額の費用を用立ててくれた者や、その家族も含まれる。

有名な：もしくは著名な：、又は人々の人心掌握に一役も二役も買ってくれそうな者らも含まれていた。

そういう者でなくとも多額の資金を吐き出して、そのアークロジの住居を購入できるだけの資産を持っている者らは、文字通り「金の力」で、安全な立場を買う事も出来た。

買うことが出来なければ、貧困層の仲間入り、買えるだけの資産のある者はこぞってアークロジの中に安全を求めた。

そんな世界に於いて、アーコロジーに住む者達からすれば、外の者らは汚染された者であり、それ以上でもそれ以下でもなく、富裕層の多く（全てではない）が、使い捨ての消耗品としての価値しか、アーコロジー外の者らに見出さないといい割合が多くなる。

仕事などではそれが特に顕著で、現場仕事、危ない仕事、汚染された大気の下、営業回りをさせられるなどは、主に貧困層に割り当てられる。

しかしそれでも、そんな中だとしても、一日に数百人規模で死なれては困るようで、すぐに呼吸する時用にと、清浄呼吸用の外出補助フィルターが発売された。

だがそれは大変高額で、アーコロジーの住民レベルでなければ手が出ない程、もちろん保険などが利くはずはない…なにしろ「貧困層」の住民で国が要求する保険の月額を払える者など、数えられるほどしかない…それこそ富裕層でなければ支払い続けるのは難しかったのだから…

無論、高い金を出せば、その呼吸用のフィルターを購入する事はできるが、その為に資産を投げうって生活（飲食や住環境など）ができなくなつては意味がない。そのため、ボくら「貧困層」は市販の花粉症や、粉塵などを吸い込まないようにする、という程度のマスク装着を余儀なくされていた。

もちろんそんな生活環境で外と中の移動、そして、そんな空気を吸いながらの仕事環境などを毎日続けていれば、自然と…当たり前だが身体は蝕まれていく。

高額な方の呼吸補助フィルター付きのマスクがあればそんなことも起きないのだが…かと言って後ろ盾のない「貧困層」の住民がそんなものを万が一でも持っていたら、一日…いや、1時間と保たず、別の「貧困層」の誰かに奪われ、そして、奪っていった者も、その瞬間に奪われる側になる。

そんな世界で、自分は父も母もいて、共働きという環境ではあったが、それは周囲のみんなも同じ環境だったため、少しもさみしくないし、疑問もなかった。

だが、そうは言っても世の中の流れは止まってはくれない。

世間の常識は、自分が生まれるよりも前に、あっさりと変わってしまった。

義務教育は「小学生まで」と国が決めてしまったのだ。

それもギルドメンバーだった大学教授の人がその理由を教えてくださいました。

「国は反乱分子を作らないために、市民に頭の良さを求めない、自分たちに都合のいい駒を作ればいいということになったのだよ」と：：そう苦々しく言っていたこともあった。

汚染前では普通に買った物も、今では高額：：食料が栄養剤になり、水道局が定額で各家庭にいきわたらせていた水も：：今となっては毎月支払う形、かつては2か月に一度の支払いの時代もあった様だが：、それも、飲み水とは区別されていた、水道から飲むことは推奨されず、飲み水は買うもの：：となり果てていた。

そんな環境では小学校を卒業するだけでも、今の世の中、実は至難の業となった。

なにしろ一般の病院で処方される薬でさえ、「富裕層」向けの病院とは区別され、一般の病院から自分らに回されるのは、期限の切れた、金持ち連中が買わなかったようなモノしか回ってこない現実も厳然としてあったのだから：

それなのに、学校の授業料が良心的であるはずもなく、6年も支払い続けられるだけでもレベルの高い行い：：給食費だつてバカに出来ない、安全安心な食材など、そんな汚染された世界では滅多に出回らず、ほとんど液体のような栄養だけ摂取できるようにされた加工食品、そんな物でも自然と価格は高騰する、ボクの両親は、そんな状況で中学まで行かせてくれた。

父の仕事が急速に悪化し、資金繰りがうまく行かなくなつたため

に、2年生の3学期が終るより前に中退という形になってしまったが、小学校では学ばなかつた知識などが少しでも学べたのは大きかつた。

中学中退で社会に出たはいいが、扱いは「小卒」以外の何物でもない…。

数年、職場で肩身の狭い想いはしたが、それもその数年で済んだ。

中学に居た時にクラスメートで友人だつた穴沢が管理職候補として入社してきたためだ。

中学の卒業というステータスは高校卒業に比べれば数段劣るものの、小卒を束ねる責任者という立場に据えるには適任のようだった。

入社してきた「穴沢」と自分は、顔を見るなりお互いのことを思い出し、仕事時間が終わってすぐに飲みに行つて意気投合した。

そして穴沢が上役になつてからは、今までの上司からの扱いとは全く違う、別世界のような働き方が出来るようになった。

そんなある日、国是として、国民全員にナノマシンを体の中に埋め込み、そこからの情報を登録することで、より効率的に住民らの管理をしやすいように…という方針が打ち出される。

それを埋め込まれる時は抵抗はあつたが、国が珍しく、格安でその手術を受けさせてくれ、補助金も出すという待遇ぶり、その当時、国民にも普及しつつあつた手ごろなテクノロジーの一環であつたダイブシステムにも使えるよう…他にも汎用性を広げようと、首の後ろに穴のようなもの（機器）をつけることを推奨された。

それを付けられたら、首の後ろに接続端子がいきなり自分の体でできるのだ。

それは、自らの脊髄に直結するように埋め込まれるため、一人一人認識コードが違い、万が一、水などが染みたりすれば死活問題だという情報は、事前に医者から知らされる事になつた。

不安でもあるし、担当の医師からも相応の注意がなされる。

水に注意すること、入浴は首までつかからないこと、防水用のネットカバーを購入しておくなさい、スチームバス程度に普段は抑え、常に首の後ろは濡らさぬように…

という条件も毎日の生活で気をつけねばならなくなった。

プラグを差し込む端子部分には浸水しないようにシャツター式の…皮膚と同質素材の疑似筋肉を、保護用としてつけられることになった。

制限も多かったが、その分、へYGGDRASILでの期待の方が当時は大きかったように思う。

それを付けければ、イヤホンジャックのように、専用のプラグを差し込むだけで、ダイブシステムにアクセスできる…という娯楽向けの理由が表向きだったが、それもサーバー単位で、国民を登録し、簡単に犯罪歴や、家族構成など、必要な情報を掌握するため、必要なものを収集するために…と、「貧困層向け」に開発されたものだと、へYGGDRASILを始めてから知ることになる。

その手術でつけられたナノマシン、それをつけられた個人を特定する暗証番号と、「認識コード」、そして「生体ID」、それが付いているため、へYGGDRASILではサブ用のアバターを作るのは至難の業だと言われていた。

そういうテクノロジーの知識に詳しい者は、それでも「穴」を見つけ、作れる者もいたようだったが、自分にはそれは無理だった。

もちろん、その当時は、ゲームとは言え、新しく発売されたVRゲーム、その新ジャンルである「DMMO-RPG」それらを遊ぶために使う機材、ハードの類を買い揃えるのは高い買い物だったが、ダイブシステム一式、そして、へYGGDRASILの専用ダイブアプリの購入、さらには別売りのツールなど…

それらの資金が行きつく場所のことなど、当時は考えることなどなく…。

一大ブームになっていたあの時は欲しくて欲しくて衝動買いしてしまっただ。

穴沢も、大いにそれに驚き、うらやましがってくれた、一度誘って見たことはあるが、あまり乗り気ではなかったのが不思議だったが、まあ、人の好みなどそれぞれ…

ゲームの好みだって、あるだろうとあまり気にしなかった。

それから「YGGDRASIL」をボクが遊び始めてから優に6年は過ぎた頃だろうか…。

仕事中に、とある経理申請用の書類をコピーしてくれと頼まれ、プリントアウトしたものを担当の部署に持って行って欲しいという内容を頼まれた。

いつもとは言わないが仕事の中では、まああることだし、職務の環境ではあったから、その時は気にしなかったが、画面のプレビュー画面を見た瞬間、「何かおかしい」と違和感を覚えた。

それが何かわからなかったため、上司に怒られることだけは避けたいと、後で間違いでもあったら修正をしようと思い、そのデータをコピーした。

そうして、その時は何も問題はなかったものの、同様の依頼をされるのがよくあり、その度にそのデータを不測の事態が起きた時のために別のメモリーに保存し続けていた。

もはや、何の疑いもなくその行動が半分日常化していた、そんなある日、その「なにか」に気が付いてしまった。

それはボクが「YGGDRASIL」を始めて、8年目…「YGGDRASIL」がリリースされてから9年と5か月目を迎えた初日のことだった。



「どうも、モモンガさん、今日も来ましたよ。」

「ああ、どうも、よかった、お仕事で忙しいかと思いましたが、来られたんですね」

自分が来るといつも居てくれるギルド長、名前はモモンガさん、ア宁德ツドの種族を選び、オーバーロード、つまりは死者の魔法使い、その最上級の職業まで突き詰めてアバターを磨き上げた人だ。

自分はモモンガさんを評価しているが、モモンガさん自身は「自分はそんなに大したことないですよ」と、本気でそう思っているらしい。

「あれ？ それにしても今日はボクが一番乗りですか？ 意外ですね、この時間、いつも誰かしら居る時間なのに…」

「ああ、今しがた数人、どうしてもリアルで外せない用事ができたようでした、落ちてしまったばかりなんですよ。」

そうさみしそうに笑うモモンガさん。さみしそうなのはそう自分が感じたというだけ。

〈YGGDRASIL〉では表情まではアバターの顔に浮かぶことはない、それぞれの感情表現はPOPアイコンという感情を表したような絵柄を浮かび上がらせるだけで、自分の気持ちを相手に伝えるしかできない仕様となっている。

あとはチャット機能だとか、音声での会話、あとはメールの文面でのやりとりなど…もあるのだが…。

(ちようど今、ここにはモモンガさんしかいないんだし、ちよつと聞いてみようかな…)

「すみませんギルド長、少し話をして大丈夫ですか？」

「ええ、いいですよ？ なんです？ 改まって…」

「実は仕事のことなんです…せっかくバーチャルの世界に遊びに来ているのに、リアルの話なんか持ち出して、大変申し訳ないのですが…」

「あはは、いいですよ、気にしないでください、へロへロさんなんか最

近、転職したばかりで、とにかく環境がひどい、毎日死にそうだよ、なんて愚痴から入ってるくらいですからね、社会人を最低条件にしてるギルドなんですから、そういった話について回りますよ」

「ありがとうございます、モモンガさん…実は、私が今している仕事で、妙な事に最近気が付いてしまいましたね…それがどうも…釈然としなくて…、でも詳しい部分での暗部まで解明できてるわけではないんですが、会社的に後ろ暗い空気をそこから感じてしまいました…どうしたらよいものかと…」

「それ…かなりマズイんじゃないですか？…ヤバイ空気を感じちゃうんですが…」

心配そうな声音でモモンガさんが身を乗り出し、少し声を落とす気味になる。

いつでも、どんな相手にでも親身にこうした態度で居てくれるモモンガさんは本当にみんなから可愛がられ、慕われ、そして、自分は尊敬している。

「そうなんですよね…最初は違和感だけで、どこがどう…っていうのはわからなかったんですが、最近になって、どうも…会社から出す予算としては、予算としての名目と、記載されてる金額が不釣り合いに高額な気がするんです。しかもそれが毎月とは言いませんが、2か月に一度程度の割合で、定期的に流れているようで…」

「うわあ…なんかかなり危ない感じの印象をバシバシ感じますね…大丈夫なんですか？ その職場、離れた方がいいんじゃない？」

「モモンガさん、ソレは悪手ですよ、ボクは社会一般の認識としてはモモンガさん同様「小卒」ですよ？ 中学中退っていうのは誰もそんな要素、見向きもしてくれませんし、最低限の教養しか持たないと見なされてるヤツが会社を去って、次の職場が条件のいい場所だった…なんてこと、ガチャで超々レアのシークレットを10連じゃなく1連でぶち当てるような可能性よりも低いでしょう…今の職場を辞めたら、きつと自分はここを続けられなくなってしまう、それはさすがに

避けたいですからね…。」

「そう…ですよね。こつちも、ギルメンが一人、二人と辞め始めている現状で、また一人来られなくなってしまう人が出てしまうのは悲しいですからね、今のは聞かなかったことにしてください、でもこれだけは言わせてくださいね？　くれぐれも無茶はしないようにしてくださいよ？　ギルメン同士、自分が力になれる部分は少ないと思いますが、相談ならいつでも乗りますので…。」

「ありがとうございます、モモンガさん、聞いてもらっただけでも少しは心が軽くなつたような気がします。」

「いえいえ、自分は話を聞いていただけですからね、そんな大したことにはしていませんよ？」

と、ここまで話をしていると、ギルドのメンバーがログインすると最初にアバターが出現する場所。

「円卓の間」…そこに軽やかなメロディがピロピロン♪と流れる、それはギルドメンバーの一人がログインしたというお知らせの音である。

「お、ペロロンチーノさん、ご無沙汰です。」

「お、珍しいですね、貴方も今日はインできましたか、とりあえずこれで、接近戦　or　魔法のスイッチヒッターが1人、後方からの射撃要員が1人、そして、死霊系魔法に加えてカルマ値マイナス由来の大ダメージをたたき出せる…脅威のPVP負け知らずのモモンガさんの3人がそろいましたね。」

「やめてくださいいよ、ペロロンチーノさん、私は初見の相手に気持ちよく勝たせるというギフトをあげる代わりに相手の情報を根こそぎ収集させてもらっているからこそ、勝てるっていうだけです、それにこの戦い方は「ぶにとつと萌え」さんから教えてもらったものでもありますから…威張れたものではありませんよ」

「またまたあ…そんなこと言っつて、オレも見せてもらいましたけど、アレ、やれと言われてできる人間って、そうそういませんよ？　オレ、や

れって言われてもできませんもん」

そう言つて首をすくめたアバター、鳥頭に背中の翼、装備しているまばゆいばかりの〈神器級〉武器をひっさげ、軽口を利く男、彼は、ギルド内では「エロバードマン」の通称（愛称？）で呼ばれる、ある意味、愛されるべきキャラの一人。

（女性メンバーにはあまりウケはよくないのだが…）

「そういえば、どうでした？この前貸した、全年齢版の方のあの元エロゲ、面白かったんじゃないですか？」

いきなりペロロンチーノさんがこつちに話題を振ってきた、そういえば数か月前、おすすめの作品がある、きつと気に入るからと、一本の「元」を付けるのを忘れてはいけないエロゲだった作品を勧められたのだ。

しかし、まだそういうゲームをしたことがなく、どんな内容だか全く知らされずに本家の方のエロゲを貸そうとしてきたため、遠慮した。

「いきなりエロゲはハードル高いですよ」と…。

そう言ったら。後日、「それならこつち」と言われ、Hシーンなしの全年齢版をどこかから見つけてきて、貸してくれた。

それは今となってはかなり昔のパソコンゲームから移植された家庭ゲームで遊べたソフトのデータ、古き良き作品ということ。ペロロンチーノさんもプレイして、感動したソフトの一つのようだった。

自分も、「全年齢版」なら…と、一応やってみることにした。

確かに面白かった。

その中の女性キャラの、とある形態をモデルにして、自分用のNP Cにしちやおうかと考えてしまいうくらいには気に入ってしまった。

「ええ、すごく面白かったですよ、リネ…えっと、なんでしたっけ？あの子、あの子の優しい性格もいいと思いましたが、えええ…つと、エディ？なんとかちやん？あの子もいいですよね、しかもその子の転生

？生まれ変わってから前世で抱いていた思慕の念、それが主人公に対して全く衰えていないところもまた、気に入りました！」

「お！よかった、その口ぶりだと、すでに何周か、ストーリーを進めてくれてるようですね。よかったです、アレの良さは一度プレイして辞めてしまつては決してわかりませんからね。」

などと、話のわからないモモンガさんを差し置いて、二人で大盛り上がり、ペロロンチーノに至つては「そうですか。私も四姉妹の内「四女のあの子」は好きなんですよね、ベルリバーさんは、三女の方でしたか：まさか前世からの転生後でのハッピーエンドに共鳴するとは：以外にロマンチストなんですね。」

「まじめに検証するのやめてくれませんか？ 一応、最後までストーリーは遊んでから返しますが：もう少しだけ貸してくれませんか？」

「ああ、いいですよ？なんなら、気のすむまで持つてもらつて：気が向いたらエロゲの方も：」

「それは遠慮しておきましょう、イメージが壊れるのはイヤですからね」

「頑かたくなだなあ：」

なんてことを言いながら、3人でレアドロップ狙いで外に出ようとしていた所、索敵&隠密特化の式式炎雷と、二の太刀要らずとして有名な武人建御雷がログインして来た。

文句なしの前衛、そして隠密からの初撃であればギルド内トップレベルと言われる式式炎雷をメンバーに入れた、ベルリバー、モモンガ、ペロロンチーノ、武人建御雷、式式炎雷の5人編成で、レアドロップを求め、外に繰り出していくのだった。

いつまでも、こんな楽しい日は続く、決して終わりなど、来るはずはないと：

モモンガが、そして、ギルドの者もそうであればどれほどいいか：そんな想いを皆が胸に抱きながら…。



「はあ…はあ…」

一人の男が夜の街、なるべく人通りの少ない細い道、裏路地などを縫うように駆け抜けていく。

ユグドラシルで、みんなと遊んだのはどれくらい前だったろうか：気が付いたらあつという間に、あれから2年半という月日が過ぎてしまっていた。

モモンガさんに「あの相談」を持ち掛けてから翌日、致命的なデータを発見してしまった。

それからすぐ、なるべく早い時期にモモンガさんに会いに行き、「しばらくは仕事の都合でログインする機会が極端に減ってしまうと思います。」と告げに行った。

会えなくなることを自体を惜しんでくれたが、先に相談していた内容が内容だけに、

「くれぐれも気を付けてください。 また…会えますよね？」と心配をさせてしまった。

「ええ…きつと…」と、根拠のない言葉で、別れることとなってしまったが、それから少ししてから、ギルドになる前、その前身、クランだった頃のクランリーダー、たちみーさんからメールで連絡があった。「話がある、渡したいものもあるから、時間があるとき、いつでもいいから連絡が欲しい」ということだった。

ボクも、ユグドラシルを辞めるつもりがあつたわけではなく、仕事で、ログインが遠のくという認識だったので、アバターの削除まではしていなかった。

その為、「なんだろう？」と思いつつも会いに行つたらば、ギルドの中で、唯一、鍛冶職に精通していて、メンバーたちの武器防具などを作る際には必ずと言っていい程、手伝いを買って出ていた「あまのまひとつ」さん、それと「たちちみー」さんの二人が出迎えてくれた。

この二人が去り際、「必ず戻ってこい、これは餞別だが…可能ならい

つかこれを返しに「顔を見せに」来てくれると嬉しいんだが…」と、一つの〈神器級〉^{ゴツズ}装備を手渡ししてくれ、その使い方、どんな性能があるかなど、一通り教えてくれ、「あまのまひとつ」さんからは「時間が確保できず、間に合わせになってしまつて〈伝説級〉^{レジェンド}すら準備できなかったのが申し訳ないが…」と、申し訳なさに一振りの〈聖遺物級〉^{レリック}武器を手渡された。

それらを装備して、「使いこなせられるようにの特訓だ」と言われ、しばらくは、たちちさんと二人で、手加減状態のPVPの手ほどきをされたのはいい思い出だ。

(本気で相手をされたらボクでは1分も保たないだろうからな…)

しばしの間、そんな思い出を回想していたが、そんな状況ではないと気を引き締める、今はそれどころではなかったのだ。

それは、自分がユグドラシルを始めてから8年目を迎えて少ししたある日、その工作中、というよりも…社員の一人が珍しく肺炎になり、緊急入院となったため、一人分の仕事量が増えた、その為に自分は一歩最後まで残業を余儀なくされてしまったことがあった。

自分の仕事を全て片付け、さて、最後に不備がないか見て回ろう。そう思つて、それぞれの社員の持つデスクトップPCのマウスを少し動かして回る。

シャットダウンし忘れていた場合、それで反応したりすれば、そのパソコンを改めてシャットダウンするためだ。

幸い、ほとんどのPCは何も問題はなかった。

しかし最後のパソコン…その部署の部長のパソコンのマウスに手をかけた時、モニターの画面が明るくなった。

「なんだよ、部長、自分は口うるさく行つてくせに…」

なんてボヤキを口にした直後、固まった。

なんで、部長のPCにこんなデータが？

不思議に思い、もう一度見てみる、見て、読んで、理解してから思った。

“これは見つけるべきではなかったと”

しかし、見てしまった以上、見て見ぬふりはできない。

その文書のデータを、いつも「何かあった時のために」と準備している記録用のバックアップメモリーにそれをコピーして、一通り保存していく。

これは…不正の証拠だ。

自分が勤めているのは、とある大企業の子会社。

その経理部。

自然と、経理関係のデータは集中する。

今まで疑問に思っていたことが、この書類のデータを見て氷解した。

それよりも、問題なのは部長のPCからこれが見つかったということだ。

ということとは、部長も上からこれの指示を受けて手を染めているのかもしれない。

となると、上層部のどのあたりまでがこのことを知っているのだろうか…？

下っ端である自分がこれを持っていても手に余る。

そう思った。

幸い、今、この時間にこのフロアに居るのは自分一人、このことを知ってる者は他にいないというのは幸いだった。

この扱いをどうするべきか…悩みながら、帰路に就いた。

もちろん部長のPCは、一応、映っていたデータを「上書き保存」して、間違っても消失してしまわぬように気を付け、シャットダウンさせてから消灯、施錠して会社を後にした。

その夜は無事、帰宅できた。

そして、何気なく気が付いていないふりをして、この2年半、ずっ

と抱え込みながら仕事に励んできたが、それでも、日々、仕事をして
いる内に自然と、自分にそんな都合の悪いデータのプリントアウトを
頼まれる機会が何故か頻繁に訪れる。

今となつてはそのデータも、もうかなりの量になっていた。

そんな日々が続き、どうにも心のざわめきが抑えられない、気が付
いたら、かつてのギルドメンバーの一人に連絡を取っていた。

ギルドの中でも「悪」という言葉一つに美学を求め、「なにかを成し
遂げるためには例え、周囲から「悪」の烙印を押されようと、自分が
迷わず正しいと信じた道を突き進める心の強さ、そういう悪に憧れ
る、独りよがりの善と、中途半端な悪ほど、醜悪なものはない」

と常々と言っていた彼に連絡を取る。

すでに「YGGDRASIL」がリリースされて：12年もそろそ
ろか：という時期になろうとしている今、彼はギルドをすでに去つて
いた、なぜなら、自分がギルドにログインできない日が続いていた中、
たっちみーさんが家庭の事情、なにやら娘さんに見過ごせない非常事
態が発生してしまつたらしく、「多分、もう来られないと思う」という
言葉を残し、去つてしまつたことがあつたようだ。

モモンガさんからのメールではその時期を境に、どんどんギルドメ
ンバーは激減してしまい、その「彼」も、たっちさんとは仲が悪く、よ
く対立していた人だったが、きつとその人にも何らかの事情があつた
のだろう。

今となつては「彼」もギルドに今は訪れなくなっているらしかった。

そんな「彼」が今さら自分に手を貸してくれるかは不透明でしかな
かつたが、他に頼れそうな「誰か」に心当たりがなかったため、ギル
ドメンバー時代から使っていた隠語、お互いだけに通じる言い回し、
暗号などを使い、たとえ、誰にこの文面を見られ、読まれることにな
ろうとも、決して悟られないように「自分の手には負えない厄介ごと
に巻き込まれたかもしれない、会えないだろうか？」という趣旨のみ
を、返答が来るかもわからない「彼」にメールで伝えていた。

後日連絡があり、日時と場所を指定された時には驚きと喜びが一気に押し寄せていた。

相変わらず、彼の文面は普段の口調同様にぶっきらぼうだが、不要な言い回しや、回りくどい挨拶などない分、今回の件に関してはありがたい。

「それをお願いします。」

とだけ、返信をして、その日、その時間に間に合うように仕事を終わらせ、そのデータを持って、待ち合わせ時間、その場所に向かった。

その場所に到着する前に、念のためと、メモリーデータの中の文書を、コンビニのコピー機で、出力し、プリントアウトして、実際の文面として、持参することにした。

そして、個室のある居酒屋チェーン店の中で店員に「先に来ている仲間がいるんですが」と伝え、名前を言うとすぐに通された。

まだ〈YGGDRASIL〉でみんながギルド、アインズ・ウール・ゴウンに夢中だった頃、一度だけオフ会をしたことがあった、彼はその時のままの佇まいでそこにいた。

「しばらくだな…元気だったか？」

口数少なくそれだけ言うと、彼は席を勧めてくれた。

「ええ。あなたも元気そうで何よりです。」

そう言いながら、個室の、勧められた椅子に腰掛ける。

「ところで…なんだって？　なんか厄介ごとだそうだが…？」

目が真剣みを帯びている、彼のリアルの仕事は知らないが、中途半端な悪を働く者、団体などを相手取って、「真の悪」とはどういうものか…それに相応しい目に合わせることを仕事として選んでいると何かで、誰かから聞いたことがあった。

「実は、これなんです…」

と、書類を出す、もちろん、今までの「そういった」種類のデータ一式全てだ。

「ほお…こりや…たしかに、普通の一般市民じゃ手の出しようがないな…」

この人は「悪」というものにこだわりはあったが、それ以上に、自

らの父親の死に様に納得がいつていない、その為、「理不尽」ということに徹底的に立ち向かい、抗うことを生きがいに行っている。

「強きをくじき、暴虐を振るう者には暴虐をもって返礼してやろう」なんてことを…ゲームの中でも…よく言っていた。

…そういうスタイルの人だった。

この人は自分にとって憧れの内の一人だ、もう一人の憧れは「世界において最強」という【称号】(ゲーム内だけで)を与えられた人、でも僕が頼ったのはその人じゃなく『災厄』の名を欲しいままに…そして、その名に恥じないよう振る舞っていた…今、自分の目の前にいるのがその「彼」だ。

強者が弱者を虐げる(それがクランやギルド内の立場であつても社会的であつても…)そんな行いに敢然と立ち向かえる人だったから…今回、頼れる先はこの人しか思いつかなかった。

ネットでの付き合いをリアルでも持ち越すのは間違つてる。

それはわかつていたんだ…でも…自分には何の因果か、何故か見つけてしまい、手に入れてしまった「その情報」は荷が重すぎた、おそらく腐敗したあの社会で、警察などに言つても『例外的なあの人』でなければもみ消されてしまうだろう…いや、それも違うな…あの人もたしか組織の中ではトップじゃなかったはず…上下関係のキツイあの組織内では、きつと、あの人だつて、「上層部がNO」と言えば、それに逆らえない…従うしか無いだろう。

であれば…結局のところ、話の分かる上司(が居たとして…)その人にその情報が届く前に証拠ごとにもみ消される、それが分かっていたから、ゲーム内でも対極の立場だった、この人に頼った。

普通だつたら迷惑だろう。

そんな身を滅ぼす結果しか見えない情報を渡されるのだ…誰だつて「なんでオレなんだよ、他にもつとそつち向きのヤツいるだろう?」つて返ってくるのが当たり前だ。

…なのにこの人は受け取ってくれた。

その人はゲーム内で使っていたアバターがきつとするだろうイメージの…

味方には頼もしく、敵には寒気を与えていた、あの当時そのままの…「悪」を背負うにふさわしい笑顔で…

笑って受け取ってくれたんだ。

もし何かあったら、証言をしてくれるか？とも言うてくれた。

考えるまでもなく自分はこう言っていた「アナタの力になれるなら！なんでもします！」って…

……そう約束したはずなのに…

油断してたんだ…いや、警戒の仕方がまずかったんだな、きつと。

誰も通らないような人通りの少ない道を選んで見つからないように、隠れるように家路につく予定だった。

証拠を手渡せた安心感で、緊張感も薄らいでいたのだろう…油断していた。

ボンヤリと…「そういえば、メールの返信の中にモモンガさんからのメールもあったな…」そう思い、携帯式の電話から、ネットに接続、フリーメール経由で、モモンガさんからのメール内容を読む。

「え？ ウソ！ 今日ってユグドラシル最後の…サービス終了の日なの？」

今まで、仕事時間以外でも、こんな会社の暗部のことに意識を奪わ

れ、ログインが減っていったとは言え、サービス終了が近づいていたことにも気づいていなかった自分を恥じる。

今の時間は「23時32分」、まだ急げば、一言、二言、少しの会話ならできるかもしれない。

そう思い、足が自然に急ぎ足になる。

急ごうとするあまり、回り道としての裏路地ではなく、近道を通ろうとしてしまった。

その時、曲がり角を曲がろうとして、足に衝撃が走った。

「うああ!!」

あまりの衝撃に、急ぎ足だったせいもあり、前のめりに転倒してしまった。

顔を上げる。

一体何が起きたんだ？

今も事情が理解できない自分の前後に2人の人影、頭から真っ黒の、両目と口の部分だけ穴の開いたマスクをかぶった誰かが、そこに立っていた。

「な…なんだよ、お前ら…」

強がってそう言っただけに見えるものの勝てる見込みはない、今自分は満足に動けもしない状態だからだ。

それに対して、一人は自分より明らかに体格のいい格闘系の者。

そして、もう一人は、暗い路地裏からまだ完全に出ていない…照明もないこの道ではよく見えないが、鉄パイプだろうか…それとも金属バット?のようなものを肩に乗せていた。

おそらくは、今の衝撃はあれで足のスネの部分を強打されたのだろうと予想はついた。

その二人の内の一人、体格のいい方の人物が口を開いた。

「ふん…何も教えることはないな…自分の不幸を呪えばいいさ…」

意味が分からない、彼は何のことを言っているのだろうか？

「な…なにを？」

「さんざん嗅ぎまわってくれたようだが、それもこれでおしまいだな

…証拠の方はあとで勝手にお前の部屋に入って物色させてもらおうとするからよ…それとも、今持ち歩いてるかもしれないねえな…、身動きすら出来なくなっただけからゆっくり探してやるから安心してあの世とやらに行きな」

二人の内の一人がそう言葉を紡いでいく、しかし、その声には聞き覚えがある。

会社で、ずっと近しい距離で聞いてきた声だからだ、間違えるはずもない。

「お前…穴沢か？」

「ふん…気が付いたかよ…まあ、そうでなきゃ張り合いもないがな…」

「おいおい、だから言っただろ？お前が来ると正体がバレるだろ？つてよお」

正体のわからない方の男がぼやいているが、穴沢の方は意にも介さない。

「俺はこんな日が来るのを待ってたんだよ、こいつに俺の屈辱の何分の1かでも味合わせてやれる機会をずっとうかがっていたのさ！」

「ボクが…お前に何をしたらつて言うんだ！」

「お前は知らないだろうな…お前が中学を中退してからの話だからな、こっちはいつもお前と比べられてきたようなものなのさ、お前は中学を中退するまではクラスでもトップクラスの成績だっただろ？覚えてるか？ 中退するやつのために先生までが送別会とかつて言つて、別れを惜しんでよ、クラスメイトも同様だったよな」

「そんな昔の事…なんでいまさら？」

「それだけじゃねえんだよ、お前が居なくなってから、どんなにテストで上位になつてもいつも周りの評価はお前の方が上だつて認識が変わらなかつた…お前が在学してたら1点差で、きつと鈴川…お前が1位だっただろうつてな…」

「そんな…なんで…それはボクには関係…」

「それだけじゃねえよ！俺より先にダイブマシンを購入しやがつて…俺の方が先に予約して、確保してたのに、運よく売れ残つてるダイブマシンを見かけたつてだけで何の苦労もなく手に入れやがつ

て、部下に先を越された間抜けな上司、だなんて評価は御免だからな
…こつちから予約の方はキャンセルして、ダイブマシーンなんて全く
興味ないふりをしては居たが…、ずっと内心では煮えくりかえってた
んだよ！」

そう言うのと穴沢は、ボクの胸倉をその両腕でつかみ上げる、さらに
足を折られたのか、満足に立てない自分を道の奥の方に放り投げた。
「なんで…、そんなの…もう10年も前の話じゃないか…ずっとその
ことを…根に持っていたのか？」

「正確に言うと、10年と7か月前のことだがな…長かったぜ…この
日をどれだけ待ち望んだことか…。」

放り投げられた先は、路地裏の奥、突き当たりの…打ち捨てられた
ゴミの山、立ち上がれず、そこに背を預ける形の自分に、ゆつくりと
穴沢が歩みを進めてくる。

「そういえば、ネットニュースでやってたが、今日が鈴川…お前が以
前、オレを誘ってくれたへユグドラシル…とかってゲームの最終日な
らだつてな？ ちょうどおあつらえ向きのがあるじゃなえか…お前
の最後にふさわしいモンがよ…」

穴沢はそう言うのとボクを軽く蹴って横にどかし、ゴミの山から何か
を見つけたようでそれを引きずり出していた、それはリクライニング
ソファ―風のダイブマシン、自分が持っているのと同型の、だが、か
なり使い込まれていた物なのだろう…ソファ―部分の革の部分は
所々破れ、中の綿が外からも見えていて焦げ茶色に変色している。

さらに、その場でしばらく放置されていたのだろう、要素要素所に、水
滴が付いていた、きつと数日前の雨の日にもこの場に捨てられていた
のだろう。

〈YGGDRASIL〉が終了間近だということを知って、早々に見切
りをつけて捨ててしまったプレイヤーの…過去に見切りをつけた残
骸なのかもしれない。

そう思った。

「それが…なんだ？ それで何をするつもりだ？」

声が震えているのがわかる、どう考えてもイヤな予感しかしないか

らだ。

「ちようどこれを持ってきて正解だったな、単なる思い付きだったんだが…」

穴沢はそう言って、ポケットから小さなスポットを取り出し、地面に溜まっていた水たまりの水をスポットで吸い取って行く。

「お前も知ってるよな？ 鈴川：お前みたいな貧民の首の後ろにつけられている端子部分：そこに汚水なんてモンを流し込まれたら、どうなるのか…」

そこには、自分が知っている、今まで言葉を交わしていた仲の良い上役の姿はなく、ただただ醜く歪んで、こつちをあざ笑い見下ろす、見たこともない表情をした、かつては同じ学び舎で勉学に精を出していたことのある同窓生だった者の顔があつた。

もう一人の格闘系の男は後ろの壁にもたれ、こつちの様子を見ているだけだ。

「それに、お前の人生の最後に棺桶替わりとしちや、これ以上に相応しいものはないんじゃないか？」

そう言いながら、捨てられていたダイブマシンの通電プラグがコードごと切られていないことを確認して、適当な建物の壁についているコンセントを見つけると、そこに接続させる。

「お？ やっぱりお前は運がいいな、鈴川：これ、壊れてないみたいだぞ？ しつかりランプがグリーンで点灯してやがら、これでお前も心残りはないだろ？」

そう言つて、ニヤけた面を見せつけながら、穴沢は足の爪先でボクのみぞおちを蹴り上げた。

まともに食らってしまった為、身体を「く」の字に曲げ、苦しんでいると、首の後ろにある接続端子にスポットの中の汚水を注入し、間髪入れず、そこに一緒に捨てられていたヘルメット型データロガーをボクの頭にかぶせ、ネット接続用のプラグを差し込んで来た。

首の後ろが今までに感じたことがないほどに熱い…まるで背骨にまでバチバチと電流が暴れまわって、弾け続けているようだ。

「ほらよ」

そう言っつて穴沢は、ボクの体をダイブマシンにもたれ掛けさせ：というより放り投げた。

少しの間、そこで苦しんでのたうち回った後、まるで体が硬直したように弓なりに反っていた。

もはや、自分の自由などはない、脊髓反射で動いているだけのよう
に、自分の思うように体が動かなくなっていた。

そんな状態で、顔が上を向いていると：「ザザ：」と砂嵐のような
画面が目の前に現れる。

そこには、モニターのタイトル画面に似たような風景が見えた。

しかしそれは似て非なるモノ：

目の前に見えてはいるが、それは「目の前」ではなく、額の上方、わずかに中空辺りにスクリーンが浮かんでいる様に感じられる。

その砂嵐は、場面を変えて、色んな画像を見せてくる。

自分が良く知る、ギルドのログインポイント、円卓の間、そのテーブルに荒々しく拳を叩きつける骸骨、きつとあれは装備からしてモモンガさんだ。

次には、後ろにNPC達だけを引き連れ、プレイヤーは彼一人だけ、その彼が、玉座の間にまで来て、玉座に座る。

どうやら時間をカウントしているようだ、手を持ち上げ、何かを数えるように人指し指を上下に何度か動かし：そして、力なく腕を下げていた。

そんなシーンが流れるまま、見ていると、モモンガさんらしき：いや、あの人ならサービスの最後の一秒まで〈YGGDRASIL〉と一緒にいるのは間違いないだろう。

ならあれは絶対にモモンガさんだ。

そのモモンガさんが、玉座に座ったまま、ギルドの象徴、「スタッフ・オブ・アイNZ・ウール・ゴウン」を高らかに持ち上げ、何かを言ううとしていた。

：あの挙動は：、間違いない、みんなできくやっていたアレだ：

モモンガさん、そんなの1人でするなんて、止めて下さいよ、
どうせやるなら自分も一緒です…

ログインには間に合いませんでしたけど…、一緒に「YGGDRASIL」に居てあげることが出来ませんでしたけど…、心は、常に貴方と共にあります。

最後の最後くらい…、一緒に言いましたよ…ボクらだけの…輝かしい、心から誇れるたった一つの…みんなと共に集めた…作り上げた全て、それを湛えるあの言葉を…。

自分が、今どういう状態で居るかなんて、もう頭になかった。

音声が聞こえてこないのは、きつとこのダイブマシーンが壊れているからだろう。

なぜログイン画面を介していないのに、モモンガさんの様子が見えるのか…そんなことはどうだっていい…、死んでしまうその瞬間くらい…ボクにも…その言葉を…

モモンガさんと共に言わせてください…。

すでに力があるのかどうかすら…リアルの自分の腕がちゃんと持ち上がっているのかも、実はもう分からなくなっていた。

だが、それでも…自分の認識の中だけでも、右腕に拳を握り、上に高く掲げる様にした。

本当に持ち上がっているかなんてどうでもいい。

大事なものはこれからのだから…。

「おい、あいつ、今さら何かしようとしてやがるぜ？ 見てみるよ？」
どこからか、誰かの声が聞こえる、だがそれも、もうどうでもいい…。

あとは、この言葉を、モモンガさんと共に叫ぶだけなのだから…。

玉座に座るモモンガさんが高く持ち上げる「スタツフ・オブ・アイ
ンズ・ウール・ゴウン」に続くように、みんなでよく叫んでいたタイ
ミングは今でも良く覚えてる。

身に染みついたタイミングで、その言葉を「せめて、ボくら2人だけでも」という思いであらん限りの力を振り絞って叫ぶ。

「アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ!!」

その言葉を叫ぶと同時に、目の前に映っていたスクリーンが徐々に薄れて行き、意識は次第に闇へと落ちて行った。

―序章― 拝啓、闇の中から

………ボクはどうなったんだろう……

自分の目が開いてるのか、閉じているのか、何か見えているのか見えていないのか……？

見えるものはどこまでも深い闇しかないので、ひたすら真っ暗だ。

闇が見えているのか、それとも視界自体が閉ざされているのかの判別もつかない状態なのかもしれない……。

まさか職場の人間に命を奪われることになろうとは思っていないかった……。

意識を失う前に、重い衝撃が頭に走った……それは覚えている、しかしそれからはわからない……気がついたら、今の状況だ……きつと自分は『あの世』って所にいるのだろうか……

「証言する」そう約束した矢先なのに……助けにもなれない自分に、無力さ、歯がゆさ、悔恨、ありとあらゆる気持ちがない交ぜとなって自分を蝕んでいく。

………もつと自分が強ければ……もつと決断力も行動力も、人に一目置かれるようなカリスマや、説得力でもあれば、もつと自分は違っていたのだろうか？……

もしそうなら、力が……もつと自分を長く生き永らえさせるだけの力があれば……憧れのあの人に厄介な種を押し付けることもなかったのだろうか……

ああ……そうだ……結局、あの人にも……ちゃんと謝れてなかったな。

自分のことを心配してくれて、リアルに送り出してくれ……「また会えますよね？」

そう言ってくれたけど、自分はそんなギルド長にも、大したことは言えなかった。

いつも優しく、両者の意見をとりもって、中間のいい具合の落としどころをうまく提案してギルドをまとめていた人だった……「魔王」というロールプレイで、ひたすら人を楽しませるために尽力していた人だった。

自分がギルドを離れる時、「ギルドから離れることになっても、僕らの絆は「アインズ・ウール・ゴウン」の絆は決して消えたりしませんから、いつでも帰ってきてくださいね。

アカウントさえ消さなければ、ギルドの指輪で、拠点には入れますから。装備は売ったりせずに宝物殿に保管しておきます、心配しないで、戻りたくなったらいつでも戻ってきてください。」

そう言って笑顔（のモーション）を浮かべて手を振ってくれたモモンガさん……結局あの指輪、返しそびれちゃった……『ユグドラシル』の最終日には返しに行こうと思ってただけだな……

……そういえば、最終日って、今日だったか……

最後に一目、逢って、話して、今までのお礼、言いたかった……

結局、自分がギルドを離れた時は、数人しかギルドを辞めてなかったけど、みんなどうしてるだろうか…

半分の20人くらい残って、あの円卓の間に、最終日だからと集まっていたのだろうか…？

だが、そうすると、あの映像は何だったのだろうか…ラウンドテーブル 卓に拳を叩きつけていたモモンガさん…あれは一体、どんな気持ちでそんな行動をしていたのだろうか？

もしかして、たった一人しか残らなかったのだろうか？

それなら…1人でも…

モモンガさんのそばに居てあげられたら…どれだけいいか…ギルド長という立場であっても人一倍、仲間を大事にする人だったし、気を使ってくれる人だった。

ナザリツクに攻め込んで来るプレイヤーには容赦なく「魔王」としてのロールプレイをしていたっけ…でも、本当は心の優しい人だというのはギルドのみんなが知っていた。

そんなとりとめのないことを思いながら、自分はどうなっているのだろうか？と思う。

意識は朦朧として、何も見えない世界。

そんな闇の中で、地面に横たわってるのか…宙に浮かんでいるのかすらよくわからない空間で、ふと考える。

さつき自分が発した…かつての思い出深い、最期の一言を言い終えて、全ては終わり、自分は…全て「無」になったはず…そう考え、そこに漂う自分の身をそのまま投げ出した。

…きつとこのまま闇（光？）の中に溶けてしまい、あとは何もわからなくなるのだろうか…そう覚悟して「その時」を待っていた。

…待って…

でも確か、薄暗い路地裏で…穴沢に…汚水を…それでダイブマシンに…

しかし、今は、どこにもその「路地裏」らしき雰囲気は感じられない、ジメつとした洞窟、少し血なまぐさいような感じは何となく感じられるが、それだけだ。

どこにも人の気配はない。

実はあのままどこかに攫われて、監禁？

…それにしては体は自由にされたままだし…と思い体を動かしていると、手の動きが変だ…というより腕そのものが変だ…

暗闇だと思っていた洞窟内で、徐々に目が慣れてきたので、色々と見えてきた…と安心して安心しかけたのもつかの間、自分の腕が自分の物じゃないことに気がつく…

あまりの衝撃にどうなっているのか悩み始めるが、どうやら見た目も、中身も自分の思う通りに動かせる「自分の腕」だという確信は持てた…しかし見た感じ、そしてそもそもその身体としての造り全体が人間のモノでは無くなっていることに気づく。

「えっ？どうなってるのこれ？ これって、バケモノじゃないの？ 人体実験？ 改造手術？ いやいや、そんな特撮ヒーロー好きのあの人があるまいし」

…と思いつつも、「夢じゃないよな？」と考え、頬をつねろうとするとなぜか口をつまんでしまった…え??? あれ？ここつて頬があった場所だよね？なんで口があんの？

次に、首の後ろを触ってみる…そこにもやはり口、それだけではなく、さつき感じた通り、その口には牙がビッシリと生えており、少しでも力を込めれば切れたり刺さったりしてしまいそうだ…と思ったが、それは自分の体なので、どここの口も自分の意に添わず動き出すなんてことはなく、自分を傷つけることもなかった。

さらに言うと、首の後ろの接続端子自体もどこへやら、消えてしまっていた。

なにがなんだかよくわからないまま、とりあえず縛られてるわけでもないし、外に出てみよう！

ここがどこかは分からないが、もし見張りとかが居ても、この姿なら驚いてくれるかもしれないしな…なんて現実逃避+超ご都合主義的思考で、不安という要素を塗りつぶし、外に出てみた。

………夜空が広がっていた。

「なんだこれ？ これって、あれじゃないの？ ナザリツクの第6階層で見たのと同じ夜空じゃないの？」とか思いつつも、周囲が木々に囲まれている中、自分が記憶して、見知っている「森」の景色、風景と全く違う場所だということに思い至る。

ココは、かつてのナザリツクの森ですらなく、かつ自分が居た世界の夜空でもないことによく、事ここに至り困惑する。

それはその通りだろう、リアルでは夜だつてこんな星は見えない…たとえば雲がない日だつて星座なんてものはおろか、星の1つも見たいこ

とはなくらいに、どんよりとした…よんだ大気の世界だったのだ
…と思うと、その時になって初めて気づく…。

外出用のマスク、汚染された空気を少しでも吸わないように、と
フィルター代わりとして身に着けていたソレがどこにもないことに
気が付く…

自分が元居たりアルでは、呼吸するのもにも専用の器具を身に着けず
に生活などしていれば、数年と待たず肺の病に侵される。

一度、病にかかれば、病院にかかれるほどの裕福な家庭など、アー
コロジに住むような人種でなければ難しい。

病院に行くためには、お金が必要で、お金を稼ぐためには仕事をせ
ねばならず、仕事をしていると、病院には行けない。

アーコロジに住めない者たちからすると、給料をもらっても、病
院に行けるほどの資金は貯まらないのだ…薬だつて法外なことも当
たり前。つまりあそこに住めない者は「病Ⅱ死」と同義なのである。

であるのに、今はそれを防止するための器具、呼吸するために必要
なものを、身に着けなくても「空気が美味しい」というのがわかる。

それだけでも異常事態だ。

ココがどこなのか？自分は十二になってしまったのか？ここでも自分はあっけなく生を終わらせてしまう程度の存在なのか：

考えることが多すぎる：先ほどの楽観視という名のご都合主義はナリをひそめ、頭を抱えたくなっていた：：というより現在進行形で、頭を抱えている。

頭を抱えて初めて理解したことだが、頭のあらゆるところに口がある：：なんとなく気がついてはいたのだが、認めたくなくて目をそらしていた：

防具も何も身に着けていない自分を見下ろすと、体中に口があるこの身体は見覚えがあった、「ユグドラシル」のプレイで使っていたアバターだ：

自分の名字をもじってつけたアバター名だから、よく覚えている、たしか「ベルリバー」だったか：うんたしかそう：と納得する。

そして、かつて「異形種」を選んでしまった自分はこつちの世界ではどのような位置づけなのだろうか、かなり不安になる。

かつて、「ギルド】アインズ・ウール・ゴウンに入るきつかけだったのも「異形種狩り」というPK（プレイヤーキル）が流行っていたせいで、何度も人間種には襲われてきたのだ。

あの時みたいな想いはもおしたくない、だがこの見た目では、どう言い訳しても化け物だろう。



少し時間が経って、落ち着いて自分の現状を確認する余裕も出てきた。

そして、ザっと見た感じ…手荷物も持っていない。

アイテムなんか持っていないだろうしな…アバターの姿で放り出されたようなものだけど…、今自分が居るココは…どういう場所なんだろう…？

景色もいい、空気もうまい、どこも汚染されていない世界がこんなにも美しく、感動させられるモノだとは生まれて初めて実感として心に湧き上がるものがある。

とはいえ、ここで生活するための日用品はおろか、身に着けるモノも、武器も防具もなくってどうするんだ、これから先…、それよりもまずこの姿で普通の服とか着てたら違和感すごいんじゃないだろうか？

なんてだんだん余裕のある思考になって来た頃、仕方ないからとりあえず歩いてみるか…と半ば自暴自棄気味にやけになって歩き始めた。

どのみち、帰り方も…帰れるかどうかも、人に戻れるかどうかもよくわからないのだ…この森で隠居生活しながら、人目につかず、おとなしくしてるのも、しばらくは楽しいだろう。

…と、思って落ち着いたら、だんだん問題が持ち上がってきた、た

しか自分の異名は「大喰らい」だったはず……ここって食べられるものあるんだろうか？

これだけ自然豊かなら、木の実くらいは食べられるだろうが、この世界には毒の入った木の実とかあったりするのだろうか？ ない方がいいな、というか、自分の毒無効の耐性はこの世界でも有効なのか？

などと物思いにふけっていると……夜の闇の中、自分のどこに目があるのかはよくわからないが夜目はどうやら効くようだ……問題なく道を進むことができていた。

それとも目などはなく、感覚器官みたいなナニかで、情報を総合的に統合して処理しているのだろうか？



自分一人だけなので、ついついとりとめのないことを考えながら進んでいくと……目の前に巨大な建造物……というよりも朽ちている……と言った方がいいだろうか？

……イヤ、これはそういう表現でも当てはまらない、なんとも形容しづらいモノが見えてきた。

……きつとそれは「建造物」でもないのだろうか……なにしろ建設途中で「うまく行かないからやくめたー」的な空気がぷんぷんしてる様相で、打ち捨てられているのである。

「ん〜：まあ、こんな森の中で、こんなでかい建物作ろうとしても無理だろうし、これを造ろうとしたヤツは何をしたかったんだろう：とりあえず、雨露くらいは防げるか」

そう判断して、とりあえずの居場所として、そこを起点としようと思った。

「おじやましまあ〜す」と、独り言のように誰に言うでもなく挨拶をして入ってしまうのは人間だった時のクセがまだ残っているのだろう：さすがに誰も居ないとは思うが念のためというのもある。

少し様子をうかがってみるも、誰かが出てくる様子はない：ここはやはり、無人なのだろう：。

中へと入って上を見上げると、空が丸見え、景色はいいが雨でも降ってきたら遮る屋根すらない：そこら辺を歩いてまわり、板切れを見つけると、軽くジャンプしてみる。

かなり上まで飛びすぎてしまった。

何度か試し、やつと手ごろな高さに跳躍することに成功し、そこにその板切れを乗せて置いてみた、これで屋根代わりにはなるだろう。

更に入ってみると、建築するのに使おうとしたのだろう道具がたくさん放置されていた、手斧のようなものから伐採用の斧、朽ちて捨てられたままのロープや、ツルハシといった具合だ。

ノコギリもあるにはあったが、錆びていてどうしようもない、切れないだろうことは一目見てわかるので、何かの役には立たないだろう。

とりあえず、護身用としてまあ、まだマシンな方である斧を持ち上げ「とりあえず新しいのが手に入るまでこれを武器代わりにしとくか」と装備して、数度の素振り：振り方は剣の扱い方だが仕方ないと自分をごまかす。

いざ、戦闘になった場合は、防具もないし近接戦になる前に魔法で：とそこまで考えて、そういえば魔法って使えるのだろうか？とそこでちよつと興味がわいた：

魔法って、どんなのが使えるのだろうか：と疑問に思う。アバターが覚えてる物なら使えるだろうか？などと思いつかべる中で結構な頻度で使ってた属性付与の魔法を試しに使ってみることにする。

〈エンチャントウエボン・フレイム魔法武装・炎属性〉！魔法の使い方などはよくわからないが、なんとなくユグドラシル時代の名前のままで使えるような気がしたので使ってみたがどうやらビンゴだったようだ、持ち手の木の部分には燃え移らず、斧の部分だけに炎を纏わせているのがちよつといいかもな、とか思ってしまった。

かっこいいのはいいとしてここは木造だ、燃え移るとここの森全体も危うい、炎はやめておこうと思いつき、〈エンチャントウエボン・ブリザード魔法武装・氷属性〉を発動させ、問題なく発動することに満足してすぐにキャンセルさせる、特に攻撃する対象も居ないので、そのまま休むことにした。

なにしろこの世界ではどんなものが食べられるものかの知識も自分にはないのだ、変なものでも食べて、腹でも壊したらたまらないと、どこかまだ人間だった時のような認識が抜けきっていない鈴川：いや、この世界ではもう「ベルリバー」である。

それに眠ってしまえば、腹が減つてることも忘れられるという経験則も手伝い、適当な大きさの朽ちかけた木箱の中に入り、中に葉を敷き詰め、丸まって眠ることにした。

とりあえず今日の収穫は、間に合わせの武器が手に入ったことと、魔法が使用可能だということが分かっただけでも収穫だ。そう思い、明日はなにをしようか：などと考えながら眠りについた……：

第01話 初めての朝

…それはひどく衝撃的でありつつも、決してイヤではない驚きだった、なぜなら建物の所々から、光が差し込むのだ。

朝の目覚めで、目覚ましのアラームのような乱暴な音ではなく、獣たちの鳴き声、鳥たちのさえずり…そういった諸々の音が優しく起こしてくれたのだ。

あのくそつたれの元居た世界では、もちろんこんな気持ちのいい太陽の光など、見たことはなく常にどんよりとした空の色、それが当たり前だったのがおかしい世界だったのだと今更ながらに思う。

死獣天さんや、ブループラネットさんは、よくこういう話をしてくれていたな…とかつての仲間を思い浮かべながら、ポカポカとした暖かさに心を奪われたような心境で陽の光を身に受けて思っていた…そうだ、あの二人はこれのことをこう言っていたな、たしか「朝陽」というのだったか…

よく自然に関しての話になるとタバラさん並に話が長くなってしまいう程リアルでは自然愛好家だったギルメント、本職は大学教授という一面を持つ仲間を思い浮かべ、今後はいろんな面で彼らのウンチクが役立つことになるのだろうと他人事のように思っていた。

なにせ著作権の切れた、輝かしい栄光の作品の数々や、歴史の本などでしか「自然」なんてものを知らなかった自分でさえ、その調和のとれている芸術的な美しさにしばらく呆然としてしまう。

気がつくくと、ぐうううぐうとお腹の音が鳴る、さすがにこの身体でも腹が減るとお腹が鳴るんだなあぐうとなんだか可笑しかった、とりあ

えずは寝てる間、敷き布団代わりにしてた落ち葉でも食べてみようか
…さすがにこれは毒なんてことはないだろう、と一人で考え、納得し、
ひとつ「うん」と頷くと箱の中の葉っぱを手に取り口に突っ込んでく。

捨てられた木箱の中であぐらをかき異形の者、体中に口がある…か
ろうじて人の形だと認識はできる身体で、葉っぱをモシヤモシヤ食べ
ているその姿は、よその人が見たらかなりシユールなのではないだろ
うか…

【大喰らい】を二つ名に持っていたとはいえ、葉っぱばかりではノド
が乾いてくる…水が欲しいなあ…なんて思いながら葉っぱに手を
伸ばしていると唐突にずりとも、にゆるうとも言えない変な感触が
手首までを包み込んでいる。

…なんだろうこれ？と思っていると手に何かが触れる、ひんやりと
していて、特に動くモノではないようだ…

ななが出てくるのだろうと思って引っ張り出してみると…これは
確か…ピツチャー・オブ・エンドレスウオーター「無限の水差し」だったな…

これってたしか、アイテムボックスに入ってたものだったはず、な
んでいきなり？と思いつつもノドが乾いていたので、今となっては体
中の至る所にある口、その一通りに水を流し込んでいく、きつと腹が
ちやぶんちやぶんになっても水は尽きないだろう、これはありがたい。
い。

ありがたいのはいいが…どうしよう？

これってどうやってしまえばいいんだ？

仕舞いたいたいんだよなあ…なんて思いながら…
ピツチャー・オブ・エンドレスウオーター

「無限の水差し」を上を持ち上げたり前に伸ばしたりしている
と、またもやあの謎の空間に手が入っていく…

「だから、なんだよこれ？なんなんだろう？」と不思議に思っている
と、どうやら出せるばかりじゃなく仕舞えるようだ。

もしや…と思い、昨夜、間に合わせの武器として入手しておいた斧
を手に持ち、心の中で「これ保管したい」と念じながら空中に持ち上
げると、再びあの暗い空間が勝手に開く。

斧をそこに入れてそつと手を離すと…どうやら置けたようだ。手
を抜かずに頭に斧をイメージするとそれが手に触れる…ああ、これ
「無限の背負袋」か…500kgまで入れられる便利な袋だった
なあ。

ギルド長に教えられて、「無限の背負袋」の中にまた
「無限の背負袋」を入れて、つてことができた時は感動したつけ。

500kg制限という重量の限界はあるが、1つの
「無限の背負袋」の中にもう一つ、中身がパンパンの
「無限の背負袋」を入れても、中身の重量は加算されず、中身が入っ
てない「無限の背負袋」の重量として計算される仕様になっていて、
さすがにメインの「無限の背負袋」内の重量まではなんともならな
かったけど…、パソコンで例えるとフォルダの中にまたフォルダを
作っていく感じと似てると思っただけ。

たしか、メインの「無限の背負袋」の中に、サブ用の
「無限の背負袋」が10個は入れてあつたはず、ということとは、総重
量5500kg…つてことは5t以上になるのか…5トン入るリュツ
クつてすごくくないか？背中に背負う必要もないし…こつちの世界の
方が色々と融通も利いていいかもなあ♪

…でも一つのアイテムの重量が500kgを超えるものなんてあつ

たら、それは入らないんだよな…総重量5トン超えて言っても、500kgまで入る袋が11個あるっただけなんだから…そこはちよつと不便だけ…

なんて思いながら、それなら中に入ってるユグドラシルでの武器もあつたりして♪

とか思い付き、「武器、武器♪」とかイメージしながら手をつつこむ要領にも慣れてきた…

そうすると、一番思い出さなくてもない武器を触ってしまった。

イヤな物、思い出しちやつたなあ…と思いつつも仕方ない…。

気を取り直し、ずるりと引き抜くとやはり…これはギルドよりも前、「クラン」だった頃からメンバーに居た「始まりの9人」の1人。鍛冶師だったそのギルメンから、私のギルド入りを記念してという名目で、もらった最初の武器だ。

しかし…ただ単に鍛冶師の彼がクランに入って最初に作った武器だけど、捨てるのも惜しいからという理由なだけだったと…後から、るし★ふぁーさんから聞いたときは、微妙な気分になったっけ…。

しかも、武器に名前まで付けられてるから、課金してまで名称変更する気も起きずにくつと倉庫行きになってたんだよな…この「あまのまブレード」

なんでこんな名前なんですか？って聞いたらクランリーダーの提案と自分の記念すべき自作武器、クランみんなで入手した材料の中から作った第一号つてことで、その名前…つてことだそう…

(理由になっていないような気がしたけど、胸を張って言われては「そうでしたか…」としか言えなかつたよな…。)

話によるとリーダーの好きな特撮ヒーローというジャンルの中で、刀身の出し入れ可能な、剣の持ち手に逆の手を添えて、武器の名前を言いながら、刀身のイメージをなぞることによって、光り輝く…なんだっけ？

れえぎー？なんちやらとか言ってたような…

そういう武器を使うヒーローがいたそうさ。

わざわざ、ご丁寧にその仕様まで組み込んであるものだから恥ずかしい…

刀身をしまう時は何も言う必要がないのに、戦う時は居合みたいなおポーズをとりながら「あまのまブレード！」なんて言いつつ刀身を出さないで、そもそも武器としての機能を充分に発揮してくれない様に作られていた。

刀身を出さない場合、その攻撃力は上級武器のダガー程度、しかも属性は斬撃ではなく殴打、まあ、刀身を出していないのだから必然的にそうなるんだけど…、自分で戦える武器を見つけるまで、ユグドラシルではこの武器で戦うしかなく、刀身を出すポーズと武器の名前を言うたびに、よくネタにされて笑われたりしたっけ…：特に誰とは言わないけどさ!!

ギルドを去る時、ギルド長に主装備を預けちゃったし、予備用の武器は売っちゃったり、欲しいってメンバーに譲ったりしたからなあ…：何が残ってるのか自分でも覚えてないや…、たしかギルドのみんなからプレゼントしてもらったり、譲ってもらったものとかはずっと残してあったはずだけど…

ユグドラシルの時みたいに目の前にアイテムボックスのサムネイルが広がってくれると一覽でわかりやすいんだけどなあ…：まあ思い出せないのは仕方ないし、小声でも大丈夫か、やってみよう…。

う理由だ。

とりあえず、気は進まないけど、必殺技つてやつ、出せるか練習してみるか…

いつどんな敵と遭遇するかわからないしな…

しかも、いざ必要つて時に出し方がわからない、発動条件があった。なんて隠し要素でもあったら、今から知っておかないと「詰み」になっちゃういそうだからな…

そう重い腰を上げ、まだ太陽の光がまぶしい、さわやかな朝の中、滑稽な叫びをあげながら、ひたすら剣を…あらゆる角度から、あらゆる方法で、色んな体勢から素振りを繰り返し返す「異形の者」が居たという。何度もの素振りは、いくら発声して、振り方を変えてもなかなか技が出てこなかったからである。

彼がその「必殺技」を正しく引き出せるまでにはまだまだ時間がかかる様子だった。

そんな彼のそばに、すぐ近くまで…何者かが近づきつつあることにも本人は気づかず、彼は熱心に試行錯誤をひたすら繰り返していたのだった。

第02話 初めての交流

ベルリバーはひたすらに剣を振っていた…振って、振って…もうどれくらい素振りしたか分からない。

なぜ、そんなことをしているのかと言えば、現状、唯一の命綱でもある武器の最大の技が出せないからだ…

ユグドラシルの時はキメ台詞を言いながら敵に剣を斬りつけたら、ご丁寧にサウンドエフェクトまで付けられた仕様により「ズビシヤ！」とも「グバシユ！」とも言える、なんとも形容のしがたい音が鳴り響き、相手のライフがゼロになった時は大爆発の轟音までしていたのだ。

あのヒーロー好きのたち・みーさんがそれを聞きたびに「やっぱりその効果音の再現度はバツチリだ、流石はあまのまひとつさん」と感慨深げに言っていたのが脳裏をよぎる。

しかしだ…それがなぜかこっちの世界ではなにが変化したのかわからないが、その音がしないのだ。武器として使えればある意味、たしかに充分ではあるのだが…最悪の状況になった時に一発逆転の手段を出せないのでは、命に係わる。

ゲームのように生き返る魔法があるのかわからないし、自分も信仰系魔法は取得していないし、よしんば使えたとしても自分が死んだら、自分に蘇生魔法なんてへ魔法遅延化ディレイマジックでも使わない限りムリだろうし、そもそも自分が死んだら魔法の発動自体もキャンセルされてしまうだろう。

結局のところ、死んだら終わりなような気がするのだ：せめて信仰系を使えるやまいこさんでもいれば心強いのに：なんて居ない人のことを考えても仕方ない。

しかしどう斬りつければあの音が鳴るんだ？もおあの恥ずかしい技名を叫ぶのも、だんだん抵抗がなくなってきたる自分が恐くなってきた頃、あらゆる斬り方を試したが基本的な斬り方をすっ飛ばしていた事に気づいた。

大上段からの一直線の斬り落とし、これをやっていなかったのだ。

袈裟斬りでも逆袈裟でもダメ

横薙ぎでも

切り上げでも

突きでもダメだった…

最後の望みに賭け、大上段から振りぬいた…

しかし何にもならない…なにがダメなんだ…これが完成しないと安心して森の徘徊なんて怖くてできやしないのに…ガツクリしてヒザをついていると、たっちさんがよく言っていた言葉を思い出す。

『本当はもっとこう…片手で剣を持って、真上から真つ二つにする勢いで振りぬいた方が絵になるんだぞ』

ああ…そういえばそんな奇妙奇天烈な斬り方しようともしてなかったなあ…なんて思いながら、どうせダメなんだろう?とか思いつつ、やってみた…当然「あまのまダイナミック!!」のセリフの叫び付きだ。

一気に剣を振りぬき、地面に突き立ちそうな勢いで斬り下ろした際、そこにたまたまあつた小ぶりの石をうつかり真つ二つにしてしまった。「…あー…」と思っても、もう遅い！

真つ二つにされたのは、もちろんただの石なワケだが「とどめを刺した」という判定になったのだろう。

静かな森に、かつて敵モンスターのライフをゼロにした時と同じサウンドエフェクトが効果を発揮した。

自分でもビツクリするほどの轟音が鳴り響く。

(なんか振りぬいた瞬間、背景が一瞬暗くなったような気がしたが…きつと錯覚だ…そう、気のせいだろう。)

「…まあ、音の大きさには驚いたが…とりあえずは…:…いやつたあゝ！ やつとできたあゝゝ!!これでなんとか最低限、自分の身は守れそうぞぞ! …あとは防具だけど…それは今後の課題だな、まあ攻撃は最大の防衛! ってね。」

種族特性のスキルも…試してないけど、きっと大丈夫だろう…でもなあ…：やっぱり技の名前叫ぶのって、もうちよつと抵抗の少ない名前ならいいのになあ…：と思うも、今さら変更は効かないだろう…：ならそこは気の持ちようだ！

「そうだよ頭の中で漢字変換させて叫べば、そんな変じゃないかもしれないじゃないか！」

とすると…：ええええ…と、アマ？ 尼？ 甘？ 亜麻？ どれもしつくりこない…

「じゃ〜「あま」って「天」の字をあてがって読もうかな？ アマテラスとかいう神様がいたって、死獣天朱雀さんもそう言ってたし、式式炎雷さんの武器もたしか、そんな名前だったしな。」

そうだ、そうしよう！

「ってことは…だ！」「天あまノ魔まダイナミック!!」これだ！言葉じりだけだとなんかよさげに聞こえるし、そう思うことにしよう！」

ベルリバーはそう結論付け、むりやり自分を納得させることにした、これ以上そのことを考えるのは精神衛生上よくないと思ったためかもしれない。



「それにしても静かな森だなあ、モンスターの遭遇すら一度もないとは……こつて実は危ないなんてコトない世界なのか？」

そう呑気なことを考えていると、木々の向こうから獣ではない何かの足音が自分の方に向かってくるのがわかる……この世界に来てやつと巡ってきたファーストコンタクトだ！どんな感じだろう……話を通じるといいなあ……などと思っていると、男2人と、女性2人の計4人が初心者っぽい装備で近づいて来るのが見える。

（一応、話を通じなかったことを考えて警戒をしていたけど、どうやら

話が通じそうだな)

警戒を解いて友好的に接しようとする両手を大きく広げ、友好的と思っ
てもらえるような明るい声で語り掛けようと待っていた。木々の向
こうからようやくこっちの姿を見つけたのか走り寄ってきた4人が
先に声をかけてきた。

「なんだ、さっきの爆音はあなたの仕業か？ ……つて、え？あなたなん
だその口、モンスターか？」

先頭を進み、最初に言葉を投げかけてきたのは、両手に剣を持ち、金
髪の一部にメッシュみたいなのが付いた髪の男、見るだけで判断す
ると、軽戦士というところか？

そしてその後ろには弓を構えた耳の尖った女性、なるほど森と言え
ば確かにその組み合わせはしつくりとくる感じだ。

神官風のメイスを構えたヨロイ姿の男が「見たこともないモンス
ターですね、あんなのは今まで見たことも聞いたことも…」という話
を言い終わらぬうちに「ダメ！そいつには関わっちゃいけない！みん
なすぐ逃げて！」と3人の中心にいた女の子…杖を持っているので、
見た目からして魔法詠唱者マジックキャスターなのだろう…いぶかしむ3人の視線がそ
の女の子に集中すると我慢できなくなったように最後の警告を仲間

に発していた。

「そいつは私の師匠より強い！第7…ううん、多分第8位階まで使えると思う！」

と足を小刻みに震わせながら、驚愕の表情を自分に向けているのがわかる。

その言葉を受け、先頭の男が声をあげる「ウソだろ？ 第8位階なんて言ったら神話の話じゃくねえか！」

よほど驚いてるのか、視線は離さないが、目を見開いているのが分かる。神官風の男は「私にもわかりますよ、そのモンスターを見てると鳥肌が立って、止まりません」と言って、女の子の言葉を肯定していた。

(ああ…そうか、まだ冒険を始めてそんな経っていないんだ？この人達…だからこんな初期っぽい装備なのか、上級装備でもないみたいだし…こんな感じならPKの心配もないだろう、それにしても…「神話」はないだろうに、そんな褒められるレベルじゃくはないってのに、照れるじゃないかあ)

そう思ったらかえって安心できた、そして最初からのポーズを崩さず、努めて優しい声音で挨拶をする。

「ああ、失礼…みなさん初めまして、私はつい最近この森に来た者ですが、どうやら驚かしてしまったようですね、少し訓練…のようなことをしてたところでして」

そう言うと、目の前の4人は口々に相談を始めた…もちろん、視線は油断せずにこちらを見つめたまま、いつでも行動できるように…という感じだ。

(警戒されてるなあ…でも仕方ないか、いきなりこんな体中に牙がビッシリと生えた口ばかりの異形種、今までで見たことないなら、そりゃ驚くだろうし…)

「危害を加えるつもりはありません、私も別に争いごとが好きなのはないので、対応はそちら次第ですが、できれば、少し話し相手になつてくれませんか？」

安心させるようにそう言いつつ、ゆっくりとした動作で驚かせないように地面にあぐらをかいた…もちろん「敵意はありませんよ」という表明のためだ。

「信用できると思いますか?」という神官風の男、「私は反対、見るからに取って食われそう」とエルフ風?な女性。

そして恐らく魔力感知を使ったのだろう女の子は何も言わず、私から目が離せないのか無言を通してている。

すると先頭の軽戦士風の男が口を開く「あんた、何者なんだい? 話って言ったって、なんも面白い話なんかないんだが?」

そこでようやく自分もちよつと安堵した。この世界での初めての交流なんだし、できれば穏便に済ませたいというのは正直な気持ちだったのだ。

会話を始めてしまった男に、周囲の3人は信じられないような目を向けた。

「なに言ってるのヘツケラン! そんなのと関わるつもり?」

エルフ風の女がそう言った、どうやら軽戦士の男はヘッケランというらしい。

「俺達も、さっきの大きな音を聞いて近づいてきただけで、あんたの縄張りを荒らすつもりじゃなかったのは信じてもらいたいんだが、どうだろう?」

そう問いかける男に「ああ、問題ないですよ?私の方も別に縄張りって訳じゃありません、ただ、そこに見える廃墟を一晚の宿代わりにしてただけなのでね、そんなことで怒るつもりなんてないですから」となるべく事を荒立てないように言葉を紡いでいく。

「そうか、なら俺たちはできれば生きてここから出たいんだが、あんたには危害を加えたりしない代わりに俺たちのことも見逃してほしい…ってという条件はどうだろう?」

様子を見ながら落としどころを探すような交渉を一任してるということは、この男がリーダーなのだろう…

どこまでの実力があるかがわからないが、とりあえずこちらが第8位階を使えると思破った上で、逃げる前提で話を進めるということは4人まとめても勝ち目は薄い相手だと思われてるのだろうと分かる。

それなら、そこを利用させてもらおう。

「別に危害を加えるつもりはないから、ここから生きて去りたいというなら別に追いかけてもいいし、そのあとに追跡もしないよ、好きにしたらいい」

そう伝えると、一瞬表情が安心するような雰囲気を匂わせるが、そこに一本のくさびを打ち込ませてもらう。

「しかし、君たちを生かして帰すための交換条件として、こちらにも…私が望むものを提供してもらいたい」

一瞬で顔が蒼褪める4人…

(いいなあ…なんていうかその表情の落差がたまらない…って、あれ？なんで俺はそんなことを考えてるんだ?)

自分の中に芽生えた感情がどこから来るのかわからなかったベルリバーは軽く頭を振ってその認識を振り払う…

すると「俺たちのなかが目的だい？ 仲間は売らないし、金目のももありはしないが？」

そう必死に言葉を返すヘツケランとやらに平然と言い放つ「別にそんなのはいらぬさ、最初に言っただろう？ 私は『この森に来たばかり』だと、だから出来る限りの情報が欲しいな」

4人が4人とも、何を言われているのかわからず、しばらくきよとんとしていたが、終始警戒の目で見ていた女の子が「応じてもいいと思う」と言い出した。

「どうしたのアルシエ！正気？ それともチャームでも使われた？」

エルフ風の女がその言葉を止めようとするも、アルシエと呼ばれた女の子は言い返す。

「そのつもりならいつでもあいつは、私たちを全滅させられる、情報が欲しいなら〈魅了^{チャーム}〉でも、〈支配^{ドミネート}〉でも使えるはず、それなのに、対価も求めず情報だけを求めてきた、とりあえずウソはないと思う」

（よかったあゝ、優しい口調だったのがよかったのかな？警戒心は和

らいでるようだぞ？よし、あともう少しだ！)

神官風の男が「しかし、こんなことをいうのも問題かもしれませんが、情報を得たらすぐに始末されるかもしれませんよ？」と忠告してきました。

それに対してもその女の子はまだまだに怯えはあるみたいだが冷静に返答する。

「私達は始末されなければいけないほどの情報をまだ何も知らない、外見的特徴だけで、どんな秘密も知らされていない。騙して始末なんて…そんな必要もなく魔法一撃で私たちはきつと終わる。…だからわざわざ手間をかけてまで回りくどいことをする必要がない…もし姿を見られるのが問題なら、対面した瞬間に私たちはすでに生きてない」

そこまで言われて、やっと折れたのか、全員が「ちゃんと生かして帰してくださいよ？」と念を押して確認をしていた。

(やれやれ、この姿を何とかしないとなあ…あんなに誠心誠意、話したのに全く信用されてないよお…)



聞きたい事を山のように聴いて、回答を引き出し、新しく浮かんだ疑問をぶつけ、それをまた答えてもらう…

そうしてゐるうちに周囲はとつぷりと日が暮れてしまっていた。

とにかく自分の聴きたい情報のために夜遅くになってしまったため、泊まっていくことを勧めた（コテージを展開するマジックアイテムがあつたはずなのでそれを使うつもりだった）のだが、何故かすごい勢いで断られてしまった。

仕方ないので送っていくよと申し出る（グレートターレポーターション上位転移を使おうとしていた）が、それも断られてしまった。

なので、せめてこれを連れて行ってやってくれと、サモン・ムーン・ウルフ月光の狼の召喚を唱え、3匹のムーンウルフに護衛を任せることにした。

しっかりと彼ら、彼女らを送り届けるんだぞ？と指示を出し、送り出す。

オオカミとは言え、月光のような白銀のふさふさした毛並みを持つ動物が相手ならそれほど恐ろしくないのか、始めこそ恐る恐るであったが、安全だと判断したら、女性陣は抱き着くほどの勢いで背にまたがっていた。

あとはどうか彼らが無事に街まで戻れますように…とベルリバーは祈ることしか出来ず、姿が小さくなり、やがて見えなくなるまで見守ることしか出来なかった。

第03話 初めてのメッセ友

ムーンウルフを護衛につけて、情報提供者の面々を安全に帰れるように召喚獣たちに命令をし、送り出してから「提供された情報」を頭の中で整理し始める。

どのみち、近場の町に着く頃にはムーンウルフの召喚時間も切れて、消滅してしまうだろう、それまでに無事帰宅してくれるといいのだが…。

それにしても、なかなか衝撃の連続だったなあ…、周辺のどこかの町の名前も知らないし、レベルつて概念もないんだもんなあ…第8位階程度で「神話」扱いなら、あの女の子、モモンガさんやウルベルトさんが肩を組んで現れたりしたら、気絶でもしてしまうんじゃないだろうか？

何となくその場面をチラッと想像して、含み笑いしてしまう。

「モモンガさんは基本、誰とでも分け隔てなく接する人だったしそれはいいんだけど…」

モモンガさんと肩を組んで、グツジョブポーズで笑顔を振りまくウルベルトの姿を思わず想像してしまい、嘔き出してしまう

「ヤバイ、あの人がそんな行動したら腹がねじ切れて死ぬるw」

なんて言いながら、ひとしきり腹を抱えて転がりまわった後、少し落ち着いた頃に再び情報の整理に取り掛かる。



ここいら周辺は森で、トブの大森林と言われているそうだが、自分が

居る場所は森の東に位置していて、すぐ目の前にバハルス帝国という国があるらしい、彼らはそこでワーカーという仕事をしているそうだ。

簡単に言えば、フリーランスで、無資格の冒険者、といったところだろうか？

まさかこの世界では冒険者でも身分証明なんてものがあるなんて思わなかったけど。

正規の冒険者という者たちは、成し遂げた功績に応じて、金属の名前があてがわれたプレートが支給され、その階級を名乗ることが許される。そして上に行けば行くほど有名になり、国の待遇も良くなるのだそうだ。

しかし冒険者が優遇されるのは帝国ではそこまでじゃないようで、国家規模で「職業軍人」が衛兵代わりをして、街を警護し、周辺の危険も見回り、警戒してくれるそうだ：結果、あまり冒険者の需要は高くないらしい。

そこでワーカーという者たちが帝国では重宝されているそうで、彼らはそれにあたる。冒険者組合という「組合」に管理されず、依頼を見つけてくるのも事前調査も自分達の力量で調べ、危険かどうか判断するし、依頼主を探したり、報酬の打ち合わせで、釣り上げるも値切られるも、自己責任らしい。

「無資格で自分の力で解決していく…：かあ、昔の有名な作品で、そんなのあったなあ、確か無免許の医者や依頼を受けて、高額報酬と引き換えに誰にも助けられないと言われていて、患者を助ける話だったか？ そう考えるとワーカーというのもカツコイイかもな」

帝国には、彼女の先生である魔法の師匠がおり、この世界でも指折

りの実力者で、寿命を魔法で引き伸ばし、もう100年以上も生きて
いるらしいのだとか：

(他に100年以上の寿命の人間が居ないので証言が曖昧みたいだ
が、あの人ならできるかも、という信憑性がウソだと断言しきれない
部分のようだ)

その関係で魔法学院とかいうのもあり、マジックキャスター魔法詠唱者の地位も高く、
育成に力を入れているらしい。

帝国以外にも、帝国とは真逆で、冒険者が重宝されてる割に
マジックキャスター魔法詠唱者の地位が低く、どんなに高い位階の魔法を使っても、上流
階級の人間たちからはかなり差別的な目で見られる「リ・エステー
ゼ王国」という国があり、このトブの大森林も一応は、その王国の領
地に含まれている一帯もあるようだ。

それ以外にも「人類至上主義」を掲げ、人類の繁栄と守護を唱えて
いるスレイン法国という国や、ドラゴンが評議員を務めるアークラン
ド評議国。獣人に攻められていて、竜の血を引く女王が治める竜王
国。それに聖騎士という地位が高く、アンデッドに対して他の国以上
に忌避感が強いローブル聖王国という国もあるという話。

冒険者をするなら、王国内の領地にあるエ・ランテルという都市に
行くのがいいという話だ、そこは王国の王都と帝国の中間地点にあ
り、その都市内にはちゃんと魔術師組合というものもあって、
マジックキャスター魔法詠唱者の地位も一応は認められてるらしい。

しかし、それでも帝国ほどではないとのことだ。どうやらその都市
は、この森を抜け、南に街道沿いに行けばたどり着けるようだが…「そ
の姿で、街道沿いを歩くのは…」とかなり微妙な表情をされた。

(まあ、それもわかるからいいんだけど。)

さらに首をひねったのが、彼らはモンスターを独自の基準「難度」という概念を用いて、普通はその「難度」という基準でモンスターの脅威度を測るのが一般的だそう。

このことについてはしつこく聞いてみた所、平均的に普通はこのくらい、って程度の目安らしいが、ユグドラシルでの「レベル」を3倍したのが「難度」になるようだ。

時々誤差はあるようだが、それでも大まかに当てはめればそんな感じかな：程度の違いで収まっている。

さつき彼らを送り届けるために召喚したムーンウルフはさしずめ、「難度60」と言えば通じてたのだろうが、教えなかったのでそこまで警戒する相手だと思っただけでない様子に見えた。

そもそも、なんで彼らがこんなところにいるのかと言えば、どうやら自分が目覚めた洞窟には少し前まで「東の巨人」と言われるモンスターが居て、そいつが森の一部：東部分を支配していたらしいが、少し前にその手下共々、姿を消してしまったらしい。

…とはいえ、そんな情報が流れてきたら森の近くの街はたまったものじゃない。

…ということで大森林の東端、その森から見ても一番近くに位置する…：帝国では一番西側に位置する街の領主が「本当にいなくなってるか調べてきて欲しい」と、領主からの依頼で彼らが様子を見に来ただけ…、そして、その領主は今でも毎日、気が気じゃない日々を送っているらしい。

その為、彼らのチーム「フォーサイト」という帝国でも少しは名の知れたワーカーであるらしい彼らが、その役目を買って出て森に来てしまったようであった。

領主も、その悩みのせいで足元を見られ、少し割のいい仕事並の報酬にまで引き上げられたので、それをヘツケランが請け負い、見に来た、という顛末だったとのことだが…

(そこまで危険じゃないはずなのに、こんな見たこともない、全身口だらけの化け物を見たら、そりやく驚くわな…)

そして周辺の地域のこともちろんだが、一応神話とか、昔話とか、英雄譚とかどういふのがあるのかなど、色々な事を聞いてるうちに、最初はウキウキして聞いていたのだが、ある話になると、だんだん気分が悪くなってきた。

人間を守るようにふるまっていた「死の神」と呼ばれる存在を、後からどこかより現れた「八欲王」なる者たちが、寄ってたかつて、殺しては生き返らせ(恐らく蘇生時に起こるデスペナでも悪用されたのだろう)、最終的には、消滅させてしまったそうだ。

そのシーンを、かつて、ユグドラシルを始めた頃のモモンガさんがPKの標的にされていたという話を思い出し、それと被らせて、ひどく不快になりはしたが、表情には出さなかった。

(口だらけの顔で、表情の変化が分かったかどうかは謎だが)

しかし、ここで声を不快な声音で語り掛けてはここまでの行為がムダになる、努めて冷静で友好的な声を出すよう心がけ、明るい声で話題を切り替える。

それにしてもよく私の使える魔法の位階までわかりましたね、と聞いたところ、彼女のへ生まれながらの異能(ト)という能力のお陰であるとのことだ、彼女の師匠もそのへ生まれながらの異能(タレント)を有しており、師匠を基準にして見て、私の位階を判断したようだ。

彼女の師匠は「フルーダ」と言って、世界規模で見ても指折りの魔法詠唱者マジックキャスターなのだそうで、魔力系、信仰系、精神系の3系統を操ることができ、魔力系に関しては第6位階まで使えるそうだし、世界規模で「第6位階」が最強って…ある意味、すごいなと思っただ。

(それにしても初見のはずなのに魔力の量だけで差を明確に見抜けるなんて、聡明な女の子だな…彼女のことは覚えておいていいかもしれない。)

余談だが「生まれついての」という面からしても後から獲得することはできず、生まれる時に選ぶこともできない。

下手をすると、山に住んでいるのに「海の変候の変化を8割で見分けられる」なんてこともあり得たり、漁師なのに「畑仕事を効率よくこなせる」なんてことも可能性としては。ありえるのだそうだし。

選んだ職業と適合するへ生まれながらの異能…というよりタレントに適した職業を得意になれる人間に成長できるとは限らないようだ。

後は、魔法についてだが、普通の魔法詠唱者^{マジックキャスター}を志す人間は、程度の差こそあれ、大体は第2位階までが限界で、才能がある者が努力してようやく第3位階に到達でき、天才が努力も重ねてなんとか第4位階に足をつっこめるかどうか、という基準だそうだし。

さらにそれ以上ともなると、英雄と呼ばれる存在、そこを超えると、魔神だとか神人だとか呼ばれる存在も昔はよく見かけたそうだし、今ではそこまでは滅多にないらしい、彼らも言ったように今では「伝説」や「おとぎばなし」、「神話」扱いとなり現実離れ…幻想、などと同じような意味で使われることも多くなっているようだ。

他にも生活魔法なるものが存在し、生活を豊かにするために自分たちで編み出しているそうだし…どんな覚え方、習い方で習得できるもの

なのか、機会があれば教えてもらいたいものだと思った。

(開発ができるのなら、全く新種のユグドラシルではありえない魔法とかも作れるかもしれないしな)

そう思い「魔法を自分の使いやすいように作れるんなら、魔法学院とか言う所で学びに行ってもいいかもしれないですね」と言ったら、ヘツケランが「甘いね」とちよつとドヤ顔になつてるのが気になった。

「え？なにがです？」そう問いかけると「なにも、オリジナルを作れるのは魔法だけじゃねえってことさ！ 戦士にだって『武技』ってものがあるんだ、基本の技ももちろんあるが、オリジナル技を作ることだって出来るんだぜ？」と…。

とにかく聞くこと聞くこと、なんでも新鮮で、なんとか外に出て、ワーカーでも冒険者でもいいから冒険がしたい！と思いつつも、この外見をなんとかしないと外も歩けないんだよなあ…と一人で抱いた思いを一人で落ち着かせていた。



廃墟の中でゴロンと横になる。

(そう言えば、神官のおじさんと、ハーフェルフのお姉さんは結局、名前、教えてくれなかったなあ)

そう…情報を教えてもらつてる時、歴史の話をしてもらつてる中で「^{メッセージ}へ伝言」で虚偽の情報を流され、それに踊らされたために国が一つ壊滅したことがある」という話を聞いたときに、違和感を持ったのだ。

(普通、声を聞けば誰だか、わかりそうなものにな…)

などと思っていると〈^{メッセージ}伝言〉の魔法はノイズがひどく、伝わる声も誰の声かよく聞き取れない」とのことを聞き、本当にそういうものに変質したのか試したくなって、1つアルシエさんに提案してみた。

「それでは私が今から〈^{メッセージ}伝言〉をアルシエさんに使いますので、どう聞こえるか確認してもらえますか？」と一応、警戒させないように承諾をもらいたいという意図を告げる。

（これからのためにも本当に変質しているなら今の内に確かめるべきだしな）

まだ少しぎこちなさがありながらもなんとか、自分の魔法を受信することを了承してくれたアルシエさんに対して、〈^{メッセージ}伝言〉を発動！

そうすると、突然驚き「なにこれ？すっごいクリアに聞こえる、はっきりと耳元で声が聞こえてる！」と驚いていると…

「うっわ、それってすごいことなのか？俺にも聞かせてくれない？」とヘツケランが言ってきたので、ヘツケランにも使ってみた。

「おおお！ ホントだ、これすっげえ聞き取りやすい！本物だ本物！」と少し興奮気味だった。

「お前らも聞いてみたらどうだ？」とヘツケランに言われながらも…

「私は慎んで遠慮させてもらいますよ」と神官おじさん。

「エルフのお姉さんはどうですか？」と問いかけると、少し眉根を寄せて「…：…：ハーフ…。」と返ってきたのだが、何を言われたのかわからなくてつい「…え？」って聞き返しちやっただよな…

そうしたら「私はハーフエルフだから、そこんとこまちがえないで！」とぶった切られ、そのまま断られてしまった。

結果、わかったことと言えば、〈^{メッセージ}伝言〉の魔法は自分からはクリアに聞こえるようだが、他の人から私にそうした場合もそうなのかわか

らない、しかし通話状態に持ち込むには条件が2つあることに気づいた。

まずは、

1. 通話したい相手の顔と名前が一致していること。
2. その上で、一度でも面と向かって会話をしていること

少なくともこれらが条件として満たされてないと、発信しても相手に届かないことが分かった。

(はあ〜…これじゃ、もっと交流を広げないと〈メッセージ〉自体が使う頻度、かなり少なくなっちゃうんじゃないかな〜…)

そう横になったままですぐやっていたところ、召喚したムーンウルフとの精神的なつながりというか…確かに感じていた感覚的な繋がりがぷつぷつと切れた感じがした。

慌てて、アルシエさんに〈メッセージ伝言〉を送る。

『あ、夜遅くすみませんね、アルシエさんですよ？ ご無事ですか？』

「あ、なんとかさんですか？ すみません、お名前を聞きそびれていて…ハイ、大丈夫です、急にオオカミさん達は消えてしまいましたが、変なやつらは近づいて来なかったので、無事に街の門の前まで来られました。今日はありがとうございます。」

『ああ、よかった、それならいいんですよ、こっちでも、ムーンウルフが消えてしまったのが分かったのでね、敵にでも襲われたのかと思っ
て心配しちゃいました。でも無事に帰れたようでよかったですよ』

「ハイ、今回のことは忘れなくておきますね、それからパーティーのみんなにも今日のことは下手に言わず、メンバーだけの秘密にしようという事で一致しましたので」

『そうですか、それは良かったです、あ…そうだ、それから一応、これは伝えておいた方がいいと思うので』…とここまで言うと、

「え？ なにをですか？」と返ってくるアルシエちゃん。

最初逢った時より警戒感がずいぶん薄れているのか、声の感じが可愛く感じてしまうのは気のせいか…

(最初に自己紹介された時に「よろしく、アルシエちゃん」と言ってしまい「子ども扱いしないで欲しい」と言われた為、本人の前では「さん」付けは確定なのだ。)

『私のことはこれから『ヴェールリバー・スウズカウワー』という名前だと知っておいてください。長ければ、ヴェールでも、スウズでも、カウワーでもお好きな呼び方でいいからね。』

そう伝えると、しばらく何かを考えているような様子で…

「それでは何かありましたらスウズさんとお呼びするようにしますね」

『ハイ、それでは、これからはまたご縁でもあれば、その名前で呼んでください、また会えた時は恐らく、見た目が違ってるかもしれないので、その時は私から名乗らせてもらいますから。』

「???(少し意味が解らなかつたようだ)…そうですか、わかりました。

それじゃ、これからなにか相談ごととか、何かあったら、私からも

メッセージで連絡することもできますね」

『あ、それもそうですね、ええ、もちろん何かあった時はお互い様ですから一向にかまいませんよ？ 初対面の時より打ち解けられたみたいで嬉しいですし、それでは今日はもう遅いですから、ゆつくりと休んでください』

「ハイ、ありがとうございます、それじゃくおやすみなさい」

…そう言つてプツンという軽い音と共に意識が通じてる感覚が消失する。



落ち着いて1人の夜を過ごしていると「あ、そう言えばアイテムボックスの使い方も、さつき閃いた感じがしたんだよな」

そう…最初は使い方がわからず、まず特定のアイテムを思い浮かべ、手をつっこむ…それで何も反応がなかったらアイテムボックスには存在していない。

そんな非効率的なやり方だと思っていたのだが、手をつっこんだ状態で、頭の中で「検索 アイテム」だとかイメージさせると、頭の中、というかおでこのあたりにスクリーンみたいなのが（感覚的に）広がったのだ。

そしてそこに手をつっこんだまま、横に振ったりしていると、イメージの中のスクリーンが横にスライドしていき、どんなアイテムが入っているか理解できる、その中で好きなものを手に取って、引きづり出せば取り出せる。

それで「彼らを泊まらせるためのコテージでもマジックアイテムで

く…」と思い、空間に手をつつこんでみたら、いきなりなにかに怯えたようになって、急いで帰ろうとするし…、他にも安全に帰れるように提案もしたのだが、何をそんなに慌てているのか、すぐにでも飛び出しそうな勢いだったのだ。

とにかく急いでる様子だったので「護衛をつけるから、ちよつと待って」と制止させ、ムーンウルフを3体呼び出した。

そうしたら、出てきたのが、オオカミとは言え、動物なので「安全かどうか」を私に確認すると、私の方も、「彼女らを護衛し街まで付き従え、危険が近づきそうなら排除せよ、離れる時は1体は彼らのそばに寄り添うように」と命令を出したら、女性陣は頭をなでたり、「ふかふかあ〜♪」とかご満悦だった。



とりあえず、今日の所はこの辺にしておいて、明日以降、どこに向かうかは明日考えよう、どうせまだ森の中だし、外に出るまでにはなんか解決策が見つかるだろう。

まずは明日になったら近場の帝国の街の方に行ってみるか、どれくらいの距離があるかはわからないけども…。

そう結論づけ、今日も「ピッチャー オブ ・ エンドレスウオーター無限の水差し」を取り出し、全ての口に水を流し込み、空腹を覚えない程度にお腹をちやぷんちやぷんにして、眠りについた。

第04話 初めてののおどり喰い

今日も目覚めは快適だ！

以前までいた世界のように、使い捨てのごとく、使いつぶされるまで仕事に従事させられ、朝は4時起きで支度して、仕事に行くなんて当たり前だったことを考えれば、なんのしがらみもなく、気が済むまで寝ていられるというのは、なんて幸せな事だろうか？

そうやって、ひとしきり毎朝の至福を感じていると、ぐううぐう…とお腹が鳴る、この世界に来て、もお3日目か、さすがに何か食べないとな…

こんな森に豚や牛なんて居ないだろうし、小動物？それとも魔獣じみたモンスター？

まあ、スキルを使えば、モンスターだろうが魔獣だろうが、食べられることは食べられるだろうが…スキルで【捕食】したものって、お腹が膨れるんだろうか？



ひとまず、食事前に装備を整えることにして、ついこの前、この廃墟で拾った伐採用の斧をアイテムボックスから取り出し、錆び着いたノコギリ、そして建物の外で所々、落ちているというより打ち捨てられている状態の木材、ツルハシの頭の鉄部分…それから掘り起こす作業用だろうか、少し大きめのスコップも転がっていたのでそれも持ってきて、一か所に集める。

そしてそこから少し離れた場所にも、廃墟の中にあつた朽ちたロープと木材を持ってきて、別の扱いとして離すようにまとめておいた。

朽ちたロープに〈修復^{リペア}〉の魔法をかけ、見た目は新品同様のロープに直す。

木材や、斧、ノコギリにも〈修復^{リペア}〉をかけて新しい見た目に直したあと、〈道具作成^{クリエイトアイテム}〉を発動させ、木材と鉄類を材料にして、ぶ厚めにしておいた木の盾を作成、さらにその上に鉄で盾の全体をコーティング。

…まあ、無いよりはいいだろう。(好みで、バックラーのように腕にピッタリ装着できるタイプにしてみたので、これなら腕がふさがらないし、使いやすそうだ)

※ イメージは活動報告にあり。

残った木材とロープは、同じく〈道具作成〉クリエイトアイテムで、簡素な弓、そして、先端をとがらせただけの、木の矢を千本くらい作成した。
(矢じりは鉄の材料が不足しているため断念)

そして追加で、矢を入れるための矢筒、それは他に余るほどある木材を使用して作り出し、矢筒も大量に作って、そこに千本くらい作り出した矢を収納させた。

それをアイテムボックスにしこたましまい込む、まあ、一応メインの武器(好んで使いたくないという理由もある)はあるが、目立つ為：同格の敵が現れない限り使わない方がいいという結論を出して、歩き出す。

(弓を専用で使う職業レベルは持つてないが、戦士のレベルは獲得してるんだし、戦うのに困らない程度には使えるだろう)

あ：そうだ、せっかくアイテムボックスの使い方がわかるようになったんだし、何があるか見ながら、装備した方がいいものを見繕っておこう、なにか服とかあるかもしれないし。

手をつっこみ、しばらく感覚で浮かんできたスクリーンを眺め、見ていると、めぼしいものから取り出し、地面に置いていく。

「探知阻害の指輪(魔力系限定)」レックグアーマー・オブ・コックローチ「恐怖公 眷属風・脚防具」ローチ「武人の

胸当て」「魔法執行の指輪」「祝福されたクローク」「ハーキュリーズのガントレット」「疲れ知らずの天冠」「アンダークロース」そして「嫉妬する者達のマスク(アニバーサリーエディション)」……こんなものか？ 意外に残ってるものだなあ……とはいえ、これらって、いいものでも遺産級レガシー止まりで、ユグドラシルじゃあんまり欲しがる人もいない基準だったからな……。

遺産級レガシーですらないのは、アンダークロースに、嫉妬マスクか……

☆☆☆

ユグドラシル時代、新規でプレイヤー登録すると、アバターが自動的に初期に着ていた服で「旅人の服」というのがあった……これは防御力もほとんどなく、強いて言えば防寒用として、冷気に対する耐性がちよつぴり上がる程度で「下級装備」にも劣る微妙系防具であったが、初期プレイヤーからすると20LV近くになるくらいまで重宝されていた理由は、基本的にユグドラシルではヨロイの重ね着はできない仕様になっているのだが、ヨロイの下に装備できる「アンダーアーマー」に分類される装備も数は少ないが用意されていたのだ。必然的にアンダーアーマーの数値も、メインの防具の防御力の数値に加算される特典がある。

その最底辺に位置するのが「旅人の服」なのである。

そういう事情により、基本的に1プレイヤーに一着はこの「旅人の服」は持つていることになるのだが、これの厄介なところは、売ることができず、捨てることもできないという点である。

そんな装備をプレゼントされて嬉しいプレイヤーなど、ごく一部すら見当たらず、持て余していた人も多かったと思うのだが、作成系のガチビルドで構成されていた「あまのまひとつ」さんと有効活用できないか？と頭をひねっていたところ、「旅人の服」を2着（あまのまひとつさんが持つている分を合成するとき提供してくれた）に、クロスアーマー（これも下に重ね着できる下級装備）を合成して防具を作成してみた所、通常の作成結果よりクオリティが一段UPした「アンダークロース」ができたのだ。

（とは言え、これでも中級装備の下の方だったんだけど…）

あと、武器らしい武器っていうと、モンスターからドロップされて問答無用でゲットするしかなかったゴミ装備ばつかなんだよな…：だいたい素材として、合成させちゃうことが多かったけど、まだまだ素材のまま、残されてる物も多いなあ…：まあ、ミスリルや、オリハルコン、アダマントナイトなんて、柔らかい材質だったからなあ…：使い物になるかわからないけど…：一応、オリハルコンあたりで間に合わせるかなあ…：

「木の弓に木の矢で、木の盾を鉄でコーティングしてるだけのシールドなんだから、釣り合いとしてはそのくらいがきつと妥当なんだろう

し…」

(実はこの世界ではオリハルコンの剣など、かなり上等な部類だとはまだ知らないヴェールリバーであった…)

嫉妬する者達のマスク(アニバーサリーエディション)は嫉妬マスクの中でもレアな方に分類されるもので、クリスマススイブの19時〜22時までの間、ログインしたままだった場合、運営から問答無用で贈られる(受け取りたくなくてもどうにもならなかったともいう)。これを持つ者はイブに一人きりだったという不名誉な事実を形として見せつけられるという意味でもかなり不評を買っていた、ある意味「呪われた」アイテムである。

そもそも受け取ったら、売ることも捨てることも、誰かに渡す(押し付ける)ことも、壊すことも合成で材料にすることもできない。出来る有効活用法と言えば、イブにユグドラシルにインできなかつたりア充さまに「ええく?キミ、これ持ってないのおく?」と持っている仲間を動員して、嫉妬マスクを装備してる状態で周囲を囲んでからかう。そんな使い道しかなかったアイテムが、この「嫉妬マスク」そういう背景もあってかなり不人気だったのだが、その中でも5周年記念、そして末広がりの意味で8周年記念、さらには10周年記念の嫉妬マスクもあつたようなのだ。

自分が持っているのは5周年と8周年だが、きっとモモンガさんなら10周年の方も持っているんじゃないかって気がする…多分、その予想は外れてないだろうな。

5周年と8周年は、イブにぼっちだった際、つまり一年に一枚しか手に入らないマスクを5年連続、8年連続で欠かさず所持している場合のみ、追加で手に入ったもの。

しかし10周年は毛色が全く違い、今まで手に入れた嫉妬マスク10枚と引き換えに手に入れるという…はつきり言って「誰得??」とどっちにしても悩むほどの運営の悪ノリっぷりだったのだ…

基本的なデザインは嫉妬マスクと変わらないのだが、マスクのふち周辺に金の装飾がこれでもかと施され、額部分には5周年という意味で「V」8周年には「8」と印字され、その左右には天使の翼のようなデザインもついている。

…10年は続けられずに辞めてしまったから、10周年の嫉妬マスクがどんなものかは知らないが、ユグドラシルの攻略wikiでは、その時期、かなり話題になっていたらしいというウワサは覚えているが、画像データではアップされてなかったらしく、自分もどんなものかは知らない…まあいまさら知ったところで、何の得もないんだけど…

ちなみにこの嫉妬マスクは「アクセサリ」に分類されているので「防具」であるヘルムや、フルフェイス式のヘルムの上からでもかぶることがができる。

…それもなんの得になるのか知らないけど…、防御力もないし、耐性もつかない、ヘイトを集める効果があるわけでも、特定のモンスターやNPCに対して好感度が上がるわけでもバフやデバフがかかるわけでもない。

はつきり言って、コレクター収集癖のあるモモンガさん辺りじゃないと好き好んで集めたりしないんじゃないだろうか？

なんだかんだ言っても、8周年の嫉妬マスクがある時点で、自分もノーマル8枚、アニバーサリーの方が2枚の、計10枚もってることになるんだけどね、そんなにあっても何に使うのやらだよ…

とか、なんだかんだブチブチ言いつつ、着々と準備した装備群をそれぞれに装着していった。

☆☆☆

一通り、装備して：実は、アイテムボックスにもう1つ気になる装備もあったのだが、ユグドラシルではかなり限定的な使い方しか出来なかったため、あまり使わなかったもの…

マップ内の気候や、強風地帯、もしくは敵からの風系の魔法を受けたりした時にしか、自分にバフがかからないという分、強風地帯だった場合、限界まで重複バフがかかるという…：分類的には「神器ゴツズ級」扱いのレアリティなので、限界までバフがかかった時の恩恵はさまざまいものがあったのだが…：そんな、時にはありがたかったアイテムも残ってはいたが…、あれはあれで、装着するのに勇気がいるから、今はやめておこう…：それもたっちさんの願望の現れ…：その名も「風車のベルト」ベルトのど真ん中に「V」、そしてその「V」の上部に「3」とある。

あまりヒーローに明るくなかった自分にはそれが何なのかはわからないが、かなり熱心に「これはイイものだから！」と押し切られるようにギルドを去るときに「餞別」として…：なのだが、結局受けとつた物。

実は『またいつでも戻ってきてくれ』って意味だっただろうことは、ずっと心に引っかかっていた。

結局、最終日までログインすることはできなかつたけど…、みんなとの絆である「ギルドの指輪」は今でも「トランプ機構付き宝物箱」で保管している。

きつともう使うことはないだろうけど…。

一通り装備してみたなら、嫉妬マスクが自分の口だらけの顔全体を覆うほどに広がって、頭頂部より後ろしか見えなくなってしまうている…そして、後頭部の方は、クロークのフード部分で、隠れるため、気にして見なければ気にならないだろう。「すごいな…さすが8周年記念。」と感動を覚えつつ、歩を進めていると、近くに水の流れる音がしてきた、これは川?…というより「沢」と言った方がいいのだろうか?

どっちがどう違うのか、きつとブループラネットさんならわかって教えてくれるんだろうけど…自分じゃどっちかまではわからないな…でも魚とかは食べられそうだ、イワナ?とかって…魚が昔、自然豊かだったころ、リアルの世界では居たらしいが、こっちではどんな魚がいるんだろう?!

☆☆☆

流れる水に近寄って見ると、信じられないほど透明だ…水の底まで見え、泳いでいる生き物まで見える。この水って、飲めるのかな?…と興味を抱き、手ですくい、飲んでみる…うまい!

「無限の水差し」と同じくらい美味しいんじゃないか? イヤ…あれ

よりちよつと甘みがあるっぽいかも？とか考えながら、さつき作った弓で試し撃ち…とばかりに泳いでいる魚を狙う…さすがに一発ではムリだったが何度目かのチャレンジでやっと一尾ゲットできた。

すぐに矢を抜いてやり、生きてるうちに新鮮な魚を丸呑み…おお…意外とノド越しが…と思っていると頭の奥でピコン！という音が鳴ったような気がした。

「なんだ？」と思って意識を自分の内側に向けると「スキル【捕食】という単語が浮かび、次に「Y」「N」という映像がくらんだり、縮んだりしているイメージが続いている。

「ここですか？」ここでもバフなんてかかったって意味ないだろうに…それとも、ひよつとしてこのスキルもこつちに来て変化してるのか？と新たな疑問が浮かんでしまった。



【大喰らい】である彼の初期スキルでもある【捕食】、その効果は単純だ。

ユグドラシルにおいては、【捕食】のスキルは敵を仕留めた際にスキ

ルを使うかどうかを求められる。

そこでYESを選択すると、小のバフがかかる、自分よりレベルの上の敵だったら中のバフがかかり、5LVより上の敵を自分の手で倒すと、バフの大きくなるような仕様だった。

しかし、これは戦闘中で効果が切れるため、仮に敵が2体出てきて、一体を自分が倒しバフがかかっても、仲間がもう一体をそのターンの内に倒してしまつたら、自分の次のターンが来るまでに戦闘が終わるので、結局はバフの意味がなくなってしまうということもしばしばあった。

それなのに、戦闘中でもないのに【捕食】？

どんな効果に変わったんだ？

そう思っていると、今度は「消化 or 捕獲？」のイメージが浮かぶ：「なんだそれ？」と思いつつも、まあせつかくの踊り食いなんだ、すぐに消化してしまうのはもったいないよな。

とか思つて「もちろん捕獲」と念じると、頭にまるで電子音を無理やり音声に変換させたような声が響く：『捕獲対象の一部を読み込みます。反映させる身体的特徴を1つ選択してください。この効果

は捕獲している間であれば何度でも選び直せます』と言ってきた。

んんんん？ 何が起こってるのか全然わからないぞ？

(今、丸呑みしたのは魚だよな？うん、間違いない、それで？捕獲ってことはまだ食べられてはいるが消化はされずに体内に留まっているということだろうか？)

…まあそれは追々、検証するとして、今は何を選ぶかだな？…魚だし、尾びれだと歩けなくなるしな…背びれ？意味ないし…、消去法的に「選べ」っていうことなら、頭くらいしか思い浮かべられないな。

なんて思った瞬間、頭に異変が起こる、目の前がザアくと、モザイクというか砂嵐というか、そんな視界になった直後、視界が切り替わる。

今まで見ていたのが、ソナー+熱源探知的な視界だったとしたら、今はそのままの景色が見える。

なにか変わったのか？と思い、頭に手をやると、つるりとした感触、体中にあつた口が今は顔中のあらゆる部分だけには全くなくなつて

いる、前方に突き出してる口が一つだけだ。

今、どんな顔になってるんだ？と興味を覚え、水面に顔を寄せ、自分の顔を確認する。

「……………魚の頭だ……………」ある程度は覚悟していたが、やっぱり魚の頭になってしまった。 ……これか？これが【捕食】の効果になっちゃったのか？ バフですらなくなってしまったのか…

なんか、以前タブラさんが言っていた、インス？まあす？人じん?? だとかなんだとかの外見みたいだよなあ…たしか、深淵の？だったか？神が降臨される前の支配者？ 異貌の魔神？とか言ってたっけ？

タブラさん、そういう神話関係の話になると止まんないから、聞き流してたんだよなあ…

…それにしても、不思議と【捕食】中は、空腹にはならないようだな…それはいい変化だ。

そうだ、捕獲してる対象を吐き出したら、どうなるんだろう？

頭の中で「スキル【捕食】キャンセル」と告げると、ブレストプレートのお腹部分にある口から「ほうええ！」という何とも言えない発声と共にボテッと地面に落ちたのは、先ほどの魚だ…。元気にビチビチ跳ねている。

どうやら本当に捕獲してるだけだったようで、食べる前と何の変化もない、強いて気になる点を言うなら、矢で空いた穴も一緒にそのままだという点だけだろうか…

吐き出した後、自分にはどんな変化が起きたのかと思い、水面を覗いてみると、さつきまでの体中口だらけの見慣れた顔だ。(ゲーム中、アバターでさんざん見たからな…)

それにしても、吐き出したとは言え、矢の穴がそのままならどのみち、このまま苦しませているままっていうのも悪い気がするよなく、せめておいしく食べてあげよう、そう思い、今度は丸呑みではなく、口から出ている牙で、グジャ、グジュウ…と文字通り「食べて」いく。

再び頭の中にイメージが浮かんできたので手早く頭の中で「そのままスキル【捕食】起動」と念じると、これまた頭の中にアナウンスが！

「泳ぎの経験を獲得しました、おめでとうございます。」の頭の中でのアナウンス。

「対象の消化が完了したことにより、バックアップに、今回消化させたデータの全てを記録します。このバックアップは1体分の容量が全て記録されます、次のデータがバックアップに保存される際は、古い方は消滅してしまいますので、どうぞ、有効にお使いください。」…と言うと静かになる。

☆☆☆

そっか、そうなのか…、こっちの世界では色々変質してるんだなあ…

「仕方ない、顔の方は後でムーンウルフでも呼び出して、【捕食】で生きたまま体内で保管しとこう、そうすれば獣人くらいには見えるだろう。」

それはそうと…【捕食】でバフがかからなくなっちゃったのは痛いよなあ…やっぱり、あとで「風車のベルト」を装備することでも考

慮に入れて置こうか…

ぼんやりと透き通る青空を見上げながら、ポツリと呟いた。

「装備した状態で、〈飛行フライ〉で飛び回れば、バフってかかるのかな？」

なんて思いながら…：そういうえば、さっきのアナウンス、聞き覚えがあると思っていたら…：そうだ、ユグドラシルのプレイの冒頭、冒険の案内役としてチュートリアルのシーンだけで現れていた「案内役の妖精、アナーニイ」の声にそっくりだった感じがしたんだった。

あの妖精って、結局その場面でしか出番がなかったから思い出すのに時間がかかったよ…：でもなぜ、あの妖精の声だったんだろう…？

まあ、これからも何か変化があったら、またあの声でアナウンスが発生するかもしれないな…：などと思いつつ、ただただ、どこまでも広がる青い空を見上げるのだった。

幕間 フォーサイトの受難 “おぞましき邂逅、奇跡の生還”

ここはトブの大森林と呼ばれる場所。

本来はうかつに人が入り込めば、どんな生き物に「エサ」として襲われるかわからない、油断できない場所だ。

そこに警戒しながらも、決して怖じけずに歩を進める一団がいる。

その者達はワーカーチーム「フォーサイト」

ワーカーとは帝国においてルールに縛られず、管理されない自由さと引き換えに、自らの実力で、全て依頼主の選定から下調べ、違法であろうがなかろうが、自己責任で依頼の危険度に見合う報酬のために、依頼さえあれば日々活動している者達のことである。

言わば「よろず仕事請負人」のことなのだが…このフォーサイトはどのような事情があれ、殺しや暗殺などの依頼は受けないことをモットーとしているチームだ。

それも自分の命あってこそ、という最低限の基準はある…襲われたら身を守るだけに留まらず、返り討ちにすることも時にはあるのだが…

そしてそんな彼らがいるのは大森林と呼ばれる…迂闊に人が足を踏む入っては生きて帰れる保証のない場所であり、周囲一帯に広大な自然が広がり、なんの準備もしないで入ろうものなら、何かに襲われずとも道に迷い、命が危ない…「安全」とは程遠い隔絶された世界である。

それでなくても本来ここは彼らが所属している帝国ではない、森の中は王国の領地である。

それなのに、危険を冒してまで彼らがここにいるのは、大森林の東端、そこからすぐ目の前にある街、「ルーズインター」の領主からの依頼で、仕事を引き受けたからだ。

☆☆☆

樹木に囲まれ、かろうじて獣道になっている細道を歩きながら、彼らは進む。

進むといつてもこの「森」というテリトリーの中では下手をすれば、厄介な敵に襲われることもある。

もちろんそれは人という存在のみならず、森に棲むモンスター達から、ということもあり得るのだ。

樹の上から獲物を狙い、生半可な武器では簡単に切れない糸で首を吊らせようとする「絞首刑蜘蛛《ハンギングスパイダー》」。

物陰からいきなりジャンプして飛び掛り、不意をうつ「跳躍する蛭」ジャンピンググリーチ

さらには、地中から気づかれずに忍び寄り、足の下から急に現れ、大口を開けてバツクリとエサを丸呑みする「森林長虫」フォレストワーム

そんなのがウヨウヨ出てくる可能性があるのだ。

必然的に歩みは安全を確認しながら、という遅めの歩調になる。

「ねえ？ ホントにそいつは罅（ねぐら）にしてる洞窟から姿を消してるんでしょうね？」

弓を携えたレンジャー持ちのハーフエルフの女性が、そう口を開く。

それを受けて一番前を進む軽戦士風の男が軽く答える

「それを心配してるから、ご領主様からたんまり前金までもらって、こ

うして調査をしに来てるんだろ？ まあ、噂通りなら巨人とバツタリなんてないと思うぜ？」

その一番後ろで、背後から襲われるのを警戒している神官風のヨロイ姿の男がそれに追隨する。

「問題は、標準サイズより大きな巨人であれば、遠くてもわかるでしょうが、ただのオーガや、トロールだったら、木々の陰に隠れててバツタリという可能性もあるでしょうね」

神官より前を歩き、4人の中では中心、他の3人に護られるように歩を進める魔法詠唱者の女の子が不安を口にする。

「おそらく巨人という話からして、魔法までは使えないと思うから、私の「目」で遠くから魔力の波に気づいて警告とかは…出来そうにない…。」

森に関してはレンジャー持ちの仲間が一番先に危険に気付く可能性が高いため、特に周囲に気を配りながら、ハーフエルフの女性がそれに返答する。

「大丈夫だって、アルシエにはいつも助けられてるんだから、今回だつてもしトロールだったら、酸や炎での支援、頼んだわよ？ 多分それしか通じないだろうしね。」

その会話で少し緊張してる感じに気付いた神官の彼が空気を和らげるために全員に聞こえるように澆刺と発言する。

「大丈夫ですよみんな、もし何かありましたら、我らがリーダーが身を挺して逃げ道を用意してくれますから。」

「オイオイ、俺にその役目を回すのかよ！ 足止めくらい役にしかたたねえんじやねえか？ トロールだったら再生されてジリ貧だぞ？」

「大丈夫ですよ、こつちだって、私という回復役がいるんですから、遠慮なく傷ついていいんですよ」と神官の男。

「おいおい、ロバー、お前の回復量でトロールのダメージをゼロにできるのか？ 俺はまだ死にたくねえぞ？」

「大丈夫です、神の奇跡で、きっと生き返ることが出来ますよ」と軽く言う「ロバー」と呼ばれた神官の男

「お前、蘇生魔法つかえないだろおく？ 適当言ってるな？」と苦笑して返答する軽戦士。

その会話で少し肩の力が抜けたのか、アルシエという女の子はかすかに笑顔を浮かべる。

「ありがとう、みんな…私、足手まといにはならないからね？」

「大丈夫だって、何かあったら私だって、アルシエに攻撃が行かないように牽制くらいの役には立つんだから。」と肩に手を置いて、ハーフェルフの女性がニツコリと笑顔を向けた。

☆☆☆

なんだかんだ、張り詰めすぎない程度の緊張を保って森を歩いていると、進行方向のずつと先から、魔法でも炸裂したかのような爆音が聞こえてくる。

驚いて、全員が顔を見合わせ「何？ 今の何の音だと思う？」「わか
りませんね、魔法の音のように聞こえましたが、ちょうどへ火ファイアーボール球が

炸裂した時のようでしたね…」「問題は、それが誰かを襲って使ったのか、それとも襲われて、自衛のためなのか…それ次第で話は変わる。」
「そうだな、ひとまずは状況の確認だな」

「まずは状況確認のため、俺が先行する。ロバーはしんがり、背後からの危険に備えてくれ、イミーナはアルシエの前に居てやってくれ、特に何かからの不意打ちに遭わないようにフォローだ。それじゃ、行くぞ！」

「わかった」「ええ。わかりました」

彼らはまだ知る由もない、これから向かう先に何が待ち受けているのか、それがまだ「悪の魔法詠唱者」程度なら、まだマシだと思いうような災禍に身を投げ出すことになろうとは、この時は想像だにしていなかったのである。

後に自分たちの身に起こる、身の毛のよだつような体験の、ほんの些細な序章であることにすら気づかず、渦中に飛び込んで行くことになってしまったとは…

☆☆☆

「なんだ、さっきの爆音はあんたの仕業か？ …って、え？ あんたなんだその口、モンスターか？」

今、自分達の目の前にいるのは、見たこともない者であった。

先ほど、爆音が森の中で響き渡り、誰かが襲っているか、襲われているかを心配して来てみれば、なんと全身口だらけ…というか口しか

ないと言うか：幸い腕や足、胴体などはちゃんとあるので、かろうじて人体の形はしていることがわかる。

とは言え、目の前の存在が、武器も防具も身に着けていない、同じ人間ならば裸という事実にうろたえるだろうが、相手は見るからに人外だ。

下手なことをすれば、あの無数にある口と牙、あれでかぶりつかれる可能性もある。

リーダーであるヘツケランは悩む：何しろ、今までに遭遇したことのない：モンスターだか、異種族だかの判断材料が全く自分らには無いためだ。

うかつなことをして、メンバーを危険にさらしたくはない。しかし、どうすれば最適解なのかの情報がない中、下手に動くこともできないというのが正直なところだ。

隣を見れば、イミーナが油断なく弓を構えては居るものの、彼女もそのまま、下手に刺激出来ない状態にいる。

しばらくそうやって下手に動けない状態だったのだが、そこでその均衡を破る声が聞こえた、ロバーデイクだ。

「見たこともないモンスターですね、あんなのは今まで見たことも聞いたことも…」

とまで言った矢先、アルシエがその先を遮るように叫んだ。

「ダメー！そいつには関わっちゃいけない！みんなすぐ逃げて！」

アルシエは「生まれついでの特異能：タレント」によって見えてい
るのだろう、魔力系、魔法詠唱者特有の魔力の量を…

(おいおい…アルシエが逃げの一手を口にするほどなのか？ ってことはあいつは魔法も使えるのかよ…少なくともエルダーリツチと同等かそれ以上ってことか？)

目の前にいる異形の相手を見やると、最初に見た時と同じ姿勢のままにいる。

こちらの様子を見ているのか、敵対的な動きも、かと言って友好的に話しかけてくるでもなく、両手を大きく広げて「さあ、おいで？」とばかりにその場から動かない。

わずかにあらゆる口たちが、小刻みに動いてはいるので、間違いなくこちらの出方をうかがっているのだろう。

(あんな態度で、余裕を出して待ち構えてるんだ…何かの罠か、それでないや、相当自信があるって証拠だよな…ありや。)

リーダーのヘツケランも思考の渦に陥っているため、他の2人も下手に動けない。

逃げようと下がれば、相手は動き出すかもしれない、かと言って全力で逃げようにもアルシエの目ではどの位階まで使えるように見えるのかわからないが、後ろからズドン！は勘弁願いたい。

チームとして動けなくなっていることに焦れてきたのか、決定的な言葉をアルシエが放つ。

「そいつは私の師匠より強い！第7…ううん、多分第8位階まで使えると思う！」

(…マジか…そんなものの範囲に巻き込まれたら間違いなく全滅じゃねえか…国を相手に戦えるアルシエの師匠よりも上ってか？)

そう思わず心で舌打ちをして「こりゃ死んだな」と内心で呟き、最期の言葉になるだろう一言で全員に「覚悟を決めろ」と暗に伝えてくる。

「ウソだろ〜？ 第8なんて言ったら神話の話じゃ〜ねえか！」

その言葉に呼応して、ロバーデイクが自分たちもそれを確信しているという意味を込めるように言葉を発した。

「私にもわかりますよ、そのモンスターを見てると鳥肌が立って、止まりません…」

恐らくアルシエの師匠ならあと100年も生きれば、第7位階とかにも行きそうな気もするが、第8、第9なんて魔法は物語の中、かの「八欲王」や「六大神」らの世界の話なのだ。

そんな「伝説」が目の前にいるのでは、下手な動き1つで世界を巻き込む、大惨事どころか「破滅」しか待っていない状況が目に見えるようだ。

（どっちにしろ詰んでるな、俺らが先か、世界と一緒に…、って違いなだけ…か？）

そう絶望に陥りそうになっているところに思わぬところから一筋の光明が差し込まれた。

「ああ、失礼…みなさん初めまして、私はつい最近この森に来た者ですが、どうやら驚かしてしまったようです、少し訓練…のようなことをしてたところでした」

一瞬、誰がそんなことを言ったのか、わからなかった…なぜならどこをどう聞いてもただの気の弱い一般人が、はずみで何かをやらかした時に弁解するような雰囲気漂わせながら、人間としか思えないような声音で話しかけてきたのだ、これがもつとモンスターじみた発声ならまだ納得もできるのだが、目の前の存在にそんな声が出せるものなのか？とつい耳を疑ってしまう。

「おい、今の聞いたか？ なんかえらく腰が引けてるみたいない感じな

んだが？ それにどう聞いてもあれ、モンスターじゃなく人の声だぞ？」

「そんなこと言ってもアルシエの目は確実よ？ 何かのマジックアイテムでも持ってた魔力を隠してるならまだしも、見えた結果を間違ったことは今まで一度もないじゃない」

弓を構えながら、小声で問いかけられたリーダーの質問にイミーナも小声で返答する。

「そうやって、気弱な芝居をして、こちらの油断を誘っているのかもしれない。あのポーズはどう見ても、いつでもかかってこい！もしくは、何も怖くないよ？ って思わせたいような態度にしか思えません。」
慎重なロバーの、それでいてそういう面があるからこそ、ムチャをせずに今まで生きてこられた彼の存在は大きく、その言葉を軽く扱うことは、自分達の危険度を上げることだと理解してるため、その言葉にも理解ができる。

「んじゃ〜どうするよ？ 進んでも地獄、逃げようとしてもズドン！ っていうのが目に見えるようだぞ？」

「じゃ〜、あいつのご機嫌でもとってみる？ もしかしたら、見逃してもらえるかもしれないんじゃない？」

「あれのどこをどう褒めるっていうんだよ、下手に機嫌を損ねたらそこで終わりだぞ？」

結論の見えない相談を身内だけで交わしていると、再び目の前の異形の存在から、信じられない言葉が発せられる。

「危害を加えるつもりはありません、私も別に争いごとが好きなのはないので、対応はそちら次第ですが、できれば、少し話し相手になってくれませんか？」

そう言い終わると、その異形の者は、ゆっくりと腰を下ろし、ヒザを地面につけて足を組むような姿勢でくつろぎ始めた。

「信用できると思いますか?。」と、ロバーデイクがどちらに対して言ったのかわからない返答をする。

「私は反対、見るからに取って食われそう」

メンバーの中で一番、罨や危険を見定めることに長けたイミーナが反対の意見を述べた。

(だが、どっちにしろこれじゃ、状況は停滞したままになっちゃう、それならちよつとばかり冒険してみるか?)

「あんた、何者なんだい? 話って言ったって、なんも面白い話なんかないんだが?。」

そう問いかけたヘツケランに対し、目の前の異形は、少し体を起こすようにして、こつちに意識を向けてくれたようだ。

(話は通じる相手っぽいかな?)

もし話が通じる相手なら、問答無用で力に訴えてくる奴よりはまだやりようはある。

そう結論を出し、これからどういった流れに持っていこうかと思案し始める。

「なに言ってるのヘツケラン! そんなのと関わるつもり?。」

ヘツケラン以外の3名がそろって、目を見開き「大丈夫か?。」といった目を向けてきていた。

それに対して、対話相手を見据えることで、言葉以上に自らの意思

を仲間に伝え、交渉を開始する。

「俺達も、さっきの大きな音を聞いて近づいてきただけで、あんたの縄張りを荒らすつもりじゃなかったのは信じてもらいたいんだが、どうだろう?」

（これで、まずはこっちが姿を見せた理由を相手に知らせることはできた、あとは向こうがさっきの爆音の理由は何かを教えてくれればいいんだが…）

そう考えていると、その異形の者は、人間であれば頭をかくような仕草をしながら（場所は頭だが、口しかない）、ポリポリと口をかいている。）

「ああ、問題ないですよ? 私の方も別に縄張りって訳じゃありません、ただ、そこに見える廃墟を一晩の宿代わりにしてただけなのでね、そんなことで怒るつもりなんてないですから」

と、そう言つて、後ろの方に指を向けるようなポーズをとられた、こちらを視界に収める程度に意識を向けると、たしかに廃墟のようなものはあった。

（ただ、寝泊まりをしただけで、通りすがりだつて言いたいのか? それにしても爆音の正体は明らかにせず…か、手の内は見せないってことか?）

そう苦々しく思うも、少なくとも見える範囲に生き物の亡骸などはなく、何かが燃え尽きたような跡も、焦げたような様子もない…犠牲者がいないなら、それ以上詮索する必要もないかと、あの音についての追及はやめる。

意識を切り替え、まずは自分たちの身の安全の確保を優先すること

にする。

(大事なのは自分たちだけが助かりたいというんじゃない、相手に「俺たち」に危害を加えてもメリットは無い、そう思わせることだ)

こちらの要求を聞いてもらう代わりに、相手にも同じくらいの条件は用意すると言い回しで、カマをかける。

「そうか、なら俺たちはできれば生きてここから出たいんだが、あんたには危害を加えたりしない代わりに俺たちのことも見逃してほしい…っていう条件はどうだろう?」

頭に相当する場所を微妙な角度に傾けたと思ったら、その交渉相手は、こう返してきた。

「別に危害を加えるつもりはないから、ここから生きて去りたいというなら別に追いかけてもいいし、そのあとに追跡もしないよ、好きにしたらいい」

(よし!とりあえず、これで当面の危機は取り除けた。あとはどうやって、この場を切り抜けるかな…そのまま何もなく撤退できれば言うことはないんだが…)

そう思っていると、続く言葉を投げかけられる。

「しかし…」

(え? なんだ? これ以上なにか用があるってことか? 命は助けしてくれるって言うんだし、少しは何か見返りを…ってことか?)

そう警戒していると…

「君たちを生かして帰すための交換条件として、こちらにも…私が望むものを提供してもらいたい」

(やつぱりか！ 「命は助けてやるから、身ぐるみ置いてけ」ってのじゃないよな？こんな森の中で装備をはがされたら、生きて出られねえぞ？)

「俺たちのなにが目的だい？ 仲間売らないし、金目のものもありはしないが？」

(ここで「お前たちの装備があるじゃないか？」とか言われたらおしまいだな…)

「別にそんなのはいらないさ、最初に言っただろう？私は『ここに来たばかり』だと、だから出来る限りの情報が欲しいな」

(え？ 情報？ なんだそれ？ 帝国の情報を売ってことか？それともこの森の？ いやいや森の情報なんてそんな重要でもないだろう、だとするとなんの情報だ？)

ヘツケランは軽い混乱状態、メンバーは相手が何を言い出したのか、何を意味するのか…そこを判断しきれずにいた中…

「応じてもいいと思う」

今まで、ずくつと相手の脅威を見定めるように沈黙を守っていたアルシエがそう返す。

今度はアルシエがみんなの注目を集める番だ。

「どうしたのアルシエ！正気？ それとも〈魅了^{チャーム}〉でも使われた？」

心配したイミーナがアルシエの肩をゆすり、冷静かどうか確認をする。もしチャームでもかけられてたら、うちの「頭脳」がつぶされたことになる…が、そんな魔法を使うような動作は見られなかつ

た。

恐らく、考えて出した結論だろうとヘツケランはそう思っていた。

「そのつもりならいつでもあいつは、私たちを全滅させられる、情報が欲しいなら〈魅了〉^{チャーム}でも、〈支配〉^{ドミネート}でも使えるはず、それなのに、対価も求めず情報だけを求めてきた、とりあえずウソはないと思う」

〈魅了〉^{チャーム}などをかけられた場合、相手を「親しい友人」だと思い込まされた状態になる、そのため、対象となる相手を「あいつ」呼ばわりはしない。

同じように〈支配〉^{ドミネート}をかけられた場合、「支配者」と「支配される側」の関係がハッキリと態度に現れる。〈魅了〉^{チャーム}と同様の理由でこれの可能性もないだろう。

(となればアルシエの勘は、あいつを「この件だけ」に於いては信用できると判断した、ってことだな)

それに対して「しかし、こんなことをいうのも問題かもしれないませんが、情報を得たらすぐに始末されるかもしれないよ」と、慎重派なロバーデイクが、展開が悪く転んだら？という意味を込めての質問をする。

その質問に対しての返答も、アルシエに揺らぎはなくしつかりとした確信を持って返す。

「私達は始末されなければいけないほどの情報をまだ何も知らない、外見的特徴だけで、どんな秘密も知らされていない。騙して始末なんて：そんな必要もなく魔法一撃で私たちはきつと終わる。：だからわざわざ手間をかけてまで回りくどいことをする必要がない……もし姿を見られるのが問題なら、対面した瞬間に私たちはすでに生きてない」

ここまで言われたら納得せざるを得ない、これまでの対面で、目の前の存在が、何気なくしていても確かな「圧」を感じるのだ…その気になつたら今の比ではないだろうことは誰しもが理解していた。

ここで、みんなも折れてその意見に従う空気になった、しかし念のため、ヘツケランが「情報の対価」を要求していた。

その内容は「あなたの知りたい情報は、俺たちの知りうる限りの情報を提供することを確約する、決して虚偽や出し惜しみはしない、その代わり、聞かれなかったことには答えない、知らないことは言わないでいいという自由は欲しい。」

さらに「聞かれた質問に、隠さず答えることは誓う、だから生きて、ケガもなく五体満足で、精神的にも手が加えられてない状態で街まで帰してほしい。」

…といつどこまでも用心深い要求だった。

☆☆☆

果たして、情報提供してもらえろという状況にはなつたのだが、なぜそんなに嬉しいのか？とフォーサイトの面々が不思議に思うほど、その異形の者はウキウキとしている雰囲気を漂わせている。

「それじゃ、場所を変えて」…と言いかけたところで、異形の者の動きが止まる。

何か起こつたわけでもないのに、どうしたのだろうと思つていと、いきなり「あああああ〜〜!!!」と叫び声をあげた。

さすがになにか見落としがあったのか？と思っていたら、異形の者はこんなことを言い出した。

「しまった、お客さんを招くのに、掃除すらしていない!!」と言ったかと思うと「すみません、ちよつとだけ待っていてくださいね?」

そう告げると、先ほどの会話で『自分が寝泊まりしていた』という廃墟に入っていく。

呆然として、状況を見守っていると、いきなり廃屋全体が淡く光り始め「何が起きてるんだ?」と思う間もなく、廃墟だった建物は、少なくとも「朽ち果てた」という表現よりも「みすぼらしい」という程度には直され、改めて招待され、招き入れられた建物内は、吹きさらしの状態ではなく、壁も屋根もしつかりと整えられた状態になっていた。

「なにが起こつたんですか? もしかして何かしました?」とアルシエと言われていた少女が疑問を口にする。

「ああ、今のは〈魔法効果範囲拡大化〉を使って、〈道具作成〉を使いました。」

「この廃墟全体を範囲に入れてから、その中の木材だけを使って、気になるところを直したんです、雑多な木材やらなにやらが、散らばっていたので、片づける手間を考えても一石二鳥でしたよ。」

（鉄までは後で別の目的で使うので、別の場所に片づけましたけどね。）というつぶやきはアルシエに届くことはなかった。

「さすがに廃墟の外に捨てられてる材料までは範囲に入らなかったの
で、そっちは何ともなかったでしょ?」

そう目(?)というより顔らしき場所を向けられて、驚愕していた
…ただの〈道具作成〉の魔法を建物全体へと範囲を広げ、さらにはた

だの掃除ついで、と言い切ったのだ。

この時点で「レベルが違う」と思っていたのだが、次の異形から放たれた言葉のせいで、周囲の空気が凍り付くことになる。

「ところでアルシエちゃんって言ったっけ？　よろしくね。」と言おうとし、言い終わらぬ内に、かぶせ気味に「子ども扱いしないで！」と冷たく突き放されてしまった。

「ハッ！」とした表情になるも、次の瞬間には顔を背け、「ごめんない、力の差を見せつけられて、トゲトゲしくなっちゃいました。」

そういうやり取りをしていると、ようやく凍り付いた時間から解放された面々がアルシエのフォローに回る。

「すみません、こちらからも謝ります、彼女はチーム内では最年少ですが、家族内では妹がいるお姉さんなんです。だから「ちゃん」付けに慣れていなくて…」と少ししどろもどろだ…。

その言葉を受け、異形の者は「ああ、気にしてませんよ、私も軽率でした、初対面の…知り合ってまだ間もない女性にうかつな発言でしたね。それにそういうお仕事をされているのですから、警戒心を持つというのは大事です、警戒しすぎて目が曇らないようにするのも同じように大事ですけどね」

背けていた顔をバツと見上げて、その異形の者を見ると（下手すると、こういうのもセクハラ案件っぽいのか？）と、アルシエにしか聞こえないような声で呟いていたが、「せくはら？」と首をかしげて彼女が問いかけると「ああ、なんでもありません、気にしないでください、こつちの話です!!」と、初めてうろたえたようなこの人（？）の反応が少しほほえましかった。

辞める際、インテリア（課金）で、飾っていたクリスタル製の彫刻やらなにやらを外し、アイテムボックスに突っ込んでいたことを思い出した。

（とは言え、ここの人たちは、アイテムボックスに手を入れる動作と光景って、一体どう見えるんだろう…そう考えたら懐から出すように見せた方がいいな。）

（見た目はグロいかもしれないけど…仕方ない！）そう思い立ち、お腹の部位にパツクリと開いている口にズボッと手を入れる。

フォーサイトの面々は、一様に驚いているが、意に介さず、続ける。

腹の位置にある口に手を入れる風に見せ、その腹の中でアイテムボックスの闇を出現させる。

その中から、10個ある「無限の背負袋」インフイニティ・ハヴァアサツクの内、未使用なのを引きずり出す。

もちろんヨダレなどはついていない。

その「無限の背負袋」インフイニティ・ハヴァアサツク内に手を入れ、その中で再びアイテムボックスに手をつっこむ。

用があるのはこれだ、クリスタル式で大人の腰辺りまである、美術品としても売れそうな女神像だ。

それをズルリと引きずり出す様子を驚きの目で見やる4人の目の前で、〈道具作成〉！と発動させ、4人分のクリスタルグラスを作り出し、それぞれに振る舞う。

今までの流れで、ひたすら呆然として、何をされたのかわからない面々に事情の説明をする。

「飲み物を出そうとしたんですが、あいにく持ち合わせがなくてね

……あ、いや、一応飲み物はあるんですよ、でも容器がないもので、間に合わせで悪いとは思いますが、こんな程度で勘弁してくださいね。」
通常、クリスタル製のグラスなど、一介の市民や、普通に生計が立つようになつてゐる冒険者や、ワーカーでもこんなものは使えない！高額すぎるのだ。それをポンと渡された、しかも「間に合わせ」と言われ…。

そして、同じ所作で「無限の背負袋」インフィニティ・ハヴァサックの中から「無限の水差し」ピッチャー・オブ・エンドレスウォーターを出し、クリスタルグラスに4人分、注いでいく。

もちろん何人分の水を入れても、中身の水は減らずにいくらでも湧き出てくるその光景に一同、閉口している。

「お口に合うかはわからないけど、さあ飲んでくれ、毒なんて入ってないからさ〜。」

そう言つて、先ほど、テーブルを作る際、ついでに作つておいた木のコップを自分用として出し、そこに水を注いで、自分から飲み干していく。

「ホラ、ボクも飲んだから、安全は保障されてるでしょ？ 遠慮はいらないよ、まあ飲んで飲んで♪」

（自分には毒無効の耐性があるから、あつてもなくても関係ないんだけど、まあそれは言わないでもいいや、どっちにしても入ってないし）

|||||

※ここからは再びフォーサイトの目線に戻ります。

目の前のクリスタルグラスに目をやる、普通は薄いグラスで作られているのが一般的だが、一応アルシエの家にも少しはそういうものがある、しかしそれに比べても厚みがあり、しっかりとした作りだ。

ワイングラスのような作りじゃなく、実用的な、普通の「コップ」に取っ手を付けただけのようなモノ：しかし見ただけで、価値がすごいものだと分かる、これ一個売っただけで家の借金がどれだけ返せるだろうか？

そんな目線でグラスを見つつ、「あ、そうだ」と1つ思いつく、しかしその前にこれを振る舞ってくれた人(?)に一言断わりを入れるべきだろう。

意を決して、一口、水を口に含んで口の中で転がす、実家で飲んでいたワインの時のクセで、なんとなくそういう行動をしてしまった。

「おいしい…」と感動して、それだけしか言えないが、表情からしても他の3名にはちゃんと伝わったらしい。

それぞれが水を飲んでいいる中、さつき気づいた事を先に言っておこうと声をかける。

「あの…すみません、1ついいでしょうか？」

「…？ はい、なんででしょう？」

「水を振る舞ってくれたのは嬉しいですが、それにすごくおいしいですし…そのお礼になるかはわかりませんが、私のオリジナル魔法、この水に使わせてもらっていいですか？」

そう言うと、相手はかなり驚いたらしい。

「え？ オリジナル魔法？…ここってそういうの作れるんですか？」

もしかして水から精霊を作り出すとかそういうのでしょうか？」

微妙にポイントのずれた感想が出る中、アルシエは返答を返す。

「いいえ、これは生活魔法、というもので、位階魔法にすら入らない、なんてことない魔法ですよ？」

「えええ？ オリジナルに魔法も作れるのに、しかもさらに生活魔法ですか？ どんなのがあるんです？ 興味ありますよ」

なんかすごい興味を示してくれてる、魔法の話でこんな風に話せるのっていつぶりだろう…魔法学院に居た時以来だったかな…？

「私の作った魔法は、水とかお料理に入れて味を付け足すものなんです、香辛料とか、甘味って法外に高かったりするので、まず手がでないですよ。」

「ああ〜、そうなんですか、こっちはそうなんですねぇ…：それで、その魔法を、今注いだ水に使いたいということですか？」

「ハイ、そうです、その様子だと、知らないみたいなので、もしよかつたらあなたにも入れましようか？」

少し、はにかんだような笑顔を遠慮がちに浮かべながら、指を近づけていく。

「ハイ、どんなものなのか楽しみです。ところで、どんな味になるんですか？ 辛くなったり、すっぱくなったりするんですか？」

なんか情報提供というより魔法談議になってる気がする、なんか楽しいから、これはこれでいいかも

「え？アルシエ、あれ使うの？それじゃ、そのあとに私のにもお願いしていい？」

「ええ、もちろん。」

そう言うと、木のコップに新しく入れた水の中に、アルシエの指が近づき、魔法の名前を口にする〈砂糖味の雫〉シュガーリイドロップス

木のコップの水の中に指先からポチャんと、しずくが2滴ほど入る。

「おおお〜!! おいしい! すつごく甘くなりましたね、こんなのも初めて飲みましたよ。」

「良かったです、それじゃ、さっきの約束だから、こっちにも…はい、イミーナ?」

「わあ〜アルシエ、ありがとう〜♪」

そうしてひとしきり、お互いの壁が初めて会った時より幾分か薄くなって来たと思えて来た辺りで、目の前の異形が口を開く。

「さて、それではあなた方の命を保証する代金として、私の欲しい情報、それらをいただきますでしょうか?」

☆☆☆

「さて、それではありがとうございます。今日は大変ためになるお話を聞かせてもらいました。すごくいい勉強になりましたよ」

「それは良かったああ〜…」

そう言つて、テーブルに突つ伏しているフォーサイトの面々、もう外はとつぷりと陽が暮れてしまい、真つ暗になっている、気が付いたら夜になっていた。

疲労を無効にするアイテムでももってない彼らからすれば疲労はかなりのものだろう。

「そういえばさつきも教えてもらったように、夜にもなればモンスターの現れる頻度、そして難度も高くなるといいますし、よかつたら、泊まつて行かれませんか？」

その言葉を聞き、テーブルに突つ伏していた一同は、ガバつと体を起こし、蒼白になつて異形の者を見つめる。

「ここではさすがに私と一緒にでは問題があるでしょうから、この近くにみなさん用の小屋をすぐ建てますので、そこで泊つていつてください」

(こいつ、やつぱり話を聞き終わつたら、用なしとばかりに俺らを食べるつもりか?)

とかなり不安になるヘツケラン、どう断つて、帰ることにするかと考へてると…

おもむろにそいつは空中に闇のような空間を出し、そこに手をつつこんだ。

「なんだ、あれ? なにかの闇の魔法か? アルシエあれ見たことあるか?」

「イヤ、知らない、あんなの見たことない!」

「私達、今かなりヤバ〜い状態なんじゃないの？ どうする？ ヘツケラン！」

「仕方ない、アルシエをダシにして、帰らせてもらおうようにしよう。」

「え？」

何を言われたのかわからないアルシエは顔を蒼褪めさせている。

「大丈夫だ、アルシエだけを置いて行ったりしない、ただ、さっきの様子だと、あいつとはかなり打ち解けてる様子だっただろ？」

と、今すぐにも何かを闇の中から出そうとしている異形の者に焦りを感じ、もう時間に余裕はないと判断したヘツケランはこうアルシエに語り掛ける。

「とにかくだ、アルシエ、お前をピンチにはさせねえから、だからオレがこれからする話に調子をあわせてくれ、頼むな？ アルシエ！」

そう言われると、何も言えない、静かに首を縦に振るしかなかった。

闇の中に入れた手が今にも引き出されそうになっていた時、ヘツケランが口を開いた。

「ああ、すみません、あのおく、大変心苦しいんですが…泊っていくことはできません。」

ピタッと闇の中に入れていた腕が、あとは指を出すだけになっていた中、引き出すのをやめて、振り返る…

「そうですか…残念ですね、でもそれはまたなんで？」

(そりやそうだよな、できれば獲物は逃がしたくねえよなあ…)

完全に自分達を獲物として、狙っていると思ひ込んでしまっている
フォーサイトの面々。

「実は、ここにいるアルシエにはワーカーとして活動する条件として、
門限というのがあってですね…なあ、アルシエ？」

「ああ…はい、そうです、これ以上遅くなると、怒られますので…」

「すみません、好意を無にしようようで申し訳ない」…と心にもな
いことをロバーデイクも言い始めた。

「…そうですか、そういうことなら仕方ありませんね、それなら私が
グレーターテレポーション
〈上位転移〉でその街まで送って差し上げましょう」

(えええくく、なにそれ、そんな魔法もあるの?)

と思ひアルシエを見ると首で肯定していた…どうやら魔法として
は存在してるようだ。

「ああ…そうしていただけると助かりますが、1つお聞きしても？」

「ハイ、なんででしょう？」

「そのグレーターテレポーション〈上位転移〉っていうのは、術者が行ったことのない場所
にも、安全に送り届けられるんですか？」

すると、その異形は初めてソコに思ひ至ったようであらゆる頭を下げて
きた。

「…ああ…、すみません、それはまだ試したことなかったです」

(ホオ~~~~~)

内心でガッツポーズをしていた。

(やばいって、どんな魔法かもわからないものをかけられて、空の上に居ます、とか石の中にいる、とか絶対に勘弁だつて！)

「それでは、もお夜も遅いので、私たちはこれで失礼します。」

そう言つて、建物から出ようとする、3たび、呼び止められた。

「……………はい……………ええとつと、なに……………か？」

恐る恐る振り返る、ヘッケラン

「それでは、街に着くまでの護衛を用意しましょう、召喚魔法で、呼び出せば私の命令にはちゃんと従つてくれますから、大丈夫です、安心してください。」

(安心できるかあ~~~~~!! と内心で叫ぶも、表面上は笑顔を浮かべ、二の句が継げられないヘッケランがそこに居た。)

そういうやり取りを繰り返し、心労でヒザをつきそうな中、召喚魔法で出てきたのは3匹のオオカミである。

「この者らはムーンウルフと言ってね、君らを街まで護衛させるために呼び出したものだ…遠慮しないで同行させてやってくれ」

(自信満々に言ってくれてるけど、大丈夫なんかよお…)

なんて心配してしまい、ついついこう答えてしまう。

「あのお、これって、帰り道に襲ってきたりしませんよね？」

「ああ、大丈夫ですよ、今から私が命令を出しますので、その命令以外のことを自己判断で勝手に指示に背いたりすることはありませんから」

そう朗らかに笑うような声で返答すると、こうオオカミたちに宣言する。

「彼女らを護衛し街まで付き従え、危険が近づきそうなら排除せよ、離れる時は1体は彼らのそばに寄り添って守るように」

そうオオカミたちに指示してる間、ムーンウルフは女性陣にモフモフされていた。

そんな中、異形の者はしずかに近づき、アルシエに両手でやっと持てるくらいの重さの革袋を手渡してきた。

「あの〜…これは？」

「ほんの土産ですよ、さつきグラスにするために使った材料が余ってたのでね、水晶玉を作ってみました。」

「ええええ？ この大きさのですか？」

「ええ、特に必要なかったら、売っぱらっちゃってもいいですよ？」

あ、それからみなさんの使ったコップはそれぞれ、持って帰っていいですからね？」

なんてやり取りをして帰り支度をしていたら、とりあえず安心してくれたのか、異形の者は、私達に手を振り、そのまま送り出してくれた。

「あああ〜…帰る時のやり取りが一番生きた心地がしなかったぜえ」

「私も同感です」

「なんだかんだで、引き留めようとしてなかった?」

「でもこのオオカミたちは可愛い、もふもふ…」

「まあそれはそうなんだけどねえ」

と言いつつ、イミーナとアルシエはちやっかり、ムーンウルフの背に乗って「楽チン♪」とか言いながらアルシエはムーンウルフの首にしがみついている。

「まあ、でも、悪気はない感じはした。」とアルシエ。

「え? マジ? 本気で言ってる? どっからどう見ても危なかったろ?」

ヘツケランの言い分に言いたい点はあったが、そのことについてココで言い合いしても仕方ないとアルシエはそれ以上言うのをやめた。

その話題を変えるようにアルシエは彼らに言葉をかける。

「ところでみんな、あの人の事、どうすればいいと思う? 私は下手に刺激しないで、私達だけのことにした方が色々安全だと思う…」

そうみんなの意見を聞いてみると「そうね、そうした方がいいかもね、怒らせて暴れまわったりされたら、国がおわっちゃうどころの騒ぎじゃくナイ気がするし」

「ああそれ、わかるわ」

「右に同じですね」

「じゃくみんなの意見も一致したことだし、ヘツケランもロバーもこ

の子達に乗ったら？まだ2匹いるでしょ？ 1人1匹乗れば街まで早く着くつてもんよ？」

「えええ〜？ そりゃ、遠慮したいよなあ〜…なあ？ ロバー」

「私はヨロイを着てますので、きっと重量過多じゃないかと…」と及び腰。

「だあくいじょうぶだって、私達2人が乗っても、普通に速度、落ちてないし、なんならこのまま走れそうだよ？」

「かじられたらどうするんだよお」

「怖がりねえ〜、私達はそんなことなかったでしょ？」

「じゃ〜、覚悟決めるか？ ロバー！」

「そうですね…神よ、お守りください…」

「ホント、大げさねえ〜、二人は」

女性二人はまったりとオオカミに揺られていた。

☆☆☆

夜もすっかり闇が深くなってきたころ、ようやく街の門のそばに来て、4人はどうしようかと思っていた。

「この子(オオカミ)たち、どうする？ 街までは連れて入れないよね」

「そうだなあ〜、かといって俺らの指示は聞かねえんじゃねえか？」

「やってみる？」

「アルシエの頼みなら聞いてくれるかもよ？」 とからかうように言うイミーナ

「じゃ、今日はありがとうキミ達、ご主人さまの所に戻っていいよ？」

そう言うと、夜空の月に一鳴きして、元来た道を走り始めた時、スウ
~~~~つと姿が掻き消える。

（あ…時間制限だったんだ、まあでもよかった、これで安心して街に入る）

と思っていたらすぐに〈<sup>メッセージ</sup>伝言〉のコール音が届いた。

誰だろう？と思ひ、受信してみると、あの異形の彼であった。

『あ、夜遅くすみませんね、アルシエさんですよ？ ご無事ですか？』

あの姿を直視していないで、この声を聴くと、本当に心配してくれて、かけてくれたんだなと少しホツとしてる自分が居た。

門の目の前で、他の3人に微笑ましく見守られながら、しばらく話し込んでしまい、街に入るのは遅くなってしまふ。

ひとしきり話をして、会話が終わると、街の門を通るのにはかなり遅い時間となってしまうていた。

：ちなみにヘツケランが言っていた「門限」というのは、あの場から離れるための方便である。

実家からワーカー通いをしてるのではなく、ワーカーご用達の宿屋があるので、そこで十分なのだ、妹たちに会いに行く用事でもないあの家には近寄りたくないという事情もあるのだが、まとまったお金が入ったら返済のために、行かねばならない日も来るだろう：そう考えると、少し気が重くなってしまふのを止められなかった。

## 帝国編

### 第05話 歩み寄る悲劇の前触れ

ルーズインタールでの彼女らの活動は早い。

何しろ、昨日は街に戻ってくるのがずいぶんと夜遅くなってしまったからだ、街に入れても、開いているお店の類は、森へと出ていく前に最後に立ち寄った宿の入口だけ。

あとは、主だったお店も領主の門も閉ざされていたのだ。

：仕方なくその日は、早々に寝ようという流れになり、こうして朝を迎えてすぐ、依頼主である領主の元までやって来たのだ。

ルーズインタールの街周辺一帯を治める「カストクーズ候」彼はこのところ、ずっと大森林のことで頭を悩ませていた：そのため、わざわざ、成功報酬ではなく前金まで出して捜索にワーカーを雇って向かわせたのだ：森まで行くのに1日、捜索して1〜2日だとして、街まで戻ってくるのに1日：としても、そろそろ帰ってきてもいいころだろう。

そう思っていたところに、彼らは帰ってきた。

待ちに待った「フォーサイト」だ。

今回の調査で何の問題もないのであれば、森の浅い地域にまで入り、森の恵み、さらには木材なども手に入れて、流通の手助けの一つくらいにはなるかもしれない。

安全だと分かれば、商人たちに情報を与え、この街の活性化に一役買ってくれば言うことはない。

問題があつて、モンスターなどが住み着いているのであれば彼らが撃退してくれたはず…と、すでに頭の中では「安全な状態にして彼らが帰ってきた」ということにすり替わっている事にも気づいていないカストクーズ候は、来訪してきたワーカーチームを邸内に招き入れる。

☆☆☆

館の中に通され、応接室に案内されたフォーサイトは、領主が来る前に軽い雑談をしていた。

「例の彼」にもらった、総クリスタルで作られたグラス…というか、真ん中からスパツと切られたエールの小ジョッキ、その下半分に持ち手の部分を付けたような大きさの、見た目はぶ厚いコップのことについてだ。

「なあ、成功報酬をもらった後で、ここの領主さまに、これ買い取って

もらうとかどうよ?。」

と軽い調子で言うリーダーに対し、基本的に「人」という種を全面的に信頼してるのは「母親」くらいのイミナーがこう返す。

「やめといたほうがいいんじゃない? 痛い腹を探られるくらいならいいけど、『もっと持つてるはず』とか思われて、尾行とかひつたくられるのとか、そういうのは願ひ下げよ?。」

「うん、あれは好意でくれたもの、勝手に売っていいものじゃないと思う。」

そう言いながら「必要ないなら売っていい」と言われた品。本職の占術師でもこの大きさのを持つてるのはそうそういないだろうというくらいの水晶玉をもらってしまい、その扱いに悩むアルシエが答え

：  
「売り払いたいのなら、よほど、「ペアグラス」ということにして商人や、高級宿のお得意様用としてどうです? っで感じで「貴方の鑑定眼を見込んで」って流れで買い取ってもらいに行くのが妥当でしょうね。」

と、「その前に美術商や、高級な調度品などを扱ってるお店で価値を見てもらってから、にした方がいいでしょうけどね」と付け加えておくロバーデイク。

「やっぱり、その辺が妥当か…、ここの領主はどっちかっていうと、治安やら市民がどうの、ってより領地の経済が潤うかどうかって方向を重視してるみたいだしなあ。」

そう屋敷の天井を見上げながら、危ない橋はわたらないに限る、と

チームの総意で方向はなんとなく決まった。

そこに、領主であるカストクス候が応接室にメイド、執事とともに現れた。

「ああ、今回はご苦労だったね、森の調査なんて雑用みたいなことをか  
の名高い「フォーサイト」の皆さんにさせてしまって、心苦しいと思っ  
ていたんだよ」

と表面上は笑顔だが、あきらかに芝居がかった口調なのを隠せてい  
ない領主は、前置きをそこそこに本題に入る。

「で?…森の方はどうだったんだね? やつぱり巨人は居なくなっ  
ていたのかい?それとも一時的に住処を転々としてるだけなのか?」

「まあ、自分らが見た範囲じゃく影も形も、痕跡も見当たらなかったで  
すね。」

(森で出会ったあの変なヤツのせいでもくに見られなかったけどな)

「今回私達が入った感じ限定で言えば、さほど森に脅威はなかったよ  
うに思えます…かといって、いつ誰が入っても無事で出入りできる  
かっていう相談は難しいと思います…」

「…さすがに、毎回森に入るたびに、キミらに護衛をお願いしては



私の金庫が空になってしまうからな…」

と言いつつ、メンバーを端から端まで、ずくずくと見ていきながら…内心でこう思っていた。(しかし、なんでこいつらはもつとこお…見栄えのいい、誰もが認めるようなキレイどころを置かんのだ!)

(さすがに蒼の薔薇とまでは言わないが、もう少し看板になる煌びやかなのは仲間に入れるべきだろう!) などと…

ワーカー稼業のことを毛ほどもわかっていない第3者的な立場から勝手な感想を抱いていた。

(あの細っこいのは、見た目は悪くないが、もつとこう…スタイルにメリハリというものが…だしな) 結局「ストーンとしてるのが減点だ」…と勝手に評価をし…

(あのいつもみすぼらしい小さい方は、あと数年もすればそれなりにはなるんだろうか? 期待はできそうにないがな…)

などと失礼なことを思っている領主の目の怪しさに気付いているのは女の勘で察しているイミナーナだけだ。彼女は不快な思いをしているが、他のメンバーは気づいてないようだし…とわざわざ、事を荒立てることもないだろうと素知らぬふりをする。

「…それならば、空になる前に今回の報酬を受け取らせてもらわなければいけないのでしょうか?」

と切り出すリーダーに対し

「ああ…：そうだったね、すまんすまん、話に意識が行ってて、そちらの方を失念していたよ」

とバレバレの芝居を披露する領主。

「おい！」と領主が手を叩き、メイドに指示すると、二つの革袋…おそろく礼金である今回の報酬が入っているのだろう、が…

(なんで2つなんだ)と一様に全員が疑問に思っていると、「報酬を渡す前に確認しておきたいことがあってね、もしその内容次第では追加も検討しなければいけないと思つてのことさ。」

(そういうことか…)

とヘツケランが内心で舌打ちをする、要はこの期に及んで、値切ろうという腹積もりなのだ…(慎重に答える必要があるな。)

「今回、みんなの話を聞き、様子を見てるとどうやら大きな戦闘は起きなかったようだね。先程、『さほど脅威はなかったように思える』つて言つてたようだしね」

言葉尻をとられ「う…」と小さく、メンバーらにしか聞こえない程度の呻きをロバーはもらった。

「まあ、でも森の中ですからねえ、改めて言うべきじゃないかと思いましたが、それなりなものには遭遇しましたよ？」とフォローする。

「それにしても、装備に汚れも傷も、損傷らしき損傷もないみたいだし、危険手当というほどのモノには出くわさなかったんじゃないか

「？」

(変なところで、鋭い目をもってやがる、そういうのを他の才能に使いやがれて…)と内心で毒づく中、領主は続けて、一枚の書類を広げ「フォーサイト」がついているテーブルの前に滑らせてきた。

「これに見覚えはあるね？　ヘツケランくん？」イヤらしい笑みを浮かべるカストクーズ。

「ああ、依頼の時に『口約束だとあとで問題が生じた場合、どっちも引けない状態になるのを防ぐため、でしたっけ？』」

「そうそう、よく覚えているじゃないか、さすが名チームのリーダー様だ」と上機嫌な領主。

(このやろう、あからさまに小バカにしてきやがって)と表情には出さずに毒づく

「さて、この書類でも書いてあるように『危険なモンスターに遭遇し、戦闘になった場合、損傷や、被害に応じた分の報酬も上乘せすることとする』と書かれているのは覚えてるよね？」

「ああ、そんなことは言っていましたね…んで？それが？」普段はしないだろうが、ここでなめられたらワーカーの名折れだ、修羅場をくぐって来た者特有の眼光で領主をにらみつける。

多少、ひるみながらも「こ…今回は、その…森での危険もなかったということだったし、キミらも無事に帰ってきた、これは喜ばしいこ

とだ。」

「だがさすがに、危険もなかったのに、危険だった時の上乘せ分を要求されても困る、正直、この街の経済も潤沢というわけではないのだよ、そ、それは理解してくれないかね？」と及び腰だ。

「まあ、そりやくわからなくはないですが、そうになると、報酬は減額ってことですか？依頼は達成して戻ってきた私たちに話す内容として、妥当だと領主さまは判断されているので？」とまた剣呑な空気が漂う。

「イヤイヤ、正規の契約通りの金額は払うとも、前金が金貨50、成功報酬で1000って話だったと思うが、それはお互いの認識に間違いはないかな？」すでにかなり顔色が悪くなってきている。

「そうですね、そういう話でしたが？ 危険手当はない代わりにそれで我慢しろと？」と、座っていたソファアに思いつき背中を倒れさせ、背もたれにのけぞったヘツケランに領主は遠慮がちに告げる。

「そこで、大変言いにくいのだが、今回はケガもなく、装備の修理をする必要もないみたいだから：成功報酬は、危険度が低かったことと、装備品を手入れする料金は浮くと考えて、成功報酬は90でどうだろう？」

と、ちっちゃい値切りを言い出した。

（それでも、この世界の金貨一枚はリアル世界基準で言えば約10万だ、それが10金貨なら1000万を値切ろうとしているのと同じ、実はちっちゃくないのである。）

「はああ〜？」と思いつき顔をゆがめ、顔を斜めに傾けて領主の顔

面にこれでもかと近距離につめよる。

「あんた俺たちフォーサイトにケンカ売ってんの？ 今値切ろうとしてる10金貨分で、そのケンカ、買わせてもらいましようか？」ともおすでに臨戦態勢に入る寸前のピリピリした状態だ。

「イヤイヤイヤ、それは困る、さすがにそれは早計だ、ヘツケランくん！ 私の話は、10金貨をキミらから減らすことが全ての目的じゃないんだ、それなら革袋が2つの理由にならんだろ？」

「ああ〜ん？ どういうこったよ？」 少しいぶかし気に続きを促し、言ってみるとアゴをしゃくった。

「つまりは…だ、今回の前金50、成功報酬で90となれば合計で140、4人で割れば、一人頭35金貨でぴったりだろう？ 150だったら割り切れないじゃないか？」

「そんなん銀貨にでもして、等分にすりゃいいんじゃないか？」と食い下がるヘツケラン。

（ここはリーダーとして、なめられたまま「ハイそうですか」と引くわけにいかねえからなあ〜…）

と少しウンザリもしてきたので、正直話を切り上げたかったがそうもいかない。ここで相手の要求を丸呑みしたら、その情報はどこどう広まるか分かったものじゃない、これからのフォーサイト全体の問題にかかわってくるのだ。

しばらく無言で話の成り行きを聴いていたロバーデイクが話に斬り込む。

「少しいいでしょうか？ カストクーズ候。」

そこで、救いの手かと表情を少し和らげたカストクーズにロバーデイクはこう告げる。「私も領主さまの言うことには正直、納得できません。ですが、先ほど話されていた『もう一つの革袋』の話がされていないのが気になって仕方ありません」

「それで、そっちの話を先にしていただけませんか？ それに納得できるような内容があるようなら、その10金貨分を情報提供料と考えるのもやぶさかではありませんが？」

☆☆☆

話を総合するとういうことだった、今、帝都の方で、ワーカーチームが複数集められていて、新しく発見された遺跡の探索を…というかなり大掛かりな問題が持ち上がっているそうだ。

その遺跡は王国領にあるということで、汚れ仕事も抵抗なく依頼できるワーカーの面々に白羽の矢が立ったからこそ、今回の話、という内容だった。

初耳だったヘッケランたちは、さっきの話は一度、置いておくことにして、どんな内容かを検討する姿勢に入る。

領主の話ではフォーサイトの面々もその話は、近いうちに伝わってくるはずだ、依頼を受ける受けないはキミら次第だろうが、もし受けるという話になったなら、一点でも二点でもいい、その遺跡で見つけたものの中から、ワーカーが冒険で使わないようなもの、美術的に価値がありそうなもの、余りものでも構わないから…ありていに言えば「こつちにちよつとおこぼれを」という話だった。

もちろん、相場より高く買わせてもらおうよ、ちゃんと専門の鑑定人も紹介するし、信用できないなら、フォーサイトのなじみの鑑定家に頼んで相場を調べてくれてかまわない、とのこと…。

その出された相場より、モノによっては高く買い取らせてもらいたい！という話だった。

フォーサイトの面々は、そういうことならと…、一度正規の成功報酬100金貨を受け取ったうえで、情報提供料として、領主に10金貨を支払った。

その上で、もう一つの革袋の件はもう一度、帝都に戻ったフォーサイトはその話が届くかどうか…届いたなら、それを受けるか受けないかの判断をして、「その話」は検討する。…と話して打ち切った。

もし受けるという話になった時、今言われた「裏で横流しお願いね？」案件については、場所が王国領だということから、もし不利な立場になったら罪が軽くなるように口利きを頼み、色々と手を回してほしい。その協力関係になるという「契約金」ということで話をし、一応、その話も書類にしておいた、もちろん、別途の代金を払って、魔法で転写してもらい、自分用にも、証拠としてもらっておく。

なので「もう一つの革袋」については、その遺跡に行くかどうかの

方針が決まるまで待ってもらおう、ということ、今回は話が付いた。

まあ、これで、どっちの面子も立ったし、悪い評価が出るわけじゃない、と判断して宿屋で帰り支度を済ませ荷物をみんなが整えている中、アルシエはこっそりと、この街での「水晶玉」の価格を相場として見積もってもらっていた。

…しかし、アブレイザルマジックアイテム〈道具鑑定〉も、ディテクトエンチャント〈付与魔法探知〉すらも使ってもらえず、思ったより安かったことにしよんぼりとしていた。

そんな事情により、なぜかアルシエだけいつもより口数が少ない道中をすごしながら、一行は自分たちの拠点（ホーム）である帝都、アーウィンタールへの帰路に着くのであった。

「きつと帝都での鑑定屋ならば、変に鑑定料をケチったりしなければ、正当な鑑定をしてくれるはず…」というわずかな望みを抱いて…。



## 第06話 アルシエの混乱

フォーサイトの面々は、ようやくアーウィンタールに到着した。

みんなはどうするのかとアルシエが聞いたところ、ヘツケランとイミーナはこの前の領主の館で言っていたことを本気半分で言っていたようだ、これから2人で、あの総クリスタルのコップを色んな場所に持ち込んで、鑑定してもらおうらしい。

鑑定してもらってから、あらかたの相場を確認後、高級宿や、貴族たちなどがよく使うレストランなどに行って売りに行くつもりだと言っていた。

「ロバー、お前も一緒に来るか？ おまえの分も確か、持ってきてるんだろ？」

「それもいいですが、どうせ売り込みにいくのなら、『ペアグラス』の方が受けはいいと思いますよ？ 3つだと中途半端に見られてしまいませんか？」

少し呆れ顔でそう告げると、意にも返さないように

「ペアグラスはペアグラスで売ればいいのさ。その代わり、ロバーも一緒に来て物欲しそうにしてるやつがいたら、俺らが売るのより高く売ればいいんじゃないか？」

ロバーデイクの肩に肘を乗せて、体を預けるようにしているヘツケランがさも、悪友を遊びに誘う時のような笑顔を向けていた。

「そう言われても、お金お金で、目を曇らせるつもりはないのですが…」

と難色を示すロバーデイクにヘツケランは真剣な目をしてこう返す。

「人助けをするのにも、まず自分自身が余裕ある生活でなければ、人に十分な助けを差し伸べてやることもできないぞ？」

そうロバーデイクに言い聞かせながら

「このクリスタルグラスがそれほどの高額になるとは思えないが、物は試しだ、価値がなくて売れないなら、それはそれで自分用に使う

いればいいじゃないか」

その言葉を受け止め、ロバーデイクは「ふう」と一つため息をつき…  
「道中、一緒に付き添うだけですよ？」と短く…諦めたようにアルシエを振り返り「すみませんね、そういうことなので、この2人に同行していきます。」

「うん、みんないってらっしやい」と笑顔で見送り、まるで2人に付き添う保護者みたいだなあ…などと思いながらロバーデイクが角を曲がったところで、アルシエも「物は試し」と言っていたヘツケランの言葉に後押しされ、帝都にある魔術師ギルドに行くことを決心して、道を歩いていく…

もちろんヘツケランたちのように、売り飛ばすつもりはなかったのだが、なんとなく気になったのだ、タレントで見た感じ、魔力の波のようなものは見えなかったが、普通のクリスタルのグラスと見比べてもどこか、異質、というか、違和感がぬぐえなかったからだ。

(元々、この「目」は魔法詠唱者が使う位階魔法の魔力量を見るためのもの…マジックアイテムまで見分けられるわけじゃないんだけどね…)

「でもこの違和感の正体が知りたい」

その一心で歩いている内に気づいたら、目的の魔術師ギルドにまでたどり着いてしまっていた。

ルーズインタールでは、魔術師ギルドのように魔法的な付与をされた品を鑑定してくれるお店まではなかったためにこの違和感を払拭することができなかったが、この帝都なら鑑定してくれる場所なら何店かはある。

その中でも定評のある建物にまで来た。

(ここで鑑定してもらって、ダメだったらきつと私の気のせい…それでも、これをサラッと渡してくれたあの人(?)の好意は決して忘れない。)

そう力強く頷いて、扉をくぐる。

中に入ると、掃除の行き届いた清潔な店内、入口を入るとすぐに受付があり、受付嬢がにこやかに笑顔を浮かべ、言葉をかけてきた。「いつもご利用ありがとうございます。本日は当店にどのような御用向きでしょうか?」

恐る恐る、受けつけまでたどり着くと、身に着けた装備から、魔法詠唱者かワーカードと分かったのだろう。

「本日はスクロールのご購入ですか?それともマジックアイテムのご購入でしょうか? 魔法付与されたスタッフやワンドなどの取り扱いはございますか?」

そう笑顔で用件の確認をしようとする受付嬢に、そのどれもが違うと告げ、持ってきた水晶玉をカウンターの上に置く。

「これの鑑定をお願いしたい」

それだけ短く言うと「これは何かのマジックアイテムか何かですか?」と受付嬢が聞いてくる

「私もその点が知りたい、だからこのギルドが一番信じられると思って持ってきた、鑑定のお願いはできますか?」

それだけお願いすると受付嬢は「少々お待ちください」とだけ告げ、奥に引っ込んでしまう…誰かに確認を取りに行ってるのだろうか?

カウンターを目の前にしてしばらく立っていると、先ほどの受付嬢が再度現れ「どうぞ、こちらに…」と言い、奥の部屋へと通されてしまった。

訳もわからず入ってしまったが(鑑定だけしてもらえば、問題ない)そう結論付け、先頭を歩く受付嬢がとある扉の前に立ち「どうぞ」と扉を開けてくれる。

(???)普通に鑑定に來ただけなのに、この対応が普通だったかな?)

そう不思議に思い、指定された部屋に入るとやけに若い声が出迎えた「ようこそ、おいでくださいました。久しぶりですね、アルシエお嬢様」

☆☆☆

いきなり、名前を言われて驚いたが、よく見ると、どこかでみたような顔だった。

でも顔は知ってる、どこかで会っている、それは確かなのだが：と悩んでいると、やや苦笑したその男性が自己紹介をしてきた。

「改めて、当店のご利用感謝します、私もあれから貴女を目標にしてここまで来られました、全部アルシエお嬢様のおかげですよ。」

そうニツコリと微笑み、そつとかけていたメガネを外し、懐から眼帯を出してそれをかけた：その瞬間、記憶が高速に呼び覚まされ、目の前の男性を思い出していた。

「もしかして、ジエットくん？」

☆☆☆

アルシエも、かなり面食らっていた、もお魔法学院時代のことは思い出したくもない思い出であり、師匠であるフルーダにも失望されて、(ワーカーになるためとは言え)第3位階習得を目の前にして退学を選んでしまったのだ。

今から思えば、家の環境として、仕方ないとは言え、目をかけていた弟子が望まぬ方向に：しかもいつ、どんな状況で命を落とすかもしれないワーカーになるためという理由で学院を退学したのだ。

退学を選んだ今でも：ワーカーでいくらお金を稼いでも、あの時と状況が変わらない今の自分に自嘲気味の笑みがこぼれる。

それでも、今、目の前にいる男の子は、最期まで：いや、今までもずっと、どうしてるか気になっていたのだ。

それが今、目の前にいる。その懐かしさに過去のイヤな思い出も吹き飛び、思わず喜びの声を上げてしまう。

「どうして？　なんでこんなところに？　あれから大丈夫だった？」

彼女にはアナタのことは頼んでおいたんだけど、ずっと心配だったん

だよ?」

思いがけず訪れた知己との対面に、自分の中にしまいこんでいたモノが一気に噴き出してしまった。

それを受けた「ジエツト」と呼ばれた少年がおもむろに眼帯を外し、再びメガネをかける。

「ええ、おかげさまで、学院生活では色々ありましたが、危ない時にはアルシエお嬢様の親友のあの人にはずいぶんと助けられました。」

「お嬢様はよしてよ、私はもお、そんなんじゃないわ」と少し照れながら返す。

「そういえば、これ知ってましたか? お嬢様が学院を出てすぐ、生徒会長になったんですよ?」

「えええ? フリアーネって会長になってたのお? すごいじゃない!」

…などという昔話に花を咲かせていたが、ふと気づいてアルシエが会話をやめる。

「あ、ごめんなさい…つい懐かしくてはしゃいじゃったけど、お仕事中だったのよね?」

「ああ、かまいませんよ、今の私は鑑定する部署の責任者ですから」一応…ですけどね、と軽く片目をつぶり愛嬌のある笑顔を向けてきた。

「でも大丈夫だったの? あれから…その…あの件は誰にも?」と、アルシエはかなり遠回しに、言いにくそうにジエツトに心配の言葉をかける。

「ええ、会長が色々と気にかけてくれて、危ない時は助けてくれましたよ、それもそう頼んでくれていたアルシエお嬢様あってこそです。」  
「なんかえらい持ち上げるねえ」と苦笑気味に、それでもはにかみながらの笑顔を浮かべ「それならよかった。」とホツとした表情をした。それが、  
れた。

「まあ、その心配事の原因を」とある方」がすごく評価してくれましたね、お抱えの…と聞いていいのかな?、まあそれなりに生活できるよ  
うなお給金までくれて、母の病気も今はすっかりいいんですよ?」

と、ここまで言うてからジエツトという少年が真剣な顔をしてアル

シエに問いかけてきた。

「アルシエお嬢様…じゃなくアルシエさんと言った方がいいでしょう  
か？ フルト家の方は『あの時の』心配は、当ても今も変わってない  
んですよね？」

そう確信をつかれ、蒼褪めた顔になる。

「え？ ジエットくんなんでそれを？」

「これでも学院を卒業して、こうして責任ある仕事をしてますからね、  
帝都でも時々は…ね、小耳にはさむことがあるんですよ。」…と暗い声  
で彼は返す。

「そう…なら仕方ないね、でも、私もそろそろ限界だと思ってる、近い  
うちに妹たちを家から連れ出して、どこか安全なところで平穩に過ご  
そうかと思ってるの…」

「あの時の、ご恩返しになるかはわかりませんが、自分が力になれるな  
ら、よければ妹さんを家で面倒見させてくれませんか？」

「え？ ダメよ、ジエットくんに迷惑がかかっちゃうし…」

そう力なく返すも、正直、家から連れ出しても、きつと私の所持金  
は、借金のために右から左…、妹を連れ出したら残りは親が返すべき  
！ということにしても、先立つものがない。

そう悩んでいると…「アルシエさんは僕のことを卑怯者にさせるつ  
もりですか？」といきなり…

しかし静かに問いかけられた。

言われた意味が解らず、「え？」と意味を量り兼ねていると

「アルシエお嬢様には、たくさんのお恩をもらいました、その恩を返さな  
いのでは、私は卑怯者の、恩知らずになってしまいます！」

「でもジエットくんにも家族はいるでしょ？…そんなこと…」

「じゃ、ずっとワーカーで、いつどんな危険が訪れるかもしれない仕  
事を？」とジエットが問いかけると、

「今度の依頼で、引退するつもり…」とか細い声で答えた。

「そう…ですか、よければ、鑑定の前にその話を聞かせてくれませんか  
？」

☆☆☆

……気が付いたら、きつと…彼でなければ話すつもりもなかったよ  
うな話を、全て吐き出すように話してしまっていた。

「それなら、なおのこと、私を見出してくれた主に相談してみなければ  
なりません、うまくすればきつとすべてうまくいきますよ」と嬉しそ  
うに言ってくれた。

「え?? え?? なんて? どこをどうすれば、そうなるの? 今さら  
あの人たちは変わらないと思うのに…」

とアルシエが、困惑しているとジエツトが先程よりも真剣な顔をし  
て、アルシエを見据え、選択を迫った。

「アルシエお嬢様は、どちらかを選ばなければならず、必ず片方は失う  
ことは避けられないとしたら…妹さんたちをとりますか? 両親を  
とりますか?」

「もちろん! 妹たちの方が大事!」

ホツとしたような笑顔で「良かった、それならきつと大丈夫です  
よ。」と保証してくれる。

「さつきからすごい自信だね、本当になんとかしてくれそうな感じで  
ウソでも安心できるよ」

と返すとジエツトは心からの笑顔で答える。

「知ってますか? 学院生活時代から私の「目」のことを評価して雇っ  
てくれた方は皇帝以上の絶対者ですよ?」

思わぬ言葉に思わず笑ってしまった。

「ジエツトくん、いくらなんでも言い過ぎく、そんな人いるわけない  
じゃない!」と涙を浮かべて笑い転げていると

「そうですね、そんな「人」居ないことは当たり前です、でも私の主人  
は別格なんですよ」

冗談だか、ホントだかわからない表情で言われてしまった。

☆☆☆

かくして、鑑定をお願いしてもらったら、意外な言葉を言われてしまった。

「アルシエお嬢様、この水晶玉を、数日お借りしてよろしいですか？お借りする代金は500金貨をお支払いしますから！」

「ええええ〜?? 500? 数日貸すだけで?ウソよね? 冗談なんですよ?..」

「いいえ、冗談じゃありません、からかってるのではない証拠に今、即金でお支払いします。」

と、じやらりと革袋にいっぱい入った金貨…を目の前に置かれてしまった。

「それで、お嬢様、ひよつとして、この水晶玉と同じ材質の物と違って、持っていたりしてませんかよね?」

とかなり真剣な表情で聞いてくる…なんでだろう、これって、そんなにすごいものなの?

「一応…これ…なんだけど…」

とコトつとクリスタル製のグラスを1つ、テーブルに置いた。

すぐさま、彼は<sup>アブレイザルマジックアイテム</sup>〈道具鑑定〉に<sup>ディテクトエンチャント</sup>〈付与魔法探知〉を唱え、そしてメガネに触れて、なにかを操作していた。

「やつぱり…」とつぶやいた。

「え?え? なにがどうなってるの? それって、そんなすごいもの?..」

「まあ…すごいことはすごいですよ、これは…なにしろ、劣化しない、落としても割れない、かなり高位階の魔法でないと壊せませんし、放っておいても曇りもせず、浄化の必要もない」

「え?なにそれ? ウソでしょ?」と問うと…

「おそらくアダマンタイトの剣先で削ろうとしても、一筋の傷もつかないでしょう。これはそういうものなんです。」

「えええ〜…じゃ〜これをもし売ろうとしたら、どうなるの?..」

「コップくらいなら、価値を知らなければ多少高いくらいの値で買い取ってくれるでしょうが…」



「魔法鑑定などされたら、まともなお店なら、店から帰しても、返してももらえないでしょうね。」

「私のチームメンバー、みんなそのコップもってて、さっき、売りに行くって…その前に鑑定して相場を調べてから売るようにするとか言っつて、出かけたんだけど…。」

というと、慌てた表情になり、その部屋の奥に水晶玉を置きに行つたかと思うと、なにやらぐこによぐこによと独り言を言つてる雰囲気が出て…出てきたかと思つたら私の手を握つて駆けだした。

「その人達、もしかしたら、困つたことになってるかもしれない、探しに行こう！」

鬼気迫る表情で言われてしまった。

なにがなんだかわからない状態で、訳の分からない展開に投げ出され、すっかり私は混乱の中にいた…。

## 第07話 アルシエの苦悩、そして家出？

今、私はなぜかジエツト君に手をつながれて、彼が居た執務室から外に連れ出されそうになっている。

自分がなぜ引っ張られそうになっているのか…それは仲間の下に行くためだ、扉のノブに手を掛けようとしたジエツト君の動きがピタッと止まる。

どうしたのだろうと思っていると「そういえばアルシエお嬢様のお仲間の方々が行かれたという鑑定屋の場所などは聞いてますか？」そう聞かれたので、首を横に振る。

彼らも特にその時はどこに行く決めての行動じゃなかったのだと思う…もちろん手近で見かければ見てもらおう…そのくらいの気分だったと思うのだ。

ジエツト君にそう伝えると「そうですか…」そうつぶやき、扉を開けるのをやめ、自分の執務机の引き出しから、あるスクロールと地図を持ち出してきた。

「それってもしかして〈ロケート・オブジエクト物品探知〉？」

「よくわかりましたね、そうなんですよ、私の主は魔導に精通してるだけでなくスクロール作成にも力を入れてるんですよ、なので先程在庫として支給されているスクロールの使用許可を取っていたんです。」

ジエツト君は本当に嬉しそうにその雇い主？なのだろうか？？その人のことを尊敬しているのだろう、その人につながる話になるとあの頃とは別人のように明るい表情で話を聞かせてくれる。

(あの時より今のジエツト君の方が見ていて、こっちも安心できる、あの頃と変わったんだって思えるな)

「主が勧めるような調べ方をしてたら、いくらスクロールがあっても採算が取れなくなるので…私用で使うのはいつも1つか、多くて2つ程度なんですがね」

(いくら自前で生産できると言ってもそんなに大量にどんな魔法を使うんだらう？ スクロールって確かそんなに高い位階の魔法は封じることがはムリなはず…)

そんな感想を抱いていると、手に持ったスクロールで〈ロケイト・オブジェクト物品探知〉を発動させる。

そうすると机に広げた帝都の地図でどのお店にいるのか判明したようだ。

「ちようどよかった、みなさんご一緒にいるようです、クリスタルグラスは一ヶ所に集まっているようですね。やはり鑑定屋で足止めを食らっているみたいですが…、すぐに行きましょう。」

そう問いかけて、こちらを振り向いたかと思うと私に手を差し伸べている。

(一緒に行くとうとうということだろうか…やっぱりあの頃と変わったかな

？ ちよつと自信が出てきてるみたい、いい人達に恵まれたんだな)

そんな風に思いながら、彼の手を取る。

先程、自分の家族に対して言われたことの不安が少しは和らいだ気がした。

(それでも彼には彼の生活がある、フルト家の問題に巻き込むべきじゃない。)

そんな思いを胸に、「今は仲間の安否確認だ。」と2人で店を飛び出して行くことになってしまった。

この建物に入って一番驚いたのは部屋を飛び出す際、彼が鑑定室長の代理として呼び出した者の名前だ：ジエツト君：彼は、たしかその男の名前をよく出し：学園内で肩身の狭い思いをしていたはずだ：それが何でそんなことになっているのか：その疑問が頭を埋め尽くし、仲間のことよりそつちに思考を奪われてる中、ジエツト君はあの頃と全く違う声でその相手に指示を出していた。

「それじゃ、私はちよつと出てくる。戻るまでの間、ここの鑑定室長代理の方はまかせたぞ！ ランゴバルト。」

そう指示を出すジエツトに対し「わかりました、お任せください。」と静かに従うかつての「いじめっ子」彼らの間になにがあつてそんなことになつてるのだろうか？

建物の敷地外に出るまでジェットに手を引かれるまま、呆然として状況がつかめず、混迷を深めていくアルシエはそのまま彼に引つ張られるように着いていくばかりで、ただただその横顔を見つめていた。

☆☆☆

ヘツケランは正直に言うと、迂闊だったと後悔している：適当に歩いてるうちに見えた「よろず鑑定いたします。初回ご利用の方の鑑定代無料！」の看板に引き寄せられ、気軽に入ってしまったのが間違いの元だったと思うも、今更どうすることもできないでいた。

初めは相手側の対応も普通のモノだった、丁寧な受け答え、特にこれと言った悪い印象は受けなかった、しかし「鑑定してもらいたいモノがある。」と言ってイミーナと2人で例の「ペアのクリスタルグラス」を鑑定してもらう旨を依頼した。

しばらくすると、受付の人がなにやら呼び出され、担当が交代したかと思ったら、その相手はずいぶんと姿勢が低くなり、思いつきりへりくだるような態度、今にも手もみでもして近寄ってきそうな態度で奥に通され、とりあえず鑑定を待つまでの間：という話で結果待ちをしていたのだ。

どう考えても、もう結果は出ているだろうと思っても「今しばらくお待ちください、もうすぐしたら結果は出ると思いますので…」と言われ、引き伸ばされていた。

少しその状況に「早まったかな、キャンセルして帰るか？」と思っていた時、飲み物が自分達3人にだけ、振る舞われた。

名目は「鑑定に時間がかかり、お待たせしている間、大変申し訳ないので、こちらからせめてものお詫びです、お代は必要ありませんので…どうぞ。」とのことだったが、どうにも胡散臭さがぬぐえない。自分の前に出されたものがすでにグラスに注がれた状態で出てきたのも怪しいと思ったのだろうイミーナが「私たちのことは気にしないでいいので先にそちらでどうぞ？」と返す。つまり先に毒見をして見せろ…と暗に言っているのであるが、それを気に留めずに店側の人間はそれを了承して自分たちがそれを飲み干した。

ただの水なのでご心配なさらず…と言いながら、今度は空のグラスを3つ出され、中は冷えているのだろう、水滴が周囲に浮かんだピッチャーが持つてこられ、生活魔法である〈水質浄化〉の魔法まで使い、自分たちに再度、注いで振る舞う。

ここまで来たら、さすがに断るのも…という空気になるのは仕方ない。とはいえもう少し考えるべきだった、振る舞った者達が見守る中、さすがに抵抗力を上げる魔法を使うなど常識で考えてそんな事を

するのは失礼とロバーも一口飲むことにしたようだ。

イミーナもそれに対して大きめの声で「それじゃ、もらいますね、いただきますまあ」と言っている間にヘツケランは小声で「肉体向上」と発声させ、武技を発動させて飲むことにした。

その瞬間、飲んだ2人がテーブルに伏せるように前のめりに倒れ込んだ。

自分は「肉体向上」の効果で、耐性が上がっていたのだろう、無事レジストできたようだ。グラスを持ってきた女性の顔が微妙に揺らいだ気がしたが、すぐにその色も消える。

これはやられたな…と舌打ちするものの、怒鳴り散らしたところで、鑑定に出しているものは恐らく返してくれるかどうかはわからない。

イミーナ1人なら、ロバーと両側を支えながらも退店もできようが、自分一人でイミーナとロバーを抱えて店を出るなど難しい、帰ってきてすぐ鑑定屋を目指してきたために鎧を着用したのも悪かった、ロバーの体格と防具の重量ではさすがに抱えて歩くのも難しい。

店側とコトを構える場合、寝ている仲間を守り切りながら戦うなど、それができるかが不明のため、下手なことできない。

これは2人が起きてくるのを待つしかないか…と思うも、揺り動かそうが叩こうが、起きないのだ…これは強めの眠り薬だな…と判断する。

水の方は浄化されているのだから、残る手段は、コップの底か、内側の全体に塗り付けられていたのだろう…用意周到な事だと変な意

味で感心していた。

(さて、どうするか…)

そう頭の中で対策を講じているとなにやら店の方が騒がしいようだ、なにかのトラブルかなにかか？どうやらこのお店に来たのは完全に失敗だったようだな…と自嘲するも状況は変わらない。

仕方ない、あのグラスはあきらめるか…結果は気になるところだが、こんな対応をされるあたり、返したくはないだろうし、教えたくもないのだろう。

(どっちにしろ、ロバーデイクの持つ物と、アルシエの持つ物がある、最悪の場合は自分らの2つは事故だったとあきらめるか…)

そう思い直そうとしていると…扉の外から怒鳴り声が聞こえてきた。

「ヘツケラン！ ロバー！ イミーナ！」いつも聞きなれた仲間の声だ！ 「ここだアルシエく!!」と叫び、店員たちを突き飛ばし扉の外に姿を見せる。

すぐさまそれをアルシエに見つけてもらい、部屋に躍り込むように彼女が入ってきたが、ヘツケランもしまった！とまたも軽率な行動をしたと反省する。

アルシエが部屋に入った時には店側の人間が眠っているロバーデイクとイミーナを人質にとるようにして、首筋に刃を突き立てていた、いつでも…どうとでもできるぞ。…と

顔を青くさせる2人…その後ろから、冷静な声が聞こえた。



「この鑑定屋はずいぶん手荒な真似をするようですね、魔術師組合に通報でもしなければいけませんか?」

アルシエが振り向いて、その声の主の名を呼んだ…どうやら知り合いらしい。

「ほお…ずいぶんな若造がえらそうな口を利くじゃねえか、できるもんならやつてみな? この店から出られれば、の話だがなあ?」

と自分達には「人質が居るんだぞ」という脅しをかけてくるも、そんなことを意にも介さずにその少年と青年の間くらいの男はこう返した。

「まあ、私個人はあなた方が人質にしてる方々とは面識がないので、どうされようと痛くもなんともないんですがね?…それよりも私と敵対するのであれば、この帝国でどんな目に合うか、教えて差し上げることまでできるんですよ?」

自信があるように、どこか「結論は決まっている」とばかりに酷薄な笑みを浮かべるが、相手も負けてはいられないとばかりに即座に返答した。

「面白れえ、どんな目に合うか、思い知らせてもらおうじゃねえか!!」  
そう言っつて襲い掛かってきた者たちからアルシエをかばうように1歩前に出ると、目の前に1枚の書類をみせる。

「なんだよ?こりゃ? こんなもんで俺たちをくく… …?」  
「おお?!」と段々顔色が悪くなってくる。

「今あなた方にお見せしている書類はもちろん、〈転写〉の魔法で複製

した者です、元の書類は別の所にあるので、破ろうとしても無駄ですよ？ まあ破ったところで事実が変わらないので…、さてと…どちらに通報されたいですか？ 魔術師組合ですか？ それともその書類の人の所でしようか？ …ああ、その人の耳に届くという事は、もつと上の人の耳にも入るかもしれないねえ…そうなたら、通報されての処罰では済まなくなる可能性もあるかと思えますが？ 「肅正」とか…お望みだったりします？ もしここで、その人達を解放して、鑑定してるものを戻してくれるなら、不問に付しますが…いかがでしょうか？」

すらすらと、脅しとも言える言葉を「いつも言い慣れてる」とばかりに叩き付ける様をアルシエは目の前で見て「そうだ、そんな一面もあつたんだつた。」と久しぶりにジエツトの性格を思い出していた。

彼個人は大抵の場合、争いごとは好まない、腕つぶしが強くもない、魔法が優れてるわけでもない…それでも自分が譲れないなにかのために体を張るときは、どんな状況も利用する子だった、そう…それがたとえ自分自身の命を差し出すという前提が必要だったとしても…だ。それはきつと今も変わってないのだろうと改めて実感していた、その力をふるうのが大切な幼馴染みのためであったり、大切な人のためであったりなどした場合に…昔は弱者である自覚を持って、貴族のいじめっ子に対し「貴族である」というプライドを利用して「自分なんかには本気を出したら家名に傷がつかますよ？」の切り札を使ったりして、窮地をしのいでいたのを懐かしむように思い出せていた。

それが今は…誰が彼の後ろ盾をしているのだろうか？

アルシエからすれば忘れられない、いまだに苦しめられている言葉をまさかジエツト自身の口から聞くことになると思わなかったが、まさか「肅正」などという言葉在意図的に使うという事は、もしかして…という可能性も考えるも、まさか…と即座にそれを否定する、なに

より、彼にはそれに至るだけのコネもなにも存在しないのだ、会おうとしても叶うはずのない天上人。まさかあの相手が、後ろ盾なはずはない…。

あの書類にはどんな内容が書かれていたのだろうか？

そんなことを思っているうちに、いつの間にか、店の者達みんながみんな、「こいつが言い出したんだ」だの「お前が薬を用意したんだろおが！」だの見苦しい言い争いをしている。

それを見て、先に進まない今の状態を呆れるように見ていた彼はこう告げる「物も彼らも返していただけないなら、本格的にこのお店を「精査」してもらおう方が好み、ということでもよろしいですか？」

その一言が最後のトドメになって、彼らは無事に解放された。

そして鑑定中のクリスタルグラスも戻ってきた、もちろん最初はニセモノを用意していたようだが、魔法も使わずになぜかそれを見破った彼は「ニセモノで私を騙そうとするなら…: どういう結果になるか、わかりませんか？ 私がこれで騙されたふりをして帰ったりしたら…: その後のあなた方は、どんな目に合うでしょうね？ 非常に楽しみます。」

そう呟いたら、本物が返された。

今までの彼を、見ていると、今の彼がどこまでの存在になっているのか非常に気にかかる。

その視線に気が付いたのか、ジエツトは「仲間が無事でよかったです。すね。」

そうニコつと微笑むと、用意した書類を素早く丸め、専用の筒に入れて懐にしまい込んだ。

準備をしていたのか、〈アウエイクン覚醒〉のスクロールを使い、ロバーデイクを目覚めさせ、イミーナを左右で抱えるようにして帰ることになった。

☆☆☆

「なあ？あんな何者なんだ？」

もつともな質問がヘツケランから届けられる。

今、フォーサイトの面々が居るのは、ジエツトが鑑定室長を務める鑑定屋の執務室だ。

イミーナはこの執務室に来てすぐにジエツト氏が用意した〈アウエイクン覚醒〉

のスクロールで目を覚ましている。

彼もヒマがあつてアルシエの助けを買って出ていたわけではない、戻ってくれば普通に仕事はあるのだ。

いくつかある仕事を片付けながら、彼は「別に何者でもないですよ？ ただの平民出の成り上がりなだけです」と平然と答えていた。

「それにしちや、いろんな荒事に通じ過ぎてやしないか？」

そういうハツケランに何を言ってるのだろう？とばかりにそれに対する答えが返ってくる

「ああ、あんな対処、昔からしてましたよ？ まあ程度の差こそあれ、今は非常に頼りになる後ろ盾が居ますからね、大事な人や大切な何かを護るためにだったら私はどんな手段でも使います…例え「虎の威を借る狐」と呼ばれようともね。「自分の実力で勝負しないのか」などとも言われますが、私の武器はいくつか使えるくだらない魔法と、そして学院時代に巡り合えた大切な友人たちだけですから。」

「みなさんにだって、みなさんなりの得意分野はあるんでしょ？」

「まあ、そりゃくな…そうじゃなけりゃワーカーなんかで生き残れやしねえよ」

「でもよくわかったわね、本物と偽物の違いなんて…」

起きてから事の顛末をアルシエやヘツケラン、ロバーデイクから教えてもらっただけのイミーナ……。ロバーデイクは起きてからのことしかわからないが、偽物を見抜いた現場は見ていた。

「ああ、それは私の主……学院を卒業しても取るに足りない實力しかなかった私を高く買ってくれ、取り立ててくれた方からもらったこのメガネのおかげですよ」

「右目のレンズと左目のレンズで効果の違う魔法が封じられていてです、こっちのレンズでは見ただけで鑑定ができるんですよ」と、こともなげに片目を指さして言う。

（ああ、初めの時、鑑定するときにメガネをいじってたのはそういうことだったのね）……とやっと納得したアルシエ

「なんだよお、そりゃ！ えれえでたらめなマジックアイテムじゃねえか！」

「まあそうですね、普通ならそうなんですけど、我が主はそこらへん浮世離れしていて、これを「就職祝いだ」って言ってポンとくれたんです、なのでそういう印象はあまりありませんね。」

「ああそうだ、ゴタゴタしてて言い忘れてた、ヘツケラン、ジエツト君が私の水晶玉と、みんなのクリスタルグラス、まとめて買い取らせてほしいんだって」

「はああ?! なんでそんな話になってる? どうせ安く買ったたかれるんだろ?」

ヘツケランが警戒していると、「コンコン」とノックの音がした。

室長の「どうぞ」の声で入ってきたのは何故かこんな店には到底、似つかわしくないメイド姿の女性。

「遅くなりました、ジエツトさま、我が主の命により、言われていたものを届けに参りました。」と恭しく腰を曲げる。

「ああ、待ってましたよ、ちょうど今、その話をしていたんです、それをこの者たちに……」

と室長であるジエツトの言葉にメイドは1つ礼をして答えると、楚々とこちらに歩み寄り「こちらになります」と言つて金貨が入っているらしい革袋をいくつかワゴンに乗せたまま目の前に持つてくる。

「それではジエツトさま、お見積り通り、5000の金貨を4つ、そして1500分の金貨、こちらは額が大きいので10000金貨分をプラチナ貨に替えて残りの500金貨と共に入れてあります。」

「ああ、ありがとうございます。主である御方にはいつも助けられておりますと、お礼を申し上げてくださいますか?」

礼を言うジエツトに「かしこまりました、たしかにお伝え致します。」

そう言つて「優雅」という言葉しか出てこない仕草で、礼をとるメイドの姿。

少しの間、その場違いな光景に4人が見とれていた。

全員がぽかんと口を空けて呆けている。金額の大きさもそうだが、このメイドはジエツトの雇い主のメイドなのだろうか……下手な貴

族：いや、大貴族だつてこんな美しいメイドを抱えるなど出来ないだろう程の「洗練された美」を見た目だけでなく所作から言葉使いに至るまで、完璧ではないか？そのような感想に思考を割いているうちに、ワゴンごと、メイドが執務室から出て行ってしまった。

フォーサイトたちの目の前にあるのはそれぞれ金貨の入った革袋、それに加えてアルシエの前には1500帝国金貨分の入った革袋も共に置かれている。

みな一様に「ゴク…」のノドを鳴らしながら見つめていると「どうぞ、お改めください。」とジエットの声によく我を取り戻し「あ、ああ…」と短く答え：袋の中身を数えていく。

信じられないことに本当に言った分の額が入っていた。

アルシエはジエットに言われていたのでそのクリスタルの価値は知っている、だからそこまで驚きはしなかった。とは言え、まさか1000すらも超える額を準備されるとは思っていなかったのだ。

「ホントに何者なのよ、あなた…」そう言うのが精いっぱいイミーナに対してもジエットの言葉はさっきの通り、平坦なものだった。

「私は単に平民の成り上がり…真にこれだけの力を示せるのは、それだけの「力」を有している御方であればこそですよ。」

「それに私の今回の行動は損得ではありません、私の人生の上で決して軽くない程の「恩」を学院生活が終わるその時まで与え続けてくれる環境を用意してくれた、アルシエお嬢さまのため、というのが一番の理由なので、みなさんは恩返し之余波に巻き込まれただけ、という感じだと思っただけだと思いますよ?。」



そう言うと「「アルシエお嬢さま？」」と、声をそろえてアルシエを見つめてきた。

「なになに、どういうこと？ アルシエ、あの人とどこまで行ってるの？ どういう知り合い？」

完全に女子トークムード全開で詰め寄ってくるイミーナ。

「なんだよお、こんな大富豪をサポートにしているような「いいお相手」がいるんなら、これからの人生安泰って感じか？」

と、からかい半分のヘツケラン。

「神は、苦難と同時に相応の恩恵も準備されていた、ということですね、二人に祝福を…」

と、ロバーまでなぜか悪ノリをし始めた。

「そういうノリ、ホントに勘弁してほしい…」

顔を伏せて、赤くなっている表情を隠すのに注力しているアルシエにはそういう言葉を言うしかできず、その赤くなっているのが「彼」への照れなのか、悪ノリ自体への照れなのか…それとも「お嬢さま」呼びされていた事実を仲間知られてしまったことに対するものか…それとも全部か…アルシエ自身にもよく分からなかったが、とりあえず好意的に受け止められたことにより全員一致で水晶玉共々、クリスタルは買い取ってもらったことになった。

最近、帝国でも少しずつ名が売れ始め、徐々に勢力を増してきたこ

の商会、まだまだ知名度は少ないが、それでもこの商会の闇の部分を  
知る者はジエツトも含めて人間の中にそのすべてを知る者は数える  
までもなく約一名を除いて、居ないだろう。

初めは王国での情報収集のための方便：…だったのだが「ウソから出  
た真」という言葉もあるように噂が噂を呼び、結局のところ名前が売  
れすぎてしまったため、それを真実にするしかなかった背景を持つこ  
の商会の名前は「イプシロン商会」

その責任者であり、リアルで言えば代表取締役の存在は名目上「イ  
プシロン」のF・Nファミリーネームを持つ、娘の父親、ということになるがその姿  
を見た者はいないほど謎に包まれた人物である。

さらにはその上、地位で言えば理事、もしくは会長とでもいうべき  
立場に居るのが、この帝国でも屈指の実力者、魔術師組合程度では、  
その個人”を取り込むことはおろかその者に逆らえるものなど、帝国  
：いや、この大陸基準では存在しない「人外」とも言えるその人物こ  
そ『主席宮廷魔導士』の呼び名で呼ばれる者。

少なくともこの帝国で、その名を出していいと認められてる人材な  
ど数少ない：ジエツトはその内の一人であり、アルシエを救う際、  
使った書類、そこに書かれていた内容はそういうことだとはいふオーサ  
イトの面々でさえ全く気づきもしない事実である。

もうすでにかなり陽が落ち始めている時刻、そろそろ…と店を出よ  
うとするとジエツトから「お嬢さま」と呼び止められる。

「もう…いい加減に他の人が居る時にその呼び方はやめて」というと  
「努力します。…アルシエさまっ」と返されるも…(やっぱりそこはギ  
こちなくなるのね)と思ってしまうた。

「近いうちに貴族ですらなくなった家の…その名前も捨てることになる、だから私のことは普通に『アルシエさん』でいい。それか呼び捨てにする？」

「ああ、ハイ、それじゃ、アルシエさんで…」

「まあ今はとりあえず、それでもいいけど…ところでなに？」とアルシエが問いかけると「これを…」と言ってウエストポーチを持ってきた。

「そんな大金を持ってブラブラと夕刻を歩いていたら危険です、それを腰に巻いて、ポーチ部分を背後に回せばベルトのようにしか見えなんでしょう、マントで隠れますしね」

そう言つて腰に巻いてくれる。

(変なところで強引になってるけど、名前の方が遠慮深いのはなんだろう)

そう思っていると「ポーチの中にあるメモは後で読んでください。」と、ポーチを腰に巻き付ける際に、小声で伝えられた。

「わかった…」とこちらも小声で返していると「いいなく、アルシエだけえ…私達には無いんですねえ？」とイミーナ

「おいおい、俺が送つてくんだからそんな危険はあるわけないだろう？？」とハツケラン。

「お二人ともそれくらいにしてはどうです？あまりアルシエを困らせるべきではありませんよ？」

ジエツトとアルシエは2人で思わず見つめ合い、笑ってしまった。

そうだ、はたから見れば確かにひいきしてるようにしか見えないだろう、ジエツト自身はたしかにひいきしてるのだが：アルシエの方はそう思っていない。親切になったな、程度である。

☆☆☆

「なんでクーデとウレイがどこにもいない？ 家に居ないのはどういうこと？」

アルシエは商会から出てすぐに実家の屋敷にやって来ていた、仲間と別れ、自分の家のことくらい自分で決着をつけるために来たのだが、一足遅かったようだ…。

「あの二人はもう居ないさ、今までの借金をナシにする代わりに、借金した額と同じ金額で買い取ってもらったんだ。」と悪びれもせずになんか放つ父親に嫌気がさす、イヤ、かなり前から嫌気はさしていたのだが、今回で決定的になった、もうこの家には居られない。

貴族として生を受け、貴族として育ったが故に、それ以外の生き方を知らず、「娘という者は両家との縁を結ぶための道具、もしくは高く売れるならそれに越したことはない。」という認識から離れられずにいる。

ある意味で言えば父も被害者なのだろうが、この件に関して言えば、妹たちを「2人とも売り払った」と言っているのだ、アルシエからすれば許せるはずもない。

「なぜひもつと時間を伸ばせなかつた？ 何のために私がずっと返済してきたのか分かつてるはず！ 借金をすることを辞めないとまた同じことになる！」

そう叫んで最後の忠告をする、それに少しでも理解があれば、まだ救いもあつたのだろうか…

「なにを言っている、そうならお前が働いて返すのが筋だろう？ 誰のおかげで今まで生きて来られたと思ってるんだ？」と、さも不思議そうに、落ち着いた声で言われてしまった。

もう我慢の限界だつた、これ以上「生きている限り」家のために金を稼ぎ、装備も新しくそろえることもできず、ずっと同じまま…

少しはおしやれも取り入れたいと思つても、すぐまたこいつらが借金をして私の金を当てにする…そして、返しているのはこつちなのに、こいつらは感謝はおろか「当然」と思うほどの愚かさ…

もう今までどれだけ返済してきたらうか…

生まれてから、今まで育ててもらつた私にかかつてきた金額を考えたとしてもその倍以上は支払つていふという確信はある。

「もういい！ 私は家を出る！ フルトの名も捨てる！ 妹たちは絶対に探し出す！ もうこの家にお金も入れない！ 借りた分は自分達で返すといい！！」

もうこの家には一分一秒でもこれ以上居たくない！

そう思い、扉を感情の昂り相応に乱暴に開けると、誰かに扉がぶつかったような気がする。

執事か：それとも最後まで残ってくれていたたった一人のメイドの彼女だろうか？そう思うも、誰も居ない。

(誰かに当たったような気がしたけど：)

そう不思議そうにしていると父親が止めようとしてここまで来ようとしているのが見えた、まだ自分の娘にすがるうというのか：とイヤになり、足早になっていく。

父親にすがられる前に扉を強く閉め、鍵をかける。中からも開けることはできるので時間稼ぎでしかない。

家に来る途中で執事として残ってくれた1人と、使用人として最後まで残ってくれたメイドの彼女に：と思い、用意していた2つの革袋にそれぞれ金貨を幾枚か入れておいたものを取り出し、すれ違いざま「ずっとこの家でよくしてくれていたお礼の気持ち、今までありがとうね。早めにここを辞めて次を見つけて？」と伝え、家から飛び出していく。

家を出てからずっとイヤな気配がついてきている気がする。

恐い：後ろを振り返りたくても怖くてできない。

足運びを速めても離れてくれてる気がしない：近づいてる気はないが、付かず、離れず、といった感じで一定距離を保っているようだ。

何も根拠はない、横を向き、後ろを視界に収める程度にしても、背後には人の姿はない：ただただ、夕闇から暗闇になりかけている、薄

暗い夜道だけだ。

なのにナニかが後ろを着いて来ているのを勘が教えてくれてる気がする。

今日はなんでこんなことばかり：妹たちも探す必要があるのに：手がかりだけでも親から引き出してればよかったか：いや、教えてはくれないだろう：自力で何とかするべきか：

仲間をこんな時ばかり都合よく頼るのはいい行動だとは思えないし：と思いつつながら夜になつた道を早歩きで進んでいると：

「お姉さま!!!」

聞きなれた声が後ろから聞こえてきた。

幻聴だろうか？

さつきまで何も見えなかった、恐ろしかった背後を振り向く：すると、愛しい妹たちが居た：

目の前がよく見えない、にじんでの気がする、もつと妹たちの無事を確認したいのに：それでも涙があふれてきて止まらない。

これは夢？

それとも幻？

自分に都合よく見せられている悪いイタズラ??

そう思いながらも、恐る恐る近づいていき、確かめるように「たしかにそこに居る」という実感を得ようと、2人の妹たちにすがる。

気が付くと妹たちも私に：私も妹たちに抱きつき、もう離さないと  
…、ずっと一緒だと：そう涙声で告げていた。

妹たちも「私たちも一緒！　ずっとお姉さまと一緒に！」と泣きながら抱きついてくれていた。

この温もりは離さない。

そう思いながら、ポーチに入っていたメモの内容に想いを馳せていた。

「いつでも困ったら頼ってください、私が返したい恩はまだまだあんなものじゃ足りていないのですから。」

学院時代に「天才」と勝手に呼ばれていたのは知っていたが、その当人にあこがれを抱いていた少年が実は意外にそばにいたということなど全く想いもしていなかったアルシエは「恩返し」という言葉を、その言葉通りに受け止め、もし彼の母親に迷惑だと思われるようならすぐに出て行こう。

そんな風に一度、結論を出したら足取りは軽かった。



## 第08話 初めての救済（前編）

この話は、フォーサイトの4人が「ルーズインタールの街」の領主の館に赴く時間にまで時は巻き戻る。

その時間、ベルリバーは、気持ちよく、外の景色、外の空気、ありのままの自然という初めて体感する全てを心行くまで堪能していた。

どこまでも広く続く空だ：とベルリバーはそう思う。

どんよりとしていた自分のいた世界とは違う、見渡す限り自然に満ち溢れた世界。

どんなに見続けても、なにを見ても感動してしまう、森林、湖、沼、それに大地、丘、山、数え上げればきりが無い、全てが感動の宝庫だ。そう思いながら、疾走（地面から小指の太さほど浮いた状態で滑っている、下手に歩くより早い）していると、自分が目的地にしていた場所を大きく外れていることに気づく。

「あれ？今どこへんだ？ 気づいたら道を大きく外れてるし：やっぱりよそ見はいけないな」

と独りごちた。

とりあえず街道に戻って帝都までの道を聞き直すとしよう：とすらも、下手に歩いているとモンスターに出くわすような世界、そんな中で、外を通りすぎる人など、見かけない。

冒険者やワーカーに会えばいいんだけどなあと思いながらウロウロしているが、はたから見れば立ったまま、足も動かさず滑るように平行移動している人物、見るからに怪しい存在だ。

下手な建物など遠くにはしか見えない、人気（ひとけ）のないちよつとした地平線っぽい景色を見やりつつ、シュー：と滑っていると、遠くにポツンとちっちゃい影が4人？かな？って程度には見えた。

「よし！ やった！ 誰か人がいたぞ。早速帝都までの道を聞いてみよう」

喜び勇んで、速度を上げた方がいいが、その行動が警戒させることに

は気づいていなかった。

☆☆☆

「あの…、前からすごい勢いでなにか近づいてきます…」 メンバーの中で先頭を歩いていたエルフが警戒の言葉を出した。

「なにか？何かとは何ですか？」

2番目を歩いていた武装した男、その者がさらに詳しく、という意味の言葉を発する。

「まだ何者かは…でも人の形はしています、それに一人で…私達の歩くのが「1」だとすると「3」くらいの勢いで近づいてきます。」

「敵かどうか、人型のモンスターという線もありますか…」

と短く言い捨て、臨戦態勢に入るも…まだ距離はある、武技を発動するかどうか…と思って「待ち」の姿勢でいると

「おお、いい、おお、いい、よかったあ、やっと人に会えましたあ」と女性の声が出た。…と思ったら、走っている様子でもないのに地面をすべるように直立のまま、こちらに滑って近づいてきた。

「なんです、モンスターではなかったではないですか！」 剣の持ち手の先端で「ゴツ！」と先頭の女を小突くとよろめいて倒れてしまい、しきりに謝罪の言葉を繰り返していた。

「うわ、大丈夫ですか？なんてことするんです？」とその女性、しかしその男は涼し気にこう言った。

「ああ、失礼、お嬢さんに不快な思いをさせるつもりはなかったんですが…この3人はみなエルフです、私の買ったドレイなのですよ、これは躓けです。」

そのエルフの女性の手を取り、そつと起こすと「ずいぶんと乱暴な躓けですね、もう少し優しくされた方がいいですよ？」

多分納得はしていないのだろう、軽く肩をすくめて地面を滑ってきた女を見る（…どっちか判断はつきませぬね、戦士系か…それともマジックキヤスター魔法詠唱者か…）

無遠慮な視線に体を抱き寄せるようにして「な…なんですか？」と

小動物のような仕草をみて「そんなに強くはなさそうだ」と結論を出し、会話に入るようにしたようだ。

「ああ、すみませんね、まるで地面を滑ってきたように見えたので、魔法詠唱者かと…でも見る感じ、戦士系の装備をされているようで、どちらなのかと…迷ってました。」

「ああ、少しは魔法もかじってる程度です、さっきのは魔法で、〈浮遊〉<sup>レベテート</sup>を改良した私のオリジナル魔法です。」

「はつきり言ってるウソである、〈浮遊〉<sup>レベテート</sup>を使ってるのはウソではないが、ちよつとした実験をしたらうまくいったので、そのまま今の状況を楽しんで遊んでるだけだ？」

「それにしても〈魔法遅延化〉<sup>デレイマジック</sup>で〈飛行〉<sup>フライ</sup>をかけて、タイミング合わせて〈浮遊〉<sup>レベテート</sup>ってかけたら、こんなことできるなんて嬉しい誤算だな。」

「え？走っていた様子ではないのはわかってきましたが、浮いていたのですか？」と驚いている様子の男に

「ハイ、地面から指一本分の太さくらい上空を浮きながら、滑って移動できるっていうだけの魔法です、歩かないでいいので、急ぐ時は便利なんですよ?。」

「私の〈縮地〉もしくは〈縮地改〉みたいな感じですね。私にはそんな長い距離はムリですが」

「え?あなたも魔法を?。」と女性が興味津々な表情で自分を見ていることに気づき、ちよつとした満足感がわいたようで、少し口が軽くなる。

「いえ、私の今言ったのは武技ですよ。〈縮地〉は相手との距離を一気に直線的に詰める武技、〈縮地改〉は前後左右を自由に足を使わずに移動でき、攻撃にも回避にも適応できます。」

そうスラスラと自分の有能さを自慢するかのように武技の性能まで披露した男に「へへ、すごいですねえ」と黄色い声で自尊心を刺激させた。

「私、さっきの魔法とかくらいしか自信なくって、武技とかもまだまだ覚えられないし…すごいと思います、他には? 他にはどんなのがあ

るんですか?」

とキラキラとした瞳で見上げてきていた。

(この女、見込みがありますね、私の有能さをここまで評価するとは…)

なんてことを考えていた…全てが芝居で、声も地声ではなく、マジックアイテムで変えた声とは全く疑いもしてない様子で、自分の武技の全てを気づけばしゃべり終わっていた。

「ああ、すみません、名前を名乗っていませんでしたね、私は、リバーヴェールと申します、ヴェールって呼んでください。」

「私はエルヤー、エルヤー ウズルスといいますが、お嬢さん」

「それにしてもすごいですねえ、能力超向上なんて、私初めて聞きましたあ♪」

(ああ…情報引き出すとは言え、女のフリって疲れるな…こいつなんか不用心すぎやしないか? まあ、助かってはいるけどさ)

一通りのことを全て話し終えたのか、こちらに話を振ってきた。

「ヴェールさんこそ、見事な武具の数々ですね、見るからに業物の数々だと見て取れます。」

「そんなことないですよ、女の遠出だなんて危険だったことで、身に着けさせられてるだけですから」

「ところで、なにか私達に御用だったのでしょうか?」と警戒まではしてないようだが、何の用事で近寄ってきたのか、知りたいようだった。

「ああ、その…私最近、こつちの大陸に来たばかりで、地理に詳しくなくって…帝都というのはどつちの方角でしょうか?」

☆☆☆

…実はベルリバーは朝から迷っていた。

例のワーカーから聞いた帝国という街を見てみたくて、移動を開始したいが「その姿で街道沿いを歩くのは…」とダメ出しをされていたのがずくつと気になっていたのだ。

とは言え幻術魔法など、そこまで持っているわけじゃない、触れられればバレるし…と考えていると、ユグドラシルでは、専ら敵を待ち伏せするのにしか使ってなかった「スキル」がこつちでも使えないかと試そうと思いついた。

使うのは「偽装 IV」完璧に化けられるわけではないが、姿かたち、肉体としてなら問題ないはずだ…と思い、発動させると…

頭の中に候補が上がってくる「ヘツケラン、アルシエ、??、??」と並んでいるが、納得する。

「二度見たことがある相手の姿にならないのか…たしか自然の動植物は「Ⅲ」だったはずだし、そりゃ、人間はあの4人しか会ってないしなあ〜」

（そう言えば神官のおつちゃん、ハーフェルフのお姉さんは最期まで名前教えてくれなかったっけか…）

とは言え、名前は知らなくても変装して化けられるのは助かる…として、??に意識を集中すると、あの神官のおつちゃんの顔が浮かぶ…（イヤイヤ、そつちじゃないって!）

それをキャンセルして、もう一つの「??」を選ぶとやつとあのハーフェルフのお姉さんの姿を選べるようになった、すぐさま発動させる。

外見が「偽装 IV」で見かけだけ女性の姿になっても、装備を身に着けることに問題はないようだ、装備としては不安の残るレアリティで、ほぼ全部レガシーだけど、このくらいいいだろう、と思うが、「ああ…ああ…」と自分の声を確認し…やっぱり、男の声のままかあ…としょんぼりする。

女の子の姿で男の声って…これはさすがになあ…と頭を悩ませること数十分、あれなら残ってないか?と思い出し、アイテムボックスをぐそぐそと探る…あつた!!

「いたずらの声」ボイス、オブ、トリック　　ぱぱぱぱららら　　という音を幻聴のように脳内に響かせ、首に装着させる、見た目、首輪みたいなチョーカーだ…

「あ〜〜、ああ〜」と声を出すと、間違いなくあのハーフェルフのお

姉ちゃんの声…。

1回チヨーカーを外し、オフ状態にして今度は頭の中でアルシエちゃんをイメージしながら再び装着…するとアルシエちゃんの声になった。

(やり〜♪ しばらくこの声で行動して、違う声が入ったら、そっちの声にしよう…あんまり無断でアルシエちゃんの声を使うのは気が引ける…いや、悪いことには使わないけどさ。)

ぶくぶく茶釜さんの声もいいんだけど、こっちの世界に来た時に変化しちやったみたいだなあ…

---

ボイス・オブ・トリック  
※いたずらの声

ユグドラシル時代、ハロウインの時期になると配られていたログイン時プレゼント用のイベントアイテム、その内の1つだ。

ゲームの中では友達登録していたリストか、ギルドメンバーの中から選んで、特定した人の声を真似することができた。

装備時に選ぶため、選び直すためには一度装備から外して、付け直さなければならぬアクセサリ用アイテムだった。

---

結局、それから、誰にも会うことはなく…ハーフエルフの姿ではあるが、クロークを装備しているため、フードで隠れて耳の部分はバレていないようだ。

(まさかエルフがドレイにされてる世界だったとは…、まあさすがにあのワーカークチームもその話題は、チームメイトのために避けたみたいだな、ドレイの話も目の前にコイツに聞いたときは「一辺、死んでみる？」って聞きたくなっちゃったよ〜)

(それにしても…こんな可愛いエルフちゃんたちをそんな風に扱うなんて…あまりにもひどすぎる……どうにかできないものか…)

と少し悩んでいると、そうだ、と思い付き…「ねえ、エルヤーさん

ちよつといいですか?」

「ハイ、なんででしょうか?」と振り向いてくれたので、「あの…後ろのエルフさんたちとお話してもいいですか?」

とちよつと聞いてみた所

「ああ、敵が出てこない限りはお好きに? 前の方のこいつには警戒させておきますので…なあ? おい!」と軽くではあったがケリを入れていた。

頭が沸騰しそうになりながらもなんとかこらえ「先頭の人の名前はなんていうんですか?」と問うと

「知りませんね、こいつも言いたがらないですし、いつも『おい』か『お前』ですね。」

こめかみに青筋が浮かんでいる自分を幻視出来たような気がしたが、「短気は損気」…だったっけか?機会が来るまで後ろの2人に話を通してみよう。

「それじゃ、エルヤーさん、敵が来たら教えて下さい、このエルフさんたちを守りながら、援護させてもらいますから」

「そんな必要ないと思いますよ? そいつらが減ったら、また補充すればいいんですしね」と冷ややかな視線を向けながらエルフを睨むようにしている。

(こいつどこまでもクズだな…うん、こいつはなにかあつても『消化』確定だな)

「ん…エルヤーさんはお金持ちなんですね、そんなにポンポン新しいのを買えばいいだなんて」

(エルフの価格がどのくらいか知らないが、俺たちの世界でだって、携帯用の通信機器を買うのにどれだけの苦労が必要だったか…それを思えば「モノ」と思っているとはいえ、大事にしようとか考えないのか!)

心の中で、グツグツとしたものを感じながら、質問を投げかける。

「エルヤーさんってお強いのですよね? もし不意打ちや、自分と同等の強さの人達3人くらいに襲われて、このエルフさん達…奪われたら、どうします? エルヤーさんの基準で言えば、誘拐ではなく強盗

…ということになりますよね？」

その言葉を受けたエルヤーは信じられない者でも見たような目をヴェールに向けて、急に笑い出す。

「イヤ、そんなことはないでしょう、近隣諸国でも私以上の…というか私と同等の実力者なんてガゼフ・ストロノーフくらいでしょう…とはいえ、今では私の方が強いでしょうけど。」

…と自信満々に言い切ったので、それを記憶に刻み込む（ガゼフ・ストロノーフか…どんな男か今後の楽しみにしておこう）

「ということは、誰が来ても負けないということですね？ エルヤーさんは懐の大きい人でしょうし「モノ」を強奪されたくらいじゃ、目くじら立てて、探したりなんてしない心の大きい人なんでしょうね」

一応、誉め言葉として、それだけ認めているという意味と、「そんなことしたら、自分は小物ですって自分から触れまわる行為だということですよ」という意味の二つを込めて言い放ってやる。

「ずいぶん私のエルフに同情的なようですね、良ければお譲りしましょうか？ …まあ私もそろそろこいつらに飽きてきたところですからね。元々の出費の半額、2000金貨ほどでお渡しますよ。」

こめかみに青筋を浮かべながら「ずいぶん思い切った提案ですね、もし私が、それを即金でお支払いしたら、どうするんです？」

「そんなことができそうな人だとは思えないからこそその提案なんですよ、飽きてきたとは言え、まだまだ使い道がありますからね。使いつぶすまではお渡しできませんよ」

（それができるんだよね…ユグドラシル金貨、たしか毎回ギルドに1万貯まったら預けに行ってたから1万は行ってないだろうけど…たしか8000〜9000前後はあったはずだ）

※実はこの世界では、ユグドラシル金貨1枚はこの世界の金貨で2枚の価値がある、つまり

16000〜18000前後の現金をアイテムボックスに入れて持ち歩いていることになる。

まだベルリバー自身は、そのことに気づいていなかったが…

（それにしても、この男、私のことを本当に女だと思って、それを



言ってるのだろうか？だとしたらクズっていう表現ももったいなさすぎる、クズに申し訳ないってレベルだな…まあ、私は外見だけで中身男なんですけどね。」

「ふうく…」とため息をついて「総合的に考えると『人権がない』以上、奪われれば奪われる奴が悪い、そういう認識のようですね。」

そう言い切つて、エルヤーに「それでは、後ろのエルフさんとお話してきますね？」と言い捨て…

「それができるのなら、そうでしょうね、もし私相手にそれができる実力者がいれば…という前提が成立すれば…ですが？」と、エルヤーはどこまでも自信過剰だ。

「それでは、前のエルフさん、あなたも気を付けてくださいね、なにか気づいたらすぐに教えて下さい、一番前は一番危険なんですからね？」

「…はい」と短く返事が聞こえた…すぐにでも消え入りそうな声だと思つた。

「どこまでもお優しい方だ、こんな消耗品にそこまでする必要なんてないというのに…」とまた私の導火線を短くしようとしている。

（さて、これでなんとかなるといいけど…）と半ば望み薄かと思ひメッセージ「伝言」を起動しようとする…も、どうやら前のエルフには届かなかつたようだ

（そうだよなあ、会話ができたとはいえ、名前…聞けてないんだもんなあ）

（そうなる後ろのエルフさん達だ、名前を教えてくださいないなら、自分が呼び名をつけてあげたらどうだろう？これも試しだ、うまくいけば儲けもの♪）

「初めまして、エルフさん達、私はリバー ヴェール。ヴェールって呼んでね？ よかつたらお名前を教えてくださいない？」

そう優しく語りかけたが、どうやら何かを思い詰めてるのか、顔を伏せたまま…の表情にどこかで見たことある表情だなと既視感に襲われる。

（どこだろう？）と思っていると、そうだ…自分が居たあのくそつた

れ世界のみんなだ…アーコロジの外で生活してた人達の日だ…と気が付いた。

(この子たちは同類だ…あの時の自分らと同じような環境で、それでもずっと生きているんだ…でも生きることをあきらめかけてもいる。すぐになんとかしないと…)

と自分の決心を強くすると、返事が戻ってこないことはわかりながらも、根気よく話しかける。

「それじゃ、よかつたら、私が呼び名だけでも考えてあげるね？」  
という、後ろの2人とも、ぼんやり…というかどんよりというか、そんな表現にピツタリした瞳を向けてきた。

(良し…とりあえず反応はあった！)

前を歩いているのはショートヘアのブラウン系の髪をした子、恐らくレンジャーを獲得してるだろうから、こっちの言葉は聞こえていると判断して、後ろの2人にも少し落とし気味の声をかけ続けた。

「キレイな水のような色、透き通るような青い髪がステキなあなたは「ディーネ」ね、水の精霊のウンディーネからとって、あなたはディーネって呼ばせてもらうから、よろしくね ディーネ？」と笑顔で微笑んで目を見てあげると…少し、色が戻った気がした。

(でもまだ足りないな、どこまでの絶望を味わって生活してるんだか…)

「ねえ、ディーネ？ 返事くらいしてくれない？ せっかく名前を呼べるようになったのにさみしいな。」と言葉をかけると「……………はい」

この子も先頭の子と同様、消え入りそうな声で答える。

(これでダメなら、本名を聞かなきゃいけないんだろうが…あのワーカー達が本名じゃない名前でも乗ってくれたことを祈るしかないな)

そう祈るような気持ちで〈伝言〉を発動すると、頭の中に回線が伸びてきたような感覚がする…これは〈伝言〉が通じる前兆だ。

「〈伝言〉…届いた？」とディーネに問いかけると驚いた顔をされた。

『この魔法なら、小声でも十分な音量で相手に届けられるから、あの男には聞こえない、だからちよつとだけ話に付き合つて？』と言つて

『もしそれでいいなら首を一回、縦に振ってみて？』と〈伝言〉での

声かけは届いてるだろう中、しばらくの時間迷ってから：「コクン：」（やった、これでなんとかなりそうだぞ！）

しばらくの時間、ディーネと話をした、というより自分が話して、それに対して首を縦に振るか、横に振るかしか反応はなかったが、それでも充分だ。

こっちの意図をディーネに告げて、全ての計画を事細かに説明する、それをディーネが隣を歩いている金髪のセミロングのエルフの子に「エルフ語」で文字にして見せるようにさせている。

筆記具はもちろん自分が提供した。

アイテムボックスの中に残っていた「メッセージボード」これはプレイヤー同士のやり取りで、緊急ではない用事で相手に意図を伝えたい時、例えばなににのイベント、いついつのレイドボス討伐に参加しませんか？ のような文面を板状の四角いワクの中に書いていくもので、ゲーム内ならそれが同じメッセージボードを持つ者同士のギルドメンバー、友達登録している者の間でのみ、伝わるような仕組みになっていた。

（実際は、結局他の友人や、ギルメンからのメッセージが届いたら、自分のが後ろに埋もれちゃってた、なんてことは普通にあっただけど：こっちではそれもないだろう）

エルフ語でも使えるかと不安ではあったが、問題なく指の動きで文字が表示されていく。

そして、文章がいつぱいになったら、手の平をボードに当てて、横にスライドさせれば消去完了だ！

（便利だなあ～：これはいくらでも応用が利きそうだぞ？）

試しにボードの文字を見ながら、〈言語読解〉<sup>リードランゲージ</sup>の魔法を使い、ボードを見てみた：ちゃんと指示通り、事情の説明をキチンとしている。

問題なくエルフ語を読むことに成功した。

ということはこのこっちの世界の言語も読めるだろう。

（幅広く読みたい時は、魔法効果範囲拡大化〉<sup>マジック</sup>をかけて、読もうとすればなんとかなりそうだし、ここまでは幸先いいぞ。）

そうやって着々と、エルヤーお仕置き、エルフちゃんたち強奪計画

は始まった。

もちろん、強奪するということも彼女たちには告げている。

『余計なお世話ならごめんなさい、でもちゃんと聞かせて？ 助けてほしい？』とへ伝言<sup>メッセージ</sup>で聞くと、どうやら金髪の子はへ伝言<sup>メッセージ</sup>を使えるらしく、先頭のエルフの子にも確認を取っていて、3人同じ結論だった。

しかし、こうも言われた。

『この計画が失敗しそうだったら、私たちはエルヤーに逆らう気力はもうない：だからきつとあなたに敵対することになると思う』

と、申し訳なさそうに言われたので、心配いらなからね？という言葉と共に

『もちろん、危なそうだったらエルヤーに全力で支援していいよ？それでも多分、この計画はうまくいくから、安心して？失敗なんてないから！』

と保証したら、目に涙をためていた、この時にはもう彼女たちの瞳は、かすかな希望を持っているようで、あのどんよりとした目もずいぶん薄まっていた。

『さて、それじゃ、これから私はあなたたちを強奪する、強盗犯になるつもりだから、ちゃんと盗まれる覚悟はしておいてね？』

と、笑顔で見やると、後ろを歩いていた2人は何度も、何度も頷いていた。

：そう、「強奪されて、さらってくれる」という希望を前に、もう彼女たちの中に迷いはなかった。ただただ計画が成功するように：との願いを込めて。

：そして後編に続く

## 第09話 初めての救済（後編）

周囲のモンスター達に対して警戒をしてはいるが、さすがに自分のチーム内で物騒な相談をされているとは思っていないだろうエルヤーが、今も偉そうに振る舞いながら道中を進んでいる。

しかしさつきとは違い、先頭のエルフは後ろから蹴られようと小突かれようと心の余裕ができたようで「さつき」より聞き取れる声で謝罪の言葉を口にしてている。

怯えた表情を見せず、ひたすら前を見ているのは「常に前を警戒しています」というポーズを通すためで、決して振り向かないようにしているのは、表情の余裕を気取られないようにしてくれているのだろう。

ヴェールは今もディーネと〈メッセージ伝言〉を繋げたまま

そして、先頭のエルフと最後尾の金髪のエルフがメッセージでやり取りしている。

先頭のエルフはかなり小声でエルヤーに聞こえないようにしているようで、まだヤツに気づいた様子はない。

『それじゃ、計画に移る前にちよつと姿を消すけど、1〜2分もしない内に帰ってくるから、心配しないでね？』

そういうやいなや、ある魔法を使う。「無詠唱化」はさせてないのに、発動させるために言葉にするのは必要だ、だからこそ、エルフの3人は信じられない思いでいっぱいであった。

最初に会った時、あの人はなんて言っていただろうか？「魔法はかじっている程度」そう言っただろうか？と思いきりしながら姿を消す瞬間に言葉にした魔法名を今一度、再確認していた…

たしかヘグレーターテレポーション〈と言っていたのではないか…

魔法の知識くらいは確かに知っている…それでも短い距離の転移でも第3位階、もつと長距離になると第5位階以上だということくらいしかわからない。

第5位階以上だなんて、「かじった程度」などで収まるわけではない。そう言えば計画では、エルヤーにモンスターをけしかけると言っていたが、「なに」をどうけしかけるのかは言っていなかった。

話を聞いているときは〈動物操作コントロールアニメタル〉でも使って群れで襲わせるのかと思っていた。

そうなると先頭を歩いてる子が危ないかと心配もしたが、そんな心配はいらないと「あの人」は言っていた。

：なら、これからどんな「モノ」がこれからこっちに襲い掛かってくるのだろうか？

少し不安になっていた頃、音もなく「彼女」が帰ってきた。

「ただいま♪」すごく爽やかで朗らかな笑顔と共に：

☆☆☆

『それじゃ、計画開始よ！ となりの子に書いて教えてあげて？それから先頭の子にも、見つけたらエルヤーにちゃんと教えても平気だつて伝えてあげてちょうだいね』

そう〈伝言メッセージ〉で伝えると、すぐさまその内容はエルフ3名の中で情報の共有がされていた。

『あ、そうだ、あのエルヤーつてヤツ：あいつ生かして逃がすとこれからも貴女達と同じ犠牲者が出るのは変わりないと思うの：だからいっそ、モンスターに：ってことにして、直接私が始末しようと思うんだけど』

と意見を求めると、みんながそれは賛成。と返ってきた。

『それで、始末する方法なだけど：いくつか考えてる方法があるの：』みんなにも意見を聞いておこうかと思つて：と言ひ、いくつかの選択肢の内どれがいいか選んでもらう。

私が提示したのは以下の内容だ。

1. あっさり、スパツと消滅させるように始末する。

2. むごたらしく長時間に渡り痛みを与え続け、とどめは貴女達、遺体は私が片づける。

3. 「2」よりは短い時間だけど、泣き叫ぶほどの痛みを与えた後、仕留めるのも片づけるのも私。

さすがにちよつとリアルすぎる生々しい提案だったかなと思いつつ「やっぱ私が全部…」と言い出そうとしたら…全員一致で「2」の方を申し出てきた。

それなら…と、『これからの私がエルヤーに対する言動は全部、芝居だから、最期まで信じてくれる?』とみんなに共有してもらおうと…全部任せると。という返事が返ってきた。

(これなら、遠慮はいらないな。)と判断して、しばらく歩いていると先頭のエルフから注意が飛ばされてくる。

「前方から巨大なモンスターが1体、後ろから恐らく、獣が迫ってきています、およそ2、3、です!」

緊張の色が表情に出ているのはエルヤー1人で、あとの女性陣は、やや力を抜いているも、怯えと緊張する芝居は忘れなかった。

(さあ! ショータイムの始まりだ!)

☆☆☆

「エルヤーさま、このままでは前後で挟まれます、どうしましょう?」  
(微妙に芝居に熱が入ってるな、これからの展開を楽しみにして熱意がこもってるのか? ハリキリ過ぎないように頼むよ?)

そう心配していると、そうとも気づいていないエルヤーは予想通りの指示を出す。

「お前が先に、そのモンスターの姿を確認後、注意を引きなさい、その間、私が〈空斬〉で距離を測って攻撃しましょう。」

(やっぱりこいつ外道だ…決定してはいたけど、もお許さないぞ、この野郎! あのエルフを遠回しに使い捨てる「壁」扱いしやがったな?)  
とヴェールが決意を新たにしていると、前方の敵が先にこちら目がけて姿を現す。

鶏の身体に、ヘビの尻尾をしたモンスターだ。

「エルヤーさま、あれはコカトリスです。 たしか難度は70に迫る存在だったはずですよ！」

「チッ！　なんでそんなモンスターがこんな平野に出るのですか！　おい！　後ろのお前たちも援護に……」

と後ろを振り向くと、先ほどの警告通り、後ろにも獣の群れがいる。そいつらはエルフの2人と、ヴェールを標的にしているようだ、獲物である彼女らを中心に3匹で取り囲むようにしながら、ジリジリと距離を詰めようとして、様子をうかがっている。

あのままでは後ろの奴らは役には立たないだろうと判断したエルヤーは先頭のエルフに指示を出す。

「強化魔法だ！　武器の強化もよこせ！　レッサー・ストレングス〈下級筋力増大〉もだ！　早くしろおおお!!」と絶叫交じりの支持を出し、魔法の恩恵を受けている。

（ふふ、どこまで善戦できるか見ものだな、レベル的には23、デスナイトの攻撃力よりちよっぴり下程度にしておいたんだが……エルヤーは遠距離攻撃タイプみたいだし、クチバシに攻撃されない限り平気だろう。）

と高見の見物を決めこむようにエルヤーの戦いを観戦している。

後ろの2人のエルフにも伝えているが、これらはヴェールが召喚した動物たちだ、意思の疎通は感覚で指示できるので、時々ちよっぴいをかけさせて、それをうまくしのいだり、防御したり……

さも「3匹の対処に精一杯です」という姿勢を崩さずに観戦させてもらうつもりでいる。

もちろんそれは先頭のエルフにも情報は共有されている、狼と同様にあのコカトリスも

〈サモン・ヒーリスト・2nd第2位階 自然の獣召喚〉で召喚したモンスターだ。

エルヤーに石像になられても困るし、一応クチバシ以外での攻撃を指示してるけど、フェイントでクチバシを使って頭突き、などで戦うのは許可している。

「おい、あいつの注意を引くんだ！　〈空斬〉を使う隙を作れ！　〈フレイム・アロー炎の矢〉だ！」



そう指示を出し、自分は近づかず、魔法の着弾と同時に〈空斬〉を放つ！」

（よっわあ……！ なにあれ？もうちょっと威力あるかと思つてたのに、コカトリスの毛皮に阻まれてんじやん！ 〈炎の矢〉<sup>フレイム・アロー</sup>の方がまだダメージ与えてるって！）

〈炎の矢〉が着弾した辺りに火が燃え移り、消化させる手段のないコカトリスはのたうちながら炎を消そうとはしているが、ジワジワと継続ダメージは入ってそうだ。

ヴェールは意識を飛ばし、コカトリスに指示を出す（コツケー！（コカトリスの名前）

〈炎の矢〉の方は気にするな！ とりあえず男を狙え！ 武器を持つてる方だ！）

と、指示を出すと、コカトリスはエルヤーの方に標的を定め、一直線に駆けて行った。

その間に先頭で「鉱山のカナリヤ」役のように扱われていたエルフと合流する。

念のために3匹のムーンウルフがジリジリと誘導させるような動きを見せつつ「追い詰められたら、そのエルフの場所だった」的な場面も、展開していたのだが、エルヤーはそれどころではなかったようだ。

遠距離攻撃タイプでありながらも、立派な刀を持っていても、コカトリスの表皮すらかなかなか傷つけることができず、〈能力向上〉〈能力超向上〉を重ねて発動させ、ようやく表皮に刃を届かせ、傷を作れるようになっていた。

そこまできてなんとか遠距離の攻撃がジワジワとダメージを蓄積させている中、コカトリスはクチバシ攻撃を見せ技に、頭突きや、翼のひっぱたきでの吹き飛ばし等で、色々と頑張つてはいたが、ロングレンジの攻撃手段を持っていないため、〈縮地改〉で距離を取られ、チクチクとライフを削られていた。

（仕方ないなあ……こつちもだんだん飽きてきたし、もおいしいか）

（おおい、コツケー！もうクチバシでの石化攻撃、出してもいいぞお

く?)

と意識で伝えると「待つてました!」とばかりに天にクチバシを向け、大きな鳴き声を響き渡らせ:エルヤーにクチバシ攻撃を繰り出す。

対して、エルヤーはずつとその瞬間を待つていたのか、大きく跳躍すると突き出されたクチバシに向けて大上段から剣を振り下ろす!

その瞬間を見計らい、クチバシにエルヤーの刀が当たった瞬間、強制的に召喚モンスターを「召還」(元居た世界に還す)。

(還すから、最期に大きな雄たけびをあげろ?)と支持を出すと、はたから見たら、断末魔を上げて、消え去ったようにも見えたのではないかと?。つてくらいには体裁は整った。

それと同時にこちらのムーンウルフ3体も同様に召還させた。

(同時に3体が斬り伏せられたような動きをしてもらった後に:だ。コカトリス同様、倒したように見せるためという理由がある。)

「やれやれ、そんな狼ごときにてこずつていたんですか? まったく世話の焼ける、こっちは1対1での勝利ですよ?」

:とやけに自信満々に戦果を誇っている。

(やれやれはこっちのセリフだよ!あんなのにてこずつてるの見てるこっちの方が呆れるのを通り越して、戦わせる気も無くしたって!)

:...と思いつつも、ここは計画通りに進めなければ、この戦闘の意味は全くの無駄になってしまう:

(本当はこんなこと:したくないんだけどな、これからの展開を想像すると気持ち悪くて吐きそう:)

(そうは言ってもこれはエルフちゃんたちのため! がんばれオレ!)と自分を奮い立たせ、芝居を開始する。

「助かりましたあ:エルヤーさん、コカトリスを倒せるなんて、やっぱりすごい強い人だったんですねえ?」

と言つて、そのクソ野郎のムネに飛び込んで行つてやる。

「これくらい、当然でしょう、私に敵うモンスターなんか、ここいらで

は出てきませんよ」…と自慢げだ。

(外皮すら、切り裂けずにジワジワ、チマチマとダメージ与える程度だったのにな?)

と内心で思いながら…

「ハイ！ 見てました、思わず見とれちゃいそうになりましたよ、私エルヤーさまのこと見直しちゃいました。」

「分かればいいんですよ、まあでもあなたも3匹に囲まれて、傷も追わないとは大したもの…と言ってあげましょう」

(ホント、どこまでも偉そうだな、オイ！)

と思いながらも、ここからが本題だ。とクライマックスへの開始を告げる言葉を発する。

「ところで、あのモンスター、変だったと思いませんか?」

☆☆☆

帝都までの道を、道案内してくれるという話で、クソ男とエルフ3人に同行することになったヴェールは、エルヤーと共に街道を外れた林の中に来ていた。

なぜ街道を外れたかと言うと、モンスターの様子が変だとエルヤーを誘導したためだ。

「どこがどう変だったと言うんです?」

「わかりませんか? エルヤーさま程の聡明で経験豊富な英雄さまが…意外です。」…とわざとらしく持ち上げ…

「普通のモンスターなら、最期は倒れて、そのまま命を失ったら身体だけが残りますよね?」

「まあ、それが当たり前でしょ? 何を言ってるんです?」 と不思議そうだ 「こいつ何言ってるんだ?」 って顔でヴェールを見ている。

(めんどくせえなく、ここまで言ったら気づけよ!)

「ああ、すみません、説明不足でしたね、つまりあのコカトリスも、あの狼も、倒した瞬間に消えてしまいました。つまりはあれは召喚されたものなのでは?」

と、ここまで言っても「?…それがどうしたんです?」としか反応が返ってこなかった。

内心で盛大なため息を漏らしながらも、子供に言い聞かせるようにかみ砕いて説明をする。

「つまりは、誰かが、エルヤーさまの命を狙ったのではないか?ということですよ。」

「召喚した犯人はまだ近くに居るかもしれませんが。ここで逃がしたら、またこれからも同じことを油断してる瞬間に仕掛けてくるかも…夜、無防備なときとか…」

と、ここまで言えば、重大さに思い至ったのだろう。

「上等ですね、そんな奴は私が返り討ちにしてあげましょう」

(かかった! それにしてもひっかかるのにずいぶんかかったな、こつちが疲れたよ…)

という事情があつて、うまく言いくるめておびき寄せ、この林に居るのである。

「それにしても、本当にこんな林の中にいるのですか?」と私の後ろについてくるエルヤー。

(やだなく、なんかやたら、背後から変な視線を感じるんだけど…まあ、あと少しのガマンだから、いつか! 踏ん張るんだオレ!)

「召喚されただろうモンスターは一見逆方向から来たように見えますが、同時に仕掛けたということは、移動の速い狼モンスターを先に召喚させ、遠回りに走らせて、背後から…」という流れなんだと思います。

「ほお、それで?」と返すエルヤー

(お前も少しは考えろよ、その頭には豆腐しか入ってないのか?) と  
思うも、平静を装い

「つまりはあの中で移動速度が遅いコカトリスは最後に召喚され、コカトリスの襲撃に合わせて、オオカミモンスターと挟み撃ちにしたん

だと思えます。」

「だからコカトリスが来た方向の、この林に来た。そういうことで  
すか？」

「ハイ！ さすがエルヤーさま！ 最後まで言わない内に理解される  
なんて、実力だけじゃなく、頭もよろしいのですね！」と今のうちに  
持ち上げるだけ持ち上げといてやる。

「あなたの話が分かりやすかったからですよ、自慢するほどのこと  
もありません」といいつつも鼻が天を向かんばかりのドヤ顔をして  
いた。

しばらく林の中を散策し、探索のまねごとをしながら、エルフの3  
人は林の入口で、怪しい者が近づかないように警戒役を…という進言  
をエルヤーにして今は「見張り役」という出番待ちをしてもらってい  
る。

つまりは今、エルヤーとヴェールは2人きりなのである。

「ところでエルヤーさま？」と声をかけると、「見つけましたか？」と  
瞬時に反応するエルヤー。

「私、さっきの戦いを見て、ずっつと想っていたんです、エルヤーさ  
まってステキだなと…」

「は？ いきなりどうしたんですか？」とどこかこつちの反応の変化  
にうろたえているようだ。

「実は…、こうして2人きりになりたかったのも、実は…勝手な私の想  
像で…召喚主なんて居ないかもしれないんです。」

「私をだましたと…そういうことでしょうか？」と不快感を露わにし  
ている。

「すみません、エルヤーさまの「おなさけ」が欲しくなってしまうて…  
このような行動に出てしまいました。」

そう言つて、エルヤーにすがり、ムネを押し付けるようにして抱き  
つきに行った。

（うわ…もう少し、もう少しのガマン、ガマン、ガマンだぞ、オレー！）  
「やめてもらえますか、こんな林の中で…」と振りほどこうとするエル

ヤー。

「こんな林の中だからこそです、ここから出たら、もお、二人きりにはなれないと思って…」と顔を伏せ、見るからに恥ずかしそうにしている。

「そんなに私が欲しいのですか？」と少し乗り気になつてきたエルヤーに対し

「ハイ、エルヤーさまの全てが…欲しくて…、あの…私のこと変な女の子だなんて思わないでくださいね？」

「ええ、そんなことは思いませんよ？ それよりあなたの素顔を見せてくれませんか？ あなたの全てを知りたいんです。」

（きやがったな？ そう来るのは予想してたけど、【擬態】してる体とは言え、恥ずかしいな〜こりや）

「あの…私、あんまりスタイルとかよくななくて、自信ないんです」と一応言い訳をしておく。

（なにしろ、見た目、あのハーフエルフのお姉ちゃんだもんなく…ごめん、名も知らぬハーフエルフのお姉ちゃん、これから私はあなたを汚してしまいます！）

と内心で、土下座謝罪をしながら…装備を外していく、武器を下ろし、ヨロイを外し…しかし顔はフードをかぶったままだ。

「どうしました？ 私は『あなたの全てが知りたい』そう言ったはずですが？」

「あの、顔までを見られるのは恥ずかしくって…じゃ〜、下も、外しますから…」と下半身の防具も外し、ほっそりとしたスタイルが露わになる。

「まあいいでしょう、それより、さつき私の「おなさけ」が欲しいと言つてましたか？」

「ハイ…エルヤーさまが、欲しくて…欲しくて…たまらないんです。」という言葉にゾクゾクするエルヤー。

「いいでしょう、私のズボンを下ろさせてあげましょう、好きになさい」

「ええ〜？ 嬉しい、いいんですか？ それでは、失礼します。」

と言つて、戸惑うこともなく、するりと中身を外に出すヴェール。  
(まあ、もともと男だからな、出し方くらいは慣れたもんさ)

「さあ、いいですよ？ 私のソレを好きにきなさい。」という感じで、  
もお完全にそっちモードのエルヤー。

「あの…その前に…私の…わがママを聞いてもらつてもいいですか  
？」

「……、なんですか？聞くだけなら聞いてあげましょう？」とちよつと興  
が削がれた様子。

「あの…エルヤーさまの…その…アレ…を、『呑んじやつたり』しても  
…いいですか？」といよいよ核心に迫る。

(この女、第一印象では奥手な感じでしたが、意外と好き者だったよう  
ですね)

「ええ、好きにきなさい、なんならノドの奥にまででも、飲み干してし  
まつてもいいんですよ？」と勘違い全開のエルヤー！

「うれしい！ そう言つてくださるのをお待ち申し上げておりまし  
た。」

と、喜色満面のヴェールのフードをエルヤーはいきなりつかみ：  
「素顔くらいはせめて見せてください？」といきなり引きはがす。

「……………あなたは…エルフ?? イヤ、違いますね、ハーフエルフでした  
か…」

そう見て取ると、瞬時に今までの顔が打つて変わったように嗜虐的  
な笑みに変わり…

「そうと分かれば遠慮はしませんよっ」

と言うと目の前の女が信じられないことを言い始めた。

「私がハーフエルフ？なにを言つてるの？私は、あなたが買ったドレ  
イじゃくないですかあ」

そう言い終わるか終わらないかの内に、いつのまにかハーフエルフ  
の耳が、途中で切られたような耳に変わり…髪が濃いブラウンの  
ショートヘアに変わる。

「お、お、お前は…なんだ！ なんなんだあああ!!!」となかば混乱状態

に陥っている。

「私？ 私はあるあなたが「おい」とか「お前」とか言ってた大事な大事な使い捨てのドレイですよ？」

と言う言葉と共に、今度は金髪の方の…自分の所有物であるドレイに変化する。

「お前は、なんだ、魔法はかじってる程度じゃく無かったのか？それとも何かの生まれつきの異能かなにかか？」

「言っただじゃくないですか？私はあなたの全てが欲しいと…そして、ノドの奥まで入れて、飲み干してもいいとも言ってくれましたよね？」

そう言い終わった目の前の女からは、残虐な笑みが見えていて、さつきまでの表情はウソであったかのようだ。

何かの危険を察知したのか、すっかりしおれた男の象徴をズボンにしまい込み、剣を構える。

「エルヤーさん、女性にそんなもの向けるものじゃくないですよ？ほおら、あなたの大切な消耗品のオモチャですよお」

というと、今度は薄い青の髪…3人目のエルフの姿になり、両手をエルヤーの方に伸ばし、何ごとかを呟いた。

「おまえええええ!!」そんな絶叫と共に剣を振りかぶるエルヤー。自分の剣を振り下ろそうとしたその瞬間に、腕に激痛が走る。

「ぎやああああくく…痛い、いってえ、なんだこれえく？」  
状況がのみ込めず、握った剣を取り落としてしまった。

自分の腕を見るとまるで拳よりも二回りは大きい丸いものが、自分の腕にくっついていて…いや、これはかじりついてるんだ。

「あああああ…やめてえ、やめてくれええく…!!」と叫ぶも、どこまでも目の前の女は冷酷は笑みを浮かべ、こう返す。

「あなたは今まで、同じことを言っただけを、慈悲を願っていたエルフの子に…助けを差し伸べたことはありませんか？」

「うるせええ!! お前なんかにく… ハーフエルフのお前なんかに指図される謂れはどこにもないんだあ」

と最後の悪あがきを言葉にする。



「ハーフエルフ？　そうですか、私がハーフエルフに見えましたか…」  
「そうだろうがあく！　さっきの耳で、そうじゃないとは言わせないぞお!!」と叫ぶエルヤーに最後の宣告が下される。

「私をいつからハーフエルフだと勘違いしていた？」

と、静かにそう言うと、スキルである「擬態 IV」を解除、さらには<sup>ビュー・オブ・ミラーージュ</sup>〈幻影の視覚〉も解除すると、脱いでいたはずの装備もなにも、脱いでおらず、装備されたまま…フードもかぶったまま、もはや、さつき見たものうち一つでも本当に幻ではないと言い切れるものはあつただろうか…という気になってしまう。

その光景に呆然としてしていると、今度は足に丸いボール、いや、口いっぱいに牙を生やした物体が、かじりついている。

「ああああああ…、もおやめてくれえええ、イヤだああ、死にたくないくく!!」

と叫びながら、手足をひとしきりかじられ、手向かうことも、逃げることもできないエルヤーを放置して、何ごとか、ヴェールが独り言をつぶやいている…いや、なにかの魔法か??

と思っただいたら、3人のエルフが目の前にやってきた。

「ちようどいいい！　おまえら！　治癒だ、治癒魔法をよこせええ、すぐだ、早くしろおくく!!」と最後の虚勢を振り絞り命令するも、目の前のエルフたちは身動きもせず…無表情にエルヤーを見つめている。

そして、今にも命尽きそうな虫けらでも見るかのように冷たい表情を3人が3人とも浮かべると、ヴェールが、自分の持っていた剣を3人のエルフの前に差し出した。

その意味に気づいたとき、エルヤーは力なく、こう口にするしかなかった。

「お、お前らあく…ど、どういう…」…そこから先は言葉にされることなく、3人分の殺意がこもった1本の剣が、エルヤーのノドに突き刺さっていた。

「さあ〜って、と♪ 気分よくうまくいったし、後は私が始末しておくから、誰にも見られないように、外を見てて？」

と言つてエルフたちを解放し、モノ言わぬエルヤーから自分の剣を引き抜くと…、片腕1本でエルヤーを軽々と持ち上げ…頭頂部に集めた口の上にエルヤーの身体を置き…

ピラニアのようにせわしなく動く牙で、肉体がグチャグチャと口内に消えていく中、静かに『消化』とつぶやき、エルヤーの武技やらなにやらを全て記憶した。

…きつと武技以外は使い道はないだろう…などと、疲れたため息を1つ漏らし、林の外に出ると、エルフたち3人が何もかもから解放されたようなすつきりした表情で待っていた。

その表情はどこまでも爽やかであり、全てから解放され、これからの未来に希望を持った者の顔であった。

良かったら…私と、パーティを組んでもらえない？と頼んだら「とんでもない、私たちのことは如何様にもお使いください。」と怖いくらい真剣な目で言われてしまった。

「パーティなどと言わず、ヴェールさまの身の回りのお世話でもなんでもさせてもらいます。」

「なので、私達をどうか見捨てないでくださいませー」とすがりつかれてしまった。

## 第10話 エルフたちとの身の上話

ベルリバーは状況がのみこめずにいた。

ただ助けて自由にさせてあげたかっただけ、たったそれだけだったのに…

なんでこうなったの？

「え？ … あのおくく」

「「ハイ、なんででしょう！」」と見事に3人がシンクロしている。

「あのね？ ええくつと、私、貴族でもなんでもないよ？ ただの…、そう、何でもないフツくの通りすがりよ？」

力なく説得力のない逃げ口上をとりあえず用意してはみたもの…

「いえ、あのような高位階の魔法を使える方が、なんでもない方のはずがありません、それにずっと私たちを気にかけてくれるその高潔な精神！きつと素晴らしいに決まっています！」

（えええくく？高位階？まあ、第8位階までは使えるから、そうと言えなくもないか？ …ってそうか、ワーカーのみんなが第3位階までが普通の基準って言ってたっけ！）

「いやいや、最近までずっと引きこもって魔法のことばかりにかかりきりだったから、世間の常識も知らないただの世捨て人だよ？ お金だつてあんまりないし…」

なんとか、自分を「そんなすごい人なんかじゃないよ」という方向にしたかったのだが…

「お金の方なら問題ありません！私達があります！すべてはお任せください。」

「え？ どういうこと？」と意味が分からない、この子達はさつきままで、心無い主人にこき使われていたはずだ、身なりからして、そんなお金を持つてるようには見えないのだが…と思っっていると。

「さつきのどさくさで、あいつの持ち物から当面の資金が入った革袋は回収してあります！」と…手にはジャラ！つという音をさせる中身たっぷりの革袋…。

「あああ…あの、あなた達が私の剣であいつの首を突き刺した時ね…」

「「ハイ！」と…まるで、周囲にお花でも咲き誇るような笑顔で屈託のない表情を向けてくれた。

(心底、嫌われてたんだな…アイツ…ま、自業自得、身から出た錆…だな)

「それにあいつは私達の取り分も全部一人占めにしていたので、隠し場所もわかってます！」

「イヤ、そこまではさすがに…あの人の全財産まで没収とか…泥棒じゃないんだからさ…」

と、なんとか思いとどまらせようとしたが…

「私達のことを盗み出してくれたたんじゃなかったんですか？」

(やばい、この流れ…このままだとオレ「どろぼうさん？」とか親しみを込めて呼ばれそうな気がして、どこかで見たそんなシーンを思い浮かべてしまった。)

「ああ、イヤ…たしかにあの時はそういう言い方をしたけどさ、モノの例え。っていうやつでええ…」

と、後ろの方に後ずさっている…

「それに私に名前まで付けてくださったのに、なんのご恩返しもさせたくないなんて…ドレイの道に反します！」

(ええ…？ さつきまでドレイだったことに絶望してたんじゃないの？ いきなり受け入れちゃってどうしたん？)

「私は、もお貴女様のドレイです！ ヴェールさま専用のドレイとして生まれ変わったのです、ディーネとして、生涯、付き添わせてくださいー！」

「そうです、ずるいですが、どうせ、お捨てになるなら、私達にもなにかいい名前をお付けくださいー！」

後ずさってひらいていた距離を、まだ名前を付けていない2人から

「最後のわがままです」とばかりに一気に詰められてしまった。

「わかったよ、1人だけに名前を付けてあげて、ハイさよならじゃく確かに無責任だね、それじゃく…どうしようかなあ…」

「まずはキミのことはもう決まってるんだよ、ずっと思いついてたけど言い出すタイミングがなかなかなくてね」

すう…と指先を向けて、ブラウンの髪をしたショートヘアのエルフ、レンジャーもちの多少魔法も使えるらしい子にそう告げると「パア〜」っとした花やいだ笑顔がこぼれ出る。

「なんですか？ どんな名前ですか?？」

「そうだね、気に入らなかつたら、別のを考えるけど…『セピア』なんて名前はどうか?？」

「ハイ！ セピアですね！ ステキです！ 気に入りました、これからはセピアとお呼びください。」

んん??と一瞬、言い回しにすごい違和感を覚えたが、それを追求しようとするより前に、もう一人のエルフが、間に割り込む形で、身を乗り出してきた。

「私は？ 私にはどんな名前を付けてくださいますか?？」

会話の隙間を空けさせず、食い気味に顔を近づけてくる…  
(ちかい！ 近いから！)

「キミがなかなか難しくってね、まだ実は悩んでる最中なんだよ…で

きれば、その光を受けて煌めくような金の髪をイメージした名前を付けてあげたいんだよねえ〜」

しばらく考え込んでしまうと、それには文句はないのか、こっちがなにか思いつくのをず〜と待っててくれている。

(実はそこまで、ひどく生活圏を犯すほど尽くしまくり〜とかじゃないのかもな…)

とか思いながら… ええ〜つと、髪が「金」だからゴールド？ ゴールデン？…だめだ、どの文字を入れ替えてもアルファベットをアナグラムにしても女性っぽい名前にならない…

と悩んでいると、先日、ワーカークリームに居た少女に渡したクリスタルを思い出す。

(そうだ！ そっち系の名前もたくさんあったじゃないか！) と思考をそっちにシフトさせ、ピンと来たものが一つ、閃いた)

「いいのが浮かんだぞ？ キミの名前…キミは『ルチル』だ！」

「ルチル？…でございますか？」

(あれ？なんか反応が薄いぞ？)

「ごめん、なにか気に入らなかった？ 他のを考えようか？」

と他のを考え始めようとする…

「あ、違うんです。そうではなくって、どんな意味が込められているのかと…」

と、戸惑い、不安を口にする、最後になった1人がそう心中を告げてくれた。

「ああ、そうだね、聞いたことないんなら、どんな意味なのか、そこは悩むよね」

と納得して、説明し始める。

「キミ達はクリスタルって呼ばれる水晶のことは知ってるかい？」

と聞くと、それには反応があった、すごく明るい表情になった。

(うん、これなら、多分気に入ってくれそうだな)

ひとまず安心して説明を再開させる。

「その水晶の仲間で、「金紅石」っていうのがあってね？ 水晶の中にキミのような金の髪にも見える針が内包されている珍しいモノなんだよ、それをゴールドルチルっていうんだ。」

そう言うのと「それで私の名前が『ルチル』ということなのですね？」

(かなり気に入ってくれたようだ、よかったよかった…これで、名前もできたし、彼女たちも自分たちの暮らしができるようになれば、助け





(ああ〜：やっぱり、そういう流れになるのねえ〜：当たってほしくなかつたあ〜：)

と心で頭を抱えるも…実は、この異世界での奴隷制度では、そこまでの強制権はない。

「名づければ問答無用でモノにできる」なんて決まりがあるなら、通りすがりに勝手に名前を付けられたら、所有権が見ず知らずの者に移ってしまう。

そんなことがあつたら、奴隷商人など儲けがなくなつて、お手上げだ：誰もそんな商売やりたがらなくなつてしまふだろう。

そもそも、そんなことが世の中で成立するなら、誰も奴隷を買おうなど思わず、平気で行きずりで、見かけた奴隷に名前を与えてしまふ。

ではなぜ彼女たちは、そんなことを言ったのか：それは彼女たち3人が自ら選んで「そうになりたい」と望んでいた結果、苦肉の策として、「名前を付けてもらえば所有物」という名目でゴリ押ししようという案が浮かんではいたのだが、ちよつと世間に詳しい人間ならそれはウソだとバレてしまふ：という危険を冒したくはなかつたからだ

そんな計算高い計画を企む女たち、と見限られてはそれが叶わなくなつてしまふ。

そんな中、彼女らに光が差し込まれた：目の前の人物からの「ずっと引きこもっていて、世間の常識もよく知らない」という言葉、それが引き金になつて、この流れとなつてしまつたのである。

「いや、気持ち嬉しいんだけど…さ、どうしてもキミらの気持ちを素直に受け入れられない事情があるんだよ」

「え？なんででしょうか？ 私達になにか不手際でも？ それともお気に召していただけないと？ 手垢のついた奴隷はお好みではありませんか？」

と、この世の終わりのような表情をされてしまう…

（あああゝ！！ もお、そんな目をされたら…こんな姿で、自分を偽っているのが恥ずかしくなるじゃないか！ 自分は人間じゃない、そう言えればどんなに楽だか…）

沈黙を守り、何も言えなくなってしまったヴェールを見て、何を感じ取ったのか、3人は頭をさげる。

「私達のような地の底まで落ちてしまった者に今までの恩情、ありがとうございました。困らせるつもりはなかったのです。私たちのことはどうか忘れてください。」

と、3人でどこかに行こうとしている。

（分かってくれたのかな？）

少し安心しかけたが、名残惜しげに一瞬振り向いた1人の目が「前の状態」に戻ってしまっている。

あの…自分が「助きたい」と…自分と同じだと…放っておけないと思ってしまったあのどんよりの瞳だ…きつとこのまま別れたらあの3人は絶望から全てをあきらめてしまうかもしれない。

自分は…見捨てるのか？

一度助けると決めた相手を…「これで自由になれただろう」って自分の勝手な認識で、すぐに外に放り出すのか…？

それは、がけつぷちでなんとか指だけで自分の身体を支えてる状態の人がいたとして、「今、助ける！」って大見栄切ったのに「やつぱり重くて引き上げるのは無理」

って、掴んだ手を離すような行動だ…それなら最初から見なかったことにしてかわらなかつた方が、持ち上げて落とすような行いじゃないだけ、数段マシじゃないか…

それだつたら…どうせ彼女たちの手を離さなければならぬのなら…自分が嫌われた方がいい！

その方が彼女たちも立ち直りが早いだろう。新しい主人を見つければいいだけだ。

「ちよつと待つて!!」

そう呼び止めると、3人の歩みが止まる、どこまでも緩慢な動きで、幽鬼のようにゆらりとこちらに振り向いた表情からは、すっかりさつきまでの華やいだ表情が消え失せていた。

「キミ達の気持ちはうれしいよ、できれば自分も、一緒に行動出来たら…きつと楽しい時間になると思う…」

そう告げても、彼女たちの表情は戻らない。「どうせ見捨てるんでしょ？」とでも言いたげに目で訴えていた。

「キミ達にこれを打ち明けるべきではないと思っていたんだ、ボクは本当は人間に成りすまして、人として、人の中で生きてみたかったんだ…もちろん、ボクは見た目通りの「女」じゃないばかりか…、人類ですらないんだよ」

そこまで言うと、少し彼女たちに表情がうつすらとだが戻ったように見えた。

まだ能面のようなだが、こちらが言おうとしている真意を測りかねているようだ。

こちらの言葉を待つてくれている雰囲気は伝わってくる。

「ボクは「異形種」と呼ばれる、人外の存在なんだ…人の姿に化けることができる、成りすますことが…ね。」

「さっきのアイツも、実は埋めたとか、燃やしたとか、獣に食わせたとか…そういうんじゃないか…」

「ボク自身がアイツを食ったんだ」

その一言を告げると、エルフたち3人の表情がさっと変わる、どういふ感情なんだろうか…

喜びではないだろう、かと言って恐怖でもない、人ではなく、人を食料にしてしまったという事実を聞かされたのだ…ひよつとして自分達も？という思いが頭をかすめてるのかもしれない。

怖いという思いはあるのだろうが、それでも逃げ出そうとはしていない。

それとも逃げたとしても転移で追いつめられるとでも思っているのだろうか？

そこから先をどう言おうかと悩んでいると…

「それで…ヴェールさまは、私たちも食料として、見ておいでなのですか？」と、抑揚のない言葉を投げかけられる。

頭を振り、その言葉を否定する仕草をみせる。

さすがにそこまで人間をやめてはいない、と思いたい。

「ボクはね？まだ人としての心は失ってはいないつもりだ…悪魔でもなんでもない…人として過ごしたいだけ…でもボクには人としての姿はないんだ…」

「だから真似る…虫のように「擬態」をして、他の何かに自分を偽って見せることができる。」

「それは食べていなくても、一度見た相手なら、誰でも…とは言いきりいかな？ 印象の薄い相手だと、やっぱりぼんやりした感じになるんだ。」

「相手のことを知れば知るほど、その相手に近づいて真似することができるみたいだね、そんな感じだよ。」

そこまで言うのとエルフの1人がこう聞いてきた。

「ヴェールさまが「食したい」と思うのはどんな人ですか？」

「ボクはまだ「食べ物」として人間を見ているわけじゃない、どうしても譲れないものがどうやらボクにはあるようだ…それから大きく外れて…『生きる価値がない』とボクが思っただけで食い殺してやりたい、そう思った人間だけかな？」

「ボクが誰かを裁けるほど、えらい存在って訳じゃないけどね…」

と、悲しいとも…寂しいとも自分でもわからない感情が、しまい込んでいた奥深くからにじみ出てくる。

「譲れないものってなんですか？」

「そう…だね…それは仲間…かな？　ボクにも昔、大事な仲間が居てね、ボク以外に40人の…大切な仲間がいたんだ…」

「人間こそが、自分だけが…そういう思想のもとに、ボくらみたいな異形の者を狩り殺していたやつらがいたんだ、そいつらに対抗するように、抵抗できるように…そんなやつらに誰かが犠牲にならないように…そういう想いで集まった41人だった…その内の1人にね？」【半魔人】って種族の女性がいたんだ。」

「その人はエルフを1人、自分の妹のように愛していてね（実際に妹だったんだけどね、説明が面倒だからそういうことでもいいや…）…とても大切にしていた。」

ボクらは異形の者同士で、お互いを護り合おう、そういうグループだったから、そのエルフの女の子を仲間を迎えることはできなかつた

…

だからかな？

キミたち3人があんな扱いを受けてるのを見てると…どうにも許せなくてね…」

いつの間にか、3人に聞かせるというより、自らの過去話になつて  
いることに気づき、かなり照れ臭くなり、むりやり話の転換を図る。

「だから、キミ達のことを食料だとは思ってない、アイツのことも食料  
としてじゃなく「許せない」って殺意の方が強かったかな？」

と半笑いの表情で言う。

「それなら私達と同じですね」

少し、共感を向けてくれたようだ。

「それにわざわざ人の種を食料にしなくても、人が食べる物と同じも  
のも食べられるし、サラダも食べられるんだよ？」

そう言うのと、少し目を見開かれた後、3人は思いつきり笑い出して  
いた。

きつと、まだどんな姿かはわからないだろうが、人間ではない何者  
かが微笑ましく

サラダをムシヤムシヤ食べている様子を思い浮かべたのだろう…。

ひとしきり笑った後、表情は普通のものに戻り、こちらに体を向け  
てくれた、少しは理解してくれただろうか、人食いの化け物じゃな  
い。って程度には。



「それではヴェールさまというのは偽名ですか？」

「いや？　そうでもないよ？　ボクの名前は本当は「ベルリバー」っていうんだ、でもこっちの世界では普通でも二つに分割された名前が一般的みたいだから…」

「だから、リバーⅡ　ヴェールというお名前なのですね？」

「そういうこと」

「それなら私たちが気に入らなかったり、邪魔だと思ったわけでもないのですね？」

「まあ、そうだね」

そう言ったところで、ハ！　っとしてしまった、今は言っちゃダメな発言だったのでは？　と思うも、言ってしまった…もう遅い。

こういうのなんだったっけ？　「吐いたツバは飲めない」…だったっけ？

違うような…まあいいか。

「人のように過ごしたいという思いがあり、人の姿になれる、それは人を食べなくても人の姿になれば、人を食料とせず、人と同じものを食べられる…それは普通の生活ができるということじゃありませんか？」

なかなか理知的な考え方をするものだ…そういう冷静さと知性、頭の回転の良さはルチルの得意とするところなのだろうか…？

「ん〜、そうかな〜？　そうだろうか？」

「そうですよ、ちなみに本当のお姿はどんな感じなんですか？」

「全身に口があつて、口中に牙がぎっしり生えてるよ？　かろうじて、手もあつて足もあつて人としての輪郭はあるんだけど…あるのは口だけっていう姿ですつごく怖いよ？」

「目も耳もないんですか？」

「無くはないと思うよ？　自分で水鏡に映して見た感じ、目も耳もどこにあるのかわからなかったけど、一応意識を向けた先の景色や人の感じはちゃんと見えてるし…自分がどういう顔で、どんな姿かっているのはちゃんと映した時、見えていたからね。…それに音も声も拾えてるから、機能は働いてるんだと思う。」

「それではアイツの姿になつたまま、ワーカーの仕事もできたりできそうですね」

とさりげなくとんでもないことを言い出すディーネ

「さすがにそれは…アイツとボクじやく性格もなにも全く違わない？

バレやしないかい？」

「それは大丈夫です。」と笑顔のセピア。

「一日だけなりきって生活すればいいだけですよ？　いつも使う宿屋に行つて、隠し場所から全財産を回収すればいいのですから、それにあればもともと私達の取り分でもありますし、それをヴェールさまが管理していただければいいだけの話です。」…とルチルもそれに追従する。

「…つて、あれ？　いつのまにか、一緒に行動することに話が逸れてきて

ない?」

「帝国で人として生活するならワーカーとして生きれば、それなりに生活には困りませんか?」

と3人が保証してくれる。

「それに私たちも、人間の所有物って立場が崩れると、その先、どんな扱いが待ってるかわからなくて不安なので…だからどちらにとつても損はないですよ?」

「そっか、それなら、しばらくはそうしようかな?」

(それにしても、なんだかんだで、流されやすいよな、嫌われようとしてたはずなのに、悪役になりきれなかったとか…とんだ道化だ。)

「あ…そうだ、1つ聞きたいんだけど?」

「ハイ! なんでしょう!」

「ワーカーで生きてくなら、オレ、エルヤーって名乗った方がいいのかな?」

という言葉には3人とも苦虫を噛みつぶしたような顔になり…

「それは一日だけ…でお願いしてもいいでしょうか?」

と頭を下げられてしまった。

## 第11話 初めての武技発動

前のエピソード——第14話 エルフたちとの身の上話

第15話 初めての武技発動！

新しく、エルヤー・ウズルスの外見になって、帝都「アーウィンター」までやってきた

「見た目だけ『天武』」の一行。

芝居で顔が無表情にするように努めながら一緒に歩いてくれているエルフ3人娘の協力により、やっと宿にたどり着いていた。

先頭に立って歩くのは、ヴェール改め「エルヤー・ウズルス」（今日限定）

(…それにしても驚いたよ…エルヤーって、収入を全部一人占めにするだけの資金力があってエルフも3人そろえる財力があるのに、宿の代金ずくつと滞納させてたなんて…おかげで、このまま姿を消したら宿の人の迷惑になっちゃうじゃないか…そう思ったら、結局宿に戻らなきゃならなくなっちゃったけど…ホントに貯金を全部もってっちゃうのかな?)

どこかで「他人の居ぬ間に空き巣仕事」みたいな気分になって、そこらへんは微妙に小市民の「偽エルヤー」その足取りは重く、それでも宿まで歩みを進めている…

(あいつってどんなセリフ回してたっけか?)

と、道中、ずっとイメージトレーニングをしていた。

「…到着しました…エルヤーさま…」

(おお…すっかり芝居モードに入ってるぞ？ 別人みたいだよセピア…)

「分かっていますよ、どうやらやっと休めるということですね、私は休

みますが、あなた達は怠けず、しっかりと動くんですよ?」  
(こんな感じだったかな? 合ってるよな?)

「ハ、ハイ! エルヤーさま…」

そう言つて、3人一緒に90度まで腰を折り曲げている。

(う…さすがに、かしづいていた年季が違うな…慣れてないとこんな  
の圧倒させられるなあ)

「い、いつまでその姿勢でいるつもりですか! ぐずぐずしてないで  
入りますよ!」

(なんか、エルヤーっぽくない気がしてきたぞ? もつと外道になり  
きるには…どうすればいいんだ?)

一応、帝都に来るまでの道すがら、エルフ3人娘と会話をし、モモ  
ンガさん風に言えば「魔王ロール」ならぬ「エルヤーロール」をさせ  
られていた。

さりとて、のんびりやつてるわけにもいかず「今日だけ…今日を乗  
り切れば!」と思い、なんとかこなそうと必死になっている。

キィ…とウエスタン風と言えいいのか、中央から開く木のドア  
を押し開けて、中に歩みを進めると、中に居た人たちから注目を浴び  
る…

(うわあ…なんか、睨まれてないか? そんな恨まれてる? オレ…  
じゃなくて、疎まれてるのはエルヤーか…)

隠そうともしない負の感情に無関心を装い、店主のところまで来る  
と店主に告げる。

「今日も部屋を用意してもらいますよ?いつもの部屋です、かまいま  
せんね?」

(このセリフはいつも同じだつてみんな言つてたしな、お墨付きだ!)

「え…エルヤーさん、あの…そろそろ、お代の方を…」

「え？なんですか？聞こえませんか？ この天武のエルヤーに金を出せと？ まるで私が宿賃程度を踏み倒してるみたいなきい草ですね？」  
（ホントにこんなこと毎回やってたのかこいつ…そりゃく睨まれるよなあ…）

「バン!!」と手の平をテーブルに叩きつけ、店主を威嚇すると背中を向けて「いつもの部屋」に向かっていく。

その勢いに押されたのか、「次はちゃんと払ってくださいよ?」

と背中越しに言つてグラスを拭いたり、テーブルを拭こうとして…店主の手が止まる。

「話を付けましょう、お昼ちようどになったら、裏口まで来て、待つてなさい エルヤー」

エルフたちの協力を得て、帝国用の文字を教えてもらつて書いたメモだ。

そう書かれたメモがひっそりとテーブルに置かれていた…さつきテーブルを叩いた時か!

そう思い、他に見られていないのを確認してエプロンのポケットにすぐに隠す。

「そうか…とうとう、おれの人生も終わりか…宿賃のために…か、短い人生だった…」

と「いつものエルヤー」を思い起こし、人生最後の仕事だと…店の客に誠心誠意、笑顔で努めているその姿に「どうかしちまったのか？ 親父さん？」とみんなに心配されるのであった。

宿で用意されているいつもの部屋に入り、いつものようにエルフ3

人娘が恭しくドアを閉める。

…バタン、と音が鳴り…

(この子達の話によると、いつもエルヤーはこの部屋の両側の部屋もエルフ名義で貸し切って、結局真ん中の部屋で全員寝泊まりしてみたいだよな…なんてムダな事を…)

…と、なんで両隣を空き部屋にしてるかの真意がわからない「偽エルヤー」はボスつとベッドに仰向けになって、天井を見上げる体勢になる。

「はあああ〜…疲れたああ〜」

と、ベッドに背中から倒れるようにして心労(疲労無効の指輪をしてるため疲れる筈はないのだが)回復させようと、大の字になっていた。

「お疲れさまでした、エルヤーさま♡」

そう言つて腕枕の状態になるように隣で横になるルチル。

「ありがとう…あんな感じでよかったのかな? どこまで再現できたか、よくわからないんだよね」

「大丈夫ですよ、少し睨みを利かす凄みは足りませんが、いつもと同じようにされるより、弱めにした方が、あのメモの効果をより強めると思いますよ?」

ベッドで大の字になっている腰のすぐ横に、静かに腰を下ろしてフォローしてくれるディーネ。

「そう言つてくれると助かるけどさ、一気にどつと疲れたよ、自分と正反対のお芝居は…さ。」

「でもなかなか様になってましたよ?」と、隠し場所らしきところを探り当て、いくつもある革袋をどんどん背負い袋の中に詰め込んでいる

セピア。

(さすがレンジャー持ち、エルフで耳もいいのが功を奏してるのか、そこに当たりを付けていたようだな)

「やめてよ、なんか褒められてる気がしないんだからソレ」

疲れた口調で言うと、みんな口をそろえて、こう言ってくれた。

「ヴェールさまは、今のままで、そのままでもいいんですよ」

少々照れくささを感じ、話題を切り替えることにする。

「それじゃ、お昼になって宿代も全部払ったら、色々見まわって、服でも買いに行こうか?」

思い付きでそう言うと、何とも言えない表情でみんなが振り返る。

「え? なになに? なんか変なこと言ったかな?」

「そんなことはないんですけど: エルヤーさまの顔でそう言われると、すごい意外で: ねえ?」

そう言っただけの2人にも同意を求めるセピア

「そうですね、私たちは嬉しいですけど、今日はよした方がいいと思いますよ?」

「え?なんで?」と訳が分からないで理由を尋ねると

「今日は一日エルヤーさまなんですもの、そんなことをしたら、帝都中にウワサが広まりますよ?」

「ああ: 天変地異の前触れか? ドラゴンでも落ちてきそうだからとか騒ぎになりそう」と同意するルチル。

「えええ?そんなこともできないのお? なんか堅苦しいなく、こいつ」

自分のほっぺを引っ張ってねじってみる。

「ま、今日は一日、ゆっくりしましょうよ、私たちもこんなに気分がいい日はここ数十年の内で、初めてのことでですよ?」



全ての革袋を回収し、重そうに背中に背負っているセピアが何となく気の毒になって声をかける。

「セピア、重いだろう？ こっちに貸してごらん？ 仕舞っておいてあげるよ」

その言葉を聞いて不思議に思ったのか、こう返してきた。

「しまう？どこにですか？ けっこう重量ありますよ？」

…ドン！ とベッドに背負い袋を置いた。

（…たしかにこれはすごいそうだな、でもこれくらいなら、問題ないだろう）

「僕だけの秘密の隠し場所があるのさ。」

受け取った背負い袋を両手で中空に伸ばすと、ぽっかりと闇のような靄が見え、そこに手首まで消えていく。

「ハイ、収納完了…と」

そう一言呟き、みんなを笑顔で見ると…3人とも硬直している。

「いま…って、なにをしたんですか？」

目をむくとはこのことか、と思うほどに信じられない物でも見たような表情だ。

「あれ？会ってから今まで見せたことなかったっけ？ 自分のアイテムボックスっていう…アイテム専用の別空間があるのさ」

「まあ…重量制限はあるけどね、全部で5000kgとちよつとは入るんじゃないかな？ ま、でも一度で500kgを超える重量のものまでに入らないだけだね…。あとどれくらい余裕あるんだろ？」

そう何気なく言っていると…

「なんかもお、驚きすぎて色々と麻痺してきそうです」とディーネ。

「でも、それなら色んな服が入りそうですね。」と1人が言うのみん

な目が輝いていた。

(女の子だからな、そりゃ、服はいっぱい欲しいだろ、落ち着いたらどこかに連れて行ってあげよう。)

そう思っている…「コンコン」 ドアがノックされた。

(レンジャー持ちのセピアが扉に近づき)

「ハイ…なんでしょう」と目だけで外が見えるよう細く扉を開く。

「エルヤーさまにお客様です、お手紙を預かっておりますので、こちらをどうぞ…」

と扉の隙間から手紙をそっと差し出してきた。

セピアが受け取ると「それではこれで…」と手紙を差し出した者は来た道に戻っていく。

☆☆☆

お昼になったので、部屋を出て、宿屋の裏口で震えながら待っている店主に声をかけると、すっかり血の気が引いている店主が気の毒になってきた…

「さて…先程の話ですがね…」

「あ…」と消え入りそうな声を出す店主が「イヤ、なんならまた後日でも…」と両手を前に出し手の平をこちらに向けてふるふると振っている。

(そんなに怯えなくってもいいのに…今までどれだけ脅して回ったんだコイツ)

その店主の手に、ずっしりとした革袋を乗せてやる。

「え？」

「あんなことくらいで身の危険を感じているようじゃ、ワーカーの宿屋なんか営めませんよ？今までの分も入ってますから…もし余計に入ってたら迷惑をかけたお詫びだとも思ってください。」

「あ、ああ…すまんね…」

（すっかり呆然としているな、仕方ないな…用意した言い訳を用意するか）

「さつき誰かから手紙が来ましてね、やたら報酬のいい仕事があるという話だったんですよ、だから今、私は機嫌がいいのです。私がそういう気分の時に受け取った方がいいですよ」

（ちゃんとみんなから聞いて、借りた部屋数と一晩の代金、そして今までどれくらい泊まったかを聞いて計算したからな、少しは余りが残るようにしてあるから大丈夫だと思うけどね）

「というわけで、私はこれから依頼主の元まで行きますので、これで失礼」

…と言って宿を後にした。

エルヤーは1人で外に出てきていた。

エルフ3人娘には部屋で留守番をしてもらう。という名目で、部屋でとある行動をしてもらうように言って時間経過を待ってもらっている。

その行動とは、彼女たちに渡してきた護符…「護符」と呼ばれるものだ。

その名も「治癒アミュレット・オブ・ヒーリングの護符」

効果は、大治癒が使えるというアイテムだ…だがあまり使い勝手が良くはなく、自分がユグドラシルを引退する日を迎えるまで、誰にも引き取られることはなかった、誰にも興味を示されることなく

くつと死蔵されていたアイテムであるが故、今も手元にあっただけなのだ。

〈大治癒〉を使えるのに、なぜ使い勝手が悪かったかと言うと、再詠唱の冷却時間の問題が大きかったからだ。

この護符自体を使えば魔力を消費することなく効果は発動できる。

しかし一度使用すると次に〈大治癒〉が使えるようになるまでは2時間の冷却期間を置かなければ、ただの装飾品以上のものとは言えなくなってしまうからだ。

それなら、まだ持つているだけで時間経過に応じた微量回復効果のある方が使い勝手がいいと思われたせいもある。

それでなくても、超位魔法でもそんなに待たないだろ！というツツコミは多く聞いてきた。

しかし、それでもこの世界では〈大治癒〉なんて魔法を使える人間の方がまず居らず、もし使えれば、きつとエルフ3人娘の、途中で切断された耳も元に戻るだろう。

それを告げて、護符を与えた時、涙を流されながら感謝をされてしまった。

…それでも、3人が回復して耳が元に戻るまでは4時間はかかる、最初の1回はすでに最初から使えるので、誰が4時間後まで順番待ちになるかの差でしかない分、恨みつこなしのクジ引きで順番を決めていた。

そこで部屋を出て、宿も出てきたから、どんな順番になったのかはわからないが…、店主にお金も今日の分まで支払ってあるから、今日一日は問題ないだろう。

指定された高級宿にやってきた…しかしここはただの宿ではない。

支払うお金次第でどんなサービスの要求もできる、何を隠そう貴族も時には顔を出すとされる「黄金色の菓子亭」だ。

鮮血帝の粛正により、ここを毎日のように使っていた貴族はすでに生きてはいないので、ここを利用する貴族は少なくなつたが、それでも「そつちのサービス」を要求しようと思えば1回のサービスで支払

う額は帝都の民でも1年貯めようが2年貯めようが払えないくらいの金額なのだ。

必然的に数えるくらいしか「そういう注文」がなく…それでもまがりなりにも高級宿の看板を背負っている分、普通の飲食代だけでも相対に高い。通常の食事やサービスの合間にちよぼちよぼでもそのオーダーがあれば、その売上のみで営業が成り立ってしまう。

帝都の裏話では有名なこの宿だが、そんな話を露ほども知らない偽エルヤーからすれば、「ただ指定されたから来た」それ以上でもそれ以下でもないのである。

中に入ると、おなじみの酒場風景なのは宿の典型だが、ここで違うのは壁際に沿うように置かれたそれぞれのテーブルが仕切りで区切られていて、1テーブル1個室という仕様になっている。

しかも、どこか店内自体が薄暗い。

壁際に設置されたテーブルは全て仕切りで囲うように個室にしてあるため、中央のスペースには普通にテーブルがいくつも置かれ、普通に歓談をしたり、食事に興じてる羽振りのよさそうな者たちがいる。

エルヤーはカウンターにまで行き、手紙に書かれていた差出人の名前を口にする。そうすると、個室に刻まれた数字の部屋に入るように指示された。

いまだに文字とか数字はどんな規則性があつて書かれてるのか全くわからない偽エルヤーだが、リードランゲージ「言語読解」を使えば見分けはつくさ、ワイデンマジック「魔法効果範囲拡大」と共に小声で発動させる。

並ぶ個室の部屋番号をずら〜と流して見ていき、目的の部屋番号がわかると、その扉をノック…そして「どうぞ」という返事を待って、個室内に入った。

個室の中に入ると先に個室内で待っていた人物がテーブルにつくように勧めてくれる。

（相手の顔が見えないな…ただでさえ薄暗いのにフードまでかぶって

るから尚、顔がわからない、そんな怪しい仕事なんだろうか)

声を落とすように話す依頼人に、どこか怪しいものを感じながら依頼内容を聞いていると、ひっかかる単語がいくつか出てきた。

「新しく見つかった遺跡」そして「墳墓のような作り」というキーワードだ、まさか…と思うも、きつと違うだろう…そう思いなおす。

(そう…あれがこの世界に来ているなんて、そんな都合のいいこと、考える方がどうかしてる)

「…どうかされましたか？」

「いえ、少し考え事をしていましたね、そんな巨大なものが今になって新しく発見されるとは…妙だなと。」

「そうですね、私の主人もそう考えておりました、中がどうなっているのか、そしてなにがあるのか、という調査をお願いしたいと…そういうことなのです。」

「しかし、そんな巨大な…墳墓？でしたか？ そのような場所、私のチームだけでは…いささか時間もかかるかと思うのですが？」

そう問いかけると目の前の男はテーブルの上で手を組みながら、こう答える。

「大丈夫です、他の有名なワーカーの方々にも依頼しておりますし、王国で最近大きな…英雄級の手柄を立てた、アダマンタイト級冒険者の方を1チーム拠点の防衛に依頼しています。」

(なんか、聞いているだけで、いくら依頼料を払ってるんだ？ って感じだな…王国の方は事情も何も、全然知らないんだけど、アダマンタイトって確か、最高位の…じゃなかったか？ それってどれだけ強いんだろうか？)

自分の思考に陥っていると、再び声が自分に向けられる。

「それで、天武のエルヤーさまとされましたは、この依頼、受けてもらえるでしょうか？」

(なんかイヤな予感がするんだよな、でも「他の有名なワーカーの方々にも」って言ってたし、そうなるにあの『フォーサイト』のみんなも来るんだろうか？)

(来るなら来るで、その墳墓が予感通り「危ない場所」なら陰から助ける役をしてもいいかもな、来なかったら来なかったでどんな流れになるかでその場で決めよう)

「その前に、報酬はどうなるんです？ どこまでの調査ができればいいから、っていう基準ですか？」

(ワーカーも一応仕事なんだし、収入のことくらいは気にしないとな)  
「それに関しては前金で200、さらに成功報酬に関しては…どこまでが「成功」とするかを考えにもよりますが、最高でも150くらいが適切かと…もちろん、その墳墓で見つかったものは、発見した人のもの、ということが成功報酬の一部に含まれる…という事にさせていただければ…」

…となおさら怪しきポンプンの雰囲気濃厚になってきたと感じた偽エルヤーはとりあえずは首を縦に振る。

「まあ、いいでしょう…気になる点が無くは無いですが、その辺りは現場で調査する中で調べて、解明していくとしましょう。」

(はじめての遺跡探索…か、どんな冒険になるか…、どんなものが待っているのか…楽しみだなあ)

「それでは、これが拠点となる場所の地図に、依頼したという印の証明プレートです、これを当日、忘れないようにしてください。」

そう言つて、手渡してくる。

(…多分、前金というのは、この「証明プレート」と引き換えに、支払ってくれるのだろうか…)

「それでは、この「証明プレート」と引き換えにして、前金を…ということですね」

(これで前金もらえなかったらバカみたいだもんなあ、念の為に確認は必要だし、聞くだけ聞いておかないとな)

「はい、そういうことになります、もし、このプレートを持ってこられなかった場合は、拠点を予定している場所にお通しできませんし、前金も払えませんので…」

(良かった、やっぱり確認しておくことは大事だよな、うん、聞いてよかったよ)

「こがねいろ黄金色の菓子亭」から出て、プレートを無くさない内に、懐に入れるふりをして、アイテムボックスに保管しておく。

「とりあえず、墳墓の件は置いて、天武の代わりにチーム名、考えないとな…、それから耳の方は幻影魔法で切れたままに見せかけ、装備は…一応整えた方がいいかもなく、手持ちでいいのあったか？」

（幻影魔法で見た目を天武で通して、プレートを渡し、前金Get！つて感じで通してもらって、受付を通ってから、頃合いを見て、その遺跡内で幻影魔法を解除して新しいチームとして行動すればいいよな）

なんて、適当なことを考えている偽エルヤーは、それが（今日限定）という約束を破ることになる。ということに気づかなかったせいで、後でこっぴどくエルフ3人娘に怒られるのであったが、それはまだまだ先の話である。

☆☆☆

敷地から出て、通りに足を踏み出すと足元で、ドン！と軽く何かがぶつかってきた。

…と思つたら、ぶつかってきた者はポスンという音でも出しそうな風に尻もちをついていた。

「いったあゝゝゝい、ふわあゝゝん!!」と大きな声で泣き出した女の子。

「どうしたのおゝ？ウレイゝ？」と全く同じ顔をした女の子が尻もちをついた女の子を助け起こしている。

片方が薄いブルーっぽい服、片方はピンクの服を着ている、これで見分けるしかないか…

「あゝ、ごめんね？ ボクが急に道に出たせいでその子が急に止ま



れなかつたみたいだ…」

「だいじょうぶ？ ウレイリカ？」

「…ぐす…うん、ありがとう、だいじょうぶ、クーデリカ…」

「ごめんね？ 痛かっただろ？ ケガはないかい？」

すっかり偽エルヤーの演技を忘れ、素の自分で応対してしまつてる自分。

まあいいだろう、どうせ知り合いなんて見てないだろうし…と軽く考えていると…

（なんかどこかで見た顔だなあ…：なんだろう？ 知つてるような、知らないような…でもどこか気になるんだよな…）

目の前にいる2人の女の子が「こつちこそごめんなさい、ぶつかったわたしがいけなかつたんです。」「そおよお？ きゆうに走りだすんだもん」「でもね？ だつてね？ だつてね？」と、仕方ない事情があつたようだ。

「どうかしたのかい？ 何か気になるものでも見たのかな？」

と問いかけようと腰をかがめて目線を合わせようとした瞬間、横から割り込むように誰かが間に入つてきた。

「ああ、こんなところに居たんですか、クーデリカお嬢さま、ウレイリカお嬢さま、探しましたよ？ どちらに行かれるつもりですか？」

どこからどう見ても、真つ当な仕事についている身なりではないのが一目で見取れる…もっと正確にいうと、身なりは普通なのだが、動き方というか、接し方がいわゆる「危ない人」を連想させる。

肩で風を切るような歩き方をむりやり普通な感じに見せようとしてるような感じと言えればわかりやすいだろうか、そんなのが2人だ…きつと女の子2人は怖いだろう。

元々、リアルでは独身、彼女なし、DTな自分が家庭もないのになぜか子供は大好きだった、もちろん変な意味で…ではない！

そんな自分のまだ残っている人間性が微かに警鐘をならしている、こいつは身内なんかではない、親とか言う雰囲気でもない…このままではいけない！と自分を突き動かしている。

一応心配してその2人の女の子を見るとその顔に見覚えでもある

のか：というより逆に見覚えがないのに自分らの名前を知っているから怖いのか：、お互いにしがみつくかのようにかばい合っている：というより震えているのかもしれない。

す：と静かにその女の子2人の前に立ち、どこの誰とも知らない男との間に立つ。「すみませんね、今、この子達とは私が話をしていたのですよ：」

と自分でも訳の分からない感情が先立ち、偽エルヤーモードに入り、相手に凄んで見せる。

「ああくん？お前、なんだあ？ 関係ない奴はすつこんでろお！」とムネを小突いてくる。

（やっぱりだ、こいつら元の自分の世界で言う所のチンピラってやつだ：自分の居た世界ではせいぜいその日の食事を奪うか、囲んで脅して、表面上は譲ってもらおう風にするか：そうでなければ、金目のもの、現金とかを盗むくらいだったけど、こいつら、子供になにするつもりだったんだ？）

（まあ、本物のエルヤーならどうかかわからないが、一応はLV100だ、そんなことぐらいではグラつくはずはないんだよ）

「へえ？私にケンカでも売るつもりですか？ 現実に出費するのはキライなのですが、対価が「力づく」で支払ってもいいというのなら、いくらでも買わせてもらいますよ？」

「なんだよ、こっちは親の確認はとってるんだ！ 許しはもらってるんだよ！ 邪魔すんじゃねえよ!!」と目が血走っているチンピラの男、さて：どうしてやろうかと思っていると（そうだ、練習台になってもらおう！ 武技をこの身体になってから使ってないしな、感覚はつかんだ方がいいだろう。）

という名案を思い付く。

「あなた達のような輩に武器を抜くまでもありません、かかつてきなさい。」

（手首を立てて、相手に手の甲を見せると、上に伸ばしたままの指を自分の方に揺らして見せる：わかりやすく言うと「コイ：コイ！」である）

「なめるなよおっ!!」と2人してかかってくる男たちの左側をすり抜けるようにして〈縮地〉を使う、『前進』という行動により、幻で違う見た目にはしているが、装備している「恐怖公<sup>レッグ・ガード・オブ・コックローチ</sup> 眷属風・脚防具」の効果で、自前の速度の1.5倍増しの速度で横をすり抜け…、すれ違いざまに手刀を腹にそつと添えてやる程度で留めてやった。

「ぐぼおおっ…!」びちゃ、びちゃ…と口から吐しゃ物を出るに任せている…とりあえずは放っておこう、汚いから。

とすぐさまもう1人の方に意識を向けると自分につかみかかろうとしていたので〈縮地改〉を発動、一気にその男の横に回り込む…横や後ろへの移動は素のステータスの半分になる…だが、それでもその動きはおいきれなかつたらしい、動きを見失っているらしいチンピラの脇腹にも、そつと1発!

拳を軽く触れさせた程度くらいに思っていたが、思いつきり吹き飛んで、誰だかの家の壁に背中を強打して、意識を失っていた。

(あつぶねえ…最初、手刀で〈空斬〉でも使おうとしたんだけど、万が一、胴体が二つに別れたりしたら、誰が見ても人殺しだろ?さすがにそれはまずいからな、普通にしたんだけど…100LVだもんな、加減を間違えて腹を突き破らずに済んでよかったよ。)

ふう…と1つ息を吐き、軽く2人の女の子を見たら、さつきと同じ姿勢でいる、お互いにしがみつき合つて、震えてる感じ…。

ゆっくり近づいて腰を下ろすと、視線を合わせ声をかけた。「大丈夫だったかい? 困ってるなら力になるよ?」

すっかり偽エルヤーモードは解除されて、また素の自分に戻って微笑みかけていた。

☆☆☆

とりあえず、こんな幼い女の子を2人もどこかに連れ込んでたら、なんちやら保護法とかいうので裁かれそうなので、「心配ないからね?」と声をかけ、手をつなぎながら、家の場所へと歩き始めるとどう

やら足の進みが悪い。

足取りが重いというより帰りたくないようだ。

事情を聴くべく再び目線を合わせて帰りたくない事情でもあるのかと聞くと、さっきの男たちの言葉に思い当たる節があるという。

「たしか、親の許しはもらってる、って言ってたよね、どういう意味だったのかわかる？」

一応、そう問いかけた時には普通に道を歩きながらそうしてるので、時々通り過ぎる者たちの視線がチクチクと気にはなったが「この子達のため」という謎の使命感に燃えていた。

話を総合すると親が貴族だった時の生活を変えられず、無計画に借金ばかりして、返済できる当てもなく、ひたすら借り続けているという：

この子達の姉という存在は居るのだそうだが、働きに出て、お金を返しながら、ここ数年なんとか持ちこたえてるらしい。

しかし親自体は「娘が返してるから」と安心しきっており、湯水のように使い、借りて：また使うの繰り返しで、減るところか借金は増える一方だそうだ。

そこから先は言いたがらなかったが、そこまで来たら大体、先は読める、そりやく帰りたくは無かろう。

そういえば、と思い、聞き忘れてた事を問いかける「なんで外を歩いてたの？あの男達から逃げてきたとか？」と聞くと：

「うううん、ちがうよ？お父さまにね？外であそんできていいよ」って言われたの：と答える赤いドレスの女の子

「いつもは外は危ないからってあそばせてくれないのにねえ？」と青いドレスの女の子も答える。

そういうことか：さすがに目の前で娘がさらわれていくのは見ていられないから、ってことなのかもな：

となると：さてどうするか：悩む：あの人ならこんな時でもきつとこう言うだろう『誰かが困っていたら、助けるのは当たり前！』：とね。

だけどさく、頼るべきツテもないし、宿屋に帰って養う訳にもいかない…これってそんなことしたら思いつきり誘拐だよね？そうだよ  
ね？

ワーカーは全てが自己責任、ということとは自分のしたこと責任は  
全て自分が取らなければならぬ…そうだとこの手に勝手に首を  
つつこんで本当に自分はこの子らをうまく助けられるのだろうか…

悩んで、袋小路に迷い込んだように錯覚してしまう…しかし、なん  
とかしなければ…宿屋を出て、薄暗い酒場で依頼を聞いて…この子  
ちを助けて…だからそろそろ4時間になりそうだしな…。

しかたない、結論の先延ばしだが、あの手で行くか…女の子たちの  
目線になって、再び語り掛ける。

「実はお兄さんはね？魔法使いなんだ」と、そう告げると「お姉さまも  
そうなんだよ？」と教えてくれた。

「そうなんだね、それじゃ話が早い、これからお兄さんの魔法でみんな  
で姿を消す魔法を使おうと思うんだ」

(本当はスキルで、景色に溶け込むだけだけどね)

「でもね？これは姿を消すだけで、声とかを出すと周りの人たちにも  
聞こえてしまうんだ、それにお互いに見えなくなると、手を離したら  
自分以外がどこにいるか分からなくなるだろう？…だから何が  
あっても、この手を離さないで、声も出さないと約束してくれるかい  
？」

(スキルで景色に溶け込む時は、こっちの世界では手をつないだりど  
か身体的にどこか接触してないと第三者に、その効果を及ぼすことは  
できないみたいに仕様変わってるみたいだし…エルフの子たちで実  
験しておいてよかったよ…)

そう説明すると「うん、わかった」と答えてくれる

「それで、なにをするの？」と聞いてくるもう一人の女の子。

「姿を消したまま、あの家に一度、入ろうと思うんだ、姿は見えないか  
らずっと声を出さないようにすれば誰にもわからない。」という事と  
…

「必要な時はボクがしゃがんで小声で話すから、ハイの時は手を握つ

て、イイエの時は握ってる手を横に動かしてみてくれ？」とだけ伝え  
：2人の女の子の間に自分が立ち、両方の手で、どちらの子とも手を  
つなぐ、そうしてから【擬態Ⅱ】を発動させる、これで姿も見えず、温  
度も匂いも誤魔化せるはずだ…この子達に声を出されたらアウトだ  
けどな…

そうして姿を消したまま、屋敷の扉の前に立ち、ゴンゴンと軽く頭  
突きをかます。

(両手がふさがってるため)

しばらくすると、扉を開けるために出てきたメイドが訪問者の確認  
に出る。

その時だけは自分が声を出して、訪問の意を告げる…一応声を変化  
させるが、普通の声マネ程度だ…そこまで気合を入れて身分を偽る必  
要はない…。

「依頼されて、お届け物を渡しに来た者です。」と言えはいいのだから  
…。

中のメイドが「少々お待ちください」…と扉を開ける。

しかし、外を見ても誰もいない…「誰かのイタズラかしら…」と、扉  
を閉められてしまう前に、足元にある石を敷地にある茂みの中に蹴り  
入れる…するとガサッと中のいう音が聞こえ、少しメイドがそつちに  
身を乗り出した。

「誰かそこにいますか？ クーデリカ様ですか？それともウレイ  
リカ様？お帰りにいられているのですか？」

と声を掛けながら少し音のした方に…扉の外へと体を出し、数歩前  
に出てきた。

その隙に屋敷に忍び込むことに成功。両手を少し握ってあげて、安  
心させてあげると、女の子2人からも同じ返事で握り返してくれた。

そうして屋敷の中を、小声で案内してもらいながら、両親のいるだ  
ろう部屋の前に来る、そうすると怒鳴り声が聞こえてきた。

「なんでクーデとウレイがどこにもいない？ 家に居ないのはどうい  
うこと？」と若い…少女？っぽい声が中で親を問い詰めているよう

だ。

「あの二人はもう居ないさ、今までの借金をナシにする代わりに、借金した額と同じ金額で買い取ってもらったんだ。」とさも当然のこのように言う…きつと親父さんだろう…。

扉をしてても外にまで聞こえてくる程に、2人の声がヒートアップしている。

「なぜもつと時間を伸ばせなかった？ 何のために私がずっと返済してきたのか分かってるはず！ 借金をすることを辞めないとまた同じことになる！」

(ん？ どこかで聞いた声だが…？ どこだったか…)

片方の手が引つ張られたので姿勢を低くすると「お姉さまの声」と教えてくれる。

(なるほどね、お姉さんはまともなんだな、それは良かった。仕事してるって話だから、なんとか匿《かくま》ってくれるかな?)とか思っている

「もういい！ 私は家を出る！ フルトの名も捨てる！ 妹たちは絶対に探し出す！ もうこの家にお金も入れない！ 借りた分は自分達で返すといい!!」

という言葉と共にバン！と扉が開かれる。

すんでのところで女の子たちを下がらせたので2人は無事だったがこっちは頭をぶつけた…すごい音でガン！と音が鳴り、その音に部屋の外に出てきた「姉」は不思議そうにしていたようだが、景色に溶け込んでる私も、妹たちの姿も…その「姉」には見えていない…どうやら気のせいかと思ってるようだった。

(扉が顔にぶつかったせいでもともにお姉さんの顔が見られなかった…。)

その「姉」自身は、ずんずんと急いで家を出ようとしている。

(これはこのまま、お姉さんについていった方がよさそうだな、それでこのままこの屋敷から外に出てしまおう。)

☆☆☆

後ろに誰かついてきている気配はわかるのか、時々後ろを振り返りながら足早にずんずん進んでいく、後ろ姿だけでも、やっぱり見覚えある感じなんだよなく、と思いつつ、充分に屋敷と距離が開いたのを確かめてから女の子2人に小声で語り掛けてやる。

「もお、お姉さんに声をかけていいよ?」

そう言って手を放してやるとスキルの効果が消え、妹たちの姿は見えるようになる。

「お姉さま!!!」

そう声をかけた妹達の声に反応し、後ろを振り向いた瞬間、その顔が初めて目に入った。

そうか…この子達に感じたどこかで…って感覚はこれだったのか…そう思い、1人納得した。

姉というのは…あの時のワーカーチーム『フォーサイト』のアルシエ、キミだったんだね。

そうして、喜び、抱き合って、うれし涙を流す姉妹の姿を…しばらく微笑ましい想いで(姿を消しているまま)偽エルヤーは夜闇の中、それを見つめていた。



## 第12話 アルシエ、某館に招待される。

|||||ここはナザリック地下大墳墓|||||

本日の支配者はわりと上機嫌であった。

なぜなら人間の協力者でもあり、NPC達には内緒にしているが、実はアインズの現地国言語（略して現国）の先生でもあったジエツト氏から現地産ではありえないアイテムが店に鑑定依頼として持ち込まれたというのだ：是が非でも買い取ってもらい解析したいと告げた所、了承は得られたが、その代わり必要経費としていくつかのスクロールの使用許可が欲しいという事なので、その程度ならいくらでも替えは効く。ということでも即座に「OK」サインを出した。

どんなものはわからないもののユグドラシル産のものが持ち込まれたとしたら、それはプレイヤーの影がいよいよ目の前に現れたという可能性も充分にありえる。

買い取り額もモノと数にもよるが5000までなら問題ないと言っているので、彼ならその範囲内で話は付けてくれるだろう。

スクロールに関してはデミウルゴスが平均的に在庫を切らせることなく継続的に増やしていつてくれているので、何の問題もない。

皮を剥いでる生き物はたしか：両脚羊だったか？ それにトロールに、獣人種などを牧場で飼育し：スクロールにするための素材として種類は豊富にあるようだ。

デミウルゴスが最近精力的に取り組んでいる牧場では、より上位のスクロール作成としてトロールのレアものが第4位階までの魔法を封じられるのでは？ということが分かってきた。

通常のトロールの皮膚をはいでスクロールにしたところ、部位と、性別、年齢、レベルという条件が良ければ、第3位階なら行ける種もあるという：それならレアものなら恐らくは：という願望もあるのだろう。

レアものと言ってもこの異国ではレベルの高いモンスターはそうそう居ない：思いつくのは「東の巨人」という存在だが：あれは【絶望のオーラV】で即死させてしまった。

(それにカルネ村の防衛力の参考にするためにトロールゾンビにしちやったしなあゝ：そう考えるとあの使い道はもったいなかったか？)

かと言って、帝国の武王もトロールだという話だが、さすがに他国の闘技場チャンピオンをそのままさらってくるのも外間が悪い。

やけにギルドではなく国にしたいという熱意が守護者たちからすごいのだが、アインズ自身は国の運営などしたことのないただの一営業マンである。

バンドラスアクター  
自分の黒歴史に関しては恥ずかしいので、まだアルベドにも面通しはさせていない：デミウルゴスに並ぶ頭脳の持ち主としてことにあるが：実際に自分があの頃に持っていた「一過性の病気」にかかっていた時期の：今見ると痛い設定でんこ盛りのアイツ：アレが自意識を持って動いてるなんて：できれば少しでも時間を先送りしたい：有能なのはわかってる、ナザリックの財政面での責任者ということにしてあるので数字にも強く、信頼のおける能力はある。それもわかる：だが、どうしてもみんなに会わせる決心ができないまま、今に至っている。

なので、国を持つというのにも、二の足を踏んでいるのである。

一応、カルネ村やガゼフ救助の際は、緊急的な対応が必要だったのでその余裕はなかった上：相手がどんなレベルかもわからないのにギルド武器を持ち出すのはデメリットが大きすぎる、ということでもちろんカルネ村救出時に持って行った「スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン」はイミテーションだ。

いざとなれば超位魔法を1発、課金アイテムの砂時計も使い、相手が慌てるうちに逃走、という選択肢も考えていたが、その必要もないくらい低レベル勢だと思った時は肩の力が思い切り抜けるのを実感したものだ。

東の巨人討伐の際は、自分とシズだけで：宝物殿に行った。

宝物殿の入口前で、リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを預ける人材が必要だからだ：シズを入口に置いて指輪の見守りという大役を命じられたのが嬉しいらしく、大人しく従ってくれた。

実際に会ってみた感触だが：やはり入り口前で待機させておいてよかったよ。アレを人に見せるなど：まだまだ覚悟が足りない：お願い、もう少し時間を頂戴！という心境になった。

そしてパンドラに言ってワールドを1個持ち出した。性能としては非とも使ってみたかったワールドアイテム「強欲と無欲」だ。これの使用実験としてその時の討伐に乗り出したという名目もある。

「絶望のオーラV」で即死させた後、実際に「強欲」に経験値を吸わせる実験はうまくいった。

今後は、なにか大きな勢力と戦争などがあつた時は守護者たちに持たせて、強欲で吸うのを忘れないように、という命令をしてもいいかもしれない。

亜人種などに攻められている国なんてものがあつたら救助という名目で、経験値という名のポイント収集ができる貴重な機会を見逃す手はない。同時に救世主という名声も得られれば一挙両得というものだ…。

なんてことを考えていると：「コンコン」とノックの音がした。

今日のアインズ当番である「エトワル」に促し、ドアを開ける許可を出す。

最近こうさせていると一般メイドの「私仕事できてる」という満足度が違うという事もわかってきたので、NPCたちの望むことを（可能な限りで）させてあげている。

その代わり、守護者並びに一般メイド達に与えようと思っている「週休二日制」の案は難航しており、その案を出した時のNPCたちの絶望したような：「自分達の価値はもうないとおっしゃるのですね」という嘆き様は強制的な感情抑制が起こったほどだ…

などと思っていると扉をくぐって入ってきたメイド「リュミエール」が今回の一件であるアイテムを目の前に持ってきた。

どうやら、ワゴンの上にあるクリスタルのコップ4つと割と大ぶりの水晶玉が今回の品物のようだ。水晶は思っていたよりも割と大きい方か？という印象だけだった。

これを全部で3500で買い取ったか…さて、これが本当にユグドラシル産の材料で作られたものなら言う事はないのだが…そう思い「わざわざ、こんな雑用にお前まで狩り出して悪かったな、本来の仕事もあつたのだろうか？」と言うと、ぱあ〜と明るい表情となり

「とんでもありません、アインズさまよりの指名されてのご勅命、このリユミエール一命を賭しても成し遂げる覚悟で挑みました。」と気合がすごかった。

(それでも転移直後よりは打ち解けてくれたというか、自分への硬さが取れてきて、目の前で正直な表情を出してくれる程度にはなつてくれているというのはいい兆候だな一年以上かけて意識改革をあれやこれやしただけのことはあつた！)

「ああ、お前たちのその精神こそ、私の望むものだ、いつも感謝しているぞ」

と告げると喜びに打ち震えているようだった。

「足止めしてすまなかつたなりユミエール、本来のお前の仕事に戻るといい。」

鷹揚にしてそう告げると「それでは、これで失礼させて頂きます」そう言つて、音もたてず静かに…かつ素早くという器用な真似をして部屋を出ていく。

(一般メイドもみんなどうやってあんな経験をつんでいるのやら…あれもホワイトブリンさんの願望なのだろうか?)

そんな想いを頭から一度追い出し、目の前のアイテムの鑑定に移る。

〈オーラ・アブレイザル・マジックアイテム  
上位道具鑑定〉

発動と同時に何度か沈静化が起こる。混乱、狂喜、疑惑…すぐに飛び出したい衝動に変わり…それも沈静化された。まずしなければならぬのは情報の収集、つまりは真相の把握だ。

何度か沈静化が起こつたため、すでに冷静になつている、とりあえず、事実が判明している内容の整理だ！と考え、もう一度効果が発動した内容を読み上げる。

目の前のアイテムはマジックアイテムではないが、故意的に、意図

的に作り上げられたインテリアアイテムだ。

思えば、人体（死体）を媒介にしてデスナイトなど平気で作れるのだ、ユグドラシルのインテリアガチャのアイテムで、家具などを作るというのもできない理由はない。

驚いているのはそこではない、その製作者の名前だ…これは…

そして「アルベド!」…と呼ぼうとして思い留まる…そういえばついさつき、謹慎3日を言い渡したばかりだ…あの罰をすぐに取り下げるというのも支配者として、許されることではないだろう。

それに、あのアルベドはちよつと怖かった。

女性に襲われかけることが、あんなに恐ろしいものだったとは…とその時のことを思い出し身震いをする…

そんな状況でわざわざ呼び出せるはずもない…というより、自分で謹慎を命じておいて、急な呼び出しなど…周りに対しての示しがないだろう。

謹慎が明けるまで、言わない方がいいかもしれない。

デミウルゴスは牧場経営で、「牧場」の方まで出向いてもらっている。

スクロールの作成がもう少し軌道に乗って、デミウルゴスが居なくても牧場の運営を任せられる誰かが入るまではうかつに呼び出すのは今は避けておきたい。

しかし、自分だけで出向くというのは対応が軟化しているとはいえず「支配者として従者の1人はお連れください! いざという時に盾になる者を…」といつも言われてしまうのだ…もう少し気軽に出歩いたり、したいモノなのだが…

「はあ…」と1つため息をつくくとエトワルが「いかがされましたか? アインズさま」と心配そうだ…「ああ、何でもないのだ、そう、なんでもない…」そう言つて(さて、どうするか…)と考えていると、やっぱり一つしか取れる手段はないよなあ…と決断して、〈メッセージ伝言〉を飛ばす。相手は、もちろんこのアイテムを買い取った功労者に対してだ。

アルシエは結局、誰にも頼る先はなく……さすがにイミーナに頼るわけにはいかない。

女同士抵抗は無いのだが、私が行くと、彼女はヘツケランとの時間が大幅に制限されてしまうだろう……それは私も望む所ではない……

同様の理由でヘツケランの所にも身を寄せるなど出来ない。

ロバーデイクは……何かあるとは思えないが、さすがにまずいだろう、年齢的にもそうなのだが……色々と思う所があつて遠慮していた。

結局、家を捨てた自分が頼れる先はそれほど選択肢が多いわけではなく、かと言つて、気分は彼の家に近づくにつれ、重いものになつていった……

彼の言い分をそのまま受け止めれば「妹たち」を受け入れてくれると思う、あれだけ「恩を返したい」という気持ちがあるなら、変な心配はないのだが……

(やっぱり、問題は彼のお母さんよね……お邪魔に思われなかな?)

「そんな平気な顔してヒトの家に押し掛けるなんて」と思われないうらうか?)

そう心配していると……結局、来てしまった。

彼の家に……どうしよう……ノックする勇気が出ない……私の腰に寄り添ってくれてる妹も「どうしたの?」という顔で見上げています。

何度目だろう、ノックをしようとして、手を下ろし、そしてまた手を持ち上げて……を繰り返すうちに気がついたこと……

家の表札が、違う名前になつている?

学院時代の彼の家には何度か彼を送り届けたことがあるので覚えていたのだが……引越してもしたのだろうか?

関係のない人の部屋なら、前の住人の話は聞けないだろうか?

望みを込めてノックする……彼本人に聞けば済む話とは言え「これから押し掛けたいから家を教えて?」とはとてもじゃないけど言えないし内容的にはそれに近くなるというのに……それをどう柔らかく言い直せばいいのか……こういう時、交渉上手なヘツケランが羨ましい……彼

の場合、相手が勘違いさせるような表現をよく使う…悪く言えばペテンにかけるような感じ…

対してロバーデイクは真摯に相手に向き合い、心から攻めていく感じだ。誠実な彼の話し方から言葉回し、優しさなどで相手が「なんとか助けてあげたい」そういう気分にならせてしまうようだ。

どっちにしても状況によりけりなんだろうけど…どちらにも私にはないもの…ただ聞きたいことを伝えればいい…そう心を奮い立たせ、ノックする。

「は〜い」中から女性の声が聞こえてきた。

この声は彼の母親の声ではない、もつと年を重ねた女性のモノだ…ガチャ…と扉が開くと「あら可愛いお嬢さんだこと、どうしたの?」

優しい表情だが、しかし突然の訪問の上、見知らぬ相手が目の前に居るのだ、多少「なんだろう」と思われても仕方がない。

「あの…以前こちらに住んでいた家族はどちらに行かれたか、ご存知ありませんか?」

「ああ…ここに以前まで住んでいた家族ね? それならこの建物の屋上に行ってみなさい、面白いものが見られるわよ。」

「おもしろいもの…? あ、ありがとうございます。」

「あら、いいのよお〜がんばってね?」そう笑顔を向けられて少し考える…どんな勘違いをされたのだろうか? 本質をそのまま察知されてもそれはそれで困りはするのだが…

とりあえず、手掛かりは屋上…そう思っただけ階段を上ってみると…そこにあった。というより、それしかなかった。

彼の住んでる建物自体はアパートメントと言えればいいだろうか?

2階建ての2階部分、その横一列に5部屋、1階には4部屋プラス大家の部屋があるという造り。

その屋上、昇ってきた階段の突き出た部分のちょうど向かい側、この建物の屋上、全体の平面の真ん中から奥…そこに堂々と建っているログハウス。

しばしその光景にあっけにとられていたが…意を決してその建物に近づいて、表札を見る…よかった、彼の…「テストニア」の表札だ、

ここで合ってるみたい。

全部が丸太で作られているログハウス、そのちよつと大きい版と言えばいいのだろうか？ そんな牧歌的な家が堂々と屋上にあるという違和感はあるものの、緊張感はさつきより薄れている。

木で作られているらしい扉にノックができた、するとやけに元気そうな声が「は〜い、今開けるからねえ〜」と女性の声、この声はたしか彼のお母さんに近いが…あの時とは180度違う…。

私の記憶の中では〈病氣治癒<sup>キユアデイスレズ</sup>〉の魔法でも癒せない、一部の例外に位置されていた難病を患っていたはずだ…こんな元気で明るい声を出した印象ではなかった。

だというのに、その記憶は嬉しい意味で裏切りを受ける。

彼女の様子は、澆刺と表現する以外にはない、元気いっぱいな笑顔だったのだ、あの時に見せてくれた病床での笑顔ではなく、吸い込まれるような明るい笑顔だった。

「あら〜、珍しいお客さんね、たしかうちの子を送ってくれたことがあったわね？ たしか、フルトさんとこのアルシエさんだったかしら？ うちの子、まだ帰って来てないけど、いつもならもうすぐ帰ってくるはずだから…良かったら寄ってく？」

きつと、これが本来の彼女の在り様なのだろう、聴いてて安心する声だ。

「もうフルトの名は捨ててきました。今はただの「アルシエ」です、すみません、こんな夜遅くに…他に頼れるところが無くって…」

そう言って頭を下げると、妹たち二人も頭を下げて姉を見習っている。

それだけで育ちというものが分かる所作だ…親の評判はあまり良いものではないが、娘たちの方に悪い評判がないのが幸いだろう。

「あらあら、それは大変ね、外に居たんじゃ寒かったでしょ？ 中に入りなさい、ここは見た目と違って広いのよ？ 2人じゃく広すぎて落ち着かない気分だったから、お客さんがいるならちようどいいわ♪」

雰囲気からどんな事情があつてのことなのか、なんとなくわかつて



くれたのだろう彼の母は扉の横にずれるようにして来客を中に招いてくれた。

「すみません、お邪魔します。」「おじやましまあ〜す」「遠慮がちに部屋に入ると…とんでもなかった。

外から見えていた広さなど「ウソツキ!」と思いつきりツツコミたくなるくらい広い、倍以上はあるだろうか…

広いリビング調の広間、外から見た感じ平屋っぽかったのに壁に沿うように階段が上に伸び、2階がある。

2階にはいくつかの部屋があり、2つや3つではきかない感じ…しかも1階にはキッチンもちゃんとなり、水回りは完璧、平民の家には珍しく風呂にシャワーの機能もある。

トイレもあり、話によると、上の部屋にはベッドもあるらしい。

屋上にあるのに水回りの給水、排水の方はどうしてるのだろうか?と思えば、このログハウスはマジックアイテムであり、給水、排水も魔法の効果で成り立っているらしい。

もお、今のジエツトくんには常識など通じなくなってるのだろうか?

呆れてしまって、もおなんでもありだな…と思っていると「すごい!ひろ〜い」「ひろい、ひろおお〜い♪」と大喜びの妹たち。「ごおら! クーデー!ウレイ!人の家で走り回るんじゃないの! ご迷惑でしよお〜!」と注意すると

「ああ〜ら、いいのよお、好きにしてちょうだい、この家は普通のログハウスよりずっと軽いみたいだし、その割に防音もしっかりしてるみたいでねえ〜家の外に音が漏れることもないのよお〜?」

あまりのことに絶句する…どれだけのお金をかけてこれを建てたのだろう…普通にマジックアイテムを…スクロール1本買うだけでも庶民には手の届かないモノなのに…それを家単位で、この内装に、しかも防音、見た目以上に広い、こんな効果まで行くとなると金貨で数千は行くんじゃないだろうか?

数千で収まれば安い方? って感じにも思えるけど…ここまでのたらしめな家は見たことがないから基準が分からない。

私の屋敷で言えば、このログハウスより全体としては広いけど…、一部屋一部屋はこのリビングの広さには及ばず、応接室や、客間であつても、ここまで広くはない。

貴賓室も形としてはあるが…この広さには及ばない。妹たちの喜びが発露してしまうのも仕方ないのかもしれない。

たしかにこれでは、この中に2人家族では広すぎて、いたたまれないだろうな。

「あの…おばさま、こんな時間に妹たちまで一緒に押し掛けてしまつてすみません」

と再度、お礼を口にする。この気持ちは感謝でもしておかないと、とてもじゃないけど申し訳なきで押しつぶされそう。

「いいのよお、私の家は自分以外は男の子しかいないでしょ？ せめて女の子が欲しかったんだけど…産まれたのはあの子だけだったからねえ」

そう言ってもらえると、少しは気分は軽くなる。

「それに、こおくん可愛い子供たちなら、私はどれだけでも大歓迎よお、一緒に料理の手伝いとか、お皿洗いで女同士のお話とか…夢だったのよねえ」

そう言つてウレイとクーデを両腕で抱きしめて、ほっぺに頬ずりをしている。

そう言われて初めて「家は逆だったな…」そう思った。

父親以外は執事を除けば、男は父親1人、女の家族ばかりに囲まれて肩身の狭い思いをしていたのだろうか…あの衝動買いもその反動だったのかも…

男一人では勢力的には少数派、意見を出しても多数決でもされれば、負けは確定。

そんな中で徐々に変わっていったのかな？と思うも、妹たちを売り払うまで振り切れてしまつてはもうそれも同情の余地はない。

そんなことを漠然と考えていると…「ただいまあ、今帰つたよ、母さん！ つてあれ？ アルシエお嬢さま!!」

そっか、何も言わずに来たから、ジエツト君はそりや驚くよね。

「ごめんね？ジエツト君、急に押しかけちゃって…、妹たちまで…その、他に頼る人がいなくて…、それから、私はもうただのアルシエ…元貴族だったフルトの名前も捨ててきたからお嬢さまはやめて？」  
「おかえり〜ジエツト、せっかくお客さんが頼って来たんだから、ちゃんとおもてなししなきゃ〜ね。」

と言つて立ち上がると、さて、お料理でもあつためますか。と呟いてキツチンに歩いていく。

「アルシエちゃんはお客さんなんだから、ゆっくり座つててね？」と言われたけど…

「いえ、私もお手伝いします！」「わたしも〜！おてつだいするう〜♪」  
「ずるう〜い、クーデえ、おてつだいならわたしもできるもおん」と言つて集まつてくるにぎやかな空気を嬉しそうに彼のお母さんは「母」の笑みで温かく受け止めてくれていた。

☆☆☆

「え？ジエツト君、今なんて？…ごめん、よく理解が追い付かなくて…もう一度、いい？」

聞こえてはいた、ちゃんと言葉も通じてるし意味もわかっていると  
思う…だけど、心当たりがなかった。

「ああ、すみません、結論だけを先に言つてしまつては、事情がわかりませんよね。」

申し訳なさそうに頬を指先でポリ…とかく仕草。昔の面影が浮かんだ気がした。

「今日のクリスタルの件、ありましたよね？その件に関して私の主は非常に喜ばれていてですね、ぜひとも元の持ち主であるアルシエさんにお礼がしたい…と仰せでして…」

（ああ…そういう事情なのか…あれつてそこまでのものだったのかな？あれつてスウズさんからもらったやつだし、そこまで高価なものだつたつてこと？）

そんな考えをよそにジエットは続ける。

「つきましては主の館にご招待したいとのことですので…よろしければ、こちらを…とのことですよ」

大きめの箱が一つ、テーブルの上に置かれる、食事はもう終わって、ジエットのお母さんとの洗い物も済ませた。今はみんなでお茶してた時間なので、テーブルに置かれてももう問題はない。

「見てみてもいい？」

「ハイ、どうぞ、お気に召すようであればそれを着てお出でになってほしいとのことですよ。」

(なんだろう…着て…ってことは服？なのだろうけど…)

箱を開ける…中が気になるのか、クーデリカもウレイリカも同様にのぞき込んでいた。

中に入っていたのは3着のドレス…煌びやかに輝く、淡い赤を基調としてドレスと、薄い青、晴れ渡った空のような色のドレス、それと落ち着いたピンク色のドレス。

(良かった、そんなキラキラの服は私にはきつと似合わない、この落ち着いたピンクにしよう。)

そつとそれを持ち上げると…

「おねえさま、いいなあ〜わたしはこつち〜♪」「ずる〜い、ウレイリカ！ わたしはこつちだもおくん」

「どうやら2人も好きな、気に入ったドレスを選んだようだ…って…え？それ違うよね？」

「あの…ジエット君？これって、3つのうちどれかを私に、ってことじゃ？ え？あの子たちの分も…ってこと？」

「ああ、はい、そうですね？ アルシエおじよう…じゃなくて、アルシエさんなら、きつと妹さんたちも連れて行きたいだろうなと思いついて、勝手に手配させてもらいました。」

「ええええ〜？いいの？これって相当高価な感じがするんだけど…」（あれ？そっういえばサイズ…）

「と思い付き、妹たちのサイズは？」と聞くと「主の話によりますと「魔化」はしてくれただけでして、袖を通せば勝手に着た人のサイズに

なってくれるそうですよ?」

「ああ…そう…ありがとう…」と答えるので精いっぱいだった…自分の今までの常識が全部まとめてひっくり返されそうだったので、これ以上ツツコムのはやめにしようと思った。

「わああ〜、しゅう〜ってちつちやくなつたあ〜、お姉さま、にあらう?にあう?」「ずるう〜い、わたしもおく、わたしは〜?お姉さまあ!」

聞いてはいたが驚いた、目の前で、大人の標準サイズくらいのドレスがまだ10にも満たない女の子の体に合うように縮んだのだ。

(ジエツト君の雇い主ってどれだけの人なんだろう…)

自分も袖を通してみると、まだそんなに身長も伸びきっていない自分のドレスもちゃんとサイズ通りに縮んでくれ、ちょうどいい感じでピタッと止まる。

「あら〜♪ みんな似合うわよお〜、すっごいキレイねえ。ね?ジエツト?」と彼のお母さんも嬉しそうだ。

「ええ、ホントにみなさん非常に似合ってますよ、これなら主も用意した甲斐があつたと言ってくれるでしょう。」

今までおしやれらしいおしやれを楽しむ余裕のなかったアルシエには、まさか自分の初めてのコーデチェンジがドレス姿になるとは思っておらず、ジエツトの言葉にも顔が赤くなるのを感じ思わずうつむいてしまった。

「それじゃ、気に入ってくれたみたいだし、その色で決まりだね、日程はいつなら空いてるかな? 問題ない日があるようならこつちから

ゴ…いや、ア…主には…<sup>あるし</sup>伝えておきますよ。」

「ん〜、私の方は、明日、仲間に会いに行つて聞いてみる、帰つてすぐに依頼が見つかると思えないけど、予定がどうなのかは聞いてから判断したい。」

「そうだね、うん、わかった、主にはこちらからそう伝えておくよ、日程が決まったら、教えてくれれば調整するからね。」

「ねえ、アルシエ？昨夜はどうしたの？ 宿の方に帰って来てなかったけど？」

さっそくイミーナがズバツと聞いて欲しくなかったことを聞いてくる。

ここは「歌うリンゴ亭」いつもフォーサイトの面々がそろって相談するときを利用する御用達の酒場兼宿屋だ。

イミーナのことだから、きつと聞いて来るだろうとは思っていたけど、出来れば聞いてほしくはなかった…

(でも普通は気になるよね？メンバーが帰ってこなかったら…)

「昨夜、クリスタルの一件が終わった後、実家に行って妹たちを引き取ってきた。それから家出をしてフルトの名も捨てた。」

手短に一番言いにくいことは後回しにする、言わないで済むならその方が絶対的にいい！(やましいことは一つもないけども…)

「ええ？それって、これからは妹さんたち二人もアルシエと一緒に行動するってこと？」

「そう、だからこれからはそこまでワーカーの方に力を入れて行動をできるかわからない。」

「しかも親がとんでもないことをしでかしてくれたせいで、あまり樂觀的に過ごしているわけにもいかない。」

「妹たちはすでに買い取り手が決まっている、親から売られた身…それをなにやら助けてくれた人が居て、人買いの連中から魔法を使って姿が見えないようにしてくれてたらしい」

昨日落ち着いてから、妹たちにあの時などで売られずに無事私の所に来たのか…という事情を聴いていたのだが…詳しいことは眠気もピークになってきた妹たちはだんだん何を言ってるかわからなくなつて眠ってしまったが…とりあえずの特徴はといえば…

1. スラつとした長身

2. オールバックにして、後ろに流してくくって縛り上げたような髪型

3. 「魔法使い」だと言っていたのに腰に刀をつけていた。

4. すごい速さでシユパーといって、びちゃ〜となって、ズン！つてなつて、ど〜お〜んつてなつたんだ、という妹の証言。

「そりやく助けてくれたやつっていうのは相当強そうだが…誰なんだろうな？」

「わからない…妹たちは見ればわかると言つていた…でも話だけではなんとも言えない…あと胸当ての所に奇妙なマークがあつたと言つていた」

「そりやく手がかりとしては有力な情報みたいじゃないか？ どんなだつたつて？」

「タテに読む形の文字で、『エル』みたいな文字が書かれていたように見えたみたい。」

「えええ〜？ それ真実だとしたら、話がおかしいぞ？ あいつ、絶対そんなことしない男だと思ふんだが…」

「えええ？ ヘツケラン、その人に心当たりあるの？」

「いや？ 小耳にはさんでる程度で、どんな奴だかは会つたことはないな」

「私もイヤな予感してるんだけど、もしかしてアイツのこと？」とイミーナがなんとなく話の流れから察しはついているようだ。

「まあ…多分イミーナが思い浮かべたソイツのことだと思ふんだがなあ〜？ どう思うイミーナ…アイツだと思ふか？」

「絶対違うと思うね！ 人間的にそんな奴じゃない！ それが一つ、もう一つはあいつは武技は使えるつて話だけど魔法は使えないはず。」

「じゃ〜妹たちを助けてくれたのは誰？ つてことになる…またふりだし…。」

「ところでさっきの話に戻りますが、親がしでかしたとんでもないこととは一体なんなんですか？」

「うん、つまり人買いはウチの親に金銭を支払った後、妹たちを買つたということ告げ、外で遊んでいたあの子らをさらう計画だったみたい。」

「それが突然現れた、何者かによって、邪魔をされてさらわれずに済んだ？ つてことよね？」話を総合してイミーナが話をまとめてくれる。

「それが問題、妹たちが助かったのは良かったけど、親に金を払って妹たちを買った連中がいるってことは、今度、またいつ奴らが妹たちを狙うかはわからない。」

「あああゝ…そういうことかあゝ…アルシエがワーカーとして外に出てる間に狙われたら…ってことか」

「そういうこと、ヘツケラン」

「そりやく確かに…難しい問題だわなあゝ…っていうことはやっぱりワーカー稼業は引退か？」

「今の時点ではそれが一番濃厚…近いうちに話は変わるかもしれないけど…今はまだ引退の確定までには至ってはいない。ただ可能性は高いっていうだけ…今は…。」

「そつかゝ…第3位階の魔法詠唱者が急に抜けるのは「フォーサイト」マジックキャスターとしては大打撃だわなあゝ…」

「ごめん、とりあえず、当面の生活費として、先日のクリスタルを買い取ってくれたお金、合計して2000金貨はあるから、しばらくは何とかはなると思う。」

「できれば、最期に「フォーサイト」を締めくくる冒険がしてみたいというのはある。だから、何か決まったら、教えて欲しいんだけど…あの件はどうなった？」

「は？あの件？」ヘツケランは即座にはピンとこなかったようだ。

「あれじゃないですか？ヘツケラン、あの…カストクーズ候の言っていた、例のワーカーに集中してるという依頼の件では？」

「あああ、あれかすつかり忘れてた。明日からでも少し探つてくるよ」

「まあ、依頼主が誰とか、背後関係とか…まず明日は接触してくるやつを探すとするか？…まあ色々あるからなく。2〜3日は余裕あるんじゃないか？」

「それなら私は2日後の予定は休みにさせてほしい、妹たちができる限り、付き添っていてあげたい。」

（その日にジエツト君に予定してもらおうように言っておこう）



『…ということになったから、あさつての2日後…予定が付くから、その時にお願いいしてもいい?』

「うん、わかったよ、それじゃ、主にはそう伝えておくね? 楽しみにしておいてくれていいと思うよ?」

『わかった、それじゃ、お願いね?』

…プツつと通話状態が切れ、差し当たつての用件は済んだ。

さて…と思っていると不意に〈<sup>メッセージ</sup>伝言〉のコール音が頭に響く。

ジェット君だろうか? なにか伝え忘れかな? と思い、受信して、通話状態にしてみる。

「ハイ、どうしたの?」

『ああ、よかった、その声はアルシエちゃんだね。今ってメンバーの人たちと一緒に?』

この声は…聞き覚えがある、それよりもなによりも私を「ちゃん」呼びする人(?) など1人しか知らない、だからあの人(?) だろう…「だから、「ちゃん」呼びはやめてくださいよ、スウズさん!」

しばらくぶりの『異形』の彼からの音信…やたらクリアに聞こえるのが何よりの証明だ。そして聞き取りやすい声で、安否確認の言葉からその会話は始まった。

## 第13話 初めてののご招待

彼は土下座をしていた。それはもう地面に額を押し付け：デコが赤く染まりそうなくらいには…。

彼がなぜそんなことになったのかというと…。

ベルリバーはアルシエの妹を救い、姉に引き合わせ：宿に戻ってきた。

その時は部屋に入るなりエルフ3人娘達は妙にテンションが高く、上機嫌で「「おかえりなさいあ〜い♪」」と迎えてくれたのだ。

気になっていた点を見ると、案の定、というか時間的に治っておかしくない時間は経っているし当たり前前なのだが：エルフとしての魅力の一端、その耳がしつかり生えていた。

やはり「アミュレット護符」を渡しておいてよかつたと思う。

それは彼女たちの機嫌がいいからではない：やはりエルフというものはその長くピンと伸びた耳があるからこそだよな…と、種族特有の美点に目を向け「うんうん」とこつちもなにやら嬉しい気分になっていた。

そして、彼女たちと夕食時のだんらん…と言つてもこの部屋内だけでだ：『見た目だけ天武』チームとしては今までとの違いが周りにバレルるようなことは極力慎むべき。という提案が出て、それには「まさにその通りだよな」と納得し、周囲に魔法を展開させる、今エルヤー達の居る部屋の両隣は、いつもエルヤーが普段そうするように空き部屋となつている。

例え、2つ隣の部屋で聞き耳を立てようとよほどの大声でなければ聞こえないようにはなつている：がしかし、それでも声を殺すような

悲鳴と：嬉しい時の抑えきれない高い声では、ひびき方にも違いはあるだろう。そう思い、周囲に「聞き取れてもその話題に興味がわからない、認識できない」という効果を、念のためにとへ魔法効果範囲拡大ワイデンマジックで建物全体を範囲に入れた。

「うん、これで大丈夫、もおどんな話をしてもとりあえず、明日の朝まではもつだろう」というと、安心したように：これがきつと本来の彼女たちなのだろうという明るさで話が始まった。

そこで、彼女たちの話しぶりを聞いていて思ったこと、それはそれぞれの個性だ。

ドレイの時は皆一様に「自分」というものを押し殺していたのだろう：同じように「没個性」という状態だったのだが：

例えて言うならば：

・デイーネ↓お姉さんタイプ、落ち着いていて口調は穏やか、周囲の語気が荒いとなだめようとする

・セピア ↓明るく活発、能動的でなにか行動の提案をする時のだいたい彼女による所が多い。

・ルチル ↓頭脳派で、総合的に3人の意見をまとめようと立ち回る。

そんな感じに思えてきた。

ひとしきり話が進み、これからの自分たちの身の振り方をどうしようか：今日でエルヤ―役もしないで済みますしね？とルチルが私に向かつて笑顔を向けて「ニコツ」としてくれる。

その時に「あ：」とまだ彼女たちに伝えていないコトがあったことに思い当たる。

セピアに目ざとく「今の『あ：』ってなんですか？」と、ジト目で見られてしまった。

「ああ…イヤ。あの…ですね」…とだんだん自分の語尾が小さく  
なっていくのが分かる。

「なんです？そんな言いにくいことを言わずに隠してたんですか？」

「あ、いや、そうじゃなくってね…」とシドロモドロになる自分。

「まあまあ、まだ何も聞いていないんだし、ひとまずはお話を聞いてか  
らにしましょう？」　ね？とみんなをうまくなだめてくれるディーネ  
…さすがお姉さん役

「あのですね…昼間、手紙がきたじゃないですか？　あれですね？  
その手紙の差出人に会って来たんです。」なぜか敬語になる自分が悲  
しい。

自分は床に正座。　エルフさん達はベッドに腰かけているも、それ  
ぞれのポーズが全く違う…

セピアは片足を逆足の上のせて腕組みをしている。

ルチルは片肘をヒザに置き、手の平をネコの手みたいにして、その  
上に顔を乗せて聞いている。

ディーネは両手を両膝に置いて、前傾姿勢気味で聞いてくれてい  
る。

「それで？　どんな話だったの？」

「あのですね…新しく見つかった遺跡の調査依頼、というのがあって  
ですね？それを…前金込みでお願いしたいと…言われまして…」

「ま…さ…か…受けてきてなんていないでしょうね？　エ…ル…ヤー…  
さん？」セピアに睨まれた。

「そうですね、約束では今日一日でエルヤー演技の日を終わらせ、

さっさとこの帝都から姿を消すって話だったように記憶しているんですが……？」と横目でルチルに流し目をされる。

「まさか受けてきちやっただってことはありませんよねえ？ そんな偽エルヤーさんじゃくはないですよねえ？」 ううう、3人でせめられるとつらい……

「ああ、ハイ……端的に言う并接受えてきてしまいました。 やっぱり受ける前に相談した方が良かったですか？」

「当たり前じゃないですか！ 〈伝言メッセージ〉の魔法、使えるんですよね？……結論を考える時間をくださいって引き伸ばせばいいことじゃないですか！」

(ハイ、ごもつともです)

「私たちになんの相談もナシに次の依頼を決めちゃうのはどうかと思うんですよええ」(常識的なご意見だと思えますルチルさま)

「その前金ってどれくらいだったんです？」

「ええくつと、たしか、200をもらえるって話だったかと……」

「え？ 前金をまだもらってはいないんですか？」

「ああ、ハイ……その遺跡調査の現場に行く際に今日渡された「証明プレート」っていうのを持って行って、前金と交換、そのまま遺跡調査。っていう流れみたいです。」

「そういうことか、なら最悪、か最善か、どちらにしろ、最終的に前金をもらわないでとんずらって手もあるってことね」(セピアさん、言葉遣い、言葉遣い……)

「あのですね……私個人としては……その、どうしようか、迷ってましてで

すね……」

「え？なんで？」とディーネ以外の2人から疑問の声が飛んできた。「ちよ……と事情がありました……その遺跡に……入って……、みたい……かなあ……？……なあ……んて……。」とiiiiつつ表情を窺うように上目遣い。

「なにか、言いにくい事情でもあるんですか？」（さりげなく理由を言いやすいように水を向けてくれるディーネさん、ありがとう！）

「え……とね……前にキミらに話したこと……覚えているかい？ ボクの仲間のことを」

「ええ、ヴェールさんのお仲間さんのお話ですな、覚えてますよ？」

「昔、自分たちがその仲間と一緒に待ち合わせ場所……というか、秘密基地というか……仲間だけの拠点、みたいにしてた場所があつたんです。」

「……………」

3人とも口を挟まずに聞いてくれている。その気持ちはすごくありがたい。

「今回の遺跡調査の依頼では、大まかな事しか聞いていないんだけど……、その拠点にしてた場所とすごく良く似ているんだよ。 違うかもしれないんだけどね」

「そうですか……それで、とりあえず、遺跡の外観だけでも見に行きたい……そう思っと思わず受けちゃった、そういう事ですよね」（正解ですルチルさん！）

「でも、その拠点にしてた場所って、ここいら近辺だったんですか？」  
「違うはずだったんだ……全く違う……違う世界にあつたはずで、ここに來てるはずはないんだけど……本当ならボクもこんな姿でここにいる

はずのない存在だからさ…」

「ああ…、もしかしたら『なにか』の力が働いて、こっちに来たのかも…と?」

「違うとは思うんだけどね…、でも…どうしても「もしかして」って気持ち捨てきれなくて…」

「そうですか…それなら、お付き合ひしましょう」

「ちよつとディーネ? わかつてるの? 私達、もお『天武』じゃくないのよ?」

「わかっているわ、でもヴェールさんは、大丈夫だと、騙し切れると思ってるから、その依頼、受けようと思った。そうですよね?」

「うん、キミ達には悪いけど、幻影の魔法を使って、幻を身にまとってもらいたいんだ。それで見た目だけは元のドレイにしか見えないエルフ3人組になれる。」

「ええええくくく? またアレになるんですか? せつかく耳も元に戻りましたのにく…」とルチルは残念そうだ…

「平気だよ、本当に耳を切るワケじゃないし、幻でそう見せるだけだよ」

「そういう事なら…いいけど…聞いて欲しい条件があります!それを聞いてくれたらヴェールさんのわがままも付き合います!」とセピア

「な…なに? 叶えられることなら…いいんだけど…」

「シャワー浴びたいです! お風呂入りたいです! 思いつきり時間を気にしないでお湯につかりたいです! たくさん泡立てて身体も洗って、日ごろの垢を落としたいんですううう!!!」

呆氣にとられて、他の2人の方を伺うと、3人そろってこっちに目を向け、ウンウンとうなずいている。

「え？今まで、したことはないの？」ポカンとして問いかけると：

「ハイ、今まではアイツの監視下で、ろくな入浴時間ももらえてませんでしたし：ひどい時は4人一緒で、逃げられないように：つて名目で、の時も…」

（あれ？…今のつて言い間違えたただけだよな？ 4人つて聞こえたけど…あ、その時はまだもう1人のエルフも居たってことかもな…）

なんて、実際のエルヤーの人間性っぷりを余りよく知らない偽エルヤーはのほほんとそんなことを考えて返答をする。

「そつか、（4人目のエルフさんのことは）大変な思いをしたね…、うん分かった。それじゃ〜思いつきりお風呂に入らせてあげよう。」

「二「ホントですか？」三」（3人ともすごい喜びようだ…よっぽどお風呂に飢えていたんだろうなあ〜）

「それじゃそのために、ちゃんとしたお風呂を用意するからさ：ちよつとレポートするから、ボクにつかまって？」

そうお願いすると、3人ともが自分にしがみついてくれる。

（…こんないいニオイなのになあ〜：女性つてすごいや、ろくにお風呂入れない環境でもこんないいニオイだなんて…これが男なら悪臭でひどくなるのにな…）

「それじゃ、行くよ、グレートターテレポーターションへ上位転移！」

そう言つて場所を変えると、そこはトブの大森林、想い出深い始まりの場所に来てしまった。

「さあ着いたよ？…ここでお風呂にしよう！」

「え？…ここ何も無い森じゃないですかあ！」



「ん？ ああ、これから出すからさ、ちよつと待つて？」

懐からコテージ風の模型っぽい小さい小屋を出し、ポイと天空に放る…すると地面に下りる際、いきなり大きくなり一軒家？つてくらい  
の大きさはある建物に変わってしまった。

「これは〈グリーン・シックレットハウス深緑の隠れ家〉つていつてね、この中でなら好きなように  
過ごしていいよ？それこそ、お風呂にシャワーもあるから好きなだけ  
入っているといい」

そう言うとき…しばらくあつげにとられていたかと思うとき…

「もお、いまさらですけど、ヴェールさんつて何でもありですよね？」  
と、あきれられてしまった。

☆☆☆

さて…と、女性のお風呂は長いというし…しかもずっと待ち焦がれ  
ていた久しぶりのお風呂なんだ、思い存分入ってもらうためにもそつ  
としておいた方がいいだろう。

一応、お風呂から出る時は〈メッセージ伝言〉ちようだいな？と言つてあるの  
で、何かあつたら連絡があるだろう、そう思い、さて…その間、何を  
していようか？と悩む。

何をしていようか…とりあえずすることないから  
「ミラー・オブ・リモートビューイング遠隔視の鏡」を取り出し、操作してみる。

(帝都の上空かなり高いところから見てるんだなあ…これもつと視  
点を下ろすにはどうすればいいんだ？)

え〜…つと、こうか?…えい!こうか!! …違うか、それとも、てい! …ダメか〜

(もしかして指でタッチしながら操作とかいうんじゃないだろうか〜)

操作に四苦八苦しながら、両手を前に突き出し、大きなボールでも持つてるようなポーズにして手の間の距離を狭めてみるも…ムダ…

その手を大きく広げてみる…『ピヨピヨン!』…お? …なんかこれで視点を低く出来るみたいだぞ、やり〜♪

(それじゃ〜差し当たって、帝都の上空から〜低空飛行に〜…って、あれ?なんか夜空を飛んでるのが居るな、コウモリか? カラス…: なわけないか…?)

手の平を下に向けグウ〜…つとゆっくり下方向に動かしてみると視点がそのまま下方向に移動する…ん?これ、シャドーデーモンか?

懐かしいなあ〜これ、ユグドラシル時代、空から偵察〜とかいうのに使ってたよなあ〜…それにしても、この世界ってシャドーデーモンも夜になると出るモンスターなのか?

(たしかLVは30のチョイ手前くらいだから…: 難度で表すと、85〜88?…って感じか? それにしてもけっこう飛んでるな、鏡で見る範囲でも3体は飛んでるぞ?)

とか見やりつつ、さて、帝都にでも鏡で色々見て回ろうかな?…と思ってるのと、鏡に映っていたシャドーデーモン達がこちらに降下してくるのを見てしまう。

「あちや〜…見つかっちゃったかあ、これって戦闘に入っちゃうムード〜」

(まあLV30弱が3体程度なら、なんとかなるよな〜)

「それにしても夜のシャドーデーモンはホントに見えにくい：『夜闇のカラス』とはよく言ったもんだ、カラスじゃないけどさ」

などと言いつつ、降下してくるのを待って、「さっそく〈空斬〉でも放ってみるか？」なんて思っている：

『我らは至高なる御方に仕えし者…、御方の命により迎えに来た、対話がしたいとの仰せである…』

（うわ、これ念話だ…〈メッセージ〉とも違う感覚だなあ、そっかくこつちのシャドーデーモンは念じて話すタイプか！これは新しい発見だ！）

『返答はいかに…戦闘は極力避けるようにと言われている、敵対する意思があるや、否や？…疾く答えよ…』

（ああ、そうだそうだ、物思いにふけってる場合じゃないよな、話しかけられてる以上、答えなきや失礼だ。）

「ああ、こちらも害を為されないのであれば、敵対する意思はない、その「御方」って人の所にはいつ行けばいい？」

『我らについてくれば良い…空は飛べるか？』

「ああ、それに関しちや問題はない…〈飛行フライ〉、さて、案内してもらいましようか？その「御方」とやらの所へ」

（さあ〜って、と…わざわざ迎えに来させて「話が見たい」ってことだし、危険はないだろうけど…一応、唯一の聖遺物級武器を手の中に隠しようか。本当はもう一つあるけど、あれは習熟度が極端に低いし使いにくい武器だからな…）

できればこの恥ずかしい武器を使わないで済みますように…と、刀身を出さない状態では手の中でなんとか隠せなくはない、という程度の武器の柄を握りしめた。

内心、誰が、自分に何の用だろうか？と…まだ見ぬ、見知らぬ「御方」とは誰？とか思いながらも、そこまで案内されて、その上空までたどり着いた。

「これは…間違いない!! 『ナザリック地下大墳墓』!!」

『やはり、ご存知でしたか…さあ、御方がお待ちかねです。さあ…こちらまで…』

導かれるまま、何もない空を進んでいると、いきなり景色が変わる…どうやら見てバレないように上空に幻術でも展開しているようだった。

(そう言えば、こんな景色だったっけか?)

ユグドラシルから離れて、3年か…ずいぶんなブランクだよなあ…PVPになんてなったら、まだ勘も取り戻せてない今じゃく同水準の相手でも危ないかもな。などと思いながら、建物の中に入る。

シャドーデーモンの後に着いていくと…、転移の罠などにかからないように、安全な道を通っているのがわかる。

自前のスキルにより、周囲が畏だらけなのは確かなのだが…その中でもわずかな隙間を確保してくれたように、罠のない道筋はあり、それをひたすら進む。

第一階層の地表部から中央霊廟を通り、第二層。第三層と、守護者

にも合わないように、最短距離を進んでいく、第5階層の吹雪に対しては上着を準備したが、その時、アイテムボックスに手をつ突つ込む仕草を見て、シャドーデーモンも何やら彼らなりに得心がいった様子で、彼ら同士で視線を交わし、頷いていた。

そして、長い長い道程を進んだ先、ここは数えたところ、懐かしの第九階層、さらには目の前に扉……こつて何の部屋だったか……と思っ  
ていると、扉は開かれ……中に居た人物が目に入る……豪華な……漆黒の  
ローブを身にまとい……手にはガントレット……顔には……

「ブフオ!!」

(やばい、思わず吹き出してしまった。)

(だっていきなり出迎えて嫉妬マスクなんて被ったまま振り向かれたら、そりやく噴き出すでしょ?!?)

思いつきり噴き出した相手にどうい感情を覚えたのか……その目の前の相手はこう言葉をかけてくる。

「なるほど……さすがにこのマスクのことは知っているようだな……ということはやはりプレイヤーか?」

(うわあ……なんかやたら重々しい口調だぞ? でもこの感じ、どこかで……誰だったっけ? あのローブも見覚えあるような……)

「ああ、ハイ「元プレイヤー」って言った方がいいんでしょうかね? 実に3年ぶりにこのアバターですよ。」

「アバターって言う割に、人間の姿のようですが?」

(冷静な人だなあ〜…そこをつつこんできたかあ〜…)

「ええ、ハイ…これは仮初めの姿でしてね、いわゆる『世を忍ぶ仮の姿、しかしてその実態は!』ってやつですよ」

「ああ、懐かしいですね、そのセリフ…よく使ってた人がこのギルドにもいましたよ。」

少し顔を上に向けて、何か遠くを見るような感じで物思いにふける目の前の人物、そしてそれに応えるように偽エルヤーはこう返答する。

「ギルド、アインズ・ウール・ゴウン…ですね？」

「ええ…あなたはそのギルドのことはどの程度ご存知で？」

仮面の奥で目が光ったような気がした。

「そうですね…懐かしいギルドですよ、私も昔、お世話になってましてね…私が離れてから3年で、このギルドがどうい道歩んできたか…私にはわかりませんが…」

自然と顔が下を向いてしまう…申し訳なさと、ここに自分が居て、本当にいいのだろうか?という疑念。

「となると、あなたは『異形種』ということで間違いはない、そういうことですか?」

「ええ…本当の姿は…こういう感じなのでね、あまり周囲の人を無闇に驚かさないうように、人の姿を借りてたんですよ」

そう言っ、元の姿に戻る…かろうじて、人体の構成はしているが、体中、口だらけで…口には牙がビッシリと生えており、ガチガチと噛

み鳴らしている。

「なるほど【アビスズ・ブレデター深淵の捕食者】でしたか…、そうすると先程の姿は【擬態】のスキルで変えていたようですね。よろしければ、ギルドメンバーだった時のお名前をお尋ねしても？」

「あ、そうでしたね、名前も名乗ってませんでしたか…それは失礼しました。あ、でもこれはこっちの世界に来て仕様の変わった【捕食】のスキルの延長で、【擬態】じゃくありませんか？ 擬態でも同じ姿は取れますが…それよりこっちの方が性能が上みたいなので…、それから私はベルリバーって名乗っておりました、私の知ってるメンバーは今いったい何人くらい残っているのか…」

「やはり、ベルリバーさんでしたか…おかえりなさい…ベルリバーさん、ようこそ『ナザリツク地下大墳墓』へ…あなたを歓迎します！」  
そう朗らかに語り掛けてくる声を聞いた瞬間…その時初めて気が付いた…そう、あの重々しい声は、PVPをする時によくギルド長が演じていた「魔王ロール」の時の声だったと…

ゆつくりと嫉妬マスクを外し…素顔をさらした時に見えたのは…  
なつかしいドクロの顔だった…。

「モモ…ンガ…さん、なんですか？ 本物ですか？」 思わず確認してしまおう。

このギルドに最後まで残っていてくれたのだろう…それならばそんな人はこの人しかないじゃないか…それでも確認せずにはいられない。

「ハイ、ベルリバーさん…ずっと待ってましたよ、私はこっちに来て、もうそろそろ3年になりそうかな？…つてくらいですかね？」

ローブの前を閉めていたのを元に戻し、懐かしいあの輝き…モモンガ玉を見せてくれる。 まちがいなくモモンガさんだ…

「遅くなつてすみません…最終日も…ログインしたかつたんですが…、襲われて、命を奪われてしまったようです…気が付いたら、この世界でした。」

あまりに申し訳ない気分で顔を上げられない私の肩にそつと骨の手を乗せてくれて…

「大丈夫ですよ、気にしないでください、こうしてここに居るだけで嬉しいんですから…」…と、そう言ってくれた。

「やっぱりモモンガさんはモモンガさんですね、変わってないようで自分も嬉しいです。」

「イヤ、自分は変わりましたよ？ 今はモモンガじゃなく「アインズ・ウール・ゴウン」と名乗ってますしね」

「えーギルドを名乗ってるんですか？それじゃ、アインズさまって呼んだ方が？」

と驚く私に『『さま』はよしてください、『さん』の方でいいですよ。』と笑いながら言ってくれるアインズさん。

「それにしても、どうして私がこの世界に来てるってわかつたんです？」

(それがどうしても気になるんだよなあ)

「だって、ベルリバーさん、インテリアガチャのアイテム、水晶玉にしてこつちの世界の人に渡したでしょ？」

いたずらっぽく骨の指を突き付けてくるギルドマスター。



「その水晶玉がうちの傘下の鑑定屋に持ち込まれてですね？ それを私が鑑定したら製作者の項目にベルリバーさんの名前があるじゃないですか、それで分かったんですよ。」

それで、居ても立っても居られなくなって、シャドウデーモンを動員して、探させていたんだそうさ。

「そっかあ〜アルシエちゃんが、私とモ…じゃなかったアインズさんとを引き合わせてくれたってことですね。」

「ああ、その子「アルシエ」って名前なんですね、憶えておきましょう。今度、その子とも会うことになってるんですよ、ここに招待してるんです。」

「珍しいですね、人間をここに招待するだなんて」

「イヤイヤこっちに来てからはそうでもないですよ？ この前、たまにたま助けた村娘と、こっちでギルドのためにポーション作成をしてくれてる夫婦を招待してますしね。」

「このギルドも随分と開けてきたってことですね、ワンマン社長って感じですか？」

「つい、そうからかうように言っちゃってしまい、まずかったか！と思ってしまっう。」

今までの会話でギルドメンバーの話題は一度も出ていない…ということは…「ずっと待ってました」あの言葉の意味は…きっとそういうことなんだろうに…と少し気が重くなっていると…

「そうでもないですよ…デミウルゴスやアルベドもよくやってくれて

ますからね」 と信じられない言葉が聞こえた…頭の中で何度も反芻する。

「え？それって…NPC…ですよね？」と意味が分からずに尋ねると…

「ああ、こっちではNPC達は自分の意思を持って動いてるんですよ、設定に沿っていたり製作者の性格を強く引き継いでたりしてますけどね。

すると嬉しそうにNPCについてもアインズさんは語って聞かせてくれる。

「ホラ、たちさんのNPCであるセバス…覚えてます？ あれとウルベルトさんのデミウルゴス…あの二人って、創造主のプレイヤー同様、水と油なんですよ！」

「え？ あの二人のNPC、仲が悪いんですか？」

「ま、時々は衝突していますが、私が「兎戯は止めよ！」とか「騒々しい、静かにせよ！」って言えば止めますからね、そこまで深刻じゃありません、それだけじゃなくてですね、ホワイトブリムさんが作成に関わった一般メイド達なんて、そういうクラスがあるわけでもないのに、絵を書いたり、デザインを書かせたり、衣装を選んだりする時、かなり役立ってますよ、ヘロヘロさんが大きく関わった一般メイドの方は細かい作業するの好きだし、ク・ドウ・グラスさんが関わったメイド達は、裁縫とか、衣装の製作や、メイド達の身に着ける小物なんかを作るのにも彼女らは力を貸すって具合で…、意外な所では、ウルベルトさんの創ったデミウルゴスと、武人建御雷さんの創ったコキュートスは通じるものがあるみたいで、時々Barに行ってみたり、相談とかもできる仲みたいですよ？ …まあ、相談するのは言わずもがな、コキュートスの方が多いいみたいですが…、それもそうです

よね、創造者は、どっちも「たっちさん」に対抗していた人って共通項があったんですし、精神的に近いものでもあったんじゃないかってオレは思うんですよね。」

…すごい爆弾発言を聞いてしまった…

それじゃくアインズさんが認めてくれても、このギルドを辞めてしまった自分には…、ノコノコ今更顔を出しても彼らは認めてくれないんじゃないだろうか…

(アインズさんと違って、自分はギルドを捨て、NPC達を見限ってしまったようなものだと思われてても可変しく無いんだ…所詮ゲームの世界だからと、軽視してしまった報いか…きつと恨まれてるかもしれない)

「どうしました？ ベルリバーさん？ そんな驚きました？ 私も初めは驚いて強制的に感情を鎮静化させられましたよ」

話に聞くとアインズさんはアンデッドの特性なのか…感情が激しくなると、抑制されるらしい…食べ物食べられないことももどかしく思っているということも話してくれた。

目下、食べ物や飲み物の「味」というものの認識が最近薄れてきている気がして、そんな自分に不安を覚えているらしい。

(ギルドに戻るに際して、自分に出来ることはなにかないだろうか…??)

そう考えていると、頭の中で〈メッセージ〉のコールが響く。

「あ、アインズさん、〈メッセージ〉が来たみたいですが、ちよつと待っていてください?」

〈メッセージ〉に出てみると、ルチルが魔法で知らせようと発信してくれた

ようだ。

『ヴェールさん？ 今出て着替えてるところですからね、もお少ししたら、戻ってきて大丈夫ですよ〜♪』

（うん、すごく充実した気持ちでいるようだ、お風呂に入れて相当満足したみたいだな。）

「うん、わかった、そうしたら、キミらもまだ身支度や着替えもあるだろうし、様子を見てそっちに戻るからね、連絡してくれてありがとう。」

そう言って〈メッセージ伝言〉を切る。

「すみません、アインズさん、もう少しゆっくり話したかったですが、チームメイトが呼んでるので一旦、戻ります。」

「そうですか…って、え?? ベルリバーさん、なにかチーム組んでるんですか?」

「? ええ、今ちよつと…ホラ、さつき見せたじゃないですか人間の姿、アイツ帝国のワーカーだったんですけどね? そいつと入れ替わって、ワーカー始めたんです」

「あ、そうだったんですか、それは初耳でしたよ、そっちの冒険譚なんかも今度聞かせてくれませんか?」

アインズさんも、相当さみしそうだな…そりゃ3年もこのナザリツクで自分以外はNPCしかいない環境に居続けてたんじゃ、息も詰まるよな…。

「それはいいですが、まだワーカーになって自分個人は一週間…どこ

ろか5日も経ってませんよ？3日過ぎてるかどうか…って感じですし…といつても、元々のコイツ（と言って、【捕食】スキルの変装技能を使い、エルヤーの姿になる）…の実績があるみたいで、それなりの評価はあるようですね、なのでワーカー1年生からの出発じゃないのには運が良かったなとは思ってますが。」

そう報告すると、アインズさんが少し声を落としてこう切り出してくる。

「正直に言うと、ベルリバーさんにもこつちに復帰してもらいたいって気持ちはあるんですけどね、それじゃ、そつちの方の引継ぎもうまくやって引き際をきっちり終わらせておかなきゃ、世間的にマズいですよね…」

（アインズさん、会社員の時の認識、まだひきずってる感じだな、ギルマスの時から変なところで考え込んだり、悩んだりすることあったから心配だな…。）

「そうですね、今すぐ戻るって言うわけには行きませんが、ちよつと考えていることがあるんですよ、今度、ひよつとしたらこつちの墳墓に遺跡調査で乗り込んでくることになるかもしれない…」

そう言うと「え!!ベルリバーさんがナザリックに攻め込んで来るんですか？それって守護者達が驚きますよ？」と、少しうろたえている。（なんか変な誤解してそうだから、説明しておこう、お互いこつちの世界でギスギスしたくないしな…。）

「実は、まだ詳しい内容自体を聞いてないので、本当にココになるかはわかりませんが…新しい未発見の遺跡が発見されて、それが墳墓っぽい…って依頼がありましたね、自分も『ひよつとしてナザリックなのか?』って思っ居ても立っても居られなかったんですよ、さっきまで…、だから、本当にココになる様だったらちよつとしたイベントも考えてるんです、よかつたら時間見つけてこつちにまた顔出したいん

で、よかつたら相談乗ってくれませんか？」

「ええ、いいですよ、その時は多分、困ったことになるかもしれないで、その為の必要アイテムも用意しておきますから、それよかつたら使ってから来てください。」

「困ったこと？」

ベルリバーは頭をひねる、何かそんな大それたことになるだろうか…と。

「実は、NPC達ってギルメンの気配って、感覚で…というか、オーラみたいなものを天然で感知してわかっちゃうみたいなんですよね、距離が離れてても…なので、今もこの部屋の護衛をさせるNPCには「中のことは大丈夫だ、様子を探ることも絶対してはならん！」って厳命して扉の外に居てもらってるんです。」

「アインズさんも大変ですね…ボクも早いトコ「モモンガさん」じゃないく「アインズさん呼び」に慣れておかないとイケませんね…練習しておきましょう。」

「それでは、またしばしのお別れですね、『今回はログインが遠のく』なんて事象は起こらないと思うので、そこは安心ですが…くれぐれも気を付けてくださいね。」

「ええ。もちろん…せっかくこんな素晴らしい世界に来られたんです、死んだりしたら、それこそもったいないですよ、まだまだ夜空も昼の空も、見足りないですからね。」

「ああ、わかります、こっちの夜空、キレイだと思います。…ブループレネットさんにも見せたかったですよね？」

「あ、ボクもそれ、同じこと思いました！やっぱりそつちに考え行つちやいますよね」

そう二人で言い合い、ひとしきり笑った後、モモンガさんが名残惜しげにこう切り出してきた。

「すみません、引き留めちゃって、メンバーさん達が待つてらっしやるんでしたよね、早く帰らないと心配させてしまっても悪いです、それではまた…ベルリバーさん。」

「ええ、またです、モモ…じゃなかった、アインズさん…、ダメですね、とっさになると言いそうになっちゃって、やっぱり練習が必要だったことですね。」

「…また、来てくれますよね？ ベルリバーさん」

（少し寂しそうだ、やっぱりメンバーがいらないと同じ立場で色々吐き出せる相手が居ないんだろうなあ〜）

「大丈夫ですよ、また近いうちに顔出しますから、もうあの巨大複合企業にこき使われたり悩まされることもないんですし…こっちの生活を満喫させてもらいますよ。」

「それはいいですね、自分も時々、冒険者として活動する日もあるんです、ユグドラシルと違って、夢のない仕事内容ですが…外に出て、自然を見て肌で感じるだけでも新鮮で違いますからね、気分転換が必要だつて点は同感です。」

「まあ、とりあえず、さっき言ったイベントは守護者たちには今はナイショにしてください、サプライズとして驚かせたくありませんか？ ビッグイベントつてやつです！」

「あ、それ、いいかもしれませんねえ、私も一枚かませてくださいー！」  
(アインズさんも乗り気っぽいな、よかった、これでこのギルドに戻れるのをNPCのみんなに認めさせることができれば…)

「もちろんですよ、アインズさんの協力ナシじゃ、このイベントは成り立ちませんからね、この世界に来て初めての「ギルドイベント」って事ですね、楽しみにしてますよ？ギルドマスター？」

「任せてくださいよ、ベルリバーさん！」

そう言つてがちり握手を交わしたあと「また後で」という言葉を残し、ナザリツクを出た。

アインズさんに勧められ、扉から出て、NPC達に見られないように…という気遣いで窓から外に〈飛行〉で飛び立つ。

そして飛行しながらへ上<sup>グレートテレポーション</sup>位<sup>ポーション</sup>転<sup>フライング</sup>移でコテージまで戻り、エルフたちのもとに戻ると…コテージへと入る…そして、湯上りの彼女たちに迎えられ、夜を明かすことになった。

結局居心地がよく、宿屋には戻らずにここに泊まってしまうことになった一同の夜がそのまま、ふけていくのであった。

ベルリバーはそんな中でも一人、物思いに浸っていた。

かつての拠点だった場所とはいえ、身分を隠して行く以上、ある程度の身の危険は覚悟しておくべきだ…守護者や領域守護者とかでない限り、自分であればそう難しくもないが…もし、彼女たちの身に…ということを見ると、どうしても、レベルアップは必要となるな…と思う…問題はどこでそれをするか…だ。

それに…、自分は、守護者のみんなにどう思われているのか…最後



まで残っていたアインズさんは快く思われているだろうが…

今も、ギルドに名前は残しているとはいえ…ずっと現れることになくなったギルメン…、もしかすると、相応の代償を払う必要はあるかもしれない…。

自分が傷付くこと自体はそれほど大変なことじゃない、耐えられる…。

だが、エルフの3人に矛先が向くことだけは…と思いつつ、ふと、とあるコトを思い出す。

そういえば、NPC達のカルマ値って、8割以上がマイナスとかじゃなかったか？

…と

(普通に、凶悪とか極悪とかがそこいら中に、ゴロゴロ居たような…)

もし、自分が恨まれてて、「彼女たちだけは…」なんて口走ろうものなら…

「それは丁度いい、それなら私たちの今までの苦しみを彼女たちの痛みを通して、貴方にも、その心の痛み、しっかり感じ取ってもらいましょうか？」と言い出す悪魔の姿を幻想する…ありえそうで怖い…。

と中々寝付けない至高の御方の1人がベッドに…左右をエルフの娘たちに挟まれながら悩ましい夜を過ごすことになるのだった。



は全部吸収させてもらったから、見た目自体はかわっても、戦い方が変わらないのはありがたいよな。」

「次はどんなお姿に変わるおつもりなのですか?」

「ん〜…候補はあるんだけど、見た目魔法詠唱者マジックキャスターまんまだからなあ〜  
…それで剣を使うとか…「詐欺」とか言われそう、まあボクは魔法も使えるから完全詐欺って訳でもないんだけどね」

ディーネの問いかけに歯切れ悪く答えることになるも、その姿になった場合の危険は「あの墳墓において」自殺行為になりかねないという思いからやはり候補から外そうかと思っているとルチルから一つの質問を問いかけられた。

「前から、気になってた点なんですけど「吸収」って言ってた外見になるのと、【擬態】って言ってた方の外見になるのと、どこが違うんですか?」

「あれ?そうか、ボクは知ってるけど、そこらへん説明まではしたことなかったね。」

改めて再認識させられ、どっちがどう違うのかの説明に入る。

・「吸収」(【捕食】)のスキルで消化した状態を柔らかく表現しただけの場合、身体的特徴、外見、経験、声、スキル、タレント、魔法、武技、それら全ての能力を新しく吸収した1人分の範囲内で全て、もしくは好きな組み合わせで実行、再現できる。(声なども同じになる、クセなどはさすがにわからない)

・「吸収」した者の記憶や秘密までは読むことはできない。

・「吸収」の対象を新しく更新した場合、直前までの「1人分の能力」の全てが消去され、最新で「吸収」した者の全ての「能力」と書き変わる。

・「吸収」でも「捕獲」状態でも武器、防具なども一緒に取り込んだ場合は、それも候補に挙がり、そのままの性能で再現が可能。(「捕獲」の場合は武器か防具かを選ぶと他が選べない)

・「捕獲」の場合、体内で傷つかずに老化も傷の進行も何もなく「保管状態」になる、身の安全はあるが、保管してる間は外見などの内ど

れか一つのパーツしか選択できない。

・「保管状態」での外見を選んだ場合、パーツごとに実行し、対象の選んだ特徴そのまま（全体の完全複製）を再現することが可能。

・【擬態】の場合、見た目だけ真似するのが可能なだけで、能力や記憶等は反映されず、声なども変化せず、本来のままの声で変わることはない。

・【擬態】で真似した場合の武具や防具はハリボテで、見た目だけそのまま、実体はあるものの「ナマクラ」以下

「とまあ……こんな感じかな？　もっとボクの知らない応用とかもできそうだけど……検証も実験もあまりしてないんだ……危険なことかもしれないし、みんなにも……ましてや無関係の人にそんなの頼むわけにもいかないしね」

聞きながら、なにやら口元に手を当ててブツブツ言ってるルチルに、「え〜つと、そうだとすると……」と言いながら中空を見つめ考えを巡らせてるディーネが対照的だった。

「ヴェールさんは、体の中に「保管」できる対象は1体以上で確かめたことはないんですか？」

「ああ……そういや、テストしたのは川だか沢だかを泳ぐ魚だったから、一尾でしか試さなかったなあ……どうなんだろう？」

「もしよろしければ、私たちのこと、食べたりしてみます？　もちろん「捕獲」的な意味で……ですよ？」といたずらっぽい笑みを見せるディーネ。

「ん〜、それもいいけど、目を開けると、大口が「ガパア〜」となつて迫ってくるから、怖いんじゃないかな？　平気？」

「ヴェールさんなら平気ですよ、本当に食べたりはしないってちゃんと思ってますし、ちゃんと身体もキレイにしましたしね♪」とずいぶん前向きなセピア

「ん〜……じや〜ちよつと試してみるだけだよ？　すぐに外に出してあげるからね？」

「「ハイ、どうぞ」」と言って3人とも目をつぶってくれる。

「では…失礼して…行きますよお」…かばあ〜…パツクン。

うわああ…ノド越しが…すごい申し訳なく感じる……では【捕食】スキル…捕獲。

するとあの時同様に頭にアナウンスが流れる。

いつ聞いても、案内妖精《アナーニイ》の声にしか聞こえない。

『新たに捕獲対象が増やされました。消化されているデータが残っているため、容量はレベル分の半分となります。今回でクイックセーブ欄の1・2・3・4が埋まり、残りは46です。』

……………絶句した。

なにそれ？クイックセーブ？そんな機能、前の時には言わなかったじゃん！　と思っていると、続きのアナウンスが続く。

『繰り返しとなりますが、一度に読み込める身体的特徴は一つだけとなります。別の部位を選びますと、1つ前に選択した部分はキャンセルとなりますのでご注意ください。』

（えええ〜？　クイックセーブなんて聞いてないんだけど…どうすんだこれ…）

そう思い、クイックセーブ欄「1」に意識を向けてみると「魚の頭」がイメージで浮かぶ……ああ、そつか、それ以外に選ばなかったからなく…それだけが保存されてるわけか…

（実際に泳ぐことも考えて「尾びれ」も選ぶべきだったか？　まあそれはまた今度だな…）

ええ〜つと「2」の方は…セピアか…、それじゃ〜エルフの耳を再現♪

エルヤーの顔（消化版）にエルフの耳（捕獲版）を重ねられるのか…これは新発見だ!!

次は…セピアのブラウン髪を再現だな…と意識して選び直すと、今度はエルフの耳が消え、エルヤー顔なのに、髪が茶色のショートに変化する。

「ん〜…これはナシだな…」

次はセピアの顔…と選ぶと、エルヤーの髪型でセピアの顔になる…

(なんかモニタージュ的な気分になって来たな…)

しばらくの間、あらゆる身体的特徴をセピア、ルチル、ディーネ(捕獲したのは同時だったので同時に捕獲した場合は恐らく50音順で記録されるらしい)と、入れ替え、読み込みし直したりして、あらゆる組み合わせをしておく…クイツクセーブ欄の中で選べる項目が増えていることに気づいた。

(やはり、捕獲中に試した部位を覚えていられる機能みたいだな…試していない内に消化したり、吐き出して逃がした場合は、そこまで、つて感じのようだ。)

「それにしても選べる身体的特徴の数が無制限ってすごくないか？

…まあ、だから選べるパーツは一つってことなんだろうけど…」

(いつまでも遊んでるわけにもいかないな…彼女たちは好意で協力してくれたんだし…これ以上拘束するのはさすがに心が痛む。)

いつぞやのように「ぼうええ！」と表現するしかない、なんともいえない音と共に3人が吐き出される…魚の時同様、飲み込む前と比べても何の変化もない。胃液のようなもので濡れてもおらず、ただ眠っているだけのようだ。

とりあえずは安心して元の姿…じゃなく「エルヤー」の姿そのままに戻す。

顔の感触を手探りで調べ、頬や、後頭部に口がないことを確認して、3人を起こす行動に移す。

セピア…揺するととりあえず目を開くも、放心状態。

ルチル…ゆさゆさ揺らし、起こすもまだどこかボヤクとしている。

ディーネが最後まで起きなかつたが、なんとか目を覚ましてくれた。

「ヴェール様の中、ステキでしたあ…、居心地よくて、まどろみの中で陽の光に包まれてるような…周囲を樹々に囲まれてる中での安らかな感じましたあ」と3人ともずくつとそのままでもいいかも、的な想いにとらわれてしまっていたようだ。

「3人とも協力してくれてありがとう、新しい可能性が見つかったよ、もつと試す人が多くなれば、もつと選択肢は広くなりそうだ。」

「ホントですか？ それはよかったです…」まだどこか意識が覚醒しきつてないのか、ディーネが寄りかかってスヤスヤ状態になろうとしている。

「じゃ、3人とももう少し休んでいいよ、そろそろチェックアウトの時間だけど、あとちよつとくらい、店主に延長料金を払っておくから」

「「はあ、い…」と、3人が3人とも、もう少しゆったり休みたいモードに入ってしまったようで、ベッドにもぐりこんでいく。

「せめて、ゆつくり眠らせてあげないとな」

アイテムボックスから〈無臭<sup>オーダレス</sup>〉の魔法効果が込められている香水瓶を出し、3つのベッドに降りかけ〈清潔<sup>クリーン</sup>〉のスクロールでベッドをキレイに仕上げ、部屋を出る。

もちろん、店主には延長の代金を払うことは忘れない。

一芝居うって周囲の人間たちにそうとはわからないように店主のエプロンのポケットに延長料金をつっこんどいた。

店主も2度目ともなるとなくそうされるとわかったのか、それに対応を合わせてくれるようになった。

少し芝居がやりやすくなったな。

周囲から注がれる視線は冷たいものだったが、それはいい。

墳墓の調査で、前金を受け取るまでのガマンだからな…好きなように思っているがいいさ、としか思えなかった。

(…それにしても3人同時に「捕獲」してる場合は1人につき再現するパーツは1つ、3人だと計3つにできるなんて応用ができるとは思わなかったな。そうそう試すこともないだろうけど…)

あ、そうだ…せっかく1人になれたんだし、アルシエちゃんにも連絡とつてみるか、近いうちアインズさんと会うみたいだし…それに關しても少し話をしてみたいからな、なんて思い、早速〈伝言<sup>メッセージ</sup>〉を送つて、うっかり「ちゃん」呼びをしてダメ出しをされてしまう浮かれ具合だった。

…どんな姿で会いに行こうかな？…とか思いながら

色々考えている内に、結局いつもどおり「偽エルヤー」でいくことにした。

変に奇をてらうよりもいつも通りでいた方がなんとなく落ち着くというか、なんとなくの座りの悪さみたいなものを感じないで済みそうだからだ。

待ち合わせる場所はリアル時代ではアーコロジー内しか存在することが許されなかったオープンテラスのカフェ風にされてる店構え、内容もソフトドリンクの提供がメインなので、アルシエちゃんにもちようどいいだろう。

テーブルに座り、もうこの世界に来て普通になりつつある「外の空気を全身で浴び、肺いっぱい息を吸う」という『元居た世界では非日常』な行動を楽しんでいると：「こちらをどうぞ」という声が聞こえ、目を開けた。すると、夢にまで見た『ウエイトレスのお姉さんに注文をお願いする』というシチュエーションがすぐそばまで忍び寄っていたことに少しドギマギする。

(むこうじゃ、こんなこと経験ないもんなあ～：)

などと感慨深げにしていると：「なにかご注文はお決まりでしょうか？」と催促されているようだ：差し出されたメニューを見るも（：読めないし～）：などと、思っただけでも言えないベルリバーは、注文を悩むように口元に手を添えて〈言語読解〉リードラングを小声で唱える：

しかしやはり、読めてもどんな飲み物だかさっぱりイメージできない名称ばかりであったため、仕方ないと心に決め「人と待ち合わせなのでこれでなければ、というものはありませんね、お姉さんのオススメをお願いします。」と言うとメニューを引つ込め「かしこまりました、それでは少々お待ちを：」と少し会釈をして去っていく。

意識を「空気を味わう」ことから外に目を向けると：オープンテラスの方に近づいて来る人：アルシエちゃんの姿が見えた。

早速〈伝言〉メッセージを送り、すでに来ていることを伝えて大きく手を振つ



てあげるとこちらに気が付いてくれたようだ。小走りに近寄ってきてくれる。

なんか、ちよつと見ない内に仕草が少しだけ可愛くなつてないか？  
そう見えるのは自分だけなのだろうか？などと思つていと…

「スウズさん、人間そつくりに変われるようになった？、見違えた。」と  
なにやら嬉しそうだ、そんな表情を見ているとこつちもなんか嬉しく  
なつちやうな。

「うん、この人の全てを引き継いで、これからはあまり酷いことはしな  
いように心がけて行動してるんだ。ただでさえ、いろいろ怖がられる  
ものだから…元々があんな姿だしさ」

（実際には、説明はしただけでエルフの娘さん達にも正体は見せてな  
いんだよな、どんな反応されるか怖いってこともあるんだけど…本来  
の姿を知つてるのはフォーサイトの面々だけか…）

「うん、何も知らないであの見た目だと、確かに怖がられると思う…私  
も最初は驚いた。今はマジックアイテムで魔力を隠してる？」

「うん、なにかと目立ちたくはないからさ、噂によるとアルシエちゃん  
のお師匠さんも有名人で同じ目を持つてるみたいじゃない？ 変に  
目を付けられたくないしね」

「もお…『ちゃん』呼ばわりはやめてつて言った…、でももういい、妹  
たちの件もあるから、特例で許す。」

（やつぱりジエツト君に対するみたいなたしな話し方はムリ…どこか遠慮が  
ちになつちやう。）

「ありがとう、それなら、これからはボクのことも「スウズ」じやくな  
くて「ヴェールリバー」の「ヴェール」の方で呼んでもらえると嬉し  
いんだけどな。」

「いいの？ 名前の方で呼んで…」とどこか遠慮がちにしているのが  
気になるが…

「いいんだよ、今、チームを組んでいるみんなも今は「ヴェールさん」つ  
て呼んでくれてるしね、その方が気が楽だし…なんか呼ばれ方が違  
うと調子が狂つちやうよ」

「そうですね… それなら、今から「ヴェールさん」つて呼ばせてもら

うことにする。」

どこか晴れやかな、なにかを吹っ切れたような明るい表情だ：以前の  
ような表情の陰に見え隠れしていた不安を抱えたままのような印  
象はすっかり消えている。

「ところで、その見た目はいつぐらいから？」と急な質問を投げかけて  
くる。

「ん？これ？ 帝都に入る少し前だよ、途中で帝都までの道順を教え  
てもらって同行してくれた人が居ただけど、「モンスターに目を付  
けられた」みたいでね、致命傷を負って助けられなかったんだ、せめ  
ても供養に、と思って「彼がこの世界で生きていた証」として、自  
分の中に取り込んで、今に至るって感じかな」

（正直に言うと、アルシエちゃん年齢的にも、思春期と言つていい年  
齢から判断しても：言わないでいい内容が含まれてるからな、エルヤ  
ーの人間性とか：知らないでいいならその方がいい。）

「そうですね、あれだとやはり妹たちを救ってくれたのはヴェールさ  
んなんですね、ありがとう。」

ペコリと頭を下げてくれるアルシエちゃん

「ああ、さっきの「妹たちの件」ってそういう意味だったんだね、一瞬  
なんのことかと思っただけど…」

「でも、否定がされなかった…だからそれで確信ができた。やはり助  
けてくれたのはこの人だったって…」

妹さんたちのことが無事だから、こんな吹っ切れた表情をしてるん  
だろうな。 それなら救った甲斐もあるというものだよ。

「どこかで見た覚えのある感じの子たちだなって最初に会った時に感  
じてただけだね、その正体がなかなか思い出せなくてさ、モヤ  
モヤしてただけけど、あの時にアルシエちゃんが妹さんに振り向いた  
のを見た時やつとわかったよ。そりゃく似てるはずだなんてね。」

「そんなに似てるの？ 少し嬉しい、妹たちは私の宝だから。」

やはり妹さんのことになる嬉しそうだな、これなら、今も妹さん  
たちは無事なんだろう。

話が止まらず、盛り上がっているとそこに飲み物が運ばれてきた。

「こちらおすすめのアイスマキヤティアとなります、どうぞお召し上がりください。」

「ああ、ありがとう、悪いですが、同じものをもう一ついただけますか？待ち人が来てくれたので振る舞いたいです。」

笑顔でそう伝えるとウェイトレスさんもそれは見えていたよう。「かしこまりました、それではもう一つ、お作りしてきます、しばしお待ちを…」と言ってそそくさと去っていく。

「ええ？ それは気が引ける…これはけっこう高い飲み物…」  
(すごく驚いているけど…そんなに高いかなあ？ 銀貨とか金貨つて言われても「円」じゃないし、ピンとこないんだよな。)

「せっかくの再会なんだし、このくらいはごちそうさせてよ。 初めの時は大したおもてなしもできなかったんだからさ」

多少強引かもしれないが、そうやって納得させて奢らせてもらうことにする。そうじゃないと、本題の情報も聞きづらいし…

「そんなこと気にしないでいいのに…でもわかった、感謝する」

「話は戻るけど、妹さんたちは大丈夫そうだね…元気そうならなによりだよ。」

「うん、今は昔からの知り合いの家にお世話になっている、すごい出世したみたいで信じられないような家に住んでいる」

「信じられない家？」

「そう、魔法みたいな家…、給排水も魔法で全部解決される、外からの見た目と内装が違って、平屋っぽいけど2階建てになって…建物の外見の倍くらいの広さはある…とにかくすごい」

(かなり興奮気味だけど…それって拠点作成系のマジックアイテムじゃないか？ この世界にもそれを作れるだけの技術力があるのだろうか？)

「それって、普通に考えて、マジックアイテムのお店とかで買えたりするものなの？」と素直な感想を質問してみると…

「いや、どんな魔化をしたのか謎、どういう魔法の効果でそんな広さにしてるのかも私なんかでは全然わからない…きつと数千どころか数

万の金貨を積んでも見つからない…」

(やはり、そうだよな…ともすると、それもプレイヤーの息が…つていうか、そういうえばアインズさんに招待されてるって話だったよな、アルシエちゃん。)

「そういえば、小耳に挟んだんだけどすごい人に招待を受けてるんだって？アルシエちゃん」

「ええ!?　なんで知ってる?」

(すごい驚きようだ、本題をいきなり切り出しすぎたか…)

「最近、知り合ったばかりの知人がそんなこと言ってたからさ、ボクがあげた水晶玉を鑑定依頼に来た人を自分の館に今度招待することになったんだ。ってね」

「そう…、世間は狭いってホントだった…まさかそんな繋がりがあつたなんて」

(こっちもビックリだよ、アインズさんの協力者をしてる「人間種」が、実はアルシエちゃんの昔からの知り合いだったなんて。狭いどころの話じゃない気がするよ)

2人とも同じ感想を抱き、わずかな時間、共通の秘密を共有できたかのような空気を感じていると、さつき注文したマキャティアがちょうどテーブルに運ばれてきた。

「おまたせしました、追加のアイスマキャティアでございます。」

「ああ、ありがとう…何度も足を運ばせて悪かったですね。」

「いえ、そのようなことは…それではごゆっくりどうぞ…」

と何ごともなかったかのように仕事に戻っていく…プロだなくと思ってしまう。

「ところで、さつきからヴェールさんの話し方が変… ウェイトレスさんへの言動が私と違う気がする…」

「ああこの話し方?　これは外向きの話し方だよ、この姿でいる間は、ワーカーチーム『天武』のエルヤーでいなきゃならないからね。その人っぽい言葉遣いを心がけているってことなんだよ」

(そうなんだ、ちよつと安心した、色目を使ってるわけじゃなかった…って、なんで私ここで安心してらんだらう…?)

「ああ、ヴェールさんだとしか思ってたから気にならなかった、ワーカーになった?」

「そうなんだよ、だから、あの墳墓への調査に行くまでは『天武』ってことにしておいて、フォーサイトの人達と墳墓内で合流して他のチームと別行動ができ次第、新生チームとして、デビューをしちやおうかと思ってるね。」

「その時は、その外見も同じ? それとも別人?」

「そうなんだよね、それも悩んでる感じ…それと新生チーム名の方もね。」

「チーム名を新しくして、再デビュー?」

「まあ、それもいいかな? ってね…」

ヴェールさんは腕を組んでしきりに悩んでいる、何か思いつかないことでもあるのかな?

「どんな名前にしたいのかにもよる…チーム名…」

「名前の1つに「牙」って入れるのはどうかって案はあるんだけど、それ以外はまだ…かな」

(バツが悪そうというか照れくさそうな感じで頭をポリポリ掻いている、いいのが思い付かないのかな?)

「それなら、『バニツシャーファング』とかどう?」

「え? それどういう意味が含まれてるんです?」

「ええ…と『天武』っていう名前は帝国では基本、すごく珍しい名称…、その文字は例えて言えば、スレイン法国の「神聖文字」と言われている種類に属する言語形態…」

「ああ、たしか人間至上主義で人の種類以外の繁栄は認めない、的な教義なんでしたっけ?」

最初に出会ったこのフォーサイトの人たちに教えられた知識の中にあつた内容を思い出す。

「そう、だから敢えて帝国風な言い回しにして…「牙を研ぎ澄ます者」という意味で考えた…どうでしょう?」

…正しくは「バーニツシュアファング」が正式な言い回しですけど…と小さく注釈も入れてくれた。

(少し自信は無さげにも見えるが、一生懸命考えてくれたんだろうし、これは持つて帰って、後でみんなに相談してみよう。)

「あ、でも少し言い方を間違えると「牙を消す者」または「牙を失った者」あとは「牙の消滅した者」という意味にもなったりする、気を付けて」

「あつははは、それはいい、ボクを表すのに、どっちに転んでも正解じゃないか、「牙を消してる者」…か、そのまんまだし面白い!」

「いいの? そっちの意味で認知されて…」と少し心配そうだが…

「いや、本当にボクはこの名前いいと思うよ、気に入ったしね…ありがとうー! これはちゃんとチームメイト達にも相談してみるよ!」

「そんな大げさに考えなくても…いい…他にいいのがあれば、そっちを使ってくれても…」

と消え入りそうな声だが、照れくさい中にも嬉しい気持ちもあるのかもかもしれないな。

「大丈夫だよ、ボクはいい名称だとおもうよ? きつと大丈夫さ!」

なんて会話を、マキャティアを飲みながら話していて、肝心な話をしていないのに気付く。

「そういえば、招待されたのってアルシエちゃんだけ?」

と聞きたいことの前振りで聞いてみる。

「違う、妹たち2人も一緒。それと付き添いで、ジエツト君も…」

「ああ、そのジエツトって人が今回、ボクらを結び付けてくれた恩人ってことになるんだね」

(ボクにとつても感謝しなきゃならないワケだしな…その名前は覚えておこう。)

「そうなる…この4人で行くけど…チームのみんなには教えてない、秘密にしてるわけじゃない、でも言いふらすのは違う気がする…」

なんとなく気まずい気分を味わってるようだが…

「その方がいいんじゃないかな? あんまり大人数で行ってもご迷惑かもしれないしね」

アルシエちゃんと妹さんだけなら問題ないだろうけど、他のメン

バーがアインズさんの地雷を踏んだりしたら、さすがにフォローできないからなあ…

「ところでさ？アルシエちゃんに相談があるんだけど、いいかな？」

「いよいよ、本題だけど、大丈夫かな？聞いてくれるといいんだけど…」

「？…なに？ 私で協力できることなら…」

（ヴェールさんにできないことが私にできるのかな？）

「そんな大したことじゃないよ、ただ、その招待の場に『護衛』という名目で付き添わせてほしいんだ、一応姿は見えないようにして行くからさ…ね？」

頭を下げて、顔の前で手を合わせて拝むようにする。

「私の判断だけじゃ、それはなんとも…ジエツト君にも聞いてみないといけない…」

（まあ、そうだよねえ…そうになると、ちゃんとした理由付けを用意する必要があるか…、そうだ、あれを持たせよう。）

「それじゃ、これを…そのジエツト君に渡してもらえるかな？ その『護衛』の話をする時に一緒に見てもらえるようにすれば、多分意味は分かってくれると思う。」

そう言って、ヒモの絞られてる革袋を一つ、渡しておく。

「??これ、中身はなに？」

「ああ、特にこれと言った効力はないアイテムだよ、ボクの身分証明だと思ってくれればいいから…あ、一応アルシエちゃんは中身、見ないでね？」

（この子の性格からして大丈夫だと思うけど、一応念は押しておこう）  
「?? わかった…なんかよくわからないけど、ジエツト君に見せればわかるのならそうする。」

「うん、ありがとう…もしそれで返答がダメって感じならそれ以上はわがまま言わないよ、見送りに行くくらいはいいよね？ その時にも返してくれればいいからさ。」

そう言って、予めその革袋に1つのアイテムを入れておき、それを

渡しておいた。

それを見たジェット君とやらがどの程度、アインズさんと近しいかがこれでわかる。

それを見ても全くなんのことだかわかりませんでした。ってことならまあ仕方ない。

『護衛』の名目で墳墓を訪れることはそこまで重要じゃないからな。もしその「身分証明」のアイテムを見てアインズさんに報告をするとしたら、話はスムーズに進むだろう…こっちの思惑もまずはステーションに足を踏み入れる段階に入れるってことだしな。

多分、【擬態】をして景色と同化して、ニオイも熱源も誤魔化したとしても、たしかプレアデスの1人は（パーフェクト・アンソウアブル）「完全不可知化」の看破＜が使える者がいたはず…どこまでこっちの手段が通用するかだな…

アインズさんは、普通に見破ってくるだろうけど…それは全く問題ない。

だってアインズさんに会いに行くんだから、ハッキリ言っただけ見えてくれなきゃ困るし…って感じだ。

あとはあまりユグドラシルでは使わなかった（ローブ・オブ・アンスライン）「不可視化のローブ」を使ったりしてもいいだろう。

見破られても、その「身分証明」のことをアインズさんが知っていれば通すように話が通っているはずだし…

素通りできるならそれが一番って感じたが、門前払いなら、それはそれでいい…

日を改めて（メッセージ）「伝言」を送って相談ごとを持ちかけてもいいんだし…アインズさんには名目として「ギルドイベントとしてのサプライズ」ってことにしてあるけど…

きっとアインズさんの性格上、本当の目的を知ったら止められるだろう…でもこれはしなげなければいけないんだ…

そうしなければ、ボクは自分で自分を許せないから…こんな素晴らしい世界で、素晴らしい仲間たちが残してくれたNPC達と共に過ごせるなんて未来があるなら、みんなを切り捨てたりしなかったのに…そんな行動をした自分に対する、これは禊（みそぎ）だ…それだけ



はアインズさんでも止めさせるわけにはいかない…。

そうでない、自分はあのギルドに居ていい存在じゃない、許される訳はない…。

アインズさんが許してくれても…残された子供たちが許してくれなければ、あの墳墓の…円卓に戻る資格すら自分にはありはしないのだから…

結局、夕べ、一晩、ベッドで考えた結論、NPC達と話をしてみよう。それが恨み言で、自分にそれが直接降りかかって来たとしても…甘んじて受け入れよう。

唯一の気がかりは人間の見た目をして、気配を隠しての問いかけだったなら果たして守護者たちは、本音で答えてくれるだろうか…？

という部分は確かに不安だが…

しかしそれでしか自分のできる精一杯の罪滅ぼしになる方法は思いつかない…自分の悩みの回答を相手に丸投げしてる気もするが…、そう結論を出し、そう決めた。

内心でそんな思いを抱えながら、その革袋を…自分の運命をアルシエに託すのであった。

## 第15話 みんなでこつそりナザリック

話はナザリック地下大墳墓の…とある一室から始まる。

「おはようございます、アインズ様…本日はワタクシ、セヴェーネがアインズ様当番となります。どうぞよろしくお願いします。」

「ああ…そうか、シクスの次なのだから、次はセヴェーネが当番となるのであったな、うむ、朝早くから大変だろうが、頼んだぞ。」

「はい、アインズさまの1日が滞りなく進みますよう、微力ながら全力を尽くしたいと思います。エイトエツジアサシんともども、御身の傍で奉仕させていただきます。」

「あ…ああ…うむ、たのんだぞ?」

そう言っつていつもの支配者らしい座り方で執務用の椅子に腰かける。

(いつもそうだけど、いい加減、もう少し砕けて接してくれてもいいんだけどなあ…表情は素直に浮かべてくれる子や、言葉も少し柔らかくしてくれる子もいるけど、徹底してる子は徹底してるんだよなあ…、特にへろへろさんが大きく関わったメイド達…あの人の「社畜属性」を大きく引き継いでるんじゃないだろうか…?とすら邪推してしまう。)

「まあ、お前たちもそんなにかしこまらなくてもいいんだぞ? ここ9階層にまで攻めて来られる者など、この世界には恐らく居ないだろうからな…まあ警戒は決して悪いことではないんだぞ? だがあまり肩ひじ張ると疲れるだろう?」

「いいえ!絶対者たるアインズ様の当番として、本日1日を補佐させていただくという光栄な日、一瞬たりとも気を抜くなどできません。」

そんなに力入れてると疲れるだろうという思いから、少し肩の力をぬけば？という意味の言葉をいうアインズだが、「忠誠」という文字の前には無力だったようだ。

(それぞれ、特色がちがうのか？それとも『ク・ドウ・グラス製メイド』『ヘロヘロ製メイド』『ホワイトブリム製メイド』っていう種別でカテゴリ分けでもされてるのか？)

などと思っていると「コンコン」と扉をノックする音がする…セヴェーネに合図を出し、扉を開けるように促し…中に招き入れる。

「おはようございます、アインズ様、本日もまばゆいばかりのお召し物、まさにこの世の頂点にふさわしい装いかと…」

…入ってきたのは守護者統括のアルベドが謹慎中のため、その代理を頼むことになったデミウルゴスである…

「ああ、デミウルゴスか…すまないな、アルベドの代理に、牧場管理、スクロールの作成、その他もろもろ、結局お前頼りだ…」

「いえ、アインズ様、このデミウルゴス！この身のある限り、至高なる御方、アインズ様のために働けることこそ至上の喜び…その深い叡智には及ぶべくもありませんが…あらゆる状況において己の全てでアインズ様の一助になれる。それこそが私ども、守護者たる者の務めでございます。いついかなる時でもご遠慮なくお命じください、どのようなことでもこなしてご覧に入れましょう。」

「そうか、その忠義の姿勢、どの守護者達よりも…いや、どの守護者にも劣らぬものだろう…嬉しく思うぞデミウルゴス。」

(こいつも、もう少しオレへのハードル、少し下げてくれないかなあ…そんな深い叡智とか無いのに…たまたまが重なってるだけだよお)

「おお…些少なこの身にそのようなご温情溢れるお言葉、身に余る光

栄にございます。」

そう言つてわずかにヒザを曲げ、上体を倒して優雅な礼の姿勢をとる。

(デミウルゴスはさらつとした所作も嫌味がなく様になつてるよな…『あの愚息』となんでこんなにならう…いや、アイツを作つたのはオレなんだけどき!)

「うむ…まあ朝の挨拶はこの辺にしておこう、ところで先日話した招待客の件はどうなつていいる?ンファイレアの時とそう変わらない待遇でよいと言つたはずだが、なにか不測の事態でも起こつてはいないか?」

「いえ、アインズ様、その件に関しては何の支障もありません、滞りなく準備は進んでおりますので…お気遣い感謝いたします。」

「まあ…うん、そうだ、先日の件と言えば、デミウルゴスは昨夜は牧場の方に居たのか?それともスクロールの皮をなめす方か?」

(どうか、昨夜はナザリックに居ましたと言われませんか?)

「いえ…昨夜は、色々準備などがございまして…例の不届き者どもをナザリックにおびき寄せるといいう私のプランの詰め部分を調整するためにナザリックに居りました、こればかりは他の者には任せられませんので…」

(う…頭を下げながらだけど、メガネの奥の宝石が微妙に光った気がしたぞ…)

「そ…そうか、昨夜はナザリックに居たのか…では、もちろん「あのこと」には気づいていような?」

(お願い『申しわけありません、至らぬワタクシでは…』とか言つてくれ!)

「ハイ、もちろんでございます…あの時わずかな時間ながら感じた強大な気配のことでございますね?」

（うわあああ、やっぱり気づかれてたよ、どうする？どうするよオレ！）

「あの時はデミウルゴスにも心配をかけたな、なにかあった時の為に  
と我が部屋の前には2人、護衛は居たので何事もなく今回の件は終息  
したのだ…部屋の中にはエイトエッジ・アサシン達もいたからな…  
まあその事を言っておこうと思つてのことだ」

「そのことについてなのですが、お聞きしてもよろしいでしょうか？」  
「ん？どうかしたか？デミウルゴス…」

（やめてくれよ？ 答えに困るようなこと聞かないで欲しいんだけどお？）

「お部屋の前にコキュートスとセバスを護衛として置かれたことに関  
しては適任だというのはわかります、ですが…なぜ私には一言も教え  
ただけなかつたのです？ アインズ様にもしものことがあつた  
ら…と、気が気ではありませんでした…」

（気の毒になるくらいに、うなだれてるよ…そんな気にすることない  
のになあ…）

「ああ、デミウルゴスには心配をかけてすまなかつたと思つている。  
しかしだ…今後において、昨夜会談を開いた者とは、同盟関係になれ  
るやもしれんという可能性があるのだ…向こうも一人で来ている以  
上、多人数で威圧するような真似をして相手の機嫌を損ねたくはな  
かつたのだ…」

（精一杯の言い訳だけど、これで大丈夫かな？ ちゃんと通じてくれ  
るか？）

「1人…とおっしゃいましたか？ たった1人で、あのような強大な  
…離れていようと、嫌が応でもこの身に感じてしまうほどの…圧倒的  
なまでの気配…危険ではないのですか？ その者は何者なのです？」

「ああ…彼はな…そうだな、敢えて言うなら…デミウルゴスは王国の黄金は知っていたな？」

急な話の転換に一瞬、返事がぎこちなくなりながらもデミウルゴスはすぐに返答を返す。

「ええ…ハイ、セバスの調査書にあり、私が興味を持った…今となってはある意味においては協力関係と言ってもいい形となったあの『黄金』のことでございましょうか？」

「ああ、その『黄金』で間違いない、デミウルゴスの言うにはアレは、人の姿を持ちながら「精神が異形化」していると書いていいほどの興味深い者だったという事だが…」

「は…はい、左様にございます」

「昨晚、私が会った彼はな…その黄金とはまた違った意味での『異形種』だ…見た目こそ人間だが、その内面は紛うことなき異業種…、敢えて言うならば「人の皮をかぶった異形種」と言ってもいいだろう。それが彼を表すのにより近い表現な訳だが、その本質は…私と同様、もしくはそれに近いと言ってもいい」

「まさか…至高の存在であらせられるアインズ様と同等…その可能性があるとおっしゃるのですか？」

「ああ、そうだ、しかしこのことはデミウルゴスだから話したのだ、この件は他言無用だ!! わかったな、デミウルゴス…これは命令だ!!」「は!!!…しかし、この件はコキュートスもセバスも、護衛をしていた以上、知っているのでは？」

「その心配は無用だ、なにしろ護衛として呼んだ際「何が起きようと絶対に扉を開けてはならん! 中の様子に關しても一切詮索はするな!」と厳命しておいたからな、中の様子は気にはなっていただろうが、それ以上は知ろうとしなかつたはずだ。」

(部屋から出て、護りとして立っていた二人を開放する時にも、今夜の

ことは他言無用だぞ！つて念を押しといたしな。」

「同様に、アルベドにも話すのではないぞ？ あれは今、謹慎中だ…その罰を与えている最中にナザリック内のわずかな情報なども与えてしまつては何のための『罰』だかわからなくなつてしまふからな…皆がああ気配に気づくようなら、恐らくアルベドも、すでに気づいては居るだろうが…」

（だからお願い、デミウルゴス、これ以上なにも聞かないでくれ！ これはベルリバーさん主催のサプライズなんだから!!）

「アルベドにも秘密とは…つまりは…」

（何かまた深読みを始めようとしているぞ？ 違うぞ？違うからな？デミウルゴス…絶対にお前の考えてるようなこと考えてないからな！

「んん！ んおつほん！ あああ…あの者はだな…これからはこちらに決して害を及ぼさないように…という…いわば同盟のような関係を持つことになりそうだ…ということは先程も言った通りだが…今後、この墳墓に來客として來ることもあるかもしれん。その時はちゃんと歓迎をして迎えるのだ…そう…侵入者に対する「歓迎」という意味じゃないぞ？ 『客人待遇』としてだ…わかつたな？ デミウルゴス!!」

そこまでアインズに言われたあと、デミウルゴスは、今日の支配者アインズへの書類、仕事などの説明を一通り伝えて、部屋を出る。

先程聞いた話を総合的に判断し始めたデミウルゴスは…

『同盟者』…『客人として』、『見た目が人で、人の皮をかぶつた内面の異業種』…という単語を再度、噛みしめるように反芻し…「そういうことですか…」とか1人呟いていた。

そして、このことは支配者<sup>アインズ</sup>への命令を護るため、ナザリック内で箝

口令が敷かれ、その気配のことを知っていようといまいとに関わらず、見ざる、言わざる、聞かざる…を徹底させる事になり、謹慎が解けたアルベドにも一切の情報が漏らされない下地が完成してしまい、誰に聞いても「そんなことなかったですよ？」 なんですか気配？って？」という感じになってしまう事になるなど、アインズの予想外のことであった。

☆☆☆

そして、ここは場所が変わってジエツト邸。

…仕事から戻ってきたジエツトに「あの…ジエツト君、2日後に招待された件のことに関してなんだけど…」と言いくそうにアルシェは言葉を選んで話しかける。

「えつとね？ジエツト君、この前さ…水晶玉の鑑定をしてもらったじゃない？ 最近その水晶の持ち主だった人と再会できてね、色々お話しできたんだ」

「それは…よかったですね…どんなお話をされたんですか？」

（ちよつと驚いてるみたいだけど、どうしたんだろう？ そんな変な話じゃないよね？）

「うん、実はね？最近、その人が最近知り合ったばかりの知人から『水晶玉を鑑定依頼に来た人を自分の館に今度招待することになった』って話を聞いたんだって」

「えええ？…つまりそれは私の主のことを話されていたってことになりますよね？」



「そうなの、世間って狭いもんだねって2人でそんな話をしてた…」

「そうかあ〜…偶然とはとても思えないような関わりが生まれていたんですね…」

(なんか深く考え込んでるけど、今、あの話をした方がいいよね。)

「それでね? ジェット君、その人がね? 私『護衛』って名目にして、その場に同席したいって言ってるの…ムリには言わない、とは言つてたけど…」

「えええ…それは、どうなんですか? 主の耳にも入れておかなければ失礼に当たりますし…なにより、どこまで親しいのかが不明な状態では…その判断も難しいかと思いますよ…」

「そうだよね…それでね? その人が、自分の身分を証明する物だつて言つて、こんなものを貸してくれたの…これをジェット君に見てもらいたい…つて…」

そういつて、彼から渡された小さな革袋を1つ渡す。

「これは…中を見てもいいつてことでしょうか? アルシエさんはこの中は見たんですか?」

「私は見ていないよ? だつて『これを見て欲しいのはジェット君だから』つて言われたし、私は中を見ないで欲しいとも言われたから…」

「そうですか…それでは失礼して…拝見させてもらいますね…でも私にその人の素性が分かるのでしょうか?」

「ん〜、わからないけど…見てもらえば自分も納得するつて…それでダメならムリを言うつもりはないつて言つてたよ」

「そうですか…それなら見ない訳にはいきませんね…つて…え!! これは一!」

(今まで見たことないくらいに驚いてる…どことなく水晶玉を鑑定した瞬間の驚き方に近いかも…そこまでの物が入ってたの? 何の効果もない物って言ってたはずだけど…)

「アルシエさん、これは私個人ではとても判断できることではなくなりました。やはり主に伝えた上で、の返答でその人は納得してくれるでしょうか?」

「うん、それは大丈夫、だって、その日には見送りに来るって言ってたから…その袋の中身はいい返事にしろ、悪い返事にしろ、その時に返してもらえばいいって話だし、返事はその時でいいと思う。」

「そうですか…それはよかったです…さすがに御方に無断で来客の人数を増やすわけにはいかないもので…聞くだけ聞かせてもらいます。」

(御方?? 今まで「主」<sup>あるじ</sup>って言ってたのに…)

「うん、ありがとう…そうしてもらえると、私もダメだったらそう言いやすいから助かる。」

「それじゃ、これは無くさないように大切にしまっておかないと…  
〈ポケットスペース〉  
〈小型空間〉」

(ジエツト君、魔法学院時代は防御魔法と、香辛料を生み出す魔法くらいだったのに…いろんなの使えるようになったんだなあ…)

「さて…と、それじゃ、もうそろそろ僕らも寝ようか?」

「うん、そうね」座っていた腰を持ち上げて階段を上がっていく。  
(クーデもウレイも寝入ってるだろうし、起こさないように潜りに行かないと…)

…その間、ジエツトはへ伝言メッセージを使つて、得た情報を、自らの主に報告をして、これからの指示を仰いでいた。

☆☆☆

翌朝を迎え、いよいよ明日になれば、招待された場所にジエツト君と共に訪問しなければいけない。

そうは思いつつも今日は「歌う林檎亭」に行つて、仲間に状況の確認をしに行かなければならない。ヘッケランが無事に今回の遺跡依頼の件に関わる人物と接触できたのか、それを聞いておかなければ：

「それじゃ、おばさま、行ってまいります」

「は〜い、アルシエちゃんも気を付けるのよお〜、行ってらっしゃい。」

いつも明るい声で送り出してくれる、これが本来の家族つていうものなのだろうか…そういう温もりを知らないアルシエにはその心遣いがありがたく、その温もりを妹たちにもちゃんと伝えていきたい。

そう決意を新たににして、この依頼を最後に引退するつもりでいるアルシエはフォーサイトを締めくくる依頼の詳細を聞きに仲間のもとに、そう時間もかからずたどり着いていた。

「おお、早いな、アルシエ！」

「おはようございますアルシエ、いま依頼の件について聞いていたところですよ」

「なんかすっごい太っ腹の雇い主だったみたいよ、前金の方が多いって稀有な案件みたいなの」

少し不審な想いに囚われ、眉をひそめながらも、内容の詳細を求めするようにアルシエは聞き直す。

「依頼主の件については？」

「ああ、フェメール伯爵って言ってな？　ずいぶんと皇帝陛下から冷遇されてるらしいぜえ」

「冷遇はされてはいるけど、金銭的には追い詰められていないって話よね…まあだからあんな値段を提示できるんでしょうけど」

「一体どれくらいの報酬だった？」

「ああ…すげえぜ？　前金で200、それで、後に150だ！」

「そ…それは、すごく大きい、以前の私なら飛びついていたかもしれない…」

「だがこれはやけに念の入った依頼だな？　前金って言っても『依頼受けます、では支払います。』って感じじゃなかったんだ」

「どういうこと？」

「1チーム単位で「証明プレート」みたいなのが配られる。それがとりあえずの仮契約みたいなもので、調査で集まる当日、拠点となる場所に行った際、その「証明プレート」と前金を交換って手筈にするらしい。」

そう言ってヘッケランが首から提げるように作られている小さな金属板をチャラリと見せてくれた。

「まあ…前金だけもらって居なくなるというチームも出ないとは限りませんからね、妥当な判断でしょう、「墳墓の調査」という性質上、成功報酬という形では、どこを判断して「依頼の達成」とするかは意見が割れるでしょうからね。」

「そういうこと！、だからギリギリまで考える時間はあるという事よね」

「そういう事なら助かる、私も少し考えてることがある…」

「お？何だアルシエ？ 気になることでもあるのか？」

「そうじゃなく…フォーサイトの締めくくりとして、それがふさわしい仕事なのか…それが気がかり…」

「まあ、そりゃそつか、…妹さんたちのために引退も考えなければならぬわいわけだしなく…」

「よし…わかった、どっちにしろ「証明プレート」との交換の時まで前金の交換は無いんだし、当日に『やはり受けられません』って理由でプレートを返すって手もあるんだしな。」

「そうですね、アルシエの気のすむようにしたらいいですよ、あなたにもしものことがあれば妹さんたちが悲しむでしょうから…」

「うん、ありがとう…」

「きつと結論は2日後には出てると思う」

（明日はジエツト君と一緒にご招待に応じなければいけないんだしね）

「わかりました、とりあえず…証明プレートの方はもうヘッケランが持つてるから安心ですね」

「ああ、依頼主の気が変わらぬ内に、形として一応受けるつもりはあるって姿勢を示すのは大事だしな！」

「それでは後はアルシエの結論待ちですね…気が済むまで悩んで、後悔のない結論を出して下さい、私たちはそれに付き合いますよ。」

そうして歌う林檎亭でのフォーサイト会議での結論はまた後日となり、アルシエは翌朝のご招待に妹たち共々、気合を入れ直すのであった。

☆☆☆

「ど…どう…かな？ 変じゃないかな？ジエツト君」

（今までずっと同じワーカー用の装備ばかりだったから、こんなヒラヒラなの着るなんて、ワーカー始める前に実家で暮らしてた時以来ね…）

「変なんかじゃないですよ、アルシエさん、似合ってます。ステキですよ」

（こういうことをシレつと言う子だったかな？ 私がワーカーしてる間、ジエツト君も色々あったんだろうな…）

「ねえ〜ねえ〜…ジエツトくん〜、ウレイは〜？ウレイのはどう〜？」  
「ずうる〜い、クーデの方がずっとにあうでしょ〜？ にあうよねえ〜♪」

「そうよねえ、ウレイリカちゃんも、クーデリカちゃんもよく似合ってるわ、キラキラのドレスが輝いてお姫さまみたいよお〜」

「わあ〜い、おひめさま〜、ウレイリカも一緒だよ、おひめさまあ」  
「うんうん、クーデリカとも一緒お〜、おんなじおひめさまあ〜」

(すっかりジエツト君やお母さんに懐いてる、私がお風呂入れたり、ジエツト君のお母さんと交代で入れたりしてたから自然と打ち解けるよね、ジエツト君はお風呂上がりの飲み物を用意する係だったけど)

微笑ましく見ているとジエツト君から1つ質問が投げかけられる  
「ところで、例の人には見送りの場所とかって伝えてあるの？ 時間とか…」

この「例の人」とはもちろん、ベルリバーこと、ヴェール氏である。

「あ…してない…いけない、今すぐするね」

しばしのコール音の後…通話を通じた感覚になる。

『あ、ヴェールさん、今…平気？』(うう〜、やっぱり話し方が元に戻っちゃおう…)

「いや？大丈夫だよ？問題ない、墳墓調査まではまだ時期があるからね、そういうえば招待されたのって今日だったよね…そのことかな？」

『そう、そのこと…馬車で帝都の入口まで迎えに来てくれるって感じ…一応、ヴェールさんも一緒にいいみたい…』

「そっか、それじゃ〜こつちも準備はしないとね、すぐ合流するよ」

『時間はお昼ちょうどに馬車が来てくれる…できればもっと早くに来て…渡したいモノがジエツト君からあるって話…』

「ほいほい、わかりましたあ、こつちも色々と前準備があるから、事前に知らせてくれて嬉しいよ、それじゃ、昼前に行けばいいね。」

『そうしてもらおうとありがたい…それじゃ…』 通話を切ってからジエツト君を覗き見ると…笑いを殺してるせいか体が小刻みに震えている…

「なあ、なにがそんなにおかしいの？」

「いや、家の外とか、「自分の空間」以外だとすぐそつちの言葉遣いに戻っちゃうんだな。ってね」

「いいじゃない、そういう風にしか話せないんだから…ところで、このドレス姿で帝都の入口まで行くの？これで街中歩くの恥ずかしい…」

「大丈夫ですよ、そうおっしゃるだろうと思つてこんなのを準備しておきました。」

そういつてジエツトが取り出したのは3つのネックレス。見た目としては簡素ではあるが、鈍く光る感じが、マジックアイテム特有の印象を醸し出している。

「これは？」

「はい、これは第2位階の<sup>ビュ・オブ・ミラージュ</sup>〈幻影の視覚〉を封じてあるネックレスです、そのドレスにも、決して邪魔にならないデザインにしてあるので…それを身に着けたら、いつものイメージしやすい服装を思い浮かべながら、ヘッド部分を握つてみてください。」

「わあ、素敵、素敵、いつものクーデがいる」

「ウレイもいつものワンピース、すごいねえ」



「…ホントだ、これなら街を歩きやすい…ありがとう、ジエツト君」

「どういたしまして、それを作ってくれた「我が主の従業員」にもそのお礼は伝えておきますね。」

☆☆☆

そして再び場面は変わり、ここは森の中、宿を引き払いへ―深緑の隠れ家（グリーン・シークレットハウス）へに移り住んでいるヴェールさん達の隠れ家である。

「それで？ 私たちのことはどうされるおつもりですか？」

「まさか、その「ご招待」の『護衛』をされてる間、私たちを置き去りにしたまま、待たせてるつもりだったワケじゃないんですよねえ？」

「それとも、お一人でその件を決めてしまわれたわけですか？ ヴェールさん？」

3人に責め立てられる偽エルヤーこと、ヴェール…  
最初の言葉が、ルチル。

2番目がセピア、締めくくったのがディーネだ。

「そ…そんなことはないさ…みんなも一緒に、連れて行く…つもり、だった…よっ…」

どんどん声先細りになっていくヴェール。

「どうやってですか？ 先方に伝わってるのは「お一人で」って話みたい

ですけれど?」

「ほら、見た目は1人で、…でも4人そろって行ける方法がボクにはあるじゃない?」

「あああゝゝゝ…そういう方向で強引に話を進めるつもりですか?」

「あの状態の時って、お腹の中ですごい眠気に襲われてるんですけどお?」

「あれって、もしかして、別の活用法も?」

それぞれが違う思惑で結論付けている…まあ、ボクもこれはまだ未検証なんだけど…。

「ちよつと、まだ試していないことがあるんだよ、キミ達が急速に眠くなったのは多分「捕獲」って選んだからだと思っただよ…」

「まあ、それは説明はされておりましたが…」

「眠くならないままで、って手段もあるんですか??」

「それをこれから、試してみたい、今度も、ちよつとした冒険になっちゃうけど…いいかな?」

「まあ…仕方ないですね」

「ヴェールさん一人で行かせるわけにいかないでしょ?」

「万が一は無いでしょうから…また目を閉じてましよう。」

3人横並びで座っていてくれる…そこでこの前同様に…お腹に集めた口を一気に集合させ、大口にして…ガパアアゝゝ!! 「パクン」

あああ…また、このノド越しが…3人を飲み込むこの感触は未だに

慣れないよなあ〜：

「捕獲 or 消化？」と頭に浮かび『YES NO』というコマンドのようなものが頭の中で明滅しているのがわかる。

わざとそれを選択しないまま、放置する：少々、コマンドの明滅する感じが煩わしくはあるけども：敢えてスルーしておく。

お腹の中に意識を向け：『どう？ みんな、起きてるかい？ 起きてるならもう目を開けていいよ？』

⊠うわ…まっくらです…これがヴェールさんの中？⊠

⊠ほわあ〜、でも暑くも寒くもないですねえ〜：もしかして、この中ならお腹も空かなかつたりするのかも？⊠

⊠ヴェールさんの体の中から外の景色って見られないんですか？

⊠

『良かった、3人とも意識はあるようだね、これならみんなの安全も保障されるし、傷つけられる危険もなく護衛に一緒に行けるってものだよ』

⊠それはそうと、外が見たいですう⊠

『じゃ〜ちよつと試してみようか？ 3人一緒に「外を見たい」って念じてみてもらえるかな？』

（自分も外の景色を見せてあげたい、って同時に思うと、なんとかならないかな？なればいいな〜）

⊠見えましたあ〜♪ ヴェールさん〜、外が見えましたよお〜♪⊠

『見えるようになったみたいだね、よかった、よかった。ちなみに、お

腹の中に居る状態で魔法って使えるかな？ 強化魔法とか、防御魔法とか？』

『間違ってもボクのお腹の中から攻撃魔法は使わないでくれよ？ どうなるかわからないんだから』

☒んんん、それじゃく〈リインフォース・アーマー鎧 強化〉！どうですか？☒

『おおく、光った光った、よかったよお、ボクは魔力系は使えるけど、信仰系魔法使えないからさあく、いざという時の助けがあるって心強いよ、みんなのこと頼りにするね？』

☒おおくく…ヴェールさんから「頼りにしてる」なんて初めてですね、私もレンジャー持ちのマジックキャスターですが、少しでもヴェールさんの魔力の節約に貢献できるように頑張りますからねえく。☒

『うん、もちろんセピアにも期待はしてるからね、無理はしないでいいから、みんなよろしく頼むよ。』

☒☒☒ もちろんです!!☒☒☒

「それじゃく、一応『護衛』ってことなんだし、一応完全装備はしておこう…、レガシーのフル装備、久々だなあくこれ、あ、その上にエルのヤアの幻影く、えい！〈ピュール・オブ・ミラーージュ幻影の視覚〉」

『さて、なんだかんだで、そろそろお昼から1時間前くらいにはなったかな？、それじゃく皆行くよ、心の準備はいいね』

☒☒☒ はい!!いつでも。☒☒☒

(敵地に入るって訳じゃくはないんだけど、NPCが自分の意識持つてるって言うしなあ〜:警戒はしておいて無駄にはならないはず:)

未だにギルドメンバーだったというだけで『関係者独特のオーラ』をNPC達が肌で感じられる仕様になっていることをアインズから知らされてるヴェールは「どうかバツタリ出くわしませんように:」と祈るしかなかった。

エルヤ―装備の姿を幻で身にまとい、悠々と帝都の関門チェックをすり抜け(エルヤ―ロール全開で、体には触れさせないように威圧はしておいた、面倒なことにならないように。)門の外に出ると、そこには男1人に、見慣れた女性が1人、そして、あの時に助けた女の子2人がこつちをみて嬉しそうにはしゃいでいる。

「お姉さまあ、あの人、あの人だよおくわたしたちのこと、たすけてくれたのお!」

「ね?ね?言ったとおりでしょ?むねあてに「エル」ってえかんじのもよう〜」

ああ、アルシエちゃんはボクらの関係をこの子達には教えてなかったのか:まあ、そんな大した関係性じゃないんだけどな。

「貴方が、今回、護衛をしてくださるとい方ですね。私はジエツトと言います、この度は我が主人との友好の証を拝見させていただきましたありがとうございます。」

そう言つて、1つの小さな革袋を差し出してくれた。

中身を見てみると:

(よかった、あの「身分証明」として入れておいた「ネックレス:オブ・アインズ・ウール・ゴウン」はちゃんと入っている。)

「あれ？　なんか見慣れない物も入っているのですが？」

「ああ、それは中にメッセージカードも入ってるので、どうぞお読みになつてください、我が主から「それは進呈するから、それを使って訪問しに来てくれ」だそうでございます。」

（このギルドマークのこともなんとなくわかつてる素振りだし、このジエツトという人物、かなりアインズさんと近い距離にはなつてるよ  
うだな。）

「ああ、それでは拝見させてもらいましょう。」

読んでみると：NPCは、ギルドメンバーだった41人を「至高の41人」としてほとんど神さま並みに信仰してるのだという事が「先日伝えられなかったので追記でお知らせしておきます。」とアインズさんらしい文面で書かれてあった。

そして、アインズさんは一度、守護者達に休暇を出そうと提案した際、NPC達のみでこそそこそと何かをしているらしいことを察し、課金アイテムなどを使い、すべての気配を消し、オーラも誤魔化し、完全不可知化や、完全不可視化なども重ね掛けをたっぷりして、盗み聞きをしたことがあるのだそうだ。

結局、守護者達は「至高の御方の想い」を彼らなりに汲み取ろうと努力してただけだったと知り、それ以降疑うことはしなくなつたらしいが、この革袋に入っているのは、その時に使ったのと同じI s e tらしい。

「これはこれは、大変いいものを…これは今使った方がいいのでしょうか?」

「そうですね、我が主は、その方がお互いに色々な混乱などを避けるためにも必要なことだろうとおっしゃってましたので…」

「わかりました…それじゃ、クーデリカちゃんにウレイリカちゃん、これから、お兄さん、また魔法で姿を消すけど、ずっと今日は一緒に居るからね?」

(そう言わないと、絶対に消滅したみたいに見えるもんなあ…)

そうして、なにもかも感知できないほどに姿を消した後、馬車が近づいてきているのが分かる。

あそこに乗っているのは…セバス…か??

あれってたしか「たつち」さんが作ったNPCだよな? ホントだよ…動いてるう…それに御者の技能なんてあつたんだな…初めて知ったよ。

なんて驚いていると…

「ああ、これはこれはセバスさま、自らお越しいただけるとは…お迎えに来ていただきありがとうございます。初めて勧誘しに来られて以来ですね、馬車を介してお話をする機会というのは…」

さらっと挨拶をしている…

なに? ジエツト氏…あなた、セバスとも知り合ってたの??? と驚きの連続であったが、誰にも見られていないのは幸いであった。

## 第16話 アルベドさんの謹慎終了

ナザリックからの馬車とえば、すっかりスレイプニールで引くというのが当たり前の光景。

世間ではそういう認識なのだが、それ以前に「おとなしめにランクを落とした」という内情を知る人はあまり居ない。

ナザリックという組織の名前はごく一部にしか知られていないので、中にはたまたま成功しただけの「成り上がりの凡暗」が粹がつているという認識を持つものも「王国」では少なくない数の貴族達にそう思われているのだが…。

帝国では少し事情が違う。

そもそもは「イプシロン商会」という存在が、帝国で知名度を上げている頃、帝国の皇帝もその破竹の勢いに、秘書官からその名前を知る事になる。

その為、概略だけでもいいから…と、部下に調べさせたはいが：肝心の知りたいたい事が全く入手できないのだ。

曰く、執事の老紳士が丁寧な物腰であるにも関わらず、得体の知れない貫禄がある。

曰く、商会の創始者である者の娘が表に出て来て、交渉をする事はあるが、本当に上の立場の者としか顔を合わせない…しかし絶世の美女と言う噂。

曰く、気分屋で…素行が悪いというより、上品ではあるが我慢という言葉をどこかに置いてきたらしい、という評判。

曰く、創始者の存在は噂されているが、誰もその姿を見た者は居ないという謎めいた商会。

それらの話が相まって、皇帝自身も警戒はしているが、表立って騒ぎを起こすわけでも、違法な商売をしているわけでもないという証拠もあるのだから、必要以上に手を出す事もあるまい、と判断しているせいもあって、「皇帝も黙認している」という

背景はかなりのアドバンテージを有していると言える。



そういう世間の風評もあって、「名うての大商人」レベルだと人々からは思われている。

その上、皇帝…というより帝国にとっての切り札である魔法詠唱者、皇帝から「爺」と呼ばれるほど近い人物であった大陸でも屈指の「宮廷首席魔導士」、その人が、影でその組織の露払い役として、名前を貸しているという噂もまことしやかに囁かれている面もある、そのためにスレイプニールを所有しているというその事実が更にその信憑性に拍車をかけている。

というのは表向きの話で、実際は一般向けにレベルを落として、やっとスレイプニールに落ち着いた、というのが真相だ。

しかし周りの者達が勝手にイプシロン商会とスレイプニールを連れている馬車（もちろん家柄の紋章付きなので誰も間違えようはない、馬車の紋章と、イプシロン商会の看板のマークは全くの別なのだが…）を結び付けて考えているだけなのだが…、そもそも帝国の中では貴族という存在は王国程の権力はない。

今の皇帝がもつと若いころ、即位してすぐに行った「血の粛清」と言われた唐突の政策により、貴族たちの力は失墜、経済力もかなり制限されている。

そんな帝国のご時世で、大手を振ってスレイプニールを出してくる家など、相当の考えなしか、身の程…というより怖いもの知らず、という認識がある。

そんな中で、平然とそれを持ち出してくる家があるとするれば、その「イプシロン商会」しかあるまい、と民衆が思うのも仕方ない事だろう。

ただ、それでもナザリツクに所属する者達にとって、スレイプニールなど、吹けば飛んで行ってしまう程度の存在でしかない、なので最初こそ「もつと強いシモベを」とか「我々が護衛を」というシモベも多かったのだが、ソリュシャンからの報告ではスレイプニール自体はこの土地では「成功した金持ちの象徴」らしいという証言を聞いて、今は鳴りを潜めた。

基本的に彼らの、そういう価値基準がこの「異世界の常識」とかな

りかけ離れている部分なのだが、そこは当人たちは全く気付くこともなく：それ故に、気づかない内に名声も高まり今では「大貴族以上のお金持ち」という認識につながる一助になっていることなど、もちろん知る由もない。

アインズ基準からすれば「いつどんな時に襲われても対処できるように」という意味でソウルイーターで馬車を引かせたいという思い入れはあるのだが、そんなことをするととにかく周囲が大パニックになるのが目に見えるようだとンファイレーアやジエツトにも止められているので、仕方なくスレイプニールで我慢しているというのが実情なのだ：もちろん血まみれの將軍さま（今はまだ族長様ではあるが：）にも止められているというのもあるのだが：

そんな想いに気づくこともない一行は、馬車内で揺られ、招待された場所となる会場に向かっていくところであった。

「ジエツト君：もう驚きすぎて、感想も出てこない。」

スレイプニールなんていうのは飼葉だけでも普通の馬の数倍、気性も荒く：戦闘能力も高い、スレイプニール一頭を買う金額でどれだけの魔法スキル持ちの希少ドレイが買えるだろう？ っていうくらい基準なのだ、一頭持つてるだけで「下手な大貴族以上の裕福さ」を意味していることにもなる。

そんなのをただの送迎に使うという：その時点で、きつと所持しているのはこれ一頭だけではないのだろうという想像は容易にできてしまう。

そんな風に思っているアルシエに比べ、初めてこんな豪華な馬車に乗る小さな子供達からすれば、よくわからないが足がいつぱいある馬で外を疾走する度に、流れるように景色が過ぎていくのだ、それはひどく新鮮に映ったのだろう。

「グ〜デリカあ、すごいよお〜：ぴゅう〜って、すごいはやさでまわりがとおりすぎてくよお〜。」

「ホントだねえ〜ウレイリカ〜：こんなのはじめてみたあ〜、すごい。」

喜んでいる妹たちが居てくれるだけで、この驚きも少しは和らぐというものだけど…

(そういえばこの子達は外の世界に出て、見て回るのは初めてだった…うちは金貸しの連中に最初の借金の時に馬車と馬を取り上げられたもんな…)

金貸しの者達からすれば、一番避けたいのは借りたまま踏み倒され、夜逃げされることである。その防止策として、万一の担保として「馬全部と馬車」を持つていかれてしまったのである。

馬車を買戻させないように「貴族としてのたしなみでございますよ?」との甘言によって、「掘り出し物」と称しては借金の額を増やさせるためだけに売りつけに来る関連の業者が訪ねてくる機会が増えた。

そのため遠くに出かけるという手段が奪われ、逃げることもできず、妹たち二人は家から見える景色が外の情報の全て…物心ついてから初めて「外に出て遊んできなさい」と言われて、喜び勇んで帝都の街並みに駆け出してみれば…危うく人さらいに連れ去られる寸前だったという不幸中の幸いにヴェールさんと会えてなかったらどうなっていたのか…アルシエは喜んで景色に夢中になっている妹たちを見ながら、本当にこの子達だけでも無事でよかったですとムネをなでおろしていた。

それにしてもますますジエツト君の主人という存在の規模が分からなくなってくる。

「そう言えばジエツト君、前から聞きたかったことがある…」

馬車に乗ってからすぐにネックレスの効果を解除して、今はドレス姿に戻っている妹たち、そしてアルシエも同様にドレス姿だ。

ちようどいいし…と、この機会に聞いてなかったことを質問してみることにする。

「ん?…なんですか?アルシエさん」

「そっちの方の目、もう眼帯してなくても大丈夫になってるの? そのメガネは鑑定用だよね?」

「ああ、そういうえば、その話はまだしてませんでしたか…前に、このメガネのレンズは左右で違う効果が封じられてるってことは言いましたよね？」

「うん、それは聞いた、それと関係が？」

「眼帯をせずに、家でもずっとメガネをかけっぱなしな理由は、簡単ですよ、そっちの目の方のレンズでタレントの効果を消してくれているからです。」

「ええ？ それは初耳…」

「話によると、レンズ自体に「視線からのあらゆる効果の完全無効化」っていうクリスタル？だかなんだかを当て込んだらしいです。」

「主いわく、「魔眼殺しのメガネ」だそうですよ」

もちろん名付け親はアイズではない…ギルドメンバー達から、かつての頃より「ネーミングセンスが壊滅的」と言われていたのは伊達ではない。

という程度の自覚はあったので、守護者たちにもメガネの名前を一人一案ずつ出してもらったのだ、結果、マーレからの案が採用され「魔法的な眼の効果を殺すメガネ」という意味で「魔眼殺しのメガネ」となったのだ。

ちなみに本来はギガントバジリスクやカトブレパス、メデューサなどのモンスターが持つ視線攻撃から身を護るために使う為のモノなのだが…タレントにも有用なのでは？と進言したのはアウラであった。

要するに、結局のところ、守護者の姉弟合作での一品という偶然の産物がこれである。

ジエツト自身にはそのことは伝えられていないが、アウラとマーレは至高の主人に手放しに褒められ、頭をなでられたりもしてもらえたのでそこで十分に満足し、完結している。

「それで、そのメガネを寝る時以外はずっと外さない？」

「まあね、これがないと見なくていいものを見てしまったり、逆に見られたくないって思ってる人の秘密を知りたくもないのに知ってしまった時の気まずさ？って言えばいいのかな？それを味わう心配が

なくなったのは何よりうれしいよ、長年の悩みを解決してくれた主人のために自分が尽くすこと…それがなによりの恩返しなのさ。」

「ジエツト君の成長もそこで?」

「多分ね、少し家庭教師的なことを主…当時は同級生の時もあつたけど…のどこに行つて「勉強会」と称して足しげく通つてたから…。それで人に教えたり、うまく説明したりする技能はあがつたみたいだよ、香辛料もむこうで割と作らされたりもしたからね、あそこの料理長とはもう顔見知りだし、そのおかげで生活魔法の〈小型空間ポケットスペース〉を覚えられるまでにはなれたしね」

（変なドレイの首輪みたいなのを香辛料を作る時はいつも着けさせられてたけど、あれはなんだつたんだろうか…）

「二度舐めた香辛料と同じものを見知らぬ素材でもそのまま作れるつていうのはタレントじゃないにしても、ある意味すごい特技、ジエツト君」

「調味料とかがなくなりそうなときには資金の節約になつて家計的には役立って助かるかな?」

と冗談のように笑う。

『それじゃ、その時にそのギルドマークを目にする機会があつて、あのペンダントの意味を理解することができたんだね?』

ヴェール自身は同じ馬車に乗り合わせてはいるが誰にもバレないようにと姿を消しているのです、声を出すことは自殺行為に近いという認識の元、〈伝言メッセージ〉ごしでの会話をしている。

この魔法なら、軽い小声でも普通なら聞こえないようなささやき声程度も十分な音量に調節された上で耳元でクリアに聞こえるため、こういう時は重宝している。

「まあ、そうですね、あれが『身分証明』だなんて言われて見せられたらそりや驚きました。」

この言葉もささやいた程度なのでアルシエには聞こえていない。

『彼女がワーカーを引退したら、誘うつもりはないのかい? あそこなら何があつても安全だと思ふんだが…』

「それはそうでしょうね…でもそれは彼女が引退をしてから、話をし

てみるつもりです。」

『そうか、それならその時までなんとか守らないとな…ひよつとしたら何かで気に入ってくれるかもしれないしな、あの人あれでレアなもの全般的に大好きだから』

「主のことですか？」

『うん、そうだね、彼が気に入れば、なにがあろうと庇護下に入って損は無いよ、キミならわかるだろう？』

「……………」

「急に黙って、なにかあった？ジエツト君」

「ああ、なんでもないよアルシエさん、ちよつとね。考え事してたものだから…」

そういう話をしていると、走っていた馬車が速度を落とし、ゆつくりと止まる。

それと共に御者であったセバス・チャンが馬車のドアを開け、声を掛けた。

「それでは皆様、到着いたしました、こちらが本日の会場になっております。どうぞ、こちらへ…」

馬車から外に下りるとそこは木々に囲まれた…まるでそこだけがポツカリと切り抜かれたような広大な平地があり、もともとは森林の中だったのだらう場所に、高くそびえたつ塔のようなものが建っている。

そしてその塔の周辺にはまだ建設途中なのか、広く周囲を取り巻くように金属の細い線を細かく組み合わせたような壁で仕切られた区画がある。

ふとそのそびえたつ塔から手前、自分たちの近くにある建物に目を向けると、ジエツト君の家と(外見としては)同じくらいの建物が立っており、その扉の前には2人の女性が立っていて、こちらに歩き始めようとしていた。

片方の女性は夜会巻きというのだろうか？艶やかな黒髪を後頭部の上の方で丸めてまとめてくくつてあり、見た目より落ちついた女性に見えメガネをしていることもあり、知的な印象を感じさせる。

もう1人は長く赤い髪：後ろで2つに分け、それを三つ編みに束ねたような髪型、快活そうな褐色の肌に深くスリットの入ったスカートは、動きやすさを重視しているのか、スラリと伸びた脚は無駄な肉のない野生の動物の機能美じみた感想を抱かせる。

「ようこそお出でくださいました、ジエツト様、そしてアルシエ様とクーデリカ様、ウレイリカ様、本日も案内役を仰せつかりました、ユリ・アルファと申します。」

と黒髪の女性が来訪のねぎらいを言葉にし…

「同じく、私はルプスレギナ・ベータと申します。」

（おおお!! 来た来たあ、ホントに動いてるよお〜! しかもしゃべってるよおお! ユリは覚えてたけど、そっか、ベータ：お前って「ルプスレギナ」なんて名前だったのかあ：覚えてぞ。うんもう忘れない。）

アルシエの影となるようについてきたベルリバーが姿を消しながら、心の中で感動の叫びをあげるといふ器用なことをしていることは、この場の誰にもバレてはいないため、盛大に：しかも素直に感動を表している。

（ユリはやまいこさんの現身うつつみみたいなものだから、格闘系の構成だったのは覚えてるんだけどなあ：ルプスレギナって、どんな構成だったっけか?…）

などと、口元に手を当てて考え込んでみても、一向に思い出せなかったので「まあ、いつか」と切り替え、機会があればアインズさんに聞いてみよう、と結論付けて、アルシエの後ろを目立たずに追随する。

「本日、我が主人は新しく建設中の館の途中経過の内見に来ているため、このような場所にての歓迎となっておりますが、改めてこちらの転送小屋から直接、主のいらっしゃる本宅までご案内するよう言われております。」

「転送小屋?」

初めて聞く単語に疑問をつい口にしてしまったアルシエ、本人は疑問ではなく、単純に聞きなれない言葉を復唱しただけのつもりであったのだが…

「ハイ、今みなさまの目の前にあるこの小さめの建物の扉を開けると、本宅に通じる転送魔法が発動する仕組みになっております。見た目は大きく口を開けた闇の顎（あぎと）のように見えますが、わたくし共が先導いたしますので、どうかご心配なさらず…」

そう言い、「こちらへどうぞ」と促すような素振りで動き出したので、こちらもそれについていこうとすると、ウレイリカが後ろに隠れたまま、スカートをしっかりと握りしめて目の前の2人の女性をビクビクしながら見ている…どうしたというのだろうか？ 彼女たちからは見た感じ…魔力の波動は感じないけれど…。

そう思っていると「あの赤いお姉ちゃん、なあに？ お姉さま、びゅううびゅうう、ごおごおしててビカビカしてるよ？ あれなあに？」

瞬間的にそれを理解してしまった。

この子のタレントに…そして、恐らく内容は同じだとは思いますが、自分とは見ているソレがきつと違う種類の波動であろうということも…

「あの…失礼ですが、ルプス…レギナ様、でしたか？ あの…いいでしょうか？」

どうしても妹の素質を確かめてみたく、つい言葉を投げかけてしまった。

「はい？ 私でしょうか…なんででしょう？」

「あの…もしかして、なにかの魔法を修められています？」

「……へえ、よくお気づきになりましたね。あなたの『眼』の力ですか？」

初めて見た時の印象よりもずっと…どう言ったらいいのか、例えるなら目の前に野獣がいて、値踏みでもされてるような感覚に襲われる。



「こら、おやめなさいな、お客さまを怯えさせてどうするんです。」

そう言つて黒髪の女性、ユリさんと言つただらうか：その人が、首の後ろをつかみ、前に倒して謝罪でもさせてるような姿勢を強引にとらせている。

「ユリねえ、なにをするつすか？ 別になんにもしてないじゃないつすかあ〜！」

「明らかにアルシエさんも、妹さんたちも怯えていたでしょう？ 咎めはしませんが、その癖、少し抑えることを覚えなさい？ 申し訳ありませんアルシエ様、ルプスレギナが失礼なことを…」

慌てて、手を振り、かろうじてそれに対して返事を返す。

「ああ、大丈夫です、そんなことされなくても…私が急な質問をしたのがいけない…：…ので。」

「そう言つてもらえると、こちらとしても助かります、来賓に失礼をした…：…などという事になれば主から叱られてしまいますので…：わかりますね？ルプスレギナ…」

そう言い、赤毛の…ルプスレギナさんを見た時のユリさんの目は。どこことなく帝国学院時代の、魔道教員の教官を思い出す。 雰囲気からしてメイド長っぽい感じだから、それでなのかな？とアルシエもそう結論付けるしかなかった。

「はい…：すみませんでした」

しおれるように頭を下げて、謝罪を口にするルプスレギナさんに「気にしてない」という言葉をなんとか口にすることができ、転送小屋の方にまで一緒に歩いてくれる道中、ユリさんが話してくれた。

「うちのルプスレギナはこう見えて神官なのですよ？ クレリックとハイエロファントハイエロファントというよりプリーステスと言つた方が通りはいいでしょうか？ 司祭長の方も少々心得があるのです。」

（あああ！ そうか、そういや「バトルクレリック」とかだったっけか？ そう言われれば、そんな風にあの人は獣王メコン川さんと一緒に相談とかして、色々設定してたような気がするな…：思い出してみると、だんだん懐かしくなつて来たぞ。）

会話の中でピンとくるものを感じ、ようやくルプスレギナの構成の片鱗を思い出す。

しかし、やはりそれ以上は思い出せず、性格の設定などもギルマスと製作者でないと基本、覗いたりするのはマナー違反だよな…という認識が（ギルドではなく個人の性格として）強かったために、アインズ程はベルリバーはNPC達には詳しくなく、ルプスレギナの人となりなどは全くわかっていないのである。

「えええ？ そんな…すごい人だったなんて…私の方こそ失礼なこと…」

アルシエがひたすら恐縮していると

「いいんですよ、私も驚いただけなので、怖がらせる気はなかったという事だけでもわかってくれれば…」

（さっきの一瞬だけ変わった口調とこっち、どっちが素の口調なんだろう…きつとさっきの方が素の話し方なんだろうな…）

「見た所、アルシエ様というより、そちらの妹さんの方がお気づきになったようですね、聡明な妹さんをお持ちで羨ましいです。」

そう言いながら、見とれるような笑顔を妹に向けてくれ、妹もその笑顔には安心できたようだ。

「ユリお姉さんにはそういうのみえないから、こわくないよ？ お姉さまもやさしいけど、ユリお姉さんもすごくやさしそう。」

「うん、ユリお姉さんはすごくやさしい人、でもせんせいをするときのユリお姉さんは人がかわりそうだねえ」

無邪気に笑いかけながら話しているが、ウレイの次に言ったクーデの発言が少し気にはなったが…2人とも少しは緊張がほぐれてきたようだ。

（ウレイは「信仰系」の魔力が見える子だったのね…気を付けるようにあとで言っておかないと…）

クーデを見ると、普通に行っているようにしか見えないが…さっきのウレイの言葉をどう思ったのだろうか？ 後で聞いてみよう。

（もしかして、この子も違うものが見えているのでは…）

そんなことを考えていると、扉の前まで到着してしまった。

「それでは、準備の方はよろしいですか？」

こちらを向いたまま、後ろ手にドアノブへと手をかけ、少しカチャカチャと音をさせている。こちらの心の準備が済むまで待つてくれるのだろうか？

「ハイ、大丈夫です、よろしくお願いします。」

そう言うと、その返事を待つていたようにドアノブをひねり、カチャ：と少し扉を開く仕草をする。

少しだけ開いた扉の隙間から、一瞬スカートが大きく膨らんだ漆黒のポールガウン姿の少女を幻視したような気がするが、「え？」と思うより前に、目の前を漆黒の空間が覆ってしまう。

扉全体が闇に通じる入口になってしまったかのような変わりように一瞬気圧されるも、ジエツト君にギュツと手を握ってもらい、少し気持ちを強くすることができた。

「それでは参りますので、遅れずに着いてきてくださいね？」

そう言つて、彼女たち、案内役の2人はなんのためらいもなく、すうすうと中に入っていく。

ジエツト君も来たことがあるのか「大丈夫だよ」と笑顔で手を引いてくれる。

クーデもウレイも少し迷つて風だったが、「この扉の向こうにはおとぎの世界が広がってるんだよ？」とジエツト君が言うと、「それほんとう??」と喜色満面になった妹たちは現金にも私を引っ張るように中へと突っ込んで行った。

☆☆☆

闇を抜けるとそこは確かに壮大な景色であった。

闇の中を抜けたかと思えば目の前に玉座に腰かけた仮面の男性？のような大柄の人が闇のような漆黒のローブを纏っている。

その人の両脇から、こちらに向かって左右に整列して並び、それぞれ20人ずつくらいだろうか？ それぞれ美しいメイドさんたちが整然と並び「いらっしやいませ、ようこそお出でくださいました。」と、

一糸乱れぬと言うにふさわしい程に声をそろえて歓迎の意を示してくれた。

周りを見まわすと豪華などという言葉で済ませていいのだろうか？というくらい景色。

天井は高く、自分があと何十人肩車をすれば天井に手が届くのだろうかというくらいどれほど上にあるかわからないほどの場所に、シャンドリアが輝いている、それぞれに光を放っており、それが魔法的な：コンティニューアルライトへ永続光光なのか、それともアイテム由来の光なのか：遠すぎてアルシエにもよくわからない。それが等間隔でいくつも設置されているのだ。

天井だけではなく、下を見れば、赤い絨毯が通路の中央を玉座にまで届かせており、まるで草原の上でも歩いているかのように柔らかな感触である。

絨毯の下には白亜の床が全体に渡って見渡す限り敷き詰められ、チリ一つ落ちていない。

まさにジエツト君の言っていた通り、まるで「おとぎの世界」にでも迷い込んだかのような感覚に満たされてしまう。

ぼおくとその光景に意識を奪われていると、不意にクーデとウレイの手が離れ、急に走り出してしまふ。急速に現実に戻り「こちら、クーデ、ウレイ、走り回ると危ない、それに失礼!」と声を掛けるもすでに聞こえていないようだ。

「すごお〜〜い、すごい、すごい、すごおお〜〜い」

「キラキラ、ピカピカ、ひろお〜い、大きい〜、たかあ〜い。」

左右にそびえる大人が5人くらい手を広げて、やっとな外周を囲めるかどうか、という太い柱と柱の間をSの字を描くように、ウレイは右、クーデは左側を駆け抜け、玉座に座る「王」と呼んでも差し支えないほどの人に左右から飛びつくように抱きついて縋りついてしまった。

「すごお〜い、こんなすごすぎて、すてき〜〜」

「うん、わたしも、ビックリした〜、おとぎのお話のお城みたい」

そう2人がさも、物語の登場人物に語り掛けているかのような満面の笑顔を浮かべている中、ようやく私は、その玉座の手前までたどり

着き、謝罪の言葉を口にする。

「妹2人が申しわけない、この壮大な景色に魅入られ、自制を失ってしまったようで…失礼の段、お許しを。」

「すみません、主(あるじ)よ、とっさのことに止められませんでした。」と、ジエツト君も共に謝意を口にしてくれる。

「んん？ いや？ 別に不快ではないぞ？ 我が家をここまで褒められて、失礼だと思う訳はなからう？ それにこのことを失礼だというなら、この子達をこんな気分にはさせてしまった私にもその責任はあるだろう？ だから何も気にすることは無い。…しかし、そうか？ そんなにここはすごいか？」

ウレイと、クーデの頭を優し気になでながら語り掛けるその男性。

「うん、すごい！ これは…えええくと、お兄さんがぜんぶつくられたのですか？」

「ああ、すまないね、まだ名前を名乗っていなかったか、私は「アインズ・ウール・ゴウン」という、気軽にアインズさんとも呼んでくれてかまわないよ？ あつはっはははははは」

「ええくと、それじゃくゴウンさまが？」

「あつはははは、ああその通りだ…、いや、違うな、これは私と…そして私の仲間たちと共に造り上げた大切な場所なんだ。 すごいだろう？ 私の住む場所は。」

「うん、すごお〜いゴウンさま、すごお〜い」

「うん、ゴウンさまもゴウンさまのおなかまの人たちもすごお〜い」

「あつはははははは、あ〜っはははははははは」

(アインズさん、すごい嬉しそうだな、ユグドラシルでもあんな風に笑ったところみたことなかったぞ？)

ひっそりと後ろから着いてきていた「ヴェール」ことベルリバーは、アインズのあまりの喜びように逆に驚きすぎていた。

当然だが、入った瞬間のメイドたちの「ようこそお出でくださいました」にも驚いたが…もちろんあんなプログラムされてなかったよな？ が最初の感想である。

(それにしても一般メイドまで、みんな自立してるんだなあ…もお、

「そういうもの」って飲み込んじゃうしかないね、こりや…」

「ところでどうかね？ そんなに気に入ってくれたのなら、私たちが造り上げたこの家を一緒に見て回らないかね？」

「うん、みてみたあ〜い、いえ、みてみたいですよ」

2人して一緒に同じことを言ってしまった。

「あつはははは、そうか…ならば色々を見せてあげよう、すまないね、そういうわけだから、この妹さんたちを借りて行こうと思うのだが、よかつたら一緒に来るかね？」

(そうだ、妹達になにかあつたら私が護らないと…)

そう思い、「もちろんです」と言おうとした矢先、ジェット君に繋いでいた手を引き戻され先に返事をされてしまう。

「いえ、アインズ様、もはや名を名乗られたので、この場では「主（あるじ）」ではなくアインズ様と呼ばせていただきますが…私ども2人はここでアインズ様のお帰りを待たせてもらおうと思っております。」

「んん？ そうかね？ それではこの子達の身の安全は、このナザリックに於いては何の心配もないということを我が名を持って保障しよう。安心して待たれるがよい。」

「あ、そうだ、あの機能を切っておかなければ」

そう言つて、いきなり空中からなにかの操作盤のようなものを出して、ポチポチと操作している。

「うむ、これでいいな。それでは、まずは一番煌びやかなところを見せてあげよう。それでは、メイド達は、この客人のお二方を丁重におもてなしするように。」

そう言い残すと、さっそうと、妹たちをそれぞれの肩に乗せ、悠々と部屋から出て行ってしまった。

アインズ様という方が部屋から出ていく寸前に〈メッセージでヴェールさんから念のために着いていってくれると言ってくれたので、安心して任せることにした。

「ねえ〜ねえ〜、ゴウンさま？ 一番キラキラしてるところってどんなところですか？」

「わたしもきになるう、どんなところなんですかあ〜？」

「ははは、そんなに気になるか？ まあ、それよりもせっかく玉座の間から外に出たのだ、このドーム状の部屋の天井を見てごらん？」

「ふわああ〜〜」

2人とも天井を見上げた瞬間に感動して、ため息しか出ないようである。

「ねえ、ねえ、ゴウンさま、あれ、なんですか？ あの4つの色のおっきなキレイな玉〜。」

「ねえねえ、ウレイ？ あれ、みんな白くひかっているよお？ あおもあかもみんなしろくひかっているう」

「どうだ？ 凄いだろう？ これらもみんな仲間たちと共に造り上げ、あそこに…まあ天井のもそうだが、壁にある彫像も全て、皆で作ったものだ。それに私が命令すれば動き出すんだぞ？」

「えええ？ あれみんなですかあ〜？ 全部ですかあ〜？」

「すうごお〜い、みてみたあ〜い、うごくんですか？ ホントですか？」

「ああ、ホントだとも『目覚めよ！ レメゲトンの悪魔たちよ!!』」

アインズがそう高らかに宣言すると、周囲に居た67体の彫像たちは一斉に動き出し、アインズの前に跪き、礼をとる。

「わああ、すごお〜い、ホントだあ〜」

「うごいたあ〜、おじぎしてるうう、ゴウンさまってすごお〜い」

「あつははははは、そうか、気に入ってくれたかね？ 見た目は怖いのが、私の言う事には従ってくれるいい子達なんだぞ？」

「ゴウンさまって、なんでもできるんですねえ〜、すごお〜い」

「ん？ そんな事はないぞ？ 私にだって、夢にまで見る『こうだったらいい、ああだったなら』というのはあるのだよ？ もお、それはきつと叶わないことだろうがね。」

(ゴウンさま、なんかさみしそう…なにがあつたんだろう…)

「ゴウンさまっ…」

クーデリカの言葉にアインズはハツとして我に返る、そして自分が少しの間でもこの子達から気を逸らしてたことを申し訳なく思う。

「ああ、なんでもないんだよ。 少な…少しだけ昔を思い出してしまっていたのだよ」

「おなかまさんたちのことですか?」

「ん、クーデリカは頭がいいな、それとも仮面ごしでも私の気持ちがわかつてくれるのかな?」

「ん…:…なんとなく、そうおもったんです。 私もよくわからないけど、もしかしたら、そうなのかな?…って」

「あああ、それなら、ウレイがゴウンさまのおともだちになるうゝ。」

「あああゝゝ、ダメエ!ウレイリカあゝ:わたしもいつしよにゴウンさまのおともだちになるんだからあゝ」

「ふふ…:そうか、そう言ってくれるか? はははは、いいな、嬉しいぞ? 二人とも、それじゃ、お友達になつてくれたお礼に特別なものを

これから見せに行つてあげよう。」

「さて…:その前に…:だ、よし『元の場所に戻れ!レメゲトンの悪魔たちよ!!』」

そう命じると、大きな音もなく、すべるように壁のくぼみに背中から吸い込まれるように元に戻っていく。

「すうごおゝゝい! しゅううゝつてもどつちやつたあ」

「ゴウンさまのいうこと、ちゃんときいてるうゝ、えらいですねえ、ゴウンさまって」

「ははは、あれは、仲間たちと共に造り上げた物たちだ、私だけの手柄じゃないぞ?…」

「でもでも、ゴウンさまのいうことならなんでもきいてくれそうですよね?…」

「うんうん、ものがたりの中のすごいまほうつかいさんみたい」

「んん? そうさ。これでも私は大魔法使いなんだよおゝ。」



ちよつと大げさに冗談っぽく言ってみる。

(ノリノリだなあくアインズさん、透明看破の能力を持つてるんだし、ボクが居るの、わかってるだろうに：よっぽど嬉しいんだろうな)

あらゆる課金グッズを行使して、姿を消せていることを計算してもアインズさんなら気づいているだろうと思っっているベルリバーと、きつとベルリバーさんなら、アルシエちゃんのとこに居るだろうと思っっているアインズとの間に微妙な認識の違いがあることになど、まだ一切、気づいていない二人だった。

「それじゃ〜これから、宝物でいっぱいのキラキラの場所に連れて行ってあげよう」

(うおう！ ウソ？ 宝物殿を見せるつもりなのか？ 見てえ！ アインズさんの作ったアレ！ 動いてるとこメッチャ見てえ!!)

アインズ作の唯一のNPC、宝物殿の番人、領域守護者という名目で人様の目には映らせないようにした存在を思い出す：そしてこの世界に来て意識を持って動くようになったアレ：それを見られる期待感にワクワクしながらベルリバーは、こつそり『トラップ機構付き宝物箱』の中から「ギルドの指輪」を取り出し、装着しておく：(これなら宝物殿の入口までなら、たしか行けたはずだしな)

「あ、そうだその前にユリを呼ぶか、指輪を預ける時に必要だしな：あ、イヤ、多分そこまでは行かないかもしれないか：それにそろそろアルベドも謹慎が解けている頃だろう、アルベドの方を護衛として呼んでおくか。」

(え？ アルベドって謹慎させられてたの？ なにがあつたんだよ？ アインズさん、そのことボクは聞いてないよ?)

などとベルリバーが慌てている間にもアインズは冷静に〈メッセージを発動させ、アルベドを呼び出していた。

☆☆☆

しばらく待っていると、レメゲトンの間にアルベドが飛び込むように入ってきた。

「アインズさま、アインズさま、お会いしたかったです、この72時間、4320分、259200秒：長かったです、待ち遠しく思っております。愛しのアインズさま？」

「おおお、お：落ち着け：落ち着くのだアルベドよ！ 謹慎中のお前には敢えて伝えていなかったが、今は来客中なのだ：：守護者統括としての自分を見失ってはいけないぞ！」

「は？」とアインズさんを見上げたアルベドの目が急に見開き、一瞬だけ見ているだけのボクでも凄まじい寒気を覚える視線をアインズさんの両肩に乗っているウレイリカとクーデリカに向けられていたが、それもホントに一瞬のことだった：こわ！と思うか思わないかの内に涼しげな瞳に変わり、アインズさんの前で恭しく跪く。

「これは失礼いたしました、我が至高の支配者、アインズ様、来客中とは知らず、恥をさらしてしまったこの身、どのような罰でも受けるつもりであります、なんなりと罰をお与えください。」

（アルベド、怖いな、なんか変わり身が早すぎだろ？タブラさん、どんな設定にしてたんだっけか？ たしか良妻賢母タイプにしたのかなとか、言ってた気がするんだけど…）

「ああ、私もお前に伝えていなかったのが今回の失態の原因でもあるわけだ：そう強くとがめるつもりはない：しかしだ、どのような時でも振る舞いには気を付けることを忘れてはいけません？アルベドよ：3日前の再現だけは、2度と許さんぞ？」

（もおく：アインズさん、だからその3日前に何があったんですかあゝ、もお、あとで問い詰めますよお？ホントにい！すつげえ気になるう）

「は：：ありがたきお言葉と寛大な慈悲に感謝いたします。：：ところで、その下等：：いえ、お子様たちは一体何者なのです？」

（あれ？ 今アルベド、下等生物とか言おうとしたのか？ 加藤：：じゃないだろうし：：果糖な訳ないしな：：他に思いつかないけども：）  
「ああ、先日、とあることで大きな朗報をもたらしてくれた者の親族、つまり妹たちな訳だが：：わがナザリックを気に入ってくれたらしくてな、これから宝物殿を見せようとしていたところなのだ：：ちようど

いいから、アルベドを護衛に…と思って呼んだ訳だ。着いてきてくれるな？」

「そうでしたか…ナザリツクを…、承りました、アインズ様の警護、しかと務めさせていただきます。」

(なんか、イメージの中のアルベドと、感じが微妙に違うんだよねあゝ…最初の一瞬だけ見せたあの視線も気になるし…ちよつと確認してみるか…センス・エネミー…うっわ…アインズさんの後ろを歩きながら、ジワジワと敵意にじませてるよおゝ…あの子たちで、これなんだとすると…自分なんかが戻ってきたらどうなるんだ？こええ…これは一応、頭に入れておいた方がいいな…)

少しだけ前に進み出て、アルベドの表情をしてみる…涼しげな表情に変わりはない…だが、敵意の波は未だにアルベドから発せられている…

(こんな嫉妬深いキャラだったっけか？たしかにギャップ萌えはタブラさんの代名詞だったけども…これは行きすぎな気がするな…アインズさんは気が付いているのか？)

なんて思っていると、アルベドがなにか口をわずかながら動かしながら歩いている…なんだ？ちっちゃすぎて、聞き取れないな…なんて言ってるんだ？…仕方ないな…こんなことで使いたくなくったけど…センサーブースト…感知増幅……ううわ…聞かなきゃよかった…。怖い。恐い…コワイからアルベド…

表情に涼しげな雰囲気張り付かせたまま、しずしずと歩いている中、その口が呟いていたのは…「この下等生物が…この下等生物が…下等生物が…下等生物が…」ひたすらその繰り返しだった…。

「それではアルベド、お前はギルドの指輪を持っているな？宝物殿に転移するぞ？ちゃんとついてくるんだぞ？」

くるつとアインズさんが振り向くと、ピタつとつぶやきが止まり、微笑と共に左手を持ち上げる…「もちろんでございませす、アインズ様から頂きましたこの指輪、いつでも肌身離さず、この通り♡」

(左手の…しかも薬指にはめてるうゝゝ!! これアインズさんがさせてるの？それともアルベドが自主的に？ この意味ってアインズ

さん気づいてんの？　なんかそういう経験少ない自分でも「女の情念」みたいなバシ感じるんだけど…」

「うむ…それなら問題ないな…それでは宝物殿に一気に飛ぶぞ！」

（アインズさん、豪快にスルーしたあゝ…！…気付いててスルーしたのか、知らないから放置してるのかどっちだ？　まあいいや、こっちもさっさと転移しないと…てい！）

「ふうわああゝゝ！！すゝおゝい！！　やまのようなきんかゝ、カベいっぱいキラキラのがたくさんゝ」

「はっはっは、そうだろう？　これらもみんな我らアイ…ン、イヤ…仲間たちと一緒に集めてきた物なんだよ、奥にはもっともっといろんなのがあるんだぞ？」

（今「我らアインズ・ウール・ゴウンが」って言おうとしたんだろうな、モモンガさんらしいや）

そう思っていると、隣に立っていたアルベドの言葉を聞いてしまった…：〈感知増幅〉<sup>センサー</sup>によって高められた感知能力だったからやっとならしたアルベドの眩き…

「ギルド、アインズ・ウール・ゴウン…か…、ふん、くだらない…」（おいおい、いくらなんでもそれは聞き捨てならないぞ？…そりや、アインズさんは今お子様たちに意識行つてて、聞こえてないだろうけど、その発言はまずいだろおよ、アルベドお…）

驚いて思いつきアルベドの方を振り向くと、思う所があるのか、どこか暗い表情を浮かべていた。

「アルベドは今回、宝物殿に来るのは初めてであつたな？　ここの守護者のことは知っているか？」

再び、アインズさんがくるつと振り向くと、またあの張り付いたような微笑に戻る。（やっぱアルベドこえええ）

「ハイ、管理上把握はしております。ここの領域守護者の名前と、その能力についての概要程度…ではあります…：面識はございません。」

「名前はパンドラズアクター、ナザリックの宝物殿の番人、領域守護者にして、財政関係全般に於ける責任者、私やデミウルゴスと同等の強さと頭脳を持ち…：アインズ様の御手によって作られた者です…」

(うつわ：今、ジワリとした敵意がちよつとだけふくらんだぞ？今度は何にだ？)

「ん：んん：まあな…、さて、それでは宝物殿への扉を開けるとするか、この向こうに行くのはさすがに2度目だからな、パスワードは覚えてるぞ」

「アインズ様は以前にも一度こちらに？」

「ああ：ほら、「東の巨人」騒ぎの時があっただろう？ルプスレギナを問い詰めた時のアレだ。」

「あの後に来られたのですか？」

「ああ、なるべく穏便に話を済ませるつもりでは居たのだがな：交渉が決裂した時の為にと、『強欲と無欲』を持ち出したのだよ。：結果的に「強欲」の方の出番に繋がった形になったので、この世界でもワールドアイテムは使えるという実験は成功したのだ。」

「さすがはアインズ様、交渉の展開だけでなく、決裂することを見越した上での状況下：ワールドアイテムが発動するかの可否を確かめる機会にまで利用されてしまうとは…」

「んん：いや、さすがにそこまでは考えていないさ、たまたまということだよ、アルベド、お前は私を過大評価しすぎだぞ？」

「いいえ、至高なる御身がその程度の存在な訳はありません！ アインズ様は存在されているだけで価値があるのですから！」

(これ、また堂々巡りの問答になりそうだな、仕方ない、ここは受け入れて先に進むとしよう。)

(アインズさんも大変だなあ、こんな忠誠心：思いつきりカンストしてるんじゃないの？これ：胃があったら、絶対に穴開いてるよね)

「ああ：お前たちの私に対する信頼、嬉しく思う、礼を言うぞ」

(とりあえず、こう言わないと終わらないもんなあ)

「さて…この闇の扉を開けないと次の間に進めないからな」

闇の扉と言われていたものの、空間が丸ごとぽっかりとした闇にしか見えない壁の前に立つと、肩に乗っていた双子の1人、クーデリカが耳元に当たる部分に口を近づけ、小声で囁いてきた。

「ゴウンさまも、大変なんだね…」

「分かってくれるか？大変なんだよ…ホント」

この会話は離れていたため、アルベドには聞こえず、『感覚増幅中』であるベルリバーにしか聞こえていなかった。

その為、思わず苦笑を浮かべてしまうのを止められない至高のお1柱（ひとり）が誰にも気づかれずに肩を震わせていた。

☆☆☆

『かくて汝、全世界の栄光をわが物とし、暗き者は全て汝より離れ去るだろう！』

アインズさんがそう宣言すると、目の前の壁の闇が失われ、そこに前に進む通路が現れる。

その通路には、道筋に沿ってどこまでも細い白色光に照らされ、かろうじて周囲の様子が見えるようになっていた。

通路沿いの壁面には一定間隔でぽっかりとした四角い空間が作られており、その中にあらゆる種類の武器が1つのくぼみに一点ずつ備えられ、通路の続く限り、まるで美術館の展示品のように置かれている。

道の暗さと、薄明かりに照らされている雰囲気から、神秘的な印象にも見えるその通路を歩いていると、双子がキョロキョロと見まわしながら、しきりに溜息をもらしたり、感心したりしている。

通路を抜け、広い空間、その真ん中にソファアーのように3つの椅子が連なって1つになっている腰かけるための場所があり、その前にはテーブル、そしてテーブルを介して対面の場所には同じ椅子が置かれており、こちらに背を向けて、座る人物がいる。

その者は、かろうじて輪郭は人の形をしていて、手足や頭部のような特徴が見えるものの、そこには後ろからでも見えるほど、体中に口があり、口内にはギツシリと牙が生えている。

（おおお〜い!! よりにもよって俺かよ〜!! なんでそれに? そんな外観だったっけか? パンドラズアクターって?）

そう思っていると傍にいたアルベドから吹き上がるような敵意があふれ出して、そいつに激昂している。

「何者!! 至高の方々に姿を真似ようと、その本質までは見間違えたりはしない! 騙されたりはしません! 言いなさい! お前は何者です!!」

そいつは、そう問いかけるアルベドのことを意にも介していないように首を少し傾げるだけで、その敵意を涼しく受け流している。

「そう…」

短くアルベドがそう言うと、足元で何かが破裂したような音がさく裂したと思ったら、すでに距離のあった相手と肉薄している、拳を突き出し、蹴りを見舞い、体を回転させ、裏拳を見舞うと見せかけ、それをフェイントにしてその勢いのまま後ろ回し蹴りを見舞うが、ことごとくが空を切る。

(おおお〜い、アルベドお?? 一応それ、ボクの姿なんだけどお?なんでそんなに躊躇もなにもなく本気モードで襲い掛かれるの?)

：つて一応、主装備のバルディッシュを持つてないだけマシなんだろうけどお〜：なんか、目の敵にされてる気分がしてきたぞ? もしかして、明日は我が身? って感じか? あれって…)

そうやって、何度アルベドが攻撃を仕掛けていただろうか：相手は回避に意識を回しているのか、全く反撃する気配はない、だというのにアルベドの攻撃の勢いは止むことなく、怒涛のように吹き荒れている。

ひとしきり、驚き、混乱し、どういう事? と疑問符が頭の中を埋め尽くしていると：アインズさんがすごい勢いで走り出し、「アルベド! もおよい! やめよ!」

そう言いながら、アルベドが一瞬アインズさんの方に視線を向けた瞬間：、目の前のボクに似た奴の頭をひつつかみ、逆の腕で首にラリアートでもするかのように回したままの体勢で「おおお〜い!!! ちよお〜とこつちに来おお〜い!!!」と言って壁際に引っ張っていく。

(なにげにアインズさんの両肩に乗ったまま、全力疾走のアインズさ

んから落っこちない双子にも意外に驚かされてるんだが…まあ首にしがみついているから、走り出す前にアインズさんがそう言った可能性もあるけども…)

そして、そいつを壁際に追いやった後、すごい音で「ドン!!」と音を出したかと思うと、なにやら話している。

「どうやら〈センサーブースト感知増幅〉でも聞き取れない範囲にまで引つ張って行かれたようだ。」

「あああ、アインズさま…その壁ドン…どうか私にも…そんなのにかまけず、私にそれをしてもらえたら…いえ、是非してください、私はいつでもドンと来いですアインズさまあ♪」

(なんかアルベドが変な方向でアツチの世界に行ってるぞ? さつきまでの勢いは消えてるんだが、どういう精神構造なんだろう?)

…しばらくのやりとり?のあと、こつちに歩きながら俺の姿に似た奴の身体がドロリと溶けるように崩れたかと思うと、次第に再び体が再構成され、見事な軍服姿にハニワのようなのつペリとした卵頭、そこに3つの黒い穴が開いているだけの頭部が変わってしまった。

(あ…アレだ…ボクが覚えてたパンドラズアクターの姿…そういえばドッペルゲンガーだったな、見たら思い出した。さすがにイン出来なかつた3年の月日は長かつたという事か…)

「はあ…お前も、そういういたずらはほどほどにしておけよ? パンドラズアクター…、そんな風に人をからかうためにその能力を与えたのではないんだからな?」

(まさか、ベルリバーさんがナザリツクに来た日に感じた気配を感知して、それを真似すれば俺が喜ぶかも、とか考えたとかさあ、そういうのヒヤつとするからやめて欲しいよ、ホント、さつきのアルベドもなんか鬼気迫るようです。すごい怖かつたしさあ…)

「は、申し訳ありません、私の創造主たる、ンああアインズさま!!」

(その呼び方、なんとかならないものかなあ…自分が作ったとは言えやはり恥ずかしい、前回来た時に、改名したこと事前に言っておいてよかつたよ。)



「ま…まあ、とりあえず元気そうで何よりだ…ケガはなかったか？」  
「ハイ、問題ありません、元気にやらせていただいております」

仰々しい、おおげさなアクションでポーズをとっている…そのポーズ自体はデミウルゴスとそんなに大差がないのに、なんでこいつがやると、こんなにおかしいんだろう…すぐく見ていて恥ずかしい。

「…ところで今回は…どうされたのでしょうか？」

（ううわああ…声自体は低くして決まってそうなのに、卵頭でドヤ顔してそれでダツサイわああ…）

「うむ、今回は、今後のことを考え、守護者統括たるアルベドと面識を持つてもらおうと思つてな…、ちなみに先程、壁際で説明した者の妹たちが、私の肩に乗っている2人だ…何かあったら力になってやってくれ。」

「は！ 承知いたしました、ンナああ…インズさま!!」

ひらりと軍服を翻し、くるりと回ってビシッとポーズを決める。

（もお、何度目だよ、数えるのもバカバカしくなるくらい強制的に鎮静化させられてるぞ？ いい加減にしてくれ、パンドラズアクター！）

そんなインズの心を知らずに、肩の上の双子は「かつこいこい…！」とか「舞台の役者さんみたく…い」とかきやつきやとはしゃいでいる。

（まあ、この子らに『パンドラズアクター』封印したい黒歴史を冷たい目で見られてたら、立ち直れなかったらうけど…）

「さて、アルベド、なかなか白熱した初対面の挨拶であったが、もう覚えたな？ このパンドラズアクターはお前たちが『至高の41人』と呼ぶ、ギルドメンバーみんなの姿と能力を少し抑え気味に再現することが出来る。状況に応じた戦略の立て方、それに平時に於ける運用の仕方にもあらゆる場面で使い勝手のある領域守護者だ…普段の振る舞い方は少しアレだが…頭脳と戦闘能力、計算と臨機応変さに於いてはお前たちにもヒケはとらないはずだからな？」

（とりあえず、第一関門はなんとかあったかな…やっぱりみんなに見せるのはやめとこう、アルベドに見せるだけでもやたら疲れた…これをみんなの分まで味わうとなると、さすがに遠慮したいからなあ…）

…)

「そういうわけだ、アルベド…とりあえず、このパンドラズアクターの存在を、ナザリックに於いての領域守護者であることも含め、ナザリックの皆に知らせておくように。そしてギルド内の資産やこれからの支出などに関しての相談はデミウルゴスに話を通すのは当たり前だが、こいつともしつかり話を通して相談するといい。」

「さて、パンドラズアクター…これをお前に預けよう、リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンへギルドの指輪だ、機会があれば、この宝物殿だけじゃなく、他でも働いてもらう必要が出てくるだろう…ナザリックのシモベに至るまで、お前の存在が知れ渡るまでは、玉座とこの宝物殿との間だけの往復に留めておけ。いいな。」

「は…了解しました。ンあインズ様。」

「アルベドも今後は、パンドラに攻撃など仕掛けてくれるなよ？同じナザリックの仲間なのだからな…」

(ホント、なんであんなに好戦的だったんだ？ 急におとなしくなったけど、一体アルベドになにがあつたんだか…)

「は…承知いたしました、アインズ様。」

「さて、ずいぶんと時間がかかったが、楽しんでくれたかな？ 二人とも。意外に時間がかかってしまったな。キミらの姉の所に戻るとうしようか？」

「うん、すごいたのしかったあ、キラキラのものがたくさんだったし、パンドラさんもカッコよかったあ」

「お姉さまにもおしえてあげたいよねえ、すごかったつてえ。」

「二ありがとうございます、ゴウンさま」

「いやいや、キミらが楽しんでくれたのなら、案内した甲斐はあったというものだよ。」

「さて、アルベドよ、謹慎が解けたばかりで悪いが、働いてもらわねばならん、今日は私は来客の対応をしなければならなくて…、謹慎前

にデミウルゴスとお前が相談して立案した『ナザリツクの防衛費 節約プラン』の件、しっかり進めるとともに実験に協力してくれる者たちとのやり取りの方も、しっかり頼んだぞ?」

恭しく跪き、了承の意を告げるアルベドを伴い、宝物殿を出る際、パンドラにしばしの別れを告げて、双子を姉の元に案内すべく、来客用の部屋へと急ぐアインズ。

そして、何を心中に抱いているのか…アルベドはアインズに命じられた仕事を進めるため、デミウルゴスの元に向かうのであった。

## 第17話 アルシエ、帝国から脱走する？

ジエツトとアルシエは2人きりで、初めに通された部屋にあるソファに促され、座った状態でゴウン様が返ってくるのを待っている状態だ。

アインズが妹たち2人を伴い、このおとぎのような城の中を見せに扉の外を出て行ってから、アルシエは何故、あそこで止められてしまったのか：妹たちの身の安全の確保は必要だと思っていたのに、それを止めたジエツト君に対してついそれを問い詰めてしまう。

「なんであそこで止めたりしたの？ 妹たちだけでは何かあった時…」

そう言いかけるが、ジエツト君の言葉で、その続きを言い出せなくなってしまう。

「アインズ様はね…ボクの前でもあそこまで楽しげに…嬉しそうに笑った場面なんて、ただの一度も見たことはなかったんだよ。あれはきつとあの子たちがアインズ様の心をしっかりとつかんだ結果なんだと思う…この城の中で言うなら、アインズ様のそば以外の安全地帯なんてないんだから、大丈夫だ…それに、ここで話しておかなきゃいけないこともあるから…」

「え？…話？ 今？ ハハハ…」

「そう…妹たち2人のことは…ちゃんとアインズ様に相談した方がいい…あのお気に入りようであれば、あの子たちが売られてしまうなんてことを聞けば、きつと助けてくれるはず…そういう形にしろ…身の安全はこの世界のどこにいるより安全になるのは間違いはない…しっかりと守ってくださいるはずだから…」

ここまで言うと、しばらく席を外していたメイドの内の1人がティーセットを持ってきてくれ、テキパキと…それでいて、優雅な動きでテーブルの準備を整えていく。

「お待たせしました、アルシエ様、ジエツト様。こちらは本日ご用意させていただきました、黄金紅茶とインテリジェンスアップルの果汁を合わせたアップルティーとなっております。お砂糖などもこちら

にありますので、お好みでどうぞ。添え物として、こちらのお菓子もどうぞ。」

「あ…ありがとうございます。」

「ありがとう、他に仕事もいっぱいあるだろうにボクらの対応なんてさせて申し訳ないです、大変でしょ?」

なにやら事情を知ってそうな言い分のジェットくんの問いに、メイドは何でもないことのようにこう答えた。

「なにも大変などという事はありません、私たちは至高なるアインズさまに従う事こそ生きる喜びなのですから…その方から「もてなせ」と言われれば主人の意向に沿うのが私たちの生きがいなのです、お気になさらずおくつろぎください。」

すごい信頼されてるんだ…ゴウンさまって人…ついそういう感想を抱いてしまった…ただのメイドに至るまでこうまで信頼を寄せられてるなど、そこいらの貴族でもそうそう見かけることのない光景だったアルシエからすれば、驚きでしかない。

しかも「従う事こそ生き甲斐」などとさっぱりと言えるメイドなど、自分の知る限り、ただの1人として会ったことはない。

普通は朝から夜までこき使われ、ようやく館の皆が寝静まってからの自由時間でも、最期の残り湯が余っていればいい方で、大抵身体を拭く程度が関の山…。

眠ろうとしても、与えられるのは「使用人として」最低限の部屋という、ほとんど倉庫のような部屋、下手をすれば離れの小屋や、馬小屋並の隙間風の吹く自室をメイドたちみんなで雑魚寝…というような環境が当たり前の世界なのだから…もちろん、ローテーションで週末の休みなど、与えられるような世界でもないのだから…それ故に、ここまで満ち足りて仕えられる環境とはどういうものなんだろうという意識が頭から離れない…。

「すごいんだね、ゴウンさまって人…。」つい言葉にして呟きが我知らずに零れてしまっていた。

「ありがとうございます、アルシエさま、そのお言葉だけでワタクシ共も満足するに足る賛辞でございます。」

「最初、会った時から、ずっとすごい面ばかり見せられてるからね、ボクなんか、そういうのが当たり前に見えるようになってきてるみたいでちよつと怖くなる時があるよ。」

紅茶に口を付けながら、しみじみと懐かしむようにジエツト君がそんなことを言い出して、少し興味を惹かれてしまった。

「そういうえば、最初にゴウン様と会った時って、どんな時だったの?」「普通に当たり前の「人」として最初に会ったのは、学院での昇級試験の時かな? 試験で対戦する相手として戦う事になったのがランゴバルトのチームでね:リーダーはもちろん彼だったけど、ゴウン様は「モモン」って名前で学院の生徒として編入してきたんだよ」

ん? その名前、どこかで聞いたような:どこだったっけ? と思うも、思いつかず、話の続きが気になり、そつちに意識を持っていかれ、その疑問は湧き出てきた興味という波にさらわれ、かき消えてしまう。

「それと同時に、まるで何かの間違いじゃないの? って感じでフルーダ様が生徒として学院に、しかもボクのクラスに編入されて来てね:、一番メンバー集めで苦しんでた僕らを助けてくれるようにチームに入ってくれたんだ。」

え? えええ?? フルーダ様が? 生徒に? 編入? なんの冗談?

「うん:その表情、よくわかるよ、その気持ち:その当時のボクも同じ気持ちだったからさ:」

そう苦笑するジエツト君も、きつと今の私と同じ気持ちだったのだろう。

「色々あって、フルーダ様を入れてメンバーが5人揃ってさ。」

それで学院恒例の初級試験は初年度こそ普通に行われたけど、次の年から一気に様変わりしてしまつてね、次の年からはお互いのチーム同士のトーナメント形式の対戦って感じで試験が行われることになったんだ。

まあ、2年目もその試験を受けられるようにはなつただけど、ほとんどがフルーダ様とモモン:つまりゴウン様との魔法合戦みた

いになっちゃってね。昇級試験をするたびに、先生方もルール作りの変更にも、学院に出る被害の補填に魔法の余波による施設の破損を防ぐための防衛魔法に苦心したり、パワーバランスによる成績の優劣の差が開きすぎないようにって、大変だったみたいだよ。」

「そ…そこまで先生方を苦しめるまでの展開だったの?」

「そりやそうさ、フルーダ様も全力で第6位階魔法を出してくるし、他の系統の魔法を組み込んで戦い方の応用は広くしてたけど、ゴウン様はそれに対応して、フルーダ様の使う位階までの魔法で留めておく、って宣言までしてたんだから…きつともつと上の魔法まで使えたんだらうね。でもそれは使わず、第6位階魔法同士のぶつかり合いになったんだもの…そりや被害もすごいさ。」

「そうなんだ…よく怪我人が出なかつたね…」

「出たりはしたけど、最悪でも軽い怪我で済むようにお互い〈飛行〉<sup>フライ</sup>を使って空の上で戦ってたからね、こっちはこっちでランゴバルト達との戦いの方に意識を向けるしかなかったよ」

(色々思う所はあるんだらうな…嬉しそうに話してるけど、複雑そうな顔もしてる…)

実際にジェットが複雑な顔をしているのは、この昇級試験が終わってからが大変だったからという事情を知る者は当事者しか知りえないことなのだ。

ただの昇級試験なのに、校舎が破損、怪我人が出たり…まあ怪我人は試験の性質上、毎回何かで出ていたことは出ていたのだが、校舎の破損からの瓦礫で巻き沿いを食う生徒がいたり、校庭にクレーターができたり、流れ魔法で教師が(防衛魔法を展開させていてなお)負傷するという事態が起きては、さすがに皇帝にまで話が行かぬ道理はなく…

昇級試験前まではなんとかごまかせていたフルーダも、とうとうその時になって、アインズ(この時はまだ皇帝にはアインズの詳細は知らされていないが…)との関係性(フルーダが弟子入りした先の師匠(モモン&アインズが同一人物とはまだこの時、知られていな

い。)の頼みの延長で今回の事件に発展したこと)や、「いつ国を捨てても不思議じゃない」くらいには尋常じゃない信奉ぶりを見抜いてしまい:そこから混迷を極めていくことになってしまっていたのだ:。

しかしここでそんなことはとりあえず言う必要はないと判断したジエツトは、先ほどの話の続きに思考を切り替え、昔話を再開させる。「とは言え、もう1人のチームメイトで、最期に入ってきた黒髪の女の人がほとんど独壇場で、最初の昇級試験は無双で終わらせた感じだからねえ、昇級試験は「チーム単位での成績」で判断されてたのがその時のルールだったから、その時の昇級試験での1位と2位は、ゴウン様の居るランゴバルトチームに:これは後から知ったことだけど、無双してた黒髪の女性はゴウン様が手配してくれた高位階魔法の使い手で、剣での戦いもできるって人だったみたいだね:その人がいてくれたおかげで、2位がボクらのチームだったんだよ。」

「え? なんて?? 黒髪の女の人が全員を負かせたんでしょ? なのになんで2位?」

「それが先生たちが悩んで出した結論でね:チームとして負けた人数は、ランゴバルトチームが多かったわけだけど:チームの中で一番実力のかげ離れた戦いを繰り広げていた、フルーダ様とゴウン様の戦いは、ゴウン様の勝利で決着してしまっただよ。」

「え?? ということは?」

「つまり、人類最強という肩書もあるフルーダ様を実力で組み伏せた:しかも魔法合戦で:だよ? そんな「編入してきたばかりの新人」がいるチームをどう扱うべきか:そこを数日に渡って先生たちは議論していたよ:そこに結論を出させたのがフルーダ様さ。」

『私を負かしたあのモモンという生徒はただモノではない、将来は有望だろう、今回は人数比率としてはジエツト氏のチームが優勢だが、どれだけの人数をそろえても「私を超える」という偉業は何にも代えがたい、だから今回の勝者は、ランゴバルトくんの:モモンくんの所属していたチームにその榮譽を与えるのがふさわしかろう。』



「なんてことを言ったみたいでね、それが決め手になって、言わばゴウン様チームの優勝ってことに、その時の昇級試験では…そうなっちゃったのさ。」

そこで、今までずっと空気のようにメイドの仕事に徹していた女性が「おおお…」と顔を上げ、目を見開き、感動しての感嘆で、つい出てしまった声なんだろうという雰囲気を感じてありとにじませていた。「そうなんだ…それもきつとゴウン様のすごさの一端なんだね、力を抑えて戦ってもフルーダ様以上なんて…」

「そう…だからその次の試験からは先生方も同じ位階同士の戦いをさせるようにして、位階ごとにそれぞれ別の採点方法を導入してバランスをとったり、なるべく実力の拮抗した者同士を対戦させて競わせようとしたり…そんな中でも格上の位階魔法を使う相手と戦いたい場合は両者の承認がある場合のみ…だとか、それで格上に勝てたら飛び級の可能性もあるだとか…いろんなルール変更を実施してかなり苦労してたよ。」

「そうなんだ…そんなことがあったのね…」

（なんかそばにいるメイドさんの方が、やたら夢中になって聞き入ってる気がするんだけど…そこまで気に入られてるんだなあ…）

「そういうことから、ゴウン様も、フルーダ様も、お二人ともボクにとっては級友だった…クラスメイトとして競い合った仲間みたいなモノのかな、気分としては。」

（実力の方は天と地ほどの差はあるけどね…と付け加えるのも忘れてないあたり、そういう点で、彼はゴウン様との線引きをしているんだという雰囲気は感じられて、初めて今までの彼とゴウン様との関係性が理解できた気がした。）

そうやって話題がひと段落ついたあたりで、お互いに出された紅茶をゆったりと味わっていると、不意に扉が開き、ゴウン様と妹たちが戻ってきた。

「いやいや、長いこと待たせてしまって済まないね。 ついこの子らに見せたいモノが次々にできてしまったもので…あそこまで素直に

称賛されると、こちらももつと喜ばせたくなくなってしまふ…全く、ホントに得な子達だよ。」

イヤそうな声ではなく、どこまでも明るく、そして軽い口調で嬉しそうに言ってくれたので、何の失礼もなかったことに安堵してしまつた。

「ゴウン様、ありがとうございました。2人も纏わりついてしまつて、ご迷惑だったのでは…?」

「イヤイヤ、そんなことはないよ。彼女たちは本当にいい子達だ、こちらも若返つたような気分になされたよ、気が向いたらまたいつでも来るとイイ。」

「ねえねえ、お姉さま！ すごいんだよお〜? ゴウンさまって何でもできるんだよお〜:それにキラキラのおへやにまほうのへいたいさんたちのおへやもあつたのお〜。」

「うんうん、すごかつたんだよお〜! ゴウンさまの未来のおよめさんもすごかつたんだよ、びしゅ! って、しゅば!! って」

この場にアルベドが居たら、ウレイリカとクーデリカを「下等生物のわりに見どころはあるじゃない」程度にはいい印象を持ち:「未来の…お嫁さん。アインズさまの…ふふ…くふふ。」なんて状態になりそうな展開を思い浮かべたアインズは、その発言をし出したクーデリカに念のためと声を掛ける。

「いいかい? あの女性は別に私の恋人とかじゃないんだよ? なんでお嫁さん候補だと思つたんだい?」

「だって、さいしよにゴウンさまにだきついていたし…スキつてずくつとおもつてゴウンさまを見てたんだよ? ゴウンさまもあのひとに「スキになるように」ってなにかをされたんでしょ?」

「うぐ…んん…まあ…その時は、まあ、そういう気分だったこともあるのだが…クーデリカはなんでそんなことまでわかるんだい?」

「えええ? だってあのひとのまわりにずっと見えてたよ?」わたしだけがゆいいつ、あいするようになめいられた。とくべつなんだ。」って…」

「うおお…、そうか、そういう…それがキミの生まれながらの異能なん

だね、キミら姉妹は3人そろって、タレント持ちだったのか、すごいものだね。」

(すげえな…クーデリカちゃんもウレイリカちゃんもアルシエちゃんも、3人ともなにかのタレント持ちか…クーデリカちゃんのタレントだけがどこまでのモノか不明なのがちよつと怖いかな、面白くもあるけど)

などと、後ろでただ一人、状況を面白がってるベルリバー。

アインズさんが、アルベドに「愛するように」なんてコトをしてたつて?これすごいニュースだな、なんて思いながらも、宝物殿でのアルベドの一部始終の行動につじつまが合うことをそこでようやく理解できたベルリバーであった。

☆☆☆

…無事合流を果たした姉妹3人と、今回奇跡の出会いのきつかけをもたらしてくれた人間の協力者の一名であるジエットの4名を伴い、(ベルリバーも居るが姿を消しているので数に入っていない。)アインズは改めて「今回はよく来てくれた、今回キミ達が運んで来てくれた情報は私はずつと待ち望んでいたもの…もはやあきらめようとけじめを付けねばと思い始めた矢先のことだったので大変喜ばしいものだった、なので、この度の私の喜びと感謝を形として表したい、料理も用意してあるので、たくさん食べて行って欲しい。」

そう伝えて「私自身は同席はしないつもりだ、緊張せずにマナーなども気にせず、好きなように食べて欲しい。」

そう言うと、その後でゆっくり話を聞かせてもらおうじやないか。との言葉だけ残り「楽しんでくれたまえ」と…、とある部屋の扉を開けると、広いテーブルというだけでなく、どこまでも長く伸びているテーブルクロスの上にコレでもかと言うほどの料理の数々に目を見張る。

貴族だった頃でも恐らくこれほどのモノを見ることはなかったであろうと思えるものばかりだ…あらゆる食材が輝いて見え、どれも美味しそうなものばかり…。

どれ一つとして、そこいらの市場でさつと買って来られるものでは

ないことがよくわかる。

「こんな素晴らしいお料理は見たことはありません、これはどちらののですか？」

思わず問いかけてしまったアルシエにアインズはこう答える。

「イヤ、これは私が元居た…いや、もはや遠くになってしまった故郷…と言つてもいいかもしれない場所で採れた食材の数々だ、これらを振る舞つてもまだ私の感謝の気持ちを表すには充分ではないと感じてるくらいだよ。」

それは…と思うも、言葉にはとうとう出来ずに絶句してしまった。

それはすでに帝国の基準をもすではるか上を行っている…どれだけの世界？いや…国だったのだろうか？

“もはや遠くになってしまった”ということは、きつと戻るつもりも戻れもしないのかもしれない…そう思うと断つたり遠慮するといふのもあまりにも失礼な行為に思えてしまう。

「さすがに全部は食べきれませんが、謹んでお受けします、このような席を設けていただき感謝いたします。」

思わず普段ではそんな言葉は使わないはずの…「貴族であつたころ」に受けた教育でその場ですべき受け答えが自然に出てしまった。

…とは言え、それもアルシエが物心ついた幼いころに覚えた言葉なので、大人の貴族社会でも通じるものかは怪しいとは思ふも、自分ではその言葉で精いっぱいだった。

「いやいや、礼には及ばない…恩には恩で返さねばな…私を感じた『恩』に見合うだけの礼をしただけなのだから、かしこまることもない、いつも通り、くつろいでくれたまえ。」

そう言い残して、ゆっくりと扉を閉めながら、部屋の中に居る数人のメイドに「それでは皆、粗相のないようにな…丁重にもてなして差し上げるのだ」

言い終わると同時に扉が閉まり、わずかな静寂が訪れる。

ハ…と意識が戻ってくるのを自覚すると、もうすでにメイドたちは行動を開始していた、す…と静かに椅子を引き、中には脚の高い子供

用に作られたのだろう椅子も2脚あった。

テーブルの中央に私、そしてその両隣にはウレイリカとクーデリカ  
：わずかに入口の扉側へとずれた隣の席がジエツト君だ。

椅子を引いて待つてくれていたメイドたちが「こちらに用意された  
席は、特に座る場所によっての序列などはこの場ではございませぬ、  
そういう意識も考えず、心行くまで味わっていただければ幸いです。」  
そう言つて、椅子をテーブル側に寄せてくれ、次々と料理を皿に乗  
せ、目の前に運んできてくれる。

「うわあ〜、すごいねえ、クーデ、おいしそうだねえ」

「うんうん、ウレイの好きなくだものもあるよお」

「慌てないで？時間はまだたくさんあるし、急がなくてもお料理は逃  
げないから」

「そうだよ。これはゴウン様が催してくれた感謝の宴席みたいなもの  
さ、ゆっくり味わつて食べても誰にも叱られたりしないから、好きな  
ものを好きなペースで食べていいんだよ」

「うん！ ありがとうジエツトくん」

そこからは本当に夢のような時間、至福とはこういう事かという味  
わいの数々に、料理を口に運ぶごとに恍惚としてしまうアルシエ達で  
あった。

☆☆☆

「さてさて、では改めて自己紹介と行こう、私はジエツト君のかつての  
級友にして、帝国内でイプシロン商会という団体のスポンサーをさせ  
てもらっているアインズ・ウール・ゴウンという、今日はみんなと会  
えて大変喜ばしい日だ、まだまだ時間はある、色々な話をしようじや  
ないか」

重々しい口調ではなく、妹たちと接してからはずっと軽い感じの：  
こちらを歓迎しているという声音がよくわかる感じで語り掛けてく  
れている、時々メイドさんたちに発している「支配者」っぽい口調だ  
とどうしても緊張してしまうので、こちらとしてもありがたい。

すでに食事も終え、場所も変わり、ここは周りを緑で囲まれた場所。この屋敷は、実は地下にあり、大きく「階層」と呼ばれているフロアで区切られているらしいという事まではかろうじて分かった。

先程食事をしたのは第九階層と言っていた…つまりは、少しだけ地上部分に近づいてはいるが、未だに地下深くに居るのは間違いはない…なのに、今、目の前には広大に広がる…草の香りさえ感じられ、風の二オイもわかる…

地下の中で自然が広がっている場所があるなど思いもよらなかったが、現実として目の前にある以上、疑いようがなかった。

そして今自分たちが居るのはその中の一角で、かつては女性めんばーと呼ばれる人たちがくつろぎ、歓談し、親交を深めるために使われていた「星青の館」という場所である。

「自分にしがみつくな、手を握るか、服のどこかを握っていてくれ」とゴウン様に言われて、服をつかみ、妹たちは手をつないでいた。ジエツト君はもちろん服のすそをつまんでいる程度であったが…、そうすると瞬きする間に、場所が入れ替わり、ここに居た。

というのが、今の状況である。

「アインズ様、この度のお食事、ホントにおいしかったです。ありがとうございました。」とジエツト君が初めに口火を切ってくれた。

「いやいや、気にすることはない、あの程度ならうちのメイドたち5人ほどが本気を出せばみんなペロリと食べてしまう程度だからな。」

アルシエはしばし、あの玉座の前に勢ぞろいしていたメイドさんたちを思い出していた、どう考えてもそうは思えなかった、みんながみんな煌びやかで、スタイルも整っており、1人として太っている人などいかなかったのに…と悪い、これはきつとこの場の空気を和ませるための大げさに言った冗談なのだろうと思うことにした。

「今回のことはキミが彼の所に水晶玉を持って現れてくれなければ、ずっと気付かずにいた可能性が高かった、アルシエ君、キミには大きな借りを作ってしまったと私はそう思っている、キミ自身はそうは思わないだろうが、私はそう思っている、それほどに強く感謝している

という事をわかってほしい。」

急に自分に話を振られ、うろたえながらもなんとか言葉を紡ぎだす。

「いえ、あれはホントにたまたま選んだお店が彼のいるお店だったという幸運に過ぎません。そこまでのことでは…」

「いやいや、その幸運こそキミの持つ『巡り合わせ』という縁が導いてくれた朗報であった。キミがワーカーをして、それを入手できていなかったら、無駄に時を過ごし、欲しいものをみすみす見逃すところであったのだ。私の長年の夢をかなえてくれたことに深い感謝を送るよ。」

「そう言ってもらえると…ありがとうございます。」

「所で、ワーカーをしているという事だが、冒険者とかには興味はなかったのかね？」

何気ない話題で問いかけられた言葉だが、この質問が本題に入るためのきっかけになったことをアルシェとジエツトだけが強く自覚できていた。

「ハイ、私がワーカーになろうと思った時点では、まだ第3位階の魔法も使えず、実績も無い身、家庭の事情でどうしても短期間で大きく稼ぐ必要があつて…そこが当時はどうしても譲れない一点だったので。」

「ああ、つまりは銅級、鉄級と、チマチマ小銭稼ぎのように地道に階段を上がるような時間的な余裕はなかったという事だね？」

「ハイ、その通りです、とは言え、ここ数年、少しずつ返してはいましたが親の借金癖は治らず、私が返済していることも手伝い、尚更拍車がかかるといになりました。」

「親とは…自分の身を削つてでも子供のために未来を切り開いてあげようという精神こそが尊いというのに…そんなふざけた親もいるのだな…」

静かに、そしてどこまでも深く、重い感情が乗せられたように感じるその言葉にゴウン様も親のことで何かあつたのだろうか…そう思うも、今はそれを聞いている時ではない、今は妹たちのことを優先に

させてもらうことにする、と心に強く刻み込み、次の言葉が続けた。

「ハイ、なので先日とうとうウチの親は妹たち二人を借金返済の名目で売り払ってしまったのです、人攫い共が妹たちを連れ去っていかうとする直前に助けてくれた人がいました、その人のおかげで妹たちが今もこうして私の元で過ごすことができています。」

「ほお：それは見上げた人だね、その人はどんな人だったのかな？」

「実は後で知ったことですが、その妹たちを救ってくれた人と、私に水晶玉を渡してくれた人は同一人物だったんです。」

（おおお!! すごいなベルリバーさん、人助けもしてるなんてまるで たっちさんみたいじゃないかあ〜）

「ほお：それはすごい偶然もあったものだね：まさにそれは天の采配というべきものかもしれないな」

「その人は私と初めに会った時、ヴェールリバーII スウズカウワ〜と呼んでくれと名乗ってくれました、その時はスウズさんとお呼びしますと言ったのですが、今ではヴェールさんと呼ばせてもらってます。」

（安直すぎる！ なにそのネーミング！ アバター名とリアの名前が混然一体になってるじゃないですか！）

「そして、彼は今もキミの護衛として、ここに来てくれているってことだね。」

「ハイ、今も居てくれていいはずですが、さっきの食事の時も時々、目の前から食事が消えてたりしたので：彼も食べていたのだろうと思います。」

（うん！食べてたよお〜：お腹の中の3人娘たちが「食べたい食べた」とずつとうるさかったものでねえ、お腹にあった口に運んであげる感じで、丸呑みしてお腹の中の彼女たちにおすそ分けしてた！：まあこの声も届いてないだろうけどね！）

アルシエの後ろで、静かにその返答をしているベルリバー、アインズと話したいという想いはあるが、今はまだ自分のターンじゃないというのは承知している、なので静かに状況を見守ることに注力していた。

「それで：彼に助けられて、もう妹さんたちは何の心配もなくなった



ということかな？」

「いえ：そうではなく：危ないのは今も状況は変わってません、何故なら、人攫い達を一蹴して追い払ってもらっただけで、『親が売り払った』という事実が消えてはいません。いずれはまた何度でも：ひよつとしたら私がワーカーに出てるうちに攫いにくることも考えられる。」

「そうか：となると、すぐにでも帝国から出た方がいいだろうね。どこか身を寄せる当ては：：というか、今はジエツト君の所に居るのだね。彼の所からも早く離れた方がいいだろう。」

「何故です！ あそこなら滅多なことでは見つからないはずでは？」

ジエツト君がゴウン様に帝国から離れねばならない理由に説明を求め始めてしまった。まあ私もそこらへんはなんでそうなるのか、少し知りたい部分ではあつたけど：

「ジエツト君、君が水晶玉と共に私の所に運んでくれたクリスタルのグラスは覚えているね？ あれを入手する時、アルシエ君のワーカーのメンバーが非合法な連中に危うく身ぐるみをはがされそうな局面だったみたいじゃないか？ そういう報告だったと思うが。」

「ハイ、それはその通りです。その時は手を尽くして救い出し、1つとして外に漏らさないよう全て回収する必要があつたのでそうしましたが：：」

「そこが問題なのだよ：：その場にいた非合法な連中にアルシエ君とジエツト君と一緒に居ることを見られていただろう？ 直接の関わりはないとしても、そういう危ない連中というものは危ないことをしている者同士、どこかしらで繋がりは持つことになるだろう：：そう遠くない内にその事実に行きつき、ジエツト君の家にも押しかけてくる可能性がある。」

（確かに、そう言われてみれば、そうかもしれない：：そういう裏のある連中は似たような事をする者同士でつながっている可能性もある：：きつとジエツト君の家に迷惑をかけることになってしまう。）

「でも：：あの家には「用のない者からは発見されにくい」魔法がかかっているのでは？」

「それはそうだが、ジエツト君、キミほどの物わがりのいい人間がソコに気づかないというのは珍しいと私は思ってしまったが：確かに〈認識阻害〉の魔法はあの家には施してある。しかし：『アルシエ君の妹達を取り戻す』という用がある場合は、その限りじゃないとは思わないかい？」

「あ…」

そう言われてやっとそこに思い当たったようだ。

「〈上位認識阻害〉をかけても良かったのだが、必要な連絡や、郵便物などが届かなくなっては生活もしくかろう：訪問客が道に迷ってもそのこと自体の連絡が入らないようでは迎えに行くこともできません？そう思つて低位の〈認識阻害〉に留めておいたのだよ。」

（この世界では〈伝言〉<sup>メッセージ</sup>の魔法がそもそも信用されていないという事実を聞いたときは驚いたものだがなあ…）

「それでは、彼女は一体どこに行けばいいのでしょうか：帝国に居られなくなり、家も捨て、親類も頼れないとなると…」

「まあ、身を寄せるといふ場所に心当たりがない訳ではない：しかしそれはアルシエ君にその場所に住める適性があるかどうかなんだよ…」

「適性…」

何のことかわからないアルシエはその言葉だけを呟き、『その適正ってどういうものですか？』と恐る恐る聞いてみると、不可思議な質問をされ、秘密の厳守ができるかの確認を取られた。

「必要があるなら、仲間たちにも秘密にすることも厭わない！妹達が護れるなら：私にとつての1番は常に妹達。ワーカーを始めたのも妹達のため、チームを組んで冒険をするのも妹達に被害が行かないように私になるべく多額の返済をする必要があったから…、妹達が護れなくなる原因を排除するためなら、チームに隠し事を持つことだつて別に苦じゃない！」

いつのまにか、いつも通りの言葉使いになつていくことにも気づかずに自らの意思を告げ、適正とは何かについての話に移る。

アインズにしてみれば、その言葉自体に共感を覚えていた。丁寧で

はなくなった言葉遣いも別に不快ではなかった、それこそが包み隠さない、飾り立てても居ない本心だと分かったから。

妹達こそが第一、それに比べれば全てのことを排除することもいとわない。その精神が「アインズ・ウール・ゴウン」を第一に考える自分の考えとどこか似ている雰囲気を感じ取ったためだ。

「よろしい、それなら、アルシエ君、キミは亜人種のことをどう思うね？」

「亜人種…ですか？ エルフさんや、ドワーフさんのような？」

もつとすごい何かを問われるかと思っていたアルシエは肩透かしを食らったような気分になる。

「まあ、それも含まれることは確かだがね…そう、例えば、人を食わず、分け与えるあらゆる動物の肉だけを食べると約束してくれる友好的なオーガとか…良心的で話の通じるトロールや…商いという点において、もしくは忠義という精神を持ったゴブリン達…そういう者たちが同じ場所に住んでいる町、もしくは村、もつと言えば小規模な団体としてでもいい。そんなところがあるとしても存在しているとして、そこに住むことに嫌悪感とかはあったりするかね？」

「いえ、多分初めは戸惑うと思います、でも自分たちの身に危険がないのが分かっていたら…、相手の表情がどんなものか理解できるようになる時間は必要とは思いますが、友好的に接してくれるのであれば…妹たちが安全に暮らせるのであれば、それがどんなところでも！」

「いいだろう、それが聞きたかった、これはまだ表には出せないことなんだが、その「場所」は王国領にある。とは言え、この屋敷も王国領にあることだし、ご近所ともいえる場所にある土地だ、そこには「族長」と言われるトップが存在し、その者の統治の元、平和にあらゆる種族が過ごしている…」

一旦そこで言葉を止め、大事な…言いにくいことを言い出す時のような雰囲気でお口を開く。

「しかしこれは王国の王族たちに知られれば無用な争いに発展しかねない案件だ…だからこそ、これは表沙汰にはできない。チームメイトであれ、その場所に「移り住む」という確約がなければ、そのことを

露見させるわけにはいかない、どこからどう話が誤解して伝わり、『王国軍による殲滅や虐殺』になるかもしれないのだから…そういう事態に発展させないためにも秘密を守ることは必要なのだ…本当は案内するつもりもなかったが、よかろう…私の「友達」になってくれたクーデリカとウレイリカの身の安全のためだ。アルシエくんも秘密は守ってくれると言うし…早速、案内しようじゃないか…よかったら、ジエツト君も来るかい？ キミだけ仲間はずれで帰されては心細かろう」

「わあ、いい、ありがとう、ゴウンさまあ、だいすき♪」

「はい、アインズ様 是非ともお供致します。」

「族長…ですか？ その方も亜人種で？」

町長でも都市長でも、村長とかでもなく、族長という事は人ではないという事だろうか…そこが気になり、つい問いかけてしまった。

さつき、妹たちが無事ならば、それ以外は気にしないと聞いたばかりなのに…「適正」を問われるだろうか…

「ふふ…それは私の口からではなくその場所についてから追い追いかけていくことになるだろう…なあに、そんなに危ない存在ではない、会えば意外に仲良くなれるかもしれないぞ？」

（そうだろうか…特に否定も肯定もしなかったという事は…オーガとかトロールとか…馴染みにくい相手とかではなさそうだけど…）

「では、そこに行く前にまずは、私やみんなの護衛となる者ら連れて行くことにしようか…ちよつと待っていてくれ？」

そう言うゴウン様はこめかみの辺りに指を当て、何ごとかを呟いている。

「さて、これでいいな。 それでは、少し魔法で護衛を1人生み出すとしよう…スキル！【中位アンデッド作成】ジャックザリッパー！」

ゴウン様がそう唱えると、地面に魔法陣のような光が灯ったかと思うところから仮面をかぶったスラリとした長身の男性(?)のような存在が姿を現した…そしてなにやら甲高いキヤキヤキヤ!とでも言うような鳴き声?のような声を発している。

「まあ、とりあえずあそこに行くのならこれで充分だろう。」

(アルシエ君の護衛にはベルリバーさんも居ることだし、それ以外にもつけてあるけどな、みんなは気づいていないだろう：多分分かったのはベルリバーさんだけだろうし：彼ならあれらが害はないという事は理解してくれるだろうし問題は無い。)

そう判断して目の前に「転移門」を発生させる。

「さて、この闇の扉をくぐると、すぐ目の前がその「場所」だ：姉妹の3人が気に入ってくれれば嬉しいのだが、用意はいいかね？」

そう問いかけ、振り向くとなにやら二人とも緊張したような表情をしているが、すぐさま決意した面持ちになり「ハイ！参ります。」と、元気に：そして幼い方の姉妹は「またあのくろいのだあ～：こんどはどんなばしょかな？　ねえ、クーデリカあ？」「どんなばしょだろうねえ～ウレイリカ～」と無邪気に楽しんでいる。

当然、緊張した表情だったのは「中位アンデッド作成」などという聞いたこともない手段をいきなり使われたからであり：それが魔法なのか、武技か何かの系統なのか：それとも全く別の何かだったのか：それすらわからなかったせいだ。

そうした手段で現れた存在が、見かけからではわからないながらも、実力差は何となく感じられ、絶句していた。ということには支配者は気づいていないのである…。

そうして一向は、はた目には全くそうとは見えないが、実は総勢で10体を超える団体になってその姉妹の知らぬ地に行くことになっているとは彼女らも、ジエツト君ですら気づいておらず、知っているのは護衛してる当事者と、支配者、そして捕食者というメンバーだけであった。

さてさて、これを読んでいる皆様はとつくにどこに行くのか理解していると思いますが…

現在、その村に向かったメンバーはまず我らがアインズ様、そしてその護衛として呼び出された某階層のシモベでサイゾウが1体(隠密特化で、姿を消していられる為)

そして、アルシエの護衛として付き添ってきていたベルリバー、そしてアルシエに気づかれぬように隠密能力を発揮して着いてきているエイトエッジアサシン。

ジエツト君と幼い妹2人の影にはシャドーデーモンが1体ずつ。

そして、一応目に見える形として（スケープゴートとも言う）護衛で召喚したジャックザリッパー。という人数構成。

加えて、仮面をしてるながらも声を出さなければ人の種類に見えなくもないって感じだからである。当のアインズ様も今の所、仮面をつけておりますしね。

この世界ではまだアインズ様は漆黒聖典の存在は知りません、（陽光聖典とは遭遇済み）なので、警戒はしているものの、書籍版と比べて若干ゆるゆるの警戒レベルとなっております。

そして、転移した場には赤毛のメイドさんが一足早く到着して、至高の御方を待っている、という図式になっております。

## 第18話 ようこそカルネ村!

一行は、ゴウンと名乗った偉人とも言うべき存在が発生させた見たこともない魔法を通ることを決意し、今… 闇の扉をくぐっている。

そして、闇のような空間はほんの短い間、もしかしたらそう思い浮かべていただけで、実は暗闇ではなかったのでは?と思うくらい短い間で、明るい陽射しを感じる。

〈転移門<sup>ゲート</sup>〉に入る瞬間、アルシエは目を閉じて歩を進めていた為、瞼の裏に明るい光を感じたような気がしたので、目を開いてみると、目の前(とは言ってもまだ距離はあるが)には背の高い…5メートルは軽く超えているだろうか…

周囲一帯を木で作られた扉に囲まれ…どこまでも、見渡す限りにその扉が横に広く続いていた、そして…とある場所から円を描くように、中を取り囲んでいるような場所があった…。

その扉より前、ゴウン様のお屋敷に来る前に迎えてくれたメイドさんの1人がその扉よりもずっと離れた、私たちの目の前で再び出迎えてくれていた。

「アインズ様、この度はようこそお出でくださいました、再びこの村にお越しいただけること、村の皆が喜ぶことでしよう。」

そう笑顔で、見た感じ怖い風ではないのだが…ウレイリカがすぐに私の後ろに隠れてしまった…どうやらあの人に見える信仰系の魔力はウレイリカには刺激が強いらしい。

「あの…ゴウン様…すみません、ウレイリカがまだ慣れていないようです。」

「ん?どうかしたのかな? ウレイリカ…あのお姉さんの何が怖いのかな?」

ああ…そうか…ゴウン様はあの時、直接ウレイリカの状態は見ておられなかった…まだそのことを知らないのは当たり前のことなんだ…と改めて思い直していた。

「あの…実は私は魔力系の魔法の波動、そして、ウレイリカは信仰系の魔法の波動を目視できる力があるみたいで…」

そう告げると…ゴウン様は「ふむ…」としばらく考えこんだ後、ロブの袖に手を入れて、何かを取り出し、そのメイドさんに声を掛ける。

「ルプスレギナ…わざわざこんなところまで出迎え、ご苦労であった、その労をねぎらうという訳でもないが…、日頃からの私への忠義の褒美だ、これを受け取るがいい。」

「とんでもございません、アインズ様、御方に尽くすのは当たり前のこと、このような事をされずとも、このルプスレギナ、御方への忠義に代わりなどありません！」

「そうか…ならば尚更受け取ってもらわねばな…物で上がり下がりする忠義など、本物ではない、お前の私への忠義は本物であるということに關しての私からの感謝だ、よもや私からの感謝などいらぬとは言うまいな…」

「いえ、決してそのような…わかりました、謹んでお受けいたします。」  
そう言うとルプスレギナさんというメイドさんはそのアイテムを受け取る。

(それは見た目がネックレスであり、十字架のようなデザインをしては居るものの、本来は上の方が短く、下が長くなるのが一般的なロザリオと呼ばれるものであるのに対して、今アインズが渡した物は、上が長く下が短い…さらには十字架に磔にされた男性のような彫り込みが、逆さ吊りになっている。)

「アインズ様…これは？」

「ああ、それは餡ころもちさんが作成したはいいが、ペストーニヤに着けようとして、結局、イメージに合わなかったということで売り払おうとしたのを私がもらい受けたものだ…」

「え?? ああ餡ころもち様がお作りになられたアイテムでございいますか?…してこれの名前は、なんと?」

「ああ…それはな…『背信のロザリオ』というアイテムだ…実のところ、クレリック系の者にしか使い道のないアイテムでな、信仰系の位階魔法のみの探知を阻害できるというものだ…。」

「それを装備したままでも信仰系魔法は使えるので、「使えないと思っ



てたのに、使えるのかよ？」みたいなビツクリさせるための使い道しかない：ドルドイドみたいな職業は回復系の位階魔法は誤魔化せるが、ドルドイド由来の位階魔法は誤魔化せないしな…、まあ、使い道はお前次第で、どのようないたずらにも使える…そう思っただけに身に着けておくといい。」

「これは良いものをいただきました、ありがとうございます。」

そう言っただけ、受け取ったアイテムをすぐさま身につける。

「いかがでしょう、アインズ様？」

「ああ、なかなかよく似合うじゃないか、それでこそお前に渡した甲斐もあるというものだ…」

（ん？ ほお…ウレイリカが後ろに隠れるのはやめてくれたか…なんとか、怖がらないようになってくれたようだ…。）

「このような素晴らしい褒美をいただいた感謝以上の忠義を捧げ、今まで以上のお役に立てるよう、より一層の精進をいたします。」

「ああ、以前のように報告、連絡、相談を怠るということは最近は無くなってきているしな、期待している…くれぐれもこの村に害が及ばないように頼んだぞ？」

「はい、身命を賭して、このルプスレギナ、その任務、必ずや遂行してご覧に入れます。」

「うむ、ここに於いてのある程度の裁量はお前に任せているから、心配はしていないが…どうだ、ルプスレギナ…最近の騒ぎ以降、何も変わったことはないか？」

「ハイ、例の亜人集団の侵攻を退けて以来、平穏な日々を迎えられています。」

「そうか…それは何よりだ…それよりもだ、今回この村に来た用件は先程へ伝言で知らせた通りだ。」

「ハイ、窺っております、そちらの3名をこの村に移住させるという件でございますね。」

「ああ、とりあえずは中を見せて実際の姿、平時のままのこの村の姿を見せてやりたくてな…アレらは隠したりはしていないな？」

「ハイ、いつも通り、日常のまま皆が過ごしております。」

「そうか、それは良かった、それならば早速、門の前まで行こうじゃないか…案内をしてくれ」

「かしこまりました、アインズ様、どうぞ、こちらへ…」

そう言うと、ゴウン様の前に立ち、先導するように門へと歩いていく…近づけば近づくほど、大きさがよくわかる、この扉なら、馬の上からでは中の様子は見え、空からでなければ近くからは見えないような造りになっている、遠くからなら見えるかもしれないが、レンジャー持ちや魔法の遠隔視でも使えない限りは「人の輪郭、人数」程度しか見渡せないようにわざと造られているようだ。

歩いて近くまで来ると、目の前には立派な木製の門がそびえ立ち、さらにその上には見張り台らしきものが立っている、そこから数人の見張りがこちらを凝視して大騒ぎしていた。

「みんなに知らせろ！ ゴウン様だ！ ゴウン様がいらしたぞ！」

「ゴウン様だ！ ゴウン様！この村の救世主のゴウン様がいらしたぞ！」

早く！早く扉を開けるんだ！」

「なんか、すごい騒ぎになってませんか？」とアルシェが聞いてみると…

「ん？ああ…そう言えばこの村を救ってから直接ここに訪れるのは実に数年ぶりだからな…それなのにみんなもよく覚えていてくれたものだ…」

(やっぱりこの仮面が特徴的なんだろうなあ…)

「ああ、時々私にも話して下さい、あの話の…ですか？ さつき『村』って言ってましたし…」とジエツト君が軽い質問で問いかけている。

「ははは！ まあそうだ、それで間違いはない…とは言え、人手の問題はあるが、扉で囲った面積で言えばすでに村の規模を超えているのは王国の国王でさえ知るところだ、半年に一度、徴税官が訪れているからな。」

「これだけの規模だと、ずいぶんな税を取られるのではないですか？」

「イヤ？そんなことはないぞ？この国の国王は「国民のため」という名目に弱くてな、ジエツト君にも言ったように以前の事件があつてから、この村の税はかつてないほど減額され労役も免除されている、この土地面積の規模にふさわしい「人の数」に達した際、その次の年の収穫以降から改めて正規の年貢の取り立てが行われることになつてゐるからな。」

「これだけの規模だと、相当人が多くないと年貢もまとまった金額を払いきれそうにないですね」

「まあ、そこがこの村にとつては良い作用を及ぼしているのさ、人が少ないという一点があるために年貢を払うだけの余力はないと公然と認められているからな。」

そこまで話をしてしていると目の前の門がゆつくりと開いていき、目の前には赤い毛色を短く刈り揃え：それなのにどこかネコつ毛のような印象を抱かせる女性を横に、そして、レンジャーだろうか：割とい年代になつてゐるだろう男性を反対側に連れた、一見ただの村娘にしか見えない：でもどこか目が離せない佇まいの女性が中央に立っている。

「ようこそ、カルネ村に：：アインズ・ウール・ゴウン様、再びこのカルネ村へのご来訪、心より歓迎いたします。」

「うん、エンリも元気そうだな、どうだ？読み書きの方は順調に進んでいるか？　読み書き、計算くらいはできないと村を栄えさせるなど出来ないからな。」

「はい、おかげさまでンファイの指導の下、簡単なことならできるようになりました、あとはもつと色々できるようにならないと：：という感じですよ。」

と言つたところで、「ハ：：」と思ひ浮かべたように急に姿勢を正し、改めて言葉を発していく。

「それよりもこの村の恩人をいつまでも門前に居させる訳には参りません、どうぞ、中へ：：」一行の皆様も、カルネ村へようこそ、大したものはありませんが、ゆつくりして行つてください。」

門の中に進み、入っていく中、エンリと呼ばれていた女性がなにやらゴウン様に耳打ちをしている。なにを話しているんだろう…

耳を澄ませていると、ゴウン様の返事だけがなんとか…か細くだが聞こえてきた。

「それには…ない、…通りの…、…を見せ…:くれ」

なんだろう、所々聞きにくかったけど、でもまあこの村には人以外も共存しているっていうのは事前に聞かされているから、すでに覚悟はできている…どんなのでも大丈夫、ビーストマンだろうとエルフさんだろうと、ドワーフさんだろうと…

と歩いていると目の前を巨大な木材を丸太のまま肩に担いで運んでいくオーガの姿が目に入る。

「オガ山さん、オガ助さん、その木材はいつもの所をお願いしますね」

と目の前のオーガに指示を出しているのは先程のエンリと呼ばれていた村娘だ…テキパキとオーガに対しても普通に臆さず話しかけている。

「ウガ…小さき者のシュジン、オレら、ガンバル。」

素直にオーガが言う事を聞いていることに目を見張る…ここは本当に…人と亜人種が…共存…している…の？　オーガとも??

「アネさん、今日はお客人ですかい？」

「エンリのアネさん！　お客なんて珍しいな、これは誰なんだ？」

と最初に話しかけて来たのは背中に毒々しい液体を刀身から滲ませたグレートソードを背負うゴ布林…とは言っても私たちが遭ってきた来たゴ布林とは全くの別物だ…マジックキャスター理知的で言葉も普通に話し、力強さも、身のこなしも全くレベルが違うのが魔法詠唱者の自分でも見て取れるほど、普通のゴ布林じゃないというのは理解できた。

それに対して、そのグレートソードを背負うゴブリンの横に居る子供のような声のゴ布林も話し方こそ普通の人のようだが、どこかまだ幼さを感じさせる、実際本当にまだ幼いのだろう。

「コラー！　アーグ！　いい加減アネさんへの口の利き方を覚えねえか！」

「ああ、ごめんなさい、族長！　この人たちは…誰…ですか？」

「はあ…もおいい加減、その呼び方…まあ、いいです…どうせみんなもう誰も私のこと村長だなんて呼んでくれないんだし…」

「あらエンリちゃん、今日も精が出るねえ、ゴウン様もお久しぶりで、今日はゆっくりして行けるんですか？」

「やあ、族長さん、ゴウン様の案内かい？ 大変だね！」

「アネさん、テーブルの片づけ、終わりやしたぜ！ 村のみんなに弓の撃ち方でも教えて来ませえ。」

次々と、この村の皆が、エンリさんに声を掛けていく、さも統率者にこれから自分がどう動くかの通達をするかのように知らせてから行動する者まで居る。

「え？…エンリ…さん、あなたが…この族長…さん。なんです…か？」

思わず驚いて聞いてしまった。

「ええ！ 私がこのカルネ村の村長の…『村長』の！ エンリ！ エモットと申します、お見知りおきを！」

静かにゆつくりとだが、しかし大事な事らしく2度、ちゃんと念を押して「村長」と自己紹介をしてくれた。

くるつと横に居たゴウン様の方を向いてみると笑いをこらえて居るのか…小刻みに体を震わせながら、手（ガントレットだが）を口の場所に当てていた。

アルシエが振り向いたのでエンリも一緒にアインズの方を向いて、アルシエが「族長」と言ってしまった理由になんとなくだがピンと来てしまったようだ。

「ゴウン様…!!!」

思わず2人一緒に心の中でアインズにツツコミを入れるのであった。

☆☆☆

「まあ、そんなにむくれてないでそろそろ許してくれないか？ エンリ…せつかくの可愛い顔が台無しだぞ？」

椅子に座りながら、対面に座って頬をぷうぷうと膨らませているエンリさんにゴウン様が声を掛けています…。いたずらした割に、真剣になって機嫌を取ろうとしているのは何故だろう

「もお…ひどいです、ゴウン様！ 私に族長と呼ばれること、好きじゃないって知っていたじゃないですか！」

「まあまあ、エンリ、キミは村長であると同時に、みんな…人間以外のみんなからも尊敬されているカルネ部族の『族長』ということに表面にはなってるんだから…そろそろ慣れてもいいんじゃないかな？」

みんなの分の飲み物を用意してくれ、それを村長の妹さんと一緒に人数分のコップをお盆にのせて持ってきてくれたンフィーレアという優しそうな人が仲裁しようとして声を掛けています。

「そおだよお、お姉ちゃんはおおこの族長さんになったんだもん、しようがないよお」

妹さんだというこの子はネムちゃんというらしい、もう私の妹たちとすっかり打ち解けてしまっている、ウチの妹より少し年は上か、同じくらいだろうか…人懐っこさの中にもどこか大人びた印象を年齢の割に感じさせる時がある。

「もお…ネムまでそんなこと言ってえ…、そりや、ンファイはいいわよね、族長の婿旦那！とか言われたいんだから！」

一行はとりあえず、カルネ村の村長であるエンリの自宅に案内され、カルネ村の現状をアルシエ達にも教えて聞かせていた。

護衛として召喚したジャックザリツパーは村長宅の玄関前で見張り番をしている。

すべての指にメスを括り付けた仮面の長身男が同じ屋根の下にいるというのは怖かろうと思ひ、離れさせている、あれではうかつに握手もできない存在であるからだ。

「そりや、私だって『族長』ってだけなら我慢もできますよ…でもね、最近ひどいんですよお」

「なんだね？…なにかイヤな事でもあったのかね？」

気になつたらしくゴウン様が真意について聞くと、信じられないこ

とが起きているということがエンリの口からみんなに聞かされる。

「誰が広めているのかわからないんですが、最近、野良のゴブリンだの、オーガさんだのが森から追われて…、行く所が無いとこの村に来るようになってたんです！」

「村の発展にはイイことじゃないか？ 人手は増えず、ゴブリン手、オーガ手が増えればそれだけ、年貢も減らしてもらい、労役の免除だってこれからも続くことになるんだろ？」

こともなげにそんな発言をするゴウン様、そうか…村の面積のわりに「人手」が少ない、というのに、これだけの広大な範囲に渡って堀を作れるというのはそう言う事だったんだ…とアルシエは始めて気がついた。

「問題はソコじゃないんです！ 私の悪評が信じられない速度で、森の中で広まったり、関係ない町にまで広まったりして、もう私、近くの街にお使いにも行けなくなってるんです…」

「それはタダゴトじゃないな…、一体なにが起こっている？」

今までの軽い声とは打って変わって、支配者のような重々しい口調が出され、一瞬、その視線はルプスレギナさんの方に向き、ルプスレギナさんは大きく首を振っていた。何のことかわからないようだ。

「この村を頼って来たオーガさんは…血染めの女隊長を頼って来た、とか言いだしてくるし、ゴブリンさんはゴブリンの大將軍…、へたな街なんかでは「血まみれエンリ」とかになってるんですよ？」

「は…??」

あまりのことにしばらく硬直した時間がゴウン様に訪れた後…

「それで、この村に何かの被害は…出ているのか？」

「いえ？ 幸い村のことまでは広まっています、ただ「血まみれエンリ」という名前ばかりが独り歩きしていて…私じゃ、どうにもならないんです。」

「それで…頼ってきたオーガやゴブリンたちは、評判倒れだと襲い掛かってきたりはしなかったのか？」

「あの…それが…ですね…、来たは来たんですが…、最近私におかしなことが起きてるんです。」

「ほお…襲い掛かれたのに無傷なのはすごいじゃないか、ンフィーレア君が魔法で助けにでも入ってくれたのかな？」

「いえ…そうじゃなかったんですよ」

そう言っただけ苦笑いとも、何とも言えない表情を浮かべているンフィーレアさんが言葉を引き継いだ。

「あの時の事、ゴウン様に言っただ大丈夫なの？エンリ」

「うん、お願い…私じゃ、主観が入ってうまく説明できないから…」

「じゃ、その時のことを話すとですね…まあ、オーガの方が反応が分かりやすいからそつちを言いますよ。」

「ああ、頼む、何があつたか教えてくれ…ンフィーレア君。」

話によると、こういうことらしい…村にやって来て、ここに血染めの女隊長がいるはずだ。と夜中だというのに門前でオーガが喚き散らしたと言うのだ。

オーガが来る少し前にも同じことがゴ布林でもあつたため、いい加減誰のことだかわかっているエンリは最初にこの村で「部族入りしたオーガ」を後ろに引き連れ、門の外に来たオーガと対面したらしい。

そうすると、オーガは一瞬だけ呆気に取られたような感じになり、「ワハハ、ウソをイウナ！ソナナ小サキ者ガソウダツイウノカ？」と大笑いした後、話にならん…というような事を言っただけ、エンリさんに向かって「コンナ小サキ者、ニギリツブシテヤル！」と両手で掴みかかろうとした時、いい加減ゴ布林の時も同じような問答があつたらしく…その時はグレートソードを持っていたあのゴ布林さんたちが話をつけたようだったが…エンリさんもウンザリしたのと同時に「勝手に頼ってきといて、なによその言い草。」と頭にも来ていたらしく…ついカツとなつて『いい加減、黙って頭を下げなさい！』そう恫喝のように言ってしまったところ、全てのオーガが…さっきまで見下して、笑っていたはずの者全てがエンリの前に跪いてしまったのだ。

さらには「オオオ…オソロシイ、チイサイノシユジン…オレタチ…アヤマル…」と…そう言っただけ、それ以降、彼女を侮るようなものは



居なくなつたという。

「私には自分に何が起こつてゐるのかわからないんです、私はただの村娘のはずなのに…いつからこうなつてしまつたのか…こんな感じじゃ、嫁の貰い手もきつと…と思つて…」

実はその前にも、村のお祭りの一環で腕相撲の勝ち抜き戦をやつたところ、全てのゴ布林たちに全勝してしまつたのだ、決勝でカイジャリに勝つてしまつた時は、もう自分は「女の子」ですらないんだな…と、打ちのめされていた。

ゴ布林達からすれば自分の主人の名声を高めるつもりだつたようだが、実際は「女としての自分」の自信を根底から瓦解させることになつてしまふなど思いもしなかつたと、ンファイレアに謝りに来て、元気づけてあげてくれないかとお願ひしに来た、という事件も手伝つてゐることはアインズにも知らされてゐない事実である。

「そうか…そんなことがあつたのか…それにしても町にまで名が広まつていたのに、よく捕まらなかつたものだね…」

「はい…どうやら噂がさらに広まる時に、大げさに言う人もいるらしくて…私が衛兵さんに世間話で聞かされたのは『身の丈2mを超える筋骨隆々の大女で、その気になれば悪霊犬バグゲストの首を片手でねじ切つて、その血をそのまま絞り出し、飲み干すような豪傑』つてことになつていて…今ではきつと、もつとすごい話になつてゐるか…」

そう言うのとエンリさんは頭を抱えてテーブルに顔を伏せてしまつた。

「まあ…たしかにその噂だと、キミだと結び付ける要素は何一つとして無いからな」「『エモット』の方で名乗り通せばきつとバレないんじゃないか?」

軽い調子でいうゴウン様もゴウン様だけど、エンリさんの悩みはかなり深いようだ…

「はあ…私つてもお二度と町の外で「エンリ」つて名乗ることも呼ばれることも許されないのね…」

そして机に顔を伏せながら「きつと今頃はただの悪霊犬バグゲストじゃなくなつて古の悪霊犬の首を片手でねじ切るような女にされてるんだわ

…」と自嘲気味に呟いている。

「元氣出しなよ…、エ・ランテルの時は事情で行けなかったけど、できる限りこれからはボクが街への買い物に行くからさ…」

助けになつてゐるようなつてないような事を言うンファイレアさんにエンリさんのくたびれたような言葉が戻ってくる。

「あなたももう一応、ンファイレアⅡエモットなんですからね…せめて一緒に苦しんで欲しいわ…」

「わ…わかつてるよ…イヤなことなんか思い出す暇ないくらい忘れさせてあげればいいんだろう？期待に添えるようにガンバルヨ……」

「ホント？約束よ？絶対だからね？」 どこか喜びをにじませるような表情になったエンリさん…なにが彼女をそんなに元氣にしたのだろう。

それにンファイレアさんとエンリさんが見つめ合い始めてるんだけど…

それにしてもンファイレアさんの言葉はすごく疲れたような声になつて行つてた…最後の方…どうしたのかしら…すごく脱力…というか…諦めというか…棒読みに近い…疲れ果てたような感じが伝わつて来たんだけど…

そう思つて、ふと妹…クーデリカの方に目をやると…2人の方に視線を固めたまま…顔を真っ赤にしたかと思うと…両手で顔を覆つてしまった。

この子には何が見えてるんだろう…そう思うも今は聞きたくても聞ける雰囲気じゃないし…あとで聞いてみよう…そう思ったアルシエだが…後々になつてもその事に関しては「言えないし、言いたくない」

そう口を閉ざしたままだった。

…クーデリカにしては珍しく頑として話そうとしなかったので、結局どんなものが見えていたのか謎のままだったのである。

その後、ンファイレアはアインズにお願ひし…魔法持続時間延長化トリブレットマジックと魔法三重化を組み合わせたへ上位認識阻害を寝室にかけてもらつ

て夜を迎えることになるのだが、そのことも、他の面々はずっと知らぬまま、夜が過ぎていくことになり、翌日は泥のように眠るンフィに、元気いっぱいのエンリという…両極端の朝が訪れることになるなど、誰にも知る由のないことである。

☆☆☆

「さて、見つめ合うのはいいのだが…エンリ？ちよつといいかな？  
村長のキミに少しお願いがあるのだが…」

そう頃合いを見計らい、彼女の意識を現実に戻すことに成功したゴウン様に、少しだけ紅潮しているような顔色のエンリさんが少しうわずったような返事を返していた。

「は…はい、ゴウン様…なんでしょう？ 私にできる事ですか？」

「そうだ…キミにしか頼れないことなんだよ…というより、この村に移住したいという人たちがいるのだが…どうだろう？ もちろん組合も通していない、訳アリの3人なのだがね…」

「ええ？ 移住ですか？ このカルネ村に…？」

「まあ、そうだ…ちよつとした事情があつてな、家にも戻れず、もはや国にも居られなくなった可哀そうな子達なんだよ…」

「そうなんですか…ゴウン様がそうおっしゃるなら、きつと悪い人達ではないんでしょうね…、わかりました、幸い、あの事件で空き家はたくさんあります！ 掃除する手間は少しありますが、こんな田舎でよかつたら、迎え入れる準備はいつでも整えられます。」

「そうか…よかつた。…というわけだ…、どうかな？ キミらは移住してみる気は変わっていないかな？」

「あ、ハイ、私の方は問題ありません、こんな平和そうな村だとは思っていないかつたので…ここならすぐになじめそうです。」

「ウレイリカも、ここ好き♪ずつとすむく…ネムちゃんももつとあそぼうねえく？」

「ううう…クーデリカも…ウレイリカといっしょにいるうく…。」

「どうしたの？元気なくなっちゃった？ ネムと一緒に遊ぶのはイヤ

？」

悲しそうな表情で、ついさつきまで打ち解けて遊んでいたクーデリカの元気がなくなったのを気にしたネムちゃんがすごく心配してくれる。

「ううん、ちがうの、そうじゃないの…げんきないってわけじゃなくて…すめるのはうれしいな…って、うれしすぎてとまどっただけえ」

10年程早く、大人への階段の高さを知ってしまったクーデリカの戸惑いはまだしばらく続くのであった。

「よかったあ…ネムちゃんもいっしょだねえ、これからもいっしょおう。」

「うん…♪ ネムも嬉しくよおう、二人もお友達できて、うれしく♪」

「良かったな、この村からなら、アルシエ君の所に行っている「依頼の調査」をする場所にも近い、移動するのに苦労はないし、仲間との合流もスムーズに済むだろう。」

（あれ？ 私…ワーカーの依頼の件ってゴウン様に話したっけ？）

疑問に思うも、ゴウン様を知っているのだ、意識してなかっただけできつと話していたのだろうと思うことにした。

そんなことを考えているとエンリがアインズに疑問を問いかけていた。

「この子達3人が、この村に…ですか？」

「そう思って連れて来たのだが…なにか問題はあるかね？」

「大丈夫です、私たちもこの子達がこの村に早く打ち解けられるように協力させてもらいます、ね？…ンファイ？」

「うん、もちろんだよ。移住してくれる人が増えてよかったね？」

エンリ。」

「これからももつともつとがんばるからね、ゴウン様、私もつともつとお役に立てるように頑張ります！」

「ああ、期待しているよ、エンリ…ああ、それから、キミの悩みの件は…根本的な解決はできないかもしれないが、何がキミの身に起きているのかの原因の方は調べてみようかと思う、しばらく待っていてもら

えるかな？」

「あ、ハイ…なにかわかるようだったら、教えてください、難しいならムリにとは言いませんので…」

「難しいかどうかはこれから調べてみてからだな…とはいえ、私の方も少しこれから忙しくなりそうなのだ…それがひと段落してからになるが…それでいいかね？」

「はい、それで構いません、よろしくお願いします、ゴウン様。」

という話が一通り終わった辺りで、ゴウン様が何かを思いついたようにガントレットをはめた両手で器用に「ポン」と音を立てて、手を鳴らしてこう話題を切り出した。

「所で、この村での結婚式はどうだったのかな？ 二人の夫婦の誓いはどういう感じに進んだのか…言える範囲で良いので教えてくださいませんか？」

「え？ ゴウン様もそういうのにご興味がおありなんですか？」

「エンリは私を何だと思っているのかね？ これでも一応、普通の人間なんだぞ？」

（エンリの記憶は最初から仮面をかぶった状態で出会ってるということにしてあるから、初対面の髑髏顔は覚えていないだろう…多分、そのはず！ ンフィーレア君も私がアンデッドだとは知らないはずだし…これで問題ないはずだ！）

「ああ、そうですね…すみませんゴウン様…でもご期待に添えるようなお話はできそうにありません。」

「ん？なんでだね？ 式ぐらい挙げたのだろう？」

「いえ、そういうのはしておりません…何しろこの村には教会もなく、神父様もいないので…」

「ああ…そうか…そういえば、この村には住み込みで村人に尽くしてくるような物好きなクレリックやプリーストなど居なかったのだな…」

「そうか…せめて式ぐらい挙げられるような村に、近いうちにしてあげたいものだ…」

そうつぶやくゴウン様の言葉に…なんとなくの光明に心当たりが

ある：そう：ゴウン様の言っていた「住み込みで村人に尽くしてくれ  
るような物好きなクレリック」という言葉に思う所があつたのだ：  
が、しかし確定事項ではないので、今は言葉にして伝える段階ではな  
い、話がうまく進んだら伝えることにしよう。

その時はゴウン様にでもいいし、エンリさんでもいいだろうし：。  
と1人納得しているアルシエだった。

(そうだ：それなら結婚祝いということ、二人に何か贈り物でもし  
てあげないといけないよな：)

「あ：そうか：そういえば、そうであつたな：ルプスレギナ：これか  
らお前に頼みたいことがある、時間は大丈夫か？」

「アインズ様からのご命令ならばなんなりと：頼みなどと言わず、い  
くらでも命じてください。」

「そうか：うむ、よし：それならばこれから少しお前に大きな仕事を  
頼みたい、頼まれてくれるな？」

そうアインズに伝えられると、喜色満面で二つ返事をしたルプスレ  
ギナ。

その話の流れを何のことかわからず見守っていたエンリと  
フィーレアに、今夜、時間を少し空けといてくれ。とだけアインズか  
らは伝えられる。

そして適当な空き家を貸してくれないか：ともアインズに頼まれ  
たため、ゴウン様のためなら：と、少し広めの家に案内すると「うむ  
：これならちようどいいかもしれん。」と何やら嬉しそうにして、何ご  
とかを始めようとしていた：

夜になつたら呼ぶから：と言われ、エンリは元の自分の家に戻され  
ている。

そうして一旦ナザリックに戻って準備に必要な物などを用意しよ  
うとしていたら、ルプスレギナに殆どの作業をされてしまった。

「御方にそのような雑用など：」と言われ奪われたに等しい。

結局アインズは、ルプスレギナに通りの指示を出したり、役目を  
全うするためのセリフ回しを教えたり：とできることと言つたら、そ  
れくらいである。

その間ひっそりと…、召喚されただけのジャックザリッパーは効果時間が過ぎ、誰に気にされることもなく還って行ってしまうのだった。

☆☆☆

夜になると、ゴウン様が呼びに来た。「夕方に私のために用意してくれた家まで来て欲しい」と言われ、そこまで足を運ぶことにした。

訳も分からずにエンリはンフィーレアと共に連れ立ってその家まで行く…するとそこには案内したはずの家はなかった。

いや、正確に言うとう家ではなくって、まるで教会の様な建物に姿を変えていたのだ。

(もちろんそれはアインズの幻術系の魔法で、家全体を幻影で包み、教会のような見た目になっているだけなのだ…)

「それでは、ンフィーレア君はこっちだ…」とゴウン様に案内され…というより連れていかれてしまった。

「それではエンリ様…こちらにどうぞ…」と声を掛けてきたのは…忘れるもしない、初めてゴウン様のお屋敷にご招待された時、迎えに来てくれたメイドさんだ…ユリさんと名乗っていただろうか…。

案内されるがまま、「改造したのかしら」と思うほどになった家の裏口から入ると、そこは何かの衣裳部屋みたいな見た目にされており、複数人の見知らぬメイドさんたちに囲まれ、着せ替え人形のように知らないヒラヒラのドレス姿にさせられる。

これは何だろう…どういうこと？何が始まるのだろうか…そう思っている内に着替えが終わり、すごく歩きづらい真っ白なドレス姿にされてしまった。

なにやら化粧までしてもらえると…こういうのは今まで知らないナニかだ…なにがこれから起こると…こののだろうか…

そう呆然としていると、また別のメイドさんが扉をノックして現れ「こちらへどうぞ、エンリ君エモット様」という言葉にもおどろにでもしてくれ、という気持ちと共に誘導されていくと、そこには装いも新

たに真っ白な：見たこともない服装になっているンファイレーア。

見たこともない服だが、なにか特別な感じがする。これはなんだろう：ドキドキしてきた。

するとンファイレーアが手を差し伸べてきて：「さあエンリ：」と声を掛けてくれた、ここまでされたら、流れに任せるしかないと：ンファイレーアの手を握り、二人で目の前の扉を開けると：目の前には赤い絨毯でまっすぐに進むしかないような雰囲気させられている。

ンファイレーアと共に前まで進むうとすると、たくさんの拍手の音が響き渡った、赤い絨毯で示された道の両側には、横長の椅子が何列にも並べられ、そこには村中の人達が集められている。

「エンリちゃん、幸せになるんだよ」

「よかったね、エンリちゃん：これからも2人で力を合わせるんだよ。」

「ンファイレーアや、絶対に幸せにするんだよ！」

「お姉ちゃん、キレイだよお、ンファイくんとかんばってねえ」

口々に祝福の言葉を口にしてくれる：ここまでくればいくら私でも分かる：村育ちで畑ばかり手伝ってきた私だけど、なにかの物語か何かで見聞きしたことくらいはあった。

それからは進行が速かった。

まっすぐ進むとルプスレギナさんが居て「汝、エンリ！エモットはこの者、ンファイレーア！バレアレを夫とし、病める時も健やかなるときも共に歩み、支え、生ある限り愛し合うことを誓いますか？」という質問される：「ハイ」：自然にそう答えていた。

ンファイレーアにも同様の質問が問われ、ンファイも「はい！誓います！」と言われた瞬間、ンファイに対する気持ち膨らんできたような気がした。

ルプスレギナさんが「それでは指輪の交換を：」と言い、目の前に指輪を差し出された：すると、小さい声でルプスレギナさんが「これをンファイ君の左手の薬指に嵌めるツスよお」と教えてくれる。

言われたとおりにすると、ンファイも同じようにして：お互いの指輪の交換が終わり：「これで、2人は夫婦として認められました。そ



れでは誓いの口づけを…」そう言われると、人前では恥ずかしいと思う部分もあるが、どこか嬉しい自分も居る。

ンファイアレアがドレスの顔部分にかかるベールを持ち上げ、ゆつくりと顔を近づけてくる…ここまで来たら流れはわかる。

自然と私は目を閉じていた。唇に軽い…そして確かな温かさを感じ…みんなからたくさんの拍手が沸き上がった。

そこから目を開けると「新しく夫婦になった2人の門出をみなさんで祝ってください」と促され、再び、今度は真っ赤な絨毯を扉の方へと歩いていく。

左右の椅子から立ち上がったみんなに拍手で祝福され…扉を開けると…ゴブリンさんたちや、オーガさんたちが出迎えてくれていた。(多分オーガさんたちはなにがなにやら、わかっていないだろうなあ…)

ゴブリンのみんながしているようにオーガのみんなも同じように手を叩いているのが微笑ましかった。

その真ん中に続いている道を歩いていくと、あつという間に自分の家にたどり着いてしまう。

扉を開けようとするのと近くでゴウン様の声が聞こえてきた「さあ、エンリ、そこでみんなの方を振り返って、この花束を上空に放るようにして投げるんだ。」

そんな声が聞こえたが「え？花なんてどこに？」と思うといつの間にか自分の手に花束が握らされている…

(ホント…ゴウン様、やりすぎ)

と思わず吹き出しそうになってしまった。

たくさんの人たちに祝福され、ゴブリンのみんなや、オーガさん達にも見送られ…喜びも極まってきたため、言われたようにすることにしました。

上空に放るようにして花束を投げると…自然に上背のあるオーガが受け取ってしまう。

「ウガ？」

と不思議そうにしてるも、みんながそのミスマッチな光景を見て爆

笑の渦へと変化している中、エンリは家の中へと帰る。

二人で、思わず見つめ合っていると

「どうかな？ 気に入ってくれたかな？ 即席だったが、なかなかだっただろう？」

「ゴウン様、夕方から準備を始めて、こんな短時間でどうやってみんなに知らせたんです？」

「簡単なことだよ、元村長に協力してもらって、みんなに知らせてもらったんだ、ゴブリンやオーガにはジユゲムやカイジャリ達が頑張ってくれたんだよ。」

「ちなみにあんな風に見えて、ルプスレギナはハイエロフアント司祭長の称号も持っているんだぞ？ 本職の神父顔負けだったと思わないか？」

（とは言え、オレの記憶にあるリアルだった世界の、ドラマのシーンとかで観たのを思い出しながらだったから細かい点は違ってるかもしれないけどな…アッシュウルヴァニバル最古図書館で調べても良かったかもしれないが…でも時間もなかったしこんな物で満足してもらおう。）

（大体、時間を停止して調べ物をするって手もあるけど、魔力だつて無限じゃないしな、調べものに魔力を割きすぎて教会に見せるための幻が作れなかったり、不可視化ができなくなったら本末転倒つてやつだしな…そんな時に間違つてもプレイヤーに出くわしたりしたら間抜けすぎだろおく…可能性は低いだろうがゼロじゃないということを考えて、最悪の状況を想定するのは用心して、し過ぎだということは無いんだしな…）

そう判断して「それでは後は若いお二人だけにしてあげましょう」なんていう大昔の「お見合い」という儀式があつた頃の決まり文句を言いながら去ろうとすると…

「待ってください、ゴウン様」と、なぜかンファイレアに呼び止められた。

「ん？ どうかしたのかね？ ンファイレア君…」

そう言つて振り向くと…実は…と言つて、あるお願いをされた。

「とりあえずその件は大丈夫だ、キミらが無事に部屋に入ったら、すぐにその魔法は唱えてあげよう。部屋に入る前にその魔法を使つたら

キミたちが部屋に行きつくことができなくなってしまふからな。」

ここまで言うと、今言った言葉の時以上の小声でアインズは指輪の効果についてンファイレアに教えてあげる。

くれぐれもエンリにはナイショだぞ？とだけ付け加えて…。

アインズが指輪交換の時に用意した指輪、ユグドラシル基準ではせいぜい上級のアイテム効果しかないが、それでも今のエンリとンファイレアには有用な効果だろう…そう思ってた1人納得していた。

ンファイレアに渡してある方の指輪は、青の宝石がはめられている。

上級のデータクリスタルであり、その効果は行動を起こすたびに消費される行動ポイントというのがユグドラシルではあったのだがその消費を半分に軽減してくれる効果があるというもの…さらに土台となつている指輪自体に込められている効果は1日に一回だけ、その消費した行動ポイント、そして疲労ポイントを全回復させる。

というもの…。

これなら夫婦生活でも、ポジション作成の際にも、ある程度疲れ知らずで励むことができるだろう。という狙いがあったの贈り物。

そして、ナイショにした方がいいと告げたエンリへの指輪には赤い宝石、これも同様、上級程度のデータクリスタルがはまっており、その効果は支援、及び指揮する技能にボーナスが付くというもの。

さらに土台になった指輪自体に宿る効果は…装備している間中、自らにへ感覚鋭敏の魔法効果が付与されるというもの…もちろんインスピレーションだけではなく…恐らくこの世界では全ての感覚が鋭敏になってくれることだろう。

リアル世界でも「魔法使い」であった鈴木悟ではあるが結婚というものに興味がなかったわけではない、人並みにそういうのに憧れはあったのだ。

だからこそ、ンファイレアの結婚を祝福したくもあり、応援したくもあったからこそその贈り物…。

カルネ村の面々にも思い入れはあるため、不器用ではあるが、こういう形でしか表せなかったのがもどかしい…しかし、結婚式というも

のを用意してあげられたのは幸いだったろう…あの二人にとって一生の思い出になってくれることを望んでいるのは真実なのだ。

一方、今回の結婚式にはもちろんアルシエとその妹たち二人も参加していた。

アルシエとウレイリカは素直に感動していたのだが…

ただ一人、クーデリカだけが複雑な気持ちで結婚式を見ていた。

結婚式自体はすぐステキで、キレイであこがれた…自分もあぁいうのが挙げられたらいい。

それは素直にそう思う…でも…

その結果が「アレ」に結び付くのかと思うと…ちよつと大人になるのが怖くなってしまうクーデリカ。

結局、アルシエ達3人は、結婚式が終わった後の…赤い絨毯の両側に並んでいた長椅子や、衣裳部屋の中の家具やらテーブルやらが片付いた、幻影の魔法が消えた家に泊まることになった。

なぜなら、どうしてもクーデリカがあの家にお世話になり続けるのは悪いから…と遠慮していたからだ。

…となると、きつとこれから暮らすのはこの家になるのだろうか…と少しだけ思うも、まあ、この村に住めることにはなったのだ、慌てることはない。

妹たちと住める家の件はまた明日、聞けばいい、フォーサイトのみんなにはジエツト君からちゃんとコトの経緯を伝えてもらうように言っている。

この村からだ、帝国は遠い距離だけど、きつとゴウン様と一緒に近くまで送ってもらえることになるだろう。

(それに護衛について来てくれているヴェールさんも傍に居るんだしね…と思うと安心して眠れそうに思えるのが不思議だなと思う。)

実は途中からアルシエのそばからヴェールは消えており、結婚式が終わった辺りからは、夜眠ることのできないアインズの所に入り浸っ

て、夜通し語り合うことになっているなどは知りもしないアル  
シエの夜はこうして閉じた瞼の向こうで過ぎていくのだった。

## 第19話 カルネ村で過ごす夜、そして迎える朝

今は陽もとつぷりと暮れた夜：護衛の中でサイゾウだけを残し、ルプスレギナも墳墓に帰らせ、余計な情報が露見しないようにという意味もあり、自らの護衛に：という名目で（そうしないと他の守護者達がこの村に泊まることを許そうとしなかったという騒ぎもあった。）今、骨の支配者の横にはパンドラズアクターが居る。

さらに逆側の隣にはサイゾウ：という立ち位置でアインズの護衛についていた。

そんな中、アインズの目の前には捕食者（人の姿は維持されているが：）、そして足元にすがるように、というか寄りかかるといふ表現が近いが：そんな光景で同室を許されているのが3人のエルフという状態だ。

空き家の2階、そのとある一室にそんな2人が対面している。

護衛2名は静かに支配者の横に立つて、言われた通り「異常事態がない限り楽にしている」という言葉を受け、「休め」の姿勢で不動のまま立っている。

（楽にしているっていいって言ったのにな：ホントみんな誰に似たんだ？この真面目さは）

反面、昼間はずつと姿を隠していた至高の1人、捕食者の御方の横には護衛ではないためか、適当に床に座りながらベルリバーさんに体を預け、しなを作るように身を預けて安心している3人のエルフが思いつきりくつろいでいるのが対照的だった。

「やく、アインズさんもよくやりますよねえ、あんな結婚式なんてあつちの世界でもリアルで見たことないんでしょ？」

そう軽い口調で口に出す。

それに対して、支配者も親しい友人と話すときのような気やすさで返事を返す。

「いいじゃないですか、この村の中でもあの2人：というかあの両家の一家は特別なんですって！あの旦那の方なんか、チート級のタレン

トなんですから…味方につけておいて損は無いですよ」

「へえ…ただのお人よしが災いしてすぐに損をしそうな旦那さんに見えなかったんですけどねえ。…そんなタレントってどんなんでしよう、聞いても大丈夫ですか？」

「ええ、旦那さんの方のタレントは「使用制限のあるマジックアイテム類なども含め、全てのマジックアイテムを装備、使用ができる。」っていうぶっ壊れ能力ですよ。」

「なにそれ!!!? それじゃくその気になればワールドチャンピオンじゃなくてもたっちさんの鎧や盾を装備もできちゃうってことですか?」  
「ええ、それどころか、下手したら『スタツフ・オブ・アインズ・ウル・ゴウン』も使いこなせちゃうでしょうね…させはしませんが…」  
「ええ、それには同意です、あれは他人に使わせていいものじゃないですからね、あれはモモンガ…あ、失礼アインズさんだからこそ…のギルド武器ですし。」

「まあ、そんなことをさせなくても、普段だけでもすごい重宝されてるんですよ、この村では…彼自身は魔力系の職業構成してるのに、信仰系のスクロールだって読めるんですからね。」

『癒しの杖』なんてマジックアイテムを持たせて、パワーレベリングをナザリックでさせたらあつという間にLV60以上いっちゃったりしてね。」

「そんなことされたら、うちの「上位物理無効」「上位魔法無効」とかの能力も通じなくなるじゃないですか、そんな怖いことさせてないですって」

(難度180超えのンファイアか…、想像もできん…)

この部屋の中では、直接の関係者でないのはエルフの3人娘だけ…それ以外はみんなギルド関係者だ…特に警戒することもなく暴露話が展開されている。

というのも、すでにこのエルフ娘たちはベルリバーのことを全部受け入れている上であの依存っぷりなのだ…この場で何を知ろうと、ベ

ルリバーの不利益になるようなことはしないだろうという判断を支配者も結論を出していた。

何しろ、この部屋に入った瞬間、アインズはベルリバーに1つの提案をされたのだ。

「すみません、アインズさん、ちよつといいでしょうか？」

「ハイ、どうかしましたか？ベルリバーさん」

「あのですね、この姿の人間を捕食した時にですね…こいつが虐待していた奴隷3名を保護してらんです。それで今その子たち、ボクのお腹の中でくつろいでるんですが…」

「へ？ 腹の中に入れてるんですか？そんなことできるように？」

「ええ、ユグドラシルとは仕様が変わってしまったみたいで…捕食すると強化されるのではなく、その外見や能力等を忠実に再現できるようになったというのは前にも墳墓で会った時に言ったと思うんですが…」

「腹の中で、捕獲するか消化するかすると、どっちにしる意識はなくなってしまうんですよ、なのでどちらも選ばずに腹の中で過ごさせている状態です…」

「ああ…それは退屈でしょうね…でも大丈夫なんですか？私たちの姿を見させて…怯えたりしません？」

「それを確かめる意味でも一度出してあげようと思うんです、一応私が見てる光景はお腹の中に居る子達も共有できるので、今日のことちゃんと理解はしてる感じですよ。」

「音声も聞かせてるんですか？会話とかも？」

「ああ、それは都合の悪そうなことは聞かせないようにすることはできるみたいです、私が聞かせようと思わなかったら、映像だけで、無音の世界だつて言つてましたから、彼女たち」

「あ、女性が3人なんですね。」

「そうなんですよお、エルフの子達でね、キレイどころが3人も居てくれるので旅のお供には癒し効果も満点ですよ」

「いいですねえ…こつちなんか「至高の41人」とかって評されて、



崇め奉られて…ほとんど神様扱いですよ…心の休まる暇がない…」

「それ、こいつらの前で言っちゃって大丈夫な話題だったんですか？」

ベルリバーはチラッとアインズの護衛で付き従っている2人に視線を向ける。

「大丈夫ですよ、サイゾウの方は「シノビ」の職業構成ですし、秘密保持の能力はちゃんと持ち合わせてますからね。それに私の命令で「他言無用だ」って言えば、他の守護者達だって、それ以上は言わなくなりませすし」

「まあ、それならいいんですけどね、パンドラズアクターはアインズさんの息子のようなものですから、アインズさんの不利益なことはしないでしょう。」

「息子って…まあ、そういう認識でもいいんですけど…なんか複雑だなあ…その言われ方…」

「まあまあ…それですね、都合の悪いことは聞かせない風にはできませんし、私のチームメイトでもあります。アインズさんには顔合わせも兼ねてどうかな?…と思いましたが…」

「ええ?…でももう一度聞きますけど、本当にいいんですか? 私たちのこのナリなんですよ? 怯えられません?」

念押しとして、さつきも同じことを聞いたが、再度、最終確認をする…本当にそれで大丈夫なのか?…と…。

「まあ、そういう面も含めて、今この場で確認しておきたいんですよ。」

ベルリバーの意見は変わらないようだ…、その決心を受けて、アインズも仕方なしに首肯する。

「そうですか…それで、この場で吐き出します?」

「それをするなら一度、本来の姿に戻らないと大口を展開出来ませんからね、その流れで見せるつもりです。」

「ベルリバーさんがそうしたいというのであれば…私がかまいませんよ…」

「ありがとうございます、それでは…行きますね」

そう言うと、本来の姿に戻り、体中の口が結集していき、胴体の前面に集まる…まるで、胴体に大きな風穴でも空いたかのように、ポツ

カリと(牙も生えてはいるが)空洞のようになっていて「ぼおうええええ」という音と共にボト…と吐き出され、3人の女性が床に投げ出された。

その瞬間、アインズは暗い想いを巡らせる。

ギルドを去ることになったとは言え、ベルリバーは確かにアインズ・ウール・ゴウンの輝かしい記憶の中にあるメンバーの一人だ…その大切な仲間を傷つけ、罵るようであれば、それ相応の対応をさせてもらおうと…

もしも彼女らが異形種だという理由で、悪し様に彼を罵倒し、この部屋から逃げ出そうものなら、シャドーデーモンを3体ほど呼び寄せ…ナザリック送りにしてもいい…しかしそれはベルリバーさんに決して悟られてはならない…それこそ、彼から笑顔を奪ってしまうことになるだろうから…と、強く心に刻んで、これからの展開を静かに見守ることにした…。

そして…

「キヤ〜〜!!」という叫び。

(やはりか…ここでもやっぱりオレ達のような異形種は…)

と、少し暗い考えに陥り…

「これがヴェールさんなのね…ホラ、見てごらんなさいセピア、口ですよ口！牙ですよ牙！…やつと、このお姿を見せていただけたのよお。」  
「ホントだあく…すっごく鋭そ〜…」

といい、セピアと呼ばれた女性が指先で、牙の先端を「ちよん」とつついて…「いったあくい♪」と喜んでいる。

「聞いてはいましたが、聞きしに勝るお姿ですね、これこそコワカワ…というのでしょうか？」

「まるで「ブサカワ」の亜種みたいに言うのやめてくれないかな…ルチル…。」

「まあ、いいじゃありませんか、例えヴェールさんがどのようなお姿でも…お人柄をよく知っている私たちからすれば、外見がどうだろうと…ちゃんと受け止められますよ？ 私たちを見くびらないでくださいね？」

肝が据わっていると云った方がいいのだろうか…水色の髪色をして、ボブカットのようなヘアスタイルをした方のエルフが堂々とそう答えた。

「そう…か、ありがとう…みんな、これからもついて来てくれるかい？」

「ハイ、ヴェールさま…喜んで。」

三人がそろってそう声に出した。

ベルリバーさんは顔のパーツが口以外ほとんど無いので、表情からは読み取れないが、声の感じからして、喜んでいようだ…。

（良かった…わざわざ「手間」をかけずに済んだようだ…彼も喜んでいようだし心の支えの一助になっているんだろう…となればそれなりの存在として認めてもいいだろう。）

そう心に刻み、致命的な未来は回避されたことには、アインズ以外の誰も気づいていないのだった。

☆☆☆

ということが起こって今…ベルリバーに寄り添い、しなを作るような体勢で身を預けている…少しも彼から離れようとしていないようだ。

そしてベルリバーはと言えば、エルフが寄りかかる場所、足や腿、ヒザの辺りなどにあつた口の数々を上半身へと移動させて、傷がつかないように気を使っている。

（これも一つの信頼関係の形なんだろうな…）

としみじみ思いながらアインズは一つ問いかける。

「ところでベルリバーさん、あの子のことはどうするんです？」

「あの子？ ああ…もしかしてアルシエちゃんのことですか？ う〜ん、どうしましょうかねえ〜…」

「何も考えてないんですか？」

「そうじゃないんですけど、最優先は「あの親から離して安全な場所の

確保」っていうのがありましたからね、それが解決したばかりだし、とりあえず明日、彼女に聞きに行ってみますよ。」

「そうですね、1つの問題が解決されると、また新たな問題が…ってなると考えることが多くて大変なんですよね…今、向こうで身につまざれてますよ。」

「アインズさん…なんだかへ口へ口さんっぽい雰囲気になってきてますよお、元氣出してくださいー！」

「ああ…すみません、つい…」

（ずいぶんストレスを抱えているみたいだな、モモンガさん…そりやそうだな…ユグドラシルがなくなるって話になって、ずいぶん落ち込んでいただろうし、その上で覚悟を決めて最終日まで最後の一秒までユグドラシルと共に…って思っていたら、こんな世界に来ていて…NPC達も動き出したり、神のごとくあがめられたり…ギルドメンバーは誰一人いなかったって言うんだし…）

静かにその様子を見守っていたベルリバーはこのままだと、心が悲鳴を上げて限界を迎えてしまうんじゃないだろうか…ついそう思うてしまう。

「そんな顔しないで下さいって…モ…お…、アインズさん…墳墓のサプライズの件が「無事に」終わったら私もナザリック入りしますから、安心して下さいよ」

「え？ ホントですか？ベルリバーさん…でもそれだとその3人の子たちはどうするつもりですか？」

急に自分たちの方に話題の趣旨を向けられ、驚きながらも不安そうにベルリバーさんを見上げている。

「ん？ もちろんナザリックまで連れて行きますよ？」

目に見てわかるほどホッとするエルフ3人には悪いと思いつつも、大事なことだ、と判断し事実を突きつける。

「あそこ、異形種しかいませんけど…」

「それでも…です、よかったら、第6階層あたりで、暮らせる場所を作っついてくださいよ、人間種の捕虜のために使う住居だから…とかって理由付けて。」

「軽く言わないでくれませんか？ ギルド入りするための条件、知っているでしょお？」

「おや？そんなこと言っていないんですか？あそこの守護者にはちゃんと亜人種のダークエルフが2人も居るじゃないですか？それに領域守護者にも1人、人間が居るの知らないとも思ってます？」

「えええ〜？それ出します？ その話はみんなで話し合っ解決してることじゃないですか？ それにギルドメンバーじゃなく守護者ですから、同じじゃないですよ？」

「でも事実でしょ？ あの子たちは居てもいいけどこの子達はダメなのは明らかに平等じゃありませんよ、それに明美ちゃんだって、招いたことあったじゃないですか？」

「それはギルメンの身内だったからでしょお？ 変な所を混ぜ返しますね」

譲らないベルリバーに苦笑する様子で…でも、どこかこんな食い下がってくる姿勢での話し合いはずっとなかったアインズにとって、心のどこかで求めていたものなのかもしれない、そこまで不快という感覚は抱いていないようだった。

「じゃ〜こういうのはどうです？ 墳墓の調査で入る私たちのメンバーの前にそれぞれ階層守護者を中ボスみたいに出して戦うんです、それで5回戦った内の2回以上勝てたら、この子達が住むこと、許してくれませんか？」

「3回じゃないんですね、2回ですか？」

意表を突かれたような、愉快げな雰囲気です。答えを返しながらも少し悩んでいる。

「だってみんなレベル100なんでしょ？ 3回なんてどうやって勝って言うんです？ ボクはガチのビルドじゃないの知ってるでしょ、アインズさん」

「まあ…5回チャンスの内、どういう階層守護者の組み合わせにするかのメンバー選抜はアインズさんに任せますよ。でもインターバルなしの連戦とか5体いっぺんにとかは勘弁してくださいね？」

「丸投げですか？ それだとアウラとマールレはどういう扱いにしたら

「いいと思います?」

「ああ…あの子たち、二人で1組って概念の階層守護者ですもんねえ  
〜」

「あいつがいたら、ボクのパートナーとして、一緒に戦わせられたんだ  
けどなあ…アインズさん、アイツ消しちゃったんですよね?」

「あ…アレのことですか?消してやしませんよ?何言ってるんです  
?」

急な話の転換をしたベルリバーに、その真意をすぐ理解したアインズは即答する…そしてしばしの空白の時間が過ぎ…「は?」と疑問の  
声<sub>が</sub>ベルリバーから返された。

「なんでです?ギルド辞める時、消しちゃっていいですよ、って言っ  
いたじゃないですか!」

「なんでって…それは他のみんなの神器級装備のアレらと同じです  
よ、捨てるもいい、売ってもいい。そう言われてそんなことすると思  
います?」

「まあ…ギルド長はそんなこと平気でする人じゃないとは思ってます  
けど…でもNPCを作るポイント、もうないんじゃないやありません?」

「あの子、精々が50LVでしょ?そのくらい残してありますって…」  
「うわあ…軽い冗談のつもりで言ったのに残してくれてたなんて…  
これも一つの黒歴史か?」

(どうしよう…)

はつきり言って頭を抱えてしまったベルリバーにからかうように  
アインズが声を掛ける。

「こつちの黒歴史バンドラスアクターのこともさぞや楽しんでくれたんでしようから、ベ  
ルリバーさんもあきらめて下さい。」

「そんなこと言われたって、100LVキャラ2人との戦いに50L  
Vキャラが1人加わって、勝率どれくらい上がると思ってるんです  
?」

(そんなことされたら、一回分の負け確定じゃん!)

「5回中2回ってアイデアを出したのベルリバーさんでしょ? 今更  
なに言ってるんです? 難しい方が達成した時の喜びもひとしおで

「しよ？」

「やたらそのやり取りを嬉しそうに返しているドクロ顔の支配者、自身はこんな愉快な人(?)だったんだ」とエルフの3人は見守りながら会話を聞いている。

「そりゃ〜そうですが…そうだ…起動はどうするんです？ あの夜の時みたいにノコノコとナザリックに入ったら、今度こそ、気配確定されて大騒ぎになるんじゃないやありません？」

「この意見を返されたらおしまいだぞ？…頼みます、ギルド長…助けると思つてえええ」

「それなら、自分が起動させますよ、テキストの所に「企画、作成、監督ベルリバー」「産婆役、モモンガ」つて一番最後に書いて起動させますから安心してください！」

片方の眼窩の赤みが暗く消えて、片手をグーにし、親指だけ立てている…このポーズに込められた意味は、エルフの3人にわかるはずもない。

「アインズさああああん!!」

「あの…ヴェールさん…話がわからないんですが…何の話をしてるんです？…なにか都合の悪い話なんですか？」

身体を預けながら、話の一部始終をおとなしく聞いていたエルフの1人が疑問に思っていることを直接、アタフタしているベルリバーに問いかけている。

「ああ、いや…なんでもないよ…なんかね？生き別れた娘がまだ生きてるんだって聞いてね？ ちょっと動揺してるだけさ…」

「え？ 娘さんですか？ ベルリバーさん…そうですよ、婚姻の一度くらい、ヴェールさんほどの人ならきつとされてますよね…」

「あ…いや、違うんだって、ディーネ。そういう娘じゃなくて…自分一人で作り出した「作品」みたいなものなんだって！」

「え？ じゃ〜奥さんがいるわけじゃ〜ないってこと？」

嬉しそうな茶髪のエルフ…この子はセピアとか言ってたっけ、その言葉に顔を上げ、そのセピアという子の隣で期待しているような目を向けている金髪のエルフ、この子は確か…ルチルだったか…。

(それにしても『1人で生み出した』って爆弾より『奥さんは居ない』って方を重要にしてるってことに驚いてるよ!)

「でも…アインズさん、あの子って、色んなNPCとキャラが被るし、それに実戦向きじゃない職業構成だからって話し合いになった所で、ボクが遠慮したじゃないですか…いいんですか?」

「まあ…そうですね、いいんじゃないですか? 今思い出してみると夢のある職業構成だったじゃないですか、もしもこっちの異世界であれがその真価を發揮したらナザリック的にもメリツトが大きいんですよ。」

「そうですね…それがこっちで本当に作れるかわかりませんよ?

本気でゼロから「有」を生み出すようなもんなんですから…」

「まあ、大丈夫ですよ、そういうものを作る器具は、この村のポーション職人の一家に一通りは持たせていますから…もちろんユグドラシル製のね。」

「まあ…ナザリックの役に立てるかも、とまで言われたら…それ以上の固辞はできませんが、それは賭けですよ? せつかく生み出してもらっても何の効果も起こらないかもしれないんですからね?」

あきらめたような雰囲気になり、そしてどこか期待しているような雰囲気にもなり始め、最悪の時の状況を先んじて提示して最終確認をとる。

「なくに言ってるんですか、誰かさんといっしょに「ユグドラシルの世界の1つだけでも征服してやろうぜ」なんて悪乗りしてた頃のベルリバーさんはどこに行っただんですか?」

「あちやあく…そのこと、まだ覚えてますか…いい加減忘れてくれませんか?」

エルフの3人が驚いて彼を見上げている、今の彼から判断して、そんなことを言うような人間だと思っていなかったせいでろう…真相は、「ウルベルトさんに感化されただけ」っていう事実なのはオレたちだけが知っていればいいことだ…この話題を共有できるのはギルドメンバーだけでいい。そう思っているアインズはそんなことまでは言わずに意地悪い返事をベルリバーに告げる。



「忘れるわけないじゃないですか、あの時の思い出も全部がオレの全て：輝かしい記憶：宝物なんですから。」

そして、照れくさいような気持ちになったベルリバーは、話題をアインズが言いにくかった内容、アルベドの一件に移り：お互いに恥ずかしい想いをしながら、夜は更けていく…。

「眠くなったら、いつでも好きな時に眠っちゃっていいよ」

そう優しく3人のエルフたちに語り掛けてあげながら、2人の会話は弾んでいくのであった。

☆☆☆

そして、朝を迎え、至高の2人とその護衛（パンドラズアクターは式式炎雷さんに変化してアインズの影、サイゾウはアインズの指示で、外見がエルヤーの姿をしたベルリバーの影に隠れているので見えていない。）、さらに3名のエルフまでもが現れ：、朝を迎えて外に出たら昨日まで居なかったはずの何者かがいきなり沸いて出てきてるのだ：そうなればもちろんエルフの3人と共にいる見知らぬ1人の剣士のことを村人は驚きながら、朝の挨拶を通して、その素性を：というかコトの経緯を尋ねている。

（そりゃ、昨日まで居なかった存在が4体も現れたら、驚くし、不安にもなるだろうし、警戒もするだろうな…）

「ああ、昨日までは居ませんでした、私の魔法で来てもらった者たちですよ、警戒しなくても、この村のことは外に漏らさないと言う確約は取っておりますので、安心してください。」

そうアインズが村人に説明をすると「ゴウン様がそう言われるのなら…」と安心したようだ。

そこでアインズへと聴きなれた声が朝の挨拶をしに来てくれる。

「おはようございます！ゴウン様！」「ゴウンさま♪ おはよお」

「おお、エンリにネムか、昨日はよく眠れたかな？」

そう何気ない一言に返ってきた返事は2種類。

「ハイ、よく眠れたかは置いておいて、すっかり元気です！」

「うん！よく眠れたよぉ〜！」

そこで、アインズははたと気付く…1人足りない…。

「ところでエンリ…キミの旦那さんはどうしたんだい？朝からポーシヨンの仕事にでも行つたか？」

（昨日、行動による疲労の半減効果と、1日に1度とはいえ、疲労の全回復効果の指輪を贈ったんだ…単純に言えば、指輪をしてない時よりも4倍くらいの行動をしても大丈夫なはずだからな。）

「ああ、昨日はンファイにはちよつとムリをさせちゃったみたいで、疲れて寝ています。もお少し寝かせてあげようかと思つてまして…」

と、顔を少し俯かせ、耳を赤くしているエンリの言葉に仮面の下でアゴが外れんばかりに「開いた口が塞がらない」状態にいるアインズはここですごく興味がわいた。

（いくら何でも、この体力の変動具合はありえないだろう…普通の成長ではない…、一体どんなことがあつたらこんなことになる？ 本人は全く自覚していないらしいが…）

そう思い、目の前のエンリに気づかれなないように一つの魔法を唱える…〈クラス・エッセンス職業構成の精髓〉…普通はPKを仕掛ける際、もしくはPVPの前に相手の情報を得る段階で使用するもの…そのつもりもない相手に使うことはしたくないのだが…あまりにもエンリの成長具合が気にかかる。致命的な何かなら、早急になんらかの手段を講じる必要がある、という想いもあり、昨日は後日と言つたがそうも言つてられないという気分させられ、アインズは、目の前の光景に愕然とする…こんなことがあり得るのかと…。

（一般）でも（ジーニアス）でもない…これはなんだ…なんでこんなことが起きるんだ？

もしや、これはアレか？死獣天さんが話していた「覚醒遺伝」とかいうやつか？それとも「先祖返り」というものか…彼女の遠い先祖がプレイヤーか、もしくは軍隊所属の…官位を受けていた者がいたとか…

とりとめのない考えに陥りそうになり目の前の少女から声がかける。

「ゴウン様、どうしたのおく？」

そこでハツと我に返る…すぐさま魔法の効果を打ち消し（目に見える発動エフェクトは無かったため誰にもバレてはいないが…）「いや、なんでもないさ、ネム…ンファイレア君が過労で倒れはしないかと心配でね」

「かろう？」意味が解っていないのも仕方ないか…と思いネムに言つて聞かせる。

「イヤ、何でもないよ。いつまでも彼が元気に居てくれるのが家庭円満の秘訣だからね、心配になっただけってことさ」

「そうなんだあ…でも大丈夫だよお、ンファイ君、あれで結構回復早いんだよおく？」

「そ…そうなのか…そういえばムラサキのポーション以外にも何か研究してるとか言ってたし、そういう回復薬も試作してるのかもな…」

「ああ、そう言えばンファイ、そんなこと言ってたかもお…」

そう呑気に言っている張本人が一番ンファイレアを精神的に枯渇させていることになど全く気が付いていないだろうことに「気の毒に…」と少しだけンファイレアに同情した。

そしてそれと同時にこうも思う…

「魔法使いでよかったと思える日が来るなんてな…頑張るんだぞ？ンファイレア…将軍（上官）の命令に抵抗<sup>レジスト</sup>できるほどの精神力を養うんだ…」

（…ん？…この場合、肉体の抵抗値だったか？…まあ…どちらにしろ…疲労無効の指輪だったとしても、アツチの方は無限にはしてあげられないからなあ…）

なんてことを考えていると、ベルリバーさんから声がかかる。

「それじゃアインズさん、ボクはこれからアルシエちゃんのところに行つてどうするか聞いてきますよ。」

「まあ、彼女には水晶玉と、クリスタルグラスを買い取つた際の150

0+500、さらに水晶玉を1日レンタルした際の即金、500も渡してるので、計2500金貨持つてるんですね、だからムリに墳墓に来る理由は無いですけど…、他の理由での場合はその理由を聞いておいてください。」

「了解です、アインズさん、それじゃ、行つてきます。」

そう言つてエルフの3人を引き連れてアルシェが泊つただろう、昨日式場として使つた家に歩み始めた。

「あ、そうだ、一応女性の部屋に行くんだし、メッセージで知らせておかないとな、身支度を整える前だったら大変だろう。今は妹さん2人も一緒なんだし…」

そういうとすぐさまこめかみかと思われる場所に指をあてて魔法を唱えた。

☆☆☆

「朝早くから押しかけてしまつて悪かつたね、昨日はよく眠れたかい？」

「ええ、妹たちも無事でしたし、のどかなここの雰囲気ではほど安心したようで妹たちはまだ寝ています。」

「そうか、それはよかつた、あまりあの子たちに現実的な話は聞かせたくないからね…」

「でもまずはこつちの事情から説明をしよう。」

さすがに朝早くに見知らぬエルフ連れで家に来られれば驚くだろう、何から驚いていいかわからないような様子だった。

まずは事情の説明をして理解してもらおう。

（昨夜、アインズさんのところでも説明したから、今回はよどみなく説明できたぞ！）

「ところで、まだ午前中なのにどうかしたんですか？」

急に訪問されたことが単純に疑問なだけで、非難めいた雰囲気はどこにも含まれていないことに安心して用件を伝える。

「まあ…ひと段落ついて、落ち着いたところ悪いんだけどさ…ワーカー

の方の依頼はどうするんだろうな？って思ってたね。」

「まだ、どっちにしたらいいか悩んでる。」

そう短くいつものような言葉で返してきた。

「そうか…どんな点で悩んでいるのかな？」

「事実、この村でひっそりとのんびり暮らすだけなら十分な蓄えはある…その心配はしてない。」

「そうか…お金以外の理由で、そこに挑戦したいって思いがあるのかな？」

（少し探るような言い方だけど、そうであってほしい気持ちもあるからなあ…）

「もちろんそれはそう…自分が引退するなら、今まで世話になったチームのみんなと…締めくくる意味でもいい冒険にしたい。」

ぎゅっと手を握るようにしているのが、まるで今の気持ちを物語っているようだ…

「その気持ちは他のメンバーも同じで居てくれてるってことならいいよね…」

「この村で慎ましく暮らすなら、お金の心配はない…でも仲間のみんなはきつと…」

言い淀む様子のアルシエの言葉をベルリバーが引き継ぐようにして言葉を続けていく。

「未探査の遺跡で財宝があれば、手を出す？」

そう言葉を続けると「コクン」と首を縦に振られる。

「その彼らを止められれば、命が助かるとしても？」

その言葉を受け、アルシエはヴェールの顔を見上げる…そうすると本気の瞳がそこにあった。

その瞳は確信を持ってこう告げているのだ…

「止められなかったら、メンバーは殺される。…」と…。

「止めてあげたい…誰にも死んでほしくない…でも…私だけじゃ…」

握りしめた拳にポタン、ポタン…と涙の雫が落ちて手の甲を濡らしていく。

「なら…ボクも一緒に彼らと同行しようか？」

「えっ？」

いまだに涙を浮かべたままで見上げてくる瞳は何かに望みを見出しているかのようだ。

「でもさすがに、墳墓に入るまでは先日のカフェでも言ったように『天武』のエルヤーでいなきやならない。そう振る舞うけど、信じてくれるね？」

「それから、こんな感じにもしていくコトになるんだけど、そこはちゃんと知っておいて？」

そう言うと、エルフたちに魔法をかけ、幻影で包み込む…すると見る見るうちに耳が途中から切り取られ、衣服もみすぼらしいものに変化して見えた。

「これが…『天武』なの？」

初めて見るエルフたちの痛々しい姿に目を逸らすこともできないまま、見つめている。

「そう…こんな扱いをエルフたちに強要して、いざとなればモンスター…の盾として戦おうと…いや、実際にそうしていたのが本当のエルヤー…ウズルスという人間なんだよ…」

まるで言いたくもない、見たくもない、伝えたくもないことを口にした…口内いっぱい汚れた空気でも流し込まれたかのような…そんなしかめられた表情になり…

「みんなと待ち合わせる拠点に行つて、前金を受け取つて、中に通してもらうまで…この姿で居るしかないんだ…その演技もしなければならぬ。」

「そんな…そのエルフさんたちは？そんなことされてもいいってことなの？」

信じられないという表情で未だに痛々しい姿の幻を纏っているエルフがそろつてこう答える。

「それがヴェールさんのためになるんなら喜んでこの幻にも耐えましょう、そして芝居での罵りや叱責も…ヴェールさんからなら喜んで…」

「だから、なるべく率先して先行したりしないように…、ボクが合流す

るまではなんとかチームのみんなを足止め…とまでは言わないけど、じっくり行動させるように…お願いしていい？」

「うん、わかった、できる限りがんばる。」

固い決意の瞳に満足し、1つの救済策を教えてあげる。

「その墳墓は〈伝言<sup>メッセージ</sup>〉の魔法は問題なく使えるはずだから…、もし自分たちの位置を見失ってわかりやすい大きな建物や、目立つものを見た時はすぐに教えて？急いでそこに合流するからさ。」

（転移系のワナがあるだなんて言っても今は何のことだかわからないだろう…この忠告が精いっぱいだ。）

「多分、最初は油断させて「奥に行ってもどうせタカが知れている」って程度のモンスターしか出ないはずだから…先を急いで財宝を目指そうとしたら…とにかく止める事…そう思わせることもワナの1つなんだからね」

「うん、わかった…」

こうして、たった一人の少女の肩に「メンバーの命」という重い荷物を背負わせることに引け目を感じるが…きつと頭脳担当の彼女なら…なんとか警戒させながらの行動を受け入れさせることはできるだろう…。

（仲間を失うというのは、誰であれ、悲しいことだろうからね…。）

やっぱりこういう考えは「カルマ」も関係してるんだろうか…、ボクは基本的に前線に出て、局面を切り開く役じゃなかったからカルマもそこまで低くはなかったけど…たしか…覚えてる範囲だと50前後、40〜60の間くらいだったような気がするから…それも関係してるのかもしれない…。

時々、変な思考になることはあるけど、意識を強く持てば、自分を見失わないようにする程度にはなんとかできてる感じだから…このまま精神まで「異形化」しないことを祈るしかないな…

「それじゃ…ボクはそのことをもつと安全に運べるように色々手を回すことにするよ…当日に、ボクが自分から正体を明かすまで…メンバーには黙っててね？」

（さてと…約束通り、アルシエちゃんの考えをアインズさんにも伝え

ておかないとだしね。」

「あ…そうだ…これは一応、念のために渡しておくね。」

そう言うのとヴェールさんは懐からなにやら引き出して目の前に渡してくる。

「…これは？」

思わず両手を皿のように広げ、それを受け取ってしまったが…

(見たこともない腕輪…というより白く輝くブレスレット?…これは銀?…いやプラチナだろうか…でもそれとは違う輝きのような印象を感じる…)

「ただのお守りさ、もし自分たちが墳墓内のどこかで危ないと思ったら、…と大きく叫ぶんだ、大きければ大きい分お守りの効果は大きいからね?」

そう言つて、幻を解除して、いつもの豪華な冒険者姿に変わったエルフたちを連れて、ヴェールさんは外に出て行ってしまった。

私の手元に残されたのは、謎のブレスレット…よく見ると真ん中に小さなピンク色のカッティングされた宝石のようなもの…そしてその中には…見たこともないような謎の紋章があつたが…少しイヤな予感がして、言われた『叫び』の言葉は言わないでおいた、お守りというのだから、これはギリギリまで使わない方がいいだろう…一度使ったら壊れるような物だつたら申し訳ない…

ピンチにならずに使わずに済むなら、それはそれでいいんだし…と思ひ、一応は普段から身に着けてはおこうと袖の下に隠して身に着けておくのだった。



―番外― 在りし日の、A・O・G

今日は久しぶりのユグドラシルだ：ずいぶんログインしてなかったけどまたみんな素材を狩りに出かけられてよかった。

珍しく、あまり奥に行かない内にけっこういいデータクリスタルも落としてってくれたからレジェンドがいくつかとゴツズも一つ、それからずいぶん奥に潜ってからだけど、ボスクラスのドロップで超希少金属や、LV90金属も落としてってくれたし：、これでみんなの武器も一段ぐらい強力になるかもしれない。

「よかったですね、たちちさん、こんなに順調に素材が落ちるなんて、ここ滅多になかったんじゃないですか？」

たまたまフィールドを歩き、エンカウント狙いで彷徨っていた際、新しいダンジョンを見つけ、誰かに見つからない内に：という意見が多数を占め、チャレンジしたのだが、そこで意外にもけっこういいドロップに恵まれたのである。

「そうですね：最近はまだいいのが落ちてくれなかったんですが、なぜかな？ベルリバーさんがいるとなんでか、ドロップ品いいものに恵まれる気がするんですよ。」

一緒に今回の冒険に付き合ってくれるが、いつものようにリーダーシップを発揮してくれて危ない局面も幾度となく打開してくれた頼もしい友人が嬉しいことを言ってくれる。

「え？ そうなんですか？ それならたまには餡ころもつちもちさんの装備とか強くしてあげるとかどうですか？ 女性陣：と言っても他の2人はほぼ装備が完成しちゃってるので、なんとかしてあげられそうなのってあの人に限られるんですけどね。」

「女教師怒りの鉄拳」などという恐ろしい名前のわりに攻撃力自体はさほどでもないが、殴れば相当遠くまでの「吹き飛ばし」効果が追加発動するため、距離が開いた瞬間、後衛の攻撃魔法や上空（とは言えダンジョンの天井だが）からの弓攻撃が敵に襲い掛かるといふパターンが展開されていく：、その反対側でたちちさんがリアルでも女教師である「やまいこ」のフォローをするため、攻撃が集中しないよ

うに防御特化タイプの「ぶくぶく茶釜」と一緒に背中を守り、なんとか最後まで戦線が崩壊することなく切り抜けられたのだ。

「ベルリバーさんはいつもそうやって人の装備に回してくれますよね、確かに今回のパーティには彼女も居ますが…ベルリバーさんだつて、そんなにいい装備とかになってないんじゃないですか？」

「私はいんですよ、みんなにはどうあがいたって敵わないのはわかってますから…魔法と剣のシフトタイプですしね、一応武器に属性効果を乗せて、エンチャント攻撃とかはできませんが、超位魔法はおろか第10位階魔法も撃てませんからね。二線級で足を引つ張らないような装備であれば充分ですって」

「欲がないって言うのは美点だとは思いますが、もう少しベルリバーさんは欲張ってもいいと思いますよ？ 直接の貢献には関わってなくても、ベルリバーさんが来てくれるといつもドロップに恵まれるのは本当なんですから…みんなもそれがあがるからギルドでも2戦級つて言われていることを知っていても、いつも一緒に行こうと誘ってくださるんですからね。」

それに私が思い付かないような局面の切り抜け方を時折り出してくれて、それが命運を分けた時だつて何回かあったんですよ？…と言う「たっち」に、一緒に前線を維持してくれていた「やまいこ」も会話に加わってくれる。

「そうですね？ベルリバーさん、普段は来られなくたって、ベルリバーさんが来ると絶対みんなモンスター狩りに出かけようって話になるのは気をつかっているんじゃないんですよ？ こうなることをボクだつてわかっているからみんなの意見も一致するんです。」

「ベルリバーさんが来てくれない時は精々、レジエンド止まりだし…何回か死にそうになってようやくゴッズが一個？つてところだもんね。」

今度はレベルアップでの数値は防御に繋がるように極振りすることで、守りに特化したキャラメイクにしているピンクの肉棒にしか見えない彼女、リアルでは売れっ子の声優である「ぶくぶく茶釜」も加わってくる。

「姉ちゃんの言う通りだよ？　実際：ドロップ率アップの神様でも連れてきてるんじゃない、って話も時々出るくらいだしね。」

金の仮面、しかしクチバシの部分だけは前に突き出すようにしないと間抜けな絵面になってしまうバードマンの「ペロロンチーノ」が空を飛びながら警戒の片手間にこちらに声だけを落としてまた警戒に戻っていく。

「でも時々しか来ないボクよりもちよこちよこ来てくれて、一緒に行動することも多い女性陣の戦力が底上げされた方がみんなの生存率も上がるんですから、どうしても余って何か作ろうか？　って話になった時に：：：ってくらいいいですよ。」

「そうですか？」

意思を変えないことを感じ取ったのか、「たっち」が『苦笑』のPOPをアイコンで浮かべ：ベルリバーの横で『意地悪い笑み』のPOPを浮かべた「ぶくぶく茶釜」がこう返す。

「ホント、物腰も言い回しも柔らかいのに、意見を曲げないところはベルリバーさんってば、実はA型でしょ？」

「いかにもーですよ、それがどうかしましたか？」

それがなにか？とでも言いたげに首を少しナナメに傾け、『笑顔』のPOPを浮かばせるベルリバー。

「それこそ今更、ですよ、ギルドに入る際に「入団祝い」ってことで渡そうとした武器を遠慮しようとした辺りから私は勘づいてましたよ？」

と、単純な火力で言えば、ギルド長であるモモンガを凌いでしまう『錬金術師』の「タブラ・ス・マラグディナ」がその話題を横からかつさらう。

「あ、いや：あれはだって、私がPKされそうになってたトコを助けてくれた印象深い武器でしたし、あの武器の第一印象があまりにも『濃すぎた』って印象が強かったからですよ。」

「え？　そうですか？　カツコよかった。の間違いじゃありません？」

そう顔を向けてくる「たっち・みー」

「まあ…そのカツコよさも含めての『濃すぎた』って印象なんです。」  
と返すしかなかった。

「まあまあ、たちさん、私もさすがにあれはちよつと行きすぎなんじゃないかとは前から思ってたよ？武器作成が命の「あまのまひとつ」さんはそうは思ってたよ？」

と、ギルドの頭脳である『ギルド・アインズ・ウール・ゴウンの諸葛孔明』こと、ぷにっと萌え。

「それじゃ、今ココでその武器のどこらへんがカツコいいのか…その辺りを見せてもらって、みんなで判断する、っていうのはどうですか？」

…と、初期から…というよりギルドになるより前の「クラン」時代から所属している暗殺者の「フラットフット」が嫌なことを言い出した。

「イヤですよ、なんでですか？ そんな必要今は無いじゃないですか…」  
ささやかな抵抗をするベルリバーにフラットフットの無情な言葉が突き刺さる。

「必要ならありますよ？ 前の方から敵の集団です。あのくらいならベルリバーさんでも大丈夫でしょう、おまかせします！」

もちろん、件のその武器で撃退してくださいねえ。と言われて背中を押され、エンカウントモンスターの前へと送り出される。

「ちつくしよお…やってやらあ！！ せめてやまいこさん、回復と防御魔法の方、今の内、お願いします！」

もはや、みんなの総意だとばかりに一人で敵集団に送り出されたベルリバーはたった一人で、その中に突っ込んでいく。

「魔法三重最強化」、そして「連鎖する龍雷」うううう!!!」

「まずは範囲攻撃で、全員とは行かなくてもある程度のライフは減らさせてもらおう！」

そうすると、後ろのやまいこさんから「上位硬化」が飛んでくる。

ありがたい、これで物理防御の方は心配ない、この程度のやつらなら…と思っていると…

さらなる魔法で支援される…しかしその魔法は…「究極の妨害」

…それは…魔法抵抗力が爆上がりする代わりに、魔法攻撃力が壊滅的に下がるっていう第10位階魔法。

「なにしてるんですか!! そんな無駄に高い位階魔法とか使わなくてもへ上位抵抗力強化」で充分ですってえ〜!」

『そんな魔法』だなんてヒツドイなく、ボクの心配をわかってほしいよお〜…そいつらに魔法とか使われて瀕死になったりしないようにって言う仲間思いからの支援魔法なんだよお〜」

どこか楽し気な声で反論しているが…

「こいつら、ほとんど魔法なんて使っても来ないの、知ってるんでしょお〜?!」

「あつれえ〜?!? そうだっけえ〜?!?」

とやまいこさん。

そしてそれに追従するようにぶくぶく茶釜さんも悪乗りしてこんな無責任な声援を送ってくれた。

「でもベルリバーさんなら大丈夫だよお〜、がんばってえ〜! ファイトオ〜♪」

☆☆☆

「こいつで最後だあああ〜!!!!」

味方によって壊滅的に魔法攻撃力が下げられてしまったベルリバーは観念して「ギルド入りしたお祝い」で受け取った武器で戦っている。

その名も「あまのまブレード」

たっちさんの特撮ヒーロー好きに同調してギルド入りしたという異色の経歴の持ち主…「あまのまひとつ」さんがたっちさんの監修の元、クラン時代、面白がってノリで造り上げた傑作らしい…。

キメ台詞を言っただけに斬り付けるだけでも音は鳴るのだが、それだけではなくキメ台詞と共に与えたダメージでライフがゼロになったら、妙に気合の入ったような斬り付け音と…盛大な爆発音へと移行して…、敵が爆発したようなエフェクトが発生する、どこまで作り込んで…

でるんだろう…、あの二人がワルノリした結果がこの武器というわけだ…。

「どうやらそのキメ台詞はどんなのでもいいようだ、さっきの「こいつで最後だ」も有効なら「死ねやコラ〜〜！」でも「往生せえや〜〜!!」でも変わらず爆発のエフェクトは発生していた。

「なんの叫びも上げずにトドメを刺した時は発生しなかったの、何らかの条件は設定されているのだろう…」

「それはそうと…これは一体どんなデータクリスタルを組み込めばこうなる?」

「あまのまさんの「バフ料理を食べる」っていう験を担ぐ行為の結果だろうか…ここまで来ると謎すぎていつそ清々しい。」

「お疲れさま〜…さっすがだねえ〜♪」

「なにがですか?全く、みんなしてもお〜…」

「ジト目で見つめるPOPのアイコンを浮かべて、みんなを見やると…やまいこさんが地面を指さして「下を〜らんない」とでも言うようなゼスチャーをしている。」

「下に目を向けると…意外にもそれはLV70金属…これで作られた武器は確実にへ上位物理無効化Ⅲを貫いてしまうだろう。」

「単なるエンカウントモンスターがこんな出すなんて…普通はこの辺りだと精々聖遺物級に相当するデータクリスタルだろうに…と、驚いていると」

「これはベルリバーさんが一人で全滅させた戦闘なんだから、ベルリバーさんが持つてて大丈夫だつてことだな。」

「ダンジョンより外に出てから今まで見てるだけだった「獣王メコン川」さんもそう言つて、みんなが肩を叩いて祝福してくれる。」

「手を貸してくれるように引き起こしてくれて、一旦ギルド拠点である「ナザリック地下大墳墓」まで戻つて行つた。」

☆☆☆

「それで…今回の獲得報酬の内訳は済みましたね、資金はみんなで頭

割り：、人数分まで行き渡らず余った分はギルド保管、みんなで倒して手に入れた素材等は保管庫行きつてことであえ」

「おっしやく、さて、今日はどんな話なんだっけ？」とメコン川さん。「二応、今日はベルリバーさんの作成してるNPCがどんなキャラになったのかつて報告と、そのキャラをギルドポイントを使って起動させるかどうか：つていう話し合いですね。」

ギルドに戻ってきたら、遅れてログインしていたモモンガさんが「おかえりなさい」と出迎えてくれて、こうして会議の議長役をしてくれている。

「ああ、アイデアはまとまったんだね、おめでとう。 どんなのにしたの？」と餡ころもつちもちさん

「二応、ライカンスロール獣人種にしようと思つてそつち系の素材をキャラガチャで回したら☆5の推しレア「ブラックジャガー」が出てくれましたね。それを使わせてもらいました。」

「おおお〜!! ジャガーかあ、ネコ科つてことねえ〜：いいんじやない？、餡ちゃん好きそうだもんねえ〜動物う、やまちゃんも好きだったよね」

そう言いながらも、実は彼女も動物好きで、自分が作ったNPCに動物を使役する能力を付けさせているぶくぶく茶釜さんが、嬉しそうに女性陣だけで盛り上がっている。

「二応、どんな感じか詳しいことを教えてくれないかな：他の：プレアデスとかの都合もあるし、ナザリックでどんな役職に就けるかっていうことも話し合わなくちゃいけないんだしな」

と冷静に話を聞いていたぷにと萌えさんが「キャラデータ見せてみる」と促してきた。

「そうですね、それでは見せても大丈夫ですか？ベルリバーさん」

「ああ、ハイ、大丈夫ですよ、でも一応みなさんに言っておきます、ユグドラシルで実装されてないかもしれない：こんなのがあればプレイが楽なのにつてずつと思つていたアイデア：まだ誰も作れていないアイテムを作るつて言うことにして、それを勝手に設定として付けてます。」

「ええ？　なんだそりゃ！」と素頓狂な声をぶにつとさんが上げた。

そしてモモンガさんは取り出した「マスターソースが見られるパネル」をコンソールを用いてポチポチと操作し、ボクのNPCであるキャラのページを開くとそれをテーブルに置いた：そのままモモンガさんはそれをみんなにも見られるような位置へと滑らせる。

もちろんキャラの外装データ、モンスターとしてのスキル、クラス取得によって覚えたスキルに…、人間時のグラフィック、獣人化した際のグラフィック、さらには獣化したグラフィック。

そして、いよいよ、核心となるクラス構成と…その実態のない…作られたという実績も未だユグドラシル内のどの「ワールド」<sup>サーバー</sup>でも報告に出ていない「未知のアイテム」が作れるという勝手な設定が付けられたテキストのオリジナルNPC…

「これは…どうなんだ…？」

誰に言うでもなく口から漏れ出てしまった素直な答えが自分の発した声だと気づき、手の平を口に当てるようにして、しばし考えこむフラットフットさん…。

「確かに設定としては筋が通っていないくもない…実際にそのアイテムがその職業構成から作り出されるかは疑問だしユグドラシル上で作り出される保証はない…なにしろNPCなんだから作成する動作をプログラムで組めるはずはないんだから、あくまでもこのキャラの「オリジナル設定」として考えるだけならばこれはいいのかもしれない。」

神話と、TRPG、ホラーと、設定を考える事…そしてギャップ萌えという隠された要素のあるタブラさんが好意的な意見を発してくれる。

「だが、自分はこのキャラを起動させてナザリック内で…このギルド、アインズ・ウール・ゴウンに組み込むべきじゃないと思う。」

先程まで、好意的な意見を言ってくれていたその口から、いきなり逆の「反対意見」が飛んできた。

「いいじゃないですか、タブラさん…この黒髪、スタイル、豊かな双丘！くびれたウエスト！健康的な肌！なによりエロい！　エロいケモ



耳娘バンザイ！」

よほどグラフィックを気に入ってくれたのか、ペロロンチーノさんが高らかに賛成意見を一票投じてくれた。

「お前え〜、身内の前でそういう発言するのいい加減にしろよなあ？　…つてまあ私も賛成は賛成、このケモ耳ちゃんが可愛い気がするしねえ…」

…と、前半はかなり低い声で…いつもの高い声の片鱗すらも見受けられない声での弟への脅しをした後…後半は打って変わり、ウツトリとした声音で…ペット屋でカワイイ小動物を見かけた時の女子状態になっていた。

「うんうん、こういう凛々しいけど、カッコよくて、どこか愛嬌を感じさせるのっていいよねえ」

「私は居てもいいじゃないかなあとは思っただけど…、何がダメだと思っただの？」

凛々しいという評価は餡ころもちさん、そして反対意見に対して疑問を投げかけたのはやまいこさんだった。

「まずは戦力的な面で言えば…最新アップデート『ヴァルキュリアの失墜』で作られたCZ2128デルタは46LV、要は46ポイントな訳だが…正直に言って、このキャラよりデルタの方が戦えると思うぞ？」

反対意見に対してまずは戦力的な面からタブラさんはこう考察をする。

「戦うというのなら戦えるキャラメイク、そうでないならそっちの方に特化した方がキャラとして立つと思う、そのいい例がペストーニヤだ、あいつは戦いには不向きだが高位階の信仰系魔法が使える。あくまでも戦えるように…という設定を残しつつ信仰系も持っていて作成系も入れたのであれば、どうしても中途半端になってしまう…しかもキャラとしてもルプスレギナと被ってしまった以上、できれば他の割り振りでステータスを上げる方がいいというのが正直な所だ。」

そこに「ルプーと被っちゃもうって言うのには同意見だな…」とつぶ

やいているメコン川さん。

「それにそうだね…この感じじゃ…主に何に重点を置いているかだが…多分、この未発見の未知のアイテムがあればそれが作れるようなキャラであつてほしい。そこなんだろう？」

とキャラの職業構成からそれを読み取り「それで間違いはないか？」という目で見てくるフラットフットさん。

「ハイ重要なのはそこなんです、戦闘面はあくまで、ナザリックに所属するなら身を守るくらいには戦える子であつてほしいって言う想いからです。」

静かに聞いていたたつちさんは「おれはこのままでもいいと思う。」  
そう言つてくれた。

「なんでだ？ たつちさん…このキャラを起動させたとして、どこらへんにメリツトがあると思うんだ？」

なんで賛成なんだ？ と意味が解らないとばかりに問いかけている  
タブラさん

「まあ…敢えて言うなら、種族が気に入ったのが第一、そして一番レベルの高い職業に感じるものがあつた…それくらいかな…今この場で言えることは…」

たつちさんがそう発言すると皆が押し黙る…直接正面からたつちさんに物申すことができるのはウルベルトさんくらいなのだが、今日はウルベルトさんは来ていない…。

たつちさんの賛成意見で風向きがそつちに行きかけた時、ずっと黙つて考え込んでいたぷにっとなつちさんがその空気を変える。

「オレも反対だな…たつちさん…」

「ぷにっとなつちさん？」

「たしかにプレアデスは玉座の間を守る戦闘メイドっていう位置づけで「それは面白い意見だ」ってみんなで納得はしたよ…でもな…？」

とそこで1拍、間を置いて…再び言葉を続かせる。

「どつちにしろ8階層のアレらが楽勝で突破されるようなプレイヤー

に攻められたりしたらオレらの勝算はまずないだろうという考えから…、だからこそ、プレアデスは時間稼ぎ的な役割でもいいから、そこに彼女ら6人を居させることに意味があつて…「魔王として」のモモンガさんを引き立たせる為にも必要だという意見でまとまったはずだろう?」

それらの経緯をみんなも思い出しているのか、声はない。

そんな静かな沈黙が続く中、その雰囲気を払拭するように声を上げた人が居た。

「それではここまでの話を整理しましょう。」

そう言つて、その静寂を切り裂いたのはモモンガさんだ。

「まずはたちさんは、○

タブラさんは…?

メコン川さんも…?

館ころもつちもちさんは、○

ぶくぶく茶釜さんも…○、ですね。

やまいこさんも○でしたよね?

それでペロロンチーノさんも○

フラットフットさんが?

ぷにっつと萌えさんも?でしたね。」

…とすらすらと議長らしく進行していくモモンガさん。

「現在は賛成が5、そして反対意見が4…ですね。」

「賛成が多いので、過半数の賛成は得られたということ…」

と、モモンガが決を採ろうとした時…ピロピロン♪ という音が響き、ログインしたギルドメンバーが来たことを教えてくれる。

ウインドウのログを見てみると…「るし★ふぁー」さんだ。

と思つてみると、バン!と扉が開き、円卓の問題児が入つてきてしまった。

「やつほおく!! みんな元気〜? 今なにしてんのかな〜? おっし

えてほしいなあ。」

「ああ、今ちよつと多数決を取っていた所です、今ちようど決まろうと  
してたトコでして…」

「ウソ！ 多数決してたん？ 悲しいなあ、オレっちも入れて欲しいな  
あ…入れて欲しいなあ。」

「ジ〜と見つめられ、根負けしたのかギルド長が渋々折れてい  
た。」

「参加したいのならお好きにどうぞ？ とりあえず、賛成か反対か…  
どっちに入れます？」

(説明する気もないんだ、モモンガさん…)

「ところでどっちが勝つてんの？ どっちが負けてんの？」

「教えると思いますか？ 公平性もなにもなくなっちゃうですよ、教  
えたら…。 そんなこと聞かないでくださいませんか？ ★ふあーさ  
ん…」

「ええええ〜?? なあ〜んで おつしえてくんないのお〜??  
モモンガさあ〜ん、つつまんないじゃ〜ん！」

「はあ…つまるとかつまらないとか、そういうんじゃありませんか  
ら…」

「オレはみんなのこと仲間だと思ってたのになあ〜…もしかしてオ  
レってみんなの仲間じゃなかった？」

「まあ…、そんなことよりも、るし★ふあーさん…大事なこと忘れて  
ますよ…」

「え??? な〜になに? オレっち、なんか大事なことをスポ〜ンと抜け  
落ちてた? なになに? なになに?」

「この多数決のそもそもの話の内容です…何に対して賛成なのか、反  
対なのか…それも聞いてないでしょ?」

「あああ〜!!! そうだったそうだった、すっかり忘れてた〜。教  
えてちよお〜?」

「はあ…いいですか？よく聞いてくださいね…」  
（と言って、説明をし始めたモモンガさん、それを最後までチャチャを入れずに聞いている、るし★ふぁーさん…こういう時は普通なものなあ〜）」

「なあ〜んだあそんなことかあ〜…別にどっちでもいいんじゃない、そんなのお…オレっちはどっちでもいいよお〜？」

…と言いながらもぐるう〜つと円卓の間に居るメンツを一通り見やった後…

「みんなを見てたら何となく賛成の方が多そうだから…反対の方に一票ねえ〜？」

「「「「はあああ〜？」」」」」

みんなが呆気にとられた表情をしてるのを見て満足したのかその部屋から出て行くこうとする。

「あ、ちよつとお、るし★ふぁーさん、どこに行くんですか？」

慌てて、モモンガさんが声を掛けると…

「ん？気が済んだから、レメゲトンちゃんたち作りに行くわあ〜…、つて今、何体目だったかな〜…そろそろ飽きて来たかもお〜？ 今度はちっちゃい小悪魔の女の子ちゃんでも作ろうかなあ〜気分転換に〜…。」

そんな声がどんどん遠ざかる中、円卓の間の扉は閉められる…

「なんか…どっちも同じ数になっちゃいましたね…ジャンケンで決めます？いつものように…。」

少し疲れたように決を採ろうとするモモンガさんを見ていて申し訳なくなってきた…

「ありがとう…モモンガさん…もおいしいよ…あれは…動かさないでおくよ…、とりあえずはそのままにしとく…」

これ以上何か言えば、自分がただのわがままを言ってるだけのような気がしてきてメンバーのみんなにも申し訳なくなってきた…。

「あ…ちよつと？ ベルリバーさん？ 待つてくださいって、まだ話

は済んでないですよ？まだなんとかなるかも…」

「だからいいですって、ボクのがままでモモンガさんたちの時間をこれ以上ムダにさせたくないですから…あのNPCを置いておくためのデータ量が心配なら…あとでその分の容量を課金して買っておきます。」

「あ…そんなの気にしないでいいですって、ベルリバーさん…この前のタブラさんの一件は、勝手にギミックを大量に…他人の分のデータ量まで使い込んだタブラさんが一方的に悪いんです！、今回の件はベルリバーさん、何にも悪くないんですし、気にしなくて…」

「本当にもおいしいんですよ…、あれは…動かすことなく、私のNPC第一号として保管しておきますから…動かすことは出来なくても…置いておくくらいは…いいですよね…？」

（別にプレアデスのみんなにとって代わろうとか、加えて欲しいとかそんな気持ちがあったわけでも、言ったわけでもないのに…、なんであんな言い方をしたんだろ…ぷにと萌えさん…それがどんな場所でも…ナザリックの一員になれるだけでよかった…極論、スパリゾートナザリックの番台娘としてでもいい…なにかに関わらせてほしかった…ただそれだけだったのにな…）

「ええ…そのくらい…、問題ないです…ベルリバーさん…その…気を落とさないでくださいね…」

（ごめんなさいモモンガさん、これはモモンガさんのせいじゃないのに…モモンガさんこそそんなに気にしないでくださいよ…）

…  
かろうじて首を縦に振ると…その日はそれ以上そこには留まられず

…  
一旦、ナザリックの自室に行くと…部屋の片隅に、未起動のまま…目の前で直立の姿勢でたたずむ彼女…物も言えず、まだ何の反応もしない自らのNPC…自分の娘になるはずだったその娘を、目をつぶって抱きしめる。

そして…「ゴメン…ゴメンな…」そう言いながら涙も流せないアバター…の身体で、縋りついてあげる事しかできなかった…。

その円卓の間から姿を消したベルリバーに対しての償いか：それとも叶えてあげられなかった罪悪感からか：たっちみーからその日、ダンジョン攻略で手に入れた超希少金属を器にして、そしてゴツズのデータクリスタル：そしてその時に手に入れた2つのレジェンドのデータクリスタルを使い、ベルリバーのためになにか贈り物をした。そう言いだしたその内容に反対する者は誰もおらず全員一致でその案は可決された。

そして、その経緯があつて作り出されたのが「風車のベルト」

ベルトのバックルに相当する場所にはその超がつく希少金属によって、横長に丸い塊が作られ：その前面部、その左右に当たる両端にはプロペラのような風車がある。

そしてその風車であるプロペラには左右それぞれに1つずつ、レジェンドのデータクリスタルが組み込まれた：。

中央のVの上部にある赤いランプの部分には落胆させてしまったベルリバーのためにと今回のダンジョン攻略で手に入れたゴツズのデータクリスタルが組み込まれたことは彼には知らされていない事実である。

ユグドラシルを引退すると決め、ギルドを辞める前：、自分が初めて作った「娘」のデータは、自分のパソコンに大事に保存する。(アカウント自体は残して去った。)

それをいつか：この子のために：どんな形でもいい：ユグドラシルで与えてあげられなかった「生」を吹き込んであげたい：。

そう思いながら：仕事通いの日々で毎日が忙殺される中：、運命のいたずらが起き：知りたくもない事実を知ってしまうことになる。

それが彼の命を大きく左右する程の事態に発展するとは気付かず  
に：。

…そしてその数か月後：彼は、ギルドを去る決心をする：…：そう：

ギルドを去ることになるその日、たっちみーに手渡された、最期の餞別だと：そう震える声で手にムリヤリある品が握らされた。

それから「最期に数時間だけ：」と言われ一緒に彼と軽い戦闘をする。

完成した「風車のベルト」と共に。

その時のエンカウトモンスターを使つての「風車のベルト」の性能実験。

一通りの使い方がわかつてからの「たっちみー」とのPVP…。

最後に教えてもらった、そのベルトの：効果もすごいがデメリットも大きい切り札にも瞠目してしまったが：それを有効に使える日はきつともう来ないだろうと思つた。

そこだけがなにより申しわけなく思つてしまい：、それが最後の想い出となつた。

そうしてネットの海に流されることになってしまった己の全てのデータは：不幸な事件を介して、最も幸運なアクシデントに遭うことになる。

異世界に行つてしまった彼にはもう、どうにもならなくなつてしまった「あの事件」がきつかけになつて…。

転移してからはそんなコトを思い出す時間も少なくなり、遠い遠い過去のように感じられてしまうコトになる「その出来事」…、それが彼自身にとってはとても不幸な：、そして：信じられない奇跡が生み出される事になつてしまふだろうとは…

その「衝撃的な異変」が起きるまでは彼自身でさえ、夢にも思つていないのだつた。

そこから先のコトは、また別の話となつて行く…。



## 第20話 フォーサイトの決心！そして恩返し

「いい加減にしろよ！こっちだって探してるんだよ！見てりやわかんだらうおが！」

いきなりそうがなり立て、相手の胸倉をつかんでつま先立ちにさせる男、フォーサイトのリーダー、ヘッケラン＝ターマイト。

彼の元だけでなくイミーナにも、ロバーデイクの元にもそいつらは毎日のように顔を出してきていた。

フォーサイトの面々も、遺跡調査の件でアルシエに話を聞きたいのに「よく考えてから結論を出していいよ」という話し合いをした直後、行方が分からなくなったのだ。

「オレらだって、依頼の件で話をしたいのに、一向に足取り掴めなくてイライラしてんだよ！ お前らもプロとして仕事してんだらうお？見張ってたんじゃなかったのかよ！」

段々とヒートアップしていくヘッケランのその表情にウソはないと判断したのか、つま先立ちにされてる男はヘッケランの手を「ギブ！ギブ！」とばかりにパシパシと叩いている。

その後ろに立っていたもう一人の男が口を開いた。

「そうですね、これはこちらの不手際ですね、フルト家のお嬢さまであつた方をお互い探しているのはご同様なんですし…もし何か分かつたら情報をいただけますか？」

そう優しい気に（刺激しないようにとも言う）ヘッケランに謝罪ともとれる言葉を出し、「わかつた際はご連絡を…」と言い残して去っていく。

「チッ！ それを探し当てるのがお前らの仕事じゃねえのかよ…なんのために見張ってたんだか…、こりずに毎日毎日…何度、言えばわかるんだか…。」

「まあ、仕方ないよ、ヘッケラン、あの子に事情は教えてもらったでしよ？」

と、ヘッケランの憤りを軽く見やりつつ、宿屋の酒場で出されたアルコール抜き飲み物を飲みながら、〃焦ることはないよ〃とばかり

に声を掛けるのはチームメイトであり、彼の大切な女性であるイミーナ。

「あの親父さんや母親から返済の余力がないのは向こうさんだっけわかってることなんだよ……だからアルシエ頼みだったのに、回収を焦って妹さんを買収するなんて話にしたのが、今回のことに発展しちゃった、っていうことをまだ向こうが掴んでなさそうなのが救いなんじゃない？」

「ああ、向こうさんは妹さんら二人を天武のエルヤーに横取りされたとか思ってるみたいなのがこつちとしちやありがたいんだけどよお……」

少しクールダウンはしてるものの、言ってるうちに再び憤りが再燃し始めたのか、ヘツケランが再び声を荒げ始める。

「その当事者の「天武」の連中も行方が知れねえ……ってどういうことなんだよおお！」

思いつきりただの八つ当たりだというのはわかっているが、矛先がこつちに全部向くのは勘弁してほしいとヘツケランが悪態をつく。

「まあ、いいんじゃない？ 一部ではあいつの評判、ほんのちよつぱりだけど微上昇してるんだよ？ ワーカー連中からは相変わらず冷めた目で見られてるけどね。」

「あん？ そいつあく初耳だぞ？ なんか変わったのか？ あいつ……」  
その人物がそうそう考え方、生活スタイル、思想が変わるはずはないと思っているヘツケランからすれば寝耳に水な話だった。

「なんでも今までずっと宿代を踏み倒し同然な状態だったのが、最近ツケにしてる分まで含めて、耳をそろえて払い始めてたみたいよ？」

「はあ……？ それ、当たり前のことだろお、そんなこともできてなかったのかアイツ……」

呆れたような声を出すヘツケランに冷めた声でイミーナはさもあらんと言葉を返す。

「ホラ、アイツだから……」

「まあ……」

その一言に、その人物の元々の性格が集約されているようであった。

しかし：かつて、トブの大森林で遭遇した：命の危機すら覚悟した超越の存在がその「アイツ」に成り代わつてるとは全く予想もしていない彼らなので、仕方のないことなのだが…。

そんな会話の中、不意にヘツケランへと、前に一度経験した感じを思い出させる「感覚」が訪れた：

そして、それに対しての対応はもうすでに経験済みだ：とは言い、相手が誰だか見当もつかないヘツケランには警戒をして受け答えをするしかなかった。

ついこめかみに指を持って行ってしまうのはこの魔法を受けたものが共通して取ってしまう行動なのだろうかと：その場に似つかわしくない感想を抱きながら…

☆☆☆

カルネ村まで同行していたジエツトが自宅まで帰り着いたのは自らの仕事を終えて帰るはずの時間：、夕方をとうに過ぎ、夜になってしまっていた。

それもそうだろう：一緒に過ごしていた憧れの人が遠い王国領に行ってしまったのだ、今度はいつ会えるかわからない：しかし、帝国の領地で下手なことを言えばそこから足が付き『借金のカタ』として再び危険にさらされる可能性もある：となると誰にも相談など出来ない：必然的に普段の仕事でやり慣れてるはずなのになかなか思ってたように進まないという醜態をさらしてしまうことになり、周囲の人間に心配されてしまうことになってしまっていた。

彼女には彼女の生活、進む道がある：それは頭ではわかっているし、応援もしてやりたいが、気持ちの方ではポツカリと穴が開いたような気分がして、ジワジワとした何かが心をさいなむのだ。

「せめてなにか会いに行ける口実はないものか…」  
「ついついそんなことを考えてしまう。」

しかし今はもう家に帰り着いているし、母の前でそんな顔を見せるわけにはいかない。

「ただいま」

元気を装い、玄関の扉を開けると母の元気な答えが返ってきた。

「あら、不良息子がやっと帰って来たわね、おかえりなさい。」

ずいぶんな言われようだ、母にそんなことを言われたのはいつぶりだろうか…

ポカンとした表情をしていると、それに気が付いた母に追い打ちをかけられる。

「ジエツト？あなたね？ どこかに泊まるなら泊まるで連絡の1つも寄こしなさい！ 食事の用意する身にもなつて頂戴よ？」

ああ…とやっとそこで納得できた、彼はそのことすらもすっかり失念していたのだ。

「作ったお食事はすっかり冷めちゃうし、帰ってくるか、帰ってくるかと思ったら、とうとう帰ってこないし…朝の仕事に行く前に、家に寄ってから行くのかと思えばそうでもないし…」

「ああ…ゴメン、母さん…アルシエさんが帝国に居られなくなっちゃってね、身の安全を確保するために、帝国外に引越すことになったんだ。その手伝いでね…でも連絡しなかったのはいけないかったね、ごめんなさい」

驚いた母が、先程までの拗ねた顔から、目を見開いた顔に変わり、距離を詰めてきた。

「大丈夫なの？ アルシエちゃんに何があったの？ ケガはないの？ 妹さんたちは？ どこに居るの？」

矢継ぎ早に質問をされ、戸惑いながらもジエツトは「大丈夫だから」とだけ最初に言って、順番に話すから少し待ってよ、と母に告げた後、一息ついて状況の報告をする。

「この家に来る前、アルシエさんは家を捨ててきたって言ってただろ？それは親の借金をずっと返済してたんだけど、妹さんたちを連れ

て家出をしてきたからなんだよ。」

「ああ、そのことは聞いたわ、『家を捨ててきました』って最初に言っただけもんね。」

「だけど、その前に妹さんたちが「借金の穴埋め」として親に売り払われて、どこかに連れ去られる前に助けることに成功はしたんだけど：そこから後が問題なんだよ。」

さらに一息ついて、母が心の準備を整えるのを待ち、続きを話し始める。

「もうすでに親が妹さんたち、つまり親御さんからすれば娘たちだね、その2人を売り払ったお金は受け取ってるんだ：つまり人買いたちがいつこの家にまで探しに来るかかわからないって状態だったんだよ。」

落ち着いて聞いていた母がそこでやつと言葉を出すも：

「ああくらまあ…。」

で終わってしまった。

「そこで、安全な場所まで移り住むのを手伝ってきたんだけど：母さん、そのことは誰にも言わないでね？ どこで誰が聞いているかわからないんだから」

それならこの家の中なら大丈夫なのだろうか…：という心配はないのかと言われれば、結論からすると「無い！」の一言で終わってしまった。

この家自体には防音の機能があって、外から耳を外壁にへばりつかせても、中の音はこれっぽっちも聞こえないようになっていた。

しかし外見自体に〈透明化〉なり〈認識阻害〉なりの機能が元から付与されてるわけではないので、アインズからの使いの者（言っしまえばシモベ）が〈飛行〉に〈透明化〉を身にまとい、ジェットの家まで来て、定期的に〈認識阻害〉の魔法を施しに来てくれるのだ。そのため、あまり危険な目には遭わないようになっていて、玄関の扉が開きっ放しにでもなっていない限り屋内の音が外に出ることもない。

だからこそ、ジェットがここまであからさまにありのままの現状を

話すことができるのだ。

「まあ…私もあの子たちのことは好きだったから、危険になるようなら、安全なところに居て欲しいっていうのは本音だけど…寂しいわねえ、最期に少しくらいお別れを言いたかったわあ」

「あ、そうそう アルシエさんから母さんに伝言があるよ」

「あらあら、あらあら、なにかしら？ 楽しみだわあ」

急に顔を上げてパツと明るい表情になって続きを聞きたがっている。

するとジエットは一枚の羊皮紙を取り出し母に見せる。

それは特に魔法的な効果はない、伝言が書いてあるだけのただの紙の代わりであり、手書きの文章が書かれていた。

『ジエット君のお母さん、急に引越すことになっちゃってお別れも言えずにごめんさい。』

そして短い間でしたが一緒に生活楽しかったです。

おかげで貴族気取りの家では経験できない家事やお掃除なんかのお手伝いをする中でたくさんの

ことを覚えることができ、本当の家族のような毎日を経験できてうれしかったです。

妹たちはお皿洗いのお手伝いができて楽しかったとも言っていました。

お別れを言うこともできずに離れてしまうことが心残りです、お礼もこんな形になってしまっ

て心苦しい限りですが、ささやかなお礼と、お詫びをお母さまに用意させてもらいました。

ジエット君に渡したのでどうぞ、受け取ってください。』

その手紙を読み終わると、少し母の瞳が潤んでいる様子が見て取れたが、それも指で拭き、すでにここには居ない人物に語り掛ける。

「私も楽しかったんだから、そんな気を使わなくてもいいのに…」

そうつぶやくと、ジエットに顔を向け、「ありがとう、届けてくれて…」

そう1つ礼を言うと、思いついたように顔の前で手を叩き、パン！と小気味いい音が鳴ったと思つたら、こんなことを言い出した。

「あ、そうそう、お返事も書くから、場所知ってるあなたに預ければ、届けてくれるんでしょ？ジエット？」

やはり母にはかなわない…、こちらの悩みなどお見通しだったようだ…

「ああ、もちろんだよ、母さん、ちゃんと届けに行くからさ、それは大丈夫。」

そう言いながらも心の中で母に感謝しているジエットに、今度は違う話題が母から切り出される。

「それはそうと、アルシエさんのお仲間の方々への伝言はどうするの？」

「ああ、それは仕事の合間、ちよつとした空き時間でしておいたよ。最初はかなり警戒してたけどね。」

「ああ…そうね、そんな状況だと変な会い方したら、どこで誰に見られるかわからないものね…そうなるよへ伝言<sup>メッセージ</sup>での報告になっちゃうかあ…」

「そうだね、案の定、最初はかなり警戒していたけど…ゴウン様が手掛けて作成されているスクロールでのへ伝言<sup>メッセージ</sup>はかなりクリアに聞こえるらしくてね、すぐにわかってくれたよ」

「それでもまだまだ知名度は低いものね、イプシロン商会のスクロールは雑音もなくクリアな音質が売りだ…だなんて…」

「仕方ないよ、徐々に口コミで浸透するしかないんだから…、かつての「あの国」が滅んだ時みたいに、信用が崩れるのはあつという間なんだけどね…」

そこまで会話が続けると、しばしの空白時間が訪れる…すると再び母が口を開く。

「それで？結局どこまで話すつもり？ アルシエさんのことを心配してるだろうし…」今どこにいるんだ？」ってことになるんじゃない？」

「そこなんだよね、バカ正直に言う訳にも行かないからさ…ゴウン様の手で色々良くしている最中で、秘密で進めていることだからね…」

「どうせなら、みなさん一緒に巻き込んだじゃうっていうのはどうかしら？」

(…病気が治って、元気になってるのは嬉しいんだけど、なんか最近、すごい勢いで…色んな意味でアクティブになってる気がするな母さん、時々怖いこと平気で言うんだよな…)

「そういうのも有効かもしれないけど…うまく巻き込まれてくれるか…ってところが悩みどころなんだよねえ…」

「一番いいのが…アルシエちゃんは妹さん第一で考えてたから、迷わずそこに移り住んだんでしょ？」「アルシエちゃんから見た妹さん」的な位置づけで「お仲間さん方から見たアルシエちゃん」も同じくらいの立場だったら同じ流れになって行きそうだし、そう進めばいいね。」

「そうだね…そう進むのが理想なんだけど…どうなるかなあ？」

「まあ、うまいことががんばるなさい！もし、仕事で失敗して責任取らされることがあったって、母さんはあんたに着いて行ってあげるから…、遠慮なくゴウン様のためにがんばりなさいな」

その一言に元気づけられ、翌日の執務室でのフォーサイトのメンバーたちとの会談に対して肩の力を抜き、話す事ができそうだと改めて母に感謝するのだった。

☆☆☆

「それじゃ、母さん、行ってくるね。」

ジエツトはそう言って、朝の支度を終えた後、仕事へ行くために玄関で母に声を掛ける。

すると、母の声が聞こえ、自分の言葉に受け答えてくれた。

「ああ、行ってらっしゃい、私もすぐ出るから待ってて？ 買い物に行って来たいのよ」

「ああ、うん、わかった、こっちも渡したい物があるから、待ってるよ」  
もちろん、昨夜に渡しそびれたものだ…話に夢中になったのと、翌日の会談でどういう話を進めていこうかと散々悩んでいたため、朝起きてから渡してなかったのを思い出したのだ。



「よし、これで支度は終わったわ、さあ、一緒に外に出ましょ?」

そう言つて、外に出て、鍵をかけると、いそいそと階段を降りようとしている…。やっぱりすっかり元気になった母を見て安心する。

ゴウン様の下で働くための条件として「母の病の治療」を対価としてお願いして、本当に良かったと思う。

あの時は驚いたどころではなかった、一応魔法学院で魔法のことを知識として教えてもらつてはいたし、同じ学び舎で共に学んだ「モモン」君の魔法の手腕はイヤというほど見せられていたので、驚かないとは思っていたが…とてもじゃないが、驚かずにいられなかった。

一度、〈病氣治癒〉<sup>キユア・テイジス</sup>の魔法を、ワンドを使用して唱えてもらったが効果はない、というのが分かると「ふふ…面白い」そう一言呟いたモモン君の姿のゴウン様。

無論、元々アンデッドで、しかも死霊系魔法に特化したビルドのアインズには神聖系の治癒魔法は使えない、しかし【リング・オブ・マスタリーワンド】を身に着けている状態なら神聖系の効果を発現させるワンドを使えるのだ。

アインズが持っている物の中でも、ワンド・オブ・リザレクションをドロップさせる際、それ以上にドロップした下位アイテムの、ワンド・オブ・キユアテイシーズは腐るほどどころじゃないくらい持っていたので、惜しくもなかったのだ。

二度目は〈魔力増幅〉<sup>マジック・ブースト</sup>と唱え、同じ治癒魔法を唱え、失敗した…その時、自分はやはりこの病氣は治らないのだろうか…と落胆しかけていた、その時にゴウン様が言った言葉が衝撃だった。「すばらしいな、この世界に於いてここまで手こずる状態異常とは…どこまで耐えられるのか勝負と行こう」…と…

まさか自分の魔法が通じないことに諦めるどころか…尚、闘志を燃やすのだ…その姿にあこがれた…自分もああいう精神的な強さを養いたい。

ついそう思ってしまった。

そして三度目。

ゴウン様は〈マジック・ブースト  
魔力増幅〉が効いてる状態で〈マギンマイズマジック  
魔法最強化〉をかけ、  
治癒魔法を唱えるもそれも失敗。

面白い、それならこれだ…とどこまでもチャレンジ精神を失わない  
不屈の精神にすでに脱帽していた。

四度目に唱えたのが、〈マジック・ブースト  
魔力増幅〉が効いてる状態での  
〈上位魔法蓄積〉と唱え、〈トリプレットマギンマイズマジック  
魔法三重最強化〉を使った  
〈病気治癒〉の重ねがけをし、それを母に「解放」したのだ…。  
〈上位魔法蓄積〉は、「蓄積」とあるように、積み重ねれば積  
み重ねるほど、威力が上がっていく、術者の力量に応じて限界はある  
が、それでも〈上位魔法封印〉のように、それぞれ個別ごとに内包す  
るのではなく、唱えた回数分効果が上がるという魔法まであるとは学  
院でも教わらなかった貴重な知識だった。

そう…彼はそこまでは知らなかったが、同じような魔法で  
〈グレートマジックシール  
上位魔法封印〉という魔法もある、それは例えば1つのそれに  
〈トリプレットマジック  
魔法三重化〉を使用した場合、威力の上がらないままの魔法であれ  
ば、位階はそのままの魔法が3回分、マジックアローならアインズな  
ら10発、「三重化」なら30発分を封じることが出来る。

それに対して、〈グレートマジックアキュリレーション  
上位魔法蓄積〉の場合、マジックアローで例  
に出すと、〈トリプレットマジック  
魔法三重化〉を使用してもアインズが込めたなら10発分  
のマジックアローのままなのだ…なのだが、その一発一発の威力はお  
よそ三倍に引き上げられたのと同様の効果となる、そのため、今回の  
〈キュア・デイズ  
病気治癒〉は同じ〈トリプレットマジック  
魔法三重化〉を使っても同様の魔法が3回発動  
されたという意味ではなく（ワンドの回数はその分差し引かれるが）、  
効果は3倍に引き上げられているのと同様の魔法が1回発動したと  
いうことになるのだ。

するとどうだろう…母の全身が光り輝いたかと思うと、すぐに効果  
はあらわれた。

母の落ち込んでいた体調が見る見るうちに浮上していき、顔色も良

くなり、ずっと寝込んでいた母がすぐに立ち上がれるようになったのだ。

何度も涙を流し、礼を言う自分と母、それに対してのゴウン様の言葉は澆刺としたものだった。

「いや〜：なかなか手にこずつたが、久々に手ごたえのある相手だった、たまにはこういう体験も自分の経験として役に立つ、私も勉強になった。」

そう言われ、衝撃だった：自分から持ちかけた条件だったとはいえ、あそこまで難易度の高い病を苦勞して治癒して見せ：自らも「手こずつた」と言うほどのなのに、それを恩にも着せず「勉強になった」と言うのだ。

その謙虚な姿勢にも心を打たれた。

「この人にはとてもかなわない：」そう思った。

実はその時すでに学院での生活でうっかり彼の正体は見てしまっていたので、「人」ではないと思っけていても、彼の言葉、振る舞い、仕草、それらを見る度に彼がただのアンデッドではないと数年も見ていればわかっていたので、そこは抵抗なくすんなりと心に染みわたるには十分な背景は出来上がっていた。

そんな過去のことから思考が現実のものへと返ってきた際、もう母は階段を下りて1階に差し掛かろうとしている、急いでジエツトはそれを追いかけて、母を呼び止める。

「母さん、これ！　これが昨日アルシエさんの手紙にあった「お礼とお詫び」って言ってた品！」

そう言つて母に差し出した品は、帝国でも名前を知らぬ者はいないほどのブランド物の香水。

母は驚き、「こんな高価な物：」と目を見開いていたが：アルシエさんから聞いていた事情も話す。

これは、『親が借金して買った中の一つ』だと：

父親は、貴族に返り咲ける日をただひたすらに夢想していて、美術品や、貴族が持つにふさわしい：と思われるものばかりを買っていた

のに対し、彼女の母親は、いつもではないが娘のアルシエさんのために「女の子なんだから」という口癖と共に実的なものを買って求め、それを借金返済に帰ってくる彼女にと「持っていきなさい」と渡してくれていたというのだ。

（「それも結局、借金して買ったものだから、私が返済してたけどね」とアルシエさんは苦笑してはいたけど…。）

その香水もその内の一つ、結局、ワーカー仕事以上に借金を返すために有効な仕事は他になく、ワーカーをする上で香水など、使う機会はほとんどなく、ほぼ忘れていて、開封もされていないからと…お世話になったジエットの母へとそれを「渡してほしい」と贈ることにしたのだ…。

「使っていないから、自分に合わない香りだと思ったら、使うのはやめて捨ててもいい」とも言っていたと、母にはちゃんと伝えておいた。

それを聞いた母は「そういうことなら喜んでもらいましょう。」と懐にしまって、買い物に行ってしまった。

お互いに「気を付けてね。」と言いつつながら。

☆☆☆

ジエットは執務室で悩んでいた。

どう話そうか…どう切り出したら、彼らを…無事アルシエさんと会わせることが出来、かつ住んでる場所もバラさず、今後も付き合い合わせることには結び付くだろうか…

そう思っているとドアをノックする音が聞こえた。「どうぞ」

そう言うのと扉を開いて入ってきたのは、受付嬢に案内されて入ってきたファイサイトの面々。

「しばらくだな、あれから少ししか経ってないが、ずいぶん会ってなかった気がするよ」

そう言っに入って来たのはリーダーのヘツケラン。

もちろんイミーナさんにロバーデイクさんも一緒だ。

昨日、<sup>メッセージ</sup>伝言で、コトの次第は：掻いっまんだ報告だけをして、詳しいことは会って話そうと：それだけ伝えて今日、この時間、執務室に来てもらった。

「そうですね、久方ぶり、というにはそんなに日は経っていないですよ。ね。」

そう答えながらも、頭の中はフル回転だ：まだ話のとっかかり、なにかから話し始めるかも決まっていない。

ドアを閉めようとしている受付嬢に「何か彼らに冷たい飲み物でも持ってきてあげてください。」そう言っただけでも時間稼ぎをする。

「ハイ、かしこまりました。」受付嬢はそれだけ答えると静かにドアを閉めていく。

「さて、アルシエのこと：聞かせてもらえますか？」

（早速、本題に入って来たか…）

「そうですね…、その前に今、帝国内で様々なワーカーたちに『ある特定の依頼』が幅広い範囲で依頼されているのを知っていますか？」

（これは知らないはずはない、このことでアルシエさんは受けようかどうかを悩んでいたんだから…）

「ああ、その件を知ってるってことは、アルシエから相談はされていたってことね」とイミーナさん。

「ハイ、その件も混みで、恐らくみなさんも相談というか、報告はされたと思いますが、妹さんたちの件は？」

「ああ…その件もご存知なのですね、それなら話も早いのでは？ヘツケラン…」

3人が3人とも顔を見合わせ、うなずいている。

…とそこへ、飲み物を持ってきた受付嬢が扉をノックしたあと、入ってきた。

「どうぞ、こちらになります。」

そう言っただけでテーブルにグラスを一人一人の目の前に置いて、部屋から去ろうと扉に向かう際に声を掛ける。

「申しわけないですが、これから私は彼らとの話があります、彼らがこの部屋から出るまでここには誰も来させないようにお願いしますよ」

？」

一瞬、戸惑いの表情を浮かべるも、すぐにその表情も引き締まったものになり「了解しました。」と短く答えて部屋から退室して行った。

「さて、それでは本題の方に入らせてもらいますね…」

(さて、どこからどこまでを話せば良いものか…)

そう考えていると急に、ドアを乱暴にノック、というより殴っているかのような音が聞こえてきた。

ジエツトは即座にドアに向かい扉の外に居る者に苛立ちを覚えていた。

(さっき、誰も来させないようにと言っておいたはずだろうに…！)

その思いをなるべく外に出さないようにと努めながら…

「どうしました？急な要件ですか？」

それだけ短く告げると「こちら、先ほど小さい少年がこの店の責任者に渡してくれと言われて受け取ったと持ってきた手紙なのですが…」

そう言われ、目の前に出された手紙を受け取り…手紙を持ってきた担当を部屋から下がらせた。

「すみません、少しだけ、時間をください」と、フォーサイトの3人に断わりを入れ、手渡された手紙を開封して一行目で心臓を鷲掴みにされたような感覚に襲われ、全て読んだ後、ヒザから床に崩れ落ちた。

「何だ…どうしたよ？ジエツトさんよお…」

何ごとが起きたのか？、と一瞬にして空気が変わったのを察したのか声を掛けてくれる。

しかしジエツトは心の整理がうまく頭の中でまとまらず、その手紙を持った手を伸ばしてフォーサイトの面々に渡すことしかできなかった。

「なんだい、おれらも読んじまってるのか？」

そう不思議がりながら手紙を軽く読み始めたフォーサイトの面々も表情が引き締まっていく。

「おい、こりゃ…」

「これは相当にまずい状態です、一刻を争います。」  
「こりやく、私たちも知らん顔をしてる場合じゃないってことね。」

やっと少しだけ落ち着きを取り戻しつつあるジエツトがフォーサイトの3人に話しかける。

「申し訳ありません、先ほどの話がまだなにも話せていませんが：お力を貸してもらえませんか：？」

「ああ：もちろんだ：あんたに何かあったらアルシエの情報だってわからないままになっちゃうし：なあ？：ロバー」

「ええ、賛成です、まだあの鑑定屋でワナに嵌められた際に助けられた恩を返せていないままですしね。」

「そうね、この件でお釣りがくるくらいの恩を売っておきましょうよ」

「：みなさん、ありがとうございます。恩に着ます：」

力なくそう答えながらも1人でこの件に立ち向かずに済んで少し安心した自分を感じた時、まだまだ「かのお方」には自分は遠く及ばないな：などという場違いなことを思いながらも：今は、この件の解決が先だと気を引き締める。

そして、フォーサイトの面々が目を通した手紙にはこう書かれていた。

「お前がフルト家の令嬢3人と最後に会いどこかに赴いたことは分かってる。」

この手紙が届く頃、お前の母親はすでに俺たちが預かっているだろう：

この意味が分かったら、お前の情報をこっちに渡せ。  
さもないと人質の安全は保障しない。

指定した時間までに来なかった場合も同様だ：

あの時の「男」には知らせるなよ：知らせたら人質の命はない！」

フルト家というのは、もはや「アルシエ」の実家のことを指すのはフォーサイトのメンバーであれば容易に想像がつく…さらには妹2人もこの事件のことにかかわっているとすれば、フォーサイトも無関係ではない。

もしも、これでジエットが母の命と交換に交渉に応じ、アルシエ達が危ない目にでも合えば…と思うと、手を貸すのに迷いはない。

妹さんらの話があり、ワーカーの進退を決めようとしてるくらいだ、アルシエ自身は魔法でなんとか逃げられるとしても妹たちをかばいながらでは難しいかもしれない…。

万が一、妹さん2人…いや、1人だけだとしても命が…いや、さらわれるだけだとしても、そんなことになったら「一生かけても救い出す」と言い出し、チームを抜けることも考えられる…。

そう思うと、フォーサイトのメンバー3人も他人事ではなく、「恩を返したい」というのももちろんウソではないが、利害が一致しているという理由も手伝っているのだ。

アルシエのために…そして、「最後を締めくくる冒険」という想い出を作るよりも前に解散なんてことになったら目も当てられない…そう考え、ジエットに手を貸すことに3人とも迷いはなかった。

そして、この一件が解決したら、遠慮なくアルシエのことを聞き出せる、そういう計算も同時に行っていたヘツケラン。

しかし、この手紙を…文面を書いた者は気づいていなかった…自分たちが致命的な間違いをしていることに…。

1つは、ジエットがただの気の弱い、戦闘スキルも、魔法の実力も目立たないタダの恐るるに足らない存在だと思ひ込んだこと。

2つは、ジエット自身が、そういう脅し、恫喝、危機的状況からの打開策を見出すことについてはピカイチな経験を持ち得ているのを知らなかったこと。

3つは…わざわざ、自分から「知らせるな」という…言わば、その



存在を恐れています。という表現をわざわざ明言していたこと。

4つは…その「存在」がある程度自由に姿、顔などを換えられ、姿を目立たないように（消えたようにも）見せられることも知らなかったこと。

（そのことはジエット自身もまだ知らないことではあるが…）

5つは…実は今まで存在すらして居なかった「その彼」の忠実なシモベが、生命を宿し、動き出してしまったということを知らなかったことも含め…。

あらゆることで地雷を踏んでいることに気付かず、人質を取って得意げにしている者たちのカウントダウンが始まっていることに本人たちは気づいてすらいないのであった。

## 第21話 NPCちゃん起動!

ここはナザリック地下大墳墓：支配者は帰ってきてすぐ、ベルリバーの部屋に訪れていた。

もちろんそこにはアインズ一人ではない、カルネ村に泊まった際、その日の途中でアインズ当番を中断してしまったニーネ、そして本日の当番のテネシスだ…。

本来は当番を2人も連れ歩くのは「自分で決めた当番ルール」を乱してしまうことになるが：ニーネからすれば来客が来た後、アインズ当番を外され、来客のもてなしを任されたのだ。

言うならまだ「あと半日なにもしていない」という嘆願がアインズにされたのだ。

(普段は憤み深いのに、こういう時だけ打ち解けた雰囲気でおねだりしてくるんだよなあ…まあそれも「服従一色」だった頃に比べたら幾分マシか…)

そう判断して、特例としてニーネ、テネシスという二人体制で付き従わせ、アインズと共にベルリバーの部屋へと来ていた。

「あ…あの、アインズ様…このお部屋は恐れ多くも至高の41人のお一人、ベルリバーさまのお部屋では…無断で…その…良いのでしょうか…?」

本日のアインズ当番であるテネシスから不安そうな声で尋ねられる。

(ん…ああ、そうか、箝口令は敷いてるけど、あの時の気配が誰かって言うのはまだ知らせてなかったな…でもこれはサプライズイベント前だし…なんて言おうか…)

「ああ…んん…お前たちには伝えていなかったか…すまん、勝手に動いてしまって、戸惑わせてしまったようだ」

(とりあえず、言い訳するための時間稼ぎだ!)

「いえ、決してそのような…私どものような一般メイドなどに行動の報告など…不要です、至高の御方であらせられるアインズ様の望まれるままで構いません」

テネシスもニーネもそろって腰を折り、謝罪の姿勢で顔を伏せている。

「ん？そうか？それならばいいが…私がこの部屋に入るのには反対か？」

（とりあえず話を合わせながら、突破口を見つけて行こう…それしかないもんなあ…）

「いえ、とんでもございません！単純に…このお部屋に入られる真意が知りたかったもので…身分にそぐわぬ質問、お許しください。」

「ああ…かまわないさ、この部屋に来たのはな…最近少し思いもよらぬ不測の事態が起こったものでな…それに対応するための人材確保のためだ。」

（身分にそぐわぬって、何もそこまで言っていないぞお〜？）

「人材…でございますか？」

「ああ、お前たちの戸惑いはよくわかるぞ、この部屋には誰も居ない、そう思っているのだろうか？」

（まあ、事実、プレイヤーは居ないけど…NPCは一体、居るんだよね…一般メイドはこの部屋とか…掃除に入ったりしてないのだろうか…）

「そういえばお前たちは仲間たちの部屋を1つ1つ掃除などはしていないのか？」

「あ…、はい、掃除などのため、入室することはございます。しかし…御方々の私物などが収められている中など勝手に見ることは不敬な行いとなるので…そこまでは…」

「そうか…それならば知らずとも仕方は無いな…実はこの部屋にはかつて、ベルリバーさんが居た頃…とある術式を施しては置いたものの、起動されること無く、放置されたままの状態で「ある者」が命令を与えられる機会に恵まれずに、そのままになっている…その結果、今に至っている状態なのだよ…。」

（未起動のNPCが居るんだから、ウソじゃないよな…）

「それは…どのようなものでございましょうか？」

「とある特殊な者の召喚…ではないな…敢えて言うなら作成系の魔法…と言った方が近いか…その上位、その術式を起動させるのはこの世界に来て初めて…なのだが…、まあ失敗する恐れもあるが…恐らく大丈夫だろう。」

「それは危険な者なのではありませんか？」

主人の身の危険を心配した2人のメイドが同様の視線をアインズに向けている。

「とんでもない…あのベルリバーさんが作り出した者だぞ？ナザリツクに危害を及ぼす筈もなからう」

「それはようございしました、それでは私共も…よろしいのでしょうか？…不敬では…？」

「ん…そうだな…入りにくいのであればムリをすることははない、お前たちは魔法などを習熟してるワケではないのだから…」

アインズはそう言うと、2人の頭に手を置いて、優しくなでながら言い聞かせるように語り掛ける。

「変に踏み込んで魔力を吸い取られてしまつては一日気絶して、私の当番どころでは無くなつてしまう恐れもあるからな…よし、2人は私が出てくるまで、待機しておけ…」

自分たちのような消耗品のごとき存在をも大切に扱つてくれる至高の主人の言葉に感動し、瞳を潤ませながら…

「いえ、例えこの身が減びて消えようと、至高の御身を守るためであれば、この命…捨てることになろうとかまいません！どうぞ、お気になさらず、お連れください!!」

(ええええ？…こう言えば、聞いてくれると思つたのに、逆効果だったか…仕方ない最後の手段だ…ウソも混じるけど、この子らのため！)

「そのようなこと言つてはならん！ お前たち一般メイドは41人…お前たちであれば、その意味、分からぬはずはあるまい…」

「そ…それは…」

その言葉に2人は一様に口を閉ざし、それ以上は言えなくなつてしまふ。

「そうだ…41人それぞれの想いが込められ、作られたお前たちの存

在は、41人で初めて「一般メイド」なのだ、例え1人でも欠けていないものではないのだぞ?」

「わかるな?」

そう問いかけながら、彼女らの目線に合わせるように腰を折り、同じ顔の高さで言い聞かせる。

「私はこのナザリック地下大墳墓の主人だ! おめおめとやられはしない…何かアクシデントがあろうと、1LVのお前たちに守られねばならぬほど弱くはないつもりだ。」

「…わかりました、それではここで無事にお戻りになれるのをお待ち申し上げております」

2人がそこに至り、ようやくそう納得して送り出してくれる段階にまでなる。

「うむ…それでは行ってくる…見張りは頼んだぞ?」

(やったああ、やっと望む流れに持ち込めたぞ…はあ…疲れたあ…)

アインズがここまでしてNPC創造の場に立ち会わせたくないのには理由がある。

一般メイドとは言え、その現場を見せてしまうのは…例えて言うなら自分の子供に、出産のビデオ動画を「こうやって生まれて来たんだぞ?」と見せる時の心境に似ていると言えばわかりやすいだろうか…

NPCを作るための最後の50ポイントとは言え、それを見せてしまうのはとてもではないが「大丈夫だろうか…」という不安がぬぐえないためだ…

なにも起きなければ、そのまま最後となった、このポイントを使い切る…。

そうなれば必然的に「どうやってNPCを作る作業が完了するのか…」の現場を見る機会は永遠に訪れないことになる。

それならば、いつそ、知らぬままに「その機会」が失われた方が彼女らNPCとしても幸せなのではないだろうか…という何となくの親心なのだ…

親になったことのない鈴木 悟には理解しようとすることは出来ても、真の意味で同じ立場に立つことは出来ない…とは言え、仲間が

残してくれた家族であり、子供のような者たちに対して、それを見せて平気なのか？と自問すると…どうしても答えが出せなかつたためだ。

アインズが部屋に入ると、ベルリバーが居なくなつてからも一般メイドたちの掃除はよくされているのだろう…ホコリも目立たない小こざつぱりとした部屋であつた。

「ベルリバーさんの部屋に無断で入つたことないから、確証はないけど…」

そう言つて一般メイドたちとの会話からあたりを付け、人の大きさを入れるんなら、きつとココだろうと予想を立て、その目の前に立つ。

そこはウオークインクローゼット。

普通であれば、そこに衣服などを入れておくべき場所なのだろうが…一応それも「彼らの私物」という扱いからすれば、この中は恐らく見られてはいないだろう…

ベルリバーさんの性格からして、自分の作品であり…娘である存在を放置で去ると思えない。

そう結論づけ、ゆつくりと…静かに、そこを開けると…やはり思つていた通りであつた。

そこには獣人種<sup>ライカンスロープ</sup>であることを隠すためだろう、額に当たる部分に見方によっては聖印っぽく見えなくもないような模様が刻まれたデザイン<sup>の帽子をかぶっている</sup>の帽子をかぶっている。

そのため、獣人の証たるケモ耳は見えないように工夫されていた。

尻尾は…多分隠されているのだろう…、一見すると大昔、リアルの世界でまだ「サムライ」というユグドラシルでも超レア職だった存在が普通に生活していた時代にみんなが当たり前に着ていたという「和服」のようなイメージの衣装が着せられているようだ…そのため、その余裕のある服の下に尻尾が体に巻き付けられていても違和感など誰も覚えなだらう見た目になっている。

そして、日本人特有のつややかな黒髪。

元にした種族はブラックジャガーと言っていたので、黒髪にしたの  
だろう：

至る所に作り込みが施されており、ベルリバーさんの思い入れが分  
かるようだ：

瞳などは、ジャガーの瞳にふさわしく、瞳孔が獰猛な肉食獣のもの  
として見開かれたまま、NPC製作用の保存ケースに収納されてい  
る。

この専用ケースの中でなら、瞳を見開いたまま、瞬きしない状態で  
一年中立っていても目も乾かず、直立姿勢で疲れたりもしないだろ  
う。

とりあえず、そのまま見ても仕方ないと、その専用ケースを開  
き、「ぷしゅうう…」という音と共に中から煙のような気体が漏れ出  
きて、そのまま周囲の空気と混ざって消える。

そして、「用が済んだら返しに来る」という約束をオーレオールにし  
て、借りてきたスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン…、玉座  
の間に居なくても、これの専用ツール機能を使えば、問題なくNPC  
起動ができるはずだ…。

(さてさて…目覚めさせる前に名前を確認しないと…だな、そうでな  
いと起動させる対象を特定もできないし…)

「えええ…つと？ ああ、あつたあつた、これが名前か…そう言えば  
この名前だったな」

専用のケースに着けられていた名札の名前を確認するとスタッフ・  
オブ・アインズ・ウール・ゴウンを高らかに持ち上げ、即座にこう告  
げる：「目覚めよ！フレイラ！お前に命を授けよう、主人の想いを果  
たすのだ！」

目の前のNPCにそう告げると、その、どこか虚空を見ているよう  
な…そんな焦点の合わない瞳に意思が宿ったようになり、すぐに目の  
前の支配者に視線を向け、即座に跪くと命が宿った喜びを告げてく  
る。

「初めまして、ナザリック地下大墳墓が支配者、至高の存在たるモモン  
ガ様、この度は不詳のわたくしめに命を分け与えてくださったこと、

これ以上ない喜びにございます。」

「うむ、そうか…お前はそのことを知らなかったのだな…どうやら起動する前から今までのことをまだ知らぬようだ、まあそれも致し方ないな…ずっと専用ケースの中に居たのではわからぬのも道理…か。」  
(さてさて、一通りのことをまず最初に教えておかなければな…)

「あの…なんのことでございましょうか？」

「ああ、この墳墓の支配者と言う私に対する認識に間違いはないが…事情があつてな、この墳墓は今や沼地にあるのではなく全く別の地に飛ばされてしまったのだ…ナザリックごと…な…。」

「なんと…それはまことにございますか！…となると、我が主人は…造物主たるマスターはいずここに？」

「ああ、それも教えねばならん…だが、その前に…この世界は我らが居たユグドラシルではない、全く別の世界だ…そのため本当の名を私は隠し、アインズ・ウール・ゴウンと名乗っている。これからは私のことをアインズと呼ぶようにな…。」

と一拍の呼吸を置いて（呼吸の必要はないが…）

「ちなみにお前の創造主たるベルリバーさんも今は名前を変えている…今は『リバー』ヴェール』と名乗って外の世界に出てもらっている、外の世界の情報を収集してもらおう為にな…。」

（本当はちよつと違うけど、この子の不安を煽るのは良そう…安心させてあげるのが第一だからな…）

「外の世界…とは、それほど危険なのでしでしょうか？」

表情を引き締め、緊張を宿したままで自らの創造主へ及ぶ危険の排除を模索しているようだ…

「実を言うと、レベル的にはそれほどでもない…かなり特殊な事例を除いて…普通の人間で、レベル30までで英雄、40前後なら逸脱者、50以上なら化け物、もしくは魔神…か魔人と言ったところだろうか…。」

「それならば、我が創造主ならばなにも問題ないはずでは…？」

不思議そうな表情のフレイラにその答えを示す。

「まあ、それはそうだが…彼には今ナザリック内の者を向かわせてい



なくてな、正直、護衛という点では不安が多い」

「それでは…マスターお一人で外の世界の情報収集を…危険なのは？」

「お前の心配もわかるが、一応彼は現地の者で味方を既に作り始めている…その点では彼はこの世界に溶け込み始めている…早くもな」

そう安心させるようにベルリバーの現状を教えたと「おお…さすがです…マスター…我が創造主さま」と、しきりに感激している。

(やっぱりNPCはこういう性格になるんだな…これからのベルリバーさんの気苦労が見えるようだ…)

「さらに付け加えると、その協力者の中でもエルフが3名…常に彼のそばにいる。レベルは低く、POPモンスターの低レベルと互角くらいの実力しかないが、それでもこの世界では少しは力になる感じではある。その者らがいるので、孤独の情報収集ではないというのをまずは覚えておけ。」

「は！ 貴重なお話ありがとうございます！ それで…わが身はこれから何をすればよろしいのでしょうか？」

「その前にナザリックの中のこととはどのくらい知っている？ それを聞かぬままでは心配で外にも出せぬのでな…」

「は…私知っているのは、守護者の方々と…至高の御身自らがお作りになられた領域守護者様…それから、統括たるアルベド様に…プレアデスの方々…それからセバス・チャン様。ペストーニヤ様に、エクレア様…アルベド様の姉であられるニグレド様…と言った感じでしょうか…？」

「そうか…ガルガンチュアや、ヴィクティム…オーレオールはどうだ？」

「は…皆様のお名前も存知あげております…ですがどのお方もまだ面識はございません。」

「どのような容姿、特徴、種族や職業か…などはどうだ？」

「その程度でよろしいのであれば一通りのことは…」

「うむ…それならば、外に出ても問題なからう…それではこれを持っていくがいい…、世界の全てを記されてるわけではないが少なくとも

ココ周辺の地理は分かるようになっていた地図だ…やつと外に出る守護者用に持たせられるくらいには精度がよくなってきたからな…」  
「ありがとうございます…して、ナザリックはこの地図のどのあたりで？」

「ああ…それならココだ…、それでベルリバー…ではなく、この世界ではリバー||ヴエールさんだな、それがこの辺りだ…まあその周辺は私も覚えているので〈転移門<sup>ゲート</sup>〉を作ってやろう。」

「ありがとうございます、至高の御身より賜る貴重な情報…そして研鑽の結晶を瑕疵していただけるその深い恩情に感謝いたします」

「それはそうと…少し、お前の装備を鑑定しても良いか？見た所、素手のままで武器など装備していないようだが…？」

「あ…ハイ、どうぞお気の済むままに…、ですが恐らく我がマスターは私に【双手拳士】の職業を持たせてくれたので…その上で種族特性の爪攻撃をさせるおつもりだったのではないかと…」

「ああ、そうか、そういうことだったか…しかしこの世界に於いて、折角耳も尻尾も隠して人同様にしてるのに爪攻撃で正体がバレては、不都合なことが起こる可能性という心配がぬぐえぬのも否めまい？」

そう言うとき、オールドフレイザル・マジックアイテム〈道具 上位鑑定〉をフレイラに対して唱える。

「やはり…か、その形態での武器などはまだ装備させてもらってはいないようだな…」

と言うとき、アインズは自分の手持ちのアイテムボックスからなにかを探るように空間に消えた手を動かし、色々と探している。

「おお…あつたあつた、意外と奥の方にあつたな、まあ冗談で作ったアイテムだから、忘れて奥に行っても仕方のないことだろうが…」

そう言われたかと思うとき、至高の御身は私に「対のグローブ？」を差し出してきた…それはグローブというより手袋に近く、指先部分が露出するような造りになっていた。

しかしグローブと明らかに違う点は、拳で相手に接触する部分にゴツゴツとしたスパイク状に金属が埋め込まれ（縫い付けられ？）ている。しかも手の甲には真っ赤な…見事なカットが施された宝石。

これは間違っても裏拳など、使つてはいけな手段になつてしまつ

たようだと、彼女は即座に思い至る。

「あ…あの…アインズさま…これは？」

「ああ…徒手格闘する人用にネタで作ったものだがな…、一度使ってもらっただけで死蔵されていたものだ…使うといい。」

そう言われたアインズ様は私に、その手袋の効果を説明してくれた。

『バーンナックル焼けつく拳』という、文字通り炎属性の魔法が込められていて、第3位階のフレア・ブラスト〈熱波の炸裂〉というものが込められている…こちらの世界では第3位階と言えば魔法の才能のある者が血のにじむような努力の末にようやく到達する位階の魔法…そういう扱いみたいだから…こつちの世界なら充分すぎる程だと思っぞ？』

「え？…そうなのですか？… その程度の…あ、申し訳ございません！ 失言でした…。決して御身の封じられた魔法を『その程度』などと言った訳では…」

「ああ、かまわないとも、私もこの世界の基準を知った時は、『弱い者どもだな』と思っただものだ、咎めはしないとも…」

「ああ、そうだ、その『バーンナックル焼けつく拳』は相手を殴りつけるだけでもフレア・ブラスト〈熱波の炸裂〉が相手に突き刺さる…、まあ、相手の体内でだがな、しかしミドルレンジ中距離から拳を突き出すだけでも発動させることが出来る…だが、ミドルレンジ中距離からの発動は一日に5回までが限度だ…しかも街中でそんなものを使えば、容易にそこいらの街の住民であればたやすく服から燃え上がって死んでしまう…なので注意して使うのだぞ？」

（懐かしいなく…格ゲー好きの獣王メコン川さんの希望で作ったものなんだよな…第3位階魔法だったから、そこまで手をかけたわけじゃないけど、イメージに合ってくれたようで、喜んでくれたっけ…）  
そんな想い出に浸っていると、そばに控えているレイラから声が発せられ、そこで我に返る。

「は…しかと心に留めておきますー！」

「さて…それでは防具の方はそのままでもよからう…あの世界では明らかに過剰な気もするが…その衣装の下であれば、それほど目立つまい…」

そう言われた至高の御身は、私が待ち望んでいた魔法を唱えてくれた。

〈転移門〉！

そう唱えていただくと、目の前に闇の空間が広がる…今すぐにでも飛び込んで我がマスターの元に馳せ参じたいという想いを押しとどめ、目の前の支配者に視線を向ける。

さすがにそのような醜態をお見せするわけにはいかないからだ。

「今、私が展開させた〈転移門〉をくぐり抜けた後、その周囲を見渡し、てみれば良くわかるだろうが、目立つ建造物がある…、拠点作成系のアイテムで作られた「新緑の隠れ家」グリーン・シークレットハウスがそこにはあるはずだ。そこにヴェールさん…お前の創造主が居る、望むままに甘えてくるといい。彼も喜ぶだろう…」

（それじゃ、がんばってベルリバーさん…彼女のことは親であるあなたに任せましたよ！）

「さあ、行くがいい！　そしてお前の主人の望みを叶える一助となるのだ！」

「は！　御身のご命令のままに！」

そうひと際、強い決意を感じさせる声で応えた後、獣人さながらの身のこなしで風のように闇の扉へと飛び込んで行く…するとそれに合わせたように〈転移門〉が収束し、消えてしまう。

「うん、これでいいな。さて、ニーネもテネシスも待つてるだろうし、部屋から出るか！」

そう言葉にした瞬間、大事なことに気づく…

「あ…：そういうや、ベルリバーさん、こつちの世界に来て、姿を変えられるようになったって伝え忘れたな…ま、大丈夫か…：創造主の雰囲気の間違うはずないだろう。」

そうして「なんとかなるだろ」的な楽観的思考で結論を出し…：その部屋を出た後、支配者はすぐにオーレオールにギルド武器を返しに行き、それからはいつも通り、ナザリックの運営という日常へと戻っていくのであった。

「ヴェールさん、ああ〜くん♪」

「ああああ〜…。」

ガパつと大きく口を開ける。

「わああ！ おつきい口〜♪ それそれえ〜！」

「なんでも入りそうですねえ〜。」

3者3様でその様子を楽しんでいる…喜ばしいことではあるが、どうにもこそばゆい…

「あのおく？ そろそろエルヤー姿に戻ってもいいですかね？」

「だあくめ！ せっかく本当のお姿を教えてくださいましたのだから、誰の目も無い時はせめてずつとその姿で居てください！」

（ムチャぶりじゃありませんか？ デイーネさん…）

「ホラホラ、そこにもココにも口はまだまだあるのですから、私の方からも食べてくださいいな、ああ〜くん♪」

と、そこにも嬉しそうに私に食事を放り込もうとしてるルチルの姿があった。

（それにしても、カルネ村の帰りに帝都に着いて早々、北市場に足を運んで、面白いものを買ってよかったよ、少し値が張ったけど、この家では備えられてない「冷蔵庫」の代わりになるものが買ったのは、嬉しい発見だったな）

その時はもちろん、エルフの3人には幻を纏ってもらい、耳を斬り落とされた風に見えるように、さらに衣服もみすぼらしい物を纏っているように見せてだ。

買って早速、その役目を使えるような状況になったのは、まさに僥倖と言えるだろう。

それと言うのも、彼女たち3人が帰って来て早々「疲れた、お腹減った！」と訴えかけてきたためだ…

ベルリバー本人は身に着けてる装備の効果によって食べなくても不都合はない、食べられないわけではないため、食べられるときに食

べられればいいやと思っていたのだが、彼女たちには普通に「空腹、疲労、眠気など」は例外なく訪れることをスポーンと失念していたためだ。

そこで、食料を獲ろう！という話になったのだが、レンジャーの心得があるのはセピアだけ：

あとの二人はエルフ特有の耳の良さ、妖精種とも言われているだけあって、精霊との結びつきを感じられることや、インフラビジョンなどはみんな問題ないのだが：

ドルイドの技能を習得しているルチルはまあ：何とかなるとしても、ディーネは純粋な神官構成：一応、簡易な弓は扱うことはクレリックの道を選ぶ前に覚えていたらしいので、問題はないようだが、神官としては刺突（矢）で仕留めるのに抵抗があるようだ：と思っていたのだが、実はそうではなかったというのが最近分かった衝撃の事実だった。

彼女が信仰しているのは六大神でもなんでもなく、もつと昔からこの土地（世界？）に居たマイナー神だったようで、その教えでは「生活に必要な最低限の狩猟であれば：」という条件で弓などは普通に使ってもいいようなのだ：

今まで弓を使うのを見ていなかったため、神官としての信仰の現れなのかと思っていたが、食べるわけでもないのに無闇に弓矢で命を奪うのは教えに反する。という理由だったらしい。

そこでヴェールは、彼女たちにあらゆる食料を口に放り込まれながら、その時のことを思い出す：4人で狩りに出ようという話になった時のことを…。

☆☆☆

「ねえ～：ねえ～：ヴェールさあ～くん、狩りに行きましようよお～。何か食べ物お～！」

言い出してから、ますますお腹が減って来たのか、セピアが段々、駄々っ子じみて来た。

「そうだなあ〜…そう言えば、この森の生き物たちって…モンスター？って言えばいいのか？ゴブリンたちだっているんだろ？そいつらまでおびき寄せちゃったら、大変だからなあ…、ボクのスキルのアレは使えないよなあ〜…」

「え？なんですか？ 効率よく向こうから来てくれる便利なものですか？」

初めて聞いた知識に反応して、森のことに関してはそれなりに興味の尽きないルチルが深いところまで突っ込んで聞いてきた。

「ああ、まあ効率はいいよな、向こうから一斉にこつちに襲い掛かって来てくれるんだから…、まあこの森に棲む動物くらいなら抵抗なんかされないだろうしね。」

「それはいいじゃないですか、今までなんで使わなかったんです？」

後ろから首に縋り付き、抱きつくような体勢になったディーネが甘えるように声を掛けてくる。

「いや〜、だって、間違つてバーストやオーガ、ゴブリンや、ジャンピンググリーチなんて仕留めてもさ…みんな…：…そんなの食べたい？」

3人ともそろつて首を大きく振っていた、その場面をきつと想像してしまったのだろう。口に手を当ててしまっている。

「まあ、どうしても襲い掛かってきたら、とりあえず仕留めて…食べなければいいしね。」

「それはそうとみんな…狩りに行くなら、もう少し装備、何とかしようよ、そういうええばあれから装備一式とか新調してなかったよね。」

そう言つてあげると、3人が一斉に顔を見合わせ話し合いを始めた。

「みんなはどう？ 新しい装備は確かに欲しいでしょうが…ヴェールさんが買つてくれた服はもちろんいいし好きですけど、これで冒険には出られないですしね…」

「私はもつと動きやすいのがいいな、魔法が掛かっている武器でも防具でも…贅沢言わないからどっちか一つだけでもそういうの欲しい！」

「まったく、セピアは遠慮というものを知らないのかしら…私は効果が上がるといふものでもあれば…それ以上は特に…」

最初に3人に問いかけたのがルチル、2番目はもちろんセピア、最期のは、さすがに神官であるディーネだ。

みんなもちろん遠慮しているのだろうが、そのままだと、自分が買ってあげた私服しか持たせてあげてない：冒険用の装備はこれと言ってまだ買ってあげてないのだ。

なぜならユグドラシル基準で言えば、明らかに「紙？」っていう程度の防御性能だからだ：もちろん、それがこの世界で一番硬いと言われるアダマンタイトであったとしても…。

そんなことを考えながら、いくつかの武器と防具を頭に思い浮かべる：でもそんなに強いものはない：強かったアイテムや武器、防具などはギルドを脱退して、ユグドラシルを卒業するとき、ギルメンに分けたり、フリマや、シヨップに売りに出したからだ：残っているのは売れなかった○○LV木材とか：○○LV金属、○○LV石材などの材料系、そして、レアリティがショボすぎて、売りに出しても買い手がつかなかったもの、そしてギルメンとの思い出の詰まった、売りに売れないアイテムくらいのものであったのだ。

「ん〜：それじゃ〜とりあえず、もうしばらくしたら遺跡探索のこともあるんだし、装備は整えといた方がいいだろう。とりあえず出していくから好きなモノ選んでよ、そんなにイイの無いと思うけど…」

そう言ってテーブルに片っ端から武器、防具を出して、並べていく。(ん〜：ここうして探してみると、武器の種類は剣とかそっち系多いよなあ〜、あんまりメイスとかの打撃系は突き詰めたりしてなかったからなあ〜：でも、この子たち剣とか苦手そうだし：違うのを出すようにしましょう！)

そう思っていると、なにやら3人がそれぞれのアイテムを物色し始めて、興味深そうに談義を始めている。

「弓はいくつかあるね〜、どんなのがいいかなあ〜？ メイスは少ない感じ〜」

レンジャー兼、魔法詠唱者のセピアがつまらなそうに見ている：彼女は弓を選ぶのだろうか：それとも杖の方がかな？



「でも可愛い感じのも、ちょいちょいありますよ？　こんなのか？」  
そう嬉しそうにドルイドのルチルが、手元にあった：握る柄の部分  
がピンク、そして、その握っている棒の上の先端には鎖が2つ付けら  
れており、それは二方向へと垂れ下がっている。

見る限りは、色が可愛いだけのただのモーニングスターなのだが：  
ルチルがその武器を振りぬくと、武器の先端についていた2つの鉄球  
を中心に、そこから八方、いや：：装備してる者の方には飛ばない  
ので七方向へときらめく星々が、所々にスパイクの付いた鉄球を発生  
源にして外に放物線を描くようにして広がっていく。

よくよく見ると、握っていた棒の下の方には、可愛い金平糖のよう  
な、お星様：「☆」こんな形のが側面にくつつけられている：しかも  
十字の模様を真似るように：確かあれがデータクリスタルを埋めた  
場所だったか：とかろうじてそこは思い出せた。

運よく誰にもそのきらめいて噴水のように周囲に散らばってく星  
たちが当たらずに済んだのは何よりだったのだが：

自分もさすがに3年以上ぶりに出した過去のアイテムがどんな経  
路での入所だったかなとか：どんな効果だったかなとか、それどころ  
か、アイテム名なんだっけ？なんて感じで：：そこまで思い出せていな  
かった瞬間にその効果の発生である、ダメージだったか、それとも回  
復だったのかも、思い出せていない。

ベルリバーがヒヤヒヤとしている中、3人は「スゴイスゴイ！　可  
愛い可愛い」としきりに感動している。

「これは、どんなのです？　これも同じような事が起こったりするん  
ですか？」

何を思ったのか、おもむろに神官職であるディーネがモーニングス  
ターよりは長い柄が付いた棒の：つまりはフレイルと呼ばれる武器  
を握りしめ、ブン！　と振りぬいた。

しかし、これと言ってなにかが起きる風でもない  
「なあ〜なんだ、何も起きないのですね、少し残念です」

少し不服そうだ：

「あの：ディーネさん？　なにか起きた時、他の2人が攻撃の範囲に

入っちやうかもとか…思わなかったんですか？」

「え？ あの…ヴェールさんが私たちの身を危険にさらすような武器を出すとは思ってなかったのです。そこまで考えていませんでした…気を付けます…」

(急にシュ〜ン…ってなってしまった…言い過ぎだったかな?)

「イヤ、そういうんじゃないかってね？ 今度の遺跡調査に出る前哨戦みたいな感じで、森の動物たちをボクが呼び寄せるから…、それを3人に狩ってもらおうかと思ってたんだよ…だから、一応、ヘタな使い方をするれば自分も傷つける可能性がある武器だったんだけど…説明を先にしていなかったね。そこは悪かったよ。ごめんね？」

そう頭を下げ、3人に謝ると真っ先にセピアが口を開いてこう言った

「そんなに嬉しかったって事ですよ？ 今まで装備なんて物は言うに及ばずですし、身を護るための武器どころか、普通に着るための服すらも買い与えてもらってなかったんですから…主であるヴェールさんにこのような武器まで用意してもらえて、はしゃいじやったって事でしょうね。」

まあ、いつもなら自分が最初にそういう行動をするキャラの位置付けだったんですけどね、出遅れちゃいました…と小つちやい声で呟いていた。

「うん、そう言ってもらえるとボクも嬉しいんだけどね、でも何かあつてキミたちが傷ついたらボクも悲しいから、アブレイザル・マジックアイテム〈道具 具 鑑 定〉を使うね？」

そう言つて落ち込んでいるディーネの肩に手を置いて、微笑んであげる…けどこの異形種の姿で「笑顔」ってわかつてくれるだろうか…心配していると、なんとなく雰囲気で分かってくれたのか、少し顔を上げてくれた。

「そうですね、不用意に触ってしまった私たちにも落ち度はありません。だから…ではお手数ですが、お願いしていいですか？」

「ああ、お安い御用さー！」

(この娘たちの身の安全が図れるなら、このくらいの手間は労力とは

思わないよなあ〜)

そう言いながら、1つ1つの武器、防具、アイテムなどに  
アップレイザル・マジックアイテム  
〈道具 具 鑑 定〉をかけ、「ああ、そうだ、たしかこんなアイテムだったな…」とか、「そうだ、この防具、あの人が作ったか…まったくもう…」などと懐かしく思いながらも、当時のギルドの空気を思い出していた。

そして、一通り、鑑定が終わり、みんなにも説明が終わると、みんな思い思いの意見を出しながら、武器や防具を取っていく。

もちろん、弓なども忘れずに選んでいるが、矢の方は、この世界に  
クリエイト・アイテム  
来た時にたしか千本くらい〈道具作成〉で作ったものがある、矢じりはないが、弓の方にデータクリスタルがハマってるから、問題なく機能するだろう。

結局、なんだかんだとキヤイキヤイとはしやぎながら武器、防具を選んで、落ち着いたのだが…まずはディーネの装備だ。

彼女は神官なので、剣などの武器は扱えない為、殴打武器にしたよ  
うだが、防具はヨロイを装備できるので、金属鎧にしたようだ…だが問題はその金属鎧だ…さつき鑑定した時に見えたけど…やってくれ  
たよな、ペロロンさん…あの鎧、なんで自分はもらっちゃったんだろ  
う…

一番目立っているのがその鎧の外観だ…彼が作ったのだから、らしい  
いと言えららしいのだが…女性が着る金属鎧というイメージで一時  
期それが一般的だったらしい、歴史あるものだ…ってたしかペロロン  
さんは言っていたけど…まあ、ユグドラシル製だし、あんな外観でも  
全身に防御効果はあるのだから、こつちの世界に来て、仕様の変更つ  
て偉大だと思う。

その外観は、一口に言えば、魅力を前面に出すために作られたんだ  
ろうな、って感じだ。

その名も『レイディアント・アーマー』

アーマー自体がまるで煌めいてるような輝きを発し、装着者の表情  
すら輝いてる様に魅力が底上げされている、肩当ては白い金属で作ら  
れ、そこもまた輝き、鎖骨部分は露出している。

ひじの部分まで装甲板があり、脚部防具も同様だ。それよりもペロンさんの思い入れがうかがえるのは、彼が当時熱く語っていた「絶対領域」なる場所だ。

自分は未だにそれがどうして「絶対」な「領域」なのかが全然わからないのだが：キッチンと、しかし目立ちすぎないように仕込まれている。

腰部部分にはLV45金属から細い金属糸を作り出し、そこから編まれた生地から作られているスカートがあり、外見は可愛くヒラヒラなのだが、その作りから風程度ではめくれることはない。

腰部の防具もちゃんと作られているので、めくれた所でどうということはないのだが、念のためつけてやつだろう…

脚部防具の下に履かれているニーハイソックス？と書かれていたが、そう呼ばれている部分も手袋部分もその金属糸で編まれているため、ちゃんと防御力はある。

ウエスト部分がなぜか、半透明なスリガラスっぽい素材にされて無駄に露出感がある…

鎧自体は鮮やかな空色にされていて、爽やかなのだが、露出している部分とのギャップがなんかすごいなという感想だった…しかも妙に：煌めきも手伝っているのだろうが、スタイルが一段階くらいよく見える気がする…それもきつと鎧の効果なのだろう…。

「重くはないかい？ その鎧…けっこうがっちり着込んでいるように見えるけど…？」

「え？あ…はい、ちよつと恥ずかしいっていうのはありますが、見た目の感じ以上に軽く感じられます。」

「それは良かった、ところで、その武器も両手持ちで問題ないのかい？」

「あ、はい、先ほどは振った瞬間に何も起きなかったので残念に思いましたが、起動するための言葉が必要だとは…」

そう言って持ち上げたのは先程、彼女が振りぬいてもなんの効果も発しなかったフレイル…その名も安直な「ホーリーフレイル」だ。

フレイルを支える棒の部分の石突きにあたる場所にデータクリス

タルがはめ込まれ、どことなく上等感がある。

先端のフレイルの鉄棒部分は六角形の形で成型された鉄の棒で、全体にスパイクが生えている、これはLV55金属、この程度ならアイズさんの上位物理無効化で防がれる程度だから、まあ安心だ。

その武器の特徴は、ヘシユートへのパワーワードを発生させることにより、棍の先端とスパイク付き鉄棒の間に、魔法的な鎖が発生する。

そしてその「鉄のスパイク棒」が敵目がけて射出され殴打ダメージを与えるというものだ。・・・が、しかし射程は2mであまりお得感はない。

射出したスパイク鉄棒（長さ約30cm程度、太さ直径だいたい10cmくらい）「属性・神聖、殴打」は、ダメージ発生直後に元の場所に戻るのを、掴まれて、引きちぎられる可能性は低いだろう。

「まあ、今回の遺跡調査で、最深部まで行く必要はないから、大体中層部でアイズさんたち、あそこを守護する者達で出迎えてくれるだろう」

「あの～：本当に、そこまでしてあそこを調査する必要あるんですか？　もうあそこがヴェールさんの元々の居場所だったってことは判明してるんですよね？」

そう声を掛けてきたのはルチルだ、ある意味頭脳担当とも言えるドルイドの彼女からすれば、なぜそこまでして調査がしたいのか謎なんだろう：そりやそうだろうな、例えて言えばかつて自分たちが居場所にしていた秘密基地を守っていた人が「いつでも帰ってきてください」と言ってくれている場所にわざわざ潜入して調査する意味がどこにあるのか？ということだろう。

「まあ：色々よね：本音を言うと、調査することが本題じゃないんだよ。」

などと会話をしながら彼女が選んだ装備をもう一度見てみる。

（彼女の方がなんか落ち着いている装備だよなあ～：武器もそれを選んだか～）

ドルイドたる彼女が装備している防具はこれも単純なネーミング「ドラゴンハードレザー」だ。

その名の通り、レザーアーマーの一種として造られたその鎧も、ユグドラシルでドロップするドラゴン種のドロップ品。それを材料として作られた物。

ドラゴンスケイル、ドラゴン肉、ドラゴンスキン、ドラゴンフアング：ドラゴンフアングより質は一段落ちるが、それを素材にして新しいモンスターを生み出せたドラゴントウースなど：数えきれない中の材料の一つ：ドラゴンスキン。通常はスクロールにしてしまうのが一般的のだが、ムリを言っただけで自分が依頼して、作ってもらった物だ。

材料にされたのはグリーンドラゴンの皮膚部分、その為に、毒、酸に対する完全耐性がある。

つまりその皮膚を加工し、レザー（革）として作り直した革鎧。

その革鎧のブレスト部分には竜鱗を使用して、そこだけ防御力を上げている。

本家のドラゴンスケイルアーマーのような防御値はないものの、革鎧の中では上位アイテムに位置する一品。

他の革鎧より、あらゆる属性で防御数値が上なのが売りで、それなりに高い評価ではあるものの、やはりドラゴンスケイルの方が性能は格段に上だし、その上、耐性が完全でない（毒、酸に対してしか完全耐性がない）点でデメリット、更にすでに加工済のため、課金アイテムを使用しないとデータクリスタルを新たに埋められず、そこまでして買おうとする人がおらず、あまり興味を示されなかった、しかもドラゴン自体がレッサー種で若かったため、そこまでのレア感がなく：だからスクロールじゃなくてもいいや、的に皮を使わせてもらうことが出来たというのもあったのだろうけど…。

そして、何より装備していてドルイド感を出しているのが持っている武器。

「ヤドリギの杖」  
スタッフ オブ ミステイルティン

神話に詳しい誰かさんが言い出して、作ることになった杖、なんでもどこかの神話で神様の命を奪ったのがヤドリギであるという伝承があったのだとか：それ以上は覚えていない。

長く太い見事な直線の枝（杖部分）の先にヤドリギが密集し、球体を形成してるヤドリギの中に六芒星が入っていて、その六芒星の中にデータクリスタルが埋め込まれている。

石突部分は刺々しく突き出していて、まずそこで刺したら確かに痛そうだ。

その杖を装備して、魔法の発動をすればするほど、魔力の残滓を養分として「ヤドリギ」が吸い上げ、次第に光り出すらしい。

その輝きが淡い光から天使のような眩しい輝きへと変化し、六芒星を包んだ時、その真価が発揮される。

なんでも所有者がドルイド系の職業を獲得している場合、その系統の数によって威力の違うブースト効果が発生するようだ。

異世界ではドルイドが無くても使用可能になっているみたいなのが判明した。

でもその場合、「魔攻、物攻、物防」に1段階ブーストが入るのみで効果は累積しないみたいだ。

ユグドラシルでは「神」的扱いのワールドにも特効はあったが、ここの世界ではそれが失われ、神聖系の属性種の全てにあらゆる耐性を突破する威力を発揮する、それは相手が完全耐性でも（対象が神聖なら）防げない。

裏を返せば、そもそもドルイド系の職業特化でなければあまり旨みは無く、神聖の属性が敵に居なければ、ブースト効果に辿り着いてもあまり意味がなく、買取り手が無かった。

フルブースト時に「トゥルダーク真なる闇」発動可能だというのがなんとなく良さげだが、発動させるとノンブースト状態になり以降繰り返しなのが残念かも。

「それじゃ〜本題って、何が目的なんです?」

魔法詠唱者で、同時にレンジャーでもあるセピアが装備に身を包み、会話をしに歩み出てきた。

セピアの防具が一番悩んだ…と言うのも、レンジャーとしての動きにペナルティを受けず、かと言って魔法詠唱者技能や魔法を使えるよマジックキャスターうな…動きを制限しないものでなければならなかったんだから、出す

物も限定される、こっちは、ユグドラシル時代の余り物ばかりなんだから：見つかったのが奇跡みたいなものだ。

彼女が身にまとうのは、「風迅の外套」

風属性の攻撃、効果などに耐性がある一品だ。

風に加護により高所からの落下でも軟着陸が可能（空が飛べるわけではない）で、軽荷重状態に限り、移動速度、「疾走」に風の後押しで移動距離→。

跳躍でも同様に距離→ 通常の遠距離射撃程度なら風を纏い、巻き上げたりして防御ができる。（これは自動的に防御するらしい）

魔法的な炎以外の炎なら、自分に届く前に中間地点を真空の壁にし、炎を遮断できるようだが熱は大丈夫だろうか…。

自分の周囲の空気をドーム状に滞留させることで、外部に音漏れを防ぐこともできる。（音だけ隠密状態）

たしか、ユグドラシルではここまでの能力はなかったはず…こっちに來て性能が一番上がったのはこれかもしれない…。

そして、その下に着ているのが一番悩んだ一品、「エルフエルフン・ガーマメントの防護服」だ。

エルフ種のみにも効果があるもので、かなりの防御力がある、その上、ステータスもアップして、エルフの長所をいかに発揮できる。

これははつきり言って、エルフ種が一番有利に過ごせてたあのサーバー世界でも、後衛じゃなくても大丈夫なんじゃないか？ 調べてくらの性能がある…これはそもそもやまいこさんの妹さんがナザリックに來てくれた時に、作ろうと思っただよな。

あけみちゃんって言ってたかな？

ナザリックにまた來たいって言ってたから、來た時に渡そうと思っただよな。頑張って作ったんだけど、結局、エルフで異形種じゃないから、ギルメン入りは厳しいけど、遊びに來るのは歓迎するよ、って話になったよな。

そしたら、何が原因かわからなかったけど、足が遠のいて行って、2度目のナザリック訪問は無くなったんだよな…。



こんなの作ってたなんて恥ずかしいから誰にも言えなかつたんだけど…、さすがにこんなのをそこまで面識もなく親しくもない相手からいきなり送ってこられたら迷惑だろうって思って、渡せなかつたんだよな。

武器は、これまた、誰かさんの趣味で作られたが、お姉さんに却下されて、どのナザリックNPCにも装備が許されず、捨てさせられそうになって、ボクに捨てるふりして、「持ってた？」って言われたんだっけか…そのいわゆるつきの武器、外観が全てを物語っている。

その名も「コメットロッド」

形状はもちろんロッドで、先端の…頭に相当する部分に可愛らしい☆の飾りが付き、握り部分であるロッドはピンク一色。

それもただのピンクではない、バニラアイスにピンク色を混ぜたら、こんな色になるだろうってイメージが一番近いだろう、例えて言うならクリーミーピンクと言ったところか…そんな色の名前があるかは知らないけども…かなりファンシーな色であることは間違いない。

☆の飾りが頭に相当するならちょうど首の辺りにチョーカーみたいに金の装飾が付き、更にロッドの一番下、石突きとも言われる部分にも金の輪っかが付けられ、首に相当する部分の左右には天使の翼のような真っ白な羽根があてがわれている。

このロッドの能力は、魔力消費に応じて、威力の違う彗星が敵単体に直撃するというもの、しかも第4位階相当以上の威力を出すときはマナ消費が半分になるっていう特典付き。

まあ、こっちの異世界では第4位階の魔力消費なんてコストパフォーマンス悪すぎることになるんだろうけどね…マナが半分であつても、きつとそうそう数は打てないだろう。

第4位階の彗星は日に一度しか発動できないし、ナザリックではきつとゴミ扱いになるだろうな…この程度、しかも非実体には効果ないしね。

辛うじて第7位階分までが出せる彗星の限界みただから、それも日に一度だけ…まあ、スケリトルドラゴンの抵抗を突破するくらい

の役には立つか：第3位階が英雄と言われる世界で、第7位階レベルの魔力消費など選んだら、きつと気絶するんだろうな：例え半分の消費であつても…。

でもボクはこれ、使うのやだなあ…。

実際、発動する際、ツインやマキシマイズのような強化は適用されないし：、どこが美味しいの？って感じた、ペロロンさんもノリで作ったんだろうな、能力のことまでは重く考えてなかったんだろう。

キーワードは「コメットインパクト」：か：ホント、あの時が懐かしいよ、あんなバカやつてたみんなが居た：あの時が：モモンガさんの気持ち、今までわかつてあげられてなかったな：その分まで：NPC達の気持ちも、しっかり聞いて、受け止めてやらないとな…。

そのためにも、この子達には、ナザリツクで間違つてもPOPモンスターにやられちゃうなんてことは防がないと：一番避けたいのは、まとめて恐怖公の所にすっ飛ばされるって事態だな：こっちの事情は知ってるんだし、さすがのモモンガさんもそこまではしないと聞くけど…。

自分がされる側になると思うと、あそこは：なんていうか：、女性キャラを使つてたプレイヤーさん達、ごめんなさい、って気分になるな…。

色々と考えることはあるけど、とりあえず、長いこと待たせないで、セピアの質問に答えてあげよう…

「ん〜：今はまだそれは言えないかな：それよりボクらの仲間が作ったギルド拠点、ぜひ案内をしたいんだ、3人にもどれだけすごいが見てもらいたいしね。」

「できれば、今聞きたい気持ちはありますけど：まあ、それよりは今のところ獲物を仕留めて腹を満たす方が先でしょうね：それで、ヴェールさんはどんな形でおびき寄せるんです？」

「そうだなあ、さっきの方法は一度、辞めるとして、別の手段だな：とりあえず、スキルで【誘引の色香】でも使うか…」

「そつちは、さつき使おうとした方法とは効果が違うのですか？」

興味深げに頭脳担当が新しい単語を聞いて知識欲求が刺激されたのだろう、ルチルが聞いてきた。

「まあ、さつき言った方は、抵抗に失敗すれば、ボクを目標にして、周囲一帯の、効果範囲内の獣（モンスター含む）たち全部が対象になって、ボクに襲いかかって来るっていうものでね、今言ったのは、抵抗に失敗すればその生き物の好きな匂い：オスならメスの匂いや、発情してる時の匂いに、主食としている食べ物、肉食動物なら、小動物とかの匂い、それか、血塗れで今にも息絶えそうな獲物の香りを出す、とかかな：それにおびき寄せられちゃうって感じ？」

「ところで、みんなはどんな動物を食べたいのかな？」

「無難なところで鳥の肉でしようか……」

「やっぱり鳥肉でしょお〜？」

「鳥肉でしょうね：外れがないと言う点で言えば……」

そんな感じで意見が合い、近接武器では不利でしようね、魔法も鳥相手にはもつたいたいからと、さつきテーブルに出した武器の中から弓をそれぞれが一本ずつ持ち、外へと出て行った。

ディーネが「ショット（散弾の意味）ボウ」「ブリザード」、ルチルがショットボウ「ソル」、そして、セピアが一番物騒な「ショットボウ」「ボルカノ」を選んで外に出て「狩りの始まりね♪」と嬉しそうにどれだけ多く撃ち落とせるかをみんなで競っていた。

ボクはもちろん、スキル【誘引の色香】を使って、鳥たちの好みそうな香りを体内で調合し周囲に散布して、みんなの競争を援助していた。

☆☆☆

という顛末があり、現在の状況となっているのである。

そんなこんなしていると、何故か、この家に訪問客でも来たのか、ド

アをノックする音が聞こえる。

珍しいこともあるもんだ…というより初めてじゃないか？

なんてのんびりとした感想を抱きつつも…「はいどちらさまですか？」とヴェールは外の訪問客にそう答える。

そう…客が来たのなら、ベルリバーでもヴェールでもなく、エルヤ―で居なければならぬからだ。

そう言っただけで反応を待っている…どこか聞き心地のいい印象を受ける女性の声で、その訪問客はこう伝えてきた。

「こちらは、マス…いえ、ベ…でもなく、ヴェールさまの別荘でよろしいでしょうか？」

## 第22話 その名はフレイラ

(……ヴェールさま?)

何故その名前を…それになんで今、扉の外に居る存在は自分のことを「さま」と言ったのだろうか…いきなりわからない事だらけの事態が発生したぞ…

ひよっとして、何かの情報系魔法で自分の存在を感知した何者かか？

第3位階程度で限界を迎えてしまうような存在が多いこの世界で、そこまで高性能の探知魔法を使える者がいるとは思わなかったが…そういえば、あそこの村で夜通し会話していた時にモモンガさんから聞かせてもらった話で「一度、攻性防壁が発動したことがある」と言っていたっけ。

多くはないというだけで、ゼロではないということか？

油断しすぎるのも問題ってよくモモンガさんもPVPに関しての知識で教えてくれたことがあったな…それはそうと、なんて答える？ どう答えるのが正解だ？

「その名前には聞き覚えがありますが…今ここに居るのは私たちだけです。その人になんの御用でしょう？ 良ければ私が代わりに要件を承りますが？」

(これは一応ウソじゃない…相手がどう受け取ろうと、なんとでも解釈できるように伝えようとした結果だ、一言も「自分はその人じゃない」とは言っていないし、「ここに居るのは私たちだけ」って言うのも間違っていない、「自分が要件を聞く」というのも自分〓ヴェールと言う線を結ばせないようにするためだ。)

「何をおっしゃいますか…扉ごしでも伝わるこの強大で温かみのある気配。私がこの気配を間違えたりするはずがございません！ 私を試しておいでですか？ マスター?」

(しまった！ 探知対策の装備をして居なかったか…しくじった！

…って、え？ 今、この子…なんて?)

「失礼、今、聞き捨てならない言葉を聞いた気がするのですがね？ 私

のことをなんて言いましたか？」

(気が付いたら、なんか怖い顔したエルフの3人娘が扉の前まで来て、じつと耳を澄ませている…そんなことしなくてもキミら、耳がいいんだから聞こえてるでしよ〜に…)

「マ・スター…と言いました。この身の全てがあなたの為の物…どのようなご寵愛も、ご命令も…御身の為とあらば…全身全霊を持って当たらせていただきます。」

(う…なんかこの言い方、最近モモンガさんから聞いた、『部下の忠誠が高すぎて、振る舞い方に気が抜けない』って言ってたのに似てる気がするけど…、これのことか?)

「私を「その人」と結びつける要素はなんですか？ 声も話し方も違うのではありませんか？」

「その程度のこと…なんの障害にもなりません、お言葉の一つ一つに、マスターの温もり、温かみを感じます…そう、まるであの時…私をその腕で包み込んで涙してくれた『あの時』のように…」

(おい！なんだそれ？ この世界に来て、そんなこと誰にもしたことないぞ！ 一つの話で誰のことだ！)

そう思っていると、自分が次の言葉を言うより早く…(会話しながらも、話の合間で幻影魔法を使って、彼女たちに纏わせていたので、見た目はまんま、耳を斬り落とされたドレイ状態のだが)エルフの3人娘が扉をすごい勢いで開けて、外に居る存在に対して、問い詰めモードに入ってしまったている。

「ちよつと！突然来て、あなた何のつもり？、ヴェールさんの何なの？」

「そうです！ 私たちにだって、そんなことしてくれたことはないと言うのに…」

「それより、マスターはやめていただけませんか？ そんな言い方を誰かに聞かれたら、困るのはあなたが「マスター」と言ってはばからない当人なのですよ？」

3人が3人とも、剣呑な雰囲気、ケンカ腰な空気を漂わせている。しかも、セピア…キミ、なにげに私がヴェールだったこと、バラして

くれちやつて…と、少し顔を手の平で覆いかけたが、「イヤ…まだ直接バラされたわけじゃない、まだやり直しは効くか…苦しい状況だが…」と、頭を上げ、訪問者の顔を見る…と同時に衝撃が走った。

その顔は忘れられるわけではない…ユグドラシルで自分が唯一、作った、そして起動させることも出来ず…置き去りにせざるを得なかった…そしてそのまま去ることになって二度と会えないかと思っていた存在…自分のただ一人のNPCだ…。

「お前…フレイ…？　もしかしてフレイラか？」

「あああ…マスター…お姿こそ当時と変わりましたが…、私の名前を憶えていてくれたことだけで私は嬉しゅうございます。マスター！！」

そう言つて肉食獣のような金色の瞳に涙をいっぱい貯め、エルヤアの姿のままのベルリバーに抱きついて、縋りつく。

「マスター…この日をどれだけ待ち望んだことか…」

（ああ…そうか、さつき言つてたことつて、ボクがユグドラシルでギルメンみんなの多数決で起動は認められない、つて空気になった後、自分の部屋に戻ってからそんな行動したっけか？　ほとんど忘れてたけど…）

「ちよつと、セピア、その扉閉めて？　いい加減誰かに見られたらマズイでしょこれ…」

「分かつてるけど…それ、どうするの？　チームには入れられないでしょ？…今更…」

（むくれながらも少し乱暴に扉を閉めるセピア、その行動からして心中穏やかではないようだ。）

「まあ、その話は後よ、それより先に…事情の方を聴かせてもらいましようよ…ね？　ヴェールさん？もちろん…言えない…何てこと、ないですよねえ？」

氷のように張り付いたような笑顔で固まった様に感じさせる表情を向けてくれるディーネにちよつと寒気が走った。

「あああ…この子、前に言つたでしょ？　ボクの娘…、唯一造つた一人娘。」

「「え？」」

(そりや、そうなるよな、自分も今そんな心境だよ、こっちだって事情が分からないんだから、こっちが説明してほしいわ)

「ちよつといいかい？ フレイ…こっちも会えて嬉しいのは嬉しいんだけど…なんでお前がここに？ っていうか動けるようになったのか？」

落ちつかせるように頭をなでながら、ゆっくりと体を離して、なるべく優しく語り掛けてあげた。

「はい、至高の御身であらせられる、モ…ああいえ、アインズさまによつて、命を吹き込んでいただきました。」

「そうか…そういうことか…よくわかった、ありがとう」

(あの時、ただのイジリかと思つてたから気にしてなかったけど、本当に動かしてくれたんだな、モモンガさん…ありがとう。)

「それはそうと、見慣れない手袋してるな…それとも拳を保護するためのグローブか？」

(なんか女の子がするにはゴツい気がするな…左右の手袋共に甲の部分に鉄板があつて、その鉄板には、見事にカットされた鮮血のような色をした真つ赤な宝石がはめこまれている。)

それぞれの指の拳頭と呼ばれる部分にはコーン(円錐)状に突起がびっしりと4つ、規則的に並んでいる…、恐らく真つ赤な宝石はデータクリスタルだろう。

相手を打ち抜く拳のインパクト部分に円錐が親指以外の4指の付け根に一つずつ合計で4つ付けられている為、見た目の殺傷力がえげつないような見た目に感じてしまう…こっちの世界の一般人ならかなりダメージ行くんじゃないか？)

そう思いながら、しみじみとゴツい手袋を見てみると、主からされた質問に嬉々としてフレイラが答え始める。

「はい、これはアインズさまから賜ったもので、これで殴ると相手の体内で〈フレア・ブラスト熱波の炸裂〉が発動するそう…自動か任意かは聞いておりませんが…そういうものだそうです。」

(すごい嬉しそうに話してくれてるな、まあモモンガさんって、昔つか



ら身内にはダダ甘だったもんなあ〜)

「基本が自動で、手加減が必要な時は「カット」して体内を焼き尽くしたりしないようにする必要があるか…それとも基本が任意で、手加減不要の相手にだけ心の中で「ブラスト!」って言うのかのどちらかが必要になるんだろうが…」

「どうなのでしょうか…実験する機会がなく、マスターの助けになるようにと、アインズさまからご命令を受けてすぐに飛び出してきてしまったもので…」

「そうなのか…ならそのグローブみたいなので殴るときは、その前に「プラスチック効果オフ、発動機能、カット」って言うってから殴る必要があるな…一応頭に入れておいた方がいいぞ?」

そうは言った物の、街に行つてなにかしらの活動をするよりも、墳墓への調査依頼の期日が来ちやいそうだな…と思ったベルリバーは、先ほどの発言内容を少しだけ変えて言い直す。

「まあ、その辺は今度、ナザリツクに行つた時に好きなだけ、実験できるだろうさ」

(ついそう言つて頭をなでてしまう…これはもう、しかたないな…こういうのを心のどこかで待ち望んでいたんだから。)

「それはそうと、お腹は減つてないか?今、ちょうど食事をしていたところだな…」

(打ち解けるにはまずは食事をしながらっていうのは王道だよな、やっぱり。)

ベルリバーとしては他のメンバーとも打ち解けてもらいたいからこそその提案であり、4人とも仲良くしてもらいたかったという心配りで言つてみたのだが、思わぬ返答を受ける。

「と…、とんでもございません!御身の盾となり、剣となるため、そこそが喜びであり、そうであるように創られた私のような存在と同じテールで…しかも御方のお食事に手を付けるなどと言う非礼、なによりそのような行い、不敬にございます。」

(うおう…出た、これか!モモンガさんが苦労してるって言つてた、「納得させるための言い訳探しが大変なんですよ」って言うの…あの

時は実感なかったけど、目の前で展開されると…こう…何と言うか…、来るものがあるなあ…」

「そ…そう…か？ ムリにと言うつもりはないけど…」

彼が言い淀み、これからどうしようかと悩んでいると、一瞬、その食材を見た瞬間にフレイラが立ち上がりその料理が盛られた皿を持ち上げた。

「ど…どうした？急に…？」

(なんか気になることでもあったか？)

「大変申し訳ございません、差し出がましいことは重々承知の上、それは理解しております、ですが…それを伏して、伏してお伺いいたします…これはそちらのエルフさん方のお食事でしょうか？」

「え？違うよお… さつきまでヴェールさんが…「ヴェールさんが！」食べていたお食事だよお？」

(やたらそこを強調するなく…でもそこをちゃんと後でボクからも言っておこう、そうでないと、このまま「マスター呼び」が定着したら大変だしな…)

「どうかしましたか？それが何か…気になることでも？」

(ルチルの方も、腕組みしながら返答してる…そりゃ、そうだよな、さつきまで3人で頑張ってる作ってくれたんだものな…)

それを聞いたフレイラがヒザから崩れ落ち、皿を取り落としそうな勢いで両手を床にしまった。

「…これが…マスターのお食事…なんと…なんとおいたわしや…私がおう少し早く…御身の為に働けていれば、このようなお食事をお出しすることは…」

それを聞いたセピアが心外とばかりに口を開く。

「しっつれいね？ それでも火は通してあるんだよお??」

「まあ…拗いて、ぶつ切りにして、火を通しただけですが、ヴェールさんがそれでもイイって言ってくれたからなんですし？」

(少しだけ、申し訳なさそうな雰囲気になりながらのディーネのフォローにも力がないな…)

「ああ…そう…でしたか…それは…、ご苦労されていたのですね、マス

ター…、私が今、新しくお作り致します。　少々こちらでお待ちください。」

そう言うのとフレイラは、まだ冷蔵庫に入れられていた鳥を引きずり出し、和服っぽい衣装の脚の合わせを華麗にはためかせると、腿に巻き付けられている黒い革の帯、そこにあるポケットに備えていた包丁を「シユ！」と引き抜き、頭を落とし、足を落とし、次々と、捌いていく…。

「そうだった、そういえばそういう設定で作ってやったんだっけ…」

「え？　どうかしたんですか？　ヴェールさん…」

恐る恐るだが、セピアが一番最初にそれに反応した、先ほどの言われようが相当堪えていたようだ。

「イヤ、女の子だし、せめて料理くらいは出来るようにしてやろうとコックの技能を1レベルだけど、取得させていたんだよ…」

「ああ、それで、料理のことでのような感想だったんですね…」

ルチルも一応は最低限の調理をしたとは言え、専門的な料理などできたなどとは内心、思っ居なかつたのだろう…少し、声に張りがなくなっている。

「うん…しかも料理ができて他が出来なきゃかわいいそうだと思うって、コック1LVを取らせる時に必要な技能を付けさせちゃったんだよね…」

「え？　そんなことできるものなんですか？」

デイーネが驚いたように顔をこちらに向けた。

「まあ…うん、コックは最低限の料理ができるようになって言うのもあるけど、食べると能力値の向上…じゃないか、ステータスが上がる？　の方が近いか？…まあ、一時的にだけどね？　そういう料理を作れる職業だから」

「え？　ヴェールさんの居た世界のコックってそんなすごいんですか？」

みんながそろって大きく目を見開いてボクを見上げている。

「まあ…それが仕事内容だったからね…それに対応させるように「職能技能で「料理人」…生存技能で「アウトドア」、鑑定で「食材見極め」、

そこで知識に「食材捌き、解体」、それに職業の得意技能で（技能熟練：料理）って特化して割り振っちゃったんだよねえ」

（まあ、1LVだけどさ…）

「それじゃ…、お料理に関して妥協ができない風になるのも仕方なさそうですねえ」

「ごめんね？ウチの娘が先走っちゃって…せつかく作ってくれたのに…みんなの作ってくれたのも美味しかったよ？」

「まあ…、悪気はなかったようですが、ちよつとショックでしたね…頑張って作ったものだったので…」

「でも、ヴェールさんが美味しいって言うてくれたのならそれだけで報われます。」

3人が3人とも、うなだれたようになってる所に、皿を4つ運んできたフレイラが、テーブルに調理済みのそれをザツと並べ始めていた。

「さて、出来ました、こちらの3皿がみなさんの分、こちらがマスターの分です…どうぞ、ご賞味くださいませ？」

「あれ？…フレイ…キミの分は？」

「先程、味見をする時に少しだけつまませていただいたので、ワタクシのことはお構いなく…、それだけで充分ですから、お心遣いありがとうございます。」

「じゃ、ありがたくいただきますか？ちなみに普通の料理だよね？バフ料理とか勢いに任せて作ってないよね？」

「はい、ごく普通の料理となっております、バフの効果も付けた方がよろしかったでしょうか？ マスター…」

（イヤ、普通で良いから！ そんな顔しないでっば！）

「いや、最初は普通に料理の味を楽しみたいからさ、こっちの方が嬉しかったからそれで正解だよ。バフ料理の方はまた今度にね？」

「はい、マスター！ その時はこの命にかけて、ご満足いただける物を作ってごらんに入れます！」

「だから、そんなことに命まで賭けなくっていいから！ 普通に作っ

てよ?」

ただ普通に釘を刺したただけだったのだが、何を思ったか、ご丁寧に跪いて「ハイ!承りました!」とやたら気合を入れた返事が返ってきた…。

(これが周囲全員のNPC達の「普通」の反応だったとしたら、そりゃく気を抜けないし、期待に応えなきゃ…って思いたくなるのも仕方ないかもなあ…)

「さて、それじゃ、せっかくだしみんなも一緒にいただくこうか?」

「は…い…」

「そうですね、いただきますでしょうか」

「私たちより美味しそうなのがシャクですね…」

それぞれに、考えるところはあるのだろうが、とりあえず、空腹には耐えられないし、美味しそうなものが目の前にあれば手を出さずにはいられないのは仕方ないと3人は思ったようだ。

「う…美味しい…」

「これは…上品な味わいですね」

「これが、同じ食材で作ったものだなんて…」

「それはよろしゅうございました、お気に召していただけただけで何より嬉しゅうございます」

「「え?」」

3人が3人とも驚いている…3人の中では、きっとフレイラはもつと勝ち誇って「どんなもんよ!」って感じの表情を浮かべる者だと思われるわけていたらしい…そんなカルマ値低く作るわけないじゃん!

せめてそこはあのオオカミ女メイドさんとかぶらないようにと言う親心…というか、小さい抵抗だったのだが…

「なにか?」

フレイラは彼女らの反応が心底、何を示しているかわからなかったのだろう…小首をかしげ、キョトンとした表情をしている。

毒気を抜かれたのか警戒していたような3人は思いついたように話題の方向性を変えて来た。

「あああ…その、ヴェールさん、もういいですから、そろそろ幻の

方：解除してもらえませんか？」

「ああ、そうそう、もう天武のふりはしなくていいと思いますよ？」

「そのことも一通り説明すべきでは？ このままだと外に出ても「マスター」って言われますよ？」

「ああ、そうだね、それは説明すべきだろうね、ボクからも説明は必要だろうと思って居たところだったからちようどいい。」

☆☆☆

「…っていう流れで、今、ここにこうしているわけなんだ：わかったかい？」

「はい、万事：御方の置かれている状況は把握いたしました。」

（事情を聞いている間、ずっと同じ姿勢で跪いている：もう少し楽な姿勢で聞けないのかな？ NPC達、ホントにみんなこうなのか？）

「そう言う事だから、これから：この姿で居る時はエルヤーさんと呼ぶようにね？」

「私たちは元々、エルヤーさんだった人にドレイとして飼われていたので、そのままエルヤー様って呼ぶことにしていますけれど…」

「すでに過去の人、って扱いなんだね、エルヤーさん “だった人” って…」

（ちよつとかわいいそうだなとか思っちゃったよ：不憫だな：エルヤー…）

「だってそうでしょお？ ヴェールエルヤーさんこそが私たちのご主人様なんですからあゝ」

「まあ…、ナザリックに入って、ある程度ことが進むまでは、『天武』で居なきやいけないわけだから、それまではエルヤーっていう役割を演じてる訳だしね。」

「演じている…でございいますか？」

「まあ、そういうことだね、フレイには演技とかそこらへんは設定してないけど…、今の所、新しいチーム名を名乗るまではフレイを表に出すわけに行かないのは理解しているね？」

別に威圧した訳ではないのだが、必要以上にかしこまって姿勢を倒し、顔を伏せ：「はい、その旨、認識はしておりますが：」と何か言い出しにくそうにしている。

「どうした？ 聞きたいことがあるなら、なんでも聞いていいんだぞ？ 聞かなかったことで、致命的なこととされても困るし：」

「はい、それでは恐縮ではありますが：、御身のお力になれない間、私は何をしていければよいのでしょうか？」

「そうだな：フレイ、キミには「ヤシチ」になってもらいたい！」

「ヤシチ？ …でございますか？初めて聞く名称ですが、それはどのような役割なのでしょう？」

「うん、これは私の仲間たちの中でも特に時代劇とかに造詣の深かった『武人建御雷』さんや、『式式炎雷』さんに聞いた限りではな？かなり難しい役割だ：だからこそ、その役はフレイ：キミにしかできないと思っ居る。」

「そ：そのような：まさか至高の41人、御方々のお名前をお聞かせ願える榮譽に預かれるとは：光栄です。」

「う？：うん：まあ、そうだな：（至高の41人って：モモンガさんからも聞いたけど、本当にそう呼んでるんだ：）まあ、それでだな：？ヤシチというのはどうやら忍びの者、つまりは炎雷さんのような影からいざという時に助けに来てくれる人のことのようなようだ。」

「わ：ワタクシのような末席の者にそのような大役が務まるのでしょうか？」

（こつちが可哀そうに思っちやうくらい目を見開いて小刻みに体を震わせている：例えが悪すぎたか：少しハードルを下げてあげよう：、まあ：さすがに炎雷さん並に思われてたら、絶対ムリって感じちやうだろうからなあ：）

「まあ、例えを炎雷さんで出したのが悪かったな、そこまでを期待しているわけじゃない、フレイは本来の種族上の特技として、【登攀】【軽業】【水泳】【隠密】なんかもあったはずだな？」

「はい、それは間違いなく：ですが、ソリユシャン様や、CZ様のような専門性があるワケではありません：」

「それでもいいんだよ、ボクが望んでいるのは、その「ヤシチ」という称号を与えられている者が担っていた役割なんだから。」

「え?! …その役割とはどのような…?」

「そうだね、たしか、彼らが言っていたのは、裏方に徹しての情報収集、その場、その場のパーティたちの置かれている立場を考慮し、有利な情報を集め、ピンチになった時にはさりげなく救いの手を差し伸べ、戦力が足りない時は後方支援、もしくは背後から襲われないように不利な位置での専守防衛的な戦闘、庇うべき存在が居る時には、護りながらの戦い、それらがこなせる心強い者…それがヤシチ…ということだと聞いたな。」

「光栄でございませす、まだ生み出されて間もないこの身にそのような大役を仰せつかるとは…、そのご期待に沿えるよう努力いたします。」  
「まあ、そのヤシチと言われる本家が人知れずに助言などのアドバイス、または危険を知らせるような手段をとる際にはかなり特殊な、投擲用のアクセサリを足元にわかるように投げつけ、床に刺して知らせていたようだが…」

「アクセサリ…ですか…それはどのような?」

「フレイ、お前はそこまで真似する必要はないぞ? 精霊魔法の<sup>ウインド・ヴォイス</sup>〈風のささやき〉や、信仰系の<sup>センチメンツ</sup>〈発信思念〉なんかもあつたはずだろう? それを使えばいい。」

「は、ではそのように…」

(そろそろ、姿勢を柔らかく、楽に聞いてもいいんだぞ? って言った方がいいよな…)

「あの…ヴェールさん? ちょっと聞きたいことがある…」

「ん? どうかした? ルチル? なにかわからないことでも?」

「私、一応精霊魔法の低位なヤツやら、名前と効果くらいは知ってるはずなんです…その<sup>ウインド・ヴォイス</sup>〈風のささやき〉っていう魔法、初めて聞きましたあ…」

「ああ、あまり有名じゃないからね、シルフの助けを借りて、対象が視認可能で、500mの距離内に居る場合に有効な魔法さ、術者の方じゃなく、かけられた方の周囲の音を術者が聞くことが出来て、更に



相互の会話も可能だけど…その魔法がかけられた相手の周囲、半径5m内しか有効じゃないっていうデメリットがある。」

「もう1つの方はどんな効果なんですか?」

信仰系と聞いて、こちらにも興味をそそられたのだろう、ディーネがもう一つの魔法、〈発信思念〉<sup>センディング</sup>について知りたくなかったようだ。

「ああ、こっちはもともと特定の信仰する神さまを相手に、短いお告げ?って言ったらいいのか?神託を受けられるようになる魔法、って感じだったかな? (まあ、神って言うより運営にちよつとした質問やプレイヤー間のいざこざを対処してほしい時に使うのが主な役割だったし、広まらなかつたんだろうな…。使用直後の再詠唱冷却時間が微妙にネックだったみたいだし) こっちは相手と自分がお互いに見えてなくても短い文章、ボクらの世界で通じていた「ニホンゴ」って言語で75文字程度の文章を1度だけ送受信できるって魔法さ。

でもこっちは落ち着いて祈りができて、冷静な心境で神託を受けられる環境じゃないと送信する側の負担が大きいつて感じだから使い勝手が難しいのが難点かな」

(さすがに敵と戦いながら、運営に対しての文章を打つなんて離れ技じみてるから、そうなつたんだらうけど…。単純に言えば、準備から発動までに10分かかるっていうテキスト上での設定があつたはず…。その設定がこっちの世界でも生きてるなら、きっと間違つていないはずだ…。)

「どっちも利点があつて、不利な面もあるんですねえ」

しみじみとレンジャーレベルの方が上のセピアがうんうんと納得している。

「セピアだつて魔力系の魔法詠唱者じゃなかつたか?」

「私の方は、攻撃魔法なんて、コカトリスちゃんの時に使わせてもらつた…。ドレイになる前から覚えていた〈炎の矢〉<sup>フレイムアロー</sup>しか持つてないですよ?あとは、能力向上系しかあのくそつたれに覚えさせてもらえませんでしたし」

「それじゃ、そのコメントロッドを持つて、初めての〈炎の矢〉<sup>フレイムアロー</sup>以外の魔法が使えるようになったつてことだね」

「そうなんですよお〜♪ 矢の次が「墮ちる彗星」だなんて、まるで夢みたいですよ〜」

（杖を抱きしめて、頬ずりしている、よほど、他の攻撃魔法を使いたかったようだ…）

『墮ちる彗星』？ ああ、発動するパワーワードが「コメットストライク」だったからな、そういう翻訳でもあながち間違いでもないか…」（そういえば、みんなに出してあげた武器の中でセピアが使えるようにと思って見せた装備って、直接攻撃魔法をついていうのはそのコメットロッドだけだったな…、最初に効果が発動した『トウインクルスター』も、周囲に散らばる星々は追加効果で攻撃魔法じゃなかったし、魔法詠唱に制限がかからないように造られたスリングスタッフの方も自動で魔力弾石が装填される仕様だったんだけど、そっちも覚えていない魔法は使えなかったしな…）

「まあ、喜んでくれるのはいいんだけど、魔力切れには気を付けてね？ 第3位階魔法までは魔力消費はそのまんまなんだからさ…」

「分かっていますよお〜…気を付けて使いますって♪」

「そうそう、フレイ…キミにはその作戦行動中に限り、ヤシチを名乗ることを許可する。しかし必要に迫られない限りは極力、その姿を見られるのも、正体を知られるのも避けるように、それが守られるならどのように行動しても構わない、必要な情報、そして、助けが必要な時はこっちからもへ伝言」<sup>メッセージ</sup>でしらせるので、間違ってもスレイン法国なんかにはちよっかいをかけるようなことは…って、そうだ、フレイ？ キミはスレイン法国っていう国は知っているか？」

言いながら、大事なことを知らせていなかったかも、と心配になり、問いかけると彼女は懐から一枚の地図を取り出し、ヴェールに見せた。

「は…こちらにアインズ様より直々に賜った周辺地域の地図が御座います、ここに、その名前がありますので、場所は分かりますが…その国がなにか？」

「いや、その国は人間至上主義を掲げていてな、人間以外は…かなり対

応が冷たい国だそうだ……だから……その、あまり遠くに行ったりはするなよ?」

「はい、なんとという慈悲深いお言葉、私のような身を心配して下さりありがとうございます、決して御身を残してわが身の命を無駄に散らすようなことはしないと誓います!」

(せっかく娘が動き出して意思疎通が取れるようになったのに、死なれちゃ敵わないしな……少しでも長くこの3人娘同様、長生きしてほしい……エルフには寿命はないんだっただか? たしか何かでそんなこと聞いたことがあるけど……誰にだったか?、まあいつか。)

「ちなみに『有意義な状況下』であつても命を散らすような真似はしてくれるなよ?」

「は?……それは……その、どういった意味でございましょうか?」

(うくん、やっぱり忠誠心の方が上過ぎて思い至らない感じか……わかりやすいように説明してあげないと……)

「つまりはだな? フレイ……もし私が、お前のことを『盾』として役立つてほしいと思つて作つたのなら、守護者統括のような防御特化の仕様で作つたはずだ……そこは分かるか?」

「は……はい、おっしゃることはよくわかります。」

「さつきもフレイ自身が言つていた内容で「剣となり、盾となるために……」つて話をしていたが、もし剣として使いたいなら建御雷さんの作つたNPCのようなクラス構成にしたと思わないか?」

「それは……確かに納得のできるお話です。……それならば、私が存在するための意味にはどのような意図が含まれているのでしょうか?」

「それはだな……フレイの主人たる私の戦い方は遠距離の敵がいるなら魔法を使いながら相手の体力を削り……そして自分の有利な間合いに入れば戦士系の戦いに持ち込むやり方が得意だ……が、私のクラス構成では回復という手段がない、その上うまく隠密や、敵の情報などを集めるなどの行為、さらには自然の動物の召喚以外の召喚魔法は使えない……まあ、「魔獣の召喚」というのだけは使えるんだが……、そういつた不得意な分野があるんだ、それを補うためにお前という存在が必要だ

「思ったのだよ。」

「そういう…:ことでしたか…:だから私はクレリックを持ち、シヤーマニッククラスを備え、かつ…:非実体に対しての対策に特化したクラス…:この3つが高レベルなわけなのですネ?」

「そういうことだ…:とはいえ、私はあまりにお前に多くを求めすぎて、逆に中途半端になってしまったようだ…:第8位階まで使える『ガンマ』ほどじゃなく、肉迫した戦闘については『アルファ』に及ばない、隠密や尾行については『イプシロン』や『デルタ』にも敵わず、治癒魔法の位階についても『ベータ』に一步も二歩も譲ってしまう…:、まあ…:召喚する者の使い方、適切な運用、効率的な立ち回りが出来れば『ゼータ』には何とか並べるかもしれないが…:私のせいで…:すまないな、フレイ…:」

「それは…:御身のせいではありません! 私の力が及ばないのはひとえに、私の精進が足りないせいでございます、マス…:あ、いや…:あの…:ヴェー…:ル…:さ…:ん…:」

(ずいぶんその呼び方に抵抗があるみたいだな)

「それでは私のことを試しにエルヤーさんって呼んでももらえるかな?」

(こっちの呼び方なら直接「さん」付けしてる感じは印象として薄いから、なんとかかなりそうなんだがな…:)

「あ、はい、畏まりました、エルヤーさん。」

「うん、そっちなら問題なく、どもったりもしないで言えるようだね、しばらくはそっちで呼ぶように…:あっちで呼んだりこっちで呼んだりだと逆に不便だろう。」

そう告げると、跪いた姿勢のまま、ヒザに顔でも埋めそうなくらい深々と頭を下げ…:

「大変、申し訳ございません、ワタクシが至らないばかりに、御身にそのような気を使わせてしまい…:」

「ああ、かまわないさ…:こっちで本格的に活動するようになったら顔の雰囲気も変えて、名乗る名前も変えようかと思う、そうしたら、フレイ…:キミにもヤシチの役職名は返上してもらって、同じ仲間として

振る舞ってもらいたいからね、それまでに心の準備は整えておくんだよ？」

「わ…ワタクシが…でございますか？ 御身の…なかま？ そんな…そのような…身に余る光栄ではありませんが…、ワタクシは精々、エルヤーさま…ん、の…手足の代わりであればそれで充分でございます。」

「ここら、今「エルヤーさま」って言おうとしたろ？ まだ堅苦しさが取れないようだな…」

「ヴェールさん…さつきから聞いてるけど、会話が堂々巡りになってるみたいよ？」

ルチルから冷静なツツコミが横から入れられてしまった。

「ホラ、フレイ…こんな風にお前も、私のことを『ヴェールさん』って呼んでもいいんだからな？ 気軽にな？ 気軽にな？」

（モモンガさんがナザリツクでNPCの意識改革に数年かけてやつと一般メイドの硬さを和らげることに実感が持ててきたって言ったけど、意味がわかった…こりや大変だわ。）

「まあ、とりあえず、それは今後の課題にして、フレイにはいくつか、与える物があるのを思いついたよ、ちよつと待っててくれ」

「は…？ いえ、そのような…御身自らのお品をワタクシなどがいただくわけには…」

（相当、腰が引けてるな、そんな大したものじゃないんだが…とりあえず勘違いだと思わせることで気を軽くさせよう）

「フレイは勘違いしているようだが、これはヤシチとしての仕事に必要なものだ…それにあげるわけじゃないぞ？ 貸すだけだ、ちゃんと返してもらうつもりだから、無くしたりせずに大切に身に着けておくんだぞ？」

「まあ、ひとまずは背中を向けて見せてみる？ 最初のを預けるからな？」

そう言うと、フレイは跪きながら背中を見せるという器用なことを流れるような動作でしてみせる。

「うん、それじゃ、ホラ腕を上げてみる…そうだ、そして、反対の腕を伸ばして…そうそう」

「よし、装着完了だ、まず単独の行動をするにはそれがなけりや始まん。インフイニティ・ハヴァサック〈無限の背負い袋〉だ。」

「え？ これは、御身にも必要なものでは？…ああああ…」

言われた直後、外そうと試みたフレイラだが、背中にセットされた瞬間、霞のように背中に背負った物が消えてしまい、「装着済」という扱いになったようだ…こうなったら、外したくても外し方がわからない。

「遠慮するな。私にはまだ本体のインフイニティ・ハヴァサック〈無限の背負い袋〉の中にも9つのインフイニティ・ハヴァサック〈無限の背負い袋〉が入っている。総量で5トンは入る計算になる、それ1つ無くてもどうとでもなるからな、一つくらい持っていけ？」

「このような貴重な物まで…その信頼に応えられるよう…」

「ホラホラ、そんな口上はもういいから…ホレホレ。」

ベルリバーは嬉しそうに、次々と、フレイラに必要なものを渡していく。

その中にはインフイニティ・ハヴァサック〈無限の背負い袋〉の中に入ったままの、というよりベルリバー本人が気を利かせて各種ポーション等を入れてあったりもするのだが…

インフイニティ・ハヴァサック〈無限の背負い袋〉の次は、『着替え』の1アクションで1ターンを費やさなくても羽織っている上着を外すだけで元の装備に瞬時に着替えることが出来る『早着替え』の効果が入ったテータクリスタルを装填しているローブ。

そして、その次に、「やはりヤシチと言えこれだろう」とつぶやきながら、黒装束をフレイラに装備させる。ユグドラシル製なので裸になつて着替える、などしなくても背中当てて『装備』と意識を向けると、するつと装備され、さらにサイズもマジックアイテムの仕様でピッタリと合う。

「それはシノビの者としての必須アイテム。アーミー・オブ・シエイド〈影の軍団〉だ！」

これもユグドラシル時代、言わずともわかる『式式炎雷』に、一緒に作ってみませんか？とベルリバーが持ちかけ、それならこういうのがいい、と炎雷がアイデアを提示して、ノリと冗談半分で作ったもの。

その効果は、『アーミー軍団』とは名ばかり、明らかに名前負けの効果なのだ

が、本人たちは満足していたらしく、一発ネタで気が済んで死蔵されていた物。

3つの効果の内、どれかを選んで発動ができる、しかし、どちらも1日に3度、装備者の周囲に展開させるか、装備している者が選んだ対象の周囲に展開させるか、の効果を選ぶことが出来る。

シャドーデーモンなら一度に2体

シャドーデーモンの下位種、シェイドスピリットであれば一度に4体。

シャドーデーモンの上位種、シャドーデビルであれば1体のみ。

つまり、一日単位で考えれば、「シャドーデーモンなら2体を呼びだす」という効果を3回、つまり出し惜しみしなければ、日に6体出す事が出来、これの良い点は冷却時間が存在しない点だ。

(実際には存在はするが、時間にして、呼び出す存在のレベル分：つまりシャドーデーモンなら2体呼びだし、22秒待てば、次の2体という感じで、戦闘中でなければ気にするほどでもない時間なのだ。)

シェイドスピリットの方は、そのままであればシャドーデーモンの半分のLVしかなく、ユグドラシル勢であれば一刀のもとに片づけられるザコモンスターなのだが、最大の技、〈影の模倣〉が使われた場合、シェイドスピリットと敵対しているパーティの内一名の能力を8割再現する形で、ライフや魔力(MP)も8割だが、外見の姿は模倣する相手そのまんまとなるので本来より格段に厄介な敵になってしまふ。

式式炎雷はこのシェイドスピリットを、この装備の効果で4体呼び出し、11秒したら、次の4体、さらに11秒が経ったら3度目の：つまり12体と自分を入れて13体分身！という冗談を披露し、自分の姿を真似させ、スクリーンショットで『影分身』とかつていうネタをギルメンに見せる為だけにそのアイテムを作ったのだ。

自前のスキルで同じことは出来るのだが、そっちは戦闘中でしか効果を表さない。

(さすがに12体出すのは無理だが…)

だから、普通の移動アクションでそれを展開させ、ネタにした、と

いうだけの話だった。

こつちの世界に来てどんな仕様になったのかアブレイザル・マジックアイテム 具 鑑 定 で見  
ていないので、詳しくは知らないが、隠密の役には立つだろうと判断  
している。

しかも、式式炎雷自身は、自前でその能力を持っていたので気にし  
なかったらしいが、実は装備している者はシェイドスピリットや、  
シャドーデーモン達同様、影に潜って相手の動向を探ることが出来  
る。

こつちの世界では、陰に潜った場合まずバレる心配のない方法と  
なったのはベルリバー達にとつては嬉しい誤算である。

(まあ、フレイラのシャーマニッククラスって、精霊の力を借りて、例  
えば光と風の精霊の力を借りて、透明化の効果と同じ状態にしてみた  
りもできたはずだったよな…たしか色々な組み合わせをして、効果を  
発動させるはずだったから応用は広いはず。)

しかしこれでは、どこからどう見ても怪しい忍者娘の完成にしか見  
えない。

エルフの3人は、どう反応したらいいのかわからない風であつた  
が、ベルリバー自身も満足しているようで…それでいて、フレイラも  
同様、自らの主人に「貸してもらっているだけ」とはいえ、こんなに  
何個もアイテムを都合してもらえて歓喜していたので、特に口をはさ  
むようなことはしなかった。

そんな複雑な視線には気づいていない当の2人は、独特の空気を纏  
いながら、なおも会話を続けている。

「ああ、そうだ、フレイラ、もしアインズさんに連絡するようなことが  
起きた場合は、ちゃんと本名の方で伝えるんだぞ？ いきなりヤシチ  
とか名乗ったら、アインズさん戸惑うからな？」

「は！ 委細、承知いたしました！」

「それでは、フレイラ…改めヤシチよ…、まずは帝国の内情調査だ！  
最優先事項はワーカーたちの間で依頼が集中している「某墳墓、遺跡  
調査の内容」に関してだ。」

と、ここまで言うと、後ろで温かく見守っていたエルフの1人、



デイーネが話しかけて来た。

「あれ？ ヴェールさん、あそのことは粗方、調べ終わってるんじゃないですか？」

「そう言われたベルリバーは、エルフの3人に分かるように指示した内容の真意を伝える。」

「ホラ、ボクらって、この森の中で居を構えてから、帝国に戻ってないでしょ？ ワーカー連中がいつ、あの遺跡に調査に行くってことになったのか、聞いてないじゃない？」

「そこでようやくそこに気が付いたのか、ルチルがやっとわかったとばかりに口を開く。」

「ああ、ようするに他のワーカーと日程がずれたりしないように、集合する日時を調べるわけですね？」

「エルヤー姿のまま、ニヤツと笑顔を浮かべ、「そういうこと！」と短く言うと、かしこまって跪いているフレイラに再び顔を向け、こう告げる。」

「それでは、フレイラ…改めヤシチよ！ お前の最初の指令は分かっただな？ それではヤシチとしての使命を果たすのだ！」

…と、ノリノリのベルリバーからの初めての直々の命令を受けたフレイラは、嬉々として外に飛び出そうとし…ふ…と立ち止まると、エルフの3人に視線を向けると、こう言い残して外に飛び出して行ってしまった。

「みなさん、ワタクシのマスターを孤独にしないでいてくれてありがとうございます。いつもそばに居てあげられない間、マスターのこと、よろしくお願いしますね？」

そこには「同じ主を持つ者として」仲良くしましょう…そういう意味が込められているように3人には思えてならず…

その言葉を受けて

「そんなに悪い子じゃ、ないみたいですね？ エルヤー様？」…とデイーネ

「でしょ？ ボクの娘だからね」…と偽エルヤー

「早くも親バカですか？」…とセピア

そんな日常の会話が4人の間で交わされるのであったが…しかしその少し後になると色々と衝撃的なことが起きることになるろうとは、まだ誰も知る由もなかった。

## 第23話 もう1人の「ヤシチ」

「そう言えばヴェールさん、あの娘、ちゃんとキッチン周りの片づけはしてくれたみたいですが、私たちの皿は洗わずに行っちゃいましたね、私たちが洗いますから貸してくださいな」

そう言つてディーネが皿をまとめると、洗い物をしているセピアとルチルに運んでいる。

「ありがとう、いつも悪いね、そんなことまでやつてもらっちゃつてさ」

(元居た世界じゃこんな風景、味わえなかったしなく、やっぱりこっちの世界は極楽だな、アバター有能力もほぼそのまんまみたいだし…)

「いいですよ、私たちは好きでヴェールさんのドレイを買つて出ているんですから、いつでもお好きな時に、お好きなように私共をお使い下さいね♪」

「ちよつと？そのアピール、ずるくない？ルチルう〜」

横で洗い物に集中していたセピアから抗議の声が上がる

「あら、ちゃんと『私たち』って言ったじゃない？それに『私共を』も付け加えたわよ？」

しれつと涼しそうな顔でその声を受け流すルチル

「そうかもしれないけどさ〜…なんかすつきりしない〜…」

どこか納得がいかないのか、あまりいい反応ではないセピアにディーネがフオローを入れる。

「まあまあ、それなら今度ヴェールさんのお背中でも私たちが3人でお流しして差し上げれば問題ないんじゃない？」

その言葉に気持ちが高揚したのか、明るい声で返答が返ってくる。

「ああ！ それナイスアイデア〜♪ そうしよう〜つと。」

「おいおい、ボクの意味は聞いてくれないのかい？ まあ、この〈新緑の隠れ家〉のお風呂は、それなりに広いし狭苦しくはないだらうけどさ…」

「あらあ〜？ おイヤですか〜？ ヴェールさん？ うら若き乙女3

人がお背中をお流しするんですよお〜?」

ニヤニヤ顔でセピアがいたずらつ子っぽい笑みを見せてくる。

「うら若き乙女って、キミらエルフだろ?今いくつだい?」

悪びれもせず、ついそんな受け答えをってしまったベルリバーにセピアの声が即座に迎え撃つ。

「あら、ヴェールさんが女性に年齢を尋ねるなんて、デリカシーって言葉知ってますか?それに乙女の定義は年齢では左右されませんよお〜だ。」

こちらに向けて、おどけたように舌を出している。

「おお〜「デリカシー」なんて、セピアは難しい言葉知ってるんだなく、キミがそんな言葉知ってるなんてビックリだあ」

こちらもおどけたようにオーバークションでそれに応えてみせる。

「ええ〜? それって私の事、残念な子だと思ってたみたいじゃないですか?」

それでもレンジャー持ちで、勘は鋭いのに〜:だの、森でのことも少しは知ってるんですけど〜などとブチブチ言っている。

そしてその空気を読んだかのようにディーネからその場の空気が変わるような言葉が放たれる。

「ところでヴェールさん? なにやら、さつきまで割と量があつた香料がほとんど無くなりかけてるんですが?」

その内容にはさすがの彼も驚いた、アルシエの護衛という名目で大付き添ってただけの自分に対して「お礼の気持ち」だとして、ジエツト氏からわりと多めにくれたはずだったのに:もうそれがなくなりそうだというのか:と、ストックとして取っておいた分がないか戸棚を調べると、なんとかビンの半分くらいはありそうだった。

「あつたあ〜:よかつたあ〜:まさか4人分の鳥肉を調理するためにほぼ一瓶、塩コショウをすり込むのに使ってしまったとは:」

と呟くと、ふと思ひ至り、ゴミ入れの中を見てみると、どうやら失敗した分なのだろう:翼と脚、頭のない鳥だった残骸が数体分、捨てられている。

どうやら、設定した『料理人』としての矜持が中途半端を許さなかったようだ：調理途中のまま、可哀そうな鳥たちがそこに打ち捨てられていた。

（恐らくすり込む塩コショウの分量でも間違えたんだろう：今度ゆつくり話ができる機会があつたら、「報連相」の概念をしつかり教えておこう。）

こっちではユグドラシルの時のように調理するための場所があり、そこで食材をそろえ、コックのクラス持ちのキャラが「調理」と選べば自動的に料理が出来上がっていたのとはわけが違う。

火加減の調整も必要なら、香辛料や、油、味付けするための物資は必要不可欠なのだ…。

今回は香辛料だけで済んだが、今度からは他にも必要なものは出てくるに違いない。

そう：味噌、醤油、ソース：ソースも確か、普通の中濃ソースだけじゃなくハンバーグ用のデミグラスとかいうものや、ウスターソースにオイスターなど：挙げればキリがない：それを料理人が全部作れるわけじゃないし：さすがにそれらを1LVのフレイに丸投げつて言うのはまずいだらう：とは言え：ボクではどう作るのかわからないしなあ…

まあ、普通のソースを作るのにも先立つ物は主な材料と：主要なスパイス：つまり香辛料だ。

砂糖のような甘いものは楓の木??だったっけか？そういう物から甘味料がずっと昔は採れていたんだと、死獣天さんが教えてくれたこともあつたな…

（どっちにしろ彼：ジエツト氏の協力は必要だろう：そんなことくらいで協力を頼むのはすごく心苦しいが：急ぎじゃないけど：ついでうのは伝えた上で、お願いしてみるかな？）

「ちよっとみんな？今から〈伝言〉<sup>メッセージ</sup>の魔法を使って、ジエツト氏に連絡をするから：ちよっと移動するね？」

（移動するって言ってもリビングの隅の方だから、そんなに遠くにはいかないけど、どっちにしろこの距離じゃ、エルフの耳なら、丸聞こ

えだろうなく…まあ隠す内容じゃないし、いいんだけどね。」

別に隠すわけじゃないけど、過去に電話という文化があった以前の  
世界での習慣からか、少し話をする際は距離を空けてしまう、なんと  
なくて意味があるわけじゃないけど、そういうものだと分かってくれ  
ればそれでいい。

そして<sup>メッセージ</sup>〈伝言〉を発動し、見えない糸がこめかみに当てた指あたり  
から宙に伸び、目的の人物の方へと向かっているのがわかる。

しばらくの間待っているとプツ…とした感じを覚え、相手が通話状  
態になったのがわかる。

「ああ…ジエツトくんかい？ 先日はカルネ村まで大変だったね、ア  
ルシエちゃんの護衛として付き添った者だけ…」

と、ちゃんとお互いだけが知りえる情報で、身分の証明を含めて、相  
手に自分と言う存在からの魔法だと認めてもらう。

（最初のワーカーパーティーであるフォーサイトの面々から<sup>メッセージ</sup>〈伝言〉  
の魔法はあまり信用のない魔法だって聞いてあったから、そのための  
対処ができる…やっぱり、こういう時モモンガさんの教えは役立つな  
…「どのような時も役立つのは情報収集だ！」ってね。）

「ああ…あの時の…良かった…連絡が取れて…大事なことを聞くのを  
忘れてて、どうしようかと思って居たんです。」

『え？ 大事なこと？ なんてしたっけ？』

「ええ…と、自分の名前は自己紹介で伝えておいたのですが、そちら  
の名前を私が聞きそびれていたの…連絡を取りたくても取れな  
かったんです。」

『ああ…そうでしたね、すみません、こちらも…名前を名乗ってもらっ  
たのに自己紹介を忘れてしまっていたなんて…』

「まあ、そんな話はいいいんです、お名前はまた改めてでいいんですけ  
ど、お力をお貸し願いたいことが出来まして…ちよつと大変なことにな  
ってるんですよ。」

『え？ なんかあったんですか？』

「実は、母がさらわれてしまいました…アルシエさんの実家の借金の  
カタに、妹さん達を連れ去ろうとした者達に関連している輩のようで

す。」

『ええええ？ そりや大変じゃないですか！ それじゃ…今からそちらにお邪魔しに行けばいいんですね？』

「ああ…それもそうなんですけど…すみません、ちよつとこちらにも事情がありまして…すみませんが、女装など…できませんか？」

『……………は……………？』

☆☆☆

『なるほど、一瞬、何を言われたのか分かりませんでしたでしたが、やっと理解が追いつきました。』

「すみません、こんなお願いを…でも、妹さんを救った際の貴方の実力は向こうも警戒しているのでしょう、わざわざ「呼ばないようになんていう弱みを見せてくれて助かってます。」

『でも、急がなければなりませんね、早めに行動をしないと貴方のお母さんもどんなことになるかわかりません、さっそく女性に変身して、そちらに向かいましょう。』

「ありがとうございます、実は助けに向かってくれているのはアルシエさんのワーカーのメンバーさんも一緒なんです、なので、私たちは一足先に指定された場所まで行くようにします。」

『そうですか…でもそれだどこっちの方が指定場所についての知識も薄く、土地勘もない為に迷ったりしないか心配なんです…』

「ああ、それなら私のしているメガネ、その名も御方直々に命名していただいた「魔眼殺しのメガネ」という名前で〈ロケート・オブジェクト物体発見〉をしても  
らえれば…」

『は？ちよつと待って？…なんでそれ…つて、ああ、そうか…アインズさん情報かい？もしかして』

「はい、聞かせていただきました、我が主の仲間であり、主ほどではないが、この世界に於いては過剰なまでの魔力系魔法を使えると…なので我々が知りうる程度の位階魔法であれば問題なくご存知であろうと…」

『わかった、アインズさんが話してもいいと判断したのなら、それで問題ないんだろう…だが、言っておくよ？もし彼の…アインズさんの不利益になるようなことをしでかすようであれば…』

「分かっております、もしそうであれば、その時は遠慮なく…、主の下で支店長をさせていただくにあたり、その件については契約として結んでおりますので…」

『そうか…それならいいんだ…、ところで、キミの母親が…っということなら、アインズさんにも一報は入れた方がいいぞ？「報告、連絡、相談」つまり『報連相』はどんな軽い問題でも伝えておく必要性はあるだろうからね。』

「はい…わかりました、そうさせていただきます。」

『ちなみに話を合わせるために、合言葉を伝えておくね？ 恐らくキミらも聞いたことのない用語である方が信憑性は高いだろう…だから、合言葉は『ヤシチ』だ。』

「ヤシチ…が合言葉なんですネ、わかりました。」

『念のため外見の特徴も伝えておこう、黒づくめの服を着て、片腕にはガントレット風のバックラーを着けている感じだ…かなり特徴的だから一目見ればわかると思うよ。』

「承知しました、それではよろしくお願いしますね。」

『ああ、こつちもよろしくたのむよ…あちなみにその指定場所から一番近い場所ってどこら辺？』

幸いにも、ヴェールが「エルヤー」として、一度訪れたことのある「こがねいろ黄金色の菓子亭」より走ればすぐの裏通りに面した人のあまり通らなそうな、いかにもな場所のようであった。

☆☆☆

「聞いてましたよ？ヴェールさん…なにか大変な事態になってそうですね…行かれるんですしよ？」

エルフの3人はすでに装備の支度を整えている。



「まだ何にも言っていないけど…よくそこまで準備できるね」

彼女たちの勘の良さにはこういう時、ホントに恐れ入る気分だ

「ヴェールさんのお仲間の方の名前、そして母親という単語、そして、連絡は入れた方がいい…これだけで大体、大ごとだろうなというのは予測できます。」

ディーネがすでにあの空色の鮮やかな鎧装備を身に着け、フレイルも両手に持ち、他の2人も準備万端で「いつでも…」という気合は充分の様子だ。

「いや、今回向こうは他のワーカーチームが加勢に入っているようだ…ボクらだけならまだしも、近いうちに遺跡探索の依頼がある以上、少しでも現時点で他のチームに面が割れる危険は冒せない…今回はボクだけで行くよ…。」

言いたいことはよくわかる、そのことは理解はしているが、それでも自らの主1人で行かせるという状況は3人としても見逃せる訳はない…3人が「でも……」と口を開きそうになった時…

「だから…ボクと一緒に来てくれるかい？」

一瞬、息を飲んだ…「自分一人で行く」ということと「だから一緒に」という言葉の真意に3人がほぼ同時に気づき、その表情は明るい物へと変わる。

「ハイ！喜んで、どうぞ!!」

そう言うと3人のエルフは満面の笑顔で両手を左右いっぱい広げて受け入れる体制をとる。

「じゃ…いくよ…目もつぶらずに、背中越してもないのは初めてだね…怖くないかい？」

「ヴェールさんのお力になれるのなら、どんなことでも怖くありません。それに…これで何度目だと思ってるんですか？」

先程のブツブツしてた時の表情はどこへやら、吹っ切れたような笑顔で言うセピアに、追隨して頷くディーネとルチル。

「ありがとう…3人も…」

そう言うと、大きく口を開け…いつものように傷つけないように最大の注意を払い、彼女らを丸呑みにした…。

これで一心同体となった4名は、決意を新たにし…ヴェールはその外見的特徴を「ヤシチ」の姿へと変え、かつて、エルフの彼女らを助けた時同様、ハロウイン用のイベントアイテムとして、ログインの際、受け取ったへいたずらの声<sup>ボイス・オブ・トリック</sup>を首に装着し、フレイラの声にする。「この装備も久々ですね」

そう懐かしむ時間も早々に、その姿を黒づくめの…忍者用の衣装<sup>アーミー・オブ・シエイド</sup>の軍団<sup>アームド・ユニット</sup>の外装だけのハリボテの上に「早着替え」ができるだけのローブを羽織り、この世界に来て最初に作った、ガントレット調のバックラーを利き腕と逆の位置に装備する。

「まあこの世界じゃこんなもんだろ」と結論を出し…

お腹の中の3人へ「危なくなりそうだったら防御力上昇系とか、能力向上の方、頼んだよ？」とだけ伝え、お腹の中から彼女らの『任せて!』という声を受け取りながら…

<sup>グレート・テレポーター・シジョン</sup>へ上<sup>アップ</sup>位<sup>レベル</sup>転<sup>転</sup>移<sup>移動</sup>を唱え…夕闇迫る「かつてのエルヤーの定宿」の裏口付近をイメージして転移したのであった。

ナザリツクの数名も含めた騒ぎになるということには気づかず

…

## 第24話 ヤシチ…お仕置きへのサポート

そして再び、ここはナザリック地下大墳墓。

支配者に対しての報告が寄せられ、支配者は戸惑い、驚き、怒り…感情の抑制が働き、一周回って冷静にブチ切れていた。

「ほお…帝国は王国よりマシな国だと思つて居たのだが…そうか…うちの商会の傘下である末端組織の一部門に過ぎないのだが…それでも我ら、A・O・Gに遠回しにでも喧嘩を売るような愚か者が居るとはな…」

職務に励むための執務机の椅子に腰かけ、背もたれに体を預けながら、そばに控える女性に声を掛ける。

「どうすればよいと思う？アルベド…この件、お前であればどのように片づけるのか、聞くだけ聞かせてもらつていいか？」

鷹揚に振る舞う支配者に「怒り」の感情がくすぶっている語気を感じ、微かに身を固くしながらその問いに返事を返す。

「そのような下等生物ども…、あまり表に出ることを良しとしない至高なるアインズ様のご威光は到底理解が及ばないとは言え、わずかにでも不敬な行いをしでかし、不快な思いをさせ、我らナザリックに連なる組織に害を及ぼそうなど、とうてい許される事ではありません、その組織ごと、滅ぼすべきでしょう。」

（そうか…そうなるよな…、しかし、面倒なことになりはしないか？

イヤ…そんなことはないか…、すでに手中にあり、我らに忠誠を誓わせてるとは言え、かつての八本指の連中も、娼館ごと、奴隷部門含めて壊滅させるのに、それほど時間はかからなかったしな。）

そう考えていた時、「そういえば…」という、少し忘れかけていたことに気づく。

「そういえば、娼館で働かされていた女どもはどうなった？ ペスト

—ニヤに預けていたはずだが…あの時は確か、『心の傷が癒えるのに時間を要する』ということ様子見にしたのであったな？」

急に話の方向性が変わった問い掛けに一瞬の戸惑いも見せず、アルベドは優雅な礼をしながら返答をする。

「はい、アインズ様、仰せのようにニンゲンどもの中でも気にするまでもない、力も智慧もさして目を見張るもののないあのような存在に時間をかけ、治療する価値はあるのか疑問ですが：順調の様です。ペストーニヤの下であれば、そろそろ外に出ても問題はないかと：」

アインズはギィ：と執務用の椅子に背を預けながら中空を見上げ、アルベドに言い聞かせた。

「まあ、彼女たち自身は放っておけば、生まれた土地で普通に育ち、毎日の仕事に明け暮れ、寿命を迎え、死ぬ：それだけの人生だったはずが、あのようないい環境に放り込まれたのだ、彼女らは何も悪いことをしていたわけでもないのにな：」

そこまで言うのと、ゆっくりと椅子から立ち上がり、王者にふさわしい歩みでアルベドの前を歩きながら、独白を始める。

「我らのギルドは「理不尽な暴力からの救済、保護」を良しとして集まったメンバーたちだ：、それを引き継ぎ、ギルマス：いや、支配者として皆の上に立つ私からすれば、例え、人間であろうとも、力はなくとも：理不尽な暴力を受けている者に貴賤はない。等しく救われるチャンスは与えるべきだろう：少なくとも私はそう思っているのだが：アルベドはそれにたいして異論はあるか？」

アルベドの知る限り、このナザリックに属する者達はかつて、この墳墓に侵略をしに来たその多くが人間種であった者達に対する報復を是とする行いを推奨していたような認識であったのだが：

まさか根本は「理不尽な暴力からの救済」などという思想があったとは初耳であったアルベドは、内心で驚きながらも支配者に深々と頭を下げる姿勢をとった。

「とんでもございません、至高の存在であられるアインズ様のご決定は何よりも優先されるべきであり：私のような者の浅慮など考慮するにも値しません。：それに：そのような思想が至高の御方々にあったとは：、どうやら私の認識に間違いがあったようです、お許しください。」

予想もしない反応に内心、アインズは一度だけ鎮静化が起きているが、頭を下げている最中のアルベドにはそれが見えていなかった。

「いや、お前の考えに大きな間違いはないとも…たしかに我らは人に恐れられ、遠ざけられ、時にはその恐怖の矛先が自分に向かわぬようにと崇められることもある。だが、その延長で、もし我らに…そう、現地の者達からすれば価値があり、それがなければ明日は死んでしまう、それほどの物を『思いやり、博愛から来る施し』をされた時、例え、それが我らにとって、取るに足らぬゴミのような行いであろうと…その際はその者には我らからの恩情を与えることに異論はない…」

「あ…あのような下等生物程度のムシケラに恩情をお与えになると？」

「ああ…だがそれも私に友好的な反応をし、害を与える意図はなく、見返りを求めるつもりもないのに親切にしてくれた場合、それは「恩」と呼ぶ…私はな…恩には恩で返す、そして仇には仇で…な。…それが信条なのは以前にも誰かに言った覚えはあるが…受けた恩はちゃんとした時以上の、こちらの感謝の気持ちも含めて、相手に返す。」

そして、一拍の沈黙が広がった後、重々しく支配者は口を開く…どこまでも暗く、重圧を感じられるような言葉と共に。

「そして、もし我らに害を及ぼそうとする者などが居れば、その時は当然、受けた行いの報いを受けてもらう。それは私の怒り、そして報復、相手からの悪意の全てをも上乘せして、倍返しどころではない返礼をさせてもらう…それが過剰だと言われようが、我らに牙をむくことの愚かさを身をもって知ることになるだろうが…、そこにためらいなどは全くない…。」

その言葉を受け、アルベドは「そのお言葉、しかと胸に刻んでおきます。」と跪いて礼をとる。

その臣下としての礼に対して、背中を向けたアインズはそこからの行動方針を独り言のようにつぶやく。

「しかし、そうだな…そうになると人選はあまり多くなくても問題は無かろう…話を聞くに恐らく、大きなバックボーンはおるまい…そこは

小さな：例え大きく見積もっても中小規模の組織で、恐らく情報収集能力がお粗末なのだろう。そうであれば、そうだな…この場合、手を出されたのはイプシロン商会の従業員と、その母親だ…となれば、そこに出向くのは名目上は社長令嬢と言ってもいいソリュシャンだろうな…そして、お付きの執事と言う設定のセバス…そこら辺が妥当だろう。」

「その二人のみで行かせるということでしょうか？」

アルベドがアインズの決定の確認をとる、それを怠り、支配者の思い描く計画に破綻する要素などがあつてはならないという統括としての責任、そして使命感だ。

「いや、さすがにそれは軽率すぎるだろう…その程度の組織に「裏で糸を引く」存在が居るとは思えないが、念には念をだ…セバスとソリュシャンには数体のシャドーデーモンを連れて行くように伝えろ、万が一、なにかしらの強者の気配を察知したら、計画を即座に中止、シャドーデーモンを盾にして、撤退せよという命令を徹底させろ…。最初は弱い囷…今回の例で言えば、その哀れなゴロツキどもの事だが…そいつらで気を引き、我らが姿を現したところに本命が現れ、包囲するというのはユグドラシルでは一般的なやり方でもあったからな…」

「は…承知いたしました。アインズ様。」

頭を下げながら、上体を少し起こし気味の角度にすると、「しかし、アインズ様…」という歯切れの悪い発言がアルベドから発せられた、このように言い淀むアルベドも珍しいなと思いつい「どうかしたか？」とアインズは続きを促す。

「シャドーデーモンを数体程度では囷としては1〜2秒、もつかどうかではないでしょうか？」

その言葉に少しの戸惑いも見せず、支配者の空気が和らいだ、アルベドの「アインズさま好きスキ大好き観察眼」を持ってして感じられた程度だが、きつと不敵に笑ったのだろう。

支配者はアルベドの言葉にこう答える。

「もしも万が一、強者が居た場合は…そうだな…、そういう状況だからこそ、それが効果的なのだよ。」…と。

…そして、支配者はおもむろに〈メッセージ伝言〉を使い、とある相手に直接連絡を取るのであった。

☆☆☆

そこには闇のみがあった。

そして一体自分に何があったのかを冷静に思い至るにはしばしの時間を要した。

自分は朝食を終え、息子を送り出すついでに朝の買い物を済ませそうとしていたはずだ：

そこまでは覚えている、そしてお店のある商店街へと歩を進め…少し近道をしようと狭い横道に入ったはず…

そこからプツンと記憶がない…自分がどこかに寝かされているのは分かる、しかし身体はどこも痛くはない、ケガもしていないようだ…：周りが闇なのは、おそらく目を開けてもどうにもならないこと…そしてこめかみあたりにある違和感で何となく理解できた…きつと目隠しをされているのだろう…。

それにケガはないとは言え、体は自由に動かせない、後ろ手にされていることから、きつと縛られているのだろう…、どのくらい気を失っていたか、眠っていたのか、どちらなのかはわからないが、その姿勢でずっといたのだろう…：不自然に体が強張っている感じがする。

とりあえず、寝かされたままであったということは、今すぐに害する気はないだろうということ…。

多分、なにかに巻き込まれているということとは分かるが…：この状況下では助けを呼んでも恐らくは近くに見張りの1人は居るだろう、自分から「目覚めましたよ？」と宣伝するようなものだ…。

片足を少し動かさそうとして見る…、しかし動かない。そして気付いた、足の方も縛られている。

縄のように足にチクチクする感じはないため、恐らく細長い布か何かか…

試しにわずかに口から舌を伸ばしてみると、口から舌の先が

出たくらいに、舌が伸びるのを邪魔するものがある…きつと大声を出されないようにとそうされたのだろう…

ここまでされて、他にはなにもされていないような感じはする、服は着ているようだ…後ろ手にされた腕で感じる布地の感触でそれが分かる。

足を動かさそうとした時も同様だ、少し動かしただけでズボンが脱がされていないのはわかった。

とりあえず、ずっと不規則な呼吸をしていると、見張りに不審がられるかもしれないと思い、寝ている風を装うため、規則的に寝息を立てていることにした…。

どのみち、他にすることもないので、即座に危険がないのなら、自分の今、置かれている状況の把握ができるまで、このままでいる方が…、どこの誰だかわからない連中も無警戒に事情を「雑談」という形で聞かせてくれるかもしれない…。

下手に唸り声でも出して起きたことを気づかれでもしたら、貴重な情報を得る機会が失われるかもしれない。

とりあえず、唸るのはそれからでも遅くないでしょう。と結論付け、彼女はもうしばらく寝ている芝居をしていた。

しばらく待って、寝息を立てる真似をし…いい加減本当に眠気を覚え始めていた頃、ようやく扉を開けて、何人かが入ってくる気配を感じ、再び寝たふり作戦を続行していると…  
「それにしても起きませんね、この女…いつまで寝てるんでしょう…？」

(…と、ようやくここで初めて聞こえた男性の声。 まだ若い感じの声だ、息子より上くらいだろうか…)

「まあ、それなりに強い誘眠作用のポーシオンを布に含ませ、嗅がせましたからね。」

(最初の一言に対応した声も男性、こちらは青年というよりはもう少し



し上の様だ、きつと年齢は一言目の男の子よりは上なのだろう。)

「それにしても手際が良かったですね、〈幻惑〉<sup>デイスイング</sup>の魔法を曲がり角の死角から、無警戒のタイミングで仕掛けるなんて、そんな使い道あったんですね」

(この声は先程のとは違う男性の声、1人目と年のころは同じくらいだろうか…でも違う声なので別人だろう。)

(でも、なるほど…そういうことをされたのね…ん…それだと、どうやら魔法の通じる近距離にまで私が近づいたところで、死角から魔法をかけたと…それで、放心状態のところ<sup>レジスト</sup>に誘眠作用のポーシオンを布にでも染み込ませ、その布で口を覆って嗅がせたのかな?…ということとは今、口を塞がれてる布は、嗅がされた布をそのまま使って…ってことのようなね。)

「それに…調べた限りじゃ、この女、正攻法じゃ、取り押さえるのもムリっぽかったからな…、〈幻惑〉<sup>デイスイング</sup>も3回目<sup>レジスト</sup>でようやく抵抗突破できただろ? ギリギリだったからヒヤヒヤしたぜ」

(この声は話の内容からして、魔法をかけた方ね、声の感じからして、中年くらいかしら…まあ魔法を使えるんだし、後ろ暗い世界にいるようならそれを覚えるのにも苦労したんでしようね。)

「あれは凄かったですよね、1度目は建物の陰から小さく開けた穴ごしに目標を見据えて発動…で、抵抗<sup>レジスト</sup>、2度目は商店街方面に曲がる方とは逆方向に身を潜ませ離れた状態で発動、で…抵抗<sup>レジスト</sup>、3度目は曲がり角を曲がった直後、背後から…でようやく…ですもんね」

(この声は一言目の男の子の声だ、あと他には何人いるんだろう…?)  
「うるっせえよ! オレの実力が悪いんじゃないやねえよ、この女の抵抗力が高すぎんだよ!」

(あらあら、現役引退してから割と長い間、ずっつと病気だったから結構ブランクあったはずよ? 最盛期よりは落ちてるとは思うけど…)  
「それにしても、こうしているとそんなに強そうには見えませんよ、それどころか、これで母親だなんて、信じられないくらい若く感じないですか?」

(この声は…新しい声だ…、うん、もし自由になったらこの子のおしお

きは軽めにしておいてあげよう…)

「お前、そんな不用意に近づくなよ？一応、一時期は名前の通ったワーカーだったんだぞ？ それなりの歳なんだからな？だまされんなよ？女は化けるんだからな！」

(さつきからうるさいわね、この声、魔法を使ってくれた方よね、この声は…、自由になったら、覚えてなさい?)

「そうなんですか？ ウチの父は冒険者をやっていて…あまりワーカーのことよく思っていないらしくて、あまりそっち方面は教えてくれないんですね…どんな活躍したんですか？」

(この子の親、冒険者なのね…帝国でよくそれで食べていけるものだわ…まあ、多少の安全は保障されるけど、仕事のほとんどは帝国の職業軍人さんが代理で肩代わりしてくれるから、ほとんどはどうでもいい仕事か、消耗品のように使い古される仕事か…のどっちかが多いのよね、でもそれでまだ生きてるってことは有名な冒険者なのかもね…。)

「聞いて驚くなよ？ そいつは『襲足の戦争鬼』ってよばれてんだ…とにかくおつかねえく女だったって話だぜ…」

「す…すごい女性だったんですね…」

(ま…真に受けないでえ…ちがうもん…『俊速』だもん…誰にでも襲撃しかけたりしなかったし…それに…『旋・颯・姫』で、鬼じやないし、いつからそんな呼び名に…)

すぐにでもうなりたい当人を置き去りにして、思い思いの言動が飛び交う…、しかし眠っていると思われる人間がいる部屋で話し込むというのはどういう神経なのだろう…これは起きていいのだろうか？という心境になってくるも、もう少し、有意義な情報は得たいな…と思います、もう少し寝たふりをする。

すると…出てくる、出てくる…内部情報…そういうのは好物です、とは思っても自分の命がかかっているのだ…もう少し聞いていることにしている。

聞いている話を総合すると、こういうことのように…

・まずなぜ私がさらわれたのかは、確信的な内容は出てきていない。

・しかし、ある貴族崩れがずくくと借金をして、返済するつもりのない買い物をしている。

・借りた金を返済するために借りている方ではなく、家族で別に働いて返してる存在がいたらしい

・もつと手つ取り早く金を回収していこうという金貸し側の利害と一致し「双子の妹」を借金の金額を帳消しに…という条件で親が手放したらしい。

(ここまで聞いていてその「親」ってやつに腹が立ってきた、小一時間どころか何時間でも問い詰めたいわ…)

・その「帳消し」にした分の金額より、妹さんらの金額は高額だったということにして、少しだけ多めに金貨を渡したら、たいそう喜んだそう。

(実はそのお金が、実は貸した金扱いされて、せつかくゼロにしたつもの残金が、再び借金扱いにされたらしいわね…さすがにここまで来たらアホだわ…)

・その上乘せされたと思ってもしていない金貨を元手にして、もう貴族でもないのに「貴族にふさわしい」という言葉を言えばすぐにそいつは借金してでも高い買い物をするらしい。

(縛られて、手は動かせないけど、もお聞いていられないわこれ、もお耳を塞ぎたくなってきた…でも聞きたくないけど聞かざるを得ない状況が恨めしい)

・親は返さないが、その親の娘が必死に返していた、第三位階魔法の使い手で、ワーカーをして長い期間支払っているらしいが、利息分とちよつとしかいつも返せておらず、結果的に負債は膨らんでる。

・金貸し的には好条件で、ウハウハだったらしいが、買い取ったはずの「双子の妹」を連れ帰る時に余計な横やりが入り奪われたらしい。(なかなか詰めの甘い、お間抜けな金貸し団体ね…しかし、聴いててもわからない…なんでそれで私がさらわれる必要があるのだろうか…あまりにも知ってる子に環境が似てるのは気になるけども…)

そんな思考に陥つてると、意外な情報が飛び込んできた。

なんと、その第3位階魔法を行使するお嬢さんが、うちの息子とど

こかへと馬車で移動した直後、行方知れずになったと言うのだ……それで、帰ってきたと思つたら、ウチの息子だけ……その時点で、何かを知つてゐることは確實。

……とまあ、そういう事情らしい。

(そうかあ、似てると思つてたけどアルシエちゃんのことだったのね……さて、事情は分かつたけど、これからどうしようかしら……)

と思つていると、その男どもの軽い口はどうやら油でも塗つてゐるかのよう情報に滑り落ちてくる。

話している内に得意げになつてきているらしい。

・最初の方こそ貴族崩れの目利きもできない一家に本物を売りつけていたが、試しに一度、1つだけ偽物を持つていき、勧めてみたところ、疑うどころか本物と信じて言い値で買ったことがあり、それからずっと安く作れる偽物を売りつけていたため、言い値で買つてくれた分、本物を安く仕入れるよりも純利益でかなり儲かつたようだ。

・儲けがかなり潤つていた上、借金の返済、そして利息の率と組み合わせても、充分元金は取り戻せている。

(もちろん返済しているアルシエちゃんの金額も含めれば、ということらしいが)

・しかし、書類上の「貸した」分の借金を全て払いきつていない、という建前が彼らの手の内にあるため、まだ支払い続けてもらう方が細く長く、搾り取ることができ……なので手放すなどもつたない、という事情。

(まあ……そういうやつらからしたら、正直者で疑うこともしない、金の卵を産む雌鶏でしようからねえ……)

・そして、一番の肝は、売りつけに来る業者と金を貸す団体は、元をたどれば、同じ系列……つまりは同じ穴のムジナ……安い偽物を用意し(その分の費用は実費)、業者がそれを持って売りつけに行く、貴族崩れの婿養子があつたが、言い値で(借金の手続きを経て……)買う。

この時点で、安物のガラクタ同然のなんちやつて美術品を「言い値」で買うので「貸した」名目の金貨は、ただ移動をするだけ、この時点

で損も得もしていない。

そのまま同系列の業者間で、金貨が右から左に移動するだけなのだから：仲間内の資金の移動で、損など出るはずはない。あるのは「借金をした」という哀れな一族がそこに居るだけ：材料費、加工費だけが回収できれば、それで儲かるという仕組みの出来上がり。

(アルシエちゃんがわずかでも返済すれば組織としてはそれが利益になる：あとは、理不尽な高額を付けたガラクタの分の価格を払ってくれれば更に言うこと無しって具合ね。)

・しかし、問題は母親の方だという話が出た、母親の方は美術品には明るくないが、化粧品や、香水などのような物に対してはさすがにイイ目をしているらしく、さすがに偽物を用意するのは難しい。

母親はいつも、注文があるときはそういう物ばかり要求する、必然的にそういう物を用意する必要があるため、そういう意味では「その件」に限り、旨みはなかったらしく、その分をアルシエの返済分で上手く回していたということだ…。

(ということとは、ほとんど損はしてなくて、儲けしかないんじゃない？ 名目上の借金なんてあつてないようなものじゃ…？ 欲張って妹さん達を買い取ってさらに搾り取ろうとしたから破綻したのよ。)

なんだかんだ、身動きはとれないものの、事のあらましの大方は把握ができたため、だんだん無駄な話を聞いてるだけの状態もヒマになつてきた…。

(そろそろこの拘束から逃げ出してやろうかしら…：モンクとして積んだ経験で得た【武技】へ肉体向上とへ筋力増強で少し全身の筋肉量を引き上げ、それに応じて自分を縛っている布だか、ヒモだかは分らないが、その結び目が筋肉の肥大に応じてふくらんだ瞬間に【武技】を解除すれば、こんな拘束くらい、ゆるんでさえしまえば脱出することくらいワケはないんだから…。)

これでも、一応、息子を女手一つで「帝国魔法学院」に入れ、卒業させるだけの蓄えは作れるくらいの実力はあったのだ、こんなことくらい修羅場とは言えない…との認識から割と余裕のあった彼女は、「そろそろ潮時よね」と思つて居た矢先、さらに外から駆け込んできた

新たな声で、事態の変化を感じ取り、「もう少し、このままでいた方が楽しそうになるかも…」と脳天気なことを考えていた。

彼女をそんな認識にさせた言葉はこうだった。

「アニキ！　とうとう来やがったぜ？　その女の息子と…取り巻きらしい女どもだ…約束通り俺らの邪魔をしたあのヤロウはいねえみたいだぜ！」

そう…この時、彼女はワクワクしていた…なぜなら、いつもは見られない『息子の危機的状況の対処能力』が見られるかもしれないと思ったからだ。

まあ、いざとなれば（彼女自身が）自力で何とか出来るだろうという、心の余裕も手伝い「息子の活躍がこの目で見られるかも…」って、いう淡い期待を抱いているのであった。

☆☆☆

そして、場面は一転し、今…彼女は嬉々として屋根から屋根へと羽のような軽やかさで次々と飛び移っていた。

ようやく己の創造主と言葉を交わし、その温かさに触れ、直々に命令までいただいたのだ…早くその命令の遂行をし、「よくやった」と褒めていただきたい。

ひたすらその一心でワーカーらしき者らを屋根の上から尾行していた…そしてその姿を注視できるものはこの帝都には恐らく居ないだろう…〈透明化〉を自分に向け、己が身に着けるローブを中心に〈静寂化〉の魔法もかけているのだ。

屋根の下の住人にも、恐らく屋根を移動する音すら聞こえていないだろう…冒険者とワーカーを見分ける手段は一つ。

首に「冒険者プレート」を下げているかどうかだ…帝都に来てプレートをしている者としていないものが居る。

違いは何か？　と思いつつ、観察していると、プレートをして居る者

は一定の建物に入っている。

恐らく冒険者にとって必要な情報などがある場所なのだろう…。

対して、ワーカーは例外なく、酒場兼宿屋に行くか、依頼に出かけている。

…依頼に出かける前の準備で買い物をする者もいるが、それは冒険者、ワーカーどっちもその行動はしているので判断基準にはしていない。

「さて…それではどのワーカーさん達が「遺跡調査」なる依頼について集合日程を知っているやら…ですね…次から次へと影に潜んでみましようか？…少々非効率な手段ですが…そういう会話が出るのを待った方がいいのでしょうか…」

そう言うつぶやきが我知らず、零れた時、唐突に脳内に何かの感覚が繋がった音がした。

反射的に、こめかみに指を持っていき、出てしまった。

どちらにしろ、私に<sup>メッセージ</sup>を発信する理由がある存在など、己の主と、至高なる方々の頂点たる墳墓の支配者、アインズ様しかないのだ…それならば即座に出なくては失礼にあたる…。

屋根の上で臣下の礼として跪くが…そのことを外から察知できる者は周囲には誰も居ないので、特にそうすることに不都合はない。

「ハイ、フレイラでございます。」

☒おお…出てくれたか…私だ…アインズだよ、よかった、息災そうだな…どうだ？『彼』には会えたか？☒

「ああ、これはアインズ様、ご心配していただいているとは感謝に堪えません…我が主、ヴェールさまには無事に会えましてございます。」

☒そうか…それは何より、それはそうと実はな…とその前に、お前は今、他に何か仕事などをしている最中か？☒

「え？… あ、いえ…実は我が主より使命は賜っておりますが、出来るだけ早くと言った雰囲気はありましたが『何が何でも急いで調べよ』とまでは言われておりません。」

即座に返事をしようとするも、つい言い淀む…我が主から使命を言い渡されて行動中ではあるのだが…至高の41人のまとめ役、総監督

とも言っていない存在の言葉を無下にしていいいのだろうか…という想いから、そういう言い回しに留めることになってしまった。

☒そうか…それならば頼みたいことがある…実は、これから頼みたいこととは、その「彼」にとつても全くの無関係ということではないのだがな…☒

(え?我がマスターと所縁<sup>ゆかり</sup>ある事情か何かで一体どのようなことが?…)

「それは…どのような不心得者の仕業でしょうか? 我がマスターの手を煩わすまでもなくワタクシが直接、話をつけに…」

☒ああ、いやいや…待て待て…、そういきり立たずとも、彼もその現場に「助っ人」として向かっているのだ…わたしに話を持ってきた者の話を総合すると、どうやらお前の手柄にしてやりたいという想いもあるのだろう…姿を変えて、お前に成り代わってるらしいぞ?☒

「それは…なんと畏れ多い…至高なる御身が私などのような被造物の姿をとるなど…数々の偉業を汚すことになりは…」

☒そんなことはない…彼にとつてお前はたった一人の…この世界に来て唯一の心のよりどころのようなものだ…彼の気持ちも察してあげてくれ、さて、それでだが…☒

「はい! アインズ様に於いてはその海よりも深い慈悲の心、感銘を受けましてございます。」

☒あああ…まあ、うん、それはいいのだが…話を続けるぞ? 私に話を持ってきたのは、私の傘下にある「商会」の一部分の支店長を任せている者だ…その母親がさらわれたようだ。☒

「な…! アインズ様の支配なされている商会に仇成す者など…許されるはずはありません! 仕置きを考慮すべきです。」

☒こちらこちら、段々と声が荒ぶってるようだぞ、少し声を落とせ…、お前のことだ、何かしらの手段を取っているのだろうか、何ごとも念には念を入れ、警戒は怠らぬようにな?☒

「は…お恥ずかしいところをお見せしました…我が主と、至高なる御身、両者共に危害を及ぼそうとする存在が居るなど…到底見過ごせない心境になりました…」



☒ははは…その気持ちは嬉しいが、私が頼みたいのは「彼」のサポートに回ってほしいというものだ…どうだ？頼まれてくれるか？☒  
その言葉に深い配慮がうかがえた…至高の御身は私のような者のことを「我が主の所有物」として『勝手に使うのは悪い』と思ってくれていたのだと…そう感じた。

それならば問題はない、きつとマスターなら…優しい主人であれば、そのような頼まれごとをされればきつと断らないだろう、私にはそれが分かる、きつとそうされるはずのお方なのだから…。

「はい、何も問題などあろうはずが御座いませぬ、全ては御身と我がマスターの為に…この身の全てを捧げる所存、どのようなこともお命じ下さいませ…アインズ様」

☒そうか…そうであれば私も遠慮なく命じることにしよう…良いか？何かしらの手段を持って彼に連絡を取るのだ…、そして『陰から支援する』という旨を伝えよ…これよりこちらからもソリュシヤンとセバスをそちらに向かわせる…どのようにするかは、私は目をつぶるので現場の判断で、あまり帝都の民衆に恐怖の対象となるような「大きな事件にならぬように」と言う条件だけは付けるが…好きなようにするがいい…それはソリュシヤンとセバスにも伝えてある。

お前であれば「彼」の一挙手、一投足から、何をするつもりなのかは手に取るようにわかるだろう…まあ…あまり大惨事にはならぬようにな？☒

そう言われると、御方からの通信は静かに切られる…。

となれば、後は御方より言われたことを我がマスターに伝えるまでだ…、そう思い立つと静かに屋根の上で祈りの為の10分を過ぐし、  
〈発信思念〉<sup>センチメンツ</sup>の魔法を発動させた。

「アインズ様より我が主の事情、お聞きしました、先程命じられた使命を一時取りやめ、そちらのサポートに向かいます。ヤシチより」  
(これで60文字ですか…、これで無事に届くでしょう…マスター…どうかご無事で…)

そう念じて、魔法の効果を発動させると、帝都に突如現れた強大にして、自らが忠義を捧げるべき、懐かしく、安らいだ気持ちになれる

気配を感じ、即座にそちらへと進路をとる。

常にアルベドがそばにいる為、話す言葉にも注意せねばならず、わずかなりともアルベドの「警戒センサー」を起動させないように気を使つての会話だったため、<sup>メッセージ</sup>〈伝言〉の魔法を切つた瞬間にどつと疲れのような感覚に襲われたアインズの苦労は誰にもわかるはずもなかった。

そして、大事なNPCからの通信を受け取つたその「彼」は、気軽な調子でその返事を即座に返していた。「うん、よろしく、助かるよ、探知対策はしないでおくから気配をたどつて来てくれるかな？」という返信を受け、その何気ないやり取りに歓喜の感情が限界突破し、彼女は大きく跳躍したのであった。

## 第25話 フォーサイト、人質の救出に協力

ベルリバーが転移先として選んだのは、自らが定宿にしていた…今では引き払って数日経っている宿屋兼酒場でもある場所の裏勝手口の外側である。

かつて、偽エルヤーとしてここに訪れた初日に、元エルヤーがしこたま踏み倒しまくっていた宿賃をかなり強引なさりげなさで店主に支払った場所だ。

ここなら店の人間でなければ使わない出入口だし、しかも今は夕刻の少し前、きつと夕食の仕込みやらなにやらできつと忙しいだろうと踏んで転移してみたが正解だったようだ。

誰にも見られている様子はない…しかし、いつまでもここに突っ立っていてはいっつ、誰に見られるか分かったものじゃない…そう思い、すぐにそこから歩いて宿の敷地から移動をし始める。

「ここからの『黄金色<sup>こがねいろ</sup>の菓子亭』の道順は確かこつちだったよな…」何も考えずにその場所までの道を歩いていると、どうにも人の視線が気にかかる…それもそうだろう…、見た目は黒ずくめの全身で、首からマフラーをたなびかせ、見えているのは目の周辺のみ、額は『ハチガネ』と呼ばれる金属で覆われている。背中には忍者刀と呼ばれている…とは言え、この姿は〈擬態〉で真似ているだけで、武器や防具の性能に全く期待など出来ない。

一応、腕に装着させているガントレット風に仕上げたバックラー、これもこの世界に来た時に間に合わせで作ったものだが、「これを目印に」と伝えてある手前、装備はしている。

防具と言う観点で言えばよっぽど、そのバックラーと、外に着ている早着替え機能のついたローブの方が防御数値としては上なのだが…そんな怪しい人間が（夕刻の人通りも少なくなっているとはいえない）シレっと出歩いているのだ。

それをいぶかしく思わない方がどうかしているというものだが、ベルリバー自身は「エルヤー」としての自分がバレるわけにはいかない

為の変装と言う意味もあつて、職質でもされたら、された時だ…そう考へていた…そして、運よくその『黄金色こがねいろの菓子亭』にまで無事にたどり着く。

「たしか、こここの裏通りに入つて、ずくつと道なりに沿つて行くとたどり着く、「放置されてる建物」だったはずだな…」

そう思つて居ると、すぐに声が掛けられる。

「あの…あなたがヤシチさんですか？」

その声に振り向くと、そこにはやはり、あの時一緒にナザリックに行つた彼、ジエツトと、今回の騒ぎで助太刀を買つて出たワーカ―チーム、フォーサイトの3名が立つていた。

「ええ…その通り、私が今回みなさんの助勢に入らせてもらう者で…『ヤシチ』と名乗らせてもらつています。よろしくお願いしますね？」

首にへいたボイス・オブ・トリックずらの声を装着している為、発する声はそのまんま、女性性の声だ…が、フォーサイトの面々は、中身が一度会つてあることのある『全身口だけ男』とも言える異形の彼がその正体だとはまだ氣づいていないようだ。

「お早いですね、こんなに早くにこちらまで来られているとは…」

心底、意外そうにジエツト氏が驚きの声と共に手を差し伸べてくる…これは握手というものだろう…その習慣がこつちの世界にもあるのは面白い発見だが。

「これでも急いで来ましたのでね…お母さまのことがあるなら急を要するかと思ひまして。」

すっかり女性としての演技に入つているベルリバー改め「ヤシチ(仮)」はジエツトから差し伸べられた手を握り返し、合流できたことを共に喜びあつている。

「その人がさつき言つていた、心強い助っ人つてことね…なんかすごいカッコだけど…雰囲気からしてタダ者じゃない感じはわかるわ、よろしくね。 私はイミーナよ。」

「あ、ハイ、こちらこそよろしくお願いしますね？イミーナさん」

そう言つてイミーナとも握手を交わす。

(この娘、イミーナつて言う名前だったのか…初対面じゃ警戒して名

乗ってくれなかったもんな…、やっと名前が分かったけど…、やっぱり見た目が同性だから安心してくれてるんだろうな。」

「オレは、リーダーのヘッケランだ、よろしくな。」

名乗ってもらわなくても、あなたの名前は知ってますと、心の中で呟いていたが、敢えてそれを口には出さず…。

「ヘッケランさんですね、よろしくお願いします。」

初対面ではそういえば握手さえもしてくれなかったということに改めて思い出し、何とも言えない気分させられた。

「私はロバーデイクと申します、共にがんばりましょう。」

このおっさんはロバーデイクって言う名前だったのか…この人も名乗ってくれなかったしな…これが初名乗りってことになるな。

「ロバーデイクさんですね…こちらこそ、何かあったら、よろしく願いします。」

そう言って一通りのメンバーと握手をして面通しをしてから、ふと、あることを思い出し、ジエツトに疑問を投げかける。

「そういえば、ジエツトさん、今回のお話では「あの男には知らせるな」という文言があったみたいですが…、いっそ、みなさん女性に変装してその現場に行ってみるといのはどうでしょう?」

一瞬、ジエツトも何を言われたのかわからなかったようだが、時間と共に脳内に浸透してきたようで、それについての異論をはさむ。

「いえ、お申し出は嬉しいですが…、変装って…そんなことできるんですか? 幻影魔法って言われても、体格に近い幻は纏えても、明らかに自分より細身の女性になるには低位階の幻影では難しいのでは?」

一般的な魔法が第3までが一般基準の世界であれば当然の認識である。…しかし、この「ヤシチ(仮)」さんはただモノではないのだ…しれっとその代案を用意している。

「それなら見た目自体をそのまま、肉体構造ごと、女性に変わればいいだけですよ。」…と。

「「はっ…」」

何を言われているのか芯から納得できていないフォーサイトの3名は、素っ頓狂な声を出し、呆氣にとられた表情をしている。

「いやいやいや…それっておかしいだろ？ え?? なに? そんなこと常識で考えて出来るもんか?」

リーダーであるヘツケランが率先して異議を唱えてくるも…

「私が持つているマジックアイテムなら可能ですよ?…とは言え、ちよつと見た目が微妙なので、それを装備したら…まあ、見た目は帽子なのですが…その帽子部分は幻影で見た目をごまかした方がいいかもしれない物は一つだけありますね。あと一人分は、恐らく見た目からして問題ないのですが…。」

どうやら肉体構造ごと、男性体から女性体に変わることにできるマジックアイテムを持つてるらしいが、ヘツケラン用と、ロバーデイク用の2種類のことを言っているのだろう…。

それは分かるが…『見た目が微妙』とはどういう意味なのだろう…と思つて居ると、その彼女から早くもそれについての提案が投げられる。

「とりあえず、出してみますので、どっちがどっちをかぶるかは好きな方を選んでくださいな。」

(…とその前に、このやり取りを誰かに見られたらマズイよな…念のため〈認識阻害〉をかけておこう)

そう言うと、懐に手を入れながら…こつそり〈認識阻害〉の魔法を発動させる…そして、そのローブの下どこに隠していたのか…一つは魔法使いがよくかぶつていそうな三角帽子と言われる、見る限り革製のただの帽子。

そして、もう一つはカボチャの外側、その上半分だけを帽子状にしたようなもの…明らかに「見た目が微妙」と言っていたのはこれのことだろう、と言うのが理解できた。

これはどちらもボイス・オブ・トリックへいたずらの声〈同様、12年に渡るユグドラシルの中でのイベント時期、ハロウインの日だけに配られていたログインアイテムの内の2つ。〉

〈パンプキンキャップ〉と〈魔法使い〉の皮帽子〉というものだ…、ベルリバーは最初期からユグドラシルをやっていたわけではないが、それでもギルドの結成がなった時には初期メンバーとして参加して

いるのだ、8年目を半分ほど過ぎてからギルドは脱退したが…それまでの間はずっとギルドと共にいたのだ、点数は保管していたりする。(っていうか、わざわざ『魔法使い』ってカツコでくくってまで強調して「革」じゃなく「皮帽子」ってところに悪意を感じたんだよなコレ…、ワルノリが過ぎるだろ、クソ運営が！って思ったもんだよな…)

ちなみにこの『魔法使い』の皮帽子は、嫉妬マスクを6つ以上所持していると、配られていたもので、その数未満だとハロウインの魔女帽子という名前だったりもしているのだが、それは彼…ベルリバー自身も知らぬことである…もちろん至高の御方もそれは同様なのだが…そのお骨様とはある事情により、その変装用の帽子は所持していない。

「そのどちらをかぶっても、同じように、女性に変わることは出来ません。ですが…その微妙な見た目の帽子状の物の方ですが、男性の、違う顔になることも出来るのですが、今回の件に限り、そうなることにメリットはないので、気にしないでよろしいかと思えます…。」

それから2人はしばらく悩みに悩み、ロバーが「皮の帽子」、ヘツケランがカボチャの方を選ぶことになったようだ。

そして二人が意を決して、その帽子をかぶると…

ロバーデイクが魔女の姿、ねじくれた魔女の杖の見た目そのまんま、真黒なローブを身に着け、手には魔導書らしきものを所持している。

そして長い黒髪…、そしてどこかおっとりとした垂れ目っぽい表情は、元がロバーデイクだった要素など一つもない。

そしてその表情はどこか感情に乏しく、ある意味無表情に近い、何を考えているのかわかりにくいものとなっている。

スタイルなどはローブに隠されてよくわからないが、妖艶な魅力と言うよりは、まだ成熟しきらない未完の魅力と言った方がいいだろうか…少女以上、女性未満、強いて言えば某血塗れの將軍さまとどっこいか、少し上に見えるかどうか…といった程度だろう。

そして、ヘツケランはと言えば…サラリと流れる金髪、肩甲骨あたりまで届く程度には長く、元の姿であれば、髪の毛、とある場所にあつ

たメツシユっぽい色あいが、前髪の中央、正面に位置する場所に変わった程度か：双剣使いという設定は行かされているのか、軽装鎧なのは見た目そのままだが、女性的なスタイルが鎧の形すら変えたのだろう、丸みを帯びた膨らみの場所と、曲線を描いてくびれる腰部分、明らかに完成度が違う「女性」そのものになってしまっている。

その姿を見たイミーナが雰囲気を一変させ、ヘツケランに詰めやる。

「ヘツケラン？ 誰？その女…どこの誰よ…誰をモデルにしてるのよ！」

「は？なに？ なんだよ？オレがどうなってるって？」

と、口調はヘツケランのままだが、声質は女性のものになってしまっているため、セリフ回しに違和感がすごくなっている。

「そこまでリアルになつといて、誰もモデルが居ないなんて信じられると思う？」

そういってイミーナは自分で持ち歩いていた手鏡を持ち出し、ヘツケラン♀に見せる。

「え？誰だよこれ…オレ？ これがオレってことなのか？」

「動揺されているようですが、それらは、そのマジックアイテムに初めから入れられているデフォルトのアドバイザーデータです、被った人の想いが作用してるわけではありませんよ？」

と、さりげなくフォローを入れるヤシチ（仮）

（とはいえ、ユグドラシルでもあんな感じだったかな？ よく覚えてないけど、ちよつと違う気もする…まあ彼らのチーム内の空気が変なことにならないようにそう言っておこう…：真実はどうあれ…）

「でふおると？… って？」

その言葉の意味が伝わらなかったのだろう、フォーサイトの面々も、ジエツトも不思議そうな表情をしている。

「ああ…最初から入ってる内装…って言った方が通じますか？そういう感じだと思っただけだよ…。」

「さて、とりあえず、見た目等は女性に成り代わったことですし、ひとまずはこれで相手を油断させられそうですね。」



そう言つて、とりあえず先を促そうとしていると、思いもかけない方から声が掛かる。

「あの……………」

聞き取れたのが、奇跡か？と思えるほどの小さな声、一瞬だれ？と思うも、そちらに顔を向けると姿を変えたロバーデイク♀、魔女つ子姿になっているその人からの声だった。

「どうしました？ ロバーデイクさん？」

「……………これ……………どう……………使うの？」

彼女（ロバー♀）が見せたのは手に持つている魔導書…そう言えばこつちの世界でどうなっているのだろう、「外装データのアクセサリ」…要はただのハリボテとしての意味しか持たないのか…。

それとも「魔導書っぽい本」ではなく、魔導書になつていのだとしたら何かの魔法を封じられていたりするのだろうか？

「とりあえず開いてみてください、その本、開けられますか？」

静かにロバー♀が本を開こうとすると、あっさりページがめくれ、ぺらぺらとページをめくつていく。

なにが書かれているのかを言わず、黙々と本に見入っている。

「何か…読めましたか？」

ヤシチ（仮）がそう尋ねると、本から顔を上げたロバー♀がぼそつとか細い声で応える。

「見た瞬間は読めなかったけど、見入つてたら信仰系の言語に変わつてくれた、今なら読める。」

そう言つて、首をかわいらしくコクンとタテに振る。

この『魔法使い』の皮帽子は、性格や話し方も根っこから変えてしまうのだろうか…まあこれなら「こいつはロバーデイクだ」って言つても誰もが信じてはくれないだろう。

「ということは信仰系の魔法が書かれていそうですね、守備、回復、サポート、攻撃に転用できる魔法でもありましたか？」

興味深そうにジエツト氏がのぞき込もうとするも、すすつと後ろに下がってしまう、どうやら人見知りの設定でも入っているかのようだ。

少し離れた所から、また消えいりそうな声で返事を返してくる。

「初めて知る呪文の名前ばかり…でも、下に説明と使い方、何を代償にし、どういう効果で発動されるかが書いてある…。」

「まあ、そういう仕様になってるのは意外でしたが、それなら悪漢程度など、問題にならないでしょう。」

ヤシチ（仮）がそう言いつつ、ジエツトに向き直り、1つ、提案をする。

「思い付きで提案させてもらって、みなさん女性になる流れになりましたが、そのまんまフォーサイトの名前のままで大丈夫なのは恐らくイミーナさんだけでしょう。 どうでしょう？ここは少し名前の雰囲気を変えて呼ぶようにしては？」

「私は別にかまわないけど、どんな名前？」

自分はイミーナのままで大丈夫という立場で問題ないからなのか、気軽にそんな対応で返答するイミーナ。

「そうですね…「ヘツケラン」さんは「ケーラン」、「ロバーデイク」さんは「ローバア」なんて言うのは？」

「面白いわね、それで行きましよう。」

明らかに楽しんでいるのか、イミーナは悪戯っぽい笑みを浮かべ、ヘツケラン改め、ケーランに声を掛ける。

「よろしくね、ケーラン♪ この事件が終わったらすぐ元に戻れるんだし、今はその名前を楽しみましょう。」

「お前は…他人事だと思いやがって…、こっちはロバー…じゃなくて、ローバアと違って意識も感覚もオレのままなんだぞ？ 恥ずかしいったらねえつつうの…」

「まあいいじゃない？そういうのも可愛いわよ、ケーランちゃん♡」

そう言っつてイミーナはケーランを後ろから抱きしめるようにして、明らかに面白がつて、可愛がつているかのように見える。

そういうやり取りを見ながら、横で魔法の詠唱を始めたヤシチ（仮）ビュウ・オブ・ミラージュは、ケーランの頭部に収まっているカボチャ帽子をぐまかすため、〈幻影の視覚〉を発動させ、ちよつと可哀そうな見た目をぐまかしてやる。これで、とりあえず普通の金髪美女（見た目のみ）の出来上が

りだ。

「さて…それじゃとりあえず、どうします？ ジェットさん…これからこのままでその現場に行きましようか？ 貴方以外が全員女性であるなら、油断してくれる可能性は充分にあり得るかと思えますが？」

そう問いかけると急に自分の周囲につむじ風のような何か小さく舞い上がり、ヤシチ（仮）にだけ伝わるささやきが聞こえてきた。『マスター…いと高き主よりの御意向を賜るべく、ヤシチ、ここに参上いたしました。』

「うむ…そうか…それならばらくはそのまま私の行動を見ていくれ、追って指示を出す。」

口元に少し指を曲げた状態の手を持っていき、声を落としてそうつぶやく、とりあえず他のメンバーには聞こえないようにと気を付けてそう指示を出した。

☆☆☆

「アニキ！ とうとう来やがった その女の息子と…取り巻きらしい女どもだ…約束通り俺らの邪魔をしたあのヤロウはいねえみたいだぜ！」

外の見張りをしていた、この中で一番若手の新人がその目で『見たまま』を報告してくる。

「おお、来たか！ それで？ 取り巻きの女どもはどんなやつらだった？まさか丸腰つてことはねえんだろ？」

一番年長らしい、どこまでの魔法を使えるのかは不明だが、恐らくはそこまで多くの魔法は使えないであろう男が、呼び出した者らの特徴を見張りに尋ね、少しでも情報的優位に立とうと試みている。

「ええ…それが…、いまいちピンと来なくって…見た目だけで言いますと…」

見張りもどう表現していいのかわかっていないようだが、見た目からだと判別できそうにない者も含まれているようだ。

「なんだよ、ハッキリしねえなあ……いいから見た目からの推測でもいいから言ってみろ？」

先を促された見張りの男は仕方なく、確定事項だけを告げることにした。

呼び出された当の本人であるジエツトはといえば、もちろん見た目だけでは武装などはしていない、戦闘力がないのか、魔法を使うのが主な戦い方なのかは調べてもわかってないようで、いまいち決め手に欠けるという結論。

そして、ジエツトを守るように前に立つのはフードを外し、ローブを身にまとった黒ずくめの……恐らくは女？ではないかという雰囲気程度のもを感じたくらいで、大きな武器らしいものは持っていないように見えたが、よくわからない不気味さを纏っていたようだ。

ジエツトの後ろで、不意打ちをされないように守っているのは見るからに魔法詠唱者<sup>マジックキャスター</sup>

という装備一式と魔導書らしきものを持ったフードを目深にかぶった女、その女の前には恐らくはレンジャーらしきハーフエルフ、そして、最後尾には腰に予備武器なのだろうメイスと、主武装であるう2本の剣が備えてある女剣士？のような組み合わせであることを告げた。

「ん……その黒ずくめがどういう戦い方をするかはわからねえが……どうやらあのフルト家のお嬢さんがチームを組んでいるワーカーメンバーじゃなさそうだな……合致するのはハーフエルフって点だけだ……あとは全く違う構成だからな、まず十中八九、寄せ集めなんだろうさ」  
“こちらには人質が居るんだから”という優位が自分らにはあるという精神的余裕がそうさせているのだろうが、あっさりと来客を通してしまふ……イミナーナの弓さえも取り上げようと指示しないというのだからあまりにも浅い考えの者たちなのは明白である。

放置されている建物と言っても、裏通りにあるというだけで、決して『廃屋』のように朽ちているわけではない。それなりの建物の体裁は整っていて、客間のような造りの部屋に通されたジエツトたちが、ソファアーにどっかりと座って待ち受けていた人物と対面していた。

「どうも初めまして…ですかね、お招きに預かったのでもここまで足を運びましたが…？一体どういった用件でしょうか？こちらには全く心当たりがないのですが？」

まず最初に口火を切ったのはジェットだ。

恐らくは相手も確信をもって人質なんてとったのだろうが、相手の出方を窺うのは常套手段だ。

「そうですね？…こちらとしても聞き流すなど出来ない情報を得てしまいましたね…あの日、えらい上等なスレイプニールにひかれた馬車に乗ってどちらかへ行かれたようですが？その時はたしか…フルト家のお嬢さま方3名もご一緒だったとか…？」

こちらの表情をのぞき込むようにして反応を引き出そうとする相手に対して、ジェットも顔色を変えずそれに返答をする。

「ああ…あの時は仕事上で付き合いのある取引相手との交渉がありましたね、こちらも裕福などところを見せないと足元を見られてしまいます。なのでこの身にそぐわないとしても…必要以上の乗り物を用意したい事情があつたんですよ…そこにあの3人のお嬢さんが「同乗させてほしい」と言ってきましたね？」

そこまで一気に言うと、少しの間を置き、今度はジェットが相手の瞳を覗くようにして言葉を紡ぐ。

「話を聞くと人さらいに妹さん2人がさらわれそうになったというじゃないですか…世の中は物騒ですね。そんな輩が居るなんて…と不憫に思ひまして、途中まで乗せましたが…、通りすがりのルーズインターナルで「ここまででいい」と言つて下りてしまいましたね、そこから先は私も知りませんよ？」

そして、目の前の相手にも念のための警告することは忘れないで告げておく。

「最近は何にかと物騒ですからね…人さらいというのはいつ、どこで、誰の下に唐突に訪れるかわかりませんからね…あなた方も気を付けた方がいいですよ？」

言われた相手は一瞬、呆気にとられたような表情をしている、「この男は何を言ってるんだらう」とでも感じたかのような表情を浮かべて

いた。

そして少しの間があり、気を取り直したのか、相手はジエットに対して哀れみか…嘲笑いか…どちらともとれる表情を浮かべ「そうだね、最近の世の中はなにかと物騒だ…気を付けて暮らした方がいいと思うよ?」お互いにね…」

という相手に対して、あくまでも余裕の表情を保ち、ジエットもそれに同意する。

「ええ…本当に…お互いに…ね。」

そこまでの会話の後、ジエットはやつとここに来た本題を相手に切り出す。

「さて、ところで私は何の用もなく情報の提供をしに来たわけではありません。そちらの望む情報を提供した以上、報酬として、そちらでお邪魔している私の家族を引き取らせていただきたいのですがね…そちらにとつても面倒を見る手間は省きたいでしょうし。」

もちろん、そう言つてすんなり帰ってくるはずはないと分かつてはいるが、そう言いださねばいつまでも話は先に進まない。

「いやいや、たいへんおとなしく過ごしているのですね、手間などかかっていないとも、それに提供してもらった情報の精査をしないことには、わざわざご足労願つた意味もなくなってしまうからね。」

その返答に対して苛立ちもせず返答をする。

「そうですね…、私の情報が本当かどうか信用できないから、すぐには返せない…ということでしょうかね?」

「いやいや、それでは我々がまるで善意の情報提供を疑つてかかる悪質集団みたいじゃないか、そのような言い方は心外だよ?」

少しの間、お互いにひりついた空気が漂うものの、先に空気を軟化させたのはジエットであった。

「まあ、いいでしょう、こちらとしては出来る限り大ごとにはしたくなかったのです、可能なら穏便に返してもらいたかったです…、こうなつては仕方ありません、実力行使で取り戻すことにしましょう。」

すつと、静かに椅子から立ち上がり、片手を対話している目の前の男に突き出し「覚悟してくださいね?」とだけ告げる。その眼はす

でにわずかな交渉の余地はないほど冷めきっている。

「貴方のようなひよろい男が、我々に力で敵うとでも？」

その言葉が最後の余裕ある発言になるとは思っても居ない哀れな男に、ジエツトがアインズの下で経験を積み、覚えた、彼曰くつまらない魔法の内の1つが効果を発揮する。

ポリモーフ・オブジエクト  
〈物質の変性〉

そう告げると、目の前の男は人体から物体へと姿を変え、小さなぬいぐるみに変えられてしまう。

ポケットスペース  
〈小型空間〉

ジエツトがその魔法を発動させると、小型の物なら収納できる魔法的空間を作り出し、そこにぬいぐるみに変えられた男を収納する…これで、効果時間が過ぎても魔法空間の中では持続時間は継続する…いつまでもこの中に居る限り、元には戻れない…恐らくは気が付いたら攫われていたという図式になっているだろう。

「忠告はしたんですけどね…こういう手合いは結局こういう末路になりますか…」

後ろで一応護衛として来ていたフォーサイトの面々も啞然として  
いる。

その中で冷静でいられたのはヤシチ（仮）だけであった。

「なるほど、そういう使い方をするわけですか…なかなかよく考えられていますね。」

「いえいえ、私などは才能もないですし、この辺が限界ですよ、お恥ずかしい限りです…これで〈魔法抵抗突破化〉ペネトレートマジックでも使えばもう少し幅も広がるのですが…」

「まあまあ…、充分こっちの世界では有効に魔法を使えていると思いますよ？　そういう見方をすればその魔法は応用範囲が広そうですね」

「そんなそんな…同じ『本社』の方々に比べたら、私など…」

「ヤシチⅡヴェールⅡアインズの友人」という図式で理解してしまっているジエツトからすれば、アインズの盟友に褒められるというのはどうにも恥ずかしいことこの上ないのだろう…ただただ恐縮してい

る。

「イヤ、そりゃく比べる相手を間違ってるよ、あいつらは反則級だから、あれと同じレベルに立とうとしたら、人間を辞めて、寿命を無くない限り、届きやしないぞ?」

そう言つて、ジエツトを励ますように肩にポンと手を置き、彼の手際をねぎらうと…

「さて、それじゃくこつちもジエツト君に負けてはいられないな…」

ヤシチ（仮）達が案内され、入ってきたドアから外に声をかけ、案内役をしてくれた手下を呼び出す。

ノコノコと現れた手下Aにチャームを掛けたヤシチ（仮）は、この建物内の構造、人質の部屋、見張りの数、配置、などなどを事細かに聞き出している。

どうやら、人質となっている母親は奥の部屋、つまりは隣にいるようだ。

そして、彼らは現地で集められた人員で、主にこの計画の筋書きを指示していたのは先程のぬいぐるみにした男。

誰かからの命令を受けていたらしいが、誰からの命令なのかは自分らにはわからないとのこと。

ヤシチ（仮）さんは、チャームで魅了状態中の手下に話を通し、人質の母親の見張り役の交代を名乗り出られないか?とお願いしてくれた、すると、友人の頼みなら、どんな願いでも聞くよ”と快く引き受けてくれ、手下Aは見張りを交代してくれた。

今まで見張っていた男はさらに奥にある部屋へと引つ込んでいき、こちらの部屋の様子に気づいた様子はなく、チャーム状態の見張りは人質を解放することには協力的であった。

自分の友人である、目の前のヤシチ、その知り合いの母親であると知らなかったのだ。

それが分かってしまったら、いつまでも捕えている訳にもいかない。という結論に至ったらしく、人目のつかないように誘導してくれ、解放してくれる時には笑顔で、手を振って見送ってくれたりもし



たほど…。

「おれら、一緒に来た意味ってなかったみたいだな…全然出番なかったみたいだし。」

そう言いながら装備していたカボチャの帽子を脱ぎ、ヤシチ(仮)さんにそれを返すヘツケラン。

「そんなことないですよ、みなさんが居たからこそ、私は自信を持ってあの魔法の行使に踏み切れたんですから、みなさんが居なければきつとイチかバチかの認識で、十分な成功率には至らなかったでしょう…だから、安心して相手にかけることが出来て、心強かったです。」…と、ジエツトもフォーサイトに感謝の意を告げている。

「でもよかったわ、みなさんが無事で、ケガも負わずに済んだんですから」

さつきまで人質になっていたとは思えない程の朗らかさで助けられた礼を言っているジエツトの母。

「私は、もう二度と…このようなものはかぶりませんからね！」

どうやら、帽子をかぶっていた間も、ずっと「自分という意識」があったようで、その上であの性格で振る舞うことに抵抗できなかった自分をひたすら恥じているロバーデイクが、皮の三角帽子をヤシチ(仮)に返していた。

「でもさ、結局使うことはなかったけど、あの本の中の魔法ってどういうものがあったの?」

イミーナがロバーに、魔女姿の時に持っていた魔導書の中身について質問している。

「それは…知らない方がいいでしょう…一番最低位階の魔法でも、一回の発動で私の魔力の8割以上を奪っていく魔法でした。それはあの召喚魔法だったんですが…それを、呼び水にして…というか、サクリフアイズ生け贄え”と書かれていましたが…、そうすることで、より高位の者を呼び出したり、神話級の魔法を発動させたりできるような内容でした…使う機会が訪れずに済んで、ホツとしています。」

(それは面白いな…ローバアさんだった時に聞いた話では最初に本を開いたときは読めず、信仰系の文字になってから読めたって話…とい

うことは魔力系であればそれに対応した魔法になり、ドルイドならそつち系ということか？検証する機会があれば試してみてもいいかもしれないな…）

「それはそうと、どこかに移動しませんか？道端で気楽に話せる時間もあと少して時間切れになりそうですし…、ジエツトさんの事務所か、ご自宅かに避難した方がよろしいのでは？」

何気なく〈人類種魅了〉の効果がそろそろ切れそうなことを告げ、避難することを勧めるヤシチ（仮）は、そう言うのと、移動することに決まった一行と共に、移動しながら〈伝言〉メッセージを使ってヤシチに連絡を取る。

「ヤシチか？一通りの流れは見ていたな？そちらは今どうなっている感じだ？」

『は…、今、ようやく〈魅了〉の効果が切れた者が、『自分が逃がしてしまった』という事実を言い出せず、保身による時間稼ぎに忙殺されているところですよ。』

「…そうか、それなら今しばらく、そちらで見張りをしてもらっているか？もう少ししたら、恐らくそちらにセバスとソリュシヤンが向かうはずだ…入り口前にまで到着する気配を感じたら、出迎えてやれ、それまでは、今回の騒ぎの首魁の情報を少しでも引き出すためにあいつらの影に潜むか、その黒装束の効果でシエイドスピリットを呼び出し、4人程の影から見張らせてもいいだろう…あと少しそちらから動けなくなるだろうが許してくれ。」

『いえ、そのようなこと…ご命令に従いそのお役に立てること、それが我が望みであり、なにより我が主に対する忠義への証明…御身が心を痛める必要など一切ございません。ですが、1つ聞かせてください、指示している者が居なくなれば自然と瓦解するのでは？』

「まあ…普通はそう考えるのが妥当なのだろうがな…念のため…つていうやつだ。だがヤシチよ…知っているか？アリという虫が群れで行動するときは、それぞれの役割があり、女王として君臨するアリ、そして食べ物を運ぶなどして女王の為に直接働くアリ、そして、働いているように見せかけて、実はさぼっているだけのアリという群れを

形成している生き物がいる、そいつらは、働いているアリを群れから引き離すと、さぼっていただけの奴らが今度は抜けた穴を埋めるため、働く側にシフトをする生態を持っている…、似たような事態がそいつらの中で起きないとも限らんだろう？ お前にはそのあたりをどうなつて行くか見極めてほしい。」

『承りました！。そこまでの考えに至らず、我が身の浅はかさに恥じるばかりでございます、それではシェイドスピリット共を呼び出し、効果時間が切れる直前まで見張らせておくことにします。セバス様や、ソリュシャン様のお出迎えの件はワタクシめにお任せを！』

「ああ…頼んだぞ…」

それだけ言うと、回線を切断するように、通話状態をオフにする。そうすると、ジエットの事務所前にまでもう少しと言う所だった。「さて、みなさん、それでは奥の鑑定室長室の方までどうぞ。」

この鑑定屋を飛び出す前、もちろん他の従業員にはコトの詳細は説明してあり、自分が居ない間はいつも通り、優秀なランゴバルトに室長代理を任せ、母の救出に出ていた。

鑑定室長室の扉を開け、室長代理に礼を言つて、あと少しだけそのまま続けていてくれ、と声を掛ける。

ジエットとフォーサイトの3人、そしてジエットの母というメンバーが、ヤシチ（仮）と共に重要な話をする際に使う奥の部屋へと移動する。

「さて、みなさん、母の救出に協力していただきありがとうございます。さて。」

改めて、頭を下げ、礼を言うジエットにフォーサイトの面々が「なんてことはない」とばかりに「気にしないでくれ」と言っている。

「俺らの方が先にアンタに助けられたんだから、これも一つのお礼返しつてことでいいじゃねえか」

「そうですね、そうでなければ、我々もモヤモヤしてた所だったので、ちようどよかったということです。」

「あのクリスタルの買い取り額だけでも法外な金額だったんだから、あれの中に今回の報酬が込みだったと思えば私たちもあんたに対す

る引け目も無くなるってもんなんだし、お互い様よ。」

「引け目感じてたんだ、そりゃ知らなかったぞ?」

「なにそれ?ヘツケラン、今夜、勝負する?」

「まあまあ、いいじゃありませんか、今はとりあえず、この件が片付いたら聞かせてもらうことになってるお話に戻りましょう。」

「ああ、そうだったな、そっちの話を危うく忘れるところだった。」

「しつかりしてよ?リーダー?、…墳墓の探索まであと二日しかないんだからさ、まあみんな集まるのは夕刻からみたいだけどね。」

（お、ナイス情報、聞かなくても向こうからその情報がもらえるとは!

柵から牡丹餅とはこのことだな…あれ?使い方合ってたっけ?ま、いっか)

…ま、その情報をくれたお礼ってことで少し彼らにも有用な情報は与えてあげよう、これで貸し借りナシって言う事にさせてもらおうと。

「その前に…一応、伝えておきますが、先ほどジェットさんがあそこで言っていたアルシエさんの行動は相手を欺くためのウソでしたから…、そこはちゃんと気づいてました?」

人さらい団体の前での発言は改めて、虚偽情報だったと証明したヤシチ（仮）に、驚くこともなく、シレつとヘツケランが受け応える。

「ああ、もちろんだ…、あんな状況で本当の情報なんて言わないだろ?

普通…:そう思ってたから特に不思議でもねえよ。」

「それで? アルシエは結局のところ、今どこなのでしょうか?」

「それは、私からお伝えしましょう、実は私はあの時、ジェットさんと一緒に護衛として、付き従って、アルシエさんの避難先まで同行したのです。」

ジェットが説明しようとする言葉を横から奪う形となってしまうが、形としてはそれが最善であると判断した。

「ベルリバー個人」の立ち位置を最大限利用してジェットの最悪の可能性を排除するため、そうしただけのことだ。アインズさんの力になっている彼をみすみす、危険な状況に陥らせる必要はないと判断してのこと。

「ええ？あんたアルシエと顔見知りなの？」

イミーナさんが驚いたような顔を向けてくるも、そこはウソは言わない方がいいだろうと判断する。

「いえ、今のこの姿は変装しているだけでしてね…、この姿を見せてもアルシエさんは私のことは「知っている人」とは思ってくれないでしょう。」

と、そこまで言っただけで、初対面での彼女の態度を思い出し、しまった、そうだ…あの子にはあの眼があつたんだ…と…。

「あ…いや…彼女の目なら、変装していても私と見破つてしまうかも知れませんが、その可能性は充分にありえる事でしょう…。」

「ああ…あの子の『眼』のことも知ってるのね、それは疑いようもなく知り合い以上ってことか。」

「理解してくれてありがとうございます。…それで…この次第をお伝えする前に、今アルシエさんがいる場所は、端的に言えば「王国領」になります、その『とある村』に身を寄せて生活しているってことになりますね。いわば亡命生活と言った方がいいでしょうか？」

「村？大丈夫なのか？そこ…、モンスターに襲われたりして壊滅とかやめて欲しいぞ？」

いきなり「村」だなんて言われたらそれは当然の反応だろうと思いつつも、あそこではそんな心配は杞憂だと知っているヤシチ（仮）からしてみればどこ吹く風だ。

「それは心配ありません、大森林が隣接している場所ではありませんが、森から外に出てくる程度の者なら、あの『村の者たち』であれば問題なく対処できるでしょう」

「そんなにその村の自警団っていうのは凄腕ぞろいなのか？」

「いえ？ 自警団自体は、今、絶賛人員募集中ですね。所属しているのは、元鉄級冒険者の女戦士さんで今は村のレンジャー見習いをしている人が一人、そして指導しているレンジャーの男性が一人、つまりは2人だけなので、新しい移住者がいて、自警団に入ってくれる人が居れば快く受け入れてくれるでしょう。」

「おいおい、それじゃく全然安心なんてできねえだろ？ どこが安全

なんだ？」

「その理由を教えるには、その村に住めるだけの適性があるかどうかをみなさんにお聞きしなければなりません、不適格だと判断されれば、その村のどんな内容もこれ以上教えることは出来ませんし、その村に立ち入らせることも…アルシエさんに会わせることも叶いませるので覚悟してください？」

「え？うちら、そこに住むなんて一言も言っていないんだけど…？」

「ああ…失礼、少し言い方が大げさでした、今言った村というのはある意味で言えば王国の中でも異質の村でしてね、事情があつてその村の全容を知っているのは村の者らだけ、外部の者には「村の本質」に関わることの一切が機密扱いなんです。それは王国の国王であっても例外ではありません…。」

「おいおい…国王でも知らされることのない機密情報つて、やばくないか？そんな場所にアルシエは今もずっと居るってことなのかよ？」  
体を前に乗り出して、名前も場所も知らないその「村」に対しての脅威に気づき始めたヘツケランが少し緊張した雰囲気醸し出している。

「ええ、彼女は無事にその適性があると判断されて、その村に歓迎され、住人として迎え入れられています。外部の者が何も知らずに訪れようとすれば身の危険を感じるほどの警戒をされるでしょうが、一度身内と認められれば、どこまでも友好的な皆さんですからね…彼女は今も妹さん共々、元気に明るく過ごしているでしょう。」

「つまりはオレらもその『適性』とやらがあると認められなきゃ、アルシエにも二度と会えない可能性がかなり高いってことだな？」

「ご理解が早くて助かります、つまりはそう言う事になりますね。」

「そんなじゃ、見極めてもらおうじゃねえか、その適性とやらをよ…なにをすりゃいい？」

どこからでも来い！とばかりに受けて立とうと身体に力を入れ始めたヘツケランを片手をあげて制すると、座るようにと促す。

「そんな難しいことじゃありませんよ。ただ、質問に答えてほしいだけです。」

「質問？」

そんなことで、王ですら知らされていない機密扱いの村との関係を持てる適性が分かるというのだろうか…そう思うヘッケランに、アインズがアルシエに質問した内容を思い出しながら、彼らにも問いかける。

「みなさんは人間以外の種族の方々をどう思ってますか？」

そう問いかけられたメンバーは少し表情が微妙な物へと変わる…あまりにも抽象的過ぎる…くくりが広すぎる問いかけだからだ

「人間以外の種族…？ それは例えばエルフや、ハーフエルフ、ドワーフや、獣人のような全般的な…って意味でしょうか？」

エルフやハーフエルフなどの人間に友好的な対応をする人間種であれば問題はない、と思うも、人間以外の種族はそれだけではない、あらゆる種族が居る為、どこまでをその範囲として答えていいかが判断がつかないためだ。

「まあ、それも含まれることは確かでしょうが…そう、例えば、人を食わずに、分け与えてやる動物の肉だけを食べると約束してくれる友好的なオーガとか…話の通じるトロール…とある存在にだけ特別に忠義を果たそうという精神を持ったゴブリン達…そういう者たちが、ドワーフや、エルフ、ハーフエルフらと同じ場所に住んでいる町、もしくは村、もつと言えば小規模な団体としてでも…そんな場所がもしも存在しているとして、そんな場所に住みたいと思えますか？」

3人が3人とも、顔を見合わせて小さな声で話し合っている、それはそうだろう…急にそんなこと言われて全員が即答できる内容の話じゃない。

「いくつか質問させてもらっていい？」

一番その問題に身近な立場であるイミーナが最初に手を挙げて来たので、「どうぞ？」と促す。

「仮に、その話が本当で、そういう場所？か団体があったとして、そこに所属する種族と同族が森から出てきて襲いかかってきたら、それらは同族と戦うことに思う所はないの？」

当然の質問だろう、村に仲間入りしたエルフが居たとして、今まで

一緒に森で生活していた同族と戦うことにでもなった場合、内部で意見が割れることもあるだろうということだろう、それに対しては答えられる。

「これも、そういう前提で色んな種族が集まっているという認識でいてもらいたいですが、そこを統べる頂点たる『長』は、こう考えるタイプの人と思ってください。」

そう言っただけ一本指を立てる。

「まず、第一に、その場所はほんの数年前、同じ人間の手によって、周辺の村々ともども虐殺されかかるとい痛ましい事件に遭い、自分らから好んで誰かを侵略、または襲いかかろうという考えはしない集まりだと思ってください。」

そして、2本目の指を立て、こう話を続ける。

「第二に、その場所に集まってくる亜人種みんなは、皆が皆、森から住処を追われ、住む場所を無くした者たち、そういう者らがここを統べる『長』を頼り、居場所を提供してもらおう代わりにその『長』に協力するという約束の下、身を寄せ合い、力を合わせて生活しています。」

続けて3本目の指を立てると、最後の、その村人全員が持つ共通認識を告げることにする。

「第三に…そういう事情なので、基本、外からの侵略、力を行使しての圧力、身の危険を感じるあらゆることに対しての防衛的戦闘をする時は、村全体で立ち向かうこともあります、戦いをしたいために戦うという戦闘狂な人も亜人も存在しません。」

そこで一度話を区切り、両手を左右に広げ、その村で見てきた、村人の性質そのままを告げる。

「なので、仮に、隣の森にエルフの集落があるとしても、その村の人たちは基本的に不可侵を守り、生活するスタイルです。森に入るときは薬草の採取や、または食料として、村が食べるのに必要な動物を狩るため、という理由がない限り他者の土地を侵そうとは考えません、無駄に血を流すことを好むこともありません。そういう集まりがあったとしたら…という前提で、みなさんとしては、そこにアルシエさん



が生活する場として、ふさわしいと思いますか？それとも反対ですか？」

「そんなお花畑な集落がこの世界にあるは思えねえが、万が一、そういう場所があるのなら、そんな場所なら…アルシエが生活する場としては申し分ないと思うが…みんなはどうだ？」

あくまで、そんなの夢物語だと思って居るヘツケランがそう言うのと、「そうね…」とイミーナもそれに同意する、彼女も生まれのせいもあり、モノの見方が偏ってる部分がある。

それでも、もし自分がそんな場所で両親とともに生まれていたら、少しは今と違っていたのだろうかという感想を抱きながら、賛成をする。

「ロバーはどうだ？」

そう問いかけられた神官は「一つ、その村の内情を質問する、あくまで「仮にその集落が今もあるとして」という前提の上での「仮想話」だ。

「その場所での集落の人たちは、決して町ほど恐らく裕福ではないのでしょうが…教会や、病院のような治療施設を兼ねた、癒し手や神官などの需要は求められていないのでしょうかね？」

そう問われたヤシチ（仮）は、にこやかな表情を浮かべ、返答をする。

「恐らくはその集まりのみなさんはそこまで裕福ではないでしょう、そしてもし、自分らの住む場所に教会のような場所、ケガをした時の治療施設などがあれば、きっと喜ばれるのではないのでしょうか？」

そこまで言つて、ただ一つの懸念を最後に伝えるのを忘れない。

「惜しむらくは、そんな辺鄙な片田舎とも言える場所に、無償で…、神殿関係の協力もなく、住み込みで尽くしてくれる…そんなもの好きな神官がなかなか現れてくれないことでしょうね。」

その言葉でロバー・デイクの気持ちは、一つの結論を見出したようだった。

そして、3人が共に顔を見合わせ、うなずき合うと3人一致で「そんな場所があるのなら行ってみたい。」との話だった。

そこでジエツト氏が話を引き継いで提案をする。

「フォーサイトのみなさんも、今回の事件でアルシエさん同様、高利貸しの金貸し団体に目をつけられてしまったでしょうし…、実際今回の連中が、あの組織の荒事のメインメンバーとは思えません。今後のことを考えると、一度ほとぼりが冷めるまで…もしよければその場所に住んでみませんか？」

大都市のエ・ランテルまで、馬車でなら日帰りで往復できる距離ですよ？と聞いて、便利そうだということもあるが、なにより件の墳墓くたん調査の現場と近く、移動にも苦労しないだろうということも理想的だったからだ。

そんな話の流れに一切、参加しなかったジエツトの母は、アルシエからもらった香水のお礼と、感謝も、そして、お詫びの手紙の返信として、メツセージをしたためていた。

「それじゃ、ジエツト？ アルシエちゃんにこの手紙、届けてちょうだいね？ ちゃんとあんたが届けるのよ？」

と、母からの後押しもあり、ヤシチ（仮）から、コトの顛末をアイズに報告してもらって、再びカルネ村までの都合をつけてもらっていた。

## 第26話 新たなるリーダー…そしてその結末。

…かくして、フォーサイトのメンバーがジエットの鑑定室長としての部屋で一連の話が展開されている頃。

すでに周囲は夕暮れどころか夕闇がそこかしこにでき始めている頃、ソリュシヤンとセバスは帝都の中では良くも悪くも評判の『こがねいろ黄金色の菓子亭』にまで『馬』で到着していた。

これが真昼間であればさぞや野次馬に囲まれ、好ましくない視線にさらされていただろう…しかし今は夕闇に包まれんとしている時間、そんななか夕食の支度もせずに表をほつつき歩いている者など、仕事上でやむなく移動中か、依頼を終えて、戻ってきたワーカーや、細々と毎日の食い扶持を確保してホツとしている冒険者くらいであろう。

つまりは、昼間ほどの人ごみも、好奇の視線もほとんどない、夜とは言え、馬のいななきなどがあれば窓からでも様子を見ようとする者らは居るだろう…というところで、アインズが常に守護者に抱いている「過保護的精神」を見事に発揮して用意したソウルイーターに乗った2人は、空から帝都上空より、今回のターゲットになった建物の上辺りにまで移動していた。

「空からでは、どの建物がアインズ様に言われた場所なのか、見当もつきませんね、セバス様」

「そうですね…あまりにも似たような古びた建物ばかりです…が…、どうやらあの建物の様ですよ？　ごらんなさいソリュシヤン、屋根の上で私たちを発見し、手を振っている者が居ます。」

「あら…おっしやる通りですね、でも誰でしょう…ここから見た感じ、黒ずくめの衣装なので、ハッキリ誰か…までは判別できませんね。」

「まあ…そこらへんはあの屋根にまで行けばわかることです、声の感じからでもいいですし…同胞の者ならば、顔くらいは見せてくれるでしょう…見せてくれなくても我々だけに通じる雰囲気ですナザリックの者かはすぐにわかるのではありませんか？　ソリュシヤン…。」

「まさにその通りですわね、ではセバス様？　それではあそこまで近づきますか？」

するとソウルイーターを操っていたセバスは、ゆつくりと現場の建物の屋根の上、少し上空まで降下をし、その者の確認を始めた。

目の前には、自分達が上空から降下し始めたあたりから、ナザリックの者にふさわしい臣下の礼をとり、跪いている者が微動だにせず、頭を垂れている。

「見た所、あなたも私たちの同胞、ナザリックに属する者の様ですね、その身に纏う空気でわかります、そのような臣下の礼など不要ですわ、私たちは皆アインズ様にお仕えするという点で同じ立場の者たち：創造主様による与えられた地位の差こそありますが、それ以外は上下などはありません：」

ソウルイーターから屋根の上に降り立ちながらソリュシャンが論ずようにそう言うと、静かに顔を少しだけあげた、その黒装束の者が初めて口を開いて声を発する。

「ありがとうございます、ソリュシャン様：それによろこそお出でくださいましたセバス様も：我が主の命により、このあばらやの監視、及び、皆様への出迎え、さらには現状の報告という任を与えられましたので、こちらにてお待ち申し上げておりました。」

「あら：初めて聞く声ね：でも間違いなく、その雰囲気は私たちと通じるものを感じられる：外部の者でも、この世界の者でもないようですね：名前を聞いてもよろしいかしら？」

「申し遅れました、ソリュシャン様、私は今朝方、至高なる御身、アインズ様の御手により起動を命じられ、長き眠りより目覚めさせていただきました、「フレイラールアルアセンディア」と申します。以後、お見知りおきを…」

と言うと、再び深々と頭を下げる。

「ああ、もう立ち上がっても大丈夫よ？ 私たちは共に至高なるアインズ様を奉ずる志で集う者、という点で平等です、公式な場ではないんだし、堅苦しい挨拶はよしましょう。」

そこで会話が一区切りついたのを見計らい、屋根の上にソウルイー

ターを座らせ、降り立ったセバスが冷静な声でフレイラにこの場所に  
来た最大の目的について疑問を投げかけた。

「ところで……こちらに監禁されているという人質の件はどうなりまし  
たか？」

☆☆☆

「……ということ、アインズ様のご親交のあるような口ぶりをされて  
いたジエツトなる者が、自力で人質は救出できております。……ただ  
待ってアインズ様のお手を煩わすことを良しとしなかった様子です  
ね。」

この建物内で起きたこと、そしてその結果どうなっているかの説明  
を一通り終えたフレイラに、うなづくようにソリユシャンがジエツト  
への評価を口にする。

「そう……その精神は立派ですね、人間とは言え、アインズ様御自らナザ  
リックにご招待をされ、歓待された物の1人、きつとなにかの利用価  
値があるのだらうと思つて居ましたが、それなりの使い道はありそう  
ですね。」

「それで……あなたがここで継続的に命じられていることは先程、言わ  
れていた「アリの群れ」の話のような事態になるかどうか……それを確  
かめるため……ということですね？」

セバスがフレイラに、解決している事件の後始末ではなく、経過観  
察のみが今ここに居る理由かどうかの問いを発していた。

「はい、それもございしますが、我が主はこう申されていました、『もし  
野心のある者が出てきて、一団のトップに上がろうとする者でも出た  
場合は今後も帝国でよからぬことをしでかす可能性がある、その時は  
どの程度の団体か……規模は……？　そして、首魁はどのような輩か……  
それを可能であれば見極めろ』……と。」

「そうですか……それならセバス様？　もしその中で興味深い者が居れ  
ば、1人、私がいただいてもかまわないでしょうか？」

ぐにやりと崩れたような笑みを浮かべるソリユシャンに、小さく

「ふう」とだけ発したセバスが即答する。

「そうなるに相応しい末路を迎えることが当然の者であれば許しましょう。私も共に行きますが…館の中では私はソリュシャンお嬢さま…あなたのお付きの執事…そのように振る舞うことを忘れてはいないと確信していますが、よろしくお願いしますよ？ ソリュシャン…。」

先程の歪みきった笑顔はどこへやら、普通の表情に戻り、優雅な礼をわずかに腰を曲げることで示す。

「了解いたしました、セバス様。」

同じ屋根の上での会話ではあるが、今のフレイラにはヤシチとして身に着けている装備の早着替えのローブ、そこに〈静寂化〉サイレンスをかけていたため、二人が屋根に下りる際、自らが背負った無限の背負い袋内インフィニティ・ハヴァアサツクにそのローブを収納し、会話を成立させていた。

ローブを脱いだら、そこには当初、己が着ていた和服系の聖遺物級レリックの装備の上に黒ずくめの忍者装備を身に着けている。もちろん見えているのは目の周囲だけで、顔全体の造作はあまりよくわからないようになっていいる。

「あら…あなたはニンジャとか…だったの？」

興味深げにソリュシャンが問いかける、ユグドラシル基準なら、その職になるには最低でも60LVは必要だからだ。

もしそうなら自分よりもレベルは上ということになる。

だからこそその問いかけだった。

「いえ、この身はその職を取っておりません、これは夜の行動にはこれが相応しかろうと過分にも主より賜った物です。」

それだけ聞くと、少なくとも60LVまでは行っていないのだろうと予測をつけたため、少し興味を失ったソリュシャンは話題を変える。

まだそれ以上のレベルかもしれないという可能性はあるが、それはそれで、同じナザリックの者であれば警戒の必要もないからだ。

「そう…ま、それならあなたのことを知るのは後々でもいいでしょう…それで？ 中の人間はどうなってるの？ ナザリックの者をつけて

監視でもさせているのかしら?」

「は…私が呼び出したシェイド・スピリットを4体、中の人間どもに潜ませ、動向を逐一報告させています。」

「ああ、あの子達ね、あれらは念話の代わりに〈メッセージ伝言〉に近い会話方法だったわね、それなら今回の人選は適役でしょう…わざわざ影から出て、報告しに来る手間が省けるでしょうからね。」

ソリュシャンがそう評価を出していると、フレイラがこめかみに指を当て、なにやらブツブツと話をし始めた。

「ソリュシャン様、セバス様…どうやら一団に、遅れて合流しに来た者がいるようです、どうやら、そいつが我が物顔で仕切り始め、現場は混乱しているようですね。」

シェイド・スピリットからの報告を受け取ったフレイラがセバスとソリュシャンに状況の変化を報告したところ、なにやら上機嫌な様子に表情を変化させたソリュシャンがセバスに聞こえるように問いかける。

「そう…それなら、多分、そいつが、大元的首魁の情報を少しでも知っていることでしょう…それを期待して乗り込むとしましょうか? セバス様?」

「そうですね、ここでただ立ち尽くしているだけでは芸もないというもの…、虎兇とまでは行かなくとも、せめてなんらかの有効な情報は欲しいものですからね…」

「決まりね、では行きましょう、セバス?」

「ハイ…お嬢さま…。」

即座に「金持ちの令嬢とその執事」の芝居に入った2人は屋根から音もなく地面に下りる直前、フレイラに1つ指示をする。

「あなたは屋根から見張り、外に逃げ出す者などが居たらその者らの確保をお願いね…」と。

そして、思いつきりこのような裏通りには似つかわしくない程の上等な衣類に身を包み、豪華な装飾具をこれでもかと言わんばかりに身に着けた2人が、建物の中に入って行った…もちろんソリュシャンは戦闘メイドのメイド服ではない…。

とは言え、その衣服だけでも、セバスもソリュションも、最上級のレアリテイの物を身に着けている。

一般メイドが身に着けているメイド服が、この異世界ではミスリル製のフルプレート並の硬さだとすると…今回この二人が身に纏っているのは、オリハルコン以上、アダマンタイト弱、といった装備だ…、現地のナイフ程度では傷1つ付かないだろう逸品で身を飾って堂々と中に入ってしまった。

☆☆☆

「おら、おまえら、何してんだ！ 人質を確保したんじゃねえのか？

連絡役からそういう報告があったから俺が来たって言うのによお！」

明らかに、神経質そうな声を張り上げる男が、来たばかりで場を仕切るように声を張り上げている。

ここは裏通りで、あまり人も通らない区域だとは言え、そんな大声でまくし立てていたら、誰に聞かれてしまうかわかったものでもないのに、こいつはそんなことも理解できていないのか？という想いを手下の一同…無論全員から、そういう目で見られているのにも気づかず、相変わらず、自分が気に食わないと思った何かが見界に入るたびにダメ出しを繰り返していた。

「まあまあ、リーダー、来たばかりでまだ自己紹介や、誰がどんな役割かもお互いにわからないんですから…とりあえず、どういう役割分担なのか分かり合った方がいいんじゃないかと、すみません、もちろんリーダーなら、そのくらい先にわかってましたよね、横から余計な口を挟んじやってすみません。」

そうなだめるように間を取り持とうとしているのは、そのリーダーに着いてきた筋肉の盛り上がりで反比例して、物腰は柔らかく、どこか幼げな雰囲気をもと…わかりやすく言うならば、明らかにそのリーダーと呼ばれる男の古くからの弟分なのだろう…そいつの気質を知った上で、プライドを傷つけないように毎度、助言をしている。

「まあ、わかっちゃいたけどよ、こういうのは始めが肝心だから…この世界で生きていくにしたって舐められちゃ生きていけねってこ



とはお前だつてわかつてるだろう？　もう俺らはあんな失敗はできやしないんだからな…わかつてるな？」

「そうですね、兄貴なら、前の失敗を材料に今回のことに活かせる人だと思つているからこそ…でしたが、余計な口を挟んだみたいで、許してください。」

「ああ、オレだつて、あんな情けねえ想いはもうコリゴリなんだよ…お前の心配もわかるつてもんだ。　お前を責めやしねえから安心しろ。」

と、ここまでのやり取りでようやく頭の中がある程度冷静になつてきた「兄貴」と呼ばれていた、リーダー格（と言つても二人組なのでその2人以外は居ないのだが…）の男が気を取り直して再び口を開く。

「すまねえな…大人げなく声を荒げちまつて…オレはイグヴァルジ、最近、ボスに身内にさせてもらつてな…、小口の稼ぎとは言え、細く長く安定した継続利益をたたき出してるお前らの評価はボスも決して悪く思つてはいねえんだ、だからこそ、力を貸してやつてくれつて頼まれてここに来たわけだが…」

「そして、おいらはヴァイエル、兄貴が今のボスに認められるよりも前からのチームメイトだ。　兄貴に救われて…拾われてなかつたら、今のおいらはない、だからおいらは何があつても兄貴の助けになろうと決めた、それがおいらの生きる道と決めたから。　つてわけだから、とりあえず、みんな、よろしくな。」

賢明な読者の皆様は、なぜこんな時に、こんな場所（帝都）などに、こいつが居るのかと不思議で仕方ないだろう…それもこれも、全部このイグヴァルジ自身が、自分の成長しきれて居ない精神年齢を抑え切れなかったが故だろう、よく言えば「英雄願望が強すぎ、自分がそうでありたいという一心からの暴走」であり、悪く言えば「ただのガキっぽい高望みに己の能力が及んでいないことを認められなかった」というだけである、どちらにしてもどうしようもないヤツという評価以外

ないのだが…。

そもそも、これも自分より後に冒険者として登録し、先日までカットパー級だったはずなのに、気がついたら、数千のアンデッドが発生した事件を自分のチームだけで解決し、ほんの数日で自分たちのかつて所属していたチームと同等のミスリル級に昇格…その後は、定期的にトブの大森林にて、モンスターの間引きをずっとしていることにより、実力をつけてきたことを正式に認められ、冒険者組合長と、魔術師組合長の二人を相手にし、2VS2の模擬戦闘で圧倒した件を経て、オリハルコンに昇格。

その直後に発生した王都への悪魔襲来事件に参加して、他の冒険者達とも協力することになった上、これまた自分らのチーム+別のアダマントチームの1人、魔法詠唱者のゲストというただの幸運に恵まれただけのクセしやがって、悪魔を撃退できたことを自分の手柄みたいにするまって、しかも王様から短剣を貰ったっていうじゃねえか！

うちらだつて、その気になれば悪魔くらい恐れず、立ち向かえたんだ…という、その悪魔の実態も強さも、凶悪さも全く知らないからこそ言える勝手な言い分を振りかざし、すでにアダマントイトになつてしまつていた『漆黑』を名乗るチームにコトあることにつっかかり、わざわざ敵対するかのようになケンカ腰の口調で煽っている。

大物の『漆黑』のリーダーは「やれやれ…」と言った風ではあったが、いい加減エ・ランテルの都市長、そして初めてエ・ランテルで生まれたアダマントイト冒険者のチームを手放したくない冒険者組合長に、魔術師組合長まで出てきて、クラルグラに注意勧告がなされたのだ。

都市長が介入してきたのは、せつかく現れたアダマントイトチームが…、あらわれた直後に別の国か、街にでも移籍などしてしまつたら、エ・ランテルの評判はもちろん、この街の護りという意味でも、住人の精神的な支柱という意味でも、もはや『漆黑』は無くってはならない存在となつていたのだ、それに比べたらクラルグラレベルのチーム1

つくらい、滅つた所で『漆黒』とは比較にもならなかったのだ。

そして、普段は魔法のことに關してのことに重きを置き、滅多に政治的なことに關与しない魔術師組合長までが顔をつ突つ込んできた理由は、悪魔退治の時にさかのぼる…、悪魔退治の際、当時まだオリハルコンだった『漆黒』が悪魔撃退の先陣として切り込むことに対して、共に行くから大丈夫だ、と保証している「王国のアダマンタイト冒険者」の、仮面をつけた小柄な魔法詠唱者マジックキャスターが着いていくとは言え、あまりに無謀だとほとんどの参加者が否定する中…「切り札ならある」として出してきたのは大きな水晶のような塊、その中には第9位階魔法が封じ込められているという…。

試しに参加者の中で道アブレイザル・マジックアイテム具デテクト・エンチャント鑑定が使える者が調べてみた結果、〈付与魔法探知〉を使用しなかったせいで中の魔法までは分からないが、確かに第9位階魔法が入っているという証明がされてしまったのだ。

結局、悪魔騒動の際、撃退するのにそれを使用したという話は聞かなかったため、魔術師組合長としては…あわよくば、恩を感じてもらふことでその水晶のような塊を…と内心計算しての行動なのだが…そのようなことをイグヴァルジは知るはずもなく…彼の中では「あの野郎、目上の者にゴマをすることはかなり得意みたいで、気に食わねえ」という印象が新たに根付いてしまい、さらにこじれてしまう…。

結局、彼の『漆黒』への対応に変化があるわけもなく…というより悪い方向で変化は起きてしまい、尚更ヒートアップするイグヴァルジを見かねた冒険者組合長インザックがイグヴァルジをクラルグラから追放処分にし、他の冒険者組合に所属できないように布令を出し、情報共有を図ることによって、冒険者としての資格を剥奪されてしまったイグヴァルジは、どこの都市、国、からも冒険者組合に登録できなくなってしまう。

そのため、凶らずも彼は「目の上のたんこぶ」扱いでいた『漆黒』チームとは全くの別次元で『漆黒の名簿』ブラックリスト入りという、周囲の者に聞かれたら、雲泥の差がある評価をその身に背負うことになり…、王国

には居場所はなく：聖王国は獣人たちとの争いごとでそれどころじゃない、どころかそんな国に行ったら自分の身の上もあやうい。

そして竜王国でもそれは同様、というより、聖王国よりも竜王国の方がもつと深刻という話をすでに冒険者時代から聞いていたので、消去法により帝国に来るも、どうしてもワーカーという：ある意味「脱<sup>ドロップ・アウト</sup>落組」になってしまうことに抵抗を示し、なけなしのプライドを維持していたのだ。

そこに声を掛けてきたのが今回の話に出て来た「ボス」なる人物だ：、「ワーカーも、冒険者も目指す地位としては小さい：キミのような野心を持つ者は、上に立つべき宿命を持っているのだ、それは1チームで収まる器じゃない：裏の社会を踏み台にして、さらにそこから国を裏から操る、影の存在として君臨するべきだ！」という言葉にコロつと説得され（騙され）てしまい、今に至る、という経緯で、帝都の影の一部門を掌握するところからコツコツと段階を踏んでいる最中の彼は、異様に張り切って、それが空回りしていることなど、全く気にしていないのだ。

そして、そのイグヴァルジに着いてきたのがヴァイエルという男：この男は、イグヴァルジを「恩人」と思っていて、そのためならどのような苦労も厭わない！と考えるほどに、イグヴァルジを慕っているのだ。

それもそもそも、彼が冒険者として駆け出しとして成長中だった鉄級冒険者チーム「コン・グラツィア」その中で、回復担当だった彼は、後方&最後の命綱扱いされていたので、最後まで生き残っていたのだが、大森林での薬草採取の依頼中、不幸にも2体のオーガ、そしてウルフに乗って機動性でかく乱してくるゴブリンが2体、普通に足での移動で、接近戦を挑むゴブリンが3体という不幸な事故が起きてしまったのだ。森の中はモンスター<sup>ドレイド</sup>の得意な地形であり、地の利も向こうにある、仲間には森祭司<sup>マジックキャスター</sup>や魔法詠唱者、重装戦士や、槍使い<sup>レンジャー</sup>、野伏<sup>レンジャー</sup>、さらに盗賊も居たのだが、ウルフに乗ったゴブリンを1つと数えたとしても個体で「7」それに対して、こちらは同じ「7」とは言え、近

接戦闘が安心して出来るのは、重装戦士と、槍使いの2名のみ……あとは遠近を使い分ける為、戦闘力ではやや不安のある野伏レンジャーに、盗賊、後方支援は森祭司ドルイド、魔法詠唱者マジックキャスター、そして回復役のクレリックの自分だ……。物量としては難しかった、オーガ2体は戦士系の2名がブロックしてくれているも、ウルフに乗ったゴ布林2体が野伏レンジャーに、盗賊という素早さを活かした戦いをする者らに挑み、その機動性で、長所を潰してしまっている、しかも森の中……樹木に隠れたり、藪の中から飛び出してこられては対応も一瞬遅れてしまう、森祭司ドルイドや魔法詠唱者マジックキャスター、そして私がかまく支援しても……いつ、残った3体のゴ布林が肉迫してくるかわからない……。最初こそ対等に渡り合っていたが、次第にスタミナの面で開きが出てきた。

ウルフに乗ったゴ布林を何とか一体仕留めた野伏レンジャーと盗賊だが、トドメを指す瞬間を読まれ、もう一体のウルフに乗ったゴ布林に、森の中では要注意な野伏レンジャーが最初の標的にされ、犠牲になった。

残された盗賊も、その流れを見ていた、徒歩ゴ布林3体に囲まれ、多勢に無勢、魔法詠唱者マジックキャスターと森祭司ドルイドの支援を受けながらも最終的にウルフを仕留め、徒歩ゴ布林の2体を片付けた段階で、横から突き出されたウルフから降りたゴ布林のショートスピアが脇腹に刺さってしまった、そのゴ布林は突き刺さったままの槍の先を盗賊の体内に残したまま自ら槍を折ると、倒れたゴ布林のショートソードを拾い、再度盗賊に襲い掛かる、回復をしようにも、体内に槍の先が残っていたのでは、体内にそれが残されてしまい、回復に意味がなくなってしまう。

それを察知したのか、最初からそうするつもりだったのかは知らないが、盗賊はショートソードを持ったゴ布林の攻撃を正面から受け止め、深々と刺さった武器を抜かない内に抱きしめにかかり、首の後ろに自分の武器をめった刺しにして、相打ちになった。

徒歩ゴ布林3名の内、2名はやられたものの、最後の一匹は、魔法詠唱者マジックキャスターの近くにまで、接近、襲いかかろうとするも森祭司ドルイドの植物の絡みつきトワイニング・ブランドに阻まれ、身動きが出来なくなっているところを魔法の矢マジックアローで、仕留められる。

しかし、ここで最悪な事態が起こる、襲いかかってきたゴブリンに気を取られていたのもあるし、恐らく、戦闘の気配に誘われて：というのもあるだろう：もしかしたら、血の匂いか何かに誘われたのかもしれない。唐突に背後から、足元にまで接近していた「森林長虫」の大型が最後尾に居た魔法詠唱者マジックキャスターを丸呑みにする。

回復役の自分とは言えば、まだ息が残っている盗賊の身体から槍の先を引き抜き、治療をしようとしていたため、森林長虫フォレストワームの近くに居なかつたのが幸いし、難は逃れたが、ドルイドだけでは決定打に欠けていたため、ジリ貧で森祭司ドルイドも倒れて丸呑みされてしまう。

それを見ながら、しかしオーガ2体をブロックすることに精一杯の戦士2名は、他に力を割ける余裕はなく、どうしようもなかった。

その時、ようやく傷口は塞がってきたが、まだダメーჯが完全に癒しきれていない盗賊が、ヴァイエルの前に立ち、森林長虫フォレストワームに向かっていく。

勝負は目に見えているように思っていたが、予想以上に森祭司ドルイドの彼が善戦していたようで、森林長虫フォレストワームの反応もかなり遅くなっていた。

最後の力を振り絞ったのだろう、盗賊の彼は、森林長虫フォレストワームの頭の部分にショートソードを突き立てると、敵も最後の力を振り絞ったのか、盗賊を締めあげ、お互いにコト切れたようだった。

これで残されたのは戦士の2名が受け持つオーガが一体ずつ：そっちに回復を専念すれば勝てるかも：と思ったのもつかの間、一歩遅く、槍使いの戦士がオーガの剛力によって振り下ろされた棍棒を防ごうとした槍ごと折られ、絶命してしまう。

これで、傷つきながらもまだ余力を残しているオーガが2体と、重装戦士と自分だけ。

即座にクレリックの彼は「祝福されし護り」ブレスド・ガードを重装戦士に発動させ、防御力の底上げ、そして「祝福」ブレスも使用し、わずかながら攻撃力にも威力の向上を上乗せさせた。

しかし出来るのはそこまでだ：ポーションくらいは持って来ているが、これは戦闘終了時に飲んで（飲まずとも体にかけてもいいが：）、時間をかけてようやく効力が発揮される、戦闘中では準備してい

る最中に攻撃を受けてしまうし、回復の見込みもなく、意味はない。  
〈ライト・ヒーリング軽症治癒〉をかけようにも、重装戦士とオーガが近すぎる為、回復魔法の範囲にオーガも入ってしまう。

どちらにしろ、今の自分に手伝えることは見守ることだけだ……いや、1つだけあった。

そう思いなおし、オーガ2体を相手に、1人で防戦一方の重装戦士の支援をするため、スリングを用意する、購入時に専用の弾石は購入済みだ。

槍使いが戦っていた方のオーガの方がややダメージはあるっぽいと見たヴァイエルは、そっちのオーガにスリングの支援でなんとか対応した。

しかし、結局は速度が乗ったという程度のただの石だ……、オーガにとっては煩わしい程度だし、直接目に当たったり、額や鼻に当たったりしない限りはそこまでの脅威ではない。

とは言え、ずっと放置していると、ホントにイヤなタイミングでスリングの弾が邪魔をしてくる、なかなか目の前の重装戦士に集中ができてきない。

そう考えると、「あのスリングの男を先に始末した方がいいだろうか？」という考えがオーガの脳内に浮かぶ。

そんな考えが浮かぶと行動は早かった。そのオーガが、目の前の重装戦士から目を逸らし、自分にイヤらしい笑みのような歪んだ表情を向けて来たと思った瞬間にイヤな予感がした。

〈ブレスド・スビード祝福されし速攻〉を自らに発動させる、するとそれと同時にオーガはやはり自分に向かつてきた。

「速攻」となっているが、攻撃に特化された魔法ではなく、普通の移動、そして走る行動だけでも恩恵が入る、そのため、オーガに追いつかれない為に必要だった。

まだオーガとの距離があるうちに、もう一つ、効果は一点タイプより上昇率は劣るものの、オールマイティに全てに効果がある〈ブレス祝福〉もかける、ほんの僅かだろうが、これで移動速度や、ダメージ減少に防御の微上昇もかかっただろう……かけ終わりふと前を見ると、あと2く

3歩走ることを許せばオーガが自分にたどり着けるのではないか？  
という距離だったため、ヴァイエルは駆けだした。

後ろでオーガと一対一になった重装戦士に届くように声を張り上げている……

「こっちのオーガはおいらがひきつける、だから、そっちを片付けたら応援お願い！」とだけ言い残す。

重装戦士の返事を待っている余裕はない、あとは、自分が少しでも長く生き延びることが出来れば……そういう淡い想いを抱きながら、ひたすら森の中を駆け出し、オーガに追いつかれないようにする。

もうスリングを撃つ余裕はない、それならと、走りながらスリングを仕舞い、オーガから少しでも離れることに専念し、走りながらも躓いたり、転んだりしないようにだけ注力し、森を駆ける。

果たして、あとどれくらい走れるだろうか……そう思っていた時に突如、声が掛けられた。

「こっちだ、そのまま全速力でこっちの方に逃げろ！ とにかく後ろは振り返るな、足が千切れても走れ！」

その声で、声のした方に向かって逃げ出したヴァイエルは、とにかく後ろを振り返る余裕はなく、走りに走った、そうすると後ろから悲鳴が聞こえた……恐らく重装戦士がオーガを仕留めたのだろうと、考える。

あとは、自分がこいつを引きつけ、追いつかれなければ、戦士が追い付いてきて、なんとかなる……そういう希望が自分に力を与えてくれた。

逃げに逃げている間、自分を追いかけてくるオーガに対して、恐らく、声を掛けてくれた相手が、自分の狩場で仕掛けておいたものだろう……そのワナがオーガにかかり、かかった罠からオーガが抜け出す。そこから抜け出そうともがいてるうちにヴァイエルは余裕のある距



離を保つことに成功した。　まとわりつく分銅付きの投網からオーガが抜け出したと思うと、再びトラップ、躓き、転んだすきに矢の雨を降らし、体力を削る。

起き上がったオーガは、それでもこっちを追いかけてくる、その間、恐らくどこかの木の上に居るのだろう姿の見えない存在より、目に見えている逃げ出している獲物を追った方がいいと判断したのだろう。追いかけてくるのはやめてはくれない。

「よし、そこで、目の前のヒザくらいまである石を右側に迂回して、岩の少し左の方にまっすぐに逃げるんだ。」

その声のままに従い、目の前の大振りな石を迂回するように回って、少し斜めにまっすぐ進むように逃げる。

しばらくすると、大きな悲鳴が聞こえた。

あの声は自分を追っていたオーガの声、なにがあつたのだろうかと思っていると、自分が迂回して回った石の真横、左側（振り向いた自分から見たら石の右側だが…）に大きな落とし穴があり、オーガがそこに落ちている、かろうじて上に伸ばした手は見えるも、指が淵にからないようだ。恐る恐る穴をのぞき込むと、落とし穴の下に無数の竹が鋭角に切られて、ヤリのように地面から突き出したように埋め尽くされている落とし穴に見事に落ちてしまったようだ、尻や背中に竹ヤリが刺さっている。

それを上から見降ろしていると、いきなり姿を現した見知らぬ男が、数人の仲間らしき者らと共に弓矢を雨あられのようにオーガにお見舞いしている。

たつたそれだけで、ことは済んでしまった。

「大丈夫か？　仲間のみんなは大変だったな…、1人だと冒険もできないだろう。彼らを一緒に吊ってやるから、俺らの所に来ないか？」

自分を助けてくれた男に対してのお礼を言っていると、後ろから声が聞こえた。

「良かったな、お前の方も無事だったか…。こっちもなんとかできたよ、さすがに2体は厳しかったが、1対1なら装備の差で補えた。防御支援と祝福の魔法にも助けられたよ。」

そう言いつつ姿を現したのは、同じチームで最後に残った仲間、重装戦士の「ブリランテ」だった。

それを見て確認すると、自分を助けてくれた男は二人に声を掛けてきた。

「ああ、その戦士くんも無事だったようだね、良かった、それじゃく良ければキミもどうだい？ また一からメンバーを集め直すのは手間だし時間もかかって大変だろう。」

その声はどこまでも優しい気に聞こえた、自分らにとっては命の恩人だ：そう思つて、その申し出を受けることにした。

どの道、薬草採取の用事は済んで、帰り際の痛ましい事故に見舞われただけで、戦闘に入る前に下ろしたカゴを回収するだけで、今回のクエストはこなせたという名目は成立しているも同然なので、気も楽だった。

自己紹介で、イグヴァルジと名乗ったその恩人は、快く自分たちをチームに迎え入れてくれ、共に実力をつけるのを手伝ってくれた。

それからの自分は『回復役』と自分を決めつけなくてそれ以外にも何かできないかと模索し続けた…。

その結果が今の筋肉に身を固めた体躯だ：そして、通常の倍の長さの柄の先に球状の鉄球にスパイクを全周から生えさせているモーニングスター。

これで剣が届かない間合いの相手にも、攻撃は届く…、持ち手となる柄の部分だけでも通常のロングソードと同じくらいの長さがある。

そして、かいくぐつて接近してきた相手には逆の手に握っているスパイク付きメイスで攻撃をお見舞いするという攻撃方法。

もちろん攻撃だけじゃなく支援魔法、強化魔法、回復系の魔法にも手を広げた。

無論、それだけでは武器で両手が塞がり、アンデッドに襲われた時〈聖印／ホーリーシンボル〉を取り出す時に1アクション行動が遅れる…そのため、考え付いたのが、バックルのように手首に装着し、わかりやすく言えば腕時計の時計部分に〈聖印／ホーリーシンボル〉を

固定させるような仕様となるよう身に着けている。

これで、万が一のことがあっても武器を持ったまま、手首を返し、上の方に掲げるだけでアンデッドに対しすぐに“ターンアンデッド”を発動できるようにしていた。

一風変わった装備群だし、二刀流ならぬ、二棍流だが、それで、防具さえしつかりしていれば、充分にみんなの役に立つ。そう思い、ヴァイエルはそれに満足していた。

もちろん、それらの行動の全てがイグヴァルジさんが居てくれたからこそ、ここまで来られたのだと心から感謝している男が、このヴァイエルという男。

しかし、イグヴァルジも言わず、ヴァイエルも知らないことだが：この時彼は、森に入る前に賭けをしていたのだ。

同じ時期に冒険者チームを立ち上げ、共に競い合っていた『天狼』のベロテ、彼に持ちかけられた、というより一方的にイグヴァルジをからかって、煽っていただけだったのだが…。

その内容は、今日一日で、新しくメンバーを多く増やせた方のチームが、今日一日の儲けを総取りできるって言うのはどうだ？ …という内容。

ベロテにしてみればいつものからかい半分の冗談であって、乗ってこようが断ってこようがどっちでもよかった。

事実、イグヴァルジ自身はこの時から色々と難がある人物という感じは時々見えていたのだ、そんなヤツに従うやつなんてそうそう居ないだろうというタカをくくった理由があったため。

それにこの時『天狼』はクラルグラの倍の人数だったのだ、万が一、その日の儲けがなくなろうと、翌日に、倍ががんばればいい。

それというのも、この賭けを持ちかけたのが、黄金と呼ばれる王女が言い出して、それを基にして法律となった『モンスター討伐の部位に応じた報奨金』の件が本格的に始動された翌日のことだったからだ。

イグヴァルジも、自意識過剰という点に於いては他の追隨を許さな

い、「オレらのチームが負けるわけはない！」とばかりにその賭けに乗った結果が、今回の気まぐれな救出劇につながったのだ。

そうとは知らずに、未だにヴァイエルはイグヴァルジを慕い、冒険者資格を剥奪された今でも…自分は剥奪まではされていないのに、ずっとイグヴァルジのそばにいる。

「自分のことを見つめ直したい」という理由でしばらく冒険者組合には顔を出さないことを告げ、言わば『休職』扱いにしてもらい、ひっそりとイグヴァルジのそばにいる。

イグヴァルジから見れば、ヴァイエルは何を指示しようとイヤとは言わないし、逃げる間、足止めをしている！と命じても喜んで火の中に飛び込むようになってる。

イグヴァルジからすれば全てが謎の行動なのだが、ヴァイエルからすれば、あの時、オーガの腹の中に納まっていたかもしれないはずの命なのだ、ならばイグヴァルジの為に命を投げ出そうとも、それは今までの礼の形だ。と思っているのだ。

イグヴァルジからすれば、よくわからない男だが、自分をよく盛り立ててくれるし、都合よく使われてくれるし、まあ邪魔さえしなければいいだろう、いらなくなったら肉の壁として、どこかの戦場でしんがり殿として、置いてきてもいい。

その程度にしか思っていないことをヴァイエルは気づいていない、どこまでも温度差の激しい二人なのだった。

☆☆☆

「ところでよお…報告にあつた人質つてのあ、どこにいるんだあ？どこにも居ねえみたいだが？」

来た時から探している、確保したと報告にあつた人質がどこにも居ないことを不審に思ったイグヴァルジが手下のBに問いかけるも、もちろん手下のBはこの時、外の見張りをしていた。

「自分は、外を見張ってたので…あ、でもAの奴が、見張りを交代するって言つて変わってくれた後は、どうなってるかわからねえです

ね。」

手下のAが内心で冷や汗をかく、たしかに〈魅了〉の魔法の支配下にあった時、見張りを変わるということにして、自分が見張り役になり、その隙に誰にも見つからず、人質を解放してしまったのだ。

しかしそれがバレたら、組織にどういう目に合わされるかわからない：だからココはその場しのぎを実行する。

「ああ、はい、その時は人質の姿は見てません、ただ：リーダーの兄貴がちよつと外に出てくるって言って、お客人らを連れて行ったはずです、その後は知りませんが：」

そんな言葉を言っていると、手下のCが口をはさむ。

「あれ？お前、オレと人質の見張りを変わってくれなかったっけか？」  
どつと冷や汗が浮かぶ：どうしよう：どう言い訳しようと思っていると、もうどうにでもなれ！という心境になり、口から出るに任せて言葉を吐き出していく。

「ええ、はい、リーダーの兄貴に呼ばれて、人質の見張りの交代を指示されたんです、そして、少し見張りをしていたら、すぐ隣で「お客人」と話していた兄貴から呼ばれて、『今からちよつと外に出てくる、その間、人質を起こさないように少し強めの睡眠効果のポーシオンを嗅がせとけ：そしたら表の見張りと変わっていいから：そんじや俺はお客人と一緒に、裏口から出させてもらうぞ？』って言って、外に出てっちゃたんです。」

「さっきから言ってるけど、その「お客人」って言うのはなんだ？」

「ああ：それは、その人質の関係者つす、うまくすりや身代金どころか、行方不明になっている金蔓と、買い取った幼女2人を一気に手にできるかもって算段だったんすよお」

「ああ：そうすりや、金の方の心配はなくなるってことか：：そんで？その兄貴とやらは今どこなんだ？」

手下A、手下B、手下Cがそろってお互いを見て、どちらも知らないという顔をする。

「おめえらー！人くらい、その兄貴の護衛でもなんでも着いていかなかったのかよ！」

バン！とテーブルに両手を叩きつけ、盛大な音が周囲に響き、AもBもCも一様に恐縮している。

…すると、外に通じる扉をノックしている音がする。

「なんだ？　なんか用か？」

扉の方を開けもせず、ノックした者にそう告げる、すると遠慮がちに扉から顔を出した手下Dが恐る恐ると言った感じで、用件を告げる。

「あのおく…イグヴァルジさん…今、この家に用事があるつて言うすつげえ金持ちっぽい二人組が来ましてですね、責任者に会いに来た、つて言ってるんすけどおく…」

「あああ〜くん??」

「どこの誰だ？」

心当たりのないイグヴァルジからすれば、本当にそういう感想しか出てこない、一目見ただけでわかるほどの金持ちがオレに会いに来た？

今の状況と何か関係が…そうとすれば、その元リーダーとやらが一緒に居るはずだ…。

しかし、その用件を伝えに来た者は一言も「兄貴」なり「リーダー」とは口にしなかった、ということはウチラとは関係のない二人組だろう…益々、謎が深まっていく。

「やあ〜?」

もちろん、この用件を伝えに来た者も、当然そうとしか答えられない、それ以外の情報は全くわからないのだから…。

実は、話題の主役である「元リーダー」が、客人の魔法によって『ぬいぐるみ』にされた挙句、魔法空間に閉じ込められ、いずれ、ナザリツク送りにされる可能性が濃厚なことなど、この訪問した2人以外は誰にも知り得もしない事なのだから、致し方ない事なのではあるが…。

「やつと通してくれたのですね…この犬小屋みたいなホコリっぽくて汚らしい場所には長く居たくはないというのに…セバス！　なんとかなさい！」

「お嬢さま…ここはどうぞ、ご辛抱ください…ここに居るのは平民の中でも少し…慎ましい者らなのです…お嬢さまと同じ生活が出来る者どもではないのですから…」

「わかつてるわよ！　でも臭いものは臭いの！　まるでこつちにまでその匂いがついてしまいそうで我慢がならないの!!」

癩癩を起こしたようにいきなり、お付きの執事にあまりにも無謀な要求を突きつける金髪の女…これほどの上玉は今までだって見たことはない、帝国4騎士の紅一点だって、まともであればさぞや美しいだろうが、それでもこの目の前の女にはかなわないだろうというほどの美貌を持ち合わせている。

第一印象の言動で、いかに内面が残念であるかはココに居を構えている者らからすれば一目瞭然であるが、このような見るからに「金持ち」がこんなところに何の用だろう…

そう思っていると、その女が目の前に居た男に鋭い目を向けて、声を荒げた。

「ちよつとそこのあなた？　何を見ているのかしら？　いったいいつになればここの責任者と話ができるというのー！」

「ああ…オレが、今の所、ここでの責任者だが…あんたはここに何の用だ？　こんな所に用もなく来てタダで帰れるとは思っちゃいねえだろうなあ？」

元冒険者でもあるイグヴァアルジは、腐ってもミスリルの実力は持っているのだ、その男に凄まれでもしたら、大抵の者は何かしらの反応はあるはずなのだが…

「そう…あなたがそうなの…全く、こんな場所にいる者にふさわしい下卑た言葉しか使えないのですね…まあ、下々の者に一々目くじらを立てても話は先に進みませんから、とりあえずは大目に見ましよう。」

目の前の女は、怯えるどころか、全くこちらの言葉に何の関心も示

さない：せいぜいが、そこいらのいきがった子供のギャング気取りが威勢よくこちらを威嚇してるんだろうな：程度にしか受け止めていないのだろう。

「あなたの方が、こともあろうに、ウチが経営している傘下の従業員の親族を誘拐したとかいうじゃない？ 部下の親族と言えば、家族も同様：見過ごせはしないでしょ？ …それで？ どこにいるのかしら？」  
計算も何もなく、単刀直入に告げる真相：きつとさつき言ったように一分、一秒だつてここに居たくないがための反応なのだろう：ずうつと、口元にハンカチを当てている。少しでもこのむさ苦しい匂いを感じないようにしたいのだろう…。

「さあ、なんのこともやらかりませんねえ…こつちとしても身に覚えのない事で、急にそんな話をされてもねえ…これは迷惑料として、いくらかもらわなけりや、割に合わないつてもんでしょ？ 違いますか？」

何も知らないのに、言いがかりを付けられた風を装い、この金持ちから、いくらふんだくれるか…という皮算用を立てていると…

「悪いけれど、猿芝居に興味などないわ…こつちは従業員から報告を受けて、ここまで『わざわざ』出向いてきたの…知ってることは洗いやざらい話さない…今、正直に話すのなら悪いようにはしないわ？」  
（目の前のお嬢さまは、どこか楽しげだな…いや…オレの勘が正しければ、これは楽しんでるのではない…正確に言えば、先の展開を予想してすでに『勝ち』を確信していたぶつている…と言った方が近いかもしれない…、なんかシヤクだな…どう言えばコイツの思惑通りに行かずに、こつちの有利に話が進む？）

イグヴァルジはどう考えても現状ですでに詰んでいることにはまだ気づいてすらいない、見えない銃口がすでに額に突き付けられ、セーフティなど初めから存在しない部類の警告をさされているようなものだ：だというのに、まだ自分は何とか切り抜けられるという淡い望みを持っている…ソリュシヤンはそれを楽しんでいるのだ、どう答えようが、すでにこつちの思う壺、こいつらがなにもかも洗いざらい答えるはずはないが…、



答えてくなくてもそれはそれでいい…、答えなければ、あの拷問官に引き渡すだけだ…、どうせ一部だけ答えて、大部分は隠すという手段に出るのだろう…アサシンとしての職を持ち、マスターアサシンも取得している私からすれば、相手の表情からだけでも「ソレ」を見抜けないはずはない…偽証の看破など容易なのだ…。

もちろんそれは確証のない自信などではなく、かつて王国にて『帝国からの商家から来た娘』という立場から、あらゆる商人たちとの会合を持ったからこそ、その経験から裏打ちされている自信なのだ…。(仕方ない、少々痛い目を見てもらわなきゃ、どうにも展開はこつちの良いいようには進みそうにねえな…)

「おい…ヴァイエル…このお嬢さまはオレらのことを誤解されてるよ。うだし、口の利き方もご存知ないようだ…、ちよつとオレらと同席するときの言葉遣いを身体に教え込んでやれ？」

いきなり話を振られた、「イグヴァルジのブレーキ役」、そして彼の〈致命的大失敗〉を素で踏み抜いてしまう能力は、危険を感知する能力同様、同じくらい高いため、時々、『危険を感知する能力の感度が鋭すぎて振り切れた程の大きな危険には反応してないのか?』と疑いたくもなることがしばしばなのだ…。もちろんそうはさせじと、その回避こそが自分の役目であるのに、どうしてこうも「やりすぎ」をスキ好んでしかさそうとするのか…ヴァイエルには全く理解できなかつたが…これだけは言える…これは手を出してはならないものだ…と。

額に汗が浮かび、冷えたものになり…頬を伝っていく。一応は、回復役、神官としての仕事を中心だったとはいえ、イグヴァルジの指示で、何度も戦場の最後方、彼を逃がすための足止めをしてきたから…、だからこそわかる…どんな局面での戦場でも逃げ場はあった…ここを切り抜けければ、なんとかなる。その目利きも自分は磨いてきた…だがこれはダメだ…ダメな存在なんだ…と体の奥から、あらゆる身体反応が警告を発している…だというのに彼…イグヴァルジには、どうやらそれがわからないらしい…。

ヴァイエルがソレを感じるのには、なにもソリュシヤンからだけではない、後ろでただ何も言わず、気弱な感じで直立している鋼のような

執事：彼の方がよほど、底が知れない…どう言ったらいいのだろう…自分たちがいるこの建物、これが今…ただの檻のように思えている、その上で、彼女は自分たちを捕食しようとするなにか得体のしれないもの…そしてその後ろに控えている執事…彼を例えるなら…虎、いやそれに収まるものじゃない…生物上で最強、頂点とも言えるドラゴン、それに例えてもいいかもしれないという重圧。

ヴァイエルはそれを肌で感じ取っていた。

「悪いですけどリーダー、そりゃくまずいですわ、この方は口ぶりからして、どっかの大商人の娘さんじゃないですか？ 執事さんもいることからして、かなりの有力者だ…しかもこんなところに二人だけ…つてことはこの執事さんは腕に自信もある…それを下手に刺激したら、上にも危険が及ぶ可能性がありますよ？ ボスに迷惑かけて、尻ぬぐいをさせるおつもりですか？」

遠回しに「こいつらは危険なんだって、やっべえんだって！」と訴えているヴァイエルの必死の抗議の声も、イグヴァルジの耳にはどうやら届いていないようだ…昔から、こういう『人の言葉に機微を感じ取る能力』の欠如はどうかできないものかと、良く頭を抱えたくなっていたものだが…ここに来て、それが悪く作用するとは…と頭を本当に抱えたい衝動に駆られる。

「お前は、俺に命を助けられて感謝してるんじゃないかったのか？ 俺のために働くんじゃないのかよ?!」

額に青筋でも浮かべてるんじゃないかってくらいの表情でイグヴァルジは、ヴァイエルを睨んでいるが…ヴァイエルも目の前の相手に話は充分に聞かれている会話内容であったため、踏み込んだ本題は切り出せない。…よもや、相手がバケモノじみているので命が危ないなんてことを言おうものなら、自分らに訪れる未来が明るいモノには感じられないからだ。

「いや…ですから、大商人の娘さんに傷でも負わしたら、やつら、金にモノを言わせて来るでしょ？ そうしたら、どんな勢力が割って入ってくるかわかったもんじゃねえでしょ？ どっかの裏社会から、八本指みたいな連中が出てきたらどうするつもりです？」

必死に頭を働かせ、なんとか言い訳が通りそうな説明をしようと脳内の情報をこねくり回して、言いくるめようとするも、イグヴァルジはどうやら、それを上回る○○○だったようだ…。

「そんなときや、そんな時だろうがあ！　ボスに迷惑を掛けず、オレらで対処して、闇から闇に…でいいんだろ？」

ヴァイエルは思いつきり手の平を額に当てた…コレは何を言ってもダメなようだ…となると…自分が何とかしなければ…と、脳内を働かせ、イグヴァルジにこう言うに留める。

「それじゃ、こいつらに口の利き方つてもんを教えてくださいます…しかし、なにも手下のみんなにそんな痛ましい場面を見させなくてもいいでしょう？　こいつらは現地で雇っただけの内情も知らない面々なんですよ？　だから、奥の部屋で精々、頑張ってくださいますって。」

なんとかそう告げて、刺激しないように「お二方、お話がございませので、どうぞこちらへ…」と言うと、今までのやり取りを目の前で見ている、自分らがどうなるかは理解していそうなものなのに、平然とこちらのさせたいようにさせるつもりのように、全く抵抗する様子もなく、大人しくついてくる…その態度に「やはり…」と確信する…こいつらはどんなことになるかと、自分らが傷つくなんてことはありえない、という確信があるんだ！と心底理解してしまった。

☆☆☆

「それで？　あなたは私に何をしようと言うのかしら？　この私に口の利き方を教えるのですか？」

先程まで話していた部屋を出て、見張りもない部屋…本当はさっきまで居たのだが「その必要はない」と言って下がらせた…なので、今の部屋に居るのは、目の前のお嬢さまとその執事、さらに当事者である自分、という3名のみだ。

なんで、リーダーはこの二人を目の前にして、あそこまで普通にしていられるのだろうと、不思議に思う…、自分からしたら、『この部屋にこの二人と一緒に居る』という状況だけで…その圧力だけで倒れて

しまいそうなのに…と思いつつも、精神力を総動員させて、その問の答えを返す。

「いえ…先程のアレは、リーダーに対しての言い訳…みんなの目から…そして耳から私たちの会話を遮断するために用意した苦しい言い訳だったので、お二方に何かをしようとか、危害をくわえようなどと…言ったつもりはありません。」

(どの道、あなた方2人に私程度が何か出来るとは思えませんしね…、恐らくは肌の表面にすりむいた程度の傷すら付けることは出来ないでしょうし…)

そう思っていると、この狭い部屋の中、他には声も音も発する存在が居ない為か、つぶやくよりも聞きにくい小声であっても聞こえてしまったのだろう。2人が意外そうな顔をしている。

「あら…それは面白い評価ね…、あなたには私たちがどんな風に見えるているのかしら…興味深いわ…。」

今まで、どこまでも、何に対しても興味どころか無関心だった目の前のお嬢さまが、自分の一言で、意識を向けてしまったことに背中に大量の水を浴びせられた気分になる。

こんな想いは、どんな集団の前に『足止め』として盾になってきた自分でも味わったことのない、得も言われぬ恐怖だった、これは言葉では表せない…本能として…生物としての根源的なモノに由来する何かなのだろうか…？

「いえ…ただの勘…なのでしょいかね…リーダーはそういういった感覚は感じていないようでしたし…他のみなさんも何も感じていないようでした…私の勘違いかもしれませんで、気に障ったのなら許して下さい。」

とりあえず、自分に向けられてしまった『興味』という意識を少しでも逸らせようと言葉を操る。しかし一度向けられてしまった興味はなかなか外れてはくれないようだ。

「ワタクシめはどこかで聞いたことがございます…。お嬢さま…人というものはあまりにもレベルがかけ離れすぎた相手だと、自分が対峙している相手の力量を図る力を有していない…そういう恐怖すら感

じる強さもない…そこに思い当たらず、『自分より強そうじゃない』と…そう判断する者もいるのだそうですよ？」

そう言ったのは後ろにいた執事だ…立っているだけで、その周囲の空気が違う気がする…なにも敵意など向けられていないのにも関わらず、コレなのだから…その気にさせたら自分は卒倒してしまうかもしれない…本気でそう思っていた。

「あら、それではさっきのあの男よりも、こっちの方が単純な強さという面では上ということ？」

恐らくはこつちに意識は向けたままなのだろうお嬢さまが執事に意識を少し向けている…、逃げられるものなら逃げたいが、逃げられるとは思えない…だから下手なことはしない方がいいだろうという結論に至る。

「恐らくはそうでしょうな…見た感じ神官風ですから、直接攻撃力という点だけでは分かりませんが、総合レベル…：修羅場をくりぬけてきたことによる明らかな危険を察知する能力、それに秀でているのかも知れませんな。」

執事の男に、そんな評価を受けながら、唯々、ひたすらに自分が悪い展開にならないようにと祈るしかない状況下なのは変わっていないことに、予断は許されない気分させられている真最中である。

「ところであなたはさっき『命を救われた』から『働いている』みたいな言われ方をされていたけど…？ ああの恩着せがましい言い方を見た感じ…、あの男が『好んで人助けをするタイプ』には見えなかったのだけけど？」

そのお嬢様からの声に、後ろの執事がなぜかしきりに「うんうん」とばかりに首を何度も縦に振っている。 たしかに見た目や、行動からしてそういうタイプではないが、自分が救われたことがあるのは事実なのだ…。

「いえ、確かにそういうタイプには見えなと思いますますが、なにかの手違い、もしくはただの気まぐれ…、何かの運命のいたずらであったとしても、私が助けられたのは事実ですから！」

背筋を正し、そう答える…それは自分の中の譲れない一点、どんな

に軽く扱われようと自分が助けられたことは事実、命を救われたことを恩義にすら感じないような存在にはなりたくはない：そう必死に自分に言い聞かせ、その恩に応えられる力が欲しいと、自分を鍛え上げてきた：それこそが自分という男の信条、一番に信じている道だから、それを否定することは自分自身を否定することになる。

「あなたという人間のとなりが見えたような気がしますね、私としては大変好ましい人物のように思えますが…、しかし、それ故に惜しいですね…。」

すこし雰囲気柔らかいものになったような気がした執事が先程よりは温かめな視線を自分に向けているのがわかる。

「ええ…そうね、私もこういうタイプは決してキライではないわ…、こういうタイプだから…と言うのもあるわね…。」

それに対し、このお嬢さまからの視線は、先ほどよりも自分を見る目に、『獲物』とは別のなにかに認識されたような方向性の意識を感じる…。それが何なのかがわからない為、どこまでも気持ち悪い感覚が抜けてくれない。

それもそうだろう…基本、業<sup>カルマ</sup>が悪に寄っているソリュシャンが、明らかに善である彼に向ける感情としてはある意味では正しくはない…しかし悪であるからこそその楽しみ方と言うのもあるのだ…。

ナザリックの中でも嗜虐性という点では、どちらかと言えばシャルティアの方と話が合いそうな面もありはするが、それでも特別情報収集官<sup>ニューロリスト</sup>のような趣味を持ち合わせている訳ではない…だからこそ、楽しみ方の方向性というのはそれぞれなのだが…そんなソリュシャンは下等生物<sup>ミンゲン</sup>に対して、手を汚すことはキライではない…だが、好んでその返り血をその身に浴びたいとは思わない。

そのため、自分の体内に収納し、体内の様々な酸による効果で、色々な苦しみにのたうち回り、暴れる様をその身で感じるのが楽しいのだ…無駄な抵抗だと知りつつもそうしてしまう弱者へと向ける…歪んだ哀れみにもいた感情を覚える瞬間も楽しくて好きなのだが…、それとは方向性が違うが、明らかに善人である者が、今まで好意的に見て

いた相手に対する認識が一気に反転した結果、今まで向けていた以上の悪感情に飲まれてしまうニンゲンという存在も居ることをソリュシャンは知っている。

それによる同士討ち的な仲間割れも好きなのだが…、今まで信じていた存在にいきなり憎悪を向けられ、何が起きたか理解できないという絶望を抱いたような目をしながらコト切れる瞬間を見るのも好きなのだ。

なぜ好きなのか？と言われても説明できないが…好きなもの好きなのだとか、ソリュシャン自身にも言えないのだから仕方のない事なのだろう。

「それで？ あなたは私たちに一体、なにをしたい…もしくはさせたのかしら？こんな場所にまで連れてきて、ただのおしやべりがしたかったわけではないのでしょうか？」

そう聞かれ、どう言おうかしばし悩みながらも…しかし結局言わなければどうにもならないと理解したのか、ヴァイエルと呼ばれていた男は意を決して、それを言葉にした。

「では…大変に不躰ですが…私個人が感じ、達した『個人的主観』をお伝えします。それが合っているか、間違っているかを問いたいわけではありませんので、ただ聞いていただければ…それで構いません！」  
それは冷や汗か…それともあぶら汗か…自分でもわからない何かを感じながら、自分が推理してきた内容を聞いてもらう、もしその推理が合っていたならば、どの道、自分にも未来はないのだから、この時点でジタバタしても始まらないのだ。

彼が言いたかったことはこういうことのようにだった。

・まずは自分が感じた…今まで生きてきた中で感じたことのないこの感覚は『商人の血筋の者と使用人』としては明らかに異質なものを感じたということ。

・ならば、なぜそれを名乗ってまでここに来たのか…？

・それはきつと、もつと、より上位の誰かの指示があったからという線が濃厚。

・ならば、それは誰なのか…だが、恐らく、人質にした者の家族が所属している組織のトップからの指示だろうことは想像に難くない。

・誘拐して、人質にしたのは自分らではないが、この件に関わってしまった以上、ただの出会いがしらの不幸な事故とするにはあまりに理不尽に感じる。

・恐らく、自分らを雇っているボスも、いい顔はしないだろうが、この件に関してだけはなんとしても手は引かせる方向で話を進めたい。

・だから、せめて、ここに事情もあまり知らされず、現地調達されてしまった人員には何もしないで解放してやって欲しい。

・そして、リーダーのイグヴァルジであるが、彼はボスのような上役にすりよることは上手だが、物申すことは苦手…なので、自分が事情の説明、そして手を引くメリットを説きに行く…その後で、自分はどうなっても構わないから、イグヴァルジの命だけは助けてやって欲しい。

というようなことを言ってみた。

するとどうだろう…途中、途中で、言っている内容はよくわからなかったが、概ね、悪いような内容の言葉には感じられない話題が二人の間でされていた。

話されていた内容はこうだった。

「どうする？セバス…私はどちらでも構わないんだけど…、『命だけは奪わずに』っていうのは飲んでもいいんじゃないかしら？」

「そうですね…、まあ、何も知らない構成員の方々は元々、これに関わる組織の者ではないようですし、さすがに無関係に近い者らを罰するのは心が咎めますね。」

「それならば、畏れ多いですが、御方に協力を頼めるか…セバス…それはお願いできますか？ 何も知らない構成員とは言え、このまま解放したのでは、どこから情報が漏洩するかわかりません、口止めをさせましょう…もし都合がつかない場合は…そうですね…大変お忙しいあの方に協力を頼むのは気が引けますが…『牧場の管理』をしてるあの方にお話を…。」

「なら、この件は、『自分はどうなってもいい』と言ったこの者が、無



事にこの件の解決が成された段階で、処遇を決めることにする…という事でよろしいですか？お嬢さま。」

「そうね、その方向で進めましょう」

「ならお嬢さま、リーダーと言われたイグヴァルジなる者の処遇は？」  
「それは考えてあります、万が一、彼の交渉が決裂に終わった場合に備えて、そのイグヴァルジなる者から大元の組織である存在の内情、そしてトップに君臨する者の詳細など…を「特別に情報を収集する」必要があるでしょうから…前もって「専門の担当官」に調べさせましょう。」

そして無事にこの件が片付き次第、その身は『がしよくちゆうおう』に任せます。あの者ならば何があろうと命まで奪うことはないはずですからね。」

それはそれは、今までに聞いたことのない、そのお嬢さまと呼ばれる存在から聞いた、温かみの感じる言葉であった。

まさか、あのような条件が受け入れられるとは思っていなかった。ヴァイエルからすれば、ありがたいの一言にしか感じられなかった。

イグヴァルジの方も、『命は奪われず』に済むという話だし…それなら悪い結果ではないのだろうという安心感が生まれた。

帝国の民から徴収された構成員も、無事に解放されるという話だし…、口止めくらいならば、相手にお任せしても大丈夫なのだろうという「基本的な常識の範囲内」の行いはお任せすることにした。

ヴァイエルが伝えた内容を受け入れる為の条件として、このまますぐにこの建物を出て、組織のボスの下へ行き、事情を説明し、某元貴族の親族からの取り立ては辞めるようにさせなさいと言われた。

その為、それに関して全面的に了承はしたが、「もしそのボスがどうしても利益が欲しいなら」という内容で、その元貴族の親の持つ資産の全てを差し押さえ、更には身元を抑え、資金を稼がせるようにした方がいいという助言を、そのお嬢さまからもらっていた。もしそれでもボスが首を縦に振らなければ、『私たち』も動くことになるでしょう。

う。　　と言ひ残し、部屋を移動し始め、執事と共に、元のリーダーの待つ部屋へと動き出していた。

そして、部屋から出る際、その執事からくれぐれも「私たちの期待を裏切ることのないように：いつでも『影』から見えますからね。」とだけ：意味することは分からないが恐らく「神は何でもお見通しですよ」という意味なのだろうと思うことにした。

「それでは、無事、この件がうまく解決した際は、どのように連絡を取れば？」と聞いたところ、その執事は、こともなげにこう言った。

「それはその時になればわかります、無事にコトが進んだなら神が私たちを引き合わせるでしょう：しかし、くれぐれも注意をしてください、うまく行かなかった時は：どうなるかわかりませんよ？」

：と、鋭い視線だけを残して、部屋を去り、再びイグヴァルジの待つ、元の部屋に移動し、まとめて彼らをナザリック送りにする流れになっっていることになど：馬に乗り込み、拠点に急ぐヴァイエルには知る由もない事であった。

更に：、その影にセバスの影から移動し、つぶさに内情を報告する役目を負った存在をも、共に連れていることにも気づかず：、彼は馬をボスの居る拠点へと急がせるのであった。

その後のイグヴァルジを見た者は、近辺の者ではおらず、ヴァイエル本人も「きつとどこかで無事に生きているだろう。」と気楽に思えるような未来がイグヴァルジ自身には決して訪れないだろうことは誰にも知らされず、静かに展開は進められていった。

## 第27話 突撃！夜のカルネ村！

いつものナザリック地下大墳墓。

そこには新たに、後々「貴重な苗床」となる予定のイグヴァルジが運び込まれていた。

それというのも、今回の騒ぎの首謀者に関しての情報を吐き出させるため、ありとあらゆる手を尽くしても良いが…くれぐれもシヨック死や、直接的な原因としての死以外の手段で…という条件が、愛しのダーリンアインスさまから出されているため、『どんな趣向をこらそうかしらん♪』とウキウキしている。

そんな中、当のイグヴァルジはと言えば、呑気に寝ていた…というより眠らされていたのである…そうだった背景は実に簡単だ。

あの時、ソリュシャン達がイグヴァルジ達の居る部屋に戻った瞬間、部屋の中にいるメンバー全員を範囲に入れ、〈睡眠〉の魔法をスクロールで…もちろん盗賊系のスキルにより、発動条件をうまく騙して発動させた。

相手があまりにもなレベル差があったため、全員が抵抗レジストのタイミングすらも与えられず、眠らされてしまう。

ソリュシャン自身は、魔法職を取っていない為〈魔法抵抗突破化〉などはもちろん覚えていない…ので、そのまま、素の〈睡眠〉の効果しかなかったのだが…。

ただの第一位階魔法程度に…不意打ちとは言え、抵抗レジストも出来ずに一人残らず眠ってしまうとは予想外であった…というよりも拍子抜けをした。

恐らくは情報通りで言えば、ミスリルの実力はあったというリーダーのイグヴァルジならきつと余裕で抵抗レジストするだろうから…あとは時間をかけてじっくりと…と内心表情が崩れそうな程の「あれやこれや」を考えていたのだが…眠ってしまったわけてはさすがにその必要がなくなってしまう。

一応、数を数えてみる…手下A、手下B、手下C…は居る、この建物に入った時に取次ぎをした男、こいつも居る。そして最後は私たち

がヴァイエルなる興味深い男と話をした部屋、そこに見張りとして立っていた者：それもちゃんという。

そしてイグヴァルジも…、話はこの眠りの魔法に関してのコトに移るが、意外にもかなり優秀で一度かかったら自然に目覚めるということは…「魔法の効果時間の消失」が発生しない限りはありえない。

途中で目覚めるとしたら…外部から直接的な干渉…ほっぺを叩く、攻撃でダメージを与える、他にはバードの使う呪歌の1つ、<sup>バードソング</sup>「へ鳥のさえずり」、あとはモンクの持つ技の1つ、『喝入れ』という技のみでしかありえない。『喝入れ』は眠りだけでなく、気絶や失神状態にも適用されるので、「眠りへの対策手段」という認識としては厳密には違うもののだが…。

この建物内に居ただろうフルメンバーがそろっていることに満足したソリュシャンは、他に聞いているものなどは居ないだろうが、ここで気を緩めて取り返しをつかない失敗をしては創造主であるヘロヘロさまより『そうであれ』と命じられ、創られた『できるメイド』としての矜持、さらには御方の失態にもつながりかねないという想いから、芝居を続行する。

「セバス？この者らは一旦、残らずナザリックに『贈る』ことにします、その上で、この者らの処遇はアインズさまに判断を仰ぐようにしましょう…、一応、約束は約束ですからね…念のため、このイグヴァルジ以外のメンバーの全員は、現地で徴収されたほぼ一般人とのことらしいですし、その辺の説明は任せましたよ？」

ソリュシャンは一度、そこで話を区切ると、1拍置いて話を継続させる。

「それからは…そうね…、私はアインズさまに<sup>コントロール・アムネジア</sup>〈記憶操作〉を使ってもらって、この一件はなかったこととしてメンバーらを放逐してもいいでしょうし、アインズ様のご都合がつかなかったら、『牧場の管理主』にお伺いを立ててもいいでしょう…そこら辺の段取りは私が致します。どちらになるにせよ、ナザリックのことさえ現時点でバレなければイイ…ということにしましょう。」

ソリュシャンからの言葉に執事として対応するセバスも、それに同

意する。

「そうですね…あと2日後に…いや、今日の夜が明ければ、もうその翌日になりますか…恐らく大詰めの段階で、トラップの配置や第一階層の霊廟区画に、宝物殿にあるレアリテイの低い武器や貨幣を置くという最終段階に入っているあの者にその時間があるかは不明ですが、私が言うよりは、あなたからの提案の方が彼も受け入れてくれる可能性は高いでしょうし…よろしくお願いします、お嬢さま。」

☆☆☆

という顛末があつて、団体様御到着♪ とばかりに眠りこけている《ニンゲン》どもを…一般メイドには荷が重いので、疲労のしないPOPするアンデッドのスケルトンウォーリアーに指示を出し、それぞれの場所に運び込んでもらう。

さすがに眠っている者を恐怖公あたりに贈ってもあまり喜ばれない…どうせなら起きている者たちの反応、悲鳴、絶叫…をあげようとしている侵入者<sup>おろかも</sup>どもの口から眷属の者らが埋め尽くして行き、黒い波に飲まれていく瞬間が楽しみの彼からすれば、何の反応もない時にそれをしたところで、まったく楽しくない、という事情があるからである。

かつての記憶…恐怖公はナザリツク史上で、唯一第8階層にまで侵入を許してしまった、あの「1500人の人間種プレイヤーによる大侵攻」の折、生き永らえた数少ないNPCである。

もちろん蘇生などされていないので当時の記憶も持ち合わせている。

たしかその当時は女性の姿をした人間種が限定で、この場所…自分の領域に飛ばされるといふ設定のはずだったが…至高の存在、ギルドの総まとめ役のモモンガ様が、アインズ様に名を変えられた辺りから…男も贈られてくるようになった。

女性の姿をしたプレイヤーは、この部屋に入るなり、悲鳴…絶叫を

あげた：それは大変歓迎なのだが、その大きく開けた口に眷属を：と思った時には姿を消していて、物足りない想いがずつと内心で残っていた。

（かなり後になって、アインズ様に「それは『ログアウト』というものだ：それを誘発させる目的で、お前は創られたのだから、不満に思うことはない、お前は自分のすべきことをちゃんとこなせているとも：」と言われ、自分のナザリックでの価値はまだある：存在しているのだ：と、女性NPCの大半から忌避されていることを知っている彼からすれば、これが承認欲求と言うものでしたか：という新たなステージに立っていた。）

領域守護者としてここに居て、御方の役に立てることは、この眷属たちを共食いで尽きぬようにすることと：、『眷属喰い』のあのメイドがオヤツ扱いして、食べつくさないようにの両面が現状、恐怖公の仕事の大半である。

それでも、今度、催される大イベントでは：何組かのワーカーマンバーがもしかしたら、私の領域まで来るかもしれないというお話が、アインズ様ご自身が直々に私に会いに来てくださり、教えてくださった内容であった。

（その時、転移前からの私の記憶が鮮明にあると知った時のアインズ様は、なにか非常に驚かれた、というか：狼狽されていたような：いや、絶対の神たる御方に限ってそのようなことはあり得ませんね、そのような印象を抱くこと自体が不敬でしたか：。この私に会いに来てくださった、その想いに応えるためにも：この恐怖公、尽力いたします、アインズ様！）

それならば：その時までには、この領域を、我が眷属たちで溢れさせんばかりに満たして御覧に入れましょう。

中途半端では、御方のお名前を汚してしまいかねません：そればかりは私としても我慢がなりませんからね…、

☆☆☆

恐怖公が、そんな風にテンションが爆上がりしている中、ソリュシャンから直接話があるということで、謁見を申し入れられた：アインは内心「ソリュシャンが？珍しいな」と思ったが、NPCが必要ならばそうすることになんの弊害もない、会おうじゃないか！という流れで、すぐに会うことになった。

以下は謁見してからの2人の会話である。

「我らが至高たる：絶対なるアインズ様、この度は私のわがままを聞いて下さりありがとうございます。」

扉が開けられ、足が部屋の境界を踏み越えた瞬間に深々とした礼を取られてしまった。

「いやいや：そのような礼など不要だぞ？ソリュシャン：お前がわざわざその様に申し出たということはその必要が有つてのことなのだろう？ならば会わない理由などどこにあるというのだ？」

支配者としては、『できるメイド』として創られた彼女の性格は悪く思つてなどいない、それどころか王国での情報収集に於いては、その高い演技力で、ほぼほぼ、期待通りの結果をもたらしてくれ、涉外活動にも文句の付け所のないほど尽力してくれている。

その中でもイプシロン商会の社長令嬢という立場と、戦闘メイドと言う2足の草鞋わらじを苦も無く、両立させているのだ：大変重宝していると言つてもいい…。

だがアインズからすれば、もう少し：こう…、とも思う。

誰がどう見ても、「無い物ねだり」なのは分かっているが、せめてももう少しその極振りされた、圧倒的カリスマって立ち位置をちよつぴりだけハードル下げて欲しいとも思う。

ソリュシャン達NPCからの対応に合わせる度に、支配者としての自分はこれで合格点なのだろうか、日々、悩み通しだったりするのだ…。

「まあ、このようにいつまでも仰々しい挨拶ばかりでは先に進まないな：せっかくだ、ソリュシャン、お前からの話を聞くとしようじゃないか。」

「は、それでは失礼します。」

部屋の中に入り、中央まで歩み出ていたソリュシャンは一瞬、アイ  
ンズを見て戸惑ってしまふ。

それもそのはず、この部屋はアインズの執務室、そしてその部屋の  
隣にはソファアールのある、ある意味「仕事上の取引相手との交渉」に使  
うためのソファアールがおかれた一室が存在すると聞いたことがある。

アインズはまっすぐにそこへと歩みを始め、その扉を開けようとし  
ている。

「ア…アインズ様！　そこは…そのような場所を、私のような者の要  
件を聞くことに使うには、相応しくないのでは…」

その言葉を受け、アインズは鷹揚にして、ゆつくりとソリュシャン  
の方を振り向き、こう告げる。

「そのようなことはない、今のような時期だからこそ、わずかな内容で  
あろうとも軽く扱うことなどは出来ん。　人払いもしよう…私と二  
人きりでしつかりと話を聞こうじゃないか」

その言葉に過剰に反応したのは、アインズの執務中は大抵の場合、  
そばに居るアルベドだ…すごい勢いでその中に割って入ってきた。

「いけません、アインズ様！　ナザリック内の者と二人きりなど…決  
して、危険はないとは言え、護衛も居ない中では危険です！　万が一  
との言葉もございます。どうか…、護衛がムリならば私を…このアル  
ベドを…どうか、共にお連れ下さい…どんな危険も、万難すら排して  
ご覧に入れますよう。」

どこまでも熱く自分を売り込んでくるその態度に「お前は自分が一  
緒に居たいだけじゃないか？　それとも『ソリュシャンとの二人き  
り』に自分だけノケ者にされるのが面白くなって入ってきてるだけな  
のか？」と思っているアインズに、肉迫するように進言を繰り返して  
いるアルベドへとソリュシャンが「そうではありません、アルベド様  
…」という言葉を投げかける。

「そうではない？　そう聞こえましたが…ソリュシャン、それはどうい



うことですか？まさかエイトエッジアサシンが天井に居るからとか、一般メイドが扉前に「アインズさま当番」としているから…とは言わないわよね？」

少し牽制するように目で威嚇してくるアルベドに、「伝え遅れまして、申し訳ありません、今回お話を…と申しましたのは何もアインズ様だけに…というわけではなく…実はもう1人、情報の共有という面でも知っておいてもらいたい方がおりまして、その方とアインズ様、私と同席していただきたいという…そういうことなのです。」

「あら…そう、それはそれでいいのだけど…そのもう1人というのは？」

その時、アインズの執務室の扉がノックされる…今日のアインズ当番であるデクリメントがゆつくりと扉を開けて、来客の確認をした後、アインズに訪問者の名前を告げた。

「アインズ様、デミウルゴス様が参られております。」

☆☆☆

「おお、よく来たな、デミウルゴス。お前もソリユシヤンの話を聞きに私の所へ来たのか？」

「はい、アインズ様、大変遅れまして申し訳ございません。このデミウルゴス…今回、面白い人材が手に入ったということで、ソリユシヤンから事情を聞かせてもらおうべく来た次第でございます。」

そうか…とだけ短く受け答えをすると、アインズはアルベドに向き直り、今一度、アルベドに念を押すことを忘れない。

「どうだ？ アルベドよ…これなら文句はあるまい？ よもや、階層守護者が共にいて、警備に難が…などと云うつもりではあるまいな！」

その一言を聞いただけで、ナザリック随一の頭脳を持つデミウルゴスは自分の来ていない時にどんな話が展開されていたのかを即座に悟る。

「やれやれ…アルベド？ キミはまたアインズ様を困らせていたのかい？ キミはアインズ様の「正妃筆頭候補」…そんな些事にイチイチ感情を荒ぶらせては『慎みのない女性』という烙印を押されてしまうよ？」

そこでアルベドに、落雷のような衝撃が走る…「正妃筆頭候補」つまりは…「花嫁」！

「正妃…花嫁…第一妃、正室…となれば当然…ふふ…くふふ…」

という発言を繰り返しながら、アルベドは次の瞬間にはひたすら妄想の世界に浸ってしまった。

「さて、ソリュシャン…聞かせてもらいましょうか？ アインズ様…貴重なお時間を我々共の為に浪費させてしまう不敬をお許しく下さい。 さて…みなさん、早く部屋に入りますよ。」

こうして、最初に「アインズ様当番」のデクリメントが先に扉を開け、アインズが先頭、次がデミウルゴス、最後尾にソリュシャンを引きつれ、室内にエイトエツジアサンが3体居る、3者会議の部屋に入り、デクリメントがその扉を閉める…。

扉が閉まった後も、しばらくの間、アルベドは至福の妄想世界にどっぷりハマり込み…、は！と意識が戻ってきたのは、会議の全てが終わり、外に出る為に扉が開け放たれた瞬間であった。

★会議室内、3者会議、会場。

「さて、それでは聞かせてもらいましょうか？ 私は最近、牧場運営とスクロールの材料の確保、さらにはこのナザリックを防衛システムの見直しという観点から作り直すという作業以外、あまり関わっていませんでしたのでね。」

「はい、それではまず、アインズ様もご存知である、ことの顛末から…つい先日、数年前前、アインズ様に現地の言語を主に教授するという僥倖に恵まれた、ジエツトなる者…その母親が拉致、誘拐されまして…今回、私たちはその後始末をしに行ったのです。」

「ん?! おかしくはないかい？ 助力を頼まれたのではないのかい？

後始末？」

最初のピースから観点が変だと思ったデミウルゴスは素直に疑問を浮かばせる。

「はい、頼まれたのは初めから助力ではなく、経過報告のようなもので、ジエツトという者は、上司であり雇い主であるアインズ様に、報告をし連絡、相談した上で、自らの手で：アインズ様に頼りきりにならず、自らの力で救出に乗り出したようです。」

「ほお：下等生物にも、そのような見上げた者が居たのだね：あまり印象がないが：どのような者だったか？」

デミウルゴスにしてみればただの独り言だったのだが、聞こえていたソリュシャンはそれをまじめに受け取り、返答を用意する。

「二期、アインズ様と共に、経験値上昇の首輪を身に着け、料理長の所で香辛料の作成に尽力させていた者です：それならば覚えていらっしやるのでは？」

その言葉でようやく名前と記憶が一致したのか、デミウルゴスは小気味よくパンと自分のヒザを叩き、「ああ、あの者ですか、あれはなかなか利用価値の高い者だった記憶がありますよ」と答えて、少し機嫌がよくなったように見える。

「デミウルゴス様までもがそう思われますか？ あの者はどのような脅威を？」

ナザリックの知恵者が認めるのだ：どれほどの：という関心が生まれるのは当然だろう。

「ん？ちつとも脅威なんかじゃないよ？ それどころか、楽に始末しようと思えばいつでもできる：だがそれをするのはどう考えてももったいなくってね：。」

ソリュシャンからしたら不思議であった：デミウルゴスは、よほどの価値がないと、その真価を他人：それも下等生物に見出すことなどはない：、精々が実験動物とばかりに色んな関心ごとを人間の身体で実験するくらいだろう。

そう：例えば、人間の背中、肩甲骨の辺りに大きな傷をつけ、その傷口にジャイアントバットの羽を押し付け、治療してみたり…。

痛みを倍加…というより、痛覚過敏状態にして、背中を皮をはぎ取り、その精神状態と、身体にかかる負荷…それらの兼ね合いでスクロールにどのような変化があらわれるかとか…。

さらには馬の頭を首ごと斬り落とし、その傷口に、それなりに実力のある冒険者の成人男性の下半身を斬り落とした後の、上半身を乗せ、治療させた場合、それはセントールになるのだろうか？などと云った冗談半分の実験に使用するか…くらいの利用価値ほどにしか基本、評価することはない。

そんな中、普通に実力もないのに評価されるという意味が解らないソリュシャンは素直にデミウルゴスに問いかける。

「それではそのジエツトなる者の利用価値とは？」

「ん？ そうだね…一言で言えば、香辛料の作成技術、これに尽きるね。」

他意もなくデミウルゴスはそう答える、ソリュシャンはデミウルゴスからの言葉なのかどうか、本当に疑問だった、そんなことがなぜ重要なのかと…。

「デミウルゴス…さすがにそれではスライム種であるソリュシャンには解釈の難しい所だろう…優しく説明してあげなさい、わかりやすく…そう、わかりやすくな？」

ソリュシャンは感動した、私などの為にアインズ様がお心を砕いてくださっている、これは是が非でも理解せねば！と心を新たに、デミウルゴスの言葉に耳を傾ける。

「そうですね…ソリュシャン、あなたは食事の必要は感じないかと思えますが、あなたが楽しいと思うことは、身の内に生物を収め、酸で焼きながら、その反応を感じるのがある意味嬉しいと感じる…そうですね？」

その言葉に首を縦に振ることで、それを肯定する。

「人間や…、まあ、一般メイドのホムンクルスのみんなもそうなのだが、「食料を食べる」ということと、ソリュシャンの好きな、「体内の生物を酸で焼く」ということの共通点を比べてみよう。」

デミウルゴスは少し思索した後、話し出す。

「ソリュシヤン、キミは仮に、手足をもがれ、首から上の感覚を麻痺させた胴体だけのニンゲンをその身の中で焼いたときと、五体満足の者として、やはり反応の違いで楽しみを満たせたという感覚に差はあるかね？」

「あると…思います、全く反応がない相手だと…、楽しみ甲斐がないなと…思っています」

それを聞くとデミウルゴスは「そうだね。」と首を縦に振る。

「つまりはそれがニンゲンの言う所の、食事をした際の「美味しい」とか「うまい」という感覚と似ているとも言えるんだよ。」

「どういう…ことでしょうか？」

まだまだデミウルゴス様の認識には程遠いと再認識させられながらも、順を追って説明してくれているのだと信じ、ソリュシヤンは次の説明を待つ。

「キミにとって、体内で暴れられたり、もがいてくれたり、のたうち回る反応を感じられるというのが、普通に食事をする者にとっては、『より味わいを深めるスパイス』と同義になるわけだよ、そこは分かるね？」

「はい、それはわかります。」

ようやく自分でも理解できる話になってきた。そこからどうすればナザリックにとって有益なことで、香辛料が結びつくのだろうか…

「つまりは味を深め、美味しくするためにはスパイスの存在という物が結果を大きく左右すると言っても過言ではない…そして、スパイスとは…イコール香辛料のことなのだよ。」

一旦そこで言葉を区切り、ソリュシヤンの反応を見る。

「ここは分かっているようだから、次に進むよ？　ここからナザリックの利益につながる話になる…現在、ナザリックは以前とは違う場所に転移をし、かつての世界で普通に補充できていた材料が、ほとんど入手できなくなったと言ってもいい状況なのは皆も知ったことだろうが…」

「アインズ様もご承知の通り、今は潤沢な在庫があるので、資金も資源も…さして心配の必要もないが…寿命のない我々異形種は…いつか

はその潤沢な資源を食いつぶしてしまうだろう…特に、ナザリックを美麗な姿に保つことに日々、苦心している一般メイドの彼女らの働き無しでは、恐らくそう遠くない内にホコリまみれのナザリックと言う考えたくもない事態に見舞われることは否定できない「可能性の1つ」なのさ…」

そこで、ようやく、口をはさめる内容になってきたため、アインズがソリュシャンに語り掛ける。

「そうだぞ？ソリュシャン、だからこそ、少しでもそれを阻止するためにデミウルゴスにはスクロールの、この世界での作成方法、そしていずれは効率よく作れる技術の確立にも励んでもらうつもりで、働いてもらっている、さらにポーションの方はカルネ村で作らせている…しかし、料理の調味料のことにまで心配をしていようとは…さすがはデミウルゴスだな。」

「いえいえ、アインズさまもその程度のこととはご存知だったはず、優先順位として下だったから敢えて緊急性を説いて来なかっただけ、本来であればどれもナザリックの状態の維持という側面からして見過ごせない案件でございます。」

「ふむ…まあ、私とお前とのやり取りはここら辺にしておこう、ソリュシャンに対する説明がまだ途中だったからな、続けるといい、デミウルゴス。」

「は…御身の御心のままに！」

「それで、どこまで話しましたか…そうそう、一般メイドのホームクルスたちの食欲の旺盛さは知っているね？ソリュシャン。」

「は、ダグザの大釜というナザリック所有のアイテムが無ければ、食材という点ではきつと、いつかは底をついてしまうだろうという恐れを抱くのに充分な摂取量なのは良く知っております。」

「ふむ、そこまでわかつているなら話は早いね…。料理というものは決して食材だけでは完成させることは出来ない…そこは説明の必要もないと思うから次に行こう。素焼きや、水炊きとかでない限りは、どのような料理でも調味料や香辛料という者は必要不可欠なのだ。…という結論までは理解できたかな？ソリュシャン。もち

ろんそのような料理がこのナザリックに相応しくないと言うのは説明するまでもないね？」

「は…そうなるとナザリック内での香辛料や調味料などの調達は一一般メイドたちの労働環境、息抜きの意味での『食事』で、意欲の活性化を図るために必須と言うことですね。」

「うん、そういうことだよ…さらにもう一歩踏み込んでみよう、ナザリック内にある香辛料や調味料で、この世界の店で買えるものはどの程度あると思う？ソリュシヤン？」

ソリュシヤンは考え込む…それは考えようとしたことはなかったからだ。

それはそうだろう…自分が摂取するのでも、使う訳でもない在庫の心配など…戦闘メイドたる自分には無縁の内容だったからだ。

「ええ…半数程度でしょうか？」

それでも十分に死活問題ではあるが、半分もあれば料理長ならば、きっとどうにか出来るのでは？という希望的観測も入っている。

「残念…正解は、ほとんど存在していない…だ。」

あまりにもな内容だった…まさか、この世界はそこまで文化レベルの低い世界だったのか…と思うと、デミウルゴスから、今の言葉に注釈が入る。

「いや、正確に言うと、無いことはない…と言った方が近いかな…恐らく代用できる物自体の存在は確認されている…ただ…」

「ただ？」

ソリュシヤンも続きが気になる、食事などしないこの身でも…ナザリックの将来という点が左右されるのであれば、真剣にならざるを得ない。

「我らがナザリックに所属する者たちが食べるにふさわしい…もしくは限りなくそれに近いレベルに完成された料理の質を維持するために必要な調味料、香辛料という物が市場に出回っているかと言うと…そこまでの物は…この世界には…ないのだよ。」

「そんな…」

あまりにもな内容に絶望感に打ちひしがれる。

それではいずれ、彼女らは今食べている普通の料理すら、口にできなくなる日が来るのではないだろうか…という暗い考えに陥りそうになり…そもその話の流れのきっかけを思い浮かべた。

「もしや…デミウルゴスさま…まさか…あのニンゲン…そのジエツトなる者は…？」

「そう、ようやくそこに思い至ったようだね、私もそれを発見した時は驚いたものだよ。彼にあんな稀有な才能があつたなんてね…あれはある意味、世界単位での才能だよ。彼自身は全くその重要性に気づいてはいないようだがね。」

そこで、何となく話の方向性が分かってきたアインズがデミウルゴスに問いかける。

「デミウルゴスは、あの者がどの程度まで作れると見た？」

デミウルゴスは、メガネを押し上げ、姿勢を正し、返答をする。

「全てはやらせてはいませんが…香辛料という限定した範囲であれば…おそらくナザリック内の全ての香辛料は、作成できるでしょう。」

「よもや、実物をひとナメしただけで、それと寸分たがわぬ、完全なる複製品を生み出せるなどは…想像だにしておりませんでした！」

あのような貴重な存在を、アインズ様ご自身が学院に編入されるより前から、目を付けられていたとは…アインズ様のご慧眼…まさにな並ぶ者なき、智謀…このデミウルゴス、そんな至高の御身に仕えられる喜びにうち震えております。」

「そ…そうだ…デミウルゴスは、香辛料だけか？試したのは…調味料とかは作らせてはいなかったのか？」

「は…申し訳ありません、そちらは試すまでもなく、恐らくは出来ないだろうと…」

「はっはっは…さすがのデミウルゴスもそこまでは考えていなかったか…知ってたか？あのジエツトは確かにそこは苦手分野だと言っているが…、香辛料を作る時の倍の時間と魔力を掛けさえすれば、ポーションの瓶で言えば4〜5本程度の量に留まってしまうが…調味料の方も作り出せると言ってたぞ？」

「ま…まさか…そのようなことまで…アインズ様…なんという…なん



という、言葉で表現しようという認識すら超越するほどの卓越したその才能……まさに敬服に値します。」

「ん……まあ、今回は彼の能力自慢ではあるまい？先の話をしようではないか……、それではソリュシャン、最初の話の続きを聞かせてくれるか？ 無事助け出されたのだろうか？」

そうアインズが促すと、ソリュシャンがコトの経緯を説明し始めた。

「は……私とセバスさまがその現場に到着した時はすでに、人質の解放がされ、中に居たのは……当事者たるリーダー格の男に金で雇われただけのほとんど帝都民と言っても過言ではない者ら数人……と、そして、そのリーダー格の男と入れ違うようにして後発で合流したイグヴァルジという男です。」

「そうか、捕えたのはその者らだけなのだな？」

（ん？なんか聞き覚えあるような名前だったな……まあ、自分が元居た世界でも、同じ名前の奴なんて、探せば居たくらいだし……こつちでは珍しくもない名前なんだろうな……）

「はい……そして、今は保留にしておりますが、泳がせている者はおります。そのイグヴァルジという男を尊敬し、命の心配までして「自分はどうなってもいいから」という条件を付けてまで嘆願をした男がいます……そいつは、この事件の首謀者である、首魁に手を引くように説得するということとして……もしその説得が決裂したら……我らナザリツクの者らで、解決に乗り出すという話をしており、シャドーデーモンに追跡もさせているのでまず、うち漏らすことはないかと……。」

（うん……よし！やはり記憶の片隅にあった奴じゃないのは確定だな！

アイツだったら、そんな尊敬を集められるはずはない……なんといつでも同じメンバーだった者達ですら「あの悪い癖さえなければ……」つて言われてたし……名前のよく似た別人で決まりだ！）

「うむ、そうか……それで？私に話ということは、その報告が全てということでもないのだろうか？ 遠慮せずに言うといい。」

己の支配者にそう言われると、ソリュシャン自身も身の引き締まる思いでいるが…その前に…ナザリツクにとつてのメリツトを先に報告することにした。

「その前にアインズ様に、朗報がございます！ そのイグヴァルジなる男を尊敬していた男が言うには「命だけは奪わずにいてあげてくれ」というような条件を言ってきたので了承しました、その条件を満たすためによほどのことがない限りは命を失うことのない、がじよくちゆうわう餓食狐蟲王の眷属らの苗床として生かし続けることを許そうかと考えております。」

（えええ？ それ、多分違う意味で言ったと思うぞ？ 解釈が全然違う感じに聞こえるんだけどお〜？）

アインズが内心で、盛大にツツコミを入れているが、キラキラした瞳で、自分を見つめてくるソリュシャンの…張り切りようを見ていると、どうしても即座に否定するのはどうかと思ってしまう。

「そ…そうか…、それはすぐに、ということか？」

「いえ、先ほどの男が、事件の首魁に対する説得に決裂した際、必要になると思われるアジトの数、構成員の総数や、強さ、タレントの有無や、平均難度と、最高難度の情報を引き出すために、ニューロニストの下で、尋問中です。」

「そ…そうか…それが朗報だったのだな…それではそうでない方の情報…どんな内容なんだ？」

「そ…それについて…なのですが…アインズ様のお力をこのようなことにお借りするのはあまりに不敬かもしれませんが…しかし、一応、選択肢の一つとして、お話を聞いていただきたく…」

ソリュシャンが、先ほどもまでのキラキラした瞳と打って変わり、オドオドした表情に変わっている、それに思わず「なんとかしてあげられないか？」という「親心」的ななにかを発揮したアインズは優しくソリュシャンの頭に手を置いて軽くなでてやる。

「なにを遠慮することがある？ 選択肢の一つ…という可能性の段階なのだろうか？ 聞くだけ、聞かせてはくれないか？」

「そうか…そういうことか…なるほど、それでデミウルゴスにも話を聞いて欲しいという内容になったのだな」

「はい、申し訳ございません、アインズ様」

どこまでも申し訳なきさそうにしているソリュシヤンに再び声を掛ける、「大丈夫だ…」と…、別に責めてはいないという意味を込めて背中をなでてやると、少し落ち着いたようだ…。

「で？ どうする方がいいと思う？ 記憶を操作するのは簡単だが…どのみち、金で雇われているとは言え、そのような後ろ暗い組織に雇われるのを良しとする環境下にあったのでは、またいつ、同じような手合いに誘われて、雇われるかわからん…ならば、私の使う魔法の中でも、ある意味かなりレアな、強制服従系魔法でも使って、2度とそのような者らに協力することの無いよう、釘を刺して置いてもいいかもしれない、こつちの世界に来てからはまだ未検証だが、テキスト設定では材料さえ全て整っていれば〈解呪〉されない限り、効果は有効で、時間経過での効果消失もなかったはずだしな…」

（とは言え、ユグドラシルでは、わざと指定された「強制条件」を破った行動をして、ペナルティアバターになったりして遊べてた程度のモノだった…テキスト通りの効果になったのなら…「そうはなりたくない」がために言う事を聞かせることができそうな点で使い勝手はありそうだからな）

元々はイベントを効率的にこなすために配られた、アイテムを使用することにより覚えられた魔法で、その名は〈青爪邪核呪詛〉、アインズが同じ手段で覚えた〈大 致 死〉同様、魔力量による効果増大も、魔法職レベルを上げることによる上昇も期待できないという点で、使いどころが難しい魔法だと思っていたのだが…

「いえいえ、アインズ様にそこまでのことをさせる訳には参りません、ここはやはり、私の牧場で働かせ、ナザリックに対する害をなした者に施す「下等生物として相応しい振る舞い方」という物を教えておき

ましよう。」

「そうか…デミウルゴスがそう言うなら、その方がいいかもしれんな…牧場で新しい世界を見せることで、今までの自分を見直す機会を与える…か、なかなかいい考えだぞ？デミウルゴス。」

「は…ありがとうございます。アインズ様…その言葉だけで、このデミウルゴス、今までの尽力の全てが報われる思いでございます。」

そして、3人のそれぞれの思惑を乗せ、ただのチンピラ的な仕事を手伝えば高給がもらえるという甘い蜜に誘われた哀れな者達は…丘陵という見晴らしのいい土地で、牧場の運営に関わる犠牲者ろうどうりよくとして、連行されていくことになるのであった。

ほぼ同時に特別情報収集官の下へと連れていかれた『未来の苗床』イグヴァアルズとどちらが人間基準で軽い処分なのかは本人たちに判断を任せるしかないのだろう…。

☆☆☆

アインズとの新婚生活を妄想していたアルベドが、正気に戻るきっかけとなる扉の音が響き、アインズ当番のデクリメントが開いた扉から、アインズ、デミウルゴス、ソリュシャンが出てきたのを視界に収め、即座に腰を折った守護者統括、アルベドは、自らの地位に相応しい出迎えをアインズに向ける、それをアインズが片手を挙げることで「ご苦労」の意思を言葉としても伝えた後…

「これから少々、ルプスレギナと所用を済ませてこようと思う。まずは…そうだな、以前私が地位を与えることを許した『エイトエツジアサシン・リーダー』に連絡を取れ、目印となる腕章をつけているはずだ、そいつに私の護衛、それと天井のエイトエツジアサシン…1人ついてこい…ルプスレギナの護衛を命ずる。」とノリノリで指示を出すと、アルベドに視線を向け…

「では、行ってくるぞ？アルベド…我らが家の護りは任せた。」

そう言われると、先ほどまでの妄想が再び頭の中をかすめ、思わず

こう言ってしまった。

「行つてらっしゃいませ、お早いお帰りをお待ちしております。」

そして、そばにいたソリュシヤンに命じ、ルプスレギナに連絡をして、すぐ自室に来させるようにという指示を出す、天井のエイトエツジアサシンは、エイトエツジアサシン・リーダーを呼びに行った。

そして両者を待っている間、デクリメントを伴い、自室に移動しながら、魔法発動の準備をする、もちろん行使するのは〈伝言〉<sup>メッセージ</sup>だ。

現在はとつぷりと陽が暮れた夕闇が支配する夜…さすがにこの時間では女性の家に連絡をとるのは非常識だろうか？という意識が脳内をよぎるも…とりあえず寝ているようなら、あまりしつこくせずに〈伝言〉<sup>メッセージ</sup>を切つてしまおうと思いつつも、発動をさせる…もちろん相手はカルネ村の責任者だ…ネムが寝ているなら、起こすこともないという意識もあるので、万が一、起きていたら用件だけを伝えて、朝からお邪魔することにしよう…と心に決めていると…すぐに通話状態となる。

『あ、はい…エンリです、もしかして…ゴウン様ですか？』

しかし、アインズはこの時、まだ知らなかったことだが、ネムはすっかりアルシエの妹2人と仲良くなり、よくお泊まりをしに行くようにまでなっていた。

養母代わりであるリイジーも、それは普段から知っているし、アルシエ自身はまだカルネ村に馴染めて居ないとは言え、日ごろからみんなに溶け込もうとし、出来ないながらも村での仕事を覚えようと頑張っている姿は認めていた、だからこそ、可愛いネムの初めてできた同世代の友達との仲を温かく見守っていたのである。

エンリの所にも時々遊びに行っているが、リイジーから言われているのか、自分でも何かを察しているのか…、夜になると大人しく帰っていくので、頻度的にはアルシエの家に行くことの方が多い。

「お…おう…早いな、エンリ…さすがにこの時間だと、眠っているかと

も思つて反応がなければ、すぐに切るつもりだったのだが…その…今は、大丈夫か？「お取込み中」ならば…さすがに今度にしても良いのだが？」

言わんとしている内容を頭の中で浸透させているのか…しばらくの沈黙があり…『え…あ、その…う、だ…だいじょうぶ…です…』といううわづつた返答が戻ってきた。

アインズもさすがに新婚夫婦の夜に連絡を取るという状況が、どういうタイミングになりやすいかということくらいは理解している…だからこそ、念のため、だったのだが、どうやら当たってしまったようだ…。

「そうか…なに、そんなに長い時間はかからない…、ルプスレギナと共に、翌朝の来客がそつちにいくという報告と…それに伴い、そちらに来訪する際の担当者に持たせる物と同じものを村長であるエンリに託したい…という用件だけを済ませたいのだ…済まないな、こんな時間に非常識だとは思ふが…許してくれ。」

そう言つて、営業マンだった頃のクセで通話している姿勢のままわずかに首を下に下げる仕草をとつた瞬間、（アインズ的には何気ない行動だったのだが）横でデクリメントが目を見開いている。

（あ…まぎすつたか？）

と思うも、後の祭りだ…とりあえずの時間稼ぎとしてデクリメントに手の平を向け、腕を伸ばす、NPCの一般メイド達には割と評判がいいというアンケートでも上位の方にあつた「まあ、待て…」のポーズだ。

これをされると、言葉に出されなくても御方直々に『命令されている』という実感があるのだそうだ…自分にはよくわからない世界だが、本人らがそう言うのなら、そうなのだろうと、取り入れることにしたという経緯がある。

それに対するエンリの言葉は予想とはちよつと違う反応をされ戸惑つた、というよりカルネ村の住人であればまずこの言葉以外は出てこないのだが、村の救世主であるアインズほんにんからすれば全くそこまでのことをしたとは思つていない為、過分な評価という認識以外は出てこ

ない。

『いえ、カルネ村の救世主であるアインズ・ウール・ゴウン様のご要望であれば、いつであろうとなんなりと…村のみんなもきつとそう言うってくれるはずです。』

「そ…そうか…まあ、それならばその言葉に甘えよう…このような時間に村全体の騒ぎにするのはどうも気が引ける…なのでこれから10分程したら、エンリが村長宅として使ってる方の玄関先に転移するので、身支度が整ったら来てくれるとありがたい。」

「それではな…夜分にすまなかった。ンファイレア君も良かったら連れて来てもいいぞ…一応彼にも伝えたいことがあるからな。」

『は…はい、ンファイも…ですか？わかりました…何かイヤなお知らせだったりはしませんよね？』

「それはない…ンファイレア君は貴重な存在だと我々の部下…まあ家族のような者達も皆、浸透している共通認識だ…日頃のねぎらいと…念のための通達事項さ。」

そこまで通話していると、自室の前にまで来たのでデクリメントに扉を開けてもらう。

そして、話しながら、そのまま自室に入るとエンリからの返答が返って来るところだった。

『は…はい、わかりました…それでは…10分後に…お待ちしております。』

「うん…ではな…」

そう言って通話を切ると、引き伸ばしたデクリメントへの言い訳を頭の中で高速回転させる。

どう言って言いくるめようかと思っていると、口を先に開いたのはなんと、デクリメントの方からであった。

「アインズ様…さすがです…そのような対応をされてまで…我らがナザリックの維持を続けるために頭を下げる事もいとわないとは…このデクリメント、言葉もありません」

「えっ…」

何を言っているのだろうか。ただ茫然としてみると、その反応をどう受け取ったのか、デクリメントが再び言葉を発していく。

「この期に及んで、誤魔化されずとも…私も先程のナザリックの維持のためにあらゆる手を尽くされているというお話、矮小なこの身なれど、聞かせていただいております…もちろんそれに関わる事項であるためにあそこまでニンゲンなどのために下手に出られているアインズ様のご心中…いかばかりか…。」

「あ？ あのな？ デクリメント？」

「大丈夫です、この件はあの時、あの場でだけの会話、私共は背景のようには想っていただければ…決して、口外などは致しません…このことは私だけのムネの内に秘め、日頃からそのような想いをされているアインズ様のご苦勞に報いるためにも…このデクリメント…ナザリックの為に日々、精進して参ります！」

あまりに着いていけない展開に話が飛んでいったため、まだ沈静化されるほどの驚きではないこともあり、ポカンとしているが、なんとかデクリメントへの言葉は返しておく。

「うむ…ナザリックの為に、精一杯励むのだぞ？ 期待している。」

「は！ ありがとうございます、必ずや、そのご期待に沿える様、己を高めてまいります。」

お前はパンドラズアクターか！と思うほどに見事なピンとした姿勢の後に彼女がとった姿勢に、アレを幻視したかと思うほどの腕の位置…（さすがに敬礼では無かったが）、一般メイドがヤツのことをそこまで知るはずもないが…なんかじわじわと来るものがある。

と思っていると、精神の鎮静化が起こって抑制された…そこまだったか…と思っていると、ドアをノックする音が響く…新たに意を決したデクリメントが、ドアの外にいる者の確認をし、しばらくお待ちを…と訪問者に告げ…「アインズ様…ルプスレギナさまが到着されました。」と凜々しい表情で報告してくれた。

「うむ…それでは行くでしょう…部屋を出る。」

NPC達は基本、よほどのことがない限り至高の41人達の私室などは決して足を踏み入れようとしない…それは神域であるからだ…



決して汚してはならない聖域であり神域……だからこそ、その場所は御方々だけの為に尊重されるべきであり、許されるのは日々の掃除などの為、出入りする一般メイドたちだけなのだ……。

そして余談だが、ニンゲンとして初のナザリック所属のメイドとして、今は昔ほどの軋轢はないが、微妙な壁が一般メイド達との間に存在しているツアレは、現在、エ・ランテルのアダマンタイト冒険者『漆黑』の為に用意された……ナザリックの守護者達によれば簡素過ぎ、質素極まる館、アインズからすれば充分すぎるほど快適なのだが……、ここに人間社会用の専属メイドとして勤めてもらっている。

一時期はナザリック内でしか心の平静を保てず、人間社会に出てみるか？とでも言おうものなら、顔面が蒼白になり過呼吸、過度な体の震え、止まらない発汗などが起き、「ここで……ナザリックで、メ……メイドの……勉強を……」と涙ながらに訴える程だったから、あの時は相当心配したものだ……数年のリハビリ期間を経て（ツアレをセバスが救いだしてから、八本指吸収直後、悪魔騒ぎが起き、そこでアダマンタイトになり……そこではばらくパンドラスアクターと、（ナザリックNPC達にも）内緒で交代しつつ、帝都魔法学院に編入、途中編入なので2年と少し経過し、ジエットの卒業を待つ……そのタイピングで館が進呈されたため）、晴れてツアレはナザリック所属の人間社会出向用の専用メイドとして、第一号、メイド長的立場として働いている。

ちなみに人間社会用という限定された条件下とは言え、メイド長就任にまで至る彼女の努力は並大抵ではなかったのは、彼女をメイドとして教育するのに力を注いでいたセバス、ユリからも聞いていたため、そのお祝いとして、第五階層で凍結保存してあった、彼女の妹であるニニヤを「ワンド・オブ・リザレクション」で蘇生させ、感動の対面をさせた。

もちろん、盛大に喜んでいたのは妹のニニヤの方で……、ツアレの方は、そこまでの感情の起伏はなかったものの、優しく妹<sup>ニニヤ</sup>を抱きしめて、泣きながら感動している妹をなだめていた。

（もちろん、それからはニニヤもナザリックに取り込まれている。

思いつきりレベルダウンしてしまっただが、辛うじてレベルは消失まではいかず、タレントも失っていなかったため、寿命をなくし成長させれば、どれほどの成長につながるだろうか？と、内心、ちよつとワクワクして期待してるのをナイショにしてる支配者がいるなど、きつとニヤ本人は知ることはないだろう。」

そしてツアレの中ではメイドの工作中とそうでない時は、一定の折り合いをつけているようで、メイドの工作中は毅然とした態度で普通の人間など寄せ付けない雰囲気を出している（近づけさせるのはモモンと親しくしてる人間だけ）、そのためかどうか、その反動で、シフト制&交代制を導入し、週に2日程の休日を与えている時は、メイドモードがオフ状態の為、外には出たがらず、思いつきりインドアの引きこもりになっている。

その間、買い物などの生活全般の補助をしているのは主にニヤだ：嬉々として姉の世話を買って出ている。

まあ、彼女が自分の休日をどう過ごすのが、彼女の自由、踏み込むべきじゃないし、踏み込まれたくはないだろうと思ひ、モモンであるアインズも何も言わないし、好きにさせている：メイドの仕事さえキツチリできてさえいれば何も問題はないのだ…。

思いつきり話が逸れたが、そんなわけでアインズの部屋に「入れ！」と命じてもルプスレギナだけでなく、他の守護者達も遠慮して、決して入ろうとはしない。

だからこそ、アインズから先に部屋の外に出て、そこにへ転移門<sup>ゲート</sup>を開く必要があったのだ。

そして、隠密化して姿を消しているエイトエツジアサシン達を連れ、ルプスレギナと共に転移するアインズ一行は、こうして夜のカルネ村：現村長宅の前に訪れることになった。

☆☆☆

「ようこそお出でくださいました、ゴウン様…このところ頻繁にカルネ村までご息災なお姿を見せに来ていただき、大変うれしく思いま

す」

さすがに10分後という時間を指定しただけあって、すっかり身支度を整えたエンリとンフィーレアが、結婚式の時に用意し、結婚指輪として2人に渡したそれぞれ特殊な効果が宿っているあの指輪をして、自分を出迎えに来てくれていた。

「うん、エンリもよく勉強しているようだな…言葉遣いからして、以前との見違える差がよくわかる…もう立派な村長だ…もう迂闊に『族长』などと言ってからかえなくなってしまうな。」

堅苦しい挨拶は、こちらに来て支配者ロールをしていても未だに慣れていないアインズは、気軽に接してほしいがため、大抵はそう軽い感じで接しているのだが…恐らく、後ろにルプスレギナも連れてきているためか…、今日はいつも以上に「村長らしく」と言ったらいいか、「私はちゃんとしております」的な空気を感ずる。

そう言えば、さつきからカルネ村に来てずっとルプスレギナが静かだな…カルネ村でのルプスレギナもこんな感じなのだろうか…？

アインズの中では、エンリの雰囲気は少し、思う所はあったが、実はエンリの中ではかなり心中、穏やかではなかった。

なぜなら、今はゴウン様と一緒に居るからなのだろう、いつものおちやらけた感じの雰囲気は全く感じさせない振る舞いだが…、ゴウン様が居ない単独でのルプスレギナを見ているエンリからすれば、いつもの空気感が全く感じられないルプスレギナの方が、ずっと怖いのだ…「何も言わないだけで、ぜえくんぶん分かっちゃってるつすよお♪」と、内心想われているような気がするからだ。

ゴウン様からのご厚意により、カルネ村でのインフラ整備はかなり向上している、上下水道の整備も結構整っていて、見た目こそ牧歌的な『村』には見えないが…その実、各家にはマジックアイテムの「蛇口」が設置されていて、もちろん付随して、インテリア用のアイテム、キッチンシンクも備え付け、下水に至るまで、しっかり手が行き届き…一応、外からの徴税官らが見回りに来た時用にと、井戸自体はまだ残されているが、基本、そっちは『その日』以外は皆、あまり使用し

ていない。

なぜなら一日で、数十回はその蛇口から出る水で生活が事足りるからだ：なぜそのような話が今出たかと言えば…

結婚式を挙げた数日後、いつものように普通に生活していたエンリが朝を迎えると、その日の朝一で来訪したルプスレギナとバツタリ顔を合わせてしまったことがある。

その時の：少し鼻を鳴らしたかと思うと：「ニタあくく：♪」とでも表現できそうな意味ありげな笑顔を向けられ、「な：：なんですか？」と聞いたところ：「ん？なあくくんでもないっすよおおく」とシレつとその笑顔のまま、横を通り過ぎ：自分を通り過ぎる際に小声で「ま、夫婦仲がいいのは喜ばしい事っすよねえく♪」と：かなり意味ありげに言われてしまったことがあるために：、連絡があつてから10分で、身支度だけでなく、急いで水を用意し、全身を水ですすいだり、タオルでぬぐったりして、これでもか：と言うほどに徹底して身だしなみを整えたのだ：それでも、今のルプスレギナには全部、お見通しな気がするので、気が気ではない。

護衛として、エンリの後ろにはカイジャリとジユゲムが居る。それぞれ、エンリとンファイーレアの護衛として来てもらったのだ、その為、少しは心に余裕は出来たが、どうにもいつもと違う雰囲気、ルプスレギナに不気味さを感じてしまうのだ：、そっちが気になり、それどころではない：もちろんンファイーにも、全身、洗ってあげたり、拭いてあげたり、一番ニオイが香りやすいと思われる場所も念入りに洗ってあげたため、大丈夫だとは思いが…。

「私はもう、すでに覚悟はできております、私はこのカルネ村の村長でもあります：そして『カルネ部族の族長』でもあるということは整理ができております、どのようなでもお呼びください。」

（おおい：：なんか、変だぞ？エンリ：：今まであんなにイヤがつっていたのに：：急にどうした？）

「それはそうと、ゴウン様、このような時間にいつまでも玄関先ではあまりに不自然かつ、失礼：：まずは中にお入りください。どうぞ、ルプスレギナさんも中へ：。」

一瞬、「このエンリはもしかしてドツペルゲンガーか何かか？」と疑い掛けてしまうほど、全くいつもと別人のようなエンリに、アインズもちよつとだけどう接したのかという気持ちにさせられたが、大人しく室内に招かれることにした。

エンリにしてみれば、これでもまだ足りていないのでは？ ってくらいではある…だが、アインズからして見れば明らかにやりすぎであり、いつものエンリらしさが全く見えないのが逆に怖かったりもするのだが…、エンリにそれを感じる余裕は今はない…。

「それでは、ゴウン様、狭い家ですが、こちらの椅子へどうぞ」

「うむ…ではそうさせてもらおう…この家でこの椅子に座るのはこれで2度目だな…いや、懐かしい…」

そう言いながら、椅子に腰かけるが…あの時に感じた「今にも壊れそうな軋みの音」がない事に違和感を覚える。

「ん？ エンリ…これは新しい椅子でも新調したのか？」

「え？ あ…いえ、先ほど、ルプスレギナさんの使いだと言ってやってきた「狼のビーストマン」っぽい方が持ってきた物です、ゴウン様用に…とのことだったので…ゴウン様の指示かと思っておりますが…違ったのですね。」

「狼のビーストマンっぽい」ということはアレか…先日、デミウルゴスから「念のためのご報告と相談で…」と言われたあの一件でルプスレギナが牧場から身請けしたビーストマンか？

他のプレアデスには似たような種族や、同胞っぽいのが居るのに、自分にはこのナザリック内では見かけないから…、ビーストマンでも「狼タイプ」なら譲ってほしいと、ルプスレギナにねだられたのだそうだ。

まあ…たしかにユリはアンデッドだから、デユラハン自体の数はそう居ないが…アンデッドは豊富に居るし…同胞と言えなくはない…

ナーベラルはドツペルゲンガーだから、まあアイツの例を除いても、テンパランスさんが創造したNPCでちゃんとドツペルゲンガー種はいるしな…

ソリュシャンにとっては、三吉くんが一応、同じスライム種で同胞

…と言えなくもない…。

エントマに関しては、蟲という種類からして、恐怖公も居るし、コキユートスだっているわけだから、似ている種族なのは確かだろう…そうなる、シズはいないじゃないか…と思うのだが、「シズつちにはあのペンギン野郎が居るから大丈夫だと思っうんです！」がルプスレギナの言い分だったらしい。

まあ、とにかく自分と似たような存在がナザリツク内に居ないというのが「ベータ」という…一応『姉』的立場なのに、妹には居て、自分には居ない、というのがイヤだったのだろう…と思ひ、一体なら…とデミウルゴスに許可を出したのだったか…。

アインズとしては、椅子一つで、そこまで気を回さないでも…とは思ったが、気持ち自体は嬉しいものだったし、この程度なら『ホウ・レン・ソウ』がされなくてもいいだろう…とは言え…カルネ村に行くとは言っていないのに…よくわかったものだな…。

「ルプスレギナ…こちらに来るとは言ってなかったにも関わらず、よく見抜けたものだ…、相談もなく行動した点についてはあまり良い事ではないが…今回のこの点のみにおいては褒めておこう…よくやった。」

「はい…アインズ様…ありがとうございます。 所要にお出かけになるとのお話で今回のお呼び出し…ならば、その場所はこちらであろうと…、予想が外れないで幸いでした。」

感極まっているのか、腰をもの見事に90度に折り、深く頭を下げている。…そこはさすがにナーベラルとは違うな…そこで跪いたりされなくて本当に良かった…。

「それに、一瞬見ただけではわからない程の、この家の雰囲気は調和しているかのようなデザイン…わざわざこのように作ってもらったのか？」

「はい…アインズ様はあまり飾り立てすぎた装飾はお気に召さないようだと、デミウルゴスさまにお聞きしたことがあったので、もし、今回のようなことが起きた時の為に…素材の在庫的に数の少ないのは避け、LV20程の木材を使用し、予め創っておいたのが幸いですま

した。」

(あああゝゝゝ…それはきつと、あのリザードマン侵攻の時だな…、あの骨の玉座には参った…、とりあえず「骨のデザインだと、他者が見た時に『今にも折れそうな骨だな』という印象を抱かれかねん。)

その上でそのような玉座に座って、椅子の方が無事ならば…、きつとデミウルゴスなら、なんらかの強化魔法で問題などないのは理解しているだろうが、それを知らぬ者からすれば私が『そんなに軽いのか？』と、侮られる可能性もあるので、デミウルゴスが折角作ってくれた物に手を入れるのは心苦しいが…「デザインに手を加えてもいいか？」と、ムリヤリの理屈で押し切って、ナザリックの玉座に見ただけは同じようにしたんだよな…たしかLV50石材を基礎にして、それを覆うようにLV35木材で、ナザリックの玉座風に仕上げたのだったか…。)

「そうか…ならば、せっかくルプスレギナが作ってくれた椅子だ…今回だけの為に使い捨てでは、お前の手柄を台無しにするようなもの…これは、今後もカルネ村に来た際は、この椅子に座らせてもらうでしょう」

…と、そこまで言っつて、はた…と気づく…：そういえばこの家主になんの承諾も得ずに、今の発言をしてしまったことに…

「勝手に私がこのように話を進めてしまつてから尋ねる形になつて申し訳ないが、エンリとしては…どうだろう？ここに、この椅子があつて邪魔ではないか？」

「いえ！…とんでもない…：このような素晴らしい…ゴウン様の為の椅子を置かせていただけるなど…：光栄なことです…：ぜひ、ここに置かせていただきたいくらいです。」

「ん…：そうか…：ならば問題はないな…：エンリもそう言つてくれるなら、この椅子は、カルネ村のこの「村長宅」で使う来賓用にするといー！」

上機嫌でそう言つたアインズだが…：彼からすれば、この椅子は別に自分専用で…：という風にする必要はないと思つていたので…：だからこそ「来賓用」…：つまりは「自分以外でもお客様用に使つてもいいぞ」

という意味だったのだが、ルプスレギナもエンリもそうとは受け取らず、それ以降、この椅子はカルネ村に訪れた際の「アインズ専用椅子」という扱いになってしまふことには、まだ気づくことの無い支配者だった。

☆☆☆

「それで、ゴウン様、今回、このような時間にカルネ村にお出でになられた用件とは？」

ずつと雑談をしていても、さすがに夜の時間では家と家同士があまり密集していない『村』とは言え、あまりに声が響いては夜の静かな時間ではどこまで響いてしまうかわからない為、タイミングを見計らい、アインズに本題を切り出した。

「ああ…すまないな…肝心の用事を後回しにして、すっかりこつちの話をお優先させてしまった…」

そう言うと、閉じられたローブの中に手を入れ、懐あたりを探すような仕草をしている仮面アインズ・ウール・ゴウンの魔法詠唱者様は、「そう…これだこれだ…」と言われると、1つのネックレスを目の前に出して見せてくれた…その先端に吊り下げられているトップ部分には、鮮やかな血のようでもあり、初めて命を救っていただいた際に差し出してくれたあのポーションの色のようでもある吸い込まれそうな程に深い色の宝石？のようなものがはめ込まれ、それが目の前で揺れていた…。

そのペンダントトップの表側には何かの紋章がある。

(この紋章の絵柄は…どこかで見覚えがあるような…、でも私が知ってる何かの紋章なんて…そんなに多くはないはずなのに…、あともう少し、何かあれば…思い出せそうなのに…)

「どうしたの？エンリ…？」

「あ、あのね…このペンダントトップの紋章…何かで見覚えがある気がするんだけど…どこだったかな？って…」

「ああ…これはアレだよ…、初めてゴウン様のご自宅に招待された時に見た…ゴウン様が座られていた玉座の間上にあつた旗の紋章さ。」



「あああ!! それ? そっか、それでなんとなく見覚えがあつたんだ…、私の知ってる紋章の数なんてたかが知れてるから…見覚えはあるなど思ってたの…。」

「これでも一応、魔術師のはしくれだからね…、必須科目の中に「紋章学」っていうのもあるんだよ、だから覚えていたのさ。さすがに左右に並んでいた全部の旗の紋章までは覚えてないけどね…。」

「ほお…さすがだな、ンファイレア君は…、一度見ただけであれを覚えていたか?」

エンリの手の上に「ネックレス・オブ・アインズ・ウール・ゴウン」を乗せたアインズは、ンファイレアの方に向いて声を掛ける。

「ええ…さすがに壮観でしたからね…あれだけの眺めは、王城に行つたつてお目にかかれないでしょう…まさに夢の中に迷い込んだのかと思つたくらいでしたから」

「はっはっは、そうか、そう言つてくれるとこちらも嬉しいよ、ンファイレア君。 そうだ…ポーションの方はどうなつている? 最近の出来具合はどうだ?」

本題の前に軽い話題を振ることで、次の話を引き出しやすいようにと…営業マン時代の時に良く使つていた手段で、雑談を兼ねた情報収集に入る。

「ああ…はい…初めにお渡しした時のムラサキ具合よりは気持ち、赤紫っぽく感じられなくはないかな?…って程度までは来られたかなと…でもなかなかうまくは…すみません」

アインズからしたら、この世界の材料だけでムラサキだけでもすごいと思うが…さらにそこから気持ち程度とは言え赤紫に近づけているなら、十分な成果とは言えるのではないだろうか?と正直にそう思い、ンファイレアに声を掛けた。

「そうか…、こつちの世界の材料だけで、そこまで段階を進められるとは…、こちらが専用の器具を貸し与えているとは言え充分にすごいことだよ? 技術的には正に革命が起きたと言つても言い過ぎじゃないと思つている。 ンファイレア君、これからも期待しているよ…。」

そうやって声を掛けたのは、決して彼に対するお世辞ではなく、本心なのだが、それでもンフィーレアからすればアインズでありモモンでもある彼は憧れ以上の存在である。

そんな声を掛けられれば、感情も高まってしまふのは仕方ない事だろう。

「いえ！ まだまだ赤には程遠い段階です！ これに満足せずにもっともつとお役に立てるよう…赤いポーションに近づかせつつ、資金的にもお役に立てるよう、青のポーションの方の品質向上にも力を注いでいくつもりです！」

「そうか…それでこそ、私が見込んだンフィーレア君だ…あ、そうそう、ポーションの話もそうだが、エンリにも伝えたい話の延長でもある、二人ともよく聞いて居て欲しい話があるんだ。」

そう話を切り出すと、二人の視線が自分に集まったのを確信してから、本題に入る。

「それは、明日の…恐らくは午前中からお昼の間のどこかになるだろうが…この村に私が親しくしている者が来ることになっている。その時、数名「この村へ移住した者に面会する」という理由でこの村に来たいという者らが居てな？ その者らを引率する存在として…、一緒に来ることになっているんだが…当日じゃなくなるべくなら前日にそのことを知らせておきたくてな…急な話ですまない。」

そう言うと、エンリが少し驚いた様子を見せる。

「え？ 移住者ってことは…先日のアルシエさんのことですか？…その人への面会…って、大丈夫なんですか？ その面会に来る人達…この村の内情を知って、攻撃してきたりしないでしょうか？」

そこがこのカルネ村の難しい所だ…移住者を求めて、出来れば人数がまとまったものになってほしいというのは本心だが…だからといって誰でもいいって訳ではない。

今の村の現状を受け入れて、みんなと仲良くできる資質が要求されるのだ…。

しかしそれに対して、目の前の仮面の魔法詠唱者は、こう答える。「大丈夫だ…私の『友』が選んで、ちゃんと適性に関しては何いただしである…現状を見ると、最初は驚くだろうが…、エンリがいつものようにみんなに指示を出す場面を見せればイヤでもみんな認めざるを得んさ。」

アインズからすれば、誉め言葉のようなものでしかないその言葉も…心に整理をつけたと（目の前のルプスレギナの手前）そう発言したとしても、本心からケリをつけた訳ではない。

アインズ自身からそう言われると…「女」としての自分は、もう終わりを迎えており、「村の支配者」的な立場として、今後も生きることが要求され、それどころか、とつくにそれが決定づけられている気がする。

少し沈んだ気分でいるエンリの横で、ンファイレアが、エンリの背中をなでて、元気づけながらアインズに質問をしてくる。

「あの…それでゴウン様…その流れで、ポーシヨン関連の話とは？」

「ああ、そうそう、その引率としてやって来るその者は、エンリに渡したのと同じ物を持っている…それでな、実はポーシヨンとか、錬金溶液とか…そういうものを作り出すためのアルケミスト系の職を少し持っている、ひよつとしたら、今までのンファイレア君の知識に新しい風をもたらしてくれる存在となるかもしれないぞ？」

「えええ？ そうなのですか？ そんな方が…いらつしやるのですか？  
どんな方で？」

髪の下に隠れたはずの目が爛々とした輝きになってるのが分かるほど近くに顔を寄せるンファイレアが、ずずいとアインズへと迫る。

「いや…落ち着きたまえ…そんなに慌てずとも明日になればちゃんとわかるさ、その者は、ちゃんとその目印を見せれば、同じものを提示して見せてくれるはずだからね…。」

とりあえず、ンファイアを落ち着かせるためというのもあるが、ちよつとだけでも少し離れて欲しいという気持ちのアインズはまるで「明日の遠足が待ちきれない小学生」に『ちゃんと明日になれば』と言い聞かせる親のように、ひとまずは気分の高揚を抑えさせるべく言葉を送っていた。

「あの……ところで、ゴウン様……先程、おつしやってましたが、その人って、ゴウン様の『友』ってことは……ご同郷の方……なんですか？」

言葉の中で気になっていた部分をエンリが問いかける、エンリにしても目の前のゴウン様は本当に謎が多い、どんな時に飲み物や食べ物をお出ししても……水や、お湯であつても、一口も口を付けようとしな  
いのだ……

それで、ンファイと話をしたことはあるが……、恐らくは魔法使いとしての何かが左右しているのかもしれないという結論になった。

エンリは魔法が使えるわけではないので、詳しい点についてはンファイの話に納得するしかないのだが……多分、魔力やら、魔法を行使するための儀式や、誓い？などの為に自分の厳選した材料や、飲食物でなければ食べるわけにいかないとか……そういう理由でもあるのかも  
しれない……という話だった。

(この時間軸では、まだンファイアはアインズ・ウール・ゴウンという存在はモモンという冒険者と同一人物であるという認識はあるが、  
アインズⅡ<sup>オーバード</sup>不死の超越者だとまでは気が付いていない……そのため、まさか飲食自体ができない存在だとはまだ、わかりもしないのである。)

「ん………難しいな……、何と言えればいいか……そうだとも言えるし、  
そうでないとも言える……現状ではどちらとも言えないな……」

なんとも歯切れの悪い言葉を出し、普段のゴウン様らしくない言い方に、不思議な感覚を覚えていると、何かを思いついたように再び言葉を送る。

「まあ、確実に言えることは、その錬金術系の職業を持っている者と、

私の『友』は同一人物ではない…ということかな…」

エンリは、少し、自分が考え違いをしていたことに気づく…確かにこの村に来る適性を調べた『友』という人が、このカルネ村に来る引率者『私が親しくしている者』と同じ人間とは一言も言っていない…。

いつの間にか、どっちも同じ人物として考えていたことに申し訳なくなる。

「すみません、ゴウン様…ご同郷のお友達の方と別の方を一緒に考えてしまうだなんて…」

アインズとしては、まあ…わかりにくい説明の仕方だったし、自分でも姿がある程度自由に変化させる『友』の外見に対して、言いにくかったことは事実なのだ…説明しても翌日には違う姿をとっているのかも知れないのだから…。

「まあ…私の説明の仕方が分かりにくかったのだろうか？ 仕方ないさ…気にすることはない、」

「ああ…それからこれだけは伝えておこう…もしその『錬金術職持ちの者』と話すことがあるとしたら…、その人にはちゃんと仕えている主人が存在している、その忠誠心は並の軍人や武人など比較にならない程だからな…まあ、滅多に「その主人」を話題に出すことはないだろうが…あつたとしても変に刺激しないようにした方がいいぞ？」

そう言うと、エンリの後ろに護衛として立っているゴブリンに視線（仮面がゴブリン方向に向けただけだが）を向けると、一瞬、そのゴブリンたちに緊張が走る…が、次に発せられた言葉で自分らに向けられた視線の意味を知り、緊張を解く。

「そのゴブリンたちがエンリに捧げている忠誠心と、似たようなものだが…それより一段、強く、濃いものだ…とだけ言っておこう…、くれぐれも扱いには注意してくれ…それ以外は、まあ良心的な子だろうが…、まあ、あんまり警戒しないで居てくれるとありがたい。」

そこままで言葉を切ると、椅子から立ち上がったアインズは、いきなり立ち上がったことに呆気にとられるンファイアとエンリ、そして驚き、緊張するゴブリンらに対して、謝罪の言葉を口にする。

「さてさて、こんな夜更けにお邪魔して、長々と話し込んでしまった悪かったね…それではこれでお暇いとまするでしょう」

「あ…ああ…すみません、ゴウン様、お構いも出来ませんで…」

（なんか、妙に表情が晴れやかな感じになったな、エンリ…。　なんだ？　少しだけさつきより彼女の肩の力が抜けたんじゃないかって気がするんだが…？）

「いやいや、毎回、水もお湯も出す必要はないと伝えてあるのは私の方なのだ…、それより急用とは言え、このような時間に来てしまったお詫び…いや、わざわざ対応してくれた礼は今度するでしょう…それでは夜はまだ長い…、ゆっくりとするがいい…。」

アインズからしたら、夜になったら普通は眠るものだろう…という認識は、すっかり薄くはなったが、そういう感覚は忘れてはいない。

だからこそ、そういう風に語り掛けたのだが…エンリはどう受け取ったのか…こう答えていた。

「はい！　まだ夜の時間はありますよね…ありがとうございます。ゆっくりと…はい…そうします。」

（なんか声のトーンが、アルベドの声音とどこことなくダブる感じが今、ちよつとだけしたんだが…、いや、まさかな…エンリと彼女ではタイプが違う…恐らくは気のせいだろう…うん。）

「そうだ、そのネックレスは、いつ来客があり、目印として提示されても、見せられるよう、ちゃんと首にかけておくといい…まあ寝る時にまでする必要はないかな？　くれぐれも無くさないようにしてくれ。」

そう言っただけでエンリに『ナザリツク関係者』としての窓口証明として託したネックレス…（そのアイテム自体はまだユグドラシルが全盛期だった頃、まだ日が浅い新規参入組、まだレベルが高くないプレイヤーがギルドの参入したいと言っただけで来た時用にと…、初心者に対する支援効果を乗せながらも、ギルドメンバーとしての証として作ったアイテム（クランだった時代、ギルドの指輪すら存在しなかった時期、クラン内の仲間同士で身内の証明として使っていたアクセサリを改造した物）だが…残念ながら、ギルド内で資材や資源、クリスタルや、希

少金属、ギルド内情報などの流出を目的とした者達ばかりの参入希望が目立っていた時期でもあった為、歓迎する意味で作ったものだが、結局使われることなく死蔵されるに至った経緯のあるアクセサリだ(…)についての注意を促すと、「さて、帰るか!」と(転移門)を発動し、そこに入ろうとした…、その時、急に村が騒がしくなる。

夜だというのに、高い音、警告の鐘の音が村中に響き渡るように鳴らされているのだ。

(なんだ? 厄介ごとか? 今回はどんな来訪者がこんな夜中に…、まあちよつとだけどんな奴らだか、見てみるか…このカルネ村の対応力も見てみたいしな。)

なんて、お気軽な気持ちで、入り込もうとした(転移門)を解除し、さて、何が起きているやら…と外に出たアインズは全く気が付いていなかった…。

自分の背後、この村での最高責任者の背から、赤黒いとも思える怒りのオーラが幻視出来そうな程に肩を震わし、伏せた顔にピクピクとした痙攣が見て取れる。

そんな彼女が(怒りにより)震える手で今、アインズから託された「ネックレス・オブ・アインズ・ウール・ゴウン」を身に着け、ゆらりと外へと歩き出す。

ユグドラシル基準では、ほんのちよつぴりという程度の効果しか上がらなかつた認識の、このネックレス…こつちの世界では(下級抵抗強化)の効果の倍の数値が上昇するため、あらゆる抵抗力が上がり、さらにほんのわずかだが、防御の数値も上昇する…それはこの世界では普通の服が、鉄のフルプレート並みの強度になるという認識にはまだエンリには伝わっていない効果である。

「あ…これ…」(かなりヤバイやつだ…)

今までンファイアレアが見たこともないエンリのその表情に、鬼気迫るものを感じた彼は、とにかく、この夜中の襲撃者という名の被害者に、「穏便に済みますように…」と祈るのみであった。

## 第28話 決闘！ 血まみれゴブリンの大將軍！

カンカンカン…カンカンカン…と高らかに鳴る警告の鐘の音、その中をいつものような感じに住民たちが避難場所へと移動を始めている。

その様は、もうすでにカルネ村の住人たちにとっては慣れてしまったもので、未だに慣れていないのはアルシエ達3人だけである。

そのため、今日もアルシエの家に…というより、クーデリカとウレイリカという親友同然となった存在の家に泊まりに来ていたネム…そのネムに手を引かれ、アルシエを含めた総勢4名で避難場所への移動を誘導している。すでにネムもこういう時はどこに避難すればいいのか、理解してしまっているのだ、村の新入りで、まだよくわかっていない一家を連れて移動している最中なのだ。

最近では避難する必要があるのかな？ という想いも無いではないが…それでも、一応、念のためということ、移動を開始している。

こんな中でも人の波にもみくちゃにされてないのは、村の住人達も…「これは避難訓練のようなもの」とばかりに日常生活でのそれとそう変わらない移動速度で、とくに慌てず行動出来ているからだ。

しかも避難している最中の者の中には「今度はどんな奴らだと思う？」だの…「エンリちゃんの前でヒザをつかない人数が何人か賭けないか？」とまで談笑しながら移動している者まで居る。

もちろん、その中には「それって賭けが成立するのか？」という声を出す者まで居て、失笑が漏れるほどだ。

そんな中、人ごみとまでは行かない程度の場所を目立たないように移動している大柄な上背を誇る、住民たちよりは頭二つ分くらいは高い身長に、豪華なローブ、そして仮面の姿を認めたネムは、そちらを歩いているローブ姿の者へと声を掛ける。

「あああ~~~~!! ゴウン様だあ~♪」

ネムがそう声に出した瞬間、避難しようとしていたカルネ村の住人たち全員が、ネムの方を見、そしてネムの視線を追いかけるようにして、ローブの者を目に映す。



その瞬間、わあ〜つと人波が、そのローブの者に集まって行った。「ゴウン様だ！　ゴウン様、今回も我々をお救いに来てくださったのですか？」

「ありがとうございます、ありがとうございます、ゴウン様はやはりこの村の守り神です！」

「ありがたや…ありがたや…」

と、口々に褒め称える者、手を合わせ、拝んでしまう者、もはや、カールネ村にとっての「アインズ・ウール・ゴウン」と言うのは「救い」の象徴となっていた。

そうやって人々に囲まれる中、人波をかき分け、二つの小さな影がアインズに近寄って行った。

「ゴウンさま〜♪　ひさしぶり〜…さいきん会えなかったねえ、なにしてたのお〜？」

「ゴウンさま〜…クーデもウレイもいい子にしてたよお〜♪」

そう言つて、左右から、抱きついていく姿に微笑ましいものを感じ、住民皆が見守る中、それを横切るように、モノも言わず、幽鬼のようにわき目も振らず歩みを進める存在がアインズの目の前を通り過ぎていく。

言わずとも住民全てがその存在を知らぬ者はいない：  
エンリ・エモット  
カールネ村の村長だ

いつもであれば、皆それぞれに声を掛け、「急がないでください、慌てず、助け合いながら行動をお願いします。」という言葉で皆を安心させることを優先する村長が、今はどこを見ているのかすらわからないような…今まで村に居た者たちですらみたことのない表情をしているエンリが…ただただ、ある一点へと移動している。

「エンリはどうしたんだ？　いつもの彼女とずいぶん様子が違うようだが…？」

という、当たり前の感想を出す『救世主』に住民の皆も、同じ感想の様で、あまりちゃんとした答えが返せないようだ。

「ええ…私達も同感です…あんな村長は始めてみます…何があつたんでしよう…今回はそんな奴らだか、知らせも来てないはずだよ？」

「イヤ、まだどんな奴らだか、知らせも来てないはずだよ？ エンリちゃんだって、まだ聞いても居ないはずさ…」

「なら、あの近寄りがたい表情はなんだ…あんな顔、どんなことがあつたつてしたことなかつたはずだろう？」

「でもホラ…やっぱり後ろに従つてるのは、あのゴ布林さん達だろう、ならきつと行く先はあそこに決まつてるさ…」

「あああ…なるほどな…警戒をしておくのは当然の行動だしな…村の責任というものを自覚しているからこそそのあの表情なのかもしれない…。」

そう感想を漏らすカルネ村アインズ・ウール・ゴウンの救世主に、「そうか、そういうことだったのか…」という納得をした住民たちは「おおお…」と感動している。

「それはそうと、みんなも早く避難場所に移動しておかないと、危ないぞ？ さあ…騒ぎが収まるまで隠れているといい。」

そう言うと、アインズは両わきから抱え、両肩に肩車をしていたクーデリカにウレイリカを下ろすと…「さあ…行きなさい…」と優しく促してあげた。

すると、クーデリカがアインズのローブの裾をくいくいと引いてくる。

「ん？どうした？ 大丈夫だよ…ここは安全だ、危ないことはないから、隠れて…」

とまで言うのと、「ちがうの…そうじゃないの…」と最後まで聞くことなくアインズに話を短く告げる。

「エンリのお姉ちゃん、すつごくおこつてる、いろんなのがぐちゃぐちゃになってわからないけど…すつごくおこつてるみたいだから…」

そう、おずおずと彼女エンリの心境を教えてくれた。

「ああ…ありがとう…クーデリカ…覚えておくから、ネムに着いて行ってちゃんと隠れているんだよ？」

そう優しく促し、背中を軽く押してやると：「うん！ ゴウンさまもきをつけてねえ？」と答え、元気にネムに着いていく。

そうすると、周囲に響き渡るほどの：、そこまで大声ではないはずだが、良く通る声が周囲に指示として行き渡る。

「偵察部隊！ 集合！ 状況はどうなっていますか？」

偵察部隊とは、もちろんゴ布林ライダー1体を中心にして、ゴ布林アーチャー1体が入る形で編成された部隊、文字通り主に偵察を想定に入れた人員構成をしている。

当然、部隊の構成はその2体だけではない。野良ゴ布林も一応、居ることは居るが、それよりも一緒に森から逃げてきて、カルネ村入りを果たした、コボルドの方がよほど偵察部隊としては役に立っている。

そもそも森から追い出され、カルネ村に「血塗れ伝説」の望みにすぎり、『ゴ布林を率いている』のなら、自分らも拒否はされないだろうという理由でカルネ村に逃げてきたのがきっかけでコボルドも共に、今はカルネ村の一員となっている。

コボルドはゴ布林と戦闘能力自体はそこまで変わりはないが、ゴ布林よりは少しだけ知恵が働く、そして犬の頭をしている関係上、ゴ布林ライダーの乗っている狼ほどではないが鼻は利く：：なので、偵察部隊に編成し、鼻の良さを活かす役割も合わせ、ラッチモンの指導の下、レンジャーのレベル上げにいそしんでいる。

その上で、「追跡部隊」にもコボルドは配属され、主にコボルドの護衛役的な扱いでゴ布林は日々、エンリ親衛隊のゴ布林兵士たちに稽古を受けている。

森から抜け出してきたばかりのゴ布林、コボルドたちは、あまり高い能力はないので、コボルドはレンジャー見習いという名目を返上させたブリタ：、3LV程度だがレンジャー技能を取得出来た彼女が新入りの最初のレベル上げのために指導していた。

現在構成人数自体はそこまで多くで編成できるほど、十分な人数、難度に達していない為、少数精鋭という形ではあるが：

それぞれ「防衛部隊」「遊撃部隊」「斬り込み隊」「偵察部隊」「巨壁

部隊」「追跡部隊」の6部隊に大きく分けられる。

その中でも「斬り込み隊」は戦力不足の為、いまいち戦力的に不安が多いが、「巨壁部隊」はオーガ5体編成+カルネ村でも貴重な回復役、ゴブリンクレリックのコナーで構成されている、他にも3体のオーガが居るが、そちらは「遊撃部隊」の方に割かれ、そっちにはゴ布林メイジが入っている。

「追跡部隊」の方は、ゴ布林ライダーとゴ布林アーチャーの2体目達を中心として動かし、指示されて動く形となるのが、コボルドレンジャー達だ。

こちらは普段から活動しているわけではなく、必要に応じて、他の部隊の応援に協力したりもしている。

「その必要はないですよ？村長、こちらで確認はしています。」

偵察部隊の代わりに歩み出てきたのは、カルネ村では人間の…という意味では一番戦闘経験の豊富なレンジャーのラッチモン。そして、その後ろに居るブリタがエンリの前に進み出していた。

「…ラッチモンさんでしたか…それで？ 外にはなにが来ているんですか？」

「ええ…それなんですけどね…一応、こちらの反応を待っていてくれるので、正確に言えば襲撃ではありませんが…こっちに避難しに来た…という手合いでもないようでした…」

どう説明したらいいか…という雰囲気のリッチモンとブリタが視線を交わしながら外に来ている何者かについて話しくそうに教えてくれる。

「え？ どういうことですか？ その事情を説明する時間…余裕はありますか？」

相手の動機がいまいちよくわからないエンリからすれば、こんな夜中に来たと言うのに、外で出方を待っているというそのチグハグさに疑問を感じ、事情を聞いたです。

「ええ…まあ、こっちに用事があって、会いに来た人物がいるそうなん

ですがね…、どう返答したもので…という所です、むこうは、この村に『確信』を持っているようですが…。」

「ますます、意味がわかりません…、その相手はこんな時間に、誰に、何の用で会いに来たと？ まさか…新しい移住者のアルシエさんがらみですか？」

エンリからすれば、思い当たるのはその辺りだろう存在の名を挙げる…、そうであってほしいのが半分、あってほしくないのが半分…の半々といったところなのだが…。

「いえ、どうやらそうではないらしく…ですね…詳しい事情まではわかりませんが、今、外に居るのは間違いなく人間の訪問者です…ですが、友好的かどうか…と言われると…どっちなのか不明なのが…少々厄介な感じだなと…」

「結論から言ってください、一体、どなたに用事だと？」

一向に話が先に進まないことに苛立ちを感じてきたエンリが、「結局、誰に、何の用事？」の回答だけ教えてくれればいいのに…！という感情を乗せて、話を急がせる。

「…、その…村長です…。」

重い口を開いたのはブリタである…、彼女は外に居る人物に見覚えがある…というよりブリタが己の限界を思い知らされ、冒険者から離れることとなった原因が、今、門の外に居る人物なのだ。

自分は見張り台から見ただけであるが、その容貌は忘れられず、今も時々、夢に出てくることがあるほどなのだ…あの時はパーティを組んでいたメンバーと一緒にその者と戦ったが、全く歯が立たなかった。

それどころか、『自分より弱い女をいたぶる趣味も、差を見せつけて見下ろすつもりもない』と告げられ、パーティで唯一女であった自分は見逃されたのだ…。

その時の依頼は結果、失敗に終わり、報酬も得られず、パーティも自分以外は全滅…という目に遭ったブリタが、失意の中、見つけたのが「村への移住者募集！」という告知だった。

概要をボオッと見ていると、その村は災害によって村人が激減したため、村人を募集しているらしい。

自警団に入ってくれる人も同時に欲しいらしく、そういう人も「初心者でも、経験が無くても大丈夫。」という文句が書かれていた。

それを見た瞬間、「それもいいかもな…。」と漠然と思った。

どうせ、冒険者としても限界だったのだ、とてもじゃないがアイツみたいな剣の腕になるには、自分は婆さんになるまで修行してもムリだと悟ってしまったから…それなら自警団くらいならがんばれば務まるだろう…と思いついたからだ…。

問題は、その村は「トブの大森林」と隣接しているということ、村に住んでいるレンジャー以外にその森へ入ってもらおうつもりはないということだが…森から出てくるゴブリン程度なら、私でも相手が務まるだろう…と軽く思った。

「私にはもう冒険者を続けるほどの何かはもうない…この際、のどかな田舎に引っ込んで平穩に余生でも送るかな…、あ、そうだ…バレアレ商店の婆ちゃんに「あのポーション」買い取ってもらおう…。」

あの時は、「自分に売ってくれるなら色を付けるよ?」と薬師のあの婆ちゃんは言っていた、田舎に引っ込んでしまうなら、一応蓄えとして、ひと財産…とまでは行かなくても、当座をしのげる程度の生活費は必要だろう…と思ったからだ…結局、その婆ちゃん…こと、リイジーはこの時まだカルネ村入りをして居なかったので、買い取ってもらった。

結果、金貨30枚になって、リイジーからすればやっと待望の『神の血を示すポーション』を入手でき、一本だけの永久保存版として保管することになり、その後の研究にも大いに役立つのだが、それはまた別の話だ…。

「え? 目的は私…ですか?」

唐突すぎて、意表を突かれたエンリは素っ頓狂な声をあげた…なんで自分なんか知らない来客が来るのだろう…と思っていると、「そっちの方の用事か…」と冷めかけた怒りが再燃してしまうことに

なる。

「どうやら…、武者修行で…人間では相手が居なくなっていたという話で、大森林で『人型であれば、亜人種でもかまわない』とばかりに…まあ、常に1対1での戦いをしていたらしいですが…」

もう少し話を聞いていると、その者の周囲には、おそらく倒してきた中で従える流れになった者達だろう…、ゴブリンメイジにコンティニューアライト〈永続光〉を使用してもらったところ、ゴブリンを従えていること  
で有名なホブゴブリン…それに追隨するオーガも数体居たらしい。

「勝負を断るなら、こいつらに命じて、村を襲わせてもいいんだが？」  
とまで言っていたそうだ…きつとそこまでするとは思えないが…か  
といつてそう決めつけるのは早計かもしれない。

「それで、大森林の者らから私のウワサか何かを聞いたということ  
でしょうか？」

「そのようです、村長を名指しではありませんでしたが…『血塗れの  
ゴブリン大將軍』に会いに来た！ここに居るんだろう？ 相手をし  
てほしい！」とのことでしたね…確信してはいるようでした…「盛大  
に警鐘をならしてくれてかまわないぞ？」とまで言っていましたね。

なのでどうしたものやら…と。」

と、そこまで話をしていると、後ろから急に話に加わってくる声が  
聞こえた…その声は聞き間違えようはない…この村の救世主本人か  
らの直々の言葉だったからだ。

「おもしろそうじゃないか…エンリ…相手をしてあげてもいいんじゃないか？」

「え？ ゴウン様…なにをおっしゃるんです？ 私、戦士とかでも何  
でもない…ただの村娘ですよ？」

「ん？ とは言え、この村でせめて自分の身は守れるようにと護身術  
程度にはゴブリントループのみんなから手ほどきは受けているのだ  
ろう？」

「それは…そうですが…私の使える武器って言ったら、日頃から使い  
慣れている、土を耕すためのクワか…草刈り用の鎌くらいですよ？」  
「ん？…まあ、そうか…エンリは純粋な戦士系の経験は詰んでいない

もんな…、どうだろう？ その話、すつとぼけて「この村にはそんなヤツは居ない」って言ってみるのは？」

「ん〜…それは難しいんじゃないでしょうか？ この時間まで話し合いで、時間を食っちゃったんじゃない、相手にも「居ないはずはない、居るから」その話し合いの時間」ってバレてるでしょうし…」

「そうか…それだとすると、勝機はエンリの得意分野による短期決戦…、勝負が長引くと、純粹に戦士としての経験も体力も豊富な相手に有利な状況に転んでしまう恐れが大いにあるだろうからな。」

「そんなこと言われても…私、身を守るものなんて…鎧とかなんとか…着たこともないんですよ？」

「それは大丈夫だ…先程渡したネックレスを装備しているのだろうか？ それを身に着けていれば、普通の衣服でも、鉄製のフルプレート並みの防御力に底上げされる効果はあるし…、最近、戦闘に限らず、いろんな面で勘がよくなっているんじゃないか？ 反射速度が上がってたり…？」

「えええ？ まさかそれも…ゴウン様のおかげだったんですか？」

「よかった、ちゃんと効果は出ていたようだな…それなら、恐らくは外にいる相手となら、いい勝負が出来そうな感じはするぞ？」

「そんなあく…ゴウン様…ご自分が戦われないからって、そのお言葉はズルいんです…。」

「大丈夫だ、なんなら私とその相手との交渉役として一緒に着いて行ってもいいが？ 必要か？」

「え？ よろしいんですか？ ゴウン様が近くに居るなら心強いですが…、ぜひよろしく願います。」

「そうか…なら舞台を整えるためにも、協力者は必要だな…、万が一のために、エンリの撤退を支援する存在として…ゴブリントループらもいた方がいいだろう…、エンリ、彼らも全員一緒に居てもらってはどうか？」

「そうですね、ゴウン様と、ゴブリンさん達、みんなが居ればきつと大



丈夫！って感じがします！　みなさんもお願いで大丈夫ですか？」  
「「ええ！　姐さん！　オレ達で力になれるなら喜んで！」」  
ゴブリントルーパたちの元気な声が重なる。  
「さてと…あまり相手を待たせて、しびれを切らすことになっては村が危ない…今はオーガやトロール程度ならば、ジャンプしても村の壁に手もかからないだろうが…、オーガがオーガを肩車する…などの指示をされては、手が届いてしまう恐れもある、とりあえずは相手の出方を窺おう、もし有利にコトが運べるようなら、私からの心ばかりの支援魔法もかけられるかもしれん。」

☆☆☆

「やつとお出ましかい？　ずいぶんと待たせてくれ…って、おいおいなんだい、ずいぶんと団体さんだなあ…」

門を開いて出てきたのは先頭に仮面をつけたローブを来た男…ローブと言っても、見るからに価値のある物だと分かる…価値だけではない、恐らくは性能も鉄の鎧など比べ物にならない程なのだろうという…なんとなくの予測はできるくらいに物を着ている、戦士である自分でもそれが分かるのだ…きつとただモノではないのだろう。

続いて、ローブの男の後に続くのは…20？　…いや正確に言うところ19体か？　やけにガタイの良い…そこいらのホブゴブリンどころじゃないゴブリンも半分とは言われないがかなり混じっている。

5…いや6？…ちがうな、7体か…まあそれでもオレの本気には敵わないだろうが…、なんだ？　一番後ろの女は…見るからにこの中じやく一番戦闘向きじゃない…ただの村娘…って感じだが…？

「いやいや…待たせてしまってますまないね、こちらにもちよつとした事情があつてね、本来はそちらの希望する人物一人でお相手させるのが礼儀なのだろうが…」

「いやいや、こつちこそ、約束もなく押しかけて来たんだ…わがままを言ってる手前、ある程度はそちらの要望は飲むつもりだったさ、にべもなく断られるのは避けたかったからちよつとした脅しはさせても

らったが…、本気でするつもりはなかったことくらいわかってくれればそれでよかったんだ。」

「そうかね…まあ、それなら必要のない被害が出なくてよかったよ、こちらとしても自分がわざわざ手をかけてまで救った村が争いの場にならずに済んでよかったと思っっているよ。」

「ところで…どちらさんが「ゴブリンの大將軍」さまで？どれも、部分的な要素は満たしているが…全部の条件が合うのは1人も居ないようにしか見えないんだが…？」

「ふっふっふ、こちらもその件が興味深くてね…私たちが広めている話じゃなく勝手に広がってる内容だから、手の出しようがない…だから聞きたいのだ。今はどのような話でまとまっているんだ？」

「あ？ あああ、そりやそうだよなあ、こういうのは尾ひれがついて、どんだんおつきくなるのが相場つてもんだ、オレの集めた範囲でよければ話せるぜ？」

「ああ…集めたということとは、諸説ある…と言ったところみたいだね…聞かせてくれないか？」

目の前の男が言うのはこういう話になって行ったようだ。

・最初は「血塗れのゴ布林將軍」といううわさ話だった、もちろん「ゴ布林程度じゃ將軍って言っても大したことがないだろう」程度だったが、日増しに話が違っていったらしい。

・次に聞いたのは身の丈2mは超える大女で、片手で古エルダーの悪霊犬の首をねじ切った上、断面から滴り落ちる血を、そのねじ切った片手で絞り続けるままノドに流し込むように飲むほどの豪傑らしい…という話。

なんだそりや…そんな女が居るわけねえだろ？って言うのが感想だったらしい、それはそうだろう、有名なアダマントイト級冒険者チームの戦槌使い…「性別分類としての女」だってそこまでするわけじゃない…という認識だったとのことだ。

・日に日に大きくなっていく話は、どこまでが真実で、お前、それどこから得た情報だ？って話が多くなっていった。

・最終的には、王国内のとある土地、それも一番悪目立ちのしない「村」に潜伏して、ゴブリンのみならず、あらゆる亜種族の者達をも支配して、村の人間達の頂点に立って日々を過ごしているらしい。という話になって行った。

・そして、トドメはその話が最終段階に入ったかぶり：「血塗れエンリ」という話にまで広がっていった時だ…。

期待はできない話だが、大森林での亜人決闘の毎日にも飽きてきて、たまたま寄った場末の酒場で聞いた面白い情報：キーワードは「王国内に存在する村」で、「本名かはわからないがエンリという呼び名」：ただそれだけの情報で、王国内の村々を渡り歩き、情報を集めて回っていたらしい…。

「やれやれ…ずいぶんと遠回りをしてきたようだが…そこまでの苦勞をして、キミは何を求めて、その『將軍さま』とやらに会いたいのかな？」

そう言われた男は、わずかな迷いもなく、こう答える。

「ん？ そりやく強い奴と戦って、自分をもっと強くするためさ…オレの目標はまだまだ遠い…そのための「対戦の機会」ならいつだって大歓迎だ。」

目の前の仮面の（…声からして男だろうが…マジックアイテムや幻影で姿を変えろという手段もある、一概にそう決めてかかるのはまだ早い…、その直感の外れていないだろうという不思議な確信はある。）者から怪しい眼の光が見えた気がした…仮面で目は外には見えていないにも関わらず…だ。

「そうか…その目標と言うのは…聞かせてはもらえないかな？」

「そりやくもちろん、オレを負かした男と再度戦う機会が来た時の為に…そいつを超えたいがためだ！ …あの、周辺国家最強の…あいつに！」

「そうか…そうか…そういうことか…なるほどな…理解した…」

「ところで…さっきの話だが、本当にどれがその『將軍さま』なんだか、

そろそろ教えてくれねえかな？ こっちはずっと待ってるんだが？」  
「ああ…、すまないな、こちらの話ばかりで…そこを教えずにいたことを許してほしい…だが、今の君にその正体を明かすことは悪いができないのだよ…。」

「はあ？ なんてだよ…この村にも居ねえってことはねえんだろ？  
今までの口ぶりからして居るってことは分かるってもんだ。」

「まあ…そうなのだが…、結論から言うと、今の君にその『將軍』に合わせるも真面目に信じてはもらえないだろうということが一番の理由だ。」

「おいおい、そりゃ〜ないだろう？ ここまでさせといて、門前払いかよ？」

「いやいや、それではさすがにそちらの気が済むまい…悪いがこちらの方も、この時間、しかもこのタイミングで…流れてしまった時間を取り戻すことは出来ないその苛立ちで収まらなくなっている者も居るのだ…お相手はさせてもらうよ…ただ…私は見届け人。…そして、ここにいる19体のゴブリンは、戦いの場…その舞台を作るための人員だと思ってくれたまえ…。」

「あん？ どういうことだ？」

「悪いがゴブリントループのみんなは、その目の前の戦士を中心にして、大きな輪を作るように一定距離ずつ離れて、立っていてもらいたいのだが…エモット？ そのように命じてくれないか？」

今までずっと、自分のことを「エンリ」と呼んでいてくれた恩人が「エモット」呼びになっていることに寂しさを感じるものの、今の話の流れからして、たしかに今の時点で「エンリ」とバレルのは色々問題がありそうなのはわかるので、従うことにする。

「それではみなさん、今、言われたように、よろしくお願いします…：そうですね…：20〜30mくらいの円周を作るような感じで…：よろしくお願いします。」

そうエンリから指示されると、ゴブリントループ達は言われるままにその距離を保ちつつ、大きく円を作り、その中にアインズ、エンリ、

そして目の前の男…という構図になる…。

「あれ？　ちよつと？　あんたが相手してくれるんじゃないの？　オレの相手、この子？」

「ああ、そうだ…見かけに惑わされない方がいいぞ？　これでもその子はこの村の中ではその「ゴブリンの大將軍」さまに最も近い距離に居る人物だ。　侮ると痛い目を見ることになる…とだけ忠告しておこう。」

「へえ…そうなんだ…そりゃ〜どんな戦い方が飛び出すか楽しみだ…。」

「あ、ちなみに私が彼女に支援魔法などで、強化したりするのは問題ないだろうか？」

しばし、考え込んでいた目の前の男は、「んん〜〜〜…」と悩んだ挙句、「彼女の力量を台無しにするくらい的大幅な強化なんかはやめてくれよ？　もしそんなことがあったら反則ってもんだ。」と、だけ条件を付けてきたので、それを了承する。

「そうか…了解した…」

という声と同時に外周に立っていたカイジャリがエンリに向かって何かを放って投げてよこした。

「これを使って下せえ…姐さん！」

「ありがとう、カイジャリさん…」

そういつて、得物を受け取ると…その手には日頃からよく使い、エンリにとっては使い勝手のいい護身用武器でもある「草刈り鎌」を左腕に握る。

「へえ…お嬢ちゃんの得物はその武器って訳かい…だが、こつちはさすがに女の子に刃物まで使っちゃ、寝覚めが悪い…手刀で勘弁してもらうぜ？」

「じゃ〜がんばるんだぞ？」

という声と共に、エンリの肩に手を置く見届け人&審判、エンリ的にはそれだけなのだが、アインズはこの時、エンリに〈中級敏捷力増大〉をかけていた。

「それでは…両者、距離を置いて、立つように」

アインズにそのように指示されたエンリはその言葉に従うべく、円周の端の方へと歩いていく、そして、相手に目を向けると、左に持った鎌を相手に突きつけるような構え方をする。

そして右腕の方は、わずかに引いて腰の位置だ…もちろん右手には何も持っていない。

対する相手の男は、エンリと逆の位置、正反対の位置を陣取るようにして、腰を落とし、左腕と右腕を自分の左腰に…エンリとは違う角度で腰に添えている…それはまるで、今にも刀を抜くぞ、とでも言いたげな構えに見える。

「では…始め!!」

掛け声と同時に飛び出したのはエンリだ…相手はまだ開始位置から動いておらず、まるで待ち構えるように腰を落とした姿勢のまま微動だにしていない。

「そこまでなめられているのなら、余裕に見られている内に決着を…」  
と思っっているエンリにゾクリとしたものが襲う…それは実際に起きた危険ではない…が「予感」とでもいうべきものだ…このまま一直線に行ったら危ない…という認識が不意に浮かんだ。

それはもちろんエンリの戦闘経験に裏打ちされたものではない、装備している結婚指輪…その中に付与されている「鋭敏感覚」を強化する魔法がエンリの身に危機として知らせて来たのだ。

エンリは、あと一歩踏み込めば相手に攻撃が届く、という間合いで…その踏み込みをムリヤリ横方向に体を急速に方向転換させた。

そうすると、自分の首筋のすぐ手前を相手の手刀が光のような軌跡を描いて振りぬかれたのが分かった。

前に進みながらの横っ飛びだったので、結果的にナナメ前方向に行くことになってしまったが、直進していたら、きっと今の手刀が頸部に当てられた自覚もないまま意識を無くしていたかもしれないかと思うと、大丈夫だろうか…自分はこの男に本当に勝てるのだろうか？という思いがよぎる。

だが：こんなことで負けるわけにはいかない：夫が門の向こう側で待つてくれているのだ：、そう：こんなことさっさと終わらせて、まだ朝までは時間がある：それまでの時間、残された朝までの時間を二人で一緒に過ごごさなきや！という意識一色に染まるも、まるで手立てが浮かばない：自分が教えられたのは初手で油断している相手に一撃を加え：できればアゴ先に拳をヒットさせること：それが有効な手段であったのだ：、だからこそ体の向きは左利きの動きを意識して鎌を構えた：が、相手は迎撃の手段が得意だとは：相性は最悪である。

しかし、なぜ拳になったかというと下手な武器でより、エンリの力はかなり：エンリが思っているより強力なのだ：、まだサージエントの職業もコマンダーも取得してなかった：あの襲撃事件の際、エンリは怒りの感情をこめて：「お前なんかに負けるか！」の気持ちを乗せて、相手の兜ヘルムに拳をお見舞いしたことがある。

普通は、今まで拳をふるった経験のない女の子が下手に拳を振るおう物なら、不自然な殴り方により手首を痛め、恐らくは鉄よりも魔法的な強化を付けた防具、しかもヘルム部分を素の拳で打ち抜こうというのだ、当たり前だが、「殴る」という行為に耐えられるだけの構造になっっていない場合、皮膚が破れ傷つき、肉が露出し、血がにじむ程度では恐らく済まないだろう：、それでもエンリは、妹のネムを救うため、一秒でも命を長らえさせるため、それを敢行し：大人の兵士をそれでもよろめかせ、反応をほんの一瞬でも遅らせることが出来たのだ。

そして今は、その頃よりも、ずいぶん筋肉がついてしまい、ゴブリンたちにその筋肉の付き方を褒められるくらいなのだ：それが不意打ちでアゴ先にヒットすれば、大体の者は、脳を揺らされ、立っていられなくなる。

もつと言えば、そのまま意識を刈り取ることも不可能ではないだろう…。

だからこそそこに賭けたのだが、見事に当てが外れた：これでは初手からして失敗、こちらの手の内を読まれてしまったことになる。

「まあ、そう来るだろうなと思っていたが…やっぱりあんた、本当は右利きだろう？ ムリに左構えなんて途中からやるから不自然さが隠せないんだぜ？」

余裕を見せるように相手はこちらの失敗をわざわざ教え、教師のように至らなかつた部分を言い聞かせてくる。

（そうか…だますなら、最初から左利きの身のこなしをすればよかつたのか…）

そう思うもエンリはそこまで器用じゃないし、演技派でもない、本人曰く、  
「ただの村娘。なのだ…。」

「ホレホレ？ どうしたい？ ずつと見つめ合つてたつて決着は終わらないぜ？ このまま朝までオレとにらめっこかい？」

彼からすれば、相手を挑発し、冷静な判断を失わせるための言葉…これが勝負を決定づけた。

エンリからすればその言葉は…踏み込んではない領域に土足で踏み入られた気分になつたのだ…

その気分はとてもじゃないが穏やかではいられない…が怒り狂うという段階をすでに超えている。

怒りすら通り越し、沸点すらすでに突破している、沸騰ですらなく水分は蒸発しているようなもの…ぎゃくに怒りが達しすぎて、冷静に相手を威圧していた。

「それを…とうとう言つてしまいましたね…、今の私にとっては一番…、踏んではいけないモノをあなたは今踏み抜いてしまいました…」「いいでしょう…そこまで言うのなら、私の本気を今からあなたにお見せしましょう…、これは今の私には手加減は出来ません、覚悟はいいですね？」

まだわずかに残つていた相手への最後の、最終警告、しかし、それも相手には通じなかつたようだ… 待つてました、それこそ望むところ…とばかりに反応が返つてきた。

「おおー… できるもんならやってみな…どんな攻撃だつて、打ち落とせる自信がオレにはある!!」

その言葉を聞いて、エンリは決断した…それならばその身で受ける



がいい：と、今までもずっとどんな亜人種でも相手にしてきたこの能力：初めて使った時のような脱力感は、二度や三度使ったところで、今はもう疲れもしない：言葉への力の伝え方で強弱のコントロールもできるようになってきているのだ：それを全開放してあげようと強く決断した目に、もう迷いはない。

「後悔しなさい!!」

まるでエンリの背後から、滝が逆流でもしたかのような圧倒的な裂帛の気合、威圧、気迫：それらのない交ぜになった全てのものを叩きつけてくるような圧迫感。

自分は彼女に対して、ここまでにさせるようなことを言っただろうか？という一瞬の逡巡が、さらに勝敗を決定づける。

もう、すでにエンリの中には相手に対する気づかい、できれば平和に：という段階を超えてしまっていたのだ：すでに彼女の中には「遠慮」という文字は消失してしまっている。

「ひれ伏し、 跪きなさい!!」

目の前の相手の手刀の間合いよりも外からなので、相手も迎撃の体勢を維持していたのも手伝っていた、その為、間合いの外からの影響をモロにかぶってしまった形になる。

今のエンリは、かつて、オーガをひれ伏させた、あの時のような、父親を殺されたシーンを思い浮かべての「仮想敵」へと向ける感情での「命令」ではない…。

遠慮する必要のない、情け容赦のない上官的思考一色に染まってしまうている。

しかし、相手も歴戦の戦士、あらゆる修羅場を通ってきた自負もある、そうそう目の前の女の子の言葉一つからかかってくる、こんな訳の分からない重圧に屈するわけにはいかなかった。

必死にその言葉に全身で抵抗しているも、精神力を総動員して耐える必要が有るようで、攻撃の方に意識を少しでも向けると、全部の主導権を持っていかれそうだと：ずっと身体を震わせながら、すんでのところで自分を保っていた。

しかし、それを面白く思っていないのはエンリである…、さつきま

で夫との夜を共に過ごし、一番幸せな瞬間に達しようとした瞬間、<sup>メッセージ</sup>〈伝言〉の魔法…、すぐさま意識を強く持ち、寸止めの状態でも、ずっと自分を保ってきたのだ、しかもその<sup>メッセージ</sup>〈伝言〉の魔法を送ってきたのはかつての村の恩人、文句など言えるはずがない…。

それでもなんとか、話が終わり、恩人からも「まだ夜は長いのだから…」と言ってもらえ、「ゆっくりと」…と気遣いまでしてもらえたというのに…それなのに、目の前のコイツは…その私の行き場のない想いをあざ笑うかのように、今夜というタイミング、寸止めからの再開が期待出来たという想いから突き落とされるような瞬間を狙ったような襲撃…この今までの苛立ちの全てをぶつけてやる…という半分は八つ当たりであるのだが…

だが今のエンリにはそれすらも関係はない…「朝までオレとにらめっこかい？」とまで言われたら黙っていられない、こんな夜中にやって来て、夫と過ごしたい夜を邪魔したお前が言うセリフか!!という感情がどンドンとす黒いものに変化して行っているエンリは、いい加減イライラしてきた…なにをこいつはがんばっているのかと…。

すぐに夫のムネに飛び込みたい気持ちのエンリは、心から湧き出た感情のままを言葉にして、相手に叩きつける…奇しくもその言葉は、アインズもよく知る、某、守護者が発したこともある言葉と全く同じものであった。

「抵抗するな!!!」

その瞬間、「どしゃあ!」という音と共に、ヒザどころか、両手を地につけながらも、それでも背中に大きな岩でも乗せられているかのよう<sup>に</sup>に地面に貼り付けられたようになってる男の喉元に、さつきから持っていたままの草刈り鎌の切っ先を当てる…、さすがに殺そうとまでは思っていなかったのだが、もしこれでも負けを認めないなら…きつと、エンリは最後の一線すら超えてしまっていただろう。

そしてその様子を見ていたアインズは驚いていた。

さつきの命令を下していた様子は、まさに…「デミウルゴス」を彷彿

佛とさせるものだったのだ…、思わずエンリの背中に、彼のスーツ姿が幻視出来てしまったほどには…。

そして、最初にアルシエをカルネ村まで送ってきたときにエンリが言っていた「自分はどうなっているのか？」という悩みはこれだったのか…という、ある意味で納得させられる一シーンを見せられた気分だった。

だが驚きはしたが、決して悪い気持ちはしない…これはこれですごくいいことだ…と思うからだ…きつと、結婚指輪で送った、「鋭敏感覚の強化」の他にも付加されている、「指示、指揮系能力の向上」という面もきつと大きく作用しているのだろう…、まさか、これほどになるとは…という、下手をしたら、ンファイレアへの評価の付属物(想い人、妻)としてのエンリではなく、彼と同じくらい貴重なレアケースとして受け止めてもいいかも…と思いは始めている程度には、エンリのことを見直していた。

まあ、もちろん『ゴブリンの大將軍』としてではなく、エンリがそのまま敗色濃厚のままだったら、アシュールヴァニバル最古図書館から呼び足していたレツドキヤップを一体、「そいつがゴ布林大將軍」だ！と言って、再戦させてみてもいいかも…とも考えていたが、その必要もなくなつて、ホツと安心していた仮面の恩人が「アインズさままいった…オレの負けだ…」と降参の意思を告げた男との勝負に…

『勝負あり!!』

と高らかに宣言をし、決着を告げると、その男を放置して、村の中へと移動…。

エンリをンファイレアへと預け、「まだ夜は少しだけ続くから…まだゆっくり寝ているといい」と言った、そのねぎらいの言葉も…今のエンリには…全く意味が違って聞こえていたのだった。

そうして、やれやれ、やつと帰れるな…でもまあ、なかなか面白い勝負だったな…と満足げな想いで居ながら…、後ろにルプスレギナを連れていたことを半分以上忘れていた支配者の夜は

ナザリックにて過ぎていくのであった。

第29話 その剣客の名は…、そして新たなる訪問者。

オレはブレイン・アングラウス。

己の剣の腕を高め、戦士として自分を負かした男を超える為、あいつに負けたあの日から…ずっとそのことだけに自分の全てを費やしてきた…。

そして、あらゆる人間を相手にして戦ったが…自分と並ぶ相手と会えたことはなかった。

一時期、腕つぶしの強い者と戦いたいがため、用心棒をやったこともあった、そいつらがろくでもない事をして居るのは知っていた。

…だが、自分はそれには加わらない：「用心棒」としての仕事が重要な時だけ、それに全ての意識を向けた。

自分の実力を高めるためのポーションや、強化系のマジックアイテムが見つかったら、それを都合してもらおうこともあった。

しかしそれらは、横流しをしてもらうのではなく、用心棒としての報酬から、それを「買う」という形でもらい受けていたし、基本その悪事に直接関わってはこなかったつもりだ…。

だがそれも長くは続かなかった、数年様子を見ていたが、自分が戦う機会というものはそうそう訪れることはなかった。

時々、冒険者が乗り込んでくることもあったが、それだけだ…挑んでくる者には容赦しない、だが女子供には手心を加えることもあった、それは強者を相手にすることを望みとする自分には、決着をつける意味もない相手だったからだ。

どのみち、その程度の者しか相手にできないのであれば、わざわざ長居して用心棒を続けていても自分の実力が停滞することは目に見えて明らかだ…だからおれは、ソコを抜けた。

それからは「人間との戦闘」にこだわらず、人間種の類であれば、亜人種であろうとも戦いを挑むこともあった、一番手ごたえがあり、数

日の長丁場になった相手はトロールだった。

ダメージの回復という特性があり、上背もあるため、喉元に剣が届きにくいこともあり得意の切り札としての技も難しい、ダメージを与えては距離を保たれ、回復され、またダメージを与え…のジリ貧状態だった。が〈領域〉を使っていたため、こちらがダメージを受ける事態はトロール程度の攻撃速度ではそもそも起きなかった。

差し当たって、「大森林」の中で考える限り、一番強かっただろうトロールに勝って、(勝った後、「オレらのボスに勝ったんだからあんたがオレらの新しいボスだ」とか言って、オーガやホブゴブリン共が従って着いてきたりもしたが、まあ、目立たないなら好きにしろ…と言って好きにさせていた。)それからどうしようかと思っていた時に知った、「ゴブリンの大將軍」の名前…始めは話半分聞いていたが、数日に渡りその噂話が大きくなっていくにつれて興味が出始めた。

それはどんなヤツなんだろう…と…一説ではゴブリンの…と云いながら2mを超える大女という話も出ていたし、明らかに話を盛ってるだろうという内容もあった。

それでも、もしも、本当に強いなら…という淡い願いもあり、探そうと…どうせ他にすることもないし、時間つぶしにはなるか…程度に思っ、捜し歩き、あらゆる情報を集め、ようやく1つの村にたどり着いた。

そこは明らかに、見た感じ「村のレベルの防備じゃねえだろう！」と思っ…が、あの噂の「ゴブリンの大將軍」が根城にしているなら、これくらいの防備は当然かもしれねえな…そうも思っ。

そこの村で、ある女と対戦することになった、変なカツコの魔法詠唱者らしいヤツが色々交渉してきたが、折り合いをつける形で「ゴブリン將軍の最も近くに位置する」としてその一見、ただの村娘としか思えない小娘と戦うことになった…が、結果は俺の負けだった。

その女の体の動かし方、軸のブレ、歩き方、立ち居振る舞い、それらから判断し、総合的に見て「戦士ではない」そう決めつけた。

そのための油断だった…というのは言い訳だろう。

自分の落ち度があった部分と言えば…目の前で戦うことになった女の子が、実は戦闘するタイプではなく、『指揮官』タイプの構成だったと思ってもよらず、相手の行動を一方的に許してしまったことだ。

自分なら、どんな攻撃でも〈領域〉の効果で、すぐに察知できるし、打ち落とせる…そう過信してしまったのが敗因だ…。

だからこそ、オレは甘んじて、その女の『命令』された行動をずっとしていく…。

命令された行動の持続時間はとくに切れていて、動かそうと思えば体のどこでも動かすことは出来る…だが、そうはしなかった。

あの男との対戦を…再戦することがあれば…勝ちたい！ その願いは…渴望は未だにオレの中にある。

だがしかし、それでも、そこに至るまでの経過として、実力を高めるための足掛かりとして…やってみてもいいかもしれないという、「1つの方向性」を思いついてしまった。

「あの指揮官…もしくは大將軍と呼ばれるものの側近…又は部下として、力をつけていきたい。」

そう思ったからだ…だからこそ、オレはそのまま跪き、ドゲザの姿勢を未だに続けている、誰が見ていようと、見て居なかりょうと関係はない。

（惜しむらくはあの時、彼女は強くない…そうタカをくくって名乗りさえしなかったことだ…今更後悔しても遅いが…彼女の中では名無しの雑兵以下という認識だろう…。）

そう思いつつも続けているこの行動…、かの「十三英雄のおとぎ話」の中にあつた一節、まだ力もそんなになかった主人公の（…後にその十三英雄たちのリーダーとなる）若者がたまたま巡り会った名のある戦士との出会いを果たし、弟子入りを志願するために、3日3晩、門前で「ドゲザ」をして弟子入りの許しを請うた、という話をなぞらえての行動だった。

ただの自己満足かもしれない…、物語のように3日でなんとかなるかどうかもわからない…だが、この身1つしか持っていない自分では…示せる何かは他にない…だからこれを続ける。

そう決意してのドゲザを続けるその姿勢は誰にも理解はされなかったが、門の前でずっとその姿勢で身じろぎ一つしない為、カルネ村の見張り台から見ている夜番の2人からは「あの人、動いてねえけど、死んでるんじゃないやねえよな?」「まさか、あのまま寝てるってことはないだろうしな…」なんて話されている程度には話題にはなっていない。

そして、やっと平穩が戻ってきたカルネ村の夜が更けていく……。

☆☆☆

カルネ村の朝は早い、ほとんど日の出と同時に目を覚ます。という日常になっっているエンリはさっそく、キッチンに歩みを進め、顔を洗い、手をすすぐ。

ゴウン様の恩恵のおかげで、この村での生活はずっと前より楽になった。朝一番で井戸に水を汲みに行く、という行動を一つ省略できるのだ…起きてすぐ顔を洗えるという行動は昔からすれば考えられないこと…、今のカルネ村は、きつとどの村よりも恵まれているのではないだろうか?

そしてこれも日々の日課になりつつある、「ゴウン様への感謝」を捧げ、祈りが終わると、隣の部屋ごしに眠る夫の寝顔を思い出す…。

エンリは昨夜も…「夜の時間」もあと少ししかないということとは分かっていただろう自分の夫が、自分の為にずっと愛してくれていたことと自体、嬉しくもあり、感謝もあるのだ…その疲れを少しでも回復させてあげたいと…、そう思って、しばらくは寝かせてあげることにした。

それはそうだろう…今となってはエンリという存在は、「カルネ村の村長」であり「カルネ部族の族長」でもある…、そしてもちろん、そっちの方は意識したくもないが…忌まわしい二つ名…「血塗れエンリ」または「鮮血のゴブリン大將軍」など…色んな肩書きを与えられてしまったこともあり、いい意味でも悪い意味でも「うなぎのぼり」なのだ。

どちらにしろ、一步家を出たら「エンリ」としての自分は村を導き、リーダーとして…、みんなと接していかなければならない。

元からこの村に居たみんなからすれば、「親しみのあるエンリ・エモット」としか見ていない「年上の村民たち」ばかりなのであるが、入ったばかりのゴブリンたちを始めとする、亜人の村民たちはそうではない。

亜人達には亜人たちなりの、「上に立つ者として相応しい振る舞い」というものがあるようで…それに即した行動をとり、それなりの態度を続けて行かなければならないのだ…、それに対する少しの精神的重圧もあつたりするのだが…、それは家に戻って、夜になればたくさん夫に甘えることでバランスをとっている。

自分のありのままを受け入れて、認めて、考えてくれているのは、今となつては「村長」としての自分ではなく、ちゃんと今でも「エンリ・エモット」として見ていてくれる夫の存在が大きいからだ。

「あ…：そうだ…」

思うところあつて、念入りに体も洗い…：というより手ぬぐいで拭き始める…：ずっと前のように朝一で、ルプスレギナさんと出会い頭にかかわれたくないため。というだけの行動だ。

手早く、しかしキツチリと体をくまなく拭いていくという器用なことをやり遂げ、服を身に纏うと、外に出て、鶏小屋へと移動する。

これもゴウン様のお知恵をお借りして作った物…、雌鶏が卵を産んでくれれば、定期的に新鮮な卵が手に入る。これを朝食の1つにしたりもできる。

朝の忙しい時間、野菜を切ったり、なんなりと…：ただでさえ、自分を護るために日々、側近として守ってくれているゴブリンtrup達みんなにも同時に朝食を作つてあげるといふのが、もはやエンリの中で確定事項であるために「今日はみんながケンカしないように卵スープとかの方がいいかしら？」などと考えていると、後ろから不意に声がかかる。

「姐さん、今日もお早いですね、こちらでしたか！」

声を掛けてきたのはゴブリンtrupの1人、ゴブリン兵士のスイ



ギョだ。

「あ、おはようございます、スイギョさん。今日もいいお天気ですね。」  
「姐さんの方もお元気そうだなにより：今日は卵料理ですか？」

「ええ、一応見に来たんですが、今日はあまり卵が産まれなかったよう  
で：、少なくともみんなに均等に行き渡る卵スープがいいかなと：。」  
「ああ、そりゃ〜いいですね。あれなら量の多い少ないの話題が出  
ることはないでしょうから。」

「それにしても、昨日の騒ぎで、また何名かカルネ村入りしちゃった亜  
人さん達が出たもんだから、この先の食糧問題が心配ですよ：どうし  
ましようね：。」

「ああ、たしかオーガが2体に、ホブゴブリンが2体の、ゴブリンが2  
体でしたか？」

「いえ、ゴブリンさんが4体の、ホブゴブリンさんが2体ですね、オー  
ガさんは2体で間違いないですが：」

力なく、「どンドンゴブリン所帯が多くなってきています、いつか人  
間の数より多くなるんじゃないかと気が気じゃないですよ」とつぶや  
くエンリ。

「まあ、そこいら辺は、あと数日もすりゃ、新入りゴブリンたちもレン  
ジャーLVを習得できる個体が数名出そうですからね、そうしたら、  
ラッチモンさんにブリタさん主導で、森の動物たちを狩ってくるなり  
して凌げるようになります、姐さんがそんな心配することはないですつ  
て。」

「まあ：コボルトさん達はレンジャーの覚えがいいみたいですよね：  
ひよつとしたらゴブリンさんはレンジャーを覚えさせるより、戦士系  
の方が覚えやすいんでしょうか？」

エンリは話しながら、何個かの卵を拾い上げ、カゴに移し、家方向  
に移動する、一応家庭菜園のようなものも作ってはいるが、村長の仕  
事が忙しく、最近はおっぱらゴブリンtrupのみんなが手のすいて  
る時に水をあげに来てくれたりしているので、枯れることはないが同  
時に申し訳なく思う。

「みなさんが水を与えてくれてるおかげですね、私は最近お世話が難

しくなってるのでありがたいですよ。」

そういつてスイギヨにお礼を言うと、「お礼などはいりません、姐さんを手伝えるのはみんなも嬉しいんですから」と言われてしまった。手ごろな野菜を一本引っこ抜き、植えておいた芋も一本引っこ抜いてこれもおかずとして一品作っちゃおう、などと思いつながら家へと歩み始める。

「そういや、昨日の姐さんの気迫は凄かったですね、今まで見たことのないくらいに凄みがあつて震えが来ましたよ」

少しバツが悪そうに…とも、照れくさそうにともとれる表情を浮かべながらエンリが顔を少し背けてしまう。

「ああ…あれは、その…たまたまあの時は…気持ちがイライラしてたタイミングだったから…その…つい…。」

「やく、でもみんな「すげえ、すげえ。」とか、「恐ろしい、さすが部族の族長。」って褒めてましたよ?」

なんか、褒めてくれてるつもりなんだろうけど、女としては微妙だなと思いつながらも、「そう?…それならいいんだけど…。」というだけに留める。

「ところで、姐さん知ってます? 昨日のアイツ、あれからずっと地面に突つ伏したまま動かねえ。つて夜番の見張りが言つてたつて話ですよ?」

「ええ? あれからずっとですか? いくら遠慮なしに叩きつけたとしても…私の号令つて、一晩はもたない…ですよ?」

スイギヨへと顔を向けると、スイギヨの方も腕を組み、顔を傾げている。

「そうなんですよね…オレらも、そんな長時間効き目があるなら便利だろうなつて思う場面も今までに何度かあつたんですが、そうでもなさそうなので…とすると、夜通しのその行動は、ソイツの…自発的な行動つてことになりやしやせんかね?」

「ええ?…だつて、外ですよ? 門の外…いつ、誰…じゃなくても獣に襲われるかもしれない場所に…ずっと…ですか?」

「ええ…もしかしたら、エンリの姐さんのことを待つてるのかもしれ

やせんね…。」

「えええ？私のことを…ですか？」

「いや、聞いたわけじゃないので、本当のところはどう思ってるのかは何とも言えやせんが…、この村で唯一接点が出来たのって姐さんお一人じゃねえですか？」

言われてみればその通りなのだ、そしてその行動をさせてしまったのも自分だし…、村の中に戻る直前、「しばらくそうして反省してなさい」とまで言ってしまったのも自分なのだ…。

であれば、その指示から解放してあげるのも、きっと自分からの言葉だけ…ということになる。

「う…ああ、まあ、そうですね。」

エンリは少し気持ちが沈みそうになりながらも…仕方ない…朝食が終わったなら…リイジーさんに用意した分でも余ったなら、門前の名無しさんに持って行ってあげて、門の内側で話を聞いてあげよう…と思うのだった。

☆☆☆

「いつまで、そうしているつもりなんです？」

そう言つて、ウンライとマツの2名を護衛に連れたエンリが、小さなお盆を手に、門前の…名無しの剣客に声を掛けた。

「あんたが頭をあげるのを許してくれるまでだ…。」

「別に一晩中、そうしていると言つたつもりはないですよ？」

目の前の剣客が頭を下げているそのそばに器を置き、その男の横に腰かける。

「だが、再びあんたはオレの前に来てくれた、それだけでもオレの行動は報われたというものだ」

ふう…と短くため息をつき…

「実直なんですね…、そこまでして何をしたいんです？」

「力が欲しい…そのためには何でもするつもりだ…たとえそれがゴブリンの大將軍という存在の部下になろうとも…な。」

護衛として着いてきた二人のゴブリンの空気が変化する、何かに反応したようにピクリとした動きがあったが、それ以上はなににもなかった。

というより、オレに話しかけて来た：たしか、エモットさんと言ったか？ この女性が制止したような動きを〈領域〉によって感知が出来た。

やはり…このゴ布林はオレよりは強くはないだろう…だが、間違いなく並のホブゴ布林よりは強いと言い切れる。

それを従えることのできる、見た限りではただの村娘…、恐らく昨夜、あのローブの男が言っていたことは本当なのだろう。

「ゴブリンの大將軍さまに最も近い距離に居る人物」という言葉にウソはなさそうだ。

でなければ、明らかに自分より力のない者に従う亜人など…居るはずはない、今までの亜人達との接触によりその点は絶対に「ありえない」ということはわかってるからだ。

「お話は分かりましたが、昨夜、この村を救ってくださった恩人、ゴウン様も言っただけのように、今のあなたをこの村の一員として認めるわけにはいきませんね。」

ホンの迷いもなく、目の前の女はそう言い切った。

「なぜだ？ なんなら、俺の持てる全ての力を使ってくれてもかまわない、どんな…イヤ、女子供を切り捨てろって言うのはやめて欲しいが…強い者と戦わせてくれるんなら、足止めとして、みんなが逃げるまでの間、犠牲の捨て石として使いつぶしてくれてもかまわない…、それでもダメか？」

さすがのような目をした後、すぐにまた頭を下げ、頼み込んでくる剣客に、エンリは再び同じ返事を返す。

「ええ…ダメですね。」

「なぜだ！ オレの何が足りない！」

思わず、ガバリと頭をあげ、目の前の女を見つめてしまった。

「いえ、戦力的には、恐らくこの村の誰もあなたには敵わないでしょう…ですが、あなたの第一としている目標と…、この村の存続が関係し

てくるのであれば、話は別です。」

目の前の女はずっと村の方向を見たまま、一瞥もこちらに視線を向けようとしていない…。、どういう心情で言っているのか読みにくい…。

「ど…どうい…こと…だ？」

「この村は他の村とは異色の村です…異端と言つてもいいでしょう、それはあなたも昨夜、この村の門からゴブリンたちが出てきたこと、その者らが、人間と共存していること…それを目にして居るはず…、このことが別の…有力者の耳に入ったら…、この村の存在自体が危うくなります。」

「お…オレはこれでも口の堅い男だ、軽はずみにそんな情報は…」

「魔法をかけられても、そんなことが言えますか？　〈魅了〉<sup>チャーム</sup>や、〈支配〉<sup>ドミネート</sup>の魔法にさらされた後でも貴方は隠し通せますか？」

自分へと目を向けてきたその少女の目は、どこか冷たいものを感じた、この少女は、その年齢で、どんな凄惨な光景をその目に映してきたというのだろう。

「そ…それは…」

「それに貴方は「ある人物」と決着をつけたい…、勝つために強さを求めている…そう言いました。間違いはないですよ？」

「あ…ああ、その通りだ…間違いはない。」

「…であるならば、もしあなたがその人物以上の実力を身につけ、「今なら勝てる」という自信が出来た時、この村を出て行って、その者との再戦をしに…飛び出してしまうのではありませんか？」

何も言えなくなってしまうた…それを否定することも出来ない…かと言つて肯定してしまえば、この村の門は閉ざされてしまう。

「な…なら…それならば、あんたがオレを…、オレを…。」

何か言おうとするもなかなかその先が出てこない…その言葉を本当に言つていいのだろうか…、自分でもバカげている言葉を言おうとしているというのは自覚している、そんなことのできる存在は居るはずはないと思つている…だが、居ないのだとしても、それだけの譲れない決心があることだけは分かつてもらいたい、その気持ちはその

言葉を後押しする。

「あんたがオレを…好きなように改造でもなんでもしてくれ…魔法的な制約をかけてくれてもいい、誓約を誓わせて、この村から出ないようにしてもいい、命令違反をしたら、心臓が破裂して死に至るような魔法をかけてくれてもかまわない…どうか…オレを…」

エンリは呆れたような表情を一瞬だけして見せ、そして普通の目に戻る。

(この男は「魔法」というものを何だと思っているんだろう…普通の魔法詠唱者にそんなことが出来るはずもないのに…、まあ、お一人、出来そうな方は知ってますが…、これはルプスレギナさんに相談した方がいい案件ですかね…)

「あなたは…どうしてそこまで、こんななんの場所的価値もなく、特産品も、資源的な意味もない村に固執するんです？ 今なら村から離れてさえくれば記憶の操作もしないままに、何もしないで見逃しましよ…：そう言っているというのに…。」

「記憶の…操作…？ あんたは…：そ、そんなことも出来るのか…？」

目の前の剣客が、何やら異質な者でも見るような目をこちらに向けているのが分かる、まあ、私ができるわけではないけれど…、あんな言われ方されたら、誤解するのも仕方ないか…。

「それが出来るのは私ではありませんよ、それが可能なのは昨夜のローブの方です。私はただの村娘ですからね…、そうそう、あなたのお申し出ですが…：ちよつと村で話をします。」

腰を上げて、かるくお尻についた草や土を払うと、そう言葉にし、村へと足を向けると背中から剣客の声がかかる。

「本当か?! ありがとう…：ありがとう。」

「お礼を言うのはまだ早いですよ？ 話をするだけで、結論が出るのはまだ先の話かもしれませんからね…、それまでお待ちいただくことになるかもしれません。」

「ああ…オレはかまわない…、それで、これはそのこととは別のことで相談なんだが…」

目の前の剣客が今までの言葉以上に言いにくそうに何かを伝えようとしている雰囲気を感じる…なんだろう…まだなにかあるのだろうか？

「その…外で待たされるのは問題ないのだが…よかつたら、村の…かわや厠（トイレ）を使わせてもらえるように、言ってもらえないだろうか？」  
そうか…、一晩中、ここでずっと地面に跪いていたんだ…そりや、さぞかしガマンしていたのだろう…、これはすぐにでも手配してあげなくては…。

「わかりました、その話の方を優先的に村の者に知らせましょう。案内の者に従ってください。それまではその朝食でも召し上がっててください。それまでに事情は伝えておきましょう。」

そう言つてエンリはいそいそと村へと急ぎ、村の「人間用」のかわや厠（トイレ）への誘導を見張りの1人に案内を、そしてお目付け役として一緒に行つてあげて欲しいと依頼するのであった。

☆☆☆

結局、エンリが剣客の男に都合できたのは、見張り台の円塔、その中にある、見張りの当番用の簡素な肥え容器であった、それでも用を足せたという満足感には男に安心をもたらしたらしい。

「ありがとう、エモットちゃん、やっとこさホツと一安心つてところだ。」

にこやかに微笑む目の前の剣客に、もう一度エンリは、確認として提案を持ちかける。

「本当にいいんですか？ なんなら見張りのお手伝いをしてくれるのなら、屋内にいてもいいんですよ？ 村の中に入るのはまだまだ許すことは出来ませんが…。もちろん、お食事もお出しますし、用を足すのに困ることも…」

「その心遣いには感謝するよ、しかしそれは遠慮する。なぜなら、さつきまでのオレはあんたへの誠意つてやつを示したかっただけだ…あの時のあんたを侮っていた自分…そして不必要な反感を買うよ

うな言動をしたことを許してもらえれば、あとは俺自身の問題だ…。」  
そこまで言うと、目の前の剣客はすらりと刀を抜くとビュツと素振りをして、こう言いのける。

「オレはこれさえあれば、外でだって大丈夫だ。なんならそこいら辺に居るトカゲや大森林の獣でも食べて生きていけるからな…」

その男はそう言うと言われ流れるような動作で武器を収め、エンリをしつかりと見て、こう言った。

「村の一員に認められてからじゃなきや、例え見張り台からとは言え、村の中のことを見られたくはないだろ？…それに、見張りだけの毎日なんて、考えるだけで体がなまっちゃう。」

そう言うと、背中を向けて、森林の方へと歩き出す。

「心配しなくても勝手に居なくなったり、死んだりはしないさ。昨日の反省を踏まえて、朝と昼の2度、生きてる証拠にこの門の前まで顔を見せに来るよ。もし朗報があるなら、その時教えてくれ。」

あ、そうそう…オレはブレイン…ブレイン・アングラウスって言うんだ、良かったら覚えておいてくれ！」

そう言いながら、背中をエンリに向けながらヒラヒラと手を振り、歩いていく男の姿に、「変なところで律儀な人ね。」と感心するのであった。

エンリは村に戻ると、ブレインと名乗った剣客の言葉を村のみんなに伝えていた。

それと同時に、魔法詠唱者であるンファイアにも、ブレインが希望していたような魔法は存在してるのかの確認も忘れない…が、やはり予想通り、そんな魔法はなかった…さらにそんな魔法は多分ゴウン様くらいしか知らないだろうという結論も、エンリと同じであった。「それじゃくどうするんだい？エンリ…ゴウン様に、お願いするって形を取るつもりかい？」

何気ない夫からの問いだが、やはり心に申し訳なさは残る…恩をまだほんの少しも返せているという実感もないのに、また頼ろうとして



いる自分がどうにも頼りなく思えてもどかしい…。

「それはまだわからない…だからルプスレギナさんが村に来たら、一応、この剣士さんの事情は知ってるはずだから、事後報告っていう形を取って、『そんな手段』がとれるのかどうか、聞こうと思ってる。」

どこか浮かない表情の妻の気持ちに伝わったのか、ンファイレアがエンリに代替案を提示してくれた。

「それなら…これからくるお客さんに、タイミングが合ったら聞いてみたら？ たしかゴウン様と近い人だったはずだよ？ どういう感じの人なのかは教えてもらってないけど、エンリがもらったネックレスと同じペンダントトップを持っている人なら、きっとその人はずなんじゃないかな？」

ぱつと顔を上げて、エンリはンファイレアを見る…、いつもではないが、時々、こういう自分でもどうしたらいいか…って心境の時に思ってもよらない提案をしてくれることがある。

こういう時は本当に頼りになる人だと思う、素直にそう感じた。

カルネ村に於いて、〈<sup>メッセージ</sup>伝言〉を使える人員は1人として居ない。

なので、メツセンジャーは、アインズから派遣されているルプスレギナ一人であるのだが、そのルプスレギナ本人も、毎日、それも定期的な時間にちゃんと見回りに来るわけではなく、気まぐれに来たい時に見回りに来る。というスタイルなのだ…なので、一度会う機会を逃すと、次にいつ来るかわからない。

可能性としては、ウィザードの職も持ち合わせているンファイレアが覚えられれば理想的なのだが、その当のンファイレアも、詰まるところ、この世界の現地人である。

必然的にその魔法の精度は「ノイズの激しいラジオ音声」のような大変伝わりにくいものとなる…となれば、尊敬し、敬愛する村の救世主、アインズ・ウール・ゴウン様に使うのに相応しいか？と言われれば頭を抱えてしまうだろうことは考えなくても予想が出来てしまう。

だからこそ、エンリは、「ルプスレギナに報告して、伝えてもらう」という認識が第一に頭に浮かんでしまい、その発想以外を思い描けな

くなっていたのだ。

ンファイレアの提案を採用するなら、もし、今日ルプスレギナさんがカルネ村に来なかったとしても、午前中に来るといふ話であった「ゴウン様と面識のある者」との関わりで橋渡し役になってももらえるかもしれない。

：もしルプスレギナさんが同時に：でも、もしくは訪問者の方々が来るより前に彼女が見回りに来てくれるなり、そうやってくれるならルプスレギナさんに伝えればいいだけなのだ。

どちらにしても、今日の内に伝えたいことが伝わるといふ安心感はある。

「うん、ありがとう！　ンファイ：そうするね、その人たちが来る前にルプスレギナさんに会えたら、その時はルプスレギナさんに言えばいいんだしね。」

そういう風に思えば、気持ちが軽くなった。

うじうじと悩むのは性に合わない、妙にスッキリした気分です事に当たれるという心境になれたのは素直に嬉しい。

そこでエンリは考える、まず朝食は終わった、ブレインさんという人との会話をしている間、ゴ布林さん達が洗い物はしてくれた。

さっきまで頭を悩ませていた懸念材料は、ンファイの提案によって、今は悩むほどのことはなくなった。

さらにまだ昼までは時間がある。

：となれば、最近出来なかった自分の所有している畑の手入れでも始めた方がいいだろうか？

それとも村長として、見回っている方がこの村にとっては、いいことなのだろうか？

これからの午前中の行動はどうしようと思っていると、偵察として外を見回ってくれていたゴ布林ライダーの1人であるチョウスケがカルネ村の門に入り、エンリ達、村人たちのそばまで近づいて来て、偵察した上での報告をエンリに伝えてきた。

「姐さん、ご報告です、恐らくは、先日のお話でありました一団…が居るのではないかと思われる馬車を確認しました。もうすぐでカルネ村が見える位置まで来るだろうと思われるます。」

エンリは思考を切り替える、来客が来ないのであれば先に済ませようかと思っていたことだが、じきに訪問者らがカルネ村に到着するというのなら、そのための出迎えをしなければならぬ。

「すみませんが、クレリックのコーナーさんはネムを探してアルシエさんの下へと使いをお願いします、今見えてる馬車内の人たちが話しの通りなら、アルシエさんとは顔見知りのはずですから…。」

「はい、承知しました」

クレリックのコーナーがエンリの言葉に従い、ネムを探しにエンリ宅へと向かう、コーナーも知っていることだが、もしそこに居なければ、親友のクーデリカ、ウレイリカの家にいるのだろう、そこに行けばいい。

そう判断して、行動を開始する。

「リーダーのジュゲムさん、メイジのダイノさんは万が一、その訪問者が話通りの者たちでなかった場合に備えて、村周辺の葦の高い麦の穂にゴ布林兵士の皆さんを配置、警戒に当たらせてください。もちろんその中にアーチャーのシューリンガンさんにグリーンダイさんも同行してあげてください。ジュゲムさんとダイノさんは門の内側に待機…でお願いします。」

その声に、周囲に居たエンリ親衛隊でもある、ゴブリントループの面々がそろって了承の声を出し、指示に従う。

「ゴ布林ライダーのチョウスケさんと、キュウメイさんは引き続き、周辺の警戒、偵察の方に力を注いでください。」

「はい、わかりました。」

ゴ布林ライダーの2人は乗騎であるウルフにまたがると、颯爽と村の外へと駆け出し、偵察に向かう。

「どなたか、村民の方は、ブリタさんとラッチモンさんに連絡を、お客さんの出迎えをします、私のそばに居てもらおうように伝えてあげてください。」

先程まで村人がエンリの周りに集まり、昨夜の騒ぎの張本人である

剣客についての話を聞いていたのだ。その面々の中から数名、駆け出し、1人は、自警団の詰め所、1人はブリタのよく行きそうな、村人も良く訓練の際に使用する射撃場、ラッチモンは自警団の責任者として、色々と村の中で飛び回っているはずだ、猟に出るといいう知らせは受けていないので、カルネ村から出ていないのは確定なので、その指示なのだ、それは当然、村民も心得ていて、探しに各方面に展開している。

「ボクも一緒にいなくて大丈夫かい？…エンリ。」

心配そうにこちらを見ているンファイレア、その気持ちだけで嬉しいので、ちゃんと彼の仕事もあると伝えておく。

「大丈夫よ、ンファイはもし、お客さんが『女だてらに村長だと？』って言いだすような人達だった場合、私の代わりに『村長』として振る舞ってもらうから、それまで待機してて？」

普段はそこまでの来訪者は居ないが、時々、村の調査に来る「徴税官」としてくる一団の中に…とは言っても、貴族の流れとか…そういう血筋の者にはそういう認識の者も時折り混じっていることはあるのだ。

その時は、「自分に対応するための副村長的な立場で…」と伝え、名目上の村長として、ンファイに村長の代役をお願いすることもあるのだ。

「それじゃ、とりあえず、安全だとは思うけど…あ、ちよつとそのオガ沢さん、オガ田さん、ンファイのボディガードお願いします、お礼に後でお昼にでも動物のお肉、あげますからね」

遠くで、材木運びをしていたオーガ2体を呼び寄せ、そのよく通る声で指示を出す、カルネ村の亜人種で、新入りでもエンリの指示を軽く見る者は一体として居ない。

代わりの報酬などなくても指示されれば、すでにおとなしく従ってくれるのだが、エンリの性格上、命令ではなく「お願い」という形なので、せめてお礼は…とつい思ってしまうのだ。

「ウガ…チイサイノノシユジン、オレラ…ガンバル。」

すでにオーガの数も、以前までは一桁だったとは言え、前夜の騒ぎ

でカルネ村入りしたオーガのせいで二桁に突入してしまい順調に増えていくのだ：最初に作ったオーガ小屋はもう手狭になりつつある。

また新しく、2つ目のオーガ小屋でも作った方がいいのだろうか？

そう思いつつも、それよりもまずは来客への対応だ、オーガ小屋の件は、また後日でもいい、今日考えるべきことでもないと思いなおし、エンリは門へと移動を始める。

「じゃー、行ってくるね、ンフィー！　もしもの時は、村長の代役お願いね？　旦那様♪」

「ああ、わかったよ、行っておいで？　気を付けるんだよ？」

「まっかせといて！」

そう言っつて、袖をめくり肘から先を上曲げる、俗に言う「力こぶを作るポーズ」をとっているエンリの筋肉が、男の自分より見栄えのいいものになっていることに苦笑をしながらも、妻の元気な笑顔を送り出すンフィーレアであった。

### 第30話 カルネ村行き、前夜。

それは、フォーサイトの面々が、ジエツト氏の母を救出した後、アルシエの情報を教えてもらえた夜の時間の事。

アルシエの無事を確かめたいが為、亡命先の「とある村」に身を寄せていることを知ったフォーサイトメンバー、*「亜人種と人間の共存」*を理想として掲げている場所で、彼女がどのような扱いを受けているか、という心配もあるが、それ以上に、そんな理想を体現できる指導者など、本当に居るのだろうか？という想いがフォーサイトの残された3名の一致している認識で、不安要素でもある。

その中でもメンバーの1人、イミーナは「亜人種」の1人に数えられ、ハーフエルフという人種に区分される。そのせいで彼女は特にその疑いの色が強かった。

彼女は種族名の通り、エルフと人間の混血、人間からは「エルフの血が混じってる」と冷たい目で見られ、エルフからは「人の血が混じっているなど…」と軽蔑され、どちらからも冷遇されることが多い種族なのだ。

唯一の救いは、両親が、愛情を注いで育ててくれたという環境があればまだ『多少ひねくれている』程度の成長で済むのだが、そうでない場合は、アンダーグラウンドな人生を送ることとなる。

それがよくわかっていいるイミーナからすれば、他人ごとではない問題。

*「亜人種と人間の共存」*

果たしてそれが絵空事でも、夢物語でも、理想だけを追い求め、統率能力もない指導者のお花畑な妄想でもないのだとしたら…、それは素晴らしいことだが、そうでなかった場合はアルシエをすぐにでも救い出さなければ…という想いもある。

他のメンバーは全員人間だから、そこまで深くは考えていないだろうが、それでもアルシエの身を案じているのは同じ気持ちだろうと信じている。

目の前の、「ヤシチ」と名乗る女性…時々、妙に男勝りな言動をする

こともあるのが気にかかるが、今まで傍で見ている、悪い人ではなさそうだ：それにどこか：普通の人とは違う気がする。

もしかしたら、彼女も亜人の血が多少、入っているのかもしれない、ハーフでなくてもクォーターか：それとももう少し遠い先祖なのか：、確証はないが、瞳の印象が獣のそれに近く感じることもある：、まあそこらへんはひとまず置いといて、彼女の提案に乗ってみることにした。

しかし、時間はもう夜になり、これから夜も深い時間になる頃だ。とりあえず、その村に向かうのは朝一番に立つとして、今は休める所で寝る場所の確保が優先だ、と判断する。

自分たちは早々に、いつもの定宿に引き上げようと思っていると、鑑定屋の、鑑定室長室から出ようとしていたジエツト氏と、その母が声を掛けてきた。

「あら、みなさん、今日はどちらに行かれるの？ いつも泊られる宿に行くのはオススメできないんじゃないかと思いませんか？」

「そうですね、人質から母を救ったとは言え、イミーナさん自身はそのまま顔を変えずに乗り込んだわけですし、そこから宿にまで危害が及ぶかもしれない、ここはよろしければ私の家に来られてはいかがですか？ 部屋数なら余るほどありますよ？」

「いやいや、オレらはこれでもワーカーとしてちつとは名の知れたチームだからな、あんなチンピラ共がいくら出て来たってなんてことはないさ。」

軽い調子でヘツケランがチームを代表としてそう告げ、遠慮しようとするもそれに対しても心配の言葉が返って来る。

「フォーサイトのみなさんがお強いのは今までのことからわかるとしても：お宿の経営者としてはどうでしょう？ そんな厄介ごとを引き連れてくるチームが毎度毎度泊まりに来るといのは：自分の経営している宿が傷ついたり、壊される危険を考えたら、出入り禁止の扱いになったりは：しませんか？」

「んんん：そいつは確かに：いただけねえな：。」

「何もこれからずつとウチを宿代わりにしてくださいって言ってるわ

けじゃないですからね？ 明日までの繋ぎとして、まだ私の家までは突き止められていないはずなので、どうでしょう？ つていう感じなのですが：せめて母救出の護衛をしてくれた駄賃代わりに、このお話：聞き入れてはくれませんか？」

ヘッケランも、たしかに自分が定宿としている場所がイザゴザの場に巻き込まれるのは、できれば避けたい。

これからも、何かあったら使うことがあるかもしれないのだから、出入り禁止などの処分は遠慮願いたい：、となれば、その可能性はゼロではないと考えると、安全策として、その申し出は受けてもいいかもしれない。

その考えをチームの2人に打ち明けると、どちらからも了承はもらえたので、心苦しい部分はあるが、その言葉に甘えることにした。

「え〜つと、それって、その中には私も含まれていると考えて大丈夫なんですか？」

と、遠慮がちに問いかけてきたヤシチ(仮)さんにジエツト氏は「もちろんですよ。」と明るく：そして、その母親も「ええ、遠慮なさらずにどうぞ？」と朗らかに寄り添ってくれた返答に、「では、お言葉に甘えさせてもらいますね？」と返し、一緒に着いていくことになるのだった。

☆☆☆

「……すげえな…、屋上にこんなもの：よく作れたもんだ…。…つてそれ以前に良く許可をもらえたな：天井抜けねえか？」

目の前に展開されているそのあまりにもな光景に、ヘッケランはつい、質問を一度にいくつもしてしまうくらいには衝撃を受けていた。

しかしながら：さすがに最後の質問は言葉にはしなかったが、『こんなところでちら3人：とは行かなくても、イミーナの部屋と、オレとロバーの部屋の二つなんてあるのかよ？』って思ってしまうくらいの大きさしかない外見だった。

なにせ見た目が一般的な小屋よりは一回りくらいは大きいかな？



程度にしか見えなかったからだ。

「ここに来られる方は大体みなさん同じ感想のようですね、でも中は意外に広いですよ?」

ジエツトがそう言うのと玄関のドアにかかっていたカギを開け、扉を建物の内側へと押し開く:、「どうぞ」というジエツトの案内のまま、中に入ったフォーサイトのメンバーは絶句した。

あまりにも広すぎるのだ:、扉自体が転移魔法の引き金で、今日にしている光景が、全くの違う場所に飛ばされたと言われた方がまだ納得がいく、というくらいに外見と中身が別世界であった。

それに、広さだけではない、見た感じ平屋にしか見えなかった小屋風の建物だったはずなのに、中に入ってみると、階段があり、さらには上階には恐らく部屋なのだろう扉がいくつもある。

「えええ? 6:7:8:まだあるんじゃない? 何この家、ドツキリハウス?」

普段あまり表情の豊かな方ではないイミーナが驚きで何とも言えない顔をして、今いる場所を評価する。

「いえいえ、私を雇ってくれた方が寛大な方でしてね、『いざという時や、急な来客、仕事の上での接待などする際に恥ずかしくない広さの家はあった方がいいだろう』って言われました、支給されたのです:えええ〜つと:たしか「ぼーなすがわり」だとか言っておりましたが:、まあ、恐らく特別手当みたいな意味なのでしょう。」

(ああ〜:やつぱり、これ「新緑の隠れ家」<sup>グリーン・シークレットハウス</sup>の外装や内装をいじくって渡したものだな:ホントにアインズさんって、身内には甘い:つていうかマメっていうか:、ボクもNPCのみんなに認めてもらえたら、そこんところもフォローしてあげないとな:きつと無くなっているはずの胃を痛めそうになりながら支配者ロールしてるんだらうから:……)

そんなことを考えながら、ジエツトや、その母、フォーサイトの面々と冒険譚などの話、ジエツトの母の現役時代の話など:もちろん相手にばかり話をさせて自分の事を話さないのはフェアじゃない:なので、自分のことも(話しても無難な範囲で)語り合いながら、夕食を

とり、夜が更けていき、翌朝のアルシエ訪問への心の準備を整える面々であった。

●ベルリバーに割り当てられたお部屋にて：

ベルリバーであり、ヤシチ（仮）としても行動している彼は、みんながそれぞれの部屋に散る直前、ジエツトに声を掛け、今回、連絡を取る原因となった、「香辛料を追加で用立ててもらいたい。」という依頼をやつと伝えることが出来、あてがわれた部屋の中で、ゆつくりとくつろいでいた。

「やれやれ…やつと人目のない状態になれたな…、これでようやく羽根も伸ばせるというもの…と、その前に…。」

ベルリバーはすぐに〈<sup>メッセージ</sup>伝言〉の魔法を唱える、もちろん、発信先は自らのNPC、フレイラだ。

コール音もそこそこに、すぐに相手に対応し、通話状態となる。

「おお、フレイラか、そっちは今、どんな調子だ？まだヤシチ続行中か？」

『いえ、マスター、それに関しては詳しい話はそちらにて…、今はマスターのおられます館の屋根の上に控えております。』

「そうか…早いな、もうこっちに居るのか…、それで？セバスやソリュシャンにはちゃんと引き継ぎは出来たのか？」

『はい…万事無事に、滞りなく…。初めて他の至高の御方々がご創造されし皆様方とわずかではありますが話が出来て光栄でございます。』

「そうか…ならばすぐに来い、窓も開けておいてやろう」

そう言いながら、窓の方へと歩みを進め、窓のカギを開け、内開きの仕様となっている窓を開け、フレイラが入りやすいようにする。

すると、窓の外側、上枠の部分に手をかけ、そのまま振り子のように体をスイングさせ、足から入ってきたフレイラが部屋に入るや、窓枠から手を放し…部屋の途中で体を丸め、華麗に空中で一回転すると、部屋の隅で、己の主に対しての姿勢として、NPCならみんなプログラムで組み込まれてしまったものなのだろう「臣下の礼」をとる。

「お呼びにより、御身のシモベ、フレイラ、御前に。」

(あああ、そうだな、元々、こいつ種族がネコ科の獣人だもんな…このくらいの軽業的な身のこなしは当たり前か…、それにしても、ほとんど音もしないって、すごいもんだ。)

なんて感想を抱きつつ、「うん、よく来たな、まあ私達だけの場で臣下の礼など必要ない、親子として肩ひじ張らずに行こうじゃないか」と言ってみる。

「そんな…、我が身を創造されし至高なる御身に対してあまりにもそれは…、しかし、御身のご命令とあらば、それに従わぬというのも不忠というもの…承知しました。 そのように…。」

「まあ、とりあえずこっちに来て座っていいぞ?」

そう言つて、ベルリバーは、自分に割り当てられた部屋にあるシングルベッドの脇に座り、自分の横に腰かけるようにと指示を出す。

「いえ、さすがにそれは、マスターの指示とは言え、その…甘えすぎは…よくないのではと…その…。」

跪きながらも顔を伏せ、もじもじとしている可愛い仕草にちよつと意地悪を言ってみる。

「会つて早々、抱きついてきたお前が、まさかそんな遠慮深くなるなんてな…ま、テキストでの性格設定で、猫科らしく奔放な感じに書いた記憶はあるが、あそこまでは思わなかったぞ?」

「あの…はい、あの時は数年ぶりによくマスターに会えた喜びで…その、半分我を失っていたもので…申し訳ありません。 今後はあのような失態を演じないよう、慎み深く…」

そこまで一気に早口でまくし立てていたフレイラに、ベルリバーは優しく告げる。

「いや、かまわないぞ?別に。」

「え?」

そう言つて、少し顔をあげたフレイラに続けてこう言い聞かせてあげる。

「まあ、ナザリツクの中や、ギルドのNPC達の居る前ではそういう仕草は抑えた方がいいだろうけどな…多分、約一名を除いて、創造主の

帰りを密かに待っているんじゃないか？って連中ばかりだからな…、無いとは言いい切れないが、恐らくは嫉妬…というよりは、羨望の眼差し…ならまだいいが、愛する相手に振り向いてもらえない統括殿からの烈火の如き感情の奔流（別名、八つ当たりともいう…）などを向けられる可能性もあるからな…：そういう場面でさえ、ちゃんと主従のものっぽい振る舞いをしてくれれば、それ以外の時は、好きにしていんじゃないか？」

そこまで言うのと、突如、我が主はピクンと何かに反応したようなご様子を見せられた、何だろう？周囲には特には感知に引つかかるものはないのですが…？

「あ、そうそう…：それも言っておかないとダメだったな…、ありがとう、みんな」

口調に変な言い回しを感じ、自分の主人を見ると、己の腹の辺りを見て、なでている。

ああ、と思った、どうやら彼女たちも来ているらしい、お腹の中に入っていれば、とりあえずこの世界のどこよりも安全だろう。

などと思っていると、自らの主人に、自分のおでこを指で「ツン」とばかりに優しく押され、こう言われてしまった。

「フレイ？ お前、香辛料使いすぎたら使い過ぎたで、ちゃんと伝えておいてくれよ？ 自分で調達するつもりだったのかもしれないけど…：それならそう言ってくれるかどうかすれば、あの子達に買いに行かせるか、自分で行くか。って相談もみんなで作るだろう？」

恥ずかしくなつて、顔をあげられなくなってしまった。

事実、瓶に入っていた香辛料は、かなり使ってしまったのだ。

久々の料理ということもあつたし、L V 1のコックという成功率のことでもあつたろう…：だが、至高の存在の1人であるマスターのNPCとして創られた自分が、調理くらいで失態を演じたなどと思われたくない…：そのため、あとで手ごろな…無臭オーダレスの効果でも込められたポーションでも売りに行つて、入手できた金銭で買い求めようと思つていたので。

もちろんそれは無限インファイニティ・ハザアサツクの背負い袋を背負わせてもらった、あの時につ

い、そう思ってしまったので、理由としては後付けなのだが…。

香辛料のこと如きで心を碎かれるようなことのないように…という想いからだ…、決して失敗した事実を隠して、帳尻を合わせようと思っていたわけではない。という言い訳を自分に用意していたのだが、どうやら我が創造主は、お見通しだったようだ…：自分がなお恥ずかしい。

そこまでのやり取りが終わると、我が主人が急に、独り言を言い始める。

「大丈夫だつて、うん、ちゃんと覚えてるつて、出してあげるから、ちよつと待ってなつて！」

そう言うのと、急に目の前のマスターが、自分の記憶の中にあつた、かつてのあの神々しいばかりのお姿に戻られ、周囲の口を一か所に集められたかと思うと、その口を集約させ、大きな口へと変化させる…：と同時に『ぼおくうええくく…』という音と共にポトンと、エルフの彼女たちを吐き出す。

もちろん、その身にヨダレなどといったものは付着していない、キレイなものだ…：さすがは我がマスター。

「あ〜…：やつと外に出られましたよ〜」…：と、セピア。

「まあ、ヴェール様のお体の中はお腹もすかず、寒暖も感じず快適で、過ごし易いんですけどね」…：とディーネ。

「とは言え、何にもなくなつて段々手持ち無沙汰になつてしまふのは仕方のないことなんでしょうか」…：とルチル。

「あ、そうだ、聞いてくださいいよお〜、ヴェールさん、私達、お腹の中にいる間、ヒマだったからずつと3人で手合わせ稽古してたんです！そしたらなにか新しい魔法、覚えられそうな感覚があつて…：どういふ魔法にしたらいいと思えますか？」

「え？ お腹の中で3人で入り乱れのPVPかい？ そりやずいぶんと思い切つた事考えたね…：つて、それさ…：ボクのお腹の中が、焼け焦げる可能性、考えなかつたのかい？」

「え？（ぴーぶい？ なんのことなんだろう？ 今度、機会があれば聞かせてもらおうかな…） ああ…：そのことなんですけど、ずつとあの中に

いて気づいたんですが、ヴェールさんのお腹の中って周囲に壁みたいなものも、天井みたいなものもないんですよ、だから、大丈夫かな？つて♪ あ、でも床はちゃんとありましたから問題ありませんでしたよ？」

軽く「テヘペロ」的な表情を軽く浮かべ、いたずらを咎められた子供のよな表情をして居る…、キミらエルフでしよくに、年を考えなさい。とはさすがに言えなかった。

はあく…とため息をつくベルリバーに、ディーネが心配そうな顔を寄せてくる。

「あの…やつぱり、時々お腹の中で痛みとか…そういうの感じた時、あつたりしましたか？」

そう言われ、今までのことで、そういったことを感じた瞬間は無かったなと想いを馳せる。

「いや、そういうえば、痛みを感じた事は無かったよ、…そう言えばライフの方も特別減った様子も無かったな…。」

ステータス画面が映らなくなったこの世界では、自分に意識を向けただけで自分のライフの量、MPの残量もわかるようになったことは素直に便利だなと思った。

そういうものはへ生命の精髓<sup>ライフ・エッセンス</sup>を自分自身に使わなくても、すぐにわかるのだ、これを便利と言わずして何と言おう！

「そういうえば、みんな全員レベルアップしたの？」  
と問うと、不思議そうな顔をされる。

「れべる…あつぷ？」とは何でしょう？」

☆☆☆

一通りの内容を教えることは出来たが、理解してもらえないまでとにかく時間がかかった…それというの「何故、数字を3分の1にする必要が有るのか？」という問いに答えを用意できなかったためだ。

細かいことは自分にも「そもそもなんで「難度」という基準がそう決められたのか」という部分分からない、なので、とりあえず、自

分が知っている事実だけを説明することにした。

自分が元々居た世界では、強さの基準は上限が100まで、ということ。

その強さの基準を表す単位が「レベル」という名称だということ。この世界で自分が気が付いたときには、強さを表す単位に「難度」という基準がいつのまにか、知らない内に世の中に浸透していたが、その理由は自分にもわからない。

ということでは何か、とりあえずは納得はしてないようだが、理解はできたようだ。

「まあ、そんな感じでね…ボクにもよくわからないんだけど、ボクが居た前の世界では強さを表す単位は「レベル」と言われていたんだ…、こつちの世界での基準では、聞いたところ、レベルの数字を3倍にすると、ほぼ、「難度」として説明がつく基準になっていたってことくらいしかわからないんだ、それ以上の説明ができなくて、ごめんね?」  
「まあ、それは仕方ない事ですよ、ヴェールさんの責任ではありませんし…とりあえず、レベル…というものが一つ上がれば「難度」が3上昇したのと同じ意味になるということは分かりました。」

「まあ、つまりはそういうことで、『レベルアップした?』ってのは、こつちの世界で言えば、『難度は上がったかい?』って意味と似たようなものだと思ってもらえれば、大きな間違いじゃないと思う。」

などと言いながら、話題はその流れで、難度が上がった感覚へと移っていく。

話を聞いてみると、エルフは世間一般では亜人種として扱われる事が多いが「森妖精」と言われることもあるように精霊の一種としての側面もある、そこまではユグドラシルでの知識として持っていたので知っていたが、こつちの世界のエルフは、自分の実力が上がり、魔法を覚えられそうだった時には、「直感」というか…そういう「勘」のようなものが降って来るらしい。

それはエルフたちからすれば「精霊からのささやき」とも、「自然の呼び声」とも言われるが、魔法、呪文を新しく覚えられそうな瞬間に

は、必ずと言っていいほど、それが起こるらしい。

必然的に、それが3ついつぱんに魔法を覚えられるのかと言うと、そうではないらしいので、ユグドラシル基準ではなく、こっちの世界の住人たちに最適化された方法と言うのが、難度を一つずつ、階段を地道に上がるように実力をつけていくという方式になっているようだ。

「そうなるよ、みんな一つずつ覚えられそうってことなのかな？」

そう問いかけるヴェールに応えてきたのがセピアだ。

「それが聞いてくださいよ、私、魔法詠唱者の魔法、1つしか覚えられそうな感覚、無いのに、ルチルも、ディーネも、2つ分、お告げがあったらしいんですよ？」

「仕方ないじゃない：私は神官職で、みんなが特訓で体力やライフが削れたりしたら、その都度、回復してたんだし：、ルチルだってドリュイドなんだから、〈ライト・ヒーリング〉で、回復の手伝いしてくれたりウォール・オブ・プラスト・ウインド〉の壁〉を使って矢を吹き飛ばしたり、植物の絡みつきでの足止めとか色々使ってたんだし。」

「それがずるい：私、〈炎の矢〉しか攻撃魔法って使えないし、あとは肉体上昇とか感覚鋭敏化なんかの支援魔法ばつかなのは知ってるじゃない、全部対策されてるんだもん：。」

ブチブチと文句を言うセピアにため息をつきながらルチルが言い放つ。

「よく言うわよ、最後の方はムキになって、「ショットボウ」「ボルカノ」使って、やたらめつたら撃つてくれてたじゃない：痛かったんだからね、ディーネが〈ブレス祝福〉や、〈ブレス祝福されし護り〉で守ってくれてなかったら、火傷じゃすまないのよ？ 溶岩弾なのよ？ わかってる？」

詰め寄られたセピアが、申し訳なきように：うなだれながら返事をしている。

「わかってるよ：だから、初めは手加減して「コメットインパクト」も第2位階以上にはしなかったじゃない」

それを受けて、ルチルも言い返す。

「どこが手加減よ？ あなた最高で第2位階が上限でしょ？ 第3位階



分のコメットなんて撃つたら、MP満タンでも、2発も撃つたら魔力切れで意識不明でしょうに：手加減って言いたいなら第1位階にしておきなさいよ。」

それを横で聞いていたベルリバーが頭を抱えていた

(そっか、それらの装備を付けたまま腹の中にいたら、そりゃ、性能を試してみたくなるよな：)

そして、はた：と気づく。

(ん？コメットロッドの効果って彗星だよな：つまりは小規模な隕石みたいなもの：それが中空から：つまりは無から有が生じたわけか？ 実際に空から落ちてくるんじゃないか？?)

そう思つて、ルチルにセピア、ディーネにも聞いてみたが、やはり「異空間」とも言える腹の中での戦闘でも問題なく機能し、パワーワードを発声してロッドを振り上げたら、その少し上あたりに燃え上がる彗星が発生することと、当たったら、とりあえず燃え上がりながら破裂するらしい。

ディーネ曰く、貸してもらつた装備一式が無かつたら、恐らく〈ミドル・キュアウーンス中傷治療〉一回でも全回復はムリというくらいダメージだったかも：という目算のようだ。

(ん？：となると、ナザリックへの遺跡調査に行った時、コメットロッドを使つても中空から発生するなら、墳墓をやたらに傷つけずに済むな：、さすがに外壁に彗星が直撃とか：まあ、ナザリックはそんな程度じゃビクともしない壁だけど：、せっかくMP使つたのに、外壁に当たつて消えたので、目の前のPOPアンデッドには届きませんでした、つていう事態は回避できるな：)

「まあまあ、ただでさえ魔力系の魔法詠唱者マジックキャスターつて、一段階強くなるのに、他の職業よりも多くの経験を積まないとステップアップしないからね、あとは、地道な経験以外にも自分より難度の高い敵を倒すつていう手段もあるけどね：でもこの場合、チームで戦つた時は、メンバーの人数で分割されちゃうから、結局回数はこなさないと：なんだけどね。」

すると目の色を変えたセピアがすがりついてくるようににじり寄

り、密着しそうなほど近くまで来て問いかけてきた。

「それじゃ、あと少し何かの敵を倒せば、私ももう一個魔法を覚えられそうなんですか？」

「ん？ まあ…多分？」

そうすると、それまで黙って聞いていたフレイラがそつとベルリバーにだけ聞こえるように囁きかける。

「あ…マスター、このままで大丈夫なんですか？ 第2位階で上限ってことは、あそこでは第2階層にすらいけないのでは？」

「うん…そこなんだよね、今まででレベル上げが出来る理想的な状況に遭遇しなかったからさ…今回の騒ぎもあそこまで低レベルなチンピラだと思っただけだし…。」

（もうちよつとこう…「こうなりや、腕ずくだ！野郎ども！」…だなんて展開になつてくれるんなら、返り討ちに出来ただけだな…）

「ま、それより前にぬいぐるみにされたんじゃ、誰にも号令なんて出せないだろう…が？ …って、そつか、その件もあつたか…。」

そうつぶやくと、ベルリバーは己のこめかみに指を当てて、魔法を発動させる、もちろんそれは〈伝言〉<sup>メッセージ</sup>、相手はアインズだ。

しばらくのコール音の後、軽やかな音が鳴り、通話状態になる。

『ああ、私だ…、誰からの〈伝言〉だ？』

「あ、夜分すみませんね、ボクですよ、ベルリバーです、ちよつと聞きたいことがあったので、連絡させてもらいました、ジエツト君から話はまだ聞いてるかも知れませんが、念のため聞いておきたくて…今、お仕事ですか？ 手は空けられますか？」

『ああ…問題はない…なんだ？ 用件というのは…』  
(なんだ？ずいぶん、口調が重々しいな…、もしかして…)

「アインズさん、もしかして、今、アルベドに張り付かれてたりとか…されてますか？」

『ああ、その通りだ、よく気が回るな…、そういう事情なのだ…、手短かに。』

「ああ、それじゃ用件だけ、この前のジエツト君の母親誘拐騒ぎの最初のリーダーって、今ジエツト君の手にあるんですけど…どうしますか？」

ナザリックで必要ですか？今、ぬいぐるみと化してそのままイベントリに入ってるのに近い状態ですが…」

『その件か…大丈夫だ、そのことなら問題ない、こちらにもつと有効利用できる者が来ていてな、今ちようど尋問中なのだ、一通りの情報を聞き終わったあとでナザリックの為に、『苗床』になってもらう予定だ、なので、そちらにある方は、そちらで処分してもらってもかまわないぞ？ まあ、生かさず殺さず…っていうのも一つの手だが…それはそちらに任せよう…』

「そうですね、分かりました、それじゃ、そういう路線でつてことで、お仕事中、お邪魔様でした、あまりムリし過ぎないように…頑張ってくださいね、それじゃ、夜分に失礼しました。」

プツリと通話状態をオフにする、危うくりアル世界でのクセで「おやすみなさい」って言っちゃいそうだったよ、危ない危ない、アインズさんってば睡眠不要の身体になっちゃってるんだよな、不適當な言葉を掛けちゃうところだったよ。

突然<sup>メッセージ</sup>へ伝言など使いだしたせいで、エルフの3人娘と、そしてフレイラの4名が心配そうな顔を向けている。

「こつちの話だから、そんな心配そうにしないでいいよ、ちよつとお人形にされちゃった人さらいチームの元リーダーさんをどうするつもりか？つて聞いたただけだから」

恐らく腹の中からでも、外の様子が見えていたのだろう、ディーネ、セピア、ルチルの3人が「ああ…あの人…」という顔をしている。

「さて、ところで、差し当たつて、今の問題を片付けよう…みんなはどんな魔法を新しく覚えたい？」

「私はもちろん、新しい攻撃魔法が欲しいです！」

「私はそろそろ、神聖属性の攻撃魔法か何かがあったら、欲しいんですが、難度的にまだ覚えられそうなのってないですかね？」

「私は、ドルイドとして、自然の精霊とか、そうじゃなければエレメンタル系の召喚か何かが好きですかね？」

そんな会話をして、ああでもない、こうでもない…という話し合い

をしながら、ゆっくりと長い夜が過ぎていく…。

「さて、魔法もそれぞれ何を覚えたか、ちゃんと皆覚えておくんだぞ？  
度忘れして、使わなかったらせつかく覚えたのにもつたないからな  
？」

などと言いながら、ヴェール（ベルリバー）は、ごそごそとイベン  
トリを探し、探し物を発見すると、黒い空間に突っ込んだ手をずるり  
と、引き抜く。

すると、出てきたのは、何分の1かのサイズに作られているベッド、  
それをこの部屋に備え付けのシングルベッドの横に置くと、通常サイ  
ズのベッドにサイズアップ…というより、戻ったというべきか…。

「この部屋もそうだけど、この家自体、中に入る人のサイズによって家  
のサイズもその都度、大きくなったりする特別仕様だからな、思い  
切って、ダブルベッドを用意しておいた。」

（まあ、実際はユグドラシルでのインテリアガチャで出たものを取っ  
ておいただけだけど…懐かしいな、インテリアは課金の回収率がそこ  
までじゃなかったのか、次第に新しいインテリアの更新がされなく  
なって行っただんだよな、そんな中での初期ガチャタイプのダブルベッ  
ド…とはいえボク1人でダブルなんて使うことなんてないし、基本、  
ナザリツクの自分に割り当てられた部屋にベッドがあるから、出番が  
なかったんだよな。）

「それじゃ、ここにディーネにルチル？それからセピアの3人で使う  
といいよ、キミらエルフはみんな細身だから、寄り添うようにすれば、  
人間のダブルベッドで3人寝られるだろう。」

「わあ、ありがとうございます。ヴェールさん優しい〜。」  
「すみません、ヴェールさん、こんな素晴らしい物まで…私たちドレイ  
など、床に掛布団の雑魚寝で充分ですのに…」

「まあまあ、御厚意で用意して下さいました物ですし、遠慮なく使わせても  
らいましょうよ、ディーネ。私達の間で遠慮は無用ですよ」

「ああ、そうだったね、そういやキミら、ボクのドレイってことになっ  
てたっけか、すっかり家族みたいに思ってたよ。家族であ

り、チームメイトみたいなものなんだから、使ってよ?」

「あの…ヴェールさんは?? どこに…?」

すると、部屋に最初からあったシングルベッドを指さす。

「これがあるから平気さ、フレイは…、そうだな、どっちが寝やすい? 元の方と、そっちの方…」

部屋を一通り見回したフレイラは一言、こう答える。

「この部屋の感じだと、元の姿の方が…寝やすいかもしれませんね。」

「え? 元の姿って? その姿が普通なんじゃないんですか? ヴェールさんみたいに姿、変わるんでしょうか?」

「いえ? 今のこの姿が、どちらかと言うと人間社会で暮らしやすいようにと用意されたもの、本来の姿は…」

と、そこまで言うのと、身体が一瞬、ぐにやりと歪んだかと思うと、全身がぐにぐにゆにとろけ始め、横に大きくなりながら、床の少し上あたりまで沈み、安定した姿は、獣のそれになる。

「この姿を皆さまに晒すのは初めてですね。これが私の本当の姿、『ライカンスローフ獣人族』のブラックジャガー、それが私になります。よろしくお願ひしますね?」

その後は、女性陣がみんなでフレイラに抱きつき、もふもふ、だの、ネコネコ、だのふかふかくだのもみくちやにして、寝るのにまだ、しばしの時間がかかるのだった。

もちろん、寝る前にセピアに部屋の外の通路に〈アラーム警報〉の魔法をかけてもらい、誰かが部屋に近づいたら、早めに教えてもらおうようにお願いするのは忘れない。

寝る前には、フレイラにもう一つだけ、伝えておく。

「そうだ、フレイ、カルネ村へ行く道中は、フレイラ自身に彼らと共に行ってもらうと思うてるからよろしくな? 心配しなくても、自分も〈アンノウアフル不可知化〉と〈アンシーング不可視化〉、それに〈カモフラージュ溶け込み〉を重ね掛けして着いていくから大丈夫だ、なにか指示がある時は耳打ちするか、〈メッセージ伝言〉で支持するから、安心するといい。」

そう言うと、フレイラの首に自分の手持ちのアイテム、「ネットワークス・オブ・アインズ・ウール・ゴウン」を提げてやる

「今回、そのカルネ村に行く時に、それが身分証明代わり…通行許可証の意味があるらしいからな、今回アインズさんがそう決めたらしいからフレイラは、村の代表にちゃんとそれを見せるようにな？」

とりあえずは、こんなもんかな？と思つたベルリバーは、しばらく、他に伝え忘れないか考えるも、今日はこの辺で大丈夫だろうと思つた後、翌日の朝一番でグレート・テレポーションへ上り、馬車屋に行つて、5〜6人乗りくらいの幌付きの物を用立ててもらおうと、明日の予定について、頭に強く刻んでおくのだった。

---

※「ネットワークス・オブ・アインズ・ウール・ゴウン」について

かつて、まだギルドを結成したばかりの時期、新しいギルドメンバーの拡充を図ろうかという声もチラホラあつた時期に敢えて「新規参入」してきた者に持たせる用にと、「ギルメン」としての身分証明の役目として作成された物。

まだギルド内の荒らしが話題に大きくなつてはいなかつた時期のことだが、ぷにと萌えを始めとした、ギルドに侵入してのスパイ疑惑や、アイテム持ち逃げなどの泥棒行為を重く見る意見に賛同する者が多かつた結果、作られたアイテムである。

内容はこのネットワークス自体を持ち逃げされてもいいようにレアリティの低いデータクリスタルを使用。

ユグドラシル基準では微妙過ぎて、あまりお得感のない程度のバフ効果を付与させただけで、そのまま持ち逃げされても痛くないようにと、「ギルドの指輪」には込められている転移などの効果は一切ナシ。ギルド入りして日が浅く、素行などの面で信用が得られるまではそのネットワークスで地表部から、霊廟を通じて内部に…という経路をたどってもらつていた。

(フレンドリーファイア(同士討ち)が出来ない仕様だったため、ギル

ドのメンバーとして名前がある内は罨にかかったりしてもダメージを受けることは無かった)

しかし、市場に出回っていたそのネックレスを購入し、それを所持したままギルド拠点に侵入しようとした輩も中にはたまくに居たが、身分証明は持っていてもギルドメンバー一覧に名前が存在しない場合、フレンドリーファイア規制等の対象には数えられず、問答無用で拠点の洗礼を受ける羽目になるため、DQNギルドとしての悪評を広めるための道具として使われるか、ファクションアクセサリとしての使い道しか無くなっていき、最終的には「とある事件」をきっかけに「ギルドメンバー41人」という数字が上限として打ち止めとなってしまうってからは、使い道のなくなってしまったアイテムであった。

最初期は、ギルメンみんなに一定数を持たせ、幅広くではなかったが、異形種限定で仲間に入りたい存在を見かけた時は、よくよく人柄を見て、その上で「これは」と思う者が居た時のみ、手渡すことを許されていたというだけのアクセサリだった。

### 第31話 カルネ村行き、当日早朝。

夜のとぼりが次第に明るさを帯び始め、闇から光が覆い始めた頃、エルヤー姿でベッドに寝ていたベルリバーが、いそいそと支度を始める。

「ん〜、さすがに夜が明けて早々、馬車の業者が働き始めているとは思えないが…いや、馬の世話や、エサの用意とかを考えれば、ひよつとしたら、ひよつとするのか？」

他のメンバーが起きないように囁くような独り言をつぶやきながら、みんなを見ると、3人娘は安らかな眠りの中…。

そして、自らが作ったNPCは、ジャガー姿のまま、床に丸まって寝ているも、今のつぶやきに反応したのか、耳だけをピクピク動かし、しばらく見ていると、音がしないからか、立てられていた耳が力なくへたり込んでいく。

（多分、寝ながらも警戒はしているということか…どこまでも忠実な…って、まあそれがNPCたる所以なのかもな…。）

そう思いながら、アイテムボックスの中に手を突っ込み、馬車を手配する際に必要かと思われるアイテムを探し出す。

もちろん、エルヤーがしこたま貯めこんでいた帝国金貨が入った袋なども、このアイテムボックスに入っているので、金銭はそこから払うつもりだ。

朝のうちには前払いで支払いを済ませるとして…、身分証代わりの物を提示する必要はあるだろう。

予約を入れても、受け取りに来る者の証明ができないのでは、別の者が馬車を使ってしまう可能性も無くはないからな。

（自分は姿を消して、着いていくんだし…、手配を予約してきた下男とでも…、いや、そうは思われないか…こいつのことはこの帝都ではそれなりに名前も顔も知れ渡ってるってことだしな。）

そう思いつつ取り出したのは、かつて、もう戻ることはないだろうと思いつつも、思い出として大切に保管しておこうとして、しまい込んだ指輪。



「トランプ機構つき宝箱」という単純な名前のアイテムの中から、所定通りの手順でワナを解除、蓋を開き、中にあるたった一つの指輪を取り出す、今となってはその指輪をはめる資格を放棄したとは言え、今もあの輝かしい想い出は自分の中にある…会社勤めで、会計の手伝いをしていた時、あんなものをうつかり見つけたりしなければ、きつとサービス終了まで、みんなと一緒に居られたんだろうな…なんて一瞬、感慨深い感傷にとらわれながら、キャラ設定として作った指輪、リング・オブ・マジックキャスター魔法執行の指輪を外す。

この指輪は、杖を持たず、素手の状態でなく、鎧や武器などを装備していても魔法詠唱の邪魔にならないという設定をより強くしようとして、キャラメイク用アイテムという意味を持たせた指輪…それをずっと身に着けていたのだ。

実際は…たしか、プレアデスのガンマが、同じ職業を持っていたな、ウォーウイザード…だったはずだよな、あの子が持たされていたクラス。

剣や防具を装備していても詠唱の邪魔をしないクラス、自分も一応、それを取って、武装していても詠唱は出来るようにしてあった。

とりあえず、自分もアインズさんのようにギルメンのみんなと同様、指輪を10本の指に装備できるように課金はしていたのだが、見た目からして成金趣味の空気ぶんぶんな「全部の指に指輪」という絵面はあまり好きではなかったため、こっちの世界に来てからは好みとして、片手に1個、両手で計2個と何となく決めている。

(効果の高い指輪関連はユグドラシルを辞める際、まとめてあげるか売るかしちゃったしな…今じゃ、どっちにしろ10個もないんだけどね。)

「まあ…エルヤアの姿をしていて、魔法なんか使っちゃったら偽物としてバレちゃうかもしれないから…」

部屋から出る前に、以前、このエルフの3人を助ける為に一度だけ使用した…、アイテムボックスの中にあった「メッセージボード」。

それに念のためにと、エルフさんたちから習った帝国語と、そして

日本語で書いた文章を書いていく。

「みんなが寝てるうちに馬車の手配に行ってきます。すぐ戻るからそれまで寝てていいよ?」

と、帝国語で書いたものはボードの上段に、日本語は下段に書いた、恐らくフレイラは帝国語は読めないだろうしな…: 反対にエルフたちは日本語は読めないだろう。

これで、どっちが先に読んでも大丈夫なはず。

その「メッセージボード」を部屋のテーブルに置き、部屋の窓際へと歩みを進める。

魔力系のみ有効な探知阻害の指輪と、リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを装着し、窓から外を見て、人通りがないこと、周囲に人の目がない事を確認する。

(ここはジエツト氏の自宅なんだし、屋上に人目があるとは思えなかったし、いいんだけど一応確認はしておいて損はないからな)

外に心配する要素はないことを確認して飛び降りる。

飛び降りる瞬間に〈浮遊<sup>レビテート</sup>〉の魔法を唱え、地面から数十cm程の地点で、かすかな浮遊感を覚えた時に魔法の効果を解除、華麗に着地した風を装う。

そうして、偽エルヤーとして、帝都の街並みを歩き、「まずはこんな朝早くでも人が居そうな場所って言えば、入口の詰め所にいる衛兵くらいだろうな…」と判断して、衛兵の居る詰め所に行き、道を聞いて、目印の看板の絵柄を頼りに歩き始めた。

☆☆☆

偽エルヤーが幌付きの馬車、5〜6人乗りの物を予約しているその頃、その者は、そこに現れた。

その者は鬱蒼とした森の中に居た。

遠くから見れば、樹の陰に隠れているため、あまり目立たないが、人

型はしている。

しかしながら、人とは言えないその存在は、樹の陰から、ずっと一点のみを見つめている。

「やっぱり、あの時話しかければ良かったかな？…でもおつかない弓を使つてた人が居たからな…あんなので撃たれたら、燃えちやうし…。」

そう一人ごち、今日も、目の前にある館のような物の前…と言つても館が建っているのは樹々の切れ目から先、そこだけ故意的に樹々が伐採され、根が除去され、野営に最適となるように造られたような場所だった。

そこだけ、ポツカリとくりぬかれたように更地のスペースとなっている。

しかし、樹の陰に隠れている存在は、決してそこから出てこようとはしない。

それでも、限界ギリギリまで本体から離れているのだ、これ以上は一步でも足を踏み出そうとすると、本体からの繋がりが薄れ始めるのが感覚でわかる。

もし本当に踏み出したら、どうなるか…考えただけでも恐ろしい。

「ホンの少し前まで森の樹々が枯れ始めてたのがウソのように他の樹たちも生き生きとし始めてるのは嬉しいけど…早く帰ってこないかな…この家の人…、今度は勇気を出して話しかけなくっちゃ！ うん、そうだよ、やっと会えた自分以外で話しが出来る生物なんだから。」

なぜこの人型のナニかが、こうして、ここに居るのかと言えばこの前、お日様がいくつか沈んでいく前、いつものように本体と一緒に、自らの身体の一部に止まる子鳥たちが…、そして小さい小柄な鳥たちなども優しくさえずり、いつものような落ち着いた時間を過ごしていた時のことだ。

いきなり、鳥たちが何かに吸い寄せられるかのようにどこかに飛び去って行ったことに驚いて、つい、人型の姿の自分が、飛んで行った

後を追う。

すると、「その者たち」が居た。

そこまで来たが、本体から離れすぎていたため、さすがにそれ以上は進めず、樹の陰からうかがう様子になったが、その者たちは、自分には気づいていないようで、鳥たちを変な魔法のような効果があるっぽい弓矢で、射っている。

次々と、色々な鳥たちが犠牲になる中、一番心配していた小さな鳥や、子鳥たちは決して射られることはなかった。

どうやらその者たちは、大きな鳥、そして数を競っているらしく、ある大鷲は矢が当たった瞬間、渦を巻く氷の粒に翼をボロボロにされ、墜ちていく。

ある鷹は、飛んでいく矢先がいつの間にか、真っ赤に燃える石のようなものに変わり、それが直撃し、矢先の石が破裂した後、体を燃やししながら、地面に墜ちる。

そして、ちようど、そこを通りかかったのだろう渡り鳥の群れたちは、別の者の撃つ矢がキレイな光の線を描き飛んでいくと、それに当たった刹那、その矢を中心に球状の光が包み、光の範囲の中に居た渡り鳥たちは、まとめて地面に墜ちて行った。

その様子をずっと見ていた：怖かったというのもある、あの燃えるような石が当たったりしたら、きっと自分など、すぐさま燃えてこのかりそめの命も燃え尽きてしまうだろうと思った。

だから、声もかけられなかった、そして一通り鳥たちを仕留めた後、彼らは館の中に入ってしまった。

小鳥たちも元の場所に戻り、周囲に落ち着きに戻ったと思ったその後、しばらく様子を見ていたら、弓も持たない新しいニンゲン？のような存在が、その館の中に入っていった。

それからしばらくその館を見ていると、さつき入った者なのだろうけど、入った時と違う服を着た者が、1人で出て行った。

さらに、気が付いたら外に出てきた様子もないのに館の中に居たはずの気配が全員で掻き消えている。

どうやったのかはわからないが、それからずっとこの建物の中は無人のようだ…。

その時からずっと、陽が沈めば本体の下に帰り、朝日が昇るところまで、限界ギリギリまで近づいて、遠くから、「彼らが戻って来たか」の確認をする毎日だ。

「ちよつと話掛けるだけだよ…そうだよ、ちよつと声を掛けて、怖い感じだったら、すぐに逃げよう。うん、それでいいじゃないか！ちよつとお話をしたいんだって言えば…わかってくれるかもしれないし…。」

少し及び腰になりながらも、自分に言い聞かせるように消え入るような声を出し、徐々に自らを奮い立たせるような言葉を紡ぎ、決心が揺るがないようにする。

「そ…そうだよ、鳥を弓で射つてたのだって、子鳥や小柄な鳥には手を出してなかったじゃないか…きつと、無差別に…って訳じゃないよ…そうだよ…、話をすればきつと…聞いて…くれると思うんだけどなあ…。」

本日何度目かの独り言を呟きながら…、今日も、そこに帰ってこない館の主をひたすら待つことになる『樹の精霊』がその場に佇んでいた。

☆☆☆

「はいよ、それじゃ、その指輪の中にある『紋章の絵柄』と同じものを持った人たちが来たら、この馬車を都合してやればいいんだな？」  
そう答えた男は、馬車の管理をして居るといふ話で、その男に手配してもらおう馬車についての話を付けに来ていた。

初めは、こんな朝早くから…という顔をしていたが、「5〜6人の幌付き馬車」という言葉と、「予約分として、設定された値段より多く払おう」という言葉に目を白黒させていた。

それはそうだろう…ワーカーの中でも指折りの評価…（良くも悪くも…）のある天武のエルヤーが、そんな羽振りの良いセリフを言うな

んて思っても居なかったからだろう。

そこからは話が早かった。

馬車の馬番にも話を済ませ、馬車の管理している者にも、同様に話を共有させる。

もちろんチップの方も、馬番の男と、馬車の管理者に渡しておいた。偽エルヤーからすれば、本家エルヤーが貯めてくれたもので自分が貯めたものじゃないという理由からだ。

なので、ある程度は羽振りをよくしても懐は痛まないという認識であるせいもある。

すぐさま、「予約済み」と、帝国語で書かれた羊皮紙が、馬車の方に貼られた。

それを確認した偽エルヤーが、「それじゃ、くれぐれも頼みましたよ？ 違う誰かに勝手にその馬車を使わせたら、私がどんな手段をとるか：わかりますね？ これだけ私が多額の資金を渡した意味も…、それを無意味にしたら：どういう目に合うか：覚えておいてくださいね？」

と、久々のエルヤーロールだ。

この芝居も、最大の見せ場となるのは、多分墳墓調査に入る直前、ワーカーたちが集まる場での顔合わせの時だろう。

墳墓に入るまでは前金を受け取るという名目がある手前、もらえないと、墳墓の中に入る資格を失うという危険だっている。そのため、中に入るまでは「天武」でいなければならぬのだ…。

業者の者達に睨みをきかせると、怯えたような表情になり、こう答えてきた。

「ま、任せてくださいよ！ これでも仕事柄、貴族の方の家にも手配されることはあるんです！ 紋章の絵柄を間違えて違う派閥の有力者のところになんて行ったら、店ごと失う可能性もありますからね、一度見たら間違えたりしません。」

という頼もしい言葉を聞き、安心するも…

「そうですね…それなら大丈夫ですね…それから…、この依頼が無事に済んで、御者もそろって帰ってきた場合、この紋章のことは忘れて

ください、外部にも一切漏らさないように…頼みましたよ？」

「は…はい、わかりました！」

そこまで念を押ししておけば、魔法でも使われて尋問でもされない限りは大丈夫だろう。と考え、話を切つて店を出ていく。

魔法を使われて、深い事情まで到達する者が居るとしたら、それはそれで、有能な人間として見てもいいが…協力できそうな人格ではなく、始末した方がいい人間であれば…、その時は遠慮なく…アインズさんに報告して、どっちが手を下すか相談してみよう。

なんて、物騒なこと考えながら、帝都を歩き…「早朝の清々しい空気」というものを人生で初めて経験した男、かつて「鈴川」と名乗っていた男が生活していた世界では失われた情景、環境で、大気汚染されていらない空気の味を肺いっぱい吸えるという贅沢を、全身で感じていた。

（ああ、そうか…そういうえばアインズさんって飲食できないってことは味を確かめることも出来ないんだよな…という事はこういう「空気の味」と言うのがあることも知らないんだろう…それも一緒に感じて、その感動を分かち合えるようになりたいな…。）

そんな朝の空気で、上機嫌な偽エルヤーの前に、台無しな光景が展開されていた。

「お前ら、私を誰だと思っている！ 貴族であるフルト家の主と、その妻なのだぞ？ その私を…こら、押すな…どこに連れて行く気だ！」  
「どこがだよ？ 『元』つてつけるの忘れてるんじゃないやねえか？ 没落したアンタにや、もう何の力もねえつてこと、まだわかつてないみたいだな？」

わめき散らす中年はどうに過ぎているだろう男と女が、後ろ手にさられたり、羽交い絞めにされたりなどされながら、朝の爽やかな気分を台無しにしてくれている。

「まったく…夜逃げなんてしようとするから、連れて帰って来るのがこんな時間になったんじゃないやねえか…こつちだつて眠いんだ、さつさとしろや。」

(まったく…なんでこう…出歩くとやっかいごとに巻き込まれるかなあ…)

時間も時間のため、周囲の店もまだ開いておらず、開店準備にすら入っていないため、まだ、家の中の住人もみな大体はまだ寝ているだろう時間帯、そんな中、歩いている自分という存在は、イヤでも目立つだろう、少し離れた場所から見ているだけだが…、向こうからもこちらに気が付かれてしまった。

「おい！　なんだ？　見世物じゃねえんだぞ？　とつとと…つて、旦那じゃねえか？　こんな朝から何してんだ？」

「なんですか？　あなた方は…私はあなた方のような後ろ暗い人間に知り合いなどいないはずですがね？」

言い終わってから「しまった！」と思うも、言ってしまったものは仕方ない、とりあえず、言い終わった後に「ニヤ」つとした表情を浮かべてみる。

(ギルドの誰だったかな、そんなことを言ってたな…「男だったら、苦しい時こそ、ニヤつと笑え。」だったか…、それとも「ピンチの時こそニヤツと笑つとけ、それだけでも相手は勝手に深読みしてくれる」だったかな…、そんなことを言っていた気がする…ユグドラシルでは、ポップアイコンを浮かべるだけで表情は変えられなかったんだけどな…。)

「ああ…そうだな、俺たちはそういう関わりで居ようって話だったもんな、すまねえ旦那。つい口が滑っちゃった…、オイ！　オメエらも見習つとけよ？　これが本当のクールな対応つてやつだ。」

(ああ…よかった、なんとかなったみたいだな…こいつらがどんなやつらで、エルヤーとどんな関係だったかは知らないが…とりあえず失言とはとられなかったようだ…。)

「ところで、珍しいじゃねえかよ旦那、いつもの腰巾着ども…あ、いや悪い、ただの肉壁だったっけか？　そいつらは連れてねえのか？」

(あいつは…本当にそんなことを本人達の居る前で堂々とやってのけたのかよ…それじゃく失望して、「どうせ遅かれ早かれ死ぬ身なんだ」って思っただけ死んだような目にもなるよな…)



出会った時の彼女たちの瞳を思い出し、エルヤーという人間性はやはり、相容れないものだど認識を新たにする。

「いつまでもくつつかれてるとこちらも気が滅入ることもあるのですよ、あいつらは疲れて眠っています…それにこの帝都内で命の危険にさらされるような場面はそうそう起きないでしょう…こんな早朝ならなおさらでしょう？ それに私がそんな状況に陥るとでも？」

「へっへっへ…そりやくそうでしょうな…あのエルヤーウズルスさんですからね…そうですか…そんな疲れて起きられないくらいに昨夜はお楽しみだったと…いやいや、いつもながらほれほれするつてもんですわ、その姿勢には。」

(何言ってるんだ？こいつ…?)

「さて、なんのことだか、わかりませんね…どなたかと勘違いしているのでは？」

言いながら、内心の心情が表情に出てしまったようだ…しかめられた顔を向けられた男たちは少し距離をとっているが、目の前で会話している顔見知りであろう者は、怯まずに会話を続ける。

「や…すまねえ、そういう探られるような物言いは好きじゃなかったよな、旦那は…オイ、オメエら！ボサツとしてねえで、そいつを連れていけ！ こっちはこっちで見られたことについての対処はしておくからよ」

そいつがそう言うと、周りの手下らしき者たちは「へい、兄貴！」と言ってその場を離れ、つかまつてる男女は、ずるずると連行されていく。

「あの迷惑な怒鳴り声はなんですか…せつかくの気分が台無しですよ…なにかもめごとですか？」

「いやいや、旦那の手を借りる程のこっちありませんって、ただでさえ、旦那の故郷、スレイン法国さんには普段から儲けさせてもらってますからね。」

「…今、なんて言いました？ もう一度言ってくれませんかね？」  
(今、たしかにスレイン法国って言ったよな、聞き間違えじゃなかった

はずだ…)

「あ…済まねえ!! 旦那にや、その話は禁句だつての忘れてた、もう言わねえから…命ばかりは…」

(どうやら聞き間違えじゃないようだな…スレイン法国…人間以外をどこまで虐げれば気が済むって言うんだ…)

「かまいませんよ…私とあなたの仲じゃないですか、命なんてとりません…ですが、やつらに儲けさせてもらってるとは? その所がどうも聞き流せなくってね…」

「ああ、その話は旦那にや、お耳に入れるなつて言われてたんで、うっかり口走つちまいりましたが…内緒にしといてくださいよ? じゃないところちの首が飛んじまうつてもんで…」

「ええ…大丈夫ですよ、あいつらの弱みになることなら、こつちにとつても好都合です…誰かに知られずにいた方が何かあった時、交渉もしやすいでしょうからね。」

「相変わらずですねえ、旦那は…、まあ実際のところ、いまだにエルフ国と、スレイン法国との戦争が続いてくれてるおかげで、おこぼれのエルフ奴隷が尽きることなくこつちに流されてくるもんでね…、それを買ってくれる者は必ず居ますから…、こつちも遠慮なく値を付けられるって寸法で…。」

「そういうことでしたか…、まあ、私が腹を立てる程のこともない内容でしたね。」

(エルフの国か…、彼女たちの故郷なら、なんとかかできないかな…?)  
「まあ、戦争なら、どの国でもどこかしらで起こつてますからね、王国と帝国、聖王国と亜人種達、竜王国とビーストマン、法国とエルフの王国。みんな似たようなもんですが…、一番深刻なのは竜王国ですかね、あそこはスレイン法国の支援がなかったら、いつビーストマンに国民全員が食い尽くされても不思議じゃねえ…最近は、なんか、とにかくバカでけえ樹木みてえなバケモンを法国の連中が連れて来て、ビーストマンを薙ぎ払ってるらしいから、しばらくは大丈夫だとは思いますがね…。」

「噂じゃ、そのバケモン、樹木みてえなナリしてるのにビーストマンを

喰ってるらしいですぜ？」

（優先順位としては、エルフの国を何とかできないかな…って思うけど、深刻さでは「竜王国」…か、そこらへんはアインズさんを焚きつけて、救世主にさせてあげれば、竜王国も手に入っちゃったりして…って、そこまで単純じゃないか…さすがにそう上手くはいかないだろうな…。）

「そういうことでしたか…、まあ、こちらもエルフの件に関しては恩恵に預かっている部分はありますからね、敢えて藪をつついてドラゴンを出すこともないでしょう…。」

「ところで…スレイン法国がエルフの王国と戦ってるのは…そもそも、何が原因でどこらへんが解決すれば、戦争自体終わるんでしょうか…？」

「あれ？それ、旦那が私に教えてくれたじゃないですか、エルフの国がちよっかいかけて攻め入って来たから、初めは自国を守るための戦いだっただって…。」

（あ…やばいか…さすがにこの質問で地雷になったかも…）

「いや…それは承知の上ですよ、もつと深い問題です、なぜエルフの国の王はスレイン法国にケンカを売ったのか…、何を満足させれば…いや、なにが欲しくてスレイン法国にケンカを売ったのか…。」

「まあ…そりゃ…前に旦那が言っていた仮説、あれがかなり近いんじゃないか？…って思いますよ？…。」

「なんでしたっけ？」

「ほら、言ってたじゃないですか、まだスレイン法国とエルフの王国が戦争をしてなかった時、エルフ王が、スレイン法国の巫女姫をさらって、子供を孕ませちまったって…その子供が実はとんでもねえ強さを持って生まれたってことで、国宝として扱おうとしたところに、スレイン法国の特殊部隊の中でも指折りの実力者が、『巫女姫の子供なら我々の子供も同然』って言って、攫い返したんだって…、多分、きっかけはそこいら辺じゃないですか？…どっちが所有権を持つか…そこが始まりで…今は何を争ってるかまでは知りませんが…。」

「私もずいぶんと口が軽いものですね…そんな国の内情まで、国外の人間に触れまわっていたとは…」

「イヤ、それはこっちがムリ言っただけで聞かせてもらったんだし、口が軽いつてことでもないでしょ？エルフー人を半額にする代わりに…つて条件でやつと聞き出せた情報でしたからね。」

（そうか…金を値切るためなら、国の事情も簡単に漏らすようなやつだったか…）

「他にも武技のことも聞かせてもらいましたしね、その時は2人目のエルフを3分の1の値段にするって約束をした時でしたか…特に、あの《流転三斬》って武技のことを聞いたときは震えましたね。」

（ん？ なんだそれ？聞いたことないぞ？）

「はあ…何もこんな所で…、その話は誰にも言っていないでしょうね？」  
気を良くしたのか目の前の男の口がどんどん滑りが良くなっている。

「もちろんですよ、エルヤーさん自身も、他の人の目がある時は絶対に使わないって言う、秘中の秘って言った武技ですからね。」

（ますます心当たりがない…どんな武技なんだ？）

「まあ、今度、自分、本でも出そうかと思ってるくらいですよ、その名も「武技大辞典」…ね？いい名前だと思います？」

「まさか、私の武技も全て載せるつもりじゃないですよ？」

「まさか…、でも、原本になってるこの日記に書いてある項目の武技は一通り乗せるつもりですよ…闘技場に通って、あらゆる国の御前試合とかにも顔出して、色んなやつ武技の名前と、おおまかな効果も書いてあるヤツは書かせてもらおうつもりですけどね。」

（…今、持ち歩いてるのか…その日記。）

「よかつたら、見せてもらえますか？」

「ええ、イイですよ？ エルヤーさんにも協力してもらったおかげもありますしね。」

「じゃ〜見せてもらいます。」

（すごいな…攻撃手段に、防御の武技、身体向上系の武技に、その他？ それから耐性向上の武技に、弱点看破系？…あ、ちやつかり、巻末

に《流転三斬》の説明もある…なるほど…そういう技なのか…勉強になった。）

「すごいですね…よくこれだけの武技を調べ上げたものです…素直に驚きましたよ…。」

「いや、それほどでもないですよ」

（しかしまずいな…これを一般に書籍にして販売されるとなると…どういう武技を持っているかさえ知られてしまえば、どんな武技にも対策されてしまう恐れもある…これは…危険だな。）

「よかつたらコレ…売ってもらえませんか？ もちろんお代は色を付けてしてもらいますよ？」

（断られたら、断られた時で…それなりの対応は必要かな…）

「ああ、いいですよ？ その本の内容は全部暗記してますし、頭の中に入ってますから、一日もあればまた同じの書けますからね」

（ダメだ…、こりゃ…やりたくないけど、口を封じる手段に出るしかないか…）

「ありがとうございます…ところで、これからどちらに行かれる予定です？」

「あ、それなら、これからさっきのヤツを奴隷市場で、どの強制労働の責任者に買い取らせるかの商談なので…、いつもの奴隷売買場に行きますよ。」

「そうですか…それなら少し待っててもらえますか？ 今…人を呼んでお金を持ってこさせます。」

「あ、旦那、すまねえな…旦那がまさかその本の読者一号だなんて光栄ってもんだ。」

そう言うのと偽エルヤーはこめかみに指を当て、申し訳ないと思いつつも、〈伝言〉<sup>メッセージ</sup>を発動させる。

「すまないな…フレイ…寝ているところ悪いが、少しこれから出て来られるか？」

「は…はい、マスター…今そちらに参りますが…どの形態がよろしいでしょうか？」

「ああ、人の姿でかまわない…それからヤシチの時の装備で来てくれ…ちよつとやってもらいたいことがある。」

「は…ではそのように…すぐ、そちらに参ります。 気配のある方に向かいますのでしばしお待ちを…。」

その返事がされた後、すぐに回線が途切れてしまう、恐らく急いでこちらに向かっていることだろう…、さて、それでは金の準備でもするか…。

懐に手を入れ、アイテムボックスの中から、貨幣を入れる小袋を取り出し…本の金額ならこのくらいか？…と適当に金貨10枚を袋に入れる。

「マスター…フレイラ、御前に参上致しました。」

と、声はすれども姿は見えない…どうやら<sup>インビジビリティ</sup>透明化で、透明になってくれてるらしい。

気が利いてる子だ。

「フレイ…かまわないから姿を現していいぞ？ どうせこの時間、当事者以外は誰も見ていないだろう。 話しながら、人目のない裏路地に移動済みだしな。」

「は…それでは失礼して…」

という声が聞こえると、しばらくして、裏路地の入口からフレイラの姿があらわれる…。

(不自然じゃないようにわざわざ曲がり角まで移動してくれてたのか…、色々考えてくれてるな…。)

「エルヤー様、仰せの通り、呼びかけに応じ、来させてもらいました。」

「ああ、わざわざすまないな…、ありがとう…。」

(悪いが、フレイ、あの男の姿をシェイドスピリットに真似させろ、そして、制限時間が切れるまで、これからその男がしようとしていたことを代行するのだ。)

そう言っつて、会話をしていた男の目の前に自分の背中を見せ、フレイラとの視界をふさぎ、さも金貨の袋を受け取りましたよ？という風を装い、それを持ったまま、男に近寄る。

「それじゃ、これが約束の代金だ…大事に使わせてもらおうよ…。」

という言葉と共に手の平の上に金貨が入った袋を渡す。

「おお…すまねえな、旦那、こんな…本一冊で10金貨なんて思わな

かったよ。それじゃ、オレはこれからやることがあるから……」  
すると、男は偽エルヤーに顔を寄せ、こそこそと小声で語り掛ける。

「旦那もすみにおけねえな、エルフが3人も居るのに、今度は黒髪のローブ纏った女性かい？見た感じエルフよりいい体つきしてそうじゃねえか？いくらだったんだい？」

エルヤーの姿をとったままでも、中身はベルリバーだ……その一言で、彼の中にあつた良心の呵責は吹き飛んでいく。

己が情熱を注いで造り上げ、ようやく動かせ、こうして夢のような毎日を過ごせるようになったというのに、この男はそんな下世話な目で、我が娘を見ている……、そう思うと、遠慮するつもりはなくなっていた。

「まあ、その話は、また次にドレイを用立ててもらおう時にでも話して聞かせますよ……」

「そうですか？なら楽しみにしてますよ、旦那。」

そう言つて、男は踵を返して表通りの方に駆けだそうとする。

その瞬間、あらかじめ金貨の袋を渡すより前に〈認識阻害〉を周囲にかけているため、心配の必要がないことを知っているベルリバーが、本来の姿になる。

その畏怖すべき姿は、エルヤーに背を向け、駆けだそうとしていた男には見えていない。

後ろで展開されているそんな光景には全く気が付いてない男を背後から一呑みにする……。

「腹の中にある男と、所持品か……この小袋は吐き出しておくか……。」

そう言つて、飲み込んだ男が持っていた、自分が渡したばかりの所持金を取り返す。

「……別にこんなのはデータとしてもいらないが……『捕獲』……。」  
所持金を取り返してから、その男を捕獲して、身の内で捕縛状態にしてやる……ナザリックのみんなからすれば、こんなの優しい方だろうな……。

「じゃ〜フレイ、この男の姿に変わったシェイドスピリットを制限時

間一杯まで、この男がこれから予定していた行動の通りにさせるのだ。」

「は…了解しました。」

そうして、一人の男が、現時点で一般に知られている全ての武技を記した日記という功績だけを残し、この世から掻き消えた。

そうして、寝起きのはずなのに、キッチンと身だしなみの整っている我が娘を連れて、朝の散歩としゃれこみ、フレイラは自らの主人との初めてのデートに内心ウキウキしてゆつくりとジエツトの家まで歩いていった。

しばらく歩き、ジエツトの家にまで到着してしまった二人は、エルフの3人を〈警報<sup>アラーム</sup>〉の効果で起こしてしまわぬよう…ベルリバーの魔法で<sup>グレイター・ニレポーターション</sup>位転移を使い、フレイラを優しく抱きかかえた偽エルヤー姿の主人と共に、何ごともなかったかのように部屋に戻ったのだった。



### 第32話 カルネ村行き、当日AM

朝から幌付きの馬車に揺られ、あまり舗装も行き届いていない道を進む一行、フォーサイトの内、3名と、案内役のジエツト、そして、フレイラ：というメンバー構成で一路、カルネ村までの道のりを進んでいる。

ベルリバーは、〈捕食〉の内、『消化』の効果によってエルヤーの姿に身を変えているが、魔法で『透明化』を使い、さらには〈擬態Ⅱ〉の効果を使って、体温や匂いでも（魔法以外では）感知されないよう気を使いながら〈飛行〉<sup>フライ</sup>の魔法で、馬車の少し上を飛んでいる。

透明になり、景色にも溶け込んでいるため、まずバレないだろうが、声など出せば〈不可知化〉<sup>アンノウアブル</sup>までは使っていないのでバレバレになってしまうだろう、変に声を出すようなことは控えている。

声を出す時は一行から少し離れた場所で、イミーナさんでも聞こえない距離まで離れてから〈伝言〉<sup>メッセージ</sup>を使うか、フレイラの耳元で囁く程度にした方がいいだろう。と彼女と話して、そう決めていた。

さて、その当のフレイラはと言えば、フォーサイトの面々には自己紹介は済んでいる。

元々、ジエツトが〈伝言〉<sup>メッセージ</sup>を「ベルリバー」から受け取つての会話であったため、相手が誰だかはフォーサイトにもわからなかったという点も手伝い、彼らのすぐそばで公然と通話していたわけじゃないので『女装』というキーワードはフォーサイトの彼らに聞かれていない。そのため、「ヤシチ」という名称は、あくまでも正体にたどり着かない為に必要だった『偽名』ということでは話は終わらせている。

同じ馬車で移動中の今となってはすでに「フレイラ」という名前であるということは伝えてある。

そして、馬車に乗り込む前、フレイラが自己紹介をしている際にジエツトにも（透明になった状態のまま）ベルリバーは耳元で彼に事情を説明し終えていた。

（もちろん、その際に前夜に依頼していた香辛料の方は、袋詰めにされてベルリバーに渡っている。）

「それにしても、ずいぶんとこの馬、移動が速いんじゃないかしら…：こんなに早くして、バテたりしない？」

そう幌の中から、馬を扱う御者に告げているのはフォーサイトの（現時点では）紅一点のイミーナだ。

「いや…：なんでかわからないんですがね？ 妙に今日は馬が張り切つてみたいで、調子がいいんですわ、信じられないくらいのペースで走ってくれますよ。」

「あ、そうなの？…：まあ、ムリの必要はないからね、馬に途中でバテられても困るから…：、ほどほどでいいよ？」

「ありがとうございます…：ですが、はりきつてるのに、速度を緩めさせたりしたら、馬たちの負担になる場合もあるんです。今日は調子いいみたいだし、お客さんラッキーつてやつですよ」

「それに、幌の前から通りすぎる風が涼しいでしょうし、換気にもなつていいんじゃないですか？」

「まあ、それは否定しないわ、馬の快調ぶりに感謝ね？」

（そりやそうだ…：みんながフレイラと話し込んでる間に、透明化とへ擬態Ⅱを併用した状態で2頭の馬の間に立って、左右の手をそれぞれ馬に乗せてへ早足とへ軽加速を掛けてあるんだ、早くならない方がおかしいってもんだよ…：。）

「この状態が続くのであれば、お天道さまが上天に上がるよりずっと前にその村についちまうんじゃないかな？」

「ああ、それなら「マ」の時刻より前に着いちゃうんじゃない？ それならいいかもね。」

さらにと初めて聞く単語にフレイラが疑問の声を発する…：それと同時にへ風のささやきをベルリバーに唱えているため、ベルリバー自身にもフレイラの周辺5mの範囲の声、そして音も即座に拾えている、その為、今聞いた単語が気になった。

（「魔の時刻」…：か、どんな謂れがあつて、そんな名前がついたのか気になるな…：魔族の活動が活発にでもなるか…：、それとも悪魔の属性の者はその時間だけ強化状態にでもなるのか…：？）

ベルリバーが様々な可能性について考えている内にもフレイラ側

の話は進んでいく…、なので「今は確定されてない情報に意識を奪われてる時じゃない」と考えを切り替え、こちらの世界での時間の表し方を知れるいい機会かも…という思いも生まれたので、フレイラの言葉はちよūdいどいいタイミングであった。

「あの…その「マ」の時刻とは？」

「あれ？ フレイラさんは知らない？ 帝国じゃ、もうかなり前から浸透してる時間の言い方よ？」

「え…そうなんですか、すみません、海の方こうからこちらに渡ってきてまだ間もないもので…。」

海の方こうという部分は明らかにウソであるが、この際、手っ取り早く常識が分からないということに対しての言い訳に使うようにと指示に出していたため、フレイラはベルリバーの指示に忠実に従っているのみなのだ。

「それならしやうがないかな？ あれも俺らだって、初めて教えてもらう時は「そういうものだ」って理解するまでは意味が分かんなかったしな。」

ヘツケランが、時間というものの複雑さと覚えることの難しさを前置きとして教えてくれる、とりあえず、心の準備は必要なようだ。

そして、それを引き継ぎ、注釈を入れてくれるロバ―デイクの言葉が続く。

「そうですね、帝国の市場で出されているマジックアイテムの中には、かつて「口だけ賢者」と言われた、ミノタウロスの賢者が広めたマジックアイテムの流れを汲み、それを上手く活用して、効率よく使えるように苦心してる人の作品も多くあります、『トケイ』と言われるそれもその中の一つですよ。」

（時計？ …そうか、となると…時刻は…時代劇とかでも使われていた「刻」とか言われていたモノでも使われてそうだな…、「フレイラ、もう少し詳しく聞いてみてくれないか？」）

「あの…その時間というのはどういう風に分けられているんですか？」

「ええ、それはですね…陽が昇って、周囲に朝の気配が漂い始めると、

そのトケイというアイテムが、周囲に満ち始める朝の魔素を感じ取り、動き始めます、その時点で「ウ」の時間と表示されます、時間には『ジヨ』と『チュウ』。そして『ゲ』というのがあり、動き始めた時点が『ウのチュウ』ということですね。」

「『ウ』？」

「ああ、それが俺らも未だにその規則性がよくわかってないんだが、そのトケイにそう表示されるんだから、そういう物だつて受け入れるしかなかったって感じだな、今では抵抗なく覚えられてるよ。」

ウ、という一文字に疑問を感じたフレイラに「気持ちわかる」とばかりに気を使ってくれているヘツケランの言葉を聞きながら、耳を傾けているフレイラが続きの説明を待っている。

「我々にも、何が始まりの文字かはわからないので、トケイが動き始める『ウ』から始めさせてもらいますが…。」

「よろしく願います。」

「ウ、ツ、ミ、マ、ジ、ル、リ、ヌ、イ、ネ、シ、ラ」の12の文字が当てられ、時間の表記が変わると、「ウのチュウ」から「ウのゲ」という表記になり、ゲの時間が過ぎると「ツのジヨ」という時間が始まります。ちなみに「マのチュウ」という時間はちょうど、空のお陽さまが上天に位置する時間の事ですね。」

そこまで聞いていたジエツトもその言葉に頷くようにして同意の言葉を間に入れてきた。

「そうですね…:だいたい、「マ」の時間が始まると昼の用意に家の中があわただしくなるのが普通でしたね。」

ジエツトさんもどうやら帝国の中での生活で、その感覚は浸透しているらしい、ならば少なくともフォーサイトの彼らでさえ物心つく前からその「トケイ」というものはあったようだ。

さらに、その会話をなんとなく聞こえていたのだろう御者からも馬を操りながら、声が掛けられる。

「今となっっちゃ、どの家も店も、その「トケイ」に頼らなくっちゃ、仕事の都合合わせも難しくなっちゃまってるからね、置いてない場所の方が珍しいんじゃないかな？」

(「ちよつと悪いが、フレイラ：そのトケイという物の時間の言い方は、帝国以外でも通用するのかわかっているか?」)

「あ、ハイ：、すみませんが、その時間の言い方というものは帝国以外でも通じるものなのでしょうか?」

「え? さあ：私たちは今まで帝国から外の国にまで出てったことはないし：どう思う? ヘツケラン：。」

「そうだな、俺らはみんな帝国を拠点にしてその領内でワーカーしてたからな：多分それはロバーも同じだろうが：、ねえおっちゃん：、おっちゃんなら帝国以外にも行ったことあるんじゃないの?」

「あ? そうだな：どうだろうな、さすがに法国にまで足を延ばしたことはないが、少なくとも王国じゃ、無かつたんじゃないかな? あそこは魔法やらマジックアイテムやらはあまり力を入れてないというか：どちらかと言えば軽視するお国柄だからな：。 王国領の「エ・ランテル」の魔術師組合だつて、ある意味あそこじゃなきや組合として成立してなかっただろうし：。」

「そうですか：、ということとは帝国の方が色々な面で生活するのに、便利なことば多そうですね。」

フレイラがそう言うと、イミーナがそれに対して、1つだけ不便な点を挙げる。

「でも、帝国じゃ、王国と違って「職業軍人」さんがいるからね：、組合にわざわざ依頼して仲介料まで取られたりなんなりしてまで冒険者をやりたいって人は少ないのが難点と言えば難点かもね：冒険者の出番の前に軍人さんで用が足りちゃうし：まあその分、ワーカーの出番が多いけど：よく選ばないと、ならずもの上がりの人間も多いからさ、帝国じゃ冒険者の実力は育たないし、かと言って変なワーカーに依頼でもしようとしたら、身ぐるみはがされるってことも珍しい事じゃないからね、そこらへん注意した方がいいかもよ?」

フレイラがイミーナの方に向き、好意的な笑みを向ける、その笑顔は今まで接してきた中で一番、吸い込まれそうな笑顔であった。

「ありがとうございます、イミーナさん：心配してもらって嬉しいですが、私にはその心配は必要ないかと：。」

「お？　ずいぶん自信みたいだが…それだけ強いって意味かな？」

おどけるようにヘツケランがフレイラにその言葉の真意を問いた  
だす意図を込めた発言を向けるが

「いいえ？　私にはもうフォーサイトの皆さんという信頼できる知己  
が得られましたので、わざわざ他のワーカーを探す必要はないからで  
す。」

「お、そりや嬉しいね、ワーカーなんてどうしようもない連中しか居な  
い！　なんてひとくりにされることも多いからな？　ロバーもそう思  
うだろ？」

「そうですね…私みたいな動機はワーカーとしてはむしろ異例でしょ  
うし…普通のワーカーからしたら明らかに胡散臭い目で見られるこ  
とは想像に難くないでしょう。」

「あの…ロバーデイクさんはどのような理由でワーカーに？」

「笑わないでくださいね？　大変青臭い…世の中のことなど分かって  
いない…現実から目を背けている理想論者だとよく言われます。」

「オレらは、そういうロバーだからこそ、一緒に居てイザという時も、  
背中を任せて最後まで踏ん張れるんだけどな。」

「茶化さないでもらえますか？　ヘツケラン、私は本気なのですから  
…。」

「知ってるさ、それをずっとお前が夢にしていた生き様で、「叶うはず  
がないだろう」とみんなに言われても、それを曲げずに突き進もうと  
する姿に俺たちは共感することが出来た、だからこそ、こうして一緒  
にパーティを組んで、窮地の場に陥っても踏ん張れるんだろ？」

「あなたはいつから、そんな恥ずかしいセリフを照れもせずと言える  
ようになったんですか？　ヘツケラン。」

「まあ、いいじゃねえか、フレイラのお嬢さんにも教えてあげなつて。」  
「私がワーカーになった理由は、簡単です…誰の指図も受けず、どんな  
権力の圧力にも屈せず、利益の多寡に関わらず、せめて自分の目に映  
る場所にいる…誰からも助けが得られない者たちに救いの手を差し  
伸べられる…そんな風になりたかったからです…ギルドや神殿に管  
理されて、通りすがりの死にそんな目に遇っていても、富を持ってな

いが為に、神殿の利益にもギルドの収益の役にも立たないからと…見捨てることを強要するような組織に縛られたくはなかったのです、だから、神殿に何も言わせないため、言われる筋合いはないと好きに救いを施せるようになるため、ワーカーになりました。」

フレイラはしばらく無言でその言葉を噛みしめるように自らの中でかみ砕いていくと、ロバーデイクに正直な感想を返す。

「そのお心は大変すばらしいと思います！私はその精神に大変近い方を知っています。…その生涯を理想の為に費やし、最後までそれを貫いていた方を…。残念ながら、直接お声を交わしたことはありませんが…、その高貴なまでの精神は今でも私の中で『伝説の勇者』のように刻み込まれています。ロバーデイクさんもその方に近いお志をお持ちなのですね。」

「え？そのような人が私以外にも？ どのような方だったのですか？」

「その方は…、例え見ず知らずの…「自分には関わり合いのない」程度の相手でも、困っているようであれば、どんな時でも、どんな相手にも立ち向かい、救いを差し伸べる…純銀の鎧に身を包んだ聖騎士でした。今でも私や…私の知り合いで、その方を知ってる者たちはその人の生きざまを一言で表したお言葉を今でも覚えています。輝かしいそのお言葉は…出会った者たちの誰もが心打たれ、その人に対して大きく心揺さぶられない存在などいなかった程でした。」

（まあ、それはその通りだよな…彼のその理想論は好意的な者達には心を驚掴みにされたように感動を与え、ウルベルトさんのように「悪」に美学を求めるような人には、悪い意味で、激しく心を揺さぶったもんな…。）

「そ…その一言とは…？」

『困っている人が居たら、助けるのは当たり前！』

「そう…たったその一言を生涯に渡って体現されていた方でしたわ」

実際は、そこまで大きな声で言われたわけではないのだが、ロバーデイクにとって、自分の理想よりもっと高い壁に挑戦し続けていた先達の言葉だったのだ…その言葉は、衝撃は…心の中に大きく、重く

響いていた。

だからこそ、心中に沸き上がった気持ちそのままを深く考えずに言葉にしてしまった。

「そう…ですか…それは…どこまでも高い壁に…挑まれていた方だったのですね…、もし会えるのなら、会ってみたいものです。」

例え知らなかったとはいえ、その言葉に答えられる存在など、どこにも居ないのだということを知るはずもなく…。

そして、フレイラはその一言に複雑そうな顔を向け、何も言わず、ただ寂しげな微笑みを返すのが精いっぱいであった。



それから空を飛びながら、アイテムボックスから取り出した「メツセージボード」に、先ほど聞いたことを忘れない内に書き留めていた。

それは、「トケイ」というアイテムに書かれるという時間の表記、そして、12という数…思いつく限りの可能性を考えるも、まとまらない。

「ウ、ツ、ミ、マ、ジ、ル、リ、ヌ、イ、ネ、シ、ラ」…これがまた難問だ…、プレイヤーが広めたのなら、恐らく何らかの規則性はあるはずなのだが…時計がらみ、時刻がらみなら、そこまで突拍子もない発想は出ないだろう…なら…なんだ？

12と言えば、わかりやすいもので言えば、12支か…それとも12星座とかだが…さすがに星座を時刻に当てはめるなんてよほど変な趣味でもない限りしないだろう…妥当な要素を挙げるなら12支だが…、しかしあれは最初が「子」だったはず…、しかし「トケイ」では朝の始まりが『ウ』ということだったし…。

12支で、『ウ』と言えば、単純に考えるなら、「卯」、「丑」、「午」のどれかなのだろう…、ならその中で当てはまる何かとは…？

現状わかっているのは「ウ」の次なら「ツ」…という事実だけ。

「丑」の次に来るのなら「寅」。

そして「午」の次に来るならば、「未」となるんだが…しかし、これ



がなんだ…そのどれかならば、「辰」「寅」「未」のどれかの中の共通する要素がどこに…つて…、あれ？…ん？

辰年…で、読みが「タツ」…、トケイの読みが「ウ」の次が「ツ」、12支なら、『卯』の次が『辰』…。

分かった気がしてきたぞ？

ツの次がミ…なら間違はなく「巳」だろう…、なら「マ」というのは午か…もしかして、最後の一文字を当てているつてコトか…それなら全ての説明は出来る…。

ひらがな表記にして、最初の一文字だと、「ウ」の段階で今言った「ウシ」「ウマ」「ウサギ」の3つの『ウ』がダブるし、「イヌ」と「イノシシ」も「イ」がダブることになる。

しかし、それならば、最後の一文字だけを当てれば、全部違う一文字で完結させることが出来る…ということなら、結論は簡単だ。

やはり、単純にベースにしたのは「12支」だ。 まちがない…、しかし、この時計を作った奴はずいぶん面倒なことをしたもんだ…、単に数字を当てた方が楽だろうに…。

まあ…あれだ…、そういう考えもあったが、多分その口だけ賢者さんにも何らかの譲れない何かがあったんだろうな…。

どれほどの時間がかかって浸透をしたのかまでは分からないが…ここまでみんなに知れ渡ってしまったなら、今更数字に置き換えられなくても困るだろうからな…、そう決まってしまったのなら仕方ないな…これもまた、コトが済んだら、報告の必要アリだな…。

とかなんとか思っていると、御者のおつちゃんから威勢のいい声がかかる。

「見えて来たぜ？ あそこがカルネ村だ…ココからでも見えるだろう？ 村にしてはえらい頑丈で高い…まるで要塞か？ つてくらの外壁に囲まれてるあそこが、お前さんらの目的地さ。」

「え〜？ おいおい…ホントだよ、あれで村かよ…何から守ろうつて言うんだ？」

「まあ…お隣にトブの大森林がそびえていますからね…恐らくあそこか

ら出てくるモンスターを警戒しての防備なのでしょう…。そんなに頻繁に襲われるとは思いませんが…。」

「あゝ、そんでな？　そこに麦穂を植えられてる場所があるだろう？　あれは村の外にあるものなんだが…。一応、あそこまでがあのカルネ村の警戒範囲らしい、これはあまり公表されてないんだがな…。数年前、この村は帝国の騎士に偽装された一団に村ごと虐殺される寸前まで行ったことがあるらしい…。　かなり前、そんな話を『あやうく、濡れ衣を着せられるとこだった、アリバイがなかったら、粛正されたかもしれない。』って巡回の騎士から聞かされたことがある。」

「おいおい…。平気か？　それじゃ、あそこの村って、反帝国って感じなんじゃないか？」

「いや、どうやらそうじゃないらしい…。これもウワサなんだが…。周辺国家最強と名高い、かの王国戦士長が助けに来てくれて、その鎧を見定めた結果、帝国の鎧に良く似ているが違うものだ。って証明してくれたらしい、村のみんなも、それを信じているから、反帝国って思想でもないらしいが…。ただそう言うことがあつてから異様に防衛意識が強くてな…。ただの馬車でも、この麦穂の土地より先に行こうものなら弓矢で威嚇されることは普通なんだ、あの高さの見張り台からだったら、ここまで届かない距離じゃないのは理解できるだろう？…。だから、悪いが、俺たちはここから先には…。」

「ああ、わかったよ、おっちゃん、俺たちはここから歩いて行くことにするよ。」

「ありがとう…。悪いな、ちゃんと前払いで一日分もらってるのに、こんなところで降りてもらおう形になっちゃって…。」

「いいって事よ、おっちゃんに死なれでもしたら、さすがにオーナーに見舞金やら、謝罪金やら、賠償金やらで、いくらかかるかわからねえからな、そこまではカンベンってことさ。」

「わりいな、それじゃ、お詫び代わりにもう一つ、これは眉睡な話だが、確実に保証できる情報を教えておく、これは絶対に心に留めておいてくれ。」

「なんだい？　おっちゃん、そんな改まって…。」

「実はな…その王国戦士長がこの村に来た際、それより早くこの村に着いて、その偽装騎士団を撃退し、追いつ返した『仮面の魔法詠唱者』マジックキャスターが居たらしい、その者は数人の護衛を連れていて、その一体が、見たこともない相手で、ゴーレムとも、モンスターとも言えないそんなのを同行させていたらしい…、それでそいつは王国戦士長と同じくらいかそれより大きいかわらないのタワーシールドを持ち、それに負けないくらい長さのフランベルジュを持った全身真っ黒な騎士風の姿だったらしいんだがな…、なんと連れ達の中でもそいつが一番弱いつて話だったんだが…王国戦士長は…そいつと戦って『勝ちを譲られた』らしい。」

「はっ。」

フォーサイトの3人が揃いも揃って、間抜けな表情をして、今言われた言葉をもう一度思い出すも、どうにも信じられないでいる。

「周辺国家最強」という肩書きを持つ…あのエルヤー自身でさえ、あの男と並び称されるなど…と普段から比べられることを忌々し気に思っているほどに、ある意味で「認めている存在」である男がだ…正体もわからないポツと出の…しかも一団の中で一番弱いやつに『勝ちを譲られた』マジックキャスターというのだ…ということはそれを連れていた『魔法詠唱者』の実力も推して知るべし…と言ったところなのだろう…ということは頭では理解ができる…しかし、あまりにもな内容に、感情が着いていかない…。

そんなことあるはずがない！ そう言えばどれほどいいか…そう思いながらも、力なくヘツケランは御者のおっちゃんに返事を返す。

「ウソだろ？ …なあ…それって冗談だよな？ …な？ …おっちゃん？」

「だから言つたら？ 眉唾な話だつて…だがオレが言いたかった「確実な情報」つていうのはこれから伝えることの方だ…これだけは心に刻み込んでおいた方がいい。」

「な…なんだよ？ …おどかさねえでくれよ？」

「あの村では、絶対にその『仮面の魔法詠唱者』マジックキャスターを悪く言うな…、実力

を疑うような発言も…しない方が賢明だ…、その一点だけは信じられる事実なんだ。あの村ではその『仮面の魔法詠唱者』マジックキャスターは救世主として、崇められているに等しい。」

「おっちゃん、なんでそんなこと知ってるんだよ…。」

「オレの娘はな…王国の方に嫁いでるんだよ…それで、その旦那がな…その王国戦士の一団の1人なのさ…、だから、目の前で起きた事と…ということと、後日、「帝国兵に偽装した鎧」を買い取ったという話で、その時は払えなかったお金を手渡しに村を訪れた際、その魔法詠唱者マジックキャスターの像でも、そのお金で作ろうか…なんて話にもなっていたらしいんだ…あの村ではそれくらい的重要人物なんだ…くれぐれも…刺激しない方が身のためだ…。」

グビリと…3人のノドから生唾を飲む音が聞こえた時、そのおっちゃんは元の人のいい感じの笑みに戻る。

「まあ、それさえ気を付ければ大丈夫ってことさ、悪口や軽はずみな事さえ口走らなけりや、すぐに村の人間達とは打ち解けられるよ。」

おっちゃんはそう言つて軽やかに手を振つて、馬車に乗り込み、カルネ村の警戒範囲から離れていく。

その様を見届けたフォーサイトの面々は（入る前からやくな事聞いちまったなあ…）という気持ちで一致していた…。



重い足取りながらも、なかなか足が進まないフォーサイトの一行、その前を軽やかな足取りで進むのが以前にもこの村に来ているジエツト、そして、初訪問のフレイラだ。

もちろんフレイラのそばには透明になって匂いも温度も誤魔化しているベルリバーも一緒だが、フォーサイトの3人にはそのことは気づかれていない。

「なあ…あの話を聞いて、なんでそんな軽やかな足取りなんだ？ ジエツトさんよ〜？」

「え？…いや、私は、既に一度、この村に来ていますからね、なんとな

く感じていたことに確信が持てた、つて程度だからでしょうか？」  
（まさか、その『仮面の魔法詠唱者』が私の主だ…だなんて言ったら、腰でも抜かしちやいそうだから秘密にしておきましょう。）

「フレイラさんは大丈夫ですか？」

（さつき、ヴェールさんから「その子はもうボクが女装した姿じゃなく、実在している本物の女性だからな…勘違いしないで接してあげて欲しい、よろしく頼んだよ？」だなんて言われてるからな…。）

「ハイ…ヴェールさま…んから話を聞いて、ずっと来たいと思っただので…今からたのしみです♪」

ジェットにだけ聞こえるようにと、気を使って耳に口を寄せ、声を落として答えを返してくれる。

それも、フォーサイトのメンバーの1人、ハーフェルフのイミーナはレンジャー持ちだ、彼女の聴力の範囲がどれほどなのかがわからないうの安全策なだけというのはもちろんジェットも言われなくてもわかっていた。

そんなジェットが…

「それは良かったです」

という言葉が発言した瞬間、ジェットの足元に数本の〈魔法の矢〉が飛んできて、地面に突き刺さった。

いきなりすることに驚き、思わず飛びすきると…、飛んできたのは上の方…というのは軌跡からして分かったため、見上げる…。

すると、そこにはジェットの方を燃えるような瞳で見つめ…というより睨んでいるような目をしたアルシエが見張り台の上にいた。

彼女は馬車が近づいて来たあたりで、ラッチモンとブリタに呼ばれ、そこから、(村への来客の魔力診断のため、念のためにと呼ばれていた)遠くを見、次第に近付いてくる一行を見つめていると…明らかに初めて見る女と仲良さげに耳打ちなどをして(耳打ちをしたのはフレイラだけなのだが…)会話をしている良く知る人物、ジェットを見つけた。

喜びもつかの間、耳打ちをされていたコトに対して笑顔を浮かべた彼の表情にイラ立ちを感じた瞬間、思わず〈魔法の矢〉の威嚇射撃を

敢行していた。



「よ…ようこそ…カルネ村へ…私がカルネ村、村長のエンリ・エモットです…。」

「ホラ…アルシエさんもお詫びしてください？ 来てくださったお客さんいきなり宣告もなしに威嚇射撃だなんて…もう！」

そう言つて、アルシエの首の後ろに手を伸ばそうとした瞬間、ジエットの後ろの方を見て、むりやりな笑顔を浮かべたアルシエが、ジエットの横をわざとすり抜け、懐かしいメンバーの3名の下に走っていく。

「イミーナ、ハッケラン、ロバー…来てくれた… もう…会えないと思つてた…のに、…でも…大丈夫？ ここ、許しが…その…。」

と、イミーナに抱きつくように再会を喜んでいながらも、不安げな表情を浮かべていた。

「ああ、そのことなら大丈夫だ、アルシエ、これでも一応、適性の方は及第点はもらつてる、合格とまでは行つてないが、見に行くことの許可くらいはもらつてるから問題ないよ。」

「ええ、それにアルシエだけを一人にさせる訳にはいきませんからね、私達も帝国を飛び出してきましたよ。」

「え？ なぜ？ みんな何も悪い事なんて…。」

とかなんとか、後ろで呆然としているジエットは放置のまま、フォーサイトの面々との再会の盛り上がりを見せている頃。

エンリとフレイラはお互いに、首に提げられている「ネックレス・オブ・アイنز・ウール・ゴウン」を見せ合い、お互いの親睦を深めている。

そしてアルシエに放置されたままのジエットは、透明のままのベリバーに優しく肩をポンポンとされ、慰められていたのだった。

### 第33話 カルネ村到着。お昼前

空気が重い…

心底ジエツトはそう思っていた…。

しかしながら、その場にいるみんなはそうは思っていない。

それはそうだろう…、彼らはカルネ村に入り、(とりあえずはエンリが気を利かせ、ゴブリントループ達、そしてアーク以外の亜人種たちは全員見えない場所に避難させている。)今は現村長としてのエンリの家ではなく、元村長の家、今は来客用のフリースペースとして開放されていた。

元村長はどこかと言えば、アルシエの住むことになった家で親代わり…というか、身の回りの世話をするという役目をして居る。

村長自身、息子は王都の方に出て、最近は便りすら寄こさなくなってきたている、昔から…誰が言ったのか、「便りがないのは元気な証拠」という言葉がある。

本当にそうならそれは何よりなのだが、本当に何もないと生きていくのか、死んでいるのか…それすらも不安になる。

王都の方に着いた、ということとは手紙で一度、来たことはある。

その後、しばらくして仕事が見つかったという手紙が来た…、その時の手紙では何かの荷物を「運ぶ」仕事を任されている。ということだった。

次に来た手紙では、荷物の運び人から昇格し、今では王国の土地にある、とある農場で、村では見たことの無い植物を栽培することになった、その責任者だ。と嬉しそうに知らせたのを最後に、ぷつぷつりと手紙が来なくなった。

向こうで、いい人でも見つけ、家庭を持っているなら何よりだが…、突然帰ってきて、「ホラ、この人がおじいちゃんだぞ？」だなんて嬉しいことをしでかしてくれてもいいとも思っている。

だが、そこまで幸せで居てくれる保証はない、王国のどこにある、どんな農場とも、どんな植物を栽培してるかも書かれていなかった。

願わくば、法に触れるような…人様に迷惑をかけるようなものでなければそれでいいのに…と思っていた。

だからだろうか…まるで孫のような年齢のアルシエの妹たち。

そして、そこに訪れてくるエンリの妹、ネム。

双子の女の子、ウレイリカとクーデリカの姉、アルシエ。

その子らと一緒に居ると、昔の賑やかだったころに戻ったような気分になったのだ。

アルシエ自身、家を飛び出し、ジエツトの家で、家事のとつかかりくらいは教えてもらった為、食器を洗ったり、掃除をしたり…そこらへんは問題ないのだが…いかんせん、貴族育ちのため、気の利いた料理は苦手だった。

ワーカーをしていた時の野宿や、テントで手伝っていた調理くらいなら何とかなるものの、家庭で出すような料理は経験がなかったため、元村長さん達がかつていた使用人たちのように色々としてくれるのはありがたい。

そんなこんなで、元村長の奥さんに色々と手料理も習っている、今は少しずつ…作れるようにはなっていた。

いつかこの手料理を…誰かに食べてもらえたら…、最近はそう思うようになつていた。

そんなアルシエの頭に浮かぶのは主に2人、ジエツトと、ヴェールの存在だ…。

いつだか、一緒にアイスマキヤティアを飲んだことはまだ記憶に新しい、なので、どんな顔で食べてくれるだろうか…なんて思ったりもしている。

ジエツトの方は…彼の好きなもの、キレイなもの…家でお世話になつていた時に聞いておけばよかつたかな…。

なんて思っていたが、今更そんなこと考えても、もうカルネ村に今は居るのだ、連絡しようにも村と帝国では遠すぎるし…うかつに帝国にも戻れない自分では…ジエツトに会いに行くことも出来ないだろう。



そう思っていた所に、またジェットが来てくれるという話が聞けた。

だから二つ返事で、「見張り台の上から魔力の程度を見てくれない？ …心配ないと思うけど、一応ね。」というブリタの提案にも乗ったのだ。

喜び勇んで行ってみると…当の相手はどうだというのだ…見知らぬどこかの女と一緒に歩いていた…フォーサイトのメンバー3人を連れて来てくれたのはいいが…、耳打ちなどされて、その後に楽しそうに、嬉しそうな表情まで浮かべ、会話などしている…。

「自分と会えていない間に、ずいぶん楽しそうじゃない？」

そんな風に思ったら「…ハ！」…と気が付いたら、彼の足元に<sup>マジックアロー</sup>魔法の矢を打ち込んでいた。

そして、今は、フォーサイトのフルメンバーが揃い、初顔合わせのフレイラという女性、そして、そのフレイラさんともう打ち解け始めている村長のエンリ。…そして、ジェット。という構成で、「元村長さんの家」で、歓談していた。

とは言っても歓談できているのは、フォーサイトの内輪での盛り上がり。

そして、打ち解けてきているフレイラと、エンリ。

そこから離れ、1人取り残されているジェット。

そういう構成のため、その場で「空気が重い」と感じているのはジェットただ一人だけという状況だった。

「それにしても、本当にゴブリンたちと一緒に居て生活が成り立つて村があるなんて思わなかったぞ？すごいとこだな、アルシエ」

「まあ…、そこは私も…そう思う。」

「そこに居る子は、ゴブリンの子供？」と少しそちらに目を向けるイミーナ。

「ああ…オレはもう、このカルネ部族の一員、ここで勉強をしてる所だ。」

「勉強だけじゃなく、腕っぷしも強くならなきゃな…、早く俺らよりも強くなつて、エンリの姐さんのために働けるようになるんだぞ？アীগー！」

「ああ、もちろんだ！」

「…なんか、すごいね、ここのゴ布林って、今まで私が会ってきたゴ布林とは全然レベルが違う感じ…、ねえ？エンリさん…ここのゴ布林ってみんなこうなの？」

少し離れた場所でフレイラと話し込んでるエンリに、イミーナが声を掛ける、そこでエンリは話を一度やめ、イミーナの質問に、逆に彼女が問い返す。

「え？…いつもこんな感じですけど？…こうなの？…とは？」

エンリにしてみれば、最初に接したゴ布林という存在が、このゴ布林トールプ達なのだ…彼女のうちのゴ布林像というのは彼らのことで、一般の人たちの考える「ゴ布林」というものとはすでに次元が違うということにエンリは気が付いていない。

「いや、ここにいるゴ布林って、えらく普通に話してるけど…、私たちがワーカーしてて、会ってきたゴ布林って、大体もつと頼りない話し方って言うか、単語だけの話し方っていうかさ…そんなのだったから、こつちのゴ布林って、なんなのかな？って。エンリさんがここまで教え込んだとか？」

そこで話に入ってきた人物が居た、その男は、最初にこの家に来た時に招き入れてくれた者で、どうやら村長代理、という地位にいるらしい。

名前は「ンファイレア」、エンリさんの旦那さんだと聞いている。

「このゴ布林たちは特殊なんですよ、この村を救ってくださったマジックキャスター魔法詠唱者のアインズ・ウール・ゴウン様、その方がエンリに「これで身を守れ」と言われて渡してくださったアイテムを使ったら、生ま

れて出て来たのがこのゴブリンたちで、アーグは、最初にカルネ村入りした、村外の：森に住んでいたゴブリン部族の1人：ボクが思う所、たまたま生まれてきちゃったホブゴブリンがアーグなんだろうね、普通のゴブリンと違って、アーグは物覚えがすごくいい：学習能力もあるしね：、彼なりに色々、学んでるようだよ。」

そう言いながら、もってきた飲み物をそれぞれの人たちの目の前に置いて回っている。

「でも見た感じ、6人くらいよね？　ここに居るゴブリン。：これで全員？」

そう質問してきたイミーナに、ンファイレアが答える。

「いえ？　ここに居る以外にも、村人に弓を教えているゴブリンアーチャーが2人、村の外を巡回して、警戒任務にあたっているゴブリンライダーが2人、それからゴブリンメイジさんにゴブリンクレリックさんが一人ずつ。あとは難度36の隊長さんも居ますよ？」

「ええ???!　！　ウソでしょ？　難度36？　ゴブリンで？　聞いたことないよ！」

イミーナも驚いているが、声も出ずに驚いているのはロバーデイクにヘツケランも同様の感想だったようだ、目を見開いてゴブリン兵士らの方を見ている。

「まあ、隊長さんが特別強いって感じですね。ここに居るゴブリン兵士さんたちは皆さん難度25ですしね：アーチャーさん、ライダーさん、メイジさん、クレリックさんはみなさん難度30ですよ。」

「はは：ゴブリンの集団が、冒険者の基準で言えばシルバー以上、ゴールド手前って：何かの冗談みたいですね。」

ロバーデイクが、思わず自嘲気味に乾いた笑いを漏らした。

フォーサイトの全員はまだ知らないことではあるが、実はトループの全員が「1つのチーム」として：19人が1個の意志として機能し、さらにエンリが指揮官になって行動を共にする際、その実力は跳ね上がり、全員がゴールドの域にまで到達する、それはゴブリントループ

全体が、「エンリ」という一人の指揮官を仰ぎ、同じ優先順位を持ち行動できるという点で常に最適化した結論を19人全員が導き出せ…、示し合わさなくても通じるものがあるためだ。

戦闘でもそれは同じで、ゴ布林兵士に至るまでそれぞれにエンリがつけた名前、その名前をトループ同士で呼び合うだけでトループのメンバーは、何を求められているのか…を悟り、すぐに「応!」と応じることが出来る。

これは熟練の冒険者でもなかなか至ることの難しい水準であるが故に、それが出来る状況下での彼ら、もちろん隊長はジュゲムだが、アインズから贈られた結婚指輪を装備した状態の「指揮官エンリ」を頭に戴くゴ布林トループは、カルネ村でもかなり信頼された戦力となっているのは確かなのだ。

「この村は、同じ同胞である人間に大虐殺されかかったという痛ましい事件がありましたから…、救いの手があったとは言え、全く犠牲者が出なかつたわけではないですからね…、信用できない人間よりも気のいい亜人種、っていう…、言い換えれば、少しでも心のよりどころが欲しかったということかも知れませんが、事実、エンリの為、常に村人に尽くそうとしてくれ、話も通じるゴ布林たちは村人にとって人間以上に信用できる存在に映つたのも仕方ないことですからね。」

その時はまだボクはこの村に移住する前の事でしたけど…という注釈も入れながら、ンファイレアがこの村の歴史について語って聞かせていた中…。

「なるほど…だからこの村にはこれほど大勢の悲しい声が響いているのですね…。」

と、今までじつと話を聞いていたフレイラが突然そのようなことを言い出した。

「は？ 悲しい声？ そんなのどこにだ？ 全然響いてなんて居ないだろ？ 静かなもんだと思うが？」

「そうですね…皆様には恐らく視えないでしょうし、聞こえないでしょう。しかしたしかに…私には聞こえるのですよ。 悲しげな声

が…、それだけでなく、どこまでも恐怖に染まって逃げ惑う声も…  
それに、必死に誰かに「逃げろ、早く行け！」と繰り返し言いながら、こと切れるという場面を幾度も繰り返す父親らしき誰かの声…。」  
その声をどこか異質な者でも見るような目を向けていた面々の中、  
1人だけ、最後の言葉に反応した人物が居た。

「あの…フレイラさん、その…最後の「逃げろ…」という声の人は、他にどんなことを言っていましたか？」

「恐らくよほど強い感情が刻み込まれているのでしよう…同じ場面を…何度も何度も繰り返し…こと切れてしばらくしたら、またどこから聞こえてくるその絶叫は…きつと誰かのために命を落としたのでしようね。」

「あ…あなたは…死者の声でも聞こえるというのですか？」

ロバーデイクが違った意味で信じられないという声を上げる、その声は忌避するというよりも自分では届かない物を持ち合わせた相手に対する…同意したいが、同じ気持ちになれないもどかしさのようなものようだ。

「私の持っている職業の中で、そういう物に特化したものがありました…不可視の…というより実体を失った…または最初から持たない存在に対して働きかける事を仕事とする能力です、たまたま持ち合わせていた力なので…それを伸ばしていただいた経緯があるのですよ？」

フレイラが持ち合わせているクラス構成は、まずは一番強いクラスはLV10が二つ、クレリック 神官と、シヤーマニックウオリアー 精霊加護の闘士という特殊なもの。

シヤーマニックという精神体に関わる職業に加えてミディアム 霊媒師3LV、ソウルステイラー5LV。

それとは別系統の職業、タブラ・スマラグディナも所持していた錬金術師という職業を、フレイラは3LVで取得している。

この世界では、どのような物まで作れるのか…試せるのなら試せさせて欲しい所だろう。

錬金術師の職と合わせ、ブリベアー 作成者3LV…、後はコック、ストーカー、  
双手拳士という職業が、それぞれ1LVという、合計37LV。

種族レベルとして獣人種ライカンスローが10LV、その上位のエルダージャガーが3LVという、13LVが合わされ、全レベルで50LVということになっている。

戦闘時には召喚を用いて、呼び出した存在と共に、バフ、デバフを使い、自分が呼び出した存在が精霊種なら、非実体のモンスターにも攻撃が通じる為、自分の「非実体に攻撃することに特化」してる能力と組み合わせる戦う仕様、最初から実体のある相手ならばどちらにして通常の攻撃は通るので問題はないという寸法だ。

「それに恐らく…私が聞こえている声は…死の間際、強烈にその場所に刻み付けられたもの…その人達本来の魂は多分、別の所にあると思われれます。エンリさんはその人に心当たりでも？」

「あ…はい、その人は…多分、私の父なのではと…、私とネムを助け、森に逃げれば、襲い来る騎士団からも身を隠せるだろうということ…、数人の騎士たちに囲まれる中、父が一人で注意を引きつける形で…私たちの命は長らえることが出来たんです。」

そこまで言った後、一区切りして溜めていた想いと共に最後の言葉を紡ぎだす。

「その時、私を逃がすために言った言葉が、その言葉と非常に良く似ていた言葉だったので…。」

思いつめたような表情のエンリを見て、気持ちが動かされたのだろう、フレイラが椅子から立ち上がり…。

「申し訳ありません、まだお話の途中ですが…エンリさんの心の中のシコリを晴らすための手伝いをしようと思いましたが…、お話の途中で退座することをお許しく下さい…みなさんはどうかそのまま…。」

フレイラは「ここで話を続けていてください」と続けるつもりだったのだが、フォーサイトの面々がそれを途中で遮って言葉を割り込ませる。

「なに言ってるのよ？ せっかくなんだし、お手並みを拝見させてもらいたいんだけど…ご一緒しちや迷惑？ ね？ いいでしょ？ ヘツケラン、ロバー、アルシェ？」

「ええ…私も今の話の流れは…どうにも気になって仕方ないですからね…どうやら同じ神官系のお仕事の様ですし…後学のためにも是非、同席させていただければ…」

「アルシエはどうする？」

いきなり話を向けられたアルシエは少し逡巡するも…ジエツトと耳打ちして話していた当人ということもあり、どういう女なのか…気になっているということもある、そのために承した。

「私は…かまわない、行く。」

「なら決まりだな、邪魔じゃなければ一緒に行かせてもらえないかな？…迷惑にはならないからよ…な？」

「そうですね…この村の人たちの魂なら、危険はないと思いますが…、一応、注意はしておきましょう。」



こうして、エンリ夫妻、フレイラの後ろについて来たフォーサイトのメンバーと、所在なさげに最後尾で立っているジエツトの8人、そして、姿を消してひっそりとフレイラの隣で様子を見ているベルリバー。という感じで、かつて村人を葬った場所の前まで案内してもらっていた。

「いいですね…他の石たちもそれなりですが…エンリさんのご両親を埋葬したこの場にある石からは…、理想的な波動が感じられます。」

「どうやらエンリさんは毎日の様にここでご両親のことを想っていたようですね。」

「え…？…わかるんですか？…そんなこと…。」

振り向いたフレイラがエンリに向けた表情は、まさに慈母と言っていいほどの微笑みを湛えていた。

「ええ、この石からは負の感情などはあまりなく、ご両親に対する想いが詰まっているようです、この石自体もその気持ちに応えるように想いを媒介してくれようとしています。」

「ええ？…石がか？…そんなこと聞いたこともないぞ？」

批判的な空気はなく、単純にそういうことがあり得るのか？という疑問を感じたようだ。

「石にも精霊が宿るでしょう？ 土の属性の魔法で土の精霊だけではなく、石に由来する精霊を呼び出す魔法もありますし：鉱石系の魔法を好んで：限定して覚えることで威力を上げる人も居るとい話も聞きます。 そういうこともあるというくらいは覚えておくと、何かの役に立つかもしれません。」

「ああ：そういうえば、何かで聞いたことはあるかも：。」

魔法のことに関して言えばアルシェの方が他のメンバーよりも多くの知識を持つ、一時期は帝国魔法学院で魔法学も学んでいたのだ、聞き覚えくらいはあっても不思議はない。

「さて：では始めましょう、きつとこれなら：喚びかけに伝えてくれるはず：。」

フレイラが墓石代わりの丸石の前にヒザをつき：祈りをささげるような体勢をとると：石の周囲からおぼろげな：淡い陽炎のようなゆらめきが立ったかと思うと：フレイラが魔法を唱える。

〈カラード・スピリット 霊体色彩化〉

すると、目の前に立ったと思っていた陽炎のようなものに色が付き、宙に浮く形で、穏やかな表情をした男性が立っている。

「お：お父さん！ お父さん！」

しきりにエンリが呼び掛けている、どうやら本当にこの人がエンリの父親らしい。

すると、フレイラがエンリの肩に手を置くと、エンリに対して魔法をかけてやる。

〈グレイブ・トーカー 墓所の語り手〉

すると、一方的に語り掛けていただけのエンリの雰囲気が変わる。時折り、「うん、うん、大丈夫」とか「そう：あの時は：ネムも大変だったんだよ？」とか、どうやら会話が成立しているようだ。

すると、近くに来たロバーデイクが「何をしたんですか？」と声を掛けて来た。

エンリの方に顔を向けたまま、見守るようにしてロバーデイクの間



いに答える。

「特別なことはしていません、あの子の父親に呼びかけ、出て来てくれた父親を見えるようにしてあげて、エンリさんに会話が出来るようにしてあげただけ…。それだけですよ?」

(間違っても死霊系の魔法だなんて、口に出しては言えませんがね…。)

しばらく話していると、エンリの表情に喜びの涙があふれ出す。

それは夫のインフィーレアでも見た事は無い物だった、基本エンリは泣いて気持ちを切り替えるということはない。

村長として振る舞うようになってから、弱みを見せるべきではないとずっと張り詰めていたのだろう。それがどういう会話が成され、その思い込みを解きほぐされたのか、他のみんなにはわからなかったが、それは当事人たちが分かっていたらそれでもいいのだろう…。問題は、エンリ自身が分かればいいことで、彼女の中で昇華できればそれでいいのだから…。

「それでは…。そろそろですかね?」

他の面々が見守る中、フレイラがエンリの父親の前まで歩いて行き、色のついた映像と化しているエンリの父親に話しかける。

「そろそろ…。よろしいですか?」

それは、エンリに向けて言った物でないことはエンリにもわかった、視線が明らかに父親の方を見つめているのだから…。

「え? フレイラさん…。何を…。言っているんですか?」

「彼…。イヤ、あなたの父親を、本来居るべき場所に送り出してあげるのです。」

「居るべき…。場所?」

不安そうにエンリがその言葉に意味を求める、何を言われているのかわからないようだ。

「ハイ、そうです、魂の安息の場所、魂となった者たちが安らげる場所、そこにあなたの父親を上がらせるのです。」

エンリの顔色が一気に変わる、やっと出迎え、話せるようになった

父親と、また離れなければならないのか…という思いが心を染め上げる。

「待って！ まだ待って！ まだ…まだ話したいことがあるの…まだ話していないこともあるの…だから、まだいいでしょ？ 今すぐにじゃなくてもいいんでしょ？」

さすがのようにエンリがフレイラに詰め寄る、しかし、曇ったような表情はそれを良しとしない雰囲気を漂わせている。

「今しかないの…、今までずっと、ここに居て悪霊化…アンデッドとしての変化がなかったのは、エンリさんが好意的に世話をしていたおかげ、父親も誰かを恨むことなくここに眠っていたおかげ…ということもあるでしょう。」

そう言つてエンリの頭を優しくなでながら…母親が子供に言い聞かせるように言つて聞かせる。

「でもね…あなたと話したおかげでお父さんも上に上がるための心の準備をってしまったている、そのため、上に上がるための扉が開き始めている…あれが開き切つて…そして閉じてしまつたら…もう次にその扉がいつ開くかは私にもわからない…ずっと、この中に縛り付けておくのはお父さんのためにもならない…時間が彼を変え、悪霊…アンデッド化する前に…送り出してあげて？ 今なら、あなたのお母さんも、一緒に上に送り出してあげられるの…。」

しかしエンリはすぐに了承はしない。  
「でも…でも…、せつかく…。」

いつものエンリらしくない嗚咽混じりの声が彼女の口から洩れている。

それを目にして、1つ、決意をしたようにフレイラがエンリの肩に手を置き、体を離す、そして目の高さを合わせ、ゆっくり言い聞かせた。

「エンリさん、お父さんと話したことは今はわからなくても、後で意味はわかるわ…、でも話すこと自体はもうできなくなるわけじゃない、エンリさんがお父さんを想い、心の中で語り掛けてあげれば…それはきっと届くの…お父さんも、エンリさんを上から見守ってくれる…、

今までだって何かあったらお父さんは助けてくれたのよ？ 今度はエンリさんがお父さんを助けてあげて？」

しばらく、見つめ合い、考えを巡らせていたのだろう…一番気になっていた内容をフレイラに問いかける。

「フレイラさん、1つだけ聞かせて？ お父さんが上に昇ったら、もうここには戻って来られないの？ この石の場所は空っぽになってしまうの？」

変わらず、エンリの目の高さに合わせて姿勢でいるフレイラがそれに答えを返す。

「いいえ、この場所は…転移系魔法で言えば、到着するためのポイントと言える場所、帰って来ようと思えばいつでもお父さんは上の世界からこつちの世界には遊びに来られるの…でも、それはエンリさんやネムさんには感じられず、視えもしない…声も聞こえないだけ…でもちゃんとお父さんは、ずっとエンリさんのことを気にしてくれて、見守ってくれるし、時々様子を見に来てくれるわ。…だから今まで通り、この石の世話をして、石に向かって父親に語り掛けていれば…エンリさんの言葉はお父さんに届く…なにも心配はないわ。」

優しい目でそこまで言い聞かせると、その直後、真剣な目になったフレイラが、ゆっくりと、意味が分かるようにエンリに語って聞かせる…とても大事なことを…。

「いい？エンリさん、上に上がったお父さんは、その気になれば、いつでもこつちに戻って、好きな時に上の世界と行き来することができる…でも、上の世界に昇れるチャンスは今しかないの…、エンリさんがお父さんにずっと居て欲しい気持ちはわかる…でもそれが強すぎるのと、上がろうとするお父さんにとってエンリさんの想いは重い錘（おもり）になって、上がれなくなってしまふ…、だから笑顔で送り出してあげて？」

…エンリは迷う。

どうすればいいだろう…さつき会ったばかりの私になんてそんなに親身になってくれるのだろうか…もしかして、父になにかするつもり

なのだろうか？

そんな有りもしないことまで勘ぐってしまいそうになるも、日頃からゴブリンやホブゴブリン、オーガ達と接し、表情筋の動きや目の動向、それらとずつと接してきたからこそわかるそれに「信じてみよう」という気持ちが生まれる。

これがルプスレギナであったなら、間違いなくその申し出は辞退しただろう…何しろ、彼女は自分では労力を使ってまで人を陥れることまではしないが、たまたまそこにあつた状況を利用して、目的にした人物が不利な状況に勝手に落ちてくれることを、どこかワクワクしながら見ているような…それでいて、ソコに誘導させるような言動自体には労力を惜しまないタイプ…エンリにはルプスレギナという人物はそんな性格に思えるのだ…だから、助言される時も「どこまで信じ、どこからは自分の判断」とするかを見極めなくてはとてもじゃないが全面的に信用はできない…長い付き合いでそれが良くわかつて来ていた。

しかし、目の前の彼女は違う、真剣な瞳、心底心配しているような…差し迫つた表情、声の感じ…どれをとつても安心できるものだ。

彼女のことはまだ会つたばかりで…話し始めたばかりで知らないことの方が多い。

でも少しの間でもわかることがある…、彼女は求めれば力になってくれる。求めなくてもなんとなく察してくれる…そんな風を感じるのだ。

信じてみよう…本来であれば、言わなくてもいい事だったのだ。

父の幻影が悲痛な叫びをあげているなど…

彼女にとつては、そのことを黙っていたところで、どちらにしても損も得もなかったはず…それどころか、そんなことをいきなり言い出せば、まかり間違えば今後の自分に向けられる目がどんなものになるか…その可能性を考えれば逆に言わない方が無難であつたかもしれないというのに…、なのにごこまでして、力になってくれようとしている。

それに…なんの見返りも、今の時点で求められていない…、ゴウン

様の次に信じられるかもしれない…と思った、もしかしたら、「信じたい」という気持ちが行先していただけなのかもしれないと思うが…それはどうでもいい。

今は、父をどうするかなのだから…。

エンリはコクン…と首を縦に振ると「お願いします」とフレイラに短く告げる。

それに応えるように頷いたフレイラは、エンリの父親に向かいヒザを折る。

その姿勢のまま祈りを捧げると同時に、父親の立っている場所より上の方から優しげな光が降り注ぐ、それはエンリの父親に降りかかり、少しずつ光り輝くモノへと変えていく。

薄く透けて見えそうな程にきらめく見た目になってきたのを見て取ったフレイラが、両手を上に挙げた。

すると、今度は優しく吹き上がる淡い光に包まれたエンリの父が少しずつ空へと昇っていく。

一同が呆然と見ていると、次第に空に飛び立って見えなくなっていく。

「ハイ、これでまずは安心です、エンリさんもお疲れさまでした。」

「いえ、ありがとうございます。」

そういう言葉を交わす中、興味を覚えているのはロバーデイクだ。

「い…今のは…何をされたのでしょうか？」

「今の…ですか？　ただのターンアンデッドを応用した技なだけですよ？　本来は信仰する神の力を授かり、行使することによって本来は前方に照射する攻撃的な波動を、前方ではなく上方へ…叩きつけるような強いモノから威力を弱め、優しいものにする代わりに長い距離を作つてあげ、光の道を示しただけです。この御業は神官クレリックのみでなく霊媒師ミディアムの能力があつて初めて出来るようになったものですが…。」

ポカンとするロバーデイクの後ろで「ほええ〜…」というため息と共に、一連の流れを見ていたフォーサイトの面々、後ろで見ていたジエツトも展開される驚きの連続に、次第に前に来ていたのだろう。

「良かったですね、エンリさん。」と話しかけていた。

何気ない光景なはず…気にすることのない場面、の筈なのになぜか心がざわめくのを感じたアルシエが、ジエットの腿のあたりをつねる。

「いったー！」

という声を出し、振り向くと、既にプイと顔を背け、仲間の下に戻ったアルシエが自分との距離をとっていた。

「…いったい、どうしたんだろう？」

そういう想いで居るのはジエットだけではない…当のアルシエ本人にも、自分の行動の真意がつかめずにいた。



正直なところ、アルシエも戸惑っていた。

(何故、私はあんなことを…)

ジエットは、私からすれば、言わば弟のような存在だったはずだ…、それがここ最近どうにも変な感じになってきている。

自分が慣れ親しんだ帝国から、見知らぬ王国という…しかも亜人と共存が可能という意味の解らない「村」に移り住み、知ってる存在は妹たちだけ…、今まではチームメイトとも離れ離れだった…だからだろうか…、帝国を離れるまで親身になって自分を助けてくれたあの子を見る目が今になって変わってきたというコトだろうか…？

実際、あの子、ジエット自身は「恩返しをしたいだけ」

そう言っていたではないか…きつとそれ以上ではないはず…それは知っていたはずなのに…。

この村に来て、早く周囲に馴染めるようにと頑張ってきたが、想像以上に「顔見知りすらいない環境」というものに精神がすり減っていたのか…思い起こせばジエットを思い浮かべる回数も増えていた気もする。

しかし、それを言うならヴェールさんもそれは同じくらいの回数、思い出している。

なのに、なんであの子…ジエツトにだけ、こんなトゲトゲしい…ささくれ立った感情を覚えるのだろうか…。

(別にあの子がエンリさんと話すくらいどうってことないじゃない…)

表面では確かにそう思っている。

ンファイレアさんがどういう人かも私は聞いている。

この村に来る直前、ゴウン様に招かれた際、あの子に聞いた話…香料の話をしていた流れで、ついでで聞いた内容…、友人にンファイレアという存在が居るといふコト…。

ゴウン様のために新しくポーションを作り出すことに協力する。という挑戦のため、進捗状況の報告ということに来ていたンファイレアさんと、当時、帝国での文字と…帝国外でも通じる一般的な共通用語などをゴウン様に「ナザリックの面々にも分かりやすく教えられるように…の知識交換会」という名目で（実際はジエツトが教師役、ゴウン様が生徒役という位置づけでの勉強会をしていた際に）顔合わせする機会があり、ンファイレアもエンリに「早く香辛料や、砂糖なんかを…」と折に触れ要求されていたため、それが得意なジエツトとの交流を通し、その生活魔法を学ばせてもらうことを通じて、友人となった経緯があったのだと…。

そういう意味で言うならジエツトにとってエンリという存在は「友人の奥さん」程度でしかないはず。

それは頭では分かっている…いたはずなのに…、何故か自分以外に笑みを向ける彼の顔を見ると…ん？…彼？…イヤ、違う、違う…あの子、そう、あの子よ。

別に彼なんかじゃ…なんかじゃ…？

そう…別に特別な感情などはない筈だ…と必死に自分に言い聞かせながらも、本当にそうなのだろうか…己にそう問いかける…。

それならば、この気持ち悪い感覚…これは何なのだろうか…？

初めて自分の中にこんな醜い感情があったことを知った。

そもそも、あのフレイラさんという女性が一緒にいる所を見てから

ずっと変な感情を覚えてしまった、一体彼女はジェットとはどういう関係なのだろうか…？

などとりとめもないことを考えている内に全員で、元の村長宅に戻ってきてしまい、「そろそろいい時間だし、お昼の準備でもしませんか？」と言い始めたフレイラに同意する面々という状況になってしまったのは自分だけ意地を張っているわけにもいかず…女性メンバーが揃って食材の皮むきから、何から…ワイワイと始まってしまった。

案の定、この村での「水道」というものは帝国でも見かけたことはないらしく、ひねったら水が勢いよく出る様を皆が見て驚いていた。

自分もちよつと前、同じ反応をしたな…と思いつながら、いつも元村長の奥さんが使っていた包丁を借りて、自分もそれに加わる。

エンリさんは自分の家から自分用の包丁を用意してきて食材を細かく切っていく。

フレイラさんは一体どこに持っていたのか、普通の物より一回り小さい包丁、果物やじゃがいもなどの皮をむくのちちょうど良さそうな大きさの一本…、それとやけに立派そうなまな板を持ってきて、それは別に半円型の鉄の入れ物？っぽいものまで持ち出している。

よくよく見てみると、どの道具も淡い魔力を帯びている。

(実際は、なんの道具もそう言えば持たせてなかったな…と気づいたベルリバーが、フレイラの為に、元村長宅に入りながらこつそりとL V10 鉄鉱石、それに同レベルの木材を使い、包丁とまな板、さらには「せめてポウルくらいは必要だろう」という事で、〈道具作成〉で一式作ってしまったからである。)

やはりというか、何と言うか…他のみんなにはその魔力は見えていないらしく…「すごい切れそうなナイフだね」とか「それ、どこかの逸品？」とか話題になっっているが…自分も魔力を込められた「まな板」なんてものは見たことがなく、暫らく呆然と見入ってしまった。

ようやく意識をそれらの物から、切り離れたのはエンリからの言葉であった。

「あ、そういえば、ごめんなさい…ひとつ言い忘れていましたが、お昼の準備中、もしかしたら途中でこの村に人が訪れるかもしれません…



とはいえ、門前までなので…すぐにここに戻って来られるかと思いませんが…」

「…村長…それ、もしかして…この前の剣士さん？」

自分は一応、新入りということで避難していたが、翌朝に話題になつていた剣士を遠巻きに、見張り台から見させてもらつていた。

自分が見たのは、ずくつと、跪いて、額を地面にこすりつけたまま、微動だにしない剣客の人物であるが…、村長が話しかけると、頭を上げ、会話をしていた風なのは見えた…しかし一体どういう話をされたのかまでは聞いていない。

「ああ、アルシエさんはそのお話しは皆さんに聞いているようですね…それなら…、その剣士さんがお昼ごろ…と言つたので、今になるか「昼食を終えてから」来るかはわからないので何とも言えないのですが…その時は、少しの間、お願いしますね？」

「ねえねえ、アルシエ、それって何の話よ？」

興味深げにイミーナが、事情を聴きたがつているが、事情が事情だけにどこまで話していいものやら…と思索していると、それを感じ取ってくれたのか、エンリさんが代わりに説明してくれた。

「それは面白そうな話ですね、その人のこと、もう少し詳しく聞かせてくれませんか？ とても興味深い方ですね。」

先ほど見た慈母のような微笑みとは少し違った笑みを見せるフレイラさんが、イミーナ以上に興味深げにその話に食いついてきてしまつていた。



(ほお…なかなか面白そうな話が聞けたものだな…。)

フレイラのそばにずっと控えて状況を見守っていたベルリバーが、その剣士の話を聞いてちよつと興味を示していた。

だからこそ、フレイラに耳打ちをして、もう少し詳しく聞いてくれないか？とお願いしてまで、聞かせてもらったのだ。

こつちの世界でまさか自分の国でも昔は使われていた時代もあるらしい「刀」そしてそれを得意武器として使える職業、ユグドラシルで言う所の、サムライ…その職業を持つ者が扱うことで武器の性能を充分以上に引き出せる設定だった「刀」という分類の武器。

それをまさかこつちで作れる者が居て、さらに使いこなそうと志す剣士が居たとは…と、ちよつとウキウキしていた。

自分がユグドラシル時代、武人建御雷に幾度となくPVPを挑み、そして結局一度も勝つことは出来なかったことを懐かしく思い出す。(一回だけ、条件付きでお互いにスキル使用を無しにしてのPVPで、やつと引き分けに持ち込めたのが、あの人と渡り合えた中で一番「戦えた」って実感が得られた瞬間だったな…)

その、結局超えるどころか、並ぶことも出来なかった相手、彼が好んで使用していたのが「刀」で、その素材の中でレアリティの高いものを入手したなら…彼は色んな組み合わせでデータクリスタルを組み込み、コンボを組み、やたら攻撃力重視でこたま作っていた…自分が戦った時は、たしか…ナザリック攻略して、拠点にした後すぐに新しいのを作った時だったから…「七式」だったかな？

一般的な刀とは見た目も変えて、外装にも手を入れたりして…かなり印象も強そうな感じにしてたっけな…、多分旧式扱いになったお下りのモノは…建御雷さんのNPCがきつと持っていたりするんだろうな…。

えくくつと、たしか、外国で言う所の地獄の…階層のどこかの名前と同じだったよな…、コキユ…？ えつと…あ、そうそうコキユートスだったか…。

確か生粋の武人って設定でカルマも中立だったはずだから、セバスと並んで敵対はされないだろうなって言うのはこの2人かな…プレアデスで言えばユリも…たしか善寄りだったはずだし…味方してくれないかなあ…？

まあ、どう絡むかは侵入してからの楽しみだ…。

それはそうと…その剣士が「武技」ってやつを使えるなら…ちよつと親交を持つてもいいかもしれないな…。

そう思うと、フレイラにこつそりと〈伝言〉メッセージを発動させ、こそこそと小さな声で話しかける。

「フレイラ…いいか？その剣士が望んでいた条件を聞かせるための魔法ってやつ、心当たりがあるから、その時はフレイラが〈透明化〉こつちが〈透明化〉を解除して入れ替わろう…、まあその時はついでに〈短時間休止〉タイム・ポーズを使うから、バレることはないだろう…ってことで頼むな？ 交代する時は同じように〈伝言〉メッセージで伝えるから…それに合わせるように頼む。」

今は「ヤシチ」の演技も必要ないため、あの黒ずくめの装備はしてない…そのため影に潜むことは出来ないことも考慮して、ベルリバーからの指示が成される。

フレイラは器用に指先をこめかみに移動させ、そこをさも「かゆい所をかいてる」仕草に見せて、応答している。

もちろん声で返答しては周りに人が居るのでバレる恐れを危惧し、首の動きだけで返答していた。

〈短時間休止〉タイム・ポーズは、〈時間停止〉タイム・ストップの下位互換。

緊急避難的にランダムで1〜3ターンの間、(最大でおよそ30秒)停止するのではなく、時間を休止させる。

つまり時間の動きを休ませ、最大の3ターン経過後であっても、効果範囲内にいる者達には1秒程度しか経過したように感じない魔法だ。

ユグドラシル時代では、CPUが操作する敵モンスターに使った際は、戦闘開始時に発動させると効果時間が切れた時は敵モンスターが「戦闘行為の選択肢」を選んだ直後くらいの時間から再開されたから、多分1〜3秒程度なのだろうと思っっている。

低魔力で発動できるという利点はあるものの、無詠唱化にするほどの使い勝手の良さはなく、効果時間を延長する強化魔法も精々が倍の時間を延長出来ればいい方という…しかも時間対策用のアイテムを

持っていれば効果はない、というゼロか1か…という微妙系魔法である。

とは言え、アインズのようにタイム・ストップ〈時間停止〉を覚えるまでの位階魔法を習得するには至らなかつたベルリバーからすればこれだけでも重宝していたのと、無詠唱化はそれぞれの魔法ごとに個別で熟達していなければならぬ為、結構な労力が必要だったため、この魔法にそこまでの情熱を感じなかつただけなのだ。

この魔法って、ユグドラシルでは戦闘時間で最大3ターンだったし、戦闘画面では有効だったけど…こつちの世界ではどこまでの範囲が有効なんだろう…。

一応念のため、使う時はこの間取りの中央くらいで使った方がいいのか？

などと思索していると、村長代理であるンフィーレアからエンリに声がかかる。

「あのさ…エンリ…、今日の所はもう村長代理の方は大丈夫そうだし、昼食が終わったら久しぶりにお婆ちゃんの手伝い…して来ても大丈夫かい？」

台所仕事をこなしながら、エンリは自らの夫に返答する。

「そうね、ここのとこずつとポーシオン作成の方はゴタゴタしてて手伝えてなかつたもんね、いいよ？いってらっしゃ…って言いたいところだけど、夕食はちゃんと帰って来てね？ また気が付いたら徹夜だった、なんてなつたら…また「埋め合わせ」してくれないと許さないんだから…。」

（え？ポーシオン作成？ンフィーレアってそういう仕事だったの？

…そう言われれば、アインズさんと語り明かした翌朝アインズさんが言ってたな…、村長の旦那は「ポーシオンの仕事か？」とかどうか…、生産系の職業だったか…そんなこと聞いたら、フレイラを作ったそもその理由、思い出しちゃったじゃんか…、うわ…手伝わせてえ…どうしようかなあ…）

人知れず、透明なまま頭を抱えて悩んでいるベルリバーが、せめて、その時間と「剣客の訪問」がブツキングしないように…と誰かもわからない何かに祈るのだった。

### 第34話 カルネ村到着。お昼どき――I

「さてつと…まあ、こんなもんか?」

そう言う森の中にいた男はひよいと肩に今まで自分が取り掛かっていた作業の結果をしよい込む。

「結構な大荷物になっちまったが、このくらいの重さがないと自分への負荷にもならないからな…。」

そうつぶやきながら、それらを背負う、もちろん「それら」とはもう身動き一つしていない自らの戦果である。

とは言え、自分から率先して狩っていたわけではない。

森の中に居るといっただけで、彼の方が森の中に棲んでいた者らの領域を冒したも同然なのだ。

そりや、襲われもするが、彼はそれ等のことごとくを撃破した。

絞首刑蜘蛛ハンギングスバイダーはさすがにオーガも食わないし、体内に弱い麻痺毒を持つているので適切に捌かないと不味いし、マズイ。

狼たちは…頭数が多いから、運ぶことはま〜…やぶさかでもないが、ひとまとめにするのに手間がかかるのでやめた。

今、彼が背負っているのは自分よりも少し大きめの森林猪フォレスト・ポアのツガイだ。

突進が当たっていれば状況は変わったかもしれないが、バカ正直な突進など、避けながら斬り付けて行けば問題はなかった。

「これだけじゃ足りないかもしれないねえが…あいつらに土産の1つや2つ持つて行ってやらなきや腹減らしてらだろうからな」

あいつらとは、短い期間であるが勝手に自分に着いてきてしまったオーガ達のことである。

オーガは力はあるものの、俊敏性に欠けるので、すばやい小動物などを獲ることにかけては非常に不器用なのだ。

「まあ大きい獣でも逃げの一手に入ったやつらに追いつることも難しいしな…あの巨体じゃ。」

などと言いながら、筋力トレーニングついでのようにそれを背負って、森の中を歩く。

歩くのはもちろん自分が地面につけて移動していた刀傷：通つて来た道をその刀の切っ先で道筋をつけていたため、それを辿れば安全に森の外に出られるはずだ。

その道筋なら一度森の先住者たちを撃退してすぐなので、再び襲われることも少ないだろうと見越してのことだが、読み通りに森の出口まで来られて安心していった。

「さくて…と、そんなじゃ、約束通り、行きますか？」

朝この森に入る際に「昼に顔を見せる。」そう自分から約束した手前、一度は顔を出さないとならないし、かと言って間違ってお昼前についてしまったり、昼食中に呼び出すのも悪い。

一応、昼メシを済ませて、後片付けも一段落したくらいに訪れた方がいいだろう。

「まあ、こいつらを背負ってるから、今から歩いて行けばちようどいいかもな。」

そう言うとその男は目の前に広がる草原、そのはるか向こうに見える、遠間からでもよくわかる城壁にも似た「村の防壁」に向けて歩き出した。



「え？見学をされたい…ですか？」

ンファイーレアが驚きの目でフレイラを見る。

みんながお昼の準備を一通りすませ、食卓に全員分の（もちろんトランプのゴブリン兵士6人に、アークもそこにはいるが別のテーブルだ）主食におかずなどを並べ、それぞれがそれぞれで歓談しながら食事をしていたときにその話を切り出されたので、みんなが聞いている前での受け答えになる。

ついエンリが「それを聞いてどう思ってしまうか」を気にしてしまい、彼はチラ…と見てみるも、いつも通りで、特に彼女に変わりは無いように見える。

「あの…ポーション作成なんて、女性が見て面白いことなんてないだろうと思いますよ?」

所帯を持つようになってンファイレーアの見識も、昔とは少し違っていた。

女の子にポーションへの情熱をぶつけても、あまりいい反応はない、ということが分かってきたため、自然とそういう言葉が出るようになって来ていた。

「いえ、そのようなことはありません、これでも一応、ポーション系の作成は興味のあるところだったのです。」

フレイラからのその言葉を聞いたンファイレーアの悪い虫がうずきだす：エンリにはどれだけの知識を伝えても、それがすごいことなのかそうでないのかの判断も良くわかってくれないために自然と家庭内でポーションの作成に関することも口にしなくなっていた。

そのせいか、家に帰ってからあの、少し当惑したような表情を見ることはなくなっただのは恐らくいい事なのだろうが：ンファイレーア自身はそれに物足りないものを感じていた。

自分の「好きな仕事内容への理解」が得られていないのでは：という想いがあるためだ。

しかし、だからと言ってすぐにそれに食いつき、ガツつくようでは共感は得られない。

不本意だが、それはゴブリンに教えてもらったことで、それが人生経験となり見識も深まった：などと村外の人間が聞いたなら嘲笑の的になるのは確かだろうが、もしもそれがなければ今のエンリとの関係は築けて居なかったことを考えると、感謝してもしきれない。

だからこそ、今はそれをグツと堪えるべきだとンファイレーアは判断する。

「そ、それで、フレイラさんはどんなポーションに興味があるの?」

(この程度なら、相手の興味を聞くだけだし問題ないかな?)

「ええ、私が興味のあるモノは魔力の回復薬、マジックポーションと言



えばいいのでしょうか？それともメンタルポジション？まあ、そう言った物ですね。いつかそういうのを作るのが夢だったのです。」  
「ええ？ 魔力の回復…ですか？ そんなことが！ ど…どうすればそんなこと…が！」

つい衝動を抑えきれずに詰め寄ってしまったものの、フレイラは特に気にした風もなく問いに答える。

「わかりません…私の元居た場所でも、そのようなものは未発見のままでしたし…だからこそ作り出したいのです。」

もしかしたら、向こうには無くてこつちにはある…そういう材料が見つかるかもしれない…そういう一縷の望みを持つて臨むつもりだが、今は時間がない、一日で出来るものではないだろうし…と気持ち切り替える。

「そういうことなので、もしよろしければ、こちらの方ではどのような作り方が一般的なのか、それを是非見せていただきたいのです。」

「そういうことなら喜んで、参考になるかわからないけど、お婆ちゃんにはボクから伝えておくから。」

と、そこまで言ったところで「ハ！」と、とあることに気づく。

「と…こういうことらしいんだけど…いいかな？ エンリ？」

恐る恐るそう尋ねる。

ンフィーレア自身は決してバカではない…ポジションに関わることで周りが見えなくなることとはしばしばあるのだが、それでも今までの生活から、例えポジション作成の方がゴウン様から言われている協力条件で、村長代理より優先順位は上なのだということは理解していても…、だからといって家庭をないがしろにしているという気持ちで居るわけではないのがエンリだということは分かっていたことだ。  
…だと言うのに、嬉しさの余り意見を求める前に応えてしまった自分の浅はかさを苦々しく思う。

「…好きにしたら？」

(あちやちや…機嫌を損ねちゃってるよ…、どうしよう…)

返事をして一瞬ジエット君の今までの様子が頭をよぎったので、エンリに同意を求めたのだが…どうやら一歩遅かったらしい。

「どうせ、私にはポーシヨンのすごさなんて解りはしないんですから？　ど〜ぞ、同じ話題で盛り上がれるフレイラさんとご一緒に仲良くしていればいいんじゃないやありませんか？」

(やっぱり怒ってるし〜)

「そ…そんなことないよ？　エンリには感謝しているよ？　家の中のことまでしてくれて、村のことまで考えてもらってる、ゴブリンのみんなだってエンリが居るから村のみんなとも上手くやっていけてるんだし、エンリが居ない世の中なんて考えられないよ。」

「エンリの居ないカルネ村」では無く「居ない世界」なんていう規模にまで言わなければならぬくらい彼らにとつての今の状況は大変な事態なのだろうか…と、可哀そうな目でフォーサイトの4人がンファイレアを見つめているが、当人はそんなことは気にならない、エンリを怒らせた後(…特に夜)が恐ろしいのだ…、エンリの甘えモードや、おねだりモードの時はまだなんとかなる。

だが、それが「上官モード」に突入した時には、ンファイレアにはそれに対抗できる精神力は持ち合わせていないと自覚しているし、断言できる…だから、それだけは絶対に避けたい事態だった。

「あのさ…だからエンリ？　何も心配しなくても…ボクはいつでもキミを想っているよ？　それは誓ってウソじゃないからね？」

必死に目の前の怒りを少しでも冷まそうと彼の中での精一杯の言葉を紡ぐ。

エンリはと言えば、さつきより表情が強張っているようだ。

「ンファイ…今、ここには他の人も居るんだから、言葉には注意してちょうだい、私たちは村長であり、村長代理でもあるのよ？」

そうして、ジト…と睨めつけられた。

「いいから、行ったらいいんじゃない？　リイジーさんにお伺いを立てるんでしょ？　あの人が選ぶことなら私が口出しすることでもないんだから、変に私の顔色なんて見なくていいの。」

(どうやらさつきよりは落ち着いてくれたようだけど、まだどこかで一押しは必要なようだね、帰りまでになにか考えておこう。)

そして、そんなエンリがンファイレアに顔を向けず、時折頬の辺り

がピクピクし始めているのはフォーサイトの面々でも分かった。

すかさず4人がそれぞれのゼスチャーで、ンファイアを外に送り出そうと『がんばれ!大丈夫だから、行ってこい』とばかりに背中を押そうとしてくれている。

(距離があるので物理的に押せている訳ではないが…)

「じゃ…じゃ…約束通り、お婆ちゃんには夕食までには戻らないと…ってことはちゃんと言うからね?ね?…行って…来ます。」

そうして、唯一の出入り口でもある扉がぱたんと締められ、充分に足音が離れただろう時間が過ぎてからようやくやくエンリの表情が一変する。

意外にも満面の笑顔だ。

「あく、よかった、さすがにあれ以上は不機嫌な表情保ってられなかったから、すつごい危なかったあ。」

何かから解放されたようなスツキリした表情、それに朗らかな声だった。

「あれ?エンリさんって、怒ってたんじゃないの?」

イミーナが不思議そうに問いかけてくる。

「ん? そんなことあるわけじゃない? さすがの私もンファイアの人となりは知ってるつもりだし? あんなことで本気になったりしないよ。」

室内に居たゴ布林兵士のみんなも一時は緊迫した表情だったが、その一気に弛緩した空気に全員が肩の力を落とす。

「驚いた、私はあの一瞬でなにが変わったのか全然理解が出来なかった、エンリさん、なんでいきなりあんな言葉が出て来たの?」

アルシエもなんとなく、興味を覚えたようだ、と言うのも、何となくだが、エンリのさつききの対応の変化は今日ずっと感じて来たジエツトに対する感情の答えを導き出すヒントになるのでは? という確証もない直感からだった。

「ん? んん、なんて言ったらいいかな? そうね、手綱を握る感じって言えばわかりやすいかな?」

さらっと、悪びれもなくあつけらかんとそんなことを言い出すエンリ。

「手綱……あの、馬…の、ですか？」

「うん、そうそう、ンフィーってね、今でこそ何とか、さつきみたい私に声を掛けてからって言うのが定着してきてるけど…所帯持った時は平気で何も言わずに『それじゃ行ってくるよ？エンリ。』って言って、ポーシヨン作成の助手に行っただけ、気づいたら朝帰りとかよくあつたからね。」

「はあくん、なるほど、そういうことなのね。」

意味深な表情を浮かべながらイミーナが一人納得したような言葉を一人でいいながら、頷いている。

「イミーナ…どうしたの？」

「ああ、要するに「怒っている妻」を演じて、それに対する旦那さんの対応を上手く誘導しながら、自分の望む展開に…生き方から言動から、少しずつ直していつてる最中ってことですよ？村長さん？」

「え？ まあ、そこまで大それたコトじゃないですよ？ ただ…彼のあのポーシヨンに対する情熱は危ない気がするの…、何かのよからぬことに巻き込まれるとき「未知のポーシヨン」ってものを材料にされたら、今のままのンフィーだとホイホイ行って行っちゃいそうな気がして…、だから無条件に信じるんじゃないで、少しは冷静になって立ち止まって考える習慣を身に付けて欲しくってね。」

「愛されてるんですね、旦那さんを、エンリさん…。」

アルシエがしみじみと微笑を浮かべながらエンリの照れたような顔を見る。

「そりやそうよ、ま…ヤキモチが全く含まれてなかったか？って言われたら、「そんなことない」っていうのはウソになっちゃうけどね。」  
そう少し照れくさそうに言うエンリさんはまるでお日さまのような笑顔を浮かべていた。

アルシエは思う…。

（私がさつきからずっと感じていたのはヤキモチ…嫉妬だったのだら

うか…、たしかにフレイラさんはキレイだし私よりも年上のお姉さんのな…それでいて、どこか神秘的な雰囲気もまとわせている。自分ではかなわないのでは…という意識がナイ訳では無い。ジエツト君が彼女をどう思っているのか…そう考えると、どうにも胸のモヤモヤが気持ち悪いと感じるのは確かだ。」

そこで、アルシエもすかさずその流れに乗つかろうと、フレイラに問いかけたかったことを口にしてみる。

「それにしてもさっきのフレイラさんはすごいと思った、先ほどの手際からすると神官のようだけど…決まった方とかは？」

ついさっきまでエンリに声をかけていたのに、いきなり自分に水を向けられたフレイラが一瞬、意外な表情を見せるも、すぐに答えに詰まることなく返答を返す。

「え？私ですか？ 私は信仰の道を進むと決めた時…いえ、もつとずっと前からこの身、そして心の全ては私の信仰する神ただお一人…私の住んでいた場所では「41柱の神」がおりました、その中でも私の中でかけがえのない神にして創造主、ただそのお方のためだけに生涯を尽くすと決めたのです、異性のことになどかまけている余裕はありません、ご期待に添えず、すみませんね？ アルシエさん。」

「(天地の)創造主ですか…それは確かに信仰に値するでしょう。」…とロバーデイク

「ええ、(私の)創造主様です。」…とフレイラ…、微妙に認識がずれているのに二人は気づいていないのだった。

その言葉を聞いて、心の中のモヤモヤが少しだけ晴れた気がしたアルシエは、「もしかして、本当に…私ってそうなのかな？」という意識が目覚め始め、認めようか目をそらそうかといった考えが生まれる中、ずっと感じていたフレイラに対する何とも言えない気分も軽くなっていることに気づいてしまっていた。



ワイワイと、食事を食べ終えたみんなは、食器を片付けたり、洗い

物をしたり…と作業をしながら、色んな話題を交わしている。

「それにしてもエンリさんはなんでンフィーレアさんを旦那さんとして選んだんです?」

素朴な疑問として、珍しく女性陣ではなくロバーデイクからの質問がエンリに届く。

「そうですね…最初は、私のことを心配してくれたり、何かあると元気付けてくれようとしてくれる、私にはもったいない友人って思っていましたよ?」

と答えたエンリにヘッケランがからかうようなツツコミを返している。

「そりゃ〜…村長代理さんも報われてなかったもんだ、さぞや苦勞しただろうな」

わずかな含み笑いをしながらエンリが懐かしそうに少し上の方を向きながら、答えてくれる。

「そうね…でも、私の中で、状況が少しずつ変わっていったのは、ゴウン様からいただいた角笛を村のために…と思つて吹いた瞬間から…運命のいたずらが動き出してしまったんでしょ?」

エンリのどこか懐かしげな、でも複雑そうな声音にアルシエが心配そうに声をかける。

「なにが起こつたの?」

「最初はね…呼び出したゴ布林さん達が私のことを突然「姐さん」って言い出して、私の命令でなんでも動き出すようになって…、だんだん周りの村のみんなも私のことを村娘じゃなくて、ゴ布林を率いる「エンリの姐さん」って言う目で見えるようになって行くのにそう時間はかからなかったって感じね。」

「ああ…」と、今までのカルネ村でのことで心当たりのあるアルシエはなんとなく納得するも、他の3人は意味がまだ分かっていないようだった。

「それが、いつの間にか、「エンリの姐さん」から…「カルネ部族の族長、エンリ」ってなつて、気がついたら知らないうちに、周辺の大きな町や、小さな村、お隣の大森林の野良ゴ布林さんやオーガさん達

にまで「ゴブリンの大將軍」とか「血染めの女大將」、酷いものになると「血塗れエンリ」…、まあね…「村長」って立場を引き継いでからは「村長」っていう目で見られるのは仕方ないとしてもよ？ 「族長！」って呼ばれたり…そういうウワサでの好ましくない評判越しとかで見るんじゃないくて、ありのままの私っていう人間を見てくれたのは村の同世代ではンフィーだけだったしね。」

「やく、だからさっきのは危なかったら、ンフィーったら、私の居ない世の中…だなんて、もう…大げさなんだから…ふふ♪」

（ああ、あの時の顔がピクピクしてたのは、崩れそうな表情を必死に抑えていた？）

アルシエがそんなことを考えていると、横に居たメンバーの男2人が別のことに驚き始めた。

「え？　なんだそれ？　エンリさんってもしかして有名人だったりするの？」

「人は見かけによらないとはこういうコトの様ですね」

そこで、今の失言に気づいたエンリが慌てて否定する。

「そ…そうじゃないの！　それは私自身の功績とか、そういうんじゃないよ…その…その…いつの間にか広まっていた噂話がどんだん森の中やら、周辺の街やらですごい勢いで広まっていますね、先ほど言った剣士の方もその噂話で、ここに訪れて来たっていう経緯があるくらいなんですよ」

と…そこまで黙って聞いていたフレイラがまたもいきなり爆弾発言を投下してきた。

「まあ、エンリさんは遙か昔に…將軍職で戦場を駆ける偉丈夫だった時もあつたようですからね、今の「皆に慕われるリーダー」というのも、名声が広まる速度も…そのカリスマ性が手伝ったのかもしれないね」

「「は？」」 ↑ フォーサイト

「え?!」 ↑ エンリ

「…、え？」 ↑ ジエツト

「あ、すみません、口が滑りました、今のはどうか聞かなかったことに…。」

そう言いながら自分の顔の横、エンリの側に片手を上げ、話を打ち切ろうとするが、さすがにそれをそこで終わらせたくないのがエンリだ。

「いやいやいや、待って待って！ ちょっと待って！ なに？ フレイラさん何か知ってるの？ 私の最近のおかしな原因なにか知ってるなら教えて？ 気持ち悪いの…自分になにが起こってるのか全然心当たりがなくて…。」

「あの…私の見えてるのは断片的なもので、そこからのことは皆さんの「この土地で昔なにかあったのか」の知識におすがりするしかないのですが…私の話に心当たりがあるかどうか…第三者の視点から聞いてもらってもいいですか？ フォーサイトのみなさん。」

「ああ、そのくらいなら、まかせとけ！ って言いたいところだけど…オレらが知ってるのは今も残っている有名な話とか、神話とかおとぎ話で残ってる逸話くらいだぞ？」

「それでもかまいません…恐らく、国も関わっている内容が…含まれていると思いますので…。」

「「国?？」」

「え？ 国に…私が？ 將軍として?…。」

(どうやらエンリさんは混乱しているみたい…そうだと思う、いきなりそんな大きい話になったら、それはビックリするよね。)

「私が視えているのは、エンリさんの…、いえ、エンリさんとして生まれるより前、それよりも前に人として生まれ、生活していた、エンリさんの過去の魂です。」

「私として、生まれるより前？ それってどういう?。」

「つまり生まれ変わり、という物です、誰かが死んでも、その人が人と



して生まれ、人として死ぬまでにしておかねばならない課題を果たせなかつた場合、もう一度やり直すためのチャンスとして、今度はどんな性別、どこの親の子供として…生まれていくか…それが決められ、また今度はその魂が生きていたより未来の時代に、新しい人間として、魂の内に秘められた生き方、性格、趣味嗜好、などが引き継がれ、同じ魂でありながら、違う人間として、果たせなかつた課題を果たすため、生まれてくるのです。」

「それが…今の…私？」

「そういうことですね、今回はそのエンリさんの素になった、過去の魂、それを『前世』と表現するとしましょう。」

「…前世……………」

言葉を噛みしめるようにエンリさんが呟く。

「その前世でのエンリさんは、どうやら、とある国の中でもかなり重要な立場に居た將軍だったようです、しかもそこは分類としては恐らく魔法兵団、その將軍である自分以外の部下のほとんどが魔法詠唱者…信仰系や魔力系、森祭司など…種類は豊富でしたが、前衛と言える戦士系は全体の3分の1に満たなく、主に魔法での集団詠唱からの〈魔法位階上昇〉<sup>オーバーマジック</sup>を経ての魔法爆撃…戦士系の部下は詠唱中に邪魔が入らないように、の警備役だったようです。その爆撃が起きた後…そこから將軍の単騎駆け…それで常勝無敗を誇っていたようです。」

「あの…なんでその將軍…その時の私は魔法を使わなかつたんですか？」

「その將軍本人に「魔法の才」がなかつたようです、主に魔法をことその他重んじるお国柄だったようですね。魔法に対する憧憬が非常に強かつたようです。子供のころからずっと魔法の才がないことで肩身の狭い思いをしていたようですね。」

「え？ それなのに国お抱えの將軍になんてなれるんですか？」

「それが…前世の將軍さんは特殊な力をお持ちで…、周囲の敵の血を…返り血として浴びれば浴びる程、強い力…、攻撃力、防御力、速さに、攻撃するため武器を扱う技量、それに体力が尽きることもなかつ

たみたいですね、ライフも上昇していたのでしょうか、血を浴びることで回復がされていた可能性もありますが…とまあ、色々な面で爆発的に上がっていったようです。」

「兵卒や下士官だったころ、上官から、しんがり殿を任されるたびに、体中を血に染めながらも常に1人であろうと帰還していた彼を、誰もがいつのまにか「血塗れ」という通り名で呼ぶようになるほど、ある意味敵からも味方からも恐れられる存在に視えていますね。」

「あの…それでも、その方にもご家庭はあったとか？」

「いいえ、魔法の才もなく、単騎駆けを得意とする彼の戦い方はいつか命を落とす、と思われていたため誰からも縁談の話はなかったようですよ。」

「そんな…。」

「でも、その常勝無敗の將軍にも敗北をする時が訪れます。自国の魔法技術を逆手に取られ、戦地での情報伝達が正常に働かず、大混乱に陥った…みたいな感じでしょうか…？」

「ねえ…ヘツケラン、もしかして、その国つてさ…。」

「ああ、俺もチラつと心当たりが思い浮かんだ。」

「そうですね、あそこの国の名前は知らない人がいても、起こった惨事は今でも語り草ですからね…。」

ボソボソとエンリには聞こえないように言っているフォーサイトだが、元々が獣人種であるフレイラは、その言葉に気づいていたものの、ここはエンリへの説明の方を優先させ、事情は後で聞かせてもらおうと説明に戻る。

「あの…魔法の、なにかを失敗させられたんですか？」

魔法のことがよくわからないエンリは思いつく限りでなんとか考え付いたことを口に出す。

「いえ、残念ながらそうではありません…つまりは〈メッセージ伝言〉の悪用のようです。」

（「「「やっぱり…」」」）

「何かの魔法で、その將軍の声に似せる事が出来たか何かで…、軍全体

に響かせるほどの声を望んだ場所に展開できる（伝言）の効果が宿ったマジックアイテム、それをしきりに使う將軍の姿が視えます。」

「え？　どうなってるんです？　声が届いてないんですか？」

「それも違いますね、指示は届いているからこそ、混乱している師団の方々の様子がわかります…：どうやら同じ声の指示が次から次へと違う命令で届いていたようです、声の模写ができる魔法でも開発していたのかもしれませんが。」

「魔法の支援が得られないと判断した將軍は単騎で特攻を試みます、おそらく内側から正面突破できれば、状況は変えられると思ったのでしようね、今までの戦いで、一度も帰れなかったことはなく、負けたこともない、その自信も仇になりました。」

「え？　今度はなにがあつたんです？」

「数千の兵たちの全てが人肉の動像で構成された陣形だったのです。」  
「普通のゴーレムさんとはなにか違うんですか？」

「そうですね、普通のゴーレムは創ろうとすれば、材料費が膨大にかかります、1体作るだけでも…、それを数千も作るとなると魔力を注ぐ時間もそうですが、鉄ならゴーレム一体分の鉄を買い占める費用が必要にもなります、石なら石、木なら木を…、しかし人肉なら…：おそらくは將軍が殿として、味方を逃がしたり、彼自身の働きで勝利して戦場を離れた後、戦争が終わるたびに相手の国は犠牲になった戦死者を敵味方の犠牲を問わず…：残らず回収していたのでしようね。…その結果が実を結び、恐らくは数年はかけていたのでしよう…：比較的安価に数千体もの人肉の動像を用意できた感じのようです…：でも問題はその次にあります。」

「え？　そんなにその人肉の動像って言うのは強いんですか？」

「いえ、巨体のモノだったり、石や鉄のゴーレムからしたらそこまでの脅威ではありませんが…、彼の力の源、生きて帰れた原因は、「血を浴びれば」どこまでも強くなれるという特性があつたからこそです。」

…：しかし人肉の動像は人肉で構成されているとは言え、血は出ません、もちろんそうなれば返り血も浴びることは出来ず、自身が強化状態にならず、素の状態のまま、剣を振れば振るほど、疲労はたまって

いく。」

「勝ち続けて、斬り続け、展望が見えている中なら、そこまで疲労は感じない物です、しかし圧倒的な絶望を目にすると、人は今まで感じなかった疲労をいきなり感じるようになることもあるのです。」

「え？ではその將軍は…そこで？」

「そうではないようですね、フレッシュユ・ゴーレム人肉の動像の軍勢に自分の指揮官が飛び込んでいったことで、部下たちもこの乱れ飛んでくるメッセージへ伝言が、声こそ將軍そのままでも「これは別物だ」と、やっと偽物だと気づいたようで…、魔法により爆撃を開始したようです、なにしろ敵の中心で戦っている將軍にその余裕はないのにメッセージの指示がやまないのですから、おかしいと思うのは当然だったでしょうね…將軍の部下たちは中心に爆撃を落とすのではなく、周辺の外側に居るフレッシュユ・ゴーレム人肉の動像らを焼き尽くしたり、森祭司たちは土の精霊召喚などで対抗していましたが、さすがに魔力には限界があります。」

「魔法が撃てなくなった人たちは撤退しなかつたんですか？」

「將軍を置いていくなどできなかったのでしょう、高台に築いた陣を維持していたようですが…フレッシュユ・ゴーレム人肉の動像の軍勢に氣をとられていた部下たちは、迂回して背後から迫って来た別動隊の動きに気付かず…容易に背後からの急襲を受けてしまいます。前衛での守り役の戦士たちもいましたが多勢に無勢、さらに魔力が切れた魔法詠唱者という兵団、勝ち目はなかつたようです。」

「そうですか…、それであつけなく…。」

「そうですね…しかし將軍の窮地を救つたのは副官として常に將軍を支えてきた魔法詠唱者の女性、その彼女が、フライへ飛行で、高台から飛び立ち、將軍のいるフレッシュユ・ゴーレム人肉の動像の群れの中へと飛び込み、將軍を背後から抱きしめるとディメンションナルムーブへ次元の移動の連続使用で困いの外に転移、それからフライへ飛行による緊急脱出、そのまま副官と共に首都まで逃げ帰つたらしいですが…そこでまた悲劇に襲われます。」

「ええ？…まだ続くんですか？」

「首都は…炎の海でした…その国はいつも最前線で勝ち続けていた將軍が居れば…という状況に慣れきつてしまい、まったく警戒らしい警

戒をしてなかった様子…、それに將軍の部下たちを背後から襲ったのは二手に分かれた部隊の1つで、本体は、いち早く首都に攻め入っていたようです、あらかじめ偽の〈伝言〉メッセージで『將軍の圧倒的勝利、敵軍撃破』という報を知らされた首都は…抵抗らしい抵抗もできず…お祭り気分でした中、襲われ、国ごと消滅…、その副官と將軍は…失意のまま…各地を放浪し、名もない集落にたどり着き、ひっそりとその副官と二人で余生を過ごしたという感じらしいですね。」

「その將軍が…私…?」

「ええ、ちなみにその副官の女性魔法詠唱者は、今のンファイレアさん。マジックキャスター將軍と副官さんの間に出来た子供さんが、今のネムさん…ですね。」

「そうですか…それで、なんでそれが私の今の「変な力」に関係しているんでしょう…。」

「それは、將軍に副官、さらには部下、という条件がそろい、前世の状況に近い環境が整ってしまったせいで、エンリさんの中に眠っていた「魂の記憶」が呼び覚まされて行ったせいなのではないでしょうか?」

「そこまで聞いたエンリが諦めたようなつぶやきを漏らす。

「ということとは、この力は…無かった頃に戻りたいと思っても無駄なこと…:ですよね?」

悲観半分、自嘲気味半分のエンリにフレイラは「決して悪いことばかりではありませんよ?」と慰める。

「例えばフレイラさんは、どういう部分が救いだと思えます?」

ニコリと微笑んだフレイラが、ゆっくりと言い聞かせるように語り聞かせる。

「上官としての経験が出来るという事は、村長としての振る舞い方、考え方から、ひよつとすればこの村の発展についてもなにか役立つかもしれないよ?」

元気づけようと言ってくれてるのはわかるけど…と、どこか素直に喜べないエンリにさりげなく他のいい点についても挙げておく。

「そういう上官…というか、將軍としての魂が奥底にあったからこそ、

ンファイアさんも魂でそれを感じ、エンリさんが村のトップになった今でも、見る目を変えたりせず一人の女性として扱ってくれてるのでしょうか？ それで充分じゃありませんか？」

肩に手を置きポンポンとするフレイラに、決まってしまったのなら仕方ないか…と、お得意の切り替えの早さで思考を新しい認識に移行させるエンリ。

「そうよね…普通は、男よりも女が偉くなったりしたら…きっと嫉妬だったり、もつと偉くなって見返してやろう…って感じになりそうなものなのに、ンファイアってそういうのは無かった…今まで当り前に受け止めてたけど、それって当り前じゃないよね？」

感じたことをそのまま声にしてしまっているエンリに、フレイラも、同意の返答を返していた。

「そうですね、妻が村長で、夫が代理、だなんて、普通はあんな風に当り前に受け入れて納得できる男性はなかなかないものですよ？」

ンファイアさんは、あなたにとっての財産とも言えますね。」

そう断言されると、そうなのかもしれないと思ったエンリは改めて我が夫の大事さを一段アップさせる。

「でも、とりあえず、さっきの事はさっきの事として、帰ってきたらチクつと言わせてもらおう、謝ってくれたら、すぐに許しちゃうけど♪」  
「そうですね、そういうのもお互いの信頼関係が成り立ってないと、出来ない事ですからね、お二人の親密さがよく分かります、羨ましい限りです。」

（私も…そうなんだろうか…好きだから、モヤモヤして？…でも、この「好き」はどういう「好き」なんだろう…）

どうやらアルシェ自身の中で結論が出るのはまだまだ先の話になりそうである。



「という訳なんだけど、どうかな？お婆ちゃん」

カルネ村内に作られたポーシオン開発用の工房、兼住居、その中で祖母のレイジー・バレアレに、カルネ村に訪れた、ポーシオン作成に興味がある人物が、作り方を見せてもらいたいと言っているというコトを伝え、了承をもらおうとしていた。

「ふん、ポーシオン作成に興味があると言いながら、作成手順も知らない小娘にあたしや何も教えないからね？」

そんな風な事を言うレイジーだが、それもそうだろう、敢えて言うならばそれは社外秘と言ってもいい物。

同じような業種のポーシオン店でも、バレアレ店ほど出来のいい店はエ・ランテル内でもまず居ないと言っているほどだったのだ、カルネ村はポーシオンを作るための材料、薬草の種類が豊富なトブの大森林が近く、わざわざ毎回冒険者を雇って調達をしに来なくてもカルネ村の村長に従うゴブリン達の護衛を連れて、レンジャーのブリタさんにラッチモンさんのどちらか一方でも居れば、充分に元が取れるようになり、さらには大きな町では色々と販路の拡大などで出て回りながらの研究という（レイジーにとって）無駄な時間を省略できるようなになったのは喜ばしい事であり、そんな中、生涯をかけて作り上げて来た作成手順を「興味がある」というだけで、外部の者にホイホイ教える程、レイジーという人物は甘い人間ではない。

逆に言えば、そうでなければここまで店を大きくすることは出来なかっただろう、彼女自身、第3位階魔法を使えるようになるまで上り詰めた：そんな「たたき上げ」の努力の末、編み出した手順を親切に手取り足取り教えるつもりもなかったというのは無理からぬことだろう。

「でも…お婆あちゃん…。」

そう食い下がろうとする孫の言い分も分かる、まだ誰にも開発出来ない幻とも言えるポーシオンが作れるのならば、それは大きな発展にも寄与できるだろうという部分は理解できる。

だが、それならそれで、基礎程度の準備から器具の使い方、作成手順など、そういう道を志すならば…自己流でもいいから理解してから

言って欲しかった、という認識もリイジーにはある。

それに対して、まだ何も知らないからこそ、スポンジが水を吸収するように、大きな可能性が生まれるかもしれないという言い分があるのがンファイレアの認識であった。

同時に、変な知識を自己流で学んでいたら、その「自己流の知識」が邪魔をして、逆に遠回りになってしまいうのではないかという心配があるのがンファイレアの考えである。

「まあ、そこまで孫のお前が認めるなら、とりあえず、見せるだけ見せればいいさ、ただ、アタシのやり方は見せたりしないよ？ アタシヤゝアタシで、自分が試そうと思っていた今日の分の研究があるんだゝ、勝手に部屋にこもってやらせてもらうゝだから、ンファイレアやゝ、責任はあんたが持ちな？ 自分の中で教えられる程の御大層な知識だと思えるものがあるなら、それをアンタが教えりゃいいさ。」

妥協できる部分があるとしたら、ここまでだゝ、基礎的な作成手順、なにを材料にするか、それらはンファイレアでも教えられるだろう、そこから先を全部、人から教えられなきや作れない人物かゝ。

それとも基礎さえ覚えれば、後は勝手に自分で応用まで出来てしまう人物かゝ、それは追々判断して行けばいい、使えない者だったら、ポーシヨン職人なら誰でも知ってるような知識くらいは教えて、勝手に店でもなんでも自分の力だけで出来る道を見つければいいさ。そうリイジーは思っていた。

だからと言って、自分の研究する時間を犠牲にしてまで教えてやる義理はない。

彼女自身、別に冷たい人間ではないのだが、経営者として、譲れないものがあり、競争相手になりそうなら、自分の立場を揺るがすような可能性は潰しておきたい、そういう思惑もあった。

とことん、リアルストな面もある彼女のそれが孫を相手に譲ってやれる最大限の譲歩だった。

「ありがとう、おばあちゃん。」

孫の顔に笑顔が灯るゝホントに大丈夫だろうかゝ、リイジーは思う



…孫のンファイレアに限ってそこまで心配することはないだろうが  
…今の夫婦生活にヒビを入れることになりはしないか？

異性を相手にする時、ポーシヨンの事ばかりを教え込んで来たため、対人関係では意外に抜けていることがあることを心配していたが、カルネ村に来てやつと孫が持てた家庭という形、それが崩れたりしないようにと、リイジーはそのことも危惧していた…。

妻であるエンリ自身は、あのンファイレアが、素で女性を口説くなんて姿を想像できなかったため、周りの心配をよそに、のほほんと構えていた、全くそういう心配などしてなかったのである。



「さて…やつと着いた、まあ、ここまでゆっくり来てりや、もう見張りが見つけてくれてるだろうが…一応、声を掛けてみるか…」

そう言っただけでカルネ村の門の前まで来た一人の剣客、昨日の今日ですっかりカルネ村内ではウワサが行き渡ってしまったブレイン・アンブラウスだ。

本人は噂になろうがなるまいが別にそこはどうでもいいと思っていた、どっちにしろ、自分の力量が上がるのなら、そのための努力は惜しまない、どのような状況でもそれを利用し、自らの力で切り抜きたい。それが彼という人間の原動力だった。

「お〜い、もう見張りからは丸見えだろ？ 一応、昼にまた来るって伝えてあるんだが、あのお嬢ちゃんに伝えてくれないかな？」

下から見張り台を見上げ、その声を掛けると、やはり上からずっと見張られていたのだろう、すぐに声が返ってくる。

「わかった、朝に言っただけだろ？ ちょうど今、来客中なんだ、少しだけ待っててくれ？」

「ああ、頼む…そんで、とりあえず、俺が肩に担いでるコレ、見えるだろ？ この村に仲間入りさせてもらった新入りのオーガ達への差し入れだ、持って行ってくれないか？」

「ええ？ …それらかい？ そんな大ききの猪<sup>ポア</sup>を2匹も繋げて、1人

で背負うなんて酔狂なのアンタくらいしか見たことない、褒めたらいいんだか、呆れたらいいんだか……」

そう返答しながら、ちやうどお昼交代なのだろう、新しく来た2人を見張り台に残し、その場から2人、門番として下りて来てそれを受け取るも、さすがに戦士としての力量があるわけではないので、大人の男2人でやっと持ち運べる様子であったそれらを、軽々と渡すブレインと、よろつきながらも懸命に運ぼうとする大人2人の様子が対照的だった。

「よろしくなく？」

まだ村の中には入らない、そう約束した手前、肩に担いでいたモノは、彼らで運んでもらうしかないという仕方のない状況だが、さすがに荷が重かったか？と思うも、まあ、何とかするだろう、とヨタヨタ歩く見張り番たちを温かく見守るブレインはどこか気楽そうだった。

それはまだ自分が持ちかけた条件を聞き届けられるのは当分先のことだろうと思っていたからなのだが、実はそうでもないというコトには彼自身まったく思いもよらない展開だった。



「あ、やっと来たようですね、フレイラさん、今話していた人が、今……門の外に居るといふ彼なんです……、どうでしょう？　そんなことって可能なんですか？」

先程、どうしようか散々に悩んでいた話をンファイアレアの知恵を借り、フレイラに相談する、という選択肢を見出していたため、ンファイアレアがレイジーの承認をもらうための説得をしている間、その話をしていた。

(フレイラのそばにベルリバーも居る為、必然的にベルリバーもその事情を聞き、耳打ちでフレイラに返答の通訳をもらっている形になる。)

「そうですね……、さすがに約束を破ったら心臓が破裂……なんていう魔法はありませんが……「ある条件」を強制的に認めさせる呪い……という

のはあるらしいです、その条件を破ったら呪いが発動するという…約束を破らなければ「呪い」としての実害はないようですが…こつちに來てから試してはいないようですので…どういう形で作用するかわからないですよ？」

エンリからして見れば「あるんだ…本当に…」というある種、別世界のような次元の話だが、なんてことはないという風情で返答されてしまっはさすがに「そう…ですか…」としか言えなかつた…。

### 第35話 カルネ村のお昼どき―Ⅱ

「お？ やっと出て来てくれたな、エモットのお嬢さん。」

カルネ村の門を開け、中から出て来たエンリ・エモット…、目の前のブレインは「血塗れエンリ」という名称を噂話で知っているため、現状、彼の前では「エンリ」という名は使っていない。

それ故、ブレインの中では村から出て来た女の子が実は、ここの村長だということも知らない。

もちろんそれは村のみんなにも伝えてある、自分をうっかり村長だとか、「エンリ」だとか言わないようにと言いつつ含めてある…だから今もって、「エモットさん」という呼び方なのだ。

「お？ 今度は黒髪のお嬢さんかな？ この村はずいぶんと女性比率が多いのか？ ゴブリン以外で見たのは見張りの人らと、変な仮面の魔法詠唱者だけだったからな、村の中は見えてないから違うかもしれないがね。」

さりげなく世間話から村の話題へと繋げやすいように話を振ってくれる、元々、人間関係に支障のあるタイプではないようで、一度気さくな対応を始めればそこまで尊大というほどではなく、何となくの親しみやすさをエンリは感じ始めていた。

「ええ、初めましてブレインさん、お噂はかねがね…私はフレイラ・アル・アセンディア。どうぞフレイラとお呼びください。」

「ああ、俺は…名乗らなくても知ってるかもしれないが、名乗られた以上、こちら名乗らなくては失礼ってもんだ、こっちはブレイン・アングラウスだ。」

「それにしても…洗礼名までついてるのか？…それともただのミドルネームかな？ …まあ、詮索するのは性に合わないのね、そこはいさ、それじゃフレイラさんと呼ばせてもらおうかな？」

「ええ、どうぞ、お好きにお呼びください。」

ペコリと腰を軽く曲げ、会釈をする。しかし顔の向きはブレインから逸らしていない、微笑んでいるような表情だが油断はしていないと

いうコトか…とブレインは判断する。

「黒髪のお嬢さんも強そうだね。歩き方からも真ん中に芯が通ってるみたいで揺らいでない感じが一目でわかる…、おっとイケネ、今は戦いを挑もうとしている場合じゃなかったな…、で、どうだい？エモットさん、話は進んでるかい？」

「ええ、今のところは順調ですよ？ 先程このフレイラさんからお話を聞けまして、ブレインさんがこの前言われていたのとかかなり近い魔法に心当たりがあるそうです。」

「ホントかよ…こっちは本気の度合いをわかってほしかっただけで、本当にあんな無茶な魔法を知ってる人を連れて来てくれると思わなかったぞ。」

「……ということは、この村の仲間入りをするためなら我が身も顧みないとおっしゃっていた内容は「心にも思っていない」と…そういうことでしょうか？」

会釈から、背筋を伸ばした凛とした姿勢に角度を戻したフレイラがブレインに問いかける、どれだけ本気かの見定めを改めて自分の目で判断するためだ。

「いや？ オレは自分が強くなれる可能性があるなら、それがどんな状況でも自分だけの力で切り開きたい、自分の目標とする場所まではまだまだ遠いという自覚はある、だからこそ自分を磨くための努力は惜しまないつもりだ、エモットさんの大事なものはこの村にある…それは理解しているし、オレの大事にしているものは…自分の力量を高めてくれる環境ただ一つ、それさえ整えてくれれば…まあフレイラさんの言う魔法がどんな魔法だかは知らないが…、その魔法のせいで弱くなろうと、オレはまた自分の力で、元の力を取り戻し、さらにその上を目指すつもりだ。」

「そうですか、ブレインさんは勇敢なのですね、その精神を忘れなければ立派な武人となれるかもしれません。」

「世辞なんていいさ、それよりもその魔法とやら、どんなのなんだい？

大体の所を教えてもらえたらありがたいんだが？」

“「それには及ばない、それは私から答えるでしょう。」”

どこからともなくいきなり聞こえて来た重々しい男性の声、ブレインは聞き覚えのないその声に警戒の姿勢をとる。

「そう警戒しなくてもいいとも、今見えるように姿を現すから、緊張をほぐしてくれたまえ。」

その言葉と同時に、昨夜の出来事が思い出される、今ブレイン達の目の前に現れたのは…エモットとの腕試しで、色々と自分に交渉を申し出て来た、一見、魔法詠唱者に見えるが、しかしそうとは思えないくらいガタイのいい仮面の男(?)の姿だった。

「ブレインくんと言ったね、昨夜以来かな? ケガも無い様子で何よりだ。それで、その魔法の事なんだが…」

目の前の仮面の魔法詠唱者マジックキャスターが説明を始めようとしたところ、ブレインがそれを止める。

「ちよつと待った! あんたあの夜の人は別人だろう? 何もんだよ…?」

いきなり現れたゴウン様に驚いたエンリだが、なんとなくの違和感を覚える程度には「あれ?」という気分がぬぐえないエンリの中で、どこがどう…とまでは分からなかったが、目の前のブレインには目に見えて違う人だと分かるらしい、腰に佩いた刀に手を伸ばし、腰を落とすブレイン、一触即発の空気になるかとエンリが心配をしていた矢先、どこまでも軽やかな笑い声があるかとエンリが心配をしていた矢

「はっはっは、ああ、すまない、早くもバレーてしまったか…キミらを騙そうとしていたわけじゃないんだ、一応魔法を使う者つてことでそれっぽい姿になった方がいいと思って真似をしてみただけなんだがね…、ボクもまだまだってことみたいだ…でもどうだい? 見た目だけで装備品の効果は全く無いようなものだから…そんなに圧迫感を感じないだろう?」

「ああ、だから分かった、声も違う感じで別人みたいだし、あの夜に感じた…その身に着ける物から感じる圧力を全く感じなかったのも確信じみた印象をより強くしてくれたよ…。」

「そうか、声は真似をしようと思えば真似を出来たんだが…さすがに

装備品まで同じのを再現は出来ないからな…まあ、いいさ、キミらを騙そうというつもりは無くってね、自分が真似できる中で威厳のありそうな魔法詠唱者のイメージがこれしかなかったんだよ。まあアインズさんとは別人だというのは隠すつもりもなかったから、バレたのならバレたでかまわなかったんだ、しかし見事なまで見破られてしまったな、うんうん、ブレインくんは豪快そうな見た目にそぐわず、警戒心も高く、注意深い、この村の力になるようなら、アインズさんも喜ぶかもしれないな…。」

「あの…あなたはどちら様ですか？」

そうおずおずと聞いてきたのはエンリだ、それはそうだろう、村の恩人、救世主であるゴウン様が現れたと思ったら実は別人だという…ゴウン様を真似している…つまりはバレなければそのままゴウン様に「成りすまそうとしていた。」というコトのように思えたからだ。

もしそうならば…内心、返答次第では許しておけないという部分もあつたが…。

「いやいや、エン…モットくん、キミには一度、会つてははずだよ？この村で式を挙げた翌朝、アインズさんと一緒に居る所を見てるし、会つてるだろう？エルフと一緒に居た私だよ。」

「ええええ？ あの時の方ですか？ …あの、でも体格が…その…」

「ああ、すごいだろ？ ボクはね…変装の名人なのさ♪」

無邪気に明るい声を出しエツヘン！とでも言いたげなふんぞり返り方…これはもう…変装というレベルじゃないと思うんだけど…と思つてみると、エンリの中で確信じみた直感が芽生える。

(間違いない、このどこかずれた常識の持ち主、それを變だとも思つていないところ、この人は絶対にゴウンさまの身内、もしくはかなり近い人だ。) …と、そんな認識を新たにしていた。



「ところでよ、話の最中で悪いんだが、変装の名人さんよ、魔法の話つて事だつたと思うんだが、どんな内容なんだ？」

「ああ、濟まないね、それを話そうとしていたんだった、そうそう、その前にボクの名前はリバー・ベル：「ベル」って呼んでくれ」

「ああ、俺の名前は：「ああ、キミの名前は姿を消しながら聞いていたから大丈夫だよ、ブレインくん」

名乗ろうとした矢先、食い気味に「別に知ってるからいいよ」とでも言いたげな返答をもらってしまおうアングラウス。

「……そうか：それなら自己紹介もいらさないな：それにしてもいきなりブレインと言われるとは思わなかったよ。」

「そうか：そうだね、親しき仲にも礼儀ありというからね、さすがに初対面で、名前呼びは馴れ馴れしかったか：それじゃ、改めてよろしく頼むよ、アングラウス君。」

ヴェール像と、偽エルヤー像を知っている者らからすれば明らかに饒舌になっている感じがだが、彼も「偽エルヤー」としてエルヤーロールを気にせずにのびのびと会話が出来るのはかなり久しぶりなのだ。恐らく半分以上は、素の話し方に近くなっているのだろうと、腹の中のエルフ3名はただただ、状況を見守っていた。

そして、門の前で、エンリとフレイラ、その後ろに静かに門柱に寄りかかり、いざという時があれば……と待機しているゴブリン兵士2名。

そして、ブレインと対峙して、魔法内容を説明している、いきなり現れたベルという魔法詠唱者<sup>マジックキャスター</sup>。

エンリ自身は心のどこかで確信を得ているから警戒はかなり無くなってきたているが、どうやらゴブリン兵士の2人。

ライマツとパイポは、今も、油断しないようにと、ジリジリ動きながらエンリのそばまで来ようとしている。

(ゴブリンさん達はゴウン様に会ったのは式の当日の昼間だけだろうから、特に親近感とかないだろうし、私みたいにゴウン様になりすますって理由で怒るのも思えないよね……となると、やっぱり私の身の安全？……ってことなのかな?)

などとぼんやり思っていると「……とまあ、こんな感じだね、魔法の効果の方は分かってくれたかな？」という声が聞こえた。



どうやらアングラウスさんに魔法の説明は終わったみたい、私には魔法がどうのなんて、よくわからないから聞き流してしまった。

「今の話からすると、俺は誓わせられる必要が有るみたいだな…何を誓えばいい?」

真剣な眼差しでベルさんを見るアングラウスさん、それに返した回答はあっさりとしたものだった。

「いや、そんなに気負うことはないと思うよ? カルネ村を裏切らない、っていうのもいいと思うし…でもそれだと判断基準が難しいよね、どこからどこまでが「裏切った」という線引きで判断されるかわからないからある意味危ないし。」

「それだと…こういうのはどうだ? エモツト嬢ちゃんの指定した…又は指示以外で村の外に出た場合に発動…とかは。」

「あ、それはいいかもしれないね。でもそれだと魔法的に…例えば支配系の魔法、魅了、拘束系の魔法に…あとは意識を失わせるとかの効果を使われて、自分の意に反して村の外に出る事になった場合を除いて。って入れておくのは必要でしょ? 万一を考えてそこは必要じゃないかな?」

「そんな複雑な条件は有効なのか?」

「この魔法を使ったのはもう5年前くらい? いや、もつと前だったか…まあ、でも受け入れられなかったら、何も効果は起きないだろうし、そこはやり直して考えよう。」

「…魔法詠唱者マジック・キャスターなのに、意外と適当なんだな、あんた…。」

「まあ、そこら辺はこっちの国に来て初めて使う魔法だからね、何とも言えないのさ、国が違うだけで効果がまるつきり変わるとは思えないけど…、ちよつとした言い回しで変な結果に終わっても困るだろう?」

「ま、そりゃくな、俺自身の身体のことだし? 万全を期してくれるのはありがたいが…。」

「それに材料をそろえる必要もあるのはさつき言った通りだけど…、まずは確定なのはコウモリの羽根が一对、あとは、アングラウスさんが呪われの効果を発生させた時、どんなモノに変えさせられたい

か、って言うのもある程度考えておかないとね…なりたいモノの身体の一部が触媒として必要だから…。」

「その一部って言うのは何でもいいのか?」

「そうだね、例えば、毒ガエルに変えてやりたいって思ってるけど、相手にそれを悟らせたくない場合、カエルの耳腺あたりから分泌される体液や、毒液なんかをこっそりコウモリの羽根に染み込ませておくとかかな…、あとは、わざと相手が普段している行動…それも無意識でやっちゃうようなクセを指定して、相手が「一度なってみたいよな」って言ってた動物に変えてあげちゃうとか…って使い方もある。」

「おいおい…この魔法って一生ものなんじゃないのか? 一度呪われたら、解呪できないんだろ?」

「そんなこともないよ? 術者が心の中で「解呪条件」を指定しておけば、呪われた後でも「その条件」が整えば勝手に効果は消失することもある、って、説明文に書いてあったような気もするしな…、まあ、かけられたのが女性だったら王子様のキスで元に戻るとか、そんな定番なものから…、ヒキガエルに変えさせられた王子様が、清らかな乙女の口づけで呪いの解除っていうのも出来なくはない仕様になってたはず…うん、多分そうだったはず。」

(ユグドラシルでもアバター同士が顔を近づけるくらいは問題なかったはず、唇がついたかどうかは、発光エフェクトで隠されてたからBANはされなかったギリギリラインだったろうし…。)

ポカンと口を開けていたブレインが、苦笑したような顔になり、「どこの世界のおとぎ話だよ、そりゃ!」と、つつこみを入れている。

「とは言え、特に術者が指定しなかった、指定するのを忘れた場合、もしくはコウモリの羽根しか用意できなかった場合なんかの時は、自動的に最初に設定されている「ヒキガエル」になるからね。 それに対して同じ材料を揃えてから、「対抗呪文」を唱える必要がある。」

「あんたはその「対抗呪文」って使えるのか?」

「いや、ボクはそっちは覚えてない。」

「オイ!!」

「やく、問題ないって、「対抗呪文」の方はアインズさんが覚えてるか

ら、頼めば、戻りたい時は戻れるって…とは言え、ちゃんと「戻りたい」って意思表示が出来る生物になってる必要はあると思うけどね。」この「対抗呪文」というのは、ユグドラシルで開催されたイベント…新規加入勢を視野に入れての、難易度の低いストーリー形式、そして面の最後にでるボスを、そのイベントで得た魔法を使い（その魔法を中心に組み立てなければ勝てないようにになっていた。）倒すことで面クリをし、徐々に「そのイベント」で悩んで苦しんでいる。という設定のNPCを救っていく、という流れのものだった。

それは必ずしも呪う方でしか…というコトはなく、「対抗呪文」の方であっても一連の行動の中で組み入れておけば問題はなかった。

そのイベントで、一つの舞台をクリアするために、その舞台ごとクリアする条件として必須だった複数の魔法（1つのステージで1つが原則）があつたが、全員が覚えている必要はなく、パーティーメンバーの中で1人が覚えていればいい。

必然的に全員が全員、覚えたくもない魔法を覚えなくては…という無駄なデータを圧迫することにはならず、それぞれの状況に応じたイベント魔法を覚えていくことが出来た、ベルリバーが覚えたのが、契約、もしくは誓約を守らせるために本人の忌み嫌う、それにだけはなりたくない、という忌避感を利用して服従させるための物。

そしてギルド長であるモモンガが覚えたのが、それぞれのイベント魔法の効果を個別で打ち消せるよう「触媒」に同じものを使用することで「対抗」して呪いを解いてみせるものだ。

本来は、趣旨に沿って、嫌がる姿にするぞ？という脅しを持ち掛け、従わせるのが運営の用意したあるべき姿なのだろうが、彼、ベルリバー自身は全く違う使い方を良くしていた。

種別としては「呪い」になっているが、相手に喜んでもらうため、敢えて解呪条件を相手に知らせることで、ちゃんと元の姿に戻れるように…というある意味、変身願望を満たしてあげる為、という使い方がメインだったのだ…。

「さて、アングラウス君は何になりたい？ ずっと、滅ぼされない限り寿命もなく…でも無力な存在、って言う事ならスケルトンの骨、を材

料にすればいいし…」

「いやいや、さすがに冒険者に速攻で滅ぼされそうじゃないか？…そんなレベルのスケルトンにされたら武技も使えなそうだし…まず解呪される前に死ぬ…いや、滅ぼされるって言った方がいいのか？…なんだろう？」

「そうか…なら死者の大魔法使い…それか異形なる大魔法使いとか…いや、アングラウスさんは剣士だし…そうなるってデスナイト？とかかな？」

「おいおい、さつきから、なんでアンデッドにしようとしてるんだ？間違っても間違わなくても討伐の対象じゃねえかよ!!」

「ん？ ああ、いやいや、そのくらいの方が、「そんな姿になるくらいなら」って気持ちが悪くて、契約を破ろうとは思わないでしょ？ 都合じゃありません？」

（ホントは、NPCとか召喚モンスターとかみたいなの「レベルが完結」してる存在は、どんなに戦闘させてもレベルは上がらない…それならアングラウスさんをデスナイトにしたら…レベルは上がるかな？って言うのもあるし…デスナイトのレベルなら、武技も失ってないだろうし…でも自我の方はどうなるんだろう…こっちの世界だと…。っていうイレギュラーがどんな進歩を見せてくれるか…それとも何も変わらないのか…

でもそれが解決できるなら、「体はデスナイト！頭脳は人間、その名もブレイン・アングラウスデスナイト！」とか名乗れるようになるかもしれないよな…。なくって考えてるからなんだけどね…。)

「理屈からしたらそうだろうけどよ…ちよつとアンデッドから離れてくれねえ？」

「すみません、リバー様、私からも一つ案を申し上げてよろしいでしょうか？」

珍しくフレイラから率先して、乗り気な姿勢が言葉で表されている、これは何かいい案でもあるのか？

「ああ、いいぞ？…どんな内容か聞いてみたいな。」

「巨身ウサギなどはどうでしょう？」

「え？いきなり動物か…理由を聞いてもいいかな？」

「はい、ウサギという種は聞くところによると繁殖力が非常に旺盛らしく…性欲の塊、年中発情しているようで…しかもメスは身ごもっている最中も、さらに妊娠できるとも言います。」

「ん？なんか着眼点がおかしくないか？ …いや、まあ中断させてすまない、続きを聞かせてくれ…」

「それでは続きを…、アングラウスさんにはその姿になった時、目印になるものを身に着けていただき、群れのリーダーに…そして、ジャイアント・バニー巨身ウサギはゴ布林さんや、村のみんなで協力し飼育、そして繁殖を繰り返せば、オーガさん達への食糧問題も同時に解消できる妙案になるのではないかと…幸いカルネ村は平原で植物も育ちやすい…繁殖が危険レベルの…できればイネ科か、牧草と言った植物を村の外で育てれば、ジャイアント・バニー巨身ウサギのエサの心配も必要なく、日々、適度に間引きもできて、ちょうどいいのではないかと…。」

「ああ、それはいいかもしれないね、大きき的にも、オーガさんが食べる分には問題なさそうですね…そんな増えやすいなら…」

そうエンリが素晴らしい話を聞けたとばかりにフレイラ案に飛びついている時、冷静な声が二人の間を切り裂く。

「なあ、あんたらさ…本当に俺をすぐ元の姿に戻してくれる気…あるんだよな？…あるんだよな？ …な？」

少し気まずい雰囲気になってしまった3人であった。

とりあえず、結論はアングラウスさんに考えてもらって、夕暮れを過ぎ、夜になってからもう一度聞きに来る。ということで話は落ち着いた。

その間、彼は門柱の横、そびえたっている壁に背を預け、座り込みながら、ずっと「なににしようか…」と考えてるようだった。

ゆっくり考えてもらって差し支えない、こちらもコウモリの羽根をどこかで調達しなければいけない。とベルリバーも思っており、それなら昼間つから洞窟なんか探し回るよりも夜を待って、スキル

《誘引の色香》を使っておびき寄せた後、必要な分を材料としてストツクしておけばいいかな…と考えていた。



「おまたせ、フレイラさん、お婆ちゃんの許しは出たよ？とりあえずはボクが案内して、説明することになったから…よろしく。」

そう扉を開けてインフィーレアが飛び込んできたのは、ブレインとの会話を終えて、再びゴウン様姿のベルリバーが姿を消した直後だった。フォーサイトのみんなは食事を終え、カルネ村を見学して回っている。

「あ、もうお許しが出たのですか？ それは喜ばしい限りですね、よろしくお願いします。」

そう言っただけでインフィーレアさんの後を追おうとすると、エンリさんに服の裾をつままれる。

「どうかされましたか？」

後ろを振り向いてエンリさんの方を見ると心配そうに小声で忠告してくれる。

「フレイラさん、気を付けてね、あそこは…匂いだけは別の世界みたいな感じだから…しかも部屋の中はもつとすごいことになってるからね…。」

「ありがとうございます、気を付けておきましょう。」

そう短くお礼を言うと、インフィーレアに着いていく最中、ウインド・ヴォイス《風のささやき》を使用して、ベルリバーにも一応報告、「悪臭注意、だそうです、マスター。」

すると、透明となつて傍に着いて下さる我が主から返答がすぐに帰つて来た。

「お前のインフイニティ・ハヴァサック《無限の背負い袋》に、オーダーレス無臭の効果のポーションが入ってたろ？それを出して、数本使っていないぞ？」

（ネコ科で、犬科とは違い、そこまでの鋭敏嗅覚は無いとは言え、女の子だからな、匂いとかそこらへんがキツいのはツライだろう。）

「は……御身の思し召しのままに……」

「さて、着いたよ？ここが僕とお婆ちゃんが使ってるポーシヨン工房さ」

「これは……たしかにエンリさんがおっしゃることが理解できますね、すごい所です……。」

外から建物を見ているだけで独特の匂いが立ち込めている、これに残り香だというのだから、中に入ったらさぞや濃厚だろう。

「あの……ンファイアさんはここに……その……マスクもナシで？」

「ますく？……何のことかわかりませんが、いつも身につけてるのはこの服とエプロン姿なのは日常通りですよ？」

（この世界にはまだマスクが開発されていないのか……となるとニオイ自体には毒性はないみたいだ、毒に対する耐性を持っている自分でさえ、これが匂ってくるんだからな……さて、どうするか……自分はいいが、さすがに自分の娘にこの悪臭で長時間を過ごさせるのは……色々と考えてしまう……。）

（仕方ないな……1個しかないが、使い道も他にないし、アレをフレイラに使ってもらおう……多分効果を發揮してくれるはず……）

そう思い、ベルリバーは姿が見えないのをいいことに手を中空に突っ込み、無遠慮に、警戒することもなくごそごそと中をひっつかきまわし、かつて、アニメ好きだったギルメン……ちよつと厨二病っぽいポーズがふんだんに盛り込まれてた作品に熱を上げていた彼に「よかったらコレ……」と言われ、贈られた物を探し出す。

それは、「修行のマスク」と彼に作成時名づけられたもの、なんでマスクなのに修行なのか未だ自分にはわからないが……説明されていた時、波紋がどうの……修行する時に力を制限することで……とかなんとか……かつて大ブレイクしたという『ラゴンオール』の修行みたいなものだろうか……重い物を身に着け生活することで装備を外した際の能力値の向上を期待できるのか……そういう感覚に近いのだろうか……それ

でなんでマスクになるのか、答えは出ていないのだが…

見た目はゴツイ感じで、柔らかい布性ではなくガーゼっぽくもない、ただただ怪しい金属風のマスクだ…。

まあ、ユグドラシル製でガーゼにしたりとかすると世界観が…っていう意見もあつたんだらうな…。

アプレイザル・マジックアイテム

一応〈道具鑑定〉を発動して、効果を見ると説明文にも申し訳程度に「悪臭もシャツトアウト？」と書いてある…。

断言されていないところが少し不安だが…

実際はそのマスク、アインズが持っていたドレイの首輪の外装をしていたアレと原理は同じだが、呼吸の量を調節させることで、能力値のダウン数値が10%ダウンにまで減少率を抑えられる。その代わり、あまりに激しい運動量を課されると、疲労の消費率が格段にアップするという特性がある。

因みに魔法の詠唱は全く障害にはならないので魔法詠唱者には倒した敵の経験値がアップするという利点とステータスのダウンを天秤にかけてどっちが得か…という損と、得、どちらを優先するか、という基準でしか恩恵はないのだが…。

さらに毒性の空気で有名なナザリックの宝物殿…そこへと向かう途中にある「ブラッド・オブ・ヨルムンガンド」の猛毒効果内でもダメージ量を3分の1にまで減少させることが出来るという効果もある、それくらいなら「毒に対する完全耐性」を持っている方がいいだろうと思うのだが…選んだ種族的にそれを取得できない場合、アイテムで取得するか、わざわざ特殊条件を手間をかけて、自分の理想とするビルドから遠回りしてまで「毒に対する完全耐性」を身に着ける必要が有るか…？ それだけの労力を割くよりも…という葛藤もあつてのアイテムだった…らしい。

ベルリバー自身、そこらへんは特に意識してはいなかったが、二戦級で細々とプレイしていた彼はギルドメンバーからすればある意味救いであつた…。

それもギルド内でベルリバーよりも上に行けたか、まだそこにまで至っていないか…という基準として…特に悪い意味で言われた事は



無かったため、ベルリバー自身思う所はなかった、そのせいで一部のプレイヤーを除き、同じギルメンでも、罪滅ぼしの意味も含め、罪悪感、後ろめたい思い、などもあるが、単に可愛がられ体質だった彼は、よく色んな人から贈り物をされるのが日常であった。

そのため、自分で取得した、もしくはドロップさせた物は自分の判断1つで売りさばいたりも出来たが、人からもらった物は「その人の思い」が込められてるといふ感覚から、1つも売りに出すことは出来ない性格だった。

そう、それが例え、処分品扱いで「これやるよ。」程度の認識でももらったものだとしても…。

その、ある意味「防毒マスク」に見えなくもない外装のアイテムをフレイラに握らせる。

「あ…あの、これは…？」

思わず声に出してしまったフレイラだが、扉の鍵を開けることに意識が向いているウインド・ヴォイスンファイアはその声が届かなかったようだ。

〈風のささやき〉の効果時間はまだ続いているため、その効果を使い、返事を返す。

「それは仲間からももらった物で、悪臭を軽減させる効果があるらしい、自分はもう一つ持つてるから、フレイラも一緒に身に着けておくといい。」

（もちろん、フレイラに遠慮させないための方便だけだな…それ一個だけしか持ってないし…）

「ありがとうございます、大切にに使わせていただきます。」

そう言いながらそれを身に着けるフレイラ。

ベルリバーの感想は、何と言うか…大人しい清楚な和風女子が、そこだけパンクロックにしてるような…そんな微妙なミスマツチ感を覚えるが…実用的な面で仕方ないよな…とあきらめる。

「さあ…開きましたよ。フレイラさん、どうぞ…って、それが…ますく、という物ですか？」

「ええ、材質を表すものではなく、このように、鼻と口を覆う物、それで、口や鼻に悪い菌が入らないようにするために開発された物が「マ

スク」です。」

「キン…ですか…フレイラさんは博識ですね、今度そのキンという物についても教えてくださいますね？」

笑顔でそう言うンファイアの後に着いていくフレイラ、そしてフレイラに着いていくベルリバー。という隊列を組んで歩く三人パーティ（一人は透明だが…）みたいな構図になっており、扉をくぐる際、さりげなく匂い消しのポーションを一本、通路の中ほどに一本、さらには工房内部…実験室だろう場所にも一本という計3本をンファイアに見えないように振りまいて、空き瓶をこつそりしまい込んだ。

そこは薄暗い、という程ではないが、灯りが行き届いているというには少し心許ない。

光や、灯りの熱で、薬草成分の変質を抑えるためだろうか…それぞれの薬効成分が変わらないようにそれぞれの材料ごとに瓶に入られている。

フレイラ自身はまだマスクを装着中だ、匂いを消すためのポーションを振りまいたが、いかんせん、空気中の匂いは消せても、長い間、壁に染み込んだ匂いまではどうにもできなかつたようだ…さすがに見ている前で（瓶に入っているとは言え）薬草のある中、そこらの壁にポーションの液体をかけるのはマナー的にまずいだらうと、出来ないでいた。

「それぞれの瓶に名称などはないのですね…」

ふと漏らしたフレイラの言葉にンファイアが親切に説明を返してくれる。

「すみません、今までお婆ちゃんと二人での作業だったので、その必要がなかつたんですよ、お互いに素材になる材料の名前を言えば、何を持ってくればいいのかわかるので、必要性も無かつた…と言った方が近いでしょうか…」

と、申し訳なきように言うンファイアは、ご丁寧に端から端までの瓶の中に入っている素材を薬効成分から何から…応用に使う時に

は…とか別の材料と組み合わせると、こんな風に変質する…だとか、ベルリバーには聞いても分からない知識だが、フレイラなら理解できるだろう…と思っていた、そのために作成者<sup>フリベアー</sup>というクラスを持たせているのだから。

ふんふん、としきりに頷いているフレイラ。

その脳内では知識を教えてもらうたびに「learning:」「learning:」「learning:」と、響いている。

作成を得意とする「作成者」そのスキルはあらゆる意味があり、用意する、準備をする（させる）、調理する、作る、調剤する、調合するというモノの他にも心構えをする（させる）などの意味も含まれることから、それらの行動を効率的に行えるクラスである。

更にはILVのコックしか持たないフレイラが通常の料理もそれなりに作れるのは「作成者」の調理技能も多少加算されているという側面もある。

（レンジャーのように採取する能力までは備わっているか…甚だ疑問ではあるが…）

そういう面もあり、この世界に来て初めての薬草知識、それらを言われるたびにそのままを学んでいく。

ラーニングという「作成者」独自のスキル、それをふんだんに使い、説明に矛盾を感じる点が脳内でヒットすると、すぐにそれを疑問としてンファイレアに問いかける。

ンファイレアも自身のポジション知識をいくらか披露してもイヤな顔一つせず…しないどころか突っ込んで聞いてくれるフレイラに、説明のし甲斐を感じ、彼自身も知る限りの知識を披露する。

それは知らない者からすれば、ウンザリするほどの仕事内容への自慢にも聞こえるようなモノばかり、さらに専門用語まで遠慮なく使ってくるものだから、その専門用語も一緒にフレイラはラーニングで覚えてしまう、普通の人であれば理解が追い付かず、話をすること、説明を聞くこと自体を投げ出してしまうような情報量を吸収し、一度言えばすぐに覚えてしまう彼女を見直しているンファイレアは、フレイラにとって有意義な情報源として活用し甲斐のある相手、教えられた

内容はそのままどんどん吸収していく。

そして、説明を聞き終わる頃には、瓶の中にある薬草はそれぞれが目で見ただけで、瓶の上に付箋のようななにかが空中に浮かぶと浮かぶと浮かび、その名称が表示されて見えるようにまでなっていた。

もちろん、使うための器具、ビーカーのようなものからフラスコのようなもの、ユグドラシルでポーションを使う際に必要だった器具もその中に混ざっている。

それらもちろん、名称がプカプカと浮いて見える為、準備するのにかかる役立つ、

彼女からすれば、初めて聞くこの世界での薬草知識であるため、話し始めれば止まらない彼の、微に入り細に入る説明は、先入観すら持ち合わせないフレイラにはありがたいものだった。

すでにいくつかのポーションの作成手順は頭の中で「レシピ」として候補に挙げられているが、まだ実験もしていない為、どれだけの手間か、そして、それにどれだけの期間が必要か…

彼女には全くそこら辺の感覚は実感として身についていないのでわからない…。

そこで彼女が一つファイアリアに聞いたこと、「ここになにか書き留めるモノというのはありますか？」という問いだった。

ファイアリアが魔力の込められていない、店売りの物で購入した一般的な羊皮紙、それに羽根ペンにインクを用意してくれたため、それに一番上の候補にあがったレシピを書き写していく。

「あの…それは？」

そう問いかけるファイアリアを取り合えず放置して、書き終わるまで書き終えてからファイアリアに説明をする。

「とりあえず、私が今の説明を一通り聞いて、思いついたいくつかの配合例の1つです、可能な限りわかりやすく書いたつもりですが…よかったです試してみてください、すでに試されていたのであれば未熟者のお目汚しで申し訳ありませんが…。」

「でも、あの…これって、どこの国の言葉ですか？ …その文字が…読んだことないものばかりで…。」

「え？ …あ、そう…です、か…、すみません、私の国の文字をそのまま書いてしまいました…あの、〈言語読解<sup>リドランゲージ</sup>〉の魔法とかは？」

そう申し訳なさそうに頭を下げるフレイラにインフィーレアは、その名前に聞き覚えがあることを思い出す。

「ああ、その魔法なら、たしか似たような名前のを…お婆ちゃんが使えたはず…だったと…思う。」

「それならお婆さまに読んでもらってください、お力になれば嬉しいですが、もし御不用であれば、捨ててください。」

「あ…はい…」

(なんのポーションを作るための配合なんだろう…?)

「さて…と、それではインフィーレアさん、そろそろ行きましようか？」

「え？どこに…ですか？」

素で、何のことを言われているのかわからないインフィーレアが何のひねりもない返答を返すと…

「もしかして、お忘れですか？ エンリさんにお夕食の際にはちゃんとお戻りになると…そのように仰せだったので？」

「あああゝゝゝ!!!」

「お忘れだったんですね…、もう陽も傾いて、外は暗くなり始めてる時間ですよ？」

いたずらっぽく、くすくすと口元に手をやり笑うフレイラに対し「ごめん、お婆ちゃんに一言だけ言ってくる！」

そう言って駆けだすインフィーレアに苦笑交じりではあるが、「世話の焼ける子」という風な目が混じっていることには当の本人も分かっている感情であった。



工房の一角、とある一室の扉がガチャリと開く。

「さて…と、やっと行ったかい…ずいぶんと長い間居座っていたもんだが…ンファイレーアのおんなまくし立てる説明で、どこまでわかっているのやら…」

ンファイレーアと、孫が気に入ったという女が工房から消えてからしばらく…静寂が戻って来たその実験室にふらりと現れた人影…「部屋にこもる」、そう言っていたリイジーが扉を開け、その部屋から出てきてつぶやいた後、先ほどまで続いていた様子を思い出していた。

孫のンファイレーアに家庭を大事にするという認識が出来ていることは喜ばしいことだが…くれぐれも彼の父親母親のような道を歩んで欲しくないリイジーは特に「夕食までに帰りたい」という孫の言い分には難色は示さず、「ああ、いいよ、いいよ、いいよ」と、短く端的に呟き、送り出していたのだ。

さすがに扉の外でもあれだけ興奮して説明していれば孫の声が工房中に響き渡っているのでは？と思うほどに扉ごしにも何を言っているのかは伺えたからである。

それは、最初こそ聞き流していたが、時折孫の言葉に反応し、逆に説明の穴について質問をするという行動、そして成分から配合まで本当に理解しているかのような言葉に少しばかり興味を持ち始め、とりあえず、実験をしながら、聞くとはなしに孫の講習を聞いていた。

「さてさて、思いついた配合例だつて？ずいぶんなことしてくれるじゃないか…基礎知識を聞いたらくらいで思いつく程度の…」  
と言ったところで手が止まる。

たしかに今まで見たこともない文字だ、どんな規則性があつてこんな言語が完成されたのかわからないが…。

しかしポジション職人として、どんなことが書かれているのか…興味がある。

その内容が、取るに足らないにしろ、新しい配合例だったにしろ、自分に見ないという選択肢はないとばかりに、どんな文字でも、例え異国語でも亜人語でも読むことのできる魔法を唱え、それを読む…。

「…りや…」

そう一言だけ言うと、書いてあつた材料を一通りひつつかみ、リイ

ジーは元の部屋に移動し、扉を閉める動作ももどかしいらしく、荒々しい音を立てて扉を閉め、中にこもってしまった。



「こちらにも、あの星は明るく照り付けているのですね。」

そう感慨深く漏らす言葉はフレイラの本心であり、ある意味喜び…、自分が創造され、その真価を発揮することができる環境だったということが初めて理解できたからである。

「ああ、月ですか…キレイですよ、夜は特に映えて見える天体ですから…夕月も悪くはないですけど、やっぱり夜の方がきらめいて見えませぬ。」

（こちらでもあれば「月」という名前で通じるのですね…、会話が通じる以上、名称も翻訳されて伝わっている可能性もありますか…。）

心の中でそう思いながら、ンフィーレアの言葉に「そうですね。」と肯定の意を示すフレイラ、そうして歩いていると村の中なので、すぐにエンリの家にとどり着く。

「それではこれで…ンフィーレアさん、また明日の朝に時間があればお会いしましょう。」

エンリの家の扉の前にまで来たンフィーレアにそう告げて、フレイラはどこかへ行くこうとしていた。

「あ…あの…フレイラさん、どちらへ？」

急に居なくなるうとしていたフレイラを心配して呼び止める。

昼間の話の流れでは、この村に泊まるとも、空き家のどれかを使うかどうかなどの話もしていなかった筈だ、野宿でもするつもりなのだろうか？…と不安になったためだ。

くるりと振り向き、足のくるぶしまで隠れている裾の長い異国風の服を翻すような動きでンフィーレアの方へと振り向いたフレイラがふわりと微笑む。

「ああ…、もういい時間なので、村の外に出て、多分今も悩んでらっしゃる剣士さんの様子でも見に行こうかと思ひまして…それに新婚

の家に居座るほど凶々しくはないつもりですからね?」

「え…えと…それなら…この村の空き家でもどこかお貸ししましょうか? エンリにも伝えますので、さすがに夜の屋外は寒いでしょうし…。」

「大丈夫ですよ? お申し出はありますが、そのような事を帰宅早々切り出したりなどされてはまた、エンリさんのご様子が昼間のようになつたりはしませんか?」

「あ! …そうだ…まだ怒ってるかな…エンリ…どうしましょう…フレイラさん。」

ふふ…という笑みがつい出てしまったフレイラからすれば「もうエンリさんは怒ってなどいませんのに…」という気持ちはあるが、エンリの意志を尊重して、そこは敢えて言わないでおく。

「それならこれをどうぞ…」

横にいるベルリバーが、余りに余りまくってる〈無臭<sup>オーダーレス</sup>〉のポーションを2〜3本あげてみたらどうだ?との言葉をフレイラに語り掛けたため、創造主のお望みどおりに…とばかりに3本のポーションをファイレーアへと手渡す。

「あの…これは? 見たところ、無色透明の様ですが…?」

「それはどのような匂いも消せるポーションですよ、同様にいい香りも消してしまうので、使い方は考えた方がいいですが…エンリさんも女性です、時には自分の匂いが気になることもあるでしょう…それを1本お土産として差し上げてください、もちろん私からなどとは言ってはいけませんよ? あとの1本はファイレーアさん用、3本目は、現物保存用として…同じものが作れるように残しておいてくださいな。」

「これを…ですか? …まだ青いポーションしか作れていないというのに…出来るでしょうか…?」

「え? こちらでは赤いポーションは一般的ではないのですか?」

「はい…あ、あの…もしかして…フレイラさんもゴウン様と近い方だったのですか?」

思わず自分の口を手で覆ってしまう…。



どうしよう…どう返事をしよう、誤魔化そうか…それとも黙秘権でも…と思っていると、自らの主、ベルリバーから肩をポンポンとされ、背中に「OK」というサインが指でなぞられる。

そして耳元で小さく「だが内密にな…と言うのを付けてな？」と耳打ちされる。

「それは…」想像にお任せします…ですがそのことは軽々しく口にしてない方がいいですよ？」

と、優しく言い含めるに留めておいた。

ンファイレアにはなんとなくそれだけで、「何かの事情で今は…」という意味は伝わったようだ。

「はい、わかりました、それでは、これは僕からのお土産として…ってことでエンリに渡しますね？」

「くれぐれも、昼間のお詫びとして…それと、あの時はごめんね？」と言うのを忘れてはいけませんよ？」

笑顔でンファイレアに軽く指を突きつけるようにしたフレイラに「はい！」と返事をしてンファイレアは扉を開けようとし…。

「でも本当に、空き家の件はお世話しなくて大丈夫なんですか？」

そう言ってくれるンファイレアに、うなずきながら…

「ご心配なく、私のことは自分で何とでもできますから。」

とだけ言っつて、ンファイレアにおやすみの意味を込めて手を振ってドアをくぐるのを見守る…しばらく心配そうな目を向けられたが、意志が固いのが伝わったんだろう、扉を開けて家の中へと入っていく。

「ただいま、エンリ。」

そう言いながら家に入ったその姿を見届けると、安心して村の入口で頭を悩ませているだろう剣士の元に歩いて行くのだった。

### 第36話 夜ふけのカルネ村：そして森へ。

「そろそろお悩みは解消されましたか？」

日の暮れた薄闇の中、近づいて来た人影は二つ、例の仮面の魔法詠唱者マジックキャスターに変装したベルという男。

そして、フレイラと名乗る女性のペアだ。

「あんたら、今度は門も介さねえで外出かい？ 気ままなもんだな？」  
内心、ブレイン自身も驚いている、普通は門を開けて出てくるものだろうに、門も開けさせないで…ということは誰にも見られないでここまで来た。 ということだからだ。

「ボク達はこちらでもこのカルネ村では、それなりの待遇は受けてはいらるんだけどね…それは村長の存在が常に付き添ってくれているからこそ、村の中で不遇な扱いはされないと言うだけ…村長が共に居ない場合は相応に行動の制限もあり得るからね、自由にあっちこつちと出歩かれては、村長の立場も考えるとなかなか難しいのさ、だからこうして夜闇に紛れて会いに来た。 という訳だよ」

なんともない事のようにサラリと言つてのける「仮面の男」ベル。  
ブレインに説明したこともその通りなのだが、それならどうやって、という疑問は残るだろう。

魔法やアイテムなどを使えば全て解決することなので、彼らには見張りくらいはなんてことはないというだけなのだが…。

フレイラは自らの創造主より賜った装備、「影アーミー・オブ・シャドウの軍団」を装備して、適当な影に潜る…そして、影と繋がっている他の影に移動しながら、防壁の陰に移動…そのまま防壁の影つながりで、外まで進出。

見張り台からの死角に潜み、装備を外し、元の和装姿に戻る。

仮面の魔法詠唱者マジックキャスターに変装したベルは、透明化している状態で飛行を唱え、悠々と外に出、フレイラと合流した後、透明になっている状態を解除してカモフラージュを使って接近。

ブレインに話しかけたというカラクリだ。 もちろんブレインは多少相手が見えにくかろうと【領域】の効果でちゃんと相手の存在を捕捉していたので、特に支障はなかった。

「キミの武技の詳細はよくわからんが…ずいぶん応用範囲の広そうな技だね…、今、多分上にいる見張り台の2人は私達のことなど見えていないだろうに…それを驚きもせずシレっと受け答えをするのだから恐れ入るよ」

「今まで、戦士としての修行もそうだが…人から襲われないようにっていう気配察知の修行も怠らなかつたからな、姿が見えにくくなっていくくらいは障害にはならんよ、気配や圧迫感や、…存在感？ごと消されたらわからんがね…そういうアンタは本当は魔法詠唱者専門じゃないだろう？ 歩き方が戦士のソレだし…本気で動いたら、追い越されそうなくらいだとオレは踏んでるんだが？」

「お…歩き方からだけでわかつてしまったか、アングラウス君には驚かさねばなしだな…うん、魔法詠唱者と戦士系の両方取りで鍛えてきた方だからね…まあ、そのおかげで魔法はそこその所で止まってしまうんだが…」

「魔法を使えるかどうかって所までは戦士のオレじゃ何とも言えないが…そちらのお嬢さんも強そうだってことだけはよくわかるぜ？ ……ホントにこの村はビックリ箱かい？」

「いやいや…その評価は嬉しいが、この子に荒事は出来る事ならしてほしくないというのが正直なところだね…、何しろ今までずっと自分のわがままでほつたらかっしっぱなしだったからな…その分、長く一緒に居たいし居てやりたいと思う…できればケガもしてほしくはない…が、明日に迫ってるワーカーの仕事では彼女の力も借りなければ、アソコの主が本気になれば抵抗もむなしなものになるからね…、とは言え、自慢の娘だ…むぎむぎ、無抵抗で殺させはしないさ。」

そういつて傍に居たフレイラの頭に手を置いて優しくなでてやる…じつとしてされるがままになっているので、喜んでくれているのだろう…。

「あんた…その子の親だったのか…さすがにそりやく驚いた…」

「まあ、その分、この子に母親は居ない…だから自分がその分、愛情をかけてやらんと…そうしなければならんさ…。」

「マ…あ、イヤ…その、ベル…さま、その…母など必要ありません！

私にはアナタさえいればそれだけで充分でございます。そのような寂しいことはおっしゃらないでください。」

「そうか…すまないな…そのような言葉を言わせてしまって…キミを悲しませてしまうとは…父親失格だな……。」

「いいえ、いいえ、お傍にいて下さるだけで充分すぎるほどでございます。それに勝る幸せなどございません。」

真剣に見上げてくる娘の表情に、嬉しくも…なぜか少し悲しい気持ちになり再びなでてやる。 …それは片親になってしまったため、中学までは行かせてもらった物の、事業の失敗で中退せざるを得なかった自分…そして、母の為にそれからすぐに働かざるを得なかった自分の境遇と、どこか重ねてしまったせいかもしれない…。

「まあ、この村には、運がよければ今後もここに顔出せるようになるかもしれない、その時は娘共々、よろしくやってあげて欲しい。 …この私以上に、こっちの土地に来てまだ日が浅くてね、私も大概だが…この子も時折り世間知らずな所もある…大目に見てやって欲しい。」

「…いや、オレに言うのは違わないか? そういうのはここの村の村長さんに言った方がいいんじゃないか?」

「ああ…そうだね…そうだった、あはは…こんな感じで普段は抜けているところもあるのさ…でも、キミがこの村の仲間入りをすれば今の挨拶もムダにはならんだろう?」

「そうだった…その話で来てくれたんだったよな、すまない。オレが色々踏ん切りがつかなかったせいでこんな夜にまで足を運ばせてしまった。」

色々な土地を渡り歩き、「武」の追及の為なら、誰と戦おうと、敗れて己の屍をさらそうとかまわれないという生き様で今まで来た男が頭を下げた…それだけでもこの男の今の本気度は分かうというモノだ。

「かまわないよ…それで? なになりにりたいかは、決まったかい?」

「ああ…さんざん迷ったが、決めたよ…もしオレがその呪いで存在ごと別の生き物になるのだとしたら…オレは…「鷹」<sup>ホーク</sup>になりたい。」

堂々と…どこまでも雄々しく居られる…それに…。」

「…う、それはいいが、いいのか？キミは刀を振る…剣の道に生きるのが自分で定めた在り方なんだろう？」

「だからさ…自分の落ち度で、呪いを受けることになってしまいうなら…それは罰だ…、罰ならば自分の一番かけがえのない物を犠牲にして自分を戒める必要が有る…そういうものだろう？」

「まあ…そうだな…それはその通り…だな…。」

（呪いってというのはその魔法の「属性」であって、枷とするために課すワケじゃないんだが…そうか、アングラウスくんはそういう風に受け止めてしまったか…それなら…彼の望むようにしてやらないとな…）  
「それならば…少し失礼するよ…。」

そう言つてベルこと、ベルリバーはスキルを発動させ、限界ギリギリの範囲に広げた《誘引の色香》を発動させる。もちろん誘いこむのはコウモリだ…。

そうして、ブレインから少し離れた場所でただ黙つてじくつと立っている、村の裏手、森の方からコウモリが数体飛んでくる。

何の変哲もない…ただのコウモリだ、モンスターでも、ジャイアントバットでもない、ただのコウモリ…ベルリバーはすぐさまスキルを切り替え、コウモリが居る方向へ向けて《弱者の悲鳴》を弱めに当ててやる。

するとコウモリは一直線にベルリバーへと迫り…噛み付こうとする寸前に翼ごと、体の横から伸ばした手で左手と右手、同時に握り込む…状態異常を受けているため、手の中で暴れるコウモリを（睡眠）で眠らせ、すぐさま翼をむしり取る、2羽目？2体目？の方もとりあえずむしる…3体目はボクの防具にガジガジとかじりついているが、無害だし痛くもないから状態異常が解除されるまで放っておこう…。

娘の目の前で…必要だとは言え生々しいモノを見せてしまった、と反省しながら彼は体内にいる彼女たちに話しかける。

（ディーネ？ディーネ？まだ起きてるかい？ ヒマしてないかい？）

そうするとすぐさま返事が返つて来る

☒眠くなんてならないので全く眠つたりしていませんよ？ 大丈夫

夫です！それよりヒマです！すつごいヒマです…出番ですか？なにかお手伝いできることでも？☒

（ああ…今も見えてると思うが、このコウモリ2体に〈慈悲の雨〉…は消費が高くてもつたないか…それなら範囲型の〈軽症治療〉をかけたやつてくれないか？ 必要なこととは言え傷つけてしまった。）

☒はくいい！ わかりました！ ヴェールさんはやっぱり優しいですよねえ☒

（頼むよ、いつもありがとう）そう言う☒どういたしまして☒という軽やかな言葉が帰って来たと思うとすぐに効果はあらわれる。

コウモリたちを中心にして淡く光る円形の小さなドームが現れ、コウモリ2体を包み込む、しばらくそうしているとむしり取ったはずの翼が元へと戻り、傷が治ったことにより状態異常『暴乱』（狂戦士化より弱めの効果）の方も、解除され、パタパタと元の森へと帰っていく。

自分の防具に未だにかじりついているコウモリは…フレイラにお願いして☒エルダージャガー☒の種族特性スキル、《上位者の威圧》で、恐怖状態に陥れ、無抵抗になったところを森の方角へと投げ飛ばす。

（コウモリの羽根は一对で触媒としては充分だしな…二対目の方はアイテムボックスに仕舞っておこう。）

さて…と、言いながら、今度は別の作業へと移る、今度は…鷹か…、どうするか…おびき寄せるにしても…この近くにいるとは限らないしな…と考えていると…

「ベル様…これは私の愚案なのですが…僭越ながらよろしいでしょうか？」…とフレイラから声がかかる。

「ん？いいよ？ 何か思いついたのかい？」

そう問いかけると、少し表情に色が戻ったようになり、…そしてすぐ表情が引き締められる…そんなに気を張らなくてもいいのに…と親としては少し寂しく思う。

「よろしければ、ベル様ご自身で召喚されてはいかがでしょう？」

たしか自然の動物召喚、及び魔獣召喚系はお持ちのはずでは…？」

我が娘にそう言われて、そうだった…と思いつく、ムーンウルフ、コ

カトリスを呼んで以降、とんとご無沙汰だったからすっかり忘れてた。とは言えず、フレイラには感謝の言葉を返す。

「いや、いい意見だったよ、ありがとう、何を呼び出そうかと思っただけど、今の言葉で一応方向性は決まったよ、呼び出してみても、彼にどっちか選んでもらおう。」

〈第一位階自然の獣召喚〉 『ブラック・コンドル』

〈第一位階自然の獣召喚〉 『冠 熊 鷹』

ブレインは目を見張る、今呼び出されたのが、どちらも勇壮で：気高い生き様を感じられたためだ。

呼び出されたのは2羽。

どちらも強そうな、それでいて驕り高ぶっていきそうな雰囲気はどこにもない、堂々としたものだった。

全体的に黒い姿の方はその名の通り、「ブラック・コンドル」というらしい、首から上は羽に覆われておらず、地肌が丸見えな感じだが、それでも足以外は全部まっ黒、これは闇夜での警戒が容易そうだ。

対して、もう一羽はもつと力強い印象を受ける、どうやら「カンムリクマタカ」というらしい。

意味は：王位に相応しい巨鷹：という意味だそうだ。

黒い方は両翼を広げると2mと少しくらいだろうか：、ベルという男が言うには、この鳥は、主に掃除屋としての側面が強く、獣などの死骸や：捨てられている果物、まれに小動物も狩ったりするらしい。人間の住処の近くだとゴミをあさることもあるようだ。

(こいつは序盤の方で装備もままならない程の強さの時に出てくるモンスターでLV3、そんなに強くないけれど、ゾンビとかと出てくるとちよつと厄介さが上がる：死肉をついばむ性質通り、ゾンビの5HP分をスキル《屍肉喰い》で奪うと、最大HPの上限を10だけアップさせ、最大HPの上限がアップしてから30ポイントのライフを回復させるといふ特性を持っていた、単独なら怖くなかったんだけどな。)

対して、「王位なる巨鷹」の方は、ベルリバーのリアルの世界でも、

昔は存在していた鳥だったという話は聞いたことがある。自分が暮らしていたような大気まで汚染された時代ではなく、もつとみんなが平穩に過ごせていた時代に実際に存在していたようだ：ユグドラシルを遊んでいた時代にはもう見なく：というより絶滅しちゃったんだけどね：、その話はさておき、その鳥が生きていた頃は、翼を広げた時は2 m程だが、それを補って余りある鉤爪で、20 k gを超える：時には30 k g以上の獲物をも掴んだまま、舞い上がり巣に持ち帰ることもできたらしい。

そして時には、木にしがみつくなのが得意な中型の獣でも引きはがしてしまうほどのどう猛さ、攻撃性を持つという：、樹の上、その安全な場所での待ち伏せではなく、獲物を探すように飛び回り、狩る時は低く飛び、それを見て逃げる者たちの中からはぐれた一体に襲いかかるといふ：縄張りには、巣を作る森の中だが、時には森の外に出て襲うこともあったようだ。

そう両者の鳥について説明していると、ブレイン：彼の目がギラついたので分かる。

おそらく気に入った方が彼の中で決まったのだろう。

声を掛けてみると、彼が最も気に入ったのは、その体が1 mにも満たない身長、そして体重も、3 k g強く6 k g前後くらいだということ：にも関わらず、自分よりも大型の種を獲物にするというその生き様、ごみを漁るよりもずっとオレに合ってるような気がする。という返答をベルに告げると、選んだ方の鳥に指をさす。

「こつちの、黒くない方で頼む！」

「わかった、クラウンド・ホークイーグル冠 熊 鷹の方だな：」

そう決めると、ブラックコンドルの方に指示を出す。

「そこの大森林に行つて、腐敗前の新鮮な屍肉をついばんで来い！好きになだけ：な。」

そう言うのと嬉しそうにトブの大森林へと飛び去って行く。

（とは言えアソコは、オーガが居るからな：死骸でも普通にかじりついているだろうし：運よく見つけても食い残しかも知れないがな：探している内に効果時間が切れて、還つて行くだろう。）



そう思いながらも、クラウンド・ホークイーグル冠 熊 鷹を自らの腕に止まらせる、幻で見せないようにしているが、今となつては標準装備として、普段から身につけているハーキュリーズヘラクレスのガンレットをしているため、爪の食い込みによるダメージは皆無だ。それでも、「I s t」で呼べる者たちの中でもLV9というまあ、トップクラスに属するモンスターだった。

自然界に属する生き物では強い方だろう…まだLVが低いため、筋力低上昇や飛行速度の上昇などは持つてもスキルや魔法は使えない…まあ序盤に出るモンスターだったからそれも仕方ないだろう…。

こいつの一番の攻撃は初期装備の相手に爪を食い込ませ、上空に舞い上げてから、地面に叩き落とすという攻撃方法もあった、アレは〈飛行〉や〈浮遊〉が無ければ序盤のHPではかなり致命的な状況に陥りやすい攻撃手段だったよな…。

などと思いつつも、羽根の一枚をもらい受ける。

「よし、これで準備は完了だ…、待たせたね、アングラウスくん。」

「いや、元々はヒキガエルになる呪いなんだろう？それをオレのことを考えて好きなものを選ばせてくれたんだ、それを待つのに嫌な思いなどしないさ。」

では…始めるか…、それでは…ええ…と、たしか専用の詠唱が必要だったよな…（その専用の詠唱がパスワード代わりだったから、直接言葉にする必要はあるだろう。）

そこでおもむろに懐に手を入れると、手慣れたもので、懐の中でアイテムボックスをまさぐり、お目当ての物を探し出す。

「百科事典…か、これを出すのもいつぶりだろう…たしか…あつたあつた、こんな長い…まあいいか。言ってみよう。」

エンサイクロペディア百科事典を片手に持ち、ページを開いたまま、目でその文章を追い、手の平にコウモリの羽根一対、そしてクラウンド・ホークイーグル冠 熊 鷹の尾羽根を乗せたまま、合言葉を言葉に出していく。

「キー・オーブス・プラタ・ロー・蝙蝠の羽より来たれ、夜魔の王我が爪に宿り、契約の効力となれ！」

一言一句間違えずに丁寧に言い終わると、手の平に乗っていた触媒が次第に燻りながら小さくなり始め、それらの収束したものが手の平から、人差し指の爪の方へと移動する。

そうするとじゅくじゅくとした音と共に、爪から毒々しい触手のような：爪の先から枝分かれし始める枝先のような何かが、どこか不安を抱いてしまうような何とも言えぬ青さを際立たせ：深い深い蒼に染まった時、ベルリバーの中に、新しい情報が流れ込んでくる：これがこの世界で初めてこの呪いの魔法が現実として発動させた効果となつたのだろう。

「すまないね、アングラウス君、ボクもこの土地に来て：初めてこの魔法を使った結果、頭に流れ込んできた新しい効果があつてね、これをキミに伝えておかないと色々とフェアじゃない：そう思ったから伝えようと思う。」

「なんだ？ また新しい報告かい？」

ジユクジユクとまだ少し枝分かれした部分が揺れる様子を見ながら、ブレインがその内容を聞く。

「この魔法を受けた場合、今の私の指と同じ：つまり受けた方の手、その人差し指の爪に青い色がつく：そして、その爪が青い間、服従を誓った存在に対し、翻意を覚えたり逆らったりした時、またはその爪ごと切り離したり、生爪をはがそうとしたりすればその爪は青から紫、そして、そこから段々赤へと変化していく。」

そこで一度言葉を区切り、ブレインがそこまでを理解したかを見てとると、説明を再開させる。

「最後に赤から真紅へと染まり切った時、キミの身体は変貌し始め、キミが先程選んだモノへと変わっていく：そこまでが今新しくボクの中に流れ込んできた情報だ、それでもいいかい？」

（ユグドラシルでは『生爪をはがす』なんて行動の選択肢は無かったからな：それも当たり前だが…）

「ああ：男に二言はない！」

「そうか：それなら、どちらの手でもいい：人差し指を出してくれな

いか？」

「ああ…頼む…。」

その短いやり取りで覚悟を決めたようで、お互いがお互いの指先を触れ合わせる。

するとあれだけ毒々しいとも言える雰囲気は爪の先が、ブレイン・アングラウスの爪に宿り、左手の人差し指の爪がまるで水の色のように青く染まっていた。

「おめでとう、アングラウス君、これでキミはこのカルネ村の住人になれる資格をとりあえずは得られたようだよ」

「とりあえず？　まだ何かあるってかい？」

「いいや？　それはボクの口から言う事じゃないだろう？」

「どういふことだ？」

「アングラウス君…キミの忠誠…いや、その呪いを発動する条件として思い浮かべたのは誰だい？　この村長さんかい？　それともエモツトちゃんかな？」

「もちろん、あのエモツト嬢ちゃんだ。」

「そうか…ならばここの村長に会ってから、この村に入っているいかどうか聞くといい、それでもダメならまだまだこの村に入るには時期が早い…というコトなんだろうからね。」

「ああ、そうか…そうだな、そういうことなんだろうな…わかった、了解だ。」

「そうと分かれば、村長の旦那に連絡だ。」

ブレインは一瞬、その言い方に違和感を覚える…『村長の旦那』という言葉にだ…普通なら『村長』でいいのではないだろうか…？

それをわざわざ、なんで「旦那」とまでつける必要が…？

とも考えるが…、まあ別に呼び方なんて言うのは人それぞれだ、ただ単にベルという人物が、「○○の旦那！」っていう風に相手を呼ぶクセでもあるのだろうと納得して、魔法で村長を呼び出しているらしいベルをただ静かに見ていた。（自分の事に関しては「旦那などと呼ばられる年齢でもないからな…」と一人勝手に結論付けていた。）



「どうしたの？、エンリ…夕食も終わって早々、こんな夜も更けた時間に外に出るなんて…」

「事情は後で話すわ…夕食も後片付けも終えた時間なんだから、ゆっくりと説明はするからさ、その前に門の外に用があるのよんフィ。」

門の内側から声が聞こえて来た、昼間であればそんな声も門の外からだし、人々の生活の音、ガヤつきでかき消されそうなものだが…夜のこの時間、そんな喧騒もない、遠くからの声で、そう大きくはないが、耳に届いていた。しかし気になる名前、自分がこの村に来た最大の理由、それがやつとこの耳で聞こえてきたが、半信半疑であった。

聞こえた声の数は二つ。

その声は男性の声が一つと、聞きなれた女性の声の一つ  
それだけでなんとなく誰が来たかは分かった。

しかし、それ以外の声は聞こえない…黙して着いてきているのだろうか…それとも、気配でも殺しているのか…と、いぶかしむも、所詮、防壁の外と内、【領域】の範囲外ではどの道、気配すらわからない…門が開くまでネタバラシもおあずけと言ったところだな…

(しかし今遠かったが、エンリと聞こえなかったか？ 聞き間違えかも知れないが…)

そう思っていると、見張り台の者が見つけたのだろう、その門を開ける準備に入り、重々しく門がゆつくりと開かれた。

「やあ、こんばんは、いい月夜だね。」

目の前の男、仮面の男がそう言って声を掛ける。

「あ…どうも…ベルさんこんばんは。 いい月ですね。」

「あ…ゴウン様…え？エンリ？ ベルって？…え？」

「は？ エンリ？…え？誰がだ？どいつだ？！」

たった一人で落ち着いているエンリ。

事情が全くわからない2人の男、その内の1人、村から門まで来た方…ンフィーレアは目の前の存在を「村の救世主」かと思いい声を掛け

たら自らの妻は違う名を呼びかける、その混乱で、剣士の前で言っちゃダメ、と口酸っぱく言われていたにも関わらず、つい名前を呼んでしまうくらい驚いていた。

しかし驚いていたのはブレインも同様だ、今までこの村で雰囲気だけは存在を確認できていたが、実際にその名を自分の耳で聞いたのは初めてであったブレインは、腕組みして静かに立っていた姿勢から、思いつきり目を剥いて声のした方を勢いよく向き、凝視してしまっていた。

「あー…ンファイ、ブレインさんの前で言ったらダメだって言っただじゃないの…もう…でも、いいです…ベルさん、もう儀式の方は済んだようですね。」

「ああー バツチリだ！」

ベルリバーこと、魔法詠唱者のベルは、片目をつぶり、右手を挙げ、拳を握ったポーズで親指を立てる。

エンリもそれは始めて見るポーズだったが「うまく行った。」又は「成功ー」というイイ方の意味だと受け取り、エンリからもそれと全く同じポーズを返す、片目はつぶっていない、仮面ごしでは片目をつぶってもそれが見えていなかったからだ。

置いていかれてる男性2名は、エンリの下に詰め寄って事情を求め

る。  
「ねえ…どういいうこと？ねえ？ゴウン様じゃないの？ ベルって誰？ねえ？」

「エモットの嬢ちゃん、どこだよ、まさか姿を消してるなんてことないよな？エンリはどこだ？」

「落ちついてくださいみなさん、順番に説明しますから…」

2人の前でムネの前辺りに両手を挙げ2人の方に手の平をみせながら…つまりは「落ちついて、落ち着いて」のゼスチャーである、それを一拍の呼吸を置き、順番に語りだす。

「ンファイ？…こちらはゴウン様のお知り合い…？ いえ…お友達と言った方がいいかしら？…のベルさん。…あ、ベルさん、こっちは私の夫で村長代理、そしてポーション職人のンファイレアです。」

「ああ、お噂はかねがね…（本当は透明化して名前も顔も知っているけど、こつちの存在はインフィーレア君自身には見せてなかったからな、メッセージ〈伝言〉の魔法もお互いの存在と名前を知らないとこの世界では繋がらないらしいから…急な変更で、エンリにしてみました…まあこの程度の混乱なら、エンリちゃんなら問題なく収められるだろう…）ちなみに私はベル…と名乗っている。一応は魔法詠唱者だ…本名ではないがそこは勘弁してほしい。」

「ああ…そう…でしたか…それにしても瓜二つです…ね…。」

「まあ、彼のことは尊敬しているからね、魔法詠唱者の純粋な実力としては彼の足元にも及ばないよ…、ま、私は剣の道も同時に歩んでいたからね、どっちも極められなかった…程度の男さ。」

それをジト目で見ていたブレイン・アングラウスはベルにツツコミを入れる。

「あんたの実力でそれを言ったら、オレにしてみりや嫌味にしか聞こえないぞ？」

「ああ、すまない、そんなことはないんだが…しかし覚えておくといい、この世界には例え自分は強い…と自負していても上には上が居るということ…をな…。」

「まあ…そこは、骨身に染みちやいるんだが…目の前のアンタよりも上の…つてのが想像も出来ねえんだよ。」

軽く肩をすくめるようにして「それは『ありがとう…』と言った方がいいのかな？」

「いらんさ…ただのグチだ…聞き流してくれ…。」

その一連の会話で3人の男性に落ち着きに戻って来たのを見て取ったエンリはブレインの前に来て初めて、正式な自己紹介をする。

「どうも、ブレイン・アングラウスさん…今までは失礼な態度もしてしまいました…ですが…どうやら御高名な剣士様でいらつしやったようですね…こちらに移住希望者として仮住まいしているワーカーの方々から「戦士であれば誰もが名前を知らぬ者などいない」程の方だと伺いました。…私は『エンリ・エモット』…この村の村長であり、ゴブリンやオーガさん達視点では『カルネ部族の族長』、そして、ご存知の

通り、巷のウワサの根源、ゴブリンの大將軍、血塗れエンリとは、私のことです。」

そう一気に言い切ると、会釈した姿勢から顔を上げ、ゆったりとした微笑みをたたえ、ブレインに優しく声を掛ける。

「ようこそ、カルネ村へ。あなたを歓迎します、ブレイン・アングラウスさん。」



「落ちつきましたか？ …ブレインさん…？」

「ああ…ありがとう…見苦しい姿を見せてすまなかった…。」

あの自己紹介を受けて、ブレインはずっこけたのだ、というよりも腰を抜かした…というより脱力の余り、ヒザから力が抜けてしまった…と言った方が近いかな…。

その直後、立ち上がるのももどかしく、「まで…ちよつと待て！」と言いながら、片手で顔を覆いつつ、反対の手の平をエンリに見せ、自分の頭の整理をまず優先した。

あの夜のことを思い出す。

アインズ…またはゴウン様と、カルネ村の者らからもそう言われていた方の仮面の魔法詠唱者マジックキャスターはこう言っていた。

確か、「この者はゴブリンの大將軍、それに最も近しい人物」だと…。だからブレインは最後まで埋められないパズルのピースを探すようにエンリと名乗ったエモットに質問をする。

「あんたは、エンリの側近じゃなかったのか？」

「いいえ？ ゴウン様は敢えてウソでもなく真実でもない…、一番アタタに納得してもらいやすい立場の者として、紹介をしてくれたんですよ…あの夜のブレインさんに「私がエンリです。」って言って信じましたか？」

「ああ…そうか…そうだな、あの夜のオレじゃ…まず信じずに、その言葉を斬って捨てちまっただだろ…その上で本物を出せ！とでも

言い出しかねなかっただろう。」

「そういうことです、とりあえず、この村を勝手に飛び出して内情をあつちこつちに吹聴して回る心配がなくなったのなら、あなたはもうカルネ村の一員です。さ…どうぞ中へ。」

そう言つて、ブレインの手を取ると、女の子の力とは思えない程の力強さで立ち上がらせてもらった。

「なるほど…ウワサもあながち……つてことか…。」

「え？なんですか？」

柔らかな微笑みで小首をかしげている、あの夜の彼女とは明らかに別人のようだ…、あの時のオレは運が悪かったな、まさかこんな子の…文字通り『逆鱗』に触れてしまうとは…

自嘲気味に「ふ…」とブレインも笑みを見せると

「なんでもないさ…それじゃ、お邪魔させてもらうとするかな？」

「どうぞ、もうここはブレインさんを迎え入れる準備は整っていますから…門番さん？鐘を…一つずつ…お願いします。」

「ああ、了解だ。 集めるだけだな？」

そう言つと、大きく…しかしゆっくりと村中にその音を響かせる…。カン…と鳴らすと、しばらく置いてまたカン…、そして、再びまたカン…その間は恐らく5秒ほどか…それを途切らせることなく、響かせていた。

「あれは？」

「ブレインさんは「敵襲」の時の音しか聞かせてないですもんね。 敵襲の時は急いで、そして村のみんなに分かりやすく3度鐘を鳴らし、2〜3秒置いてまた3度の鐘…その繰り返しで「急いで避難」戦闘要員は緊急対応。 という意味を知らせる合図だったんです、そこはもちろんお分かりですよね？」

「ああ、それは大体どこの村でもそうだからな…だが1つつて言うのは初めてお目にかかる。」

「あれは、急いで行動することは無いですが、村のみんなにお知らせすることがあるので、みなさん集まってください。の合図です。」

「どこに集まるんだ？」



「ああ、それなら村の広場です。今、私たちが向かっているところなので、ご案内します。」

そう言って、ブレインを連れて、ンフィーレア、ベルにフレイラ。そして先頭にエンリ。というメンバーで歩く。

すると、遠くから人の姿がちらほらと見え始めた。

「村長さん…エンリ村長さん？　ボクはそろそろ姿を隠すよ、自分が姿を見せたままだと余計な説明まで必要だろうし…エンリちゃんも大変だろう。　ボクもちよつと野暮用がある、この後、少しだけこの村から姿を消すが…、夜のうちに戻って来られると思う。その時は…、まあ勝手に村に入らせてもらうよ…いいかな？」

そう言いつつ、懐からトラップ機構付き宝箱を取り出し、中からギルドの指輪を取り出す、そして、フレイラにも声を掛け「一緒に見せよう…いくぞ？」とだけ伝ええると、要点だけしか言っていないのに、彼女もちゃんと理解してくれたようだ…賢い子で助かるな…と思いきり親バカになっていた。

「エンリちゃんにはもうバレてしまっているようだからな、隠してても始まらないし、とりあえず知っておいてもらった方がいいと判断したよ」

と言い、フレイラは首から下げたネックレス、そしてベルからは指輪の宝石部分を見せられた。

もう細かい説明はいらなかった、エンリもフレイラと同じネックレスをアインズから借り受けているのだから…見た瞬間、その意味を理解する。

「わかりました、いつでもお出で下さい、カルネ村はお二人の訪れをいつでもお待ちしております。」

「ああ、ありがとう…、ちなみにアングラウスくん、キミはこの後、村民たちへの自己紹介が終わったら、フォーサイトの男性側の仮住まいに行ってみるといい、みんなきつと快く受け入れてくれるだろう。」

そこまで言って、村長の頭越しはまずいか…と思ひ、確認だけ取る形で村長に顔を向ける。

「そんな感じでも大丈夫かな？　村長さん？」

そう声を掛けると、言いたいことは分かっているのか、ただそれもいいか、と思っているのかわからない表情を見せながら、静かに言葉を返してきた。

「そうですね、似たようなお仕事の人たち同士、話は合うかもしれませんからね。」

「ありがとう、それじゃ行ってくるよ、エンリちゃん。」

そう言うのと、すでにもう言い慣れているのか間髪入れずにこう返される。

「行つてらっしゃい、またのお出でをお待ちしています。」

にこやかに手を振りながら見守ってくれる彼女：もうすつかり奥さんの雰囲気が身についてしまつてるな…という感想を抱きながら、少し距離をとるように歩き出す。

「なあ、フレイラ、フォーサイトの2人が泊まっている家にはシャドーデーモンを配置してあるんだらう?」

「はい、そこに関しては抜かりなく。」

「うんうん、上々だ。」

そう言いながら、彼女の頭に手を置き、ポンポンと優しく褒めてやる。おとなしくしてくれているので喜んでくれているのならこちらもありがたいな、なんて思つていつつも…。

今もベルリバーの肩に止まっているクラウンド・ホークイーグル冠熊鷹に指示を出し、シャドーデーモンが潜んでいる家の屋根に居ろ。と命令を下して、行動に移させる。

これでひとまずは完了だな。

そう意識を切り替えると、グツとフレイラの肩を抱き寄せる…そのままベルリバーはグレートテレポーションへ上位転移を発動させ、カルネ村から姿を消した。



☒ヴェールさん、ここって私たちの家ですよね?　なんか用事でもありましたっけ?☒

そう問いかけてきたのはセピアだ…彼女にしてはおとなしく、ずっとお腹の中でくつろいでるようで、特にこれと言って騒がしく感じた事はなかったが、ボクの中で安心してきているのだろうと思うようにしていた。

一度、自分の建てた家の前に来ると、外見をエルヤーの似姿へと変える。

「ああ、この家を撤去しようと思ってね、これを元の大きさに戻したら、カルネ村の隣に置かせてもらおうかなと…そう思うんだが、みんなはどうだろう？あそこは森も近いし、木の建物だし、過ごすのに居づらいということはないと思うんだけど…？」

☒ヴェールさんがそうされたいのであれば私たちの方は問題ありませんよ？☒

体内からの声でそう返してきたのはルチルだ。

「今のはボクの意見を通したいって意味じゃなくて、キミら3人の意見としてはあそこで過ぐすことに抵抗は無いかい？つてことが聞きたかったんだけどな…。」

☒その点なら大丈夫ですよ？ヴェールさん、森の匂いがそばにありますし、木製の物や家なんかに囲まれたあの村は私たち、嫌いではありませんから☒

「そうか…それなら、すぐに撤去だな。」

そう言ってへ新緑の隠れ家<sup>グリーン・シックレットハウス</sup>を回収に入ろうと手を伸ばした時、何かの音が聞こえた。

それは気に掛けるほどでもないか？とも思ったが先程から、定期的…というか、ある程度の時間を置いて…と言った方が近いような気がする…弱々しい音がずっと近くから聞こえて来ていた。

☒どうかしましたか？ ヴェールさん？☒

「いや…さっきから何かの音がずっと聞こえていてね…気にはなってたんだけど、どうも人為的な音じゃないかって気が…」

☒私達もそれは気になってました、何の音かな？とは思ってました

けど…☒

「ちよつと確認してみよう」

そつちに意識を向けると、弱々しくどこかから石が放物線を描いてこちらに向かつて…足元どころか、はるか手前で落ちる。

そしてしばらく見てるとまた石…気にする程でもな小さい石、それが先程よりももつと手前で…カサリ、という音を立てて、葉っぱに落ちる。

「何だと思う？みんな…これって森の自然現象じゃないだろう？」

☒そうですね…声も出せず、助けを求めて…つていう感じのような気もするのですが…☒

「ちよつと気になるよね…少し様子を見てみよう、フレイラももし傷ついて死にそうな人でもいた場合は頼んだよ？」

「はい…マスター、御身の御心のままに…。」

「あ、それに戻っちゃうのね…まあ、人目がない時はいいけど…ほどほどにね？」

「?? 程々に…という意味が図りかねますが…了解しました。」

そうして、最初に見た時の石、そして二度目に見た石を直線で結ぶようなイメージで見ると、その直線状の先を直指して進む。

しばらくと言うほどの距離もいかず、すぐにその存在は居た。

ちようど、自分がこの世界で目覚めた洞窟前の廃墟、それを作るため、周辺の樹を伐採したがために出来たぽっかりとした平地のスペース、その境界の外。

木がそこから先にずっと続くエリアのギリギリ辺りで前のめりに倒れている、見た感じ…人型に見えなくはないが、印象としてはミノムシのような感じ…木の枝や、葉っぱ、土、芝…そう言った諸々の物で構成された着ぐるみ…そういうものを着たコスプレ人間？と見間違えそうになるが、その者は、身動き一つできず、唯一動かせる腕を緩慢に持ち上げ、手近にあった石を…ポテ…と投げる。

今度は長い距離を進むこともなくポトリと落ちた。

☒ヴェールさん、この子、樹精靈種ドレイアードです、こんな弱ってるのを見たことは初めてですけど…以前私たちの住んでた森で何度か見かけたことがあります。☒

森祭司ドレイドのルチルが教えてくれる。

その言葉を受け、その子をそつと抱えてあげると、少し地面から身体を浮かすようにして、顔を空へと向け、話しかける。

「大丈夫か？おい！誰にやられた？気をしっかり持て、今治療してやるからな…PKでもされたのか？」

ベルリバーがそう樹精靈種ドレイアードに声をかけるとその者は目らしき部分をゆつくりと開く…とはいえ、半分くらいしか開けられず、そこまで力が出せなくなってきたようなようだ。

「キミ…は、だ…れ？ あそこの…家の…ひと？」

どうやら目が見えていないのか、空を見上げたまま、こちらに目が見えられないまま話しかけてくる。

「ああ…そうだ、誰だ？誰かに…襲われたのか？」

「懐かしいな…さっきの言葉…あの人達にも…そう言われたコトが…あつたなあ…」「ぴーけー」…か、久し…ぶりに…聞いた、よ…。(この子…プレイヤーの情報を知っている?)

「まつただよ…、ずっと…やつと、あえた…ね…お話し…したく…ても…でも…もう…ダメ、か…な…最後に…声だけ、でも…聴けて…うれし…かつ…た…よ。」

「オイ！オイ！しっかりしろ！ルチル！樹の精霊を癒す魔法か何かないか？」

☒この子は、外へ活動に出るための操り人形みたいな感じなので、この子ではなく、本体の樹の方を癒しませんと…☒

「オイ！オイ！まだ気を失うな！お前の樹を教えてくれ！すぐに治療しに行つてやる。」

そう言うと、抱きかかえていた腕からざく…という音と共に、枯れ葉、枝、土、腐葉、諸々のものになったそれらの塊が土に落ちる。

それと同時に、一枚の葉っぱがふよふよと宙に浮かび、先端ではな

く茎の部分で先を示すように、風に吹かれるでもなくひとりでに動き出す。

あ：そうだ：助けを呼ぼう！ たしか、アインズさんも夜通し語り合った夜に「ナザリツク農地拡大、農作物資金化計画」っていうのに着手してるって言ってたし：なにより畑仕事に精通していて、植物の状態や生育具合、できれば一目で元気があるか病気か、わかる者でも居れば欲しい：とかって言ってたからな：ドレイアード樹精霊種ならその条件にあてはまるだろう。 メシも食わないし排泄物も出さないし：エコだよなエコ！

ベルリバーはそう考えを巡らすと、宙に浮かんで少しずつ進む葉っぱを追いかけながら、こめかみに指を持っていき魔法を発動させる。

「アインズさん！ 緊急要請です！ プレイヤーの情報を持っているらしい存在を発見、保護しています：しかし虫の息、今にも死にそうです。対象はドレイアード樹精霊種！ 可能であればマールレをお願いします。」

### 第37話 森での騒動…そしてお持ち帰り

|||||ここはナザリック地下大墳墓|||||

今日も執務室で毎日のノルマ…いや、ナザリック運営のためのあらゆることを優先順位の高い物から順に処理していく。

しかし、リアルでは小卒してすぐ社会に出て、営業職一本でやってきたかつての鈴木 悟…今やアインズと名乗っている彼には荷が重いものも多々含まれている。

軽くその書類を見て、「うん、これはアルベド案件だ。」とか「これはデミウルゴスだな…」とか「こういうった難しい計算はアイツに任せよう」など、有能なNPC達に殆どは割り振っていた。

アインズに忠誠を誓っているNPC達は、絶対なる支配者、あらゆる事象を見通し、自分らがもたらす結果以上の成果を出し、常にそれを驕るどころか、「この程度のことなど、大したことはしていない」と言う智謀の主、謀略の支配者、その御手から直接仕事を任されるといふコトはNPC冥利に尽きるとばかりに、不審に思うこともなく割り振られる仕事を…やりがいがあればあるほど燃えてくれるNPCには「こういう時は助かるな」と思いながら、自分に回って来た分の書類だけでも片づけていく。

そんな中、ふ…と考えが他の思考に逸れ、傍に控えているアルベドへと支配者は問いかける。

「そう言えばアルベド、いよいよ明日に期日が迫っているナザリックへの誘い込みプラン… 金貨の消費発動に頼らぬ罫での撃退「安心、節約返り討ち計画」“の方はどうだ?”」

「は…ご安心を、防衛時における作戦指揮官であるデミウルゴスとのすり合わせを重ね、ご来客の皆様にはご満足いただける仕上がりにして御覧に入れるべく調整中ですが、いよいよ大詰め、ほとんどの配置は終了しております。」

「そうか…楽しみにしている…こちらの世界ではどの程度の罫ならば見破られやすく、どの罫であれば有効か…そういった内容も含めて検討したいからな…くれぐれも金貨の消費はカットして全て構築して

あるのだろうか？」

「問題ありません、全ては御身のお望みのままに…恐怖公への転移や、第六階層への転移などは任意での転移に切り替え、シャルティアの〈転移門〉と連動させることにより、魔力の消費による発動にして金貨による消費は起こらないようにしております。」

「うむ…ならばいい…転移の罫が一番心配であったが、魔力依存で発動できるように設定できるのならば…そちらで運用することも今後には視野に入れておくべきかもしれないな…。」

（しかしシャルティアが〈転移門〉を持つてから連動させることが出来たのか、その魔法を覚えてなくても魔力さえ引き金に出来れば金貨の消費がされずに発動可能なのか…それも検証が必要かもな。）

そこで新たに、以前着手したまま、経過観察状態で放置されていた案件を思い出す。

「そう言えば、資金といえばアルベド…例の件はどうなっている？生育の方は順調か？第六階層ならば問題はないかと判断して、あのままにはしておいたが…光の問題や水質、土の栄養などはどう解決しているんだ？」

それはアインズがいつかギルドとしての維持費を使い切ってしまう未来を危惧しての打開策、エクステンジボックスを使い、ナザリックで生み出した食料や、穀物、稲などのもろもろをつつこんで金貨に変えてしまおうという、現在模索中の計画のことだ。

「そのことですがアインズ様、光の方は第六階層の光量で充分かと…、それから土…水質共にマールレの魔法がありますので、そちらで問題はありません…ですが、実は畏れながら、生育の方は…停滞しており、成果らしき報告が出来ない状態でございます。」

「何故だ？土も水も光も問題ないのだろうか？それならばどこで支障が出ているのだ？」

「それが…、大変申し上げにくいのですが…御手により創造していただいたスケルトンたちの…その…。」

アルベドは言いにくいようで、顔を伏せながら下げた両手をぎゅつと握りしめ、なかなか言い出せずにいる。



「アルベドよ…あのスケルトンは農作業用に…と作ったものだ、それ以上でも以下でもない…それに関して「私が創ったから」という特別な意味合いを持たせる必要はない。そいつらがどうしたというのだ…？」

「は…それでは…申し上げます、不敬とは重々に理解しておりますが、御手により作られた存在にこのような言い方をするをお許しください。」

「ああ、言われずとも罰も与えんし、咎めもしないとも…正直なところを聞かせて欲しい、何が問題だった？」

「それでは…あのスケルトンらは耕すことに関しては問題ありませんでした…ですが、こちらから指示を出さなければ作物の不調にも気づけない点…、さらに口頭で伝えても微妙な力加減、または手心を加えると云った認識の欠如。…そして一番の問題だったのは…。」

「遠慮はいらん、忌憚なき意見を聞きたい。お前が感じたことをそのまま発言することを許そう。」

「ありがたき幸せ、その慈悲深さに感謝いたします…、その…土をかける時の…量や、形を整える時の力加減、その調節が全くできず…種子の段階で芽吹かせることも難しいことが原因となっております。」

その言葉を聞き、アインズは大きくため息をつく、吐息は出ないのであくまでもポーズとしてだが…。

「そうか…ならばマールレの魔法で成長を促してみてはどうだ？」

「それも試しましたが、それもうまく行かず…ムリに魔法で勢いを付けようとしても、その効果に作物自体が耐えられず…」

「ああ…そうか、わかりやすく言えば、まだ成長しきっていない、体が出来上がっていない、もしくは赤ん坊のままの存在に魔法で全力疾走を要求するようなものというコトか？ 与えられた効果に自身が耐えられず、無理を強いられた結果、最悪の状態になったと…。」

「はい…申し訳ありません、恐れながらその通りにございます。」

「そうか…それならば、今後はスケルトンによる農作業の効率化は望めそうにもないな…、となると、そっちのことに詳しい何者かの力を借りねばならんだろうが…マールレの魔法では効果が強すぎる…とはいえアウラでは森には詳しくても、植物の育成にかけてはどの程度その力を割くことが出来るかが問題か…守護者としての役目もあるし、付きつきりで植物の世話ばかりをしている訳にも行くまい…。」

「は…まさにその通りでございます。現在私の方でも目下、探している最中ではございますが…」

そこまでアルベドが告げている最中、アインズの脳内に聞きなれたコール音が響く、これは…と思いつき、アルベドには手を挙げ、手の平を見せ、「少し待て…。」のポーズで伝えたまま、こめかみに手を当て、その連絡を受ける。

「ああ…わたし」

「アインズさん！ 緊急要請です！ プレイヤーの情報を持っているらしい存在を発見、保護しています…しかし虫の息、今にも死にそうです。対象は樹精霊種！ 可能であればマールレをお願いします。」

「しだ…、急いでいるようだが…何がどうなっているのだ？ プレイヤーの情報を知っているかもしれない存在を保護しているのだと？ それは確かに情報源としては欲しいが…たしかにそのまま死なせてしまうのはもったいないか…」

（あの時の陽光聖典の者たちはアンデッドの媒介に使っちゃったしな…隊長の方は質問に答えさせてたら死んでしまったし、死者の大魔法使いに創り替えられないくらい爆散してしまっただしな…：そいつから聞けなかったプレイヤーの情報があんなら…：助ける価値はあるか…）

「仕方あるまい…その樹精霊種とやら、助ければ農作業や、ガーデニング、田畑の面倒などを見てもらうにはちよūd良さそうな人材かもしれんからな…この目で見させてもらおうこととしよう。」

そう言うのと、メッセージ〈伝言〉を切断させ、要望されたマーレ：そして護衛として申し分のない実力者を1人、連れて行くことで不承不承ながらもアルベドは首を縦に振った。

本日のアインズ当番であるトウワイシィに指示を出し、他の一般メイドにその2名を呼び出すようにと指示を出し執務室まで呼び出してもらう：そして、3人が揃ってから指定の場所、「トブの大森林」まで転移するための準備をし、それを終えたアインズは…

「行ってくるよ、アルベド：なるべく早く帰る。」との支配者の言葉に「行つてらっしゃいませ、お早いおかえりをお待ち申し上げております。」と、アルベド。

アインズはその言葉を受け、リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンギルドの指輪を彼女に預け、ゲート〈転移門〉をくぐっていった。



「どうしよう…どうすれば…このままだとボクはマーレと鉢合わせしちゃうじゃないか…イヤ、呼び出したのは自分だけどき…。」

「あの…マスター、守護者の方々とお会いするのはなにかマズいのですか?」

「あ…そうか、キミには話していなかったね、アインズさんとの約束でね、墳墓調査に赴いた後、守護者の面々とちよつとした手合わせをする予定なんだよ、それで、一通り終わったら「実は…」って正体を明かして驚かせてやろうっていうサプライズを仕掛ける手筈になってるんだ、だから今、身バレするのはマズイんだよ…。」

「そういう事情でしたか…それならば…私も装いを変えた方がいいですね。」

フレイラはそう言うのと早着替えの効果で、ローブを羽織る。

「ん…それで誤魔化せるかはわからないけど、しないよりはマシかもしれないな…、でもフレイはそう言えばソリユシャンとセバスには顔を見せていたはずだな? いや、正確に言うとも目元だけ…だったか。」

「はい…仰せの通り、誘拐騒ぎの折り、お二方には屋根の上でご挨拶は済ませております。」

「うん…ならば、フレイ！、ここに来るマーレとの対応はキミに頼んだ！」

がしつとフレイラの肩に両手を置いて、指示を出す…自分は隠れているから…という旨もちゃんと伝えるのは忘れない。

「ですが…あの、また透明に？」

心配そうにフレイラが問いかける、心配はもつともだろう、現地人たちなら、誤魔化せても、守護者クラスに通じるとは思えないという認識は間違っていない。

(マーレならドルイドだし、取得魔法の中に〈センスオーラ霊光感知〉でも持つてそうだ…、生体から出る微弱な光…それを見るための魔法でも使われたら、レンジャーを持っていないマーレにすら見破られてしまう可能性が大きい。)

どうするか…と悩んでいると、今度はベルリバーの方に〈メッセージ伝言〉が届く。

『私だ…今トブの大森林に到着したところだが、目印を打ち上げてくれないか？ さすがにこの森の中を探し回るのは時間がかかってしまうからな…よろしく頼んだぞ。』

「ああ、来ちゃったよ…、アインズさんまで一緒みたいだから、イザって時はフォローしてくれると思うけど…」

「仕方ないか…フレイ！ ボクは一発魔法を打ち上げるから、その後は頼んだよ。」

そう告げると、すでに会話をしながら本体まで到着した葉っぱは樹木の中に吸い込まれていた…どうやらあの葉っぱは半実体だったようだ、その樹の近くで魔法を打ち上げようと決める。

覚悟を決めたベルリバーはいくつかの魔法強化をかける。

上空にまでよく見えるようにと〈魔法距離延長化〉を付加させた魔

法を発動させた。

〈プロウアップ・フレア吹き上がる熱波〉

通常の戦闘で使えば、対象だけに炎属性のダメージを与え、他の対象に延焼などしない限定的な効果が期待できる魔法…広範囲に被害を及ぼしたくない時に有効な魔法だ。

もちろん、この樹々の中、打ち上げる対象は「空」だ、それ以外に燃え広がる心配をしなくていいのは助かる。

魔法が発生し、上空に打ち上げられ、どの樹よりも高く「延長」された熱波は森の外にまで見えていた…。

そして現実として、森の入口に〈飛行〉で飛び上がったアインズ、アインズに抱えられたマール、そして「キ」を使うことによつて空を飛ぶことも可能である〈舞空旋〉というスキルを使ってアインズに追隨するセバスの3人にもその熱波は見えていた、その場所までそんなに時間もかからずに到着するには充分な時間、吹き上がっている。

魔法を打ち上げながらベルリバーはフレイラに問いかける。

「フレイ…キミはジャガー種だから、木登りはできるよな？」

「あ、はい…問題なく…。」

「ネコ科だから、跳躍も軽々と出来るよな？」

「それは…ハイ、その通りでございます、マスター。」

「なら、さすがに休眠状態に入ってる樹精霊種の樹を踏みつけるのは気が引けるからな、その隣の樹木の天辺てっぺんに立ってアインズさん達に合流してくれ、事情の説明等は全部任せた！」

「あの…マスターはどうされるのですか？」

「ボクか…？ そうだな…ボクは「樹木」になる！ 木を隠すなら森の中！ ここは森だ…なら何の問題もない！」

そう言うや否や、手ごろなポジションまで歩いて行くと、〈擬態Ⅲ〉を発動させ、見た目だけではなく身体構造、細胞に至るまで、そっくりそのまま、この森の中の木と変わらない状態に、変化させる。

（擬態Ⅲ：体組織、身体構造など全てを「実体として変化したい」（自然の動植物のみの）擬態対象そのままになる）

ただの樹となったベルリバーは、もうすっかり森の一部になっている、もちろん心まで樹になってしまったら、取り返しがつかないので

心は本来のまままで、いつでも元に戻るよう外部の状況を認識できる機能は維持している。

よもや、至高なる41人の1人がまさかこんな大胆な隠れ方を披露しているとは思われないだろうという意識の元、樹としてそこにあり続けた。



「あそこです、アインズ様…あの木の上で誰かが手を振っているようです」

「ああ、あそこか、なるほど緑の風景の中で黒装束にくすんだ茶色のローブか…たしかに目立っているようだな」

「あの方ですか、またもやこのような場所でお会いすることになるうとは、私とはご縁があるようですね。」

マールが木の上に立っている存在を目に留め、アインズに報告すると同時に、遠くに居るはずのその存在を見たセバスがその存在を知っているという話をする。

しかしマールにとっては初対面だ。

「あ…あの…セバスさんは、あの方を…その、ご存知なんですか？」

「ええ、先日、一度ソリュシヤンと共に会いまして、ご挨拶はさせていただきますいております、わがナザリックの新しい仲間、アインズ様のもとで働く同志です。」

「えええ？…あの…アインズ様…そうなんですか？」

「ああ、皆にはまだ顔合わせも紹介もしてないからな…マールが知らないのも無理はない、事情があつてな、今のところは全員に紹介するわけには行かないのだ…あまり詮索しないで居てくれると嬉しい。」

明らかに性別的に逆だと思ふのだが、マールをお姫さま抱っこしたまま、空を飛び、その木のそばまで来て宙に浮かんだまま、アインズがフレイラに声を掛ける。

「しばらくだな、私からの指令は無事にコトが進んでいるようで何よりだ、フレイラよ。」

「ありがとうございます、そのお言葉一つで報われます、しかしまだ全てが終わったわけではありません、まだ本番はこれからですので、油断はできません。 …セバス・チャンさまも、お元気そうで何よりです、先だっではお世話になりました。」

そうわずかに木の上で腰を曲げ、礼をとるフレイラにセバスはわずかに表情を緩め、言葉を返す。

「私のことはセバス…で構いませんよ？ 同じナザリックにお仕える者同士、私とは一度挨拶も交わしているのですから堅苦しいのはやめにしましょう、それで…今回の…助けるべき対象はどちらでしょう？」

その言葉を耳は無いながらも樹木の樹皮感覚とでも言えばいいのか、それらで大気の震え、声の振動などで会話内容は理解できたため、目印も必要だよな…と思い至る。

（そうだな…とりあえずわかりやすいようにしておいた方がいいよな…ディーネ？聞こえるかい？）

木になっっているので全ては自分の心の中でやり取りするしかないベルリバーが未だに身の内にいる者の一人の名を呼ぶ。

☒はい、ヴェールさん、どうしましたか？☒

（えつとな、さっきの樹精霊種ドレイアードの樹つてどの木だか、エルフのキミらなら一目瞭然だろう？ そこに〈恵みの雨〉マーシレインをかけてあげてくれないか？ 多分水属性も含まれてるし、植物になら効果が強く出るだろうし…それにアインズさんへの目印にもなる。）

☒はい、わかりました…それでは、〈恵みの雨〉！☒

発動させると同時に樹の少し上から雲もないのに空気中の水蒸気から構成でもされているのか、キラキラと輝きながら、それが雨のようドレイアードに樹精霊種の樹に降り注がれる。

（これですこしでもHPが回復してくれればいいんだけど…でも一体なんであんな弱っていたんだろう？）

「アインズ様、今あちらで〈恵みの雨〉<sup>マーンシューレイン</sup>が降り注がれている樹、あれが今回プレイヤーの情報を知っているらしき樹精霊種<sup>ドレイアード</sup>が宿っている樹木です、消耗が激しく休眠に入っているようなので、姿を維持できるだけの力も残されていないものと思われ、マール様、どうか、お力を…。」

「あ…あの、アインズさま、僕が診てもいいんでしょうか？ それなら、一度下りて調べたいと…思うのですが…いいですか？」

「ああ、そうだな、マールが頼みだ、頼んだぞ？」

ゆつくりと上空から地面へと降り立ち、そつとマールを立たせる。

しばらくの間、樹を見たり、触ったり、なにかの魔法を使ったりしていたマールが、アインズに振り返り、調べた結果を報告する。

「アインズ様…この樹なんです…、消耗が激しいのは…中に寄生虫が入り込んで…樹の中も、栄養も食い荒らしているからかと…。それらが解決すれば、あとは時間が経てば自然と回復すると…思います。」

（なんだ…襲われたんじゃないやなくて寄生虫か、それなら〈誘引の色香〉で寄生虫を誘い出せば…ってダメか、そんな悠長なことをしてる内にHPがゼロになったら目も当てられないしな…それにボクじゃく樹の中にどれだけの寄生虫が居るかわからないしな…どの道マールを呼んで正解だったみたいだ。）

「そうか、ならばその寄生虫とやら、どうにかできないか、マール？」  
「大丈夫です！ アインズ様のお望みなら、全力を持って当たります！」

嬉々とした表情で、持っている神器級<sup>ゴツズ</sup>の杖を振りかざし、魔法を唱える。

〈魔法効果範囲拡大化〉<sup>ワイドレンジ</sup>、〈寄生虫除去〉<sup>リムーブパラサイト</sup>

範囲を拡大して、樹精霊種<sup>ドレイアード</sup>が宿るほどの大樹、葉っぱ一枚も隙を作らずすべて範囲に入れ、樹木内に巣食っていた寄生虫を全て除去し、一匹残らず一か所に集める。



（おおお、なんかすごい数だぞ？寄生虫つてもつと小さいかと思つたのに、まとまると気持ち悪いな。それに数も多いし、よくこれだけの数に食い荒らされて今まで生きてたもんだ…。）

樹になつた身体でそんな感想を抱いていると、マールレがその一か所に集まつた虫たちに向けて、詰めの魔法を発動させた。

〈根絶駆除〉  
エクスターミネーション

（おいおい、それって虫以外にも有効な範囲魔法だったんじゃないか？…ただの虫だったろ？張り切りすぎじゃ…、守護者つて力有り余つてるのか？もしかして…）

「終わりましたあゝ アインズ様」

満面の笑顔で報告しに足元まで来るとまるで「褒めて？褒めて？」とでも言いだしそうな表情で「どうでしたか？」と聞いている。

「ああ、よくやった、これでこの樹精霊種は命の危険は去つたというコトで問題はないのか？マールレ。」

「はい、もう大丈夫だとは思いますが…見た目からして、本体の樹がロボロボに食い荒らされています、それに同じ場所に居ては…今の寄生虫にもうマーキングされてる可能性もあります…、同じ種類の寄生虫にこれからも狙われる可能性はあるんじゃないかと…その…はい。」

「マールレ、この樹精霊種はナザリツクに持つて帰ろうかと思う、何しろプレイヤーのことを何か知っているようだしな…それにマールレの階層で行っている農作業の方をこいつに手伝わせたかどうか…と思つている。同じ植物由来同士、病気になつたり、元気が無かつたりしたら見てわかるだろうしな…。」

「アインズさまのお望みなら…僕は大丈夫です、しっかり守護階層で枯らさないようにお世話します。」

「そうか…、ならば持つて帰ろうか…とところでマールレ、この樹の根元か

ら土ごとごとつそり、傷もつけずに引っこ抜くことは可能か？」

「あ…はい、それなら範囲を絞った〈大地の大波〉<sup>アース・サージ</sup>で周囲の土をどかせば大丈夫です。」

（おお〜い！ マーレ！ それって…強すぎじゃないか？ ここ平地じゃなくて森だぞ？ 他の樹に影響しないか？ 自分も今、樹なんだけど…へし折ったりしないでくれよ？）

姿を現すわけにもいかず、かといって声も出ない樹木の身としてはコトの次第を見守るしかできず、引っこ抜かれた樹は、アインズがセバスと二人で担いでいこうかと思っていた所、「主人にそのような雑務をさせるわけには行きません」と言われ、アインズ以上の筋力を誇るセバス一人で、軽々とナザリックまでお持ち帰りされてしまうのであった。



「ではな？ フレイラ…この樹精霊種<sup>ドレイアード</sup>はナザリックで面倒をみることにする、ヒマを見つけて会いに来てもいいぞ？ その時はアウラとも面識が出来るといいな。では…『彼のこと』はよろしく頼んだぞ？」

そう言い残し、去っていくアインズ、そしてセバスとマーレが居なくなるると同時に、〈擬態Ⅲ〉を解除して、新たに〈擬態Ⅳ〉を使ったベリバーが偽エルヤーの姿をとる。

「これでよかったんだよ…な？ うちら、あの精霊の同意をとってなかったのだが…」

「イイのではないでしょうか？ 命の恩人、しかも食い荒らされていた状態を癒してくれ、寄生虫の心配の一切ないナザリックで暮らせるのですから…、最初は混乱するかと思いますが、慣れれば問題ないかと…。」

フレイラにそう言われたベリバーは、力なくうなずくだけで、ムリヤリ自分を納得させていた。

「慣れれば…か、そうだな、慣れることが出来れば…なんだよな…気を強く持つんだぞ？ドライアド君！」

そうして、一段落ついたベルリバーは、森の一角に建っているままの〈グリーン・シークレットハウス新緑の隠れ家〉を回収し、晴れてカルネ村の隣にお引越しを済ませると…、夜の内に戻る事が出来ていた。

あらかじめ仮面の魔法詠唱者の姿へと新たに「擬態」すると、堂々と夜の上空高い場所から透明化してカルネ村まで落下、フレイラはベルリバーより先に落下し、地面に映る夜の影に潜ることに成功すると、透明のままの「ベル」と一緒に村の広場に舞い降りた、

「さて…と、翌日の墳墓調査までは…あとどれくらいだ？恐らくは単純に計算しても16〜18時間は残っていると思いたいが…。」

「マスター、時間について何かご心配でも？」

「ああ、いや…今のエルフのみんなやアルシエちゃんたちじゃああの墳墓じゃあつとという間にピンチになりそうな気がしてな…ただでさえトラップが多い場所なんだし…。」

「しかし20時間もないのでは鍛えるにしても時間があまりないかと…。」

「それなんだよな…、アルシエちゃんだけでもせめて生き残ってくれれば…、つて訳にも行かないか…、フォーサイトの面々にはこのカルネ村での自警団としての役目…というか、戦力の増強という面でも役立って欲しいからな…、ロバーデイクさんは、こっちで神父さんとかやってくれると助かるんだよな…、まあそれは引退してから、つていう見方もあるが…。」

「…ある程度のお仕事や、ナザリックでの使命などが片付いたら、という前提ではありますが、私がここに駐留するという方向で考えるのはどうでしょう？ ベルさま」

「あ、そっか、何も一人にこだわらなくてもいいのか！　ありがとうフレイ、またキミのアイデアに助けられた。」

「いえ、この身の愚案程度で、助けになるのであればいかようにも…それにこの村でのポジション作成、その助けになれるというのも…我が主から生み出された使命のようなモノを感じますし…私もそうしてみたいのです。」

フレイラが偽りのない正直な気持ちを告げる、ベルリバーも今の今まで思い出さないようにしていたが、そもそも魔力回復用のポジションというユグドラシルではあるかどうかすら怪しかつたものを作り出せないか？というある意味「ロマン」を求めて作ったのがフレイラである…その認識に落ち着くというのも必然と言えた。

「そうか…そういう事なら、そっちは取り合えず保留にしておこう、まずはナザリックで生き残ることを念頭に入れて行動しようか…できれば安全策で言えば100LVは最低でも欲しいが、生憎と時間が無い、とりあえずPOPのシモベに倒されないように…つてことで50LVをメドに修行するか？　『無い時間』なら作り出せばいい。」

そう言うと、まずは男連中の方だな…と結論を出し、とりあえずまだ時間切れを起こさず、健気にも命令を遂行中である「冠クラウン・熊ホーク・鷹イーグル」が屋根に止まっている家へと向かう。

「さてさて、夜からの特訓だが、まあ…アレを使うのはもったいない気はするけど…、実際自分が持つても使う機会はないから、宝も持ち腐れっていうのもあるし…仕方ないか…。」

主の誰にともなくポツリとつぶやく言葉の真意がつかめず、小首をかしげ不思議そうな顔をするフレイラの頭をなでるようにする、「最近これもクセになってきてるな…」となでることにより、何故か自身も安心できる副次効果に思考を割かれながら、目的の家の前に着く。

コンコン

家のドアにノックをして、訪問の合図を送る。

「おう…こんな時間なんだよ、誰が何の用だ？」

そう言つてドアを開けたのはブレインだ：根がそもそも善良という訳ではないだろうが、悪い人間という訳でもないのだろう、こちらが伝えた言葉の通り、結局この家にお世話になることにしたらしい。先に住んでいる（とは言えまだ仮住まいだが）ヘツケランとロバ―デイク、その二人に遠慮して、新入りの自分がドアを開ける役を買つて出たのだろう、彼らしいことだ。と一人で納得していた。「お、ベルさんかい？　なんだ、戻つたのか、そつちの用事はすんだのかい？」

「ああ、こつちの用はもう済んだよ、晴れてこのカルネ村のお隣にお引越しは済ませたからな、どどんと居を構えさせてもらったよ：ということは、これから自分は☒王国民☒という位置づけになるのか？」

「家を：かい？　さつき姿を消してから時間はそんなに経つていないと思うが：、ホントあんたつて男は底が知れねえな：。」

「まあ、経緯や手順やらでどうやって建てたか、つていうことより、そんなに結果だけ受け止めてくれると余計な悩みを抱えなくて済むぞ？」

「いや：、普通はそういう：：つて、まあいいや、用事があつて来たんだろう？　それに今じやなければならぬ理由つて事じやなければこんな時間に来やしなかつただろうよ、一体、何ごとだよ？」

口には出さないが「揉めごとかい？」と目で訴えて来ている、そういう訳でもないんだがな：。

「用事は、この家にいるフォーサイトのお二人さ、良かったら、明日のワーカー仕事の前に難度を上げるための特訓：いや、自分を鍛える修行でもしないか？　と思つてな。」

そんな言葉を家の中にいる2人に向けて問いかけては見たものの、戻つてきたのはあまりいい反応ではなかった。

「その申し出はありがたいが、明日に控えて、体を休めておきたい：いざ、当日になつて体が充分に動かなくなつたら、本末転倒だしな：。」

そんな言葉に打開案を用意していたベルという男は、彼らの予想を覆すアイデアを提示する、一度聞いただけではまず真意など理解でき

ないような…そんな内容を彼らに聞かせた。

「自分なら、明日の墳墓集合までに…そうだな、体感時間で7〜8カ月以上の時間は作ってやれるぞ？その間に自分を鍛えて実力を上げるための手伝いをしてあげたい。未知の遺跡探索なんだろう？どんな者が出てくるかわからない…実力はありすぎて困ることはないと思うが？」

「あんた…正気かい？ 時間を？ 作るだつて？ しかも数カ月単位？ 帝国の三重魔法詠唱者の爺さんだつてそんなこと不可能だぞ？」

中に居たヘツケランとロバーデイクが扉の前まで来て、リーダーであるヘツケランが反論する。

「まあ…信じられないのも無理はないよ…実際、何も知らない者たちが聞いたら狂者のたわごととしか受け止めてもらえないだろうことを口走っているというコトは理解しているさ…それでも、見てみるだけでも損はないと思わないかい？」

「面白い事を言うじゃないか、オレらの貴重な時間を奪って、無駄だつたら、ゴメンじゃすまないぞ？ もしウソだつたら、あんたウチラと墳墓で行動を共にしろよ？ アングラウスさんから聞いたが、あんた、剣も使えるんだつてな？ フォーサイトは前衛がオレしか居ねえんだわ…ロバーは回復役として、出来れば一番前には出たくないからな…もう1人くらい注意を引く役目の誰かは欲しかったんだ、だが認められない内はメンバー入りはさせないからな？」

「はっはっは、とことん自分らに有利な条件を提示してくれるものだが…いいだろう、その条件受けた！ …ということだリーダーがそう決めたんなら…チームとして他の2人も見に来てくれる、と認識していいのかな？」

「そうだな…アルシエとイミーナは別々の家に居るみたいだから…声を掛けてみるさ…、もちろん言い出しっぺのアンタも、来るんだろ？」

こうしていよいよ、ベルリバー主催、フォーサイト特訓（ユグドラシル仕様）イベントが開始されようとしていた。

## 墳墓潜入前、修行編

### 第38話 みんなで特訓、レベリング！「3つの扉」

アルシエは暗い部屋でベッドに横になっていた。

アルシエが早寝という訳ではない、そのベッドには3つの小さいふくらみがあり、真ん中にはネム、そして右にはウレイリカ、左にクーデリカがネムを抱き込むようにして「すー…すー…」と寝息を立てている。

(ようやく寝てくれた…)

最初こそアルシエもどうしよう戸惑った物の、結局この家に手伝いに来てくれている「元村長夫妻」の口利きによりリイジーにもこのことは通達され、現在のこの状況となっている。

一時期は確かにリイジーも養母代わりに色々面倒を見てくれたが、最近ではポーシヨン作成に掛かり切りとなっており、そうなるも他のことがおろそかになるのは一族の特徴なのだろうか…？

それともポーシヨン職人はみなこうなのだろうか？と元村長夫妻も首をかしげていたが、最近では村の皆までもが「そういう人たち」という認識になっている。

そのため面倒を見られる人が世話をする、という認識になっていて、ネムもウレイリカもクーデリカも、いつでも一緒に仲良くなっており、二人に「もう寝ましようか」というと「じゃく私も…」と寝る支度をネムも始めてしまうようになってしまった。

実の姉であるエンリも時々様子気を気にしてくれるものの、実の所、カルネ村の村長、カルネ部族の族長、さらには一家の妻、主婦としての顔を使い分けて生活をしなければならぬエンリに、さらにもう一つ「姉」という立場を負わせるのは何となく気が引けるといのが村の総意だった。(他にも「エンリの姐さん」という物もあるが…)

ネム自身もそれは分かっているようで、アルシエの家となったこの空き家だった場所も、片付けや荷物の運び込みなどの際は、彼女なりに小さいながらも力になろうとしてくれていた。



食事の時も、食器やお皿など、手伝えることは手伝ってくれ、自然と「私も」とクーデリカもウレイリカもアルシエを手伝うようになってくれている。

毎日、ネムのそういう健気な所に引つ張られ、お手伝いを始めた双子の妹たちも疲れが出たのだろう、すっかり眠ってしまった。

いつもであれば、そのタイミングで寝室として用意された部屋を出て元村長夫妻に「もう寝ました。」という報告をすれば、「それじゃ、もう大丈夫だね」と言つて、夫妻の本来の家に帰っていくという流れで一人の夜が訪れるはずだった。

しかし今夜はそうは行かず、3人が眠りの世界に入り、アルシエも扉の音で目が覚めないようにと気を付けながらリビング代わりの少し開けた空間に移動しようと扉に手をかけた時、まだその広めのテーブルに座る元村長夫妻が居るタイミングで扉がノックされた。

「はいっどちらさま？」

そう言つて奥さんが扉を開けて対応に出る。

すると、そこに居たのは自分のチームメイト、ヘッケランとイミーナ、ロバーデイクという顔ぶれ、それにいつの間にか村に出入りを許されたのか、最近の村の話題の人、流浪の剣士さんに：ジエツトくんの雇い主のゴウン様：なぜかその人まで立っており、その横には異国風の衣装に身を包んだフレイラという女性が着いて来ていた。

はつきり言つてアルシエからすればよくわからない状況の上、その面子、一体何ごとか？と思ひ、奥さんに「私が対応する」と短く告げ、扉を閉めて外に出る。

「一体なにごと？　こんな時間に？」

（さすがにあのゴウン様がここに居るのは違う気がする、みんなにゴウン様とのつながりがあるとは思えない：でもあの姿はどう見てもゴウン様？）

「ああ、なんかこの人が面白いものを見せてくれるって話でな、もしそれが本当なら、これから俺たちを今までより強くしてくれるらしいぞ

？」

軽い調子でヘツケランが口を開いて事情を簡単に説明をしてくる。「私は信じてないけどね？　ヘツケランがね？　賭けをしてるんだってさ……だから勝ち負けがはつきりするまでは見届けたいんだって。」

隣に立っているイミーナも言葉を引き継いで聞かせてくれた。

「見たところ、フレイラさんからの信は篤いようです、そんな人がどのようなことをなさるおつもりなのか、私としては少し気になる所ではありませんので……」

気まずそうに言うロバーデイク、よほど、自分のできない信仰系の御業に刺激を受けたようだ、まあ3人がそれでいいなら……と、眠っている3人を見ていて欲しいと夫妻に告げ、こちらもそれに付き添うことにした。

「さて、ベルさんよ、ちょうつとだけ寄り道させてくれないかな？」

（ベル？　その人の名前？　やっぱりゴウンさまではなかった……ん？

ベル？　ベール……ヴェール？……もしかしてヴェールさん？）

アルシエの思惑など特に気にも留めていない様子で仮面の男はそれに対して了承の言葉を剣士に返していた。

「ああ、そうだね、キミの場合、無断で下手なことをしたらボクの魔法が発動しちゃうかもしれないし一言、言っておかないと……かな？」

軽く肩をすくませ、両手を上に持ち上げる仕草をして「ま、そういうこと、この村に仲間入りするにはその条件を飲むしかなかったからな。」と言った後、続く言葉もシンプルなものだった。

「それに本当に強くなれるんなら放っておかれちゃ困るからな、特訓なら大歓迎だ。」

「特訓？」

不意に聞こえて来た、聞き逃してはいけない言葉を聞いた気がして疑問を口にした。

「ああ、この人が何かどえらいことをするみたいでな？　明日の夕方になるくらいまでには数ヶ月分の訓練を積めるって話なんだ。」

その剣士はそう教えてくれたが、私は早速ヘツケランに抗議をす

る。

「何それ？ 私は聞いてない…。」

「やく、どう考えたって、そんなのペテンだろ？ 何するか知らねえが、どっちにしたってこっちの有利なことには変わらないから大丈夫だ。」

「ヘツケランは…この人の凄さがまだわかってない…、この人の引き出しには他になにかあるのかわからない不気味さがある。」

その言葉に「アルシエも私と同じで初対面」だと思っていたイミーナが聞き捨てならないと突っ込んで聞いてくる。

「あれ？ アルシエってこの人のこと知ってるの？ 私は初めて会ったんだけど？」

「私は…今のその姿では初対面だけど、そうじゃない時に何度か会っている…。」

（本当の姿をしてる時にみんなも会ってるはずだけど…それはヴェールさんも隠しておきたいみたいだし、言わない方が…いいよね。）

アルシエはそう言うと、ベルと名乗る男に向けて腕を持ち上げる。

その持ち上げた腕には夜でもわかるような淡い輝きを発する見たこともない金属のような光沢を有した腕輪。見やすいように鮮やかにカットされたピンクの宝石部分を見せる。

それはヴェールから直接アルシエに渡された物、「お守り」として、と言われ、身に着けていたものだ。

「あ！ それ！ ちゃんと身に着けてくれてるんだ、アルシエちゃん、嬉しいな、もし何かあったら遠慮なく使っていていいからね？」

（やっぱり…この人、変装してるのに隠すつもりは無いのね…）

「あんたら、いつのまに交友関係を築いてるのよ？ それ、なんのアイテム？」

男2人と女2人のチームで、（女では）自分だけが相手のことを知らず、アイテムももらっていない、「お守り」程度とは言え、その差に愕然としてつい口から出てしまったその言葉を聞くも、アルシエは何も返せなかった。

「私も…これがなんのお守りなのか知らない。」

チラリとベルの方に目を向けるアルシエに、彼からの言葉はそれ以上詳しくは教えてはくれない内容だった。

「まあ、その時が来ればわかりますよ、一応作り手の思いがたくさん詰まってるので、不意打ちでも危なくなったら効果は出るはずだから。」  
「答えになってない…。」

会ってまだ時間は経っていないにも関わらず、チームメイトの自分らとそう変わらない心の距離感で話しているアルシエにチームの3人は「本当に知り合ってたんだ…。」と改めて実感していた。

「あ、そうだ、いっけね、一応行く前に一言伝えとかなきやな、お取込み中だったら困るだろうし…。」

と、歩きながら会話していると、急にこめかみに指を持っていき独り言を言い始めたかと思ったら、ベルさんは誰かに何ごとかを話していた。

「よし、これでオツケ！ それじゃ行くか？ アングラウスさん、エンリさんとこに。」

そう言っただけで状況が分かってるベルはみんなを連れて、そう長くない距離を歩く…そしてエンリの家まで行くと、「アングラウスさんを貸してもらっていい？」と、いう許しをもらっていた。



「ありがとう、エンリちゃん、それじゃ～後のことはよろしくね。」

ベルは、事前に「今からそっちに行っても大丈夫？」というシンプルな問いかけと共に、いくつかの要望を聞いてもらいに家の方まで訪問しに来ていた、ついでのプレゼントも手土産に持って…。

エンリは「よければ家の中で…」と言ってくれたが、万が一にもンフィーレアには聞かれたくない内容も含まれている為、それをやんわりと断り、「すぐに終わる話だし、新婚の家にお邪魔するわけには行かないよ」とイジリ半分のような言葉で誤魔化した。

エンリに伝えられた内容は以下の通り。

・今夜これから広間の方で大きな儀式をする、そうしたら、大きな扉が3枚現れるけど誰も近づかせないで欲しいこと。

・「どんなマジックアイテムでも使用可能」なンフィーレアをその扉に触れさせないように…、そこに吸い込まれたら自力で戻れるか自分でもわからないこと

・自分たちはその内の1枚の扉の向こうに居るが、昼過ぎ…夕方になる前には戻るからそれまでは誰にも近づかせず、いじらせないで欲しいこと。

その3点のみを伝えたところ、「それなら広間じゃなくもつと目立たないところの方がいいんじゃない？」と言われ、「それもそうか…」と思い直し、どこがいいかと聞いた所、「それなら森側の防壁沿いに裏口があります。」というコトが聞けたので、そこにした。

エンリ曰く、元村長さんと、現村長の自分、それから森に出入りするラッチモンさんとかくらいしか普段は使っていない場所らしい。

それを教えてもらったベルは「これ、エンリちゃんに差し入れ」と言つてエンリに渡したのは片耳分だけの耳飾り。

これは？とエンリが気にすると、非常時の通信用で、ボクらがその扉の向こう側に居ても、通信できる優れもの。

というモノだった。

アニメ好きなギルメンが、こういうのも作っちゃった、と言つて見せてくれたが、すぐに熱が冷めたようで1ヶ月もしない内に自分の手元に来たユグドラシル製アイテム、その名も「通信用イヤリング」という名称だが、外装としては全くイヤリングではなく耳たぶに着けると、違和感なくぴったりフィットし、デザインは菱形、アクアウォーターというレアのパワーストーンにデータクリスタルをハメこみ、その宝石を保護するかのようになつていっているのはLV10金属で作られた素材。

効果は単純で装備している者同士で〈<sup>メッセージ</sup>伝言〉の魔法の効果が発動すると言う物で、主に片道発信の応酬をすることでお互いの連絡手段にするというモノだ。

わかりやすく言うと、「トランシーバータイプ」と言えば伝わりやす

いだろうか…。

装備者に連絡が来る時はお馴染みの音と共にブルブルと耳たぶでそれが震える、そして、その宝石部分に触れると相手側の〈伝言〉<sup>メッセージ</sup>が受け取れる。

こちら側が返事をした時は、宝石部分を指で押すようにすると、押している間、自分の言いたいことが伝わるようになる、という単純なアイテムだ。

魔法が使えないクラス構成のアバターで〈伝言〉<sup>メッセージ</sup>を使いたい、という願望をかなえる為だけに創られたようなアイテム、そしてすぐに製作者の興味は廃れてしまった。

なぜなら、結局、特定の1人を相手にするしか使い道がないということに気が付いてしまったからだ。

本当はこのアイテムはアルシエちゃんに持っていてもらおうかな？とも思ったのだが、今アルシエが暮らしているのはこの村であり、この村がピンチになれば必然的にアルシエの妹たちも危機的状況になる。

それにせつかくポジションを作れる環境が整ったばかりだということにこのチャンスをふいにしてしまうのはあまりにも惜しすぎる…。という結論から…やっぱりエンリちゃんに持っていてもらおうという結論に至ったのだ。

一通りのアイテムの使い道を説明し終わると、イヤリングのもう片方はフレイラが装着していることを告げ、なにかあれば…というコトだけを告げて、裏口へと向かう。

エンリに見送られ、一行が来たのはカルネ村の裏口を通ってすぐの森との境界部分、必然的にこの扉を通れば森に行くというイメージがつきやすいような位置取りでさっそくコトを進めようとして、メンバーの確認をする。

「フォーサイトの4人に、ボク、フレイラ、アングラウスくん…の7人か…それならギリギリだな」

「ん？…これからする特訓って人数制限でもあったのか？」

特訓と聞いてワクワクしているブレインが、その言葉を聞いて気になつたようで確認をしてきたので返答をする。

「入れるのは1枚の扉で10人が限度だ、ちよつとこつちもあと少しだけ実力を付けさせてあげたいメンバーが3人いてね、ギリギリ限度の上限だなど思ったのさ。」

「ベル様、彼女らも一緒に鍛え上げるおつもりですか？」

静かに着いてきてあまり余計な事を言わなかったフレイラだが、少し心配をして居るようだ。

「ああ、これからするのはユグドラシル形式のレベリングだからね、人数が多いに越したことはない、経験値も人数で分割されるけどみんなに割り振られるから…「難度」も上がりやすい、その分気を付けて挑んで欲しいんだよ。」

その言葉を聞き、少し思索しているようだったが、思い切つて提案することにしたようだ。

「それならば、この場で彼女ら3人と顔合わせだけでもさせた方がよろしいかと…。」

「そうだな…：そうしようか…。」

（あ、そうだ、この前フレイラに提案した〈タイムポーズ短時間休止〉を使ったトリックで誤魔化そう…：結局は前の時、提案した事案は使う必要なくなつたけど、今回は使わざるを得ないよな。）

そう判断したベルは地面に手をつく…：そして小さく〈フラッシュ閃光〉とつぶやくと、手をついた場所周辺、地面から発生した光の円が広がる。

（通常、敵の眼前に発生させて視界を奪う魔法だが、こういう使い方、応用次第つて事なんだな…）

そのタイミングで、それも小さくつぶやく声で〈タイムポーズ短時間休止〉を発生させると、周囲一帯の時間が休止状態になる…：停止しているわけじゃないので、動きが見えていないわけじゃないが、こちらの行動は早すぎて、目で追えない、と言つた方が近いだろう、なにしろ一つの行動がコンマ何秒とか…：そういうレベルに近いのだから。

その魔法の効果中にベルは、元の自分の姿、「ベルリバー」へと変わる。

その瞬間、体中の口を一か所に集め、大口となった場所から3人のエルフを光の円の上に吐き出し、素早くそこに立たせてやる。

3人を光の円の中に立たせると、すぐさま自分の外見を仮面の魔法詠唱者の姿へと戻す。

もちろん彼女らの装備は自分が分け与えた一式全てフル装備状態だ、あと一応〈幻影の視覚〉で、彼女らの顔の造作も手を加えちゃえ…パーツはこれと、これ、これと…よし。

そこまで整えてややすると、効果時間が切れた。

ランダムで効果時間が変わるので、10秒程度の休止から30秒の休止という、幅の広い落差があるが、今回はなんとか20秒だったらしい、その行動時間が1秒という時間に凝縮されるのだ、目で追える速さのほががない。

そうして時間が動き始めると、いかにも光の魔法円から、3名のエルフが現れたように映ったかと思う…というか、そう見えて居て欲しい、という祈りを込めて姿勢を正していく。

「さて、今私が呼び出したのは、私と共に旅をしてきているエルフの3名です、みんな、自己紹介を。」

「はい、ご紹介に預かりました、ワタクシ、ルチルと申します、まだワーカーとしては若輩者ですが、クラスはドルイド、よろしくお願ひします。」

その身にはどの革を使ったのかわからないが、とにかくすごい魔力を感じるハードレザーマー、そして武器はドルイドに合っており、太く長い木の枝の上になにやら植物のような何かが球状に密集しており、その中央にも魔力を感じる「核」とも言える星のような金属？っぽいなにかが入っている。

そして、その金髪はきらめく様で…青いその瞳は、深い海の様だ。

「次は私、セピアと申します、レンジャーと魔法詠唱者の両立を目指しております、よろしくお願ひします。」

セピアと名乗った女性は背中に一見、ロングボウに見えるが、矢を番え引き絞った際、ちょうど矢の先端に当たるような位置に見事な赤



い燃えるような宝石がはめ込まれているものを背負っている。

それとは別に魔法詠唱者マジックキャスターに相応しくロッドが握られ、そのロッドの頭には星を象ったモノ、そして左右に白い翼が広げられ、その翼の中央に星が乗っているようなデザインが施されている。

ローブの方は風も吹いていないのに緩やかに小さくはためいていて、その下にはミドリ色を基調、そして所々金の装飾が嫌味のない程度に施された服を着ていた。

茶髪に近いブラウン色の髪に同色の瞳、その髪は肩にかかるくらいのセミロング、どことなく明るさを感じさせるような表情で立っている。

「最後になりました、わたしはディーネ。神官を務めており、クレリックの位階を第2位階まで覚えております。」

クレリックに相応しく、その手には両手持ちのフレイルが握られており、見た感じそれほど変わった所はなさそうだが、どことなく目が離せない何かがあるように見える。

そして、その身に着けている鎧は、女性が身に着ける装備としてはこれ以上ないという程の煌めき、そして、身に着けた者の魅力を引き出すような意匠で、見ているとため息が出そうな程に美しい

さらに、その鎧に負けない水色の髪は透き通るようで、カールしたような毛先の印象がまたその見た目を際立たせているが、それとは対照的な力強く切れ長な瞳、それがなにより強く印象に残った。

(まあ、墳墓に行くときは耳が切られたような幻影を纏わせるし、衣服もみすばらしい見た目に変えるから、バレないと思うけど、一応…:な) 先程の顔の造作とパーツ選びで、ベルリバーが選択したのが、ルチルは青い瞳、目は変えてない。

セピアが髪型、本当はショートヘアな所、セミロングに変えてある。そしてディーネが一番、鎧の効果で印象が残りやすいかと思ったため、真逆で切れ長の、目チカラが強いデザインにしてあった。

「さてさて、これで、お互いのことはある程度わかったでしょうから、あとはこれから行く特訓の場で色々を知って行きましょう。」

そんな中、仮面の魔法詠唱者姿のベルは、その懐に入れた手の先をアイテムボックスに連動させ、その中から一つしかない超貴重なUR（ウルトラレア）とも噂されていたドロップアイテムを取り出す。

それは見た感じ、なにかの模型として作られたドーム状の建物のような物、その見た目とはそぐわぬ名前を持ち、見た目からは効果の内容はまずわからない。

その名も「時の歪む異世界」それはどのモンスターが持っているのかすら公表されておらず、ドロップ率も、脅威の0.021%という確率とアイテム名しか知らされていなかった物…、ユグドラシルのWikiでも誰も見たことがないという話ししか出てこなかった話題のアイテム。

それをベルリバーはユグドラシルを引退する日、どうにもギルドからの脱退という現実をモモンガに見られ、失望させることに臆病になつていたベルリバーは、ギルドに名前を残したまま、引退することを決めた。

そして、そんな心境の中、「どうせ引退するんだし…」という思い、どうせレベルが下がっても引退するんだ…というややくそな気持ちで、レイドボスに挑戦した、どうせ勝ち目などないと思っていたが、運よく乱入（協力）プレイヤーが入って来てくれたことでそのボスを死なず（レベルダウンも起こさず）倒せたものの、今は名前も思い出せないそのプレイヤーは倒せたことに満足したのか、ドロップ品の確認もせずにアウトしてしまった。

結果、出たアイテムが…その「時の歪む異世界」

その効果は、目の前に出て来た3枚の扉のどれかを選び、入ることによってゲーム時間の基準で一日を消費すれば、一年分の時間をフルに使い、経験値稼ぎをすることが出来た。

しかも3枚の扉という触れ込みの通り、それが3回まで使えるというある意味シューティングスターの経験値稼ぎ版とも言える物、そ

れがこれだ。

しかし、その時、そんなものを手に入れても引退する当日と決めていたベルリバー、さらにはレベルもカンストしており、それ以上なんて上げる必要がなかったのだ…。

結局、一度も使うことなく死蔵され、ユグドラシルのサービス終了と同時にアバターも無くなったはずだったが：アイテムボックスに突っ込んでいたのだろう、捨てたと思っていたのだが、それはイベントリに保存されていた。

それを先日、何の気なしに整頓でもしようかとヒマな時、いじっていたら発見したのだ、どの道、ナザリツクではレベルも上限のインズさん、レベルが完結しているNPC達、どちらにしろ結局は使い道などないと思っていたのだが：どうせ自分が持つても一生使うことなないだろう…：と思い、ここでどうせなら使ってみようと思った、どうせ自分には効果はないが、自分以外のみんなには有益なのだ。

そして、ベルリバーがそれを使うと：森の境界の辺りに森の木の高さと同じ高さの扉が3枚横に並んでそびえ立っている。

扉の表札らしき部分には“(0 / 10)”と表示されている、きつとそれがこの扉を通れる上限ということ間違いなさだろう。

それが何の冗談か、左から青の扉、黄色の扉、そして赤の扉がある。(これって絶対に難易度…：だよな…：「Easy」「Normal」「Hard」といった具合か?)

そう思うも、果たしてどれを選んだものか…：と迷う、LV100と50LVが一人ずついるとは言え、この現地民のレベルは…：そこまで高くはないだろう。

おそらく10人中、半分もレベル30…：いや、20代の後半も行ってないかもしれない…。

そんな中、みんなを守りながら、戦いきることは出来るだろうか？

：そう思うと、やはりここは「青の扉」だろうか？と選ぼうとする…

自分はインズさんのように「蘇生ワンド・オブ・リザレクションの杖」など大量には持ち合わ

せていない、間違つて死なせてしまったら…せっかく経験値を稼ぐために来ても最低のレイズ・デッドでも5LVダウンだ、マイナスの方が大きい。

「なあ…これってそれぞれ色が違うが、一体なんの違いがあるんだ？」興味津々で聞いてきたのは、特訓にワクワクしていたブレインだ。

そんなことを聞いているブレインの横でヘッケランはポカンと口を開けたまま「マジかよ…」と絶句している。

アルシエもそれを受けてヘッケランに「ね？…つまりはこういうこと。」と突き放していた。

そういう会話が続く中、ベルはブレインの言葉にどう答えるべきかと悩む。

（どうしようか…これで正直に説明したら、決闘好きのこの男のことだ、絶対に「赤にしようぜ？赤が強いんだってよ！」とか言い出しそうだ。）

「これはな最初は青、二度目の人は黄色、三回目に来た人は赤にチャレンジできるって意味なんだ。」

「そうか…そういうルールなら仕方ないな…。」

なんとなくの気分でそう誤魔化して青の扉を選ぶ…つまりは簡単なんだろうな？と思つた方だ。

扉を開けると、目の前にパネルが開かれる。

「この中にいる予定の時間を選択してください」  
そして、数字が表れる。

「外の世界 ▼ 異世界時間 ▼ 総経過時間」

という項目ごとになっており、外の時間を選ぶと自動で、異世界時間が計算される仕組みになっているようだ。

最大の一日を選ぶと、もちろん異世界時間は一年と表示される。

しかし、どう考えても今は夜、今から24時間などの余裕はない、しかしまだ日付も変わるような時間でもない為、12時間以上は大丈夫だろう。

少し余裕をもって17時間にしておくか…と判断し、17時間を選ぶ。

すると異世界時間は「8. 5ヶ月」と表示された。

(一年の3分の2以上か…まあ、その辺が無難か?)

そう思い、「OK」と押そうとすると、その横に気になるものを見た、「設定」という項目だ。

気になって見てみると、冷や汗がドバつと出る思いがした。

「異世界の出現頻度」という項目だ…そこが「自動出現」になっていた。やばかった…危なかった、自動出現なんてなつてたらインターバルなしのひっきりなしに8. 5ヶ月つて…無茶だろう!

そこをポチつと選び、「任意」と設定を変える。

後は…まあ、怖い所はないな…やつぱり「獲得経験値」は、青が「Easy」で、経験値獲得率が2倍らしい…。

そして意を決して、「OK」と選ぶ。

するとアナウンスが流れ、「おめでとうございませす、異世界への扉が開かれました、あなたの冒険ライフに幸あらんことを!」

という言葉が終わると、扉が開き、それと同時に周囲一面が真っ白な闇とも言える世界に包まれる。

とつさにフレイラの腕をつかむ。逆の手では近くに居たルチルだ…ルチルがセピア、セピアがディーネの腕をつかんでいますように…と願いながら、その白い世界へと強い引力により引っ張り込まれるような錯覚に陥る。

…そして、異世界で目が覚める、いよいよ墳墓調査に赴く前のレベル上げ特訓が幕を開けた。

### 第39話 みんなで特訓、レベリング！「難度90の壁」

そこは真つ白な世界だった…どこまでも真つ白。

：周囲を見回しても何も無い、床はあるが見渡す限りの地平線…それがどこまで続いているのかもわからない。

天井も無く、空もない、ただただ真つ白な世界が広がるだけであつた。

（〈飛行<sup>フライ</sup>〉で飛んで行ったらどこまで上がれるんだろう…）

だがしかし、自分の後ろには大きな扉がある。

そして扉に浮かぶように表示されているパネル、そこに時間経過が表示されていた。

「あと…8ヶ月と14日 現在…一日目 消費時間…00：0

1―54 外の時刻20：47」

という具合にだ。

（まだそんな時間だったんだな…）

こちらの世界に来て、少しずつ慣れてきているとは言え、かつての「リアル」と呼んでいた世界を思い出す。

あつちではあんな空は見えはしなかった、空どころか星空も…、一応昼間は薄暗いかな？程度で…太陽は、淀んだ雲が灰色よりももっと濃い暗さで空にあり、それごしに何か光つてるように見える…そんな程度。

爺ちゃんのお父さん、つまりは曾祖父…から「昔はメガネをして太陽など見たら眼に悪いからと直視など出来なかったんだが…」と言っていたが…こつちに来てからならそれがよくわかる。

そんな雲にずっと覆われてる空だったから、晴れていたとして、夜の空を見上げても一番星が辛うじて肉眼で見えれば運がいいくらい。

星空など拝めはしない世界を思い出し「ふう…」とため息をつく、

（リアルの世界より、あつちの世界の方が愛着はあるよな…。）と一し

きり感慨にふけた所で周囲を見てみる。

自分の横にはフレイラ：逆側にはルチルがいた：、とりあえずよかつた。

ルチルの横にはセピア。

セピアの横にはディーネ。

エルフの3人もどうやら目が覚めてはいないようだ。

ゆっくりとフレイラを揺り動かす。

「お〜い、フレイ〜？ 朝だぞお〜：大丈夫か？」

ゆさゆさと肩をゆするが：いまいち反応がない：自分の耳はどこにあるかわからないが：フレイラの口元に、かつて耳があっただろう場所を近づけていくと、呼吸はしている様子、ほっと一安心か。

（まあ：とりあえず：「メッセージボード」でもフレイに抱かせておくか：）

アイテムを異空間から引きずり出し、一筆入れておく：「他のメンバーを探しに行きます、扉の周囲で待っていてください、回収次第戻ります。」

（時間が惜しいから日本語のみだけど、フレイなら読めるよな：。）

そつと胸に「メッセージボード」を抱えさせ、〈飛行〉を唱える。

一気に上空高く舞い上がるも周囲はどこまでも真っ白、目印になるようなものは眼下の彼女たちと、扉のみ、床にも一点の曇りも無く色もないため空から見ると、彼女らが白い空間で浮かびながら眠っているようにも見える。

（さて：どこまで広範囲の空間だかわからないからな：ともすれば広範囲をカバーできる魔法でも使うしかないな：）

そう思い、ベルリバーは魔法を発動させる。

それは広範囲をカバーできる代わりに探せるのは生体の気配のみ、それを球状の光で見えるようにするもの：〈生命探知〉のよう<sup>ディテクトライヴ</sup>に決められた視覚範囲内の中の生命体に意識を向けるとある程度のその者の情報がわかる魔法と違い、今使う魔法は強化魔法で範囲を広げなくても：〈魔法効果範囲拡大化〉<sup>ワイドレンジ</sup>を使用しなくても上空から見える視覚範囲内程度なら充分カバーできる、しかも範囲を広げる魔法の強化を

すれば、視覚の範囲外でも感覚でわかる…だが、そこに居るのが集団なのか個体なのか、レベルは？性別は？種族は？などのことは全くわからないという問題はあるものの、今の状態では問題ない、私たちのメンバー以外の生命体が居るわけないのだから…。

（もちろん心臓という器官のない…植物みたいな生命や、アンデッドなどには反応しないんだけどね。）

そういう訳で、【捕食者】という関係上、罨を張る時に良く使った、懐かしい魔法を記憶から引つ張り出す。

空に浮かんだまま、〈魔法効果範囲拡大化〉と、そして〈生命探索〉を唱えた。

自分が見える範囲の外まで範囲を広げて発動させると自分の感覚がどこまでも広がっていくような感覚に包まれる。

この魔法は自分を中心にして、広がるように展開させるので、自分が動けば、探索範囲もそれに応じて動いてくれる、それが何より便利だった。

それからは特に書くこともないただの単純作業みたいなものになる。

それだけの範囲をカバーしながら飛び回れば、でたらめに飛び回っても、反応にひっかかる者を見つけるのはそう難しくはない。

問題はどうかやって目印のないこの空間で、異界との接点であるあの扉まで戻るのか…だが、それは転移で戻ることにした。

あつちの世界と違い、転移した後に建物や、人工的な何かや、壁、柱…生き物などの中に転移してしまい「同化」しないだろうか？…なんて心配をすることがないこの空間ではMPの節約として〈転移〉を使う…イメージは扉がなんとか見える程度の距離を選択。

…と、ひたすらそれを繰り返し、なんとか10名全員が揃うことが出来た。

「さて…これでやつとみんなも目が覚めたようだな…大丈夫か？どこか調子が悪いとか気分が悪いとかはないか？」



「こっちは大丈夫みたいだぜ？」

とヘツケランがチームを代表して答える。

「俺の方も問題ない。」

と、ブレイン。

「こちらも問題はありません。」

と、フレイラとエルフ3名。

「よし、それじゃく早速特訓を開始するか？　…と、その前にみんな装備の方は準備いいか？」

静かにみんなが頷いている、どうやら問題はないようだ。

（それはいいが…どうやってモンスターを呼び出すんだ？一応…「任意」ってことにしておいたが…）

唯一の思い浮かぶ要素として、イメージにするか、パネル式で選ぶのか？のどれかだろうと思いつく…パネルのあるだろう「何か」自体がこの空間には存在しない。

…あるとすれば、あの扉くらい…

（ん？…扉？）

と気が付き、扉の方に歩いて近づくと、時間表示の下に空白のパネルがあった。

そつとそれをタッチして、様子を見ると…

“出現させるモンスターを選択してください”

と出て、その文章が消えると、別の選択肢に移った。

「出現レベル　―　「60　▼」

と出ている…、▼のマークを押すと、下の方にずら〜と項目が現れる、それを追っていくと一番下が「LV30」で切れていた。

（30が低レベルの限界か…あつちではそのくらいは簡単に乗り越えられたけど、こっちの世界だと…難しいよな。30レベルって言ったら…アインズさんに聞いた周辺国家最強っていう人がそこいらへんだつたって聞いたくらいだもんな。）

「まあ…でも一応、ウォーミングアップ的な意味でも、みんなの強さがどれくらいか…って言うのは見極めた方がいいよな…」

と、独り言を呟いた後、みんなの集まっている場所まで戻る。

「ちよつとみんなに聞いて欲しいんだけど…みんなは例えばここに難度100の相手がモンスターで出てきたら…戦うかい?」

「一体で、斬撃が通じる相手なら戦いたいな…もちろんサシで…だ」

と即答したのはブレインだ。 みんなで協力して叩く…というのは最後の手段らしい。

「うちらも…だな、難度100の相手が1体なら俺らが協力すればなんとか…って感じた、斬撃が通じない時はアルシェ頼みになっちまいそうだが…。」

と、ヘツケラン。

「わたし達はフレイラさんと一緒なら戦えそうな気はします。…でも、私たち3人ではどこまで連携できるか…そこが心配ですね。」

(そこは一応、変装しているボクのごときは気を使ってくれてメンバーには入れてない前提で…か、さすがに賢明ですね、みんな)

「いや、チームごとに…って感じの前提でもいいんだけど、ここに居る9人で戦った場合…とかは?」

「あれ? あんたはどうするんだ?」

ベルの質問にかぶせるように質問してきたのは自分にあまり遠慮をしていないブレイン。

自分が入らなくても9人も居れば大丈夫だとは思いますが…それとは違う理由も話しておく。

「ボクの方はボクの方で、一応、決闘方式での戦い方の勘を取り戻したくってね…こっちはこの扉の中では最高レベルの60…じゃなかった、難度180と1対1で戦うことから始めてみたいんだ…でもそれは一応キミらが休憩してる時にでもさせてもらおうよ、危ない時はボクが助けられる立場に居るというコトで安心してもらいたい。」

一同が顔を突き合わせ、とりあえず挑むのは全員だが、9人単位での行動ではなく、それぞれのチームごとに動くけど、行動は一緒、という結論に落ち着いたようだ。

支持の方は、それぞれの指示役が担うことにするらしい。

「それじゃ、この世界で呼び出せる一番弱いのは難度90のモンスターからで、一番強いのは180になる…その範囲で戦うことになるらしいから、みんな、気を引き締めてね？」

「難度90…」

グビツと生唾を飲む音が広がる、ブレイン以外の現地勢は一様に緊張しているようだ。

「まあ、それに挑む前にボクがウォーミングアップ用に難度80くらいのを呼び出そうと思う」

〈サモン・レベル・スト・3rd 第3位階 魔獣召喚〉

「ハイコカトリス！」

すると足元の地面に光り輝く魔法円が出現し、そこからあの時エルフの3人が見たことのあるコカトリスと比べ、一回り大きな体、そして頭の上にはギガントバジリスクのような王冠にも似たトサカがあった。

体色の方も通常のと比べて少し濃いような気もする。

「おい！こいつ、コカトリスかよ…石化対策なんてしてないぞ？」

非難じみた言葉を出すヘツケランだがそれに対してブレインが横から大丈夫だ、と告げてくる。

「避けることに専念しておけば問題ない、嘴からの石化効果にさえ当たらなければなんて事は無いんだしな。」

「あ、一応させないようには言っておくが、こいつ、石化のブレスも吐けるから、どこかで同種のやつを見かけたら気を付けてな？」

召喚した主人であるベルからのその言葉でみんなが引きつる、引きつっていないのはフレイラたち、エルフの娘らくらいだ。

「大丈夫ですよ、召喚された存在は召喚主には忠実です、この戦闘では使ってくることは無いでしょう」

エルフチームがそう保証すると、少し安心した様子になり、少しずつ「やってみようか…」という空気になって来る。

そこでベルが口を開く、今後の方針として一番最初に認識しておい

てもらいたいことを納得してもらうためだ。

「こっちの世界での特訓って言うのは、主にこの世界で呼び出せる種類のモンスターを倒し続けることで、相手のモンスターの攻撃手段、それに対する対策、対応の模索、更にはその経験で難度を飛躍的に上げて行くことを目的に置いている。」

それぞれのメンバー同士での模擬戦もオススメだが、こっちの異世界では、その模擬戦の経験からは難度のアップは起こらないのは覚えておいてほしい。

その代わりに、モンスター相手では得られないようなスキルの組み合わせ、フェイントなどの戦術の組み立て、相手に合わせた戦い方などを考えて行うことで勝率を挙げていくことも出来るようになる。」

「そういう経験も貴重だから、機会があつて、それぞれの力量が釣り合つてゐるなら試してみてもいいと思うよ?」

そこまで言うと、少しだけ後ろへと下がるベル、そして右手を大きく空に掲げて「では準備はいいかい?」

その言葉で、9人のメンバーがそれぞれ、チームごとの戦いやすい陣形へと素早く位置に着く。

「それでは…はじめ!!」

決着は割とあつけなかつた、一番前衛として相手に飛び出したブレインが、少しではあるが「神聖属性」が含まれている自分の刀で、〈瞬間〉を発動させ斬りかかる…そうすると何故か徐々にコカトリスが弱っていく…というより動きが鈍くなっているような様子を不思議そうに見ていた彼だったが、今は戦闘中というコトもあり、今はそつちに意識を集中しようだった。

しかしその弱り方に思う所があつたベルは「戦闘が終わつたら、確かめてあげよう」と思っていた、なによりブレイン自身もその原因はまだわかつていないだろうから。

続けて、そのブレインの攻防を支援するのはエルフチーム、セピア

が自分の渡した木の矢で、ショットボウ「ボルカノ」を使って、溶岩弾を射出、その身を焼き焦がしていく。

弓を使っている間は魔法詠唱者として魔法の使えないセピアに変わり、デーネとルチルが支援魔法を唱える。

デーネは前線で戦っているブレインに「祝福されし護り」を使用、同様にフレイラも前線での戦闘に参加、スキル【獣の力】を使い、攻、耐久値（防御に影響）、速を上げ、鋭く伸びた爪を武器に使い、両手で2回攻撃を繰り返して出し、攻撃しながら素早く動いて相手を翻弄、かき回して対象を絞らせないようにしている。

ルチルは戦況を見守り、ヘッケランへと「土の守り」を使い、防御数値とダメージ減少率の向上という効果のある魔法を与え、ウインド・ガード「風の守り」も併用、万が一「石化のブレス」があつたとしても、最前線で戦っている、一番危なそうなヘッケランへと：その身に纏わせることになった空気の対流により、ブレスが直接身体にかからないようにするため、という意味で護りを固めてあげた。

そうすると、魔法の発動に応じて彼女のヤドリギの杖の先端に淡い光が灯り始める。

そこでどうやら第一段階の強化状態に入ったようだ。

ヘッケランが、ブレインとフレイラの動きに翻弄されているコカトリスに対して、「双剣斬撃」を見舞う、難度80の敵の為、なかなか深くに刃が食い込まないが：それでもダメージを与え続けている。

（やっぱり、毛皮や表皮である程度、剣の傷は軽く済んでいるようだが：普通のコカトリス相手に刃がほとんど通らなかつたエルヤーの攻撃力は、やはりあまり強くは無かつたんだろうな：それとも「空斬」という武技は距離が離れば離れる程、攻撃力が落ちるデメリットでもあつたのだろうか？：それも要検証：だな。）

中距離でヘッケランに「下級敏捷力増大」を発動したのはロバーデイク。

それでようやくヘッケランもコカトリス相手に有利に動けるくらいには素早く行動できるようになっていた。

アルシエは、「魔法の矢」で確実に命中させ、少しでもダメージの蓄

積を狙う。

イミーナはアルシエの護衛として敵からの視線がアルシエを捉えないように底いながら射線を維持している、普通の矢なので、牽制程度の役にしか経っていないようであるが…。

1ターン目の敵の攻撃、ハイコカトリスは突進からの頭突き攻撃を仕掛けてくる。

もちろん召喚主から、石化の嘴攻撃、及び石化のブレスは使用を認めない、つていう指示を受けているのでそれに従って行動する必要がある。

コカトリスは考える、誰を一番に攻撃するか…、可能なら一番ダメージを与えて来た溶岩弾の射手の方であるが、だが、距離があるし、自分とその射手の間には鎧を身に纏った神官らしきヤツがいる。

これでは直接そいつへ攻撃に行く前に何人もの敵に囲まれる。ならば斬り付けられて不調を感じた最初の剣閃を見舞ってきた剣士に行こう、と判断を下す。

そいつに的を絞って突進するも、〈領域〉を展開中のブレインは悠々と回避に成功した。

## 2ターン目

〈領域〉を展開していて、命中率も上がっているブレインはもう一度〈瞬間〉を見舞う、それは吸い込まれるようにコカトリスの脚へと到達し傷を作ったものの傷自体は深くない…、であるにも関わらず、2度目の攻撃でまたコカトリスの動きが鈍った。さつき斬り付けた脚とは逆の脚の為、両足ともちよつぴり傷ついたことになる。

次に、セピアの溶岩弾の矢がコカトリスの顔面に命中する。

顔面ではじけた溶岩弾は相手の目を潰すことになり、コカトリスも目つぶしを食らったのと同じ状態に追い込まれ、まともに攻撃対象を視認することが困難な状況に陥った。

そのタイミングでルルルが〈ソーン・バインド〉を発動、魔法とはかくも偉大なもので土も茨もないこの異世界でも問題なく発動した。

淡い光が先端の、六個の突起がある★のような形をした部分を包むモノから杖の頭全体を包む光になってくる。

強化状態の第二段階まではまだ少しかかるようだ。

体を茨のトゲに巻き付かれ、身動きが取れないコカトリスへと、フレイラが走り寄り拳を握る、そして装備している「焼けつく拳」<sup>バーンナックル</sup>がその身に届くと、それと同時に「熱波の炸裂」<sup>フレア・ブラスト</sup>の魔法付与の効果が発動し、コカトリスの体内で爆裂した。内臓やらなにやらを焼かれたコカトリスは、のたうちながら、茨のトゲを身体に食い込ませ、継続ダメージを受けている。

力づくでその拘束を引きちぎろうとしているようだが、魔法の茨で、しかも第一段階とはいえバフ状態からの発動だ、そうそう切れるモノではない。

そこでディーネが最近覚えたばかりの攻撃魔法を唱えた。

「ホーリーウェーブ聖衝波」がコカトリスに当たるも、神聖属性の為、ダメージは通つたものの、そこまでの威力はなかったようだ。

しかし、体内を焼かれているコカトリスの動きが弱々しくなっているのを見て取ったフォーサイトのメンバーは「ココが決め所」と判断する。

「レッサー・ストレンガス下級筋力増大」

ロバーデイクがヘッケランに向けて支援魔法を放つ、それと同時にアルシエは「ファイアーアロー火の矢」を撃ち出し、コカトリスの胴体に命中させた。ヘッケランがチャンスとばかりに立て続けに武技を発動させる。

「リミット突破肉体向上」 「リミット突破限界突破」 「リミット突破剛腕剛撃」

まずは肉体自体にかかる負荷に耐えられるよう、肉体の性能を上げ、体にかかる効果に耐えられるほど強くした後、自分の限界すらも突破させる能力をその身に課す。

さらに攻撃力を劇的に上げる武技を発動させてからの、「リミット突破双剣斬撃」へと移る体勢に入る。

コカトリスに向かうも、気合の乗った雄たけび、攻撃をする際に武技の名前を叫び続けた結果、その声で、視界の利かないコカトリスも、次の攻撃が目の前まで来ているのを察知して、カウンターを仕掛けようとする。

締め付けられてる茨で身動きはとれないが頭突きでの吹き飛ばしで応戦しようとしている。

しかし、それを許さなかったイミーナが殴打属性付きの特製の矢を使い、コカトリスの額を撃ち抜く。

一瞬だけ、クラリと目の前が揺らいだモノの、すぐに意識を立て直すが、それも遅い：そのわずかな合間で、高く跳んだヘッケランの上段からの〈双剣斬撃〉がコカトリスの首を左右から斬りつけ：斬り飛ばす。

その瞬間、ハイコカトリスは、光の粒となって、茨の拘束の中、姿を消した。



「さて、みんな：感触の方はどうだった？ 一応石化の方は使わせなないように指示を出しておいたんだが…」

「ああ、準備運動にはちょうど良かったが：さすが魔獣だけあるよな：とにかく、あの耐久力で石化のブレスなんて来たら遠距離だけが有効手段だな：接近戦なんてあまりにも恐ろしい…」

さすがのブレインも石化の対策まではしていないようで、〈領域〉の武技を使って避けても吐き出した石化ガスに触れば：という状況を考えると近づいて戦うのは自殺行為だと思っっているようだ。

そんな空気の中、ヘッケランが沈んだ空気を換えようと違う話題で雰囲気軽くするため話し出す。

「そういえば聞いたか？ エンリ村長さんから聞いたんだが、最近エ・ランテルで新しくアダマントタイトの冒険者チームが現れたらしくてな：この前エンリ村長さんも助けられたらしいぜ？ その英雄に。」

「へえ：いきなりどうしたの？ ヘッケランそんな話なんて持ち出してきて…」

「いや、それがな：その人「漆黒のモモン」って名前なんだが：、その英雄譚の1つにギガントバジリスクの討伐って言うのがあってな？ なんと2人のチームなのに、モモンってやつが一人でギガントバジリ



スクを討伐したらしいぜ？」

「それは…すごいですね、青の薔薇という人たちも恐らくチームで戦わねば恐らく難しい敵でしょうに…それを一人とは…石化対策もされていたのでしょうね…」

「それがな？…それでもないらしいぜ？」

「…どういうこと？」

「その話では貴族の坊ちゃんの護衛を頼まれて、ゴブリンを倒すお坊ちゃんの度胸試し…っていうか成人の儀式？…みたいな手伝いを頼まれて依頼の遂行中に遭遇しちゃったらしくてな、そういう準備も全くしてなかったらしいんだよ」

「それは…不運でしたね、冒険者というのもワーカーというのも悪い時は悪いことが重なることもありまますからね…。」

「で？…ヘツケラン、そいつどうしたのよ、まさかその坊ちゃん連れて逃げ切れたからすごいって話でもないんでしょ？」

「もちろんだって、その坊ちゃんと、お付きの護衛役だって居たらしいんだが、二人とももちろん「逃げましょう」って結論だったんだよ、当たり前だよな、…でもな、そのモモンって人はこう言ったんだってよ。」

少しの時間タメの時間を作り、言い放つ。

『石化の視線など…レジストしてしまえば何も問題はありませんよ』  
…だとき。

「それでお坊ちゃんたちが逃げてる間、自分だけで足止めを買って出て…「足止めはかまわないが、アレは別に仕留めてしまっても構わないだろう。」と軽く言っただけらしい。

「それだけですか？ たったそれだけの理由で…、一瞬の失策が命取りになるギガントバジリスクを…たった一人で討ち取ったと言うのですか？」

「ああ…俺たちにやるとても真似できねえ…もはや芸当でも何でもねえよな……どんだけなんだって話だろ？」

「だが…そうだな、そうでなきやな…」

そんなヘツケラン達の話の聞くとはナシに聞いていたブレインが

そうつぶやき始める。

「どつちにしたって、俺が進む道は一つだ、ただただ、目の前に立ちほだかる背中に手が届くように自分を鍛えていくしか、そこに到達できる道はない…そういう事だよな…」

すつと立ち上がり、誰に言うでもなく、自分の中で決心の表れのように言葉を紡いだブレインの言葉に…。

「ま…そういうことだわな…」

ニヤつと笑いながら同じように立ち上がるヘッケラン。

「私は…みなさんの足手まといにならない程度には自分を鍛えておかないといけませんね。」

やれやれという顔で立ち上がるロバーデイク。

「ホント、男つてワケわからないよね…アルシエ?」

と、イミーナ。

「…その言葉、今なら少しだけわかる気がする…」

という話が展開される中…。

実は今の返事は半分は生返事だった…、それと言うのもさつきまでアルシエは別の考え事をしていたからだ。

何故なら何か聞き逃してはいけない何かを聞いた気がして、気になつていたので…だがそれが何なのかピンとこない。

(なんだろう…何に今、引つかかったんだろう…忘れてはいけないよ  
うな…前にもこんな思いを抱いたような気がする…その時も同じよ  
うに思い出せなかった…)

そんな風に悶々としている中、ベルの方から、質問が投げかけられる。

「皆さんの中で、ちなみに力が湧いてきてるくみみたいな感覚を感じてる方は居ませんか?」

「ハ〜イ! ハイハイハ〜〜イ!! わつたし〜♪ ヴェールさあ〜ん、わつたし〜♪」

勢いよく手を挙げるのはセピア…まあ、彼女が一番平均ダメージは高かったしな…ボーナス経験値でも加算されてのレベルアップか? と思うも、その前にやることがある。

すす…とセピアの前まで進み、目の前まで立つとおでこに縦チョップを見舞う。

「ゴ…と鈍い音が聞こえると…「なあ…今、すつげえ音したよな？」と、ブレインがヘツケランに言葉をかけた。

「ああ…女の子にチョップしたぞ？チョップ…いったそうだったな…。」

「いったあ〜い！なあにするんですかあ〜くヴェ」

そのタイミングでそれ以上言わさず今度はチョップの手の形のまま、手刀でノドをズビシ！と突いてやる。

「あれは…容赦ないですね…」

「ギユブフウ！」と表現したらいいのか、何とも言えない声を口からだし、ノドを手で押さえている。

（これは傷を治すキュアウーンズじやなく症状が少しは緩和する方のヒーリングの方がいいですね）

と判断し、森祭司のルチルがセピアに〈ライトヒーリング軽症治療〉でノドの痛みを治してやると、ノドをさすりながら「ありがとう」と言っている、少しは良くなったようだ。

そのやり取りを見ながらベルがふと目を向けると、ルチルのヤドリギの杖、その先端にある球状の、密集した植物の繭のようなものが、丸々白く輝く光に包まれていた。

（ふむ…敵との戦闘以外でも…治癒魔法でも使用した魔力に応じて効果が累積…、バフ効果も発揮するのか…それも面白いな…）

なんて思いながら、セピアにはちゃんとやって聞かせないと…という認識のもと軽く説教。

「お前はちゃんと考えてから、私の名を呼ぶように…セピア、勝手に今の私の名前を伸ばして呼ばぬようにな…」

そう言いながら、こめかみに指を当て、セピアに〈メッセージ飛言〉を飛ばしてツツコミを入れる。

『この姿の時はずっと「ベル」だって名乗っていただろう…せめてそこは察してくれセピア…』

と言ってブツリと通信を切る、そうすると「ううう…すみません。」

と返って来た。

「まあ、良しとしよう、それで？ 成長でもしたか？」

と、今度はさっきのような重い含みの声ではなく、共に成功を祝う家族のような声。

「ハイ！ 一個上がったんですけど、一つ…【遠射の一撃】っていうの…覚えてたんですけど…なんですかね？」

「ああ…魔法詠唱者として成長してくれたかと思ったんだが、そういえばレンジャーとしての戦法しか使ってなかったからな、レンジャーが成長したのだろう。 ちよつと待つてな？どれどれ…」

懐から「百科事典」エンサイクロペディアを取り出し、ページをめくる。

（自分はレンジャーは覚えてないけど、PVP用にどんなスキルがあるか、とかは公式に書き込まれてたwiki情報なんかをココに書き留めておいたと思った…が…、あつた、これか…）

『遠射の一撃』…スクリュー状の回転を武器に与えることで推進力が増加…射程距離20%up、命中も同様に20%up、さらに刺さりながら捻じりが加わることによりダメージ10%up…か、まあ、矢の攻撃や、刺突武器のような「突き」の手段に命中率を上げてくれるようなものらしいね…さすがに刺突武器で射程を伸ばしてくれはしないだろうけど…」

「できれば、魔法とかそつちの技とか覚えてたかったのにな…。」

「それなら次はコメントロッドを使えばいいんじゃないか？次は難度90に挑んでもらうんだし、戦闘開始早々、第3位階の彗星でも墮とせばそれなりのダメージは通ると思うぞ？ まだMP使っていないだろ？」

「そうですね、ハイ、そうします!!」

花が咲くような笑顔だ、次のレベ…じゃなく難度アップで1つでも魔法を覚えられるようなら今後の戦い方の幅も少しは違ってくるだろう。

「さて、ちなみにアングラウスくんは、気になることがあるんじゃないのかな？」

「あ？ ああ…まあ、な…わかるか？」

「さっきの戦いでボクも気になっていたからね…ちよつとだけ、武器を貸してもらえるかな？」

「ああ…頼む。」

ブレインからの武器を受け取ると アプレイザル・マジックアイテム〈道具鑑定〉と ディテクト・エンチャント〈付与魔法探知〉を発動させる。

「ふうむ…神刀、属性神聖、低位魔法効果、物理障害に対する斬撃効果20%向上、物理ダメージ5%向上、および一時的効果+10%、非実体に対し30%のダメージ効果、クリティカル率10%上昇…か、どうやら気になる要素はこっちの武器の方ではないようだ。」

「それではアングラウス君自身の方かも知れないから、そこを調べることにしよう。」

そう言うと、ベルは自身の持つ魔法、アインズからも…かつてモモングだった頃に「覚えておいた方がきつと役に立ちますよ」と助言されて覚えた魔法、あの頃はダメージを大きく与える魔法ばかり覚えていたよな…と思いつき出しながらその魔法を唱える。

〈職業構成の精髓〉

すると、己の中に浮かび上がってきた情報…その中で見つけた初めて見るクラス名、それで原因に思い至る。

この魔法はどんなクラスを持つているか、という表層的な情報しか判別できない、そのため、どんなスキルを持つているか…魔法は覚えるのか？などは自分の中の情報だけが全てであるため、ぷにと萌えやモモンガたちにも折に触れ、情報の価値について聞かされていたため、調べてはいたが…こんなクラスがあるとは聞いていなかった、きつとこの世界に対応した結果の職業だろう。

「わかったぞ？アングラウス君、キミに新しいクラスが発生した、そのため先程のコカトリスはクラス由来の効果で不調が起きた…と言うのが原因だろう。」

「俺に…？ 新しいクラスが？ …どんなのだ？」

「ああ…それがな…『カースドスラッシャー』という職業だ、恐らく「呪われし抜刀者」とかいった意味だろう」

「呪われた…そうか…それでか…」

「ああ、多分その刀だけでなく、アングラウス君の使用する武器なら全て「負のダメージ」を与えられるようになったんだろう…だが、…いや…そうなるか…」

「なんだよ？ 自分の中で考えてないで俺にも教えてくれよ、そんなに考え込むような不安要素でもあるのか？」

「いや…キミの武器は神聖属性が付与されている、だから相手がアンデッドとかであった場合は、武器の特性によりダメージは少し上乘せられるだろう…だがキミはクラス能力のせいで「負の攻撃」を取得してしまった。…つまり、アンデッドを例にあげると、弱点の神聖ダメージを与えることは出来るが、その直後、「負のエネルギー」を相手に与えることにより、アンデッド特有の「負のエネルギーネガティブ・エナジー」による回復という効果を与えてしまう危険性が出てくると…まあそういう心配が浮かんだだけだ。」

「それじゃく3歩進んで2歩下がる的な攻防じゃないか？ それに自分が使う武器なら…ってことなら、どんな武器にしても結局、相手を回復させちまうってことなんだろう？」

「まあ…それなんだが、その能力は〈スキル〉と呼ばれるものでな？あと少し、経験を積んで、クラスLVが上がれば…「負の属性」を任意でカットすることも出来るようになるはずだ…だから、今はそこまで気にしなくてもいいじゃないか？」

「そうか…それならいいんだが…」

「まあ生物に対してならどつちかは問題なく効くんだし、ひよつとしたら…負の属性が普通に通って、神聖が弱点っていうモンスターが居ないとも限らないしな、悪いことばかりじゃないかもしれないぞ？」

それにその逆のパターンもあるかもしれないし…とにかく悲観することは無い。攻撃の選択肢が増えた。と思えばいいよ」

(ま…LV27の…普通のコカトリスより1ランク上って言ってもその程度のレベルだし、経験値も9等分ならそんな大きな収穫にはならなかっただろうしな…)

「他のみんなも難度が上がったとしても別にボクに言わなきゃならな

いってことはないんだけど…チームメンバー同士での相談くらいはしていいよ？ あと少し休んだらさっそく本題の「難度90」に挑んでみるからね。」



しばらくの休息を入れて精神力（魔力）も回復して、ライフの方も全く減っていなかった面々はいよいよ難度90という難敵に意識を向ける。

「さて、いよいよだけど、装備品の変更はナシでいいのかな？」

一応尋ねてみるも「大丈夫だ、いつでもいいぜ？」とブレインはやる気満々だ。

他のメンバーたちも特にこれと言って何かを言い出す様子はないので、そのままでもいいんだな、と結論付け、パネルの操作をする…「レベル30」にセットすると、ちょうどレベルが30のモンスターの名前が表示される。

（うん、これは面白いかもしれない…）

どういう戦い方をするだろうという感想を持ちながら、「決定」の操作をする。

「みんな！ 一応これから呼び出すのは、正式に呼び出されるモンスターでボクが召喚するものとは別種だから…本気で戦わないと死んじやうかもしれないから、気を付けてね？」

と言うと、みんなの構えが強いモノとなる。

（もちろん、呼び出したヤツがこっちに来るという可能性もあるが…そうになったら、相手をするだけのことだ。）

そう思っていると、メンバーの目の前に黒い球状のものが渦を巻き、そこからなにかが這い出てくるのが見て取れる。

何が出てくるか知っているベルは気楽だが、一同は気を引き締めて待ち受けているだろう…と思っていると、その全貌が明らかになる。

炎をその身に宿し、その身の周囲にも炎を纏わせる成人男性の手首から肘くらいまでの大きさのトカゲのようなモンスター…それは冒

険者をしていても滅多にお目にかかれないモンスター：サラマンダーだ。

自分の居た元素界からいきなり呼び出されたサラマンダーは不機嫌だった。

こっちの都合も考えずに好きな時に呼び出し、勝手な要望を押し付ける：召喚主と呼ばれる者には良い印象などは無かった。

呼び出されたからと言って相手の意のままに振る舞うつもりのないサラマンダーは、敵意の咆哮を上げる。

目の前の存在達もどうやらこっちを使役するために呼び出したわけではないようだ：、一様に戦闘態勢をとっているのは分かる、もちろん敵意を向けられていることもだ：ちようどいい、憂さ晴らしに相手をしてやろう：という意識の外、自分の横にはやる気のなさそうに、変な扉に寄りかかる者が居る。

なんだ、あいつは：こっちを相手する訳でもなく、友好的と言う訳でも、敵対するつもりもないようだ：

どちらかと言えば無関心：と言った方が近いだろうか：まあ、それならいいだろう、一番後回しにすればいい。

そう意識を切り替えたサラマンダーは、敵対的な対応を見せている者達に向き直り、戦闘開始の雄たけびを上げた。

## 第1ターン

戦闘開始早々、その姿を見てから手段を講じていたのはディーネだ。

雄たけびを上げられる前から詠唱の準備に入っていたため、雄たけびの直後に間に合った、その魔法を唱える。

〈マーシーレイン恵みの雨〉

ディーネがそう唱えると、サラマンダーの頭上に揺らめくモノが発生し、そこからキラキラと煌めき、炎の身体を形づくるサラマンダーに降り注ぐ。



癒しの雨とも言えるその魔法は、光りの属性であると同時に水の属性の魔法でもある。

降り注がれるその魔法で炎の勢いを抑えられてしまい、現れた時に比べると、少し炎の勢いが弱められたように見える。

体力の方は、最初から満タンなので、回復の恩恵は全くない。

ただ炎を消すほどの威力は無く、まだサラマンダーの方がレベルは上の為、少しだけ弱められた程度で終わっている。

その次に控えていたのはセピア、先ほどのアドバイスに従い、準備をしていた彼女は手に持っていたコメットロッドを振りかざし、全魔力の半分を使い第3位階分まで引き上げた「彗星」の準備をする。

「コメットインパクト！」

それは、サラマンダーの頭上から垂直に落下してくる隕石のようなモノ：それは狙い<sup>あやま</sup>過たずにサラマンダーを直撃：しかし炎属性＋殴打の効果では、炎のダメージは最小ダメージしか通らず、殴打の方しか十分なダメージは与えられない。

だが、彗星自体の主成分は氷などで形成されている。

炎の属性はあくまで、飛来落下する際に起きる空気との摩擦熱で起きる「熱」からくるもの、必然的に、「氷」属性もその彗星には含まれている。

その分のダメージは問題なく通ったようだ。

フレイラがブレインに プロテクションエナジー・ファイヤー へ火属性防御を唱える。

ルチルは エレメンタル へ自然の精霊召喚 Is t を発動させ、レベル6の水の精霊を召喚し、ヘツケランに「水のベール」をかぶせ、炎ダメージの軽減効果を与えていた。

ヘツケランが行動する前にロバーデイクも行動を起こす、ブレス 祝福の魔法を使い、ヘツケランの持つ、魔法の攻撃が出来ない普通の武器に少しでも魔法の恩恵を乗せるも、攻撃力自体はそこまで高くはならない為、ノーダメージよりはマシだろう程度に思っていた。

「悪いな、ロバー！」

「いいんですよ、このくらいしかできませんからね。」

アルシエはマジックアローを唱える。

本当は先程のコカトリスとの戦闘で、新たにファイアーボールを覚えていたのだが：炎の精霊に対しての効果はまず望み薄だと判断し、まだこっちの方が：との判断でそっちに切り替えていた。

3本の魔力の矢がサラマンダーに刺さり、精霊の呻きが聞こえる。イミーナは、自分の持つアイテムでカルネ村に来る前、帝都での市で買った物を取り出す。

魔法のクラスを取得していない自分では精霊種には効果的な行動は出来ないことに歯噛みをし、少しでも何かできないかと思い、考え付いたのがそれだ。

それは滅多に出回ることの無い貴重な品、錬金溶液を作る際、わずかに残った溶液の下に残る沈殿物、そこに集まってしまった純粋な魔素、それを一滴一滴、つまり溶液一容器につき一滴。

それをかき集めることでポーション瓶一本分になったそれこそ、「錬金魔化溶液」一度使用したら使い切りだが、それでもその溶液をかければ使用する武器に魔法の付与を持たせることが可能なのだ。

特に炎や、氷結などといった効果は、この瓶には込められていないが、それでも武技「戦気梱封」と同等の攻撃力向上効果は見込めるはずだ、という主人の口上を信じ購入した。

(普通のヒーリングポーションの5倍の値段が使い捨ての魔化手段で終わってしまうのはもったいないけど：死んでしまつては元も子もないしね…、効果はそれなりに持つみたいだし…)。

「ヘツケラン、武器にこれを…！」

と言って、ヘツケランのそばに寄つたイミーナが彼の武器にそれを注いでいく、2本の剣、それぞれにだ：瓶は1本しかないのです、これで効果が半々になどならなければいいが：と思うイミーナをよそに、そんな不安すら気にしていないヘツケランが感謝を口にする。

「ありがたいな、これで何とかなるかもしれない」

「いいよ、その代わりちゃんと活躍してくるんだよ？」

(本当は矢を束になるように一つかみにして、全ての矢の先端にかけてやろうかとも思つてただけだね、矢の本数分、効果が割り引かれ

たんじや、効果が期待できないのと同じだからね…それならヘツケラの武器の方がまだ望みはあるってもんさ)

(フォーサイトはここで1ターン目の行動終了。)

フォーサイトのメンバーが悠長にそんなことをしている間に、ブレインが囮役を買って出ていた。

炎対策をされていたブレインは炎の弾、矢、などを己の武器に宿る力…さつき刀の鑑定をもらった時に聞いた「低位魔法効果、物理障害に対する斬撃効果20%向上」と言う部分に望みを込め、敵から撃ち出された<sup>ファイアーアロー</sup>火の<sup>ファイアーバレット</sup>矢をその刀の横の部分をナナメに構えることで後方にそらす。へ火の弾を上段から切り裂く、そのままの勢いで迫ったブレインは神聖属性が宿り、ついでに負の効果も与えられるク拉斯の能力により、刀は実体だが、属性効果でジワジワとした効果をサラマンダーに及ぼしていた。

サラマンダーは少しイライラしていた…なんだこいつらは…ダメージを満足に与えることも出来ないくせに、チマチマ、チマチマ…チマチマ、チマチマと鬱陶しいことばかりしてやがって

…これじゃ憂さ晴らしどころかストレスが溜まっていく一方じゃないか…と思うも、忌々しいのは最初に水の効果の魔法が使われたことだ…、まさか最初にあれで勢いを削がれるとは予想外だった。

だが、今の所、要注意なのは目の前まで来ている刀を持った剣士だろう、小癩にも非実体に対する攻撃が出来る武器を持ってやがる…。

純粹な魔素から身体を構成している自分には魔化されたものや、魔法でのダメージ、それから…伝説の魔法武器くらいでしかダメージは通らない…だが非実体にも効果がある武器は例外だ。

そつちでも攻撃のダメージを素通りさせることは出来ず、損傷は蓄積されていく…。

ならば、目の前の剣士に集中すれば…

…という認識の元、ブレインにサラマンダーの狙いが定まる。

「嬉しいね、こっちに來てくれるかい？ それなら遠慮なく…腕試しと行こうか！」

それからはブレインとサラマンダーとの勝負のようなものだった。宙に浮かびながら、重力の問題など無視するように縦横無尽に立ち回るサラマンダー。

それに〈領域〉の効果で対応し、躲し、身をよじる。

敵が牙を突き立てた時には、その口に刀の刃を押し当て、噛み付かれないようにする。

爪の攻撃は、その刀さばきで弾いていく。

爪を弾きながら一閃。

口に刃を当てながら引いて斬る。

サラマンダーも応戦して、距離を置いてからその身の炎をかき集め、〈炎の翼〉フレイム・ウイングを自分を中心に円形に広がらせ、炎の奔流を叩きつけるものの、炎属性の防御が宿っているブレイン。

さらに、ルチルが呼び出した…まだレベルは6しかない水の精霊が周囲に水蒸気、霧を展開させている為、炎の状態も呼び出された時の半分近くにまで落ち込み、望んだような威力は発揮できなかった。

（あの水の精霊もいい加減、鬱陶しいが…だが所詮はレベル一桁台…オレが本気を出せば、なんて事は無い、その気になればいつでも始末は出来る…だがこの剣士との長期戦は不利…今も負のダメージが蓄積している…攻撃の速度も思ったような速さではなくなっている…すでに攻撃も見切られてる…）

一見、サラマンダーが不利に見えるが、ブレインも炎の防御がいつまで続くかわからない為、出来れば早く決着をつけたい気持ちがあった。

とは言え、刀としてのダメージよりも「非実体への攻撃」の効果でしかダメージを与えられていない実感がある。

これでは、自分のとっておき、「秘剣」の方もあまり期待は出来ないだろう。

ここで両者は思った、「お互いに決め手に欠ける」と…。

膠着状態に陥った彼らの間に入ってきたのはフレイラだ。

彼女はブレインの横に来て、耳打ちをする。

それはサラマンダーには聞こえない内容だったが…

「そうか…少し不本意だが、今の俺では決め手に欠ける…このままジワジワ押しきるように削り合つての勝利は、まるで泥仕合のようで好きじゃない…、キミの好きにしてくれ…」

そう言つて刀を仕舞う。

「すまないな、本当は最後まで決着をつけたかったんだが、この娘さんがキミの相手をするそうだ…無事だったらまた、戦おう。」

そう言い残して、その男はあっさりと味方の方へと歩いて行く。

なんだ、この女は…オレの憂さ晴らしにケチをつけやがって…許さねえ…こんなやつ…と思つて、挑みかかろうとして…

首をつかまれた。

フレイラのレベルは50

純粋なレベル差がある上、元々獣人種であるため、素早さも他のステータスより上、さらに【獣の力】によつて素早さも底上げされている為、気が付いたらサラマンダーは首をつかまれ、高く持ち上げられていた。

「すみません…ベルさま…少し試してみたいことがあります…私の勝手な行動をお許してください。」

（珍しいな、あの子が率先して、そんなことをし始めるなんて…何をするか気になるな、見守ってみるか…）

「ああ、気にすることはない。好きにするといい。」

ベルがそう言うのとフレイラは感謝の言葉を返し、吊り上げたままの手でもがき、困惑しているサラマンダーを見上げた。

(なんでだ?なんでこのニンゲンは…私をつかめる…自分は魔素で作られた体、物体としての身体構造はしていない…しかも掴まれるなど…)

「不思議ですか? 自分が掴まれていることが…簡単です、この身に  
プロテクション・エナジー・ファイヤー  
〈火 属性 防 御〉を使つて火傷しないようにしているのですよ…  
そして、私は非実体の存在に特化したスキルを使えます…そう…  
アストラス・タツチ  
【星幽体の接触】というモノです。」

(なんだと…それは…そんなの…知らないぞ…今まで、そんなのを使える奴に、会つたことなどおお!!)

「ああ、知らなくても仕方ありません、これはあまり人気のある能力ではありませんでしたからね…さらに、こんなものとも組み合わせることも出来るのですよ?」

そう微笑むと、サラマンダーを掴んでいた…接触している手から何かが吸われる感覚がサラマンダーを襲う。

(なんだ…なにをしている!! なんのつもりだああああ…)

「ああ、勝手にすみません、あなたのエナジーを搾り取らせてもらつてます。スキル【魂の吸い上げ】つてやつですね、これはソウルステイラーのスキルの1つ…そしてその二つ目がこれから使うスキルです…」

(やあああめえろおお!! オレの…俺の身体を構成する魔素があああ…)

「すみません、大切に流用させていただきますので…成仏…と言つて適切なのでしょうか? 精霊さんの場合は…まあいいでしょう…安らかにお眠り下さい」

【生体濾過】

そのスキルを使うと同時に、今まで吸い上げていたものと、現在吸い続けているモノが全て彼女の身体を通し、純粋な魔力(魔素)、炎の元素、負の元素とそれぞれ分けられ、彼女の意志の通りの場所から排泄されていく。

「失礼…」

そう言うとき彼女は手持ちのバッグの中から、空になったポーション瓶を3本取り出し、目頭に瓶の口をあてがう。

すると、その目から色のついた液体が涙のように溢れ、瓶の中へ注がれていく。

もちろん逆の方の目からもだ……。3本目の瓶には、また、1本目の分を注ぎ終わった方の目から涙のように瓶に注ぎ入れていった。

「ハイ、終了です、ありがとうございました。」

ポカンとしているメンバーたちの中、手に持っていたサラマンダーはすでに姿を消していて、その手にはひっそりと「火の元素石」が握られている。

「あ……………」

フレイラも一瞬、呆気に取られながら……ベルに報告に行く。

「ベル様……サラマンダーを倒しましたら、このようなものが現れましたが……これは、ユグドラシルのドロップアイテムだったりしませんか?」

「なに!!!」

フレイラからその石を受け取り、アフレイザル・マジックアイテム〈道 具 鑑 定〉を唱える。

「これは……たしかにそうだ……まさか……この異世界空間では、ユグドラシルのドロップアイテムが落ちるようになってる世界だということコトか……これは……貴重かも知れん……」

「なあなあ……なんかあったのか? 色々聞きたいことが山積みなんだが……聞かせてもらってもいいかな?」 所在なさげにヘツケランが遠慮がちに聞いてくる。

「ああ、済まない、ついこつちの話で意識を持っていかれてしまった。

ところで聞きたいこととは何かな? 一つ一つ、可能な限り答えてあげよう。」

ベルがそう告げると、メンバーがベルの周りに集まる。

そして、サラマンダーがどうなって、ああなったのか、倒せたのはどういう仕組みか……さっきの涙みたいなのはなんだ? という質問から、なんで掴めたんだ? とか熱くないのか? などと言った質問まで……

それぞれが知りたい問題が乱れ飛んでいた。

「それでは、私がわかる範囲で答えよう。」

とベルが言うと、皆、目を剥いて注目してきた。

「彼女は…カルネ村でも見たと思うが、非実体の存在に対して働きかけることが得意な職業も有している、そこは分かってくれるかな？」

そういうと、今の今までそこはスポンと忘れていたらしく、「あああ!!」とみんながその時のことをようやく思い出せたようだ。

「それで、そのことを踏まえてなんですが、さつきもアングラウス君はフレイの魔法によって、プロテクションエナジー・ファイヤーへ火属性防御をその身にかけてもらったと思うんだが…熱さやダメージなど感じなかっただろう？」

「ああ、それはその通りだ、ダメージらしいダメージは通ってこなかったな。」

「それもそのはずさ、フレイはサラマンダーの難度の1.5倍以上の実力があるからな、レベル差で完全に遮断できていたというコトさ。」

「なるほど…それで？サラマンダーを手づかみにするって離れ業に關しては？」とロバーデイク。

「それも非実体の存在に働きかけることに特化した職業由来の能力だね、「魂への接触」と言ったらいいかな？ 実体がなくても触れる技があるんだよ。」

「それで？ あのサラマンダーは、なんで急に消えちやつたのよ？」

「それは【魂の吸い上げ】って能力で、接触してる相手から「魂」と呼ばれるものの構成物質をまるごと吸ったりすることが出来る。それを【生体濾過】ってスキルで濾過してそれぞれの純粋な魔素やら火の元素やらに変換したってことさ、詳しいことはわからないだろうから、「濾過」について聞きたかったら、ンファイア君が一番良く知ってると思うぞ？」

（本来はどつちも吸い上げてHPにしたり、濾過してMPにしたりっただけだったんだけどな…。）

「それで…さつきはなんで涙を…その瓶に？」とアルシエ。

「それは私から話しましょう…その私の身体を通して不純物を取り除き、超純粋な…わずかな混ざりも許さない性質に変え、それを液体に



して、体外に排出したのです。」

「え？それだけの理由？」 不思議そうな顔になるイミーナ。

「はい、本当であれば人体から出せる部分であれば、どこでもそれは可能なのですが…その…見た目からしておイヤでは…ありません？」

「え？何が？」 何のことかわからないという風なアルシエ

「例え、混じりけのない液体だと分かっている…その…鼻ですとか…口ですとか…耳から出したり、さらには下の方から出された液体を…それをポーシヨンになどされたら、みなさんはそれを身体にかけたり、飲まれたり…そういう気分になりますか？」

「あああ…わかった、やっと納得した」とイミーナとアルシエ。

「ところで…とりあえず…戦闘は終わりましたが…みなさんの調子はどうでしょう？何か変わりがありますか？」

そこからメンバー同士の情報交換が成され、ベルリバーは「火の元素石」を手に持ち、じつと眺める…

(このことも、後でアインズさんに報告した方がいいのかな？…した方がいいだろうな…まさか…こんな手段でドロップアイテムが手に入るとは…)

できれば、ワクワクしたこの気持ちのまま、すぐにでも報告したいと思うベルリバーだが…、今そのことを言つて「仲間に入れてくださいよ」なんてアインズが言ってきた場合…守護者達も護衛で一緒に来るだろうことも考えられる…そう考えると気が重くなるし…まさか今さらこの姿を辞めて別の変装になんて…難しいよな…、という結論を下す。

そして、結局「やっぱり今はやめておこう…」と思い、このことは先延ばしにしておこうと強く心に留めるのであった。

## 第40話 みんなで特訓、レベリング！「装備の選択？」

「やはり、この世界で倒す敵からはドロップする何かが出てくるらしいな…。」

その後、みんなには遠慮してもらい、ベルはパネルの操作をし、2体程サラマンダーを出現させ、フレイラに同様の手段で対応してもらっていた。

「しかしベルさま…私から言い出したコトとは言え、一概にそうとも言いきれないのでは…」

主人を期待させて、結果そうではなかった時のことを考えて、間違いであった時の可能性を主であるベルに示唆するも、「その時はその時だ、この精霊からこのような物がドロップしたのは事実なんだから仕組は解明しておかないとな…」と嬉しそうに言われてはフレイラ自身もそれ以上は何も言えなくなってしまう。

とは言え、しっかりと左右の手に一体ずつサラマンダーの首根っこをふんづかまえ、全力ではない【魂の吸い上げ】でちゆるちゆるとすすりながら、「火の元素石」という物の情報を、両方の精霊から詳細に引き出させ、精査を行なっている。

どちらかがつじつまの合わないことを言えば、例え、どちらが虚言を用いているようと両方から精霊の命とも言える魔力（魔素）を少しずつ吸い取っていき、相手に圧力をかけていた。

サラマンダー曰く、「火の元素石」は、火の元素界にある石で、長い間、火の影響下にあつた石に意思が宿った結果、それが「火の精霊石」となりそれが「コア」、つまり「核」となり…、火の精霊が生まれるのだ…、というコトの様だ。

以上のことを総合的に判断すると、「核」ではなく「元素石」になつたというコトは…フレイラが限界まで吸いすぎてしまった結果、意志の宿る前の状態にまで戻ってしまったから…と言うことらしい。

（ああ…だからレアリティが30LVからドロップしたのにHN（ハ

イノーマル) 止まりだったんだな…)

「これが精霊石なら…武器と組み合わせで炎属性付きの剣とか…腕輪や指輪にセットして防御や、攻撃にとか…そういった使い道もあったんだが…な、まあ、しかたない、ヒマを見つけて気長に炎の中に突っ込んだりして様子を見るか…。」

そうブツブツとつぶやきながら、ベルは首をつかまれたままのサラマンダーらに向き直る。

「それで?…お前達はコレのように元素石にまで戻りたいか?…それとも…精霊石に戻って全面的に支配下に入るか…どれを選ぶ? 他  
の選択肢では、ココで他の者に倒されて、元素界に還る…という選択  
肢もあるが…、そうなると彼らの経験値にもなるしキミらは元の世界  
に還れる…まあ好きで痛い想いをしたいのであれば止めはしないが  
…。」

(意志が宿った「精霊石」になるなら、石の状態になってもこっちからの  
の問いかけや指示、命令は通じるだろうから、支配下に入るなら入る  
で…、ナザリツク的には美味しくはないが…彼ら…フォーサイトの戦  
力アップには貢献できるだろう…)。

しばらくの休憩時間が訪れ、意図せずヒマになってしまったフォー  
サイト、エルフチーム、ブレインは思い思いの会話を繰り広げていた。  
「なあ…俺はさすがに炎の精霊とかは戦った事ないんだが、石に変わ  
るってというのは普通に起こりうる事なのか?」

「さあ…それはどうだろうな…さすがに俺たちの方も帝国の闘技場で  
だって、自然界の精霊様と戦わされたことはないからな…エルフの嬢  
ちゃん達はどうか?」

「ワタクシ達もそれは同様です、シャーマン系に特化したクラス構成  
をしているなら分かりませんが、そうでない場合、接触…というより  
関わりを持てることなどまずありえない事なので…ましてや戦うこ  
となど…」

「まあ…そうだな…となると、今あのベルってやつが知りたがって  
いるのはもしかしたらドえらい発見の歴史的瞬間に俺たちは立ち

会ってるのかもしれないな…」

などと口々に話していると、ベルがフレイラと共に戻ってきて、赤色に鈍く光る輝石を2個持ってきた。

「やあすまないね、みんな待たせてしまつて、とりあえず話をついたよ。 私たちに協力してくれるという確約はもらえた。」

「ええ？ サラマンダーを従わせちまつたのか？ どんな魔法を使つたんだよ？」

（従わなかったら、魔力を吸い尽くしてやつてもいいんだぞ？ つて遠回しに言っただけなんだが…そこは伏せておこう。）

「いや、ただ単に誠心誠意、見返りはちゃんと与えるようにするから、その代わりにこちらにも力を貸してほしいとお願いしただけだよ？」

ヘッケランは疑いの目を向けているが、ブレインの方は納得はしていないが、理解はしたようだ。

「それで？ そいつら、どうするんだ？ まさか一緒に修行するつて訳でもないんだろ？」

「ああ、先ほどまでの戦いを見る限り、急務でやつておいた方がいいのはフォーサイトのみんなが使う武器とかの強化かな…と思つてね。」

「へえ…そいつはありがたいが…その精霊が力を貸してくれる見返りつて何だい…それを聞かない事には安心はできないんだが？」

「ああ、三つほどあるんだが、そのどちらも守つてくれればそれ以外に要求するつもりはないそうだ。」

「なんだい、その三つつて…」

「二つ目は、自分と同じ炎の精霊に属する者で、自分より上位の精霊と戦わされるのは勘弁してもらいたい、ということだ、それ以外の相手なら特に抵抗はないらしい。」

「二つ目は、精霊石となつて武器や防具、アクセサリなどに組み込まれた場合、自分で炎の魔力を充填する手段は持ち合わせていないそうだが、だから一日に一回、少なくとも一時間、多ければ多いほどいいらしいが、炎の中で休ませてもらいたい、と言っている。」

「それで？最後の三つ目はどういう条件を言つてるんだ？」

「簡単な事さ、彼ら、精霊に対する態度で、ドレイのようにこき使うような態度はやめて欲しいそうだよ、使うたびに尊敬しろとは言わないが、協力者としての感謝の念は持ち続けていて欲しいそうさ。」

「そんなことか…それならお安い御用だ、もちろんその三つはどれも叶える事は約束しよう…ところで魔力の限界っていうのはそんなにすぐに来ちまうものなのか？」

「そうだな、これはサラマンダー達が今、教えてくれてることだが、状況によりけりだそうさ、例えば火の気がない普通の場所で火を灯すくらいならそんなでもないらしいが、水中で火を起こそうとするのは無理で…同じく、周囲を水の気に囲まれてる海底神殿みたいな場所で炎を作るのも必要以上に魔力を消耗するらしいし、そのままの状態を維持するのも同様に魔力の消耗が激しいらしい。松明や焚火の近くでの発動なら軽くて済むそうさ…そんな感じだと言っているぞ？」

「まあ、細かい話は、ヘッケラン君の武器にサラマンダー達を組み込んでからゆっくり話をすればいいさ。悪いが、キミの2本の武器を貸してくれないか？」

そう言われると素直に渡したヘッケラン、ベルはその武器を手に持ち…、少し悩むと、懐から金属のインゴットを取り出した。

（精霊石の全力をそのまま出すと、普通の一般的な剣じゃ、火の精霊の炎の熱量に耐えられないからな、剣そのものの姿を模した形にして20LV金属でヘッケランの2本の剣そのままのデザインに作り替えて、それに精霊石を埋め込んでみよう…、どうかバレないように…。）

左右の手にそれぞれ、ヘッケランの2本の剣。そして金属のインゴット、さらに左右の手に一つずつの「火の精霊石」を持ちながら〈道具創造〉を発動。

すると、見た目は変わらないが、剣の刀身、その根元部分に「火の精霊石」が埋め込まれた形になり、どことなく剣の重さも心なしか軽くなった様な気もする。

（調子に乗って魔力を引き出して使いすぎると、あっという間に魔力切れになるしレベル的に低い20LV金属じゃ精霊の炎に耐えられないかもしれないからな…、少しずつ小出しに発動すると仮定しても

半分以上の20LV金属なら、刀身も溶ける事はないだろう…)

ヘッケランはまだ気づいていないが、炎の属性が自分の剣の両方に付与されたことにより、最悪トロールとの戦闘になった時でも有利に戦いを進められる点や、精霊石に内包されている魔力量に依存する形になるが、ある程度の離れた距離からの炎攻撃が可能となった為、現地民の装備としては破格の能力アップになっているのだが、まだ戦っていない為、実感は無い。

「ハイよ、これでヘッケランくんの戦闘力は格段に上がったことは間違いない…あとはその武器に慣れてくれれば言う事はないだろう。」

ベルからその2本の剣を受け取ると、感嘆の声を上げるヘッケラン。

「すげえな、まるで今までの剣より軽くて、扱いやすくなったような気がするぜ、こりゃ手加減する時は斬り過ぎないように気を付けないとだな…。」

「おめでとうございます、ヘッケラン。あなたの武器が強くなれば我々の生存率も上がりますからね、チームにとっても喜ばしいことですよ。」

そう言われたヘッケランはロバーデイクにいつもの軽い調子で言葉を出してしまう。

「これはきつと、なかなかの武器になったぞ？　ロバーも何か作ってもらったらどうだ？」

その問いに気まずそうにチラリとベルを見たのはロバーデイク本人だ…さすがにそう言われて「私にも作ってくれ」とは言えないだろう。

「すみません、ベルさん…ウチのリーダーがあまりの嬉しさに口が滑ったようでした…気を悪くなさらないでください。」

「ん？　なにがだい？　ボクの作った武器が気に入ってくれたって事だ

ろう？ どこに気を悪くする要素があったのかな？」

その言葉を聞いて、ホツとしてムネを撫でおろす想いで安心できた。しかし、なぜなのだろう…という想いはロバーデイクの心から拭い去ることは出来ない。

「あの…ベル様…と呼んだ方がいいのでしょうか…こんなすごい偉業をされたばかりなのに、我らのチームの為に…武器の強化をしてくれるなど…ご自分の方の戦闘力は不安ではないのですか？」

そう問いかけて、ベルは首をひねってしまう、サラマンダー程度の魔力が上乘せされる程度ではどのみちあの墳墓では「焼け石に水」どころでは無く、「溶岩にスポイト水」程度の影響しか与えられないからだ…もちろんそれは守護者を相手にするという前提であるならば…だが。

「なあに、これから修行してもっと強い敵と戦って、もっと強い物が落ちてくれれば、もっと強い力にもなろうというモノだ。先は長い、まだまだこれからだよ。それに「様」は必要ない、今まで通り「さん」でいいさ」

（なくんて言ってるけど、この世界ではいいとコレリック級が精々だろう…レジェンドクラス以上になると…期待はしない方がいいだろうな…こつちの扉世界で60LV程度が上限なんだし、そもそもそんな程度でそこまでのレアリティ期待する方がどうかしてるしね…）

「ありがとうございます、それに…気になっていたことをお尋ねしてもいいでしょうか？」

やけに畏まってロバーデイクがベルに何かを言いくそうにして質問を言おうか言うまいかずつと悩んでいるようだ。

「なんだい？ わからないことなら聞いた方がスッキリするんじゃないかな？ ボクに答えられる質問ならばなんでも答えてあげよう。」

「では…失礼して…ベルさんは…なんでここまで私たちの為に力を貸してくれるのでしょうか？ あまり面識もないし、ベルさんに恩義を感じてもらおう程の何かをした記憶も…心当たりがないのです。」

心底、申し訳なさそうにうなだれている…こつちの厚意なのだからそこまで重く考えなくてもいいのに…とベルは思っているのだが、ロ

バーデイクの人間性はそれを許さないらしい。

「ああ、そのことについては、私の勝手な我儘…、自分がしたいようにしているだけさ、気にすることはない…だが、キミがそれを受け入れがたいと言うなら…その恩はカルネ村のみんなに返してくれればいいよ…これからもキミらは、あそこでアルシエちゃんや、村長さん達と暮らしていくんだろう?」

ポンと肩に手を置かれ、(仮面)とは言え)柔らかな雰囲気の声で語り掛けられれば、それ以上の言葉は出せるはずもなかった。

「では…ありがたく、ちょうだいしておきます。」

「いやいや、キミにも何か作ってあげるつもりなんだから、ソコで話を終わらせないでくれよ?」

そこで、まさに「鳩が豆鉄砲」のような表情をしたロバーデイクが盛大に狼狽えていた。

「いや…いえいえ、さすがにそこまでしていただくわけには…」

自らの両手を大きく胸の前でぶんぶん振りながら、顔を青くして遠慮する様に「そこまでのことか?」と思わず苦笑してしまうも仮面の中ではそれもバレることはなかったようだ。

「とは言え、ロバーデイクさんの役目はチームの中では重要だよな…メンバーの生命線、サポート役で回復係、さらにヘツケランくんにかあつた時は、その重装甲でみんなを守る防波堤…さて、それら全てを補強できる何か…もしくはそれらを補って余りある新しい能力…か…。」

(あいつらからして見たら、少しくらい重装甲にした所で、アダマンタイトで身を固めたとしても紙みたいなものだろうし…、かと言ってヒイロカネとかアポイタカラなんて上等なもの、全部ギルド所有で手持ちは無いしなく…)

「話題を最初に提案した私が、今更こんなことを言うのも心苦しいですが…今のところ、ロバーデイクさんにすぐお渡しできるアイテムは思いつきません…いずれ、何かを入手出来たら…という形で構いませんか?」

ベルは早々に思考を切り替え、中途半端に渡すくらいならいっその



こと、もう少し時間を作って新しい状況が発生し、意図せずに事情が好転したらその時にまた考えようと思いなおす。

そして、先ほどまで顔を蒼白にして今にも倒れそうだった神官は、大きなため息を一つつき、「いえ、お気になさらず、私の方は気にされずとも問題ないですとも…」と少しだけ強張った笑顔を返してくれた。

「とりあえず、それまでの繋ぎとして、こちらの杖をお渡ししておきましよう、ロバーデイクさん所有でもいいですし、魔力が心許なくなつたアルシェちゃんに持っていてもらつても問題ない杖ですよ。」

そう言つて、先ほどの話で意識を逸らしながら、背中の方でアイテムボックスに手をつ込み、そこから取り出した、ひと振りの杖。

それは、エルフの3人の装備を強化させてあげようとして並べた武器防具群の内の一本。

その名も「ハーフスリング・スタッフ」である。

原理はMPを消費することで、魔力の宿っている弾石…、予めその杖を作る時に設定した攻撃力を持つ魔力石、それがMPを1消費する度に自動的に装填完了。

そして、第一位階魔法の〈魔法の矢〉マジックアローの消費分だけ追加で支払えば、自動命中の特典が得られる。

〈魔法の矢〉マジックアローを撃つた方がダメージ的に上ならばそつちを使つてもいいのだが、敵には時々、「上位魔法無効化」や「中位魔法無効化」などというアビリティ持ちの敵も存在する為に、純粹な魔法で効果がな  
いなら…という目的で作られた物、必然的に〈魔法の矢〉マジックアローよりも1だけMP消費が高いが、それで投擲や射撃などのクラスやスキルなんか  
が無くてもダメージが通るなら…という代替案のようなものから作  
られた杖。

(それにしてもこの武器も序盤では散々お世話になつたけどな…  
〈魔法武装「炎属性」〉エンチャントウエボン・フレイムだったり、炎属性のデータクリスタルを組み込んだ武器を作れるようになるまで、スケルトン系の斬撃、刺突が通じにくい特性の敵を相手取るのにちょうど良かったんだよな…この杖  
単体でも、普通のスタッフと同様、魔法を唱える際の媒介として使え

るようになってたし…)

そんな風に自分の世界に浸っているとロバーデイクが語り掛けて来た。

「あの…ベルさん…これは一体?」

「ああ、これは元々、杖だったのですが、少々改造しましてね…スリングスタッフにしてあるんです、でもそのままだとスリングスタッフは2mくらいの長い物がほとんどなので半分のサイズに…、なので「ハーフスリングスタッフ」という単純な名称の物なのですが…。

これならアルシエちゃんでも誰でも、取り回しに苦労することは無いでしょう。」

「おお、それはなんとありがたい。私には遠距離からの攻撃手段は限られますからね…しかもスリング弾ともなれば神の教えに背くこともありませんし…とても助かります。…となれば、一度まとめてスリング弾でもどこかで買い求めなければなりませんね。」

「え?そんな必要ありませんよ? 魔力を1だけ消費すれば、自動的に…あ、いや、勝手に魔力を帯びた専用の弾石が装填されるので…逆に普通のスリング弾を使う方が攻撃力、下がりますよ?」

そう言いながら、ベルは持っている杖の先に魔力弾を装填させる。そしてそのままその杖を振りぬき、持ち前の戦士職の力量でもって、どこまでも続く、果ての無い空へとそれを撃ち出す。

すると、その魔力弾は、その勢いのまま、どこまでも進み、やがて、姿が見えなくなった。

「ね? こんな感じですよ、ちなみに今のは追加魔力は支払わずに戦士の力量で放り投げただけなので、誰にも当たれることは無かったですよ?」

その言葉を聞いたロバーデイクの、杖を受け取る手が震え始め…心なしか声も震え始める。

「え?それは…何の素材も、触媒も必要なしで…魔力だけで…無限に出てくるんですか?」

その言葉を受け、ベルはさらっと説明の補足をロバーデイクに返す。

「無限に…という訳ではないですが…まあ、魔力が続く限りは、弾数が尽きることは無いでしょうね」

「そ…そんなマジックアイテムは聞いたことがありません…どれだけ値段のつく代物なのか…私には見当も…」

「そんな大したことじゃないですよ…まあ確かに全部「R（レア）」素材で造ったものだから普通の物よりかは上かも知れませんが…特筆できる点と言えば、自動命中と、魔力のダメージを『殴打』と共に与えられるという点くらいでしょうか…、スケルトンみたいな殴打に弱いモンスターには魔力ダメージと、殴打の属性がプラスされるので、そういう意味ではお得かもしれないですね。」

「いやいや…魔力を代償として弾石を発生させるなんて…しかも魔力を纏った状態でなど…普通に言えばその石だけでも売ろうと思えば、それなりの値段で買い取ってくれる程の物ですよ？」

「ん…、こっちの土地に来て、その武器を試していないので確かとは言いにくいですが…多分、敵にぶつけないまままで…だと、一定時間経過したらその魔力弾は消えちゃうと思いますよ？」

（魔力を使って生み出したとしても、スリングスタッフの力で出されたものだから、売ろうとして装填状態から取り出したりしたら、消えてしまうのではないだろうか…？ よしんば消えずに済んで買い取ってもらえたとしてもせっかく買い取った物が、通常の召喚モンスターみたいなのに、時間経過で消失なんかしたら…店側から詐欺で訴えられそうだからな…その考えは危険すぎるだろう。）

ロバーデイクからの意見を即座に否定すると、少し長めのステッキとも言える程度のサイズであるスリングスタッフを持つロバーデイクに気がかりなことを問いかける。

「ところでロバーデイクさんはスリングの扱いには習熟してるんですか？ 普段からスリングとかは使ってたらしやらないようですが…」「いえ、一応、クレリックの職業につくときに同時にスリングの技術も一通り身に着けているので大丈夫だとは思いますが… …それにしてもコレ、なかなか魔力弾が出ませんね…何かコツでもあるんでしょうか？」

ロバーデイクに問いかけられ、ベルもそこに至り、ようやく気が付いた。

…そう、重大な見落としを…。

「あの…ロバーデイクさん、失礼ですが…その…クレリック以外にも、魔力系の御職業とかは習得されてたり…していませんか？」

「ああ…いえ、私は魔力系はさっぱりなので、こうして神のお力にすがり…ってベルさん…どうしました？」

ベルはガツクリと力が抜け、気分的に「orz」というポーズを取りたい気分だった。

「すみません、それ…「魔力」にしか反応しないんです…」

少し驚いたような表情をしたロバーデイクは、少し離れた位置に居たアルシエに声を掛け、杖の持ち主から…ということと、杖の使い方を一通り教え、その杖をアルシエに手渡す。

そして、彼のその表情はどこかさみしそうであった。

そんなことを露ほども考えていなかったアルシエは教えられたとおりの使い方をしている。

「あ…ホントだ…スリング弾が…出た…。」

そう驚きの声を上げるアルシエ、さらにその杖を高く掲げ、魔力弾が光り始めた…と思ったなら周囲をせわしなくキョロキョロと見まわし、不意にベルと視線が合った瞬間、謝罪の声を上げた。

「すみません、ベルさん…これ、お願いします。」

そう一言告げると、アルシエの持っていたスリングスタッフの魔力弾がひと際光り輝いたかと思うと、ベルに目がけて、勢いよく発射された。

（ああ、面白半分に〈魔法の矢〉<sup>マジックアロー</sup>の消費分を使ったはいいが、当てる相手のことまで考えてなかったか…、まあ、折角だし久しぶりの準備運動にでも使わせてもらおうかな…。）

そう思い、自分の方へと向かって来る魔力弾に相対し、とりあえずの間に合わせで…と用意していつも持ち歩いていたオリハルコン製のロングソード（見た目はエルヤーの刀の幻を纏わせている）を構えると…捕食者という異形種系の中でも、「深淵」<sup>アビス</sup>の領域に入っようや

く扱えるようになった剣技を久しぶりに使ってみる。

〈深・淵・閃・斬！〉

そう発動させると、縦横無尽にあらゆる角度から滅多切りにするような連続攻撃が発生し、その剣速は、ブレインの目にも一体、何度斬り付けたのか分からない程の勢いで、自分に投射された弾石を切り刻む。

その魔力弾がベルに当たる前に、細切れにし終えた瞬間、パキン！と甲高い音と共に、オリハルコン製の剣が見事に折れてしまった。

呆然と武器を見つめるベル。　：惜しいとかもつたいないとか言う感想ではなく、ノーマル（下級）というレアリティなのに、良く最後まで持ちこたえたものだ：：という感心からだった。

「ああ：：ごめんさい：：ベルさん：：すみません：：大事な武器を：：」

アルシエが泣きそうな顔でこちらに近づいてきて、しきりに頭を下げ、何度も何度も謝罪をしてくる。

（ただのノーマル（下級）の剣が折れただけなんだから、気にすることはないのに：：というより、よく考えたらレア（R）の攻撃力まである魔力弾をスキルの剣技を使ったとは言え、良く切り刻めたものだよな：：、最後まで斬り終える状態まで持ち堪えられたことの方を褒めてやりたいよ、見事だったぞ、オリハルコン！）

「まあ：：大丈夫だよ、そんなに気にしないで：：そろそろ、もつといい武器に変えようかと思ってたところだったから、気に病むことはない、本当によく持ちこたえられてビックリしてるくらいさ。」

目に涙を滲ませそうになりながら、うるうるの瞳でこちらの目を見ってくる。　恐らく気を使ってそう言ってるだけなんじゃないかと疑っているようだ。

「本音だよ？　今度の依頼では、オリハルコンの剣くらいじゃ、あまりにも頼りなさすぎて、アソコに挑戦するなら、もっと上級な武器にしようと思ってたところだったんだから、ウソなんて言っていないよ。」

ホッと一息ついて頭を上げてくれた、ウソではないと分かってくれたようだった。

(さて、それはいいが…困ったな、魔法で〈上位道具創造〉クリエイト・グレートアイテムを使つて作るのはいいけど、鍛冶職のメンバーが居ないからなあ…、ボクも武器作成系の専門職なんて持ってないしな…それほど魔力の宿つてないレベルの金属や木材とかなら、そんな専門職、必要ないけど…少なくとも50LV金属とかなら、それ以上の加工には専門職の手助けが必要なんだけど…ここでドワーフでも居れば…って無い物ねだりをしてても仕方ない。)

「ま、武器なら、何とでもなるよ。今はみんなの力の底上げが大事だから、ボクより、みんなの方さ。」

「わたし達?」

イミーナが不思議そうな顔で見返して来ていた。

(そうそうフオーサイトのメンバーが一番不安なのが攻撃力的にキミなんだよ…。)

さつきまでなんとかしようと思っていたロバーデイクの件は本人も「お気になさらず」って言ってたんだし、後でもいいよな。という認識の元、どこかやる瀬なさそうな表情の神官一人を差し置いて、イミーナに向き直る。

実は、武装をいいものにしてあげられる手段はない事もない…だがそれはどちらにしても大事な仲間が遺してくれた物…、もちろん例外はあるが…。

そう悩みながらも、イミーナにいくつかの選択肢を与えることにする。

「実はね、イミーナさん、キミにも武装を…上級の装備にしてあげることとは出来るんだけど…どれも一癖も二癖もあるモノばかりなんだ…、大雑把に特徴を伝えるから、ヘツケラン君とも相談して決めてくれ。」

「ん? オレも聞いていた方がいいってことかい? そりゃ?」とヘツケラン。

「ああ、もちろんさ、だって君はこのチームのリーダーなんだろう?」

(なんて言うのはただのこじつけ…渡す装備的に、片方はこんな渡したのがバレてしまったら、茶釜さんに何を言われるかわからない…ってデザインの装備だからなんだが…、それもあつて半分、避難先

みたいな形でペロロンさんに手渡されたんだよな、アレも…そんなものを彼氏持ちの女性に何も伝えずに渡したとなったら、それこそ大ごとだからな…、実際に居るんなら会ってみたいものだけどね…茶釜さん…みんな…。」

「そんで？　どんな装備なんだって？」

「うん、私もちよつと興味あるかも…」

「ん〜、まあ、それじゃ、まずはデザイン的に無難な方から…にしよう。」

「ん？？」

二人ともその言い回しに何か感じるものがあつたようだが、とりあえず話を聞いてから…という結論に至ったようだ、イチャモンならきつと、聞き終わってから言ってくれるのだろう。

「まずは、デザインのには全身鎧みたいなモノでね、無防備なのは首から上だけ、それ以外の守りは完璧だ、けどこの鎧は斬撃と刺突に対しての防御は完璧とは言えない…とは言っても、こつちの世界での伝説級とかの武器でなければそうそう内部まで貫かれたり傷つけられるほどじゃない…完全に安全なのは「殴打」の方だ。そつちの属性からの攻撃に関しては、ピカイチの性能がある。」

「へえ…すごいじゃないか…それで？　もちろんお前さんが薦めるってことはそれだけじゃないんだろ？」

「え？　そうなの？　ヘツケラン？」

「なんとなくな…この人がその程度の物をわざわざ勿体つけて話すはずがないだろうっていうのは、まあただの勘だけどな。」

「まあ、そこはご明察だ…、この全身鎧の一番の売りは…、レンジャーレベルの底上げ、さらにスキル、技能などを今の限界以上に引き上げてくれる効果があつて、【樹】の属性が与えられてるから、【土】の属性にコトの他強い、さらに、【水】の属性からの攻撃ならある程度は吸収することが出来、その吸収した魔力を自分の力に上乘せして…ドル

イドの効果っぽい攻撃手段を取ることも、弓矢の攻撃に威力を上乗せすることも出来る…。」

「ま、ウチにはドルイドなんて使えるメンバーは居ないから、そこは気にしなくてもいいな。」

「そうね、私なら、単純に弓攻撃に上乗せさせる方でしか使い道がないかな…。」

「…無難な方の装備の説明はこの辺で終わりだ。」

「なんかイヤな言い方だな…。」

「私もそれが引つかかっているのよね、無難じゃない装備ってどんなのよ…。」

「それが…、この装備は…私の昔の仲間が創った物でな、これは自分の趣味じゃないことは最初に断っておく、だが見た目に反して、性能はさつき言った物を遥かに凌駕している。そこだけは念頭に入れておいて欲しい。」

「お、おお…そいつはすげえな、さつき言ってたものより凄いつてか？」

「なんか今、気になること言ったよね？」「見た目に反して…」って何よ、見た目って重要じゃない？怖いこと言わないでよ！」

「これは、ハッキリ言って、見た目的にはほとんど冒険者としては軽装鎧とも言えないんじゃないか？ってくらいの派手なデザインなんだが…、それを補って余りある機能が、「浮遊する装甲板」だ…。」

その言葉を聞いて真つ先に反応したのはイミーナだ。

「は??なにそれ?意味わかんないんだけど? 装甲板が? 浮いてる? それに何の意味があるってのよ?」

自分が薦めてるはずで、間違いなく機能としては折り紙付きなのだが、何故かソレを薦めることに内心で、申し訳なさと言うか…若干の罪悪感が拭えないのは…製作者の趣味が上半身部分に集約されているからだ。

下半身部分は、姉に遠慮して、姉が製作したNPCに寄せて、逃げ



道にしようとしていたため、彼が創ったにしては明らかに中途半端な作りなのだが、それはこの際、どうでもいいだろう…着る人の感想が大事なのだから…。

「まあ、これはな…肩当に相当する装甲版が少し存在してるだけで、アムダーバストから下を護る部位そのものが存在してなくて、肌が露出している…ちゃんとズボンは履けるようになってるが、レッグアーマーはちゃんと用意されている、逆を言えば満足な装備はレッグアーマーだけというデザインにしか見えないというのが…この装備なんだが…」

「なによ、ソレ…、要は防具として防御力があるのは足の部分だけってこと？バカにしてるの？」

イミーナが激昂して、反論してくるが、言い出しっぺのベルも、その言い分はもつともだ…と思ってる為、心の中では謝罪をして居る。

「いや、正確に言うと、ズボンそのものにもちゃんとレア度の高い防御力はあるんだぞ？少なくともアダマントナイトなんて真っ青つてくらの防御力はあるんだ…信じられないだろうが…」

「あつたり前でしょ？ズボンにアダマントナイト以上の性能って、あるわけないじゃない…バカにしないでよー！」

そう言つてベルの言い分をのっけから切つて捨ててるイミーナとは別に、ハツケランはその先が気になるようだ。

「オレは、あんたの言い分は最後まで聞かなきゃ判断はできない…お前さんの言葉を信じもしないで、さっきは賭けに負けちまったからな。続きを聞かせてくれ。」

「ハツケラン!!!」

続きを促そうとするハツケランに異論を唱えるイミーナだが、「ま

だほんの最初の部分しか聞いてないだろ？」と言われ、渋々、聞く姿勢に戻る。

「では続きを話すとしよう、その防具は、手袋部分と、ブレストプレートっぽいデザインがメインで、見た目レザー調の外観なんだが、斬撃、刺突、それぞれは、さっきの全身鎧の防御力より上位に位置するほどの防御力があって、殴打の方は完全耐性とまでは行かないが…それなりに護りは硬い。さっきも言ったようにアンダーバストから下の方はむき出しで、ズボンの部分までは素肌のままだが、そこで「浮遊する装甲板」が威力を発揮する…無防備な場所はそれが自動で動き、勝手に守ってくれる。」

「はあ？　なんの魔法よ…フロートインングボードの魔法に自己認識機能を搭載させて、防御にでも回してるってこと？　そんな魔法聞いたことないわよー！」

「オレもその意見には反対の意見はないが…それを言ったら、今オレたちがいるこの世界、この魔法？　だかアイテム？　だかわからない仕掛けもどういうこと？　ってことになるぞ？　イミーナ…。」

（なんかさつきからやけにヘツケランが擁護派に回ってる気がするな…ペロロンさん風に言ったら、「やはり彼も男のロマンが分かる『漢』ってことなんですよー。」って言いだしそうだけど…まあ、それは考えすぎだろう。）

「それは…そうだけど…さあ…。」

弱々しくそう言っつて、チラリと、視線がエルフのディーネの方へと動く。

（ああ、デザインの的にアレに近い物になるんじゃないや…って思ってるってことか…まあ、間違いじゃないが…アレとは微妙にデザインが違うんだよ…）

「それから、その防具には電撃の吸収という特典があつてな…、ライトニングやドラゴンライトニング程度なら、問題なく吸収して、自分の力にできるし、その電撃の魔力で弓と矢を同時に作り出し、純然たる魔力の奔流が矢のように相手に襲い掛かるように出来る。」

(もちろん、これは彼の：☒羿弓☒なんかとは比較にならない程：というよりアレの試作品として創られた機能だからな：弓と矢の作り方としては、弓からして魔力から作るから原型は無いんだが：、その分、威力は落ちるんだよな：)

「反面、自力で回復したり時間経過で回復はしない、電撃魔法や雷撃魔法で吸収しないと、吸収した分の魔力が切れたら次の攻撃が出来ないという点で、使いにくい点ではあるが：かなり上位の雷撃魔法じゃないとダメージは受けないというのは、ある意味では強みかもな：。」

「以上で、全部の説明は終わりかい？ 旦那：」

と、問いかけてくるヘツケラン。

「ああ、これで全部だ：。」

と、ベル。

そこでイミーナが割って入ってきた。

「まだ、それで全部じゃないでしょ？まだ教えてもらってない情報があるわ：。」

(ん?? …なんだったかな：他に言い洩らしたことってあったかな?)

「何を知りたいんだい？」

と問うベルに対し、イミーナはたった一言：

「色は？」

「…え？ 色??？」

「そうよ…色よ…どっちも基調となる色が何色がメインの装備なんだか聞いてない…まさか変な色なんじゃないでしょうねえ…」

(何も、そんなに警戒しなくってもいいと思うんだが：ペロロンさん

からしたら珍しく大人しめなデザインなんだぞ？…比較的…ね。」

「全身鎧の方は、8割方がミドリで、あとは黒と…肩当ての白部分くらいかな。」

「もう一つの方は？」

ジト目で、こつちを見てくるイミーナさん…そんなにイヤなのだろうか…毛嫌いするほど…最初に言ったけど、ボクの趣味じゃないって説明したはずんだけどなあ…

「もう一つの方は、レッグガードは白地に青のラインが入ってる感じ、ズボンと、ブレストの部分は茶系だね…それと浮遊する装甲板は、メタル色って言うってわかるかな…鉄と銀の中間みたいな色？…つてな感じ…だよ？」

（なんでボクがこんなに申し訳ない気持ちで装備の説明しなきゃならないんだよ、ペロロンチーノさん、アナタのせいですよ！ 聞いてます？… って、聞いてないでしょうね…）

「まあ、装備の話は今すぐじゃなくてもいいんですよ？ 良くみんなで考えさせて…」

（そうだよなあ…ユグドラシルではそれなりの物でも、こつちじゃくネタ防具って言われて、納得できるモノでもないもんなあ…）

そう言われたら、それ以上は何も言えず、とりあえず、今後の方針として、レベル30を目指して、みんなで平均的にそのレベルでそろえていくようにしようという話をして見たら、その点は了承された。

サラマンダーは大丈夫だからと言って、イフリート辺りに挑戦するのは、自分はいいが、フレイラでも厳しい水準、他のみんなでは自殺行為だろう…、とりあえず、30〜35くらいの辺りで挑戦させてみるかな…ヘツケランはとりあえず、攻撃力は上がってるんだし、なんとかなるかな…。

とは言え、良く考えてみたら、バランス悪いよな…

マジックキャスター魔法詠唱者が、アルシエちゃん、セピア、

クレリック神官職は、ディーネに、ロバーディクさん

レンジャー野伏が、イミーナさんと、セピア

ローグ盗賊職系はイミーナさんだけ…

ドルイド森祭司だってルチルだけだしな…

前衛として出られるのが、ヘツケランと、アングラウスさんか…

アングラウスさんは最終的にカルネ村で斬り込み隊に入ってもら  
うとしても…前衛がヘツケランだけで、本当に大丈夫かな…この人達  
は…、一人攻略されたらナザリツクじゃ、終わっちゃうんじゃないか  
？

なんて、心配しながら、とりあえずこっちの修行世界では、まだ純  
粋な意味でのデータクリスタルなどのドロップ品はお目にかかれて  
いない為、不安と期待の入り混じったような気持ちで、次のモン  
スターを扉のパネルを使って呼び出すのであった。

第41話 みんなで特訓、レベリング！「次は難度9  
3」

|||||

ベルは扉のパネルを操作しながら、次に出すモンスターについて想いを巡らせる。

（さて…どうするかな…30〜35弱のレベル帯って言っても色んなモンスターが居るからなあ…ボクもほとんど知らない別サーバー世界でしか出なかったんだろう名前もあるし…、そういうのは選ばない方がいいだろうな…現地民からしたら、ほんの少しの強さの違いが決定的な勝敗に繋がったりもするだろうし…）

悩みながらも、<sup>かたわ</sup>傍らにはフレイラが付き添い、特に何かを言う事はないが、常に主人であるベルリバーの動向を見守っている。

そこに小走りにアルシエが近づいて来た。

一旦パネルの操作を止めて、そちらに意識を向けるベル。

「どうしたの？何かあったかい？アルシエちゃん。」

仮面ごしでもいつもの優しい気な声、そう思ったアルシエはイミーナからの距離は離れていたが普通に意識を向けていれば聞くことの出来た、先ほどの話の内容について問いかけてくる。

「その…さっきの、全身じゃない方のヨロイ、それについて興味がある…あれって魔法使いでも身に着けることは出来る？ レンジャーだけ？」

まさに驚いたのはベル本人である、まさか女の子であるアルシエ自身が興味を持つとは思っていなかったからだ。

「ああ…え？ あれに興味があるの？なんで？」

ついそれを聞かずにはいられなかった、よりにもよつてなんでペロロンさんの方の作品をアルシエちゃんが気に入るのだろうと…

「え？ あ…ベルさんの気持ちは嬉しい、私たちが生き残れるように…精一杯色々してくれようとしてくれるのは分かってるから…。」

真剣な眼差しでベルを見上げてくるアルシエ、その瞳には彼女なりの信頼が見て取れた。

（よかった、あの装備を気に入ったからとか、そういうんじゃないんだ…まあそれなら話してもいいか…）

「いいかい？アルシエちゃん…アレについては多分…だけど、装備でできる性別は限定されてると思うけど、職業で分け隔てるような設定はしてないはずだ…そんなことで差別するような人じゃなかったからね」

（『エロゲ女子、万歳！みんなオレの嫁！』的な勢いがあったし、それなりにストライクゾーン広かったからな…、唯一、お姉さんが声優やってたキャラだけは敬遠してみたんだけど…、それでもそれに抗えないくらいのキャラ的魅力に惹かれて…「使ってしまった…」ってそうとう落ち込んだこともあったしな…あの人はホント、せつそう…じゃなかった、博愛的だったからなあ…）

「良かった、なら私でも着られる…かな？」

「ん？なんで、アレ着てみたいの？」

（確かにペロロンさんなら、アルシエちゃんみたいなロリ属性持ちで、かつ…「ひんぬ〜」女子が身に着けてくれるなら…と…かつ感じて標準設定以上の「謎仕様」で、『ペロロンさんボーナス』でも付いちやいそうな感じはあるんだけどな…ユグドラシルから離れたこっちの世界での仕様に変わったのなら尚更、ペロロンさんの性質を受け継いだ装備になってる可能性も…）

「だって、ベルさんのあの説明じゃ…きつとイミーナは一生着ない…だから私がちよつといい面を引き出して見せることで興味を持ってもらおうと思つて…」

「ん？ ああ…それは気を使つてもらつちやつたかな…でもいいのかい？装備は出来ると思うけど…魔法詠唱者のアルシエちゃんマジックキャスターがその装備を着たりしたら…多分魔法の詠唱にかなりの制限が課されて、第一位階分でも詠唱できるかわからないし…素早い動きの方もかなり

重くなつてくると思うけど…ひよつとしたら身動きできるかどうかも…」

「なら…どうせ私は後方支援、ベルさんからつて言われてロバーから受け取ったこのスリングスタツフもある…それに…勝手に動いて守ってくれる装甲があるんだよね?」

(んくくく…できればアルシエちゃんに危険が及ぶようなことは…色々と考えちゃうよな…きつと自分に妹が居たら、こんな気分なんだろうけど…まあ…そういうことなら少し任せてみるか…)

「それじゃ、お願いできるかな?アルシエちゃん。」

「うん、わかった…着替えはどこでやればいい?」

(あ、そっかアルシエちゃんには、まだその説明してなかったっけ?)  
「ボクの装備はわざわざ着替えのために更衣室を使ったりする必要はないよ? その手間をかけたと思って思うなら、そうすることも出来るけど、時間や着替える場所がない場合は…こうすれば…。」

そう言いながら、取り出した一式装備をアルシエの身体の前面に接触させる。

すると、今まで身に着けていた装備(武器以外)は全て背後に弾き出され、ベルが差し出した装備が一式…、その身に丁度良くフィットするように装着されている…ズボンから下は、特に何も言うことはないようだが、そこから上はやはり少し恥ずかしいらしい。

すぐにマントを拾い上げると肩から掛け直し、そのマントを持ち上げる仕草でお腹部分を隠すようにして覆ってしまったている。

「やつぱりベルさん…この見た目…どうにか、ならない?」

相当恥ずかしいようだ…確かにこれだと戦闘に入る以前の問題のようにも思う。

「それじゃアルシエちゃんは、周りで浮かんでいる装甲版が…身に着けた瞬間の時より2回りくらい大きくなつてることに気づいてるかな?」

「え?あ…そうだったの? そこまで意識を向けてる余裕がなかった。」



「まあ、多分アルシエちゃんの恥ずかしいって意識が、「なにか隠せるものを」って気持ちと被る感じで、その装甲に左右してるんじゃないかって思うんだ。だからそれを動かして自分の周囲に展開させるとか…出来そう?」

(ロリ属性+「ひんぬ〜」のコンボで性能アップしたって可能性もあるけど、そっちは言わないでおこう…その方が色々と丸く収まりそうだし…。)

「わかんないけど…やってみる。」

そう短く言うと、彼女の周囲に浮かんでいただけの装甲板は彼女の周囲を旋回し始め…最終的にモロ肌が見えていたウエスト部分をすっかり覆ってしまった。

見事に、装甲板としての形も彼女のウエストのくびれにフィットするように密着して隠している…これなら見た目、特殊なレザーアーマーっぽい感じにしか見えないかもしれない、お腹部分だけ金属板で補強してる感じに見えなくも…ない、か? それに口でヒントを与えただけで即実行できるとか…さすが天才少女って言われてただけのことはあるって感じだな。

「で?…どう?…動けそう?」

ベルがそう問いかけると、腕とか足とか…動かそうとしているようだが…色々と上手く行かないようだ…

「ちよつと無理そう…、動こうと思えば動かせそうだけど…重心とか、すぐ崩れて倒れちゃいそう…。」

「そうか…それなら、それに対応したモンスターを呼び出そうかな。アルシエちゃんが動かなくて済むようなヤツ。」

そう言いながら、ポチポチとパネルを操作しながらベルはフレイラに指示を出す。

「悪いけど、フレイ、黒装束を一度身に着けて、シェイドスピリットを2体呼び出してくれないか? 前にサラマンダーを2体呼び出した時のポイントにそれぞれ、そいつらを配置しておいてくれ。」

「ハイ！わかりました！マスター！」

久しぶりに主人からの直々の指示に、喜色満面のフレイラ、「ベルさま」呼びすら忘れ、『マスター呼び』になるくらい冷静で居られていないのが丸わかりな程ウキウキだ。

フレイラが指示通りに黒装束に身を包み、指定場所に2体を配置すると、他の7人のメンバーは一瞬、「またモンスターか？」と身構えたものの、すぐにベルからの言葉で警戒を解く。

「あ、警戒しなくて大丈夫、それはフレイラが呼んだ者たちで、今回呼び出すモンスターがその辺りに出現するはずだから、今の内にそのポイントを参考に配置を考えていてくれ。もうすぐ呼び出すからね。」

そう説明されると、今回出現するのが2体だという意図が伝わったのだろう。

フォーサイトの面々は、どうやら、何かの都合で動けないらしいアルシエの周囲に来て、アルシエを起点にする。

そのモンスターが現れるだろうポイントの直線状に上手くヘツケランが前衛として立つ感じで隊列を整えていた。

対して、ブレインは残されたエルフの3名の前に出るようにして、前衛としての立場を活かすように敵が出現するだろうポイントを目の前にする。

距離は出現してすぐ攻撃されても対応できるよう、もちろん〈領域〉の範囲に敵が出て来るような立ち位置でだ。

それぞれのメンバーが4：4で2チームに分かれたことを把握したベルは、それぞれに宣言するように説明を始める。

「それじゃ、これから新しいモンスターを呼び出すけど、難度は93だ、100には届かないけど、アンデッドだから、傷ついたり体力が削られても負傷によって動きが鈍ったり、行動のペナルティが起きたりすることはないから、注意して当たってくれ。」

それと、今回の奴はアンデッドとしては特殊な性質を持っているな

：最初に目の前に立った最前線の前衛を標的にすると、そいつと戦うことしか眼中になくなる性質を持つ、もし前衛が倒れたら、その後ろに位置する者に標的を変更する流れに移行するから、前衛は踏ん張ってくれ。」

「責任重大だな」とヘツケラン

「1対1のサシ勝負か…望むところだ！」とブレイン。

意気込むブレインに「さつきも言ったことだが」と、一応注意として忘れないようにと、釘を刺して置くべく忠告を発する。

「アングラウス君は、『カースド』のクラスを取得したため、まだその性能自体をカットする感覚がまだ出来ていないだろう、だから武器の神聖属性と、自前の「負の攻撃」が、どっちがどのくらいのダメージに差があるかわからない、大きいダメージは後ろのエルフのみんなに任せる感じで、敵モンスターの攻撃を凌ぐことに意識を持っていくことを勧めておくよ。」

「ああ…そういえば、そうだったな…武器のダメージと、クラス効果…どっちが上か、まだわかんないからな…「負の」回復量の方が大きかったら、いくら斬り結んでも決着はつかないだろうし…仕方ないか…」

「なんだよお…こつちにはアドバイスは無いのかい？ベルさんよお」とブクたれるヘツケラン。

「キミにはすでに「炎熱剣」が2本もあるだろう？基本的にアンデッドは「神聖」と「炎属性」が弱点に設定されてることが多い、こいつもそれは例外じゃないからな、前衛としてはキミの方が有利なんだぞ？」

「でもよお…他になんか有用な情報はないのか？どんな攻撃方法があるとか、特殊な攻撃してくるとかよお…」

食い下がるヘツケランに、ベルも渋々とだが口を開く。

「ヘツケラン君はそれでいいかもしれないが…キミがこの部屋から出てすぐ向かうことになる調査の仕事は、この世界で出て来るモンス

タワーの基準なんて「勝手に発生し続ける」タイプのモンスターばかりだからね？

さすがに30：じゃなかった「難度90」を超えるモンスターは勝手に自然発生する訳じゃないが：その都度ボクが「この敵の弱点は：」つて言える訳じゃないことを覚えておいてくれ、まあ慣れるまでは教えるけどね。」

「おいおい、アンタ、なんでそんなことまで知ってるんだ？あそこの関係者か何かか？ それはいいが、「難度90」までが自然発生？おかしいだろ？色々と壊れてるだろそれ！」

「そうは言われてもな：それは、そこを作った運営：じゃなかった、「un-A」と言われた大魔術師に文句を言ってくれ、そいつがそう作らなかつたら、そもそもそういう物にならなかつたんだから：」

（こつちだつて、あそこを攻略する時に、どれだけ苦労したか：同時攻略タイプなんてふざけすぎてるだろ！ボくらに編成されたチームは主力編成じゃなかつたから死にかけてたつて言うのに：）

それに比べたら、ワーカー連中に用意されてる攻略難易度なんて明らかにイージーモードだろ、全く……。）

「大魔術師、「un-A」か、覚えておこう。」

「まあ、その話はこの際、置いてだ、とりあえず、呼び出すモンスターの予備知識だな」

「ありがとよ、さっそく頼むわ。」

「これから呼び出すのは「死の剣闘士」と言つて、遠距離攻撃、中距離攻撃はまず仕掛けてこないが：、抵抗力の数値が低い相手には遅効性の毒を与える攻撃が常時発動式能力として普通に攻撃に上乘せしてくる：毒とは言つても、生きてる間は効果は発しない、このモンスターの手によって死んだ場合、【死の盾持ち】となつてアンデッドとなる。」

まあ、生きてるうちに〈毒類治癒〉をかければ、問題ない程度だから、毒を受けてもあわてることがはない、ターン毎のダメージもないから毒というより「呪い」っぽい感じだね。

攻撃手段は、直接戦闘での攻撃のみ、武器はグラディウスだが、身長はトロールより少し大きい程度(デスナイトより一回り小さいくらい)だ。そのため、普通のグラディウスよりも大きく、重い、つまりはそのモンスターの体の大きさに合わせてある感じだから通常のグラディウスよりリーチがある。ってくらいかな? …あとは実力勝負だ。」

それを聞いたヘツケランが礼と共に、最後の確認をする

「ちなみに攻撃と防御の割合はどのくらいだ?」

「そこまで聞きたいのかい? しかたないな…攻撃に特化してるアンデッドだから:(え〜つとLV31で、攻撃力はLV35モンスター並だった気がするから…)標準難度のモンスター―基準で言えば攻撃力は難度100を下回ることはない程度だね、その代わり防御は極端に低くて、難度75のモンスター並の耐久力だと思っついてくれ:」

そこまで聞いたヘツケランは少し肩を落とした調子でベルに愚痴をこぼす。

「自分で聞いていてなんだが:聞くんじゃなかったよ。それで素早いとかだったら生きていられる気がしないぜ:ロバー:もしもの時はちゃんと〈毒類治癒〉:頼んだからな」

「大丈夫です、後ろは任せてください。万が一の時は骨は拾ってあげますから、遠慮なく。」

「だから骨(アンデッド)になりたくねえから言ってるんだよ、ホント、頼んだぜ:。」

「じゃ〜、呼び出すよ? ポチつとな!」

それと同時にフレイラは、その場にいたシエイドスピリットを回収、引き上げさせた。

ベルがそう告げると同時にブレイン、ヘツケランの目の前に、おなじみ闇色の渦巻きのようなものが現れ、そこから黒い物がふくらみ始める:次第に形に色がついて来ると、その者「死の剣闘士」デス・グラディエイターが現れた。

その者は、ボロボロの腰巻きの布だけを身に着け、剣を持つ方の腕にはこれも朽ちかけている布をぐるぐるに巻き付けた申し訳程度の小手状にしている。

剣は情報通りのグラディウスだが、身長に見合う大きさのグラディウスとなっており、普通の人間サイズから見れば充分バスタードソード並に見える。長盾も持っていて、足元に立ててみれば腹部分がすっぽり隠れるくらいの大盾仕様：せめてもの救いは、鎧を身に着けていないところか：確かにこれなら「難度75のモンスター相当」というのも頷けた。

ヘルムは被っているが、これも朽ちてきており、盾を持つ左側の顔半分が露出し、真っ赤な：瞳の無い眼窩に炎とも光のとも取れない揺らめきが見える。

そこ以外は顔のほとんどがフルフェイスに近い状態のヘルムを被っており、右半分、剣を持つ利き手側の視界はかなり悪そうだ。

肌はどす黒く変色しており、腐臭や、膿みなどは見当たらないがアソックスらしからぬ筋骨隆々の身体から、所々、骨が露出している。

その赤い眼窩が、目の前の前衛戦士をそれぞれ目で認めると、その者に向け、大きな咆哮をあげる。

「ヴオオオオオオ~~~~~」

大きな口を開け、威嚇するように叫ぶと、それが戦闘開始の合図となった。

### ● サイド：フォーサイト

#### ・ 第一ターン

(まずは、特別ボーナスでアルシエちゃんにちよつとだけサービスしてあげよう)

ベルがすぐ後ろから防具の為、うまく体を動かすことの難しいアルシエに、不意に声を掛けた。

「これ、サービスだから、受け取って？多分、ダメージは通らないと思うけど：〈ライトニング雷撃〉！」

うまく振り向くことも出来ないまま背中ですれを受け止める形になるが、背に何か当たったような気はしたがそれはすぐに霧散する。

それと同時に身に着けている鎧自体に、何か、得も言われぬような：なんとも言えない波動を感じ、思わず「生まれつきの異能」で見失ってしまう、鎧全体が第3位階をわずかに上回る魔力量に満ち満ちていた。

(ヴェールさん：ありがとうございます。)

そう思っていると、先手必勝とばかりにヘッケランが敵に向かって駆けだしていく。

ヘッケランは駆けながら、自分の顔の前で両手に持った剣を交差し、〈炎熱剣！〉と叫ぶ：すると2本の剣に、まるでその身に炎を纏っていたあのモンスターかと思まがうような炎が2本の剣両方に吹き上がり纏わりついている。

「行くぞー！〈空炎斬〉！」

ヘッケランがそう言い、片方の剣を離れた距離から届くはずのない剣閃を見舞う。

すると、死の剣闘士デス・グラディエイターに向かい、剣を振りぬいた形を絵にしたような半月状の炎が向かう：が、それは顔にまで持ち上げられた長盾で防がれてしまう。

しかし、それを見逃さないヘッケランが盾の下部分をかいくぐり、〈炎斬撃〉！と足に向けて振るうと、片足を炎のダメージで焼かれながら、苦悶の声を上げる、そのまま軽戦士特有の素早さで、相手の死角に回することで瞬時に居場所のかく乱を計る。

イミーナは持ち前の弓の腕で、引き絞った矢を〈二連速射〉を使って矢を放つ。

その矢は、ヘッケランの攻撃により、足の傷ついた敵が足元へと盾を下ろしてる隙に、腕と肩口に放たれ、見事に刺さる。

しかしダメージ自体は通っているようだが、内臓自体の機能も無い動死体同様のモンスターに刺突効果が薄いのは今までのカツツエ平野でのアンデッド狩りでもイヤと言う程に戦力不足を痛感し、悩んで

来た。

これがスケルトン系のヤツなら、「殴打属性の矢」で補えるが「…やはり力不足は否めないわね」と思っているところに更に更に後方のアルシエから雷撃が飛ばされる。

だがそれは今までに見たことのあるアルシエの雷撃魔法では無い、その違和感に、後ろを振り返ると、ほとぼし迸るような電流で作られた弓を発生させている左手…そして、今打ち出したのだろう右手には、今、弓を放ちましたよ、と言わんばかりの指のまま、固まっている。

(レンジャーの技能は持ってないけど、魔法の投射関連なら心得はある、射出なら、それを応用することも可能…。)

「アルシエ…それ…」

「話はおと！ まだ完全なダメージには至ってない！」

「え…ええ…」

(身動きしにくいと思つてたけど、直立したままであればまだ腕を動かすくらいは何とかなる…、これならヴェールさんからの雷撃は無駄にせずに済みそう。)

肩と、腕にそれぞれ矢が刺さり、痛み自体の感覚は薄いものの損傷は受けている認識はあるため、剣を引き、盾を構える姿勢を取ると、アルシエの雷矢が、デス・クラディエーター死の剣闘士の顔面に直撃する。

が、しかし相手はアンデッド、電撃系のダメージにはダメージポーンはつかない為、あまり効果的と言うほどでもないようだ。

ロバーデイクが、準備の終えたレッサーストレンジス〈下級筋力上昇〉を発動させる。

相手はもちろん、前線でダメージを与える役を一身に受けている、ヘツケランにだ。

そこで死のデス・クラディエーター剣闘士は大きくムネを張り、上体を反らせ、大きく振りかぶる。

自分の周囲をコバエのように動き回り、鬱陶しい速度を苦々しく思いながら剣を振り下ろす。

しかし、盾の影、兜の被っている視界の悪い面の側へと、条件の悪



い方に動き回ることであまく敵の目を逸らすヘッケランを目で追うのは難しい。

結果、相手の攻撃は空振りに終わっていた。

## ・第二ターン

ロバーデイクが徐々に敵に近づき、ヘッケランの広範囲の動きをカバーしつつも支援魔法の範囲に入る位置に移動、ヘッケランは、敵の目がロバーに向かないようにわざと視界をかすめるような位置で動き回る。

### 〈下級敏捷力上昇〉 レッサー・デクスタリティ

ロバーデイクの支援魔法がヘッケランに飛ぶ…と同時に後ろに回ったヘッケランが死デス・グラディエイターの剣闘士の背に大きく跳躍してからの攻勢に移る。

### 〈双炎斬撃〉！

吹き上がる炎を両手の剣それぞれに纏わせ、剣戟と共に炎でのダメージを見舞う。

大きくのけ反る敵を前にして、イミーナが限界まで大きく引き絞った弓から武技を選択。

### 〈強撃射〉！

威力の強められた矢が尾を引くような速度で一直線に進んでいく。しかし、それは易々と盾によって防がれる。

（それも、防がれたなら防がれたで他の手に活かす手段はある…、矢を防ぐために盾を持ち上げられたなら、足元が疎おろそかになる。）

そこへ、さつきヘッケランがダメージを与えた方の足へと、アルシェが二発目の雷矢を射出する。

矢を防ぐ方に意識が行っていた敵は、それを防ぐことは出来ず、片足に直撃を受ける。

しかし、死体とはいえ、まだ太い骨には深刻なダメージを負わせるところまでは行っていないため、まだまだ動きに変化は見られない。

さすがにかぶっているヘルムの半分で視界が悪いためか、見づらい方（剣を持つ方）の剣速は、眼窩がむき出しの方（盾を持つ方）へと

剣を振り下ろす時に比べて、精彩が欠けているように見える。

「まだ倒れねえのかよ、このデカブツ！」

ヘッケランが悪態をつくとそちらの方へと目を向けるが、既にその時はそこにヘッケランは居ない、そんな攻防を何度も繰り返すうちにデス・グラディエイター死の剣闘士も学習している。

「戦っている相手は生者、それなら目で追うのではなく、相手の存在自体を感じればいいのだ」と：

眼窩の赤い揺らめきが失われたかと思うと、鋭い剣速が、ヘッケランへと的確に振るわれる。

通常のバスタードソード並の大きさを誇る、相手のグラディウスの重い一撃がヘッケランに襲い掛かるも、2本の剣を交差させることで、その一撃を受け止める。

（これも炎の精霊が宿ってるおかげか？ 前の状態の剣だったら、今ので、ポツキリ折れてておかしくない一撃だった…）

ヘッケランはまだ自分の剣の素材が、魔法金属で作られたものになり変えられてる事には気づいていない、そのため、能力も耐久値も底上げされてるものと思ひ込み、炎の精霊に感謝の念を覚える。

（ありがとよ、精霊さん達…）

そう思っていると、その気持ちを通じたのか、2本の剣それぞれが両方とも一際強い勢いの炎に包まれる。

その瞬間、ヘッケランの中にイメージだけが伝わってくる…

それは、二本の剣を？の形にして、相手に突きつけ、自分が何ごとかを言うと、敵が炎の渦に包まれるイメージだ。

（出来るのかい？ それ…、それとも俺に力を貸してくれるってか…嬉しいね…そっちの魔力だつて無限じゃないんだろうに…）

「じゃ…その提案、ありがたく使わせてもらおうとしますか！」

### ・第三ターン

ロバーディクが数歩下がり、それでも射程の中だと判断する中で

の、アンデッドに対する効果的な手段、防具によるダメージ減少を気にせず傷を与えられる手段、それを発動させる。

ミドル・キユアウィンス  
〈中傷 治癒〉

本来は傷を癒し、治すための魔法、それが負の生命であるアンデッドには真逆に作用する、神聖属性に対する脆弱という特性もあるアンデッドには特に効果を發揮した。

体から血は流れないが身体各所がずぶずぶに…グズグズに崩れ始めているのが見て取れる。

「みなさん、豊みかけるなら今ですよ！」

チームに聞こえるように号令を出すロバーデイクに真つ先に応えたのはヘツケランだ。

「そんなじゃ、とっておきをお見舞いしてやりますか！」

そう覚悟を決めると、敵の真正面に立ったヘツケラン、そいつに向け、イメージの中に出て来たような…2本の剣を？の形にして、相手に向け、大きく発動の意志を告げる。

〈猛火噴炎〉！

そう言うのと、死の剣闘士の足元から全身をすっぽりと覆い、さらに天空に噴出するかのような炎が吹き上がる。

盾で防ぐという手段も間に合わなかった死の剣闘士は、神聖属性により大ダメージを受けた直後、第2の弱点である炎に包まれ、焼かれていく。

その様子を見守っていたベルは、内心で感心する。

(ダメージの総量では、及ばないが、あれは正に〈吹き上がる炎〉…レベルは明らかに及ばないはずなのに…精霊が力を貸したか…なかなか面白い展開だったな。)

密かに〈生命の精髓〉を使い、相手のダメージ総量を常に見ていたベルは、精霊の力を借りるだけで、ずいぶん勝率が上がるんだな…と認識を改めていた。

死の剣闘士は両膝をつき、力なく盾を手放し、グラディウスも地面

に着いてしまっただい。

眼窩の赤みはすでになく、もう動くことはないだろうと思われた。フォーサイトのメンバーが喜び、勝利をお互いにたたえ合う中、完全に油断していた瞬間を見ていただろう者が最後の力を振り絞り、武器を振り上げる。

その者は、完全に油断した瞬間を狙って両手で握り直した己の武器を、最後までまともにダメージを与えることのできなかつたヘツケランに向けて振るう。

勝利を確信して、武器をしまっていたヘツケラン。

愕然とした表情で固まるメンバー。

その中で一人、その状況を見ていたアルシエ、彼女は身動きが出来ないので、ただただ、相手の拳動を見ているしかなかったのだ、油断していなかったというより、3発めの雷サンダーアロー矢を準備したまま、解除：キャンセルさせる方法が分からず、タイミングを逸していただけだったのだが…。

その決定的な状況で、彼女は最後の攻撃を見舞う。

大きく振りかぶった瞬間を狙っていたため、心臓は無いが、相手のムネのど真ん中に、その雷サンダーアロー矢が突き刺さる。

その一撃を最後に…、一体目の死デス・グラフェイエイターの剣闘士はついに力尽きた。

アンデッドの最後に相応しく、全体が崩れ、黒い砂のようになって地面へと消えていく。

「あつぶねえ…助かった、アルシエ。」

「やれやれ、美味しい所を彼女に取られてしまいましたね。」

「私なんて、ずつといい所ナシよ…まったく…それにアルシエのその装備、つてさ…ベルさんの言ってたヤツ…でしょ？お腹出てないじゃない…それ私にも着させてよ♪」

「そんなことない、私はたまたま、動けなかつたから、武器を下ろしてなかつただけ…運が良かった。」

（それにしてもこの鎧に込められた魔力量は凄い…私の魔力で打ち出す雷サンダーアロー矢は、撃ち出した感覚からして、ライトニング雷撃にも匹敵する威力で、

多分魔力の消費量も同じくらい：なのに、ヴェールさんの〈雷撃〉ライトニング一発の総魔力量は、私の〈雷撃〉ライトニング3発分よりも大きい、まだこの鎧に魔力の残量が存在してる。）

アルシエ自身は暫定的に「雷矢」サンダーアローと呼んでいるが、実際に込められている魔法は第4位階の〈雷電〉サンダーライトニングで構成された、ペロロンチーノのお遊び装備のだが、魔力自体は使用者のレベル、魔力を基準とするので、消費量は第3位階相当となっていた、詳しい設定内容はペルリバーも教えてもらってないし、調べてもないので、ガチな威力で作られてはいないだろうという認識で「こんなものだろう」と気軽に考えていたという背景があるので、想定範囲内という感じ。

さらにはアルシエの〈雷撃〉ライトニングと、レベル100のペルリバーの〈雷撃〉ライトニングでは基本となる魔法攻撃力の数値自体がかなりの開きがあるので、難度70ちよいだとしてもアルシエのレベルは25にも届いていない計算なので、まだ魔力量は余っている計算になる。

自分が動けなかったから、下ろしていなかっただけ、とチームメイトに謙遜していたアルシエであったが、不意に武器をなんの抵抗もなくスルリと下ろせたことに驚く。

「え？」

と疑問に思っていると、気が付いたら、手足を動かしても、さつきまでの装備の重みを気にせず、普通に体を動かせることに戸惑いを隠せない。

「ベルさん！…なんかおかしいです、さつきと違って身体が動かせるようになってます！」

思わず、叫ぶ…今の状態でそれを叫ぶのが正解だったかわからないが、なんとなく今の状態を説明できるのは彼しかないのではないかと言う直感から、つい助けを求めてしまった。

それを聞いたベルは「え？　まさか…そんなこと、起こりえるのか？」クラス・エッセンスと言いながら近づいて、〈職業構成の精髓〉クを発動させた。

しばらく、立ち尽くしていたベルだが、アルシエに理解した真相を告げる。

「おめでどう！ アルシエちゃん！ キミは晴れて「アーマードメイジ」を1レベル体得したね、これで鎧を着たままでも、問題なく魔法の詠唱も出来ると思うよ？」

「え？ …あーまーど？ なに？」

「ああ…え〜つと、それはね…？」

ベルは、その職業の概要をわかりやすいようにアルシエに聞かせた。

### ●サイド：ブレイン&エルフチーム

#### ・第一ターン

〔武技〈領域〉！〕

剣を構えて腰を落としたまま、無言で自らの武技を発動させる。

雄たけびを上げた直後、死デス・グラディエーターの剣闘士が大きくブレインに向かって

足を踏み出し、剣を上段から振り下ろす…しかし、ブレインは悠々とそれを体をひねることで、紙一重で回避した。

その瞬間を狙い、デイーネが〈中傷治癒ミドル・キュアウーンス〉を放つ。

大きく悲鳴のような叫びをあげる敵に目掛け、ルチルが〈自然の精霊召喚エレメンタル1st〉を唱え、レベルは7のファイアーエレメンタルの召喚に成功した、近くにサラマンダーの存在があるため、1LV上昇した精霊を呼び出せたようだ。

そこで、セピアが標準仕様の「コメットインパクト！」を高らかに宣言すると、敵の頭上、前方から敵の盾くらいの大きさの彗星が空から墜ちてくる。

前方からそれが見えていたため、相手は盾を構え、それに備えるも、はるか上空から墜落してくるソレを受け止めるには、勢いが乗った落下物を防ぐには足りなかったようだ。

構えた盾は壊れはしなかったものの、変形してしまい、燃え上がる

彗星が足元に転がり直撃する。

わずかにバランスを崩し、膝をついた相手は、足の骨に小さくはない損傷を受けたと自覚を持ちながら、目の前の剣士に対し、引き続き、攻撃の意志を固めていた。

### ・第二ターン

(アンデッド相手に、これだけ身長差があると、オレの「秘剣」もさすがに届かないだろうし、ノドを切り裂けても何の意味もないな…守備に徹するか…)

「〈能力向上〉！」

今のままでも攻撃は当たらないとは思っているが、万が一でもアンデッドになるなど御免だと判断して、万全を期して能力の底上げを図る。

そこへ目の前の相手からグラディウスの横薙ぎが襲い掛かった。

ブレインは器用に自分の刀、相手のグラディウスの大きさ、刀身の分厚さから言うと、爪楊枝ほどの自分の刀をナナメにすると、自分の足元に滑らせるようにして受け流す。

まともに受ければ自分の武器が折れてしまうので、自分も後ろに軽く飛ぶ形で力を逃がすと、勢いに乗った相手の剣はそのまま地面に振り下ろされてしまった。

その体勢のわずかな不利を見たエルフの3名はそれぞれ行動を開始する。

発動から直撃までのわずかな時間差を惜しんだセピアは、先日覚え  
たばかりの魔法を唱える。

〈ファイアーレイン〉

発動と同時に、天から拳大ほどの火の玉が雨のように降り注ぐ。

体勢を立て直す時間もなく死の剣闘士は自らの弱点である炎属性  
を背で受ける形になる。

防御もままならない状態で、背中が焼け焦げていく。

次に襲い掛かるのはルチルが呼び出した火の精霊だ。

自らの身体を使い、死の剣闘士デス・グレイエイターの背中にすがりつく、そうすることで、引きはがせないまま、継続ダメージをジワジワ受けることになる。

デーネも再度、再び同じ手段を試みる。

〈中傷治癒〉

自分も芸がないとは思っているが、〈慈悲の雨〉マーシーレインはMPの消費量が意外に多い、そのため乱用はしたくないのだ。

「グギヤアアアアア!!!」

盛大な苦悶の悲鳴を上げ、傷ついていくアンデッド。

ヨロヨロと起き上がり、力なく体を揺らめかせながらブレインに襲い掛かる体勢をとった。

### ・第三ターン

相対する相手に対して万全の体制をとるブレイン、半死半生の死の剣闘士デス・グレイエイター。

最後の足掻きとばかりに、最大の攻撃を準備している様子のアンデッド、その直後、目の揺らめきが強くなったかと思うと、今までより早く、鋭く、重い一撃が繰り出される。

それは〈剣闘士の一撃〉

そのモンスターが下級クラスクラスの存在でも最初から覚えているスキル。

上級で同種種のものは、もつと上のスキルを使えるが、31レベルの彼からすれば、攻撃で有効なスキルはこれだけなので仕方ない。

しかし、その鋭く、重い一撃も、ブレインは通常より身体性能が上がっているうえ、〈領域〉で相手の攻撃などすでに把握している。

余裕綽々で、その間合いの外へと出る形で回避していた。



そこに、予め、トドメとばかりに用意していた、セピアが〈第三位階〉相当のMP消費により、発生させた「コメットインパクト」を、発動させると、先ほどより一回り大きくなった彗星が死の剣闘士デス・グレイディエーターに襲い掛かる。

直撃まで時間はあるものの、よけるだけの体力的余裕はない為、盾を持ち上げて、防ごうと身構える。

しかし、それは先ほどの〈第二位階〉ではなく〈第三位階〉相当の威力の直撃だ。

さつきはひしゃげただけで済んだ盾も、まともに受けては盾ごと押しつぶされるようにして、身体が地面にたたきつけられるとそのまま、炎上し、黒い灰のように周囲に広がっていくと、すぐにそれは霧散する。

「やった〜！ 私がトッドメ〜♪」

「ああ〜あ、結局ワタクシは割り役で終わってしまいましたね。」

「わたしなんか一番ダメージ与えたのですから、えむぶいぴ？ つてものをもらつてもいい気がするんですが…」

いつものように3人の日常的会話を繰り広げながら危なげなく戦闘を終了させた4名は、ひとまず安心して、一か所に集まりそれぞれの活躍をたたえ合う。

「お疲れさん、結局、俺は何の役にも立てなかったな、あそこまで一方的だといっそ清々しいぜ」

苦笑いを浮かべながら、エルフの3名の健闘を称えるブレイン、それに対してエルフのみんなも労いの言葉をかける。

「そんなことないですよ、あそこまで一方的な運びで引きつけてくれて、傷一つ負わず、その武器にも損傷はないじゃないですか…それってすごいと思いますよっ」

「そうか？ …まあ、一応相手は「難度93」って話だったからな…念には念を入れて防御に専念させてもらっただけさ」

そんな会話をして居ると、どうやら、向こうが騒がしい、なにやら起こった様子だ。

「なんだ？ 向こうで何か起こったのか？ 誰かが新しい武技か魔法でも覚えたか？」

「ん〜…聞くところによると、新しいクラスを覚えた人がいるらしいですよ？ 話の様子からして、あのちっちゃい子？ アルシエさんと言いましたか？あの子のようですよ？」

レンジヤーのクラスを持ちエルフ特有の聴力の良さも併せ持つセピアが遠くでの会話を聞いて、内容を教えてくれた。

「それじゃ、どんな会話してるのか行って、聞いてみるか！」

そう言いながら、結論は聞かず4名とも、騒いでいる方の6人が集まっている方へと向かう。

近づけた頃にはフォーサイトのメンバー間、というより女性メンバーの間で色々と問題が起きてるらしいことが判明した。

「ダメ…これは私がベルさんから直々に着させてもらったもの、それに身に着けながら魔法が使えるなら、今までよりこっちの方がいい。」  
すると、すがりつこうとするイミーナを軽やかに避けながら、アルシエが舞う。

とは言え、イミーナも本気でアルシエを捉えようとしている訳ではないため、おふぎけの延長でじやれている程度の絡みの様であるが…でなければ魔法詠唱者の身のこなし程度でレンジヤーのスピードを躰し続けられるわけではない。

「ねえ、お願いよお〜アルシエ！ ちよつとだけ、ちよつとだけだから

試しに着させてよお…話に聞くより良さそうな装備じゃない？ 試しに一発、ね？一発だけだからあ」

「ダメ…この分だと、あと一発撃ったら打ち止め、新たに魔力を補充する必要がある！ イミーナが〈雷撃〉を私に撃てるんなら話は別だけど…？」

普段、チーム内でも姉的立場であるイミーナからここまで何かをねだられたことのないアルシエだからこそ、こういう空気は新鮮だと、実はこのやり取りを楽しんでいた。

「ねえ、アルシエちゃん？意地悪言わないで？ね？ お姉さんに特別に…一回だけでいいから…ちよっぴりだけだから♪」

などというやり取りを外から見ているベルはなつかしそうにそのやり取りを眺めていた。

（ああ、こういうセリフ、ペロロンさんが聞いてたら、きつとこう言うんだろうなあ…「ねえ、ベルリバーさん。この会話っていいと思いませんか？『ちよつとだけ、ちよっぴりだけ』ってやつ…どことなく『ね？頼むよ、先つちよだけ、本当に先つちよだけだからさ…ホントだって、一発だけ、一回だけだつて』ってセリフみたいだと思いませんか？」だなんて爆弾発言をサラリと茶釜さんのいる前でも言い出しそうだったなあ…）

「でも、イミーナにはちゃんとレンジャー用の緑の全身鎧もあるって話、そつちでも問題はないと思う。」

わざと意地悪を告げるようにして、話を引っ張り続けるアルシエ、本来はイミーナにそういう気持ちを持たせるためっていう目的があつての行動だったのは忘れていないのだろうが、それは限界まで勿体つけているようだ。

「でもさ、私は、どつちかを選んでいいよ…って言われてたのよ？それをアルシエが着ちやうのはズルいんじゃない？」

せめてもの抵抗でそう言うイミーナの言葉も、アルシエはそれを迎撃する。

「それはそう…、だけど、あの時は『どっちにしても着たくない』って話をした、私が着て、使ってなかったらそういう感想は一生待たなかったのは確実。」

「ちよおくく…それ、ベルさんの聞いてる前で言っちゃうワケ？」

「でも事実…それでも着たいなら、後で私も考えなくもない…、でもそれはイミーナ次第…。」

と、やっとそこでアルシエは一步引く姿勢を見せた。

「なにになに？ 私次第ってどういうことよ…。」

その言葉にやっと表情を緩めるアルシエ、緩めるというより少しニヤつとしてる雰囲気が出ているのは気のせいだろうか…あの子がそういう駆け引きをするタイプだとは思えないのだが…何を言い出すつもりなのだろうか…？

「それについては、次の戦闘が終わってからでいい？ 私も、自由に使えるようになってからのこの鎧の性能、ちゃんと確かめたい。」

それに関してはイミーナの方も特に反対する意思はないようだ、ちよつと借りるだけという意味もあり、その装備の性能がもつといい物なら、それはそれで借りるときの喜びもひとしおだろうと判断した為だろうか…？

「まあ、それは構わないかな…ならアルシエ、約束よ？」

「うん、もちろん！」

と言いながら二人は指切りをしている中、ベルは、適当なアイテムを…と漁り、無料コインで良く買え、敵からも良く初期のダンジョンとかで落としてくれていた、死蔵アイテム、「たいまつ」を数本用意して、先端の炎の部分が中心に集まるようにして、準備。

この後の戦闘の為に、ヘッケランの武器の炎系魔力補充用として、焚き火のように設置して、フォーサイトの男性メンバーに暖を取ってもらっていた。

…そういえば、みんな飲食って無効化してないよな…こっちで、なんとかする必要はあるか…キャンプ用の調理アイテム類で、代用できるかな…？

などとベルリバーは今更ながら、特訓期間中の食事についても心配し始め、そこに気が付き始めていた。

## 第42話 みんなで特訓、レベリング！「お昼と食休み」

ベルリバーとフレイラを含めた総勢10名のメンバーは、皆、一樣にキャンプよろしく、まるでアウトドアの現場の様にテントを張ってみたり、たいまつ数本で作った焚き火を囲むように石を敷き詰め（この石はどこから出てきたのかは後述参照のこと）、簡易的な炊き出し場を作り出していた。

（もちろん、その焚き火の火に当たるようにして、ヘッケランの剣、その刀身の根本、剣の平たい部分に光り輝く炎のような紅い精霊石、それに炎を浴びるようにさせる、これで、少しでも回復してくれれば、さつき手助けしてくれた返礼代わりともなると思っているのだろう。）

もちろん、先程、戦闘していたドア正面ではなく、ドアの裏側に移動して、そこに休憩が出来るようにと憩いの場を作成し、そこでの食事、または睡眠での休息をとらせることでダメージ、疲労などの回復をしてもらったり、気分転換のように息抜きをしてもらおうとしていた。

その作業をしようとしていた時に、いつでもそばから離れないフレイラが「非力な我が身も、微力ながら手伝わせていただきたく…」と伏し目がちに言ってきた。　：そう言われてしまうと、仲間外れも可愛そうだなと思い、お願いすることにした。

：のだが、しかし作成者プリベアーのクラスをいくら習得していても、それは液体とか関連についての技量（調理、材料の仕込み、煮炊きなど、薬液などの調合も含む）であり、アウトドア関連に対しての知識はほとんどなかったため、結局、他のみんなの手間を増やしてしまうだけ：と思われたのだろう：「フレイラさんは、どうぞゆっくりされていて下さい、細かい作業はワタクシどもが：」と言われてしまい、ベルの

横で落ち込んでいた。

そして、当のベルは、ユグドラシル時代に無料コイン（ユグドラシルコインとも言うが…）で初期の初期、購入していたアイテムを提供し、それで今回のキャンペーン場の作成を提案した流れで、今回のこのような作業に取り掛かることになってしまったのが、現在のこの状況に繋がることになる。

ユグドラシルで、まだ自分というアバターが発生したばかりのサーバー世界。

大きく分けると『アースガルズ、アルフヘイム、ヴァナヘイム、ニダヴェリール、ミズガルズ、ヨトウンヘイム、ニヴルヘイム、ヘルヘイム、ムスペルヘイム』に分けられた九つの世界…、自分たちの最初のホームとも言えたそれらサーバー単位での各種世界から出ていけなかったくらい低レベルだった頃、当時、一緒に良くコイン&経験値稼ぎで外に誘われていた時に、一緒に持つて行っていた「おでかけ用」のセットも10人分賄えるように、みんなに提供していた。

それは、初心者でも購入しやすいようにと、店売りだった「ピクニックセット」「アウトドアグッズ一式セット」「サヴァイバルツール」の3種を出して、あらゆる材料提供をしていたため、こちらものんびりと…というより「どうぞ、お疲れでしょうから…」と遠回しに『おとなしくしてくれませんか?』と暗に言われたようなもので、こちらもみんなから外され、ひっそりとしていたのだった。

「ピクニックセット」は、通常のブルーシート4枚、持ち運び用のバスケット、日よけ用の日傘（折り畳み式）に、5人分の…ワリバシ、スプーン、フォークも人数分含まれており、当時の無料コインで100コイン…その中にはちゃんと5人分の水筒（500ml程の容量、すぐに飲み干しても微量ずつ中の水は回復し1時間で500ml満タンになる仕様。）も入っていた。

「アウトドアグッズ一式セット」の方は、当時500コイン、もちろん、5人分の…アウトドアを楽しむよう、耐火用の大型テント2つ（男女用）、煮炊き場を作るのに必要なカマド作成の為の「石」数十個。

この石はそれなりの大きさがあり、座るための椅子代わりとしても代用できるような形と大きさになっていた。

その上でこっちでも：多分、これ単品でも大丈夫なように設計されていたのだろう、これにもスプーン、フォーク、ワリバシ、さらには皿、器、小ボウルがこっちにも人数分（最大人数の5名分）入れられていた。

当然、鍋、手鍋、鍋フタ兼用のフライパン、飯盒（はんごう）は言うに及ばず、アウトドアで多人数で食べる場所と言えば「木のテーブルと椅子」だろうという思い入れでもあるのだろうか：それも入っていた：普通の認識で言えばアウトドアにはそんなもの、持っていけないと思ったのだが、そこは「一式セット」の中に含まれるものらしい。それ以外にも人数分のマグカップも普通に含まれていた。

見た目からどう見ても持ち運びは無理だろうというテーブルに、キチンと足場も作られ、しっかりとした造り。

さらには、椅子の部分は一本の丸太を縦にすっぱりと真っ二つにしたような形、平面を座る場所になるような：そんな感じの趣のある椅子ではあり、横に長いので、5人くらいは問題なく座れそうだ。それにテーブルの対面にもその「丸太真っ二つイス」はあり、確かにいい物ではあると思ったのだが、私がリアルで過ごしていた世界ではピクニックはもちろん、アウトドアなんてものは金持ちの道楽だった。

アーコロジー内でなければ健康的な空気などは提供されず、日光のような清々しい光などはあり得ない世界だったのだ。

ピクニックだって、それ専用にももちろんアーコロジーの施設内で作られた場所でなければ「そんなこと」しようとも思わない公害が日常だった世界、かつての「そういう文化」があつた時は本当にそういうものを使っていたのだろうか：ボクには全く分からない世界だが：死獣天さんなら、詳しく知っていたのだろうか…？

ぷにっと萌えさんでも色々教えてくれそうではあるけども…、やはり信頼度では大学教授の死獣天さんに軍配が上がるかな…。

など色々と考えにふけてしまったが、とりあえず細かいことはどうせわからないのだ、知っている人たちに任せたいだろうと、



アウトドアの達人らに任せようという結論に達していた。

ついでに言うとサヴァイバルツールは上級者用で、課金アイテムだが：あの背後に浮かぶ文字、たっちさんの「正義降臨」でも使われていた、一文字分に相当する50課金晶クリスタルで買える程度のアイテム：とは言え、有料課金を良しとしない「無課金同盟」が全盛だった時は「こんなもの邪道だ！」とみんなに言われていたっけな。

「誰用になんだ？」と悩んだのは携帯用トイレ、さらには「折り畳み用トイレ」などと言うものもあり、組み立てれば、木の枠の外装だが、天井もしっかりしていて、それなりのスペースもある：、水量調節や、音姫なる機能があったのだが：これはきつとアークロジ内の家庭向けの仕様だろうか：ウチにはこんな機能のトイレは無かった、普通の洋式トイレだったのだが：。

その機能がついていたのは女性用だけだったので「フレイラ：私が女性用の場所に入るのもアレだ、だからお前が説明してあげなさい」と、とりあえず緊急避難的にぶん投げたのだが：フレイラは何ともないように、これはこういう機能で：と普段から使い慣れたる様に細かい使い方で説明していたのにはかなり凹んだ：。

（ユグドラシルアバターでは「排泄」なんて機能、なかったはずだが：誰用の目的だったんだ？ …、それともこっちの世界仕様が変わった弊害？ もしかしたらユグドラシルでも、人間種にはそんな機能があったのかもしれないが：そこは何とも言えないな：自分にはわからない世界だ。）

他のみんなが忙しなく作業を続けてくれている中：、ベルリバーは当時を思い浮かべていた。

当時のユグドラシルはまだリリースされてまだ数年も経っていない時期で、のんびり無課金で楽しめるゲームでもあるという点を売り

にしてたこともあり、そこいらでキャンプのような真似をする事も出来た。

しかしながら、もちろんそんなことを悠長にして居たら、意味もなく「PK」されることもあったわけで…。

その頻度は意外に多く、自分もその洗礼は否応なく受けることになった、それは一度や二度ではない。

今も昔もネットゲームというのはそういう輩は居るものだという事前の心構えはあった、大昔、普通にネットが普及し始めていた時代、今のようなダイブシステムではなく、普通にバーチャルでのネットゲームであっても、そういう輩は居たという記録が残っている。

自分が吐き気がした記事は「血のバレンタイン事件」と後に呼ばれるようになった惨事。

運営が企画した大量初心者殺戮イベントが、バレンタインの時期と合わせる形で催された祭典。

謳い文句は「愛を知らないプレイヤーに愛のこもったチョコを送って、愛を教えよう」だった。

実際は大したことをするわけでもない、PKを生きがいとする者たちが集まるサーバーに、そのチョコを送りたいという、まだ何も知らない本当の初心者プレイヤー達に告知をすることでおびき寄せるといふ策略を打ち立てたのだ。

初心者ではないプレイヤーにも、その告知は同様に届いては居たが、少し長くプレイしていれば、その舞台となるサーバーの広場は、PKプレイヤーしかいないことを知っているため、「誰がそんなところかよ」という結論を出し、誰も行くわけないよな。とそのイベントが成立する訳ないとタカをくくっていたのだ。

もちろん運営側はそのサーバーは「そういうヤツら」の巣窟だということを親切に告げる事もせず、大々的に募集をかけ、ちゃんとイベントとして告知した。

チョコアイテムを送信するのではなく手渡しで…という条件まで付ける念の入りようで、とにかく善意のプレイヤー達をかき集めていた。

運営は、そのこのサーバー内のプレイヤーにチョコを渡すことに成功したキャラには盛大なボーナスポイントや超レアアイテムなどを用意、一番チョコを渡せた者だけがそれを受け取れるという話だった。無論、愛を教えに行くため、戦いに行く装備は持ち込み厳禁。ということでまともな装備も身に着けず、チョコだけを持って、そのサーバーに入った瞬間に、周囲のPK達はなにも知らずにやってきた彼女らに襲い掛かる、という図式はもう出来レースだった。

その事件の被害者は相当な精神的ショックを受け、そのゲームを辞める者たちが続出したらしい、もちろんそんなゲームの寿命も長くは続かなかつたらしいが…。

そういうこともあるという認識を持ってここに来た自分は、PK自体にはそれほど衝撃は感じていなかった、どこにでもこういう輩は居るものだし…とある意味、蔑みさげすの感情を持って、あきらめ半分でもあった。

しかしゲームとしての楽しみを期待して参加した初心者組は、そういう風に割り切れるはずもなく、それでやめていく人が多かった。

自分をキャンブやら、外に経験値稼ぎやドロップアイテム収集に行こうぜ！と誘い出してくれたのもその内の一人。

気がついたらいつの間にかやら、外に誘われなくなり、最後にはアバターの抹消まではしなかったものの、イン自体がなくなっていた。

さみしい気分で、その友人と共に、よく行っていた場所にソロキャンブ気分で単独で行ってみた。

その時は危険があるかも…などとは考えてもいなかった…というよりすでに自分を終わらせることを前提にしていたのかもしれない。かかった。

ひよつとしたらただ、少しでも寂しさを何かで紛らわせたかっただけかもしれないけれど。

今の自分でも、当時のあの時の自分はどっちだったのか判断は出来ない。

森の適当な場所に到着すると、一人でテントを組み立て、野営の準備を一人で行い、火をおこす。

そうしていると、気が付くと変な奴らに包囲されていた、その時の自分は自暴自棄になっていた、彼がもうどこにも現れてくれないなら、デスペナを食らって、なんなら1レベルまで落ちるだけ落ちて：この世界も辞めて、キャラデリくらいしてもいいかな：とくらい思っていた。

そもそもこんなPKなんかがなければ、あいつも辞めることは無かった、今も楽しくこの世界での探検を楽しめていたはずなのに：と、どす黒い想いも無いではなかったが、多勢に無勢、自爆アイテムなんて持ち歩いてるはずもないので、包囲していた輩の中、そのヤツらの誰でもかまわない、誰にともなく語りかけた。

「こんなところでまたPKですか？ 揃いもそろって暇ですね：、自分より弱い異形種を食い物にして何をしたいのかは知りませんが：もうこの世界ともこのキャンプを最後に去ろうと思いますので：どうぞご勝手に。」

その言葉をどう受け止めているのか、ただ静かに、こちらをはやし立てることも、バカにすることもなく、ただただジワジワと距離を詰めてくる。

自分はその時、静かにため息を吐いた。

こんなことがユグドラシル生活最後になるのだろうかと：ギルドどころか仲良しだけでクランを作ることもないまま、このゲームの醍醐味も知らないまま、辞めること自体に未練がないでもなかったが、それ以上にもうこれ以上、こいつら「PK」する輩が、弱い物いじめに精を出し、愉悦を見出すように：強いものに挑むではなく、とことん自分より実力のない相手ばかりを標的にする、そんな奴らに纏わりつかれるのにも嫌気がさしていたのだ。

特に抵抗するでもなく、焚き火をいじりながら、座り込み、最後の炎を見つめるベルリバーがとことん不気味だったのかもしれない。

それとは別に、ただ「こいつは無抵抗だから楽な相手だ」と思った

のだろうか…一定に離れた場所からは近づいて来ようとしていなかった集団の中から一人が歩き出してきた。

(あいつがボクを最後にPKする最後のプレイヤーか…上等だ…実力で負けてたとしても、負け犬の遠吠えと言われようが最後まで罵り続けてやる。)

そう決心してにらむように顔を向けると、その相手は他のメンバー達を後ろに少し下がらせたまま、自分が座っている場所のとなりに腰を下ろし、座り込んだ。

この目の前の相手の行動の意味がわからないベルリバーは、いぶかしげに相手から目を離さずにいるだけしかできなかつた、見た感じ相手の装備だけでも自分の持つ物以上のレアリティを感じる。

自分がまるで「初心者装備のまま」、近寄ってきた相手が「〇トの武器」に身を包んだ上級レベルプレイヤー。

ぱっと見でそれだけの差があつたのだ。

(ああ、これは確定だな、ここで…今日が自分の命日になって、ここが墓場つてことか…)

そう思っていると、その相手は、

「こんなところで何をしているんだい？」

(なんだ、こいつ…馴れ馴れしく話してきやがって…そうか、こつちが「この人たちは安全だ」と判断したら襲いかかって、何が何だかわからないって狼狽える様を見下ろしながら、せせら笑おうって魂胆だな…、その手には乗ってやるもんか！)

「見てわかりませんか？ ユグドラシル生活最後のキャンプをしているんですよ…」

するとその目の前の相手も異形種の為、表情も変わらないので性別はわからないが、おそらくは男性っぽいと思われる声で尚もこちらに質問をしてきた。

「こんなところで、1人で？」

(しつこいな…そんなにぼっちかどうか…ああ、そうか、伏兵がいなか警戒でもしてるのか？…そんな相手いませんよ…思つて悲しくなってきたよ…。)

「その質問に答える前に、私からもいいですか？ ……なんでお隣に？」  
すると、少し首をかしげるような仕草をされた後、そいつは、自分のコンソールを呼び出し、ポチポチと何かの操作をすると、含み笑いのような…押し殺した笑いを口から洩らした。

と、その相手は少し後ろに控えていたメンバーらしき者達を見えない場所にまで下がらせ、二人きりになった。

「そうか…それはすまない……そうだったのか、本当に初心者の方のソロキャンプだったとは…キミはなかなか命知らずだね。」

そう言われても仕方がない、今日を最後にしようと思っていたのだから…

「私にはもう続ける理由がありませんからね…、このゲームを始めた同輩…と言ったらいいでしょか…、親しくしてくれたアイツももう来ないようですし…その原因を作ったPKのやつらに恨み言の一つでも言いながら消滅でもしようかと思っただけに来たようなものですから…だから、どうぞ、伏兵も何も、私には協力してくれるどころか、利害で結ばれた程度の人脈もないので…好き放題に殺しまくってくださいいな…もう疲れましたよ…。」

一通り、心の中の想いを吐露すると、相手もなにかコツチに伝えたイコトがあったのか、PKに及ぶこともなく話を続けた。

「そう言えば、さっきのキミからの質問に答えてなかったね…オレがキミの隣に座ったのはキミのステータスを確認するためさ…遠くからだと相手の外装、装備の「見た目」しか分からない…それが幻なのか…実体なのか、初心者のような装備でもそれは本物か幻か、本当のプレイヤーレベルはどれくらいか、仲間をどこかに潜ませてるのか…森と言う場所を生かしたトラップなどは？とか、色々気を付けなければならぬことが多いからね…その中でも一番有効なのは、相手の隣に座ること……そうすることでキャンプ仲間のような位置づけに勝手に認識されて、隣の相手の表面上のステータス程度は読み取れるようになるのさ…もちろんキミも、オレのを見られるはずだよ？」

「えっ？」

意外な答えだった…友達だと思っていたアイツにはそれは教わっ

ていたが：初見で、まだ友達申請もしていない相手が、隣に座ったくらいで：表面上だけとは言え、ステータスを見られるような仕組みになっただけなんてコトは知らなかった仕様だ。

自分もコンソールを操作して相手のステータスを見る。

(相手の名前、クラン所属、総合レベル：HP：MP：うん、自分より比べようもないくらい上だ：)

「すごいですね、クランに入られてるんですか：」

「ああ、そうだよ、その感じだと初対面だからクラン名までは表示されてないだろう？」

「そう：ですね：、それは見えてません。」

「唐突だが、キミ：ウチらの仲間にならないかい？」

リアルの自分の眉が顰められるのがわかる、こいつは何を言い出すのだろう：と不快感が先に立ったためだ。

「PKの仲間になれと？」

「確かにクランの名前に「PK」という文字は含まれるが活動内容は真逆だよ？　：いや、する事は同じようなものだけど、報復という点では「楽しみ」の為ではない、って立場だから、その点で全く違う、って言い直した方がいいかな？」

(PKの片棒を担ぐなんて死んでも御免だ：アイツを追い詰めたヤツらと同レベルに墜ちるなんて：)

「まあ、とりあえずボクがキミに招待メール送るからさ、とりあえず了承してみてくださいよ：そうすればクラン名がわかる、それがわかればオレらの活動内容も勝手にわかるはずさ：それを見てもやはり、相容れないと思ったら、その時、キミの「クランメンバー一覧」から「退会」を選択すればいい。」

(まあ、PKと真逆の活動なのにPKという単語が入るクラン名というのは確かに気になる：メンバーになってから退会していいなら、クランの名前やメンバーの名前を確認するだけでも損にはならないしな：『了承』：と。)

クランの名前を読んだ瞬間に衝撃が走った。

そんなことは思いもよらなかつたからだ、まだギルドではなくクラ

ンという規模だが、それを活動内容にしようという団体が出来ていたのか：という新鮮な驚きだった。

「PK（プレイヤーキラー）ハンターズ」

：後で、その男はクランリーダーだったことを知る。

戦闘に於いてはあまり前線が得意と言うわけではないが、素早さ&回避、攻撃をさばく技量に特化しており、得意なのはチームの支援、集団戦ではメンバーの実力の底上げを得意としていたらしい。

自分に何故声をかけたのか：ということについては「自分たちがこれからPKハントをするにあたり、しようとしてた初心者装備になつての『囿』作戦と全く同様の状況だったから」とのこと、要するに自分たちと同じような志で活動するチームも別に立ち上がったのか？と思つたかららしい。

それならば、一度挨拶くらいはしてもいいかもしれない：という話になつたから、と言うのと、もし活動するきっかけとなる想いは同じでも根本的な『報復目的』がお互いに相容れなかつた場合、お互い不可侵で、ターゲットが被つた場合は、捕捉、尾行を先にして居た方が優先権を：とかの取り決めをするためでもあつたようだが、結局は『真正正銘ボッチの初心者』だつたことがわかり、いたたまれなくなつて誘つてしまつたらしい。

もちろん、それからはそのクランの活動の下、自分のレベル上げ、PVPのやり方、PKに襲われた時の防衛策：など、貴重なことを最初に教えてくれたのは彼らだった。

結局そのクランの活動のおかげで、PKする際は初心者装備のソロキャンパーは気をつけろ、という認識にまで至るようになり、そういう点では少しは彼らに痛い目を見せることに尽力できたのは、そこはかとなく自分の自信にもつながつたと思えた最初の出来事だつたな：。

そして、その活動の上で、とある「ギルド」に潜入することになり、



そこから自分の運命が大きく変わり始めるのはまた別の話だ。

(結局、あの時のクランメンバー…、ギルドにまでなったのだろうか？　そこまではウワサ、流れてこなかったな…)

そんな思い出に浸るのもそろそろ、時間切れとなり…とりあえず、しばらく待っていた一連の作業を終えた達人たちは一通りの作業を終わらせ、戻ってくると、見事に同時作業ができるようにと、鍋用の…手鍋用の…飯盒用の…という3種の煮炊き場を作ってくれていた。「おお…これはすごいね…ボクらはこういう事は慣れてないから、キミ達がいてくれて助かるよ、ありがとう。」

「それはいいが、何で料理する？　肉も何もあの中からは出てこなかったみたいだが？」

もつともな疑問だ、食べる場所を作っても食べる為の肝心の材料がなければどうにもならないのは誰が見ても明らかだ。

「ちよつと待っていてくれ、手軽になんとかなる物は、あるにはあるんだ…ちよつと味気ない感じだから、物足りないかもしれないが…」

そう言って取り出したのは久しぶりの出番「無限ピッチャー！ オブ・エンドレスウォーターの水差し」だ。

それを大きめの鍋に「このくらいか？」と言いながら人数分の水を満たしていく。

「あ……」

といきなり口にしたイミーナ…。

「どうしました？イミーナ…？」

「なんかあったか？」

「あんたたち気づかないの？　あれ…あの水差し！　私たち、一度見てるでしょ？」

「え？そうだったか？ どこでだったっけ？」  
「ん〜：そう言えば見たような…えつと…」

チームの男性陣はあまりそのことについては覚えていないいらしかった、肩の力がガツクリと抜けていく。

「はあ…もおいいわよ、アンタ達、あんな怖いことあったのに忘れてるなんて…ねえ、アルシエは覚えてるわよね？あの時の…」

と、そこまで言い、最後まで言えずにアルシエを見てしまう…なぜか笑っているのだ、それも手で口元を隠し、押し殺すような笑いで…  
「な…なに？ どうしたのアルシエ…、なにか…なんかおかしいことでもあった？」

「ん？ なんでもない…ちよつと、意外だっただけ…そうか、みんなそう言えば知らなかったままだったんだ。」

「え!!!? …まさか…もしかして…アルシエ…あんた…知ってたの？」

「うん、知ってた。 だから少し前に言った。『今の姿では初対面だけど、そうじゃない時に会ったことがある』って…」

「ああ!!! そう！ 言ってた！ そっか、そういう事？ 私たちにも隠してたなんて酷いじゃないの！」

「最初から言っても多分、信じてくれないだろうから言えなかった部分もあった、だからだけど…でも今なら大丈夫かな？」

「大丈夫なの？ あの時のアイツでしょ？ あの姿は…変装してるってことだけ…」

「大丈夫、少なくとも、私たちの知ってきた中ではかなり友好的な、善

良な人、私も妹の件も含め、かなり助けられた。」

イミーナから驚きと共に、疑いの眼差しを向けられるような言葉を投げかけられた。

「正気？ アルシエ、アレなのよ？あの時のアイツ：あんなのを信じ  
フレイシ・ウオツシュ  
るって：へ洗 脳でもされたわけ？」

その言葉を聞いたアルシエの目も、少し険しいものとなる、アルシエからすると、イミーナの言い分の方が信じられない言動だったためだ。

「イミーナ：それは少し言い過ぎ、妹たちの恩人にそれはヒドイ言い草：」



なにやらフォーサイトの方が賑やかな雰囲気を感じながら、ベルが手持ちのアイテムから飲食用の消費アイテムを引きずり出す。

初期はかなりお世話になった代物。

後半になっても時々コレを落とす敵はちよいちよい出てきていたので、使っても在庫が切れることも無く、使ったところで序盤ならいいが後半では、その手間の方がめんどくさくなってしまい、使わなくなつたといった方が近い。

そのアイテムは2種。

「パピースター」と「メロリーカイト」

前者の方は、主に「幼年竜」ドラゴン・パピを代表される、あらゆるモンスターの幼児期タイプの敵が良く落としていたもの。

基本的に生物はほとんどそうだろうが、子供を単独で勝手に遊ばせてる親など、育児放棄したモンスターとかでない限り、そんなケースはあまり無く、ほとんどが「幼年竜」ドラゴン・パピを見たら、親ドラゴンも居ると思え、と言われていた程だったくらいだ。

他のモンスターの場合は多様で、例で言うところにはグリフォン・パピール幼年鷲獅子などと一緒に出くわすようなことは滅多になく…。

単体で、幼年鷲身馬を見かけることは多い、対して幼年鷲獅子は単体でも、親と同伴でも外ではあまり見かけないなど…モンスターによっても事情は全く違う。

後者の方は主に「メロウ」と言われる水辺に良く出現する半魚人のようなモンスター、水辺に出るモンスターが持つのにべちゃべちゃに濡れていることが全くないという不思議仕様。

そして、「カイト」という飛行系モンスターや、「巨鳶鳥」ロックカイトなどと言ったモンスターも落とす。

カイトが落とした場合は妥当だと思うが、「巨鳶鳥」ロックカイトが落とした場合、外れ感が強かった、何故なら飛行系は倒す手段が魔法や射撃系武器でないため効果が薄い為、倒しにくい上に体力もある、そのため労力の割に、報われなかった感が強く出てしまったためだ。

そんな2種のアイテムの効果は、「パピースター」

空腹の状態を回復させ、5%空腹を満たし、行動力も5Pt回復。HP、MP共に5Pt回復という効果と共にスキルポイントも1ポイント回復もしたが、回数制限のあるスキルは回復しなかったという不親切効果でもある。

アイテムの説明欄に「そのままでも食べられる菓子麵、もちろん、お湯で茹でて食べても美味しいお手軽食品。」と書かれていたがユグドラシルではお湯を沸かすなんていうことの意味は異形種にはあまり縁がなかったため、したことは無かったし、本当に茹でて作れるものかどうか不明なアイテムだった。

「メロリーカイト」

これも空腹を満たす効果があるもの、その上、「栄養補助食品」という名目だけの上級感だけは有名だったが、果たして美味しいかどうかの真相はついに謎のままだった。

効果は手軽にどこでも食べられる、それと「水分」と共に摂取すると幸運度が1アップするという謎の効果も追加であったが、基本的にこれも腹を満たすため、5%空腹度の数値が回復の方に上昇、行動力が5Pt上がるのも同じだが、「栄養補助」という名前があるせいとか、各種抵抗値が（下級抵抗値上昇）分上昇するという効果があったが、この効果は1個食べようと、20個食べようと、上昇した1回分の効果以上の恩恵は受けられなかった。無論それは幸運度の方も条件は全く同じである……しかも時間の経過で、その効果は消失するというのは当たり前の話なのだが。

そんな「メモリーカイト」をまず人数分の座るだろう位置へと、木のテーブルの上に並べていく。

フレイラが、「そのような雑用は私が……」と言い出しているが、「私だけ何もしないでふんぞり返っている訳にもいかないだろう?」と無理やり静かにさせた。

ついでに先程、鍋で水をお湯に沸かしている流れで、「パピースター」を10個投入。

（こういうのはみんなで食べるからこそ美味しいんだよな、全員分作らないと少なすぎて、効果が出なかったら残念な結果になるしな……それにこつちの世界でも普通に効果が表れるのか、実験したいっていう部分もあるし……ボクもこの際、その実験の被験者として味わわせてもらっちゃおう）

しかし……と少し悩む。

さすがに麺だけだと、見た目が寂し過ぎるよな……と何か、具はないか?と探していると、あった。

「ゴルゴンの燻し肉」

他にも、「ミノタウロスの牛タン」などあったが、それはまた今度にしよう。

意を決して、鍋にゴルゴンの燻し肉を小さく千切つてぶち込む……これでしばらく茹でれば……少しは柔らかくなるだろうか……?

そういえば、あつちでもこつちでもリアルでも野菜とか植物系とか

…そっちの知識は明るくなかったな…：中学でもつと勉強しておけばよかつた…：まあ家の事情で中退することにはなったが、途中までは通えてたから…とは言え、学歴的には小卒ってことになるんだよな。

「ああ…：ええ…つと悪いけど…：ルチルさん？　少し聞きたいことがあるんですが…？」

いきなり声をかけられたルチルは少し驚いた顔をしてベルの方を振り向いた。

「あの…：ドルイド系の魔法で、植物から、食用とかにできる野菜とか…：野草とか…：そういうの、作れないかな？」

「できないことも無いと思いますが…：試したことは無いので…：やっては見ますけど…：」

少し、及び腰だ。

扉の裏のスペースから少し離れ、十分なスペースがあると思われるあたりまで移動したルチルはいくつかの魔法を連続で発動させる。

〈植物の絡みつき〉

〈植物成長〉

〈植物作成〉

ルチルが3つ目の魔法を唱え終わると、地面から拘束用に出した根っこが、成長して超巨大な植物の根のような物へと変化し…：その根っこが、横たわり、地面に大きなスペースを確保するように複雑に絡み合う…：すると色々な種類の植物に育つような適切な「プラント（設備）」が同時に組み上げられていく。

「あ…：」

何かが気になったのか、ルチルが唐突に顔を上げて、他のことに気を逸らしていた。

「ん？どうした？ルチル…：何かあったか？」

「…あ、いえ…：なんでも…：では続けますね。」

「??？」

（何かあったようだが、隠し事なんて珍しいな、それとも本当に何もな

かったのか？ だとしたら、最初の「あ…」というのがそもそも成立しなくなるし…まあ本人が言いたくないなら、今は聞かなくていいだろう、聞いてもらいたいと思ってくれたなら聞いてあげればいいよな。）

クローブ・フィールド  
〈作物畑〉

その魔法を唱えた瞬間、植物だったものが穀物に…根菜類に…野菜に…と様々な作物が実る場が変わっていく。

「あれ？ すごいじゃん、ルチル…新しい魔法じゃない？ それ？」

セピアが近づいてきて、その光景を見るや否やそのようなことを口にする。

「ええ、新しく難度が上がったので、新しく魔法を覚えることが出来ました、なのでこの魔法を今回は選択いたしましたよ？」

（え？ せっかくの新しい魔法獲得のチャンスを、畑作成の魔法を覚えるのに使っちゃったの？ …もつたいない…って、そうか、そう思われるから、気に病まれるんじゃないかと思って隠したのか…ホントに、イイ子達だよ、この娘らは。）

（ん…でもさすがに、卵にナルトは難しいよな、これ以上負担をかけるわけにもいかないし…）

「それじゃ、間に合わせで…ほうれん草に、ニンジン、あとはネギ…と、ありがとうルチル、それじゃ遠慮なく使わせてもらおうね？」

「あの…ベルさま、それなら材料の方は、私が…少しくらいは手伝わせてください…ダメですか？」

おずおずとフレイラが声をかけてくる。

「それはいいけど、切るのにまな板がなくなつてな、あとは手ごろな包丁…、さすがにサヴァイバルナイフでネギ切るわけにもいかんし…切れないわけじゃないが…見た目的に…な。」

悩んでいると、表情を明るくしたフレイラが距離を詰め、顔を近づ

けたまま見上げてきた。

「それならば、カルネ村での調理の際、下賜していただいたまな板と、小振りながらも切れる包丁はございます、あれからナイフ用の鞘をかぶせて大切に保存しておりますので…。」

「ああ、そう言えばそうだったな、それならお願いしようか、頼んでもいいかい？」

そう言うと、彼女は花が咲くようなという表現にぴったりな微笑みを浮かべ、笑顔で頷いた。

それからはネギはナナメ切り…と言いながら、切り方を隣で教え、ニンジンは短冊切り…と言いつつ、その切り方も教えていく、ほうれん草は…お湯に根元から入れていくだけだから、普通に手を出すまでも無かった、泥を洗い落とすのに少し手間がかかったみたいだったが…。

茹でられたほうれん草は熱いので、手早く自分が素手を湯に突っ込み、それを引き上げ、手早く絞るとまな板に横にして置いた。

「さて…切り方は根元の部分を切り離したら、等間隔で切っていくといい。あまり間隔は大きく広がりすぎない程度…そうそう、そんな感じだ。」

後は、ほうれん草を茹でる前に固い根菜類の方を短冊切りにしたモノを茹でて、柔らかくしておいたので、軽くネギを散らすだけ、で完成した。

「さあ！これで出来上がりだ。それぞれの器を出してくれ！」

結局のところ、器は代わり映えのない同じデザインなのだが、それぞれ受け取り終わると、テーブルに並べ、その器に茹で上げた麺を移し、その上に彩りの緑、オレンジ、白を並べていく。仕上げに細かく千切って湯通しをしたジャーキーをチャーシュー代わりに乗せて



いく。

(どうしてもナルトがないとラーメンらしさが微妙なところだが、なんとなくの体裁はついたな…。)

これも、みんなギルメン達と同じ会話を共有したいという欲求で、色々手を出していた結果、無駄に浅く広く知識だけはそれなりにあった。

ヒーロー物は、なんかみんな同じようなものに見え、どれがどれやら：って感じで今もどのヒーローがどんな戦い方だったかも怪しいものだが、マンガだとかアニメだとか：ゲームとかはそれなりに：ゲームの方だけは知識の豊富な本人から借り受けることが多かったが、ソレの替わりはない、現物はそれだけだから取り扱いには注意してくれ！と言われると、気を使わざるを得なかった。

「まだエミュとかの方が、気楽に遊べたのにな…」

ラーメンをよそいながらも、過去の記憶に想いを馳せる。

そんなことを思い浮かべているうちに、よく読んでいたマンガの1シーンを思い浮かべてしまった。

その決め台詞、言ったらどうという反応が返って来るかな？ そんな子供じみた気持ち湧いてきた。

一通りの器に全員分のラーメンを注ぎ終え、人数分の「メロリーカイト」を箸休めに(：というにはちよつと頼りないが…)それぞれの場所に置いておいたポイントの横にラーメンの器を置いていく。

「さあー おあがりよー」

ドバンと、思いつき自分だけの盛り上がりで、完成の意を告げると、みなは特に何もなく、それぞれ「なにになに？ できたの？ なくにコレ？」とか「見たことないけど、ちよつと美味しそう…」など、分かっていた事だが、これと言ったりアクションはない。

「おあがりよ」という部分はちゃんと相手の耳に翻訳されていたのか、それぞれテーブルについて、みんなが食べ始める。

「もうちよつと、何かしらの感想は欲しかったけどな…」

と、シユンとしながらボヤいていると隣のフレイラから小さい声で

フォローが入る。

「大丈夫です、きつとみんな気に入ってくださいますよ…。」  
（そうじゃない…ソコじゃないんだよな…ボクが言いたかったことつて…、まあでもせっつかく娘が気を使ってくれたんだし、そういう事にしておこう。）

「ああ、そうだね、ありがとう、フレイ…、さあ！ボクらも食べようか…。」

「ハイ！」



ラーメンをすすりながら、時折「メロリーカイト」をかじるといふ…ある意味面白い光景が目の前で展開されている中、みんなそれなりに美味しいとは思ってくれているようで、途中でフォークを止める者は居ない、自分とフレイラは箸を使っていたが、その他のみんなは、フォークの方が使いやすいようだ。

「ところで、さつきは賑やかだったけど、何を話していたんだい？」

不意にベルがフォーサイトの方へと話題を向ける、食べながら、男性陣は苦笑い、アルシエは少し不機嫌な表情を出していた。

「??？」

なんだろう…ケンカでもしたのだろうか…そう思っているとイミーナからラーメンをすすりながら問いかけられる。

「アンタさ…、久しぶりなのに正体を隠したまま、ずっとこのまま過ごすつもり？」

「なんのことだい？」

そう返答すると、イミーナは不意に立ち上がり、声を荒げた。

「その仮面の下よ！ ずいぶんガタイがいいとは思ってたけどさ、中身がアレなら領けるつてもものよね…私もさつきの「水差し」を見るまでは思い出せなかったんだけどさ…けどもう言い逃れはできないよ？」

そこで納得が行く、ああ…それでひと悶着あったのか…と。

「そうか…ボクのせいでチーム内に不和が起きてしまったか…それは申し訳なかった、隠しておくつもりではなかったんだが、別段、波風を立てて引つ掻き回す趣味もないものでね…知らないままでもいいなら、しばらくはそのままでもいいかなって思ってたのさ。」

「良く言うわよ、アルシエにはちゃんと正体を明かしていたみたいじゃない？ 私たちは信用ならないってことなんですよ？」

「おいおい、イミーナ言いすぎじゃないか？」

「そうですよ、みな誰しも言いたくないことや言えないこと、言い出しにくい事というのはあるものではありませんか？」

「ロバーにヘツケラン、ずいぶんとこいつの肩、持つじゃないの…どうい風風の吹き回しよ？」

「どういう…って、なあ？ロバー…？」

「ですね、ヘツケラン、どうやら同じ気持ちの様子ですね」

「なに2人で通じ合ってたのよ、わかるように説明してよ！」

エルフの3人は特に何も言わず、静かに食べている、それぞれが無関心を装うようにテーブルから視線を上げようとしていない。

ブレインだけが、ことの成り行きを気にしているようで、ちよいちよい顔を上げては話の内容に耳を傾けている。

「まあ、確かに？ イミーナの仮説が、本当ならそりゃ驚くことだろうけど…あの人が「アレ」だったからって、今はそれほど…なあ？ロバー」

「そうですね、今となっては、それが果たしてそれほど騒ぐ程のことでしょうか？という感じもありますからね」

「どおおしてよ！　なんでそんなに落ち着いていられるのよ！」

「だってイミーナはこの人が「アレ」だったからって衝撃で、それを受け止めきれないだけなんだろう？」

「思い出してください、イミーナ、正体がどうのと考えてる前までは普通に接することが出来て、普通に相手もそれに応じてくれ、精神的な隔たりなど何もなく、同じ立場として接することが出来ていたではありませんか？」

「そういうことだな…中身だの、正体だの…そういうのより、今までの彼の振る舞い、言動、気遣い、それらがまるつきり嘘だとは俺も思えない…、対等に付き合っていけるなら見た目は関係ないと思わないか？　それはイミーナが一番身に染みて分かっている事だと、俺は思ってるんだが？」

そこで少し、冷静になれてきたようで、ゆっくりと腰を下ろすイミーナ。

彼女もハーフエルフとして、いろんな目で見られてきた歴史がある、本当の自分を見てくれる相手は砂の中の砂金を見つけるより難しいと思っていた。

自分だって、自分を守るために相手をわざと遠ざけるような言い方をすることもある、傷つきたくないから、敢えてキツイ言い方をして相手から離れてくれるように仕向けたこともあった。

でも、目の前のコイツはそうじゃない…さつき見た剣速だって、人の領域を軽々超えていたように見えた。

魔法だってアルシエの言葉が真実であれば…いや、彼女の「目」が予測を外したことなどない…なら間違いなく第8位階まで使えるのだろう。

そんな逸脱者すら、かすんで見えるような超人が、なんで姿を隠すことがあるのか…そこが納得できないからこそその反発なのだ。

一人、納得できていないイミーナに対してか、全員に対してかは分

からないが、ベルは一人言をつぶやいた。

「一つ、これは真実として受け止めてくれて構わない、というより嘘だ  
としか思えないだろうが…事実として君らがもうすぐ直面する現実  
という名の絶望が数えきれないほどの脅威として襲い掛かって来る  
未来がボクには見えるのさ、どうしても…こっちの世界に来て初めて  
通じ合え、会話が出来た、そしていろんなコチラの情報もくれた、そ  
の恩人に対して、なにか力になれるなら、それもいいかなと…そんな  
小さな望みを持ってしまっただけだよ。」

「はあ？ 私達を憐れんだってこと？ ふざけないで！ 私たちはこ  
れでも名前の通ったワーカーよ？ リーダーのヘッケランだって、ま  
とに渡り合えるヤツなんてそうそうお目にかかれないんだから！」  
「そうかい…それは、プライドを傷つけたならすまなかつたね、では視  
点を変えよう…これからある例え話をキミらに聞かせた後、ある質問  
を問いかけることにする。その時ボクは「この時、キミらはどうす  
る？」と問いかける、それまでは状況説明だ、静かに聞いていてほし  
い。」

その物語は始まった。

とある場所に、ひっそりとそびえる過去の遺跡、外観は見るからに  
地下墳墓。

その墳墓の地下は、一度深くまで入り込めば出ることは不可能。

ドアを開けようとすると大きな口が襲い掛かるドア型のモンス  
ター。

本物のドアを探し当て、部屋に入ると転移の罠。

見知らぬ場所に飛ばされれば、自分がどこに居るのか、チームは  
バラバラなのか、揃っているのか、自分の置かれてる状況は…色々な  
判断材料を知るまでに挙動が遅れる…その間、墳墓に居る者たちは

ゆっくりとキミらを料理する方法を考えることが出来る。

難度90までのアンデッドモンスターが自然発生する墳墓、それは尽きることなく、何度でも湧き出てきて、アンデッドの特性ゆえに疲労も何もない。

とことん追い詰めてくる敵、少しでも倒すのに時間がかかると、物量はどんどん膨れ上がっていく。

対して、倒せば倒すほど、そして、倒せなかったら倒せなかったで、キミらは疲労が溜まっていく、疲労が溜まれば攻撃力も機敏さも衰える。

うまく自然発生する者らを退けて、奥に進めても、ソコには難度180など、子ども扱いな連中がゴロゴロしているエリア。

難度200どころか、250を超えるモンスターも普通にそこいらを歩いている。

運よく、それらをすり抜けて奥まで到達したとしても…そこに居るのは難度300に達する、その墳墓に於いて最強とも言える番人、守り人：守護者と呼ばれる者たち。

しかもその墳墓は階層によって区切られている。

フロアではないよ？

10フロア分の地下ではなく、10の階層で分けられている伝説やおとぎ話のような世界の遺跡。

そしてそれぞれの階層には、階層を守護する難度300の「階層守護者」がそれぞれいる。

自分でも知る限り、「階層守護者」に限定しなくても難度300に達する者らは少なくとも8人より少ないことは無い。

ひよっとしたらもつと居るかもしれない…。

さて、そんな中、深い階層まで入り込んでしまったキミたちはどうする？ 下手に動き回れば転移の罠でまた良くわからない場所に飛ばされる。

飛ばされるだけならいいが、チームのメンバーがチリチリに分けら

れて、無力化されてしまう可能性もある。

飛ばされる場所は当然、初見の場所、当たり前だが地上までドコをどうやって進むのかなんて親切に教えてくれる存在など1つとしてない。

そんな場所に入りこんだキミたちは、どのようにして脱出する手段を見出すのかな？

「…さあ、もしこの「例え話」が現実として、キミらの目の前に展開されたら…それでも果敢に挑めるかな？ キミらはどうする？」

「バカにしてるの？ そんなの伝説やおとぎ話としても3流以下よ、攻略のしようもないじゃない…。」

「…そうだね、まさに「人を」小馬鹿にしたような場所だよね…でも、もしそこまでは行かなくとも、それに近い絶望的状况が初探索の…今まで未発見の場所なら…警戒しておくのは必要じゃないのかな？ だからこそ、キミらにはせめて難度150程度までは行ってほしくてね、差し当たって、その前の難度90を目安に成長していつてもらいたくて、こんな状況を作り出している訳なんだが…強くなるのには反対なのかい？」

「つ…強くなりたくないなんて、言っていないじゃない、それとコレとは話が別よ！」

イミーナが顔を背けるようにして、それだけを言うに留める。そこには文句はない様子だ。

「そうだね、それなら個人的なわだかまりは後にしておこう、何も今すぐどうこうしなくてもいい事だろう？ まだ時間は8か月以上もあるんだから、のんびりで行こう。」

「まあ、それでいいなら、ゆつくりとアンタのことは調べさせてもらうけどさ、それよりもさっきの言い回し、気になったんだけど、聞いて

いい?」

(ん? なにかしくじった言い回ししたかな? 変なこと聞かれなけりゃいいけど…)

「時々、『こつちの世界』っていう言い回しを聞く気がするんだけど、元々、どこ出身?」

(あ! …そつちか…まずい…どう答えたら…)

チラリとこちらの様子を窺うように視線を向けたアルシエが、その言葉を引き継いでベルに言葉をかける。

「それは私も知りたいと思ってた。ベルさんのアイテム類は、こつちの魔法では考えられない程の性能がある。…かつて栄えていた、失われた超古代文明の、今とは独立した体形の魔法が使われたアイテムだったとしてもおかしくない!」

(それだ! ありがとう、アルシエちゃん、頼りになる!)

「そ…そうか…どうやら早くもバレてしまったようだね、そうさ…魔法実験の事故で飛ばされてこつちに来た時に、事故の影響でこんな姿になってしまったね…自分が持っているのはその時の手荷物なんだけどね、みんなその文明の遺産さ。おそらくはもうあそこには戻れないだろう…。」

「そ…それは…ごめんなさい…魔法の事故でそんな姿になってただなんて…その、知らなかったから…」

意外にもイミーナが素直に頭を下げてくれた。

(生まれ持った姿なら認められなくて、事故だとしたらすんなり行くか…、彼女の認識はどこに重きを置いているか、よくわからないが、とりあえずアルシエちゃんに助けられたということは事実だ、そこはまた貸し! …あれ? 借りの方だったっけ?、ああ、いいや。)

「そこまで気にしていないからイイヨ、それより、洗い物でもしようか」



そう言いながら、食器をまとめようとしていると「それは私が…」とフレイラに横から奪われる形となる。

(まあ…いつか、それならこっちは、彼女に貸してみようかな)

「それじゃ、イミーナさん、コレ！」

と言つて、先程の「水差し」を彼女に貸してやる。

「え？これ？…て、え？」

「何か勘違いしてないかい？洗い物をする際に貸すだけだよ？」

「ああ…そうか…そうよね…ははは。」

「ご存じの通り、そこから出る水は尽きることがないから、どれだけ水を流してもいい。」

だから、食器を洗うのに水をかけてあげる役目をお願いしていいかな？」

「え？でも水なんて、どこに流せば…」

「なに言ってるの？ちゃんとさつき水を流せる場所を提供してあるじゃないか…まあ食器の洗い物をする場所じゃないけどね本来の用途は…。」

とりあえず、先程、折れてしまったオリハルコンの剣を材料に使つて〈道具作成〉を唱え、オリハルコン製の「水切りかご」を用意してあげる。

「水でゆすぎ終わったら、それに伏せておけばいいから…あとはやっておくよ」

「それじゃ、フレイ、みんなの洗い物の方、頼んだよ？ 水を流す役はイミーナさんがやってくれるからさ。」

「承りました、では行ってまいります。」

(ん…：なんか返事が重たい感じだな、もしかして、さつきのイミー

ナさんとの会話、根に持つてる？大丈夫かな？　まあ、カルマは善だから、滅多なことは起きないと思うけど。。）

心配ではあるものの、命じた以上、うかつに女子用簡易組み立て式トイレには入れない為、ソワソワするしかない創造主であった。

そして、洗い物も終わり、みんなが食休みをして居る間、ベルリバーは一人、扉の設定画面をもう一度確認をしに来ていた。

（手に入る経験値が2倍っていう事なのに、ずいぶんレベルの上りが渋い気がする。。。このままで順調にレベルアップが進むのか？）

と、設定画面を開き、下にスクロールしていても、別段、他の設定項目があるわけでもない。。。さっきもルチルがレベルアップしてるし、気のせいだったかな？

そう思い直し、設定画面を閉じようとする、設定画面の上方、右すみ、歯車のようなマークの右横に「▶」というマークが目立たないように出ているのを発見した。

（これか？これを押したら、何が出る？）

いつもは画面の右下の「閉じる」という部分を押し、画面を閉じていたため、その発見に遅れたことを悔やみつつ、そのマークを押して右側に隠れていた画面を呼び起こす。

すると、地味に重要な設定が隠されていた。

それも：

「経験値割り振り率」という項目と「リザルト報酬設定」、「タイマー機能一時休止」の3つであった。

「経験値割り振り率」の項目を見てみると、「出来高率」で設定されていた。

。。。ということはおそらくダメージを与えた者は与えたダメージの量だけ、経験値がもらえる。

回復職はダメージの回復や、アンデッドに回復魔法でダメージを与えた数値分経験値が入る、もちろん最後のトドメを刺した1人が、敵を倒した際の経験値？2の全部を独り占めにできる…。という概念なのだろう。

道理で、支援メンバーのレベルの上りが渋いはずだ…。

これは後で、みんなと相談して設定を変える必要が出て来るかもしれない。

それから「リザルト報酬設定」の方を見る。

すると「ドロップ設定ナシ」となっていた…道理で、何も落ちないはずだ…こっちの設定を最初から見つけてたら、なにかしら落ちているのだろうか…最初の3戦…とは言ってもサラマンダーは厳密に言えば倒したわけではないからな…リザルトも何も無い。

自分が召喚したハイコカトリスのやつも、倒したら元の世界に戻されるだけだ…倒されたと判定されるなら経験値も入るだろうが、もし「帰っただけ」と認識されたなら、トドメを刺したヘツケランに経験値は入っていないかも…。

同様の理由で、ドロップの方も多分、召喚モンスターでは発生しないかもしれない…。

…そして最後に気になるのは「タイマー機能一時休止」だ。

これはどんな時に使うのだろう。

項目を指でつついてみると…

一時休止、中断、カウント再開。 の3つがあるだけだった。

「一時休止」の設定を指で選ぶと、下の方に余白が現れ、そこに説明が表示されていく。

どうやら、休止してタイマーを止めている間、自由に、外の世界と出入りすることが出来るらしい、しかし、この扉の内の世界に最低でも一人は残る必要があるようで、全員が出てしまうと「中断」とみなされる。 …と書かれてあった。

そこで、「中断」を選んで、説明文を読む。

すると案の定、今までの経験は獲得済みとして解決はされるが、残された未解決の時間数分は全て消失し、3回チャレンジできる権利の内、1回はまるまる権利の放棄をしたとみなされるといふことなのだ。

「再開」は、読む必要はないだろう…多分、休止状態から復帰して、タイムーが再び動き出すことを示しているのだろうことはまず間違いないだろうから…。

以上の新しい発見を改めて知ったベルは、食休みで休憩時間をとっているメンバーの元に行き、経験の割り振りの設定の件から伝え始め、今のままでいいか、又は、各員均等の割り振りをされた上で、それぞれがその数値の2倍になるのがいいか…それとも仕留めたやつ、ダメージ与えたやつが中心に育つ方式の方がいいか?と、相談するところから意見を交わしていた。

## 第43話 みんなで特訓、レベリング！「イメチエン、ブレイン」

メンバー達は、この異空間での過ごし方も徐々に理解してきているようで、入り口だった扉の裏手に作った、人数分がきっちり座れる木製の横長テーブルに全員が腰かけ、ベルリバーこと、魔術師「ベル」の話聞いていた。

片側には左端からブレイン、ロバーデイク、ヘツケラン、イミーナ、アルシエ。

その対面にはブレインの目の前にフレイラ、その隣にベル、そしてじゃんけんで勝ち抜けをして、ベルの隣をゲット出来てご満悦のディーネ、不満顔のセピア、一番遠い場所にルチルという位置取りで座っている。

「なるほど…そういうことだったのですか…なかなか難度が上がっている感覚が表れてこないと思っていましたが…そういう事だったんですね。」

重い口を開くロバーデイク。

「しかし…経験値…か、そういう概念は今まで俺たちには無かったな、強い敵であればあるだけ、戦闘で得られる「自分の力量を引き上げる」段階へと至る為の点数稼ぎ、その点数というのが『経験値』というものに置き換えて考えていたと…、そして、満了状態に至る度に難度は引き上げられていく…か、今までザコを何人切り伏せても強くなった実感が得られなかったのはそういう事だったか。」

かみ砕いた説明をしたベルの話を咀嚼するように自分の認識とすり合わせを行いながら口に出すブレイン。

彼なりに思うところはあろうだ、少し思案しているような表情を浮かべていた。

「それならパパッと強いやつと連戦すれば…なんてお気楽に言える状況じゃないね、それっていつも死と隣り合わせで勝ちをもぎ取るギヤ

ンブル性の高い成長の仕方じゃないの？」

「そう口を開いたのはイミーナ。」

彼女の言う事ももつともだ、今言つて聞かせたのは「ユグドラシル」というゲームの中での話、あの中では、戦闘によって死んでしまおうが勝手に蘇る。

しかしそれはプレイヤーの持ち金が半額になるといつかつてのアナログゲームのような軽い処分より、レベルダウンという重い処置により、勝手に蘇生される世界での認識、戦い方なのだ。

一度、死んでしまえば二度と生き返れない可能性の高い（蘇生魔法の使い手が極端に少ない）この世界では、その戦いで連戦連勝するには、なかなかの強さと、適切な攻撃手段、チームワーク、アタッカー、タンク、回復（ヒーラー）、遠距離攻撃、支援、特殊担当（ワイルド）らと言つた役割をこなす者達との連携がどう取れるかによつて生き残れる可能性がグンと上がる。

そういう戦いができない場合、連戦して、確実に生き残れる可能性という希望はかなり低くなってくる。

そういう点に於いては、チームワークを是としない：1人で戦つてきたブレインは思いつきり不利な状況だということを目の前に突き付けられてしまったことになる。

「私たちは結局、3人とも前衛向きの構成ではありませんし、ブレインさんはブレインさんの好きな戦い方を選択してもらつて、私たちはそれに応じたフォローをする、そういうやり方もアリなのではないかと思えますよ？」

と発言したのはエルフ3人娘の一人ルチル。

「そうですね、レンジャー野伏兼、マジックキャスター魔法詠唱者：そしてクレリック神官の私、そしてドルイド森祭司の3人構成ではなんとか戦えそうなのは神官だけ：それでも専門職として経験を積んでいる純粋な戦士には戦力としてはあまりに頼りない程度の戦力でしかない以上、ブレインさんが居てくれることは私たちにとっては助けになってます。」

今までの戦いでも、チームワークという高いものではないが何とか「足並みをそろえる」努力を3人がしていたお陰で、レベルの高いモン

スター相手と渡り合うことが出来ていたのも、ベルからもらった装備の力もあるが、もちろんそれだけではなく、前衛を務められるブレインの存在は大きいと、エルフたちはみんなが同じ認識で共通していた。

「それはそうと、私はまだその「ケイケンチ」というものの振り分けられ方についていまいちピンとこないんですが、わかりやすく説明してもらってもいいですか？」

そう発言したのはセピア、普段はお茶らけていたり、はっちゃけて居るイメージもあるが、最近になってわかったことだが、彼女はそれなりに危機意識というものに重点を置いているようなのは見て取れる。

不透明な希望にすぎるよりも、確実な危険を排する方に意識を持って行く性質なのだろうか？と思うことがある、それも彼女がこだわって、取得する攻撃手段を「炎系の魔法」に寄せているのもきっと彼女なりに思う所はあるのだろう。

「ユグドラシル」でも一番最初に対策をとれるようになるのは「炎対策」と「移動阻害対策」であるため、炎は確かに威力こそ安定しているが、防がれる可能性も高い。

そのため、炎特化で成長させるより、対策された場合のことを考えて別の魔法を取得させた方が後々になれば窮地を突破する一助になる日も来るのだろうか、そこまでのレアリティのマジックアイテムが出回っていないこの世界なら、プレイヤーと戦うとかの機会がない限り、完全耐性で無効化されるような事象はまず起こるまい…とベルはその危惧を頭の隅に追いやる。

(一番心配なのは、プレイヤーじゃないけど、NPCとしてかなり強めに設定されたビルドで構成された守護者たちとか…シモベ勢なんだよな…、まあ、今はそんな先の話より、POPモンスターを圧倒できるくらいのレベルになってもらわないと心配でしょうがないからな…それなりに現地民としては「価値」があると思ってもらわないと、アソコの者らに認めてはもらえないだろうし…。)

と、少し物思いに浸りながら、懐からとある駒を取り出す。

ユグドラシル時代、低レアリティで手に入ったアーティファクト。もつと言えば、戦闘ばかりではなく遊びにも楽しみを見出してほしいという運営からの計らいにより、実装された娯楽ゲーム。

その中には定番のオセロや、将棋、といった対戦方式の物ばかりではなく、ヨーヨーなどと言った物から果てはルービックキューブなんて言う一人でも遊べる歴史遺産的なおもちゃまで色々であった。

そのうちの一つ、チェスで使われていた駒、「ポーン」を10個取り出し、テーブルに置いていく。

並べる中で、とりあえず、割合を8:2にして、テーブル上に並べた。

そこで疑問を口にしたのはアルシエである。

「ベルさん…それ、なんで2体だけ別？」

「ああ、それはね…さつき経験値の割り振り方で、設定の確認をしてみたんだが…どうやら僕とフレイラはこの部屋に入る頭数には入っていないようだが、経験値の割り振りとしての頭数には認識されていないらしい。『どのような割り振り方にしますか?』という問いかけに對して示された提示は、最大8名…つまり、ボクとフレイラを除くみんな、ということになる…まあ、色々な事情によつて、私たちは今以上には強くなれない…とはいえ、直接的に戦闘を経験することによつて、戦い方の幅を増やすこと自体はできるようになると思う、そういうのはどうやら「経験値」とはまた違う扱われ方のようだ。」

「そう…それは残念、ベルさんと一緒に強くなれば嬉しいと思つて居た。」

「ありがとう、その気持ちだけで嬉しいよ、でもキミ達は、同じチームメイト同士、より高いチームワークを磨くことを第一に考えていてくれた方が、ボクの方も安心できる。だからそうしてくれないかな?」

「…うん、わかった、ベルさんがそういうなら、そうする。」



「…アルシエ…あんた、変わったね…って、無理もないか…今はもう、妹たちしか残されてないもんね、さすがにそれだけじゃ心が疲弊するし、どこかで安心できる相手は必要…ってことね。」

「とりあえず、そこいら辺の話は置いておいて、説明に入ろう。」

そうやって、8個の駒をテーブルに均等に並べて、説明に入る。

「今までは、「出来高制」という設定だったから、多分だけど、『トドメを刺した者』、『ダメージを与えた者』…そのダメージ量の大きさに応じた経験値の分配』、『状態異常や、デバフに成功した者』、『バフや支援に行動を寄せていた者』…という優先順位でそれぞれ経験を割り振られていた感じだったと思っしてほしい。」

「さすがに、どれがどのくらいの割合で…ってというのは目に見えてわかるわけじゃないってことだよな？」

話を聞きながら、ヘツケランが確認を取る。

もちろんプレイヤーであった自分でさえ、どのような割合で配分されているのか、認識しているわけではないので「その通りだね」と答えるしかできない。

「今言った優先順位も恐らくは、というボクからの「仮説」の域は出ない、もしかしたら、支援とかバフには経験値が割り振られていないかもしれないけど…、多分、回復とかデバフには経験は割り振られているだろうというのは8割くらいの核心はあるけどね。」

「そうですね、ワタクシの時も、畑を作る魔法を使った際、難度が上がって、魔法を覚える機会がありましたし、職業の得意分野とする行動には経験値というものは割り振られると思いますよ？」

情報の確実性を後押ししてくれるルチル、その言葉を聞いたメンバーは一樣に頷いて、納得してくれたようだ。

「それで、例えば自分よりレベルが上のモンスターを出現させ、倒した時の経験が100もらえる計算だったでしょう」

そこで、一体のポーンを一番前に出し、「こいつが最後のとどめを刺した者だとすると：ゴメン、セピア、これに数字を書くのを頼まれてくれるかな？」

そう言っ取り出したのは、前にも使ったメツセージボード。

帝国式の数字を一桁なら問題ないが、3桁ともなるとベルには自信がないので：あくまで助手として、詳しい説明を求めてきたセピアにもよくわかってもらえるようにと、間近で聞いてもらうことにする。

助手として、ボードに数字を書く必要があるという事はちゃんと間違えがないように数字を聞き逃さないようにする必要がある、という名目を免罪符にして、ディーネとベルの間に強引にお尻を割り込ませ「ごめんあそばせ？」とセピアはわざとらしく勝ち誇った顔をする。

少し残念そうな顔をしたディーネだったが、この説明が終われば元の位置に戻るだろうと、自分を納得させたようで、素直に座る位置を交代させることにしていた。

「多分、最後に倒した一人は半分の50%、つまり経験が50入るんだと思う。」

そういうと、メツセージボードに矢印を書き込み、その矢印の先に先頭に出したポーン、そこに50という数字を書き込んでいく、ベルは書くことには自信がないが〈言語読解<sup>リードランゲージ</sup>〉の魔法で読むことには自信があるので、ちゃんと書いてくれることに一安心する。

「さらに、ダメージを大きく与えていた直接攻撃役、遠距離攻撃、範囲魔法での〈軽症治療<sup>ライトヒーリング</sup>〉や、接触しなくても発動できる〈中傷治療<sup>ミドルキユアウーンス</sup>〉などでのダメージ(対アンデッド戦闘のような…)と言ったものが発生した場合、ダメージの大きさの順番で残った50の中から更に、4割、2割、2割、2割となっていくような感じだろうか…。

だから、トドメを刺した者はこの場合、経験が数値にして50手に入る。

それで、残った50の中から、一番ダメージを与えた者に4割の20。

…もしここで、ダメージを与えた者で、2番目に大きい者が居て、数

値がかるうじての差しか無かったりしたら、想像だけど…そこから更に6:4:つまりは『20から6:4に分ける訳だから:12の8つてことになるのかな?』

そういう割り振りかもしれない。

次に『状態異常や、デバフに成功した者』は、2割の10

そして、『バフや支援に行動を寄せていた者』が2割、同じ10

さらに回復や、直接戦闘に参加はしていないが、アイテムを使ったり、指揮官的に行動ボーナスを与えたり、魔法詠唱のキャンセルの手段に集中する役目を担当した者など、チームメイトではあるが特殊な立場の者には2割の、経験値が10:という感じだろうか。」

「かなり幅があるな…これじゃ、いつまで経っても戦った相手との差の割に貯まる経験の数値が少なく、貯まっていけないんじゃないか?」

渋い顔をしたヘツケラン、それに対してベルも返答を返す。

「もちろん、これは「仮に経験値が100もらえる敵だったら」という例え話だ、しかも、この通りの設定とは限らないし、今、この空間は『青の扉』の中だ、もらえる経験値の量は、さらに倍になってるはずだよ。」

「それで?それを均等割りにすると…どうなるんだ?」

結論を急がせるようにブレインが問いをベルに投げかけた。

「そうだね…仮に100の経験値がもらえる敵を倒した場合、それを8人で同じ数字にして行く訳だから…全員で経験値が12.5、そしてその倍になるから、どんな戦い方でも25の経験値が割り振られることになる…かな?」

「そうになると、今の状態では2割の後方支援で、倍計算で20、均等割りだと全員が25…、だが出来高制だと、後方に居る者は支援だけだと20だが、大ダメージを叩き出すことが出来れば、もっと経験値が上乗せされる可能性は充分にある。」

そこまで話を聞いていたブレインが総合した内容を整理して話し

ていく、そうすると、さらにそこに付け加えるように言葉を引き継いだハツケランが言葉を続けていく。

「そうだな、となると、均等割りという設定にすると、どんなに大ダメージを出しても均等に2.5しか経験は入ってこない、その代わりに、今の設定のままなら、一番大ダメージを与えることさえ出来れば、そいつの方にガツンと経験は入ってくる。」

「もちろん、さつき見た限り「カスタム」という内容を見た範囲では、人数指定も出来た、例えて言うなら『出来高1：均等7』といった感じかな？ そうすることも出来そうだな。でもそうになると、出来高制の人間は、もしも均等割りのメンバー以上のダメージを出せなかった場合、今回の例で言うと、2割分を2倍した2.0しか入らないことになるかもしれない。」

一同が悩む、というより一番悩んでいるのはブレインだ。

今までの自分の生き方では自分が強くなるためには自分自身の鍛え方が大事であり、自分が先頭に立って戦い、相手を負かすことで、より高みに上がれると信じて戦ってきた。

なのにこの場に来て、この状況である。

もちろん、大ダメージを出せればいい訳ではあるのだが…、さつき見た限り、宙から降ってくる隕石、炎の柱を立たせることが可能となった二刀使い、雷の矢を出せるようになった女の子…。

とても今の自分では、あれ以上の攻撃を出せる自信は無い、悲観ではなく、現実的に見てもそう判断していた。

そして、さつき口では言わなかったことだが、その設定で均等割りを選んで戦うことになった場合、もちろん、他人のおこぼれで強くなるという道は、何があっても遠慮願いたいブレインの考えからすれば均等割りは選べない。

かと言つて、出来高制でも、もし、前衛だろうとダメージを大きく出せなかったら扱的には「アイテム等での支援役」という立場と（経験値的には）変わらないのだ。

（どうする…俺の信条としては、自分だけの努力、経験、積み上げ、特

訓、生死をかけたギリギリの攻防から得た全てで力をつけていきたい……だが、この世界……というよりあのメンバー達と比べれば自分は明らかに力不足……、ならどう補う……?)

そこでブレインは、はたと気づく、今まであまりにも本人が当然の様にさりげなさ過ぎたため、すっかり見落としていたことがあったことに……。

(そうだ、ベル……あいつは会った時から、訳の分からない力があつたし、俺の知識にもない、知らない魔法も使っていた……今回の3つの扉を出したあのアイテムだってそうだ……雷の矢を撃ちだせる鎧も、ベルがフォーサイトに渡したモノだし、二刀使いが炎の精霊を武器に宿すことになったのも、ベルが手助けしていた。もしかしたら、今回の難題も解決できるアイテムなりなんなりを出せるんじゃないだろうか……?)

と思うも、そこで一つ考えるべきことがある。

その代償をどう支払うかだ……、散々頭を悩ませたあげく、藁にもすがらる思いで、一つの結論を導き出す。

(これで、それじゃ足りないと言われたら……自分の素の力を底上げしていくしかないか……自分自身だけの特訓、訓練で……!)

そう判断すると、ブレインはこう切り出す。

「俺は他人のおこぼれで勝手に強くなるような……そんな成長の仕方は御免だ、他のみんなはどう思うかわからないが……俺は今まで通りの「出来高」の方でいい。」

そう言うと、感心したようにヘツケランがブレインを称え始める。「お……さすがブレイン、やっぱりお前はそうじゃないとな、自らの力でのし上がる、お前のその姿勢、嫌いじゃないぜ!」

そこで、今までずっと黙って聞いていたフレイラが話を変えるように口を開く。

「ところでベル様、もしよろしければ、この辺で少し腹ごしらえでもされてはいかがでしょう? 話もとりあえず皆さんの中で結論を出すのはもう少し考えてからの方がいいでしょうし……急がずに、小腹を満た

した方がより落ち着いて考えもまとまるのでは無いかと愚考いたしますが…?」

そう言われて、ベルもそれに頷く、なにしろ食べる必要も疲労も関係ないアイテムを身に着けているとは言え、他のメンバーはそうではないのだ、疲れもするし、眠りも必要だし腹も減る。

そういう時間くらい必要だろう。

「そうだね、とりあえず、ちよつとした軽食タイムと行こうか。」

何かを思いついたようにベルが立ち上がるようにする。

「あの…マ…いえ、ベル様、どちらに?」

じつと見守っていたフレイラが自らの主の挙動に素早く反応する。

「あ、いや、食材でも畑から取ってこようと思ってね、この前、畑から野菜を引っこ抜く時、折れちゃったからさ、今度はうまく抜けるように経験を積みたいのさ。」

レベルが100である状態で、戦闘以外でも生活面で磨ける要素はあるのだろうか…それとも全く磨けないのか…疑問が晴れないままココまで来てしまった。

モモンガさんは、冒険者として…モモンとして動いている中で剣の使い方や身のこなしなんかは「日常動作」の延長として自分の技量にまで引き上げていると、以前に夜通し話をしたときに聞いたが…自分はどういう部分が、それに当たるのだろうか、試してみたい気持ちはずつとあつたものの、それを実行する機会がなかなか訪れなかったのだ。

せめて、野菜の引き抜き方くらいは日常動作の延長として、昇華させていきたい。

そう思つて居ると即座に自らの娘、フレイラに制されてしまう。

「いけません! そのような誰にでもできるような雑事、御身がされることはありません、その程度の事、どうぞ私にお命じ下さい! 主の助けになれる様、務めに励むこと、それこそが私の使命、どうぞい

かようにもこの身をお使いください」

（フレイ：…気持ちは嬉しいが、キミだって「フアーマー」のレベルは持ち合わせていないだろう？ボクと似たような状態で引き抜く感じになるんじゃないか？）

ベルはそう思いつつも周りを伺うと、ただ野菜を取りに行くだけだと言うのに、まるで緊急事態の様に顔色を変えて止めようとするフレイラの行動と口調に、一同はかなり引いていた。

（今までも彼女の言動から、みんなも慣れてくれてるかと思ったが、やはりこの温度差はNPCと現地住民とはかなり開きがあるようだ。）

少し視線をずらし、ルチルの方へと目を向けるとルチルもそれに気づいたようで、軽く顔を縦に動かし、こちらの意図を汲んでくれたようだ。

すつと立ち上がり、先ほどの烈火のような勢いのフレイラの言葉とは真逆の、穏やかな水面のような優しい言葉で周りに提案を持ち掛ける。

「みなさん、せっかくこの場を用意して、テーブルから何かから準備してくれているベルさんばかりに何でも先を越されてはワタクシどもの立場がありません、どうでしょう？ベルさんにはここでゆつくりしていただいて、私たちも少しお手伝いなど買って出てはいかがでしょう？もちろん、森祭司ドールイドであるワタクシも僭越ながら、この不詳の身を動かすことに抵抗はありませんが、皆さんはいかがですか？」

そう改まって言葉にされると、確かに自分たちは、かまど代わりとなる石の台など、火をくべる場所を作っただけだ。

この異様な空間に来てから、主導権はベルにずっと握られている気がする。

そう気が付いた面々は、それぞれが立ち上がる。

「そうだな…俺だって元々は商人の出だ、四男坊とは言え、商品となるような物の扱いはそれなりってところを見せてやらなきやな！」

そう発言したのはヘツケランだ、実家が商人なのはチームメイトも

知っていることなので、大したことはないが、実際、帝国で戦争を王国に仕掛ける際、兵糧としてあらゆる食材の扱いを複数の商人たちと都合している内の一家であったことは事実なのだ。

畑から野菜を引き抜く扱いは造作もないと言えた。

「そうね、私なんかは戦闘でもあまり活躍できてないし、ここいらで何かしておかないとさすがにいたたまれないわ。」

レンジャー持ちのイミーナも立ち上がる、森での活動を得意とするイミーナが居れば、畑から食材を引き抜いてくる程度の作業、捗るだろうことは疑いようがない。

「私はこれでも、辺境の地で人の役に立てれば……と思うことも時にはあるのでね、それなのに土仕事もできないのでは、仲間入りは難しいでしょう、ここらでそういう体験をするのもいい経験となるでしょうね、力になりましょう。」

「……私は元貴族だから、土仕事の方は自信がないけど……みんなが加わるなら……私も何もしない訳には行かない……行く。」

アルシエもゆつくりと立ち上がる。

「ホラホラ、あなたたちも、言い出しつぺの私たちが先を越されたら面目丸つぶれよ?」

ルチルが、ベルの隣から動きながらないセピアと、セピアが動いたら元の位置に戻ろうと狙って動けなくなっているディーネに行動を促す。

すると、静かに立ち上がったディーネが冷ややかにセピアを見下ろしながら

「……仕方がないですね、行きますよセピア? ……まあ貴女だけベルさんのそばに居続け、「いい加減うつとおしいな」なんて思われても私はフオーししませんよ? ……それでも良ければその場でゆつくりしていらしたら?」



「あ、ひつどお〜い、違いますう！ そんなんじゃないですう！ ボードに説明書きをするお手伝いをしてただけですから！ そういうんじゃないですからー！」

そう、思いつきり言い訳じみた理屈で自分をごまかし、セピアも立ち上がる。

もちろん、そういう状況下でみんなに先を越されては言い出した自分の立場がない、とばかりに足早に動き出したのはフレイラだ。

もちろん、先を急いで争っているわけではないが、なんとなくみんなが急ぎ足になっているのは競争意識というものだろうか…。

そして、ポツンと残された、ブレインとベル。

そこで、周囲のみんなの目が離れたことでやつと言い出せなかったことが言い出せると、ブレインがベルに話しかける。

「ベルさんよ、ちょっと頼みたい…というか、もしそれが出来るなら力を貸してほしいことがあるんだが、聞いてもらえるか？」

急に話しかけられ、ベルの方も座り直し、居住まいを正す。

（いきなりなんだろう…今まで自分の力だけで実力をつけていきたいと言っていたこの男が、自分にどんな願い事だ？）

ベルは心当たりがないな…と思いつつも、ブレインの言いたいことに興味があり、先を促す。

「もちろん、構いませんよ？ ボクにアングラウスさんの望みを叶えられるだけの力があるかどうかは別問題ですが…話を聞くだけなら支障はありません、聞かせてもらおうとしましょう。」

（なんでも言っておきたい、とか言つて、「それは出来ません」なんて答えることになったら格好悪いからな。ここは無難に話だけでも聞きましょう、という姿勢で居よう。 どんなこと言い出すかまだ分からないんだし…。）

ブレインが言い出しにくそうに重い口を開いていく。

「実は…、最近、周りのみんなの伸びしろがえらい勢いで上昇してる

ような気がしてな、ハッキリ言っただけ置いて行かれてるような感覚を覚えてるんだ。」

(ああ……そうだな、アングラウスくんは「自力で強くなる」って公言してたから、アイテムとか装備とかそういう効果で強化されるのイヤなのかと……ストイックなのかと思っってしまったが……さすがに急成長する者らを見ると、焦りが出てくるんだろうな……)

実際は、レベルの点で言うならブレインの方が圧倒的に上なのだが、装備の点で電光の矢を出せたり、主武器に炎の精霊を宿らせたりにっというのは、目の前で見てると羨ましい部分はあったのだろう。

何しろブレイン自身、別にアイテムの力で強くなるという手段に抵抗がある訳じゃない、露店とかマジックアイテムを置いてあるような場所に行くわけば、立ち止まってあれやこれやと品定めをして購入することもあるくらいだからだ。

もちろん「起動1」と「起動2」で、効果が表れるように設定している自らの装備品もマジックアイテムだ、自分が強くなるためなら、装備の力で実力が底上げされることに抵抗はない。

だからこそ、ベルに聞いてみたかったのだ、何かないか……と。

「だから、その……、アイツらみたい……って言いたいわけじゃないんだ、装備の力だけで強くなってもそれは道具自身の強さであって俺の力じゃない、身にそぐぬ程の武器を持って、武器に振り回されるのは御免だ、だからと言って、強くなれないまま足踏みをしている自分も許せない、だから、何が言いたいかって言う……」

ここでブレインは言葉を選んでいるかのように少しの間、口をつぐむ。

そこで思い切ったように言葉にしてベルに告げる。

「武器の力だけで攻撃力をあげてくれてワケじゃない、防具でダメージを受けないくらい強いのをっていうのも望んでいない、今以上に……そうだな、アンタの言う……「ケイケンチ」ってものを効率的に身につけていく方法はないだろうか……?」

「……ん……そうだね、無いこともないが……これは一個しかないから

キミにあげるわけには行かない、ゆくゆくは返してもらわなければならないけど……くれぐれも無理をして途中で命を落とすことがないようにしてくれ。」

そう言いながら、懐に手を突っ込んで、ローブの中でアイテムボックスに繋がる異空間を発生させる。

そこで引きずり出したのは……仲間と一緒に行動して、フォローしてくれなければとてもじゃないけど戦闘で使う気になれなかった物、しかしこれの恩恵はかなりありがたかった、反作用……デメリットも相応だったが……。

テーブルにゴトンと置かれたのは一つの首輪、ペットの……というよりは明らかにドレイか何かの首に着けて引きづり回しそうな見た目で、できれば装備したくないような外観をしている。

「……まあ、アングラウスくん……キミのその表情で、どういう心境かはボクにもわかるつもりだ……ボクもかつて、これを使っていたが、正直使い勝手のいいモノでは無い……しかしこのアイテム以上に今のキミの要望を叶えられるアイテムという物は他に持ち合わせがないというのも事実なんだ……説明だけでも聞いてもらいたい。」

そう言つて、一通りの説明をする。

ユグドラシルでのステータスは細かく分けると「10」の種類があった。

それらはそれぞれ……

・力（物理攻撃力に影響、高レアリティなどで重量が高い武器を持つるかにも作用）

・体力（HP、物理防御、総合耐性などに影響）

・知恵（魔法を取得するレベルまたは威力、知識を必要とするスキルやクラス取得に影響、符術師などの精神操作系などに大きく作用する数値、全般的に「知恵の数値の半分」を基準としたボーナスが魔法防御や、あらゆる耐性に加算される）

・信仰心（神官系のクラスや、森祭司などのクラスに必要なステータス、耐性や神聖属性からの防御、威力上昇にも左右）

・魔力（魔力系魔法詠唱者にとって必要な数値、魔法防御や、魔法

攻撃力にも影響。)

・加護 (物理防御以外の防御の数値に影響、魔法防御へのボーナスや、精神抵抗値、各種耐性、回避などにも影響)

・敏捷 (素早さを必要とするクラスには必須、忍者や盗賊、レンジャーなど、魔法を使うものも、これがないと敵の行動に先を越される。)

・器用 (武器の扱い、鍛冶職の成功率、アイテム作成時の完成度合に作用、武器での受け流しや連続攻撃系のスキル取得にも影響)

・運 (総合的な運、チャームや、支配、戦闘時の回避や、武器作成の完成度など、多岐に渡るが何に左右してるか全く説明は運営からもされていない。)

・特殊 (全ての耐性が基本として加算される、それ以外にもPCアバターごとに定められた隠しパラメーターとして、ある条件を満たすと個別に、とある恩恵が発動することもあるが、なにが設定されているかは「隠し」なので条件が満たされなければ、永遠にわからない可能性もある。)

※書籍版 (小説) の巻末に乗っているステータスにある「特殊」とは別扱い

書籍版の「特殊」は結果として、総合的な数値を計算した後での数字の大きさ。

ステータスの全ての数値にそれぞれ影響を及ぼす、どう影響しているかは不明。

上記の「特殊」はPCキャラ個人個人に割り当てられたもの、隠し要素なので、クラスに影響するか、特定のスキルか、特定の種族を選んだ時のみ発動するか、可能性は無限にあり、数値が上がれば可能性も増えるが、隠しなので、なにがいつ増えたのか、全くステータス画面から窺い知れることはない。

(習得することができれば、プロフィール画面から見ることは可能)

もちろん、「書籍版」の『特殊』の要素も含まれているので、数値が大きければ各ステータスの加算もある。

運営曰く、各PCキャラ、それぞれ一体には必ず、ランダムに割り

当てられているという説明はある、が、キャラごとに違うので、満たされる条件が一定の数値とも、レベルとも限らないので、確証はない。(条件が満たされたら「特殊の条件が満たされました!」○○の●●を取得しました)とか出てきたという噂はwikiで見かけたことはあるけど…眉唾だったな…。)

「つまりはだね…今言った10のステータス、力、体力、知恵、信仰心、魔力、加護、敏捷、器用、運、特殊のそれぞれから、どのくらい負荷をかけるか…つまり簡単に言うとな弱くさせるか…の割合で、自分が身に付けていく経験値の取得率が変わっていくアイテムがこれなんだ…。」

「つまりは、これを身に付けて、どれだけ弱くすりやどのくらいまで経験を多くできるんだ?」

「最大で、全ステータスを半分にまで少なく出来る。一つの項目を1割弱くすれば、取得経験値が1%分上昇する、だから10種類全部を1割、弱くすれば獲得出来る経験は、1割多くなる。全部の項目を半分にした場合、5割減るわけだから、獲得する経験は1.5倍になると…まあそういう事だね。」

「大きいのか? それは…」

「人それぞれの認識によるだろうね、例えば自分より難度が10上の敵を倒す時、普通は100の経験がもらえる物だと仮定して、それが150ももらえらななつたら…他のメンバーが2体倒して200の経験なのに対し、アングラウスくんは300、一体分、倒していないはずの敵との戦闘経験が積んでいるということになる。」

「そうか…それは大きいかもしれないな…しかし、今の自分よりも自分の力しか出せなくなる…守りも素早さも半分になる…か、かなり厳しい戦いになるのは確実だな。」

「そこは今までのキミの技量次第さ、さすがにフェイントの成功率だとかまで半分になることは無かろうし、敵との駆け引きとか、判断力なんかのインスピレーションまでは半分にはならないだろう。」

「いん？ すぴ？ …なんだって？」

「ああ、悪いね、母国語で言ってしまった、つまりは直観力の事さ、いざというとき『これはヤバイやつだ』っていう本能的な危機察知能力までは低くなることないだろうというとき、生命として持っている根源的な能力までは弱体化はされないと思うよ？」

「そうか…それはかろうじての救いかな…、それがあってもかかなり違うだろう。」

「とは言え、アングラウスくんの武技である〈領域〉、あれはいいね、敏捷と器用の低下で命中率が低くなっても〈領域〉の効果で、それを補うことが出来る。さらにはキミにはまだ『隠し技』…持つてるんだろ？」

「なんだ、アンタにはバレていたのか…うまくごまかせていたと思つて居たんだが…」

「今までの格上の戦闘でも、あまり追い詰められてる素振りがなかったからね、いくつか奥の手はあるんだろうなと予測はしていたのさ、見事に当たってくれてホツとしているよ。」

「とは言っても、これはさすがに見た目、どうにかならないか？ 身につけるのはどうも…抵抗があるぞ？」

「ん…そうは言ってもなあ…」

（確か、アイテムの外装の変更は…いくつか条件があったはずだ、一つは自分の拠点、ギルドやクランに未所属の場合は、自力で購入した隠れ家や、ホームグラウンド、洞穴なんかのパーソナルスペースに設定した空間で、落ち着いて作業できる空間が必要だったのが一つ。）

それとは別に、ギルド拠点や、クランの集合ポイントに立てた敵対勢力に見つからないよう設定された施設などで、材料とかユグドラシルコインとかを集めて、鍛冶技術をもつプレイヤーと一緒に作るか… そうでなかったら、手持ちの材料と、ユグドラシルコイン、外装に必要な素材を用意して〈上位道具創造〉（クリエイト・グレーター・アイテム）を使うしかなかったな… 選べるのはこの3つの手段の内、一

つしか選べる道はないか…)

「まあ、わかった、アングラウスくんは抵抗がなく、似合うような外装にしてちよつとおまけもしてあげよう、でもそれはちよつとだけ時間をくれないか？ 食事を終えたくらいには渡せると思う。」

「ああ、わかった、よろしく頼む…、コツチもちやんと、どのくらい動きに制限をかけるか…決めておかないとな…いろいろと考える時間は欲しいからな…、ああそうだ、ちなみにそれは設定の変更は可能なのか？」

「ああ、もちろん、一度身に着けて、設定した制限は装備してる間は変えられないけど、装備を外し、身に着け直せば、新しく、細かい設定は可能だ…だけど、それは戦闘中にはオススメしないから、注意してくれ」

「了解だ！ 今の話は皆には内緒にしておいてくれないか？ さすがに今まであれだけ大口叩いてたのに、結局ベルさんを頼っちゃったんじゃないかも気分的に開き直れるほど凶太くないんでな…その代わりと言っちゃなんだが、俺のことはもう、ブレインでかまわん、こんなに世話になつて、まだ他人行儀とか…さすがにそろそろ打ち解けてもいい頃合いだとは思って来てたからな。」

そう、彼が用意していた代償と言うのは単純な話で、報酬とかの金銭で、ではなく、「呼び捨てにしていいから」何とか出来ないか？

という取引にもならない取引に持ち込んで何とかしてもらおうという思惑だったのだ。

「わかりました、それではブレインさん、よろしく願いますね。」  
「ブレインさん…か、まあ今は何でもいいか…、まあよろしく頼むよ」

そこまで話をして時点で、みんなが畑で育てた食材を持って、ぞろぞろと戻ってきた。

「フレイラさんが、引き抜く姿、まさかあんなに苦手だとは思いません

でした、大丈夫でした？」

「私もまだまだ修行が足りません、御方のため、もっと尽力できる様、努力を重ね、精進しなければ…」

「まあまあ、出来ない作業は出来る人がフォローしましょう、その為に私たち3人がベルさんのそばにいるんですから…戦闘ではお二人の足元にも及びませんけどね。」

「ああーブレインさん、なにしてるんですか？一人でくつろいで！一人でサボりなんてずるいです！夕食の分は、ブレインさんが1人で野菜を引き抜いて来てくださいね？」

自分が働いているのに、その間、テーブルでベルと談笑しているように見えたセピアが抗議の声を上げた。

それに対しての返答はセピアにとっては意表を突かれた、そして、他のメンバーにしてみれば意外過ぎる言葉だった。

「任せてくれ！ これでも元々は農村出身でな！ そういった土仕事は嫌いじゃない、夜の時は俺一人に任せてくれ、お詫びに一通り見繕って来てやろう。」

その言葉にみんなが顔を見合わせた、ブレインが元農村出身…あまりにもイメージと違っていたため、それからは、女性陣が農村の野菜料理というのはどういう物があるのか…という質問攻めの時間に移るのだった。

☆☆☆

軽く食事を終え、みんなが食休みをして、MP回復、食事を作っていた炎にはヘッケランの主武器である二本の剣を突っ込んで炎の精霊に英気を養ってもらっていた。

時間経過のMP回復がたら、アルシエは自前で第3位階の〈電撃〉ライトニングを自らの鎧に浴びせ、電力を充填させている、そして、またMPが満タンになったら、再び〈電撃〉ライトニング…という大変地道な作業をしている。



その間、少しベルは、決して近くを離れたがらないフレイラを伴い、あれやこれやと理由をつけてみんなから見えない場所にまで〈飛行〉の魔法で移動して来ていた。

「さて、この辺でなら問題ないかもしれないな。」

「マスター、これから何をされるおつもりなのですか？皆さんの前では見せられないようなことを？」

「いや、そういう訳じゃないよ、ここに森の中に展開していたあの家を一旦展開させようと思ってね…：それには、フォーサイトのみんなとかの目は出来る限り無い方がいいかなと…：そう思っただけの話さ。」

そう言っただけは「深緑の隠れ家」をその場で展開させる。

森の中で展開させた大きさなら、きつと扉のそばにいる者らからも、さすがにここまでは見えないだろう。

「さて、入るか、フレイ。」

「はい、お供致します、マスター」

そして、それほど時間がかからず出てくる2人。

「まあ、こんなものだろ…：レアリテイとしてはHRに届かない程度だが…：Rにしては性能が高い方だろう」

「まさか、あのような物までお持ちだとは…：お見せしました」

「そんな大したもんじゃないぞ？ ミノタウロスの皮なんて、レベル40ちよつとくらいで充分に手に入る素材だからな…：、この前食べてもらったあのジャーキー肉も、ゴルゴンの肉だったんだぞ？ゴルゴンを倒すのに比べたら、ミノタウロスなんて可愛いもんさ。」

「それにしても、あのような貴重なクリスタルまで使われて…：よろしかったのですか？」

「イヤ、ストレンクスとアジリテイが10アップするなんて程度、そんな凄い物じゃないぞ？HRの段階に入ったらゴミみたいなものだしな、だから、貰い手がなくて死蔵されてたものだ。」

「それにしても、そんな外装に出来るなんて…思いつきもしませんでした…」

「まあ…ボクも、昔にマン…じゃなく、書物で見たことがあってね、こういう装備品もあったという記憶を頼りに作ってみただけさ、さつきよりは見た目、ひどくはないと思うんだが…気に入ってくるといいな。」

ベルはそう言いながら「深緑グリーン・シークレットハウスの隠れ家」を元の模型程度の大きさに戻し、アイテムボックスに格納する。

「さて、あまり長く離れていて皆を心配させてもいいけない、戻るぞ、フレイ」

そう言っつて、ベルが両手を広げる仕草をみると、フレイラは少し瞳に優しい気な雰囲気をもとわせながら、嬉しそうに主の元に近づき、そつとその腕に抱かれるように寄り添った。

〈グレートポーション  
上位転移〉

すると、場所は変わり、元の扉の前に瞬間的に転移が完了していた。

「あ、おかえり…つてずるう〜い！ フレイラ、なあ〜にそんなベルさまに抱き着いてえ〜!!」

ぶんむくれながら文句を口にしたのは言わずもがな、セピアだ。

「まあまあ、そうしないと一緒に転移が出来ないんですから、仕方ないことなのは知ってるでしょ？」

姉役のディーネが場を収めようとセピアの肩に手をかけた。

「むう…今度は私の番ですからね…」

よくわからない言葉を残して、ゆつくりとテーブルを拭く作業に戻るセピア。

「お、さすが、もう後片付けも終わったみたいだね、どうだい？ 武器の魔力や、鎧の魔力の方はバッチリかな？」

「…ハイ、ベルさん、4発目のライトニングを鎧に吸収させました、

その消費魔力も今回復しきった所です。」

「そうか…それじゃ…ええ〜つとブレインくんはどこに?」

「ああ、扉の表側の方で刀の素振りをしていますよ?」

「ああ、わかったありがとう。」

そう言つて、ブレインの元に近づいたベルは、今しがた、作成してきたばかりのアクセサリを彼に手渡した。

「お? これつて、さっきのあれか? ずいぶん小っちゃくなつたな、それに…継ぎ目も無くなつてるじゃないか…どうやつて首に着けるんだ」

「まあ、アクセサリだし、どこに着けてもいいんだが、首が一番いいだろうな、元々、首に装着する為の装飾品なんだし…ちよつと指をひっかけて両側に引っ張つてみたら、変化はないかい?」

「お、伸びる、伸びるぞ、これで頭から通せばいいんだな?」

「うん、それはいいが、減らす数値の割合いの方はもう決まっているのかい?」

「ああ、あんたを待つてる間、考えていたからな、バツチリつてもんだ。」

そう言つて、装着することになつたということとは、デザインは喜んでくれたようだ、とりあえずよかつたとムネを撫でおろす。

結局、最初にブレインに見せたデザインはドレイの首にかけるようなデザインだったから気に入らなかつたようなので、一風変わったようにした。

とりあえず、フレイラの首に着けてもらい、大きさを小さめにしてから、先ほどの死蔵されていたデータクリスタルをセット、そして外装を変えるため、ミノタウロスの皮をその周囲に巻き付けるようにしてクリエイト・グレート・アイテム《上位道具創造》を発動。

外装自体は、革細工のちよつと太めのチョーカーっぽい感じにし、イメージで内部の首輪の金属部分を変形させ、革から円錐状の突起が等間隔で、外周をぐるりと囲むようなデザインにしてみたのだ。

イメージとしては、ドーベルマンがつけているようなトゲトゲの首輪を少し大人しくしたような…。

もつとわかりやすく言えば、ロックスタイルというか…ワイルド系というか…そんなデザインにただけなのだが…、どうやら割とその外装は気に入ってくれたらしく、文句も言わずに即座に身に着けてくれたところを見ると、まんざらでもないようだ。

「ところで、どんな割り振りにしたんだい？ ブレイン」

「とりあえずは、自分には魔力なんてものはないと思ってるから、そこは半分までカットは確定だな、それから神様なんて信じてないから、信仰心も半分にカットとして…あとは特殊は減らさず、そのまま、目に見えない加護やら、運頼みな能力には育ってほしくないからそれは知恵も含めて2割カットだな」

「え？ 知恵を2割減らすのはなんでか聞いていいかい？」

「ああ、俺は魔法は使えないが、戦うことに於いてはあらゆる知識は集めたい、そういう意味では魔力や信仰心みたいに半分にまで減らしたら、イザ、戦ううえで記憶や知識は必要になるだろうし、脳筋じゃない戦い方を身に着けていくためにも2割にとどめた方がいいと思つたのさ」

「そうか…後の数値は？」

「あとの数字は全部1割カットにするよ…そうすれば丁度、1. 2倍になるだろう？」

「力、体力、器用、敏捷…が1割減…か、身体能力を極力減らさずに、本来の能力と、減少後の差からくる致命的なミスを少なくするためには、それが最適かもしれないな…」

「だろ？ 結局、欲張りすぎても良くないという結論に達したのさ、

1. 5倍が1. 2倍に減ろうと俺は俺の戦い方で成長していくしかないだろう?」

「…そうだな…ブレイン、キミは、そっちの方がいいな…。」

「あ、そうだ、一つ注意しなければならぬことがあったから今から言っておくよ。」

ブレインは素振りと居合の練習を止め、ベルに向き直る

「なんだよ、改まって」

「せっかく、身体能力の差をなるべく誤差の範囲にしてくれてたところ、悪いんだが、キミの身の安全を考えてね、その首輪を付けている間は、力と敏捷がちよつと上がる様にしておいたんだ、器用さに変化はないから、その分、自分の動きが不自然に感じてしまうかもしれないが…しばらくすればそれも慣れるだろう…」

ベルがそう告げると、ブレインは少し肩を落とすような感じになり、力なくこう言うに留まる。

「お前さあ…それよ〜、もうちよつと早く言ってくれや〜…」

「…すまん」

## 第44話 みんなで特訓、レベリング！「雷精」前編

「こいつで終わりだ！ くらえ！」

その言葉と共に繰り出された神速の一刀、そこから放たれた2連撃。

その攻撃により、目の前に出現させた敵、ネクロサマナー屍者の召喚者は黒い煙のようになり、消えて行った。

それと同時に、スケリトルドラゴン周囲に居た骨の竜達も崩れていく。

崩れ去り、黒い霧のようになっていく骨の竜らの居た場所に、スケリトルドラゴンチャリン、チャリンと、小気味良い軽やかな音が聞こえる、通称ユグドラシルコイン、ゲーム内では課金アイテムなどを購入する際には使  
用できなかったため、無料コインとも言われ…、主に、ギルドの運営  
資金、ギルド拠点の維持などのために貯めざるを得なかったという、  
そんな用途が主なる貯蓄目的となって行ったものだ。

「うお！ なんだこれ！ 初めてじゃないか？ こんなの出んの！」

元商人の家の出であったヘッケランが驚愕の声を上げる、それもそうだろう、緻密な彫りに裏と表で違う肖像画をコインに削り込んだような横顔、しかもそのコイン自体には自分らが知っている金貨とは比べ物にならない厚み、さらには歪みも凹みもない、綺麗に真っ平な金貨、どう見ても価値が違うのが分かる…そんなモノが、アンデッドの居た場所から落ちてきたからだ。

「なんだよ、ベルさん、これ！ 一体なにが起きたんだ？ 一度目にアンデッドと戦った時はこんな落ちてこなかったよな？」

拾い上げて、それが何なのか、何が起きているのか、なんでそういう現象が起きているのかわからないヘッケランが質問攻めに入ってきた。

それはそうだろう、ヘッケラン自身、初めての体験なのだ。

「アンデッドを倒して金貨が出現する」という奇跡的…いや、奇怪な現象に遭遇したのは。

「ああ、ボクの過ごしていた世界ではアンデッドを倒しても今の様に

金貨や、運がいいとモンスターのレベル…あ、いや強さに応じたドロップアイテムなども出ることがあったのでね、そういう設定に戻したのさ、今までがキミらの世界に合わせた設定だったみたいだからね、こつちの方が強い敵でも倒し甲斐があるだろう？」

「いりゆうひん？ 落とし物ってこと？」

首を傾げながらアルシェが横から今の説明を聞いて問いかけてくる。

「モンスターが落とし物をするなんて初耳、ベルさんの世界は変…。」

「落とし物…？」

（そっか、うっかりしてたけど、こつちの世界って翻訳されて相手に伝わるんだっけ…ドロップアイテムという概念も、単語も無い場合そう変換されるのか…、遺留品…か、そうと言えなくもない…か。）

「私も飽きる程、カツツエ平野でアンデッドを狩ったりしてきたけど、コインが落ちて来たなんてこと初めてよ、さすがは超古代文明の遺産つてところなのかしら？」

イミーナが説明を聞いても釈然としない顔をしながらも、現実到目前にある金貨を指で拾いつつ、夢じゃないことを確かめている。

「まあ、そうだね、だからこそ…金には困らなかった「冒険者」が多かったね、今のボクのような異形の姿をした者を『異端』として、人に何の危害を加えてない存在でも「異形種狩り」なんてことにまで手を染める者も居た…。それも今となっては、その文明の名が残されて無いという事は慢心が過ぎて破綻、崩壊させてしまったのかもしれないね…。」

（…という事にしておかないと、あれやこれや説明することになったら、大変だもんな、こつちだって説明を求められても説明できない現象のことが多いって言うのに…）

「だからこそ、異種族であっても互いに分かり合え、力を合わせて生活をしているあの村に思い入れがある…ということでしょうか？」

拾い終わったロバーデイクがその金貨が入った袋をベルに手渡しに来る。

「なぜ、ボクに？ 倒したのはキミ達だ、キミらが持っていてもいいんじゃないか？」

「そうだぜ？ ロバー！… これだけの金貨だ、下手したら交金貨2枚、いや3枚くらいの価値はあるかもしれないぞ？」

じやらりと音を立てる革袋を手に持ち、笑顔のヘツケラン：しかしそれをどこか辟易したような目で見やるロバーとの温度差が異様に目立つ。

「持つだけならご自由に？ でもそれを持ち帰ってどうするんです？ 自分で彫ったとでも言うつもりですか？ それとも正直に遺跡から発掘したアイテムから発生した異空間でアンデッドを倒したら、これらのコインが落ちて来たんだ…とでも？」

「理由なんて、適当にごまかせばいいじゃないかよ、ロバー！ これだけの大金なんだぜ？」

どこか諦めきれない雰囲気のヘツケラン、しかしそれもロバーデイクを説得する材料には成り得なかった。

「私はもう御免ですよ？ 一般に一回っていない品を売ろうとして命の危機にさらされそうになるのは…あの時はアルシエとジエツトさんが居たから助かったようなもの…あの時は不覚を取って私は眠らされてしまいました…、目覚めた時のあの衝撃的な状況は、今も忘れられません。」

それはきつと<sup>アウエイケン</sup>へ覚醒のスクロールを唱えてもらい、目覚めた時、目を覚ましたロバーの後ろに、ナイフと言うには一周りは大きい短剣と表現してもいい得物を持った存在が居た場面を言っているのだろう。

そう受け取ったヘツケランは、静かに、その袋をゆつくりとロバーに手渡す。

「そうだな、あの時は俺自身はレジストに成功して眠らずに済んだが…俺一人じゃ、ロバーとイミーナの2人を抱えて逃げることはできなかった。…あのままの状態だったらどうなったか、無事二人を無傷で助けることが出来ても、俺自身はお尋ね者になってたかもしれないな



かったからな…最悪そこまでのことが頭をよぎったよ…あの時は…。」

そこで、ベルのそばにいたアルシエがゆつくりとヘツケランとロバーデイクの近くに来て口を開く。

「みんなには感謝している、今まで家族の為、お金が必要だった私を仲間に入れてくれて、ずっと何も言わずに…私に負い目を感じさせないように分け前を多めにしてくれてたのは知っていた、でもその厚意を全部、借金に当てなければ…と、あの時はそればかりだった、そんな私の装備だつてずっと同じだったことも問い詰めないで居てくれたみんなには感謝してもしきれない…でも、もうそれも…その借金もすでない…もう必要以上に稼ごうとしなくても、今回の依頼が済めば、あの村で穏やかに過ごしても私は構わない。」

チームの妹役、魔法知識担当のアルシエにそう言われれば、そこはリーダーとしては何も言えなくなってしまふ。

「わかったよ、アルシエ…なあベルさん、これからも戦った中で落ちるものは、とりあえずアンタが管理してくれないか?」

「ええ、かまいませんよ、必要になった時はいつでも言つて下さい」  
(いいチームだな…、昔の様にボクもあんな風に仲間に戻って来て欲しいけど…もう無理だろうな…。)

「でもまあ…確かに言われてみりや、俺らには、あの時ジエツトさんから買い取ってもらった代金が丸まる残ってるしな…これ以上あくせく稼いでいく必要もないか…」

「そうよおく? これからは商人の能力より、耕す方を求められるかもよお?」

と、意地悪そうな笑顔でヘツケランをいじるイミーナ。

「ありえそうだ…水汲みとか薪割りの速度で、村長に負けたら立ち直れないかもな…そりゃ」

「大丈夫よ、あそこじゃ薪割りはともかく、水汲みは蛇口を捻れば出てくるマジックアイテムが全部の家に普及してるからね、必要ないんじゃない?」

「じゃ〜今度は、手をかざしたり、指を突き付けるだけで火が付くかまど竈とか都合してくれないかね？」

などの軽口を利かせたヘツケランにアルシエが「警告」ともとれる忠告を口にする。

「それはダメ…数日の違いでしかないけど、あそこの村で暮らしてきて、村人の気質は分かってきた、あそこの人たちはそういう意見に敏感…自分らが楽をするためにゴウン様に頼るような考えを言おうとすると、周囲から反対意見の嵐になる…。」

「そ…そうか…冗談でもそういう言葉は言わない方がいいか…村の生活も、街とは違った大変さがあるんだな…。」

「最近はおーガも増えてきているから、力仕事も丸太を運ぶのも、巨石を運び出すのにもみんな協力し合っている。今でも隣におーガがいると落ち着かないけど…多分、もう少しで慣れると思う…。」

「いつかトロールも増えてくるようになるんじゃないかねえか？大丈夫なのかよ…。」

恐怖心から少し警戒し始めるヘツケランだが、それに対してアルシエは違う方向で答えを返す。

「そう遠くない内にきつとそうなる…あの村長は魔力こそないけど、底知れない何か眠ってる…いや、きつともう目覚めてるかも…。」

そう言い放つアルシエに同意する言葉を投げかける存在が近づいてきた。

「まあ、そりやそうだろうな…あの女は、俺に膝をつかせたくらいなんだぜ？」

（ま、形としては自発的にも見えただろうが、結局は膝まづかされた訳だしな…）

ウソも誇張もしていない、聞いた側の認識に任せただけ…と自分に言い聞かせ、ブレインがエンリのことを評価する言葉で締めくくる。「王国戦士長と以外では今まで負け知らずのブレインが…ヒザをつかされた…？」

アルシエは、その「ヒザをつかされた」瞬間の現場は見えていないが、

その後の翌朝…いや、昼前まで膝を地面につけていたブレインの姿は記憶している。

「そうなのか？アルシエ？」と問いかけてくるヘツケランに「まあ…地面に膝をついていたのは事実…その瞬間の現場は見えていないけど…私が知ってるのは膝をついてから後の姿だけ…」と告げるに留める。

きっとこれなら、ブレインの戦士としてのプライドも傷つけないだろうというギリギリの線は保てたはず…自分は戦士じゃないし、男でもない、ましてやブレイン自身でもない訳だから…本当のところはどうか、そこは分からないが…。

しかし、この話によって、ますます「霸王 炎莉」という名称がつけられる要素がまた一つ付け加えられてしまったことには、この話題を始めた当の2人も、全く気がついていなかった。

まだ、ゴブリンの大將軍、鮮血の女隊長、血まみれエンリ…などの名前で済んでいる今の状況とは、そう遠くない内に世界の認識が変わっていつてしまうコトになるなど…今はまだ誰も知らない未来の話である。

「ところでブレイン、そつちはどうよ？うまく制御できるようになるか？ さつきは割と調子よくスケルトンや、スケリトルドラゴン共を蹴散らしてたみたいだが？」

何かまずそうな空気になってきたのを鋭敏に感じ取ったヘツケランが話題を変えるべく違う質問をしていた。

それは呪いの効果によって「呪われし拔刀者」カースドスラッシュヤーのクラスを得て、負の属性を攻撃に乗せるといふ常時発動効果を得てしまっただけから、アンデッドへの効果的な攻撃に調子が出なくなっていたからだ。

「ああ、なんとかかな…、一つ難度が上がったからなのかどうかはわからないが、何となくスイッチの切り替えのような感覚はつかめるようになった。」

「よかったな、これも敵さんが、バシバシアンデッドを生み出して？召喚？してくれたおかげで事か？、それとその相手を選んでくれ、経

「験を積ませるチャンスをくれたベルさんにも感謝しないとだろうな」  
多少わざとらしくもあるが、おどけるようにそんな言葉を出してき  
たハツケランを別段、責める要素はどこにもない、今事を荒立てて、空  
気を悪くするつもりもないベルがそれに答えを返す。

「いや、それには及ばないよ、ブレインが強くなればカルネ村の防衛力  
も上がる、戦力が高いのに越したことはないからね、それにブレイン  
も、さっきの戦闘で新しい技のアイデアがちょうど浮かんでるタイミ  
ングじゃないか？」

そうベルが水を向けると、ブレインもそれに反応する。

「よくわかったな…まだ頭の中でのことだから言わなかったんだが  
…、前々からそれが出来るようになれば…と陰で練習はしてたんだ…  
だがさっきの手応えで、やつと何かつかめたような気がしたんだよ。」  
「やはりね…さっきの戦闘でブレインの難度はまた一つ上がったよう  
だな。」

ベルのその言葉に納得の言葉が上がる。

「そりやそうか…相手にとどめを刺したのはブレインだしな…経験  
値ってやつもその分、ブレインが獲得してるんだらうからな…。」

「とは言っても今回は骨が相手だったからな、斬撃も突きも効果的  
じゃない以上、刃じゃなく「神聖属性」頼りになってしまった、この  
刃にそれが付与されてて助かったよ。それに斬撃じゃなく、寸前に刃  
を返して峰打ちにしたから、「殴打」属性でしのげていたようなもの  
だったからな。」

「しかし…どうしたのか…なかなか順調ってわけにも行ってないと  
ころが歯がゆいね…、もつと強いのを出さないとレベリングはうまく  
行かないんだが…、かと言って死なれても困るしな…うくん。」

そこにそばに控えていたフレイラが口を開く。

「差し出がましい言を差し挟むこと、お許しくださいベル様、それでし  
たら、ベル様の召喚される魔獣を呼び出し、共に戦わせるという手段  
はどうでしょう？　もし支障があるようでしたら、私の神聖系の召

喚、天使を呼び出すという手段も併用すれば、どうにかなるのではと……愚慮するのですが……」

「そうだね……そうすればなんとか、数体の敵モンスターを一度に出現させても大丈夫そうだが……そうなると……3体くらいか……1体はフォーサイトチーム、もう1体はブレインチーム……3体目は、決着つくまで足止めの盾役として、極力召喚した者らで防御に専念させとけば……ダメージを負わされても、召喚される前の元素界に戻るだけだしな……よし、その方向性で行こう。」

そう言つて、お礼の言葉と共にフレイラの髪を撫でてやる……かぶつている帽子の下には普段は目立たないように隠しているケモ耳がある……その感触も手に心地よい。

「あれ？」

ベルはそこで今まで感じていなかった違和感を覚えた。

フレイラの頭にかぶつている帽子の額の付近にある、クレリック職を覚えさせるために便宜上、「信仰する神」として設定させた『聖印』、そのマークに見覚えのない輝きを見て取つたためだ。

「フレイ……この『聖印』ホーリーシンボルの所つて、こんな輝きの色だったか？……確かボクはここ……白で決定した気がするんだが……こんな白銀のような煌めきにしたんだっただか……？」

「あ……これのことですか……これは、確か私がまだ起動を許されていなかった時に、た……」

とここまでフレイラが言葉を紡いだ瞬間、外野から声がかけられる。

「おくい、ベルさんよお!!……もういつちよ行つてみるかい？　まだ1〜2回くらいなら、戦闘に耐えられそうだぜ！」

「ああ……わかった、それなら今からちよつとした変わり種を用意してあげよう」

一言、ヘツケランにそう言葉を返すと、会話は一旦置いておこうとフレイラにも言葉を投げかける。

「フレイ、すまないがその話は次の機会に聞かせてくれ、これから呼び

出すのは運が良ければ、アルシエちゃんの鎧に最後のスロットを埋めるデータクリスタルが落ちるかもしれないからな…そのために、戦闘が始まるタイミングに合わせてみんなを範囲にして〈聖なる恩恵の地〉を掛けてあげておいてくれ…こっちは設定後、すぐに〈電気属性防御〉を各自に掛けていこう。」

「は、承知いたしました。そのように致します。」

「ああ…頼んだ！」



ベルは扉のパネルを操作し、敵の設定を始める。

「今回は、すでに召喚魔獣も召喚天使も配置済みにしてあるからな…レベルはさっきの『ネクロサマナー屍者の召喚者』が35だったから、ちよつと上げて36にしておいてあげよう」

（でも一応、順調と言えば順調か？ 難度的には108ってことだしな…。）

ポチポチと操作し、呼び出すのは炎の精霊、サラマンダーより少しレベルが上の雷の精霊種、【雷精】というモンスターだ。

全身は青で、外観は人型をしている、体の所々に赤、または黄色で、イナズマ模様が各部を彩っている。

燃えるような瞳は赤で、トンボのような複眼、額からは蛾を思わせる触覚のような装飾が左右の両端に伸びるようにして上を向いている。

それが、全身から弾けるような電流をバチバチと身にまとわせながら3体現れる。

すかさず、ベルは複数呼び出した魔獣の内、3体のムーンウルフそれぞれに念で呼びかける…攻撃に見せかけ、相手が動作に入ったら全力で防御をしろ！という風いだ。

もちろん呼び出したのはムーンウルフだけではないが…、一応、別

動隊として、待機。

ムーンウルフが倒されたら、そちらの出番だ、という指示は出しているの、後発組はじつと戦闘区域から離れて後ろに居る。

そして戦闘が始まるより前、その隙に、ベルはパーティーのそばに  
テレポーション  
〈転 移〉で瞬間的に現われ、ブレインとディーネに両手を広げた姿勢で接触。  
ツインマジック  
〈魔法二重化〉でそれぞれ左手と右手に  
プロテクションエナジー・エレクトリシティ  
〈電気属性防御〉を発動、同時に二人に防御魔法をかける。

第一ターンに移るタイミングでベルは再び〈転移〉を発動。

今度は別組のヘツケランとロバーデイクに同じように  
ツインマジック  
〈魔法二重化〉で両手に発生させた  
プロテクションエナジー・エレクトリシティ  
〈電気属性防御〉を掛ける、これで、最低でも前衛二人はダメージを低く抑えられるだろう。

その用意が済んでから、第一ターン【雷精】の攻撃は自分に向かってきたムーンウルフに  
ライトニング  
〈雷撃〉を食らわせようと動作に入る、その瞬間、ムーンウルフは指示通り全力で防御に専念、ダメージを半分抑えるに成功するもレベル差はムーンウルフの1.5倍を超える、防御状態でもHPは一桁のレッドゾーンに入ってしまった。

他のムーンウルフ2体も、その状況に変わりはない。全員HPの残数は一桁だ。

防御魔法を身に纏ったブレインが、さっきの戦闘で身に付いた実感が得られた武技、〈縮地〉を発動させ、一気に【雷精】との距離を詰める。

今回はアンデッドではないので、意識下で“負の属性”をカットする必要はない。

神聖系のダメージの上乗せは期待できないだろうが…と、そのまま攻撃に移る。

戦闘に入ると同時に〈領域〉を発動させるのは最早、自然に体に染みついた行動になっているブレインは、そのまま命中精度が上がった神速の刀閃、2連撃を見舞う。

わずかながらも「非実体」にもダメージが通り、かつ「物理障害に

対する斬撃効果20%向上」という性能もある。

【雷精】のパッシブスキルである〈雷の衣〉を『物理障害』と認識されるようなら、非実体への30%のダメージに加え、さらに20%が加わり、最大ダメージの半分に落ち込んだダメージから相手のスキルの割合分差し引かれ、通るダメージは相当にわずかな分だけ…という可能性もあり得るのだろうか…。

だが、それも繰り返し連撃で切り付けて行けば、積もり積もったダメージはバカに出来ないだろう、とブレインは思考を切り替える。

ルチルは、森祭司ドイルドの魔法を展開、〈茨の締め付け〉ソレン・バインドを発動するも、【雷精】が身に纏っている電流の影響により、【雷精】に絡みついた茨に少しずつ火が付き始める。

このままではすぐに火が付き、燃え尽きてしまうだろう。

そのため、恐らくはバインド状態は次のターン頭に解除されること  
が予想された。

MP節約のため、レンジャー持ちの魔法詠唱者マジックキャスターのセピアがショットボウ「ボルカノ」を【雷精】に撃ち出す。

矢の先端に発生した溶岩弾の熱により、射出した瞬間、先の溶岩部分を残し、それ以外の部分は燃え尽きながら、【雷精】へと一直線に飛んでいく。その燃え盛る溶岩の塊は、バインド状態の【雷精】に直撃した。

【雷精】のパッシブスキル〈雷の衣〉により身を守られ、ダメージが少し減ったようだが、それでもダメージはかなり通ったようだ。

ユグドラシル製の鎧を身に纏っているディーネはブレインのすぐ後ろで、攻撃に備えている。

今まで出せなかった自分の武器、「ホーリーフレイル」に付与されている攻撃手段。

「シュートー」と発声し、フレイルを【雷精】に向け、目一杯近付ける。

すると、フレイルの先端から更に魔力的な光を帯びた鎖が伸び、2mだけ先に発射される形で、【雷精】に直撃する。



LV55金属で出来ている先端の鉄柱の直撃はそれなりに威力はあつたようだ。

射程が2mと短いため、前衛より少し後ろ、くらいまでしか距離が取れないのは危ないとも思えるが、握り柄の棒自体が1m以上あるので、目一杯伸ばせばもつと距離的な面では有利に展開できるだろう。



一方、チームフォーサイト。

こちらはやや不利な状況だ、初撃こそ、ムーンウルフが〈雷撃〉を引き受けてくれたものの、戦闘時の素早さではヘツケランより〔雷精〕の方に軍配は上がる。

もしも、第2ターンの攻撃でムーンウルフが沈めば、次の魔獣が間に入って来るまでは1ターンかかる。必然的にその3ターンの目の攻撃をへ電プロテクション・エナジー・エレクトリシティ属性防御で防ぎきれるかどうか：それが課題と言えた。

しかし戦闘時に迷っている暇はない。

一番使い勝手が良く、消費も低い為、使い慣れ始めた攻撃手段へ双炎斬撃を〔雷精〕に見舞う。

セピアが放った攻撃と同様、炎系も少し抵抗が入る、予想していたダメージには少し足りなかったようだ、常時発動する形でダメージがいくらか軽減されるスキルでも設定されているのだろう。

ヘツケランの次に立っているのは前衛向きのロバーデイクだが、相性は悪い、こちらの装備は現地産だ。

ユグドラシル製より脆弱で、かつ金属鎧は電撃系にはあまり抵抗力がない、ダメージを軽減される魔法をかけてくれているも、金属製鎧のデメリットとプラスマイナスで相殺され、ダメージ的には変わらないかもれない、つまりトントンと言った感じになるだろう。

そんなロバーデイクだが、アンデッドが相手であれば、「ターンアンデッド」や「回復魔法」でのダメージも期待できるが、今回は精霊種、

肉体もなく、非実体の存在に攻撃手段がある訳では無い。

その中で彼が選んだ手段は：〈下位属性防御〉レックサープロテクションエナジーを発動。

そうすることで、最前線のヘツケランに〈電気属性防御〉と〈下位属性防御〉が重ね掛けされることになった、その結果、多少はダメージを抑えられるようになっただろう。

今回、戦闘開始早々、ロバーデイクは後方支援に徹底した方がいいだろうという結論を早くも出していた。

自分が所持しているのはメイスで、〈祝福〉ブレスの魔法が付与されているが、非実体の存在にダメージを与えられるほどの攻撃力は無い。（低レベルの存在であれば話は別なのだが…）

それなら回復役、もしくはは支援に専念するべき、という選択肢しかないことをイヤと言うほど理解できた為だ。

「あんがとよーロバー！これで、少しはマシになったってことだな。ダメージも上乘せできる魔法もあれば言うことは無いんだけどな！」  
もちろん何かを期待しての発言ではない。

炎の精霊が力を貸してくれるとは言っても、炎の残量には限りがある。

たつぷり補充してあるとは言っても、無計画に炎をまき散らし、結果：相手に致命傷レベルのダメージを与える前に自分の攻撃手段が枯渇してしまえば意味はない。

「実際、あんまり炎のダメージが通ってる感じはしないんだけどな…」

「なら別の手段！ 違う魔法でダメージを与える！」

後ろで魔法の準備をしていた、アルシエが詠唱の終わるタイミングで魔法の発動をさせる。

得意のファイアーボールでも、ダメージはヘツケランの攻撃の感触だと減らされてる様子と判断した彼女は、ライトニングもあきらめる、恐らくは、「雷精」に雷撃を食らわせても大きなダメージには成り得ない気がするのだ。

「それなら……これ！〈水流 刃〉」

ストリーム・ブレイド

空気中の水分から集約された「水の気」で作られた刃が発生する。刃の部分全体を、流れる水の如く小刻みな水流となつて「引いて斬る」役目を果たすように目では負えない速度で刃部分が波打つことに加え、半月状の水の刃が高速回転する。

そのため、見た目としては円盤状にも見える水刃が【雷精】に迫る。彼女が減多に頼らない水系の第3位階魔法である。

魔法的に生み出された水の刃は【雷精】の精霊的な身体を切り裂くも、それ自体も効果的な手段ではなかったようだ、血こそ出ないし、傷口もパツクリと裂け目を作っているものの、予想するほどに傷口は出来ていなかった。

イミーナは矢じりにミスリルのコーティングをしてあるとつておきを矢筒から引き抜き、矢を【雷精】に向けて撃ち出すも、威力不足のようで、他の面々のようなダメージも通らなかつた様子だった。（いかな……他のメンバーは着々と戦力増強がされてるが……彼女だけはいまいち決め手に欠ける……、なにか彼女に相応しいナニかがない物か……）



## 第2ターン

ルチルにバインド状態にされていた【雷精】がターンの頭に拘束状態から解放される。

その瞬間に、その【雷精】Aの表情がわずかに歪む。

その意味は「この程度なら脅威には成り得ない。」

そういう判断が下されたような表情だ。

すると、【雷精】Bが大きく上に顔を上げ、他の【雷精】達に呼びかけるように「ピャー！！」とでも表現する方が近いような金切り声を上げた、それは頭の上の触覚のようなものを震わせ、他の2体の【雷

精】の触覚にもその震えは伝播している。

それは何かの共有の合図をしたかのように、メンバーのみんなには感じられた。

その瞬間、呼びかけた一体の【雷精】B、そいつの行動はそこで終わる。

それ以外の2体【雷精】AとCの身に変化が起きた。

体中から今までよりも大きく、激しい電流が迸り、それが全身にいきわたると、そのバチバチとした光は背中ですばらしい大きな翼のような形状を作り上げていく。

まばゆいばかりの雷の翼が両腕を広げたよりも、その倍くらいの大さきの翼を形作る。

そこで【雷精】達の第2ターンが終わった。

ヘツケラン達、彼らはその光景に危険さを察知してしまう。

今のうちに仕留め切らないと、何が来るのかわからないが、次は絶対やばいものが来る、というワーカーとしても、剣士としても：経験からくる危機感に襲われ、その危険性に気が付いていた。

そこですかさずベルは背後にへ転テレポーション移して、フレイラの横まで瞬間的に移動した。

別段、自分にとつてはレベル的にも恐ろしいというほどの魔法ではないが、それでも自分が致命的な時に手助けしてしまつては、イザと言う時に甘えが出てしまう恐れがある。

それはあの「地下大墳墓」に於いては最悪の状態とつながる恐れがあつた。

：そう、あそこでは『死はそれ以上苦しみを与えられないという意味で慈悲』という場所なのだから…。

転移したその場で唯一、状況を左右できそうな武器を持っているデーイーネに一つだけへ伝言メッセージで助言を与える。

それは中学で教わった知識、うまく行けば無傷、うまく行かなくても最小のダメージで済むだろう。

ブレインチームはそれでいいとして、フォーサイトチームは大丈夫

だろう、あの聡明な天才児、アルシエが魔法戦に於いて、判断を誤るはずがない、チームが無事で済む可能性にはすでに気付いているだろうと信じて見守ることにした。

【雷精】の行動が終わって、自分たちの行動になった瞬間、2つのチームは、それぞれの【雷精】に立ち向かう。

『雷の翼』を広げる敵Cに正面から立ち向かおうとするフォーサイトチームと、一方は行動の終わった【雷精】Bと、そして『雷の翼』を広げて、次のターンにはその翼を使って何かをしようとしているのが明白な【雷精】Aとの間に移動したディーネが、ベルに指示された通り、己の武器を地面に立てて、先端を天に向けた状態で、なるべく姿勢を低くしてかがんでいる。

ルチルと、セピアにはそれぞれ、別の指示をディーネは残している。きつと言った通りのことをしてくるだろう。

セピアは<sup>シールドウォール</sup>へ盾壁の魔法をブレインに掛け、物理攻撃に対する防御を上げると共に、専用の魔法には劣るもののわずかに魔法に対する防御も引き上げることも可能な呪文を唱えることで、最前線のブレインの物理耐性、魔法耐性も上げていく。

ルチルはへ自然の精霊召喚I s tを発動。呼び出すのは地の精霊。「I s t」なので、まだ精霊になりたてのレッサーアースエレメンタルだ。

ここではルチルの召喚により、そこでの行動は終了、呼び出された精霊は呼び出される際、地面に伏せるように召喚されている。

そして、フォーサイトのターン。

「ここは私に任せて！」

短くそう言い切る魔法関連担当のアルシエがハッケランより前に出る形で、【雷精】Cの目の前に歩み出る。

「おい！アルシエ！あぶねえぞ！見てわかんדר？」

「わかる…だから私が来た、この攻撃に対抗できるのは、今のみんなの中では私だけ、だから少し後ろに下がって…、私が防げたら、ヘツケランはいつでも反撃できる様に…」

そう伝えると、それだけの言葉で理解してくれたのか、理解できなくとも魔法の知識に関してはチーム1のアルシエが言うなら…と従うことにしたのかはわからないが、ヘツケランがアルシエの指示通りにアルシエの後ろへと下がる。

「頼んだぜ？アルシエ！」

「…任せて。」

ロバーデイクは、最悪の場合に備え、レックスアップロテクションエナジー〈下位属性防御〉を自分に掛ける。

これで、金属鎧でのデメリットも多少は和らぐだろうと淡い希望を抱いてだ、かと言って、直撃すればただでは済まない。

「イミーナはもう少し後ろに居た方がいいでしょう。」

「あんだだつて金属鎧で危ないんじゃないの？人の心配をしてる場合？…まあいいわ、お言葉に甘えて下がらせてもらうけど…無茶はしないようにね。」

「ええ、アルシエの声は聞こえてましたか？ イミーナの数少ない武技、あれを使つてダメージが通らないなら、打つ手はありません、安全な場所に居た方がいいかもしれませんからね。」

イミーナは考える、それはその通りだろう、自分が覚えてる武技は数えられるくらいしかない、あとはローグとしての「罨解除」だの、「鍵開け」だの、そういった専門技能ばかりだ。

ロバーが言うなら「邪魔だ」という意味じゃなく「安全な場所に…」という、純粹にそれだけの意味なのは理解できた彼女は、少し後ろに下がり、射程ギリギリの場所まで避難し、いつでも次の行動に移れるように矢をつがえた。



### 第3ターン

誰よりも素早さの高い【雷精】が、行動に入る。

3体の内、2体AとCが広げられた大きな雷翼から戦闘に入っているメンバー、それぞれの4人に行き渡るような広範囲に電撃を広く撃ち出す。

エレクトロ・ウイング  
〈雷撃の翼〉

【雷精】AとCの2体が同時に発生させたそれは、全体攻撃ではなく、範囲攻撃だったのがせめてもの救いだが、それでもこのレベルのモンスターの電撃が全員に襲い掛かれれば〈下級〉しか防御を張れないメンバーでは一発で体力のほとんどを持って行かれるだろう。

その為、それに対抗できる者達の対応は早かった。

「シュート！」

「全部吸いなさい！ 少しだって後ろには通さない！」

それは2人とも、声にしたのは同時だった。

方や、一番小柄な女の子の身に纏う鎧が、まるで周囲の雷だけを吸い寄せる吸引機のように、範囲全体に広がろうとする電撃を全て吸い込んでいく。

それは、今、アルシエが装備している、某エロバードマンが作ったネタ装備、それを有効利用させた結果、本来は4人に行き渡るはずの雷撃を、全て、その鎧に吸収し、更にはもう1体の方の雷の翼、その片翼の分も引き込んで吸ってしまった。

そして、一方、エルフチームの一人、ディーネの発生した言葉によって効果が表れたのは、地面に立てたホーリーフレイル、その鉄柱を天に向けて居た状態でのパワーワードの発声…、先端の鉄の棒部分が空に射出される形となった。

とは言っても2m程度ではあるのだが…しかしそれでも、他の伏せている者たちの誰より、高い位置…持ち柄の長さを合わせても3mの

高さ存在しているソレに……4人に直撃するはずだった雷撃の翼、その残された片翼の雷撃ダメージが、全部その一本の鉄の棒部分に吸い込まれ、ホーリーフレイルの素材を通して、地面へと流れていく。その結果、本来、1体目と3体目の【雷精】、その目の前の存在にも届くはずだった翼からの雷撃は、瀕死のムーンウルフにも届かず。

そのターンの攻撃は無駄に終わった。

今度は苦々しい表情に顔を歪めたのは中央の……金切り声を上げた方の【雷精】だ。

一度〈雷撃の翼〉エレクトロ・ウイングを使ってしまったら、あれは連発できるモノではない。

発動直後、3ターンは使用が出来なくなってしまう。

ならば、違う方法を考えなければならない。

ここで〈雷撃〉ライトニングを地面に伏せている女に向けても、さっきの現象を見る限り、なんらかのスキルか何かで、あのフレイルに集めて、後で何かをするつもりなのだろう。

ならば無駄撃ちするべきではない。

そう判断すると、未行動の【雷精】の行動は早かった。

己の右腕を天に向けて高く掲げると、第4位階の〈雷電〉サンダーライトニングを使用する。

本来、〈雷撃〉ライトニング系は手、もしくは両手から発生させた電撃を、狙った場所……もしくは相手に撃ち出す技だ。

しかし、この〈雷電〉サンダーライトニングは一風変わったエフェクトが施されており、天から降る雷が、幾筋も発生し、それが道筋を作る様に目標へと向かう……なので、地面に居ようと、空を飛んでいようと、始点から終点を繋ぐ天から地面までの一直線が電撃の及ぶ範囲内なのだ。

ある意味、第4位階という序盤の魔法でも、対空魔法の代わりに使え、使いようによっては便利な魔法だったのだ。

しかし、この【雷精】はそれを違う用途に使う。



発生させた<sup>サンダーライトニング</sup>へ雷電を突き上げた右腕に直撃させ、それを腕全体に纏わせる。

利き腕に電撃の属性を付与させ、攻撃力を上げた状態で、忌々しい、小柄の：電撃全てを吸い込んだ女に狙いを定める。

本来は、そのような攻撃手段はユグドラシルでは存在しなかったのだが：今の【雷精】にはAI（人工知能）ではなく自立した思考回路が存在する、必然的に、応用した攻撃も生み出すことが出来る様になつていた。

それはレベルの高さも起因しているのかもしれないが、今はそれを考えている場合ではないだろう。

肉弾戦に持ち込もうとアルシエに近づいた【雷精】は右腕を振りかぶり、拳を突き出し、スクリュー状に拳部分を強化している雷撃ごと、アルシエを撃ち抜こうとしているのは明白だった。

〈雷撃貫通弾！〉

直撃すれば恐らく、ただでは済まないだろう重い攻撃が目の前にまで迫る。

純粋な魔法なら吸い込むことも可能だが、直接攻撃に付与された強化属性までは防ぐことが出来ない。

ヘツケランは後ろに下がらせてしまったため、防ぎに来てくれるのは間に合わないだろう。

他のメンバーも同様だ。

鎧を身に着け、動けるようなクラスを取得しているといつてもまだまだ1レベルだ。

肉弾戦に長けているわけでもないので回避もままならないだろう。死を覚悟した彼女の前に、タワーシールドをさらに大きくしたような広さの石壁が地面から発生し、敵の拳との間に割って入った。

ルチルが呼び出したレッサーアースエレメンタルが作り出した、1LV分の石壁だ。

アルシエを守る為に作られたが、所詮は「1LV」でしかない、サンダーマグナム〈雷撃貫通弾〉を受けきるだけの強度は無く、爆散し、飛び散って消えた。

貫通弾という名前通り、その勢いは石壁を突き抜いても衰えず、アルシエに迫る。

今さら、恥ずかしいなどと言って居られないと判断した彼女は、自分のウエスト部分を覆っているアーマー部を独立展開させ、自動防御の盾として使うことを決断するも、わずかに一直線に迫る拳の方が早い。

間に合わないか！

と思った瞬間、炎の刃が【雷精】の拳に当たり、勢いを削ぐ。

ヘツケランの〈空炎斬〉が、石の壁を爆散させる為、わずかに速度を落とした拳に合った。

拳に炎のダメージを負った【雷精】Bは、怯むも、今一番警戒するべき対象に向ける敵意は緩めない。

ダメージを受けながらも雷を纏う拳を撃ち出し、届くかと思った瞬間、アルシエのアーマーから外れた自動防御をする浮遊盾がなんとか間に合い、雷の拳をガードする。

その盾の性能は、いくらネタ装備とは言え、36レベル程度のモンスターが太刀打ちできるほど弱くは作られていない。

そこはロリは国宝！有形文化財！と豪語していたエロバードマンの想いが異世界に来て強化してくれているのか、36レベルの強化攻撃程度ではビクともしない。

それが全力展開することにもなれば、4枚浮遊して、守りに割って入るのだ。

こうなつては、【雷精】に出来ることはなくなつてしまったと言つて

いい。

少女を睨みつけながら、どうしてやろうかと思案している【雷精】の目の前に彗星が迫る。

それは体を丸めたトロール程の大きさもあり、彗星の主属性である氷を空気との摩擦熱で燃え上がらせながら、炎属性と氷の属性という相反する属性を同時に展開させ、油断していた【雷精】に直撃した。セピアが『コメットロッド』で撃ち出した、自分の総魔力の6割近くも消費させ、発生させたとおきの「第3位階」相当の彗星。

1ターンの目の攻撃が関の山と思つて居た【雷精】の虚を突いた一撃、それが大幅にHPを削る。

その身に〈雷の衣〉を展開させ、ダメージを常時軽減させているが、本来は自分を相手にするはずではない場所に居たエルフからの攻撃魔法。

まさか、それが自分の方に来るとは思つて居なかつたのだ、軽減している分よりダメージの方が大きい。

半分近くになった体力で、焦りを覚えた【雷精】だが、次の行動までは〈雷の衣〉でしのぎ続けるしかないと覚悟を決める…しかし切り札でもあった〈雷撃の翼〉エレクトロ・ウィングが封じられたも同然の状況で、どうすべきか…答えを出せずにいた。

そんな中、まだ未行動の存在が居ることを頭から除外していたのに気づいていない【雷精】は背中に電流の痺れを伴う直撃を受ける。  
どこからだ？

周囲を見渡すと先ほどの小柄な…忌々しい雷撃を吸う娘…。

その時、ようやく娘の腕に電撃で作られた弓のようなものが形作られているのに気付いた。

自分は【雷精】。

雷撃系のダメージだけは3割程軽減させることが出来る。

それなのに、このダメージ量はなんだ…？

半分残っていたHPが一気に50%の3分の1、つまり全体の17

%を割ってしまったことになる。

あんな小娘のどこに、そんな魔力が…？と警戒するも、【雷精】は気づいていなかった。

雷撃を吸収する娘が、吸った魔力を攻撃魔法に転化させられる装備を身につけていたという事を…。

つまり【雷精】が受けてしまったのは【雷精】自身が放った〈エレクトロ・ウイング雷撃の翼

それを、電撃の矢に変化させ、そのまま【雷精】にお返ししたのだ。

これが雷神クラスであれば『雷撃吸収』などの特殊効果があってもおかしくはないのだが、【雷精】はそこまでのレベルではない、軽減させる程度までしか耐性を身につけてはいなかった。

意識がアルシエに向いている瞬間を縫うように1本の矢が飛来する。

その矢はミスリルのコーティングがされた、イミナーナの矢だ。

その鏃やじりには淡い光が宿っていた。

きつとロバーデイクの〈ブレス祝福

きつきの矢程度の攻撃力なら、1本くらいそのまま受けても、軽減能力でダメージはナシにできる。

そう判断して、たった1本の矢を無視することにする、軽減を突き抜けるほどの攻撃力などありはしない。そう結論付けてだ。

しかし、その判断はその予想通りに行かなかった。

確かに矢自身の攻撃力は大したことはなかった、ダメージも受けていない。

淡い光で魔力を付与させていた分も軽減の範囲でゼロにできた。

しかし、その直後だ。

その矢がいきなり刺さった部分を抉り、矢自体が回転をして穿つよ

うな動きを見せ始めた。

それが、イミーナの数少ない武技、〈穿<sup>うが</sup>ち撃ち〉

命中にボーナスはつかないが、矢が当たりダメージ判定の計算がされた後（軽減の効果の解決後）に、追加ダメージを与える、それはもちろん防御を突き抜けてからのダメージなので、そのままダメージが通る。

しかし、だからと言って、大ダメージではない、削り技でしかないのだ。

「癪に障るわね…自分の力がこの程度だって実感させられるのってさ」

とイミーナがぼやき、

「それを私の前で見えますか？ 私などは、ダメージを与える手段もないのですよ？」

と、ロバーデイクがフォローする。

【雷精】に通ったダメージは軽微でしかなかったが、それでも2%は削られた。

残りは15%…と元AIだった思考回路が冷静に自分の残りHPを計算した。

場面は変わり、【雷精】Aの目の前。

セピアが〈 comet・インパクト〉で第3位階相当の彗星を直撃させた時、【雷精】Aは、そのエルフを警戒し始め、今のうちに始末しよう<sup>と</sup>と決断するが、目の前の剣士がそうさせてはくれなかった。

〈瞬間〉と〈神速二段〉を組み合わせ、その剣士が魔法の詠唱の時間を与えてくれずにいた。

この剣士の攻撃は危ない、命中の練度が並外れている。

かと言って、受ければわずかなダメージでもなぜか体が重くなる。

ならばと空に逃げようとするれば、金髪の方のエルフが石の散弾を魔法で放ってくる。

きつと、あの彗星を生み出した茶髪のエルフが自由になれば、今度

は自分が標的になるだろう。

【雷精】 Aは少し焦り始めていた。

このまま目の前の剣士の攻撃を受け続けていればダメージ自体は軽微でも、受けた回数に比例して体が重くなり、宙に浮かぶ余力もなくなってくるだろうことは容易に予想できることだからだ。

このまま【雷精】 BがHPを全て失ってしまったえば、フレイルをもつ鎧の娘、そいつがこっちに集中できるようになる。

あいつのフレイルの先端は、ただの鉄ではない。

何か特殊な金属だ、ということとは判断できるが、正体までは解らない、その為、警戒心がかなり上位にランキングされていた。

今は目の前の相手が一番少ない【雷精】 Cに期待するしかないかと、そちらに活路を開いてもらうことを願っていた。

そして【雷精】 Cサイド。

第1ターンで、瀕死にされたムーンウルフが「防御しても結果は同じ」とわかっているのか、果敢に攻めに転じていた、とは言え20レベル、普通に【雷精】に腕を横に振りぬかれるだけの通常攻撃で息絶えてしまう。

さて：Bの助けに行くか…と考えていると、そこにもう一体のムーンウルフからの不意打ちで、首に噛みつかれる。

本来は肉体のない精霊であるため、首を狙われても痛みも何も関係は無いのだが、今、首に噛みついてるのは「ムーンウルフ」月の守護をわずかなりとも受けている魔獣だ。

月は、人の精神に大きく左右する魔力を持つ天体として有名だ。

そのため、この魔獣の牙は、精神体などの実体のない存在にも効果が表れるようになってる。

すでに【雷精】 Bが瀕死の為、念話でこっちの助けてやれ、と召喚主から指示があったため、急いで来たが間に合わなかったようだ、せめて少しでもダメージを…と一桁しか残っていないHPで、ムーンウ

ルフが牙を突き立てる。



#### 第4ターン

(第1:ライトニングでムーンウルフにダメージ、ムーンウルフは全力防衛)

(第2:【雷精】Bの合図で<sup>エレクトロ・ウイング</sup>〈雷撃の翼〉の準備、ムーンウルフ防衛するも不発)

(第3:〈<sup>エレクトロ・ウイング</sup>雷撃の翼〉発動、しかし吸収され、ムーンウルフにかじられるも反撃で返り討ち、すぐさま別のムーンウルフに噛みつかれる。)

首に牙を突き立てているムーンウルフに対し、【雷精】Cは逆に相手を抱き締める。

それにより、〈雷の衣〉から発生する微弱な継続ダメージを受け、一桁しかなかったHPがゼロになり、ムーンウルフは息絶えた。

そこで【雷精】Cの行動が終わった。

そして瀕死の【雷精】B。

〈肉体向上〉 〈限界突破〉 〈剛腕剛撃〉

ヘッケランが瀕死の【雷精】Bに攻めかかる、その技のコンボは以前、ハイコカトリスにもお見舞いした技だが、今回はそれに加えて、炎の属性が付与された武器だつてある。

その時とは攻撃力も段違いだが:もちろん武器としての金属も違うものにすり替えられてるので土台としての攻撃力も全く違うのだが、そのことにヘッケラン自身まだ気づいていない。

「くらえー! 〈双炎斬撃〉!」

ヘッケランの底上げされた攻撃力をもつてしても、【雷精】のライフ

の全てを刈り取ることはできなかつたようだ、ダメージ減少があるとは言っても、それなりにダメージは通っている、あと一押しと言った感じで、フラフラの状態の雷精に、追撃の一手が迫る。

〈狙い撃ち〉 〈強撃射〉 〈穿ち撃ち〉！

矢の部分に今度は〈祝福<sup>ブレス</sup>〉ではなく、その一段上の魔法〈武器神聖化<sup>ホーリーウエポン</sup>〉が付与された一射が、【雷精】 Bに迫る。

神聖化で、攻撃力が上乘せされ、武技の〈強撃射〉に拠るダメージ向上。

さらには〈穿ち撃ち〉での、追加ダメージ。

残りわずかだったHPもそこで命の火は消えた。

「やったあ〜…でもとっておきのミスリルの矢、3本も使っちゃったよお…大散財…」

この異空間に来てから初めて最後のトドメとなった攻撃を繰り出したことに喜ぶイミーナ。

しかし、その為の犠牲は決して小さくはなかった。

「いいじゃねえか！…これで、イミーナも勝ち星が1だな！」

と、喜ぶメンバー達の前にゴトリと、重々しい音が聞こえた。

「なんだ？」

とヘツケランがそちらを伺うと、丸くて…小さくパチパチと火花のようなものが模様として浮かび、一瞬として同じ模様で居てくれな、見えて飽きない宝珠のようなモノがそこにあった。

エルフ&ブレインチームサイド

「向こうは片付いたみたいです、今度はこちらを何とかしましょうー！」  
目の前に注意を払いながら、【雷精】 Bにも意識を向けていたセピアが目の前の【雷精】 Aに集中するような言葉を全員に投げかける。



「ああ、こつちもずいぶんといイ感じになつて来たぜ？」

『負の効果』によつて、当初の動きがすでに見られず、精彩の欠いた動きしかできない【雷精】Aの姿がそこにあつた。

動きは緩慢になつて来ているが、純粋なステータスとしての『力』や『魔力』などに衰えはない。

ただ攻撃力、魔法攻撃力などに影響しているだけで、素の数字以下にはならないため、油断はできないことをまだブレインは知らない。

もちろん行使できる位階魔法も、使用制限なども起こるわけではないのだ。

レベルも格上の相手なのだから油断していい相手ではない。

「とりあえず、相手が弱っている間に決着を付けましょう！」

シャードストーンショット  
〈土石散弾〉！

「それは同意見ね！『コメットインパクト 2nd』！」

「シュート！」

「くらえ！ 秘剣！もがりぶえ虎落笛！」

スパンと、鮮やかな軌跡を描き、首が華麗に宙空を舞う、そして、ゴロリと転がった所を、すかさずセピアが目隠し&触覚も縛り上げ、遠くに蹴り飛ばす。

「さて、そいじや…こいつのトドメは後回しにして…近づいてきているアイツ…だな」

ユグドラシル製の鎧の為、相手に触れても継続ダメージの入ってこないディーネが安全圏外まで、首のない【雷精】を足で蹴りつつ移動させる、動きはあるので首は無くてもまだ生きてはいるようだ、人の形をしているとは言つても、そういう見た目をしているだけ、実体はないため、首がなくても生命維持に支障はないのだろう。」

と、そこでチームフォーサイトと合流できたブレイン&エルフチームの8名で、最後の【雷精】との決戦が、ついに火蓋を切ることになる。

## 第45話 みんなで特訓、レベリング！ 「雷精」後編

ベルはフレイラに指示を出し、召喚した天使を3体同時に援護に向かわせるよう命令させる。

その直後、守護天使は3体共、「雷精」の方へと向かっていった。（セピアのやつ、相当ムリしているな、第3位階相当は、本来セピアじゃ使えない領域の位階魔法…それを無理やり引き上げようとすれば相応の魔力を余分に使うことになる。今では3割残ってるか、3割切ってるか…ってところだろうな…、イヤ…実際、第2位階の彗星も一発、シールドウオール盾壁も使っていたし、確実に3割残っては居ない…25〜26%ってところか？）

3体の天使が「雷精」より少し離れた地点、8人のメンバー達の後方で、3体それぞれが魔法の準備に入った。

中央の天使は<sup>リィンフォース・アーマー</sup>「強 化」を唱える。すると、中央の天使にその効果は及び、光が体を包んで攻撃に対しての耐性が上がる。

防御の魔法が物理耐性を強化すると、両翼の天使が<sup>ピラー・オブ・スタラグマイト</sup>「石 筈 の 柱」を8人の斜め前方、右と左にそれぞれ発動させる。それに呼応し、大地から石筈の柱が左右に1本ずつ、雄々しくそびえ立つ。

それは人間の背丈の倍は高く、頑丈そうに突き立っている。

「?。」

意味が分からないのは「雷精」の方だ。

今のを自分への攻撃用として使うならまだわかる、だが、ただ目の前に出現させるだけでどんな意味があるのか…そこが分からない。

それは指示を出したフレイラも同じだった、しかし、己の創造主に「そうせよ」と言われれば、それに従うのが被造物である自分の存在意義であり、自分を生み出してくれた神であり親でもある主に対する忠

義だ。

自分の疑問点など、後で解決できればいい。

【雷精】は自らの能力により、油断なく宙に浮かび、様子をうかがう。すぐに戦闘に入ってもいいが、無策で雷撃を撃ちだしても、無駄に吸われてしまうだけ。というのは先ほどの戦いで分かってしまったことだ、ならばここは、相手が様子を見てくれている間に少しでも有利な情報を集めるしかない。

そう判断して周囲を見回す。

…何もない。

そう、目の前には扉、扉の裏には土に覆われた区画があり、テーブルと、椅子のような物。

それ以外には、今、目の前に突き出された石筍の柱が2本あるのみ。

そこにどんな狙いがあるのかわからないが、得意の電撃が使えない以上、別の戦い方をするしかない。

幸い、その為の条件は整った、今ならば「アレ」が発動するはずだ。

そう結論を出した【雷精】は、不敵にニヤリと笑い、眼下の8名を視界に収めると、宙に浮かんだまま、大きく手を広げ、手の平を天に向けたままのポーズに入ると身に纏う電流の流れが一段と激しくなっていく。

（あれ…まずいぞ？　もしかしてあのモードに入るつもりか？　アレになられるとアイツらじゃ…ちよつと決め手に欠けるからな…今のうちに天使たちに攻撃を仕掛けさせるとするか…あのモードに入る前に1ターンの「溜め」がユグドラシルでは必要だったはずだからな…。）

「フレイ…無防備な今のうちに天使たちに突撃…いや、一体だけ一応残して、2体で【雷精】に攻撃を仕掛ける様、指示を出してくれ…。」

「ハイ…承知いたしました、マスター」

了承の声と同時に、エンジェル・ガーディアン・アリス守護の地天使2体が【雷精】に飛来、飛び掛かる。

その天使の持つ剣が届く寸前、眩いばかりの電光が迸ったかと思うと、全員の耳に届く程、通りのいい音声が耳に届いた。

〈超力！ 招来!!〉

周囲一帯が、〈ワイド範囲拡大化〉でも使った〈フラッシュ閃光〉に包まれたかのような…全てが真っ白の世界に包まれたその直後。

ようやくその光も衰え始め、何事もなく目が景色を映し出した頃、エンジェル・ガーディアン・アリス守護の地天使2体が光の粒子となって消えて行く瞬間を見てしまふことになる。

「な…なにが…？」

それは誰が発した言葉だろうか…誰ともなしにその言葉が漏れて出た時、一人、ベルだけが「やはりそう出たか…」と理解できていた。

眩く白い景色の中から現れたのは、先ほどまでの【雷精】とは少し見た目が違っていた。

一番目に付く顔の部分には、額から伸びていた左右の蛾の触覚のようなものだけではなく、額から新たに一本、ツノのように触覚が真ん中から新しく伸びている。

そして視線を少し下に降ろせば、肩の部分から胸にかけて、肥大した筋肉のような…

体色そっくりに染めたブレストプレートのような…

厚くなった胸板と思えばそう見えなくもないが、違う見方をすれば“チェスト胸部位防具”のようにも見えるナニかが胸部に変化を起こしていた。

そんな見た目に変化した【雷精】に、ベル以外の者はある種の畏怖のような感覚を覚え始めていた。

それは通称『超力モード』とプレイヤー達に呼称され、パッチを当てられるまでは誰もが恐れたスキル。

『超力モード』状態となった【雷精】は、36LVという序盤の敵だと言ふのに、その状態になれば、かなり上級の手段を取らなければ全<sup>カウンター</sup>て〈返し〉で、同じ威力のスキル効果、魔法、通常攻撃に至るまで攻撃を仕掛けた者の身に返されてしまう。

返されるだけならまだいいが、返す方の【雷精】自身は全くノーダメージで、相手に〈返し〉で応戦をし、自分の番になれば自分からも攻撃を仕掛け、〈逆転チェスト〉というスキルを使つて、あらゆる事象を解決済みのものまで含めて反転させる。

ひどい時は攻撃の〈返し〉ではなく、今まで負つたダメージを「時を巻き戻す」ように〈逆転チェスト〉で、（攻撃されたという事実を、その時間前まで巻き戻すという名目で）回復してしまう事もあった。

当初は、いつでも使用できた壊れ技だったのだが、プレイヤー達の悲鳴が、運営に津波の様に押し寄せ、「バランスブレイカーだ!」とか「ボスでもないのに倒せないってどういうことだ!」などの声が後を絶たず、別にワールドボスでも何でもない、ただの雑魚的扱いだったため、仕方なくパッチが当てられることになり、『戦闘時、戦闘可能状態が最後の一体となった時が条件、効果時間は5ターン、その間は自主的な攻撃はせず、時間の巻き戻し設定は削除。』と言う風に変更されてからは、最初程の非難は寄せられなくなったという背景がある。

（落ち着いてる場合じゃない、みんなに知らせなきや、何も知らずに攻撃でも仕掛けたら全滅するぞ!）

ベルは急いで〈伝言〉<sup>メッセージ</sup>の魔法をティーンに飛ばす。

『ティーンか?かなりマズイ状態だ、そいつに攻撃するのはしばらく止めだ! レッサー・アースエレメンタルと、<sup>エンジェル・ガードイアン・アース</sup>守護の地天使がまだ一体ずつ居る、そいつらで、時間を稼いでる間、ヤツに近づかないよう他の面々にも通達してくれ、それで、安全圏にまで下がって、待

機だ！』

「はい、ベルさん、ではそのようにみんなには伝えておきます。」

しばらく見て居ると、下がって安全圏にまで移動したのは7人。

まだ一人、【雷精】のすぐ近くで残っている者がいる。

遠目でもわかる、あの刀…つまりブレインだ。

『申し訳ありません、ベルさん…事情は説明したのですが、説得に失敗しました。ブレインさんは残って戦うそうです。』

〈伝言〉<sup>メッセージ</sup>を送ってきたのは、エルフたちの中で、唯一その魔法を覚えていたルチルだ。

「はあ…彼の事だ、どういう事情で残ることにしたのかは、ある程度予想は出来るが…、なんでそうなった？」

『ハイ、〈返し〉<sup>カウンター</sup>で、どんな技も攻撃も、魔法でさえ跳ね返すので、危ない存在になりました、効果が切れるまでは離れた方が得策です。と言ったのですが…。』

「どうせ彼のことだ、『そんなにすごい相手になったのなら、なおさら真っ向から挑む価値はある！』とでも言い出したんだろ？」

『申し訳ありません、まさにその通りです…、『精霊と天使がやられるまでは大人しく見ているさ、俺一人になったら、思う存分、自分の全てを持って挑ませてもらおう』…だそうですね…。』

「ああ、わかった、とりあえず、好きにさせよう…彼なら、別に致命的な魔法を使えるわけでもないから返されて困る展開にまではならないだろう…：恐らくは『負のペナルティ』までは〈返し〉<sup>カウンター</sup>できないだろうしな…イヤ、どうだろうな…こっちの世界に来てそこからへんは変質している可能性はあるか…、とりあえず、2〜3ターンなら多分、持ちこたえられるだろう。」

『わかりました、それではしばらくは様子を見守るということで、周知

させるようにします。』

通信が切れる感覚があり、目を前に向けると、ちょうど残った精霊が倒されるところであった。

「よお…調子はどうか？ 随分と楽しそうにしてるじゃないか？ オレも混ぜてくれないか？」

ゆつくりと【雷精】へと歩みを進めるブレイン。

【雷精】に変化はない、言語を使えるわけではないので返事を期待しての声掛けではないのだろうか…【雷精】はそれを「挑発」と受け取った。

ブレインの方を見た【雷精】は、ブレインの持つ武器を真似る。

腕を伸ばすと、雷の電流で構成された刃が手刀の先から、ブレインの刀と同じ長さだけ伸び、形状も同じで固定される。

「ぴゅゅうう〜♪ ずいぶん器用なまねができるんだな、嬉しいよ、存分に戦えそうだっていうのは…な、精々オレをがっかりさせないでくれよ？」

自分の武器を真似た形状で挑もうとする目の前の相手が見せた芸当に口笛を以って感心したような言葉を返した後、ゆつくりとブレインは腰を落とす。

すると、目の前の【雷精】も同じポーズで腰を落とす。

正面から返り討とうとしているのが一目でわかったブレインが〈領域〉を展開、さらに〈縮地〉で距離を詰め…ようとした瞬間、目の前の雷精も同じ速度で一気に距離を詰め、ブレインの〈瞬間〉に対抗するように稲妻の剣で交差…「キン！」という軽快な音を残し、そのま



ま膠着状態に入る。

「いいねえ……この程度について来られないようじゃ挑んだ甲斐がないってもんだよなあ？」

そうブレインが軽口をたたいてる間も、剣と刀の応酬は止まらない。

何度も、何度も同じ剣の速度、同じ威力で打ち返され、ブレインも相手の剣を迎え撃つように刀で、既に何合目だか数えきれない剣閃で打ち合っている。

〈神速二段〉！

ブレインが得意の技を繰り出すと、それに応じて、【雷精】も、それを同じ動きで返す。

自分の技をそのまま初見で返されるという対応をされ、その剣速に負けない勢いでブレインがその剣を刀で止める。

さらにブレインが攻撃に転じた刀も、同様に【雷精】の〈返し〉カウンターで対応されるも、それが直撃していないのはブレインの技量の高さ故だろう。

お互いに疾風のような速度での剣と刀との応酬を繰り返し、次第にブレインが押され始める、疲労するか、しないかの種族的な問題だ。

「はあ……ふう……、さすがに……しんどくなってきたな、だが……何となく突破口が見えて来たよ……次で終わらせる！」

一度、攻撃を休め、刀を鞘に戻し、腰を落とす。

すると【雷精】も、その隙に攻撃しようとはせず、ブレインと同じ行動を取る。

（やはりな……コイツは、さっきの叫びの効果……武技だかなんだかわからないが……それが切れるまでは……どうやらこちらの攻撃に対応する

ことしか出来ないらしい…。)

もうさすがに精神力が底を付きそうな感覚を覚えているブレインは最後の賭けに出る。

今からしようとするのに対して、最後まで対応されてしまったら、もう次は無い。恐らくは逃げるか…ジリ貧で、同様の攻防を繰り返しながら効果時間が切れるまで待つしか道はないだろう。

その最後の賭けに出る為に精神力を振り絞る。

初見の武技でも対応されてしまうのは体験済みなので、それは間違いないだろう。

(こっちの〈瞬閃〉にも〈縮地〉にも対応できたのは、きつとこいつの難度との差で、敏捷性に関きがあるせいだろう…あの武技ありきのお陰で同等の素早さで応じることが出来た…と、そんな単純な理由であればいいんだがな…。)

「問題は…、まあ、それはこの賭けがどうなるか次第で答えは出るさ…。」

気持ち切り替え、腰を落とした状態で、鞘に納めた刀に全ての意識を向ける。

まだ〈領域〉の効果は続いている。

だが、相手に〈領域〉が出来ているような素振りはありません。見えない…真似できるのは【雷精】自身に向けられた行動、攻撃だけなのだろう。

ならば付け入る隙はある！

そう思い、わずかな可能性に賭けるのみ！ …そう決心する。

刀の柄に手をかけ、握りしめる。

数千、数万で済むかどうかわからない程に振り続けたこの愛刀、握りの部分がすり減り、自分の握り方のクセ通りに固まった柄に力を込める。

「くらえ！ 〈神閃〉！ 秘剣！ 虎落笛もがりぶえ」

ひとたび鞘から抜き放せば目で追うことは不可能な剣閃。それのさらに上を行く神速の一刀。

更にそれを〈領域〉の効果により命中精度を極限まで引き上げたブ

レイン独自の武技。

しかし、目の前の【雷精】は予想通り、狼狽する様子も見せず同じ動作をブレインに繰り返す。

(そうだろうな…そう来るだろうと思って居たさ。)

【雷精】の稲妻の剣がブレインと同じ速度で、ブレインと同じ剣の軌跡を描き、頸椎に切りかかってくる。

そこで、ブレインは、攻撃途中のその僅かな…刹那とも言えるタイミングで、自分に強化をかけ、神速の一刀を更に加速させる。

〈能力向上〉!!

すでにブレインの攻撃はトレースされ、その動きを反射させることを決定し終えている【雷精】には、もうそれを更に真似るだけの容量は残されていない。

戦う者同士の実力が拮抗し、全く差がない場合、いつまで経っても決着がつかないという事例はある。

しかし、そんな中でもどちらかにほんの僅かな差、もしくはズレが生じた場合、あっさりと勝敗が付いてしまうことはよくあることなのだ。

それは、心の迷いだったり、偶発的な不可抗力など要因は多岐に渡る。

踏み込んだ際の小石を踏んだ程度のバランスのずれ…

疲労による判断力の低下や、集中力の乱れ、剣の振りの乱れ。

それらのあらゆる事象が生死を分けることは大いにある。

だが、目の前の【雷精】にそれを期待するだけ無駄だろう。

ならば、自分に変化を起こすしかない。

ブレインはそう結論付けて、【雷精】に向けた刀に乗せたのは最後の勝機、残った力を絞り出し、振りぬいた。

【雷精】の剣が首に届く寸前、刀の速度が急に伸び、ほんの僅かの差で

ブレインの一閃が【雷精】の首を跳ねる。

〈能力向上〉の発動により、瞬間的に引き上げられた能力が、ブレインの刀の振りの速度、技量、力、体の捻り：攻撃に必要な要素の全てが急速に：瞬間で引き上げられ、紙一重の差でブレインの刀の方が目標を先に斬りつけた。

さらにブレインは、相手の首を跳ねた瞬間に、己の上体を反らし、かろうじて、【雷精】の剣が振りぬこうとした軌道から首を外し、皮一枚切られる程度で済ませ：「パチン。」と刀を鞘に戻す。

それを見ていたベル、フレイラも、他のフォーサイトのメンバー達もエルフの三人も集まってくる。

「やったなー！こいつ！まさか、一人で片づけちゃうなんてよ…どこまで強いんだよ、お前さん。」

ヘッケランが走って自分の事の様に勝利を祝う言葉をかけ、ブレインの肩を叩く。

「すごいな…この状態になってるコイツを、一人で片づけられるなんて…もう少し待てばこのモードも切れそうな時間だったんだが、その前に倒してしまったか」

（ユグドラシル時代、同レベル帯でも…下手をしたら10LV上のパーティでも「超力モード」は手こずる形態だったのに…）

「これでなんで雷精？ 雷撃を使ってる時よりずっと今の方が厄介そうだった。」

アルシエがポツリと素朴な疑問を、何気なく口から零した。

自分もそれには同意だが、あのやたら厄介な種を生み出していた運営だ、これも何かのモデル、似たようなテーマでもあって、それを題材にして作られたのかもしれない…そう思いながらも

「まあ、みんな無事でよかったよ、あまり電気ダメージを受けた者は居なかったみたいだね。」

「ええ、おかげさまでね…でも、妙ね、私、一体倒してるはずなのになんの変化も感じられないんだけど…」

（確か弓で倒してたと思うからレンジャーだよな…そんなに高い経験点、必要なかったはずだが…、あ…そういうえば首を跳ねても死んでないやつが一体…、…あれ？）

不思議に思い、足元に転がっている首を見下ろす…すると首は何かを言おうとしていた…

（まずい、そういうえば首を跳ねても即座に死ぬタイプじゃなかった!!）

防御系の魔法を使おうにも、【雷精】の首は今すぐにも何かを発動させそうな勢いだ。なんらかの攻撃魔法？それともスキル？が発動するのは明らかだが、一発くらい直撃を覚悟するしかないか？と思いつながら周囲に声をかける。

「みんな！今すぐに防御態勢を…」

ベルが言い終わらぬ内に首だけとなった雷精が自分を中心に、周囲一帯を範囲にする最後の攻撃スキルを発動させた。

〈轟 迅 雷〉!!

全員が範囲に収まるまで待っていたのか！と思うも…その最後のあがきは発生することなく…、いや、発生はしたが、誰にも影響を及ぼすことはなかった。

円形のドーム状に展開された光の中で、轟音が響き渡り、全周囲から膨大な雷が乱れ飛んだ景色は見たのだが…誰にもダメージを与えないことなく終わった。

（確かに、発動はしていた…だが、どうしてだ？なんで誰にも効果がなかったんだ？）

ベルが不思議がつている間に、行動を開始していたブレインが自らの刀を【雷精】の頭に突き立てる。

そこで、体の方はさらにヘツケランが〈猛火噴炎〉を発動させ、【雷精】に自分の双剣を交差させた際の魔力を叩きつけ、派手に燃え上がらせていた。

「なんだったんだ？今は…、何か起こったみたいだが…何も…なかったよな？」

「ええ、不思議と…ダメージも何もないようですね…何が起きたのでしょうか？」

「それって、何か…もしかして、これの影響かな？」

そう言ってイミーナが出したのは、一つの宝珠。

その珠の模様は雷模様で、一瞬でも同じ模様のままではなく、めまぐるしく…火花が飛び散るような、雷が荒れ狂っているような印象のモノで、見ているだけで何かの効果は宿っているように思えた。

「それって、もしかして【雷精】が落とした物かい？」

手に取って、不思議そうに見つめるベル。

同時に〈道 具 鑑 定〉アブレイサル・マジック・アイテムを唱えた。

「いや…これは違うようだ、確かに雷撃系の属性を宿したデータクリスタルだが…魔法の防御に関して発動するタイプじゃない」

「そう…それは残念ね…、…で？どんな効果？」

イミーナが、どんな魔力が宿っているのか気になる様子で、効果について聞いてきたので、簡単に説明をする。

「チャージ用の…キミらの言葉を借りると「宝珠」ってことになるのかな？ 雷撃属性の魔力を戦闘開始時に100%にチャージしてくれるものだね、その上で敵から吸収した分も無駄にせずに余剰分として別枠でチャージしてくれる効果の方はすでに、アルシエちゃんの鎧に

は備わってるから…、コレの利点を挙げるとすれば、魔法詠唱者マジックキャスターじやなく、雷撃呪文を使えなくても、あの装備に電力が勝手に蓄積されるから…、その能力を使いこなせるようになる…って感じかな？ 戦闘でチャージした分を使い切っても、次の戦闘時には放っておいても元の100%に戻る…という仕組みになる。」

「え？ じゃ、それ付ければ私でも装備して使いこなしたりとか…出来るかな？」

花が咲くようなというのはこのことか？というような笑顔で何かを期待しているイミーナがそう言って迫ってきた。

「ああ、いや、不可能ではないと思うけど…、その鎧を装備したら、イミーナさんは「盗賊系」のクラスが無駄になるよ？きつと使えなくなると思うし…そうになると、盗賊スキルの方だって…」

とりあえず、今アルシエが着ている鎧は、革鎧どころの騒ぎではない、装備したら間違いない盗賊系クラスは意味がなくなってしまうだろう。

「そんなのどうってことないって！ 畏外しとか、鍵開けとか、そういう時にだけ、この鎧を外しちやえばいいんでしょ？ アンダーアーマーは有効だし、素っぱだかになるわけでもないんだし？」

食い気味に問い詰めてくるイミーナだが…本当にそれでいいのだろうか？

最初はかなりイヤがっていたはずなんだが…それに、今は装着してる人って、アルシエちゃんだしなあ…

「アルシエちゃん…どうする？ 彼女はこう言ってるけど…？」

「うん、いいと思う、その話し合いはもう済んでるし、貸すだけならいいって言うことでイミーナには納得してもらってる」

「そ…そうか…、それじゃ…これ」

そう言って、ベルはアルシエに鎧を装備させる際、後ろに弾き飛ばされた…最初に装備していた服やらなにやらを手渡す。

さすがにその衣類はマジックアイテムではないため、自動的に装着できる設定は入っていない、必然的に、着替えの手間は発生するのだ。

「あ、じゃくアルシエ、扉の後ろに行こう？そつちで着替えようよ！男連中は来ないこと！いいわね！」

「じゃく…行ってくる。」

そう言つて二人はそそくさと着替えをしに行つてしまった。

(そうすると謎は残るな…、あの時、アレが無効化されたのはどういった理由だ?)

そう頭を傾げていると、ルチルが近くに歩いてきて、さっきの珠とは別種の…それでいて、巨大な骨を無理やり不器用に削つて作られたような玉、それは女の子の彼女の手の平にすっぽり収まるようなサイズになっており、中心からは、闇色の…どす黒く紫っぽい光が大きくなったり小さくなったりしているのが透けて見える、まるで脈打っている風にも思えた。

「あの…もしかしたら、これの影響でしょうか？」

「ん??? それは?」

「これは、スケリトル・ドラゴンの竜が一斉に消えた時に、一個だけ落ちて来た物で、とりあえず落ち着いてから聞こうと思つて居たので見せる機会がなかったんです…」

「そうか、それならこれの影響なのかな? これも鑑定してみよう。」

「うん、ビンゴだ…これだね…。」

「そんな凄い物なんですか? それ!」

「うん、これはスケリトル・コアの核石つて名前みたいだね、このクリスタルの効果は、第6位階以下の魔法の無効化、でも回復や、バフなんかの自分の得になる魔法はちゃんと通してくれるらしい。デバフや、攻撃魔法なんかは当たっても効果はゼロ…その代わり第7位階以上のダメージ



とかはダメージ減少とか関係なくそのまんま通っちゃう、って感じだね。」

(こんな便利な物…ユグドラシルでもあったっけ?…Wikiの書き込みにも、当時はこんなの…どこにも書いてなかった気がするんだけど…、まあギルドに顔を出しにくくなってから、そっちの更新は追ってなかったからな…新たに追加されてたのを知らなかっただけかもしれないけど…)

(…でも、こういうのって本来はスキルには影響を及ぼさないとはずなんだけど、アレは、スキルだからMPの消費はしないが、ダメージの計算自体は魔力を消費させることで消費分に応じたダメージ量の増加の効果があつたはず…だから、『魔法』扱いとして処理されたのか?)

(ま…細かいことはいいか、こういう貴重なアイテムはどんな時でも手に入ると嬉しいし、心が躍るよな。)

「いいのを出してくれたね、ルチル、拾っててくれなかったら、大損する所だったぞ?」

彼女の頭を優しくなでてやる、これがあれば、難度の伸び悩んでるロバーデイクさんの成長を促す手助けが出来る可能性も格段に上がったって事だ!

頭の中でそう考え、補助役にディーネでもつけてあげればそう危ない橋でもないだろう。と一人、納得していた。



「さて、まずは簡単な方から片づけてしまおう…クリエイト・グレート・アイテム〈上位道具創造〉」  
通常、クリエイト・アイテム現地の材料を使つての武器、防具などの錬成や、道具作成なら、クリエイト・アイテム〈道具創造〉でも充分に用は足りた。

だが、今回使う材料はユグドラシル由来の材料だと言っても過言ではない、その為〈上位〉でなければ、恐らくは無理だろうという結論

に至ったのだ。

(ユグドラシル由来の武器、防具を最初から創り出すなら、魔法だけじゃなく鍛冶職の補助も必要だろうが…、今回はデータクリスタルを材料にして、アクセサリに仕上げるだけだし…金貨が減るだけで済むだろう。)

これからの展開を軽く考え、魔法を発動させた。

(アクセサリの土台となる金属のレベルが50を超えると、鍛冶職の補助、もしくは鍛冶職を持つ人間でなければ作れないという条件が発生する…だからここはそれより低い20LV金属で充分だろう。スケリトル・ドラゴン  
元々骨の竜のレベルだって、そもそも20にも届いていないんだし…)

「そうなる…指輪とかだと『核石』のサイズ的に…なんだかなあ…つて気分だし…、それならいつそ腕輪だな…イヤ、バックルっていう手もあるか!」

イメージの中で想像、構築させ、形を整えていく。

決して、締め付けがキツくならないように形状としては三日月状の形で抑え、真ん中の部位は、広めの幅にしておいて、そこに骨竜の核石スケリトル・コアがハマる様に確定させる。

金属の見た目としては黄色の風合いにして、黄金にも見えるようにしてみた。

外見としては、どことなくクロワツサンっぽい印象だがこれも一風変わった感じがいいだろうと思いつつ確認すると、球体が丸々収まるには、手首に接触する面が平らすぎる。

半分にカットされてしまったか? どうせなら、その半分にカットされる方の骨竜の核石も、無駄にしないように作成されたらよかつたんだけどな。

…などと内心ぼやいていると…その眩きに反応したように、新たに同じものが作られる。

三日月状としてのバックルとしては、若干太さが細めになり、サイズも小さくなったようだが、その分、節約されて余った方の金属と、残っていた、骨竜の核石の半分がハマ込まれたもう一つの…全く同じ

「バックル」が発生していた。

「あ…これ…やっちゃった?」

と思つて居ると、後ろから声が聞こえてきた。

「うお! なんだ? ベルさんの腰の袋…パンパンだったのに、急に袋がしぼんじまったぞ!」

「そつちのエルフさん達の袋の中もそのようですね…たつぷり入つていたはずが、すっかり空になってます。」

(あつちやく…そこまでのレアリティじゃないにしろ、やっぱりユグドラシル由来の材料だから、ユグドラシルコインが消費されて、作られるってことになるんだな…、覚えておこう。)

ベルは創つたばかりの2つのバンブルを持ち、フォーサイトの方へと合流する。

「すまないね、多分そうなるだろうと思つて居たんだが、このアイテムを魔法で作る際、連動して、集めた金貨が、手数料と言えいいのか? 作成の手間賃? として徴収されてしまったようだ。」

「はあ? なんだよそれ、ずいぶんだよな…せっかく…つて、いいや、これはベルさんが管理してくれて話でこつちがお願いしたんだからな。これ以上言うのは野暮つてもんだ。」

いろいろ言いたいことはあるようだが、諦めたようにヘッケランがそう言ってくれる。

「まあ、キミらだつて質のいい武具などをオーダーメイドで作つてもraithたい時には、それなりの資金を対価に上等な装備をしつらえてもらうんだらう? それと同じと思つて納得してくれると嬉しい」

「はあ…：しようがねえな、そう言われちまうと、こつちも何も言えなくなるな…：『それと同じだ』って言われると『そうか?』って疑問もないこともないが…：」

理屈は解らなくはないが、どこか割り切れない何かを心中に残しているヘツケランに、着替えを終えたイミーナが上機嫌で戻ってくる。「まあ、いいじゃないのよ、こつちだってそれなりのモノ都合してもらって生存率が上がってるっぽいのは事実なんだしさ♪ ある程度は大目に見ようよ、どうせ、この場から外に出たら、持ちだせない代物でしょ? …：その金貨ってさ。」

「おお、おかえり、イミーナ…：って、なんじゃああ、そりやああ、イミーナ、お前…：ええええ??」

「へへ♪ 驚いたつしよ? 私も装備した瞬間、驚いたのよねえ…：まさか、スタイルがこんなに変わるなんてびっくりよ。」

「いや、変わり過ぎだって! それ、ヨロイの形だけってワケじゃ…：ないんだろ? その…：中身の方も…：そうなのか?」

「んん? まあによお、ヘツケラン、そんなに気になるう?」

今まで見たこともない顔をして、どことなく嬉しそうな…：自慢気な表情をしたイミーナが、ヘツケランの顔色を窺っている。

そりや、ヘツケランだって男だ、そういうのに変化したら、気になるのは当然だろう。

そう…：何しろ、ハーフエルフとは言え、エルフの血を引いてるイミーナは良くも悪くも、とにかくスレンダーなのだ、女性らしい細い体つきは、とにかくそれに特化しており、余計な脂肪分など、森林生活での身のこなしの邪魔になる、という意味でも、エルフとしての環境的にも、種族的にも、そう変わっていった経緯もあつたのだろうか…：。

それがマジックアイテム、その装備である、『ペロン鎧』の効果によるものか…：或いは製作者の想い、こだわりそのものが異世界に於いて、より見た目を華やかに具現化させるコトこそが『正義!』だと結論付けたのか…：。

出る所はちゃんと出て、引つ込むべき部位はキチンと引つ込んでい  
る、誰がどう見ても女性的な体形に変化していた。

あまりの変貌ぶりに、今までの話の内容が吹き飛んでしまったヘツ  
ケラン、そして、「男ってどうしてそう…」という目でその様子を距離  
を置いて見ているエルフの3人。

「まあ、これの下がどうなっているかは、依頼をこなして帰って来てか  
ら確かめてみたらどう？ それまでは秘密にしておいた方がヘツケ  
ランも、色々、夢が膨らんでいいでしょ？」

「もお…イミーナ、その辺にした方がいい…そのやり取り、あまりいい  
目で見てない人もいる…。」

「んん、しょうがないわね、この辺にしときましょ、みなさん、お騒  
がせしましたあゝ。」

「よかったですね、ヘツケラン、予想外の展開で…こうなるとは思っ  
てなかったのでは？」

「そりやそうだろう、だれが素材のスタイルまで変わっちゃうと思う  
よおー！」

「せいぜい、可愛がつてあげて下さい、装備を外したら元に戻った、な  
んて事が無いように祈らせてもらいますから。」

「…ロバー、お前、絶対にそれを望んでるだろ？」

「それはそうとき、ベルさん、ちょっと聞きたいことがあるんだけど  
さ、この鎧って変じゃない？」

「ん？ どうしました？ 変…とは？」

イミーナが装備の点については文句はないようであるが…、他の人  
に説明しても理解してくれないだろうと思っ居るのか、他の誰か  
ではなく、ベルの方に話しかけてきた。

「珍しいですね、相談事をチームメイトじゃなく、私の方に声をかけて来るなんて…」

「いや、この鎧つてさ、私が着てから、ずっとなんかの呪文みたいの、唱えてるのよね…でも、全く意味が解らなくって…頭に直接響いてるからなのか、まったく異界の言語でも聞かされてる気分なのよ。アルシエの時はそんなこと起きなかったって言ってたし、私個人に対しての評価なのかどうか？ってコトが気になっちゃって…」

「へえ…それはそれは…」

(まさかペロロンさん、エルフとか妖精種限定で、変な音声データでも仕込んでたんですか…やめてくださいよ、もう…)

「えええ…と、ちなみに聞きますけど、その流れてくる声って、なるべく忠実に言葉にして発声することはできますか？」

「ええ…できるとおもうけど…なんの言葉の羅列なんだか、解ったらちゃんと教えてね？」

イミーナも正直、自分に何を言われているのか気になっているのだから、何かの注意喚起か、警告か、それとも良い意味での祝福とかなのか…、どんな意味が含まれてる言葉なのかわからないと、どうにも気になるらしかった。

「じゃ、言うね？」

と、気を引き締めるような表情を見せるイミーナに、自然とベルの方も少し緊張が走る。

「お願いします。」

「ひんぬくばんざい、ろりっこばんざい、てんねんそざいはほごたいしよう、すれんだーもきよにゆくもびば、まんせく、おさないからだもまじさいこう。」

がつくりと、膝から崩れ落ちた…。

(なんて音声を仕込んでるんですか…ってことは、間違いなく女性専用装備ですよ、男性が着ようとしたら、拒否されるだけならまだしも、防具の内側、肌に接触してる面に直接、電撃でも流れるようになってしてないですよ?)

「ど…どうしたの? やっぱ、何か、悪い意味でのお告げ? 的な言葉??」

(いけない…なんとか平静を装わなければ…)

「いや、そういう意味じゃないですよ、ただ、こちらも相当心の準備をして聞こうとしていたものでね…肩透かしを食らったと言うか…そこまで警戒することは無いです、あまりの緊張感の無さに脱力してしまった、みたいなものだから、気にしないでください。」

(こんな言い訳で通じるか?…まあ、いざとなったらペロロンさんの言葉を自分流に直して、翻訳して伝えるしかないな…これ。)

「そう? それならいいんだけど…結局、なんて言ってたの?」

「え?…あ、ああ…あの、実は、ですね…『あの少女もそなたも我の所有者として認めよう、女性はこの世の何よりも大切な宝である。我の力でそなたらを護ることをここに誓おう。』みたいな意味の言葉をずっと繰り返してるんじゃないですかね。」

(単に生身の女性に着てもらって嬉しさ大爆発して…ってことを妄想して、その音声データ仕込んでたとしたら、何てことに労力割いてんだ! ってツツコンでやりたい気分だよ、録音データを装備にセットするのって課金が必要なんだぞ!)

「あ、でもいつまでもその言葉が脳内で響いてると、気が散っちゃいますよね、少し止められないかどうか、試させてください、アーマーの肩部分に触れてもいいですか?」

「あ、ああ、どうぞ?」

許可が出たので、そつと『ペロロン鎧』の肩当ての場所に手を当てて、意識を集中させる。

そして、その鎧に直接、言葉を叩きつけるつもりで、声には出さず、念じるような要領で言いたいことをぶつけてやる。

「いい加減にしろ！ その口、今すぐ閉じないと彼女らから引き離して、永久にアイテム倉庫にぶち込んで二度と陽の目をみせねえからな！ エロゲマニアが！」

「あ…声が収まったよ、わざわざ悪かったね、ありがとう、このお礼は、今度何かで返すからね」

「ああ、そんなこと気にしないでいいですよ。こつちもその装備を渡した手前、心苦しかった部分はあったので…。」

「そう言わずにさ…これでも気にしてるんだよ？ 今までずっと偏見の目で見えてさ、事故の所為でそんな姿になったんだって最初から知ってたら、あんな冷たい対応しなかったのにな…って、ね。だからさ、せめて罪滅ぼしくらいはさせてよ。」

「そうですね？ なら、何かで困ったことがあったら、お願いします。」  
「そうだね、でもアンタが困る状況で、私が助ける場面ってどんな状況だろうね、想像がつかないよ。」

「それはそうかもしれないませんが、そろそろ本題に移りましょう、実はイミーナさんがここに来る前、アイテムを新しく創ったんですよ。それの効果がどんな風に反映されてるか鑑定しようとしてたところでしてね。」

「え？ そうなの？ すごいじゃん！ どんな装備？ 武器？ 防具？」  
「いえ、ただのアクセサリですが、それなりにすごい効果が籠っていますよ？」

「へえ…、それが、今その手に持つてるモノ？ それってなに？ 手にはめる物？」



「そうですね、腕輪みたいな物で、バングルって言うんですが…、宝珠を埋めようとした時に丁度、半分に分れたみたいで…2つ出来ちゃったんですよ、なので、どんな効果に納まったのか、確かめようとしてたんです。」

「じゃ、早く確認した方がいいんじゃない？ 私たちのことは後回しでいいからさ。」

「申し訳ないですが、そうさせてもらいます、これの効果がうまくそのままこのバックルに移っていたら、最初にコレを貸してあげたいのはロバーデイクさんですからね、うまく行けばかなりレベル…じゃない、難度アップが期待できますよ？」

「え？…私…ですか？」

いきなり話を振られて素っ頓狂な対応になる神官オヤジ、…って言ってもリアルな自分と比べたら一回りも変わらない、少し上のお兄さん、そんな年齢差でしかないのだが…。

「ええ、これは魔法に対する防御が並外れているモノだからね…、とまあ、くだらない話はひとまずコッチに置いて、鑑定の方に移るとしましょう。」

(ちやんとうまく創れているかどうか確認しないと…。)

二つのバングルを手の平に乗せ、再度アブレイザル・マジック・アイテム〈道具鑑定〉と、念のためデテクト・エンチャントに、〈付与魔法探知〉も同時に発動させた。

ああ…二つになったのはそういう…でも、それも当然か…これがそのまま2個になったら、こっちの世界の魔法合戦じゃ、無敵状態だろうからな、そうなるのも頷けるか…。

「どうしたんです？ 何かおかしなことでも？」

話を向けられた本人からすれば、アイテムの事もそうだが、近い内、自分の身に降りかかる可能性の高い話題に繋がるのだ、気にならない方がおかしいと言えるだろう。

「ええ、この2つのバングルなんだけどね、通常は二つとも同じ人間が左右の手に、一つずつ、手首に装着する物なんだけどね、別々の人間が片手に一個ずつ…って使い方もできる、でもそうすると、効力が半

分になるというデメリットのオマケ付きだ。」

「半分？」

意味が分からないようだ、もう少しかみ砕いて説明する必要がある。

「この腕輪のような物はね、2つ装備していると第6位階までのあらゆる魔法を無効化させることが出来る上、自分を助ける…、まあ強化魔法だとか回復魔法、そう言ったのは問題なく受け入れてくれるという優れモノだ。」

「それは…優れモノなんていう範疇には収まらないと思いますよ？それどころか伝説級と呼んでもおかしくはない…それほどの物でしょう！」

（ウチらプレイヤーからしたら、微妙アイテムなだけ…第7位階なんて、割とすぐ習得できちゃうし、それ以下しか使えないプレイヤーなんて初心者とか新規参入組くらいのもだったしな…。）

「まあ、それはその通りかもしれませんが、でも先ほど、話したように、この腕輪のような物、これを片手ずつに分けて、2人が装備した場合、効果が半分になる…つまり第3位階までの魔法を無効化するくらいしか出来なくなる。」

「おいおい、第3位階って、それでも充分すぎるじゃねえか！」

「そうかい？ アルシエちゃんの元師匠さんは、第6位階まで使える人だと聞く、その人と対抗できるか、それとも、手も足も出せずに完敗してしまうか…それは大きい差だとボクは思うけどね…。」

「それは…そうだろうけどよ…。」

（まだ納得していないみたいだな、ここらでもう一回、引き締めた方がいいかもしれない。）

「いいかい？ 今言った第6位階って水準は、今度、ボ…キミらが行く遺跡探索をする場…あの中まで行けば、お遊び程度の位階でしかない。この腕輪を持ってても、良いところ通じるのは第2階層の途中まで…そこから現れる階層の中にいるそれぞれの領域を護る領域守護者、さらにもつと奥へと行けば最後の番人、次の階層への侵入を妨害

しに来る『階層守護者』には歯が立たない、軽く第8、第9つて位階の魔法だつて使ってくる。…その時点で、こんなアクセサリの効果は、気休め程度ですらなくなってしまうんだ。」

そこまで言つて、ベルが顔を真剣なものにして、言い放った。

「あの場所は…いや、あの場所自体が常軌を逸している…ある意味異世界だと言つていい、実力をつけていて、つけ過ぎと言ふことは無い、関係者の許しも得ずに侵入などして、金品など持ち去ろうなんて考えたら、間違いなくろくでもない未来しか待つていない場所だ。」

その場の空気が凍り付く、さすがに言い過ぎたか？とベルが少し冷静になった頭で、もう少しハードルを下げるか？と思ひ始めた時…。

「わかった、もう、お気楽な態度で臨める場所だなんて認識は捨てる、それに…欲はかかない…、目の前の宝より、命が優先、生きて帰つてこそ、次もある、そう思うようにする。」

アルシエが、他の面々も言えないようなことを代表して言つてのける。

それも、ベルの言う事が真実味を帯びていたためもあるし、今となつてはベルと言う人物はアルシエにとつて恩人だし、妹にとつても同じだ、接してみても信頼できるということは肌で感じているからだ。

しかもベルという存在が、自分たちを遥かに凌駕する存在だという認識を持つている中で、そのベルが「気を引き締めないと命に係わる」とまで言い切る場所。

正直に言う…そんな場所に行きたいとは思わないが、自分の最後の冒険だ。

ワーカーとは言え、一度引き受けた依頼だ、それなら遺跡で身分不相応な財宝を持つて帰らなくても、帰った時に後金がある。それなら、財宝を漁つて命を落とすより、生きて帰った方が何倍もいい。

貴族を剥奪され家も捨て、世捨て人同然でただの村人になった自分。

そんな自分にとって、最後の思い出となるだろう、チームとしての冒険、それをこなしてから、未来に歩みを進めたい、そう思うアルシエの心にもう迷いはなかった。

「絶対に生きて帰る！」

それは改めてチーム、フォーサイト全員の共通認識になった。



「やってしまった……」

只今、ベルは反省をしている真つ最中だ。

いくら位階魔法に対する認識が自分とずれていたからと言って、あれは言い過ぎだったような気がしてきたため、「セピアが一番MPが底を付きそうだろうし、ブレインも精神力がギリギリだろう？ そろそろ休みを入れよう。」

と、無理やりな理由を付けて、自分は「少し休憩をしてくる」と言つて、ついさつきブレインのチャーカーを作る際に、拠点作成のアイテムで立ち寄った場所まで移動して来ていた。

もちろん、ベルはその小屋の中である。

当然、自分一人だ。

「でもな……あの発言を聞いてると、どうしてもナザリツクを侮って見られている気がして、正直イイ気分じゃなかったんだよな……だからついつい言葉が荒い感じになってしまったが……、いけないよな、その場の勢いであそこまで不安をおおるつもりじゃなかったのに……、本当にモモンガさんの精神の鎮静化って新しい特徴がうらやましいよ……。」

微妙に自己嫌悪に陥っている至高の一人、ベルリバーが、出口の見えない迷路にはまり込んでいた。

そこに、外のドアからノックの音が聞こえる。

「誰だい？」と返事をする。「私です……マスター。」と即座に返答。

「そうか…」と短く返事をして扉を開ける、この拠点作成系のアイテムは、こつちの世界に来てから、展開させた者、もしくは創り出した者自身がドアを開けないと、中にも入れないし、中に入ったら、その人が開けてやらないと、閉じ込められてしまうようになっていたからだ。

「やっぱりキミだけのようだね、フレイ、安心したよ。」

「はい、きつとお一人になりたいのだと承知はしていましたが、かと言って、御身を放っておくなど我が身にそのような無礼極まる行い、出来ようはずがございません！ お邪魔にはなりませんから、どうぞ私をおそばにおいてくださいませ。」

「ふ…そうだな、そのように創ったのも他でもない自分自身なのだかな、断る理由は無い、好きにしたらいい。」

自嘲気味にベルが笑みを浮かべた瞬間、フレイラがホツとしたような表情を浮かべる。

「安心しました…先ほどまでなにやら浮かないご様子でしたし…何か私たちが御身の気に障るようなコトでもしでかしてしまっただかと、皆も心配しております。」

その言葉に一瞬「？」マークが浮かび、確かめたくなったベルがフレイラに問いかけた

「…？ みんなって」

「もちろん、アルシエ様、セピア様、ルチル様、ディーネ様でございます。」

他にはいないのかよ！ …と突っ込みたくなる衝動をグツ抑え込み。

「そうか…それにしてもよくここが分かったな、フレイ。」

「はい、マスターに関する私の『勘』には少々自信がございます。多分こちらにいらつしやるだろうと…」

「ただの『勘』かよ！」

と、自然に…即ツツコんでしまい、わずかに苦笑を漏らす。

ホンのわずかな間だったが、フレイラが自分の方を見つめていたかと思うと目を閉じて、胸に手を当てる仕草をして静かに話し出す。

「ホっと致しました。　ようやくマスターの笑顔を見ることが出来ました、今まで、こちらに来てからずっと何かを思い詰めているようにしたので…、冗談を弄するのはあまり得意ではないのですが…：がんばった甲斐がありました。」

そつとベルの座っているヒザに頭を預け、少しの間、穏やかな時間が流れる。

「そう言えば、そんな設定も文章で入れてたな…『冗談は得意ではないが、それで笑顔にするのは好きなため時折、微笑ましい行動に出ることもある。』だったか…」

「この身の全ては、一から創っていた…マスターから最初に贈られた私だけの宝物でございます。」

「とは言え、ただの「苦笑」なだけだったかな…」

そんなことを言うベルリバーに、フレイラがそつとベルの腰に腕を回し抱き着くような仕草を取る。

「それでも良いのです。　マスターの気がほんの少しでも晴れてくれるなら…それが自嘲だろうと、苦笑だろうと…私は気にいたしません。　それにマスターは普段からあまりお笑いになりませんから…せめて私の前でくらは、自分を装わず、そのままのマスターを見せてくださいませ。」

「そうか？…そんなにボクは笑顔を普段、見せていないか？　この口だらけの全身でよく『笑ってない』とかわかるな。」

「茶化さないでくださいませ。　この身も、そして、我が心も…そしてなにより私を形作る全てに、マスターの想い入れが籠っております。

主の感情を感じ取れぬわけはありません。」

「そうか…こうして二人でゆっくり話す時間があると改めてよく解るな…驚くくらいにボクの好みが反映されている、まさに理想の全てだよ、フレイラ…。」

「ありがとうございます、マスター、そのお言葉一つで、身に余る喜び、光栄の極みにございます。」

「それはそうと、さっきは「冗談」の一言で片づけられてしまったが、本当になんでこの場所がわかったんだ？」

「気配でございます…、マスターはこっちに来てから、別空間という事に安心され、探知阻害の方ではなく、魔力隠しの方の指輪をされておいでだったので…それで気配をたどってまいりました。」

「ああ、そういえば、そうだったな、そこはうっかりしてた、気を付けよう、この世界から外に出る時は探知阻害の方もちゃんと指に装備するようにしなくちゃな。」

「まだまだ時間はたっぷりございます。まだ彼らの特訓は始まったばかりで、こちらの時間で一カ月も経っておりません、焦る必要はどこにもないかと…」

体を預けたままの姿勢で、ゆっくり言い聞かせてくれるように諭してくれるフレイラ。

(そういえば、『声は甘く、落ち着いたようなトーンで、彼女は無自覚で癒しを与え、活力を与えるとともに、嫌味のない言葉で「手の平で転がす」ように誘導することが出来る。』って設定も入れてたっけ…)

しばらくそうしてお互いの沈黙が、気持ちの平穏を取り戻し始めた時、ベルの方からフレイラに言葉を掛けた。

「なあ…フレイ、ちよつとだけ聞いてもらっていいか？」

ベルに体をすつかりと預けたまま、静かに返答をする。

「はい、なんなりと…。」

「お前はナザリックのNPC達をどう思う?」

問われた意味がよくわからず、ゆっくりと頭を上げ、ベルに顔を向ける。

「どう…とは?」

「お前も薄々はわかっていることだろうが、実はボクは、一回はナザリックを捨てた。ギルド、アインズ・ウール・ゴウンも…ギルドメンバーとしての名前は脱退せずに残してある…だがユグドラシルに行かなくなったことは事実、忙しかったとか…そんなのは言い訳としか聞こえないだろう…」

まるで、贖罪のようにフレイラに言葉をかけていく、そのベルの言葉に決して否定の声は差し挟まず、ただジツと、自らの神が全てを言い終わるまで、『何が言いたいのか』を確認できるまでただ、頷いていた。

「他のメンバー達も同じだ、リアルの世界の生活を選び、モモンガさんのようにずっとギルドと共に歩むことを心のどこかで『いつかなくなってしまうのに…』と冷めた目で見ていた部分はボクにもあった。

それでも、結局ボクは自分をだまし続けることはできなかった。

居なくなるなら、きつちり居なくなつて、ギルドも脱退して、NPCのデータも、持つてるアイテムも全て処分してキャラデリすればそれでよかったはずなのに…自分では戻る勇氣も持てずに、誰かがまた誘ってくれるかも…と、起こりもしない偶然をただ待っていただけの男だ。」

そこまで聞いてもフレイラはただジツと主人を見つめ、姿勢を正して聞いている。



端から見れば、怒られてる異形の者と、叱っている黒髪の女性。という構図にも見えたかもしれない。

「だから、正直に言うとなザリックに行くのが怖い、怖くてしようがない…だから探知阻害の指輪も、モモンガさんに渡されたときは嬉しかった、これで少しは自分だとバレずにすむかもしれない…憎しみの目も…さげすみの目も…恨みつらみの声も…やり過ぎることが出来るかも…なんて思ってたんだ。

ボクは…みんなが『至高の41人』だなんて崇めてくれるメンバーの中でも実力のあるっていう立場じゃない、ただ、運が良くて、みんなが支えてくれて、可愛がってくれたから…戦闘でも、誰かがフォローしてくれて、助けてくれたからこそ、あのギルドに居続けることが出来た。ただそれだけなんだよ!!」

すると、今度はベルの方が、フレイラをじっと見つめるような様子になって、すがる様に返事を求め始めた。

「お前たちは、「至高の41人」って存在は完全無欠、無敵で、絶対の存在、ナザリックのNPCの誰よりも強く、何でも出来て、全ての事象を見通せて、どんなアクセントがあっても完璧にどんな危険も排除できる…そんなヒーローみたいな者達の集まりだと思ってるんだろ?」

そこまでで、既にベルの声は涙声になっている、まるで母に甘える幼子の様に…。

「教えてくれよ、コキュートスや、シャルティアや…セバスにも勝てない…そんな「至高の存在」になんの意味があるって言うんだ…、モモンガさん一人が居ればそれでいいじゃないか! あの人は強い! PVPでだって、あの人を完全に圧倒出来たのなんて、ギルド内でもたつちさんと、ウルベルトさんくらいだ…、

二線級で戦って居るしかできなかつたボクとは出来が違うんだよ！」

ただただ、すぎるようにして、フレイラの両肩に手を乗せ、頭の部分をムネに当て、自分の顔を見られ、失望されないような体勢で、今まで心に溜めていた。必死に隠していた本音をさらけ出す。

「それがなにか重要なことですか？」

たった一言、フレイラの温かみのある声がベルの耳に届く。

その言葉を聞いたベルは、顔を起こし、今度はフレイラの顔を見上げるような姿勢になる。

「ナザリックの者達の中でそのようなこと、気にする者など、恐らくはおりません。」

そう…なのか？ と心の中で、その疑問が渦を巻く。

「そうです…私にとつてのベルリバー様と同様、他の者達にとつてもベルリバー様という存在は「至高の41人」の1人、その宛がわれただけの地位の名称以上の価値がある…きつとみんなそう思っておいででしょう…それに、ナザリックのシモベの者達の中で、至高の御方の1人が1LVだったら？という問いを投げかけたとしても、その忠義の心は変わることはいらないと思います。」

そう言う意味では、シモベ達も、守護者の方々も…ベルリバー様が領域守護者、階層守護者の皆様より弱い、そんな程度の事で見限る者は一人としておりません…それどころか、もしそうならば、この身をもつて、盾として死ぬことになろうとも、お護りするまでだ。と…より一層、やる気を出すかもしれません。」

「この身は、かの御方々の為にのみある…。」そういう認識は他の皆様

にもおありになるでしょう。私にとってはベルリバー様という絶対無二、唯一にしてワールドアイテムと引き換えにしてくれと言われても、それに応じる意思はありません、それほどの御方、それがベルリバー様、あなた様なのです。」

……しばしの沈黙……。そして、深く深く吐き出すような息、その後、静かに顔を振って、改めてフレイラの顔を見たベルリバーの顔に迷いはなかった。

そんな風にフレイラには感じられた、ならばそれが正解だろう。

「フレイ、すまないな……。主らしからぬ弱い姿を見せてしまった、醜態をさらしてしまったな。」

「いえ、そのような……私のような者に、包み隠さぬ本当のお言葉を聞かせていただけたこと、私のことを信じていただけているが故のことと受け止めております、ならばその期待に恥じぬ働きを今後ともお見せしていければと……そのような過大な望みを目標としております。」

(ホント……どこまでが本心で、どこまでが設定に沿った言動なんだか……)

「そうか……。なら私から詫びることなど何もないな……。私も、フレイに負けないように頑張らないとな。」

そう言い、フレイラの頭に手を置いたベルリバーの表情が今までのどんな時よりも柔らかく感じたというのは、きつと彼女にしかわからない、二人の間にある絆の成せる業なのだろう。

「さて、ずいぶんと長居をしてしまったな、そういえば、アレの処遇はどうなった?。」

「アレ?……でございませうか?。」

「ホラ、最後の一体になって、放置してしまった【雷精】だよ、セピア

に首を蹴り飛ばされた方の…」

「あ、ハイ、それならまだトドメは刺していないのではないかと…ベル様が処遇をお決めになりますか？」

「そうだな…そのためには、またお前の力を借りたい、フレイ…頼めるか？」

その言葉に、即座にナザリックNPC全員に徹底されている『礼』の姿勢を取り、ひれ伏すように畏まる

「承知いたしました。ではそのように。」

「うん、では行くか！フレイ！」

「はい、どこまでもお供致します。」

そう言っ、外に出て、拠点アイテムを回収、みんなと合流する頃には、数時間前に言われていた通り、ブレインが1人で夕飯の準備をさせられ、(農村育ちの彼にすれば)豪華な野菜料理の数々をテーブルに、人数分広げてくれていた。

(せっかく、準備してくれてたんなら、食べないと失礼だよな、それに何げに楽しみなんだよな、こっちの世界に来ての野菜料理…自分が居たリアルの世界じゃ、野菜なんてものは口にする機会なかったからな。)

【雷精】のことは多分、みんな意識の外に行ってるだろうけど、食事しながら、話をしてみよう。

ヘッケランの剣に炎の精霊が宿って協力してくれたように、ひよっ

としたら交渉次第で【雷精】も、助けてくれるかもしれないしな…、最悪、条件付きの協力関係って言うのでもいいけど…

まあ、それは食後、その時考えよう。

と気楽に考えることで、ブレインが作ってくれた料理に舌鼓を打つ、御方であった。

## 第46話 みんなで特訓、レベリング！「帰還！カルネ村」

カルネ村の朝は早い。

とは言っても、それは、自然に染みついてしまった行動のようなものだ。

時間になると、なんとなく目が覚めてしまう。

ゆうべはあれから、騒ぎと言ったような騒ぎもなく、夜の方も平穏な時間で過ごすことが出来、昨夜は心行くまで愛しの夫との時間を満喫することが出来た。

そんな隣では、夜のうちに体力も：男性としての活力も、全てエンリの求めに応じて張り切りすぎた結果、泥の様に眠って起きてくれない夫であるンファイがいる。

無防備に眠りこけている夫を見ているとつい「可愛い」と思ってしまうのは妻の欲目であろうか…。

いつまでも、こんな日々が続いてくれればいい…：そう思いながら夫の髪を優しくなでる。

ンファイとの生活は最初こそぎこちなかったり、不安だった部分もあつたが最近はそのような部分も少なくなっていた。

自分もンファイに無理を言うつもりはないから、出来ないことを要求することは無い。

しかし、家の事や、私生活での様々な場面、村長代理としての役目、村では貴重な…：難しい文字を読めたり貴族や王家などの紋章などの知識を知る者は全くと言っていい程ココには居ない、その為、商取引や、政治的な駆け引きなど（ただの村なので、そういう話は今のところ来ていないが…）や、村内の在庫のチェックや発注など…：挙げれば

キリがないが、私の及ばない部分のかなりの面を彼はフォローしてくれる：そんな優しく頼れる人。

そして、その仕事も終えて、夜になると私の要望を「必ず」受け入れてくれ、こなしてくれようと毎日「励んでくれる」彼の：昼夜のギャップが今ではエンリを「クセになつちやったかも」状態にしていた。

(エンリ自身は気づいていないが、これも夜の方のお願いは、ほとんどエンリの「望み」であり「要望」である：、言い換えれば『上官からの指示』に等しいものがある。そのため、従わざるを得ない状態に追い込まれているのが実情であるのだが、夫であるンファイア自身も心底惚れた女との毎日である：『期待に応えたい』という想いがある為、”指示に従わされている”という認識がなく、需要と供給が一致してるがために全く違和感すら覚えず、こなしている：だからこそ、朝、起きられなくなっているのだが：)

：そう、特にそういう意味ではンファイとの夫婦生活には不満はない。い。

不満は無いのだが、たった一つだけ、気になることはあった。

それは最近朝起きて、自分の一糸纏わぬ体をしげしげと見て気づいたこと：。

エンリは最近、左胸ばかりが育ってきている気がする。

そこが育つこと自体は、悪いことではないし嬉しいのだが：左右とのバランスが気になっているのだ。

(まあ：彼は右利きだし？！しようがないことはわかってるんだけど：)

そのおかげ：と言ったら言い方は変なのだが、左と右で、感度に差が出来ている気もする：だからついつい、そつちばかり求めて来られるのがイヤで無くなってる自分はあるし、気が付いたら、「もっと」と口走ってる自分を思い出し、赤面してしまう：のだけど：ンファイの攻めも日に日に上手になつていくんだから仕方ないじゃない！ と、自

分をごまかし、夫の所為にする。

(そりやく、私の方も、結婚式を挙げたその夜から、今まで以上に感度が良くなってるから、ついインフィの頭を抱え込んだりうようになつたし：インフィも私の両腕くらい引きはがして右の方だつて求めてくれてもいいような物なのに：)

ンフィーレア自身は魔法詠唱者な訳で、力があまり強いわけではないのはエンリもよく知っている。

だが、一応、男なんだし「ただの村娘」である自分の力くらい跳ね返してくれてもいいと思つて居るエンリなのだが、夫は優しいため、それをしないだけ、そうせずに、ずっと私に抱き寄せられたままで居てくれる。：と彼女の中ではそういう認識で今に至っている。

(実際は、力で勝てないくらいの差が出来ているため、抱えられたら身動きが取れなくなつてただけなのだが、エンリはそのことに全く気付いていない。それに夫の攻めがうんぬんというのはエンリの『指揮』能力が上がっているため、指示されたンフィも、上官の望む対応、痒い所に手が届くような：ピンポイントを突くような巧妙さ、それら全ては何を隠そう、エンリ自身の力なのだということは、夫婦そろつて自覚していない。)

朝の目覚めでとりとめのない考えを、ひとまず頭から振り払い、まずは水をオケに入れ、タオルを絞り、いつものように体を拭くことから始める。

不思議と、こういう時にドアがバン！と開いたりすることが一度としないのは、きつと、カイジャリさん達が気を付けてくれているのだろう、と思う。

なぜなら、一通り準備が済んで「さて：」とエンリが思うタイミンで彼らは朝の挨拶に来るのだ。

とは言つても、そろそろ服を着ないと、ゴブリンさんたちが本当に朝の挨拶をしに来ちゃう。



ええ：と、今日は確か、ノスリさんだったかな？

ゴブリントループの19名の中では、見た目、最年長っぽいのだが、なぜか難度が25（LV8）という人数の多いゴブリントループ内でも、構成人数の多く、一番難度の低い「ゴ布林兵士」という立場に居る不思議な人（？）だ、あまり戦いの場に出る機会が少なかったのだろうか？

でも他のみんなは割とバカ騒ぎをしたりするのが好きで、時々、周囲をそれで和ませてくれるメンバーが多い中、ノスリ本人はそれに乗っかって場をかき混ぜること自体は好きではないようで、みんながそういうやりとりを（芝居だとしても）始めてようと、彼だけは『我関せず』という空気を纏っている。

ゴ布林兵士12名が同時に行動することになれば、ノスリさんが暫定的にまとめ役になることもある。

朝一番でエンリの元に訪れ、朝の挨拶&周辺警備及び、エンリの様子伺い、そして夜から朝までに村内であったことの近況報告、そういった役割を12人で一日ごとに交代制で：ということになったのは最近のことだ。

なぜなら、少し前まではジャンケンなど、色々なことでその日の当番を決めていたのだが、勝つ者が偏ることがあって、なかなかエンリの朝の挨拶役に就けない者がほとんどだった時期があり「それなら：」とンファイが提案したのだ。

「交代制なら、順番が来るまでの辛抱だから：」とンファイも説得し、ゴ布林兵士のみんなも納得した形が今の状態になっている。

もちろん朝一番で緊急事態などがあれば、第一発見者のゴ布林リーダーのどちらかや、見張り台で日中、日没の日の出まで、という当番で村人を補佐しているゴ布林アーチャーさんが知らせに来る場合もあり、その都合上、同時にその挨拶役を代行することもある。

もちろんその時は緊急性が高い状況のため、「当番なのに飛ばされた」などの非難の声は出たことは無い。：ただ、その次の日に延期になるだけなので、「しやーない」という雰囲気でもまとまっている。

やはりそれは『自分たちの望みより主の安全こそが第一』という共通認識があるからだろう。

(それが時々、重いんだけどな…)

支度をしながらボンヤリそんなことを考えていると、ドアをノックする音が聞こえる。

「どうぞ?」とエンリが許可を出すと、ドアを開けたノスリがエンリと視線を交わし朝の挨拶を告げる。

「おはようございます、エンリ姐さん! 今日もいい天気ですよ、良い表情をされているようで…よく眠れたようですね。」

『村長』としての一日は、まずこういった挨拶からスタートという流れが既に出てしまっていた。

「はい、おはようございます! 今日も1日ががんばりましょう、みなさん!」

エンリは扉の近くに居ないゴブリントループの全員に声をかけるように張りのある声で朝の始まりを告げた。



「ところで姐さん、あの裏手の方のどでかい扉はなんですか? 昨晚は「何も危険はないので、放置で大丈夫。」という事でしたが…」

ノスリがカルネ村の裏口、その扉を出て、少し先、トブの大森林との境界あたりに不自然にそびえ立っている3枚の大きな扉の件について聞いた来た。

「ええ、あれは、新入りのブレインさんや、アルシエさんたちのチームのみなさんが修行? するために創られたものだそうで…、この『ゴ布林將軍の角笛』みたいなマジックアイテムで出した扉のようですよ?」

(私も「アングラウスさんを貸してくれないか?」って言われただけで、その時は…取り込み中だったし…、詳しく聞かないで了承し

ちやっただけど…あの時詳しく聞いておくべきだったよね…でも、あの時はそれどころじゃなかったし…)

「そうですか、その正体とか効果、安全性が分かるまでは迂闊に近づかない方がいいようですね、特にンファイレアの旦那には言わない方がいいでしょう、どうせ今日も起きてくるのは遅くなるでしょうし、朝食の時、みんなが集まった際、話しますか…。」

「そうですね、その方がいいでしょう、みんなはわざわざ裏口の方には行かないと思いますが、まだ幼い…焼き討ちされた村からの移住者のお子さんたちや、アルシエさんの妹さん達はお構いなしに近づいちゃうかもしれない、教えることに不安はありますが、事件が起きてからでは遅いですからね。」

「承知致しました、ではそう致しましょう。」

「ばあさんの方はどうします?。」

(ばあさんとはもちろん、カルネ村ではすでに有名(生活面が謎、私生活もカルネ村での研究自体も詳細は謎と言う意味でも…)な人であるリイジーさん、村長代理として働く孫のンファイの代わりにポーシヨン作成に尽力してくれている。)

「そうですね、いつものように朝食を即座に食べに来るとは思いませんが…一応、声はかけましょう…数回呼びかけて返事がなければ、研究中で、それどころじゃないでしょう、その時はそのままです。」

「はい…わかりました。」

などのとりとめのない会話を差し挟みながら、野菜や、生まれた卵、じゃがいもや…最近、ゴウン様の保護を約束されたということで、時々売りに来てくれる<sup>リザードマン</sup>蜥蜴人の一団の方々が持つてくる魚なんかも一応、候補に入れておく。

<sup>リザードマン</sup>蜥蜴人さんは、お金ばかりじゃなくてもいいようで、物々交換の様

に、野菜や果物、臭みや血抜きをした肉でも融通してくれることは普通で、そこまでお金に執着はしていないようだ。

しかし、1年を通して決められた額の年貢としての金銭額は決められており、その額さえ貯まればそれ以上は、これと言って必要ないと言ふ…。

余ってる交易通貨は、村の中に設置した「アインズ・ウール・ゴウン様像」の下に作られた簡易的な「気持ちの印箱しるし」という場所に、日々の礼拝などの際、入れる人もいる様だ。

(お金がある時にソコに入れておくことで、後々、年貢を納める額の足しにしている様子)

人間との交易が出来る集落や村はそこまで多くないようで、通貨の集まりは少ないらしいが、年に一度納める額自体は決められている為、危険は承知で、ココ、カルネ村まで遠征して行商にやってくるらしい、本来は沼などの場所が行動しやすい為、森の中を移動するなど危険度が高まるのだが、そこは胸に赤い印のある氷の剣を持ったリザードマン蜥蜴人に守られ、危険を承知で来てくれる。そこまでのことだと言われればこちらもどうかして報いてあげたい、なにしろゴウン様からの紹介と言ってもいい程なのだ…

ゴウン様つながりと知って、村人も偏見の目は向けないが、ただ買い物をして「ありがとう」で済ます訳には行かず、ゴブリン兵士さん数名と、鼻の利くコボルトさんらで、安全な地点まで送っていくので、「帰りは安心で助かる。」と、よく感謝される、そうするとこちらも嬉しいので、そうすることがいつものことになっていた。

基本的に、年に一度の支払い以外は強制されてるわけでもないのリザードマンで、蜥蜴人さん達が自発的に始めたことに関しては、ゴウン様も好きにさせているそうだ。

「いつも思いますが、この魚すごいと思いやせんか?、最初から骨がないんですよ? リザードマンが抜いてから売ってくれてるんですね?」

「どうなんでしょう…話してみると皆さん穏やかな人たちが多いみたいですし、そうかもしれないですね。」

一般的には穏やかに見えようと、友好的だろうと、異種族と言うのはそれだけで普通は偏見の目で見られやすいのが当たり前前の通念なのだが、すでにこのカルネ村ではそういう常識自体が廃れ、薄れてしまっている。

精々、抵抗を示す態度に出るのは、新しい移住者くらいだ。

徴税官などが来る時は必ず、人間以外は全員避難させているので、王国内ではほとんどカルネ村の実態を知る者は居ないと言ってもいいだろう、ごく少数の例外を除いて。

(今度、徴税官が来るのはあと4か月後か…、その時は、最初にオーガ達を一回り大きくして作った2号小屋と、最初の1号小屋に分けて…ゴ布林達と、コボルトさん達は森の中…よね、何かあった時の為に、コナーさんは元村長さんの家の床下ね、元村長さんはほとんどアルシェちゃんのお世話でそっちの家にいることが多いから、ほとんど使っていないそこがいい、ウチの床下にはジユゲムさんとダイノさんに…って感じにするしかないよね…。)

考え事をしながらでもエンリの食材を切る速度に衰えは無い、すっかり主婦として、料理の腕前も普通の主婦と比べて遜色はないくらいにはなっていた。

かまどの火はノスリさんに点火してもらった、最近移住してきたフォーサイトのメンバーが移住する際の手土産として、帝国のマーケットで購入して来た物だ。

「チャットカーワンド」という名前、使うときは先端をクルリと一度回し「チャットカー」と言えば、生活魔法でも有名な「ティンダー」が先の方で発動するという優れモノ。

農村では火を起すのも技術が必要でコツもある、元村長の奥さん

は手際がいい方だが、私なんかはまだまだ時間がかかる方だと言っている、ゴブリンさんなんかは、火を起こすなんてもちろん出来はしない。

だが、この生活用マジックアイテムなら、簡単に火を点けることが出来、扱いても容易、点火された先端の火を消す時は何も言わず、もう一度、クルリと回せば消火される…。

使用回数制限はあると言う話だが、もし反応しなくなったら、マジックキャスター魔法詠唱者のダイノさんに頼んでフレイムアローへ火の矢を1発分の魔力を注いでもらえば、再使用も可能という至れり尽くせり仕様…、魔力を込める人の『魔力』（数値上の大小次第）で、使用回数にバラ付きは出てしまうようだが、何度でも繰り返し使えるのならありがたいがたかった。

薬草採集でも、通常のかまどへの点火作業程度でもまるで役に立つことのできないゴブリン兵士のみんなもこれならば手伝える。と割と高評価だったりもしていた。

「さて、みなさ〜くん、朝食ができましたよ〜！」

ゴブリン兵士数名と、ノスリ、そしてエンリが寸胴の鍋いっぱい作った煮物、主菜ともいえるメインは魚料理、そして、スープも運ばれてくる、さらには野菜サラダ、そっちの方は別枠で既に運ばれていた。

エンリの家の周囲だけでは収まり切れない程の数。なので、最近はこの村の広場に集まる形となりある意味毎日の光景と化していた。

その数…。

ゴブリントループ19名。

森で保護、そして、時折り森から「避難先」としてカルネ村に亡命してくる野良ゴブリン達。

オーガは大きいので、ラッチモンさんとブリタさんがレンジャー修

行でよく狩ってくれる動物たちを小屋の方で食べてもらう。

そして野良ゴ布林同様、カルネ村に避難してくる野良ゴボルト。オーガの数を除いて数えても60は超えている。

ほぼ、毎朝、エンリはこれだけの数に朝食を作っているのだ、そうなると思う事。

「ホント主婦って、大変、そんな苦労も知らないで昔はごめんなさい、お母さん」

そう心の中で、すでにこの世には居ない母に謝罪を送っていた。



食事をする前に、事情を一通り説明し、みんなにも理解してもらえた。

食事の時は、大体、村民みんなが集まってくる、今日の族長のおかずはなんだ？とか、また今日もすごい量だな…とか…色々口にしなから、食事が終わったゴボルト、もしくはゴ布林に今日は何を…とか、これから訓練に参加する者は…だとか、色々と指示を出す人がチラホラと出てくるためだ。

防衛訓練としての弓の練習は手のすいてる村民も参加しているし、ゴ布林もゴボルトも参加している。

特にゴボルトは犬の頭をしてる関係上、追跡を得意としている、ニオイで個体差を見分けることが出来るためだ、その為レンジャーの習得が早く、それに次いで、ニオイに関係する毒物に関する事にも鼻が利くため、やはり植物系や木の実などの（食べられるか、そうでないか程度だが）知識を持ち、野草サラダなどの材料の足しにしたり、かつて村が襲われた時に、襲った騎士達が置いていった馬も10頭ばかり居るので、その飼い葉などを確保するためにも彼らの力は必要なのだ。

その用事で集まった村民たちにもその「謎の扉」の事情は聞かせてある。

「どんなマジックアイテムでも使用可能」そういう能力を持つン

ファイアは村では貴重な存在だ。

何しろ覚えてたてではあるが〈ドクター医師〉の職を取得してるのはこの村では彼だけであり、深い傷などを負った際、応急処置、治療、必要があれば治癒系のスクロールなどを使えるのもファイアだけなのだ、本来は治癒のスクロールは神官系や、森祭司などの関連職を持つ者しか使えないが：ファイアなら使えるのだ、それがマジックアイテムであるならば…。

なので必要不可欠な存在であると同時に、逆の意味では取扱注意の存在でもある。

仮に、例を挙げておこう…。

何かの拍子に、荷物の中に間違つてマジックアイテムが混じつてしまったとする。

その中に、〈エクステンション爆裂〉の魔法が入っている魔石が鉄鉱石と混じつていたとした場合、ファイアがそれを手伝おうとして持ち運ぼうとした場合、なにかの手違いで発動してしまうかもしれないのだ。

そうなつたら被害も大きい、村で済むなら復興させればいいが、エランテルなどの大都市で買い出しに行った際、そんなことが起こつたら、犯罪者にされるばかりか：村にまで被害の損害を弁償する費用を請求されるかもしれないのだ。

なので、効果のしつかりわかる、安全だと判明したマジックアイテムでないとなファイアに近づけるのは危険だという認識は常にカールネ村では周知徹底させておかないと、何かあつてからでは遅いのだ：とはいえ、彼個人は性格に問題がある訳でも人格がどうの：という事は無い為、村人の彼ら親子に対する対応にまでは響いていないが、不必要に不審物には近付けるな。というのが、村の中での数あるルールの中の一つ、覚えておいてもらわなければ困るのだ。

とりあえず、食事も終え、みんなもそれぞれの役目に解散したころ、ファイアが目覚まし、遅めの朝食に参加しに現れる。

あとはのんびりと夫婦二人で、食事する番だ。



エンリも、村の人たちに説明をずっとしていたため、口の中が乾いていた、なので、スープを一口、吸ってから食事に入る。

「今日は何から始める？ンファイ？」

「そうだね…まずは、一通り、村の中の資材の在庫数を数えて回ろうか？建築系の方はこの前数えたから、今日は違う方だね、馬や鶏なんかの動物たちのエサ関係かな？」



…そして時間は少し巻き戻る

と言つてもカルネ村時間での話。

扉の向こうの時間ではかなり巻き戻ることになる。

それは、朝を迎えたカルネ村と同時刻の扉の世界を基準にして時は遡る。

「それで？こいつの処遇がどうなるんだって？」

（もうこいつは死に体も同然なんだからボク一人でもいいのにな…みんな来るのか…）

「イヤ、ちょっと試してみたいことがあってな…ひよとしたら少しレベルも上だし、物分かりもいいんじゃないかと思つての実験だよ。」

「僭越ながら私の力も必要だと言われましたので、私は同席を許されていますが…皆様はまだ休んでおられてもいいのですよ？ 精神力の回復はともかく、消費した魔力の回復にはまだ時間がかかるのでは？」

ゾロゾロと興味深げについてきたみんなの目の前でする程のことでは無いんじゃないや？と思うベルの想いに同調したのか、フレイラが彼らを少し遠ざけようとしてくれている。

（ボクってそんなに心とか考えてることとか読まれやすいのかな…）

「まあまあ、フレイ、彼らも悪気がある訳じゃない、もし何かあった時にと来てくれたんだらう、これからフレイのすることを見られるのが恥ずかしいというのなら、遠慮してもらった方がいいかもしれないが…、一応これは、カルネ村のポーシオン職人の役目を担っている人に手土産として渡そうと思つて居るだけだからね…。そんな大がかりなことはしらないと思うよ?」

「ますますワケがわかんないんだけど? 一体何をするつもり?」

イミーナが焦れたように「結論を言つてよ」と促してくるので、少しネタバレをしてやる。

「雷精」の魔力を吸ってもらうのさ、そしてそれを私が用意したポーシオンの空きビンでフレイの涙を受け止めるといふ寸法さ。」

(ああ、あれをするのか…と言う顔だね、やっとわかってくれたか…)

「ちなみにそういうわけできつきの腕輪はこの件が終わるまではフレイにつけていてもらうよ?」

そう言つて、自分の手でフレイラの両腕に装着させてあげた。

「感謝いたします、その期待に相応しい結果を見せられるよう、覚悟して臨ませていただきます。」

(そんな気負わなくてもいいんだからな?)

と、軽くそれだけを〈メッセージ〉で伝えて、すぐに切る。

実際はそこまで固執してゐるわけじゃない、材料は多ければ多い程いいだろう、ポーシオンの作成はボクがフレイラに託した夢の産物…目標としていた物が、なにで作られているのか…わからない以上、素材は多い方がいい、そう思つてのことだ。

だから、魔力の素、つまり命名「魔素の溶液」を絞り出せる機会があるのならそのチャンスを逃す訳には行かない、その程度の想い入れに過ぎなかった。

「さて、始めようか…ではフレイ、こいつの胴体から魔素を吸い上げろ！」

「はー！」

そう言うのと、わずかに上に出ている首の部分と、肩とのちょうど境目に爪を食い込ませ、「雷精」の身体を片腕で持ち上げる。

持ち上げながら、食い込んだ爪をソコだけ、ライカンスローフ人獣族の爪に戻し、さらに深部まで食い込むようにすると、サラマンダー炎蜥蜴の時にも使用したスキル

アストララル・タツチ【星幽体の接触】そして【魂の吸い上げ】と【生体濾過】を併用させ、

【雷精】の身体を構成している魔素を吸い上げていく。

（な…なんだ、なんだコレは…こんな感覚、今まで誰からもされたことは無いぞ…何者だ、一体お前はなんだああー！）

余程、衝撃的だったのだろう、サラマンダー炎蜥蜴の時はこちらまで聞こえるような規模で意識が流れ込んできたことはないのだが、恐らくはこの分なら、この辺一带にこの声は聞こえているんじゃないか？と思ひ、少し振り返ると、他の8名のメンバーも、耳を疑うような仕草をしている。

「やつぱりね…」

それなら、コツチの言いたいことはフレイを通して、通訳してもらおうとするか…それまでは彼女に任せよう。

「ああ、大変失礼いたしました、不躰ながら今、貴方の魔素を吸い上げて「魔素溶液」を作り出すのに使わせていただこうと…首がなかったのです承は取れないかと思つたのですが、意識はおありなのですね、安心いたしました。」

（なんだ一体？ そんな丁寧な言葉遣いでも全く吸い上げる速度は緩んでないぞ！ このまま枯渇させるつもりかあああ!!）

そして【雷精】は、残されている魔力があるうちにフレイラにライトニング〈雷撃〉や、エレクトロスフィア〈雷撃球〉などを使っているが、第6位階までの位階魔法を無効化させているのだ、1ダメージも通っていない。

「そうですか…とつても活きがよろしいのですね、吸い甲斐があつて

いいですよ？ さあ、もつと好きに暴れてくださいませ。」

(楽しんでるなく…そんな性格の設定付けた覚えないんだけど…これって製作者の内面とか、自覚してない闇の部分が反映とかしてるんだらうか…?)

すると、そろそろ危険を感じ始めたのか、【雷精】が訴えかけ始めてきた。

(な、なあ…この辺で止めてくれるならまだ許してやるぞ？ なんならお前たちに協力してやってもいい、だから…な？ 全ての魔力がなくなってしまう力を貸したくてもできなくなる、そうなってはそちらも都合が悪いだらう!)

「ああ、「元素石」のことを仰っておられるのですね？ご心配なく、そうなれば新たな元素と融合させたり、ブライマル・ファイアエレメンタル根源の火精霊にずくと抱えて、温めてもらうとかはどうでしょう？かなり上の炎の精霊になれるかもしれないよ?」

(やめてくれ…あ、いや、ください、まさか…従えているのですか？あの存在を…)

「私が…ではありませんけどね？ 私の主の更にその上、最高位の御方が…呼び出して従わせることが出来るんですよ？ よかったら、貴方もその序列に加わってみたいとは思いませんか?」

(従います！ 従いますから…どうか…どうか、枯渇させるのだけは…お願いします、あなたさまのお名前に誓って、決して裏切るような真似は致しません!!)

「そうですか…それでは、私の名前に於いて誓いなさい、今よりお前は私の下、そして、私の主たる者の所有物として、その力となると…」  
(はい…従います、あなたさまと…あなたさまの主さま…そして、その最高位の方にも…我が身、我が魔力…その全てで従います。)

「いいでしょう！ 私の名前はフレイラ・ルアル・アセンディア…主の名前はベル…ベルリバー、最高位の君臨者の名はモモンガ」

(そこはさすがに声を抑えてくれたんだな…ボクの方はどっちでもよ

かつたんだが…さすがにモモンガさんを本名で告げるのは…って、精霊との契約つて真名じゃないとダメなんだつたっけ？」

…そういえば百科事典エンサイクロペディアにそんなようなこと書かれていたような気がしたな…予備知識的なページの下の数行しかない説明の中で…。

（ご尊名、伺いました。 フレイラ・ルアル・アセンディア様、そしてその上位の方々、軽々しく名前を口にするのも憚られる圧倒的絶対者、そのお二方にもわが名に於いて永遠の忠誠を誓います、我が名は「イナズ」…お好きな時に我が力、お使いくださいませ…）

「その言葉、忘れず、刻み込んでおきなさい」「イナズ」、決してその言葉を変えることのないように…期待していますよ？」

（は！…これより我が身は、御身の方々の末席に置かせていただく身、どのようなでもお使いくださいませ）

そう言うと、フレイラの手の平の中にゴロンと【雷の精霊石】となり、大人しくしている。

それを確認すると、すぐにベルは、フレイラの左右の目元にポーションの空き瓶の口をあてがう。

すると【生体濾過】により、純粋な魔素溶液となった雷属性の液体がみるみるうちに2本のポーション瓶を満たしてしまった。

「我が使命、たしかに成し遂げられてございます、マスター。」

「ああ…よくやった、フレイ…予想以上の成果だ…。 ところで、それ…フレイが身に着けてみる気はないか？」

「え？私がでございますか？ 我が身よりもマスターの方が身に着けた方がよろしいのでは？」

（そういえば、さつきこいつに弱音を吐いたばっかだったっけ…うわああ、思い出したら恥ずかしくなってきた！）

「いや、自分に必要な時は改めて借り受けよう…だが、今は自分の戦い方を…私が一番、やり込んでいた最盛期の戦い方の勘を先に取り戻したい、受け取るのはそれからでかまわないか？」

ベルがそう言うと、何も言わず、しばらく「じくく…」とベルの顔を見上げている、まるで、今かぶっている仮面の下の表情を見極めようとするかのよう…。

しばしの時間が経過し、目を下へと伏せるとフレイラが胸元に、「雷の精霊石」を包みこんだ。

「承知いたしました、それまでは、この精霊石、私が大切に保管させていただきます、ご用命の際はいつでも仰ってください。」

「まあ、しばらくはソイツを休ませておけ、お前に魔素を吸い上げられて、相当消耗してるだろう。」

「はい、すでに残り魔力は、全体の1割を切つてましたから…契約が終了した時点でそれだったのでギリギリでしたね」

…と、笑顔でしれつと言いのける。

「フレイ…せめて契約の宣言の時くらいは吸い上げるの止めてあげても良かったんじゃないか？」

「油断はいけません！ 最後の最後で宣誓がどもったり噛んだりすれば、その時点で契約は不成立で、2度と同じ手順を試みることは出来ないのですから…一瞬でも気は抜けないですよ？」

「そ…そうだったか…それは、大変だったな、お疲れさまだ…フレイ、ありがとう」

そう言つて、再び頭をなでてやると、嬉しそうな表情を浮かべていた。

「さて、それでは、第2ラウンドだ…フレイ、ちょっと、この腕輪貸してくれ、これから装備させて、安全に戦わせたいメンバーに使ってもらいたいからな。」

すると、少し名残り惜しいような表情になりながらも、そつと手渡して返してくれた。

「すまないな…用が済んだらまたお前に着けてやるから…。」

小声でそう言うのと、すぐに顔を上げたフレイラが微笑みを浮かべながら

「わかりました、それまでお待ち申し上げております。」

と、送り出してくれた。



3体目の【雷精】の処遇が決まった直後、後ろから歓声が上がる。何事かと思い、聞いてみるとイミーナの難度が、このタイミングで上がったらしい。

どうやら呼び出したモンスターの全てをどうにかしないと戦闘終了という扱いにならないらしかつた。

(まあ、それはそうだろうな…、戦闘画面が終わる時、経験値の振り分けがされるんだし、それも当然か…)

後ろでは難度が上がったメンバーが色々、何を取得しようか？などの談義をしている。

難度が上がったのは、2体目の【雷精】の身体を焼き焦がしていたヘツケラン。

同様に頭を突き刺したブレイン。

1体目をへ穿ち撃ちの武技でとどめを刺したイミーナ。

おまけで、第3位階相当の「彗星落下」を発動させたセピアが魔法詠唱者の難度がやっこさ一つ上がったらしい、喜びで飛び跳ねている。

ロバーデイクがうらやましそうな視線を送っているが、大丈夫、こ

れから死ぬほど経験詰まさせてあげるから……とは口では言わない。

：というやり取りがあつて、それからは、ロバーデイクの両腕に腕輪バングルを装着してもらい、死者の召喚者ネクロ・サマナーをとりあえず、一体呼び出した。22のLVの死者の大魔法使いエルダーリッチが、骸骨戦士スケルトンウォリアーを4体呼び出すのに対し、LV35の死者の召喚者ネクロ・サマナーは骨の竜スケリトル・ドラゴンを魔法の力で1体呼び出すことが出来る。それは魔力の続く限り……だが召喚できる数は戦闘に参加している人数分に比例する。前は8体まで呼び出されてしまったが今回は2人だ、多分同時に呼び出すのは2体までだろう……

それにしても骸骨戦士スケルトンウォリアーとLVの数値は同じなのだが、魔法が通じるか通じないかの差は大きい。

なので、今回は魔法での攻防戦にはあまり期待できない。

となれば、直接的な物理攻撃、離れた距離からの物理攻撃に訴える必要がある。

見た感じ、ロバーデイクさんは距離を取って戦闘するタイプには見えない。

なら、自分が離れて攻撃する必要があるか……そうなると不安が残る。

エルフであるディーネ、セピア、ルチルは3人とも、射手の心得はある。

しかし、得ているクラスの種類が違い、セピアはレンジャーのクラスで、弓を打つ。

対して、ディーネとルチルはどちらも信仰系に属する職業、弓自体の練度が違う。

だからと言って扱えない訳では無く、子供の頃、冒険者としてのクラスを得るより前、里で普通のエルフとして弓を使っていた名残り、獵師入門生の技術は持っている為、専門性には欠けるが扱うことではできる。



と言つても、ディーネが選んだ弓は、ショットボウ「ブリザード」。つまり氷属性のため、スケルトンやアンデッド、リッチなどには効果が薄い、もちろんスケリトルドラゴンにもだ。

自分の主武器はホーリーフレイル、55LV金属で創られた「属性：殴打、神聖」のため、武器としては効果が高いと思うが：ロバーデイクさんのメイスは見たところ、そこまでの打撃力は無いように見える。

ベルさんがイメージしてるのは多分、ロバーデイクさんの難度アツプ、となれば、私がこの武器を持っていても仕方がない、これをロバーデイクさんに貸すとして、私の攻撃手段は？

得意の〈中傷治癒〉ミドルキュアウーンズでは、相手の魔法無効化の能力でかき消されてしまう：せめて：炎系の弓でも選んでいけば…

そう思つて居ると、外野からディーネに声がかかる。

「お〜〜い!!! デイ〜〜ーネ〜〜〜!! こいつ必要でしょ？ 氷の弓と交換ねえ〜〜!!」

その声に後ろを振り返ると、セピアが自分の「ショットボウ「ボルカノ」」を私に放り投げる所だった。

「ちよつと〜！ いきなりすぎるでしょ〜？ セピア!!」

そう言いながらも、受け取った弓を持ち換え、セピアにショットボウ「ブリザード」を投げ返す、その際、「こうなったら仕方ない！」と覚悟を決め、ロバーデイクの方に近づき、自分のホーリーフレイルを渡す。

どの道、自分の装備はベルさんから渡されたもの、性能も折り紙付き、武器がロバーデイクさんの貧弱なメイスだとしても、セピアの「ボルカノ」ならきつと攻撃は通じるはず。

防具である鎧の方も、防御性能は高い、滅多な攻撃が来ない限りダメージはかなり防げるように思えた。 敵のダメージが私に通つたら、回復すればいい。

そう割り切って、有無を言わず、ロバーデイクさんに私の武器を握らせた。

「あの…これは？」

「それは神聖属性と殴打の攻撃が出来て、「シユート」って言うのと、2m先にフレイルの鉄棍が相手の方に飛び出すの、戻るのは勝手に戻る魔法の武器だから、今回の敵には効果的はず、貸してあげるから、メイス貸して…まさかフレイル使えないってことないわよね？男の腕力なら簡単でしょ？」

と、時間がないので早口でまくし立てた。

なぜなら、すでに敵は目の前に姿を現して、骨スケットルドラゴンの竜の1体目を召喚しているのだ、これが第1ターンの相手の行動なら、猶予はない。

呼び出し終わって、召喚した存在が私たちを敵だと認めるまでの時間でなんとか体勢を整えるしかない。

「状況は切迫してるようですね、わかりました、これがどれ程の武器かはよく知りませんが…今回はお借りすることとしましょう！」

「準備はいいわね？ なら行きますよ？」

「ええ、お互い信仰系同士のコンビプレイ、見せてやりましょう！」

「相手の召喚主には回復魔法のダメージは通るけど、骨スケットルドラゴンの竜には通じないこと、忘れないでよね、それで殴り殺して！」

「ええ、解りました、少々お言葉が荒い様子ですが…緊急時です、言葉を悠長に選んでる場合じゃないことは承知です。では行きましょう!!」

そう言って、二人は敵に向かって走り出す。

「はあああああ  
」  
「やあああああ  
!!!!!!」



そんなこんなで、カルネ村でのお昼が終わり、さて、午後からもあとひと踏ん張りか!

そうエンリが思っている、裏口の扉から、ぞろぞろと帰ってきた人たち：ブレインさん達、10人だ。

なぜか、夜の訪問ではいなかったはずのエルフさん3人が居る。

でも、なんでだろう：前の時に村に来たベルさんに付き従っていたエルフさんとは別人に見える。

なのに、なぜか共通するパーツが大部分なのが気になる、よくよく見てみると、別人のように見えるのは顔のパーツに一つか二つ、印象の違う見た目がある所為であり、もしそれが私の知ってるパーツ通りなら、きつと、あの人たちに間違いない!と確信できるのに…

と頭が混乱していると、フレイラさんが胸に下げているネックレスを見せてくれた。

まちがいない、偽物じゃなく、本物だ、という証明はそれで充分だった。

ベルさんも本人だというのを証明するため、あの紋章が入った指輪を見せてくれる。

そして軽く私に耳打ちをし：「エルフの3人は事情があつて顔のパーツに幻を魔法でつけていてね：騒ぐと面倒になるから、ナイシヨにしてて?本人たちも別人の顔みたいなのはもう知ってるから。」

ちよつと、耳に息がかかることを想像するとビクツとなりそうで警

戒したが、ベルさんの声からは吐息がかかってこなかった…：気を使ってくれたんだろうか…：こういう少しの気遣いが出るのってすごいなとエンリは思った。

(実際は種族特性で、呼吸不要という特徴がある為なのだが…)

「みなさん、お疲れじゃないですか？　夜通し特訓なんて、よければ少し休まれません？」

そう提案すると、ヘツケランさんが軽く手を上げ遠慮してきた。

「ああ、大丈夫、休息ならたつぷりと二日分は取らせてもらったから…その分何度も死ぬかと思っただけであつたけどな…」

「でも、最後の方は結構、順調だったじゃない？　最初こそ何度も「これもう死んじやうよね」って場面は確かにあつたけどさ」

と、イミーナさんも同じ意見のようだ。

「私ももう、お腹いっぱいですよ…：敵さんは魔力切れがないのは卑怯です…：骨の無限増殖はもう勘弁してもらいたいですよ…。」

二日はたつぷり休んだと言っていたはずのチームの中で年上ポジションのロバーデイクさんが一番精神的に疲労しているようだ。

「でも、この中で一番成長の伸びが凄かったのはイミーナ…：すっかりその鎧も馴染んでるようには見えな…。」

アルシエが、イミーナを評価する言葉を言うと、イミーナもそれに返答する。

「まあね…：でも不思議と威力が当初のまま上がってないのはちよつと残念だけどね、防御の面ではかなり助かってるかな？　それに、魔力が自動で充填される宝珠？みたいなのもやつとこさ付けてもらえたしね…」

(イミーナ自身、魔力の数値がほとんどないと言ってもいい、それなのに、それなりに威力が出せるのは最初に装備したアルシエの魔力を基準とする設定がデフォルトになっているためだ、とことん女性には優しい仕様になるらしい…。)

フォーサイトの面々がそんな会話をしていると、後ろを歩いているエルフ女性3人組もそれぞれが思い思いの会話をしている。

「私たちだって、それなりに難度上がってますし、私たちは今の装備で充分ですもんね〜？ デイーネ？」

「そうね、ルチル、私たちは自分の好きな物を、つてベルさんから選ばせてもらった物ばかりなんですから、重みが違いますものね。」

「そうだよ、私なんかこの「風迅の外套」に魔法の効果が宿ってること、すっかり忘れてましたけど、なんとか使えるようになりましたからね、風の操り方次第では炎の威力も違ったりして、後半は色々試せて面白かったりして、応用性が広がりましたしね」

そうすると、大きな声が村中に響き渡るような声で「雄たけび？」と思いたくなるような叫びが轟いた。

「出来たよおー！！ 新しいポーションが完成したよお〜〜！！！！」

ビックリして振り返ると、手に数本の見たこともない色の瓶を持って駆けて来るリイジーさんの姿があった。

「あ、リイジーさん、こんにちは、今日もいい日和で…」

「そんなことはイイんだよ！ 出来たんだよ、新しいポーション！！これは凄いなだよ！！」

（あ、やっぱりンファイのおばあちゃんだ…ンファイそっくり…）

エンリはそう思ったが、実のところ、ンファイレアの方が祖母に似てしまったのである。

「ところで何がそんなに凄いですか？」

興奮気味のリイジーさんの熱を軽く冷ましてあげようとそう問い

かけると、ヤブヘビだったようだ。

「なにが凄いかって？そりゃくね、こいつはね、うちらが持つてる普通のポーションの材料だけじゃなく、トブの大森林で採れる素材だけで、これが作れるって事なんだよ！　しかもだよ？調合することが出来たんだよ！　いいかい？今まではそれぞれの強い効果を合わせると、お互いが喧嘩し合っとうまく行かなかった…、それを新しい可能性に気づかせてくれたのがこのレシピ!!　それもね！　エンカイシはもちろん、いつものように紅玉の粉末に魔力の羽根、それだけじゃなく、他にもニユクリ、アジーナ、それとエリエリシユ、それに精神を落ち着かせる効果のジョンズワースも入れることに成功したのさ!!　これはある意味、改革が起きたのと同じことなんだよ!!実はどれも必要な要素だったのに私たちが気づかなかっただけなのさ!」  
（ごめんなさい、レイジーさん、ほとんどが何を言ってるのか全く理解が追いつきません…）

「そ、それで、今度はどんな色になったんですか？」

滝のようにとめどなく溢れて来る言葉にうろたえながらも、このままでは話が終わらない!と判断したエンリが、ホンのわずかに出来た言葉と言葉の間に、自分の言葉を滑り込ませる、実は色に関してソコまで興味がなかったのだが…、差し当たって、話の方向を変えられる可能性はそれしか浮かばなかったのだ。

「良いところに気が付いたね、エンリちゃん、それで出来たポーションがこれさ!」

そう言っただけレイジーが持ち上げて見せたポーションの瓶は紫よりも少しだけピンクっぽい色が濃くなり、しかもどことなくどろりとした濃さではなくうっすらと透けて見えるような透明感を持っていた。

一瞬、エンリもそのポーションに目を疑った、前に見たポーションは「どムラサキ」と言っている程の濃厚そうな色だったからだ、それに比べたら、今回ののはいつもの青のポーションの透明度のまま、水中に少し薄い紫を垂らし、そこにピンクっぽい色に近づけたような…なにか美味しそうな色をしている。

ありていに言えばラベンダー色をかなりピンクっぽくして、それに透明感を出した様な感じなのだ。

「それで…これって、前のとどこか違うんですか？」

つい口にしてしまった！と思うももう口に出してしまっただけからでは遅い。

またあの濁流のような説明が…と思って居ると、逆に落ち着いたような声が返ってきた。

「実は今回もそこまで効果の方が高まったわけじゃないのさ…」

珍しく落ち込んだようなリイジーの様子に心配になったエンリは「こんなにキレイなのに…なんでですか？」と聞いてみたくなり、声をかけた。

「それがね…回復する分は前の青いポーションとそんなに変わらない、ちよつと上かな？って程度なんだけどね…こいつは、即効性がある、飲んだり体に掛けたりすればすぐに効果が現れる…それは嬉しいことなんだけどね…」

「なら、そんなに落ち込むことは無いんじゃない？」

と言いかけると、エンリが最後まで言い終わらない内にリイジーが声に出して叫んだ。

「それでも劣化してしまうことは止められないんじゃないよ！」

「ムラサキのを開発した時は、鑑定してみた結果、劣化速度が遅く、通常のポーションより2倍長持ちすることがわかった、つまりそれにブリザベーション〈保 存〉を掛ければ、効果期間が失われるまで2倍長持ちするという嬉しい結果だった…だが、今回のほうまく行ったのはすぐに効果が表れること、見た目が青のポーションを少しピンクっぽい感じに近づけ、毒々しい色じゃなくなったこと、それとこの土地にある材料だけ

で作れるということくらいなんだよ、利点と言えるのは…」

その言葉のやり取りを後ろで聞いていたベルが、ポジション業界のことはよくわからないが…と前置きを言ってからリイジーに声をかけた。

「でもそれ、怪我の功名つてやつじゃないですか？ それ、市場に出してもいいんじゃない？つて気がしますけども…」

しかしそれに対して過剰に反応したようにリイジーがその言葉を遮った。

「な…なにを言い出すんじゃない!!お前は…いくらゴウン様の姿を真似ることを許してもらえる立場でも言つて良いこととそうでないことが…」

そこまで言われたベルが、何かを思い出したように頷きを返した。「ああ、そうでしたね、大丈夫です、その辺の事情は分かっていますよ。何も知らない若造が勝手なことを口走ってるわけじゃないので安心してください。」

呆氣にとられたリイジーには短く言葉を返すのだけで精いっぱいだった。

「お…おぬしは何を言つて…?」

「混乱させてしまったようですね、実は、私の後ろに居る彼女、フレイラは、ゴウン様とは面識がございませぬ、彼女の口扱いがあれば、多少はこちらの言い分もご理解して頂けるかと思ひますよ?、全ての研究を独占してしまうような欲深な方ではないのはご承知の上でしょうか？ キッチンと説明すればわかつて下さる方ですから…それに青のポジションの開発許可だつて出してきて、通常の店舗経営の方も認めて下さつてゐるんですから、その延長として提案すること自体は罪じゃありません、ですが、許可が出なかつたら、次に頑張ればいいん



ですよ。」

「おぬしは何者なんじゃ？今回のポーションも元をたどれば、その女が残してくれたレシピ通りに作ったらこれが出来たんじゃぞ？」

「ん？　ということとは純粹に、ゴウン様から支給された器具を使わずに、今回の新しいポーションが現地の材料だけで作れたと？」

「いや、通常通りの青いポーションを作る際は、ゴウン様に下賜された器具は使わずに…という指示を受けておるからの、ゴウン様へ進呈するポーションを作成する際のみ、専用の器具を使うことを許していただいておるのじゃ…つまりこのポーション自体は器具の使用を前提としてでなければ作れん代物…ということじゃの。」

リイジー自身は伏せている内容で、実は赤いポーション自体を決められた比率に応じて数滴混ぜると、色の変ったポーションは作れるのだが…そこまでの企業秘密をおいそれと口にするつもりも、信用してるわけでもない為、その部分だけ故意に隠し、ベルには伝えないようにしていた。

しかしそうとは知らないベルは、内心で自分の考えを勝手に構築させていく。

(そうか…だから、ユグドラシル要素の器具や成分が関わることでよって、その色や効果、出来栄えに影響を及ぼすようになったと…それに応じて内容も変化が起きて…となると…)

「わかりました、それなら、その話、少しこちらで預からせてもらえませんか？　そのポーションをもって、直接伺いをしに行ってみますよ。」

「しかしの…いかに私とて、そう言われて即座に信用してポーションを手渡すほど耄碌はしておらんつもりじゃが？」

「それはそうですね、信用されないのは当然です、ならば、このフレイラに2本だけ預からせてもらえませんか？見たところ、全部で5本できたご様子ですが？」

確かに、興奮冷めやらぬ内に飛び出した為に、リイジーはそのままポーションを持ってきてしまっていた。

「意外に目ざといの…」

「いえいえ、私たちが信用されないという事でしたら、そもそも、彼女の力添えがなければそのポーションは創ることが出来なかった…、ならばとりあえず、その5本の内、2本を彼女に預けるといふ形を取るの、必ずしも丸々、大損しているというワケではないのでは？ 1本はこの目で実際にその効果があるかの検証用、そして、ゴウン様到手渡し、判断を仰ぐ用。」

そこまでまくし立てた後、ベルはリイジーの手にあるポーションを指さして、最後の言葉を語りだす。

「残った3本はリイジーさんとンフィーレア君の保管用、そして私が持ち逃げした場合、リイジーさんが直接見せに行く用に…の1本つてところで問題ないのでは？」

「人の好みまで考慮に入れてくれるのかい…わかったよ、おヌシの言葉通り、そちらのお嬢さんの力がなければこのポーションはそもそも作れもしなかったし、作り方のアイデアも引き出せなかったのは事実じゃからの…1本は預けよう…だが、検証用って言うのは誰に試すんだい？」

周囲を見回しても、そこまで怪我をしている様子の者は一人もいない。

「いえいえ、体の傷ではなく心の方でね、少し影響が残ってる人が…あ

る意味重症なのが1人いますので…。」

そう言つて、後ろで顔色を悪くしているロバーデイクに手の平を向ける、「あそこにいるあの方です」とでもいいだけに…

「ほほお…そつちの人は先日移住希望でカルネ村入りしたもんかい…  
わかったよ、村民希望者なら無碍にも出来ないしね…」

そう言つたりイジは、テクテクと歩いていくと、ロバーデイクに新しいポーションを頭からぶっかける。

すると、みるみるうちにロバーデイクの顔色が良くなっていき、表情も明るくなっていった。

見るからに、今までの青のポーションとは違い、即座に効果が表れた、これなら戦闘中でも使えるかもしれない…と、見ていた全員がそう思った。

「効いたようだね…。どうだい？わかつただろ？ 一応、疲労とか心の衰弱にも効くつていうのがある意味強みかね…まだまだ病気やら状態異常にまで応用は出来ていないみたいじゃがの…」

そこまで言うと、「ホレ」とフレイラに薄紫のポーションを渡す。

「嬢ちゃん、しつかり頼んだよ？」

「ではフレイ、頼んだ、それを見せに行つてくれ、そして今の説明もちゃんと伝えるんだぞ？」 作るための器具は専用のを使用する必要

はあるが、素材は全て現地で作れた初の、青以外のポーションで、市場でさばければ、御方にも、純利から1割程度だとしても新開発品なので、割高で売れる計算も見込める。そちらへの得にも成り得るんじゃないか？とな…。」

「は…それでは、そのように御方にはお伝えしておきます。」

「それでは、ベルさま、私が戻るまでの間、これを預かってもらつてよろしいでしょうか？」

「そう言い、差し出したのは通称『イナズの珠』、つまり【雷精の精霊石】だ。」

「ふ…：しようがないな、解ったよ、無茶はしないさ、お前も早く戻ってくるんだぞ?」

「はい、すぐに戻ってまいります。」

そう言っつて、少し意識を何かで反らしたかと思ったら、「これで、御方へ『これからそちらに参ります』という言っつては済みました…：では」と言っつて、まるで猫の様に高く跳躍し、地を駆ける…：そしてみるみる内に見えなくなっつてしまっつていた。

ただ、その様を呆然と見つめていたレイジーに「そうだそうだ…：」と言っつてベルが何かを手渡してきた。

「?? なんじゃ? これは? ポーション瓶? じゃが、中身はポーションじゃないようじゃの…：」

手渡された物をシゲシゲと見るレイジー、ポーション関係ではエ・ランテルでも指折りの彼女でも、それ以上の事は解らないようだが、ポーションではないことがわかるだけでも大したものだとベルは思っつた。

「ええ、それも彼女、フレイラからの手土産でしてね…：彼女の特技…：タレントとでも言えはいいのでしょうか? そういうので、精霊の魔力を吸い上げて、濾過させることで、純粹な魔素に変換、それを溶液にして、その瓶に詰めた物です。」

よく見ると、片方は2本の赤々と燃えるような色をした…：完成された神のポーションとは違っつていて、透き通るようすで、それでいて揺らめくような成分が内封されていた。

その光景に吸い込まれるような感覚を覚えながらレイジーが尋ねる。

「それで? なんの効果だとかはわかるんかの?」

わずかに首を振るベルが「申し訳ないが…」と伝えてから説明に入る、その赤いのは「炎の精霊」から抽出された魔素溶液で、そういう属性が付与されることになるってくらいしかわからない…と。

そして、あと2本の瓶には、青々とした空のような色の溶液、そして、時折、黄色いスジが縦に何本か走っているそんな見た目の液体もあった。

「そちらは風の属性の中でも雷撃の方に特化している雷の精霊、それから抽出された魔素溶液ですよ…それもどれと組み合わせればどうの…という説明は私ではわかりません、フレイラ…彼女ならわかると思います…」

「おヌシらはこれからどうするんじや？　これからもちよくちよくこつちに顔を出したりするんかい？」

と問いかけるレイジーに、そばに居たエンリが事情を説明する。

「あ、レイジーさん、この人たちはこの後、用事があるそうでした、そちらに移動することになるようですが…それが何事もなく進めば、またこちらに顔を出してくれることもあると思う…って話ですよ？」

エンリとベルの方へと交互に視線を向けていたレイジーは短くため息をついて、表情をゆるめ、こう言うに留めた。

「ま、いいじやろ、このカルネ村の村長が認めとるんじや、ワシからは何も言うことなんぞないよ…身の保証の方は村長が確認済みなら問題はないからの…しかし…次に来るときは、そのナリ…改めておいた方がいいぞ？　いつまでもゴウン様のマネをされとると、どうにもいい感情を持たん村民は多いと思うからの…」

そこまで言う、「エンリちゃん、うちの孫のこともこれからも頼んだよ？　アレもわざわざ男としての能力を引き上げるポーシヨンなぞ、自作してまでアンタに付き添っとなるんじや…あまり夜中まで酷使しないでやってくれると嬉しいんじやが…まあ若い内は仕方ないのかの…」

そう言い残して、レイジーは背中越しにひらひらと手を振りながら、自分の工房へと歩きだしていく。

これからまた開発しはじめるのだろうか…、それとも少しでも休むのだろうか…？

そう心配するエンリが「あ、そうだ、リイジーさん！ お昼！ まだ余ってますよ？ いかがですか？」

と、声をかけると：

「ああ、それじゃ、工房まで持ってきておくれ…今なら、そこまで臭くはないはずじゃ…今回は特殊な工程じゃったからの、そこで食べながら色々手掛けてるとするよ。」

とだけ言い、工房の中に入って行ってしまった。

「さて、それじゃ、私たちも行くとしましょうか？ ヘツケラン」

「ああ、そうだな…イミーナ…そろそろ移動し始めないと、早めにあつちについた方がいいだろう…なにしろ迎えの馬車がくる帝都には俺らは居ないんだ…すれ違いなのは確実なんだし、いくらココから近いつて言ってもそろそろ移動し始めないと。」

「そうですね…ちよつとスツキリさせてもらったコトですし、行きますか…ちなみにヘツケラン、証明プレートはちゃんと持つてるんでしょうね…、行ってみた方がいいが追い返される、なんてのは御免ですよ？ ここまで準備して来たんですから。」

と、立ち直つたばかりのロバーデイクがリーダーに、肝心のものがあるのか？と問いかけている。

「ああ、ホラ、このポーチに入れてあるから大丈夫だって！ な？ アルシエ？」

ヘツケランがアルシエに声をかけると、アルシエは自分の腰に着けているベルトポーチを開けてプレートを見せた。

それはジエツトが彼女の為に、渡したベルトポーチ、何気に便利なので、それなりに大切に使っている。

「うん、この通り、ここにあるから大丈夫。」

「まったく、リーダーが持つてなくてどうするんですか？ いつの間に渡したんです？」

「まあ、いいじゃねえの！ 細かいことはさ、大事なのは無くさないことさー。」

「そういえばヘツケラン、あいつの件は話を詰めなくて大丈夫だったの？」

と、イミーナが急に話題を変えてきた。

「あいつ？」

単純に思い浮かぶ人物に心当たりがなく、首をかしげるとイミーナが教えた。

「ホラ、ルーズインタールの領主、カストクーズ候から頼まれていた件があつたじゃない、アレよ。」

と、言つたイミーナの言葉に、「ああ…」と初めて思い出せたもの…。

「あつちはいいや、キャンセルキャンセル！ 欲を出して命まで取られたくなんざ無いっての！」

という言葉にメンバー全員が肯定の言葉が上がる。

「たしかにそれはそうだね…」と。

「それじゃ、ベルさん、今まで世話になつて何もお礼も出来てないけど、無事に帰つてこられたら一緒に飲みましょうや！ その時はうちらがツマミやら酒やら用意しますから。」

実はベルも姿を変えて、墳墓には行く予定なのだが、それは秘密にしてあるので、まだみんなはそれを知らず、ここでお別れだけ…という前提でフォーサイトからの言葉を受け、ベルも返事を返した。

「ええ、楽しみにしていますよ、その時はご一緒しましょう！ それよりも早くお会いできる気はしますけどね…」

「そうですね…、もしそうなら嬉しいんですけどね、ご一緒出来ないのが残念です、うちのメンバー4人で、依頼主にもその契約となってるんで、ベルさんの入る余地が無いのが心苦しいですけど…大丈夫！ ここまでしてくれました、生きて戻ってきますって！」

「ええ、私もそう願っています、及ばずながら…ですけど、陰ながら応援していますよ！」

という会話をしていると、それを聞いていたエンリが声をかけてきた。

「あの…それなら簡素ではありますが、カルネ村で買い出しに行くときに使う馬車があるので、良ければそれに乗って行かれませんか？ 歩いていくより早く着くと思いますよ？」

そう申し出てくれた村長の言葉をありがたく受け止め、「それじゃ、お願いできますか？」というやり取りをしている。

村の奥の方から引き出してきたのは、薬草の壺を乗せるのによく使う、荷馬車。

ギリギリ4人が乗っていけるか？という程度のものだが、それに見合わないくらい上等な馬が繋がれている。

違和感が尋常じゃないな…と思いつつも、それを敢えて口にはしなかったフォーサイト。

「それじゃ、道案内の方はよろしくお願いします、フォーサイトの皆さん。」

そう口を開いたのは、エンリではなくンフィーレア、結局、村長が



村を空ける訳には…というトループの面々の制止もあつて結局、彼が馬を操り、近くまで付き添う形となつた。

村の在庫管理自体は、そこまで緊急ではない為、こつちの方を優先しても一日二日くらいはズレ込んでも大丈夫だろうという村民の意見もあり、どつちにしろ彼の役割と認識されていたのは決定事項のようだ。

「おお！任せてくれ！地図の方はバツチりもらつてるからよ。道中、護衛の方は俺らがなんとかするから安心しなつて！」

「それじゃ、村長さん、俺も一緒に行つて良いかい？ 荷馬車内は狭いと思うから、ンファイレアの旦那の隣にでも座つて、帰りの護衛は俺がするつてことでどうだい？」

と、言い出したのは一緒に扉から外に出てきたブレインだ。

送つていくと言うのなら、もちろん帰りの移動もあるのは当たり前前の事だ。

行きは、フォーサイトが居て安心でも帰りの道中にモンスターに襲われては、ンファイレア1人では第2位階の魔法までが精々だ、多数で襲われれば厳しい状態となるだろう。

「お、ブレインが居れば、道中安全だろうな、武技で〈空連斬〉だっけ？ あれで範囲外の敵も攻撃できるようになつたんだし、心強いな、ンファイの旦那！」

「あ、すみません、それじゃよろしくお願いします、エンリもそれでいいかな？ ブレインさん借りるけど…問題は無い？」

「ええ、大丈夫よ、ンファイの安全の為ですもの…ブレインさん、ンファイの護衛、どうかよろしくお願いします。」

そう言つて手を振るエンリの言葉に「ああ、任された！」と言つてひらりと荷馬車に乗り込むブレイン。

見送る様に手を振って、それを見守るベル。

そして、その光景を目にしてしまい、戦慄している村民が1人：顔面蒼白にして呆然と立っているのに気が付く者は周りに1人もいなかった。

「なんで？ ……なんであいつがいるのよ…、冒険者を辞めてまでこんな田舎の村に来たっていうのに…まさか、私のことを追って来たんじゃないよね…」

予め、自己紹介などはまだだったため、思いつきり不意打ちを食らっている女性。

エンリはフォーサイトのメンバーが全員無事に帰って来てからでいいよね、と思つて居たため、そこまで頭が回っていなかったのもあるし、ブリタの過去を細かく聞いたりしていなかったからこそ起きてしまった今の状況…、それから数日は生きた心地のしていなかったカールネ村の自警団の1人、元冒険者のブリタ。

彼女は冒険者時代、ギルドの依頼で「死を撒く剣団」のアジトにチームを組んでいたパーティで飛び込んだことがあった。

強い者との戦いに飢えていたブレインにパーティメンバーは返り討ちに遭い、自分以外は全滅、「女に手をかける趣味は無い」と言われ、「また挑む覚悟があるなら、何度でも来い！」と逃がされた過去があった。

その記憶は今でも強く刻み込まれている。

だからこそ、自分の力の限界を知ってしまい、冒険者を辞めてこんな村にまで避難したって言うのに…

なんでそのアイツがここに居るのよ！ …と、誤解が解けるまでと

にかくブレインと会わないように努めてしまう彼女であった。

## 探索 大墳墓編

### 第47話 いざ！合流の地へ！

ここは、ナザリック地下大墳墓

いよいよ、本日の夕方、陽が暮れてから：アインズ個人の気は進まないながらも始まってしまいうイベント。

「ワーカーホイホイ」

ナザリックの名を世に知らしめるための布石として、ワーカー連中を墳墓内に侵入させる計画

その為のトラップの設置やPOPモンスターの出現レベルの調整など、かなり大規模に変更させていた。

それは、ここ、ナザリックに於いて、未だかつてない程の「低難易度」に設定し直され、金貨を消費させる系のトラップは全てロック、発動しないようにした上、第一階層の表層、棺が並んでる区画（もちろんその一帯も棺を開けた際のトラップなど全ロック、発動不可にさせている）より先一帯、そこから一つ下に下りるまでは、出現モンスターもLV10未満のアンデッドしか出さないように、とか…。

他にも、通路上の転移の罫も発動を停止させ、可能なのは扉を開けて部屋の中に入った行動がトリガーになる非消費タイプの転移装置のみなど、細かい設定、設置位置の変更、早い内から極刑の対象を絞り込むため、棺の中に金品や、最高でも「上位」ランクまでの武器を撒き餌に敷き詰めておいた。

それをわずかでも持つていこうとでもしようものなら、最低でも「殺す」ことは確定事項となる。

という仕組みだ。

そんな最終チェックをデミウルゴスとアルベドを交え、アインズを含めた3人で墳墓内を見回り、自動で湧き出るスケルトンなどで、罫にかかってももらったりして、不備がないかの最終チェックを確認していた。

「どうでしょうか、アインズ様…あらゆる可能性を考えた上での配置、お気に召していただけたでしょうか？」

改まった物言いである。アルベドがアインズに意見を求めていた、それも、そもそもアインズがトラップの調整具合を確認しておきたい…と、言い出したことが発端である。

「ああ、お前たち…もちろんデミウルゴスのしていることもそうだが、私の方にお前たちの仕事ぶりを疑う気持ちなど全くない…、それは最初に言っておかねばならん、そのことは頭に入れて置け。」

そばに居た悪魔も、守護者統括もその言葉に打ち震え、背を曲げ恐縮する姿勢を取る。

「しかしだ…私が気になっているのは、今までナザリックのトラップの起動をせずにここまで…、いや、違うな、より正確に言えば、この草原にナザリックが転移してから「侵入者に対して」発動するトラップの効果になんらかの変質が起きていないか…そういう可能性の調査は今までしてこなかったが為、念のため、調べたくなったという事なのだよ。あまり自分を卑下しないことだ…お前たちの働きも頭脳も…ある意味で言えば私以上とも言えるのだ…自信を持つて然るべきだぞ？」

今まで、転移という事件による「トラップ効果の変質の可能性」などと言う、想像だにしていなかった事に考えが至る主人に驚き、尊敬の念を新たにする2名…。

昔からなんでも綿密に、敵のデータや、戦い方など…細かいところまで自分で理解しなければ気が済まないというのは「鈴木 悟」時代からの悪いクセだよな…と思いつつも、なんとかナザリックの頭脳の内の2人に対する言い訳がうまく行って安心する支配者をよそに、忠誠心は日に日に急上昇を見せていて留まるところを知らないのは、ある意味、自分が蒔いている種が発芽…またはある意味自業自得…を地でやっていることに全く気が付いていないのは本人ばかりなり…

なわけなのだが。

NPC達がそう思わざるを得ないほどの説得力のある言い訳を常にしているアインズだからこそ、それが「心からの言葉」だと信じて疑わない彼らからすれば、自らの主であり総まとめ役でもある神たるアインズ：その口から出される言葉なら、それは疑いようは無い為、ますますアインズの首を真綿で締めるとような結果へと続いていく。

「おお…考えてみれば正に、転移という事象が起き、毒の沼地から草原に転移するというありえない現象、それがナザリックの罠にも影響を及ぼしていないという保証はどこにもございません…まさかそれを失念していたとは…このデミウルゴス、一生の不覚でございます。」  
（いや…「一生の不覚」…って、お前、悪魔なんだから寿命なんかないだろ！）

「いやいや、私だって、最近まで思いつかなかつたのだ、違う立場だったら、私よりお前の方が先に思いついたかもしれないぞ？多忙を極めているデミウルゴスだからこそ、そこに考えを寄せる時間すら与えてこなかった私の方にその責はあろうと言うもの…それを責めてしまつてはひいては私自身が仕事を割り振った監督責任を問われることになるう…違うか？デミウルゴス？」

そう言われた悪魔には、その言葉に反論する言葉が浮かばない、そう言われてしまえば「自分が思いつかなかつた」それ自体が、自分の能力が足りなかつたのではなく、トップの責任だ、という慈悲深い言葉だと受け止めるしかない何よりの言葉であつたからだ。

「ありがとうございます…不詳の身である私のような者にそのような温情あふれるお言葉…このデミウルゴス、感涙の極みでございます。」  
「ああ、よせよせ、そのような問答をしている暇はあるまい？ 時間は有限だ、もうすぐここに招く「お客様」に対する歓迎の準備はしつかりとして、心行くまで楽しんでもらわねばな…、お前たちからの礼の言葉はそれからでも良い、気の早い客が招かれに来るより前に仕上げておかねば、我々の名にも響いて来よう。」

鷹揚に言葉を紡ぐ主人に「まさにその通りだと思われます、アインズ様」とアルベドも同意見のようだ。

「まあ、今まで見た感じ、これと言つて異常が生じている様子はない…この分ならまず歓迎の趣向としては…ん？」

アインズが、言葉の途中で何かに気を取られたように中空に目を向ける。

アルベドもデミウルゴスも釣られてそちらを同様に見るが、そこには当然、何も無い。

「アインズ様、どうかなされたのでしょうか？」

デミウルゴスが恭しく尋ねて来る。

「ああ、いや、すまないな、こちらの事だ、この分なら趣向としては問題なく進みそうだからな…ここから先はアルベドの主催で色々と準備しておいてもらおう、デミウルゴスは、罫の効果に以前と変化があつたりした場合に備え、そばに控えていること、私は、用を思い出した…少し自室に戻る。何かあつたら知らせに来るように。」

「は！ 畏まりました、アインズ様！」

2人がそろつて礼の姿勢をとる。

これが外に出る、だつたり、少し席を外す、なら供の物を…と言いだす所だが、自室であれば「ギルドの指輪」で一足飛びなのだ、自室にはエイトエツジアサシンもいる、なんの不安があるうか…2人は、アインズが姿を消すまで、その背中を見守っていた。

★★★

「さて、それじゃ、迎えに行くとするかな…〈メッセージ伝言〉」

アインズはこめかみ辺りに指を当て、「これからそちらに〈ゲート転移門〉

を開く、開いたらこちらへと繋がるので、入ってくるといい。」そう言う  
うと、回線を切り〈転移門〉を開く。

その闇の扉に半身だけ体を入れてみたアインは、背中側はナザ  
リック、前面部はナザリック地表部というかなり異次元な状態にい  
た。

「しばらくだな、フレイラ、さっそくで悪いが、私の手を取れ…、そこ  
で話をしよう」

「申し訳(ご)ざいません、御身の手を煩わせることになった上、お目通り  
も叶いましたこと、正に恐悦至極に存じ奉ります。」

(きようえつ? なんだつて? あとで調べておこう…)

「イヤ、何もそこまで堅苦しく考えることは無い、先ごろ、お前の言っ  
ていた要件とやら、落ち着く場所で聞かせてもらおう…。」

「は、それでは、失礼させていただきます。」

ナザリックの真なる支配者、その者の手を取り闇の扉を通る。

すると、自分が移動したのは、自分が目覚めた主の部屋と似た部屋  
の造り、しかし明らかに違う内装や、インテリアの数々、そしてベツ  
ドの位置の違いなど…、一目見て理解する。

「これは、アイズ様の御部屋…私のような末席の者に足を踏み入れ  
る許可をくださるとは…これ以上ない誉れにございます。」

「ああ、いやいや…その辺でいい、自室に呼んでまで感謝されては私の  
方が「どこなら大丈夫なのだ?」と考えねばなくなる…守護者た  
ちの目もあるしな…、まあエイトエツジアサシンには口止めをしてい  
るので、余計な心配はいらんが…背景だとも思えばそこまで気にな



るまい。」

と、そこで話をすることを説明された御方は自らのベッドに腰掛けられ、聞き入ってしまうような支配者としての凛々しいお声を出される。

「それで？ そのポーシヨンとやら、見せてもらおうか？ どのようなものが出来た？」

「は……こちらにございます。」

アインズは手渡されたポーシヨンを見て一言。

「今度は透き通るようなヤツか……しかも薄ムラサキとピンクの混合色……面白いな……ピンクに近づいたという事は少しはユグドラシル成分が強まったという事か？」

「いえ、製作者の話では劣化は止められないとのこと、回復の度合いも青のポーシヨンより多少は上……程度だと言っております……ですが作成に於いて使用した器具、材料、素材など全ては現地産100%で作れる品だという由よしにございます……」

「……ん……改めて聞いてると、どこか時代劇じみた物言いが時折出て来るな……それは製作者……ベルリバーさんの影響か？」

「わかりません、私の「せってい」なる物がどのような文章で書かれていたのかまでは……しかしたっち・みー様や、あまのまひとつ様などからは性格に関して手を入れられた記憶はございませんので、恐らくはそうなのであろうと……」

そこまで話していると、急に立ち上がられた御方は私の肩を揺らして、今までと違ったお声で問い詰めに入られてしまった。

「たっちさんとあまのまささんがなんで、今の話で出て来るんだよ！」

話してほしい、フレイラ……お前とたっちさん、あまのまささんとはどの

「ような関連があるんだ？」

「……（この御方も我が主と同じ…我々の為にと必死にご自分を偽って…いや、我々の望む姿を演じようとして下さっている…なんという懐の深さか…本来の自分を出せないなど、どれだけお辛い「コトか…」少々、お時間をいただきますが、よろしいでしょうか？ 私が知る範囲の内容を語るだけでも時間はかかると思われますが…」

「ああ、そんなことどうでもいい！ 今は二人の事だ、それを教えてくれ！」

「は！承知いたしました。」



「さて、今日もたんまりドロップ品は集まったことですし、私の部屋でたちさんとあれやこれや言いながら作った品々…あの子に着けて上げましょう」

そう言いながら、ベルリバーの部屋の扉を開けるあまのまひとつ…彼のカニの爪のような手で、どうやって開けているのだろうか…と思う者も居るかもしれないが、彼は鍛冶職、カニの手では不可能な事も容易にこなせる、それも元々は種族の特徴としては、ある意味コキユートス同様、4本の腕があるためだ。

4本の内の上腕、それがカニの爪のような武骨な…それでいて攻撃の際はいかになくその威力を發揮するあまのまひとつの自慢の武器であり、信頼できる腕でもある。

そして下腕の2本は細かい作業が出来る様にと、ちゃんと人の腕のような細い腕…つまりそっちの方で鍛冶仕事の方はこなしているのだ。

必然的に、そっちの細い方の腕でドアノブを回し、開けた。という事になる。

「毎回、私にカギ開けの役をさせるの辞めてもらえませんか？これでもリアルでは私、法の番人なんですからね」

そう言っただけで扉をくぐってきた二人目、クラン時代リーダーを務めていたという話を「私」の前で何度も聞かせて下さった至高の御方々のお一人、たっち・みー様がまたいらして下さった。

「そんなこと言っただけで、たっちさんだっただけでこの計画を出したとき、割とノリノリだったじゃないですか？」

「それは、私の力が及ばなかったあの一件が未だに私の中から抜けてくれないからです…あの時…るし★ふぁーさんが「反対」の方に入れば…いや、あまのまさんもあの場に居てくれれば…と何度思っただことか…」

「それを言わないでくださいって…だからこうして私も協力してるんじゃないですか！私だっただけで、その場に居れば諸手を挙げて賛成票に入れましたよ！ヒーロー好きを自負する漢の名に懸けて！…でもそれが出来なかった…その場に居合わせることが出来なかった謝罪ですよ。これは…。」

と、うなだれ、申し訳なげにしている「あまのま」が「たっち」に首を向け、一つ問いを投げかける。

「それに少しとは言え、共有資産であるギルド保管用の素材まで使うほど、自分を責める必要あるんですか？」

と、あまのまが言えばたっちも反論する。

「あまのまさんだっただけでわかるでしょ？ 僕らが餞別として彼に贈ったあのベルト…どんな意味が込められているか…その上で彼がそうとは知らず…でしょうが、NPCとして選んだ…「ジャガー種」、これを生かさなくてどうします？」

その言葉にあまのまの方も首を縦に振り、肯定の意を示した。

「まあ、それは私も同意です、ある意味これは私たちの勝手な暴走、夢を実現化したい、妄想した場面が本当に起きるなら…という認識で勝手にしていること…他人の造ったNPCに無断で手をかけるなんてこと、許されはしないでしょうが…、そこはブレーキ役のたっちさん

がいるから安心して「この子」に自分の想いを託したりできるんでしょう?。」

「まあ、そうですね…彼もどうやら人獣種ライカンスロープの種族を最大限に生かしたかったんでしょね、そういう種族レベルを取っていることからも領けます。」

「私たちがしてイイのは、この子の装備に、本来託されていなかった僕らの想いを乗せてあげること、そしてこれが活かされる日がいつか来てくれるように願う事だけ…まあ、NPCな訳ですし、このまま、『彼』が来なくなったら、その意味もないんでしょうけどね…でも僕は信じますよ、「この子」がココに居る限り、『彼』はきつとまたここに戻ってくる…『彼』は「この子」を置き去りにはしない…そう信じたいんです。」

…そう、どこか遠くを見るような視線を宙に泳がせながら語るたち、あまのまひとつも同調の言葉を返す。

「そうですね、それはワタシも同意ですよ、たっちさん、この前は半獣化した時の両腕にウチらが駆けずり回って素材を集め、精魂込めて作成したこの装備にふんだんにデータクリスタルスロットを拡張させてまで作った「シザースガントレット」…あれを付けるところで終わったんでしたよね。」

「そうですね…そこで今回はこれ! このヘルメットですよ、これを…こうして…こう。」

「おお…そうしますか…それで、その白の〈聖印〉ホーリーシンボル部分の色を、特殊効果のある光でエフェクト付けて関連付け…ということですね。」

「そうですね…「この子」は「あのベルト」を装備する『彼』をサポートするために作られた、それなら、そういう存在なりの装備はこれしかないでしょ?。」

「ああ、だから「シザースガントレット」にあんなに拡張スロット作って、クリスタルあんなにぶち込んだんですね？ やつとわかりましたよ…あれらの効果の意味が…と言うより銃とかドリルの時点で薄々は予想してましたけどね…」

「いつか、『彼』が、「この子」の半獣化フォームを見て、驚いてくれる日が来てくれること、楽しみにしていきましょう。」

そこであまのまひとつが、たちち・みーに思い出したように問いかける。

「じゃ、この前…録画機能まで使って、音声仕込んだデータ、あれもそのヘルメットに仕込んだりしてるんですか？ 『彼』がウチらからのメッセージを見られるように…？」

「ああ…あれはおまけ…ですね、彼がそれに気が付いて、見てくれるならそれが一番いいんですが…さすがにあんな無茶なトリガー条件は満たされることは無いでしょう…「この子」…NPCですからね、可能性があるとすれば、ソコの違和感に気が付いて、色々試行錯誤してくればもう一つのスイッチを押ししてくれるかも…という僅かな可能性にボクらの想いを乗せておきたい、そのくらいですよ」

「本当にワタシ達って、酔狂ですよね…他人のNPCに…しかもサービス中に起動するかどうかも不透明な【作品】にこんな思い入れを突っ込んだりやってるんですから…。」

自嘲するようにあまのまひとつが笑顔のエモーションの後、苦笑のエモーションもたつちに向けてうかべる。

「そこは一応、自分の中で線引きはしてますよ？ さつきあまのまさんはギルドの資産に手をかけたって言ってましたけど、それは違います。これはワタシ達二人が個人的に、他のギルドメンバーが居ない時に「拾った」素材のみを使って、作り上げた装備の数々…これらの材料自体はギルド資産から抜き出したりしてないでしょ？」

「まあ、たっちさんがそう言い張るんなら私もそうだという事にしておきましょう。…でもこれって不法侵入ですよ？ いいんですか？ 法の番人さん？」

「あ、それを言いますか？ それを言うなら、私はあまのまさんが悪事を働かないように監視する役目ですから…目を離す訳に行かないですよ？」

「ぷっ！ 相変わらず、そういう「自分に対しての言い訳」をするの、上手じゃないですよ、たっちさん…。」

「そんなことどうでもいいでしょ？ それより…これで…今日でこの子に私たちの望みを託す作業は済みましたね…。」

「ええ…、たっちさんも、本当に娘さんの為に？」

「はい…娘の心臓に疾患が見つかりましてね…かなり重い状態です…遊び半分でユグドラシルにログインできるのも、精々があと一度が限度でしょう…嫁にもこっぴどく言われていますし…そろそろ引退の時期…なんでしょね。その時はみんなに別れを…いや…せめてモモンガさんにだけはちゃんと別れを言わなければいけないとは思いますが…娘の件はモモンガさんとは関係のないこと…余計なことでモモンガさんが悩んだりしないようにそこは伏せるつもりです。」

「そうですか…たっちさんがそう判断したのならいいでしょう…それなら私も、近い内、自分の持ち物、アイテム、鍛冶道具なんかも全部、自作NPCの【鍛冶長】に預けておくつもりですよ。」

「え？ あまのまさんまで何言ってるんです？ あなたまでそれに付き合うことはないじゃないですか？ 楽しんでてくださいいよ！」

たつちが叫ぶ、あまのまひとつ、彼を誘い込んだのは自分だ、ヒーローを熱くメンバーに語っていた時に通りすがりの彼が「その話、ワタシもそう思いますよ、あれは傑作ですよね!」という出会いがしらの遭遇が、ギルド入りになるきっかけとなった。

それからはずっとギルドのみんなの装備を作る手伝いをしたり、夢の装備を作る為、またはたつち・みー打倒を果たすための武器を創りだしたい…等々、そんなギルメン達のための武器、または防具を作る手伝いもしてみたり…そんな彼は絶対にギルドに無くてはならない存在の筈だ。

だからこそ、ここで自分に付き合わせるような形で辞めさせるわけには行かない。

「何を言ってるやら…ですよ? たつちさん、ワタシは、あなたが居たからこそ、ユグドラシルの真の楽しみに気づくことが出来たんです、あなたが居ないなら、ここに意味なんてないですよ。」

「あまのまさん…」

「それに、たつちさんが居なくなったら誰が私のヒーロー談義を熱く語るどころ、真に理解してくれると言うんです? モモンガさんなら話には付き合ってくれるでしょうけど…困ったような顔されるのは本意じゃありませんよ…。」

「じゃ、どうされるんです? ギルマスには…家庭の事情? または仕事の関係だともっ…」

「そうですね…深く聞かれたら…言い訳くらいはさせてもらいますが…本当の理由は言えませんね…それこそモモンガさんに失礼な言い分ですから…」

「そうですか…モモンガさんは…いつまでここに居てくれると…、あ、

いや、その話は止めておきましょう…今そんな話をしても意味は無い  
ですしね…」

そんな会話が遠くなっていくのを「起動されてない状態」の私が、記憶に焼き付けていることには…当の二人は気が付いていないのでしよう…そのまま、扉を閉めて出て行かれたのが…私がたっち様と、あまのま様をお見かけした最後のお姿となります。

話し終わった後もしばらくの沈黙…かなり重い空気がその場を支配する。

「そんな…たっちさん…あまのまさん…そんなこと、一言も言ってくれなかったじゃないですか…何です…それを聞いたら悲しませるからとかですか？ それとも…ギルドマスターとして心もとなかったからですか…本当のことを聞いたら失望するとも思ってたんですか？ そんなに信用がなかったとでもいうんですか？」

（ああ…至高なる御身が…心を痛めておられる…私は…私はどうすれば…御方の為に、私が出来ること…）

背中を丸め、頭を抱え、下を向いたまま己を責めるような言葉を繰り返し、出口のない迷路に迷い込んだかのような御方…その心中、いかばかりか…自分に出来ることなど、至高なる方々と比べたらほんの小さいことしか出来ないが…せめて少しでも心の救いとなるのなら…

そう思い、不敬かとも思った、そんなことをして叱責をされるかも…そうも思ったが、それでも…この身が滅ぼされることになろうと、己の身にしかできないこと…そう考えると、思いつくのはその行動しか思い浮かばなかった。



うずくまるように体を丸め、頭を抱え込み、ひたすらに自分を責め続ける御方の頭を抱き寄せ、胸の内で包むようにする。

一瞬、ピク…と動かれたようだが、それも一瞬の事だ、数秒もすると落ち着かれたのか、お言葉をかけて下さったその声は、いつもの声に戻られていた。

「ありがとう…フレイラ、お前のお陰で少し気持ちが楽になった、まさかベルリバーさんのNPCであるお前にそこまでしてもらえるととは思って居なかつたぞ？」

「至高なる御身、モ…いえ、アインズ様が心を痛められる必要など、どこにもありません…、御方々は、アインズ様のことを慮おもんばかつておられました…誰よりも慈悲深く、心のお優しいアインズ様だからこそ、聞かせるべきではないと…そう思われたからかと思われま…私のよくな矮小な身で、至高なる方々の心の内、その全てを理解しきるなど…到底かなうべくもありませんが…、まずそれが絶対間違っているなどということは無いかと…僭越ながらそう考えております。」

落ち着いた様子を肌で感じたフレイラは、す…と体を離し、すぐにまた跪く姿勢に戻る。

「うん…そうだな、あの二人は、決して人を、同じギルドメンバーを侮って見るような人たちでは無かつたな…それに気づかせてくれたこと…礼を言うぞ、フレイラ。」

「もったいないお言葉…過分なまでのお言葉…痛み入りましてごさいます。」

「やはり、お前はベルリバーさんが第一だからか、それとも彼がそうあれと作ったからなのかは知らないが…他のNPCとは少し温度差があるな、もちろん悪い意味ではないぞ？良い方の意味でだ。私も必要以上に身構えなくて済むというのは、ある意味では気が楽だ…、それはそうとポーションの話であつたな…すまないな…話が脱線してしまつていた。」

「いえ、私が不用意なことを申し上げてしまつたが故の過ち…我が身

を以って謝罪させていただきます、それで足りなければ…この命を以って謝罪を…」

という言葉を言い終わらぬうちに至高の御身はその言葉を遮る様に、ご自分のお言葉を割り込ませることで制止に入られ、差し止めてこられた。

「良い！ その必要はない！ フレイラールアルアセンディア、お前の罪の全てを私は許そう…そもそもお前に罪などない…私が聞かせると命令したのだ…それなら責任の有無は私の方にこそある…それをお前に擦り付けたのでは上に立つ者として私は失格となってしまう…もう一度言う…お前に罪は無い。それを心に刻んでおけ。」

「は！ 心優しきお言葉…我が身に余る寛大なお心に感謝いたします。」

(やっぱりどこかでNPCの忠誠心は残っているのか、要所要所で他の皆との態度とダブって見える時があるな…)

「それにお前の命は私の一存でどうにか出来るものではあるまい、お前の命はベルリバーさんの為にこそある、ならば、その命は「彼」の為に使え！ 私のような者の為に命を散らすような真似などは絶対に許さん、それを心しておけ！」

(ただポーションを届けて説明をするだけのお使いで「なんでNPCが自殺するようなことに？」なんて問い詰められたらどうするんだよ！「ごめくん、テヘペロ」じゃ、済まないんだぞ！)

「さて、100%現地産という事だが…、どのようなものになったのか見させてもらうとするか…オールアブレイザルマジックアイテムへ上位道具鑑定」

しばらく動きが止まっていたかと思うと、「ふむふむ…なるほど…」と呟きが漏れる。

「たしかにこれは面白いな…先ほどの説明の通りのようだが、隠された効果もあった。劣化速度自体は青のポーションとそう変わらない

が…〈保 存〉の魔法をかければその効果は永続化される…つまりは青のポーションの様に期間限定の〈保 存〉をかける必要があり、効果期間が切れる前に飲み切るか…そうでなければまたかけ直すか…などしなくても一度の〈保 存〉で完結する…条件としては微妙だが…最終的には劣化しなくなるという点ではユグドラシルポーションに近く、だからと言って効果は青のやつと基本的には変わらない…だが、魔力の高い者が使ったり振りかけたりする場合と、魔力の全くない者が使ったりする場合では違う効果が表れ、魔力の高い者が使った方が回復量上がる、という点は面白いな…。」

「いかがいたしましょう？我が主からは、これを市場に出せば普通のポーションより価値は上、価格もそれに応じて高く設定できるため、1割の見返りでも数が出回れば、より多くの利益につながるだろうというお話でしたが…？」

フレイラがそう伝え終わると、アインズは少し何か考え込むようになり…少しして結論を出す。

「うむ、これは市場に出すという点については賛成だ。…だが今すぐ、どこで…という許可は出せん！これを下手に世に出したりすれば、それだけ影響も大きいだろうが反作用…つまり抵抗勢力との軋轢も大きくなるう…これは、あと少し待て…それまではカルネ村内のみ、臨床実験、言い換えれば村民全てに抵抗感がなくなるまで…、認識が広まるまでは村外には出さないように徹底させよ。…どの都市、街、国で広めるかは後々、伝えることにするが…それまではくれも外に情報が洩れるようなことにはならぬように厳命する！」  
(あとでナザリック内にもそのこと、みんなに伝えないと…、とりあえずその先のごとは保留だな…。)



「はあ…のどかだねえ…」

思いつきりのどかな時間を満喫しているヘツケラン、それを咎める者は居ない、誰しもが同じ感想だったためだ。

「まあ、気持ちにはわかるがな…、だが気を緩めすぎじゃないか？　護衛としてここにいるんじゃないか？」

ブレインがそう注意をしたが、ブレイン自身も少しはあの空間から解放されて少し気が抜けている部分はある…が、その目も、感覚も…周辺を警戒することに終始させていて、ヘツケランの様にだらけている雰囲気は無い。

「…結局、戦闘の最中、一度もコレは効果を現さなかったけど…どうやったら発動する…？　ベルさんに聞いておくべきだった…。」

アルシェが自分の腕に嵌めている…ベルからもらった腕輪を見つめる…その腕輪の輝きは変わらずに見とれてしまいそうな程だが、ずっと何も起きないと不安にもなってくる。

どうすれば効果が出るのだろうか…そしてどんな効果が込められているのだろうか…という不安もあった。

「まあ、いいじゃないの…あの人が渡してくれた物なら、効果はちゃんとしてるんじゃない？」

通称「ペロロンアーマー」を装備しているイミーナからすれば、すっかりこの鎧にも抵抗感はなくなっていた。

攻撃力は申し分なく、自分のイメージ通りに盾は浮遊して勝手に動いてくれるようになる、一度動けば何もイメージしなくても勝手に防御に回ってくれるのだ、便利以外の何者でもない。

何も無い時は、アルシェがしてたように、浮遊盾をウエスト部分に密着させることにより、露出している見た目を隠す役割もさせている。(装備中は、憧れだったそのままのスタイルに固定されてるみたいなんだもん…外したくない気分なのよねえ…)

他のワーカーチームと比較しても、これは自慢の一品だろう、これを見た他のチームの反応が楽しみだ、と思って居るのはまだ口に出していない。

そんな中、いち早く異変に気付いたのは緊張感をすっかり手放し、

荷馬車の荷台に体を投げだし、空をのんびりと見上げていたヘツケラ  
ンだ。

「なあ…おい、みんな、アレ…なんだろな？ わかる奴…いるか？」  
ヘツケランが何かを見つけたように天を指さした。

馬を操る必要のあるンフィーレア以外は全員が空を見上げた…す  
ると、空高く、ポツンと黒い点が見える…それは次第に大きくなって  
いき…いや、大きくなっていくのではない。

こちらに近づいてくるようだ…近づいてくるにつれて見えて来た  
もの…それは黒い点ではなくボール状の黒い物体、その中に苦悶にの  
たうち回るような表情の顔、それが何人分だというのか…数えきれな  
い程に入れ代わり立ち代わり「表情たち」が表面に現れ、消え、そし  
てまた現れ…を繰り返している様が見て取れた。

「ありやく…なかなかの相手だぞ？ やべえ…非実体のモンスターだ  
…魔法の効果や武具じゃなきゃ通じない相手じゃなかったか？」

「ええ、確かそうでしたね…アンデッドの知識は広めにしてあります  
が…なかなかお目にかかれない存在です…。」

「どんな名前だか…憶えてるか？」

「確か…「スクリーチ・ボール・コープス痛苦の怨嗟屍魂」ですね…」

「みんな…戦えるか？」

「ええ、問題ないわ」

「こつちも…大丈夫…。」

「なら、先手必勝！ですね！」

フォーサイトのメンバーとブレインは荷馬車から降りて戦闘態勢  
へと移る。

しかし、そんなフォーサイト達を眼下にした黒い球体状のモンス  
ターは、全周に断末魔のような数多の表情たちをびっしり張り付かせ  
ながら、多重ステレオサウンドのような聞き取りにくい声で警告を  
発してきた。

「聞け！愚かな人間どもよ！ 我は先ぶれである…」

すると、別の苦悶の表情を浮かべている顔からも言葉が発せられた。

（「どうやら向こうは私たちに時間をくれるようです…ホラ、ヘツケラ  
ン、行きますよ？」）

（「あ、悪いなロバー…。」）

「寿命も短く、刃が体を突き抜けただけで生命が尽きてしまうひ弱な人間達よ…その身で、これから先、汝らが踏み入ろうとする地は死地である。」

（まだ時間はあるようですね…）

（「では、ブレインさんも…支援させていただきます、これをどうぞ」）

（「あ、俺にもしてくれるのか、悪いな…感謝する…。」）

そして、また違う悲鳴をあげるような大口を開けた表情も叫ぶ。

「その死地に踏み入る資格があると自負するのであれば、我を倒して見せよ！ 勝利でその証を立ててみせるのだ…。」

（「まだ時間はあるようです、それなら護りを固めましょう、  
〈魔法効果範囲拡大化〉〈ホーリー・サルベージョン聖なる救い〉」）

更に、怨嗟のような表情をありありと見せる表情は最後の警告を出した。

「戦いの中で勝ち目がないと理解したなら逃げよ、我らは追わぬ、敗者の証として…このようなコトをした依頼主を恨むが良い！」

それを最後に<sup>スクリーチ・ポール・コープス</sup>痛苦の怨嗟屍魂も戦闘態勢に入る。

上空の…まだ射程の遠いと思われる位置から精神をかき乱すような、耳を覆いたくなる絶叫が響き渡る。

しかし、異空間で難度を上げ、レベルアップしているメンバー達は<sup>レジスト</sup>抵抗に成功していた。

「こいつは長引いたらまずそうだな…早めに決着をつけるぞ！ イミーナ！」

「ええ！ 任せて！」

その鎧の効果で電流の逆る弓と矢を作り出し、雷撃の矢を放つ。

すると第4位階魔法<sup>サンダー・ライトニング</sup>へ雷<sup>電</sup>の効果を宿した雷矢が<sup>スクリーチ・ポール・コープス</sup>痛苦の怨嗟屍魂に直撃するとともに、その魔法特有のエフェクト、天から地に落とされた稲妻が、直撃した<sup>スクリーチ・ポール・コープス</sup>痛苦の怨嗟屍魂に対して、追加ダメージを与える。

それは宙に浮かんでいる、若しくは空を飛んでいるモンスターのみに通じる追加ダメージだ、地上の敵の場合は、そういう効果は表れない。

ギヤアアア…と、ダメージが通った痛みに苦痛の表情を浮かべた敵は反撃を試みる。

「やるな…人の子の分際で…、それではこれではどうかな？ <sup>スケアー</sup>恐慌！」

向けられた対象はイミーナだ。自分に攻撃を届かせた存在に対象を絞るのは仕方ないと言えた。

「う…う…う…う…」

次第に彼女の様子はおかしくなっていく、どうやらこれには抵抗を  
失敗した様子だ。

しばし呆然となり、次第に身動きが取れない程の恐れに囚われてい  
るようだ。

「ライオンズ・ハート  
獅子の如き心」

ロバーデイクから支援魔法が飛ばされる、すると効果が表れイミ  
ナの心はもはや、何の影響も受けていない。

「ありがとうロバー！ 助かったわ」

「いえいえ、それも役目ですからね、気を付けましょう」

「こつちも忘れてもらっちゃ困るぜ？ 〈空炎斬〉！」

「こいつも喰らいな！ 〈空連斬！〉」

ヘッケランとブレインが、いまだに宙に浮かび、剣の届かない位置  
にいるモンスターに攻撃を仕掛ける。

異空間での戦闘を通じ、手に入れた力をふるうヘッケランと、そし  
て自力でその域まで到達するに至ったブレインが、共に闘気を剣に宿  
し、その気を剣の刃並みに研ぎ澄まし振りぬく連撃を見舞う、すると  
それは直線で最短距離を通り、ヘッケランの飛来する炎の剣閃と同じ  
タイミングで、スクリーチ・ボール・コープス痛苦の怨嗟屍魂に到達、その3連撃はダメージを与え  
るには充分だったようだ。

相手は傷つき、更にその傷口を炎で焼かれ、アンデッドの弱点であ  
る炎により、第4位階の雷撃並みのダメージを受けてしまう。

何故なら、ヘッケランの双剣にはロバーデイクからの神聖属性が付  
与されているため、炎のと両方のダメージが上がっているためだ。

「対策を取ってないモンスターなら弱点はやっぱり効果的なよう  
だな。」

とヘッケランが言うど…



「だが、これで終わりじゃないぞ？・気を緩めるな！」  
横で警戒を緩めないブレインの檄が飛ぶ。

「なるほど、その地に至らんとする力は身に着けているようだな…だが、その程度で得意になるなよ！〈負の闇域〉」

フォーサイト達の周囲を闇が支配する…それと同時にへ負のダメージがメンバー達に継続ダメージとなつて襲いかかり、徐々に体力も奪う。

体が重くなるような…行動にペナルティでも負つたような感覚に囚われ、痛みも増している感じさえする。

闇の中に全員が囚われ、時間が来るか術者を倒さない限り、決して消えることのない深き暗黒が全員を蝕んでいく中、上空で高らかに笑う痛苦の怨嗟屍魂

「ハッハア！ 思い知るがいい矮小な人間どもよ！ 闇の牢獄で弱り果てるがいい！」

そんな中、不敵な声で立ち向かわんとする一人の声が、闇の中から痛苦の怨嗟屍魂に届く。

「勝ち誇るのはまだ早いんじゃないか？ 笑うのは相手の死に様を確認してからがいいぞ？」

「この声の直後、その声は技の名前を叫ぶ。  
「へ疾空瞬間」

闇の空間がまだ展開されている為、何がされているのかわからない痛苦の怨嗟屍魂が何が起きるのを見ていると、発声と同時に「パチン」という小気味良い音が聞こえたかと思つたのと同時に痛みが走る。

「悪いな、こっちは〈負の属性〉の攻撃には耐性があるもんでね…この程度なら、行動に制限などは受けないさ」

「う…おおお…!!」

痛みの為、大きくバランスを崩し、少し落下するものの  
スクリーチ・ボール・コープス  
痛苦の怨嗟屍魂はなんとか体勢を保ち、浮かぶ姿勢を維持する。

しかし、その位置はもうブレイン達の頭の上くらいの高さまで高度を落としてしまっていた。

「おのれ！ おのれえええ!!」

「そっちは痛みに耐性はないみたいだな…アンデッドなのに痛みはあるか…、難度が低いからってことかもしれないが…?」

「お前は…お前は何者だああ!!」

「俺かい？ 俺はしがない風来坊さ、今はとある村で、これから名を上げることになるだろう指揮官の下に就いている…そんな程度のただの剣客さ…名乗る程のもんじゃない。」

そう言うと、ブレインは腰を落とし最後の攻撃の体勢に入った。

無言で、武技を連続発動させ、〈呪われし〉のクラスに共通する特性、〈負の属性〉を乗せた攻撃（それはアンデッドなのでカットしてあるが…）に、力任せに近い重攻撃を通常攻撃と同じ扱いで出せるようになったダメージによる、ブレイン得意の更なる連撃、そして、その身が振るう刀は「非実体」にもダメージを通し、更に「神聖属性」でもある。

もちろん、命中率が爆上がりする〈領域〉も展開中だ。

「くらえ！ 〈連斬 虎落笛〉」

通常の虎落笛もがりぶえの攻撃に、更に逆側からの虎落笛もがりぶえを加え、左右からの頸部切断に特化させたブレイン独自の武技、それをアンデッドである敵に放つ。

切断する首はないので、即死効果はないが…、それでも2度の同時攻撃によるダメージの積み重ねは大きい。魔法の武器ではないが、荷馬車を降りた際、ブレインもロバーデイクに〈武器神聖化ホーリーウエポン〉の魔法をかけてもらっている。

魔法効果による〈神聖〉効果と、武器由来の〈神聖〉の攻撃が重なり、アンデッドにとっては致命的な二連撃となった。

「みごとだ…その実力であれば…最低限での実力はあると判断した…行くがいい…死が待つ終焉の地に…」

そう言うと、スクリーチ・ボール・コープス痛苦の怨嗟屍魂は崩れ去り、そこにはすでに何も残されていらない。

「俺らが倒さなきゃいけないのにブレインが倒しちゃったのかよ…、お前が認められてどうすんだ？ カルネ村に戻るんだろうが？」

闇の魔法からやつと解放され、なんとか体が動く程度には回復したヘッケランがツツコミを入れて来る。

「まあ、それはそうなんだがな…、あの魔法の影響下では、お前たちの支援は期待できないだろうと思っただったんだが、余計なお世話だったな…でも無事で何よりだ…、あんなのがゴロゴロ出て来る場所だ、気を付けて行けよ？」

そう言っつて、ポンとブレインがヘッケランの肩を叩く。

「あつちに見える…まだ遠くだが…あのテントがいくつも見えるアレ…あそこがお前らの行くところなんだろう？ 俺はこれでカルネ村に戻るとするよ…あ、ンフィーレアさんちよつといいかい？」

「あ、はい？…なんででしょう？ブレインさん」

ンファイアが、荷馬車から降りようとしているが、それを止めてブレインが口を開く。

「ああ、下りて来なくていいですよ…そこからちよつとヘッケランにフレイムアロー〈炎の矢〉を一発、撃つてやってくれないですか？」

「ええ？ 当たっちゃっていいんですか？」

「まあ、とりあえずやってみて下さい…な？ いいんだろ？ ヘッケラン？」

「あ、そういう事ね、ありがとさん、ブレイン。」

「今回、出番がなかった私もそれには協力する…どうせ準備してて撃てなかったフレイムジャベリン〈炎の投げ槍〉がまだ戻してないし、これで消しても魔力の無駄だから…」

「??？」

何がなんだかよくわかってないンファイアだが、会話の流れからするとヘッケランにとっては嬉しい事らしいのは確実に感じ取れていたンファイアは、自前の魔法の準備に入る。

「行きますよ？ヘッケランさん！」

「ああ、いつでもいいぜ？ 村長代理さん！」

こんなやり取りを終え、〈空炎斬〉で消費した炎の魔力分以上の回収ができた愛刀を腰に携え、やつと視界に、集合場所が入る位置…徒歩圏内にまで来られた一行は一路、重い体を引きずりながら…〈負の属性〉の効果が、キャンプに至るまでにはどうか体から抜けますように…と願いながら、歩みを進めるのであった。

## 第48話 モモンの問いかけ ワーカーの選択

そこは、ナザリツク地下大墳墓をとりあえず一部分だけ見ることのできるくらいは離れた場所、少し小高い丘のような場所から筒状のマジックアイテム「遠視の筒眼鏡」でこれから踏み込むことになる墳墓を見ている1人の少女。

アルシエが墳墓の遠景を見てどうしてもぬぐえない不信感、違和感とでも言えばいいのだろうか…うまくそれを言葉にできないモヤモヤとした何かの心の中で渦巻いて晴れてくれない。

「考えれば考える程、不思議…時代や背景が、この遺跡からは全く読み取れない…まるで、突然、ポンとココに放り込まれたような…よくわからない造形の像もあるし…読めない記号？文字？みたいなのも…、それに十字の墓標…見たこともない…ああ、考えてたら頭が痛くなつた…。」

アルシエが頭を抱えるようにする仕草の横で、「遠視の筒眼鏡」を借りたヘツケランが代わりにそれを覗き、墳墓を見る。

「…となると、ますますあの「ベル」さんの言ってたことが信憑性を帯びて来ちまったな…、未発見の墳墓…未知の搜索…ありえない程の地下迷宮…か」

考え込むヘツケランに副リーダーのイミーナが提案を持ち掛けて来た。

「考えるのもいいけど、リーダー？ そろそろ集合場所に戻らない？ そろそろ集まってきてる感じよ？ 一番乗り…私たちだけだったから、挨拶に行つとかなきゃじゃない？」

「ああ、ホントだ…そろそろ集まって来てるっぽいな…それにしてもそれなりの人数だな…よくこれだけそろえたもんだよ、依頼主様の財力には感謝かな…？」

そうつぶやいて、丘の上から、下の方へと降りていくフォーサイトのメンバー。

そこには壮々たるチームたちがひしめき合っていた。

「おお…、汝らも来たのか…伯爵邸に集合の筈だったというのに居ないから辞退したと思って居たのだが…どうやら現地集合は汝らだけのようだぞ?」

「うげ! そっか、そういう話だっけか…先に来ちまつてたよ…前金ってまだもらえるか?」

「なんしゃ…ヌシらはまた、もらってなかったのか? またもらえるはずしゃ…行って来るといいんしゃないかの?」

「ああ、老公もいらしていたのですか、お元気そうで何よりです。」

「おお…ヌシらもけん気にやっとなるように、なによりしゃ!」

「積もる話はまた後で! …では行ってまいります、イミーナ、みんなと交流を深めといてくれ!」

「ちよつとおく? 私に押し付ける気く? ヘツケラアア〜ン!!」

「まあ、落ち着いてください、私がフオローしますよ」

「ああ、そうね、ロバー、頼むわね…こういうの苦手なのよ…売られた喧嘩の方が何倍もマシよ…変な気を使わないで済む分、気が楽でさ…。」

「かつかつか、こりやまた、けん気のいい娘っ子さんしゃの、血の気の多いのは嫌いじゃないぞ?」

なんて返事を返そうかと「あう…あう…」としてる所にロバーデイクが割って入ってくれた。

「すみません、老公、ウチのリーダーがせわしなくて、まともに相手もせず、自分の都合を優先するような真似を…」

と言うと、老公も「気にするてない…」と気を使ってくれる。

「まあ、現地に来てしまったのは汝らの落ち度だが、それが理由で前金がナシとはならんだろうな…何しろ、支払う予定だった分が残ってるのだから…問題ない…と我は思うぞ?」

ワーカーチーム「ヘビーマツシャー」とワーカーチーム「ドラゴンハント」が2チームとも、先に顔を合わせる事が出来たのは幸いだが、遠くに嫌な相手が居ることをイミーナもロバーデイクも見えてしまった。

それは、4人制のチーム構成という点では同じなのだが…、連れているのは見るからにみすばらしい服しか着せられていない奴隷のエルフ3人を連れた金髪のクソ野郎!とイミーナ自身、忌み嫌っている存在である。

その者の名はワーカーチーム「天武」のエルヤー・ウズルス

遠目にして、視界に入れるだけでも目が穢れた気がして嫌だと言うのに、<sup>エルフ</sup>奴隷を連れてワーカーをしているという時点でもう彼女からしてみれば嫌悪の対象なのである。

それはロバーデイクも同様のようで、あからさまな侮蔑の表情は抑え込んでいるものの、どうしてもポーカーフェイスと言うには程遠いひきつった笑みにするのが精いっぱいの様子だ。

「あいつ、すぐ死んでくれないかしら…後ろから刺しちやっても構わないんじゃないかな? 誰も文句なんていうヤツ…いないんじゃない?」

不穏な発言をするイミーナを「私も気持ちは同じですが、ここは抑えて…」と制止にかかるロバーデイク…それを横目で見やるアルシエが、やつとそこで口を開いた。

「大丈夫、あのチームはどうせ、墳墓に入っただけでしばらくしたら消えていなくなる…そういう運命。」

「ア…アルシエ?」

イミーナも一瞬、何を言うの?この子?という顔をする。

それはまるで、アルシエがそれをするの？という印象を感じてしま  
うほどの内容を含んでいるように感じたからだ。

「なに？ なにか変なこと言った？」

（ヴェールさんだって、「墳墓に入ってそれぞれ別行動をするまでは『天武』のふりをしなければならぬ」って言ってたから、消えていなくなるようにして、別の見た目に入れ替わるのよね…、あの装備も実際は『幻影』を纏っているだけ、エルフの3人もそう…今はイミーナの暴走を抑えないと…あれは芝居なんだから…）

「え？ いや…アルシエがそこまで表に出してそんなこと言うの意外だったからさ、ね？ ロバー？」

「え？ …ええ、そうですね、何か思う所でもあるのかと思いましたよ。」

「…別に…思う所なら山ほどあるけど…それはわざわざ口にしないで  
も2人には通じるでしょ？」

（今は、その真相を口にはできない、それを口にしたらヴェールさんの足を引っ張ることになる…妹の恩人であるあの人にそれだけ  
はしたくない…。）

（「イミーナさん？ アルシエってあんなに過激な言い方、今までして  
いましたか？」）

（「イヤ、私も初めて聞いたよ、なんでだろ、いつもなら嫌な顔はする  
けど無口を通していたのに…」）

そう、フォーサイトの中でエルヤーは、今現在、偽物が演じている  
こと、そしてそれがヴェール・リバーという存在だという事はアル  
シエしか知らない。

チーム外で…ということならアルシエの妹の2人、それと、ジエツ  
ト氏しか知らされていない。

ヴェール自身があそこまで演技をしているのだ、こつちがそれを台



無しにするわけには行かない……という謎の連帯感を生みつつ、両者ともに『天武』を偽物だとは思わせないように多少過剰なくらいの演技で、熱が入っていた。

「おお、いい、やったぜ！ 前金ゲットしてきたよ、良かった良かった。」

と、戻ってきたヘツケラン：チームメイトの視線の先に居る存在を目にして「うげ……！ アイツも居んのかよ！」と小さくだが、声に出してしまふ程、露骨に嫌がっている。

と思つて居ると、そのタイミングで大きく何かを叩く音がした！

音の発生源は視線の先に居たエルヤーだ、ヤツが一緒に連れているエルフの1人に対して、平手打ちをしたらしい：振りぬいた手を見て取ったヘツケラン。

叩かれた為、地面に膝をついて、媚びるように謝罪を繰り返すエルフ奴隷を見て、舌打ちをするイミーナ：ふと見ると小さく、エルヤーの背中に向けて、卑猥な手つきで指を立てている。

アルシエは（大変だなあ……ヴェールさん、あそこまで演技をしなければならないなんて……）と同情の目を向けているが：ヘツケランからすれば、その目は同情と言うより蔑みさげすみ：自分以下の存在を可哀そうな目で見ているようにしか見えなかった。



時間は少し巻き戻る。

それは偽エルヤーが、奴隷風に装う気満々のエルフ3名を連れて、ベースキャンプに来たところからだ。

「はあ……やっと着きましたねえ、みなさん、いいですか？ 今からは『天武』ですからね？ それをお忘れなきように。」

リハビリを兼ねて、既にエルヤーロールに入りつつあるヴェール、それでもまだ足りないかと小声で指摘してくる3人娘たち：意外に彼

女らはスパルタのようだ…芝居だと言っても手は抜かない！という熱意が伝わってくる。

「そんな注意勧告など、本物ならしませんよ？ もっと「エルヤー様」なのだという自覚を持つてください」とルチル。

「僅かな疑念の可能性でも致命的なことになりかねないので…から…もっと『本物』らしく！」

とディーネ。

「まあ、ヴェールさんはアイツの口調や、言動なんか、一日も見てないんですからね、仕方ないと言えば仕方ないんですけど？ それらしくすることは重要ですよ？」と、緩衝材の役目を買って出ているセピア。

そのエルフ3名は、器用に耳を折りたたむことで短く見せ、植物の蔓で作ったヒモ状の素材で括り付けている、その見た目なら幻を纏わせることで、途中で切れているように見せることも可能だった。

服の下はちゃんと装備を整えているが、ちゃんと最初に会った時のみすぼらしい服を身に着けさせ、不自然な服のふくらみを隠すよう、その上に同じみずぼらしい服を幻で纏わせ、二重にごまかしていた。

「わ…：私に意見をするつもりですか？ 千年は早いですよ！ え…：エルフの分際で！」

と、詰まりながらもそれらしく言うと、「そうそう、その調子です」とか「そこは詰まらずに言い切るところですよ？」だの…「80点！ あともう少しですね！」と嬉しいんだか、嘆くべきなのだか…という評価を受けていた。

彼女たちは女性ならではの演技力を活かし、表情はエルフの奴隷然としたオドオドしている表情。

だが、その口から出てくるのは、今のような辛口評価である…遠目から見たらエルヤーがエルフを虐げているようにしか見えないう…

ふと、NPCに神の如くプレッシャーを与えられてるアインズさんと、奴隷を虐げている芝居を強要されて、みんな（ワーカー連中）からの評価がこれから爆下がりすることを強要されることになったヴェール。

どつちがツライ立場なんだろうな…と彼は一人、そんなことを考えていた。

「まあ、すでに伯爵邸にグレートターテレポーションへ上<sup>↑</sup>位<sup>↑</sup>転<sup>↓</sup>移<sup>↓</sup>で、近くまで移動、集合しているのです、前金の交換は無事に済んでますが…他のメンバーと挨拶しに行くのは気が重いですね…『エルヤーらしく』というのがこんなにも難易度が高いものだったとは…」

「ホラ、何言ってるんですか？ 警戒が足りませんか？ 不用意な発言は慎むように…！」

と、オドオド顔で、角度的に見られない位置から蹴りを入れられた…痛くはないが精神的に来るものがある。

「あなたたちねえ…」

と後ろを振り返っただけで、「も！申し訳ございません！申し訳ございません！もうしませんから！どうかお許しを！」と、周囲に聞こえるように私のエルヤー度を周囲に広めてくれている。

ありがたいのはありがたいのだが、何もしてないのにいじめっ子に仕立て上げられてるような…そんな何とも言えない気分させられている。

その時、どこかから「チツ！」という舌打ちのような音が漏れ聞こえてきた。

「バツチリですね…みんなもエルヤーさんが偽物だなんて疑っていないようですし、このまま行きましょう！」

と、こちらもオドオド顔に年期の入っているセピアが遠慮がちな風を装い、イケイケな内容を口走る。

そして、しばらく他のワーカーチームとの会話をすることで、「ワーカー同士、うまくやりましょう」という内容を告げに行くだけなのに、異様に疲労が溜まっているような気がしている偽エルヤー…「これも墳墓内で、別行動をするまで…それまでの我慢！」と自分に言い聞かせて頑張っていた。

他のチームと話をする際はエルフの3名は着いてこないということだ…いつもエルヤーは、人間同士での会話にエルフを混ぜることを極度に嫌うのだという事だ。

面倒な性格だったんだな、そのくらいいいだろうに…とヴェールは思うのだが、それが本物の思考なら、それに沿うしかないな…と、1人で芝居を頑張っている。

後ろから小声でダメ出しが来ない分こつちが多少、気が楽だな…と思うのは演技指導してくれている彼女達に失礼なのだろうが…と思っ居ると、そこに丘の上に居たフォーサイトが下りてきた。

(あ、アルシエちゃんだ、ちよつと挨拶でもしておこうかな？フォーサイトのみんなも一緒じゃないか！)

そう思っ居ると、後ろで待機していたルチルから〈メッセージ〉の魔法が飛んでくる。

「ヴェールさん、ダメです！フォーサイトのメンバーに話しかけないで、すぐに戻って来てください！」

そういう切羽詰まった声が偽エルヤーの元に届いた為、ヴェールは、そのままワーカーチームとの会話を打ち切って会話が聞こえない程度の距離に離れてから、応答を開始する。

「どういうことですか？別に話すくらいは…」

と言いかけた偽エルヤーにルチルが〈メッセージ〉を被せて、釘を挿してきました。

「問題大有りだから言ってるんです！接触は避けてください！バレたらおしまいなんですよ？ポロつと地が出たらどうするんですか？」

「わかりましたよ…すぐ戻ります、そこで待つてなさい！」

そして、戻ってきた偽エルヤーに飛んできた試練の演技…それはルチルの指示で、彼女をみんなに聞こえるような大きな音で、派手に平手打ちをしろ！という物だ。

「そこまでしないでいいんじゃないですか？ なにも自分が痛い想いをする必要など…どこにもないでしょう？」

「まだエルヤー度が満ちていないようですね…本気でエルヤー度が完璧にならなくても困りますが…これはワーカーの他のチームに印象付ける為です！ 必要なんです！ やってください！」

「ううう…女性に手をあげるのは正直、抵抗あるのですがね…」

と、何気なくつぶやくと

「今はヴェールさんの意見を取り入れる場じゃないんです。天武としてのお立場をご理解願います！」

と、前半はディーネ、後半はルチルが詰めよって来たため、ますます追い詰められてしまう。

(やれやれ、これではどっちが本当に主導権を握っている立場なんだから、解らないですね…)

と、エルヤーっぽい言い回しで考えてしまう自分に自嘲しながらも決断を下す。

(要は叩いたように見ればそれでいいんだから！)

そこで偽エルヤーはルチルの左頬に自分の左手の甲をそつと添える。

「なにしてるんですか？ そんな程度では…！」

その先を言わせることなく、偽エルヤーは、自分の左手の平に右手の平をぶつけ、思いつきり平手打ちをしたような音を高らかに響かせる。

それにいち早く対応できたのはルチル…その音で偽エルヤーがし  
ようとした真意を察知し、派手に「きやあ!!」と大きな悲鳴を上げ、地  
面に横たわる。

「はい！　そこで心配そうな姿勢を取らない！　背筋を張って、自信  
満々で直立しててください！、そこで怒りに満ちた顔！」

と、<sup>メッセージ</sup>〈伝言〉で、ツツコミが入ったので、反射的にその通りにした。

後ろから誰かの「くそ野郎！」という声が風に乗って聞こえて来て、  
かなりしんどい気分させられた。

聞こえない部分で「当時の戦士長と並ぶのは、剣の腕だけかよ…」と  
もつぶやかれていたのは彼には知る由もないことであつた。



「時間になりました。今回、我が伯爵家の依頼を受けていただき誠に  
ありがとうございます。」

その言葉から始まったフェメール侯爵家の執事の依頼内容の説明、  
改めてベースキャンプの警護を頼むことになった王国の冒険者組合  
から派遣されてきた冒険者の数、調査の為に許された滞在期間…など  
など、必要な説明を始めた。

それまではお互いに「なるべくなら極力、話どころか顔も合わせた  
くない」と認識しているフォーサイトのメンバーと、「どうかバレませ  
んように…」と接触を避けていた天武のメンバーは、これでお互いに  
説明などの方に集中できると、そちらの方に意識を向けた。

大きく話が変わったのは冒険者が護衛について拠点となるこの

ベースキャンプを護るコトになったくらいだろう。

「それでは、用意しております野営場所までご案内いたします。そちらの野営場所では金級冒険者の方々とアダマンタイト級冒険者の方一組の護衛でお護り致します。しかし墳墓内には冒険者の方々は足を踏み入れない契約となっておりますので、その旨、ご理解いただき、決してお忘れなきようお願いいたします。野営場所へは当家の馬車にてご案内いたします。こちらにどうぞ…。」

ごく当然と先頭を歩いていく天武のメンバー。

すぐ後ろにドラゴンハントのチーム

次が、ヘビーマツシヤール…最後尾がフォーサイトだ。

「なあ、グリンガム…ちよつといいか？」

ヘツケランが前を歩くヘビーマツシヤールのリーダーに話しかける。

「おお…何事だ？」

「すまないが、うちのチームと天武のチームとを違う馬車になる様にしてくれないか？」

そう話を持ち掛けてきたヘツケラン達フォーサイトのメンバーを軽くチラ見してすぐ理解できたグリンガムは快くそれを引き受けてくれた。

「そうか…汝の不安、確かによくわかる、彼女が居るのではヤツが何をしでかすか…ヤツが何もせんでも彼女がどう動くか…そこらへんもあるのだから？ 承知した、天武のチームは我らのチームが引き受けよう。」

「悪いな…助かるよ。」

「遺跡調査という名目で集まった我らが、始まる前からいざこざを起こしては、無事に済むはずの依頼も難しいものとなろう…そのくらいは…」

という言葉を言い終わらない内に、先頭を歩いていた天武のリーダーの声が聞こえてきた。

その言葉は他のチームの誰もが耳を覆いたくなるような内容で、爆裂魔法でも投下されたかのような…それを聞いてる全ての者がそういう心境に陥った。

「金級冒険者程度で、拠点を守るなど、本当にそう思ってるのですか？ 探索して戻ってきたら、モンスターに占拠されていた、なんて私は御免なんですがね？」

（ごめんなさい、本心じゃないんです、後ろの子たちに言わされてるんです！）

心の中で盛大に謝っているものの、表情にまではそれは出せないため、横柄な言い分にしか相手には伝わっていない。

それでも執事は、態度を硬化させず、柔らかい物腰でエルヤーに返答を返した。

「ウズルス様、でしたか？…ワタクシ共はそれに対しての心配は一切ないと判断しております。」

さらっと言い募る執事に、一瞬、言葉を詰まらせたようなエルヤーだったが、何事もなかったようにすぐに言葉を返す様はまるで、予め用意されたシナリオを読み進めているかのようだった。

「それは、護衛の頭数に私たちワーカーも含まれていると？ それなら理解できるのですがね？」

わずかに目の奥に冷たいモノを宿したような表情をした執事が、エルヤーに負けじとそれを否定する。

「いえ、そういうことではありません、今回皆さまを護衛してくださる方に先ほども申しましたがお一組、アダマンタイト級の方もいらつしやいます。ご理解いただけるとはいいのですが、アダマンタイトという事は皆様より強い…まさかそれが分からないウズルス様ではございませんね？」

「ほお…私よりも強いと？ それは聞き捨てなりませんね…」



先ほどまで、エルヤーの言葉で憎々しげに目を向けていた金級冒険者の面々は、執事の返答で溜飲が下がったのか荷物を馬車に運び込む作業を再開させていた。

執事がそう言わなければ、下手をすれば他のワーカーを巻き込んだ「VS冒険者」という目も当てられぬような刃傷沙汰になっていたかもしれないなかった。

「では、ご紹介させていただきますしよう！ モモンさん！」

(…………え？ モモン…ガ、さん…じゃないの？ モモ…ンって…)

エルヤーの外見の中に居るベルリバーの意識が急速に疑問を浮かべていた。

モモンと言えば、確か、モモンガさんの冒険者としての名前だったはずだ…「一体なにしてんの？」と言う気分になる。

すると、馬車の中から漆黒のフルプレートに身を包んだ偉丈夫…フルフェイスの兜に覆われた顔をのぞかせた後、美女を伴い、馬車から軽やかに舞い降りた。

「何かありましたか？ 名を呼ばれたので手を止めてすぐに参りましたが…？」

「いえいえ、ワーカーの皆様には「漆黒」のお二方を紹介させていただきました、呼ばせていただきました、お仕事中所、申し訳ありません。」  
執事も先ほどのやり取りで一矢報いることが出来て少し気が晴れたのか、さつき感じた冷気を含んだような雰囲気は霧散していた。

「モモンさん、こちらの荷物運びの方は私たちがやっておきますのでどうか、モモンさんはそちらのワーカーの方々と親睦を深めておいていただけますか？」

すると、別の金級冒険者のチームも口々に同じようなことを言い始める。

「そうですね、このような雑用は我々に任せて、リーダーであるモモンさんは、ぜひ、ワーカーの方々と、警備方針などについて、打ち合わせをしておいて欲しいのです！」

「そうですか…了解しました。 非才の身ですが君らのチームがそれでいいという事なら謹んでお受けしよう…だが、金級の冒険者である皆の方が私たちよりも数が多い、なのでメインで動くのは君らを主眼に置くべきだろう。」

「いやー・ 非才などーなにをおっしゃいますか！ それに我らのリーダーたるモモンさんを差し置くななど…」

と言って、遠慮しようとする金級の冒険者の言葉を手を上げること  
で遮り、モモンは自分よりも他の冒険者チームの立場を立てるべく、  
短い結論を告げた。

「いや、警備の方は君らの方をメインで頼む！ 私達を有効に使って  
くれ。」

そう言つて「ナーベ！」と呼ぶと、モモンは、ナーベを連れて、ワー  
カーたちの前にまで歩いてくる。

ワーカーたちもその空気に飲まれていた。

明らかにそこに立っているだけで空気が違う、その偉丈夫さが何よ  
りも、聞いていた冒険者としての業績の全てが「真実なのではないか  
？」そう思わせるだけの重厚さを纏っていた。

「こりゃ…ギガントバジリスクがどうの…つて話もあながちウソつて  
訳でもなさそうだな…」

ぼそつと口に出したヘツケラン。

それはグリーンガムに教えてもらった情報。

王国でのアダマンタイト級への異例のスピード昇格…そしてその  
偉業の数々…。

目の前に立たれているだけなのに…押し潰されそうな息苦しさを  
感じる。

そんな空気を知ってか知らずか：モモンがワーカー達をぐるりと見まわし：、良く通る声で全員に質問を投げかける：それはワーカーにとつて当たり前すぎて、「なぜ改めてそんなことを？」と、耳を疑うような質問だ。

「君たちは：何故、あの遺跡に向かう？ 組合に属していないキミらは危なければ辞退する道もあつただろう：何が君たちをソコまで駆り立てる？ 未発見の遺跡では何が起きるかわからない：なのにそこまでする理由はどこにあるというのだ？」



（かなり数：、減つたな：呼び出したワーカーチームでこちらが送り出したシモベを突破できたのはこいつらだけか？）

と最初に思ったモモン：ことアインズ。

（数十チームは呼んだはずだが：一応、メツセンジャー兼、墳墓に入つてもいいかな？という基準を計る為、ふるい篩にかけるという意味でも必要であつた存在を呼び出したんだよな：一応、わりと低位のレベルでアイボール・コープスある集眼の屍の最低位、スクリーチ・ボール・コープス痛苦の怨嗟屍魂に留めておいたと言うのに：それでもまだ強かつたか：まあ、依頼する分の資金が浮いたと：いい方向に考えよう！）

そう気分を切り替え、目の前に並んだワーカーチームを見て、気づいたこと。

以前、ナザリツクの玉座の間に呼んで、第九階層の客間とかで食事などをふるまい歓迎した記憶がまだ新しい、その時の一人、アルシエがその中に居るのを確認し「結局、来てしまったか：」と聞こえない程度の小声で、兜の中へとその言葉を漏らす。

（さすがに、墳墓に招き入れといて来た奴ら問答無用で全滅させると

か…、そんなことしてたら、また『DGNギルド』の汚名の再来だからな…こつちの世界でだってどんな強者が居るかわからないんだから…可能な限り、穏便に進めるべき…とは言え、盗掘しようだなんて者まで許すと思われては不愉快だ。その時は私の『流儀』で相応の礼をさせてもらおう…)

そう思いながらのその質問。

その質問の重要さを真に理解しているのは、古くからのギルドマスターの人となりを知っているベルリバーが演じてるエルヤーだけ…あとのメンバーは、深く考えることなく発言している…。

とは言え、フォーサイトの返答は、他のワーカーとは一線を画す答えで、モモンの方も「ふむ…そうか…そういう道もありかもしれんな…」とだけ短く答えていた。

ベルリバーのみが知っていることだが、今、ワーカーの目の前にいる「モモン」と、かつてアルシエが歓待され、妹たち2人が『ともだち』として受け入れることになったゴウン様。

その両者は、実は同一人物だという事を…。

アルシエは、その時、気づいた…「モモン」という名前に…聞き覚えがあり、心当たりがあるという事に。

(そうだ、確かジエツト君が言っていた、魔法学院時代、同級生として一緒だったチームメイト…その子の名前がたしか「モモン」だったはず…でも…、目の前の「モモン」さんはフルプレートトの戦士…それに少なくとも第6位階以上の魔法も使える…はず…はずなのに…、魔法の波動が見えない?…隠しているの?それとも別人?…いや、そんな名前が複数居るとは思えない…ますます、目の前の存在が謎すぎる…。警戒はしておいて正解だったかな…?)

先ほどの質問に対して答えた言葉を自分で思い出す。

リーダーが応えるべき場面だったのは承知してはいたが…「ベル」さんに警告されていた内容が心に引っかかっていたため、「墓荒らし

の盗賊の一味」と思われたくはないチームフォーサイトとしては「ただの金もうけが目的の招かれざる客」では困るためだ…。

だからと言って、目の前の「モモン」という人物にそれを言って、自分の未来が左右されることになるなんて、これっぽっちも考えていなかったのだが、それでも自分の偽らざる本心を伝えた。

「私たちはこれを『ワーカーチーム フォーサイト』最後の冒険にしたい！ その最後の依頼は【未発見の墳墓の内部調査】！ それ以上のことに首を突っ込むつもりはない…ワーカーは『Ⅱ盗賊』ではない…金があったからと言って、持ち主が居るかもしれない場所でかすめ取るような真似は『ワーカー』としての名折れ！ 最後を飾るにふさわしい冒険にしたい！」

リーダーのヘツケランを差し置いて発言してしまったが、正直ヘツケランもどこかそれは思っ居た部分はあったようで、「まあ…俺らがこの依頼を最後にしようと考えてるのは全員一致の意見だ、その上でこの依頼を受けた、それは最後を飾るため…そこは変わらない…金目の物に目がくらんで命を落としたり、今回の依頼内容【墳墓内の情報】を持ち帰ることが出来なくなっちゃう…それだけは避けなきゃな…『ワーカー（仕事請負人）』としては…。」

と、言ってくれたので私も少しは気持ちが軽くなったように感じた。

だが知らなかった。 …とアルシエは思う。

まさかチームメイト全員で解散の意思まで固めてくれていたなんて…そこは今、聞くべきではないことなので、あとで落ち着いたらそのことについて聞いてみようと思った。

自分たち「フォーサイト」より前、「ヘビーマツシャー」と「ドラゴンハント」のメンバーはすでに発言をしまった居た。

「もちろん、ここに眠っている遺跡のお宝だ！」…と。

ただ一人、老公だけは「お古い先がみちかいこの身しや…敢えて宝に執着する必要はないとは思うか…、持ち主か居ない…所有者なき置きみやけなのであれば、話はへつとなるの…。」

とだけ答え、モモンの中では「一応、保留…」という位置づけになっていた。

最後まで発言をしなかった『天武』に目を向けたモモン…お互いの顔を視認し合う。

「キミらは…どうなのかな？」（待ってましたよ、ベルリバーさん！  
久々のナザリック！楽しんでくださいね）

「そう…ですね…、【墳墓の調査】という名目で受けた依頼でもありませんし、当面はその一点に尽きるでしょう…ですが…人類にとって、この地に生きる我々全ての者にとっての脅威となる存在が居るとなれば…生きてその情報を持ち帰るのを優先すべきでしょうね…。」  
（モモンガさん、この意味、伝わっててくださいいよ？ 一応、外見としてのコイツのロールプレイをしながら出来る、最大限の返答がこれなんです！）

しかし、その言葉に違和感を持つ者は、ホンの僅かであった。

エルヤーの人間性、認識…、（彼にとっての）常識…それらを十分に嫌と言うほど思い知らされている3人しか、それに気づく者は居なかったが…彼の出身地を知っている彼女らからすれば「一応、許容範囲」として収まっている返答だったので、特に何も言うことはなかった。

他のワーカーの面々も薄々、噂としての情報レベルでそれは認知されていたため、確証のない情報であるが、その言葉はその情報の信憑性を強いモノとしていたので、その奥の「真の意味」に気づく者は居なかった。

『この地に生きる我々全ての者』

：それは「人」に限らず、人類種、亜人種、異形種、それぞれが諍いの無く、互いに忌み嫌うことのない、虐げられることも虐げられることもない：手を取り合って進める世界、侵略も：することもされることもない：そんな世界を夢見ていた。

この世界に来て初めて実感できた「大自然」。

それを「人の持つ、飽く無き欲求、欲望」の犠牲にしてはならない：そう感じてしまったが為だ：。

「ふむ：みんなの言い分は理解した：くだらないことを聞いてしまったな：不愉快な思いをさせてしまったかもしれないが？」

そうモモンが言うと、「とんでもない」とワーカー達からの返事が返ってくる。

彼、モモンの言うくだらないと言う意味を理解していたのはただ一人：その人は、ただ静かに「ご愁傷様：」と思うのみであったという：。



「やめしや：やめ：こりや敵わんわい：降参しやよ：」

そう言い、負けを認める老公。

それは少し前、モモンの噂を本物かどうか確かめたい、そう彼が言い出したのがそもそものキツカケだ。

「どうやって？」と言う意味の発言を返すモモンに対し、『手合わせ』と称した模擬戦を持ち掛け、「手加減はあまり得意ではないのですが：」と渋々了承を取り付けたと判断した老公は、初っ端から全力での攻撃を繰り出し始めた。

それは、同じチームメイトも、他のワーカーチームも、一目瞭然の「殺しにかかっている」レベルの全力。

なのに、それを難なくさばき、いなしてしまうモモン。

全てを対処してしまった老公に対してモモンが「さて、では今度

は私の番ですね？」と言った所で「降参」の言葉を口にされてしまった。

という流れである。

「降参？…いいんですか？　これから本気を出すおつもりだったのでしょうか？」

モモンからすれば、さっきの攻撃は様子見レベルのモノという認識しかなかった。

だから単純に手加減した攻撃を老公と呼ばれている老人が受けるなり避わすなりした後、本気の攻撃が来ると…単純にそう思つての発言だったのだが…。

「ひよっひよっひよ…老体をあまり酷使用するものではないわい…本気しやよ…さっきのは真正銘、ワシの全てを乗せた本気…それでも又シにやくかすりきすをつけることすら至難のわさしやと思ひ知らされたわい。」

「そう…ですか…？…？」

モモンとしては少しばかり釈然としない様子だったが、老公らのチームメイトからは「老公の立場を想つての発言」（まだ本気じやないのでは？）と受け取ったチームメイトからは、好意的な目で見られているようになったことに、モモンは気が付かないのであった。



ワーカーらとの話を終え、当初の仕事、馬車に荷物を積む作業に戻ろうと移動すれば、金級冒険者のみんなが既に済ませてしまったとのこと。

仕事をさぼってしまったような気分にも襲われたモモンからすれば、「申し訳ない」という一念しかなかったが、彼ら冒険者からすれば、モモンは憧れの存在である。

その人が自分たちと共に、荷物運びをしてくれていた、それだけで



今回は満足だった。

だからこそ、彼が戻ってくるより早く、「なるはや」で仕事を片付けたのだ。

それに対して頭を下げてくれる憧れの漢、そのどこまでも謙虚な姿勢にまた心の中の評価が上がる。

もちろん、テントの方も彼らは設置してくれていた。

かなり気を使ってくれたのだろう…本来、自分たち冒険者は今回、【護衛】という名目でココに来たのだ。

他のワーカーらとも違う場所に野営はしているが、基本的に、護衛で共にいる彼らはワーカーらの近くに居なければならぬ…というよりそれが普通だ、そうでなければ「不測の事態」が発生した場合、即座に対処することが出来ない。

であるのに…だ。

モモンのテントだけは、護衛をしての金級冒険者たちのテントより奥まった場所、テント内で「ナニ」かをしていたとしても…容易には聞き取れないだろうくらいの距離を離して、設営してくれている。

冒険者からすれば、冒険する為のパートナーとは言え、第三者の居ない二人きりのチーム。

こういう事にもなれば、夜は…そういうことになってもおかしくないだろう。

という認識の下、そこまで気を使ってくれたのだが、どちらにしろモモンとしてはありがたい、「ナニ」自体が無くなっている身体なので、「ナニ」をするわけでもないのだが、これから身代わりに入れ替わるのだ。

特に疑われないで済むという点では、なによりありがたかった。

「ナーベ：私はナザリックに戻る：代わりは：そうだな、テンパランスさんのNPCであるグレートドップルゲンガーに頼むでしょう：、少し演技指導をする必要はあるが：あの冒険者らの行動からするに、わざわざ邪魔をしに来ることも無かろう：、もし用事で来ることがあれば「用を足しに行った」とでも言っておけ：それで通じるだろう。」

「は！ 畏まりました、モモン様！」

そして、すぐにいつもの「跪く」姿勢。

思わず、額に手を持って行ってしまった。

「モモンさんと言えと言ってるだろうに：、まあ他に誰が居るでもないし：こんなところに監視系の魔法なんて仕込まないだろうからいいか：。」

と言って、<sup>メッセージ</sup>〈伝言〉でアルベドに連絡、テンパランスさんのNPCである楽団たちの中で誰でもいいから1人：という命令を出し、極力『黒歴史』とは顔を合わせたくないアインズは、その者に「モモン役」を交代してもらい、ナザリックへと帰還していくのであった。

「：さて：それではショータイム：いや、歓迎の宴の始まりだな：」

そう零したアインズの声は、どこか気が進まないようでもあり：

それでいて気だるいながらもやる気を出そうとする声のようにも

：

拠点を上げての初のイベントに少し高揚しているように聞こえる  
声音でもあった。

## 第49話 グリンガムの運命

そこは玉座の間、至高なるアインズが座り、  
目の前にはモニターにも似た、いくつもの画面のパネル。

アインズはそれにそれぞれ目をやりながら、隣に位置するアルベドに語り掛ける。

「招待客には心ゆくまで楽しんでもらえる宴にしてあるのだろうか？」

そう質問すると、「はい、万全でございます…今回使用させていただくトラップの類は全て問題なく、通常通りの効果で発動するという結果が得られましたので、皆様にはきつと喜んでもらえる趣向となるのは確かかと…。」との返答が戻った来た。

「そうか、ならばアルベドの歓待の宴、その趣向を楽しみにさせてもらうとしよう。」

そう言つて、支配者はモニターへと目を向け、アルベドに告げておくべき事項が新たに出来たことを告げておく。

「そうだ、アルベド…今回、招待した客の中にひと際、年を召された者が1人いる…そいつの監視を強めろ…、そのチームが、我がナザリツクの財を持ち逃げする気があるならば当初の予定通りだが…その老人個人が懐に1枚でも自分の物にした際には…わかるな？」

アルベドは恭しく頭を下げ、それに了承の姿勢をとった後、一つの懸念を口にする。

「ならば、もし…その老体が、一枚も個人として手にしなかった場合は…いかがいたしましたでしょうか？」

「…そうだな…それは、その時の状況にもよるが…、最後まで懐に入

れなかった場合は、「その者だけ」死亡確定の条件は満たさないこととなる：しばらく監視：影の悪魔でも潜ませ、後々、分け前としてナザリックの財を受け取った場合は、その時対応することにしよう：。」

「は…それではそのように…」

そう短く指示を受けたアルベドの声を聴き、アインズは再び、各モニターへと視線を向けた…。

(デミウルゴスは非消費タイプのトラップの中でもトリガーが条件になっていない罠の発生をさせるために「拠点防衛時の指揮官」としての役目を担い、待機してもらっている、拠点側で発動させる必要がある罠を展開させる際の指揮を任せているからな。)

「それではじっくりと見させてもらうこととしよう：アルベドとデミウルゴスの主導の下、開かれる宴：：気に入ってもらえれば最高なのがな…。」

そう不敵に笑うような声音で、アインズが含み笑いをしたようにアルベドには聞こえていた。



「ちつくしよおお!!! なんだよこの墳墓おお！ くそつたれがあ!!」  
悪態をつき、急ぎ足で、その場を離れることとなったヘビーマツシャー、つい先ほど、何が起きたかわからない手段で犠牲者が出た。そのため、その場から急いで移動するべく、足を進めている。

最初の一人は多分、何もわからない内に：：自分に何が起きたのかを把握するより前にあっけなく「物言わぬ塊」となっていた。

自分たちも予想外であった、まさか最後尾を歩いていた、いざと言

うときしんがり殿の役目を務めるはずだった…背後からの急襲に備える役のアイツが狙われたと言う認識に至れたのは「それ」が起きてから…冷静に考えられるようになるまでの時間が必要だった。

その「仲間だった『物』」となり果てた塊を調べた結果、ぶすぶすと焦げ臭いにおいがまだ残っていた。

これは炎系のトラップか？とみんなが思ったが、判断材料が足りない。

…これはきつと最初の警告だ。

「うまく行きすぎだと思つて居たんだ…出てくるのは難度30にもならない雑魚ばかり…そう思わせてのコレか…どうする？今から引き返すか？」

「だからと言つて、ここまで来て素直に帰らせてくれるとは限らん…我らのするべきは少しでもコイツから、打開策を見い出すことのみ！

汝らはそうは思わんのか！」

「それはそうかもしれないねえが…殿しんがりの戦士が最初の犠牲者だぞ？それもリーダーを除けば一番硬い防具で身を固めた戦士がこのザマだ…俺らなんてイチコロなんじゃないのか？」

このパーティーたちは知らなかった、こうして居る間にも、今回デミウルゴスの考案し、立案、そして検証を重ねた結果、限定的に浅い階層でのみ実験的に行われるようになったトラップの事を…

その発動条件が、魔族の魔力をトリガーとして発動されるチャージ型のトラップ、これは一度罠を展開させると、また同じ起動待機状態に戻るまでは少しの間チャージ状態になり、一切の起動が利かなくなる。

即効性はないが、待機時間が過ぎ、起動可能になったなら…魔族由来の魔力を使用することで再度、同じ罠が使用できるようになる。

なので、こうして、被害者の検証という時間を侵入者たちが浪費している時間こそが、ナザリック側にとってありがたいことだったのである。

起動展開中（作動中）の罫は、効果が終わるまで消えることはない、消えれば即座にチャージ状態に戻る。しかし、息をつかせぬ連続連携（コンボ）につなげないことには、上位レベルの体力を持つ相手を仕留めるには火力不足なのだ。

だからこそ、今回の侵入者に対しての手段としては相応と言う結論が下された。

これらのトラップはあらゆるトラップを管理、そして保管してある部屋とは別の部屋。

「廃棄待ち」と書かれた部屋に置いてあったモノ達。

性能から、何から確かに着想としては（悪魔的観点で）素晴らしいものだが：悪魔由来の魔力を使える者でなければトラップ起動のスイッチ役は務まらない。

しかも、連続連携コンボに繋げるには：「3HIT」までは容易に可能だ。

壁からの発動の罫。

天井からの発動タイプ

そして床からの発動タイプ。

大きく分けて、その3つを駆使して罫を仕掛ける必要があり、この罫の最大のデメリットとして、ほとんどは対個人を想定して作られている。

例外はあるにはあるが：最大の効力を発揮するのは、やはり個人に対して連続連携コンボに繋がられた時だ。

1パーティが全員片付くまでは、次の新しいトラップの組み合わせの画面を呼び出せないのも大きなデメリットだが、それでも天井、壁、床からのトラップの候補は最大3つ分までの候補をストックしておくことが出来る。

繋げようによっては9つの罫を一人に集中させることもでき、トラップの内容によっては一度の罫で2回当たったという判定のモノも存在する。

それをうまく使えば対象のHPゲージが途中でゼロになっても、体のどこかが「生命活動」を続けている間は連続連携コンボの対象として認め

られる。

途中でタイミングを逃し、最大の罠でとどめを刺す瞬間に至らず、死なせてしまつては不完全燃焼だ、最大の功績は残せない。

デミウルゴスの中では、最大の連携で結果を出すこと、それに意識が向けられていた。

が、何より至高の御方の指令は絶対だ。

流れを無視して、自分の欲求を優先しては今回の自分の立案した「そもそももの」展開に支障をきたす恐れもある。

そう言う意味では細心に細心の注意を払って、事に及ぶ必要がある。

「それは解っているのですがね…早く次のターゲットに仕掛けてみたいものです。」

そうつぶやき、次のポイントとなる最高の設置場所に「どんな連続連携が一番いいでしょうか…？」と、彼にしては珍しく…「ワクワクという気持ちとはこういう事でしょうか…？」と言うくらいには気分が高揚していた。

…そう、一度に展開できるのは3つまで…しかし、最初に起動させた罠を発動させた瞬間、待機チャージの状態になると同時にトラップの種類の変更をして、同系統の別の罠を仕掛けることにより、連続連携の連続HIT数が稼げ、得点につながる。

同じ罠を連続連携の最中に、もう一度当てるだけではどういう理屈かわからないが、積み上げていた得点がゼロに戻ってしまうのだ、これでは今まで積み上げていた成果が、そこで打ち切りになったのと同様だ。

連続連携に繋げ、連続ヒット数を稼ぎ、最終的にいくつダメージを与えたかで出て来る点数、それに応じた金額が、ユグドラシルコインとして自然発生するという現象が起きたのはデミウルゴスにとって嬉しい誤算だった。

なぜ、こんな素晴らしいものを「廃棄待ち」扱いにされたのか……それは使い勝手が悪すぎたからだ。

一つは、起動役は付きっ切りでなければならぬ点。

離れていても発動できるが、タイミングがシビア……そのため今回のようなモニター越しでは恐らく対応できるのはデミウルゴスしか、このナザリック内ではないだろう。

悪魔の種族を使っていた「ウルベルト」ですら、これらの凶悪ともいえる効果の全てをコンボとして使いこなすことはできなかったし、使いこなそうという情熱が続かなかった。

こんなチマチマやってるのなら、自前の高火力で、一気に殲滅した方が早かったからだ。

ユグドラシルコインというのも、課金アイテムに使える物ではない。

こんなに苦労して、コンボ決めて……資金を僅かに得ても、それなら外に出てモンスターを狩って居た方がずっと獲得資金的には天地ほどの差があつた為……というのもあつた。

廃れていくのも仕方がなかったと言える。

……そう、この異世界に転移して、効果や性能自体の変質は無かつたが、新たに陽の目を見る好機にありつけた、不遇のトラップ達がこのナザリックに於いて今！侵入者たちにその産声を響かせていた。

そして、次の犠牲者として選ばれたのは「ヘビーマツシャー」の中で、レンジャー兼盗賊の職を使える弓使いの予定だ。

初めの実験台として、戦士を選んだのは正解だった。

メンバー達が先に歩いている中、最後尾で背後からの敵に備えていた彼を捉えるのは容易過ぎた。

初めは「スプリングフロア」……バネ仕掛けにより、トラップにかかった相手を四方のどちらかに吹き飛ばすことが出来る。

しかし設置する時にどちらかに飛ばすのかを選ぶ必要があり、再設置するまでは変更が出来ないという不便な点はあつたが、それは地形を利用すれば簡単に解消できた。



T字路をターゲットが歩いていっている中、交差点を先に歩く4人が通り過ぎるのを待ち、最後尾の戦士がポイントに足を踏み入れたのを確認した瞬間、それは静かに足元からせりあがって、元来た方向に2mほど戦士を吹き飛ばした。

まさか床が跳ね上がって、鎧を装備した自分を吹きとばす場面など誰が想像できるだろうか…？

「警備監視室」のモニターからその状況を見ていたデミウルゴスはまず初撃が問題なく起動したことにひとまずは満足しつつ、次の手に想いを馳せる…、床の次は天井か、壁からの罠にしなければ、連続<sup>コ</sup>連携<sup>ボ</sup>に繋がられなくなる。

そのため、3手先の罠の為に…と「足挟み」<sup>ベアトラップ</sup>に切り替え、戦士が吹き飛ばされてくれた場所より一つ後ろの「その場」に設置し直す。

床から跳ね上げられ、後方に飛ばされただけの戦士にはそこまでダメージは無かったが今の状況を混乱させるには充分だった。

床から放り出されるといふ常識ではありえない異常事態に困惑しながらも、剣を取り落とすこともなく、よろよろと起きあがろうとした戦士に、天井から「花瓶」が落ちて来る。

カポンという音と共に、視界をふさがれ、ふらふらと歩くしか出来なくなった戦士は進行方向の突き当り、正面の壁から突如、レリーフが出現したのを見ることはできなかった。

その為、そのレリーフに顔が描かれていることも解らず、その口からボールが転がり出たことにも気づくこともなく、無抵抗に「それ」が当たった直後、再び後ろに吹き飛ばされた。

壁からのトラップ「ローリングボール」、爆発系のダメージは与え、後方へのノックバックが発動する罠。

通常、特別大きな破裂音などが出ない限り、多くの罠はほぼ無音で展開される。

しかし、先ほどの爆発音は別だ。

前を：と言うよりすでにT字路の突き当たりを左折し、かなり前を進んでいた「ヘビーマツシャー」の4名は後方からかすかに聞こえてきた爆発音に一瞬足を止めるも、音は離れているようだし、爆発音が近づいている様子もなかったもので、その時は特に気にすることもなく、再び前を向きそうになるも、最後尾の戦士が居ないことによりやうく気付く。

そんな状況下、その爆発によって少しダメージは負ったものの、威力はそこまで高くない：「まだ動けるか？」と自分の状態を確認しようとして立ち上がるとうとする戦士。

「まだ半分、残っていますね。」

「警備監視室」のモニターから状況の一部始終を見ているデミウルゴスにはちゃんと見えていた、連続<sup>レ</sup>連携<sup>ボ</sup>中は、「トラップの起動を行っている者のみ」対象者のライフゲージが見えている仕様になっているのだ。

「さて、連携状態が途切れる前に仕掛けるとしましょうか…」

まだまだ楽しませてくれそうな戦士を見ながら、花瓶が破壊された瞬間にトラップの変更、「吊り天井」をセットしておいた、まだまだ待機時間がチャージされ始めたばかりだ。

そこに爆発の効果で後方へと再び戻された戦士が「今度は何が起きたんだ？」とよくわからない状況下で体を起こそうとしている中、「足挟み<sup>ベアトラップ</sup>」が、足に食い込み、その場に固定する。

そこでようやく自分の置かれている立場に気づいた戦士だが、すでに遅い、時間はすでにカウントダウンを始めていた。

戦士は「足挟み<sup>ベアトラップ</sup>」に固定され、身動きのとれぬ中、徐々にチャージの充填されている天井の罠の存在に気付くこともなく、足に食い込む爪

を外そうともがく、そして：そうこうしている内に、その場のちようど真上、そこから3 m四方の範囲に所狭しと剣が敷き詰められた天井板、それが「足挟み」<sup>ベアトラップ</sup>の効果時間が切れると同時に起動した。

「吊り天井」

その声と同時にゴン！と言う音を立て、天井から落ちて来たソレは、対象者を串刺しにした。

デミウルゴスはそのからすぐ、天井のトラップを変更、最後の締めくくりに必要なトラップを仕掛ける。

これはチャージ時間を異様に必要とするので、待ち時間を充分にとれる状況でないと間に合わない可能性がある。

吊り天井によってライフゲージがゼロになったのを確認しているデミウルゴスは、「ローリングボール」を発生させた直後に切り替えておいたトラップのチャージが完了しているのを確認し、相手に余裕を与えないタイミングで、起動させた。

「アイスアロー」

トラップから氷の矢が飛び出し、魔法ではなく「トラップ」としての機能で、対象者を氷漬けにした。

ちようど、ライフがゼロになった瞬間、氷漬けにされたので、もう彼は成す術もないだろう。

拘束時間が無くなるまで、戦士は凍結したままになる：その間、チャージの時間を稼いでおくことにした。

ヘビーマツシャーの4名は、その吊り天井が落ちた音を聞き、そこに居るのでは？という相談をして戦士の名を呼び、場所を探す：音からしてかなり後方のようなのだが、周囲に音のない墳墓内、大きな声なら耳に届くだろうと判断したためだ。

だが彼らはまだ知らない。

その当の戦士は吊り天井が落ちた瞬間に絶命して、返事など返せる状態ではないということに。

そして、戦士の方とは言えば「凍結」しているとはいえ、まだまだチャージはたまらない、最後の天井のトラップが使用可能になるまであと少し…という所で、時は動き出すべく「氷の矢」の凍結が解除されてしまった。

そこで、間髪入れずに仕掛けておいたもう一つの手段、「<sup>ペ</sup>足挟み<sup>トラップ</sup>」が壊れた直後に仕掛けておいた「マグネットフロア〈氷〉」これを、「アイスアロー」の凍結時間中にチャージを済ませ、いつでも起動できる体制を整えていた。

「マグネットフロア〈氷〉」は、床から展開されるトラップ。

ちょうど中心地に戦士が居たので時間差すらなく、即座に中心ポイントに凍結された戦士は、ただただ、何の抵抗も出来ず、全てを受け入れているしか道はなかった。

氷漬けのまま、仲間からの呼びかけに（元からこの時点でライフゲージはゼロなので）返答できない戦士が凍らされてる間に、時間が経過し、決定的な「その時」がやってきた。

「ようやく溜まりましたね。」

待ちに待ったその時を、楽し気な声で締めくくると、モニターを見ていた悪魔は最後となるトラップを発動させる。

「マグマロッカー！」

天井から、穴が開き、そこから落ちて来る巨大な溶岩：マグマから作られているような、対象者をドロドロと燃え溶かすために作られた

ようなソレが現れることになっても、既に命の火が消えている「戦士」はその瞳に何も映すことはできなかった。

その岩は、わずかに傾斜がある通路をゆっくり…ゆっくりと転がり落ちて来て、戦士をおしつぶす。

その結果、氷は砕け散り、その身はマグマに焼かれ、ドロドロになった体、さらにローリングボールの爆発で付いた少しの匂い。

結果的にそれが彼らへビーマツシャーを惑わすことになるのだが、それも誤差の範囲、修正は効くものと意識を切り替えた。

「さて、実験は済みましたし、本番は…至高なる御方の居城で、御方を口汚く罵った…あの弓使いにしましょうか？」

戦士が居なくなってしまうた今、後ろの役目は、神官のクラスを取得している者、弓使いは2番手だ。

「後ろに居てくれればコトは簡単だったんですがね…さすがにそうは行きませんか…どうしましょうかね…。」

少し悩むも、このメンバーを仕留め切るまでトラップの構成を変更することはできない。

「天井」 花瓶、吊り天井、マグマロック

「壁」 アイスマグネウォール「氷の磁力壁」 アイスマロー、ローリングボール、

「床」 ベアトラップ「足挟み」、スプリングフロア、マグネットフロア〈氷〉

どちらにしろ、この構成で何とかするしかないだろう。

「そう…御方に…満足していただくために…」

その瞳に決意の熱を新たに宿し、使命に燃える忠実なる悪魔がそう高らかに宣言していたという。

一方、戦士を欠いて4人で進むことになったヘビーマツシャー。

構成は、戦士が抜けた為、重戦士であるグリーンガムが先頭。  
続くのは、先に危険を察知する役目の盗賊持ちのレンジャー。(弓  
持ち)

その後ろに魔法詠唱者、マジックキャスター最後が、一応戦うことも出来る神官だ。

「結局、ヤツがどんな方法で、あんな短時間に仕留められたのか…結論  
を出せた者は居なかったな…」

「うむ、仕方あるまい、こうなっては我らだけで、なんとかするしか道  
はない！そうだろうか？汝ら。」

そう決意を新たにしながらも、原因のわからない何かから逃げよう  
とするかのように急ぎ足だ。

しかし、先頭がフルプレートのグリーンガム、そこまで速度を上げて  
走れるわけはなかった。

逃げていて気付いたこと…、妙に静かだ。

静かすぎると言って良い程に…その時、行く手の先、曲がり角から  
誰かが進み出て来るのを見ていた2番手のレンジャーが、前のグリン  
ガムに警戒を呼び掛ける。

「グリーンガム、前から…多分アンデッドだ！」

「そうですね、あれからはアンデッドの反応がありません。間違いない  
ですね。」

「またか…ここにはアンデッドしかおらんのか！」

「仕方ないだろう？ここは墳墓だぜ？ 天使とかいたら逆にびっくり  
するよ！」

そう言って全員が戦闘体勢に入る。

弓を使う盗賊は、盗賊技能、レンジャー技能…どちらを使おうとア  
ンデッドには有効な攻撃は出来ないだろう

そう判断し、弓使いの彼は一番後ろに下がる。

前に居るのは、グリーンガム、そのすぐ後ろが神官、次が魔法詠唱者だ。

さて：おっぱじめるか？と全員が意気込んだ瞬間、そのアンデッドの姿が目の前に来て正体が判明する。

「エ…：死者の大魔法使い…：！」

「まずい…：戦士二人いても難しい相手だつてのに、4人じゃ分が悪すぎる、ここは引こう！グリーンガム！」

「いや、ここは踏みとどまって叩くしかあるまい…：幸い相手は一体…：のみ…：で…」

と言い終わらぬ内に、さらにその後ろからぞろぞろと着いてきた人影、そいつらも同じ死者の大魔法使いだった。

全部で5体。

勝ち目なんてあるはずがないと、即座に後ろを振り向き、逃げようとするも…：先ほどまでそこに居なかったはずの通路の先に、いつの間にか死者の大魔法使いが逃げようとした方向にも2体、通路は一本道、通り過ぎてしまったT字路は、死者の大魔法使いの後方。

これで計7体…：「こんなデタラメ、許されるのかよ！」と、盗賊がまた愚痴をこぼす。

しかし、口汚くこの墳墓を罵った所で状況は変わらない…：

こんなところで火球でも喰らったらひとたまりもないのに、5連発なんてなつたら消し炭しか残らない。

背後の分も入れたら7発同時爆裂だ…：骨が残ってくればいい方かもしれない。

「グリーンガム…：そこに扉がある！、そこに飛び込もう！」

「うむ！ 行くぞ！ 汝ら！」

扉を開けてそこに躍り込んだ瞬間、部屋全体に魔法陣の光があふれだし、そのまま扉の中に入ったメンバーが実は躍り込んだ時点で「3人」になっていたことにも気づかないまま、彼らはどこかに飛ばされてしまった。

「さて、本番としての料理といたしまししょうか…?」

パネル越しに見ているその光景に、悪魔は満足そうであった。

壁に発生した氷の磁力壁アイスマグネウォールに囚われ、壁際に吸われたまま、凍結している対象者ターゲットを見ている。

チャージ時間がすでに終わりマグマロックの準備は済んでいる。

いつでも、真上からレンジャーをつぶしにかかるのは可能だ…だがまだ早い。

幸い氷の磁力壁アイスマグネウォールはダメージを与えるようなトラップではない。

効果が切れて、連携が立ち消えになってから、初撃で大ダメージを与えて連続連携コンボにつなげた方が、得点もHIT数に応じて大きくなる。

「おーばーきる、という要素もあるようですが、それは今回の構成では難しいでしょうね…それは次の機会に試してみるとしまししょうか…?」

そう独り言を言っていた悪魔は、天井から発生する罠の中に即死レベルの物が入っているという認識が薄い。

だからこそ、「この程度ならちようどいいダメージでしょう」とすら考え、なにやら楽しげに、連続連携コンボのための舞台を整えている。

『最初の大ダメージは「マグマロック」くらいがいいでしょう』と思っ居る悪魔は、「ソレ」を発動させる前に、壁の罠は「ローリングボール」に変更、床には「スプリングフロア」を設置して、チャージもすでに溜め始めている、氷の凍結時間が時間切れになる頃には半分



以上はチャージが溜まつてるだろう。

※ここからはデミウルゴスの頭の中の計画。

とりあえずの手順としては、「マグマロック」でHPを一桁になるまで削った直後、「ローリングボール」で爆発を起こし吹き飛ばす。（予想ではここで死亡）

そして、飛ばされた先にある「スプリングフロア」で、通路の先の方角に頭が向くように弾き飛ばす。

「マグマロック」が当たった直後に、どのトラップより早くチャージが溜まる「花瓶」をフロアで飛ばした先のポイントに設置させておき、愚かな侵入者で、至高の御身に無礼な口を聞いたソイツの硬直時間が切れる前に「花瓶」を落とす。すると、頭にかぶった状態で即座に立ち上がるようになるのだ。

花瓶は意外に便利で、倒れている対象でも、身体の一部でも触れるようであれば、頭にすっぽり被るようになっていく。

そのため、HPがゼロでも、立ち上がって一定の歩数までは勝手に進行方向へと歩きだすのだ。

少なくともふらふらと歩いている間は死亡の効果は発生しない、一定歩数分歩き終え、花瓶が割れたら即効果が切れる（つまり死んでしまふ）ので、花瓶が割れる手前の位置に設置する壁際に、トラップアイスマグネウォール「氷の磁力壁」を設置、「ローリングボール」の爆発直後に切り替えてあるのでチャージはその時から始まっている、当然準備は万全だ。

「壁」のマグネットのある場所までふらふらと愚物が歩いている内に準備が終わっている「氷の磁力壁」アイスマグネウォールに「花瓶」状態のまま吸われ、凍結状態になったら、花瓶が割れた瞬間、「天井系の罠」である「吊り天井」に移行。

「吊り天井」は、設置ポイントを中心に1m上下左右へと張り出しており、真四角の板状になっている為、1mだけずらせば、他の罠とポイントが被ることがなく、エラーが起きることは無い。

流れとしては、「花瓶」が割れる1m手前で、「氷の磁力壁」<sup>アイスマグネウォール</sup>で氷漬けにしたら、効果が切れるまでチャージ時間を稼ぎ、他のトラップの準備に費やす。

「吊り天井」は保留しておき、壁の罫の真下、ほんの1m分ずらした位置に床部分のトラップ：<sup>ベアトラップ</sup>「足挟み」を設置して、凍結時間中に使用可能にしておく。

氷が割れた瞬間に、<sup>ベアトラップ</sup>「足挟み」発動で、再び拘束。…しながら同時に「アイスアロー」を設置。

<sup>ベアトラップ</sup>「足挟み」発動中に「アイスアロー」のチャージが溜まるので、「足挟み」<sup>ベアトラップ</sup>↓「アイスアロー」の発動と同時に「マグネットフロアへ氷」をセツトでチャージ開始。

<sup>ベアトラップ</sup>「足挟み」が切れた時、「マグネットフロアへ氷」を発動、倒れたまま、ずりずりと引き込まれる死体が氷漬けになって、コンボが繋がった瞬間にトドメの「吊り天井」というシナリオだ。

※ここからデミウルゴスの考察から現実に戻ります。

そして、タイミングが計られ：「マグマロック」が発動した。

発動と同時に天井に穴が開き、マグマに燃え滾った巨岩が頭上から現れる。

弓使いの盗賊は巨大溶岩につぶされ、ライフゲージがゼロになった。

(なんとも脆い…あの一発で終わってしまうなど…私の想像を遥かに超える脆弱さでしたね…でも計画は遂行します。御方を楽しませる為の遊具となりなさい。)

そう…彼の命が尽きてもそこで「悪魔」の責め苦は終わらない、それほど「彼」の発した言葉は許しがたく、罪深い…殺して終わりではその悪魔の気が済むはずもなかった。

いくつもの連続<sup>コ</sup>連携<sup>ポ</sup>を叩きこまれ、「死はそれ以上痛みを与えられないという意味で慈悲」という認識のナザリックで、死してもなお痛みを与えられ続けるという、悪魔が最も望んでいた状況にやつと至ることが出来、最後の連続<sup>コ</sup>連携<sup>ポ</sup>で盗賊が解放され、真の意味で「息絶える」まで、その操作を心の底から楽しんでいたデミウルゴス。

「死体に鞭打つ」を体現するようなその連続トラップを最後に締めくくったのは計画通り「吊り天井」だった…。

「それにしても3人は転移させてしまいましたか…、ですがまあいいでしょう、当初の目的は果たすことが出来ましたし…あとは彼らに任せておけば問題はないでしょうからね…。」

そう言つて悪魔らしい笑みを浮かべ、適当なトラップの対象者<sup>ターゲット</sup>が他に居ないか…遠隔<sup>ミラー・オブ・リモートビューイング</sup>視の鏡を使用し、デミウルゴスは新しい玩具を探し始めた。

（それにしても至高の御方々はまさに素晴らしい先見性をお持ちだよもや死してもなお痛みを与え、かつあのようなトラップの効果で、効果切れを起こすまで倒れる事も断末魔の隙もお与えにならないような手段を予めこのナザリックに密かに準備されていたとは…私でさえも予期すらしていなかったこと。…まさに驚愕に値する…鬼才と呼ぶことすら及ばない…それさえも超越した境地にいらつしやると判断するにふさわしい、という言葉しか思い浮かびません。）



（え？ ウソ…こんなトラップの機能、ナザリックにあったの？大丈夫なのか…コレ…？本当に金貨消費してないんだろうな…？）  
「ア…アルベド？ この罠はナザリックに元からあった物か？ 本当に金貨を消費していないのだろうか？」

「はい、仰せの通りでございます、今ごらんになられていた罠の一通りは全て、金貨の消費を必要とせず、【悪魔】系統の種族をもち、かつ、

魔力を有する者にしか発動させる事が出来ず、それ以外の者は、その罫を所有することはおろか、起動も、各場所に自由に設置することも出来ないという…用途がかなり限定的な物でした。なので、汎用性に乏しく、今、ご照覧あそばされたトラップの起動には金貨の消費は一枚も伴いません。」

「そ…そう…か、そのようなモノがこのナザリックに眠っていたのか…」

（どうせなら『ナザリック学園』とかのデータを製作途中でもいいから見つけてくれれば面白かったのにな…でもまあ、これも守護者たちが見つけてきてくれたモノ…まずはホメる事から…だよな。）

「そうか…なかなか良い見世物であったぞ？ 対プレイヤーに仕掛けるには『移動阻害対策』や『冷気対策』…『炎対策』、『時間対策』などされれば無意味な効果ばかりだったように見えたが…、今回のような弱い奴らだから効果があったのか…、仮にそれらの対策をしているプレイヤー相手でも「トラップ」独自の仕様により、そういった『対策』すら全く意味を成さなくなるのか…、実際の所、どうなのかは時間が出来れば検証したいものだな…。」

アインズはそこまで言って、とある可能性を思い浮かべる。

アルベドなら、そのくらいの実験はしているだろうという、ある意味信頼を込めての質問をした。

「そういえば、POPするスケルトン達で実験はしなかったのか？

あれらは冷気の攻撃など、効果がなかったはずだが…？ それらについてはどうだった？」

「申しわけございません。低レベルのスケルトンでは1〜2回程の「こんぼ」なるもので砕け散ってしまい、その先にまでつなげることは出来ませんでした。人間相手なら、あのように連携がタイミングよく間に合えば、ひたすら続ける事も出来るようですが…ナザリックのシモベでは奴らのように、倒せば資金が回収できるようにもなっておりませんでしたので…。深くは追及しておりません。」

そこで思いついたようにアルベドが伝え忘れていた内容を口にす

る。

「そうです！　そう言われれば、スケルトンでも爆発系の罠や、先ほどのような岩でも効果はございました、それは確認しております。」

（岩石なら、攻撃の種類としては「殴打」に属するだろうし、さっきのは「マグマ」みたいだったから、間違いなく炎ダメージだろう…どっちも弱点じゃないか…そこ以外を知りたかったんだが…、まあ「弱点に通る」という事は、通常の攻撃手段としてもダメージが通る公算は高いと見るべきか…？）

「そうか…ならば、今度、機会があれば死者の大魔法使いに時間対策用のアイテムを持たせて、さっきのトラップに掛からせるようにして見たらどうなるか実験してみてもどうだ？　見たところ、氷にする罠の方はさしてダメージを与えていた様子でもなかったようだしな…その際は私もそれには同行して見てみたい。」

（死者の大魔法使いは冷気に対する耐性があるからな、凍って時間が止まるはずの罠の場合、凍らなかつたら時間が停止するだけなのか、それとも完全に無効化されてしまうのか…、足を拘束する罠の方は斬撃扱いになるんだろうけど、それに対しての耐性も少しはあるからダメージも軽く済むはずだし、そうなる足止めは有効となるのだろうか…ん？）

アインズはついさっきアルベドが言った言葉をそのまま聞き流していたが、気になる言い回しをしていたことに気づいて問いかける。

「アルベドよ、先ほど、気になることを言葉にしていたが…対象者が人間の場合は…資金の回収ができるのか？」

「あ、ハイ、シモベ達での実験では金貨は生じませんでした…八本指の組織を傘下に入れる際に、殺せずに地下牢獄に放置されていた下等生物どもの中でも最も下等で愚劣な、唾棄すべき輩のみをトラップにかけてみました所、金貨が生じましてございます…それもユグドラシル製の…なのは間違いございません、この目で確認済みでございます

す。」

(おおお!!! それは朗報じゃないか? 周辺諸国をわざわざ支配して、トップに君臨して税金とかで稼がなくても…死刑囚なんかの罪深いヤツだけをトラップにかけて資金稼ぎって言う可能性が出てくるとは…、嬉しい誤算じゃないか?)

モンスターを狩り殺しても、ドロップアイテムもクリスタルも出ない、どころか金も落とさないとハッキリわかった時には「冒険者」になった意味を見失いそうになったものだが…ここに来て資金が稼げる可能性を見つけ、アインズは鎮静化するまでには至らない物の、ジワジワと喜悦感にも似た感情が湧いてくるのを止められなかった。

「そうか…、それは嬉しい、私にとってもナザリックにとっても朗報だ、国が出来た暁には死刑囚に対しての処分方法に、また一つの可能性が生まれたな、わざわざ拷問だの身体を食べさせて治療だの…回りにくい事をしなくても資金が稼げるなら、そういう手も…という選択肢が増えたことは喜ばしい。」

「お気に召して頂けたようで何よりでございます。」

「その件は取り敢えず、さて置いてだ…そのトラップに関してはアルベドは使えないのか? サキュバスとは言え、元々は小悪魔イシンブなのだから、使えないことは無いのではないか?」

支配者のその言葉で、少し表情に陰りを見せつつもアルベドはその問いに正直に答える事にした。

「はい、私でも持ち運びや、設置、起動にも全く問題はなく動作させることは出来ました…ですが、私はデミウルゴス程の巧妙さを持ち合わせてはいないようで…その「こんぼ」なる段階につなげる事が難しいのです。」

(え? そうなの? デミウルゴスと並ぶ知者のはずなのに、そういうのは難しいのか? …まあ、防御特化でビルドされてるわけだし…そういう点では苦手分野なのかもしれないな…)

「そうか、少々立ち入った話を聞いてしまったようだ、気を悪くしないでくれ、アルベドにはいざという時は私の身を護る為の盾として、存分に力を奮って貰わねばならん時が来るかもしれない、その時に力を発揮してくれれば、それでよい、誰にでも向き、不向きというものがあるのだからな…」

少し大げさに言う事で重い空気を排除しようとしながら、鷹揚に手をあげ「気にするな」のポーズをアルベドに見せる、彼女にはそれだけで通じたようだ。

「ああ…能力の足りない私のようなシモベ風情にそのような温情あふれるお言葉、この身に染みましてございます。 そのご期待に応えるべく、私の可能な、出来る範囲のあらゆる分野でご期待に応えてご覧に入れます。 これからの私をどうか見ててくださいませ！」

「う…うむ…期待している。 ……そ、それはそうとあいつらは何処に飛ばされたのだ？ アルベドが設置したのだろうか？ あの転移は何処に通じていたのだ？」

「あ、それならば、こちらでございます。」

そう言ってアルベドが映し出した先の映像…。

そこに目を向けるアインズ。

そこには艶めかしく腰を揺さぶり、しなを作る〈脳漿喰い〉、特別情報収集官の姿があった。

そばにトーチャーも居るので、即座に殺しはすまい…と割とすぐに目をそらした。

部屋の隅にフルプレートのような装備が一式…打ち捨てられるかのように積み重ねられているのにもアインズは気付かずに…。

そして、その兜…、額の部分にはカブトムシのようなツノが一本、生えていたという…。



「誰かいるか？」

「おお…こつちにいる。」

「よかった、ここはドコだかわかるか？」

「いや…悪い、俺にもわからん。真っ暗で何も見えないのは、俺だけじゃないよな？」

「ああ、こつちも周り中が真っ暗だ、何も見えやしねえ。」

「そうか…どちらにしろ、こんな所からは早く出ないと…出口は何処だ？」

そう言つて、立ち上がろうとし…、足を地面に踏み込んだ瞬間、「ベキゅ」…とも「ブチュ」とも言えない…なにかを踏んだような感触がする。

それが何かを見ようとしても下も上も、左も右も、全てが真っ黒…だが、何か違う、暗闇とは違う異質なものを感じていた。

…しかし、その正体がわからない。

だが、気のせいか、この暗闇は動いている気がする…ずるずるとするような大きな個体としてでは無く、どこかツヤのあるような黒さが密集して、それぞれ不規則に動いている様な感じさえする。

「なにゆつくり足元なんて観察してるんだよ？早く出ねえと先に行つちまうぞ？」

「待ってくれよ、置いてかねえでくれって！」

と、そこまで会話していた時点でどこかから響いてきた、まるで反響する様な声。

「いやいや、さすがにココから外に出る事は叶いますまい。」

「な…なんだ、誰だ？」

「どこから聞こえるんだ？この声は？」



周囲を見回していると、自分から見えて横の方向に足より下の方から上に向かって、淡くどこか不気味な色を秘める光が立ち昇り、そこから、徐々に何かがせりあがってくる。

それはよく見ると頭から2本のヒゲのような何か…いや、あの動きは触覚であろうか？とつい考えてしまうような何かを生やし、それを忙しなく動かしている。

手には王家の者が持つような錫。

頭には冠を被り、マントのような装いは高貴な出で立ちを感じさせた。

もちろんそれが人間であつたらば、という前提が付くが…。

目の前の存在は、昆虫じみているが、六本ある足の内、一番下の2本で直立している。

もしも昆虫が自力で2足歩行をし始めたとしたら、顔に相当する部分、目などは、当然上を向くだろう。

だが、目の前の存在は天ではなく、ちゃんと前方へと顔を向け、直立しているながらも、人語も解するようだ。

「失礼、お話し中のところ、勝手に会話に割って入ってしまった無礼、許していただきたい。」

と、さも友好的であるかのような言葉から入る、その昆虫のような…異質なナニか…。

「私は、この場所の守護を任されている『恐怖公』という者…どうぞお見知りおきを。」

「な…なんだよ、なんなんだよ、お前は一体何もなんだよおお!!」  
神官である男が半狂乱になったように叫ぶ。

どうやら、こういうのは苦手だったらしい、そういう自分も決して好きという訳ではないが…普通の昆虫とは全く違う存在感を漂わせ

ている「ソレ」には不気味さしか感じられない。

ただの『虫』と結論付けるには、あまりにも…であり、違和感なんという生易しいもので片付けられる印象ではなかったためだ。

「ふむ…、そうですねか…：どうやらもう一度自己紹介をした方がよろしいのでしょうか？」

静かに、動揺することもなく丁寧な物言いをしているところがまた一段と不気味さに拍車をかける。

「いやー！そうじゃねえよ！ 違うだろ！ そういうコトじゃねえよ！」

もうすでに神官は涙交じりだ。

こりや、交渉で何とかかなりそうなら、自分が何とかするしかないか…と魔法詠唱者である男が一步前に入る。

そこでもやはり「ぶちや…」とも「べきよ」、ともいえるような何かを踏んだが…それを気にしている余裕はない。

「失礼、どうやらこちらの方には転移で飛ばされて迷い込んでしまったようです、急なことでこちらも驚かれていますでしょうが、それは私たちも同様なのです。どうでしょう？よろしければココから出してもらえる方法とかを教えるはもらえないでしょうか？ もちろんお礼なら致します…：言い値という訳にはいきませんが…」

と、話している途中で目の前の『恐怖公』と名乗った『虫』のような何かの話に割り込んで来た。

「いえいえ、何も遠慮されることはありません、こちらの方は普段からお客様が訪れるという事自体が珍しい場所、急な来客の方がありがたいのですよ。それにお礼などは必要ありません、『お礼』ならすでに私の手中ですから…：新たに用意されずとも、私は今、大変に喜ばしい気分なのです。」

「い…、一体なにを？」

「実はですね…普段から我が眷属たちは腹を空かせているのです、それに…もう共食いは飽き飽きしているようでしてね…だからお二方には感謝しているのですよ？」

目の前の存在がそう言い放ち、手の位置だろう場所に握っている錫を持ち上げると周囲にあつた真つ黒なナニかが津波のように押し寄せた。

「うわああああ!!」神官の絶叫が響き渡る。

「やめ…よせえ!!」魔法詠唱者も同様に叫ぶも、それで事態が好転するわけもない。

神官は咄嗟に手を口に当て、体中にかじりついているだろう「黒い悪魔」と称されることもある小さい虫、大きいものは1m以上もあるモノもいるが…そんな者達に、穴と言う穴から、おびただしい数の「そいつら」に入り込まれ、身体の中から食べられている痛みさえする。

神官も、魔法詠唱者も、同様に黒い波に飲まれている。

そんな中、口に手をやっていた神官の口から魔法の発動が発せられる。

〈軽症治癒・ライトヒーリング〉

それを傷つくたび、かじられるたびに唱えている。

しかしそれも無限ではない。

押し寄せる数が魔法の効力を上回り、回復量より食べられるダメージの方が大きくなっていく。

そんな中、(こんな形で死んでしまうくらいなら!)と奮起した魔法詠唱者が、口の中一杯に入りこんだ黒い虫たちを食いしぼり、歯で噛みちぎり、口内だけ、一瞬自由になった瞬間に発動に間に合う魔法を唱える。

炎系の魔法の中で自分が一番、慣れ親しみ素早く唱えられるようになった魔法。

〈炎の雨／ファイアーレイン〉

「食らいやがれ！」

その声と共に、恐怖公へと乱れ飛んでくる雨のような何本もの小さな針にも見える火が、一斉に狙い通り飛んでいく。

「いけませんねえ、この様な場所で火など使われては…眷属たちに燃え移ったらどうします?」

軽くそう答え、特に脅威とは感じていないような声。

(まさか、俺が使い込んだ、一番威力のある火の魔法なんだぞ?)

そう信じられないようなことを言われたと思つた瞬間…さらに信じられない現象を目にする。

〈ウォールオフインセクトの壁!〉

目の前の存在がそう声をあげると、そいつの足元にあつた黒いモノ達が集まって壁のようになることで、その火の雨を代わりに受け止める。

受け止めた壁は、すぐに火が付き、燃え広がるも、その火は別の虫たちが、引火した虫を容赦なく食べる事で延焼を防いでいた。

「やれやれ、おかげで我が眷属たちの被害が予想より大きくなってしまいました。」

それほど、残念そうな声には感じられない嘆きが聞こえた後、恐怖公の追撃の音が発せられる。

「そこまで頑張つたみなさんに私からのプレゼントを差し上げましょう、存分に味わってください?…そう、おかわりを…ね。」

と言って錫の先端をこちらに向けると、黒い波の第二波が押し寄せ、2人を一気に飲み込んだ。



一方……

「あらん…もうおねんねしちゃつたのねん…残念ね、もう少しイケるかと思つていたのに…」

少し不満げな声をもらしたニューロニストは、先端にトゲトゲしい突起が付いているスティック状の棒を横のテーブル上に置く。

「でも、しかたないわよねん、この尿道掘削拷問は、至高なる御方のお一人であられるチグリス様だって、涙を流し、苦痛に耐え、いつ終わるかもしれない「激痛」なんていう優しい言葉では表現できないくらいなの：っておっしゃっていったものねん：それを人の身でそれだけ耐えたのだから：ほめてあげるべき：かしら？」

そう独り言をつぶやくと

「トーチチャー？ 癒しておあげなさい？そして治ったら優しく起こしてあげるのよ？わかってるわねん？」

指示されたトーチチャーの一人が傷を癒すべく、治療に入る。

（まだまだ、これは序の口、これから長い付き合いになるのだから…、次はどんなことをして楽しんでもらおうかしら？ 『付け爪擬態蟲』でも付けて：いえ、それくらいなら、いつそ『爪ピアスをしてあげる方が素敵よねえん：そうね、そうと決まればそうしましょう♪』

拷問官とも呼ばれるカノジョ（と呼ばれたがってる性別詐称モンスター）は、相手のリクエストを聞かずに、自分が思いついたアイデアならきつと喜んでくれる、と考え、そう思い込むことで自己の趣味を正当化する困った認識：需要と供給が全く成り立っていない思考回路をしていた。

：だからこそ、『特別情報収集官』なのに、『拷問官』とも呼ばれているのだが…

「そうであれ。」

創造主からそういう設定を付けられているニューロニストにとって、当たり前前の事であり、それが他の誰に受け入れられなくても、それが自分の生まれた理由であり、自分がしたいと思う事は創造主もそう望んでいる…、そう考えている為、結局のところ、「彼」の行動が「誰かの為」という理想に近づくはずもなく…、しかし「彼」の性格は『ナチュラルに壊れている。』も同様なのだが。

拷問官としては特に優秀なため、支配者としてもギルメンの残した大切な忘れ形見のようなもの。

アルベドたちを家族と言うなら、もちろんニューロニストももちろん

んそれは同様である。

思い入れの度合いに差があるだけで…。

そこらへんのことは深く考えない『特別情報収集官』は『これならきつと喜んでくれるに違いないわねん♪』と、独りよがりの思考ということにも気付こうともせず、今日も『自分にしかできない』職務に励むのだった。

## 第50話 老公の処遇

それは、舞台の時間が少しばかり巻き戻り、チーム全員が3つに分かれる十字路に出てしまった場面から始まる。

「さて、では我らはこの先、正面の道を行こうと思うが、汝らはどちらに進むつもりだ？」

これから、自分たちの待つ運命を知らず、さつきスケルトン軍団を蹴散らしたばかりのヘビーマッシャーが、十字路を正面方向に先行すると言う。

「そうか…俺たちは…そうだな、それじゃ、右の方にも行こうか？どうする？みんなはどっちの方が良いと思う？」

ヘッケランが、自分は右に行きたいと思うけど、と…他のみんなにも意見を聞こうとするあたり、ワンマンではなく、チームの意見を重んじようとしているのだろう。

「そうですね、リーダーがそう言うのなら右でもいいと思いますよ？」

「私も、別に反対する理由はないわね…知らない場所なんだし、未探索なんでしょ？どっちに行つたって、危険なのは同じじゃない？」

「アルシエはどう思う？」

ヘッケランがアルシエにそう問いかけた時、アルシエの頭の中で通信がつながる時のコール音のような感覚があった。

「ちよつと待って。」

アルシエは短くそう言うと、視界に『天武』のエルヤーを収める。

大っぴらに見ているとバレない程度に、目をそっちの方に動かすと、エルヤーもこめかみに指を持って行っている。

やはりこれはベルさんからの<sup>メッセージ</sup>〈だ〉。

「はい…、ベルさん？どうしました？」

「ちよつと心配でね、一応もう一度言うけど、ここのお金や、旗、武器、防具、彫刻など、例えそれが石ころの1個でも持ち帰らないようにね？…それと合言葉、ちゃんと覚えてるよね？ 以前教えた、腕輪の

強制起動させる時の合い言葉。」

「ええ…もちろん…でもあれ、本当に言わないとダメ？」

「そんなことはないと思うけど、この前まで居た異空間でも、自動発動しそうなタイミングだったはず、って場面は何度かあったのに、起動する気配がなかったからさ、気にはなってるんだよ、だから一度、言葉で未起動状態を解除させる必要があるのかもしれない…と思ったんだ。」

「そ…そう…わかった、気に留めておく…ところでベルさん、これってお守りって言うってたけど、一度使ったら消えちゃう使い捨ての…って事は…ない…？」

「あ、そっちの心配してたの？ 大丈夫、何度使っても大丈夫さ。戦闘で表面が損なわれることがあっても、一度解除して、また装着し直せば元通りになってるはずだから…そういう仕様にしてあるはず…だからね。」

ベルからの言葉で、やっと安心できたアルシエは「危険になったら使わせてもらう」とだけ伝える。

そうするとベルからも返事。

「二応、言っておくけど、多分POPするモンスター程度ならびくともしない素材で出来てるんだけど、それ以上に強い存在相手だと厳しいかもしれないから…その点は気を付けて…基準は難度で言うと150までだ。」

ベルさんがそこまで言ってくれるなら、多少は無茶しても浅い階層までは多分大丈夫だろうと判断して「ありがとう」とだけ言って、通信を切る。

「アルシエ、ベルさんからか？ なんだって？」

「気を付けて、だって…心配性だから。」

アルシエがそう言うのとヘツケランも「ああ、あの人そういう人だよな」で済ませていた。



「きつきの話だけど、私もどっちでも構わないと思う。」

その言葉でフォーサイトの行く道は決まった。

「じゃ〜ウチらは右に行くとするよ、老公は墳墓の入口付近で別の通路がないかどうか調べてくれるって言うし…こっちは10%払わなきゃならないんだしな…探索開始だ。」

「ダメ…この場所で、この墳墓内にあるものは、石一個でも持ち帰るべきではない。それは前にも言ったけど、それはきつと命を縮める行為。」

アルシエは知っていた。

この墳墓の複数ある入口の内一つ、自分たちが入ってきた場所の正面に、見覚えのある紋章の旗が高々と壁に掛けられていたのを…あれは、恩人の一人、ゴウン様の頭上にあつた紋章と同じ絵柄だった。

ならば、きつとここには主人が居る。

所有者が居る場所、お宝を奪おうなど…それはワーカーではなく盗人だ。

貴族を捨てたとはいえ、山賊や、盗賊のマネをするほど落ちぶれていない。と内心で思つて居るアルシエは、まだ確証には至っていないため紋章の事はまだ仲間には伝えていない…

その「確証」とは、その紋章が恐らくはゴウンさまに関係する誰か、もしくは所属する組織、またはどこかの国家？という線もありうる…だけど、個人ならまだしも国家とかであれば、王国からのクレームなど比べ物にならない処罰が下される可能性もあると、その恐れは無いとは言いい切れないので、すでに何度目かになる忠告をした。

ヘツケラン自身もそれは頭の中にあるが、いざ同業の他チーム達がお宝を得て「ウハウハ」状態で居るのに、自分たちは何も得ずに…、実質なんの土産も自分に対するご褒美もナシで、危険な遺跡を進んでいるという状況に「少しくらいわからねえって」という気持ちが始り始めている。

イミーナもそれは同様のようで、少しくらい…という認識になりつつある為、イミーナはロバーデイクが、ヘツケランにはアルシエが付き、それを制している状態だ。

(それにしても、ベルさんからの腕輪、この宝石の中にある紋章は、あの旗の紋章とも違った…もしかしたらあの玉座のある通路、あそこに並んでいた旗の中で同じ模様があったかもしれないけど…1枚1枚はさすがに覚えていない…それに腕輪をもらったのはカルネ村に入ってから話だし…)

と、一人で思考に陥っていると

「それでは私たちは勝手にモンスター共を狩り殺して回って来ようと思えますので、お先に失礼しますよ?」

そう言って、フォーサイトとは別の方向に進んで行く『天武』のメンバー。

「とつとと行ってモンスター共に殺されちまえ!」

そう小声で口汚く罵るイミーナ、彼女はまだ『天武』のリーダー、エルヤー(本物)が依頼の途中で命を落とし、その遺志を受け継いだベルさんが、姿から形、声から挙動まで芝居していることなど夢にも思っていない。

それを知っているアルシェの目から見れば、やはり…と思う事。

それはこの墳墓に来てからモンスターを「狩り殺したい」そう言いながらも、今だに1体に対してもそれを行っていない。

先ほどのスケルトンが複数体出てきた時も「私はイヤですよ?あんな雑魚、みなさんで充分でしょう、私にとって役不足すぎて剣を振るう気にもなりません。」

そう言って、動こうとしなかったし、金塊はもちろん、金貨の山を見ても「帰りでもいいでしょう?深部に進むのに自分の荷物を重くしてどうするんです?身軽なアンデッドに追いつかれないよう身軽にしておいた方が得策ですよ?」

と、途中まではエルヤーらしい口調ではあるのだが、明らかにこの墳墓内でいざこざを起こしたくない、余計なもめごとを持ち込んでほしくない。

そう言ってる様だった。

噂で聞いている「エルヤー・ウズルス」なら深く考えず、目についた金貨は懐に収めエルフにはわずかでも与えないという行動ばかりだという話が一般的の様だったが、今はそうではない。

この墳墓内に入ってから行動を見てもエルフはもちろん何も得ていないのは変わらないが…、エルヤー自身も金貨一枚、武器一本持って行こうとしないのだ。

明らかに自分が持っている武器より上等の、魔法が込められていそうな武器があつたにも関わらず…だ。

アルシエは迷う、なにか言葉をかけてあげるべきだろうか…？

でも下手なことを言つて身内に、真相がバレることをベルさんは嫌がるかもしれない…そう思うと、どうしても素直な言葉を選ぶことはできなかつた。

「精々、アンデッドのファイアーボールで吹き飛ばされないようにすることね。

あなたのワーカー人生がここで終焉を迎えないことを祈つてあげるわ…。」

すると、エルヤーはアルシエに対して振り向き、こう返す。

「あなたのようなおチビちゃんに心配されるほど落ちぶれてはいないつもりですが…その忠告自体はありがたく受け止めましょう…確かに範囲魔法に巻き込まれたら大変ですからね…そこまで開けていない通路でそんなことがあれば…それは尚更ですからね。」

そう言いながら、背中越しにヒラヒラと手を振って去っていく。

イミーナが苦々しく「素直に礼の一つも言えないのかよ、クソ野郎！」

と、だんだん彼女のガラが悪くなってくる。

きつと次に会うときは違う姿になってるんだろうな…そう言えば、新しいチーム名、どうするか決まったんだろうか…？

そこも聞くの忘れちゃってたな…。

と、思うも、「とにかく無事で居てくれれば、どんなチーム名でも…」と誰にも聞こえない程度の独り言をつぶやいたタイミングで、エルヤールが背中越しに振っていた手を一瞬だけ、握り拳にして親指を立てる仕草をした。

多分、あれは「大丈夫、心配するな」

そう言ってくれているような気がして、少しだけ心が温かくなっていた。

「では行こうリーダー！ アイツの言ってたように深部に行くのに荷物で動きが遅くなつては本末転倒！ 漁った宝で身動きできなかつたではエルヤール以下！ それは避けるべき。」

そうアルシエがヘツケランに言うのと、「アイツを引き合いに出すかよ…：わかったよ、行きますよ！」

と半ばヤケになっているようだった。



「さて、人目は無くなりましたね」

「そうですね…：ヴェールさん。」

「お疲れさまでした…：気を抜かずよくここまでできましたね。さすがです！」

「いえいえ、それもみんなの協力があったればこそですよ。」

「さて、それでは、幻を解除しましょう。」

そう言つて、彼女たちの幻影を破棄させ、本来の装備姿に戻してあげる。

「もうそのみすぼらしい服、着ていなくてもいいでしょう…：」

そう言つて、インベントリに突っ込んで、封印することにした。

彼女たち自身が「必要」だと言い出せばまた出すことに抵抗はない

が：それでも、好き好んで思い出させるような真似はしたくなかった。

彼女たちは身なりを整えながら、耳を折りたたむために括り付けていた細い蔓を解き、元のちゃんとしたピンとするエルフの耳に戻していた。

「さて、それでは私も…」

と言つて、エルヤーは自分の髪色を黒に変えていく。

それはエルヤーではなく、ヴェール自身のスキルによるもの。

この世界に来てスキル効果が変わってしまった、バフ効果ではなく、主に変装がメインの使い道になってしまった能力。

以前、出会った、「エルヤー」の奴隷売買の際の業者の売り子だった奴で、趣味で「武技大辞典」なるものを自作で作っていた、それだけならまだいいが、フレイラを不快な目で、勝手な妄想で暴言を吐いてくれたため、胃の中で「捕獲」状態ですつと眠らせている男のデータを呼び出した。

どうやら異国からの移住者とかだったのか、この付近では珍しく黒の髪だったのを覚えている。

自分だって、元々は日本人、髪は黒なので、こっちの方が気分的に落ち着くような気がしていたため、その色にした。

金髪もキライじゃないようにはなっているが、エルヤーにつながる要素はなるべくなら消しておきたいというのが本音である。

髪型自体はエルヤーそのものであるが、色だけは黒塗りに変更し、アイテムボックスから引っぱり出してきたモノ。

「嫉妬する者たちのマスク、アニバーサリーエディション」である5周年を記念して配られた：「5年連続でクリスマスにボツチだったで賞。」を送られたような不名誉な装備品、もちろん効果などは何もない。

ただ、額に刻印されている真つ赤な「V」の字だけはわりとお気に入りだった。

それを装着する。

「じゃ、これでエルヤーのマネはしなくてもいいよね？ やつと自分に戻れた気がするよ。」

「ええそうですね、私達も素のままですんで居ていいなんて、ワーカーするようになって初めてかもしれないかもしれません」

「そうね、人目を気にしないでおおっぴらに振る舞えるなんて夢でしたから…。」

「ま、街中とか往来では今だって『いつもの目』で見られちゃうから、身内限定みたいなものだけ？ それでも違いますよね？」

3者3様に嬉しいという感想を持っていてくれるようで何よりだ。

自分には大きな影響力などない（と思い込んでいた）為、市場のエルフの奴隷制度の撤廃など、自分には手の届かない問題に思っているが、今は目の前で救えたこの3名の笑顔だけは守っていたい。

そう思うのだった。

「ところでヴェールさん？ その名前のままで活動するおつもりですか？」

「ん〜…そうだね、名前は変えようと思っているんだけどね…でも知り合いにはちゃんとボクだってコトわかってもらえる範囲の名前にしたいんだよね…はあ…これで何度目の改名だ？ …まあいつか…。」

「そう言えば別の地に行って冒険者なり、ワーカーなり、どっちをするにしても別のチーム名の方がいいって話は以前にも言っていましたけど…決まりました？」

「あ、そうそう候補はあるんだけど、感想を聞いて見たくてね、聞いてもらってもいい？」

「あ、考えてはあるんですね？ 聞かせて欲しいです！」

少し考え、以前アルシエちゃんが提案してくれたチーム名を試しに言ってみた。

「あ、ヴェールさん、それ、その使い方間違ってます。」

「え？ そうなの？ どこらへん？」

「バーニツシュというのは確かに、『研ぐ、磨く』を意味しますけど…それは物質に対して、紙とか石とか、刃物ですとか…そういう「物」に対して充てる言葉で、爪とか牙、と言った肉体にある部位に磨きをかけるのには向かない表現なんですよ?」

「そ…そうか…表現的にキライじゃなかったんだけど…じゃくどうするか?」

「あ、それなら「突き立てる」はいかがですか? 命名「突き立てし牙!」いかがですか?」

「んん、カツコイイ感じだね、アルシエちゃんには悪いけど、後で事情は説明して謝っておこう。」

「それじゃく新生チーム「スタックドフアング突き立てし牙」活動開始ですね!」

「おおく!! パチパチパチ!」

と口に出しながら4人で手を叩き合う、彼女達はハイタッチもしていた…どこでそんな文化覚えたの?とは、頭に浮かびはしたけど聞かなかった。

人目がないからいいけど、コレ、墳墓内で展開されるノリじゃないよな…。

同じ感想、心境でパネルを見ている至高の41人の頂点、ギルドマスターその人から、(なにやってるんだよ!ベルリバーさん!思いつきりくつろいじやダメじゃないですか!)と思われていることには気づいてすらいなかった。

ちなみに隣に立っているアルベドも、その光景を見て不快感をあらわにしているのだが、彼女がどんな表情をしているか…、アインズには気付くことが出来なかった…。



「それで、これからの行動の方針は？」

問いかけてきたセピアに、差し当たったの第一目的を告げる。

「これだけ時間を使えばあの十字路から人はいなくなってるだろう、だから、元の道に戻って、これから地表霊廟へと向かおうと思う。」

「え？ 逃げる…って訳じゃないですね？ 何をしに行かれるのですか？」

デイーネが行動の意味が理解できていないようで、エルヤーの考えを少しでも理解しようとして目的について知りたがっている。

「ああ、あのご老体の様子を見ておきたくてさ…多分、予想通りなら、今頃、大ピンチになってるんじゃないかって思ってたね」

「え？ あの人たち、それなりに強そうでしたけど…ほら、モモンさん？あのひとの戦いの時も一方的な攻め具合だったじゃないですか？」

「まあ、そうなんだけどね…（本当は理由は違うんだけど）強そうなチームから先に潰しておいた方が、この墳墓を支配する存在からすれば当然の行動だとは思わないかい？ しかも彼のチームは今…単独で地表部近くに居る、他の援軍は見込めない…なら、その絶好のタイミングを見逃すことはないって気がするんだよね。」

実は今、まさにその通りで、そのチームの目の前には、階段の上から見下ろすようにメイドの服を身に纏った5人の美女に進む道をふさがれている場面だったのだ…だがまだ自己紹介の最中、ということは何ベルリバーも予想していなかった。

「という事で、見に行ってみて、問題なければそれでいいし、何かあれば助けに入ろう、なにせあの老人は、率先して宝を漁る気はなかったようだし、状況次第では助けられるかもしれない。」



「まあ…そういうことなら？　見に行くだけ見に行ってみましょうか？」

「あ、そうそう、もしかしたら、そこには余裕で難度150超えのバケモンが複数体いるかもしれないから…ちよつと体の中に入つてくれる？　強そうじゃなかったらすぐ外に出して、チーム名の名乗りを一緒に上げようよ」

「あ、それいいですね！　チーム名の名乗り！　一度みんなで作ってみたかったです！」

「なら決まりだね…あゝゝん」

と大きく口を開けると、もはや何の抵抗もないのか3人が列を作つて歩いて口の中へと進んでくれた。

(信頼してくれるのは嬉しいけど…もう少しこう…リアクションとかない物かな？　まあ話がスムーズでいいけどね。)

その陰で、アインズはアルベドにそれを見られないように…と、必死に注意を引いて、コトが済むまで見せないようにするのに苦労していた。



「コロシマシヨオオ…」

「…殺すべき。」

「ただ殺すだけではつまらないわ、ありとあらゆる痛みを与え続けた上で『死なせてくれ！』と頼んで来るまで苦しめましょう。」

ベルリバーが、姿をいつもの姿から変え、嫉妬マスクのレアな方を身に着け、顔でバレないようにしながら、地表部までもうすぐ…という所でそんな声が聞こえてきた。

(やっぱりか…まさか、本当に各個撃破を狙って来ていたとは…、一応見に来てよかったよ。)

そこにまで来た時点で、急ごうとするも、自分はユリとルプスレギナの声しか間近で聞いていなかった。

そのため、今の3人の声はそうではなかったもので、消去法で言えば、ナーベラルはモモンと一緒にだからここにはいない。

ユリは確かカルマ値が「善」だったからあんな言葉は使うまい…とすると他の3名か…

中でもソリユシヤンはヘロヘロさんの創った中でも(ヘロヘロの個人的趣味と言う点で)最高のNPC

索敵、探索系のスキルを取得しているクラス構成だったはず、迂闊に近寄れば感知されてしまう恐れがある。

ならば…〈捕食者の隠密〉

本来はエサ場に展開している罠に獲物がかかるまで…その近くで、じつと気配を押し殺す為のスキルなのだが…これは、隠密のまま移動出来るほど高性能ではない、これを使うと身動きが取れなくなるのだ。

(セピア…聞こえるか?)

(はい、何かありますか?お手伝いですか?何しましょう!)

嬉しそうな声で声を返してくる、そういえば腹の中に居る間、こんな風に助けを求めたことなんて今までそんな多くなかったもんな。

(お前の装備している「風迅の外套」の効果で風の空間をボクの周囲だけに展開してくれないか? 足音を極力相手に悟られないように消しておきたい…さすがに動き出せば気配は消すことまでは出来ないが、足音が出ないだけでも、「前の敵に集中」している最中なら、意識の外から不意を打てるかもしれない。 そうなれば警戒して、挙動が「様子見」から入ってくれるかもしれないからな)

(あ、はい、では周囲の空気を集めて、ヴェールさんの周囲だけに球状にして包む感じにしますね…これなら足音は球状の気体の中のみに関くので、外には漏れない筈です。)

(ああ、ありがとう、セピア。もしこれから敵でエルダーリッチとかに出くわした時は、敵をこの球体で包みこんで、中を真空状態にしてみたら面白いぞ？ 詳しい説明すると面倒だからしないが、多分炎の爆裂は起きない可能性が高くなる。)

(わっかかりましたあゝ!! 覚えておきます!)

「さて、それでは行きますか!」

球状の気体に包まれ、発する音の全ては、その球体の中で完結するので声に出しても外に漏れることはない。

(ベルリバーは気づいていないが、自分の周囲に展開して空気の対流を起こし、球状の中で音が完結できるということは「気配」の方も、外に漏れ出ることなく、空気の対流と共に気配も滞留することになるのだが…まだそのことには思い当たらず、当分は気付かないこととなる。)

自信をもってプレアデスたちの近くに(一応警戒しながら)歩いて行くのだった。



「ありやく…こりや、まずいつすねえ…」

「これは…コキュートさまもびっくりですわ」

「…これ程とは…思っても居なかった…」

「それにしても弓を持つてるスケルトンアーチャーの目の前で〈飛行〉を使うとか…何考えてたんツスカね?」

「多分…、空からへファイアーボールでも落としかつた？…のかも…でも、弓を持つ相手の前で宙に浮かぶとか…悪手…。」

「そうね、射抜かれて地に落ちて、今は身動きできないみたいだし…息はあるようだから、あとで食べさせてもらえないかしら…」

「ズルイイ…タベルナラ…ワタイモホシイイイ〜。」

などと、明らかに観戦モードのような口ぶり、どうやらプレアデスは戦闘には参加していない様子だ。

あと少いで、ジャンプすれば頭を超すことが出来るか？と言う所で、その時間はないことに気付かされる。

「ア、トウゾクモ、タオレタ…」

「こりやく、勝負あったツスねえ…」

と少し残念そうだ、もう少し善戦してくれると思っていたのだろうか…一体ナニと戦っているのか…？

やっとすぐ後ろに立てたが、即座にユリに気付かれた。

「ルプスレギナ！　すぐ後ろに邪魔者よ！　乱入などさせないようになさい！」

（やべー！　さすがに不用心に近づきすぎたか…：そういうえばユリは見た目からは解らないけどアンデッドだったっけ？　生体感知でも使ってたか？…あ、でも徒手格闘特化だったよな、魔法の心得はそんなでも無かったはずだし…なんでバレた？）

実は、モニターを見ていたアインズがさすがにあそこまでプレアデスに近づかせるのはアルベドのしている前でだと何も行動に移さな  
いのは不審がられるか？…と心配になってへ伝言<sup>メッセージ</sup>を飛ばし、ユリに警告をしただけという事情だったのは、エルヤーに知ることはできない内容だ。

「おっと！ ヤベ！ 見つかつちまったよ！」

空気の対流をセピアにお願いしてキャンセルしてもらい、声を伝えるようにしてもらおう。

ここまで来たら、対話が出来ないのはキツすぎるからだ。

ルプスレギナの武器である長柄のメイスのような武器が降りぬかれる寸前、頭上を飛び越し体を翻しながら、階段の中断、わずかに足場を確保できる場所に着地する。

「何者ですか？ この墳墓には、ワーカーと言われる侵入者しか居ない筈ですが…今回、黒の長髪という特徴は一人も心当たりがありません…名を名乗られてはいかがですか？」

「ボ…あ、いや…私ですか？ そうですね…私は…ベル…」ベルⅡカウワⅡスズリバー」と申します、長くなるのでお気軽にベルさん…と呼んでいただければ幸いです。」

少しユリの眉がピクリと上がる。

何か思う所があるようだが…、そのことより重要な件を優先することにしようだ。

すぐに、自分のよく見てきた、NPC時代の表情、わずかに口角が上がり、笑顔に見えるもどこか無機質っぽい顔に戻り、問いかけを再開する。

「二体、何者でしょうか？ ワーカーでないなら、早くここから…あ、いえ、そうもいきませんね、この場所に居る以上、内部の情報を外部に出す訳には行きません。ナザリック・オールド・ガーダー！ その死にぞこないの老人相手は1体を残して、この黒髪を相手にしなさい！」

「その必要はないよ、こちらから下に降りて行こう。」

ヒラリと階段から飛び出し、体を空に舞わせると、落下しきる前に

〈浮遊〉<sup>レビテート</sup>の魔法を展開。

地面から数c m手前で軽やかに着地。

絶体絶命か…と諦めかけていた老公に話しかける。

「ご老体…ご無事ですか？」

「おお…ヌシは何もんか知らんかの…、助勢は大変うれしいか…二人て何とかなる相手じゃない、お前さん、早くにけるんしゃ！」

「そうも行きませんね…これでも、一応あなたに死んでもらうては困る可能性が少しばかりあつて、死なれると都合が悪いのですよ。…多分…。」

「囲まれながらおしやべりとはずいぶんと余裕ですね…、かかりなさい！」

ユリの号令で、7体のオールド・ガーダー達が一齐に攻撃に転じる。全部で8体だが、先ほどの命令が効果を残しており、老公に剣を持ったナザリック・オールド、ガーダーが張り付いているため、それ以外はベルの方に注意を向けている。

「ごめん、セピア、ちよつと聞かれちゃまずい言葉、叫ぶから、3秒だけまた音の遮断、お願いできるかな？ 今度も自分の周囲のみね？」  
とお願いとすると、さつきと同じ空気の対流が巻き起こる。

「風…ですか？ 妙な魔法を使うものですね…でも威力が少々足りないようですが？」

（ご心配なく…これは攻撃用じゃありませんから！）

空気の対流の中で返事をするも、その音は外に漏れることがない。ユリ側からは、口が動いているのは見て取れるが、内容が聞こえてこない、それをみて音の遮断か…と思いいいたるも、ここで音を遮断しても何の意味があるのかわからない。

（どつちにしろ、体内のエルフの3人には聞かれちゃうけど…まあ、

彼女達には意味がわからないだろうから、聞かれても問題ないだろう。)

そう判断して、服の中、懐に手を入れたベルは、服の中でアイテムボックスを起動、その中でショートカットですぐに手に届くように設定しておいた武器を素早く引き抜く。

「久しぶりの出番だ！ 頼むぜ！ 天ノ魔あ：あまのまブレエエエくくくドオ!!!」

この武器は発声の音量が…というより気合で、威力に差が出るのは転移直後に実験済みだ。

あらん限りの声を張り上げ、叫ぶと同時に、「握り」だけの柄つかの先に添えた手を滑らせる。

すると、まるでその手の平から発生するかのようになり、光り輝く剣が現れた。

その剣はブレードと言う割には少し細身だが、長さはバスタードソード並み、その輝きはユリでさえ、一瞬、目を見開いてしまうほどのモノがあった。

「そ…それは…?」

(サンキュ！ セピア、もう大丈夫だ！ ありがとう)

(なんで今のを隠したかったのかよくわかりませんが、なんでですか？ かつこよかったのに…。)

(あ、そう？ ありがとう、でも色々と事情があるのよ、これがまた複雑なのが…ね)

体の中の3人に答えるようにしながら振りぬいた一閃。

その動きだけで直接、近接戦を挑もうとした約半数、3体が黒い靄の様になって消える。

(『ダイナミック』を使わなくても、20レベル弱の相手なら普通の攻撃で充分だから…。 神聖属性が入ってるし…。)

「お！なんか面白くなってきたっすね！ ワックワクしてきたツス！」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ？ どうするの…アレ…?」

私が食べちゃってもいいのだけど？」

「でも…あれ…あの仮面…、以前私たちがかぶっていたものに近い？  
…」

「ハイハイ、おしゃべりはそこまでよ、あの存在は今まで相手にしてきた者達とは次元が違います、しつかり戦い方を見ておきなさい。」

「「「はい」」」

「さて、一気に3体葬ったから、あとは劍持ちが2体に弓持ちが2体か  
…劍持ちの一体はご老体が足止めしているからいいとして…次は弓  
…かな？」

武技〈縮地〉！

一気に弓を持つオールド・ガードーとの距離を詰めると、矢を撃ち  
出す前に、構えていた弓ごと胴体を真っ二つに切り裂き、次の1体を  
〈空斬〉で攻撃、神聖の光で焼かれたオールドガードーは、弓持ちが2  
体共、黒い靄になつて消える。

(やつぱり、本物のエルヤーの〈空斬〉が弱かったんじゃないかって、使い  
手の技量、若しくは対応するステータスの数値が低かったんだろかな  
…ちやんと「ナザリック・オールド・ガードー」に通じたし…ガチビ  
ルドじゃないと言つてもレベル100の攻撃だもんな、5分の1以下  
のヤツに耐えられるはずもないか…。)

そんな感想を持っていると、すぐそばまで来ていた劍持ちの最後の  
一体であるナザリック・オールド・ガードーがベルに襲い掛かつてく  
る。

「遅いよう？ その程度じゃ…ね」

そう言つて横に剣を薙ぐ。

それだけで、その一体の方も黒い靄になつて消える。

残るは老公の相手をしている一体。

「ご老体、私が代わりましょう、どうか私の後ろへ…。」



「おお…すまんの…そろそろこの老いほれにはキツくなってきたところな…」

「では少し休憩しててください、お怪我はありませんか？」

「ああ、少ししやか、もらってしまったわい、またまた動けるかの…」

そうは言ってるがツラそうだな…見るからに憔悴しているのが分かる…。

パーティメンバーがこんなになっちまったら、そりや落ち込みもするか…。

(ディーネ、濟まないがキュアの魔法を使ってくれないか？一番低い位階のやつでいいから。)

(はい、ヴェールさん、了解です。)

手の平に光が灯ってきたあたりで、その手の平を老公の身体に触れさせた。

「ライト・キュアウーンス 軽傷 治癒」

「おお…おヌシ、回復魔法も使えるのか…なかなかしゃの…これでもまた寿命が伸びたワイ。」

「さてさて、この辺でそろそろ引いてくれないかな？ こつちも別に全滅させたくて参加したわけじゃないんだ」

今までの7体葬ったので、現在、ナザリツク・オールド・ガードーは剣を持っているのが一体残っている。

耳を疑うような表情をした後、ユリは戸惑いながらも答えを返す。

「ならなぜ、首を突っ込んできたのです？ そのチームは我らが主のセンスがどうかしているなどという暴言を吐いたのです！ 許されていいはずがありません！」

「…なるほどね…それは確かにひどい物言いだな…、お前たちが腹を

立てるのも解る…殺したい程、思い知らせたいという感情もな…わからなくはない…だが…それは、この老人も同様か？」

意図せぬ言葉が投げかけられたことにより、ユリの眉が先程と同じように吊り上がる。

「あなた如きにボ…私達の何がわかるというのです！ 口から出まかせも大概になさい！ 私たちの…気持ちなど…お前たち風情が本当に理解出来るなど…、勘違いも甚だしい！ 恥を知らない!!」

どうやらその言葉は、彼女達の中で全員が同意見のようだ、烈火のような表情を浮かべ、こちらを睨みつけてくるような感情がうかがえる…並みの者であれば、その10の眼光だけで、退散ものだろう…。

「ふむ…、そうだな…、確かにどこの誰ともわからぬ輩に、「良く解る」などと言われては…、素直に命乞いをされた方がまだその言葉を信じられるというもの…か、仕方ない…「気持ちが分かる」という証拠を提示するでしょう。 これを見ればキミらも、その言葉が一時しのぎの姑息な言い分ではないと理解してくれるだろう。」

### 〈第1位階自然の獣召喚〉 サモン・アニマル1st

己をベルと呼称したその若者が魔法を唱えると、地面に魔法陣が輝き、一羽の鷲が現れる。

「さあ、これをあの階段の上の女性に届けて来てくれ。」

静かに差し出された物を嘴で挟み、飛び立つと、言われたようにユリに対して羽ばたいてゆき、ソレを届けに来て、再びベルの元へと戻っていく。

「どうだい？ それを見ても、まだ私が「君らの気持ちか理解などできぬ輩」と決めつけられるかい？」

「……これは……これは、なんで……なんでこの方が、いや……このお方が……この……方々が……」

わなわなと言う表現がびったりだという感想をベルが持つてしま  
う程にユリからの動揺は計り知れない。

それはそうだろう、それは一枚の写真、それは木枠で覆われ、部屋  
の一角に大切な思い出として飾ってあってもおかしくない形で、かつ  
てあつた「その時間」を切り取つたまま、ユリの手元で現実として突  
き付けられている、それは彼女たちにとって……、一番触れて欲しくな  
いコトであり、一番理解してほしいコトでもあつた。

ユリは今、それを差し出してきた若者が……、恐ろしいとさえ思つて  
いた。

なぜなら、これを持つているという事は、この方々と交流があつた  
という何よりの証……ひよつとしたら、この中に、その若者自身も居る  
のではないかと僅かな望み、可能性、そうであつてほしいという願  
い……ありとあらゆる感情が、願望が……渴望が……激流となつて、5人を  
蝕む。

彼女が持つているのは、大切な思い出を残したいと思う者であれば  
誰もが一度はしたことがあるだろう……その思い出の一瞬を切り取つ  
た『写真』それを木枠の中に収め、透明な板で色褪せぬように覆い、机  
の端などに飾つたりする……そんな一品。……端的に言えば『写真立  
て』だ。

それが確かに……実際の出来事だと良く解かる者達がそこに写つて  
いるが故、その反響は大きい。

「なんです！ ユリ姉さま、ここに……ここにいらつしやるのは……へ口  
へ口様……へ口へ口様ではありませんか！」

「ア…アインズサマ…マデ、ナゼ…ナゼ、ナゼエエ!!」

「ユリ姉さま、この中に…やまいこ様!やまいこ様がいらつしやる  
じやないツスカあ!!」

「ウルベルト様も…いる。」

それはベルリバーの中でも大切な思い出の一枚。

ユグドラシル時代、みんなでワイワイ言いながら、くだらないことばかりをやって、みんなでふざけ合っていた頃の…他愛ないことで盛り上がっていた時代。

その時の1ページをスクリーンショットで切り取り、画像データを加工して、ユグドラシル用のインテリアアイテムと合成させた物。

その写真に写っているのは総勢で9名

ギルドマスターのアインズ。

ワールドディザスターのウルベルト。

当時は、今のブラック企業に就職する前で、割と時間があつてよくログインしていたヘロヘロ。

ベルリバー。

やまいこ。

ぶくぶく茶釜。

ペロロンチーノ

ブループラネット

館ころもつちもち。

写真の中には、表情こそ変わらないものの、ポーズからして全員が楽しんで写真に写っているのだろうことはうかがえる。

そして、至高の御方々がお召しになられている衣装、これは見たことも無い物、まるで全身スーツとも言えるような服で、それぞれが違う色を身に纏っている…。

中心に…、赤い色の全身スーツを首から下に着込み、真ん中でポ-

ズを決めているアインズ様。

(アインズ自身は、リーダーなら赤は絶対でしょ！という多数の意見に流され、仕方なく着ているが、本当は〈ブラック〉が良かったと、とうとう言えなかったというのは後でベルリバーがアインズに零された愚痴である。)

そして、アインズを中心に、頭上に飛び上がり、天空に向け弓を構えているパープル色の全身スーツ姿のペロロンチーノ

某少女戦隊ものの影響を受け、「パープルも入れよう！パープル！それは外せないでしょ！」と言い出した騒ぎの発起人というのは皆に知れ渡っているのだが、そのことにペロロンチーノは気付いていない。

アインズのすぐ隣、左側にはピンクの肉棒をアバターに選んだぶく茶釜…もちろんスーツもピンク。

(アイテムの外装の影響で、首から上はピンクの肉棒だが、首から下は普通の人間っぽいスタイルで統一されてしまっている。)

アインズの反対側のすぐ隣はブラックのへろへろ…それはブラック企業だから、という事ではなく、本来、ウルベルトが候補に挙がっており、黒と言えば「悪」のウルベルトさんでしょ？と、全員一致の意見で多数決されたのだが、本人の絶対拒否の姿勢により、仕方なくエルダー・ブラック・ウーズ古き漆黒の粘体のへろへろが着ることになった。

のちに決めポーズでだけなら…と参加した写真が出来上がった時、受け取ったウルベルトが：「やべえ、オレ、こいつらの長官っぽくねえか？」とつぶやく程の出来だったのは彼の黒歴史だろう。

ピンクの茶釜のとなりは、いつも「かぜつち」と呼び、彼女をリアルでもユグドラシルでも親しく交流していた餡こころもっちもち。

彼女は出来れば餡子らしく黒が良かったけど、先に黒が決まってるなら、私は白餡で…！ ということでホワイト。

ブラックであるへロへロの隣にはノリノリで、参加したブルー役のブループラネット。

ヒーロー系には造詣は深くないが、青なら是非、協力しよう！ という事で〈ブルー〉

ホワイトの横にさりげなく立っているのが「やまいこず・フォレストフレンズ」繋がりで『やつぱりやまちゃんも緑っしょ？』という事でグリーン。

ブループラネットの横には、一番端っこでやまいこと鏡合わせのよなポーズで立つベルリバー。

彼としては、ヒーロー系の話題にはついていけないことの多い自分でも、こうして誘ってもらえること自体が嬉しいから、何色でもいい、という姿勢だったので特に不満はない。

それを着た時、「カレーが良く似合いそうですね」と、ペロロンチーノから言われた時は何のことかわからなかったが：さんざん調べていたら、やつとそういうことか：と理解できたという裏話もあった。

「それを見て、私の言葉にウソはないと思ってくれるなら、このご老人を私の監視下で、引き取らせてもらいたい：、それに最初の話に戻るが：その「許されない発言」をしたのは、このご老人本人かい？それとも、言わせた原因がこのご老体なら、それは仕方ない、私も殺されても仕方ないだろうと思える部分もある、その上でもう一度：、重ねて尋ねるよ？ 本当にこのご老人が『言った』のかい？」

ユリは悩む、この写真を持つという事は、このナザリック、ひいてはギルド、「アインズ・ウール・ゴウン」に何らかの形で関わった可能性もある存在であろうことは確かになってしまった。

それならば、先ほどの『気持ちわかる』という言葉だってウソでも、一時しのぎの言い訳でもなく、本当にそう思ったという真実を語ってくれたのだろうという認識に落ち着き始めていた。

だが：御方の命令は絶対、「侵入者の盗賊どもを抹殺せよ！」という

指令が今回、自分たちがココに來た理由なのだ。

その上で、問われた言葉…そもそもこの老人自体は確かにナザリツクを貶めてもいないし、暴言を吐いても居ない。

その言葉を吐いたのは盜賊、先ほど、雷撃のハンマーで潰し殺したばかりだ…、そういう意味では暴言に対しての天罰は済ませたとと言える。

だが…それでも、こいつらは「侵入者」であり、このナザリツクの財を平気で漁っていく盜賊、野盜、落伍者<sup>スラム</sup>どもと言つてもいい輩だ…殺してもいいはずだ。

「とりあえず、ここで引いてくれるなら、その写真は進呈しよう…この主にも必要があれば見せてあげるといい…と言うより、ここで時間を浪費していいのかな？ 状況が変わったら報告し、判断を仰ぐことも時には必要なんじゃないかな？ と私は思うが…？ それとも…進むことも出来ず、下がることも出来ずに、このままここに居るのが、キミらの忠義だとも言うつもりかい？」

「う…その言葉、真実ならば、確かに報告の必要がありそうです…、確かに当初より状況は大きく変わりました、これは報告の必要ありと判断します…みんな、ここは撤収しますよ？」

（あれ？ いいんですか？ 死んだヤツら回収してアインズ様のところに連れて行く予定だったんじゃない？）

（そうね、でもそれは後回し…どちらにしろ、あの死体をどうにかするには、埋めるか、燃やすか、生き返らせるか…しかない。普通の手段では生き返らせることもこの地の人間には至難の業らしいから…そいつらでは、葬るしかできる手段は無いでしょう…そうなれば、この地、ナザリツクは我らの支配下…自分の領地で勝手に埋められたモノを、掘り返して何か問題あると思う？ 処分することになっても、それは処分する時期が早いか遅いかだけ…結果は同じ…それならアインズ様に判断を仰ぐのが優先と考えます。 だから、見逃すのでは

なく、一度保留…そういうことよ、ルプー?)

「あ、そういう事なら、確かに問題ないっすね! そいじゃ…ありがとう、黒髪のお兄さん! これは大切にさせてもらおうとするツス!」  
「くれると言うなら…本当に持って帰るだけ…返してと言われても、もう返さない…。」

「あなたの正体については後回しにします、次に会う時まで命は大切に下さい。」

「アインズサマニイ、イイツケルウウ…」

そして、静寂が戻ったその場で、やっと安心できたのか、緊張を解いた老公その人から、感謝の言葉がベルに届いた。

「若いの…あんた強いのお…最盛期のワシもあんたとくらへたら、『月と長虫』くらいに弱かったんしゃの…」

「いえいえ、お気になさらず、まずは素顔をお見せ出来ない非礼、お許しく下さい、時期が来るまでは、どうしても、身分が明らかにされるわけには行かないのです。」

「ああ…かまわんよ、命を助けられたんしゃ…、アンタが何者だろうと、ワシヤ、構わんよ…さっそくワシを監視下に置いとくれ…、あんたの近くの方が安心しゃ…」

「ええ、それでは、私の仲間の元に行くとしましょうか…ちようど、この物陰に隠れてもらってますので…、先ほどの交渉がうまく行かなかった場合に備えていたのですが…うまく行ってよかったですよ」  
(もちろんウソですけどね、適当な物陰を見つけて、そこに体の前面だけ入れて角で前面部を見せないようにしながら、仲間を吐き出すとしましょう。)

そうして、吐き出しているシーンは、プレアデスの報告を受けているアルベドもアインズも、その写真に目を奪われていたので、気づかれることはなかった。



(もちろん、アインズもその時の記憶が鮮明に蘇り、恥ずかしさで『感情抑制』が働くくらい動揺してしまったのは言うまでもない。)

## 第51話 想い出と、そして丸呑み

アイنزは、玉座の間でモニターを見続けて居た中、思考がわずかに停止していた。

その原因となるそれは：思いがけぬ物が、友人の手から5人の戦闘メイトに渡ってしまったことを起因とする。

（何て物を渡してくれてるんですか…いや、あれ自体は想い出深い物だし、それを未だに持つていてくれたことは嬉しいですよ？うれしいですけども…なんでそれを彼女たちに手渡すかなあ…）

支配者は心の中で頭を抱えていた。

自分のそばにはアルベドも居る。

もちろんその画像自体はアルベドも見えてしまっていた。

アイنز本人が、モニター画像を拡大させ、「もしや渡った瞬間、ダメージとは行かずとも、拘束系やデバフ系の何かを発動させるアイテム」でも仕掛けようとしていないか？と言った確認をするため、思いつき画面を拡大させていたためだ。

少ししたら、彼女達もその写真を手に、玉座の間まで来てしまうだろう、それまでになんらかの言い訳を考えておかなければならない、「友」が齎してくれた置き土産に内心で舌打ちをしつつも、嘆いてばかりでは状況は改善していかない：ベルリバーさんの言う所のサプライズを実行させてあげるためにはこれをどう乗り切るか：ギルドを維持させていたリーダーとして無様な姿勢は見せられない。

差し当たって、アルベドの方を見ると、もちろんアイنزの方を見ていた。

「アルベドよ…先ほどのは見えていたな？」

「はい…間違いなくアレは…、至高の41人の御方々の内、数名の方々のお写真かと…それがなぜあんな人間如きが…それに、あの者がかぶっていたあの仮面、以前アイنز様がカルネ村を救出する際、身に着けられていた物と色こそ違い、大変、酷似しておりました。…と

いう事はあの者は…アインズ様と同じく、ユグドラシルからこの地に  
来た者なのででしょうか？」

「さあ…どうかな…あの仮面だけだと何とも言えん…それよりも…私  
はあの者が何故、あの写真を持っていたかの方が気になる…アルベド  
よ、状況が大きく変わったようだ、守護者たちを第6階層、アンファイティートルム円形闘技場  
まで来るようにと招集を掛けよ！POPする者たちは、あの黒髪の  
チームにすべて集め、最後の1チームは転移の罠でアンファイティートルム円形闘技場まで誘  
い込め！それらが済んだ後、デミウルゴスにも来るよう伝えるのだ！  
恐らく緊急事態となるやもしれん…。」

（とりあえず、自分もこんなこと起きると思っていなかったってフリを  
しておこう！ 何も知らない風を装えば、切り抜けられそうな気がす  
る！）

「は！畏まりました！」

恭しく頭を下げるとアルベドは静かに…姿勢を崩すことなく…そ  
れでいて颯爽と玉座の間を出ていき、扉が閉まる…。

アインズはそこでようやく玉座に背を預け、脱力したように物思い  
に耽っていた。

…そう、あの写真を撮ることになった…みんなが悪ノリしてまで、  
材料を集めて回り、「9人分」を作成し終わった時のことを…。



「やりましたね！ みなさん！ お疲れさまです、よくこんな短期間  
でここまでそろえられましたよ！」

モモンガは作成に携わった者、皆を労う。

「いや、私も楽しかったですよ、ギルド結成以来、あまり外に出な  
かった私ですが久々に楽しめました！ やっぱり目標があつて出か  
けるってというのは一味違いますね」

そう言ったのは、まだギルドを脱退する決意をするはるか以前の「あまのまひとつ」。

もちろん全身スーツを作るのはもちろん、必要となる金属系の材料となる素材、高レベル金属を集めて回ったり、データクリスタルを手分けして集めて回る要員としても活躍していたからだ。

「で？　どんなの作るの？　私ならひらひらのドレスっぽい感じの…ってダメか、私の種族じゃどっちにしろ似合わないよね…見た目オスだかメスだかすらわかんないもん。」

と、希望を言いかけたが、自分のアバターを見下ろし諦めた風の言葉を紡ぐ「餡ころもっちもち」。

「そっか、餡ちゃんはドレスっぽいのが好きなんだね、まあ、異形種じゃなければ似合ったんじゃないかな？　私もその気持ちわかるし」

そうフオローするのは仲良しである「かぜっち」ことぶくぶく茶釜。なぜ「かぜっち」なのかと言うと、本人が仲良しさんにはそう呼んでもらってる…という一貫した拘りもあるし…、リアルの仕事で使っている声優名からもじった愛称でもあるためだ。

「あはは、それじゃみんな似合うモノ作るの大変そうじゃない？　私だって「半魔<sup>ネファイリム</sup>巨人」だから、そんなの着てもゴツくなるだけだろうしね」

41人の中で数少ない限られた女性プレイヤーの1人であり、リアルでは学校の教師であるやまいこ。

今は副担任をしている為、比較的余裕はあるが、近い内「担任」を任せられそうだという話はチラホラと出ているようだ、そうなると今までみたいに頻繁に来ることもできないだろう…それもあつて最後のお祭りイベント的な気分で手伝いを買って出てくれていた。

「そこは大丈夫でしょう。なんたって「あまのまひとつ」さんが作ってくれるんですからね、出来は…推して知るべし？」と言った所でしょう

うから」

最初から材料集めにノリノリだった「たっち・みー」さん。

今回も奥さんを説き伏せるのにかなり苦労されたようだが、近々、仕事の上で忙しくなる「なんちやら週間」とかいう職務上の手を抜かず、その間はログイン禁止などの交換条件を飲むことで、今回、材料集めに参加できるようになっていた。

そして、その期間が終われば、次は「アークロジャー」内のお偉方が外国に行く際、道中の警備任務、ルート及安全確認やらテロリストなどが出来ないように、などの仕事内容に追われ、しばらくは来られないという話、材料が集まり切った今、無事に短期間で製作することが出来れば、忙しくなる前の一日は参加できるんじゃないか？って程度でかなりシビアだが：ギリ完成品を着て写真を撮れるかも：と言う程度のスケジュールになりそうだが：と、少し楽しみにしている。

「え？姉ちゃんがドレス？ヒラヒラ？絶対になんかの罰ゲームなんじゃね？とか思われるのがオチだって！」

家族のおしゃれした姿なんてたしかに身内：しかも弟からしたらそんなものなのだろう、普段から、何かあると怒られている弟は、姉のきらびやかな姿など「可愛い」という範疇にすら入らないとでも言いたげに悪態をついている。

その姿はバードマンのAvatarであり、ぶくぶく茶釜の弟である「ペロロンチーノ」が軽妙に茶々を入れている。

「ああん？　なんだって？　愚弟：いい度胸じゃないかよ：そうかい、そんなじゃこの前約束した「水野」のサイン、もらってこなくてもいいんだな？　特別にお前の名前入りでお願いして来ようと思ってただけどねえ：そうか、要らないなら無理に受け取ってくれなんて言えないよなあ…。」

いつものロリっ子としての声優の声はどこへやら、ドスの効いた低い声で弟の弱みを刺激している。

それはもはや、姉としての特権だろう。

「ああ…（めんなさい、ウソウソ：嘘です、お姉さま！　そんなこと本

心から思ってたなりなんて、そんなことある訳ないじゃないですか、いやだなあ…ちよつとした冗談だってえ…。」

声に張りのない、怯えたような声で謝罪を繰り返すペロロンチーノ…、モモンガは「水野」とは誰だろう？と少し離れた距離でそれを聞きながら思案する。

そういえば、以前ファンだとかなんとか言ってた人にそんな名前があった気がした、どうやら推しの有名人らしい…そりゃ「サイン」って言うくらいだから有名なんだろう。

「あれ？もうこんな時間？…すみません、みなさん、急ですけど、今日は私の当番で、娘をお風呂に入れる約束でログインさせてもらってるんです、なのでそろそろログアウトさせてください、かなりやばい時間なんで!!」

そう言って、ワールドチャンピオンの彼がモモンガの前で手を合わせて頭を下げる。

その様は、本当に申し訳なさそうだ。

「ええー！それは急いだ方がいいですよ！奥さんは大事にしてあげてくださいね？」

ギルドマスターのモモンガが快く「たち・みー」を送りだす言葉をかけた。

モモンガのリアルでの母親は、物心つく前に他界した父の代わりに、家事に、仕事にと…かなり無理をして小学校を卒業させてくれた。しかし、それまでの無理がたたって、病室で「鈴木 悟」のスーツ姿を見ることなく、息を引き取ってしまった。

なので、生きている内になるべく長く夫婦の生活と言うのは時間を作らせてあげたい、そう思っ居るモモンガはいつも何も言わずに送り出していた。

そんな様を苦々しく思っている人も中には居て、モモンガが何も言わず、送り出す姿勢を「本心から向き合えない偽善者」と言う人も昔は居た…その人はクラン時代には仲が良かったが、ギルドを作るか作

らないか…のくらいに脱退…ある意味ケンカ別れのような感じで、ア  
カウントは残しているが、ギルドから姿を消してしまっていた。

反対に「妻」を…「娘」を言い訳にして、克蘭リーダーから逃げ、  
ギルドマスターをモモンガに任せたその姿勢が気に入らず、何かにつ  
けて反目している人もいる。

他の人に対しては割と分け隔てなく接してくれるのだが…「たっ  
ち・みー」にだけ風当たりが強い、中にはそんなメンバーもいる。

今日はまだ来ていないが、とりあえず、時間がかぶらないでよかつ  
たと思う、なんだかねでその二人の間を取り持つのも一苦労なの  
だ。

「じゃ〜早速、始めましょうか。 こっちは製作に入りますので、色は  
この前言った8色に、8つの色を均等に振り分けて作った全ての力を  
使えるスーツ。以上を入れての9着でいいんですよね？」

本来は5色でいいという意見が「たっち・みー」からの意見だった  
が、どうせなら、戦隊もので出た色、一通り作っちゃうのはどうだろ  
う？という意見が「あまのまひとつ」から出され、「それもおもしろい  
かもしれない…」という考えに移り…「どうせなら『始まりの9人』に  
なぞらえて、9色にしてみようか？」となったわけだが…

肝心の9色目が決まらず、「あまのまひとつ」と「たっち・みー」の  
間で「そう言えば、昔、「ビッグワン」って居ましたよね、あれみたい  
なの作りませんか？」という意見が出た際は、もうすでにその時、意見  
は出尽くし、煮詰まっていた為、「そうしよう。」となったのがそもそ  
もの始まりである。

「あまのまひとつ」が鍛冶製作部屋に入ろうかと、確認の意味で質問を  
投げかけた瞬間で、みんなが集まっていた円卓の間に、ウインドウが  
開き、軽快なチャイムのような音が響いた。

「へろへろ様がログインされました。」

「ウルベルト・アレイン・オードル様がログインされました。」

「お！二人も来た様子だね、せっかくだから、イメージ作りのために他の色の件も決めちゃうとしますか？ まだ黒が決まってなかったですよ？」

「あ…、（黒…やりたいんですけど…ってこのタイミングで言ったらまづいかな？）」

少しためらったアインズが声を出すより早く、ログインして来た二人が円卓の間に現れる。

「お！みなさん、来てましたか！ こっちはやつと面接終えて帰ってきましたよ！今日は3社受けてきました！」

へろへろが明るい声で面接の報告をしてきた。

「まあ、気を付けて社風を見ることも大事だぞ？ 俺の親父みたいにろくでもない最期にならないようにな？」

同時にログインして来たウルベルトも心配しているようだ。

基本、アーコロジの外で暮らすことになっている面々には優しいウルベルトだが、彼が反目する存在は「アーコロジ」に関わる人種全般に偏っていた。

「たっち・みー」は警察官と言う職業だが、高給取りであり、お金でアーコロジ内に住居を構えることが出来る様になった、しかも嫁まで居る。

そんな立場の「たっち・みー」にはよく逆らったり、反対意見を言ったりしていた。



「さも「お前の思い通りになんてさせるもんか！」とでも言いたげに…。」

一時期はペットロスになっていた餡ころもっちもちも…、動物が飼えるという時点でアークロジの人間の気配濃厚なのは薄々みんなの認識にはあったのだが、だからと言ってそっちに矛先をむけることはない。

「悪」という道に美学を見出ししているウルベルトからしてみれば「弱き立場の者」に感情のまま怒りをぶつけるなどチンピラレベルの「悪」がする行為、それは彼の「美学」に反する。らしい。

だから女性には、例え、そういう面があったとしても内に宿す悪感情を向けはしない…その代わりにその分、「たっち・みー」にそれが向かうことになるのだが…

それは毎回、間に入ってモモンガが仲裁を買って出ていた。

「良かった、今日はあの野郎は居ないんだな…。」

ポロっと零した本音、それが誰のことを指しているのかわかる全員は「苦笑」のアイコンを浮かべ、その言葉を流す。

そこで、話題を変えるべく、そこに割って入った人物がウルベルトに話しかけた、さつき作成に入ろうとしていた「あまのまひとつ」だ。「ちようど良かったですよ、ウルベルトさん、先日話して協議した事なんですよけどね？ 今度作るコスチュームのメンバーにウルベルトさんも入ってほしいですよ！」

虚を突かれたウルベルトは唐突な話題に面食らったように上ずった声をあげた。

「え？ いきなりなんですか？ それ…コスチュームって何を題材にするんです？ 今回だって…どうせろくでもないんですけど…」

「いえ、そんなことはないですよ？ 今回はウルベルトさんのイメージ

にぴったり合う「黒」！「ブラック」です！」  
とあまのまひとつが言うと

「お、それはいいですね、黒！まさに俺の色じゃないですか！ それで？「メンバーに」ってことは俺一人じゃないんでしょ？ 他には誰が居るんです？」

追及してくるウルベルト。

「今回はモモンガさんが赤、ブループラネットさんが青…今日は来ないですけどね、日程を合わせて全員がそろろう日を予定するつもりです。それで全員が着て、記念撮影って流れなんですけど…」

「ほおほお…それはそれは…ブループラネットさんというのは珍しいですね、あの人世界で残っている自然の保存の為に各地を回ってる人でしょ？滅多に会えないんですよ…。」

興味を惹かれたようなウルベルトの言葉に乗せるように次の説明に入る「あまのま」

「それから緑はやまいこさん、ホワイトが館ころもっちもちさん、ピンクが茶釜さんで、パープルがペロロンさんって感じですね。」

「あれ？ 6人なんですか？ ってことは何かのチームでも作るのか？野球には足りないですし…サッカーだとまだその倍は必要ですよね…？ 一体、何のテーマなんですか？」

「ああ、それは『戦隊もの』です！」

その一言で全員が凍り付いた…。

他のメンバーは「それ言っちゃ、おしまいじゃん」と言う空気。

あまのまひとつは「どうです？面白いと思いませんか？」という顔…ウルベルトは…「はあ？」と言うような顔のアイコンを浮かべ、すぐに「怒り」の表情を浮かべる。

「冗談じゃない！ それヒーローじゃねえか！ 誰が！ 戦隊で！」

ヒーローなんて！ 演じるか!!!」

かなり頭に血が上っているウルベルト、そりや「悪」に憧れ、「弱きを虐げることなく、強きをくじく」ことを美学としている彼からすれば、ヒーローなんて偽善者の集まり…という認識なのはみんなが知ってることだ。…だから「戦隊」と言って納得するはずなのは誰もがわかる結論だったのだが、あまのまは尚もウルベルトに追いすが

る。  
「いや、違うんですって！ ヒーローって言ってもブラックは立ち位置が違うんですよ！ 感情的に…熱血漢として突っ走りやすいリーダーの反対意見を常にいう事でチームとしての平衡を保ってる存在なんですよ、言わば、ヒールヒーローってやつです！」

「悪役英雄？」

「そうです、そうです！ この役割はそれを地で言っているウルベルトさんしか出来ないんじゃないか！ ってみんなの意見もあって、声を掛けさせてもらったんですが…どうでしょう？」

詰めに入ったように言い募る「あまのま」だが、その言葉の中に嫌な予感を感じさせる単語ワードが含まれる言い回しに気付いたウルベルトが「あまのまひとつ」を問い詰めた。

「地で行ってるってなんだよ？ 俺が反対意見をいつも言ってるのは1人に限られてるんだが？ まさかあいつも候補に入ってるなんて言うんじゃないだろうな？」

表情に変化はないはずなのに、目の奥に激しい炎を見たような気がした「あまのまひとつ」が言葉に詰まる。

「ええ…と、その…、まあ、あの…ですね、…かも、しれないですわ？」

と、弱弱しく肯定とも否定とも言えない言葉を返すもその言葉だけでウルベルトには充分だった。

「冗談じゃない！ 俺はやらないぞ？ 誰があんな奴と同じコスチュームなんか着て、撮影なんかするか！ ふざけるな！」

気分を害したらしく、円卓の間を出ていくウルベルト。

「あの…ウルベルトさん…どちらへ？」

モモンガがそう尋ねると、モモンガに八つ当たりするのは筋違いだと理性を保ったのだろう…それでも少し苛立ち気味の声でウルベルトは返答していた。

「第7階層の領域守護者たちを作ってきましたよ…12宮の方もまだ全員じゃないですからね…」

「あ、そうですか…気を付けて…と言つてもすぐ下の階層ですもんね 指輪使えば危険もないですか…すみません、なんか、せつかくログインしてくれたのに気分を害させちゃったみたいで…」

「ああ、それはモモンガさんのせいじゃないですって、それについては気にしないでください、ちよつと今、自分が大人げなかっただけなんです…少しソコで頭を冷やしてきますよ。」

バタン…と扉が閉まる音がして、一瞬、部屋の中に静寂が訪れる。

「……………ええ…と…、ウルベルトさんがあそこまで激昂するのって珍しいですよ、ボクが知る限りでは記憶に…というか印象に薄いんですけど」

「そうよね…あの人、いつも冷静な話し方してて理詰めで納得させながら自分の思い通りに言いくるめるスタイルだもんね、もつと普通に「お断りしますよ。」つて言いそうなイメージを私も持っていましたけど」

重い空気を軽くしようと「ベルリバー」が可能な限り明るい声で言う、それを察してくれたのか「やまいこ」もそれに同調し、雰囲気を変えようと周囲にも聞こえるように話をする中…。

「さて、それじゃ今、ここに居る中で「黒」って言えばへろへろさんが合う！って言う人は挙手をお願いします!!」

急遽、モモンガが軌道修正を図り、矛先をへろへろの方へと転換させた。

「えええ??  
!!!」

驚くへろへろをよそに挙手の数は彼以外、全員の手が挙がった。

「しようがないですね…まあ、私も採用の合否が来るまではヒマですし…それまでなら…ってことで。」

かくして、最後の「ブラック」の役が決まり、リーダーは赤、そして、裏のまとめ役的な立場として最強の存在！ってことで「オールワン」と名付けられることになる…本来は「たち・みー」が着るはずだったコスチュームも含め、9着分の作成が始まった。



「ハイ！ ポーズ！」

みんなでポーズをとると、スクリーンショットの音が聞こえた。

音の確認の直後、コンソールの操作をすることでそれぞれ全員が、その写真をコピーして、思い出を残すための「思い出」フォルダにペーストをした。

「やべ、俺、おもいつきり長官みたいじゃん、このポーズ…。」

そう呟いたウルベルトの言葉でみんながソコに注目すると、たしかにそう見える。

体を斜めにするような立ち位置

山羊のような顔の左目方向をカメラ目線のように向け、左手は思いきりカメラの前に突き出している。

まるで、「行け！お前たち！」と司令官が号令を発しているかのようなポーズで写っていた。

寸前まで、写真に写るつもりなどなかったウルベルトだが、たっち・みーが結局、来られなかったことに安心したのか、みんなから「せめて一緒に写ろう」と言われ、「コスチュームは着ないからな！」とだけ条件を飲んでもらうことで「写ってもいい」と言う言葉をもたらえたのだが、それが良かったのか悪かったのか…それは彼自身のみ知るところであった。

後日、いつものようにペロロンチーノさんから「姉ちゃんに勝手に捨てられないように」という事でペロロンチーノさんが着たパープルを預かって数日後…。

今度は茶釜さんから「弟の預かってるんでしょ？」と聞かれたので「なんのことう？」と答えたら、軽く笑われて「大丈夫よ、今回は皆で楽しんでたことなんだし捨てさせるようなことしないって」と言われ、「弟のと一緒に私のも預かって？」と言われ、ピンクのコスチューム用の腕輪を預かった。

その場に居た女性メンバーからは「かぜっち、ベルっちに預けたの？なら私のも預かってもらおう♪」ということで、緑のと白の方も預かることになった。

黒の方と、赤、青つて、着た本人が持つてるのかな？それともボクの時みたいに、誰かに預けたのかな？

預けたんだとしたら、多分、モモンガさんの可能性が高そうだけど…問題はモモンガさん以外が預かっていた場合だな…、その人が持つ

たまま、アカデリしちやった場合だとか…、まあ、色々可能性はあるだろうけど…、どっちにしてもボクがそれをどう考えても答えは出ない問題だよな…。

などとりとめのないことを考えながら…こんなことも思う。

(そういえば「オールワン」のコスチュームは誰が持つことになってたんだったつけ?)

ふと、回想から意識を戻したベルは、一番後ろに「警戒役」という名目で老公を配置している。

魔法で職業構成を調べたところ、レベル的にはエルフの3人は30LVを超えていたので、単純なレベルで言えば彼女らの方が上だ。

そういう点では老公より難度的にに関してだけであれば「強い」ということになるが、近接戦闘と言う点ではディーネより老公の方がわずかに強い程度だろう、と見積もっている。

彼女らは主に魔法中心で強くしていた為、3人合わせても武技の類は数える程しか取得していない。

なので〈疾風加速〉などで、動き回られ、攪乱されたら、ディーネには勝ち目はない…もちろん今装備している鎧じゃなく、同じ装備と言う条件下であるならば…だが。

「さて…どうするのかの? 気ついてるかもしれんか…後ろから、それから前からもアンテットのヤツらが迫ってきておるぞ? すこい多さしや!!

後ろを歩いていた「しんがり殿 兼、警戒役」を務めていた老公がベルたちに声をかけた。

当然、彼もそれは気づいていたし、ディーネも神官としてアンデッドの能力でアンデッドの気配を感じていた、セピアもレンジャーの技能で…ルチルに専門技能などは無いが、エルフの発達した聴覚により、気づいていた。



一方、場面は移り、まだ第一層の中央霊廟を下がり、そこから一段下に下りたばかりの一带をさまよっているフォーサイトのメンバー。現在、彼らは、無限とも思える数のアンデッドに包囲されつつあった。

「イミナー！後ろだ、〈雷撃〉<sup>ライトニング</sup>が来るぞ！」

ヘツケランが叫ぶ、彼は今：死者の大魔法使いが撃ち出した〈火球〉<sup>ファイアーボール</sup>の魔法を剣の中にいるサラマンダーに吸わせていた。

30？Vに至っている自分が、たかだか22？Vの魔法ごときに難儀するはずは無いと思いつつも、こつこつ5体、6体、7体…と、どんどん増えて来ていては、いづれ腹もいっぱいになるだろう…適度に炎の攻撃をしてもらって、小腹を空かしてみなければならぬだろうか…と炎の精霊も考える。

最初こそ、意思の疎通に異種族としての難儀さはあったものの、今は精神的なつながりが生まれたのか、言葉で意思疎通が出来るようになっていた。

周囲にまで丸聞こえの叫びのようなものではなく、個人間での小声の打ち合わせレベルの会話が出来たようになったのは何かと便利だな…と思う。

「通さないからー！」

イミナーが立ちはだかり、後ろからの死者の大魔法使いの放つライティングを鎧の効果で吸い込んで鎧の内封する魔力ストック分として蓄えていく。

現状、その攻撃魔法に対しては対策はとれているので、大きな被害はないが、さすがにこの数はギリ貧かもしれない。

攻撃魔法自体は脅威ではなくなっているが、ちよいちよい、後ろにいる死者の大魔法使いの放ってくる〈恐慌〉<sup>スケアイ</sup>には対抗手段を講じていないので、誰かが必ずレジストを失敗し、ロバーデイクが



〈ライオンズ・ハート  
獅子の如き心〉を唱えている。

そうなれば、2人分の行動はそれで終わってしまう、残るのは頼みのヘツケランとイミーナだ。

アルシエも居るが、ハッキリ言って誰が〈恐慌<sup>スケアー</sup>〉に掛かるか分からない為、打開策がない。

最悪、まだそうはなっていないがヘツケランが〈恐慌<sup>スケアー</sup>〉にかかり、ロバーが回復を掛けているまでの間、ヤツらがただ待っていてくれるはずがない。リーダーが立ち直るまでに〈ファイアーボール<sup>ファイアーボール</sup>〉でも5〜6連発で叩きこまれたら、さすがに〈下級<sup>レツサーブプロテクションエナジー・ファイア</sup>火属性防御〉を掛けてもらっているとは言え、ダメージの蓄積は相当なものになるだろう。

(ここまで来たら、仕方ない……どんな効果が起きるか分からないのが不安だけど……)

そう考えながら、1つの結論に至るアルシエ。

自分の腕に身に着けている腕輪だ……先ほどベルさんに教えてもらった話から考えると、最初に私の声でキーワードを叫ぶ必要があるらしい。

(叫ぶんじゃないくて、ハッキリした発音で、普通に発声するんじゃないやダメ？　ってこと?)

内心で頭を抱えながら、どうせここで使わなければ死ぬかもしれないのだ……。

ならば一時、恥ずかしい想いをしても、死ぬよりマシ！　とばかりに決意する。

彼女は腕輪を高く掲げ、周囲に良く見えるようにすると、叫ぶ準備に入った。

「ちええ〜ん……ん……え？……？」

気が付くと、先ほどあれだけ嵐のように乱れ飛んでいた魔法の乱流が、止んでいた。

何事かと思うと、自分達を囲んでいたアンデッドたちがみんな、踵を返してどこかへと移動を開始している。

これは逃げているわけではないと、誰もが納得している。

ノーダメージで今まで通していたが、どちらも決定的な手段が見いだせなかったためフォーサイトもアンデッド側も身動きが取れなかったただけだ、このまま物量戦でゴリ押しを続けていけばいずれ、相手側に有利な状況になっていたはずだ、逃げ出すとは思えない。

ならば、一体、なにが起きたのだろうか…と4人共に首を傾げていた。

そして、メンバーの3人から「さっきの何だったの？なんか言おうとしてたんじゃない？その腕輪の効果？」

イミーナから先ほどの叫びに関して聞かれたが、さすがに答えを言うのは最後の手段にしておきたい。

今回は、無事に済んだが…まだ安全だとは言えない状況だ、いつまた…さっきのような状況になるかがわからないのだ…

死んじやう前に使った方が得策だけど…決心したつもりでも、素に戻ってみるとやっぱり…意味は解らないけどあの言葉は多分、恥ずかしい…もの…だと、思う…。

という感想を浮かべていた。



「光栄しやな…これだけのアンテットか相手をしてくれるとはの…」

「お爺さん、軽口を叩いてる暇があるなら、戦う準備をお願いしますよ？」

「ほっほっほ、エルフのお姉ちゃんの方が、アンテットに対して有効な手はたくさん知っておるしやろう？」

「みんな一通りは、アンデッド対策はしておりますが…、それぞれが別々の方法なので、一人でも欠けたら大きくアドバンテージが傾いてしまう恐れがありますので…護衛の方、お願いできますか？」  
「了解しゃ…しかし…なんつくか、頭か痛い…これほどの数…先は遠そう…しゃな…。」

それらの言葉を後ろに聞きながら、前方に意識を向けているベルが、どこまでも押し寄せて来るアンデッドを光輝く剣で一閃することになり十数体が光の粒子となって消えていく。

その度に、わずかずつ前進しつつ、老公、そしてエルフ達の計4名も神聖属性の範囲魔法をアンデッドらとの間に展開させ、距離をとりながら下がっている。

下がった先で展開していた神聖属性の範囲魔法を使い、またアンデッドの歩みを止めているという手段でじりじりと進むベルの背中を見失わないように下がり続けている。

現在、ルチルがやっと覚えた魔法強化系の〈魔法効果範囲拡大化〉ワイデレンジングを使用し、アンデッド集団の前に〈軽症治癒〉ライト・ヒーリングを展開中。

進軍を止める効果はないが、弱い敵程度なら、相手はアンデッドなので、範囲内から外に出る前に神聖ダメージで随時、粒子となって消えて行く。

それだけでも結構違うモノなのだ。

そして、そこから外に出てきたら、異空間でロバーデイクが覚えた魔法を元に、自分も取得してみた魔法をディーネも唱える。

この魔法も範囲系魔法だが、使用者を中心に術者の力量に応じた範囲をカバーして、範囲内の対象に神聖属性の護りを…負の属性の者にはダメージは与えないがディーネのレベル以下のアンデッドの侵入を阻む効果があり、足止めには充分に効果がある。

残念ながら、展開時に、展開範囲内に運悪く巻き込まれたアンデッドが居たとしたら、その者らは能力値に大きな減少を余儀なくされ、

身動きが取れなくなる。

〈ホーリー・サルベインジョン  
聖なる救い〉

この魔法は発動時は使用者を中心にして展開されるが、展開されたら術者とともに移動ができる効果はない、その為、この魔法は、一度唱えたら、その場に残り続ける。

良くも悪くもそういう効果で、その場でアンデッドを足止めする役目を果たしている。

開かれた外の地形なら、それほどでもないが、この墳墓の通路程度であれば、十分にカバーできるくらいの範囲に、その効果を表し、ルチルの〈ライト・ヒーリング軽症治癒〉を超えてきたアンデッドの足を止めていた。

しばらくすると足を止めている前線のアンデッドと、後ろから続々と押し通す寄せて来るアンデッドとで団子状態になった頃合いを見計らい、セピアが〈ファイアーボール火球〉を、見舞う。

それだけで、かなりの効果を上げていた…。

だが、そのアンデッドたちは無限に湧き出るPOPモンスター…それだけでも、まだまだその後ろには山のようにゾロゾロと蠢いて、緩慢な動きで押し寄せて来る。

「しかし、これはすごいね…まるでこの墳墓の全POPが、ボク達の方に集中してるんじゃないか？つてくらいの量だよ…、フォーサイトのみんなが大丈夫ならいいんだけど…」

一人で、そうつぶやくベル。

その声は戦闘中である後ろの4人には聞こえていない。

「それでも、こんなところでぐずぐずしてる訳には行かないな…早く、打ち合わせた場所まで…しかしこの数…、あ、そうだ、あの手段を使えば…」

ベルは戦いながら、魔法の詠唱に入る。

発動させたのは〈サモン・ビースト・アトヒ第7位階 魔獣召喚〉。

すると、選んだモンスター「オルトロス」が現れ、正面のアンデッ

ド達を自分の代わりになぎ倒していく。

その間にベルは、アイテムボックス内から「トラップ機構付き宝箱」と命名したアイテムを取り出し、そこからリング・オブ・アインズ・ワールド・ゴウンの指輪を取り出し、自分の指に着けていた指輪を1個外す…今、彼が身に着けていたのは、アインズから預かっている「探知阻害の指輪」、それと反対の手の人差し指に「魔力系の看破、探知のみを阻害する指輪」だ。

その内、「魔力系の看破、探知を阻害する指輪」を外して、空いている指に嵌めた。

「うん、これで準備は良し…と、後は転移するだけだな…。」

余裕で後ろを振り向くと、魔法の展開を準備している3人と、前衛で頑張ってくれている老公。

その4人を、瞬間的に元の姿に戻った体で、大口を「がばあ」と広げる。

そのまま、不意打ちで4人を丸呑みし…、リング・オブ・アインズ・ワールド・ゴウンの指輪で、転移した。

その場に残されたのは、召喚され、主の命令通りに…、召喚の際に与えられた仮初の肉体で戦うオルトロスのみである。



「こりゃ…行くしか…ないんだろうな…」

フォーサイトが自分たちの身に起きた突然の変化に理解が追いついたのは、ここに放り出されて、しばし経過してからだった。

アンデッドモンスターが一気に、波が引くように消えて行っただと思つた刹那…足元に光り輝く魔法陣が表れたかと思えば、今、自分たちが居る場所。

というわけだ。

アルシエが言うには帝国の闘技場とよく似ているらしい。

例えるならば、自分たちは挑戦者側、ということで、対戦者として招かれているのだらうということとは明白だ。

「では…行くとしますか!」

決意をして、促すと、自分以外の3人も心を決めたようだ。 頷いてくれている。

…こうして、フォーサイトチームは、目の前の鉄の柵へと歩みを進めていくのだった。

…そこで何が待っているのかを、まだ何も知らぬまま……。

## 第52話 対戦！フオーサイトVSハムスケ：

そこは第6階層、アンファイティートルム円形闘技場。

アインズは効率を優先して、少々回りくどいやり方ではあったが、ワーカー連中（ベルリバー達チーム含む）に会わないように、まず「プリアデス」の末妹オーレオール・オメガに連絡を取り、そこからナザリック内での〈転移門<sup>ゲート</sup>〉の全てを管理している彼女の協力を得て、アンファイティートルム円形闘技場の、最上段への〈転移門<sup>ゲート</sup>〉を展開してもらった。という方法で、その場に来ている。

ある程度の時間を過ぎてから来たので、当然であるが階層守護者（第4と第8を除くメンバー）は全員揃って主が来るのを待っていた。ご丁寧に、その最上段では、骨の玉座が用意されており、守護者たちは全員が跪いている。

いや、よく見ると、まだデミウルゴスが来ていない様子だった。

「ん？どうやらまだデミウルゴスは来ていないようだな…。」

玉座の前で、以前のよう「忠誠の儀」をそのまま再現したような姿勢で改まったまま、待ち続ける階層守護者たち。

その「庄」に若干、気圧されそうになるも悟られまいと、堂々とした姿勢でその玉座に腰掛ける。

座ってみて初めて分かった事だが、見た目に反してそこまで座り心地が悪いという事が無く、少し安心するも、「まだココで気を抜くわけにはいかない！」と己を奮い立たせ、支配者ロールに入る。

「まあ、デミウルゴスは持ち場の段取りに区切りがつき次第と言つてあるからな…まだ来ていないという事は、まだ奴らが来るのに時間はあるのだろう。…のんびりと待つとしようか。」

そういう言葉を誰ともナシに呟いていると背後から「皆さん、遅れてしまいお待たせしてしまつたようですね…。」と聞きなれた声が聞

こえてきた。

「おお、デミウルゴスか、そっちはイレギュラーもなく、誘い込めたようだな。」

玉座に座ったままのアインズから、少し離れた場所より声が届いた。

「どうやら、急いで飛んできたようで、背中から生えた悪魔の翼を最後にはためかせると、静かにその場に下りた。」

そのまま大回りで迂回するようにして玉座の前方に歩みを進めてきた悪魔、デミウルゴスが即座に跪いた姿勢になる。

「申しわけございません、御方をお待たせしてしまおうとは…私の至らなさをお許してください。」

「と言いつつ彼に軽く笑い飛ばす空気を纏わせ、支配者は言葉を返す。」

「いや、そこまでの事ではない、私が『ヤツらを誘い込んでから来い』と言ったのだ、それを待てぬ程、狭量ではないつもりだぞ?」

「おお…なんとという慈悲深きお言葉、まさに真の支配者の器に相応しきお言葉かと存じます。」

「あまり時間をかけている余裕はあるまい…うまく誘い込めたのだな?」

「はい…万事、抜かりなく…転移の罍を使用し、飛ばされた先で、そこから数歩でも歩みを進めれば、即座に『今回、導入することになった罍』を起動する手筈となっております、オート機能という便利な機能を備え付けておりますので…足を踏み入れたらすぐに私の魔力が消費され…、ああ、かかったようですね。」

「まさか、それであっけなく終わるような罍トラップなどではあるまいな?」



（正直、来てほしいと思わなかつただけだな…俺のことを「友達」だと言ってくれた子らの「姉」をわざわざ殺したくなんてないし…かといって侵入者をタダで帰す訳にもいかない…難題だな、守護者達にも納得する理由付けが必要だけど…さて、どうするか…）

「はい…この度、配置したのはごく低位の罠で「スローガス」<sup>トラップ</sup>「コンフューズガス」の二つでございます、これに掛ければ、ふらふらと前方に歩くしか出来なくなる上、動き自体も遅くなりますので、普通に歩くよりは時間がかかるかと思われれます。」

デミウルゴス視点ではかなり気に入った様子で、新しく導入した罠<sup>トラップ</sup>の手ごたえは十分らしい。

さも、楽しそうに報告をしてくれる辺り、これからもこの罠<sup>トラップ</sup>は度々お世話になるのだろうと内心で予想を立てていた。

「では手短に話すでしょう、アウラ…奴らが来たら、進行の方は宜しく頼んだぞ？」

「は！ アインズ様の仰せの通りに覚えて参りましたので、抜かりなく務めてご覧に入れます！」

「うむ、期待している。」

そこでアインズは一呼吸置き、重々しい口調で目の前の守護者たちに語り掛ける。

「さて、皆にここまで来てもらったのは侵入者への制裁をその目で見てもらうため…というのは当初の予定通りなのだが…先ほど、予想外の事態に陥る羽目になった…、下手をすれば今回、計画したよりも大きな余波がナザリツクにもたらされるかもしれん…もしかすれば、階層守護者たるお前たちにも動いてもらわねばならぬ展開になるやもしれん…その時は…、想定とは違う展開となるが、お前たちの力も貸してほしい。」

（まあ、ベルリバーさん次第なんだけど、守護者に対するサプライズって何を準備してるんだろうな、あの人は…）

「あの…アインズ様、それは先程の…アレのことでしょうか？ それほどの脅威ということなのですか？」

「ふむ、アルベドよ…私は常々お前たちに言っているようにどのような事態になろうとも決して対する事象、相手、敵対する者らなど…それに關して侮ってはならぬと言っているのは、忘れてはいないだろうが…、今回のワーカーの中に、ひよっとしたら現地の者らが伝え聞く「神人」と呼ばれるプレイヤーの血縁者、若しくはプレイヤー本人が紛れて入ってきた恐れがある。」

「な…、それは、事実でございませうか？アインズ様…。」

「うむ、デミウルゴスよ、その件に關しては今、悠長に語っている時間はなさそうだが…、フラフラとはあるが、『招待した挑戦者たち』が御出ましのようだぞ？」

「は…、それではこの一件が片付き次第、詳しいお話をお聞かせいただければ…」

（やはり考えていた通り、私達の認識を改めさせるための舞台を用意してくださったという事でしょうね…、そのご期待、このデミウルゴス、至高の御方々より与えられしこの頭脳、その全てで応えて見せましょう！）

「ではアウラ、相手は正氣に戻ったようだ…、周囲を見回し現状の把握に努めている、今の内に計画通りに進めるぞ？相手に主導権を握らせるな…、行け。」

「はい！アインズ様！それでは行ってまいります！」

そう明るく返事をしたアウラ、その軽やかな動きで、闘技場の最上段から戦いの場となる地表舞台まで「とあ！」という掛け声とともに体を宙に投げ出し…舞い下りて行ったのだった。



「…」は、既に相手の術中に嵌ってしまったということでしょう

か？」

「…のようだな、まさか歩き出した瞬間から、この場まで意識がまるで無いとは…恐れ入ったよ。」

「これで終わりの筈がない…きつと何か仕掛けてくるはず…」

「私達四人でなんとか切り抜けるしかなさそうですね。」

「幸い、どうやら外には出られたみたい、これなら〈飛行〉<sup>フライ</sup>でどうにか…」

と、チーム内で現状の確認をしながら会話をしていると、はるか上空から「とあ！」という可愛らしい声と共に舞い降りてきた小柄な：中性的な魅力を持つダークエルフ、きつと目の前の相手がこれから何かをして来るのだろうことは誰の目にも明白であるため、瞬時に警戒の態勢に入る。

目の前で着地したダークエルフ。

それは大きく砂埃を舞い上げる程の衝撃だったにもかかわらず、どこも体を痛めている様子はない。

あんなに高い場所から飛び降りているのに…だ、それをその身ひとつで…ヒザの動きだけで衝撃を吸収してしまったのだろう…そんなことを軽くこなしている様子からして基礎的な身体能力だけをとつても、信じられない程の相手だろうことは見てわかった。

それは恐らくイミナーが一番良く解かっているだろう。

エルフは基本的に森での生活を送る上で必要な能力を自然と身に着ける。

数百年から数千年は（寿命と言う観点では）生きるとも言われるエルフだから、それだけ時間をかけて能力を身に着けていく訳であるが、あそこまで逸脱した身体能力を得た個体など、居るはずはないと彼女もそう思っ居た。

（いえ、母様から聞いた話では同じことが出来る存在というのは1人聞いたことはあるけども…、あいつはもうエルフという種ですら捨ててしまったような感じみたいだから…、でもどちらがより上なのかしら…）

彼女がそう内心で思案に耽っていると、砂埃が収まった地面からすつくと立ちあがったダークエルフの子が、片手に見たこともないような、ワンドの変形させたような短い棒を口に当て、大仰なポーズを取りながら、言葉を紡いでいく…どうやらすぐに戦闘に入る為に来たわけではないらしい。

「そおくれではみなさん！ お待ちかねえ!! 今回我々の前に姿を現した挑戦者は…ナザリック地下大墳墓に侵入した、命知らずの愚か者たち4人!!」

そう…まるでこれから起きることの前触れを事前に…明白な立場として知らしめるように自分たちの方へ手の平を向けているダークエルフの子。

その顔はわずかに笑顔を浮かべているが、好意的なモノでは無いことは雰囲気でわかる。

帝国の闘技場でも、このような決闘の場に入った時には進行役の係員が会場を盛り上げるべく、今のような口上を発することで、場の空気を温めることはよくあることなのだ。

「そうになると、嫌が応でも戦わなければならない立場になったわけか…」とハツケランは気を引き締める。

「そして、その者たちに対しますのは…、ナザリック地下大墳墓の主！  
そして偉大にして至高なる死の王！ 『ナインズ・オウン・ゴール』  
様！」

そう言われ、私達が入ってきた方とは反対…というより、正面に位置していた鉄格子が上に持ち上げられていくと、そこから顔を見せたのは、一見して濃密さが全く違う「死」の気配を漂わせる存在。

あたかも「死」をそのまま具現化したような存在が目の前に歩みを進めてきた。

その首には奴隷剣闘士を真似ているのだろうか：仰々しい首輪を付け、片手剣と、一回り大きいラウンドシールドを身に着けている。

（今回、名前を変えるしかなかったもんなあ：まさか、彼女の前で「アインズ」の名前出しちゃうワケにはいかないし：名乗っちゃやうと正体バレちゃうしな：緊急の対処として「死刑執行人」的な立場ということでその名前：ってことでゴリ押ししたけど：今回だけにしておこう。）

内心、ヒヤヒヤものの心境で、アルシエの前に出てきた「アインズ」改め「ナインズ」であったが、それはアルシエも同様であった。

この墳墓に入った時に見た旗印：紋章は、ゴウン様のお屋敷に招かれた際、頭上高くに堂々と掲げられていた図柄と全く同じであったためだ。

心の中で動揺はしているものの、なんとか思考を巡らせる。

果たして、目の前の人物「ナインズ」と名乗ったのは誰なのか：「アインズ」と名乗ったゴウン様と直接関わりのある存在なのか：それとも全く関わりのない別支部かなにかの責任者なのか：？

考えてはみるものの、答えは出ない。

しかし一つ言えること：今までの「ベル」さんの行動からしてハッキリ言えること：それは私たちの想像も及ばない常軌を逸した存在であればある程：：どうやら本名や、自分の身の上が判明するような手掛かりは教えたがらないのでは？という懸念だ。

（そうすると「ナインズ」という名前も本物が怪しい：：それどころか：信じたくはないし、そうであってほしくはないけど：：目の前の存在が、「アインズ」と名乗ったゴウン様本人という可能性も捨てきれない：。まあ、冒険者でもワーカーでも身分がバレないように偽名を名乗るのは一般的だし：：隠さずに名乗るのは：：私たちがみたいな例外的なケースだけだ：。：）

そこまで考えた時点で、また新たな言葉が目の中のダークエルフから発せられる。

「おお〜と!! どうやらセコンドには『我ら』が守護者統括! ア  
ルベドが居るぞお!」

(守護者…どうかつ? 別の肩書を与えられているって言うことは、  
考えられることは二つ、守護者に次ぐ実力者か…それか、守護者の中  
でもひと際実力が高い者?)

そこまで考えて、甘い考えだったと考えを改める…、この地の支配  
者の近くで「せこんど」なる立場に居る以上、低い実力の筈はない…  
ならば、守護者の中でも特に実力のある者であるという絶望的な状況  
に違いない…。

「申し訳ない…みんな、私のせいでこんなことになった…。」

思わず、謝罪の言葉が口から出てしまった。

それと言うのも自分のワガママで「みんなで、最後を飾る冒険で締  
めくりたい」

そう言い出したのは私の方だったからだ。

それに対してメンバー3人からもそれに対しての言葉が返ってく  
る。

きっと私を責める言葉などは言わないだろう、みんなそういう人た  
ちだからそれは解っているが、言わなければ自分の気が済まなかつ  
た。

「いやいや…この娘っ子はなくにを言ってるんですかいな? つて!」

「…ですね、これはみんなの総意、全員が決めて選んだ仕事です。」

「そういうことよ、気にする必要なんかないわ、チームでしょ? 私達。」

そのやり取りを遠巻きに見ていた「ナインズ」と名乗っている支配  
者が対戦相手であるフォーサイトに軽やかな声をかけた。

「どうやら盗人は盗人なりの仲間意識くらいはあるようだな…、心意  
気は立派だと言っておこう…だが、この墳墓に侵入した時点で、お前

「私たちは私の財を目当てに侵入してきたのは明白……ならば相応の覚悟は済ませてあるのだろうか？」

（一応、口唇蟲で声を変えておいてよかったよ、声だけなら今の俺が「アインズ」だとは思われないだろう。）

ナインズがそう考えていると、それとは逆にヘツケランは生き残る確率を少しでも高めようと模索をし始めていた。

（……さて、無駄だとは思うが、向こうさんから話しかけてくれたんだし……交渉してみるか……？）

「まずは謝罪をさせていたただきたい……ああ……ナイン……ズオーン……殿？」

「……………ナインズ・オウン・ゴールドだ。」

「失礼！ ナインズ・オウン・ゴールド殿……、この墳墓内にあなたに無断で入り込んでしまったこと深く謝罪いたします。」

（よし、ここまでで反論はない……ということはその先の話聞いてもいいという認識で居ていいという事、ならまだ道はある。）

「許していただけるのであれば……それに相応しいだけの謝罪の印として、金銭をお支払いしたい。」

（ん……金銭と言われても……こっちの交金貨って帝国金貨と1：1だろ？それなら仮に1万金貨受け取ってもナザリック的には5000金貨程度の価値しかないわけだし……、これでもし……こいつらがナザリックの財をかすめ取っていたなら……『どの道、その金は私たちの物だっただろ？』って怒りも出ていただろうけど……こいつら……奪ってないしなく……）

「お前たちは何か勘違いをしているようだが……私は別に強欲でも、欲に目がくらんだ守銭奴でも無い……ただ……そうだな、お前たちの実力の程を知りたいのだよ……そう、今まで見ていた中でお前たちはなぜかは

知らんが、自分の実力を隠しているように見える…それが気になつてな、力を見せてもらいたいのだよ。」

(それに、あのハーフェルフの子の装備、どこかで見覚えがあるんだよな…すぐくノスタルジックな感覚がビシバシと刺激されるんだけど、どうしても思い出せない…)。

「それに、一番年若い少女の装備、どうやらうまく誤魔化しているようだが…かなり上位の魔法的な金属の糸で編まれた衣装を身に着けているようだ…私の目はごまかせん…それをどうやって手に入れたのか…興味があつてな…。」

「…つまり、装備を置いていけ…という事でしようか?」

「いや、そういうことでは無い、つまりはだ…今から私がお前たちと戦うのは簡単だが…その前にどうしても確かめなくてはならないことがあつてな…キミ達の実力を確かめる上でも、私の頼みを聞いてくれるとありがたい…それを持って、キミらの実力が分かればいいのだよ。」

「……ということは、その後ろの女性と戦え…ということなのでしようか?」

「いや、それも正解ではないな…、彼女と刃を交えるようなことにでもなれば、恐らく実力の程を確認する前に勝負がついてしまうだろう…それではあまりにも味気ない…ということとで別のお相手を用意させてもらった。今から呼ぶモノと戦い、無事に生き延びたならば…恐らくはソイツ以上の実力はあると判断して私が相手をするかどうか…それはその時に判断させてもらうとしよう。」

「…それを倒せば無事に帰してもらえらつて話じゃ…ないみたいです  
ね…。」



「そこまで警戒しないでも大丈夫だと思うぞ？　一応そいつには『戦士』としての成長を見せて欲しいと言ってるだけで、『相手を殺せ』と言ってるワケではないしな…、抵抗する素振りを見せたり、逃げようとしなければ…、問題は無かろう。」

「この空を〈飛行〉<sup>フライ</sup>で飛んで逃げても…追って来ますかね？」

（まあ、普通に空を飛んでくる相手が居ても不思議はないよな…そんな気がするよ、あの黒髪のお姉さん、腰から翼が生えてるし…それだけで追いかけてこられそうだ。）

「そうだな…面白い手段だとは思いますが、現状ではやめておいた方が良さだろな…、弱肉強食の世界では当然の摂理だが、『逃げる者は追いかけたくなる』…そういうものだろう？」

一瞬、目の前の骸骨の眼窩が赤く、怪しく揺らめいた気がした。

「申し訳ありません、少々、チームで話し合いたいのですが、その時間はあるでしょうか？」

「ああ、構わない、存分に話し合うといい、今生の別れとならないよう…心行くまで語り合うとイイ…。」

（このくらい言っておかないと多分、守護者たちの溜飲は下がらないだろうし…仕方ないと思っ居てもらおう。）



フォーサイトのメンバーは顔を付き合わせ、話し合ったが、結局建設的な結論は出せなかった。

逃げようにも、先ほど釘を刺されたように、空を飛んで逃げようとも、種族的に空を飛べる存在と鬼ごっこをしても勝てる見込みはないことと「逃げれば追う」と明言された以上…先ほどの提案を受けるより他はなかった。

なんとかこちらの要求で飲んでもらえたのが「命にかかわりそうな状況や、身体の欠損などの負傷を負う羽目になったら治癒を頼めるだろうか？」という部分だけは了承してもらえた。

そばにセコンドとして来ているという女は反対していたようだが、「生かさず、殺さず、実力が半減するような負傷を負ったら治療して、また実験に使える限りは使えた方が良さだろうか？」という物騒な説得をし、その女は「そういう事情であれば、あの者たちに相応でしょう。」と、やたら聞き捨てならない言動を発して認めてくれたのはかなり不安な部分はあるが…。

そうして目の前に居た先ほどの「ナインズ」という者と、女悪魔は引きさがり、その代わり、大勢の蜥蜴人リザードマンと、それに引き連れられた大型の魔獣、見たことも無い雄々しい銀の体毛、力強さを感じさせる瞳に、見るからに強大さを感じさせる体躯。

尻尾はまるでドラゴンの鱗に覆われた蛇のような姿に似ていて、四つ足ながら、問題なく二足歩行もできるあたり、伝説の魔獣と言ってもいいかもしれないその姿…。

「まさか、こんなすごいのと戦わされることになるとはな…」

「大丈夫…私達なら…あの場所だって乗り切ったんだから。」

「これでも「あの扉」を潜る前と後ではそれなりに力量も変化してる自負はあるつもりですよ。」

「私も、少しは使える魔法の位階も上がった、大丈夫。」

「さて、それではお仲間との話は済んだでござるか？ 某それがしは修行の成果を見せる場を作って頂いた殿の為に、今まで磨いてきたこの力、存分に振るわせてもらおうで御座るよ。」

「どうやら目の前の魔獣は言葉も操るようだ。」

「ヘツケラン、あの魔獣、今の私と同じ第4位階までの魔法を使えそう、気を付けて。」

「そいつあく…ちよつと本気でかからないとまずいっぽくないか？」

「そうね、短期勝負で、一気に畳みかけるとしましょうか…?」

「その方がいいでしょうね、嫌な予感がしてなりません。」

ここでヘツケランが目の前の魔獣に質問を投げかける。

「一つ、聞きたいことがあるんだが…、後ろに居る蜥蜴人達リザードマンは…次に控えている対戦相手…という認識でいいのか?」

「ああ、彼らは某それがしの戦いを採点する役割の者達で御座る。手は出さないで気にしないで欲しいで御座るよ?」

「それは良かった、さすがにそれだけの数を相手にするのは連戦と言う状況からしても乱戦は避けられないと思ったからな…無駄に血を流してこの主を不快にさせたくなかったから安心したよ。」

「お? 余裕で御座るな? 某それがしを相手にして、その次の戦いも視野に入れるとは…見掛け倒しで無いことを願うとするで御座る。…では行くで御座るよお!!」

そう言つて、体を低くかがめると、その魔獣は攻撃に移る前に「あ、そうで御座った」と態勢を変えずに再び言葉を投げかけてきた。

「某それがしはハムスケ! そちらも名乗ると良いで御座るよ!」

(実は正々堂々とした戦いができる相手なのか? そう言えば『戦士』としての成長を見せる場』って言つてたしな…そういうことなら、多数…1つて言うのはこつちにとって有利すぎじゃないか? それとも、それだけ、相手であるあの魔獣は強いって証拠なのか?)

「俺はチーム「フォーサイト」のヘツケラン、軽戦士フェンサーだ…、最後に一つ確認だが…遠距離攻撃や、魔法支援などの多人数の手数押しが「卑怯だ」って言い分があるなら今の内に言つておいて欲しいんだが?」

一応、勝つてからクレームを付けられても困るので、戦いに入る前

に確認だけは怠らず、どこまでが了承ラインなのかを探る為、言い分だけは聞いておくことにする。

「ん？ 元々最初から全員を相手にするつもりだったので全く構わないで御座るよ？」

そこまで言った魔獣の雰囲気は少し変化し、目つきも鋭さを増したかと思うと、こちらを挑発するような言葉を告げて来る。

「…と言うより、それでいい勝負になるとイイなあ〜と思って居るで御座るよ？こっちも。」

(完全に舐められてるな…こりゃ、初めから飛ばして行く感じでちようどいいかもしれないな…。)

「それじゃ、仲間の名前も伝えておこう…鎧でガツチリ固めた男の方がロバーデイク…小柄な女の子はアルシエ、最後に最後尾のイミーナだ。」

「それで御座るか…、それにしてもずいぶん静かで御座るな、強化魔法などを使わないでもいいので御座るか？ 某はそちらの準備が整うまで待っていてもいいので御座るが…小柄な女性は魔法詠唱者で相違無いので御座ろう？」

「生憎と、このあと、どんな展開になるかわからないんでな…少しは真面目に戦うつもりだが…、全力を出したとして、次の戦闘に勝てないとか考えたくないんでね、余力は残しておきたいのさ」

「それはそれは…やはり余裕があるのは何よりで御座るよ、こちらもそれでこそ命の奪い合い甲斐があるというもので…御座る、よ!!!」

最後の締めくくりの言葉と同時に後ろ脚を蹴って駆けてきた来た巨体。

距離を詰めてきた「ハムスケ」と名乗った魔獣。

その勢いのまま正面から受ければ吹き飛ばされるだけではすむま

い…と判断したヘツケランが〈回避〉の武技を使用し、後ろに飛ぶと同時に〈空炎斬〉を撃ち出す。

その炎の剣閃は、ハムスケの鼻先に直撃するも、あまりダメージは受けていないようだ。

ハムスケと名乗った魔獣はその勢いのまま、爪の攻撃も組み込んでいたようだったが鼻先に炎が当たり、焦がされた為、わずかに爪の軌道がずれ、ヘツケランの装備に小さな爪先の痕が残る程度で終わる。

（もう少しダメージが行くかと思つて居たが、あまりにもダメージが少なすぎるな…種族の特性で炎が利きづらい性質なのか？ …それともアイテムとかそこらへんで外傷の軽減を凶っている？）

ヘツケランが考え事をしている間、アルシエとロバーデイクから支

援魔法が届く。

エンチャントウエボン・フレイム

〈魔法武装・炎属性〉

クイック・ヘイスト

〈攻撃速度・軽上昇〉

この組み合わせは以前まで修行していた異空間で確立させた戦い方の一つ。

炎の精霊が宿る双剣に炎属性の魔法を付与させることによって、元々のダメージ量以上の攻撃力を発揮することが分かった為、炎が効果的な相手や、炎の属性ダメージを元々の攻撃力以上に引き上げたい時に使用する組み合わせだ。

精霊にとつても炎の相乗効果という物ありがたいらしく、これをするとならば効率、消費量の軽減にもつながる為、重宝していた。

攻撃を繰り返すための速度も重要で、これに加えてヘツケランの武技〈疾風加速〉が加われば単体での戦力としては期待できるようになっていたろう…もちろん更に上昇させる奥の手も身に付けているのだが、それはヘツケラン自身が使いどころは良く解かっている。なので、その部分は彼に任せることにする。

「ほおほお…剣から炎…で御座るか？それは面白い武技でござるな…  
そういうものも覚えてみてもいいかも知れんで御座るが…しかし、  
某の鼻を焦がした程度では次の勢いを止めることは不可能で御座る  
よ？」

そう言うと同時に、再び姿勢を低くして次の突撃の準備に入っていた。

「そうはさせないよ？ 〈雷弓強撃射〉！」

イミーナが身に着けている鎧の効果で、死者の大魔法使いからの  
〈雷撃〉をしこたま溜め込んだ「魔力ストック」分で雷撃用の電流が  
迸る弓を作り、そこから武技の〈強撃射〉を併用したイミーナのオリ  
ジナル武技だ。

常にヘッケランの後ろに居るように立ち位置を工夫している彼女  
から放たれる「雷撃の矢」。

ハムスケがヘッケランに突進しようと正面から来るといふ事は、必  
然的にヘッケランの背後に立っているイミーナから見ても狙える射  
線上に居るといふ事になる。

「おっと！ これは危ない所で御座った！ なかなか出来るように御  
座るね？」

ハムスケは突進しながらもその勢いのまま斜め上方にジャンプす  
ることで射線から外れ、避けることに成功する。

「では、こういうのはどうで御座るかな？」

空中に居るままのハムスケが、その場で体を丸め、ボールの様に高  
速回転をし始める。

そのまま、ヘッケランの方にV字を描くような方向転換で突撃を敢  
行した。

（さすがにあの勢いをそのまま受けたら〈要塞〉が使えて防御したとし  
ても数mは後ろに後退させられるだろうな…）

まだ〈疾風加速〉の効果は切れていないヘッケランは、上空から落  
ちて来るハムスケが近づくより早く下を通りすぎ、着地した瞬間に攻  
撃をするべく体勢を整える。

「甘いで御座るよー！」

そう言うと、回転させたままの体から長い尾を広げ、鞭の一撃の如く、しなる尻尾の攻撃が上から襲い掛かる。

勢いの乗った攻撃だが、一辺倒すぎる。

打ち下ろす軌道が丸わかりなので、少し身を横にずらすだけで躲すことが出来た。

地面に尻尾が叩きつけられた大きな音が響き、それと同時に地に降り立った魔獣「ハムスケ」

一撃は入れたものの、それからは防戦一方のヘツケラン：両者ともに相手を見据える。

「なかなか素早いで御座るな…だが逃げてばかりでは某それがしに勝つなど夢のまた夢で御座ろう?」

「そうだな…こちらも余裕を出している場合じゃなくなってきたようだ…そろそろ〈疾風加速〉の効果も切れそうな時間だ…、一気に攻めに転じよう。」

「天晴な心意気で御座る！ さあ、見せるで御座るよ、侵入者よ…そのたの輝きを！」

目の前の魔獣はそう告げると、ヘツケランの前へと悠々と歩みを進めて来た。

「接近戦で御座るよ…受けるで御座るか?」

（しまった！ まさか目前まで来ての接近戦に持ち込まれるとは…これじゃ〈疾風加速〉の利点が活かせない…。）

「あくまで戦士としての戦いを望むというなら…応えるとしますか！」

〈肉体向上〉 〈限界突破〉 〈剛腕剛撃〉

〈双炎斬・連撃〉

ヘツケランが新たに身に着けていた武技の発動に踏み切る。

それはヘスライト・ヘイストの一段上の位階魔法ヘクイツク・ヘイストの効果中に放たれる〈双炎斬撃〉の多段攻撃版である。

4回の攻撃を可能とする攻撃だが、4光連斬のように一度に4つという訳ではなく、4回の連続攻撃であり、攻撃の速度は使用者の敏捷性、器用度の数値に影響される。

その為、魔獣であるハムスケより勝る敏捷性や器用さを持ち合わせていないと対処される恐れがあると言う弱点も同時に孕んでいた。

「よ！ は！ なんと！」

両腕の爪で器用に捌いているも3撃目の剣を弾く際に体勢を大きく崩されたハムスケは後ろに倒れるような動作を取ると、剣の軌道から大きく外れることに成功している。しかしそれを見逃すヘツケランではなく4度目の攻撃を、その丸見えになった腹に見舞おうと4撃目の剣を振るう。

これが対人の戦闘であつたならこれで話は済んだかもしれない、だがヘツケランが相手にしているのは「魔獣」だ。

人間とは違う対処の仕方があることを忘れてはいけなかった。

ハムスケは倒れる勢いを利用して、自分の尻尾を地面すれすれの位置から跳ね上げるようにして反撃に出る。

攻撃に意識を集中させていたヘツケランでは、それに気づくのはあまりに遅い結果となった。

「危ない！ヘツケラン！」

アルシエの〈雷撃〉<sup>ライトニング</sup>がハムスケに向けて放射される。

寝転がっていて大きく体勢を崩していたハムスケではこれに対処する選択肢は残されていない。

「むむ…〈外皮強化〉！ …で御座る!!」

一見、もふもふの毛並みにしか見えない柔らかかそうな体毛がいきなり鋼のような硬さになり、ハムスケの身を護る防具となる。

もちろん〈雷撃〉<sup>ライトニング</sup>の直撃は避けられなかったが、それでもダメージ



は最小限に抑えたようだ。

「危ないで御座るなあ…、さすがに4人同時は手数が多いで御座るね。」

武技による防御に切り替えただため、攻撃は途中で中断、尻尾の攻撃はヘツケランにダメージを与える程の威力は無かった。

かなり威力が削がれた尻尾の一撃は、2本の愛剣で受けきることで済んだので無傷。

（そうか…最初の〈空炎斬〉のダメージもあまり通らなかつたのは、今みたいにダメージを軽減する手段によるものだったか…）

「悪い、助かった、アルシエー！」

アルシエは何も言わず、顔を横に振る。

その仕草は「気にしなくていい」というサインだ。

「ケガはないですか？ヘツケラン…！」

回復の準備をしているロバーデイクも声をかけてくる。

「ああ、なんとかな、まだノーダメージで済んでるよ…！」

「いやはや、なかなかで御座るな、それではこちらも最近モノに出来た技を出すとするで御座るよ。」

そう言った魔獣ハムスケは、再びヘツケランの目の前にまで歩いて、再度の近接戦を挑んで来る。

「それがし某も『戦士』として成長できているという証を「殿」にお見せせねば立つ瀬が無い故に、この辺で良い所を見せなければ、ご期待に沿えぬ我が身を歯痒く感じるで御座るからな…よもや、得意な間合いでの戦闘を避けはしないで御座ろう？」

「そうだな…戦士がこの距離で戦いを放棄するわけには行かないよな…乗せられてやるとするか」

そう言葉を発した途端に、頭の中に不意に別の意識が流れ込んでき

た。

「大丈夫なのか？　かなり手こずってるようだが…？　お前が敗れるようなことになれば俺たちはどうする？　せつかくやっていけそうなパートナーを見つけられた矢先に死なれたらこっちは困るんだが？」

この意識は2本の愛剣の中に宿っている炎の精霊サラマンダーだ。異空間での修行で使っている内に次第に打ち解けられるようになってきたため、時々こうして語り掛けてくれるのだ。

通常なら、そんなに心配などしてくれないはずだが…気になって頭の中で聞いてみる。

（大丈夫だって…俺に何かがあっても別の持ち主が現れてくれるんじゃないか？）

そこまで脳内会話をし始めた段階で、目の前の魔獣にも変化が訪れる。

「……待つで御座るよ……。」

目の前の魔獣を見る。

観察してみるが、視線はこちらを向いている。

それは確かなのだが、どこか眼に力がない…と言うより何かに気を取られながらこちらを見ているような気がする…。

（もしかして、向こうも、俺と同じように何かの存在と会話でもしてるのか？）

そう考えていると、その自分の想いなどお構いなく炎の精霊は自分の言いたいことを一方的に伝えて来る。

「お前は自分自身のこと、意外にわかってないようだな…お前みたいな奇妙な輩はそうそういないという事を…、こっちは武器の一部、貴重な武器の能力の一端扱いなどされたくはないからな？　そんな奴ら…こっちの存在を認めてもくれないヤツの為に振るう力など…俺らはカケラ程も持ち合わせてない！」

『奇特』って…ずいぶん言い草だな…もうちよつと言い方あるだろうよ…、でもま、こつちだつて死にたいわけじゃないからな…精々悪あがきして、見苦しく生きて見せるさ…それが無駄な努力に終わりそうなら…その時はその時だ…それからはお前の自由に生きろ?」

などと会話をしていると、どうやら向こうの魔獣の方もこつちどころの話じゃないらしい。

「あああー… もう、うるさいで御座るよ！ 邪魔するなで御座るうー！」  
魔獣は頭をぶんぶんと振りながら、意識をこつちに持ってこようとしている。

そのタイミングで…。

「そうか…わかった、お前がそのつもりなら、こちらもそのつもりで居よう…。」

それでサラマンダーからの音信はぷつりと途絶えた。

「ああ、もう、面倒で御座る！ もう何もするなで御座る！ しかれば…行くで御座るよ?」

どうやら最後の「行くで御座るよ」の部分だけはこちらに対して発した言葉らしい。

先ほどまでの彷徨いがちな視線ではなく、しっかりとこちらを見据えながら言っていたのだから。

「ああ、いつでもいいぜ?」

巨体を持ち上げるようにして、両腕をゆっくりと持ち上げている。見るからに胴体ながら空きだ。

攻撃してくださいと言っているようなモノ…隙だらけに見えるのが逆に不気味に思える。

(距離を置いて〈空炎斬〉の連続って言うのは愚作だな…相手はこつちのダメージを軽減できるし…効果は期待できない…その上、そんな戦い方じゃ、戦士と戦士の戦いに水を差すようなモノ…それで本当に相

手に勝ったと胸を張れるのか?)

ならば……と意識を切り替える。

「ロバー……防御の支援を頼む。アルシエは俺がトドメを刺されそうになったら魔法で注意を引きつけてくれ、イミーナは、いつでも雷撃の矢で、アルシエの援護が出来る様に頼んだぜ?」

「ちよつと!・ヘツケラン! 縁起でもないコト言わないでよ!」

「そうですよ、こんなところで……まだ序盤です! ここでリタイヤなんてさせませんよ?」

そう叫んだロバーデイクは魔法で〈神恵の皮膜〉デイベイン・ペールを発動。

ロバーデイクの持つ魔法で現状、一番防御効果の高い魔法だ。

「ありがとな……じゃ、最後の賭けに出るわ。祈っててくれ」

「なら……せめてこれを……」

アルシエから武器の攻撃力上昇を助ける魔法〈鋭刃〉シャープネスがかけられる。

可能なら、攻撃魔法で助きたい気持ちなんだろうが、戦士同士の戦いという事で譲歩してくれたのだろう……少しでも切れ味を良くして勝率を高めようとした結果が、この魔法……それに感謝を覚えた。

「待たせたな……ハムスケさんよ……こつちも奥の手を出すから……ちゃんと見ててくれよ?」

「いいで御座るよ? こちらも戦士としてこの場に居る以上、正々堂々と打ち負かすことに意味があるので御座るからな。」

「ありがたい! 行くぞ! 〈戦気梱封〉 〈能力向上〉 〈肉体向上〉

〈限界突破〉 〈剛腕剛撃〉」

そして、それらを同時に全展開した後、2本の剣に炎が纏わりつき、蛇がトグロを巻くようにうねっている。

「行くぞ! ハムスケ! 〈双炎斬・連剛撃〉」

「なんの！ 〈斬撃〉！ で御座る！」

ヘツケランの能力向上によって、先ほどの4回の連続攻撃の上を行く、6回の連続攻撃…

そしてそれに対応するように、最初の2撃は両手の爪で、2度目の2撃は尻尾で左右の手を撃ち上げて防ぐ…

3度目の2撃に合わせるようにハムスケは〈斬撃〉を発動。  
奇しくも、左右の連続攻撃同士のぶつかり合いになった。

勝敗は…方や、2本だけの剣での攻撃、それに炎を纏って居ても、鋭さを込めても、最終的には刃先は2つしかない。

一方、ハムスケの方は…確かに左右の腕で考えれば2本しかないが…その爪の部分は4つに分かれている。

それが左右から襲い掛かってくるため、刃はハムスケの場合、8つある計算になる。

「お…、うあああ!!! ああああ!!!」

ヘツケランの悲鳴が響く、のたうち回るヘツケランはかろうじて腕は繋がっているが切り口からは骨が見えている。

一番、爪の長い部分の切り口では、骨の3分の1がスッパリと切られていて、接合できるかどうか…これ程の重傷は見たことがなかった。

「ふむ…人間にしては、腕のある方だったみたいで御座るね…こちらの爪が左右で一本ずつ傷をつけられるとは思っていなかったで御座るよ。」

「くっそおおお!! 腕がああ、ここまで…ここまで来て、これかああ!!」

かろうじて、落ちていた一本の方の剣は口で噛み、もう一本の剣は両腕で抱きかかえている。

手首こそ無事だったものの、手首と肘の間に掛けて、4つの切り傷

が肉を削ぎ、骨を露出して、場所によっては傷がついてる部分もある。手の平に力が入る状態では、もはやなかったのだ。

「さて…苦しめるのは趣味では無いので、これで終わりにするで御座る…。」

そう魔獣が言つてのけた瞬間、そこにあつた「4つの意思」が弾けて行動を開始した。

後ろにいたイミーナは、既に準備を終えていた『雷の矢』を使い、そこに再び武技を発動させ、撃ち出す。

〈遠雷撃射！〉

それは、異空間で覚えた『遠射の一撃』という武技を雷矢の射撃用武技として身に着け直してもの。

螺旋の動きで、スクリュー状に回転しながら空気を割き、敵に向かう武技。

その為、飛距離も伸び、命中率も上がる、更には刺さりながら捻じりが加わることによりダメージも多少上がる。

その次に動いたのはアルシエ。

「させない！」

予め準備していた魔法、第4位階で最初に覚えた魔法。  
〈吹き上げし爆裂〉を唱える。

その魔法は爆裂系の魔法で、地表部に足をついている者全てに効果を及ぼす魔法。

それが範囲内に居る者すべてに効果を及ぼし、ダメージを与えると同時にノックバック効果＋上空に撃ち上げる効果も加わる。

ハムスケが上空に撃ち上げられ、後方に下げられている内にイミーナとロバーデイクがヘッケランの下まで走り寄る。

「大丈夫ですか、ヘッケラン、今後ろまで下がります、治療をそこでしましょう。」

「大丈夫？ヘッケラン、防御なら任せて？ 私の防具が何があっても

守ってくれるから…」

二人で左右をそれぞれ支えながら、後ろに下がって居る中、地面に打ち付けられたハムスケがむくりと起き上がる。

「いまだに勝敗も決まらぬ内に退場などは無粋で御座ろう？ … さあ、最後まで命の輝きを見せるで御座るよ！」

ハムスケの尻尾が怪しくうねる。

すると、一直線にヘッケランの背に向けてその硬い先端が向かい、今にも届くかと思われた瞬間…。

尻尾の先を丸々と覆う程の規模で地面から炎が吹き上がる。

それは先ほどの〈吹き上げし爆裂〉とは違うものだ。

撃ち上げの効果は無いモノの、ダメージ量はこちらの方が上…。

魔法使いの少女は特に魔法を発動する挙動は見えなかった。

なら…一体なにが起きたのか…ハムスケにはわからない。

ヘッケランが必死に口にくわえている2本の愛剣、その刀身に埋め込まれていた魔石部分が煌々と輝いていることなど…背中しか見えないハムスケにはわかるはずの無いことであった。

「ふむ…トドメとまではいかなかったのが残念でならないで御座るが…どうでござろう？ザリユース殿？先ほどのはちゃんと武技として現れていたで御座るか？」

「ええ、あれはまさしく…武技〈斬撃〉の発動でした、お見事です…」  
「嬉しいで御座るなあ…もつと修行を積んで、ハムスケウォーリアになるで御座るよ」

「ちよつと待ちなさいよ!!」

ハムスケの後ろからイミナーナの声が轟く。

「ん？何で御座るか？ それがし 某にまだ何か用で御座るか？」

「まだなにか？ じゃないわよ！ うちのリーダーをこんな目に合わせてタダで済むと思うんじゃないわよ？」

「イミーナさん、落ち着いてください…アルシエも、止めて下さい、私は治療で手いっぱいでは今は動けませんので…。」

「大丈夫、イミーナ…このくらいならきつと治る。」

「アルシエも何言ってるの？骨まで行ってるのよ？　大丈夫な訳がないでしょ!!」

「こちらとしては、全員を相手するつもりだったので、そちらの3名でかかって来てもいいで御座るよ？　まだまだ某は戦えるで御座るし…」

「いや、ハムスケよ、そこまでで良い!」

不意に上から重々しい声が発せられ、全員の動きが止まる。

「おお!　殿!　見ていてくれたで御座るか?　某、それがし武技が使えるようになったで御座るよ!」

嬉しそうに上を向く魔獣、今なら後ろから撃つことも出来るけど…、でもそれでも勝てる気がしない…魔獣が「武技を使う」それだけのコトで、ここまで実力に差が出ようとは…と、どうしようもない気分に襲われていた。

「ああ、お前の成長は確かに見せてもらった、先ほどの武技の発動は見事であった、益々の精進を期待している…。」

頭上の支配者がそう言葉にすると、魔獣の方も嬉しそうに声を返す。

「ありがたき幸せに御座るよ、殿!　某、それがしもつともつと特訓に励み、もつとたくさん武技を覚えてハムスケウォーリアになる所存!　その際は殿に見届けて欲しいで御座るよ!」

まるで貴族の愛玩用に買われる犬か何かのペットの様に嬉しそうに尻尾を振る魔獣「ハムスケ」。

悔しいが、今の私たちではまだ力が足りないと思いきらされる…こうしてる間にもヘツケランの腕から血が流れて、持っているポーションを使っても血の流れが少なくなる程度で治る兆しは無い。



「どうしたらいいの？　ねえ…ロバー？　このままだとヘツケランが…ヘツケランが…」

「今はこのまま、魔法をかけ続けるしかありません、今これを止めてしまえば…血が一気に溢れて腕が使い物にならなくなってしまう…。」

「でも…このままだと、時間の問題なんですよ？　そうなんですよ？」

珍しく感情を表に出して狼狽えるイミーナ。

自分も、ヘツケランがこんな姿になることは想像していなかった。

絶対に痛み分けになっても無事に戻ってくると思って居たのに…。

半ば、絶望の色が濃くなった時、自分達が入ってきた鉄格子がゴゴゴ…と音を立てて、持ち上げられていくのが見える。

今度は…何が出て来るんだろうか…？

次は何と戦わされるのか？

3人がそれぞれそっちの方に目を向けると、アルシエだけは気付いていた、さっきの魔獣も、上に居る支配者も、私たち同様に、そっちへと意識を持って行かれていることに…

「みなさん、どうされました？　どうやらお困りのようですね？」

その声にフォーサイトの面々は安堵を覚えた。

それは、以前ジエツトの母を救い出すために行動を共にしたことのある、黒髪で聖印を象った帽子をかぶり、東方の…異国風の衣装に身を包んだ女性。

初めて知り合ったのはその時だが、それからはちよくちよく顔を合わせる事となり、異空間での修行でも、ベルさんと共に私たちのサポートや、回復などを買って出てくれていた人だ。

そして、その少し後ろには同じように黒髪の長髪、それに見事な武

装で身を固め、光り輝く剣を手にこちらへと近づいてきた仮面の者：髪は長い為、女性か？とも思うが、体つきからして男性？とも思う…どの道、見ているだけだとどちらとも判断がつかない。

「フレイラさん…ヘッケランが…ウチのリーダーが…」

涙声でうまく声の出せないイミーナの言葉を全て聞かなくても状況を判断してくれたのか、フレイラさんが後ろの黒い長髪の人に声をかける。

「マスター…どうされますか？ このままでは時間の問題かと思われませんが…？」

フレイラさんがそう言葉にすると、無言で頷いた長髪の方は、懐に手を入れると、護符のようなものを取り出した。

「……………」

無言でそれをヘッケランの腕に向けると、その護符から光があふれだし、ヘッケランを包みこむ。

「さあ…これで大丈夫だ…。」

やっとその長髪の人声が聞けたが…誰が聞いてもそれは男性の声だ。

改めて男性だと認識したことに驚きを隠せないみんなは、その人に視線を奪われていたが、「ハー」と気づき、ヘッケランの腕を見る。

傷ついて、骨まで露出していた腕はすっかり良くなり、骨にまで達していた傷どころか、出血すら見当たらない、切り傷程度の痕すらも残っていないかった。

「あ、ありがとうございます。…ありがとうございますました！」

何度も何度もお礼を言うみんな、…でもこの声を聴いた瞬間、私にはこの人が誰なのか…もう気がついていていた。

髪の色と装備こそ違うけど、その声、髪の長さ、歩き方、よく知っていたからだ。

「さあ、あとは私に任せて、キミたちは下がって休んでいてくれて構わないよ？」 後のことは『ボク達』でなんとかするから…」

そう言っつて、その人は、目の前の魔獣には目もくれず、頭上の支配者の方へと目を向ける。

その言葉に安心したのか、腕の傷は治っているはずのヘツケランが深い意識の底に落ちていく…極度の緊張から解放されたせいか、その表情はどこか安らいだものであった。

### 第53話 支配者に賄賂、それは武技大辞典！

ヘツケランの腕の傷が無事、完治したことを見たフレイラは「これで安心していいわ」と声をかけ、イミーナの背を優しくさすつてあげている。

「ありがとう…ありがとう…」

そう繰り返すイミーナは、今まではそれどころじゃなかったの思い浮かばなかった疑問を一つ、フレイラに投げかける。

「あの…フレイラさんはなぜ、ここに？ ここにはワーカーしか入って来られない筈…」

その言葉を聞いたフレイラは「ああ…」と短く納得する言葉を発した後、イミーナに問いの答えを返した。

「お忘れでしょうか？ 私は黒装束を身に着けることで、誰の影にでも、何の陰にも潜むことが出来ます…ということ、影に潜んで中まですり込んでくるのが出来た…ということですよ？」

「それで…、フレイラさんは…その、ワーカーになられてるというワケでは？」

「違いますね、ワーカーが『自称』ということ、本人がそう思っただけで居ればそう。』という定義があるのであれば、それになることもやぶさかではありませんが、それは主人の意向を聞いてからでしょうね。」

「…と言うことはやっぱり、あの人は「ベル」さん…ということ？」

横で静かに聞いていたアルシエがフレイラに訊ねてきた。

フレイラはわずかに笑みを浮かべ…

「そうですね、私にとって「主人」と言えるべき方は世界中で…ただお一人。ベル…」

と、そこで何かを言いかけ、口をつぐむと…わずかの逡巡の後、続ける言葉を付け加えた。

「ベル…カウワ…スズリバー、その人だけなのですから。」



「ようやく会えたようだな…侵入者よ…お前は他の有象無象とは一味違うようだが…お前には聞きたいことが山ほどある…そういう意味でもこうして相まみえる瞬間を心待ちにしていたよ…」

支配者であるナインズが、遙か頭上の貴賓席らしき場所よりもさらに上、支配者に相応しい最上段から眼下を見下ろし、満を持して現れた黒髪の勇者に向かって言い放つ。

「それは喜ばしい限りですね…このような強大な…難攻不落と言つていい拠点を支配する超人…いや、神と呼んでも差し支えないほどの力あふれる貴方のような方にそう評価してもらえらるとは…、こちらには心当たりはないのですが…お聞きしたいこととはどのような事でしょうか？　ああ…失礼、私は『ベルⅡカウワースズリバー』と申します、お見知りおきを…。」

ベルと名乗った、見るからに剣客の姿である仮面の者が支配者に対して返答した、そこには以前から目の前の存在の力量を知っていたのかと勘繰りたくなるような物言いが含まれていた。

ナインズと名乗るアインズ・ウール・ゴウンの近くに控えていたデミウルゴスが、その言葉を聞き「やはり…」という表情をする。

(何かの間違いかと思いきもうとしていましたが…どうやら先ほど、侵入者がトラップにかかる瞬間をモニターしている最中、たまたま見えていた画像の中のあの映像…、あの瞬間の姿が本物であれば…間違いないようにユグドラシルで存在していた種族…その異形種の中の一つということになりますね…実力のほどまでは分かりませんが…警戒しておくべきでしょうね…。)

御方に万が一にも傷を負わせるわけにはいかないと決意を新たにするデミウルゴス。

どうやら他の守護者たちはそのことには気づいていないようで、どこか強者が弱者に対して「絶対の余裕」を以って見下している様な雰

困気を感じる。

(私がすっかりしなければいけないようですね…統括のアルベドまでが余裕の姿勢を崩していないとは…)

「先ほども言ったようにお前には、聞かねばならんことがある…、その上で処遇を決める事としよう。」

「これは…、支配者というだけあってさすがの貫禄ですね。まるで言葉自体に重みが乗せられているようだ…しかも理知的で話し合いの余地まで設けてくれるとは…侵入者に対する態度としては温情あふれる姿勢と言わざるをえませんね。…きつと永き時を過ごしてこられたのでしよう…正に上に立つべきお方だとお見受けします。」

(さすがにここまで持ち上げておけば、NPCたちも悪い気はしないだろう…己の主を評価しているのだから…問題はやり過ぎるとわざとらしさが前面に出て、おちよくられると思わせられる可能性があるくらいか…)

その言葉を聞いて、デミウルゴスは思った。

やはりこの男は油断ならぬ存在だと…、あそこまで言われれば、主と言えども軽々に処罰を下すことなどできない、御方は意味もなく殺害に及ぶことを良しとしないお人柄。

その上で、あのような言われ方をされれば尚更、極刑に処すなどという言葉が言いにくくなる。

そこまで計算の上で言葉を選んでいたら、相当の食わせ者であることに疑いの余地はない。

「ではまず聞こう…あの老人は何処へやった？ 確か監視下に入れておくので見逃してほしい…であつたか？ 別に弱者の中でも最底辺の人間ごとき一人見逃したところで然程の事でもないが…、先ほどの写真一枚で、我らからの追及が無くなるなどとは思ってはいまい？」

(疲れるなく…どんなシナリオがあつてどういう流れに持って行けばいいかがわからないから、こつちとしては手探り状態なんだけど…、

ベルリバーさんの機転に期待するしかないよなあ〜…。)

「ええ…今は誰かから知らぬうちに不意打ち等で命を落とさぬよう、安全な場所がかくまっておりますよ？ 完全に御身の名において絶対の安全を保障して頂けるといふのなら…すぐにでも無事な姿をお見せいたしますが？」

軽い調子で核心に至ろうとする仮面の剣客、それに対して、ナインズもむぎむぎ思い通りにさせるわけにはいかないようで、相手を牽制する。

「それを保証すること自体は、我らの財宝に手を付けてない者であればどちらでもいいのだが…、「それ」を認める事が我々にとってのメリットに繋がるとは思えないのだが？ お前の監視下にある盗人ども一味の一角、古い先短いとはいえ老人一人見逃すに足るメリットが我々にあると言う証明を示してほしいものだが？ それはどうするつもりだ？」

(すみません、ベルリバーさん、これ、自分がいつもNPCたちに要求していることなんです！ これを言わないと絶対にこつちが疑われちゃいそうなんです…せめてここはクリアしてください、お願いします！)

内心でそう謝罪をしながら、言葉を操る支配者、その堂々たる余裕は見る限り、狼狽している風には見えない…ガイコツなので表情などないというのが幸いしているのだが…。

それに対してベルの方も用意しておいた代替案を持ち掛ける。

「それについてですが…、このご老人を見逃して頂ければ、この老人の命1つ以上の価値ある資料をそちらへ提供する事が出来ます。それは、この地で、この地の人間が、この地独自の発展を遂げた『武技』なるものの…今現在、現状で確認できる全ての種類の武技を記した手帳…それと引き換えにして頂きたい。」

「な…なんだと？…」

「どうでしょうか？もし、お許しただけなら、その原本となる物を

今すぐに進呈させて頂くことも可能ですが」

「それほどの価値がその老人にあるというのか？　こちらからすればそっちの方が割に合わないという気がするが？　現状において存在している…表舞台で確認されている武技の全てが記されているというのなら明らかにその資料の方が上ではないか？」

「それはその通りなのですが、この資料には…欠点もございまして、完全無欠の参考資料という訳ではないのですよ…残念ながら…」

「ほお…それならばまだ納得も出来ようというものだ…聞かせてもらおうか…その欠点とはなんだ？」

「はい、今現在、表舞台に…明るみになっている武技は一通り説明されてはいますが…記載されているのはその武技の名前、そしてそれが攻撃の武技か、防御のか…身体強化系か…といった種類の記載、更にはその武技を使用すればどのような結果が表れるのか…しか書かれておらず、どんな相性が合えばその武技をおぼえやすいのか…何レベルで、習得可能となるのか…またはその手順は…？といった事柄は一切記載されていないのです。」

「ふむ…ならばその老人一人とつり合いが取れると言われれば否定する材料はないな…相応と言うべきか…」

「ならば、その資料となる手帳、その現物がこちらとなります。」

そう言って、いつものように懐に手を入れる風を装い、中からアイテムボックスに手を入れ、その手帳を引きずり出す。

「アウラ…それをこちらまで持つてこい、よもやアレが偽物で、私の近くに来るための口実…、近くに来た途端に襲って来るとは思えんが…念のためだ、本物かどうか確かめたい、受け取って私の元まで持つてくるのだ。」

「ハイ！　ア…、ナインズ様！」

そうして最初こそ、舞台上でマイクパフォーマンスをしてフォーサイトの紹介をしたアウラだが、支配者が上に戻った際、共に上段の方へ一緒に戻っていた。



その為、再び舞台の方へと軽やかに飛び降り、手帳を受け取ると、そのままナインズのそばに持ってくる。

「はい、ナインズ様、お持ちしました、こちらとなります！」

「うむ、ご苦労、アウラ：では読ませてもらう…」

ナインズも、手持ちのマジックアイテムを持ち出す。

それは、片目でかざして見ると、どのような文字も翻訳して読めるようになる魔法のメガネだ。それを取り出すと手帳を見る…。

間違いない、ハムスケが覚えた基本の『斬撃』

ガゼフが使用した「戦気梱封」「即応反射」「流水加速」「六光連斬」

クレマンティーンも使っていた「超回避」「疾風走破」「不落要塞」「能力向上」そして「超向上」

漆黒の剣のリーダーが使っていた「要塞」

（え？…ウソ…「重要塞」なんて武技もあるの？ みたことないんだけど！）

他にも珍しいのを挙げれば、老公と手合わせした時に彼が使用した「竜牙突き」「白竜牙突き」「青竜牙突き」などなど…誰が使った物か分からないが、他にも数限りない武技の種類まである。

面白いものなら、『オリジナル武技の作り方のガイドダンス』などという記載まであった。

「ふむ…面白い…これならば、この地の武技なるもの…、それら一通りの対策を練ることも可能となろう。それは正にナザリックにとって財産とも言える知識…、見事だ、これを我らの物にしてもいいというのであれば、先ほどの老人の命、『お前の監視下』という条件は付くが、それでいいのなら好きにするといい」

「ありがとうございます、この地の支配者、ナインズ様…それに加えまして、まだ一つ、これは附属品と言いますか…付録とでも言いましょうか…その手帳を受け取って頂けるのであれば、もう一つ、御身に有効に使って頂きたい者も御座います。」

「ほお…まだなにかあるというのか？それはなんだ？」

「はい…それは…その手帳の記載者、本人でございます。」

「まさか…それは…、連れてきているのか？」

「はい…先ほどのご老人同様、丁重に保護下に入れておりますが、その者は現在意識を手放してる状態、明け渡した後は、お好きなように…脳髓から情報を引き出すもよし、尋問で聞き出すもよし、〈<sup>ギアス</sup>制約〉の魔法で引き続き、武技の研究の為に生かし続け、ナザリックの為だけに行動させるもよし、〈<sup>コントロール・アムネジア</sup>記憶操作〉によつて…『情報こそ力』…その力とするべく情報のみ抜き出してもいいでしょう。」

少々、芝居がかつたような仕草と言い方だが、スラスラと出てくる選択肢の数々にデミウルゴスも少しだけ、その状況を連想し、興味深い気分にさせられる。

「素晴らしいな…見事の一言だ！ その記載者を明け渡せるのならそれは私にとつて…いや、ナザリックにとつての大きな力と成り得るかもしれない、そうなればそれは交渉以上の価値をもつ、言うなれば「恩」と受け止めてもいいかもしれない！」

（なんかすごいな…ベルリバーさん、こんな短期間でここまでの成果を持つてくるなんて…武技の内容か…あとでゆっくり読ませてもらおう！）

そこままで話が一区切りつき、「武技大辞典」の存在で「メンバー達の写真の追及」のことをすっかり忘れて上機嫌になってしまっている支配者のそばまで来たデミウルゴスが静かにナインズに語り掛ける。

「ナインズ様、少々よろしいでしょうか？」

「ん？どうした？ デミウルゴス…。」

「私からも、あの者に聞きたいことがございますので、少々お時間を頂いて宜しいでしょうか？」

（う…何か感づかれたか？デミウルゴスは変に頭が切れるし、深読み凄いいしな…とりあえずお芝居ロールは続けながら、現状維持を優先しておこう…。）

「珍しいな、デミウルゴスが率先して人間などに聞きたいことがあるなどとは…まあ、いいだろう…ただし、向こうが何かしらの手出しをしない限りは、こちらでも決して危害を加える事はならん…それがダメージを伴う方法であれ、そうでない方法であれ…いかなる手段でも…だ、分かったな？」

「は…かしこまりました、至高なる御身よ…。」

そしてデミウルゴスは、軽やかに宙に身体を投げ出すと、背中から悪魔としての翼を生やし、仮面の剣客が立つ、その場へと優雅に下りて行った。



(うう…デミウルゴスが下りて来たぞ？ どうする？…でもここからが本番だ、踏ん張りどころだぞ？ 怪しまれず…かつ、こちらの有利に話が進むように誘導しなければならぬ…デミウルゴス相手に通じるか？…ええい！ 通じなかつたら通じなかつたでそれまでだ！ どうせ、そういう可能性ありきでここまで来たんじゃないのかよ！)

少し不安感に苛まれながらも、己を激励し奮い立たせるベルリバー。

そんな感情は、仮面によって遮られていることに少しの安堵を覚えるも…デミウルゴスと舌戦を展開しなければならぬプレッシャーに押しつぶされそうになる。

しかし、それはほんの序盤だ。

この千載一遇の機会を活かせなければ、今後の自分の理想を作り出すことなどできない。

その為の重圧にならいくらでも立ち向かっていくつもりでここに来たんだ！と思いを新たにしていると、優雅に目の前の悪魔は地に降り立ち、そしてわずかにこちらに興味深げな視線を向けて来る。

しかしそれは好意的なモノではなく…あくまで観察対象…実験動物や、昆虫をケースに閉じ込めて生態を観察するような目に似ている

…そうベルリバーには感じた。

「これはこれは…申し訳ないですが、あなたはこの地の…支配者様ではありませんよね？ 失礼ですがどのような立場の人なのか、お聞きしても？」

（一応、知識として覚えてはいるけど、初見で見ず知らずの人間が知ってたらおかしいもんな…ここはまず外堀から埋めていかないと…ですよね？ ぷにっとなさん！）

「ああ…これは失礼…大変に興味深い個体に見えたのでね、観察するような目を向けてしまったようで失礼をしたね…私はデミウルゴス。このナザリツク地下大墳墓に於いて、防衛時の作戦責任者を任されている者だよ…。」

そう背中をわずかに前へと倒し、優雅に腕を胸の前に持つてくる所作。

こちらに敬意を払って居る様に見える動作だが、恐らくはそれはこちらを油断させるため、決して「認めて」その態度になったわけではないだろう。

デミウルゴスは背筋を伸ばし、両腕を後ろ手に組んでこちらに目を向け、こう切り出した。

「ところで、あなたには…、私の方からどうしても聞きたいことがありますしてね…。」

（…来た！…そうだよな…あの場から穩便に引き上げてもらう口実とは言え、あの写真を見たら、そりゃ背後関係を疑ってみたくなるよな…）

「単刀直入に申し上げますと…あなたの正体など、正直私にとってはどうでもいいのですよ、本当はね…。」

（あれ？ 予想とは違う言葉がデミウルゴスから出て来てるぞ？ 正体の事、聞かれるかと思っただけ…）

「私が知りたいことはただ一つ！ あなたは…いえ…『あのお方』とどういった関係だったのです！ よもや、写真だけ奪い取ったなどという事は無いのでしょうか？ 『あのお方』が弑されることなど考えられ

ませんが…、もしそうならあなたの評価も少し改める必要がありますからね。」

〔「あのお方」…か、デミウルゴスがそう言うということは…きつとウルベルトさんのことだろうな…っていやいや！それはダメだろ？それを口走つたら、いきなり関係者だつてバレるだろうし…わざわざ自分からネタバレとか…絶対にダメなやつだし！〕

「…『あのお方』とは？ 一体誰の事でしようか？」

ベルと名乗った目の前の男がしらを切つて居るのか、本当に知らないのか…、恐らくは前者だろうとあたりを付けているデミウルゴスはその「茶番」に対して、表情を崩さず思案する。

（やはり、そこには食いついてきませんか…ここでポロつと漏らしてくれば儲けものだったのですが…まあその程度は見破つてくれないと少々興冷めな展開だったかもしれない…なら次の手に移りますか…）

「もちろん、至高なる御方々のお一人、ウルベルト・アレイン・オードル様その御方に対してですよ…。」

眼鏡をクイッと持ち上げる仕草をして、わずかな時間の沈黙…そこでベルリバーはどう返答するべきか悩む。

（さて…ここですぐ答えるのはあまりにも軽率だな…外部の人間という設定で「今は」来ているんだし、ここでバレたら、そもそもサブライズにならないしな…まだ勘付かれる訳には行かない…か。）

「ウルベルト…さん？、あ…いや失礼、ウルベルト様…、でしたか…それは写真のどのような位置におられる方でしたか？ 外見の特徴だけでも…何色の方が言つて下されば私もどの方だかわかりますし、それに関しての情報が思い出せるなら…」

（ふむ…やはりそこは引つかかりませんか？…それとも本当に知らない？ …いや、それならば発言が引つかかりますね…、こちらの世界の人間ならば名前の構成は「名前」が最初で、最後が「姓」…、つまり家名の部分、いきなり見ず知らずの対象を名前呼びにするというの

はどうにもひっかかりません、そうなるならアインズ様のように、始めに「姓」が来る国、もしくは場所の生まれという仮定が成り立ちますが…)

「山羊の頭をした、黒づくめの姿で写っていた方ですよ、何色の服も装着していない…ローブ姿の御方です。」

「ああ、何色のも着ていないお一方でしたか…それならやつとわかりました、あの人？方？のことですね。」

(敢えて「服」と呼称しましたが、それに対しコスチュームなり、スーツなり…独自の名称などが出てくればもつと確証は得られたのですが…、これ以上の深い追及は難しいでしょうか？…まあいいでしょう、とりあえずの確認は取れました…この世界…現地民である可能性は限りなく低い…その結論だけでも良しとしましょうか。)

「申し訳ありませんね、それは先祖…祖父の祖父、そのまた祖父からの遺産でしてね…どことなく背景の印象とこちらの雰囲気似ていたので見せてみたら、好感触だったのには驚きました、こちらの関係者の方々に渡せてよかったですよ、これで祖先も浮かべられるでしょう。」

(素性となる部分はやはり隠しますか…、それだけ古いモノならば、もつと素材的に色褪せていてもいいはず…あれは見た限り、新品同様に保存状態が良かった、それだけ古い時代からの物ならそれなりの痕跡はあるはず…なのにも関わらず…知らぬ振りをするということは…)

「そうですか…ならば…こちらも対応の方法を変えましょう、貴方…元々この世界の住人ではありませんね？」

(う！…気を付けていたはずなのに、いきなりバレた！なぜだ？どこでしくじった?)

「やはり…即座に否定はしなかった…そして、答えに詰まった所を見ると、「神人」の線は消えましたね。」

（しまった…カマを掛けられたか？ それとも確信があつての発言か…？ どつちとも判断がつかなかったな…さすがは悪魔、話術はお手の物…ということか…。）

「ふふ…、やはり、悪魔の知能には及ばなかったようです…、さすがに駆け引きで悪魔を出し抜けるとは思つて居なかつたのですが…、話し始めて5分もしない内に何かしらの手がかりをつかまれるとは…ね。」

（とりあえず「神人」ではないと言う、その点については否定はしないでおこう…、肯定も否定もせず…とりあえずデミウルゴスの流れに任せ、そこから打開策を見出していくとしよう。）

「となると…プレイヤーですか？ 何が目的ですか？ こんな場所まで無傷で潜入できるなど…本来ならばありえないコト、あなたには転移の罫で第6階層までの直通コースは開けていなかったはず…なのにここに居るといふ時点でおおよそ、現地住民ではないだろうとは思つて居ましたが…私の予想は外れてなかつたようですね。」

「それに関しては否定もしないが、肯定もしないでおくよ、その答えは君らの実力で私をねじ伏せて聞き出すといい！」

デミウルゴスの眼鏡の奥の宝石の瞳がキラリと光った感じがした。

「正気ですか？ たしかに第6階層まで無傷で来られたというのはなかなかにお見事、と言わせていただきますが…その程度で我らに、しかも貴方お一人で全員を相手に生き抜く自信があるとでも？」

スキル、魔法などの手段無しでの純粋に力勝負であれば「デミウルゴス相手なら」と言う点については負けないう自信はあるが…それでは自分がここまで来た意味がない、そんな事がしたかつた訳ではないのだ、と思ひ自分を奮い立たせる。

「いや、さすがにそれは無いでしょう…敵の本拠地に来て最強の者達を相手に命のやり取りをして、生き残れると思う程、自分を驕つてはいないつもりです…、私が提案するのは…試合形式の…、言わば特殊

なルールを正式に設けた上で、それを遵守することを前提としたP V P…いや、この場合、P V N…と言うべきかな？」

「ほう…ならば、試合形式という事は、そちらからも何名か出場するという事でしようか？」

「そうなるかもしれないし、今はまだ自分の意見をそちらに伝えたいという段階でね、私の言い分を受け入れてくれるようならば、出場選手についてはその時点からこちらで話し合うことになる、まあ最低でも5人は確保できるだろうが…最悪の場合、2人という可能性も起りうるかもしれない…まずはそちら側が受けてくれるかどうか…まずはそこを上の立場の方と相談してみてくれないかな？」

「…なるほど、まずはこちらがその条件を飲むかどうか…その上で、細かいルール決めはそれからのことだと…？ まあ、イイでしょう。」

こちららも私の一存では決めかねる案件です。一度、戻って、御方と相談してみましよう。」

デミウルゴスはくるりと、背を向け、バサリと翼を広げ…、そして瞳だけをこちらに向けるような横顔を見せながら、こちらに問いかける。

「二つ…これは先程のようなお互いの腹の探り合いではなく、純粋な質問です、はぐらかすようなことがあれば…この話自体を私の全力で以って叩き潰し、提案自体を破棄する流れに持つて行くつもりです…なので貴方の本当の言葉が聞いてみたい…」

こちららへと、優しげだが…しかし内には真剣さを滲ませる言葉の力強さを感じさせるデミウルゴスが、そのまま視線のみをこちらに向け、僅かな挙動の変化も見逃さない気迫を感じさせている。

「なんででしょうか？」

「その前に…、このナザリックでは、今や、以前と違い防衛機構が整っています。侵入者の素行、行動の全てを見逃さぬようにミラー・オブ・リモートビューイング〈遠隔視の鏡〉で、私は全員を見張っていました…なので、これは私の胸の内だけに入れてあることですが…、あなたが仲間をその身の内に飲み込むシーンは見させていたでおりますので…、ウソは貴方の為になりません。それだけはお伝えしておきますよ」



そこまで伝えたデミウルゴスが小声でベルにだけ聞こえる程度の声で語り掛ける。

「先ほどのあなたの「老人は保護している」という言葉を信じるとするならば…ですがね。」

その言葉を聞き、「見られていたか…」と冷や汗が浮かぶ、まだギルメン本人か…それとも別人かを疑っている状態だろうか？

それとも本物だと見破った上で、デミウルゴスの独断でこのようなことを？という疑問が浮かぶ。

そう考えるも、アインズさんの話では一部不安なNPCは居るということだが、デミウルゴスは決してそのような暴走をするタイプではない、感情ではなく理性を重んじるタイプ。

一か八かの勝負などする男ではない…ならば、どんな質問をしようと言うのか…？

「聞きましょう…なんのお話ですか？」

「貴方にとって、ウルベルト・アレイン・オールド様とは…？」

それは短い問いでありながら、彼の全てを乗せた言葉だと言うのは理解できた。

もし今後の不安要素となるなら…創造主の敵となる様なら、恐らくココで排除されるだろう。

試合上の手違いという名目で、始末されるかもしれない。

恐らくは、今の質問に特殊な効果を乗せ、真意を看破するための手段でも講じているのかもしれない。

デミウルゴスにとって、それだけ重みのある質問、今後のナザリツクの方針を転換する必要があるかどうかの重要な内容である、聞き逃し、見逃しがあつてはならない部分だからそれは当然だろうな…とベルリバーもそう思つて居た。

(仕方ない…ココで変に誤魔化して、ここに来た全員の命を危険に晒す訳には行かないもんな…どうせ正体を見られているなら…、それをアルベドにも伝えていないということなら…それは彼の中で、裏切

り”のレッテルを張られかねない、ギリギリの部分なのだろうし……こちらも、相応な態度で応えるしかないだろうな……)。

「そうだね……、高い……どこまでも高い目標だったよ……いや、違うな……、ボクの憧れだった、と言った方がいいかな？ 目標と言うと聞こえはいいが、そこまでたどり着ける素質は自分には無かった……だからどこまでも高みを臨んで、見上げていただけさ……、その場に、隣に並べるなど……そんな風に思い上がれるほど、安っぽい存在じゃなかったからね……ウルベルト・アレイン・オードルという人物は……孤高を好み、どこまでも己の理想に殉じていた人だった……いや、きつと今でもそうだろう……あの人の心根はずつと変わらないはずさ。」

ずつとこちらに向けていた瞳を前へと向け、視線を外したデミウルゴス。

「そちらの真意は受け止めました……どうやら今の言葉にウソ、偽りはなさそうですね、ならばこちらも、先程伝えた言葉を実行に移すします……、御方にその旨、伝えるとしましょう。」

そう言つてバサリと翼をはためかせ、上へ上へと飛び上がって行った。



「なるほど……あの者は、そのようなことを提案して来たか……面白そうだ……どこまでこちらの守護者達に食らいついて来られるか……見ものだ……アルベドはどう思う？」

「は……恐れながら、あのような下等生物風情……私たちと渡り合えると考えているだけでも、思い上がりも甚だしいかと……、ニンゲンなど、一刀の下に切り伏せて終わりに出来るかと思われま……手加減をして負かす方が……よほど力加減も難しいかと愚考いたしますが？」

「ふむ……そうなるアルベドとしては受ける価値もない……そう思つて居るという事だな？」

「はい…至高なるアインズ様の意見に異を唱えるつもりなどは御座いませんが…あまりにも下らない提案で、受ける価値もないかと…。」

「そうか…コキユートスはどうか？」

「御方二私ノ意見ヲ申シ上ゲルナド、不敬カトハ思イマスガ…、私トシテハ、チカラノ差ヲ見セツケルノモ時ニハ必要ナノデハナイカト…。」  
「なるほど、それも一理あるか…アウラとマールレはどうか？」

「あんな弱つちそうなのと戦うなんて…それ以前に気迫を叩きつけただけで勝負がついちやいそうで、本当に戦いになるの？…って部分が心配ですかねえ〜？」

「あ…はい、ボクも…お姉ちゃんと、その…同じ…です。ボクの魔法を…広範囲に一度出しただけで…終わっちゃいそうな気がします。」

「シャルティアはどうだ？…シャルティア？　おい！シャルティア！？」

どこか、心ここにあらずに言った雰囲気シャルティアであったが、今まで向けていた意識から視線をアインズの方へと戻し、慌てる様に、問い掛けに対しての反応を示した。

「あ…ハイ！　失礼いたしんしたアインズ様…少々考え事をしておりんした。お見苦しい所をお見せして申し訳ありません。」

「珍しいな…何か気になるところでもあったか？」

「いえ…、あそこにいるチームの一人、ハーフエルフが着てる装備、どうにも気になりんす…特にこれといって脅威には感じていんせんが…目が離せないような…不思議な感覚に襲われていんす…油断はならないかと…それ以外は特に…何も感じんせん…、やり合ったとして…あつさり決着が着いてしまふでありんしょうねえ」

「そうか…私も、あの装備には何か引つかかるものを感じてはいるのだが…それが何かは思い出せぬ…シャルティアもそう思っ居るとはな…。」

しばらくアインズは考えた後、それぞれの認識をまとめ、思案の中

で多数決を取っていく。

(シャルティアは戦っても戦わなくてもどっちでもよさそうだな。装備に興味があるという事は、話をさせる機会を作るという点で、その申し出は受けてもいいかもしれない。

コキュートスは武人として、戦いを挑まれば、逃げるわけには行かないだろう、ということ。「○」…だな

アウラとマールは、戦う価値もない…という認識っぽい、となるとどちらかと言えば否定派…か。

デミウルゴスは…提案を持ってきた時点で、そこまで否定的でもなさそうだ…なら「△」か…

それでアルベドは無論「×」となる…。

そこまで考え、アインズは×と考えてる意見が2票…と数える。

△が1票

受けてもいいしどっちでもいいが1票

受けるべきが1票

ここまで考えてみて、思う。

「賛成」が1

どちらかと言えば…「賛成でもいい」が1

△は、どちらでもないとして、

「反対」が2…

(…ということとは真つ二つに割れてしまったな。)

「意見が真つ二つに割れてしまったようだが… 2:2という状況に…、どちらにも偏らない意見が1か…」

「アインズ様…そうなりますと…ここまで来れば、アインズ様の一存でよろしいかと…」

恭しくデミウルゴスがそう告げてきた。

「そうか? ……ここで私が「是」と言えば、「否定派」の意見を潰したことになるろう…その逆もまた然りだ…それでお前たちは構わないのか?」

「とんでもない！ アインズ様のご決定に異を挟む者など、このナザリックにはおりません！ アインズ様のご決定こそが、ワタクシ共の総意…なんなりとご決断くださいませ！」

「そ…そうでありんす!! わらわも決してアインズ様の決定に異存などありません!!」

「私達も同じです！ アインズ様が一言、「戦ってこい」と発してくださいればその意向に沿うのが守護者としての私達の存在意義です！」

「は…はい…ボクも…そう、思います！」

「マサニ…アインズ様ハ…タダ一言、勝ツテコイ！ ソウ仰ツテイタダクダケデ、我々ニハ充分ナ理由トナリマス！」

「そ…そうか…、ならば…皆、着いてこい…詳しい話は、下で待っている発案者の下に行かんと細かい話し合いなど出来んからな。」

そう言いながら、骨の玉座からスツクと立ち上がるとイミテーションのスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを振るい、漆黒のローブをはためかせ、マス・フライ〈集団飛行〉を唱えると、6人の階層守護者と共に、下に降り立って行った。



「ヘツケランは大丈夫そうか？」

ベルが話しかける。

「まだ駄目そう…傷は治ってるけど、まだ意識が戻らない。」

どうやら、ここに運び込むまでにずいぶんと血を流し過ぎたようだ、失血による気絶状態の為、すぐに戦闘に参加できる状態で無いのは、こうして見ているだけでも明らかだ。

「そうか…、なら、どうする？ どうしてもと言うのなら、3人はヘツケランのそばに居て、私達とは無関係を貫いてくれても構わないぞ？」

「さっきのやりとり、一応、聞き耳を立ててたけど…アンタらだけで戦うつもり？」

さすがはレンジャーのイミーナだ、後ろに居てもデミウルゴスとの会話はしっかり聞いていたらしい。

「まあ…ボクは単純に…難度を基準にするなら、これから戦う誰とも同じステージに立っているからね、不安なのはフレイラだ…彼女は難度で言えば、150ピツタリ、やつらのちょうど半分という事になる。それがネツクかな…？」

フレイラが沈痛な面持ちで謝罪の言葉を言い始めた。

「申し訳ございませぬ、ベル様…私の力量が足りないせいで、主である御身に無用の心労を掛けさせることになろうとは…、不甲斐ない我が身を恥じ入るばかりでございます。」

今にも土下座をしようとし始めたフレイラの肩に手を置くことで辛うじて押し留め、膝を折ることで視線を彼女に近づけて語り掛ける。

「いいかい？フレイ…今の言葉は決してキミを責めている言葉じゃない…、単純に守護者の前に出して無事で済むだろうかという親心のようなものだ…それに、お前をそのように生み出し育てたのはボクだ…そこに不満などあるはずないだろう？」

そう言って、彼女の中の、自身を責め苛む想いを払拭してから再度、言葉をかける。

「それにだ…以前にも言ったと思うが、ボクはお前に「純粋な戦闘力」や、ボクを護る為の「盾」として身を呈することを求めたわけじゃない…だから無茶だけはしないと約束してくれ。」

わずかに、瞳に潤んだものを浮かべながら、頭を少し下げたフレイラは感謝の言葉を告げる。

「どこまでも至らぬ我が身に温情溢れるそのようなお言葉、真に痛み入りまして御座います。」

感涙の雫であろうか、ホロリと目頭から滲み出たそれは鼻筋を通

り、ポトリと地に染みを作った。

「それなら、私の浮遊する盾の出番もあるんじゃない？　少しは護りの役に立てるかもよ？」

歩み出てきたのはイミーナだ。　どうやらすっかりその鎧はお気に入りに入りらしい。

「それはいいが…その盾も、最後の戦いまで無事とは思えないよ？　守護者の一刀で切り伏せられる可能性もあるし…、まあ数日もすれば元に戻るだろうが…護りの役がイミーナ頼みと知られば真っ先に標的にされる可能性もある…キミらフォーサイトの一人一人が「難度100」に辛うじて到達したとは言え…その3倍の相手だ。　危険だよ？」

一応、危険に対しての認識が低く見積もりすぎていた場合の為に、再度「危ない」という言葉を伝えるが

「ここまで来て危険じゃない場所なんてないんでしょ？　うちのリーダーをボロボロにしてくれたお礼は少しでもお返ししておかないかね？」

と、心に結論はすでに出しているイミーナだが、少し肩に力が入りすぎ、幾分、気負い過ぎている気もする。

（少し、緊張の度合いを緩めてやるか…あまり張り詰めすぎてもいい事はないだろうしな…）

「違うだろ？　「うちのリーダー」じゃなくて、「私のヘツケラン」の言い間違いじゃないのか？」

仮面越しだが、確かにわかるその軽口は、イミーナにダイレクトに届いた。

「な…！　違うったら！　そんなんじゃないってば！　変な勘違いしないでよね！」

（よし、これで少しは気負ってる度合いも軽くなっただろう。）

と安心していると、小柄な少女がベルに向かって歩み出る。　アルシエだ。

「ベルさん…私も、チームメイトとしてリーダーの雪辱を晴らす…い

いでしょ?」

一瞬、思考が停止する。

できれば彼女には安全な位置に居てもらいたい、妹たちの為にも彼女は生き残るべきだと思つて居たからだ。

「いや…アルシエちゃんは妹さんが帰りを待つているんだろ? わざわざ危険な目に遭いに行かなくても…。」

そう言つて止めようとするも、彼女は軽く、自分の腕を持ち上げた。そこには自分が「お守り用」として預けた腕輪が装備されている。

「それを使うつもりかい? 言つておくけど「お守り」以上の破格の効果や防御力、攻撃の幅の広さなんて機能はないからね?」

「それでもいい…私はまだ、あの時ベルさんが教えてくれた合言葉、まだ使つてないから…ここで使つておきたい」

(…まあ、カテゴリとしては全身鎧だけど、作りとしては着ぐるみだし…下に50LV金属の金属糸を編んで作った衣服の上に着込む感じになるかもしれないしな…そうなれば、元々の守備力より数値的にはマシになるだろうけど…それでもコキュートスの武器だとバツサリ切られちゃいそうだよな…。)

「まあ、わかつたよ…そこまで言うなら止めないけど…妹さん2人が待つてることをくれぐれも忘れないでくれよ?」

「うん、わかつた!」

「あ、そうだ、ロバーデイクさんはそこでヘッケランが目を覚ますまで付き添つててください、後ろの壁沿いにまで下がれば、攻撃対象にはならないでしょう…。」

そう告げて、後ろに下がってもらおうとする。

万が一にも、こちらの戦いに巻き込まれ、範囲魔法で命を落とされても困るのだ。

「では、試合形式の戦いが始まるまでは見守らせてください、開始の合図が終わったら下がるとしましょう。」

自分だけ安全圏でのうのうとしている気分になれないのだろう。

それが最大限の譲歩だというのは、目の力強さで判断できたので、



それ以上は譲らないだろうな…と理解したため、「それでいいよ」と言うに留めた。

(これで、ボク、フレイラ、アルシエ、イミーナの4人か…、あとは空白の一人分…とサブメンバー支援回復オンリーの役目としてあと一人…っていう感じでルールの際、提案しておこうか…?)

「あ、そうだ、約束のアイツ、今のうちに吐き出しておかないとな…」  
そう言うや否や、腹の位置に突如、ぽっかりと大きな口が開いたかと思うと、ボトリと…ナザリックの者達に背を向けた状態で、ある人物を吐き出す。

そいつは、先程の話し合いの際、自分で捕えていると明言した、「武技大辞典」の執筆者、奴隷売買の売人をしていた男、その人である。

今まで、ずっと腹の中で「捕獲」状態だったこともあり、すっかり深い深い、熟睡モードになっており、吐き出された現在も目を覚ます様子はない。

(さて、この分なら向こうさんに手渡す場面でも目を覚ますことはないだろう…。)



「ふむ…どうやら間違いはないようだな。」

こんこんと眠り続けているその男をナインズ・オウン・ゴールに引き渡すと、〈記憶操作コントロール・アムネジア〉によって脳内の記憶を探ると言う手段で本人かどうかの確認をしていた。

その後、身柄の拘束の方はマールに任せるようだ。

(あの子なら、ドルイドの低位階魔法で拘束することくらいたやすいだろうから適任だろうな…)

「アルベドよ…そいつの目が覚めない今のうちに、王国から拉致してきた者らを監禁してる部屋に入れておけ…あそこなら一般人が多数派だから寄ってたかってなぶられることはあるまい…生き残りはニグレド達が助けた赤子、少年少女ばかりだからな。」

「はい…委細、承知致しました、ナインズ様。」

深々と頭を下げたアルベドが、拘束されたままの男をひよいと肩に担ぎ、闘技場を後にする。

「さて…ベルとやら…これで、先程言ったように君には、返すべき「恩義」を感じている形になった…ならば『恩』は返さねばならん、なんなりと望みを言うがよい。」

(最初からボクからの要望は一つだけですよ、モモンガさん…)

「少し、先程ここにいるチームの方々とも話したのですが…、試合形式で、お互い戦力を出し合い、互いに決めたルールに則って戦う、そして勝敗は互いのHP残量で判断して、先に1割を切った状態になった時、その者が敗北したということ。命のやり取りは無し…という条件ではどうでしょう?」

「ほお…面白い提案だが…本当にそれでいいのか? 私は常に相手の意思を尊重し、何度も確認を取ることにはしない主義だ。それは…それが相手の本心だと心から信じたいからだ。」「恩義」の返礼という形で無事に地上に帰りたいとは思わないのか?」

こちらの意図を読み取ろうとでもしているかのように眼窩の赤い揺らめきが色濃くなる。

それでも、ベルリバーの中の意思、そしてフォーサイトの面々の覚悟は変わらなかった。

「お申し出、真にありがたいと思います、そう言っていただけなのは確かに魅力的な提案ですが、生憎、先程、そちらのデミウルゴス殿と名乗る方と約束事をしておりましてね…、しかも持ちかけたのはこちらの方でして…、悪魔との約束というものは可能な限り解消しておかねば後が怖いですからね、生きて帰って即、行方不明…なんて目には遭いたくないもので…こちらの価値を認めさせることが出来れば、「ただの盗人」から「それなりのワーカー」という評価に格が上がる可能性を引き出せるのでは…と思っ居るので…その機会を頂きたいのです。」

「ふむ…そうか…そちらがそう言うのであれば…、もはや何も言うま

い：ならば、その「試合」という形式で進められるPVP：それを行う上での細かいルールなどを決めようではないか：そちらから『こうしてもらいたい』というルールがあれば、提示してもらいたい、それをどの程度こちらが受け入れるかどうかは、こちらに任せてもらえると嬉しいのだが？」

「わかりました。ならばこちらからの提案を、そちらの皆様で検討していただき、修正案をこちらに提示：それを見て、納得できるのならば、そのまま試合の流れ：、もしまだ融通してもらいたい要綱が残されている場合、細かい決め事をお互いに誤解のないよう話し合う：という形でどうでしょうか？」

「ふむ、そうだな：お互いにルールを設定する時点で、理解に差があり、認識に誤差があつては後々弊害となろう：その言い分を受け入れようと思うが：デミウルゴスの方はどうだ？ なにか異論はあるか？」

「いいえ、何も御座いません：例え向こうの提示したルールがどのようなものであれ、我ら階層守護者が事に当たるのであれば、むざむざ敗北するような醜態をさらすことなどは無いかと：」

「なるほど：、ということだ：後はデミウルゴスと話し合つて決めると良い：最終的にどうなったかというルールについては最後に私に見せてくれれば、私が公正な審判役となろう。」

「ア：：いえ、ナインズ様を判定役などと：了承致し兼ねます！ 御身は貴賓席で勝敗の流れを見ていただくことが何より肝要かと存じますか：？」

慌てて、主の意向を思いとどまらせようと進言する悪魔の言葉に鷹揚に頷いた支配者は、それでも：と言葉を返す。

「いや：デミウルゴスよ：、その気持ちは確かに嬉しいが、このような催し事はナザリックに於いてそうそう起こりうる展開では無いことはお前も解つてる事だろう？ ならば、最前列の席でかぶりつきの観戦を楽しみたい：その気持ちもわかつて欲しいという物だが：」

そこまで言葉を紡いだ後、僅かの間、何かを考える仕草をして、支配者は次の言葉をデミウルゴス始め、守護者各位に言い聞かせるように告げていく。

「なに、心配は要らないとも、試合中、審判に攻撃するような不埒者は、それだけで一発退場となろう…それだけの権限はあると思うが…どうだ？」

「マサニ…勝敗ヲ決スル勝負ノ場ニオイテ、見届人ニ危害ヲ及ボソウトスル者ナド、ソノ場ニ相応シク無イ者ト思ワレマス。」

「うくん、試合とか勝負の取り決めっていうのにはさっぱりなんだけど、コキユートスがそう言うんならそうなんだろうね、なら私は異論はないよ。」

「は…はい、ボクも…お姉ちゃんに賛成です！」

「まあ、まだどんな勝負方法になるかもわからないのだ、我々に不利なことにはならぬと思うが…向こうも勝負を申し出る以上、卑怯な手には出まい…もしそうであるなら「恩」の件は返上する可能性もあること、心しておいてもらいたいものだな…。」

相手に釘を刺すような視線を向け、ベルを見据える墳墓の支配者、そしてその視線を向けられたベル自身もその「圧」を受け止めて了承の言葉を返していく。

「ええ、もちろんです、こちらが試合を申し出る以上、一方的に負けるのは本意ではないし、こちら側の皆さまを蹂躪できるなどと思いがっているつもりもありませんからね…精々、善戦できるようにしたいものです…それでは、こちら側のルールを私の『メッセージボード』に記載して行きますので…修正箇所などあれば、手を加えてくれて構いませんよ？ その時はこちらにも変更した部分は教えてもらえたら幸いです。」

「ふむ…その言い分、最もだな…こちらは問題ない…そうだなデミウルゴス。」

「はい…おっしゃる通りかと…」

そして、お互いの実力を最大限に発揮できるような流れで進めたい両者の間に於ける勝敗の判断、反則の設定など…多岐に渡り、話し合いを設けることになった。

## 第54話 ルールの取り決め、初戦の相手は…

その話し合いは、長時間に渡り、繰り広げられた。

まずお互いの身体上の構造の違いを認める事から始まった。

(まあ、そこらへんはお互いに「異形種」だし？ 自分は「擬態」してただけなんだから、そこまで理解に苦しむことはないけどな。)

そう思いながら、目の前の悪魔と会話をしながらルールの作成をする。

※大前提として、身体的構造からの問題、体の内部、若しくは表面から生えている、生えさせている、生えることになる如何なる部位であつても、その役割、見た目、内部構造、異常性に関わらず、「己の身体」又は「その能力」を素として発生させているならば、それを反則とは認めない。

※人間として普通に備わっている部位、そして数に於いて、対戦相手がそれらと同数もしくはそれ以上であろうと、戦力としての優位性、又は不利益を被る場合であつても対戦自体に支障は無いことを認めること。

まず最初に決められたルールの大前提、つまりはこれを理解しないと先に進まないというワケだが、それはこちらも(擬態を解除すれば)同様なので、そこで理解に苦しむことは無かった。

他にも、〃人数にも依るが、釣り合うなら「5VS5」方式の対戦でも、勝ち抜き戦でもどちらでも構わず、対戦相手が多数を相手にする場合を了承した場合のみ、「多数対1」という形で戦うことも出来るが、その際は多数側が、全員、戦闘不能となった場合、敗北とする。”  
という取り決めも作られた。

(この「戦闘不能」って言葉が妙に引つかかるな…一応、布石は打っておくか…)

※ 「戦闘不能」とは全HPの一割を切った状態であり、HPをゼロにしてしまった場合、攻撃側の反則1が加算され「反則」は、2つ重なる則敗北とする。

(しつこいようだけど、これも一応、試合として必要最低限という認識は持ってもらわないとな…、かつてはDQNギルドとして扱われてたけど、この世界に来てまでその路線で認識されていたくはないから…意識改革は必要だろう。)

ついでに召喚する場合においても、そのルールを決めることにした。

召喚をする者についても「召喚、もしくは招来などの効果により呼び出された、又は発生した事象は、その効果が切れるまでは次の「召喚、招来」を行うことは厳禁とする、破った場合、反則行為と見做す。

” とも記載される。

更には…

ペア(2名1チーム)で戦う場合、相手側も同様にペア(2名1チーム)として戦うことを許されることとする。

支援魔法、回復魔法などは、自陣営、控えからの働きかけを強制してはならない。

(ペアでの戦闘、多数で戦うことを了承されている場合、同チームメイ卜からの魔法は別とする。)

要請も無く、控えのメンバーが助力の手助けをした場合など、「2回の注意」で、警告1回と見做す。

※ 「注意」の判断の基準に関しては審判役、ルールを司る者の判断に委ねるコトとする。

警告は2回重なると、警告された者が「反則1」となる。

もちろん、審判役に「反則行為」を行つたと思われても即、敗北となるルール。

2対2の試合のみ、選手同士（味方限定）の立ち位置交換などの手段を用いても敗北にならない。

（戦場内での短距離転移、移動なら何度でも可能、転移、位置交換などの手段で控えの選手との交代はその場で敗北とする）

1対1の試合中、控えの味方が対象の個人に対し、立ち位置の交換手段を発生させ、不当に敗北させようとした場合、行きすぎた行為を行つた者を敗北として扱い、対戦者側を勝者とするが、連戦とするか次の選手と変わるか決めることが出来る。

（注意：このケースで交代した場合、次の試合までメンバーの交代は不可とする。）

というルールも追記されていたが、そこは最悪のケースを想定し、こちらの意見も認めてもらい、更に追記をしてもらうことになった。

（わざわざナザリックの者がそんな手段を取るとは思えないけど…念には念を…だよな）

※↓上の方法で転移、移動などの手段を対戦相手に対して（控え、出場選手を問わず）それを行い、事故、故意を問わず敗北に追い込んだ場合、その手段を行使した者を失格処分とし、その場で負け星が1つ付く。

この手段の転移等で移動させられた者は試合に復帰できるか、控えに戻るかを選ぶことが出来る。

（第4位階の〈他者瞬移〉アザームムーブなんて使われたら、〈転移遅延〉デイレイ・テレポーションジョンすら使えないメンバーじゃ、抵抗の手段もないからな…）

（あ、そうそう、これも追記していかないとな…）

大事なことを思いつき、話し合いの上で、もう一つ、追記事項を書き込んでいく。

※ 攻撃や防御の手段による吹き飛ばし、ノックバック等による効果は、この限りではない。



(これでよし…お互いに不利な条件ばかり相手に押し付けてたら、試合にはならないだろうからな…と言つても、守護者と戦おうって時点で実力に開きがありすぎるんだよな…)

などと、自嘲気味の笑みをわずかに表情に浮かべながらのベルだが、それを不思議そうに見て来るデミウルゴスも、その心境の全ては読み取れないようだ。特にそこに触れてくることは無かった。

(さて…お次は、装備についての取り決めか…)

・身に着ける装備は、試合の前に準備、装備をした状態で入場し、基本装備変更などはしないこと。

・装備している武器の性能上、特殊な効果、外装の変化、変化に伴う攻撃力、攻撃の際に起きる効果の変質などは考慮に入らず、それが純粋にその武器、防具に由来する能力であれば反則とはならない。

・試合中、それぞれの武器、防具が壊れるなどした場合、アイテムボックスのインベントリ内に用意しているショートカットで、瞬間換装が可能な武器であれば交換は可能、しかし現地民のようにその能力がない場合、どのような手段であっても武器の交換は認める事とする。

・課金アイテムの所有がある場合、1試合につき、3つまでなら所持し試合中に使用可能。

しかし、武器内のデータクリスタル、マジックアイテムの数はその(3つという制限)中に含めないこととする。

・種族上の適性、能力などで、カットできない耐性、弱点などをカバーすることは自由とする。

・弱点のカバーは「完全耐性」未満の効果を装備するものとし、その範囲内であればどのような防御上昇、阻害耐性、弱体化耐性など、いかなる種類でも身に着けてよい。

・それぞれ、個々の対戦後、回復の為の時間の浪費を極力短縮させる為、互いの陣営に回復役の信仰系魔法詠唱者を控えさせ、勝敗の決

した際、治療に当てさせること。

・1対多数の戦闘で、片方のチームに「注意、警告」の数が加算されていても、その数はその戦闘に於いての成績とし、新たな戦闘の際にはそれらを持ち越さないこととする。

というのも組み込むことを提案し、またそれも受け入れてもらえた…これも弱者として見られている賜物（…と言っているのだろうか？とは思いますが…）だろう。



「さて、こんなものでしょうか？ デミウルゴス殿もこれでよろしいでしょうか？」

「ええ、こちらは何の問題ありませんよ、多分こちらの武器が壊されることなど起きることは無いでしょうが…そちらの武具を私たちが破壊した際の救済措置は必要ですからね。」

「まあ…そうでしょうね、こちらの世界基準の武器はあまりにも…な認識はそちら側からするとおありでしょうからね…。」

ベルがそう言つて、デミウルゴスの言葉をフォローしていると、目の前の悪魔もそれは同意とばかりに頷いている。

「…でも、それなりには抗って見せることが出来れば…羽虫からホタルになつたくらいの認識の向上になつてくれればいいな…とは思つてますが…、ゴキブリからゲンゴロウ程度にしか認識が改まらなかつたら、それはそれで切ないことになるでしょうね。」

（夜通し、アインズさんと語り明かした日、NPC達は人間を、かなり低く見ているという…個体ごとに差はあるが、それでも「下等生物」「下劣な存在」「虫の方がまだ世界の役に立っている」という認識の者も居るって話だからな、こうして打ち解ける必要もあるだろう。）

ベルがそう思っ居ると、目の前のデミウルゴスは口調を柔らかくするような声音で語りだす。

「私は、人間をそこまで低くは見ていませんよ？ 一部には人間の個体を見分けられずに「虫」の名前で呼ぶ者もいるようですが…まあそれは一部の者で…私は人間は、大変有用だと思っ居ますよ？」

（言葉が理解できる程度には知能があり、認知力もある…これからのような目に遭うのかを想像させながら追い込んでいくのは大変見ごたえのある余興ですからね…、更にその上で心が壊れていく過程をつぶさに観察できるというのも…ある意味、気分転換にもなる私のリフレッシュとも言えるでしょうかね…。）

などと考えているとは思っ居ないベルは、デミウルゴスの評価を少しだけ上げていた。

「それはなによりですね、それでは、お互いにそのルールに則っいい勝負が出来れば嬉しいですよ。」

「ふむ…あなたは私の友に少し気質が似ているのでしょうか…？ そんな風には見え…あ、いえ、こちらの事です、聞かなかったことにしてください。」

そうしてベルは、自分のメッセージボードを持ち、自陣営のメンバーにルールの説明を始める。

対してデミウルゴスは、その内容を頭に全て入れるくらいはたやすいことなので、そのままを記述したものをその場で作成する。

「さて、こういうルールに従う…という形を取った…、「人間に対するハンデ」です。 その上で、どこまで向こうが我々に抗い続けることが出来るか…醜く這いつくばり、もがき、足掻く様を楽しみにしてこの余興を楽しみましょう！」

「ああ、そういうことだったのね、デミウルゴスも色々楽しめそうなこと考え出すよね…そういうところ感心するよ、ホント」

と、アウラが感心するように声を上げる。

「あ…あの…それで、デミウルゴスさん？ 結局、ボク達は、何人くらいで出て行けばいいんでしょうか？」

と、遠慮がちなマール。

「まあ、それは向こうのメンバー構成がハッキリしてからだろうね、こつちも敢えて、その数に合わせてあげるとしよう…その方がいくらかでも楽しめるかもしれないからね。」



「さて、とりあえずはうまい具合に向こうもこのルールをハンデとして認めてくれた感じだから、率先してアッチがルールを破って戦うことは無いだろう、勝敗が決した際の回復役もお願いはしているんだけど…、誰が…っていうのを指定したら、なんでそこまで内情を知ってるんだ？なんて正体を勘繰られかねないからね…さすがにそれは控えておいたよ。」

自陣營に戻り、一通りの説明と共に、メッセージボードを他のメンバーにも見せている中、ベルはフレイラと雑談タイムだ。

「それがよろしいかと…、結果として誰が来るようなことになっても…御方の指示で役割を与えられるようであれば…それを無視して本来の職務を投げ出すような行いはしてこないでしょう。」

さすがに、他の目があるので自らの主に跪いて応えるわけにもいかないフレイラは、心苦しく感じつつも直立のまま会話を続けていた。「さて…とりあえず、形としては5対5という風にしておきたいんだけど、先鋒は自分が出るようにすると、みんなには順番を回さないようにするつもりだけど…最後の5番手の戦いでは…誰が来るかにも寄るから、相手によっては順番が前後するかもだけど、1対複数の形で挑むつもりだ…多分相手も、自分に絶対の自信を持つてははずだから、余裕で受け入れてくれると思うけど…まあ、そこは今考えてもしょうがない。」

と、そこで言葉を区切ったベルが、みんなを見渡す。

先鋒 ベル  
次鋒 フレイラ  
中堅 イミーナ  
副将 アルシエ

そこまで考えて

(あと1人、足りないよな…せめて大将を決めておきたかったけど…)  
「あ…そうだ、フレイ、一つ良いこと思いついたんだけど、今日はまだ、あの黒装束の回数制限の方の能力、使ってなかったよな？」

「はい…ベルさ…ん…の許可がなかったの、まだ使っておりません。」

「よし、ならこの場で本日最初の1回目の能力を発動させて、上限の4体召喚しておいてくれ、その内の3体はフレイラの影に潜ませ、対戦時まで外には出さないように…出す場合は「招来」扱いで呼び出す形にしておいてくれ。」

「は！ 承知いたしました、ではすぐに…」

「うん、頼んだ！」

頼まれたフレイラは即座に効果を発動させ、上限である4体のシェイドスピリットを生み出し、その内の3体は、誰にも見られず、自らの影に潜らせ、待機を命じておく。

ベルの目の前には1体のシェイドスピリット。

念のため、イミーナ、アルシエ、フレイラの壁で、ナザリック陣営には(肉眼という手段では)見えないようにしてもらおう。

(情報系魔法とかで見られてたら、すぐバレるだろうけど…むこうもルールの把握とか、説明で時間はかかるだろうし、その内に命令を与えておくとするか)

ベルは、目の前に居るシェイドスピリットに命令を下そうとした

が、途中でやめる…

何故なら、それはフレイラが生み出したという形であって、直接の繋がりがあるのはフレイラの方だからだ。

「すまないがフレイ、こいつの姿を私の姿に変身させた後、擬態を解除するように命令を下してくれ…こいつを先鋒として、次鋒が自分、中堅がフレイラ…キミということにしよう。」

「はい、ご命令、承りました！」

短くそれだけをフレイラが言葉にすると同時に、目の前のシエイドスピリットの姿が影の体から実態を伴った肉体へと変化し…それからその肉体も解除させると、異形の姿へと変貌していった。

「よし！ これでなんとか5人そろったな！」

「かなり力技…」

「戦う前からバレルなんてことにならないといいわね。」

「冷静なツツコミありがとう、まだ試合前だからこれくらいの細工は見逃してくれるだろう…弱者の特権って言うヤツかな、向こうはこっちが足掻いてもがく所を楽しみにしてるんだし、これくらいは『微笑ましい』ものとしてみてくれるさ…バレてたとしてもね。」

（まあ、この状態の先鋒が急に現れたら、どんな反応するかはちよつと楽しみに感じてるんだけどね）

「あ、そうだ、フレイ…これを使うとイイ」

そう言って、彼女に手渡したのは…〈伝言〉の魔法が込められているスクロール、試合中でもバれないようにこれで会話する必要がある時は会話内容のフォローをこつちが出して、それをフレイラに中継してもらおうことであまく誘導できれば…という認識で渡している。

（こつちの強みは体のあちこちに口が出せるところだからな、向こうから見えにくい肩の後ろ側に口を一つ展開させて、そこから言葉を出すことで、顔の方の口を動かさずに、フレイに指示を出すことが出来る…うまく行けば注意をそつちに向けることもできるし、先に相手のNPCの戦い方を参考にできる、モモンガさん風に言うと『戦う前に勝負はついている』っていう状況を作るために必要な事だからな。）

「先鋒として戦ってもらおうコイツには精々、踊ってもらおうことにしよう。」



「…ずいぶんと驚いてましたね…」

アルシエがポツリとこぼした言葉にイミーナが返す。

「まあ、こんなおつかないバケモンみたいな見た目じゃ、初見じゃ普通の反応じゃないかな？」

（多分、違う方向で驚いていたんだと思うよ、アバターそのまんまの見た目…っていうか自分を模写させたんだから、そのまんまで当たり前なんだけどね。）

ベルだけが事の次第を面白げに第三者的な視点で冷静に見る事が出来た。

一番冷静だったのは案の定、デミウルゴスだった。

（あの姿をモニター越しとは言え、すでにみられているわけだからな…もう少し驚いて欲しい部分はあったけど、仕方ないね、そこは仕方ないと思っておこう。）

…などと、離れた距離から会話をしている中、ナザリック陣営は先ほどとは違った会話内容が繰り広げられていた。

「まさか…ニンゲン共に味方をする異形種を従えていたとは…、誤算でありんすねえ…」

余裕の表情を少しは引き締めている感じだが、それでも焦りまでには行かないようで、まだどこか余裕の態度を崩していない。

「そうね…雰囲気からして、至高の御方の内のお一人とは別人であろうことはすぐに分かった事だけ…正直、不快ね…あのお方にそつく

りの見た目をしているだけで…不敬と言わざるを得ないわ。」

彼女にしては珍しく表情に嫌悪のような歪んだ顔を隠そうともしない辺り、あの見た目だけで、相当に腹に据えかねる部分があるようだ。

「まあ、あらゆる種族を選べるというのがユグドラシルのプレイヤーとしては魅力的だったからな、同じアバターを使ってる者が一人も居ないというのは樂觀視しすぎだろう…どこかで自分と似たアバターにたどり着く職業構成というのは…100%起こり得ないとは言いきれないのだからな。」

骨の玉座に背を預けたナインズが、そう言っただけのチームをフォーローすると「ソウイウモノデシタカ…」と墳墓の絶対支配者がそういうのであれば…と、皆がうなずいていた。

「それはそうと…むこうは5人で1チームという構成のようだが…どうする？　こちら5人でメンバーを作った方がいいと思うか？　アルベド、デミウルゴス…お前たちはどう思う？」

「は、恐れながら申し上げます、向こうは5名で…という事であればこちらもそれと回数とする方がよろしいかと…向こうよりこちらの数が優位ですと、簡単に勝負がついて面白い展開を望めず、決着してしまいかねませんので…。」

「んん…まあ、そうだな、となると…こちら5人編成という事になるうが…、まずは第1〜第3階層守護者のシャルティアに先鋒として出てもらうとしよう…そして、こちらは勝ち抜き形式や、1対1での交代方式と言った固定させた戦い方ではなく、あくまでこれは「恩を返す」のが目的の言わば交流戦のようなもの…、どのようになつたら交代となるか、どうなれば決着とするのか…そういった内容は強者であるこちら側が決めるのではなく、挑んできたあっち側に決めてもらうとしよう、そうでなければあまりにも一方的な展開になりそうだからな…。　そうすれば、皆もそれぞれ楽しめる機会も訪れようというも



の、まあ…相手の戦意がシャルティア相手にポツキリと折れてしまわなければ…の話だな。」

と、やや軽く明るさを感じさせる口調で守護者達に意見を聞かせるナインズ、これからのベルリバーとの一芝居が楽しみというのもあるが、家族の様な存在である守護者達と、友との交流戦、内心で楽しみにしていたイベントという事もあった為の上機嫌である。

「おお…さすがは至高なる御身、我々の為にそこまで考えて下さっておられるとは…このデミウルゴス、感謝の極みでございます。」

「しかしそれでは、こちらの方で戦意を失わせないように加減する必要があるのでありんしょうかえ？　あまり得意ではありんせんが、これもアイ…いえ、愛するナインズ様の為、このシャルティア、どのような難関も乗り越えて見せるでありんす。とくと見ていて欲しいでありんす。」

「ちよつと、シャルティア？　言うに事欠いて、この場で抜け駆けの様な物言い、ナインズ様がお許しになられても、統括たるこの私が…」  
この展開は、しばらく長くなりそうだな。

一瞬でそう感じたナインズは、早々にその流れを断ち切るため、やや強引に話の方向性を切り替えようと、わざと大きめの声を出して周囲に聞かせ、混沌とし始めた場を平坦な空気に戻していく。

「う、うむ！　とりあえずはまあ…そんなところだろう！、そして2番手は、第4階層はアイツだから…第5階層のコキュートス、お前に任命するでしょう…あまり武人として戦う機会もないお前だ。存分に戦ってみると良い。」

「アリガタキ幸セ、アイ…イエ、ナインズ様、コノコキュートス…全霊ヲ以ツテ勝利ヲ御身ニ捧ゲル事ヲ誓イマス。」

「うむ…張り切るのはいいが、あまり気負わないようにな…変に肩に力が入れば、本来の力を出し切れぬまま…という可能性もある、まあコキュートスに限ってそのようなことはあるまいが…」

「私ゴトキニ過分ナオ言葉、痛ミ入りマス、ナインズ様。」

「さて…次は、アウラとマールレだな、二人は…」

ナインズがそこから更に言葉を続けようとする、意外な人物から言葉を途中で遮られた。

「お…お待ち下さい！ ナ…ナインズ様！ ……今回の戦いでは…」

と、そこまでの言葉を発したのはマールレだ。

ナインズにも一瞬、呆けたような時間が生まれる。

その間に、また別の者が、その言葉を再び遮ることになる。

「…マールレ？ あなた、解っているの？ まだ至高の御身であらせら

れる御方が発言なさっているのよ？最後までその珠玉のようなお言葉の全てを聞いてから発言すべきだとは思わないの？」

そう告げてきたのは言わずと知れたアルベドだ。

彼女の周囲からは黒いオーラが滲み出ているのが幻視される程の圧力のある視線が、ただ一点、マールレに注がれている。

「アルベド？ そのくらいにしてやったらどうかね？ まさか、侵入者が目の前に居る状態で内輪もめを始めたわけではないと、私は理解してはいるが…、マールレにも理由があるのだろう…まあ、途中で言葉を差し挟む無礼に対して何の謝罪の言もないと言うのは階層守護者として自覚が足りないとは思ったが…、ナインズ様が何も言わないにも関わらず、キミが先んじて何かを言うのは御方を軽んじてると思われても仕方ないのではないかね？」

さらりと、アルベドの熱を急速に冷ましたのはデミウルゴスだ、その言葉を聞いたアルベドは、瞬時に支配者の方へと視線を向け、謝罪の姿勢をとった。

「申し訳…ぎいませぬ、ナインズ様、決して御方を軽んじての先走りではないという事だけは…どうぞ、ご理解いただきたく…。」

そのやり取りを見て、なんとか冷静さを取り戻せた支配者は、落ちて着くまでの間、ずっとマールレを見ていた。

その様子はいつもとは違い、オドオドはしているものの、しっかりとした意思がそこにあり、何かをナインズに伝えようとしている風にも思える。

「ああ、かまわん、その点に於いては私はアルベドを責めるつもりもマールレを責めるつもりもない。そこは皆、心に留めておけ。」

「「は!!」「」」

一斉に膝まづく一同に、(またこれか…)と思うも、それにも慣れてきた支配者は、静かに思考に入る。

(そういえばマールレって、フレイラとは面識があったはずだな…、雰囲気彼女だと感知したのか? あの時は黒ずくめの衣装に濃茶のローブって感じだったのに…良く解かったものだな。)

「…マールレよ、今回の事に於いて、お前は姉一人の実力で充分に相手を圧倒出来る…そう判断しての先程の言葉だと受け取っていいのかな?」

(さすがに森で拾ってきたアイツを第6階層に置いてあるとは言え、そのことについては俺が「詮索しないでくれると助かる」って言うとおいたからだろうな…深く関わろうとしないのは、その命令を護ろうとしているんだろう…そう考えると心が痛むな…。)

「あ…はい!… そうです!… 二人がかりでなんてやらなくてもあの程度の者達なら…、お姉ちゃんなら何人居ても勝負にすらならないと思うし…範囲魔法一発で殲滅しちゃったら、お仕置にもならないと思いまして…。」

(マールレも必死に言い訳を考えてるんだろうな…なるべく姉の立場を立てて、自尊心をくすぐる形で、距離をとろうと言うのは、まあ…俺の命令ありきではあるが…、賢いやり方ではあるな。)

「マールレったら、珍しく持ち上げて来るじゃない?… なんかやらかした?それを私に隠してるとか?」

「そ…そんなことないよ?… お姉ちゃん、何も隠してないよ?」  
「ふ〜〜ん…」

しばらくジト目で弟を見ていたアウラは、少ししたら納得したように視線を外し、ただ一人の支配者に向き直り、はっきりと宣言する。  
「マールレもこう言っておりますし、私は問題ありません!… あのように

な連中ごとき……まあ手加減は大変かもしれませんが……でも頑張ります。」

「そうか……ならばアウラ、お前に任せるとしよう。……しかし姉弟の絆は深いと言うべきか？ 問題のある隠し事なのか、隠されてても支障は無いレベルでの他愛のないプライベートか……その辺はお見通しということのようだな？」

そう評価した絶対の支配者からの言葉にアウラは慌てて言葉を返す。

「い……いいえ、そのような気の利いた話じゃありません！ マーレはそんなことでウソをつくような弟じゃないと信じているからです。

……だよね？ マーレ？」

（最後の部分だけ、妙に低い声だったのは気のせいかな？ マーレも少し体を硬くしてるようだが……）

「まあ、今は侵入者に対する……半分相手の要望を叶える形になってはいるが、自力でこの第6階層までやってきた実力は未だに未知数だ、完敗などはない得ないと思うが、怪我などしないようにな？」

「はい！ 頑張つてきます！ ナインズ様！」

「さて、アウラの次は、デミウルゴス……防衛時の責任者として、4番手……副将の役目を頼めるか？」

「は！……この不肖デミウルゴス、お力になれるのであれば……ナザリックの栄華を揺るぎない物とするため、粉骨碎身の覚悟でコトに臨む覚悟でございます、ナインズ様！」

「うむ……さすがはデミウルゴスだ……頼りにしているぞ？」

「ではナインズ様、私が副将を務めるという事は……大将となるべきは……まさか……」

そこでナインズは大きく目の前で手を横に振る。

「いやいや、さすがに私自身は出ないことにするよ、自分の手の内を明かすような真似はしたくないからな…存分に戦い、手の内を見せるのであれば最終的に殺すのが一番口封じには有効であるが…それでは「恩に報いる」と約束した己の言葉を裏切ることになるう…さすがにナザリツクの支配者としてそれだけは出来ん相談だからな。」

「なるほど…確かに言われてみればそれも納得できるお答え、このデミウルゴスの浅慮、お許しを…。」

「いや、構わん、その程度で口うるさくがなりたてる程、心は狭くはないと思いたいものだからな。」

「では大将は誰になさるおつもりでしょうか？」

「うむ…そうだな…」



こうして、戦いの場が整ったそれぞれの、身支度、装備品などの準備万端が整い、それぞれの試合ごとの合間に、回復するための役割として、ベル側にはペストーシャが配置される。

審判役として出てきたナインズと名乗る支配者の後ろには、マーレが控え、万が一、審判の判定に異を唱え、危害を加えようとしてきた場合には、即座に防御の魔法や、拘束の魔法などで対応できるように（という名目で）後ろに控えてもらっている。

マーレの口からは先程から「やっぱり、あの人はあの時の女の人、ですよね？ …ナインズ様、なぜこのようなことに？」と、不思議そうにしている。

事情を少しでも知っているマーレを守護者たちと共に置いておいては、万が一が滑ったりした時にフォローが大変だ。

だからこそ、そばに控えてもらっている。

「うむ、それはな…彼女を起動させた後、出した指令は「ダブルスパイ」の役目だったのだよ」

（もちろんそんな事実ないけどな…守護者に納得してもらうためには

そう言っておかないと……)

『ダブルスパイ』？ ……ですか？』

「うむ、こちらの……ナザリック側というワケでは無く、潜入する者らが敵対することになる団体の情報を出し惜しみなく奴らに提供する代わり、潜入しているチームの情報は、ナザリックへ……つまり私の方にきちんと報告し、こちらが知らない情報は常に把握しておく必要があったのだ……だから、他の守護者達にも情報の隠蔽という意味も含めて、極力、その情報は流さないようにしていたのだよ。」

(かなり無理やりだよな……言い分に無理ありすぎるだろ、それってダブルスパイじゃなく、ただのナザリック派閥の密偵ただけだよな……こういう時、マーレが素直な子供でよかったとつくづく思うよ。本当はベルリバーさんのNPCだからってという理由しかないんだけどね。)

そうしている内に、闘技場に降りてきたのは、マイクパフォーマンスをしていたアウラだ。

とりあえず、自分の出番が来るまでの間は選手入場の際、お互いの選手名を互いに知らせる役目を持たせている。

「さて、みなさん、お待たせしました！ それでは第一戦！ 先鋒同士の戦いです！」

この場に行きつく前に、ベルはフレイラに<sup>メッセージ</sup>〈の巻物を渡している。〉

その効果を使い、フレイラは先鋒で戦う役のシエイドスピリットに戦い方の指示を出す。

もちろん、その戦い方を横で指示しているのは、本家であるベル当人だ、シエイドスピリットにはベル自身の本来の姿を真似させている為、その戦い方もベル自身が指示する形で、スピリットを生み出したフレイラから、それを命令するという形で戦わせようという腹づもりだ。

シエイドスピリットは、真似をする相手の8割のステータス、HP、  
? Pを再現し、全てのスキル、攻撃手段を有する。

もちろん魔法のダメージも威力も、〈最強化〉<sup>マキシマイズ</sup>を使っても全体の2  
割、威力が低下していることになる。

しかも、その能力はユグドラシル内でのみ存在していた能力に限ら  
れる。

なので、こっちの現地世界で手に入れることになった、変質した能  
力は効果を発揮しない。

〈擬態〉の能力はほとんど効果は変わらないが…ユグドラシルでの〈消  
化〉によるバフ能力はシエイドスピリットの方に引き継がれてしまっ  
ている。

無論、腹の中に居てもらっているエルフからの支援魔法などという  
裏技は、シエイドスピリットには扱えない。

その分、自前で使用できる魔法、スキルは充分に使えるので、それ  
はいいのだが…問題は装備品だ。

「本当は、ここでこれを渡すのは、不安で仕方ないけど…」

そう言いつつ、シエイドスピリットに渡したのは、必要な装備品、  
天ノ魔ブレードは自分で使うつもりだから…その代わりの武器を渡  
すことにする。

その武器は、あまのまひとつさんが、たち・みーさんと共に、ボ  
クがギルドから少しの間、離れることになると話しをし、別れを言い  
に行った当日、餞別だから…ということに渡された装備品の内の一  
つ。

たち・みーさんに渡されたベルトとは別に、あまのまひとつさん  
が作ってくれたのがこの一振りの剣、その名も「無銘一刀『宜振』」。  
それはかつて、好きな武将は誰か? という話題が、武人建御雷さん  
から発せられた際、みんなは好きな武将などを挙げていたが…自分は  
当時、とある人物の伝記ものを集めようとしていた物の、なかなかそ  
の人の文献は見つからず、せいぜいがドラマや、版權切れになったマ  
ンガの中の再現キャラでしか、人物像が見られなかった、自分にとつ

てミステリアスな存在。

特に有名なエピソードなどは残されているものの、後々から検証してみると、実は後から作られた捏造の逸話だとか：そんな話ばかりだったためますます自分の中でもっと知りたいと言う意識が強くなつていった。

そのせいで、その時に自分が話した人物名を、あまのまさんは覚えていてくれたのだろう。

彼なりに調べてくれていたようで、なかなかその歴史上の人物らしい武器のイメージになつていた。

形状は剣というより、刀であり、一番攻撃力が効果的に発揮されるのは「突き」の一点に限る。

だが、かつて「人斬り」として恐れられたという逸話からか、刀を振れば振る程に、地道に攻撃力が上がっていく。

一振りで、「1.1倍」ずつという：数値的には微妙だが、それも聖遺物級という：伝説級のレアリティからすれば一段階下の性能、攻撃力を上昇させてくれるという効果を入れてくれただけでも、当時、人気に陰りが差し始めていた時を考えれば随分頑張ってくれたのだろう。

説明だけだと、天井知らずに攻撃力が上がるのかと思いきや、一度刀を鞘に納刀すると、初期数値に戻ってしまうという特典付き、世の中そんなに甘くないという事だ。

とは言え、みんなとの多数決もそれなりに大変だったろうに…。

そう思いつつも、その刀を、シェイドスピリットに手渡す。

防具の方も、これからPVPに挑む彼(?)の為に「武人の胸当て」を貸してあげた。

これは自分がずっと愛用していた装備で1対1の戦いに於いて、攻撃に対する耐性、防御力、状態異常に対する抵抗を高めてくれる、という破格のデータクリスタルが入れられている一品だ。

ただでさえ2割減の存在なんだ、それをせめて全体の1.5倍にしてあげることが出来ればもっと戦いも有利になるだろう。



その代わり、自分の鎧は、暇さえあればコツコツと作っており、自分が持つ素材金属の中で、一番レベルの高い：個人所有が認められた稀有なアイテム、LV70金属。

まだギルドメンバーで外にモンスター狩りに出かけてたりした時、本来は出すはずのないエンカウントモンスターがひよろつと、ドロップした物だ。

その時は自分一人で、最初から最後まで戦ったのだから：：というところでギルド所有では無く個人所有が許されたという顛末もある。

それを使つて、クリエイト・グレートアイテム〈上位道具創造〉を使い、胸当てではなく、部分鎧の腰から上、肩当てまで及ぶように製作したものだ。

（レベルが70という事もあり、作るのに手持ちのユグドラシルコインを大量に消費しちやっただけだな：、まあ気の利いた装備もないんだし、仕方がないよね。）

もちろん色々なスロットに様々なものを入れてある。

一応、戦士としても戦えるように職業構成もしてあるので、モモンガさんみたいに重い鎧を着ると5つまでしか魔法が使えなくなる。

なんてデメリットが発生しないようにアーマードメイジや、バトルウィザードなんていうのも取得している。

こっちはそっちの制限は考えなくていいのが強みだ。

（第8位階までで止まっちゃったのが痛いと言えば痛いけどな：戦士と両立すると、魔法の取得数、純粋な魔法職より少なくなっちゃったし、まあ、どうしようもなかったよな。）

などと、とりとめのないことを考えていると、マイクパフォーマンスに力を入れているアウラが、第一戦の出場者の名前を告げていく。

「第一ゲートから出てきましたのは、挑戦者！　なんとその姿は異形の者！　その一言に尽きます！　なぜ人間の味方などするのか？　謎の戦士か？　その名も：「シェイド・ベール」

（ほら、行きなさい）

フレイラから言われて、ようやく反応したシェイドスピリット改め、「シェイド・ベール」

「それに対しますのは〜！　なんとナザリック地下大墳墓、第1〜第3までの階層守護者を務める！　総合的な戦闘力では追従を許さない、単騎での戦闘では最強の個！　その名もシャルティア・ブラッドフォールン〜！！！！」

（あ、そうだった：自分がギルドに居た時は、ただの拠点防衛の為に1キャラという認識しかなかったから、わからなかったけど、シャルティアってペロロンチーノさんの愛娘だもんなあ。シェイド・ベルがどこまで食らいついていけるか：だな、ガチ装備で出てきたら、まず勝てないだろうけど…。）

そう思っ居ると、第一ゲートの正面に位置するゲートから出てきたのはポールガウンに身を包んだ、しずしずと歩いてくるシャルティアの姿…。

（やった〜！！　舐めプ状態のシャルティアだ！　これならまだ善戦できるかもしれないぞ！　頑張れ！）

と、そこまで喜んでいたのもつかの間、重要なことに気付く。

（え？もしかして…これからペロロンチーノさんがシャルティアの為にデザインに苦労してまで製作したあの服、傷つけなきゃならんのかな？）

第55話 先鋒1 シャルティアVSシエイド(前編)

ナザリック陣営には、回復役としてルプスレギナが控えていた。

「頑張つて下さい、シャルティア様、応援させてもらうつす。」

「それはありがたく受け取っておきんす、とは言え、近くであのチビ助も見ていることでありんすし、見苦しい戦いは…御方もご覧になっているのでありんすから…、不覚は取らないように致しんしょう…。」

「そうよ？ シャルティア？」「一番槍はワタクシめに」とか言い出しそうだったコキュートスも我慢してくれたんだし、無様な戦いは見せないようにね？ 頑張つてちょうだい、ペタ子ちゃん。」

楚々と歩みを進めていたシャルティアが、対戦相手ではなくマイクパフォーマーのアウラに近づいてガンを飛ばしている。

「はあくん？ よく聞こえなかつたでありんすねえ？ 今の減らず口、もう一度言えるでありんすか？ わらわの気のせいでないなら、今この場で決着をつけてもいいでありんすよ？ 断崖絶壁チビ助？」

「ホラホラ、それぞれ…すぐに相手の言葉に翻弄されて、頭に血が上る所、ペロロンチーノ様から「そうあれ」として創造された部分なら難しいだろうけど、そうでないなら御方の恥にならない程度には抑えられる努力はしなきゃでしょ？ シャルティア…ほら深呼吸よ？ 深呼吸。」

目の前に…というより鼻先に人差し指を向けられ、出鼻をくじかれたような、意表を突かれたような言葉を向けられたシャルティアは「うっ…」と少し顔をのけ反らせるも、すぐに持ち直した。

「チビ助に心配されるようでは、わっちもまだまだということでありんすか…」

そう言つて、すーはーすーはー…とひとしきり深呼吸をした後「ありがとう、アウラ、行つて来るでありんす、見ているでありんすよ？」

「うん、がんばって？精々ワタシの時の参考にさせてもらうからさ、足をすくわれないように気をつけるんだよ？」

「ん？ それって「足元」だったんじゃないですか？」

「違うよ、デミウルゴスにも後で聞いてごらん？ 足をすくわれるから転んで不利な体勢になって困ったことになるのよ…『足元』をすくわれたって痛手にはならないでしょ？」

「ああ…、そういう意味だったんでありんすねえ、一つ勉強になりんした…でもちよつとシヤクでありんす…アウラに知識面で不足を指摘されると…どうも素直に礼を言う気分になりんせん…。」

（この一連の顛末が終わった後、実際に聞いたところ「そうだね、足元はすくうものじゃなく「見る」ものだからね」と言われてしまうことになるのだが、それはまた別の話だ。）

「ははは、ソレはしようがないかもね、私たちの創造主様が姉弟関係だったわけだからさ、素直な気持ちになれないのは気分的に仕方ないんじゃないの？」

「…見た目がわらわより下に見えんすのに…どうにも自分が「出来ない子」みたいに思われてそうでなりんせん、変なところで同情なんてしないでくんまし。」

「まあまあ、これ終わったらたくさん話に付き合っただけだからさ、あんな奴に大ダメージなんて受けないようにっていう激励よ。」

毒気が抜かれたのか、最初の勢いは吸い取られたかのように顔を下に向け、「はあ…」とため息を一つ付いたシャルティアは、気を取り直した様子で、向きを変え、これから戦う相手に目を向ける。

「マナ・エッセンス  
魔力の精髓」

戦闘前なので、少し声を落としたまま魔法を発動させ、相手の強さの大まかな基準を判別しようとして、魔力を見る。

すると、自分より魔力が下回っている程度なのが見て取れた。

（魔力系なのは間違いはないようでありんすが…、装備は戦士に近い

感じに見えんすね…、アインズ様の仰られている「きようびんぼう」タイプなる感じならそう怖くはないでありますが…)

そう思いながらも、シャルティアの目は対戦相手にではなく、その後ろの方に向いてしまう。

5人の中の1人であるハーフエルフ、シャルティアの目を捕えて離さない、なぜか気になるその鎧。

どうにも、それが気になって戦いに集中できそうにない…ならば、直にこの目でその原因を試してみるしかない。

何に気を取られてしまうのか…デザインか…隠されてる性能か…それとも、アインズ様のお言葉に出て来る「でーた量」なるモノが起因しているのか…

気になるならば、一緒に戦わせてみよう、そうすれば多少でもあれの性能が解かろうという物。

そこまで考えたシャルティアは試合場であるその場にいる者達を見る。

周りにはマイクを持ったアウラ。

そして審判役として戦いにルール違反がないか判定する役目のナインズ、そして、その背後にマーレ。

(ここはアウラじゃなくアインズ様の方に意向をお尋ねした方が得策かもしれないですね。)

「ナインズ様…戦いが始まる前に一つ、提案がございんず。」

いきなり話を振られ、ただ観戦モードに意識を向けていたナインズ・オウン・ゴールと名乗っているアインズが、意識を支配者モードに切り替える。

「どうした？ シャルティア…？ 提案とは何事だ？」

「そのことでありんすが…決して相手を軽んじているわけではありん

せんが：後ろに控えているハーフェルフの身に着けている装備がどうにも気になって仕方ありません、このままでは目の前の相手に集中できない恐れがあります、それならいっそ、わらわ一人が相手をして：目の前の異形と、ハーフェルフの2人がかりで：という形はどうでありますでしょうか？」

「ちよ？ シャルティア？ あんた何言ってるの？ さつき私の言ったこと……！」

「まあ、待て、アウラよ、シャルティアはシャルティアなりに考えた上でのことだろう、なるほど、目の前に対戦相手が居ると言うのに、興味の対象がずっとその背後にあるのでは目の前の戦闘に集中できない可能性がある、ならばいつそ近くに置き、同じ戦闘の中で『興味を覚えている原因』を確かめることが出来れば、戦闘にも集中でき、気をそぞろにすることもない……ということだな？ シャルティア……」

「はい、ナインズ様、正にその通りであります！」

「ん？」

いきなりナインズ様が何かに目を向けるように虚空を見つめるような仕草をされていた。

「少し待つのだシャルティア……」

ナインズ様はそう言うところめかみに指を持って行き、何事かを話し始めた、どうやら〈<sup>メッセージ</sup>伝言〉の魔法でなにやら報告があるらしい。

「ああ、私だ、うむ……そうか……、んん、それは……確かにそうなのだが……ならばどうすればよいと思う？ うむ……そうか、そう思うか……ならばそれの方が良いかもしれんな。」

なにやら困りごとなのだろうか、この場になって、誰が、なんの話で今、ナインズ様にその報告をして相談などを持ちかけているのだろうか？

「ああ、そうだな、少し伝えるようにしよう。ではな……。」

そう言うと、〈伝言<sup>メッセージ</sup>〉を終わらせたようだ。こちらに目を向け、言  
いにくそうに私に何事かを言い出そうとしている。

「済まなかったなシャルティア、話の途中で…ところでな…ああ…  
シャルティアよ…」

「はい！　なんでありんしょう！　ナインズ様！」

「お前の今のそのボールガウンだな…、それとは違う装備に変える  
ことは出来ないか？」

急な話の転換に頭が追いつかない、至高の御身はこの姿では不足と  
いうことだろうか？　ならば、あの真紅の鎧…あれが相応しい相手だと  
…そういうことなのだろうか？

「あの…それでは、『伝説級<sup>レジェンド</sup>』のあの鎧の方で相手をするべき強敵だと  
いう事なのでありんしょうか？」

「ああ…いや、そうでは無くてだな…ホラ、その服は、ギルドの皆が…  
お前の創造主のみならず、女性の服のデザインなどにも通じていた、  
へロへロさんやク・ドウ・グラスさんや館ころもっちもちさんら、み  
んながアイデアを出し合って作った、『お前』の為だけの衣装だ…それ  
をこんな、座興レベルの戦いで万が一にも傷をつけてはもつたいない  
と私は思う…ならばだ…仮に傷がついても、戦闘が終われば、無事に  
修復がされ、かつ動きやすい…運動に向くような服装に変えた方が、  
いいのではないかと思うのだ…どうだ？　シャルティア？」

「ああ…私のような者<sup>もの</sup>ごときの服の為に、そこまでお心を砕いてくだ  
さるなんて…ありがたいことでありんす！　確かにこれは我が創造  
主、ペロロンチーノ様から賜った「お前に一番似合う衣装だ」と言わ  
れた物、たしかに戦いの場で着るには、ペロロンチーノ様の意思に  
沿っていないと思われんす、なら、「運動に向く」と言われた衣装に着  
替えてきんす。」

そう言うと、シャルティアは闘技場のその場で〈転移門<sup>ゲート</sup>〉を展開。

「それではナインズ様、しばしの間、失礼させていただきます」

躍り込むようにその中に入ると…、しばらくの時間が経過し、

〈転移門〉が消失…それから少しすると再び〈転移門〉が展開され、その場から出てきたシャルティアは…ある意味、伝説と呼ばれるようになった衣装に身を包んでいた。

「シャル…シャルティア…それは…」

「はい！ナインズ様？ 似合うでありますでしょうか？ これこそ、ペロロンチーノ様より賜りし、伝説の「運動に向く」最適装備…その名も「体操着」であります。」

「そ…それは…傷ついても、戦闘が終われば普通に、元に戻ると思っつてよいのだな？」

「はい、ペロロンチーノ様が自慢気に私の前でへろへろ様と話されていたことを今でも覚えていんす…これなら、この「体操着」を溶かしたりしない限り大丈夫だろうと…それが可能になるのはへろへろ様のように装備を溶かし、衣装のレベルごとダウンさせるくらいでないと「だつい」なる「ろまん」には届かないだろうとも、おっしゃられていんした！」

（あの人は…何を考えているんだよ！ 確かに運動に向くけどさ、体操着って…いくらなんでもこの場に相応しいかと言われると、明らかに場違いだろう？）

自分の手を、顔につけたまま、一つため息をついたナインズに、緑色の光が包む。

「まあ、それが一番運動に向くと言うのであれば、私からは何も言うこととはない、それもお前の創造主が、シャルティアだけの為に用意した物なのだろう…ならばそれで戦うことを許可する。…ちなみに防御力という点では、問題ないのだろうか？」

「はい、ナインズ様、これには一応、防刃、防弾、防寒、防災、移動阻害対策、弱体化対策なども入っているすからして…装備としての防御力は先程のと大差ありません…ですが、この体操着に「ぶるま」なる物を取り入れることで、より理想を体現した『究極の体操着』の完成



になるのだ。とも言われていんしたので、そのように…いかがでありんしょうか？」

「そ…そうか…それにしても、それにも彼の想いが込められているのは見て取れるな…」

そう思いつつ、四角い白の布地を縫い付けたような胸には…。

「 1—3

しやるていあ

ぶらつどふおーるん」

と、クラスとフルネームらしく見えるように書かれていた

(どっちだよ？ 小学生設定の1—3？ それとも中学か？ いや、ただ単に第一階層く第三階層の…って意味なだけかもしれないし…深い意味は無いのかもしれないけど…)

「あ、ムネのコレでありんすか？ はい、これにはペロロンチーノ様も、館ころもつちもち様に協力してもらいんして、丸文字なる「女の子らしい」字で書いてくれと、お願いして作成してもらったと聞いていんす。」

アインズは頭を抱えたい気分になった。

たしかに無難なチョイスではあつただろう…ギルド、アインズ・ウール・ゴウンには女性のメンバーは3名しかいない、その内の一人は現役の教師…そんなこと頼めるはずはない、そのくらいはあのペロロンチーノも理解していたのだろう、片やもう1人は自身の姉だ。

そつちもそんなこと頼めるはずはない。

男性のギルメンに「丸文字」なんて書けるはずもないのだ、その人しか頼める人はいなかっただろう。

「まあ、それでならば、先程のと防御の数値的に変わりはないという事だし、動きやすいという点でも…傷ついても問題ないという点に於いてもクリアしていると思つていいのかもしれない…」

「それではこれで戦うということでお許しいただけるのであれば、行つて来ようと思ひんすが…」

「ああ、行ってごい、向こうへの交渉は私の方から伝えておこう。」  
すでにアインズは半ば、諦め半分で友人の娘、シャルティアを戦い  
へと赴かせることにした。



「ああ…はい、そういうことに…はい、はい。」

さすがにベルリバーも少し戸惑っていた。

シャルティアに体操着を作っていたなど…いや、ペロロンチーノな  
らさもありなんという所だろうか、とも思うが、さすがに現物を目の  
前で見ると、シヨックが大きい。

「あれは…鎧…じゃないよね。 かと行ってローブ系の装備でもな  
く、ただの服とも違う。」

イミーナは、これから対戦相手からの指名で、戦いの場に出なくて  
はならないという状況になり、相手の観察を行っていた。

「気になるのは、あの文字ね…魔法に使う文字とも違う、ロバーから聞  
いたことのある神聖文字とも…あれは一種の魔化？ あれで一種の  
魔法的な要素を付加している？」

（それにしても腕や足などの部分に護りがないのは…そこに攻撃を誘  
う意図がある？）

深読みを展開しているイミーナをよそに、次鋒に控えるベルリバー  
も口には出さないが心の中でその疑問に答えてあげることにする。

（まあ、外れではないんだけど、そこまで深読みしなくても…、でもペ  
ロロンチーノさんのことだ、色んな効果を仕込んであるんだろうから  
な…油断は出来ないけど…さっきの服装よりは攻めやすくなった  
な。）

などと考えていると先ほど、アインズさんから交渉をされ、2対1  
という形で、イミーナも戦闘に参加してもいいとシャルティアからの

要望だが、どうだ？ という話が出された。

〈伝言<sup>メッセージ</sup>〉の魔法でその話をされたので、小声で落とし気味の声であったが、どうやらイミーナの鎧の製作者の雰囲気を感じて察知しているらしい、気になって戦闘に集中できないままになりそうだという話をされた。

もちろんそれはイミーナには話していない。

ナザリツクの傘下に入っているならまだしも、それはまだ：現時点でどうなるか不明な段階だ。

それまではギルメンの情報も可能な限り知られる訳には行かない、知ってしまったえば最悪、「彼らは」口封じの手段に出るのかもしれないという理由から教えない方が彼女らの身の安全のためには得策だった。

今から「シエイド・ベール」の方の戦い方も頭の中で考えておく必要がある。

アレの性能は、ユグドラシルでの戦闘のまままで意識を変えないでいいのだから、その方向でいいだろう。

と、なると、いきなり初手で「あのスキル」を使わせなければならぬ：アレを使わなければ、状況は不利になる、とは言え、それを使えばシャルティア自身はいきなり大ダメージを負うことになる。

それで、本気モードにならなければいいけど：と、その前に会話の手段も用意しておかないと：とということ、イミーナにはボール状にして取り外した、自分自身の口の一つを持たせている。

それを「シエイド・ベール」の体のどこでもいい。背中でも後頭部でもどこでもいいからくつつけて来て？と頼んでおいた。

何故なら「シエイド・ベール」は、本来「シエイド・スピリット」だ、口頭での会話は不可能。

念話での会話なので、違和感を相手に与えない為にも正体に気付かせないためにも、私の口を体に取り付けることで、体に外見だけ見えている口の中に私の口を一つだけ本物を紛れ込ませることで会話の手段を準備させたという事だ。

イミーナが試合場まで歩いていく。

もちろん、その際イミーナの手にはベルリバーの体から切り離れた野球ボール状の大きさの口が握られている。

その口が、小声でイミーナに語り掛ける。

レンジャーである彼女なら少しの声でも聴きとることは可能だ。

なんだろうと耳を傾けていると「キミは無理に戦おうとしなくていいからね。後ろで防御に専念して、ボクらの戦いの巻き添えを食わないよう、流れ弾とかにぶつかからないようにして居てくれればいいから。」

という言葉が投げかけられた。

「なに？それって、私は戦力外通告ってこと？役立たずでも言いたいわけ？」

と、イミーナも歩きながら小声で返事をする、彼は「そういう意味じゃないよ」という。

彼が言うには、ベルさんが居た世界では特殊な用語があり、敵の注意を引いた、だとか、敵から注意を逸らした。などという状態のことを「ヘイト」と表現するという。

ヘイトを稼ぐ、ヘイトを減らす：などと言うそうだが、つまりは戦闘中に敵が狙い通りの標的に注意を向けてくれないと、戦う側も存分に戦えないという。

勝手に護りに入ってきて来られて逆にピンチになどなられたら、パーティ：と言ってチームと言い換えていたが、同じ意味のようなものなのだろう、つまりチーム全体の全滅に繋がらないように協力してほしいということだった。

それに：と最後に付け加えられたのが、この言葉だ。

「もちろん最後までただ、立ちっぱなしで居てもらいたいわけじゃない、きつとイミーナの協力を申し出るタイミングは絶対に出て来るだろうから、その時は合図をする。そうしたら、とにかく、その相手に集中して防御に専念していてくれ：下手に攻めようとするとならないからね、くれぐれも忘れないでくれ。」

と、かなり強く念押しをされた。

そんな会話をしながら歩いていると、シエイド・ベールのそばまであつという間に辿り着いてしまっていた。

もちろん、背中に言われた通り、ベルリバーの体から取り外した口をシエイド・ベールの背に押し付けると、すぐにその口は体に吸い込まれ、ちようど人で言えばノドの辺りに移動し、現れている。

相手側の2名がようやくそろったのを確認したシャルティアは、さも不思議な生物を見るような何とも言えない目でシエイド・ベールの方をジロリと見やり、言葉を投げかける。

「それにしても、お前は何者でありんす？ 異形種のくせにニンゲン程度のくだらない奴らに加担するなど…とても信じられんせん…どんな神経しているでありんすか？」

口ではなるべく穏便に話しているつもりのようなのだが、シャルティアのその表情はかなり苛立っているらしく、鼻から下は笑顔のように張り付いているが、鼻頭から上はかなり目ヂカラがすごく、アンデッドなのに血管が浮き出そうなどと思ってしまうくらい怒り心頭なのが見て取れた。

(さて、その怒りがどこから来てるものか…知る必要はあるよな…俺たちギルメンに対する怒りだったら、正体を明かすのは止めといった方が良いかもしれないし…)

「この人達には色々とお世話になってね…、こっちの情報やら、国の内情やら…一般人が知っている範囲の内容での情報提供をお願いする代わりに、力になれるならいつでも協力する…、そういう交換条件だったからね、その借りを返すいい機会なんだよ。」

シャルティアがさらに眉間にシワを寄せて険しい表情となる。

「何者でありんす？…と言ったはずでありんすか？ どうしても正体を明かさないと言うことなら実力行使で口を割らすであります。」

彼女の指から、爪が伸びる。

シャルティアの肉体武器としていつでも使える、どんな形態の時でも使用可能な便利な武器だ。

だが、しつかりしたレアリティの武器に比べ、耐久性がない。

その代わりに、治癒魔法で修復可能という利点も同時にあるのだが：「戦いを始める前にもう一度、おさらいとしての忠告だが、審判の判定次第だが、「注意」を2回受けると「警告」1回分というルールになる。しかもその「警告」が2回分貯まると：その時点で失格…、つまりどんなに有利に試合を進めていても敗北という事になる。そこは理解しているかな？」

(本当は「注意」2↓「警告」1、「警告」2↓「反則」1、「反則」2↓「失格」で敗北って図式なんだが：そうになると、一人くらいは殺しても構わないな…とか結論付けられると困るからな…シャルティアの記憶力が優秀だったら…という心配は不要だったようだ…細かいことは特にそこまで気にしないらしい…身内になったらそこを注意しておかないとな…)

「言われなくてもわかってるでありんすよ、そっちのハーフェルフは装備こそそれなりのを身に着けていてでありんすが、中身が貧弱すぎでありんす…ライフ量があまりにも低すぎ…かなり手加減してあげんせんと、すぐHPがゼロになって私が負けになってしまいそうでありんすからね…精々気を付けさせてもらおうでありんす。」

(よかった、とりあえず意識をこちらに集中させることはできそうだが、イミーナの浮遊盾が、シャルティアの爪とどちらが上なのか…正直力の差が分からないからな…。念には念を…だ。)

控え席にいるベルリバーも、自身に〈感知増幅〉と〈千里眼〉を併用させることで、シエイド・ベールに取り付けた口部分から感じられる全ての情報を自分にも感知できるようにして、戦闘の感覚共有を図る。

念のため更に〈浮遊の眼〉を発動させ、上空から俯瞰で戦闘を見守ることとした。

さすがにここまですると、メインカメラからの視覚情報と、サブカメラからの情報とで脳が混乱しそうなものだが、そこは魔法。

〈感知増幅〉の効果で、感知する能力、感覚的な部分は強化されてい

るようで、支障なく事が運べそうだ。

「さて…そろそろ準備は終わりんしたかえ？」

シャルティアから静かに声がかけられる。

その状態で居たままではまだ不利だ。そこでシェイド・ボールに感覚で指示を飛ばす。

『お前の武器は振れば振る程、攻撃力が上がる、それは素振りや、空振りでもだ！ だから今、その場で接敵される前に〈深淵閃断〉だ！』

体に貼り付けさせておいた自分の口部分から『感覚』という意味表示で、指示を伝える…元々の会話方法が「念話」なので、念じるだけで伝わると言うのはありがたい、その指示を迷いなく実行していた。

それは合計して、技の立ち上がりから最後まで合わせると8度の斬撃となる。

1度振るごとに1.1%上昇するのだから、×8で単純に考えても109%、つまりは10%上昇にも及ばない程度だが、それでも攻撃力が上がったのは確かだ。

剣としての攻撃力はその程度だが、防御面に於いてPVPという状況で言うならシェイド・ボールに身に着けさせている防具は防御性能、さらに各種の耐性が+50% upになるという物。

全体的なステータス

HPや、MP

攻撃力に防御力、耐性、抵抗値などが2割減となる変身性能からしても、そこから防御に関してのみとは言え1.5倍はかなり心強い。「ふうくん…体の動きを確かめる為に…でありんすか？ 今のは…まあ少しはマシな動きも出来る様でありんすね。」

「それは嬉しいな、『守護者』という呼び方でいいのかな？ それだけの強さを誇るだろう存在に評価されるのは、そこは喜ぶべきだろうね。」

「そんなお世辞などを言っても手は抜きんせんでありんすえ？ …さて、そろそろそちらに行くでありんすよ？」

シャルティアはゆっくりと歩みを進める。

…1歩  
…2歩  
…3歩

それはまるで、こちらが攻撃するのに必要な射程を確かめるためのように、向こうは余裕綽々だ。

(どうしよう?どこからが戦闘開始なんだ? もう始まつてるのか?  
シャルティアは歩いてるだけだし、あれは戦闘行為とは言えないんじゃないか?)

迷いながら、その隙を伺う、こちらの世界に来て大幅に仕様が変更され、攻撃力も発動条件も使用回数もかなり変化してしまったスキルを使う機会をうかがう。

それはユグドラシル時代での戦闘では開始したそのターンにのみ使えるという制限があったためだ。

必然的に1戦闘につき使えるのは一度。

その効果は、レイドボス、レジエンドボスや、ワールドエネミーにも通じていたスキルだったが、こつちの世界に来てからはかなりの弱体化をってしまったため、ユグドラシル時代の仕様のままこのスキルを使えるのは、現状、ベルリバーの姿を真似したシェイド・スピリットののみなのである。

そして、その反面、この世界で身に着けた、誰かを丸呑み、かみ砕くなりして捕食して、「捕獲」もしくは「消化」して、相手の技などを盗むという行為はシェイド・スピリットには出来ず、必然的に〈空斬〉〈縮地改〉〈能力超向上〉など使うことは出来ない。

元々持っていた『擬態』のスキルは問題なく使えるようなので、外見を変えたり元に戻るくらい問題なさそうなのは、不幸中の幸いと云った所か。

そして、シャルティアが最後の一步を踏み出そうとして…そこにシェイド・ベールは一步、足を踏み出すことで剣先が届く範囲を伸ばす。



その刃の及ぶ範囲を一步分だけ先に進め、腹に一閃し斬りつけた：と思つた瞬間。

ふわっと、軽やかにシャルティアが後方に飛び退く。

「なかなかの速度でありんすよ？ …でありんすが、わらわを傷つけるにはまだ速さが足りんせんね…」

（何も反応が来ない、ということとは相手は回避に専念してると判断されて、「戦闘状態」とは見做されていないという事か…だがこれでようやく刀の攻撃力が1割を上回つたな。）

「おんし…他に何か面白い技とかはないでありんすか？ もしあるなら今の内に出しておいた方がいいでありんすよ？」

「悪いがこちらは、そちらの気に入るような気の利いた技と言えば思いつくのは一つだけなんだが、それはそちらが攻撃してくれなければ発動できないものでね…ご期待に沿えず申し訳ない。」

「おやおや…それは勇敢でありんすね、健気にもそんな有様でわらわを挑発でありんすかえ？ なら、その技、どのような物か…見せてもらうとするでありんすよ？」

「…まあ、お手柔らかにお願いするよ…」

「…では、蹂躪を開始しんす…」

シャルティアがそう声を発した瞬間に世界が止まる。

その周囲は灰色に染まり、シャルティアの髪色さえも例外ではない。

前傾姿勢でこちらに踏み出そうとし、地面を蹴る動作の状態では世界は停止している。

（ああ、こつちの世界ではこのスキルってこういう見た目の状態になるのか…）

そう思つて居ると、目の前にウィンドウというべきか、パネルというべきか…そんな何かが目の中に出現し、そこに文章が刻まれている。

『相手が戦闘状態に入りました。』

その為、先制攻撃に対するカウンターとして処理されます。

スキル【スウーパー・オブ・フアング牙の急襲】を発動させますか？

(これをキャンセルした場合、この戦闘中での使用は不可能になります。)

迷いもなくその選択肢に、了承の意を告げ、「OK」を指で押させた。

すると、灰色の世界は解除され、こちらに踏み出そうと地面を蹴る動作から弾丸のように蹴りだした動作の瞬間、シャルティアの体中に無数の：牙を突き立て大口を開けたバスケツトボール状のモノが至る所に喰らい付き、その肌にごチャグチャと音を立ててダメージを与えている。

「あああああ!!」

地面を蹴り、前方に踏み出した瞬間に、感知できない攻撃が自分に発生していることに、完全に虚を突かれたシャルティアが悲鳴を上げる。

攻撃が来るのが分かっていたら体にとの心構えが出来、ダメージに対しても苦痛に抵抗するくらいはできるが、何の前情報もなく、いきなり発生している状況には心構えもへったくれもなかったシャルティアはそのまま地面に落ちてしまう。

そして、シャルティアのHPゲージがおよそ5分の1程度、削られたくらいで突如発生した牙の群れは、発生した時と同じように、何の前触れもなく消えた。

「くうう…油断したのであります、まさかあんな隠し技があるなんて強かでありんすね」

ゆらりと立ち上がり、不敵に笑うシャルティア。

(あつぶな…さつきの一瞬だけで距離の半分潰されてるぞ…何もしてなかったら完全に不意打ち喰らってた。)

「そちらこそ、あの一瞬でここまで距離を詰めて来るなんて、何もしなかったら何されたのか分からない内にダメージ食らってたところですよ…。」

「だからこそ、速さが足りないと言ったのでありんす… このくらいは見えてないと対等には戦えないでありんすよ?」

「そう…かもしれないね、でも、これで少しのダメージを与えられたのは誉れと受け止めていいのかな?」

しれっと、手傷を負わせたことをアピールするシエイド・ベールに対し、シャルティアもわずかに表情を崩し相手を見下すような視線を送り、こう言い放つ。

「そうでありんすね、わらわに手傷を負わせたのは上出来でありんすが…、この程度、痛手かと言わすのは間違いでありんすよ?」

そう言うなり、シャルティアは魔法の詠唱に入る。

〈グレートリーサル  
大 致 死〉

〈生命力持続回復〉

「回復手段ならいくらでもあるでありんす、好きに攻めて来てかまいませんよ?」

(そうだよな…ペロロンチーノさんが愛娘でもあり嫁とも豪語していた存在に回復手段を用意してないはずないもん…それに特化した主武器だつて持たせてるんだし…アレを装備したら絶対コイツに勝ち目なんてないだろうから、精々今の内に…つて言ってもずっとMP温存されると、結局〈グレートリーサル  
大 致 死〉で回復に回されちゃうし…MP吸収のスキルでもあればよかつたな…今さら後悔しても遅いか…)

「回復ですか…そうになると私に勝ち目はないようなものですね…さすがは守護者の名を冠するだけのことはありますね」

(まあ、だから同じ守護者に複数回挑む事態になっても、2人目の守護者、3人目の守護者を相手となる度に負け星の数に左右されず、単純に「勝ちか負けか」という結果だけを残すようなルールにして、負け星の数が次戦に持ち越されないよう、守護者が替わるごとに勝敗を清算出来るように決めといたんだけど…。)

「となると、可能な限りMPは先鋒戦で消費してもらおう形にしないと

いけませんね、後の人に繋ぐためにも！」

ミドル・デクスタリティ  
〈中級敏捷力増大〉

テクニカルブリスト  
〈技量増幅〉

マナ・エッセンス  
〈魔力の精髓〉

自らの技量と、反応速度を上げさせるため、ベルリバーの指示（をフレイラから）により、魔法で上昇させる。

さらにシャルティアの魔力量を調べる為の魔法を発動させることも忘れない。

グレートリーサル  
〈大 致死〉と+アルファ分のMP消費じゃ、そこまで減ってないな（。。）

シャルティアの魔力量を見たシェイド・ベールは、シャルティアに突進する。

その動きとほぼ同時にベルリバーが貼り付かせた口から、魔法防御を上げさせる魔法が発せられる。

マジックシールド  
〈魔法盾〉

その声と共に彼の持つ刀がうなりを上げる。

ダブルスラッシュ  
〈二連斬〉

〈深淵閃断〉

まずは二連撃で体勢を崩させ、そこに深淵閃断を食らわせようとしたが、二連撃でも体勢を崩させることは叶わず、必然的にその次の一手も先ほどの動きを覗られていた手前、剣閃の軌道は予想がつくように、大きく避けることで難を逃れていた。

（仕方ない、ここは武器に属性を持たせよう…『天<sup>あま</sup>ノ魔<sup>ま</sup>ブレード』は神聖属性が付いているから…この場では炎属性を使わせよう、そうすればどちらの対策を講じているかの情報ははおおよそ見当がつきそうだからな。）

エンチャントウエボン・フレイム  
〈魔法武装・炎属性〉

すると、刀身に炎が宿り燃え上がる。

「へえ…、一応は考えているようでありんですが…炎で本当にいいんで

ありんすか？ そつちは対策している方かもしれんせんよ？」

（やはり揺さぶりをかけて来たか…、こういうのこそPVPの醍醐味みたいなモノだしな…とは言え、本当に対策している方なのだとしたらわざわざそれは言う必要のないことだろう…かと言って、安心も出来ない、効果は低い代わりに炎と神聖属性、どちらも対策が出来るアイテムだつてあるんだから…完全耐性を付けるならば一つの属性に限られるけど…1つのアイテムでどちらも対策することは可能なんだよな、効果が微妙なだけで…。）

そう考えて居たベルリバーが視覚情報の強化を維持したまま  
〈ライフ・エッセンス生命の精髓〉を発動させる。

「仕方ないな…それじゃ…こういう手段に出させてもらおう」  
〈プロウアップ・フレア吹き上がる熱波〉

自分の覚えている中で不意打ちや限定した単体相手にならかなりの命中度を誇る魔法。

この魔法の良い点は、狙った対象以外に効果は及ぼさないこと、その上、詠唱の途中まで「フレイム」か「フレア」か…全く予想をするのが難しいという点が好ましい魔法で、「フレイム」の方はかなり狭い範囲だが範囲魔法としても使え、〈ファイデンマジック魔法効果範囲拡大化〉を併用すればそれなりの数を巻き込んで、しかも延焼させることも可能だ。

その為、素早い相手なら即座に回避行動をすれば範囲外に出られる危険がある。

それに対し「フレア」は狙った対象にのみ効果を及ぼす炎属性の魔法だ。

回避しようにも発動の瞬間に、狙う対象に命中補正がかかるため、使いやすいのだ。

「うつきやあああ!!」

魔法の発動を受け、悲鳴を上げるシャルティアだが、〈ライフ・エッセンス生命の精髓〉の効果がHPの量は見えている。

通常のダメージ量よりかなり低めの数値だ、これだと恐らくは炎対策はされているような気がする。

とはいえ、シャルティアはアンデッド、炎に対する脆弱さを種族と

しての特徴で有している、それなりにダメージは通ったが、彼女のライフから考えるとダメージは微々たるものだ。

ダメージを受けている今の内に距離を詰め、熱波の塔が消えない内にシャルティアに対して先程の剣技コンボを叩きこむ。

ダブルスラッシュ  
〈二連斬〉

〈深淵閃断〉

装備した当初から比べれば1. 2倍を超える攻撃力になっている刀での攻撃に加え、更に炎属性付きでダメージを与えている為、徐々にだが、彼女のHPが削られている。

…だがおかし、刀の攻撃力に加え、炎属性があるのにダメージ量が少なすぎる気がする。

いや、これは炎補正が少ないと言うより、単純に攻撃が通りにくいと見た方が良いのか？となると…

「もしかして、アンダーアーマーですか？」

「ふふ、意外に馬鹿じゃありませんというワケでありんすね…そうでありんす…これこそが我が創造主様から与えられし至宝の一品、ビキニアーマーを基に作り替えられたアンダーアーマー！その名も「スポブラ」でありんす！」

ベルリバーの耳にその単語が届いた瞬間、彼の力ががくりと抜けていく感覚に襲われる。

「あの変態鳥頭！どこまで趣味の道を爆走してるんだよ！」

と言いたくなるのを必死に抑えている…が、現在シャルティアと戦っているのは「シエイド・ベール」の方だ、やつに恐らくそんな脱力するような感覚はあるまい、と確かな自信があつたが間違いはなかったようだ。

スキル〈羽々斬り〉を発動させ、剣速を羽根が舞う様に軽くさせ、攻撃回数を上げる効果を自身に掛け…

次に〈飛燕 乱舞斬〉を使用。

…しかし、その攻撃の最中、シャルティアの腕が大きく振るわれ、剣を弾く。

「あまり調子に乗るんじゃないわあー!!」

ガギン！ と音を立て、刀の側面に長く伸ばした爪を当て、武器を弾き飛ばした。

そのせいで途中までしか攻撃を当てることが出来ずに終わる。

その隙にシャルティアは一気に後方へと距離を取り、剣の及ばない場所にまで下がり、次の行動に備えている。

「お…おんどりやあ…至高の御方にお姿が似ていらっしやるからと手を抜いていればああ!!…好き放題しくさってえ…もういいであります！ 手加減などみみっちいこと最初からまどろっこしくてやつてられんかったでありますからねえ!!」

シャルティアの腕が…体が、ミキリと音を立てて徐々に体の作りが変化していく。

口元が歪み、ギリギリと歯をかみ合わせる音が妙に大きく響く中…すでに意識は白い靄もやに包まれかけ、霞かすみがかったような意識の中、辛うじてそのシャルティアの耳に残る言葉が彼女の意識をなんとかつなぎとめる。

「チビ…スケエ…」

すると、徐々にだが彼女が元の姿へと戻り始め、荒い息を繰り返している。

「はあ…はあ…、危なかったであります、もう少しで自分を見失う所でありました…」

その様を見ていた対戦相手から、興味深げな言葉がかけられる。

「ほお…己の渴望から立ち直りましたか…それは興味深い…発動中に自力でキャンセル状態に持ち直すなど、『血の狂乱』にも抵抗できる精神力が備わってるとは思いませんでしたよ。」

その言葉を聞いたシャルティアがギロリとシェイド・ボールを睨みつける。

「おんし…その名前をどこで知りんした!! いや、それ以前に、その物知り顔がなにより気に入らんせん！ 御方々でもないでありますしように！ その勿体付けた物言いがイライラさせられんす！」

（何故？ 他のゴミ達であれば気にもなりんせんのに…何故、こいつ

の言葉だけは無視できんせん?…問われれば答えたくなり、声を掛けられれば聞かなければ…という気にさせられる原因がわかりんせん、イラつきが止まらないでありんす!」

「チマチマ、チクチクとしかダメージを通してこない煩わしい程度のクセして…至高なる御方々のお一人の姿そのままであること自体もまた不敬でありんす! 偽物風情が粹がついていい場所ではありんせん!!」

戦闘中ということのを忘れたわけではないだろうが、そんな中、自身の内から滲み出て来る意味の分からない感情の折り合いの付け方がわからないシャルティアが叫ぶ、目の前の相手に挑みかかることを忘れたまま…。

シャルティアに散々言われ放題の相手が、その言葉を受け、「ふう…」と一つため息をつき、口を開く。

「お前の口から度々出て来る『至高の御方々』というのがどれ程の者らなのかは知らないが…お前らにとってそんなに大事なのか? お前らの支配者はただ一人なのだろう? 他には見当たらないだけかもしれないが…居るのだとしたら、本拠地に侵入者がやって来ているというのに、他に誰も居ないというのが理解できない…そんなに無責任なヤツらなのか?」

わざとシエイド・ボールに貼り付かせた口から、ベルリバー自身の言葉でシャルティアの心をえぐる。

「うるさい!うるさいうるさい!! 御方々は…御方々は、きつとわらわ達のことを大事に思っ居てくれているんでありんす! 来られないのには事情があるはずで…事情も無くお隠れになられてはいるはずがありんせん!」

「…、わからんな、なぜそこまで信じられる?見捨てられたとは思わないのか? 用済みだと思われ、ただ、興味を無くされ…その遊びに飽きたから、次の「創造された世界」へと旅立ち、自分たちは打ち捨てられたとは…」

「ありんせん! ありんせん! 絶対にそのようなことありんせん!



お前ごときが…！お前のような愚物如きが、至高の御方々の温情溢れる、わらわ達にとつての全てである、親であり、神である方々の偉大さが分かるものか！！御方々の為になら命を投げだせと言われるようにと迷いはしんせん！そんな私たちを捨ててしまわれるなど…あつて…あつて…」

ぶつぶつと、うなだれながら、うわごとのように呟き続けるシャルティア。

（ちよつと言い過ぎたかな… NPC達のギルメンへの気持ちを知る為だったとはいえ、少し酷だったかもしれない…仕方ない、ここは大人の振る舞いでこちらが先に非を認めて…）

と、そこまで考えていた時点で、シャルティアに変化が訪れる。

先程まで体操着だったはずの衣装の上に、真紅の全身鎧が瞬間装着され、すぐに完全装備に移行し終えていた。

（はい…シャルティア、「注意1」だな）

冷静にナインズはその場の状況を見て、シャルティアに対して『減点1』と心のメモ帳に書き加えておく。

装備の瞬間装着自体は、ルールの問題はない。

だがそれは、『武器や防具が壊れるなどして、代用が必要となった場合』と決められていたはずだ。

シャルティアの体操着は、破壊状態と言えるほど、ボロボロでは無かった為、装備をし直す必要はそこまでなかったはず、ということは故意に、ルールを無視しての行動ではないだろうが、恐らく感情が高ぶって細かいことは吹き飛んだ結果、そうなったのだろうから…ここは「注意1」に留めておこうと、ナインズはそう判断をしていた。

と、決めていた中、突如、赤い閃光が奔る。

「あつてたまるものかああああ!!!」

戦術も、駆け引きも何もない、ただの体当たりのぶちかまし。

それだけでもシャルティアがやれば、かなりの威力を生む、その上、それは手加減など考えず、突進してきた一撃なのだ、駆けて来た跡が、

土煙を上げ、音を置き去りにする程の勢いでシェイド・ペールに頭から突っ込んできた。

「取り消せ！ 取り消せ！ 御方々が！ペロロンチーノ様が！ 至高なる41人が…、このナザリツクを捨てたなど！ お前は、私達だけじゃなく、御方々を侮辱した！殺す！殺す！殺す!!」

真紅の全身鎧に身を包んだシャルティアが、本来の専用装備である「スポイトランス」を振りかざし、シェイド・ペールに馬乗りになったまま、子供のケンカの様にとただただ、感情に身を任せて殴りつけている。

殴られる者は痛い…殴る方の武器の所有者は、殴りつける度にわずかに減っていたHPをガシガシ回復させている。

一方、シェイド・ペールの方は明らかにダメージが深刻になっていた。

すでに残りのHPは21%を示している。

そして、その数値は現在18%…

さらに15%…となり…

どんどん敗北に向けてのカウントダウンが始まっている。

そんな中、彼女、シャルティアの勢いは…、えぐり続けられた彼女の心の傷は未だに落ちつくことを知らず、荒ぶるだけ荒ぶり続けている。

残りHP12%…となり、ライフエッセンス〈生命の精髓〉を使用した上で、この成り行きを見守っていたナインズが、そろそろ止めるか？と動き出そうとしていた瞬間、事態は新たな展開を迎える。

馬乗りになっっているシャルティアは、もう怒りのままに…悲しみのままに殴り続けていて、自分が殴り続けている者の変化に気付かない。

それはもちろんナインズにも、気づけるはずもなかった。

土壇場に追い込まれたシェイド・ペールの様子を見ていてベルリバーがとつさに思い浮かべた、逆転に繋がる可能性のある…今の状況をひっくり返せるかもしれない唯一の方法。

きつとこの距離なら…そして今のシャルティアの精神状態なら、回

避もままならないだろうという計算で、フレイラ経由で指示を出してもらった。

そしてそれが実を結ぶ。

〈ウェイブ・オブ・ペイン苦痛の波動〉

唐突に、殴られ放題だった相手からの反撃の一手。

下から吹き上がった闇の波動。

それが馬乗りになっていたシャルティアを一気に吹き飛ばした。

それはそれだけの威力が発生したからだ。

『ウェイブ・オブ・ペイン苦痛の波動』

その魔法は、闇の属性ではあるが負の属性は加えられていない。

半分は呪いであり、半分は「自らの行いは自らに返ってくる」というコンセプトが込められた魔法。

つまり、単純に、ダメージを与えられた被害者がこの魔法を「攻撃していた者」に向けて発動させると、今まで与えられたダメージの総量をそのままに、ダメージ減少や、装備の効果に関係なくダイレクトに相手に返すのだ。

だからといって、その魔法を使用し、受けたダメージを相手に返した後に、自分のHPが勝手に回復するわけではない。失ったHPは失われたままだ。

しかもHPの限界値が自分より相手の方が多かった場合、お互いのパーセンテージが五分五分とはならない可能性もある。

「うっぎやあああ!!」

いきなり予想もしていなかった反撃を受け、シャルティアが吹き飛び、ヨロヨロと立ち上がる。

その目は未だに先程の暴言に対して腹を立てており、その瞳は負の感情に支配され、それを瞳に湛えているのは明白だった。

「もういいわえー！いたぶるコトは好きでありんすが、一方的にいたぶられる趣味はありません！」

そう言つて彼女が発動を決めたスキル

シャルティアのどす黒い感情を表すように背中に蝙蝠の羽根をバサリと大きく広げ、発動させる。

〈眷属召喚〉！

シャルティアの体から黒い靄もやのようなものが噴き出し、そこからあらゆる黒い存在が形作られる。

蝙蝠、狼、鼠…と言つた動物たちだ。

その出現数はシャルティアのレベルに比例する。

呼び出す為の回数は自由に決められるが、一日に呼び出せる数の上限はレベルの数値分だけ

その総数は「100体」

眷属たちは、数回に分けて…なり、呼び出したい時に呼び出した回数だけ呼び出す、という手段もとれる。

だから、今まではそのような使い方はしてこなかった、だが、さっきのアイツの言い方は看過できない。

なので、呼び出せる最大数を一気に呼び出した。

(さすがにこれはまずいかもな…あと残りHPはレッドゾーンだし…)

これは護りを固めるか…)

〈上位硬化〉

〈竜の鱗肌〉

そして、シャルティアが呼び出した眷属たちが周囲に展開された瞬間、呼び出された全ての者に命令が下される。

「全員でかかれ！ ヤツを食い殺せ！」

その号令と共に、100にも上る数の獣たちがシエイド・ベールに襲い掛かる。

今の彼のHP残量は、12%…あと少しでも削られれば、その場で負けが確定してしまう。

だが、シエイド・ベールは慌てずに、自分に流れて来る指令に従うのみなのだ。

体をわずかに齧かじられながら、10%にまで届かないギリギリの数値を見極め、周囲にまわりつき、かじりつく獣たちをそのままに、1%を僅かに割った瞬間、一つの魔法を展開させる。

「悪いな、呼び出されてすぐに済まんがまとめて葬ってやろう！」

〈ネガティブバースト負の爆裂〉！

シエイド・ベールを中心として負属性の暴力が嵐の様に荒れ狂う。アンデッドであるシャルティアは〈ウェイブ・オブ・ペイン苦痛の波動〉の効果で吹き飛ばされた後、距離を取ったので、すでに範囲外にいる。

そうでなければこんな魔法を使えば回復されてしまう。

自身の放った魔法で窮地に陥るなど、ただの笑い話にもならない…だが、眷属程度なら別だ。

闇の者達ではあるが、アンデッドではないため、通常通りダメージは通る。

とは言え、アイنزの様にカルマ値がマイナスに振り切れているならば、ダメージもそれに応じて大きくなるが、シエイドスピリットである彼は、良くも悪くもない。

カルマ値がゼロなのだ。

威力的には今一つだが、レベルとしてはそこまで高くない眷属達を始末する分には問題にならなかった。

それでも始末できたのは周囲に群がった8割程。

残り2割弱はまだ健在。

「いいでありんすね…せいぜい悪あがきをしてくれなんし…楽しませて欲しいでありんす」

自分があと一息で勝てるという…相手を追い詰めたコトを確信したことにより、シャルティアは少しだけ余裕が戻り、優越に浸る微笑みを浮かべ、笑う。

「残りが2割弱…か…、ならば充分かもしれないな…。」

シエイド・ボールがシャルティアからさらに距離を取るべく、後方に飛びのく。

「逃がしんせん！ 行きなんし！」

シャルティアの号令の下、残った眷属たちが全てシエイド・ボールへと襲い掛かる。

距離がある為、向かってくる眷属達はある程度ひと固まりになって向かってきている、それに対して手の平を大きく広げ、それを襲い来る眷属たちに向けてシエイド・ボールが叫んだ。

「開け！ 風穴よ！」

と言いながら、シエイド・ボール自身の念話の仕様によりスキル名を念じただけでそれが発動する。

〈暴食〉！)

シエイド・ボールが広げた手の平には一つ、牙を生やした口が展開されている。

その口からコーン状に広がった竜巻が、向かってくる眷属達を一気に吸い込み、呑み込んでいく。

この〈暴食〉と言われるスキルは〈暴飲〉と対になるスキルで、それぞれ効果が異なる。

簡単に言えば、暴食は物理的な吸い込みで吸収、若しくは自分の力に変換させる。

(それはバフであったりHPの回復だったり、MPの回復だったり…それは任意で効果を選んで発動させることが可能)

そして、〈暴飲〉は、魔法的な吸い込みで、「魔力」を使用する必要のあるあらゆる魔法、スキルなどに効果を及ぼし、その効果を自身の

身の内にストックしておくことができる。

(通常、スキルというものはMPを使用することが無いので、よほどのレアケースでないスキルを吸い込むことはまず出来ないのだが…)

「スキル発動！〈我<sup>The Cosmo</sup>が胃<sup>in my Stomach</sup>は小宇宙〉」

「スキル！〈捕食〉！」

シェイド・ベールが持つスキル〈捕食〉と、ベルリバーの持つスキル〈捕食〉は同一のものではあるが、この異世界に来てすぐ、ベルリバーのスキルは仕様が変更されてしまったため、今発動したシェイド・ベールの〈捕食〉は効果が全く違う。

直接的に敵を倒したと判断された際、スキルの〈捕食〉を発動するかどうかの選択を迫られ、了承すると、倒した数に応じたバフが自身にかかる、それは効果がどんどん上乘せされ、上限がない。

ユグドラシル時代では次のターンの頭にバフの効果が発現し、戦闘が終われば効果が消失する程度のものだったし、戦闘シーンで100体のモンスターに襲われることなどまずありえないコトだったので、ここまでの状況に遭遇したことなど、前例がなかった、その為…どこまで強くなるのか試してみたかったのだ。

さらに〈我<sup>the Cosmo</sup>が胃<sup>in my Stomach</sup>は小宇宙〉というスキルは一度に胃に収める敵のレベル総数を2倍にするという、人体で言うところ「胃拡張」のスキルのスキル。

ユグドラシルでは種族レベルを上げ損ねていた為、結局「宇宙」や「大宇宙」の方には届かなかったが、まあそれは今更だろう…所有しているモノで何とかやりくりするしかない…

通常はレベル100のベルリバーは総合計でレベル100分までしか〈暴食〉で一度に吸収することは出来ない。

(LV50モンスターを2体とか、LV33モンスターを3体など…つまり19体構成のゴブリントループ相手でもその全員を一度に吸い込むことは不可能という…効果としては微妙系だが使い方次第

だ。)

その為、20体弱という数であり低レベル帯の眷属とは言え、総LVがわからなかったベルリバーは、シェイド・ベールの胃の容量を上げさせたのだ、結果、総合計でLV200分までなら一気に吸い込むことが出来る。

しかし、かと言って200LV弱のバフが追加され、100LVのキャラが+200レベル弱の分ステータスがアップして約300レベルくらいの強さになる、という単純な話ではない。

吸い込んだ結果、18体を吸い込んだ計算になったようだが：つまりバフを重複して強化上昇を重ねることにする数とHPを回復する為の分を調整しないといけなくなるというわけだ…。

吸い込んだ中で5体分は今まで使用したMP回復に回している。

その内、10体分はHP回復分として活用。

残った3体分は、バフの効果に全部回す。

さらにその上で、〈捕食〉の効果により18段階のバフがシェイド・ベールに与えられる。

総合計で21段階の強化上昇となるわけだが、その上昇効果には大きな差がある。

片や、〈捕食〉のスキルはパッシブ型なので、それほど制限がある訳でもなく、1段階の上昇で数%。

それに対して、〈暴食〉の場合は、戦闘中に3回までという制限がある為、〈捕食〉の上昇率よりは数値が上なのだ。

結果的に、18：3の割合での上昇だが、上昇割合的には54：18：つまり「3：1」程度の開き。

ステータス的には、シェイド・ベールの数値が100だとした場合、「172%」へと上がったことになる。

(これで戦闘力がシャルティアを上回ることが出来ればいいんだけど…戦闘中はこのバフが解除されることは無いから、そこだけは安心だけどね…)



〈暴食〉はこの戦闘中では、あと2回が限度

〈暴飲〉は、まだ未使用だから丸々あと3回だな。

（ブラフで「風穴」っていう名前をシャルティアには聞かせたが…さすがにそこを深読みするタイプじゃないかな？…、まあ、それならそれで仕方ないか…、一つの布石が無駄になった程度に思っておこう。）

せっかくスキルの名前を偽装して見せたのにな…と少しやるせない気持ちになるも、それは受け手の感じ方に大きく左右されてしまう話、ただの「セリフの一部」としか見なされなければ、決してそれ以上には成り得ないのは当たり前前の事であった。

一方、シャルティアの方はと言えば、勝利条件の10%以下まで残り僅かだったため、余裕で勝てると思って居た彼女はさらにイラつきを募らせる。

勝てると思っていたのに、まだその相手は見苦しく抵抗をしているのだ、しかも〈ライフエッセンス生命の精髓〉で見てみたところ、HPが約3分の2強まで回復してしまつて居る。

それに対して、自分のHP残量は25%、ハッキリ言つて計算が狂つた。

ルールには時間制限はなかったものの、現状ではHPの残量では負けている。

守護者である自分が、どこの誰ともわからない異形種相手に、いいようにあしらわれている、それが我慢ならなかった。

25%では魔法攻撃力の数値にもよるが下手をしたら超位魔法一発で終わってしまう恐れもある。

私の魔法防御を上回るくらいの威力では、考えられるのはナインズ様、御自らの超位魔法くらいでないかと思えるが…

もし相手がそれを使えるとしたらアウトだ。

だが、超位魔法は、発動までに時間がかかる。

発動の準備が整うまでに攻め込みダメージを与えればいいだけ、動

けないほど狙いやすい物はない。

自分にはさつきと違い、スポイトランスもある、これで攻撃してダメージを与えれば、HPはまた戻ってくる。

それはいいが、不用意にダメージを与えると、下手をしたらまた同じ目に合わされかねない：下手に動けなくなってしまうた。

：ならば：

シャルティアは新たにスキルを発動させる。

高々と、上に乗った手を上げたシャルティアの頭上にあるのは、光り輝く巨大な矢じりのような形状をしたモノ。

それは彼女の切り札の一つ、「清浄投擲槍」

このスキルから出る攻撃手段は、神聖属性を持ち、更にスキルではあるが魔法扱いの武器でもある。

しかも追加でMPを消費させると、絶対命中という特典もある、しかしこれは一日に3度までしか使えない。

(だけど、今はこれを使うべき！)

距離を取って、これを3度全部使用し、残ったHPは攻撃魔法で削り切ってしまうがいい。

向こうが再びあの魔法を使ってくるようなら：私には魔法を防ぐ、絶対の「盾」もある。

それに：さつきは不意打ちで、頭に血が上っていたせいで冷静に対処できなかったけど：〈時流逆行〉というスキルもある：

そこまで考え、出現させた光の槍に追加でMPを支払い、撃ち出す。それは絶対命中の光の槍、神聖属性の魔法扱い：相手はアンデッドではなさそうなので弱点ではないだろうが、通常のダメージは通るだろう。

(これを繰り返し返せば！)

相手は戦った感じ、これと言って遠距離の手段は魔法以外には持ち合わせていないように考えていたシャルティアは勝利は目前だと思考し、射出した。



(ほお…あの「モドキ」の方のベルリバーさんもなかなかやるもんだな…、姿を真似するという事は多分…)

と、ナインズもいくつか候補を頭に思い浮かべているが、ことが終わればネタばらしは彼に聞いてみればいい話だ、名前がシェイド・ボールなのだから、恐らく「シェイド○○」とかの種類なんだろうけど…くらいに考えていたので、思わぬ善戦に目を見張る。

「それにしてもまさか、あんな手段でシャルティアに大ダメージを与えるとは意外だったな。」

ぼそりつぶやいた言葉を後ろで聞いていたマーレがそれに反応する。

「え？ なにかおっしやいましたか？ ア…じゃなくてナインズ様。」  
「ああ、いやなんでもない、相手も階層守護者相手になかなか粘るなど思ってたな…だがまあ、今はシャルティアも少し頭に上った熱も冷めて来てるだろうし…落ち着きさえすれば問題あるまい、まだそれほどMPを浪費してるわけではないのだから、<sup>グレートリーサル</sup>〈大 致 死〉もまだ余裕で使えるだろうし、<sup>リジェネート</sup>〈生命力持続回復〉は…一応、そろそろかけ直す必要はありそうだがな…。」

(さて、追い詰めてしまった結果、逆上したシャルティアが完全武装になっちゃったのは計算外だっただろうが…そのシャルティア相手にどう立ち回るのか…見ものだな。)

そう思いながらも心中、どちらかに応援を偏らせるわけにもいかない気分のナインズは、ただ静かに見守っていた。

対して、場面は変わり、ここは控え席、ベルリバーが指示を出し、フレイラがその指示をシェイド・ボールに指示を…開きっぱなしの<sup>メッセージ</sup>〈伝言〉の魔法で指令を下し戦わせている中、アルシェが指示役のベルリバーに対して話しかけて来る。

「なぜイミーナは戦ってない？ 盾で援護するだけでも展開は違うと

思う…。」

「ああ、それは変に注目を浴びたり、敵意を集めなかったためだよ、うちの仲間内では「ヘイトを稼ぐ」とか「ヘイトを集めないように」って言ったりもするけどね、変に目を付けられて攻撃されたら、イミーナの身が危ないからね、あの浮遊盾だって使用した素材としての金属レベルはシャルティアとガチ勝負出来る程じゃないだろうから…」

「そう…それじゃ、最後まであのまま？」

「そうとは考えてないよ、もしその時が来たらその時はヤツにくつつけた口から指示を出すさ…問題はそこまでヤツのHPが持つか…っていうのと、そこまでシャルティアを追い詰めることが出来るか…にかかっているかな？」

「でも…なにかあれば、あの異空間での修行が役立つはず…」

「そうだね…あんな盾の使い方ができるなんて想像の範疇になかったからな、自分でも、アルシエの発想には驚かされたよ、ウチラじゃ、あの盾は…どこまで言っても「防具」の一種だからね…それをあんな風に工夫しようなんて、一生かかっても思い浮かばなかったと思うよ。」

「うん、でもそれは、妹たちにも感謝しなければならぬ…あれは私が必死に集めた知識の賜物、六大神様が残されたという御知恵の中に、妹たちが喜びそうな記述が遺されていた文献を元によく再現していたモノだったから…」

「そうか…なら、どんなヤツらだったのかわからないが、そんな顔も知らない六大神とやらにも感謝しなければな…それが機能した時、イミーナの真価が発揮される時だろうけど、二人であれだけ頭を悩ませたんだ、きつと大丈夫だろう。」

「エルフにも人間にも、あんな文化は無かった、だからそれが役に立つなら、それが何より…」

と、会話をしながらも意識は戦闘に何割かは割いているベルリバーが反応する。

「うー！ まずい…あれはたしか、神聖属性の攻撃スキルだったはず、絶対命中の機能もあつたはずだから、今のアイツに使われたらかなりHPが削られる…あれは確か…レアリティ基準で言えばレジエンドの

上位に位置するスキルだったはず…、今のシエイド・ベールは「胃拡張」させても精々レジェンドの中位く上位に指がかかるか？つて程度だから、今のを吸い込むのは難しい…今撃たれたら厳しいな。」  
「…なら、なんとか少しでも弱めたりすることは無理？」

（あのスキル効果を弱めるか…考えたことなかったが、出来るのか？  
いや…ぶつつけでも試してみる価値はある、幸い、支援魔法と最後の反撃の魔法を使ったただだし、さっきの〈捕食〉でMPも多少回復してるはず…なんとかなるか？）

「そうだね、通用するかわからないけど、やるだけやってみよう、ありがとう、アルシエちゃん」



「死にさらせえええ!!」

シャルティアが〈清浄投擲槍〉を撃ち出す瞬間に、シエイド・ベールも〈伝言〉からの指示により、即座にその対応を取り始める。

〈魔法三重最強位階上昇化〉〈トリプレット・マキシマイズ・ブーステッドマジック〉

そう詠唱の準備に入ったシエイド・ベールが選んだ魔法は、光に対抗するように発生させた闇の魔法。

それも〈負の爆裂〉同様、カルマ値がダメージ量に大きく左右される魔法の一つ

無論、アインズ程のダメージ量は望めないが、一時的に位階を引き上げる「魔法強化」を施し、自らの最大位階である第8位階に引き上げたその魔法を3連発、シャルティアの光の槍に向けて全てぶつけていく。

〈獄炎〉

指先から発せられた小さき闇の炎は、シエイド・ベールに向かってくる光の槍に向かって襲い掛かる。

1 発目。 着弾、闇の炎を燃え上がらせるも、光の槍の勢いは変わらず、わずかにサイズが変化した？という程度の変化しか与えられなかった。

2 発目。 着弾、間髪入れずに吹き上がる闇の炎が光の槍を覆いつくす。わずかに勢いが殺され、先程と同じくらいの勢いで光を奪っていく、2 発目でやつと目で見て少し違うくらいには判別できる程度に変化していた。

3 発目。 勢いが衰え始めた光の槍に3 発目が襲い掛かり、最初の大きさより一回り小さくすることに成功したが、スキルそのものを打ち消すには至らなかった。

「ちい……！ さすがに打ち消すには足りなかったか！」

「きやあくくつはつはつは！ その程度では我が創造主様から与えられしこのスキルからは逃れられんせんよ？」

すると、シェイド・ベールのムネから腹にかけて、魔法陣が浮かび上がる、さしずめ、これが絶対命中の目印と言ったところだろうか：

（よし！ それなら！）

シェイド・ベールは体中に分散されている口を魔法陣が刻まれた辺りに、一斉に集め、そこに巨大な口を形成していく。

「さあくく！ 一発目が命中でありんすよおくく？」

嬉しそうに言い募るシャルティアに対し、シェイド・ベールはただただ、指示された役目を遂行することに意識を向ける、それが失敗に終わっても、それが召喚者の意思ならば、それに従い、果てることができることに満足を覚えるに違いない、それが本懐というものだろう、そう思つて最後の一手を発動させる。

「さあ、存分に飲み込め！ 大風穴！」

（〈暴飲〉！）

シェイド・ベール（に付けた口）がそう発言するとともに、魔法陣

を口中に収めるくらいには大きく広がった大口がガバつと獲物が飛び込んで来るのを待つ捕食者のように出現し、光の槍が空気に溶けて消えるように、その大口に吸い込まれて行く。

（よかった、なんとかレジェンドの中位より多少は上程度には弱められたか…、上位のままなら吸い込めなかつただらうからな…、うまく行つて良かったああ…）

「バ…バカな…そんな、ありえない…絶対命中の筈のこのスキルが…」「ふっふっふ…どうした？シャルティア…そんな顔をして、この程度のスキルを、私がどうすることもできない程度の存在とでも思っていたのか？」

（とりあえず相手の動揺を誘つておこう、ペロロンチーノさんはどんな風に創ったか知らないけど、シャルティアって、直情傾向が強いっぽいし…、直情タイプは「猪突猛進」とも似ていて攻撃力という点では要注意だけど、反面、細かい配慮や、臨機応変って言葉は苦手分野になるからな…それを上手くさばくことが出来れば…もう少し粘れそうかな？）

「うそ…なんで？ 至高なる御方が生み出した技をなんでお前のようなポツと出の…訳のわからない下等種が打ち消すなんてことが出来るでありんすか！」

「なんでだろうね？ もしかしたらシャルティアを創ったというその者より、「この私」の方が優れていたということの証明なんじゃないか？」

「ぐう…認めません！ 認められんせん！ そのような戯言たわごとなどおおお!!!」

そして2発目の〈清浄投擲槍〉の準備に入ったシャルティア。

「そうか…認められないか…ならこういうのはどうかかな？」

そう言うと、シャルティアのするポーズのまま、同じ動作をシェイド・ベールが鏡写しの様に腕を高々と掲げる。

…すると、その手の上に出現したのは明らかに〈清浄投擲槍〉

そして、それは今シャルティアの撃ち出そうとしているソレよりサイズが一回り大きい。

それは身の内に一度、収納したことにより、先程の〈捕食〉と〈暴食〉の効果で底上げされたすべての能力が2段階の強化上昇状態パとなっっているからだ。

その為、純粹にレアリティ基準の攻撃力で言えば、ゴツズの最低ラインには届こうかという威力にはなっている。

「そ！…それは！…なぜ？…なぜお前ごときがそれを使うことができんす？…それは私だけの…私だけの能力で…ペロロンチーノ様…ああ…何故…どうして？」

驚愕の表情を浮かべ、狼狽えるシャルティア。

自分が得意とし、切り札の一つである技を盗まれた（本当は違いうのだが）ような状況を見せられてはさすがに平静ではいられないのだから。

（さて、シャルティアが〈清浄投擲槍〉を撃ち出す前に、これを使い切らないと、次の〈清浄投擲槍〉を喰らう為の容量が確保できなくなっちゃうからな…、そもそも〈獄炎ヘルフレム〉の助けも無いと吸い込めないし…アインズさん程の魔力量が欲しいよ、全く…。）

「さあ、どうしてだろうねえ？…自分のスキルと同等か、それ以上かもしれない威力をその身で受けるといいよ？…そうなることで初めてそのスキルを受けた者の痛みが分かるようになるんだから…ね！」

と、最後の「ね！」で、シエイド・ベールが〈清浄投擲槍〉を撃ち出す。

意外にも、追加でMPを消費するかどうかの選択肢が脳内に浮かんだので、絶対命中の要素も同時に吸い込めたらしい。

「あああああ、あああああ!!…くう!!」

苦々しい表情を浮かべ、シャルティアは抵抗することも無くその身に〈清浄投擲槍〉を受け入れる。

しかし、苦痛の悲鳴は無い。

その身に刺さって、発生したはずのダメージから巻き戻しの発生が



起きたように傷が無くなっていく、まるで時間の操作でも出来るのか？と錯覚するには充分の衝撃を受ける。

「な…まさか…時の流れを操れる？ ユグドラシルにそんなスキルあつたっけ？それともデータクリスタルか？」

途中からユグドラシルから遠のいてしまったベルリバーには解らない、ペロロンチーノさんとはモモンガさん程には仲良く出来ていた自信がない為、そこまでシャルティアに関しては詳しくないのだ…その分だけでも情報量が不足していたと言える。

(基本的にきさくな人だったから、誰とでも抵抗なく話したりできる人だったけど…「このゲーム面白いから」とか言つてボクをそっちに染めようとしていたイメージしか残ってないな…)

どちらにしろ、自信のあつた攻撃が…それなりにダメージが期待できた攻撃が無力化されたことは事実なのだ、だがあれだけ強力な効果なら、それほどの回数は使えないはず…普通なら2回…

もし、何らかのデメリット、何かしらの制限をそのスキルに課しているのだとしても恐らく「戦闘中」では無く、「一日に」という部類だとしても、全部でいいところ3回が限度。

できれば「2回」の方であつて欲しいんだけどな…

「ふふふ…こちらにも、まだまだ奥の手は残してあるのでありんすよ？残念でありんすねえ…目論見が外れてしまつて…まあこれも、お前ごときより「あのお方」の方が優れていたということの証明では？」  
(さつき、思いつきり「ペロロンチーノ様」って口走っていたのはすっかり忘れていいのか？ それとも強引に誤魔化すつもりか？ どっちにしても力技すぎだな…)

「そうか…それで？今お前の出している2発目の方はどうするつもりだ？また同じ目に遭いたいのなら、いくらでも撃つて来ると良い…何度でも蹴散らして撃ち返してやろう…お前はあと何発なら撃てる？1発か？それとも2発かな？」

「おのれ、どこまでもわらわを愚弄するつもりでありんすか！ スキルなどなくても、魔法という手段もあるでありんすよ！」

シャルティアは、待機中の〈清浄投擲槍〉を解除して、使用回数を

節約するつもりのようなのだ……

魔法の準備に入り、3つの魔法を発動させる。

〈大<sup>グレート</sup>致死<sup>リーサル</sup>〉

〈生命<sup>リジエ</sup>力<sup>ネー</sup>持<sup>ト</sup>続<sup>ト</sup>回<sup>ト</sup>復<sup>ト</sup>〉

〈魔法<sup>マジック</sup>最<sup>マキシマム</sup>強<sup>マジック</sup>化<sup>マジック</sup>〉

〈朱<sup>ヴァーミリオ</sup>の<sup>オンノ</sup>新<sup>ザア</sup>星<sup>ザア</sup>〉

シャルティアが第9位階の魔法を使用して来たが、一応、『武人の胸当て』を装備しており、少しは各種抵抗、無論、炎に対する抵抗力のみならず幅広く耐性は付加してあるし、〈魔法<sup>マジック</sup>盾<sup>シールド</sup>〉も適用されている上、バフにより、ステータスも上昇し魔法防御力も上がっている、ダメージ量はそれなりに抑えられるだろう……とは言え、最強化状態の第9位階を無抵抗で受けるのは得策ではない。

そうだ、わざわざ立ち止まってやる義理は無い、先程、シャルティアの眷属を吸い込むことでかなり強化されているのだ、全力でシャルティアに駆け出したら……という好奇心が頭をもたげる。

地面がさく裂したかのような音を残し、シエイド・ベールが一直線にシャルティアに迫る。

それは、まさに蒼の帯を残し、疾駆する存在となった者の賜物、発動場所ではそのまま渦を巻いて荒れ狂う紅蓮の炎が置き去りにされていた。

(これで接近して、火力タイプのスキルで一撃を加えられるか?)

その姿が目の前まで迫って来た思いもよらぬ事態に、シャルティアも自身の魔法で対応を実行に移す。

〈自己<sup>タイム・アクセラ</sup>時間<sup>レーター</sup>加速<sup>タイ</sup>〉

周囲の時間の流れが、止まったような流れで緩やかになる。

つまり、止まっているわけでは無くそう見える程にゆっくりとした時間が流れるようになる魔法。

その魔法が展開中は、一切の攻撃や、攻撃魔法などは効果を発揮しない……というよりもっと正確に言えば発動は出来るが、ダメージを与えることが出来ないと言った方がより正しい。

しかし、その効果が及んでいる間は、シャルティア自身は自由に行

動することが出来る。

だからこそ、その流れが：効果時間が終わり、自分を見失い、戸惑う相手を楽しみにするように、落ち着いた歩みでシェイド・ボールの背後に回り、効果時間が終わるのをじっと待つ。

「浅はかでありんすね…：そんな手段でどうにかしようなど…：時間対策もしてありんせんとは…：準備不足でありんすよ？」

シャルティアは緩やかに流れる時間の中で、もう一度、背後に立つもう一人の装備に目を向ける。

（ああ…やはりアレが近くにあると妙に安心するというか…懐かしいような気にさせられんす…見たのは初めてなのは確かでありんしように…何故でありんしようね…）

…そして時が動き出す。

いきなり目標を見失ったシェイド・ボールが、そのまま、先程シャルティアの立っていた地点でブレーキをかけ、足を止める。

「油断は禁物でありんすよ？」。

その言葉と共に、背から腹にかけてスポイトランスの先端が突き抜ける。

（くそ！ シャルティアのスポイトランスはゴッズ武器…そのレアリティではさすがに〈暴食〉でも直接攻撃分に対応するのはムリだ！）  
「それにしても随分と力量が急速に上がったようでありんすね？ 我が眷属たちを吸い込んだ影響だと言わすわけでありんすかえ？」

「くう…〈次元の移動！〉」

今以上のダメージ量を受け、シャルティアの回復に回されるのだけは防ぐ必要があった。

だからこそ、緊急避難でシャルティアから距離をとったのだが、彼女のHPは先程の〈大致死〉と〈生命力持続回復〉の効果も合わせり60%くらいには回復している。

「距離をとりんしたかえ？ …：それなら時間対策も疎かにする愚か者に、決定的な差という物を見せてあげんしよう。 …」

控え席に座っていたベルリバーにはそれが全て見えていた。次鋒戦でシャルティアと戦う為、念の為にとあらゆる対策を取る為、自分の流儀に反して、見た目が「成金」みたいだと言う拘りがあったためにずっと避けていたことを実行したことに由来する。

そう、それは10本の指全てに指輪を装備すること、それに首飾りの仕様に仕立てたアクセサリ。

各種効果を己へと身に付けさせるための苦渋の選択だった。もちろんその中には時間対策用の指輪も含まれている。

だからこそ、「時間対策」をしていない相手に対して、どういう手段をとる可能性が高いのか：それをただ観戦して自分の力とするために、つけ入る「穴」をお膳立てしておいたのだ。

そんな緩やかに流れる時間の中で、シャルティアはのんびりとシエイド・ボールに歩を進める。

一步：

また一步：

さらにもう一步：

そうして歩を進める中、もう一度〈グレートリーサル大致死〉を唱え、足を止める：そのまま至近距離まで近づくと、優しいな微笑みを浮かべ、対戦相手の腹にそつと手を添えた。

特に意味はない、離れていても発動は可能だが：より相手に恐怖を与え、絶望の表情を張り付けさせ、そのまま固定させたいと：そう思っただけだ。

体中が口だらけの為、苦悶の表情がどういいうもので、絶望がどんな表情だか、彼女にわかるのかは謎な部分だが：。

そのまま、腹をなでながら、効果時間が終わるのを待つ。

（やはり何もこの者に感じるものはありませんね：、となると：やはり御方々は戻って来られないのでありませんしょうか：いいえ、シャルティア、信じるでありんす、いつか、必ずお隠れになった方々はきつ

と戻って来て下さると…！)

思案に耽っている内に効果時間は切れた、…そして時は動き出す。色が戻った世界、時間の流れが戻り、距離を取ったはずのシャルティアが転移したかのように接敵されていることに驚愕を感じていたシェイド・ベールに〈メッセージ伝言〉で指示が来る。

主の、その上位に君臨する大主様、おおあるしその方からの指示が主様から告げられる。

上位に位置する魔法が来ると予測されたようだ。

迷わず使えと…。

使うスキルを指示していただけたのだ。

ならば使うのみ、そう判断して発動させる。

(〈暴飲〉！)

口には出さず、シェイド・スピリット独自の念話仕様で、その効果が発動した。

そしてその結果、シャルティアが望んだ魔法は何の現象も引き起こさずにかき消える。

それにより、シャルティアにはその魔法が吸収されたか、又は無効化されたかのように映ったはずだ。

その攻防はほぼ同時だったが、わずかにシェイド・ベールの念じた方が一瞬早く発動する。

シャルティアの放った魔法は第8位階魔法〈エクストラロード破 裂〉

個人に対して有効な魔法で、魔力消費も同じ位階魔法の中で範囲系の物よりコストが手頃な魔法。

ベルリバーの所有している魔法が第8位階までであり、2割のステータスがダウンして、吸い込む限界量も本人と比べればダウンしているものの、スキル効果によって胃拡張してあったことにより、なんとか飲み込むことが出来たことに安堵する。

(しかし2回使わされたか…そうになると、この戦闘中ではあと1回か…使いどころは慎重に考えないと…)

「え？　なんで？　なんで何も起きないのでありんすか？」

「ん？　今、何かしたのかな？　もしかして、私の「上位魔法無効化」で打ち消せる程度の魔法で何とかするつもりだったのかな？」  
(もちろん、そんなのはウソだけどね。)

そして、一閃。

目の前に相手が居るのなら、それは刀で攻撃できる有効範囲だ。

「ぐううう…」

シャルティアがうなりながら下がる。

しかし、相手から余裕をもって近づいてきてくれたのだ、これを活かさない手はない。

さらに距離を詰めようとする…、再度いきなり見失う。

『危ない！後ろ！』

フレイラ様から注意の〈伝言〉メッセージが届く、振りむこうと動きかけた瞬間に、横っ腹に〈清浄投擲槍〉メッサーが突き刺さった。

「ふふん…さすがに不意打ちではこのスキルを打ち消すのは無理だったようでありんすね。」

(くっそ、あそこでまた〈自己時間加速〉タイム・アクセラレーターを使って背後に回るとは…それじゃ、見せ技程度になってしまっけど…ちよつと実験してみるか！)

一つ、思いついたベルリバーは、本来なら真剣勝負の最中、ギャンブルをするべきではないと思いつながらも、シャルティアなら、かかるんじゃないかと思いつき、試したくなった魔法を使わせる。

(〈幻影の視覚〉ビユー・オブ・ミラーージュ)

シエイド・ボールが再び、己の念話でその魔法を発動させ、手を高々と空に掲げる。

すると、そこにあるのは先程撃ち出した〈清浄投擲槍〉、それが鮮明に再現されていた。

「そ…それは…まさか…何度も使えるようになったのでありんすか？」

「ふふ…どうだ？…これでもう〈自己時間加速〉タイム・アクセラレーターは使えまい…どこに移動しよう…絶対命中のコレがあれば、お前の居場所など造作も無く判

明するのだからな。」

「ううう…、それは意外でありんしたが…それは何度使えるんでありんすか？ 絶対に避けられないなら、防げばいいだけでありんすからねえ。」

「そうか？ ふふん、ならば試してみるか？ これがお前程度のスキルで防げる程度のモノかどうか…？」

「いいでありんすよ？ 好きに撃つて来るでありんす、逃げも隠れもしんせんえ？」

「いい覚悟だ！ 行け！ 〈清浄投擲槍〉！」

「ふん！ 〈不浄衝撃盾〉！」

ぶわつと、スキルの発動により、赤黒くよどんだ色の障壁が現れる。

シャルティアの全身をすっぽり隠せるほどの、吹き飛ばし効果のある盾が展開された。

それと同時に、シャルティアへと迫る 〈清浄投擲槍〉の幻影。

実体が伴っていないため、映像だけなのだが…幻だけでいいなら、何度でも出現させるのは可能だ。

ダメージは与えられないというだけで、見た目は全くソレそのもの…迫ってくる脅威は、視覚に頼る限り、惑わされる。

完全にそれが幻だと疑い、〈魔力の精髓〉<sup>マナ・エッセンス</sup>ごしに、その幻を観ない限り、見破られないのだ。

幻や幻影を見破る能力持ちのアビリティやスキルなどがあれば話は別だが…シャルティアにはその機能は備わっていない。

しかし、幻である以上、〈不浄衝撃盾〉にはなんの衝撃も与えられないという懸念材料もある。

そこで、主の主（ベルリバー）から賜った課金アイテムの使用許可が今出たので、幻の投擲と同時に、それをシャルティアに向かって投げ。

シャルティアの視界は血を思わせる赤黒くよどんだ衝撃波を生み出す障壁、〈不浄衝撃盾〉によって遮られ、前方の様子はほとんど窺い知れない。

その為、〈不浄衝撃盾〉に当たった衝撃だけを受け止めることにな

る。

それは「投擲型」の〈爆撃地雷〉エクスプロードマイン

手榴弾の形に見えるソレは、本来の魔法では「地雷」の様に地面に仕掛け、接触した者に対してダメージを与える効果のモノだが、この課金アイテムは手榴弾の形の物に魔法が付与されており、投げて使うタイプ：つまり投げられて当たらなければ発動すらしらないという問題もあるが、外れても地面に当たればそこで爆発してしまう。

（普通の敵なら足下に落として、爆風でダメージを…という手もあるが：直接当たった方が効果は高いしな）

とは言え、シャルティア相手ではそうなたら無駄撃ちとほとんど変わらなくなってしまう…

〈不浄衝撃盾〉は、ものの見事に爆発も爆風も両方共、盾から発生する衝撃により吹き飛ばす。

その爆発音は、〈不浄衝撃盾〉の衝撃音でほとんど相殺されている。ハツタリとしては上々だった。

接近するなら、〈不浄衝撃盾〉で前が見えない今！とばかりにシェイド・ベールがシャルティアに迫る。

合計でそろそろ1.4倍に迫ろうかという攻撃力になっている刀を振るう前に、さっきのスキルを再度発動。

スキル〈羽々斬り〉はばを使用し、また刀の重さを一段と軽くさせ、連続攻撃の回数をわずかに上昇させる。

〈飛燕 乱舞斬〉！

それは、一度の攻撃で同時に10の斬撃を繰り出す技。

しかし、そのダメージ量は重さが乗っていないため、10の連撃であるのに、そのダメージ総量は通常の攻撃の10倍ではなく、2倍でしかない。

しかし、今は刀の攻撃力自体に炎属性が付与され、少しだが攻撃力も上がっている。

その為、通常の1.4倍のダメージ量に上がっているのだ。

徐々に、〈生命力持続回復〉リジェネで回復し続けている上で、かつ



グレートリーサル  
〈大 致 死〉でも回復されている以上、少しでもダメージを重ねておく必要はあるのだ。

さつきまでは25%程だったが、その回復により、今は80%近くには回復されてしまっている。

一方、ここまでの時点でシエイドボール自身も50%を大きく下回る程度のHPしか残されていない…スポイトランスに貫かれた時と〈清浄投擲槍〉の不意打ちダメージ分、減らされたためだ。

あとはどこまで、シャルティアにスキルを使わせ、使用回数をゼロにするか…にかかっている。



「う…うう…うつとおしい、この連続攻撃は…、これじゃ〈時流遡行〉が使えんせん…」

〈時流遡行〉のスキルは1発の攻撃に対して、大ダメージであればある程、効果がある。

なので、直接ダメージでも魔法ダメージでも、一発で大ダメージを出せる火力タイプの攻撃なら、すぐに巻き戻せるが、細かく小さいダメージを重ねて与えて来る相手には使いにくいスキルなのだ。

なぜならわざわざ小さいダメージを一度消す為だけに使うのはスキルの無駄使いだし、使ったとしても、その小さいダメージ一発分だけしか適用されない為、一日の使用回数が2回となっているスキルを使うには明らかに過剰すぎるのだ。

どうしても後々まで残しておきたいという意識に支配され、細かいダメージだと使いにくいのが大きい。

だがそのダメージが小さくて済んでいるのはシャルティアの装備している真紅の鎧があるから…というのが一番の理由だ。

そうでなければ、それなりのダメージが来ていることだろう。

タイム・アクセラレーター  
〈自己時間加速〉で距離をとれば〈清浄投擲槍〉、接近されれば〈時流遡行〉の使いにくい連続攻撃が来る…、自己時間加速で距離をとるうにも、この息をつかせぬ攻撃の中では発動の時間すら許してはくれ

ない…きつきみたいに腕を振って弾けばいいんでありんしょうが…、全体的に実力が向上している以上、今度は弾けないでありんしょうね…となれば、残るは…)

シャルティアは頭を悩ませる、どうすればより良い選択なのか…？  
シャルティアはあの時、気づきべきだったのだ。

例え、自分の得意とする、至高なる創造主に与えられた切り札たるスキルがそのまま再現されたとしても…、その時は自動命中の効果が発動していた為、ムネに魔法陣の目印が輝いていた…しかしシャルティアにとって、それは当たり前、当たらなければ意味がないし、少しのMP消費で済むならケチっている場合ではないという思い込みから…彼女にとって追加でMPの消費をするという行動はセツトだったのだ。

そう、幻の〈清浄投擲槍〉を出された際、撃ち込まれた際、自分のムネに『魔法陣の目印』が表れてなかった事を確認するべきだったのだ。

そうしていたら、アレはブラフだと…、ハツタリだと気付いたはずだった。

しかし彼女はそれを怠った、その為、その幻が本物だと信じ込んでいる。

その呪縛から離れられないでいた。

長くもあり、短くもある思案の末、シャルティアは覚悟を決める。  
これは時間との勝負だ。

ほんの僅かでもズレが生じれば相手に対策を取る時間を与え、反撃の余地を与えることになる。ならば、間髪入れずに、全てをこの一連の流れに掛けるべきと判断して、一気にケリをつけようと…全てはナインズ様の目の前で無様をさらさないため、勝利をお見せする為と動き出す。

「しゃらくさいわああ!!! 〈不浄衝撃盾〉!」

一方的な刀の連続攻撃で、今やその攻撃力は、すでに2・2倍にまで達していた。

勢いで押していたシエイド・ボールが、至近距離で出された〈不浄衝撃盾〉により吹き飛ばされる。

しかしそれで終わりではない、吹き飛ばされ、体勢が不十分な内に仕掛けなければ…とシャルティアが準備するのは最後の〈清浄投擲槍〉である。

絶対命中の効果を寄せ、吹き飛ばされながら闘技場の壁に背をぶつける瞬間、ヤツに刺さる様に…と少しの遅れも許されない！ その覚悟を持って臨む。

「行け！ これでおしまいでありんすう!!」

最後の〈清浄投擲槍〉が、吹き飛ばされている最中のシエイド・ボールに迫る。

「くう…させるか！ 〈飛行〉<sup>フライ</sup>」

〈飛行〉<sup>フライ</sup>の魔法で空へと飛びあがり難を逃れたシエイド・ボール。

しかし、MPを追加で消費されている為、追尾機能で後ろから迫って来ている。

「くう…ならば、〈軽速飛行〉〈クイック・フライト〉」

それは〈早足〉〈クイックマーチ〉の飛行版、飛行速度を底上げしてくれる魔法を使い、少しでも距離を詰められる時間を稼ぐため、ひたすら空を逃げ回る。

「いくら逃げてても無駄でありんすよ？ その自動命中の効果は当たるまで消えることはありません。」

空を飛翔し、逃げ惑うシエイドを余裕で地上から見上げ、嗜虐の笑みを見せつつ告げるシャルティア。

そして、シエイド・ボールは、追って来た〈清浄投擲槍〉を誘導するように空高く飛び上がった後、放物線を描くように急降下を始める。

「なにをするつもりでありんしようね、無駄なあがきというのは見て滑稽でありんす。」

「どうせ結果は決まっているのに」

そう結論付けているシャルティアの前で、シエイド・ボールは地面すれすれまで降下したかと思うと、低空飛行に切り替え、シャルティ

アの居る方へと逃げて来る。

「破れかぶれでありんすか？ どちらにしろ、スポイトランスで貫かれるか、〈清浄投擲槍〉で貫かれるかの違いでしかないでありんすし： 引導を渡してあげんしようかえ？」

ゆっくりと構えを取って、待ち受けるシャルティア。

そして、視線が交錯した刹那：、シェイド・ボールの姿はかき消える。

念話で、発声をせずに〈完全不可視化〉を使用したのだ。

それと同時に〈次元ディメンショナルの移動

により、再度シャルティアの背後に回り、その場で、シャルティアの影の中に沈んでいく。

擬態の能力で、身体構造は変化していても、自身の持つ生来のスキル、〈影潜み〉はいつでも、どんな状態になっても使えるスキルなのだ、起こり得る僅かな不安要素も排除して臨む。



シャルティアは姿を消したシェイド・ボールを見た瞬間、また転移魔法を使ったのだろうと判断、即座に〈自己時間加速タイム・アクセラレーター〉を使用。

そこで、奥の手である〈時間休止タイム・ポーズ〉をほぼ同時に発動。

詠唱の為の長さの関係で、〈時間休止タイム・ポーズ〉の方がわずかに先に言い終わる。

シャルティアが「タイムー」と発声したのを確認してから言い始めても〈時間休止タイム・ポーズ〉の方が同時か少し早く言い終わるのだ。

しかし、その効果まではシャルティアを上回るわけではない。

時間の流れが緩やかな中でも、シャルティアが1・2歩分歩くくらいの行動で、シェイド・ボールも同じ速度であるという前提だとしても、ようやく1歩というくらいの違いがある。

だが、それだけの行動が出来れば、〈完全不可視化〉状態であるシェイド・ボールを見失っているシャルティアの目をごまかすことは出来る。

それを見越して、念話で発動させたのを、まだシャルティアは気付

いていない。

シャルティアは先ほどと同じように、周囲に出現するのを待ち受けるも、いつまで経っても現れない。

（現れていたのだが、〈完全不可視化〉状態の為、普通の視点では見えていなく、その内に影に潜まれてしまっていたのだ。）

シャルティアが〈不可視化〉の可能性を見出し、即座にライフ・エッセンス〈生命の精髓〉を使うが、時すでに遅し、影の中に隠れていた為、自身の影に目を向けなければ、存在に気付けない。

どこにいるかを見つけれないまま、効果時間が切れ、通常の間時間の流れに戻る。

その瞬間、〈完全不可視化〉状態のシエイド・ボールが影から抜け出し、シャルティアに組み付く。

見えていなくても、組み付かれた感触は感じられるため、シャルティアは焦り始めた。

「な…、それは…もしまや不可視化？どこに隠れていたかと思えばそういうコトでありんすか！ どこにも反応がなかったのはそういう訳だったという事でありんすね。」

「ふふ、切り札は最後まで隠してこそ、意味があるのだよ？ このまま、ボクと共に貫かれるがいい！」

そして、シエイド・ボールを追って来た〈清浄投擲槍〉が狙い過たあやまずに最短距離をまっすぐに飛来、シャルティアごと、シエイド・ボールを貫くことになるだろう———と思っただが、いつの間にかシャルティアの姿がない。

そう、シャルティアは吸血鬼の持つ特性を利用し、肉体を持つ実体からスキルによって霧へと変化する。

それにより、非実体となったアストラ星幽界体のシャルティアは、組み付かれた状態から苦も無く脱出に成功する。

「非実体の霧となったか、ならば…喰らうがいい！」

トリプレット・マキシマイズマジック〈魔法三重最強化〉！ アストラ・スマイト〈星幽界の一撃!!〉

アストラ  
星幽界体のまま、その身に非実体攻撃することに特化した魔法を受け、その霧はたまらず地面に降り立つ。

その口から吸血鬼らしく赤黒い血をゴポリと、口の端から滴らせて…。

口の端から血を流しながらも不敵に笑うシャルティア：…それと同じ時にシェイド・ベールもその身に光り輝く戦神槍を受け：…そのまま、立ち上がろうとするシャルティアに向けて、大きく手を伸ばす。

「…何をするつもりでありんす？」

「さつき、お前の眷属がどんな目に遭ったのかは見ていただろう？  
それと同じ道を辿らせてやるだけさ」

どこまでも冷酷な声音を装い、手の平に一つの口を展開させ、牙をむき出し…

「吸い込め！ スキル！ 〈風穴〉」

（よし、今回は「スキル」とまで言ったんだから間違いなく勘違いしてくるはずだし、そんなスキル、ユグドラシルには無かつたんだから脅威を感じても不思議じゃない！）

シェイド・ベールの手の平の口から、再びコーン状の竜巻がシャルティアに襲い掛かり、猛烈な力により吸い込まれて行く。

それは全力で足を踏ん張ろうとも、背中の翼を使って飛ばうとしても…、スポイトランスを地面に突き刺しても…その吸い込みの勢いは衰えず、地面に突き刺した穴が一本の線になっていくのを当たり前であるかのように…禍々しくも見える牙を生やした口がシャルティアに迫る…というより、シャルティアがその口に引き寄せられて行く。

「そうはさせません！ 〈自己時間加——〉」

「させんよ！ 〈破 裂〉」

それは、先程シャルティアから 〈暴飲〉 の効果で吸い込んだ魔法。彼女の使う威力よりも魔法攻撃力が上がっているシェイド・ベールの行使する今の方が、シャルティアの魔法防御を突破して、ダメージを与えるには充分の威力がある。

もちろん、「風穴」は、彼女を吸い込むことより、彼女の方から射程

範囲に引きずり込むことの方が主の目的である。

どの道、100LVのシャルティアを吸い込むなど出来るはずがないのだ、それを知ってるのは共にギルド戦でも、日常のモンスター狩りでも行動を共にした者しか知らない。

現状ナインズこと、モモンガ、そしてベルリバー本人しか知らないことなのだから：もしシャルティアがそれを知っていたらそこまで吸い込まれることに抵抗はしなかつただろう。

「吸い込まれる」というエフェクトが発生しても、結局「吸収」という結果には結びつかないのだから。

「ぐ……うー！」

「どうだ？先程お前が私にしてくれようとしたコトだよ？しつかりと味わえたかな？それが人の痛みを知るという事だ、まあ、そこまで痛手ではないだろう？まだまだHPに余裕はあるんだから、存分にやり合おうじゃないか！」

（こ、こいつ…いかれてるんでありんせんのか？）

もちろん、そう思わせるのが目的で、本心は違うのだが…、口だけで言い放題のベルリバーより、実際にシャルティアと戦わされるシェイド・ベールの方が、実際たまったものではないが、そこは召喚された者。

（主様、そして大主さまのお望みならば、この命！）

というくらいに張り切っている。

とは言っても、実力は未だ、シャルティアの方が上、スキルはほとんど使い切り、後は〈時流逆行〉が1回と、真正銘の切り札〈死せる勇者の魂〉のみなのである。

霧となる手段も残されているが、相手の魔力はまだ余裕はある、再び〈星幽界の一撃〉を喰らわされてはこちらが不利になる…そう考えられているシャルティアはこう思う。

“なんてめんどくさい相手なんでありんしょう”  
…と。

(こうなれば回復手段の回数が減ろうが、攻撃魔法を使って削りきるべきでありんしょうか?)

少しそんな考えが頭をかすめるが、それを棄却する。

殺すのならまだしも、殺してはいけないのだ…手加減をして力を抑えるためにも相手からの多少のダメージは覚悟して、回復は残しておくべきと判断を下すことになった。

(今までの戦い方からして相手は回復手段は多くないはず…あのへ風穴<というスキルがどんなものか、魔法をどこまで無力化できるかわからないことが多すぎて下手に動けんわえ…)

(それでも私は階層守護者！ 決して負けを認める訳には行きんせん！HPもまだ7割は残っておりんすし…向こうの体力は半分以下…足を止めての直接攻撃の応酬になっても負けるはずはありんせん！)

決断したシャルティアの行動は早かった、技を出させる暇を与えず、ただひたすら自分の間合いで相手とぶつかり合う。

シエイド・ベールもそれに応え、お互いの力を出し合う。

そして、そうなつてからはそこまで時間もかからずに、決着の時が訪れた。

「そこまでだ！ シャルティア、勝負あり！ 先鋒戦、第一回戦はシャルティアの勝ち星とする。」

「え？」

「勝負に夢中で忘れたか？10%を下回った段階で決着というルールだっただろう？」

「ああ、そうでありんしたね、目の前の戦闘に熱くなりすぎていんした…、ナインズ様、ありがとうございます。お見苦しい戦いをお見せしてしまいんした…この処遇はいかようにも…。」



ナインズは満足そうに頷きつつ、跪くシャルティアの肩に骨の手を乗せる。

「いや、よくやった、相手の粘りも大したものだが、それを最後まで圧倒したシャルティアの戦いは見事であった！ 特に『血の狂乱』を抑え込んだ時のお前は、今までとは違うナニかを感じさせるに充分だったぞ：ムネを張るといい。」

支配者からの評価に、喜びの波が押し寄せながらも、必死にそれを押し殺し、頭を深々と下げる。

「それも、全てはナインズ様からの信頼に応えたいが為、その一心でありんした、辛うじて勝ちを拾えんしたが、次も御方の為に勝利を捧げたいと考えていんす。」

そう答えるシャルティアに：そして、最後まで粘って戦った シェイド・ボールにねぎらいの言葉をかける。

「両者とも、大儀であった！ ついては次戦が始まるまで、しっかりと休み、万全の態勢を整えると良い！」

勝負が終わった後、シャルティアがシェイド・ボールの下まで歩み出て、語り掛けて来る。

「残念でありんしたねえ：まあ、最後のあがきは中々に滑稽でありんしたよ？ 敵わないのを知りながら悪あがきする、弱者そのものの戦い方を楽しませてもらいんした。」

ニヤリと表情を歪ませ、上から見下ろすように、シェイド・ボールを見下した言葉を投げかける。

「弱い割にわらわを相手に良く戦いんした、下等種にしてはよくやった方だと褒めてあげんしよう。」

（うまく踊らされたのはどちらだか：もうすぐでわかるさ：シャルティア：シェイドの頑張りを無駄にしないためにも：な。）

「ご苦労様でありんした、それなりに楽しかったでありんすよ？」

そう言いながら、くるりと身を翻し、ナザリック陣営の控え席に

戻っていく。

だがその表情は勝利者というより、苦戦を強いられた拳句に相手の策にまんまと嵌ってしまったかのような心境がどうしてもぬぐえない：そんな沈痛な面持ちで顔面筋をヒクヒクと引き攣らせていた。

「くそ！くそくそお！ やっぱり怒りが収まらないであります！」

「なくにを言ってるのよ？ 勝ったのはあなたでしょ？ シャルティアあ？」

横に近づいてきたアウラが語り掛ける。

「何が勝利でありますか：あんな見苦しい戦い：全然美しくありません！ しかも至高の御方々を愚弄されて：、その上余裕で勝てるど踏んでいた相手にスキルのほとんどを使わされて：情けないの一言であります！」

「まあ、確かにあなたにしちや、泥臭い戦いになってるなど思っただけどね、でもシャルティアのお陰で随分相手の手の内が見えてきたように思ってるんだ、感謝してるよ、シャルティア。」

イヤなモノを見たような：、ありえない場面で、ありえないヤツが不自然極まりない言葉を告げて来たような、この世の全ての苦虫をかみつぶしたような表情をシャルティアが浮かべている。

「あなたから感謝なんてムズ痒いだけであります：って、アチシを踏み台にしたでありますね…」

「まあまあ、あなたの役目はまだ終わってないよ？ 今の内に回復しときなあって、ねえ？ ルプスレギナ？ シャルティアの回復をお願いしていいかな？」

「はい！ 了解！ つつ、シャルティア様もずいぶんとガチに殴り合っで戦ってたつすね。」

「へ大治癒ヒールつとおく」

「痛い、痛い、痛い！ それはダメージを負うので止めて欲しいであります！ アウラ！ ワザとでありますしよう!!」

「あ、バレた？」

「いいであります、自前で癒しんすから！ へ大グレート致死リーサル」

そうして、自前の魔法で癒すしかないシャルティアは、余計にMP

を消費してしまうのであった。

「ところで、さっきの話でありんすが、何のことでありんす？　今勝つたばかりでありんすのに、先があるでありんすか？」

「最初の話を聞いてた？　相手は勝ち抜き戦形式にするかどうか分からないだし、どうなるか？　だけど一人目が負けた以上、次は二人目でしょ？」

「なら、コキュートスと相手の二人目で戦うと言わすのが筋じゃありませんでありんしょうかえ？」

「あんた、勝ち抜き戦って言葉知ってる？　その場合だったならシャルティアは負けない限り降りられないの…多分、良く解からないけど、そういうルールなんじゃない？　向こうが負けを認めない限り…つて気がするよ？」

「はあ…面倒なことになったでありんすねえ…かと言ってワザと負けるといふのは階層守護者としてはあり得ないでありんす。実力で負けたならまだしも、お情けで勝ちを譲るなんて、ナザリック地下大墳墓の階層守護者、シャルティアオールブラッドフォールの名に懸けて、次も勝ってみせるでありんすよ!!」

「そうそう、その意気！　応援してるからね、シャルティア！　とにかく頑張つて！」

と、アウラがパチパチとその小さな手を叩いてシャルティアを激励し、その意味を込めて彼女の背を叩く。

「ええ、任せておくでありんすよ？　あんな優男、ひとひねりでありんす！」

などと言いながらシャルティアは、ひたすらに、MPの回復に努めている。

とは言え、時間回復なので、全回復するには時間が足りなすぎ、回復量は微々たるものになるのだが…



そしてここはベルリバー側の控え席。

〈魔力の精髓〉<sup>マナ・エッセンス</sup>を唱え、シャルティアの方を伺うと第一戦の開始前の時に比べると、約半分になっている。

(そりやくかなりなりふり構わず戦ってたからな…スキルも随分と使ってたようだし。)

しかし、当のベルリバーはかなり気が重くなっていた。

何故なら、シェイド・ベールがあれだけ粘って戦って、やっとMPを半分近くに削ることが出来たのだ。

自分はどこまで善戦できるだろうと…

自分の身の内には、まだ老公も居て、とりあえずエルフの3人とはうまくやっているようだ。

腹の中に意識を向けると、すでに今の状況を驚きながらも、観客として楽しんでる部分も窺い知れる。

あとで、彼の〈武技〉も借り受けることしよう。

腹の中の彼女らから魔法の支援も受けられるんだし…ひよつとしたら、彼女らに預けたマジックアイテムの効果を自分の体を通して外に具現化することもできるかもしれないしな…

などと、なるべく明るい方向へと考えを持って行きながら、腰に装着している「風車のベルト」をなでて、さするのであった。

第56話 先鋒2 シャルティア VS ベル  
〔中編〕

シャルティアとの戦闘が終わり、シエイド・ペールがうなだれながらこちらの控え席まで戻ってくるのを、全員で出迎えてあげた。

「よし、よく頑張ったな！ まさかあそこまであのシャルティアを追い詰めるとは思わなかったぞ？ 予想以上に活躍してくれた！ ありがとう」

『大主様おおあるじ…いえ、しかし、御自ら手渡していただいた課金アイテムとやらも使い切れる力も無く…余力を残したまま負けてしまうなど…どうお詫びしたらよろしいか…』

「ああ、気にする必要はない、お前が戻って来てくれたこと、それが何より、課金アイテム以上に価値があるのだ…今の戦いで得た経験…それをうまく使いこなせるようになれば…それがお前に課す私からの「負けた罰」だ、しかと心に刻み付けておけ？」

（課金アイテムはもう、買おうと思っても買えないからな…使わずに済んだのならそっちの方が嬉しいって感じだし、召喚モンスターも成長の余地があるんなら、それを検証してみるって言うのも、ある意味、アインズさんの力になれるかもしれないしな…）

『おお…私のような使い捨ての使い魔如きにそのようなお言葉…もつたないことでございます。』

（「使い捨て」って…、誰かにそう言われたわけでもないだろうに、お前の認識も大概じゃないか？）

「ああ…ちなみに、お前はどの程度までこの世に留まれるんだ？」

『は？… それにつきましては、こちらに呼び出されてから3時間経過すれば、この場より、元居た世界に還っていくことになりましたが…』  
「そうか…それだとすると、せっかく今回の事で格上の者との戦いで身に着けた経験が失われてしまうのは…なんとももつたない気がするな…」

『おお…私のような者のためにそのような…使い捨てにされるのが存在意義である私に、未永く仕える道を思索してくださいとは…生涯にわたる誉れにございます。』

「いや、何もそこまで御大層な理由じゃないんだが…？」

『ならば【同化】という手段もございますが、どうされますか？』

「ん？【同化】か？ あれは戦闘中じゃないと使えないんじゃないか？」

『いいえ、そのようなことは…何かのスキルと混同されて認識されているのでは？』

（そんなはずはない、シェイドスピリットは本来、プレイヤーが選べる種族じゃなく敵モンスターか召喚モンスターの扱いだ、だから戦闘以外の活躍を能力に割り振られてはいない筈…戦闘以外だと【影潜み】ぐらいだったはずなんだが…？）

「そうか…そうなら私の考え違いだったかもしれない、確か、私の知る【同化】は、死にそうなHPとなったシェイド・スピリットが自分と同じHP残量か、それ以上残っている同族と【同化】で一つになることよって、HPとMPが全回復する…という感じだったと思うのだが…？」

『恐らくおおまかな感覚ではそれで問題ないかと存じます、しかしそれだけではなく、自意識と取得した経験則なども同時に、他個体と【同化】することで、より効果的に記憶の共有を果たす事となり、戦闘や、日常生活などの面に於いても選択肢の幅が大きくなり、経験の向上を果たすことが出来ます…残念ながら、レベルアップという現象にはつながりませんが…』

（なにそれ！ そんな仕様なかったはず…、ああ…あれか、例の異世界に来て仕様が変わったってやつね、確かに【同化】したのにHPとMPが回復するだけって変と言えば変な感じだもんな…。 版權切れの超有名マンガでは【同化】することによって戦闘力が大幅にアップするっていう能力も、見たことあったけど…さすがにそれは望めない感じだな…。）

「だが、それがあつてもどうするんだ？ 1個体が3時間こちらの世

界に留まれて、時間切れ寸前に別個体と同化する手段をとっても、フレイの装束から呼べるのは一度で4体だ：12時間で消滅することになってしまわないか？」

『ああ、その点は問題ございません、3時間というのはこの世界に留まれる精神力と言いますか：体を構成する魔素と言いますか：そういうのが大気の影響で薄まって行った結果、大気に触れればなしで存在し続けられるのが「3時間」ということなのです、つまり最小時間ですね：ずっと影の中に隠れたままで居られるならば、大気とは触れることはないので構成する魔素が削られることもありませんが、なので、それらを繋いでいけば1日2日は、何とでもなりましょう。』

（ご都合主義か！　なんて都合のいい解釈なんだよ！　そんなのエンサイクロペディア百科事典にも書かれてなかったぞ！）

などと、ツツコミを入れている最中、にベルリバーは忘れていたことに思い当たる。

確かにフレイラがその装備から、一度に呼び出せるシェイドスピリットは4体までだが：時間を経過させれば一日にあと2回使えるということをし：すっかりそのことを忘れていた事実で内心で恥ずかしい想いをしながら、話の内容をすり替える。

「そうか：それなら、このイベントが3時間以上続きそうな流れになりそうなら、控え席で待機している間にフレイの影に隠れている個体と交代だな：、そして装備の方もそちらに渡して、次の守護者とも戦闘してもらって、その経験を「同化」させて、倍の経験則を身に付けてもらおう。」

（お、そうだそうだ、シェイドに渡した刀の「鞘」は預からせてもらおうかな：せっかく積み上げた攻撃力上昇が初期値に戻ったら目も当てられないもんな：。それと、観戦の間、ずっと素振りをさせてるのも手段としては面白いかもしれないな：）

そこまで話をしていると、念話で仲間内には会話が届いていたのだろう、フレイラが「それが良いと思われれます。」と賛同の声を発していた。

『は？　私はシャルティア様に負けてしまった以上、出番がないの

では?』

「お前こそ、何を言っている? 階層守護者だぞ? そんなの相手にするのに現地民を合わせた5人で対抗できるはずがないだろう? ナインズさんにも話しは通してあるから、そこはさらっとクリアできる問題だ、次のコキュートス戦も、お前が先鋒だ。活躍を期待してるぞ?。」

ベルがそうシェイド・ベールに告げるとフレイラもその後ろからすつと現れ、激励の言葉を投げかける。

「そうですよ? あなたはあなたのすべきことを全力で成し遂げればよいのです、これで終わりではありませんよ? 次も頑張ってください。」

『おお...おお...なんとという慈悲深いお言葉...私は...私は...まだ利用価値があるのですね...このまま用済みとは言われないで済むのですね...』

ポタポタと、黒い雫が、シェイドベールの瞳のあるだろう辺りから滲んできて、溢れ始めている。

(召喚モンスターって、そんな心の闇をみんな抱えてるのか? 利用価値とか...用済みと言われるとか...そこまで卑屈にならないでもないと思うんだが...?)

「なんか...こう、モンスターって怖いもんばつかかと思っていただけ、分かり合えそうな存在もいるのね...まさかそんな風に考えてるモンスターもいるだなんて目から鱗よ。」

(イミーナさん、エルフなのに、その言葉知ってるのか...その言葉、元々キリスト教の聖書に載ってる記述だぞ? アークエンジェル種とかが存在するのにキリスト教の概念がなかったり...かと思えば、聖書に書かれてる一部が世の中の認識に浸透していたり...なんかこの世界めちやくちやだな...)

正確に言えば、イミーナの発する言葉は、親から教わったエルフ語



の言い回しも混ざっており、エルフ語の中での発言と人間の話す言語との混合語である。

ベルリバーの知っている日本の格言や、諺、言い回しなど、単純に似ているものに翻訳されているだけに過ぎないのだが……恐らく、そのまま伝わっているのは単純に固有名詞だけだろうという点については、まだ彼は知る由もなかった。

……ついでに、フレイラの身に着けている黒装束の発動効果は（シェイド・スピリットなら）一度に4体を呼び出せるが、一日に3回使用できるということをつかり忘れていることにもベルリバーはまだ気づくことが出来ないでいた。



一方、ここはナザリック側の控え席

「ナインズ様、初戦は無事に勝ち抜きまして御座います、いかがだったでありますでしょうか？」

（まあ、言いたいことはあるけど、最初は部下の働きに対して労いの言葉をかけてあげる事、そして、褒めてやることから、それが上司としての務めだもんな……最初に指摘から入っちゃいけない！）

そう思いながらも口を開いたナインズ。

「うむ、初戦が初勝利で飾れたのは喜ばしきことだ、やはりあの者らの実力はこの世界での基準というよりユグドラシル世界での基準に近いように見えた、使う技も〈武技〉ではなく〈スキル〉と言っていた様だったからまず間違いないだろう、その者らに対して勝利出来たのはシャルティアの功績と言えよう、まずはよくやってくれた！ 私は誇らしいぞ？」

跪くシャルティアの肩に骨の手を置くナインズ……後ろでギリリという音が聞こえた気がしたのは気が付かなかったことにしてスルーしておこう。

「だがシャルティアよ……初戦は勝利で飾れたが、お前にはその中で」注

意」が加えられている、その点だけは気を付けておく必要があるろう、次に相手側の次鋒で出て来る者との戦いではさらに汚点を重ねることのないようにな？」

そこで驚いたような表情をし、ナインズにすぎるような面持ちになるシャルティア。

その言葉に即、反応を返していた。

「お言葉でありんすが、どこで失態を演じてしまったのでありんしょう？ 最初から最後まで圧倒出来ていたと思ひんすが…？」

言葉の意味が解っていないと思われるシャルティアに、軽くかぶりを振ると、視線をデミウルゴスへと向け、ルールの説明と、「注意」の原因になった行為の説明を指示し、あとはデミウルゴスに任せることにする。

「いいかい？ シャルティア：先ほど説明したルールでは装備の規則に従った場合、我々のように瞬間で装備を入れ替えられる立場の者は装備を破壊された場合、若しくは著しく破損してしまった場合に於いて「新しく装備し直す」ことが認められると説明したはずだったが、キミはそれを覚えているかな？ シャルティア…？」

「も…もちろんであり…、あ！」

「はあ…ここでようやく気が付いたようだね…、そう…キミは最初に装備していった、ペロロンチーノ様より与えられた「究極の体操服」なる装備に身を包み、戦いに臨んだはず…であるにもかかわらず、これといった破損も、ましてや破壊もされてない状態で真紅の鎧へと装備を変えてしまった…：そこが「注意」となってしまったということなのだよ、解ったかね？」

「うゝわゝ、やっちゃったねゝシャルティア…完全勝利のはずが、汚点1とか…まあ次で挽回するしかないよね、で？ 次もその全身鎧のままで戦う感じになるの？」

片手にマイクを握ったまま、その手を腰に当て、シャルティアに声をかけるアウラ。

慰めているようにも、いじっているようにも聞こえるが、ただ単純

に「やつちやつたことはしようがないじゃん」という意味で声をかけている感じだ、多分それ以上の意味は含んでいないだろう。

表情からして、そんなに気にしていない様子だ。

しかしシャルティア自身はそうも行かないようだ、そこまで割り切れるはずもない…なにしろやかした当人であるからだ。

「ああ…御方に捧げるべき晴れの舞台、その初戦を完全勝利で飾るはずでありんしたのに…まさか…1つ汚点を残すことになりんしたとは…」

さすがにここで見ていられなくなったナインズが、さりげなくフオーローに回り、シャルティアに語り掛ける。

「ま…まあ、私からの指示だったとはいえ、どちらもお前の創造主、ペロロンチーノさんからの装備ではあったが、その真紅の全身鎧の方が「真剣勝負」という点に限っては群を抜いて上位の性能でもあるし、シャルティアにとっても一番馴染んでいる装備だったのだろうからな…それだけの意気込みがあつたということなのだろう？　そこまですで恥じ入ることはない…、ここはシャルティアを責めるより、相手の健闘を称えるべきだろう、ナザリツク最強の守護者と言ってもいい程の実力あるシャルティアを相手どって、MPは半分使わせ、スキルもかなり消費させた上で、まだ命があるのだ…相手も相応な対策で戦っていないければあそこまで喰らい付いて戦うことなどはそうそう出来ないだろう、自信を持って！シャルティア…次も期待しているぞ？」

「はい…この戦い、「勝ち抜き戦」という種類だとのこと、勝ち続ける限り、下りられないという規則であると聞きました、こうなればすべての戦闘を私一人の勝利で飾り、ナザリツク地下大墳墓の偉大さを見せつける所存でありんす！」

張りきってそう主張するシャルティアに対して、一瞬だけ間が空いたような空気が流れた後、デミウルゴスとナインズ様は少し後ろに下がりが、なにやら相談をされているようだ…一体、今の発言に何か問題があつたのだろうか？

……しばらくの後、二人は再び元の位置に戻って来た、そしてナインズは守護者全員に聞かせるように説明をし始めた。

「ああ…すまないな、シャルティアよ、お前の意気込みは非常に嬉しいものだ…私も、通常時であればそれは望むところであったかもしれない、だがこれは…そうだな…、何て言えばいいか…？」

と、少し、考えを巡らせるような素振りをした後、こう発言し直され、内容の訂正をされていた。

「これは、先程までお前たちに課していた命題「ワーカーホイホイ」計画とはまた違った趣旨となつているのは、説明しなくても解つてくれていることだとは思うが…これは、先程のアチラ側から進呈された「贈り物一式」に対する返礼として設けた…いわば親善試合のようなもの…だからこそライフをゼロにしないように…というルールが入っているのだ…まあ、もし間違つてゼロにすることがあつても私からの「ワンド・オブ・リザレクション」で蘇生させるつもりだが…、私の手持ちのアイテムを使わせるような事態にはならないし、そのようなことは起こりえないとお前たちのことを信じている。」

そこまで言い切ると、少し時間をおいて、本題を守護者達に告げようとナインズは心に気合を入れ直し、最初に周知徹底し忘れていた大事な内容を告げていく。

「まあ、その、つまりは何を言いたいかと言うとだ…今回の「勝ち抜き戦」は「殲滅戦」ではない、『手を抜いた戦い』と言うと聞こえは悪いが、これはお互いの力量を知る為の情報収集の一環だ。この機会を通じて、こちらの世界にも要注意な事態が起きた場合、その対処法を知る必要があると皆に学んでもらう為、向こうに協力してもらつてい要素もある…だからシャルティアが相手の戦力全てに勝つたとしても、それで終わりではなく、次のコキュートス戦でも、更にその次のアウラ戦でも、向こうは先鋒、次鋒、中堅…と、同じメンバーで再度挑んで来る流れになつている。…その大前提を伝え忘れていたことは私の責任だ、どうか許してほしい。」

この戦いの趣旨を「こういう流れにしましょう」として「事前の建

前」をベルリバーと決めていたナインズは、その大事な部分を伝え忘れていたことに、先程のシャルティアの言葉で気付かされたのだ。

あそこで、あの言葉をシャルティアが言ってくれなければ、きっと忘れたままだったかもしれない…と、流れるはずのない汗が背中を流れ落ちて行ったような感覚に囚われていた。

「そ…そのようなことはありません、至高の御身よ、頭をお上げ下さい…、こちらのルプスレギナはともかく、あちらにもペストーニヤを配しておられることを鑑みますと、それは当然の帰結かと思われ、我々の考えが至らず、御方のお望みを理解しきれなかった私供の方にこそ落ち度があったと考えます、どうか…どうか、そのようなことはおっしゃらないでください。」

アルベドが困惑しながらも、目の前で頭を下げ謝罪するナインズを制し、頭を上げてもらえるようにと慌てふためいている。

「そうです、ナインズ様、そのような流れであることは、ルールを作るにあたり、私の方でも自らで気付かなければならなかった要素、そう伺える言い回しが入っていたにも関わらず、そこに気付けなかったのは我々の責任、御身がそこまでされることはありません、罰せられるべきは我々の方なのですから…」

さすがのデミウルゴスも、アルベドにばかり責任を負わせる訳には行かないようで、二人して相争う様に「私のせいです」の奪い合いをしている。

「いや、すまないな…私が知っていることは皆も解ってくれているだろうと考える癖は改めなければ…と常々思っているのだが…難しいものだな、今後も私の言葉が足りないようなことがあった場合、その都度、教えてくれるとありがたい、皆も覚えておいてくれ、期待させて欲しい、それでいいだろうか？」

（なんとかこれで誤魔化せるかな？ 単に言い忘れて、伝えていなかっただけなんて知られたら、支配者としての格を落としてしまうかもしれないからな…体裁を整えるというのも大変だよ…ホント。）

ここまで来て、ようやく守護者達も安心したようで、「私達も、御身の叡智に及ばず、お望みを曲解してしまわぬよう、気を引き締め、心中の真のお望みを汲み取れるよう、日々精進していくようにしたいと決意を新たにしました！ 御身よ、これから我らをお導き下さい。」  
そう言つて、忠誠の儀の時のような流れへと移つてしまふ。

こうなつたら、もう、こちらから話しかけないと守護者達から身動きするようなことは、今までの展開的に難しいだろう。

「まあ…わかつてくれたなら何よりだ…そういうワケで、むこうの次鋒戦、出て来るのはあの優男だが…注意しろよ？ 見た目にそぐわず、食わせ者のような雰囲気を感じるからな…」

（まあそれなりに剣の腕もあるんだけどね、ベルリバーさんつて…でもさすがにプレイヤースキルでは建御雷さんやたちさんにはかなわなかったけど…というかたちちさんは警察学校でもトップクラスだったらしいからな…剣の腕…敵うわけないんだよなあ…）

「は！次こそは一点の曇りも無く、汚点も残さない完全勝利を御身に捧げることをお約束いたしんす！」

気合の入った返事をするシャルティアに対し、支配者も声をかける。

「あまり相手を侮りすぎんようにな…」

（これ以上は言うに言えないよな…正体をバラすような発言するわけにも行かないし…かと言つてどちらかに肩入れするわけにも行かないんだから、つらい立場だなあ…）

そう思いながら、支配者は再度、シャルティアを送り出すのであった。



両者が試合としての体裁を整える為の開始線へと歩いている中、

シャルティアが対戦相手の仮面の男に対して、言葉をかける。

「おんしもモノ好きであるんすね、こんなところにまで来て盗賊どもの手助けを買って出るなんて…よっぼどの命知らずか…それとも死にたがりなんでありんすかえ？」

進み出てきた仮面の男、ベルはその言葉を聞き、僅かに肩をすくめる仕草をして見せると、その質問に返答をする。

その首には、チョーカーと言えはいいのか、首輪と表現すればいいのか…何とも言いにくいアクセサリを身に着けていた。その声はシェイドの口から発していた時の「素」の声では無く、かと言ってすぐにバレルの危険のあるエルヤーの声でもない。

（そういうえば、この声の持ち主ってどうなったんだっけか？確か、人形か何かにされて、ジエット君の魔法でボケットスペースへ小型空間へ入れられた男だったよな、まだ生きてるんだらうか？）

「悪いが命は惜しい方かな…死ぬような思いをするのは一度で充分だ、向こうで一度味わったし、あとは…自分の、今一番大事な存在の為に命を懸けたい、だからここにいます。ただその前に…それが本気だと認めて欲しいだけさ。」

しばらく、相手の言っていた事に対して、考える素振りを見せるシャルティア、小首をかしげる素振りはペロロンチーノさんが「そこだけは！」とプログラマーとしてナザリックのNPC達の姿勢プログラムの担っていた一人、ヘロヘロに頼み込んで組み込んでもらった仕草と同じポーズを取ったことに懐かしさを覚える。

それを見るだけでも昔のことを感じられて嬉しい自分が居た。

「どうも、おんしの言ってることはこっちはわかりにくいでありんすね、つまりは後ろに居る者達がお前にとって大切な者…と言わすということでありんすか？」

「いや、それが全てというワケではないけどね…あ、そうそう、ボクに勝てたらキミが喜ぶこと間違いなしのいいものをあげようと思う、まあ、言われなくても守護者である者が負ける事なんて考えないと思

うけどね。」

シャルティアが眉をしかめる仕草をする。

NPCの時はこんな表情は作れなかった物だけど…こういう所はちゃんと生きている個人として動けるようになってるんだな…と素直に感心する。

「お前がわらわの何を知ってるというんでありんすか？ 何も知りんせんくせに勝手なことを言わん方が身のためでありんす、あまり口が過ぎるとルールなんて関係なく殺してしまいいんすよ？」

「それは困るな…ボクが殺されるのは自分の予想では、まだ先の話だ、予想通りに運べば…けどね。 その上で言わせてもらえば、まだシャルティアに殺される訳にはいかないだよ」

仮面の男、ベルはそう言つてわずかにヒザを曲げると――再び武器の名前を大声で叫ぶのはどうしても避けたいため、剣の刃部分を消さず、出しっぱなしで持っていた「天ノ魔ブレード」――、その手に持つ刀身を肩に担ぐようにして、刃先部分は背中より後ろの方へと向けている。

シャルティアの方に向いているのはその剣の持ち手、柄と呼ばれる部分の石突きだ。

「そう…妙な構えをするものでありんすが…、死なない程度に痛めつけて負けを認めさせてやるでありんす。 覚悟しなんし？」

「お手柔らかにお願いするよ…」  
そう言い終わるのを待つて居たかのような審判の「開始！」の音が告げられる。

その声でほぼ同時に動いたのは両者共に同様なのだが、わずかにシャルティアの方が早かった。

真紅の疾風が駆ける。

それに対して、一瞬だが遅れて動く事になったベルは、柄の石突き



をシャルティアに向けたまま、両手で持った剣を頭の先に突き出し、両腕を突き出すように伸ばす。

それは、石突きを先端にした…先が鋭利では無いだけの槍の穂先のようにであった。

そして、その背中には「光の刃」が鬣たてがみと化しているような体勢で、駆け出す。

（槍相手だと「剣道3倍段」とかよく言うけど、シャルティアにはどの程度通じるか…だな。）

ベルが、シャルティアの持つスポイトランスに向かって直接、頭から突っ込んでいく。

（ふふ…馬鹿な男でありんすね、自分から刺されに飛び込んで来てくれるなんて…ならお望み通り、串刺しにしてやるでありんすよ？）

その直後、肉を裂くような音がぶく響き渡った。



それは、ベルが、シャルティアと向かい合う前、戦う際の開始線へと歩み出しながら事前の準備をしていた時の流れである。

『ああ…聞こえるかな？ こうして体内に向けて直接話しかけるのは初めてですが、ずっとお詫びを入れるのが遅れてしまい申し訳ない、少しだけ時間よろしいですか？ご老公？』

ベルが話しかけたのは、第6層の円形闘技場アンフィテアトルムに来る前、POPモンスター達から守る為、事前予告も無しに不意打ちで後ろから丸呑みした…今までずっと腹の中で放置していたワーカーの一人、現状フォーサイトを除けば、唯一のナザリック内での生存者と言える人間だ。

（おお…おヌシか…こりやまたかなり待たせてくれたの…、このエルフの嬢ちゃんらを介してのやり取りをのそけは、初めての事じゃないかの？）

『ああ…その節は大変申し訳ない、身の安全を保障するためとはいえ、唐突にあんな目に合わせてしまったこと、先に謝罪すべき所、先に何の断りも入れられなかった事、どうか許してほしい。』

(ああ、最初こそ、たまけたかの…この3人の嬢ちゃんらの説明かなければ、途方に暮れとったよ…まあ、こんな場所で命のやり取りをしとる間は仕方ないとは思うか…、観戦しとる間に謝罪は可能だったんじゃないかの?)

『それは…大変申し訳なく思っております。今後の交渉の為、老公の存在は可能な限り、有効な手札として、残しておきたいという面もあるし、万が一の時、命の保証という点からも…あいつらに僅かな懸念材料も残しておきたくはないもので…、わずかな素振りも取れなかつた事、重々、お詫びさせてもらいます。』

(わかつたわかつた、ええから、ワシも少し意地悪がすきたようしゃの…言い過ぎたわ…とこころて? 他にも用はあるんしゃろ? 謝るたけて語り掛けた訳てはあるまい?)

『さすがはご老公…話が早いですね、では持つて回った言い方はやめましょう、老公は私の腹の中にいる間、模擬戦とかは彼女らとしましたか? その時に〈武技〉の使用などは?』

(いや? しとらんよ? さすかにこんなか弱そうなお嬢ちゃんらを打ちのめすのは気が引けるしゃろ?)

『やはりそうでしたか…そこで相談なんです、老公が墳墓に入る前に使っていた武技、〈疾風加速〉、あれ、私の体内で使用した場合、老公だけに効果があるのか、それとも、空間ごと丸呑み状態にしている私自身にも【老公の一部】として扱われ、発動するのか…試してみたくありませんか?』

(なるほどの…そういうワケか…いいしゃろ! その口車、乗つてやるとしよう…今使つて見せるからの…ちよつと待つとれ。)

そうすると…特にこれと言って変わった様子はない。

しばらくしてから声をかけてみた。

『どうですか? 老公、使つてもらえました?』

(おお…使つてはみたか…とうしゃ? 変化はあるかの?)

『いえ、これと言って…もしよかつたら、その武技の効果が「池に小石を落とした」時みたい、波紋が広がる感じをイメージしてもらつていいですか?』

(なんしや?急にこむすかしい注文をしてきたの…まあええわ、やつちやろう、しょうの無い奴しやの…)

『申し訳ない…恩に着ます、老公。』

(その言葉、忘れるんしやないそ…?)

というやり取りの直後、体にじわじわとした感じが伝わって来た、リアルな時代、母がダイエツト用にと、体に装着することで振動する動きを与え、体の燃焼効率を上げるとかなんとか…そんなことを言っていたあのブルブル感のごく弱い感覚が沸き起こる。

『なんか、じわじわと言いますか…体に弱い波が広がってる感じはしますね…でも、素早くなってる感はしませんけども…』

(おお…それか解かれは、後は簡単しや、その波をもっと早く、体中を高速で駆けめぐるようにイメーシすりやええ、そのままそのイメーシで固定すりや、たぶん問題ないしやろ?)

言われた通りを試してみた所、体中にその波がものすごい勢いで回りだしたのを感じる。

そのままイメーシを固定すると、足だけじゃなく、体の全部位に活性化した感覚が沸き起こり始めた。

『老公、ありがとうございます、これが武技の感覚なんですな! 有難くこの効果、お借り致します。』

(おお…まあ助けられた恩もあるしの…、ふしにここから生還できるのてあれば、ワシの力くらい貸してやるわい…いつでも声をかけい。〈即応反射〉に〈要塞〉も使えるか…むすかしいかの…〈要塞〉の方はタイミンクかシピアしやし…)

『いえ、そのお気持ちだけで嬉しいです、可能な範囲で助けていただければそれで構いません、これだけでも精神力使わせてしまったのですから、逆に申し訳ない。』

(かっかっか、なにを今さら…しやよ? 〈疾風加速〉くらい音をあけるワシしやとも思うたか?なめるてないわ。)

そんな軽い感じで、気分によさそうな返答が戻って来た。

…そして、舞台は、戦いの場に戻る。

〈疾風加速〉での加速を発動させ、一気に距離を詰めながらスポイトラ  
ンスへと向かうベル。

それに対し、「飛んで火に入る…」とばかりに赤い閃光と化し、ベル  
に武器を振るう、と言うより速度からして『ランスチャージ』どころ  
の騒ぎではない一撃も同時に襲い掛かる。

ベルは、背中に沿うようにしている光の剣、その刃をスポイトラン  
スの下方に当て、受け流しの様にしてその一撃から身を護る。

…と同時に、その刃を背中ごとシャルティアの利き腕の脇の下、つ  
まり鎧の継ぎ目に体当たりをし、その勢いのまま、剣を自分の頭の上  
へと振りぬぎ、神聖属性の斬撃ダメージをシャルティアに浴びせる。

予想外のダメージを受け、一瞬だけ体勢を崩し、足の動きが鈍った  
シャルティアの背中側に走り抜けたベルが、片足を軸にしての円運動  
でシャルティアの背中に正面を向く、すると背にあるスポイトランス  
から延びるホース状のエネルギーチューブ、それに上段から剣を一  
閃。

『済まない、セピア、風の効果でボクの頭の周辺だけ真空状態にしても  
らえないか?』

(はい、わかりました、では…)

すると、時間差もほとんどなくそれが感覚でわかる、呼吸をする必  
要のない種族だからこそできる荒業だ。

(「くらえ! 『天ノ魔! ダイナミック!!』」)

顔の周りを真空状態が包みこんでいる為、大声を出しても外に声が  
漏れ出ることはない。

しかし、「発語」というトリガー条件は満たしていた為、その効果が  
発生する。

最大ダメージの1.5倍ともなる斬撃、一応神聖属性ではあるが、  
シャルティアの防具は神聖属性の耐性が付加されている、そのため、  
更にそこから追加ダメージまでは期待できなかった。

それでも、両断は出来なかったが、背中から出ているホース状の管、  
それに切れ目を入れ、回復効果を弱めること、そして装甲の無い継ぎ

目である脇の下にもダメージを与えるのに成功した。

(これは守護者の専用装備だからな…何日かすれば自然回復するはずだったよな…確か。…アルベドの鎧も、3度まで装甲を犠牲にすることで超位魔法を防ぐことが出来たはずだったし、あれも時間経過で、失った装甲は戻ったはずだったからな…あれ?それとも専用の課金クリエイトツールでだったっけか?…ま、いつか、どっちみち直せるんだし。)

「くうう…小癩でありんすね…神聖属性の武器でありんすか…おかしな動きと変な構え…、ただのスキルじゃありんせんということでありんしょうかえ?」

そこで、真空状態の効果は解除されたようだ、頭(の位置するだろう部位)から何とも言えない感覚が消失したことからそれは判断できた。

「ああ…これはただのプレイヤースキルなだけだ、気にすることは無いよ、小手先の技と、勝つ為に練り上げられた歴史の残滓…って感じかな?」

(プレイヤースキル?…こいつはプレイヤーと言うことでありんすの?…それにしても、ナザリックに対する敵意のようなものがない…そうか…こいつは…)

「なるほど…プレイヤーだったということでありんすのね。それは意外でありんしたが…もしや「あの時」の再挑戦、リベンジと言わす事でありんすの? 前回は残念でありんしたね、まさか…足止めにつっかかって、第8階層で全滅してしまうとは…未だにナザリックでは笑い話として語り継がれているでありんすよ?」

(あ…あれ?もしかして、この状況って…え?ボクって、ナザリック1500人大侵攻のメンバーか何かに思われてる?…どうしよう、このままその話に乗っかるか? …いや、それは愚策だな…、その一言を引き金に「敵対すべき相手」と思われたら計画の全てが水の泡…、ここはとぼけるしかないな…。)

「ああ、あの有名な事件の事ですか…あれは凄かったですね、でもボクはあの馬鹿騒ぎには参加しませんでしたよ…、そもそも馬鹿げてるで

しよ？数百あるギルドの中でも最盛期、ギルドメンバー全員在籍中の時期は、ランキングでも十指に入っていた強豪ギルド、それにケンカを売るだけならまだしも…本拠地に攻め込むなんて…考えなしのおめでたい奴らに付き合っつて巻き添えを食ってレベルダウン…そんなの御免ですからね、当日すつぽかしましたよ。」

「そう…それは賢明な判断でありんしたね、それならなんでおんしはこんな場所にいるのでありんすか？ 命は惜しいのでありんしょう？ まあ、このナザリックの事を知られたからには、生かして帰すという選択肢は残されてはいないでありんしょうが…」

「そうか…それは怖いね…だがこっちは自他共に認める小心者でね…なんとか、身の安全くらいは確保しておくさ。」

「ふん…それが出来れば苦労はしんせんよ？ ここは至高の御君がいらっしやる神域…そこを無断で踏み込んで、無事に帰す訳ないでありんしょう？」

シャルティアが、勝ち誇るように見下ろすような視線で、絶対の強者を気取っている。

少し、いたずら心が沸き起こったベルは、少しだけシャルティアの戸惑う姿を見たくなり、話しの方向性を変えた。…今までは考えもしなかった方法で…。

「無断で…か？果たしてそうかな？ ボクがココに居る理由、ワーカーとしての立場と言うだけで我らがここに居るとでも？」

「…………何を言ってるのでありんすか？ 誰がこのナザリックに立ち入る許可など出せる不届き者を名乗っているでありんす？」

「不届き者か…？さすがのキミらも想像がつかないか…仕方ないかもしれないね、まさか許可を出せる存在がこっちに来ていた可能性なんていうのは、今まで考えてもいなかったんだらうから…でもいくらなんでも、「不届き者」は言い過ぎじゃないか？ 「不敬罪」に当たる言動かもしれないよ？」

「な…何を言って…イヤ、そんなことはあり得んせん！今までずっと

…これまでだつてそんな痕跡どころか、僅かな手がかりすら…お前!!  
言いなんし!誰が許可を出しんした!」

シャルティアが、アンデッドらからぬ真つ赤な表情を連想させるほどの鬼気迫る表情で問い詰めてきた。

「それはキミ自身が、良く解かつてるんじゃないかな?」「彼」のことを…さ?」

「彼?」彼女と言わず訳ではないということでありんすね? …なら…どんな外見をしていんした?」

シャルティアの言葉に熱がこもる…もしかしたら最も自分が待ち望む、たつた一人の可能性もあるのだから…

「そうだね…体軀はりっぱな感じだったよ、大きくて、がっしりしてても、怖かつたね、ギチギチの牙を無数に生やしていてね…今にも「シャー!」とでも言いながら襲い掛かつてきそうな外見だったよ。」  
「そ…そんな、あの方じゃ…無いという事でありんすの? …誰でありんしょう…」

しばしの間、思案するも、あまりにも判断材料が少なく、対象を絞れないと思つたシャルティアは早々にその話題を放棄した。

「まあ、今の話がウソだとは思えんせんが、かと言つて本当と決めるのも早計でありんす。万が一、それが本当だった時は…まあ、命だけは助けてあげんしよう…喜びなんし? ウソだと解るまではその命、大切に扱つてあげるでありんすからねえ…」

余裕綽々でこちらにそう言い放つシャルティアだが、脇の下から少しずつだが、ポタポタと血が流れているように見える。

「それはひとまず置いてくとしてだ…回復をしなくて大丈夫なのかい? 脇の下から流血しているようだが?」

(ちよつと心配になつたから言つちやつたけど、そう言えばシャルティアってアンデッドだよな…なんで血が流れてるの?)

「ああ…これでありんすか、気にしないでくんまし? わらわの血液を操る職業を使いんして体内で「魔力のストック」代わりにしてるだけでありんすから…それ以上は機密事項でありんす」

と、そこで「ハッ!」とした表情になつたシャルティア、急いで口

を手で覆う。

(わらわは何を言っているの？こいつは侵入者でありんすのに、なんでご丁寧の説明なんてしているの！)

彼女の中に訳のわからない感覚が徐々に広まっていく、敵対者だと頭で思っても声を聴くとどこか安らぐのだ…話しているとどんどん自分の口が滑らかになっていく感じがさえる。

(やはり侮れない相手と言うことでありんすね、精神攻撃が一切無効のわらわにここまで何らかの影響を及ぼすだなんて…)

「だけど…プレイヤーという事はわかりんした以上、魔法での攻撃を使っても大丈夫そうだという事は解りんした…ということに使わせてもらいんすよ?」

背中から白い翼を出現させたシャルティアがバサリとその翼をはためかせると、空に舞い上がり、距離を取りつつ魔法を撃ち出そうとする。

地上にいるベルはそのシャルティアの動き…空に舞い上がる行動に合わせ、持つて居た課金アイテムを一つ素早く手に準備して、魔法を撃ち出そうと手を突き出したシャルティアにそれを投げつける。

(なに? アイテムか何か? それにしてもそんなノロイ速度で投げられても当たりんせんよ?)

自信まんまんに余裕を持つて動き、わずかに体を捻ってそれを避ける。

しかしシャルティアは知らない。

その投げられた課金アイテムが実はダメージを与える類の物ではないということ…。

その課金アイテム、まるで小さい彫刻のような人形っぽいソレを後ろに逸らしたシャルティアはすぐに下を向き、対戦相手に視線を向ける…が、そこにはすでに誰も居なかった。

「ここだよ、シャルティア!」

いきなり後ろから声が聞こえたかと思うと背中にドカリと誰かに乗られたような感覚、そして衝撃が走った。

「うあああああ!!」



背中に乗られた状態で、無防備となった一対の翼、その片方の翼の根元に剣で切れ目を入れると、そこをむしるようにブチブチと力任せに引きちぎろうとしている。

その痛みだけは背中越しに解かった。

「なぜ！いつの間に後ろに？まさかへ転テレポーターシジョン移シジョン？でもそんな時間はなかったはず！」

「答えを教えてやろうか？ さっき投げた課金アイテムの効果だよ。」  
（アインズさんも散々、ガチャってる人だったから、これ、山のように持ってたなく：お互いこの人形何個かぶりました？とか言って、どっちが少なく済んだか比べたりし合ってたなく。）

そう：それはかつてアインズと名乗ったばかりのモモンガが、カルネ村でガゼフを陽光聖典から避難させるため、自分と位置を交換するのに使用したアイテムと同じ物、ベルはそれを一人で使用したのだ、シャルティアの後ろに逸れた瞬間にアイテムの効果を使用、アイテムがあつた場所に瞬時にベルの移動が完了、そしてベルの居た地上に人形が現れた瞬間、それは霧のようになって消えたのだ。

シャルティアは信仰系の魔法詠唱者であり、翼も白い羽根と、コウモリの羽根の2種類持つている為、へ飛行フライの魔法は習得していない。その必要を感じないように翼を付けたのだから、覚えさせてもらっていないのは当たり前とも言えた。

その為、白い翼があれば、へ飛行フライが無くても支障はなかったのだが、ここでまさかそれを失おうという状況になるとは…、思いもよらない事態である。

飛ぶための翼が掴まれているには飛び続けることは出来ない、空から一気に地上へと落下することになった。

そして、それはベルにとつて思わぬ誤算を生んだ。

少しではあるが、空から地上へと落ちる際、その重力の働きにより：落下の際に生まれた風の力が、ベルの腰に身に着けていたベルトに力を与える結果を生んだのだ。

だがまだそれは「第一段階」だ、左側と右側、その2つの風車の中にそれぞれ付けられたランプ、それが赤々と点灯しているのみ。

第二段階、それはベルトの模様になっている「V」の字の上にあるランプに光が灯ると第二段階となり：「V」の字が緑色に輝くと、その時に初めて最大限の効果を生み出すようになるのだ。

（だが、今の状態で戦うのはまだ力が足りないか？）

「〈全能力強化〉」

グレート

（「上位」には一歩及ばないけど、自分の覚えてる中で最高位の強化魔法、この辺までしか使えないのがここに来て響くなんてな…）

本気を出すならもっと他の効果も重複させる必要があるだろうが、今の内に手の内を全て見せていると、コキユートスレベルと戦う際に色々と不都合が生じる可能性もある、だから今はこの辺までにしとくとする。

：そして、地上に落ちた瞬間に力を込めて翼を片方だけ引きちぎる。

さすがに両方むしっちゃうのはギルド長に申し訳なき過ぎてできなかった。

どちらにしても片方だけの翼では、まともに飛ぶこともできないだろうから…これで許してもらおう。

「すまないな…まずは満足に飛べないようにさせてもらったよ…、恐らく空での戦いになればシャルティアの方に分があるだろうからね。」

背に乗られたという屈辱にも関わらず、なぜか不快ではない自分に戸惑いはあるものの、それ以上に自分の翼を台無しにされた怒りが一時的にそれを上回る。

「わらわの翼をお!!! 殺してやるから覚悟しとけやあ!!!」

地上という足場が出来たことにより、力任せに立ち上がり、ベルトを背から地面に落とし蹴りを叩きこむことで、シャルティアはベルトとの距離を空ける。

そこから再びのシャルティアの突撃、の勢いを借りてスポイトランスの横薙ぎ。

恐らくはそれで力任せの一撃を出し、ダメージを与えるか、悪くても吹き飛ばすことで有利に運びたかつたのだろう…、しかしシャル

ティアのそれは、先程と同じベルの動きで、背に沿わせた刃により滑らせられてしまう。

ベルの剣の側面：その中央に来たあたりで剣の角度を変え、スポイトランスの軌道を流している。

その流れを利用して、体勢を崩したシャルティアの手首にベルは剣を斬りつけた。

もちろん手首部分は稼働することを想定して継ぎ目となっている、そこを斬りつけることで効果的なダメージを与えていた。

攻撃を流され、手首を傷つけられるも、蹴りを浴びせることが出来、武器ではないものとりあえずやり返せたことで辛うじて冷静さを戻し始めたシャルティアが怒りを抑え、相手の狙いを嘲笑う。

「手首狙いでありんすか？ この程度のダメージでは武器を落とすこともありませんえ？」

僅かな嘲笑を含んだ微笑みと共に、ダメージの積み重ねも無駄なことを：と得意の魔法を唱えた。

「生命力持続回復」

「ふふ：これでまた振り出しに戻ったようでありんすね？ 無駄なあがきは見てて楽しいでありんす。」

そこでベルはシャルティアの魔力残量を見る為の魔法を使い、次からの攻め方の参考にするため、様子をうかがうことにした。

〈魔力の精髓〉：ダメか：回復に魔力を割いてるだけあって、前の戦闘と合わせてもまだ4割以上は残ってる…

「回復のヒマを与えらると思うかい？」

〈疾風加速〉の武技の効果で多少上がった速度に〈全能力強化〉の効果加わった速度でのヒザの脱力：そこから転びそうな勢いを利用しての速度が乗った前進。

さらには、自分が幻を纏って隠してはいるが、自前の装備ですつと身に着けている脚部防具、その名も「恐怖公 眷属風・脚防具」

名前からも分かると思うが、製作者は「るし★ふあー」さんだ。

いつもの彼なら悪戯か何かを仕掛けていてもおかしくはないのだが、この時ばかりはそれは無かった。

なぜならこれは「お詫び」の印として製作、譲渡されたからだ。

最初に、自分のNPCであるフレイラをゲーム時代、起動するか否か、その決を採ろうとした際、るし★ふあーさんが突然ログインしてきて、「面白そうだから」と、引つ掻き回せば盛り上がるかも…という意図で「反対票」に入れたがため、起動する案件自体を自分が辞退することになった。

その原因になったのが自分(るし★ふあー)ということをギルメンから巡り巡って聞かされたことにより、謝罪の意を込めて贈られることになったのがこの一品だ。

本人曰く、「本心から反対だったわけじゃない、たまたま面白い展開になりそうだと思ったので、ついそうしてしまった。」と言って、お詫びにはならないだろうが…と、装備の性能を聞くことになったのだが…

彼はGという虫に思い入れでもあったのだろうか？そう思っってしまう程に熱く…、それは熱く語ってくれた。

ゴキは、構造上、前方にしか進めないのだと、Uターンは出来るが、バックは出来ないのだという事。

全ての生き物と同サイズにしての競争をした場合、ゴキの走りは世界最速だろうと…聞きたくもないのにずっとうれし気に語るその姿に、かなりげんなりとさせられたものだ。

ギルドの共有資産でもある各種材料を使うのは大丈夫だったのか？と聞いたところ、それは皆が賛成してくれたとのことだった。

きつとそうさせるように全員が彼を追い詰めたのだろう。

結局、自分(ベルリバー)は最初の多数決で結果を辞退して以来、何度か他のメンバー達からももう一度多数決しましょうよ、と誘われた事もあったが、頑なにそれを受け入れはしなかった。

なぜなら、それは当たりが出るまで何度でも挑戦できる多数決、ということにでもなれば、そもそも多数決をすること自体に意味が薄れてしまい、自分のわがままで既に結論が出ている答えをひっくり返すような真似はしたくなかったからだ。

だからこそ、わずかなりとも「るし★ふぁー」さんも罪悪感からこのような行動をしてくれたのかと思っていたら…

「自分としてはどっちでもよかったんだけどね、面白そうな方に入れた方が楽しいでしょ？」

と、反省をしているのかどうか、かなり怪しい一言を最後に残し、モヤッとした感じを残してくれたのは今でも忘れていない。

彼は良くも悪くも「自分の拘り<sup>くだわ</sup>」に正直に生きていた人だった。

自分が心底納得しなければ、手掛けている作業も「完成」には至らないし…

言わなくても解かるでしょ？という「暗黙のルール」が通じない相手でもあった、そのせいで言わなくてもいいことを平気で口にした、本人にそのつもりは無かったのだろうが、あらゆる意味で火種になりやすい人だったし、下手に言葉にするより文字にした方が分ってくれる可能性が高かったというのも、興味深い部分ではあった。

途中で作戦の変更を余儀なくされた時なんかは、急な予定の変更は脳の処理が追い付かずパニックに陥るようで、いきなりログアウトする事も多かった。

ナザリツクに1500人で攻め込まれた時は、相手のギルド連合から「事前に攻める」なんていう親切な予告は無かったため、あまりにも急だった：だが、式式炎雷や、フラットフット達による調査、探索、隠密を得意とする面々によりギルドとしては「その準備」を察知されていたが、あまり静かにじつとして話を聞いている状況が苦痛に感じられるようであった「彼」からすれば、そのことを聞く機会が無く…というより聞ける場に来ようとしていなかったという理由もあって、ログインしたら、突然攻め込まれてるという状況に出くわし、すぐログアウトをされた、という事件もあった。

気持ちの切り替えに少しの時間を要し、第5階層に侵攻された辺り

で再度ログイン。

そこから先は41人全員でコトにあたることになったという昔話も今となつては懐かしいエピソードだ。

まあ、そんなこだわりや、精神的特徴の濃い彼が、納得もせず、本心から悪いと思つても居ないのにここまでしてくれるはずはないことを一応は理解していたので「彼なりに」何か感じる部分があったから、そこまでしてくれたんだろう。…と思うことにした。

誰かの気持ちを理解しようという認識が欠落してるんじゃないや…とみんなが言つていた彼がそこまでしてくれたことがとにかく驚きで、つい残っていた装備がこれなのだ。

飛行を含む、あらゆる前進行動に1.5倍の上昇効果をもたらす防具。

名前に負けず、その装備の外観は、モデルにした虫の足をイメージしたのだろう、外周にトゲトゲした突起というか、トゲみたいなものがびっしり生えていて、回し蹴りでもしたら普通の人間ならさぞや痛かろう…と思つてしまうようなものだった、苦手な人は絶対あの虫の足を思い浮かべるだろう外観をしている。

だが、そもそもマジックアイテムなので、足のサイズに関わらず、形が変わり、太さも変化…フィットするので、まだマシなのだが…。

そんな防具の効果も加わることで、シャルティアの速度にも劣らない程度には上昇した前進行動は、蹴り脚という予備動作、踏み込むための力みも発生させずに距離を詰められたシャルティアにとって不測の事態、予測で反応させることを許さなかった。

彼女自身、今までにない速度を出されたせいで、虚を突かれ戸惑いの瞬間が生まれた。

その突進にも似た速度のまま剣を突き出し、全身鎧の唯一の露出部分である顔めがけ、体当たりの勢いを借りた重量を乗せ、剣を突き出す。

「くう!!」  
フオース・エクスペロージョ…  
「へ力場爆れ…」

「遅い!」

魔法の詠唱をしようと口を開いたシャルティアの口内に神聖属性の剣を押し込み、貫く。

「まずはノドを潰させてもらう!」

シャルティアの喉に剣を突き刺し、深々と押し込んで傷つける…神聖属性のため、焼けるような痛みのはずだ。

普通の相手ならその手段は即死ものだが、相手はシャルティア、ア  
ンデッドだ。

そのまま死亡とはならないだろうことは承知の上。

この程度はクリティカルヒット扱いでもないし、HPだつてまだ  
シャルティアなら余裕があるはずだ。

そこで、剣を引き抜こうとした瞬間、剣が引き抜けないことに焦り  
を覚える。

シャルティアが、喉奥を焼かれるのも構わずに、口の中に押し込ま  
れた剣を歯で噛み、そのまま抜かせてはくれないのだ。

(声は出ないでありんすが…最後の一文字くらいは発せられるであり  
んすよ?)

「ン」

先ほど、言いかけていた魔法の詠唱に最後の一文字を加えたことに  
より、効果が発生した。

シャルティアを中心に不可視の衝撃波が荒れ狂い、それが剣を持つ  
たままのベルに直撃した。

「ぐふう!!」

そのまま後方に吹き飛ばされるベル。

しかし、その手にはもう剣は持っていない。

シャルティアの口で、歯で、固定されたままである。

ずるりとノドの奥から剣を吹きぬいたシャルティア。

それなりではあるが、目を見張るほどのレアリティもなかったことから、興味を無くし、その剣をベルの元に放り投げ、足元にガチャリと音を立てて戻された。

言葉には出していないが「まだ戦おうとする気があるなら好きにするといいでありんす」とでも言いたげに…

（声を封じられるとは…やられてしまったでありんすね…これでは…スキルの方は使えても、魔法はしばらく使えないでありんすか…）

シャルティアが今、残しているスキルは〈時流遡行〉と〈死せる英雄の魂〉

どちらも一日に一度の回数しか残されていない。

（あとは、〈生命力持続回復〉の回復でどちらが先に使える状態に戻るか…でありんしょうね…ノドの方が…翼の方が…まあ、それまでは時間を稼がせてもらいんしょう…）

魔法と言う手段を一時的に取り上げられた今、取れる手段は限られている。

かと言つて片方の翼だけでは飛ぶことも難しい、出来ない訳では無いが…傷ついた方の翼は根元がころうじて半分だけ背中に繋がっていて、半分かちぎれかけている為、ダラリと垂れさがっている。

不安定な飛行で戦うのは自分でもどんな結果になるか、予測もつかない…ならやはり最後の手段しか残っていないだろう…「アレ」が対戦相手を死なせたりしないだろうか…そこだけは少し気にかかる、それで自分が負けてしまつてはナザリック…ひいてはナインズ様の御名にも傷が付こうというモノ、それだけはなんとしても避けなければならぬ…。

（まあ、いざとなつたら「解除」して消してしまうとすんでありんすか…）

死なせてしまう前に消してしまおう…そう判断して「最後の切り札」の使用に踏み切る。

幸運にも、今残されているスキルはどちらも「発声」がなくても起動できるタイプのスキルだ、発動に支障はない。

意識下で発動を決断すると、それはシャルティアの体から白い影と



なつて抜け出して形を成す。

「来たか…ついにこのタイムミングで使つて来たか、シャルティア最大の切り札…」

（なぜアイツがこのスキルの事を知っているの？使うのも見せるのも初めてでありんすのに…）

「へ死せる英雄の魂〜！」

（名称まで…、一体何者なのでありんすの？…、いや、ここに侵入する許可を出したという方から聞いた知識かもしれんせん、考えすぎて飲まれてはダメよ…私！）

そこまで驚くような態度を見せていたベルが、わずかにシャルティアの分身に目を向けながら、大きく声を張り上げて、展開の変化を告げる。

「出番ですーイミーナ先生！ お相手を頼んます!!」

その声と同時に、白い弾丸のように風を置き去りにしたエイン・ヘルアルがベルへと迫る。

しかし、その横から鋭い刺突武器がドリルのような回転を生み出しながら空気を切り裂き飛来する。

そしてエイン・ヘリアルの攻撃がベルへと届く前に突き刺さった。

「やつと出番？…こんなな待たされるとは思わなかったけど、こつちは準備万端よ？…それに…誰が先生よ！」

ずっと、安全圏内で前準備を整えていたフォーサイトのメンバー、レンジャー役のハーフェルフ、彼女の出番が告げられ、ついに参戦する。

その姿は全身を光らせる程の稲光を纏わせ、体の周囲には3つの浮遊物。

一つは先程、シャルティアに襲い掛かった刺突武器と似た形の物。

二つは、四角い板状に広がって浮いたままになっているナニか…

恐らく4つの浮遊盾を形状変化させて、今の形にしたのだろう。

攻撃役が2つと、防御に回せる方が2枚、そういうことなのだろう…。

（おやおや、今までずっと何もなかったので半分忘れていんしたが…

ここに来てアレの助けを借りんすの？ わらわの〈死せる英雄の魂〉の相手が務まるのでありんしょうかね？…まあ、いいでありんす、ちよつと遊んであげるといいでありんすよ？)

意識の中で、〈死せる英雄の魂〉にそう告げると、即座に標的を視界の外にいたハーフェルフへと態勢を変えて、構えを取る。

そこでイミーナはベルへと、決断の一言を告げてきた。

「ねえ…、詳しく聞いてなかった私の所為でもあるんだけどさ、ホントにアレの相手、私がすんの？」

そうして、いよいよこの戦いの最後の舞台が整いつつあった。

第57話 先鋒3 シャルティア VS ベル〔後編〕

それはただただ、鋭利な針のような武器であるように見えた。

しかし、針にしては大きすぎ、槍の先端にしては丸すぎ、先に行くに従い鋭さを増すように作られているようだった。

不意を打ち、ベルの背後から横をかすめるようにして、突進してきたソレは：急な制止や方向転換など出来ないほどの速度をもって突進してきた白い人の姿をした異質な者に突き刺さった。

しかし、刺さるだけではなく螺旋のように回転をかけ、与えるダメージを底上げしている風にも見えた。

一見、見慣れない武器のようであるそれは自身に意思があるかのよう自立して動いているようだ：イミーナ自身がそんな武器を初めから有していたわけではない。

正体は彼女の鎧と共にあった浮遊する盾の役目をしていたモノ。それは4つあり、その内の2枚を攻撃主体として動いてもらっているだけなのである。

攻撃しているのはその平べったい板を丸めて作った単純なモノだが、それでも先端を尖らせて、螺旋回転により刺し貫き、そこをさらにえぐるという点では有利に働いている。

原理としては単純で、子供の頃、紙の吹き矢で遊んだ際に作ったことのある人はいるのではないだろうか：、そのの矢の部分、くるりと丸めて、円すい状にしたアレ、作りとしてはそれと同じだ：しかしあれよりも細く、鋭くしている為、何重にもその金属が巻かれた形となっている、その為強度としては盾として機能している防御役の板より分厚く硬くなっている。

螺旋の回転と、相手の突進力によるカウンターでの破壊力が上乘せ

され、通常よりも大きな損傷を与えていたが、それでもエイン・ヘリアルは表情を一切変えない。

真つ白で、無機質な白蟻じみたその表情からはダメージの大きさがどれ程であったか、窺い知ることは出来ない。

「ホントにアレの相手、私がすんの？」

心配そうにそう問いかけてきたイミーナ。

それはそうだろう、現地民の基準で言えばエイン・ヘリアルは「難度300」だ。

それは魔神というくりよりはるかに上位の存在、災害レベルと認定してもまだ足りない程かもしれないのだから…。

しかし、イミーナ自身も修行に入る前の難度のままではない、素のレベルとしては30を超えるくらいまでには戦闘を繰り返してもらったが…時間が足りなかった、ユグドラシルの経験値よりも明らかにこっちの世界での「異世界基準の経験値」割り振りは厳しいもので、同格のレベル帯のモンスターを呼び出し、倒すだけでは時間がかかりすぎた。

そのため、上のレベルのモンスターで、弱点という意味では相性のいい相手を選び、戦ってもらって居る中、叩き上げで（アルシエや、ボクからの知識を応用しての技でもあるが…）鍛え上げてきたその戦い方で乗り越えてきたあの修行の成果をこの場で発揮してもらうことにした。

万が一、危なくなっても…「あの手段」を使えば、もしかしたら…という望みも込めて。

「大丈夫さ、キミにはアルシエから教えてもらった「オリガミ」の知識から取り入れた形状変化と、電流操作で微弱な影響にまで調整できるようなったその効果での身体強化ができるようになってるんだ、以前より比べ物にならないくらいには強くなってるんだから。」

ベルはそう返答をするが、だからと言ってエイン・ヘリアルと互角に戦える訳じゃない。

「でもさ…、アレと足を止めての接近戦なんて土台、無理な話よね？」

私、接近戦の得意な職業持っていないんだしさ…」

「危なくなったら、アレを解放すればいいじゃないか、結構使い勝手いいと思うんだけどな」

軽く発言した内容に思い当たる節のあったイミーナがそれに反応をした。

「え？あれ？…アレを出すと言ってもさ…この鎧の中の電気の蓄積、全く足りないのよね、下手したらこの身体強化も解除されちゃうかもしれないじゃ…ない？」

軽く会話をしているように聞こえるが、会話をしている最中でもエイン・ヘリアルは攻勢は止むことは無い。

スキルや、魔法などは使用できないが…純粋な直接戦闘だけで言えばシャルティアそのものと言って良い存在だ。

油断できる相手ではない。

しかし、最初から見えていたイミーナには戦い方は伝わっていたようで、2枚だけ残っていた平べったい板状のナニか…それを湾曲させ、「」のような形にすることで、エイン・ヘリアルへのランスの先端を、ベルが剣で受け流したのと似たやり方で勢いを逸らしている。

2枚の防御と、2つの攻撃。

それを使い分けることにより、接近を許さないようにするのが今のイミーナの戦い方だ。

（これもアルシエちゃんが妹さんたちに良く読み聞かせていたっていうおとぎ話からヒントを得た「折って畳む」「曲げてみる」「広げたりして形を変えてみる」っていう概念がなければ考えつかなかった戦法だよな…）

それは六大神と言われる神々と戦った、恐らくはプレイヤーと思われる者らとの戦いを物語調におとぎ話化されたもの。

その登場人物にエントマのような符術師の亜種のような戦い方が描かれており、それを現地民たちが独自の試行錯誤を繰り返して生み出した、ベルリバーがリアルで知っている「折り紙」とは似て非なる物と化していた。

紙を折りたたんで別の形状、動物や鳥と言った形に組み立ててい

き、「使い魔」として使役したり、1枚の紙を複雑に折っていくことでそれぞれ違う効果を生み出す「折り符」と呼ばれる物など…、そこから「オリガミ」なる（ボクが生きていた世界の物とは違う）、この世界独自の発展を遂げた文化を見て驚くことになった。

（自分が教えたのは脳の機能とか、そこからの神経伝達物質だとか、その伝達するのに必要なのが微細な電流であるという事、それらの速度が上がれば反応速度も、反射運動以上の速度になるかもね…といった「希望的観測」でしかなかったんだけど、実現しちゃうんだもん…適応力高いよな…彼女。）

だからと言つて、渡り合えてる訳では無い、いくら身体強化をかけているとは言え、70レベル差をひっくり返せる程の常識離れの性能をした強化ではないのだ。

それを埋めてくれているのが「自動（オート）」で機能してくれる浮遊盾、いや、今となっては浮遊物質と言った方がいいだろうか、それの恩恵だと言えた。

どの道、直接的にあの鎧からの雷弓攻撃の威力ではシャルティアと同等の魔法防御を持つエイン・ヘリアルに対して効果的に通じるとは思えない。

何L V金属を使った鎧なのかはわからないが、彼女（イミーナ）が名付けた武技、〈螺旋突槍〉によるダメージは多少は通っているようだし、それなりには何とか出来るんじゃないかと希望的観測を持っているくらいには通じている様子。

しかし、相手は魔法的、というかスキル効果で生み出された、人工生物のようなものだ、痛みの表情や、ダメージによる動きのよろめきなどが目立つわけでは無い為、どこまでの損傷を受けているのか見た目ではわかりづらいのが難点と言えれば難点だ。

しかしシャルティアには普通に機能する当たり前のスペックが、「エイン・ヘリアル」には元々備わっていないという致命的な欠陥も同時に孕んでいる。

それを勝機に活かせるかはイミーナ次第なのだが…

などと考えてる内に、ベルとシャルティアとの戦いも続いている。ベルが考え事をしていている間もシャルティアの攻撃が休まることは無く、その強引な突破力、そしてランス攻撃の突きや、払い、横薙ぎ、叩きつけなどによる連携攻撃にさらされ、徐々にベルの方も押されてきていた。

装備品により、疲労を覚えないようになっていたため、長期戦になっても身体的な心配も持久力としての心配もないが、MPは限りがあるしHPにも限りがある。

更には、その猛攻により精神的な余裕もガリガリと削られて行く：何しろ一撃一撃が重いのだ、これで純戦闘職でないというのだから：コキユートス相手となればどれだけのプレッシャーが襲ってくるのだろうと、今更ながら戦慄が走るようだ。

直撃は未だ一発もないものの、フェイントでも混ぜられ、喰らってしまえばどうなるかわからない。

アインズさん：いや、アインズさんよりは物理的な防御も、直接攻撃力もHPもボクの方が多いと断言できるが：

MPの量や、位階魔法の限界、魔法攻撃力や魔法防御力などは圧倒的な差がある自分では、魔法での逆転劇を生み出すのは難しいだろう。

(できれば手の内はさらしたくないけど、そうも言ってられないかな…)

そう判断したベルは、腹の中にいるエルフ女子3人組に語り掛ける、手助けをお願いできないか?と：

純粹な意味では彼女達の魔法の位階はなんとか第4位階に届いた者が居る程度、その程度ではベルの強化に多少貢献は出来るが、シャルティアに魔法攻撃で通じるか?とさえ自分以上に厳しいだろうというのは良く解かる。

ならば：他の手段で何とかするしかない、幸い、その為の道具は彼女らには譲渡済みだ。

まずは自分から状況の好転を図る一手を撃ち出し、反撃の狼煙とす

るために動く。

〈縮地・改〉！

まずは勢いの乗る方向、前方へと舵を切り、シャルティアの暴風圏へと進み出た刹那、片足を踏ん張り、逆の脚は前進させる動きを実行することで高速の体捌きを可能とした。

結果、シャルティアの利き腕側、スポイトランスの真横外側に肉迫していた。

（ちよこまかと目障りでありんす）

さすがに何度目かの側面攻撃のためか、その動きに慣れ始めたシャルティアが、横薙ぎにスポイトランスを振るう。

ベルが直撃を受ける際、そこで準備していた魔法を発動させた。

〈魔法三重抵抗突破化〉  
トリブレット・ベネトレットマジック  
ヘビースロー

〈重化鈍速〉

至近距離からの魔法発動により、シャルティアは即座に範囲外に出る事が出来ず、三連続で発動する魔法をモロに浴びる形になる。

しかしシャルティアの魔法耐性<sup>レジスト</sup>により3つの内2つが抵抗された。

（シャルティアの耐性の数値がどれだけかわからなかったから多重化させたけど、一発でも通じたのなら良しとしよう。）

（くう…どれだけ煩わしい手を使えば気が済むでありんす？）

今のシャルティアはノドを焼かれ、未だ完全回復には至っていない為、声に出すことは難しい。

しかしHPは微量ずつだが魔法の効果で回復はしているのだから、時間の問題だろう。

その上スポイトランスでダメージを与えることが出来れば回復の度合いも早まる。

（鈍化状態が続いている今の内に少しでもいい方向に持って行かないとな…）

仮面の姿のままなので、シャルティアからは解らないだろうが、軽く自嘲気味な笑みを浮かべたベルはシャルティアの速度の変化を見極め、自分の役割を思い出し始めていた。



(やはり同レベル帯との戦闘になると力不足は痛感させられるな…魔法と剣とのどつちつかずの職選びはやり直せるものならどうにかしたいものだけ…)

「すまないな、こつちはずっと以前から特殊役寄りの物理火力役でね、相手の嫌がりそうな手段を織り交せてこつちに引きずり下ろす戦い方で対等になるようにしてきたのさ、少しだけこつちの都合に付き合ってもらおうよ?」

(みみっちい戦い方をする相手でありんすね、弱体化させて有利に戦うタイプでありんすか、地味に嫌な戦い方をしんすね。)

内心ではそう思っていた物の、表面に出てきた認識は先程考えた思考とは違う物であった。

(その程度で、わらわの実力を弱体化出来ると思っているのならおめでたい頭でありんすよ?、そつちの得意分野ごとすり潰して勝利をもぎ取ってやるでありんす。)

シャルティア自身も戸惑いを覚える、そんなことを考える自分ではなかったはずだ…だが、最後の「こつちの都合に付き合ってもらおうよ?」という言葉にどうしても振り切ることでできない思いが奥底から滲み始めている、それが不快ではない自分にも苛立ちを募らせた。

(なんでありんすか、あいつは…精神操作や精神攻撃には絶対の耐性があるはずなのに…なんでこんなわらわらしくない思考をするようになってるのでありんす!)

いつものシャルティアなら、別に相手の都合に乗って戦う必要などどこにもないのだ、遊びに付き合ってやること自体はそう悪くはない、ちようどいいヒマつぶしになれば…程度であれば乗ることもある。

だがこれは「親善試合」のようなものとはいえ、至高の存在、ナザリックの支配者でもあるナインズ様が、目の前でご照覧なさっているというのに、絶対の勝利を捧げなければならぬ状況で遊んでいられるはずはないのに…にも関わらず、相手の言葉に逆らえないようになっていく自分がいることに驚く。

(ますますわかりんせん…あの者は何者でありんすか？ …聞き覚えの無い声なのに、一言一言がジワジワとこの身を侵していくようで怖いでありんすね…)

一方、ベルの方も、少しづつ弱体化はさせているものの、決め手に欠ける自分に歯がゆい思いをしていた。

(シャルティアのHPはバカに出来ないからな…モモンガさんの超位魔法でも一撃では仕留められないって言うんだから、自分の攻撃スキルを積み重ねても追い込むのは難しい、その上へ大<sup>グレートリーサル</sup>致死でも使われて回復に回されたらますます手が付けられなくなる…、いつノドが完治するかわからない状況ではいつ戦況がひっくり返るかわからない綱渡り…か…)

と、そこまで考えたベルが、当初の目的をすっかり忘れ、シャルティアに勝とうとする欲が出ている自分に気付く。

(そうだよ、別に勝つために挑んだわけじゃないだろう？これは守護者達に対するサプライズイベント、言わば『ギフト』、贈り物の類だと割り切ったはずだ、なら適度に戦って負けを認めて勝ちを諦めてもいい、どうせ最初からシャルティアに勝つなんてこと自体、自分ではおこがましい、頭脳労働担当としてサポート役兼、最低限の前線役として作って来たアバターなんだから、別にそこにこだわる必要なんてなかったんだ…)

そう思いだしたベルは思考を切り替える。

ならば今の自分がすべきことは…

シャルティアの方へと手を伸ばし、指先を伸ばす。

その仕草を見たシャルティアが、動きが鈍い状態でありながらも即座に行動を開始して回避行動の態勢に移る。

本来なら<sup>ウォールオブストーン</sup>へ石の壁を使う場面であろうが、それを詠唱に回すことが出来ない為、避けるしか今のシャルティアには選択肢が残されて

いないためだ。

<sup>ドラゴン・ライトニング</sup>へ龍雷！

ベルの指先から龍の姿を形作る稲光が迸り、雷光となって一直線にシャルティアへと迫る。

しかし、いち早く行動を開始していたシャルティアは辛うじてその回避に成功した。

(なめられたものでありませんね、この状態でも第5位階程度なら避けるのは難しくはないですが…、今の体では一瞬でも気付くのが遅かったら当たっていたかもしれんせんね。)

雷撃の魔法を回避できたその一瞬、通り過ぎる魔法へと視線が動いた瞬間、シャルティアに斬撃の痛みが走る。

しかしその威力は「痛み」と表現するほどのことでもない、神聖系の刃である感触はあったが、それだけだ、真紅の鎧の防御性能で半分以上のダメージは軽減されている。

(何が?)

そう思い、ベルの方へと意識を向けると相手との距離は開いたまま、剣の届く位置からはかなり遠い。

しかし、僅かに腰を落とし、攻撃する姿勢ではあるようだ。

「スキル〈羽々斬り〉！ 武技〈空斬〉！」

攻撃回数を一気に底上げし、一度の攻撃で羽根が舞う様に軽くなった武器での連続攻撃を可能とする技、さつき戦った相手も使っていたスキルだ、さつきのやつはこれを近接戦闘で使っていたが、こいつは離れた距離からの「疾走する刃の斬撃」を衝撃波として、視界を覆わんばかりの斬撃の数を見舞ってきた。

さつきの衝撃波は、今の〈空斬〉と言われるモノが単発で襲い掛かって来たものだろう。

そう結論付けたシャルティアは自分の顔の前にスポイトランスを持ち上げ、露出している部分に神聖属性の刃が当たらないよう、武器で受ける姿勢をとった、他の分は鎧の性能でダメージはかなり減少されるだろうから…

(一撃一撃は軽いではありませんが…こどもも連発されると…不利ではありませんね、ならどの道、大したダメージではないではありませんし、ある程度の被弾は覚悟して距離を詰めた方が…)

そこまで考えていると、ベルがジリジリと距離を詰めるべく、すり足でわずかづつ迫って来るのが見える。

(そっちから来てくれるつもりなら、このまま待つとしんしよう…、わらわのランスの方が得物の長さとしてのリーチに分がある以上、先に届くのはこなたの方でありんすえ?)

口元をスポイトランスの影で僅かに歪ませ、獲物を待ち構える狩猟者のごとく機会をうかがうシャルティア。

そして、近づくにつれて、斬撃の数も僅かづつ上昇していき、それ程の威力はないとは言え、スポイトランスの距離に來たベルを攻撃するには自分も多少は被弾する覚悟が確実に要求される状況に追い込まれたことを実感していた。

ベルの体がスポイトランスの届く圏内に來たのを認識したシャルティアはほんの数歩の突進のあと、スポイトランスをベルに向かって突き出す。

それと共に、ベルも自分の体内に向けてお願いしていた助力のタイミングを「ここだ」と判断し、それを発動させる、今までの自分の動きをわずかに上回る為に「能力向上」、そして老公の「疾風加速」を同時に発動してもらい、迫るシャルティアのスポイトランスの下をくぐり抜け、エルヤーが遺した最後の切り札を発動させた。

〈流転三斬〉！

あの奴隷商人の小間使いらしき人物が書き記していたお陰で知ることが出来た、接近戦用のオリジナル武技、これを使うのは「反撃」に限られ、カウンター技としてしか使えないらしいが、それはエルヤー自身が開発したてで精神力の消費も半端じゃなかったからだろう、ここ一番で使うしか方法がなく、さらに可能であれば「初見殺し」を理想としたため、やたらに技を披露することはなかったようだ。

そうでなければ自分もこの技を知らずにいたかもしれなかったのだから、多少はありがたいと思うが…

それでも我が愛娘を穢れた目で、妄想とは言え汚してくれた罪は、その恩を帳消しどころか、マイナスにまで達してしまった。 それに對して後ろめたい気持ちは微塵も無い。

奴はそれだけのことをしでかしたのだ、と、ベルリバー自身の思考はそこで中断される。

シャルティアのランスをかくぐり、下から手首を切り上げ、同時に武器を跳ね上げさせる。

その流れのまま、横腹を斬り抜けて、シャルティアの背中に回った瞬間に上段からの一閃、これがエルヤーの生み出した武技の流れ、三段攻撃の全容だ。

横をすり抜ける際に、〈疾風加速〉と〈縮地〉の重ね掛け、さらにはここからの〈縮地・改〉の発動だ、プレイヤーの精神力なら問題ないが、通常の間人なら、それで精神力は尽きてしまうだろうだけの分は削られていた。

（まだまだ攻撃の流れを工夫できそうだな…うまくすればカウンターに限らず、攻撃用の武技としても使えそうだけど…）

そこまで考えていたベルリバーの中で別の声が生まれ、訴えて来る。

『またまた、終わりじゃないしやる？』

そうして発動された効果で、体が勝手に追撃の動作に移る。

〈紅竜牙突き〉！

体内から武技の発声がされたと同時に、ベルの持つ剣が光の効果と同時に炎もその身に纏うことになる。

そのまま、シャルティアの背に斬りつけた斬撃の跡に寸分たがわず、神聖属性と炎属性の両方が乗った刺突が食い込んでいく。

悲鳴が聞こえるかと覚悟したベルは、その声がいままで経っても聞こえないのに心配になってシャルティアの背を見つめる。

すると、背に傷を負ったまま、わずかにそれが揺れ始める。

と、同時にシャルティアの傷から噴き出したどす黒く赤い液体が噴き出し、その身を包み出す。

「う…うつつふっふ、ふふ、ふふふふふ…」

（笑っている？）

予想もしていなかった反応で呆気にとられ、そのまま呆然としてみると、スポイトランスの横一閃がベルをとらえ、そのゴツズ武器の威

力で吹き飛ばされる。

「今のは…ちよつと痛かった…痛かったでありんすよおお!!」

（まずい！ 今の攻撃ダメージで、シャルティアの声の復帰に役立つてしまったか！）

豹変したようなシャルティアの言動の後、爆発したかのような踏み込みから、突進の音を置き去りにして、彼女がベルに迫る。

「ぎゃあ〜〜〜っはっはっはっは、ああああ〜っはっはっはっは!!」

その表情が、その口が、モンスターのような形相に変貌したと思ったら、そのまま首を片手でつかまれ、地面に押し付けられると、そのまま押し付けられながら引きずられる形で進行方向の先にある壁に衝突する。

そして、首に爪を食い込ませた状態でベルを吊り上げた。

（『血の狂乱』…か…）

よっほど、力を抑えて戦うのにストレスを感じていたのだろうか…、今のシャルティアは手加減という言葉を忘れてしまったかのような雰囲気さえ感じる。

（いや、『血の狂乱』状態だったら間違いなく忘れてるんだろうな…）

シャルティアを傷つけるのは正直、気が進まない想いはあるものの、このまま大人しくして居てもシャルティアが正気に戻る可能性はかなり低い、それならばと、「止むを得ない…」と呟き、自分を持ち上げているシャルティアの手首をつかみ、そのままギリギリと締め付けていく。

ベルが装備している小手、その名も「ハーキュリーズガントレットヘラクレスの小手」

アインズが装備するイルアングライベルよりもSTRの上昇値は高く、本来まだ自分の所持できないレベルの武器もSTRの数値を引き上げることによって持てるように、装備できるようにと作り上げたモノだ。

その純粋な腕力によって、シャルティアの手首をねじ切りそうな程に締めあげる。

手首を締めあげられることにより、ベルの首に食い込んだ爪が、指が外れ、ギリギリという音とシャルティアのくぐもった悲鳴のみが響く。

「は…はあなああせえええ!!」

残されたもう一本の腕で、構えていたスポイトランスを振り上げ、ベルの顔面に叩きつける。

しかしその攻撃にベルは全く動じていない。

そう、ベルが装着しているのは「嫉妬する者達のマスク」

その特別バージョンである『アニバーサリーエディション』だ。額の部分に刻印されている「V」は5周年を表している。

クリスマスイブの夜、19時〜22時の時間帯にユグドラシルに居続けた者だけが運営から贈呈されるという嫌味にしか思えない贈り物、それが通称「嫉妬マスク」のノーマル版だとするなら…

「V」の字はそのノーマル版が一度も抜けることなく連続で5枚集まった時に（つまり5年の間、クリスマスイブ〜当日に至るまで恋人とリアルで過ごせなかった者に）のみ、運営からノーマル版の後、クリスマスが過ぎ、26日のAM0時ぴったりに運営から贈られてきた『祝福』の品。

それがこの『嫉妬する者達のマスク、アニバーサリーエディション【5周年Ver.】』だ。

シャルティアの苦し紛れの攻撃程度で壊せるはずもないアクセサリ。

捨てることも、素材として合成させることも、誰かにプレゼント（押し付け）することも、魔法的な効果を付与させることも出来ない、筋金入りの『破壊不能』アイテムがこれ。

〈上位道具破壊〉でも壊せないという狂った代物なのだ。

もちろん『嫉妬マスク』が破壊不能だからというだけが原因ではない、そもそも嫉妬マスク自体には何の防衛性能も無いのだから…

強いて言うなら、シャルティアは近づきすぎたのだ、スポイトラン

スは「ランス」と呼称されるだけあり、種別としては「ランス」…つまり『馬上槍』に該当する。

それを振るうなり、突くなりするには相手との距離に十分な開きが必要となる。

それが、今、シャルティアは腕で吊り上げている程の距離まで相手と近づいているため、その攻撃力を十分に生かせるだけの空間的余裕を自分で潰してしまっているのだ、勢いの乗ってない攻撃ではその真価を発揮することが出来ず、威力が削がれる状態になったのが大きい。

破壊不能とは言え、決して防御性能が付加されているワケではなく全くダメージを減らす能力など無いのだ。

その為、ノーダメージとは行かず、充分ではないもののそれなりにダメージは通ってしまった。

今ごろシャルティアの方にはスポイトランスの効果で微量ではあるが、HPの回復はされているだろう…

そんな中でもベルは平静を装い、シャルティアに問いかける。

「ふん…それで全力か？ シャルティア…」

シャルティアの手首を極めたまま、シャルティア自身を武器のように振り回し、何度も何度も地面に叩きつける。

(しかし、さすが伝説級の鎧だな、ここまでしてもほとんどダメージらしいダメージを与えられないとは…)

さすがにこれ以上すると、モモンガさんの目が痛い…そつと手を離して距離を取った。

「うっうっう…おとおもしろおおいねえええ…もつと楽しませてちょうだあああああい」

(う…今気が付いたけど、シャルティアの翼も、傷が治って千切れかけだった根元が正常にくっついてるじゃん…さつきスポイトランスで殴られた際の回復効果でそつちも戻ってしまったか…いよいよ余裕がなくなってきたな…)



再び、突っ込んできたシャルティアだが、いかんせん細かい駆け引きなどは考えられない状態なのが、「血の狂乱」だ。

芸も何もなく、ただまっすぐ迫ってくるだけのシャルティア：その直線状に（ルチルの）魔法を発動させる。

ソーンバインド

〈茨の束縛〉

デイレイマジック

〈魔法遅延化〉

トワイニングプラント

〈植物の絡みつき〉

この程度の低級な足止め魔法を使った所で、行動阻害の耐性などの、移動阻害対策を施されているシャルティアでは、持つて1〜2秒だろう、それからはソコを抜け出して次の行動に移るだろうが：考えなしに最短距離を走ってくるなら、〈植物の絡みつき〉にも引つかかるのは自明の理、ってやつだろう。

「ちなみに審判？　ここで課金アイテムじゃない普通のドロップアイテム等を使った場合、ペナルティは？」

一応さりげなく、準備をしながら審判に問いかけた。

対してシャルティアは〈植物の絡みつき〉に丁度、引つかかった所である。

試合の流れを見つめながら試合のルール役であるナインズはそれに返答をする。

「課金アイテムはルールにしたが、普通のアイテムに関しては言及していなかったな：あまり悪質な連続使用でなければ「注意」という事にしておこう」

それを聞いたベルはすぐさま、今にも絡みつきを引きちぎって自由になろうとしているシャルティアから目を離さずに言葉を返す。

「ありがとう、なら甘んじてその「注意」のペナルティをもらい受けるとしよう！」

そう言うなり、ベルは準備した『下級回復薬』をシャルティアの顔面に投げつける。

絡みつきを引きちぎったシャルティアはすぐ目の前にまで迫った「物」を反射的に爪を振り払う事で破壊する、それと同時に中身である赤い液体がシャルティアの顔に数滴かかり、わずかに肌を焼いた。

じゆう…とした音と共に、僅かに焼け焦げたような煙を上げる頬…そこから感じる少しの痛みで表情が心持ち引き締まった。

シャルティアは、『血の狂乱』による強化状態、そこから来る全能感と言ってもいいような高揚感、その感情の高ぶりを邪魔した正体を見下ろし…そして瞠目した。

「下級回復薬？」

まさか、これは！と口に出しそうになった自分の口を堅く結ぶ。

少しだけ戻った冷静な部分を総動員させて自身の動揺を抑え込みつつ思考を巡らせた。

（これがナザリックの下級回復薬の筈がない…でも、この赤さは間違いない…イヤ、さつき目の前のコイツ自身が言っていたのを思い出すのでありんす…そう、こいつもプレイヤーの1人だと…）

そこまで考えを導き出したシャルティアは、そこから一気に希望的解釈へと結論を急がせる。

（なら…これはユグドラシルの…であって、決して我がナザリックの…というワケでは無いという事で間違いないでありんしょう…）

外見的には、ヤツメウナギ状態が半分、いつものシャルティアの外見が半分混ざりこんだような容貌で見た目が留まり、一気に先ほどの興奮状態は脱しているように見えた。

「とりあえず、シャルティアが冷静になつてくれてひと先ずは安心だね、ところで…こちらは一旦休戦としないかい？ 向こうが面白いことになってるみたいだからね。」

目の前のベルという男が意味のわからない言葉をいきなり提案して来た。

そのため、シャルティアは、ベルの方に一度視線を向ける。

別段、その提案に乗るつもりなどは無い、そちらが休戦したいなら勝手にすればいいが、自分はこの対戦で至高の御方に「勝利」という花を手土産に、『この世の美の究極』とも言えるあの白磁のような骨の

お身体で「よくやった」と抱きしめてもらうのだ、その為にはこの男に勝たなければならぬ。

そういった考えを内心で固めているところに、ベルが後ろを指さしている仕草に目を止める。

何気なく、そちらに視線を送ると…そこには…全ての事がどうでもいいと思ってしまうかねないほどの衝撃的な光景が目飛び込んできた。

それは…

☆☆☆

その場の時間は少しだけ巻き戻る。

それは、ベルがシャルティアとの戦闘に意識を向け、イミーナから半分ほど意識を切り離れた瞬間から…の事となる。

イミーナ自身は、以前、カルネ村の裏門に発生した「異界の扉」と表現してもいいくらいの違和感ある3つの扉の内、青い扉の中で過ごしていた修行の日々の中、試行錯誤の末、身に着けた装備の有効活用、その一端を解放させていた。

それは言うなれば「生体電流活性化」とでも言う技術。

それはベルがリアルの世界で聞きかじった知識をこっちの世界でも使えたら強化に役立ちそうだなと考え、チラっと聞かせてみた所、自力で通称「ペロロンアーマー」の中に宿る電流を調整し、細胞の活性化、さらにはアドレナリンなどの分泌物等をも代謝能力向上に役立たせ、結果、かなりの限定的なデメリットに後々見舞われるが、それに見合うだけの戦闘能力の向上を果たせるまでになったいた。

とは言え、さすがにレベル差70近くもある相手との力量差を埋めるだけの上昇は見込めない、そこを埋めているのが自動で防御と攻撃の両面で牽制をしてきている4枚の浮遊板だったのだが…。

その内の2枚の攻撃用がイミーナに近づかせないように前方や、両側面などあらゆる角度から変幻自在に攻撃することで、本来の標的である相手に近づくこともさせないでいる。

それがあるからこそ何とか、彼女の今の戦闘相手「エイン・ヘリアル」に喰らい付けている状態だと言えた。

イミナーナ1人だけではエイン・ヘリアルの突進を視認する事も出来ず、ランスに貫かれてしまっていただろう、今でも旋風の様なエイン・ヘリアルの動きは追い切れず、かろうじて攻撃の音、湾曲した形の板で攻撃を逸らせている際のこすれる音だけが耳に届くのみ、次元の違う戦いの中に身を投じてしまった後悔に陥るも、気丈に意識を保ち直す。

「まだ何か私に出来る事、出来る事…」

何とか震えそうになる体に活を入れ、自分に残された手札がないかの確認をし始める。

しかし、それを使用するには満たさねばならない重大な要素が、今の自分には足りていない。

この鎧装備の効果で作り出す…命名「雷撃弓」では、レンジャーの腕があるとは言え、あの相手では回避されてしまうだけだろう…あれほどの圧倒的なレベルを目の前で体感したことなど、「あの扉の中の異空間」でもなかった事なのだ。

しかし、あの場所での戦闘で、イミナー達フォーサイトは、格上の存在というものをまざまざと見せつけられた、その為、ある意味「上位レベル相手との心構え」という一点に於いては耐性が出来ていたのが幸いしたと言える。

一見、落ち着いて考え事をしているように見えるが、その実、全くそんな余裕はない。

シャルティアと呼ばれていたあの赤い鎧の…「守護者」と呼称していた女性、その者ときつと同格の存在であろうことだけは何とか自分でも理解できた。

ベルとシャルティアとの戦闘を見ていなければ、実力がほとんど同じということなど見抜けなかったかもしれない。

ベルからの説明は受けておらず、今戦っている相手の情報は自力でつかむしかない状況のイミーナだが、エイン・ヘリアルは暴風の様な攻めの乱流を一手に引き受けていた浮遊板にも限界が来ることになる。

魔法も、スキルも使えないエイン・ヘリアル

直接攻撃と敏捷さ、そしてその翼を利用しての上空からの攻撃、地形に左右されない動きなど、それらしか取り柄が無いと思われがちなエイン・ヘリアルだが、それでも「戦闘センス」という側面に立つと、それはシャルティアと全く同一人物と言って良い。

そして、何より、エイン・ヘリアルがシャルティアより勝っている点の一つだけある。

それはどんな状況においても精神的な動揺が一切起きないこと。

NPCとして自我を持つこととなったシャルティアと違い、エイン・ヘリアルは完全にシャルティアに創り出された魔法（スキル）的な存在であり、現状を即座に把握し、それを打破すべき行動を最適化して行える。

そこに希望的観測、自分に都合のいい憶測や、降って湧いた理不尽に心が折れたり…など、一切入り込む余地はない為、冷静に…冷徹に対処できるのだ。

無論、そこに「血の狂乱」など一切入り込める余地は存在しないという利点もあった。

エイン・ヘリアルは一連の攻撃、その履歴を総合的に判断して、防御に専念している物体は恐らく正面から自分の攻撃を受け止めるだけの耐久性はないものと判断するに至った。

…となれば、出来ることと言えば湾曲した形状に沿った利点を生かし、自分の攻撃を受け流す、その一点を攻略すれば後は簡単だ。そう結論付けて次の一手に移り始める。

攻撃役に徹している2枚の物体も、前後左右、果ては斜め前方、斜め後方も織り交ぜ、自分をこの場に留めようとしているが…このくら

いの攻撃では自分にとっては軽いものでしかない。

多少、被弾してもダメージはそれほどでもないなら、これを操る本体の方を仕留めればそれで事足りる。

そう判断したエイン・ヘリアルは、自分の行動を抑え込もうと襲い掛かるへ螺旋 突 槍に意識を払わず、被弾してもどこ吹く風だ。その代わり、標的をイミーナへと切り替える。

相手の姿を正面にして視界に収める。

すると、劇的に2枚の浮遊板の軌道が一変した。

エイン・ヘリアルの周囲を飛び回り、そこから先へとは行かせないように：それでいて視界を邪魔するように飛び回りつつ、攻撃が来た際はいつでも対処が可能ないようにしてる風なのが良く解かる。

へ螺旋 突 槍の初撃は、自分の突進のカウンターとしての側面もあつて、それなりにダメージはあつたものの、足を止めた状態から被弾した攻撃ではそれほどでは無かった。

これなら何の問題も無いと、これからの行動、それを効果的に結果を導き出せるよう、演算じみた思考で対処法をくみ上げていく。

急に、エイン・ヘリアルに見られる形となつたイミーナは一瞬硬直した。

：すると次の瞬間、エインヘリアルはイミーナへと突進を敢行。

そうはさせじと浮遊する盾板が再び、そのランスの先端を逸らせようとした動きに入る。

しかしそれもエイン・ヘリアルは承知の上だ。

逸らせようと湾曲面をランスの先端に沿うように位置した瞬間、100レベルの敏捷と器用さで体勢を浮遊した盾板へと相対するような体の角度に変更。

そのままの流れでよみなくその中心をランスで貫き、深々とそれを押し込む、盾の役目としてはもう使えないだろうというくらいまでの巨大な穴を穿っていた。

(あと一枚…)

中心に巨大な穴が穿たれた盾板ではもはや攻撃を逸らすことなど出来なしまい。

そう判断したエイン・ヘリアルは見せ技としての突進ではなく、本気の突進を発動させた。

その速度は光の速さか!と思う程に、瞬間移動の如く、目の前にまで現れたかと思うと…狙い過たず…イミーナの心の臓に狙いは定まっていた。

(獲った!)

エイン・ヘリアルがそう思った刹那、エイン・ヘリアルの側面から唐突な稲光が龍の形となって襲い掛かって来た。

…そう、それはベルが「勝つ必要は無い」と思い出した後、シャルティアの方向へと撃ち出したへ龍ドラゴン・ライトニング 雷レインだ。

「今の自分がすべきこと」…という結論の上で撃ち出した魔法、それはシャルティアにダメージを与える為ではなく、その向こうに行くよう、最初からそれを狙った一撃であったのだ。

(流れ弾のようなもの? …今それを考える必要はない、万一を考えて回避するのみ)

あと一瞬でもあれば、心臓を貫いていたタイミングだというものに、そんな中での余計な邪魔者に計画の修正を余儀なくされつつ、イミーナから大きく距離を取る。

直後、イミーナはそのへ龍ドラゴン・ライトニング 雷レインに、そのか細い身体を貫かれることになる。

「ああああああ!!!」

(私が直接、手を下すまでもなく勝負はついた?)

さらに一步距離を取って、様子を見る。

イミーナは身体にバチバチとくすぶる電流を纏わせながら、天を仰ぎ見て、直立している。

きつと予想外の方向からの魔法に対処が遅れたのだろうと、エイン・ヘリアルが結論を出そうとしていた時、へ龍ドラゴン・ライトニング 雷レインに撃ち抜かれた彼女に反応が起き始めた。

「そうよね…、これさえあればあの子も出せる…きつとアレの助けがあれば…」

そうブツブツと何事かをつぶやきながら、イミーナはその防具にドラゴン・ライトニングへ龍 雷の雷撃量と、そのMP分を吸収するように吸い込んでいく。

そこに黒焦げになっている様子などどこにもない。

(なに?…一体何が起きている?)

☆☆☆

(正直、オートで展開してる攻防手段と「生体電流活性化」の維持魔力消費では、今までの吸収分と合わせても、ちよつと魔力とか電流の量とか、足りなかったのよね…けど、これで発動できる!)

そう決断すると、イミーナの装備している防具から電流の迸りが音もなく、一瞬〈閃光フラッシュ〉にも似た光を伴い、天井へと突き上げるくらいの勢いで噴きあがっていく。

(なんだ?…何が起きてる?)

エイン・ヘリアルが、あまりの情報不足、初見の状況変化に「見」の姿勢を維持している中、その天井へと至った爆発的な電力は…上方で、次第に翼のある人型へと形状を変化させていく。

「ピエエエエエエー!!!」

空の上で高らかに雄たけびを上げた「ソレ」は、翼をはためかせ、ゆっくりと…そして勇壮に降り始めてきている。

「これが私の今の最大の切り札! 今の雷撃魔法が無ければとてもじゃないけど生み出す魔力が足りなかったところよ!」



一気に強気になれたイミーナ。

これを発見できたのが、あの扉の奥へと広がっていた異空間での修行、その最後の一戦で、初めて感覚を掴め、今よりおぼろげながら辛うじて人型に見える程度の存在を生み出したことが始まりだ。

それ以降、彼女の中でイメージトレーニングをしていたのだろう。

最初に生み出してから随分と洗練され：某バードマンとかなり近くなっているのは：それも奇縁と言った所か？ それとも残留思念をかき集めてそれを電力で構成させたらたまたまアレの姿だったのか：それは誰にも知り得ない事象である。

(なんだ？　なんていうんだ？　アレは：？)

「エルド！　やっちゃって！　<sup>ライトニング・スコール</sup>〈突風雷雨〉」

：エルド、それはイミーナが生み出したこの電流の身体で構成されたマジックアイテムの効果を拡大展開させた結果、発生した「コレ」に彼女が名前を付けてしまったものだ。

ベルは「これって、ペロンバードとか付けない？」と提案したらフォーサイト全員から「もしかしてベルさんってネーミングセンスなのかな？」と評価が少し下がってしまったのは残念なエピソードだ。

それから散々名前前で悩んだのだが、フォーサイトの『『黄金の鳥』』みたいだし、それにちなんで名前付けて見ないか？」とヘツケランが言ったその言葉に「黄金のコンドル：エル・コンドル：か」とベルの何気ない呟きに反応した誰より耳のいいハーフエルフのレンジャー、イミーナが根掘り葉掘り聞き出したことにより、結果として、黄金都市「エル・ドラド」と「エル・コンドル」のいいとこどりをして「エルド」にしたらしい：ベルからしてみればどう見ても「ペロロン」さうんと言いたくなってしまいう程なのだが：それは口に出さないようにしているようだ。

今も少し上空にいるペロ…ではなく「エルド」は、その指示に応えるように大きく翼を広げると、エイン・ヘリアルに向け、突風を伴う程の雷撃属性が乗った羽根の集中砲火をお見舞いする。

イメージ的には「触腕の翼」の雷撃バージョンと言えればいいだろう。

一発一発は高位階の魔法に比べ、威力こそ若干弱めなもの、それが大量の数、爆撃か、一斉照射か、というくらいの数、撃ち出されるのだ、結果的にそれなりのダメージへと繋がっていく。

(う…さすがにこのままではまずい…、だが計画は変わらない、術者の攻撃に移る。)

エイン・ヘリアルが意を決し、イミーナに突進し始めた刹那、それに対して、エルドの方も落雷の直撃にも似た急降下で、エイン・ヘリアルに体当たりを仕掛け、地面に叩きつけた。

それに一瞬の逡巡も見せないエイン・ヘリアルは執拗にイミーナへの攻撃へと行動を一貫させる。

だが、それを許さないエルドは、「爆撃の翼王」にも迫りそうな程の突進で空を駆け、エイン・ヘリアルの背中に、一本の光の槍、ランスチャージにも似た肘打ちを敢行、ダメージによる一時的行動制限などはないものの、見事に狙っていた場所とは違う方向へと吹き飛ばされていた。

エルドは、イミーナの前、エイン・ヘリアルとの間に立って、油断をせず生み出してくれた装備の持ち主の護衛を続ける姿勢を取った。

闘技場の壁に叩きつけられながらも、痛みの制限のないエイン・ヘリアルは再度、突進を仕掛ける。

今度はイミーナではなく、対象はエルドだ。

(こいつを排除しない限り、術者は倒せない、なら目の前のコイツから！)

連続に次ぐ、連続、体力の尽きることも疲労を覚えることもないエイン・ヘリアルだからこそその息をもつかせぬ連続攻撃、普通の相手ならそれだけでも充分だっただろうが、相手をしているエルドも、同様に「呼吸の必要もなく、疲労も覚えない」存在であることに変わりはない。

ない、その為、勝因となるのは自力の差だけだろう。

片や、遠距離攻撃特化のキャラの残滓から発生したイレギュラータイプ

片や、カースドナイトのクラスを取得しているナイト職でありつつ、信仰系魔法詠唱者でもある、総合能力最強の存在のコピー。

筋力勝負になれば、多分エイン・ヘルアルに軍配は上がるだろう。だが機動力勝負であれば、エルドの方が恐らくは上だ。

あとは装備の面では、エイン・ヘリアルもエルドも自前の防御力や魔法防御が決められているという点では見た目からの判断は微妙な所だ。

しかし、直接攻撃という点では、エインヘリアルの武器にはHP回復の手段は講じられていない。

ならうまく立ち回ればシャルティア個人よりは戦いやすいと言えるだろう。

イミーナとエルドは装備者と、被創造物としての繋がりははっきりとしている為、イミーナが頭で念じただけでエルドにはその意思が通じる、その為、コンビネーションの点では勝っている。

多少、エイン・ヘリアルの連撃の直撃を受けつつ、エルドは攻撃をさばき、機会をうかがう。

エイン・ヘリアルは冷静に、堅実に進めれば勝てると認識していた。(多少でも自分と渡り合えるだけで相応のレベルだとは思うけど…威力に脅威は感じない、なら私の方が上！)

内心で、そう結論は出しているが、油断で敗北をするつもりはない。チャンスの時は迷わず行かせてもらう！

と思いつながらの連撃で、エルドがエイン・ヘリアルの武器を大きく弾いたその瞬間に、体の中心線が開きが生じたのを見て取る、これは

致命的なミスだ。

エイン・ヘリアルが、その防御が解かれた部位に、自身の武器を一気に突き出す。

(よしーこれでコイツは終わり、あとは術者を仕留めれば…) と思いをめぐらせようとした瞬間に…。

「ガキン!!」

いきなり硬質な音が響き渡る。

意識を逸らしかけては居たものの相手から視線は外していなかったはず、と思いそこに目をやると…

先ほど大穴を開けて1枚攻略したはずの防御用の盾板、その残り一枚。

だが、ただそれだけではなく、大きさがずいぶん小さい。

見た感じ厚みもある…

そう思いよくよく見てみると、8つ折りになって分厚くなっている四角い金属板と化したそれが、エイン・ヘリアルのランスの先端を受け止めていた。

しかも、それが残された3枚分、重なっている、分厚くなり、貫けなかったのも道理だ。

薄い防御でも、折りたたんで厚みを増して行けば、それだけ護りも厚くなる。

ピンポイントでかなり危うい方法ではあるが、攻撃してくる場所が分かっていたらそこに置けばいいだけ…そう考えれば、わざと隙を作り、攻撃を誘導されたのだと、やっとその時に気が付いた。

…が、その貫けなかった8つ折りの板3枚分に意識を奪われていた瞬間、機動力を生かしたエルドが、エイン・ヘリアルの背側に回り、羽交い絞めにする。

それと同時に、全身が電撃で構成されているエルドが、抱きついたエイン・ヘリアルに全力の放電を開始した。

イミーナも、身動きの取れないエイン・ヘリアルを相手にして、ペロロンアーマーの雷撃弓を準備させ、狙いを相手に定め、エルドとの同時コンビネーション攻撃をお見舞いし、HPを削っていく。

(なんで？ こここまでやつてもまだ倒せないなんて…、どんなデタラメな体力してるのよ…)

イミーナが内心で舌を巻く、このまま続けていれば勝てるかもしれないが、純粋な筋力勝負だとエルドではあの相手には負けてしまうかもしれない…引きはがされたらおしまいだ。という危機感はいミーナでも理解できていた。

(ならば、エルドの最後の手段…あれで仕留め切れなかったら、覚悟を決めるしかないわね…そうだったら、あとは…最悪、ロバーがああ修行の異空間で「レイズデッド」を覚えるまで特訓してくれることを願うしかないかしら)

どこか冷静にそんな考えを浮かばせながら、イミーナが最後の勝負に出る。

「エルド！ 全魔力解放！ 〈稲妻、太陽落とし〉よ！」

稲妻、太陽落とし…それはペロロンチーノがユグドラシル時代、生み出すことに心血を注いでいたコンボの名前、「太陽落とし」が素になっっている。

例え、残滓であつても、この異世界に発現するくらいなら、きっとその理想もどこかに残っているのでは？ という希望的観測でベルがイミーナに発動を促してみた所、ちゃんと発動して驚いた、という経緯があるものの、ベルリバーの知っている「太陽落とし」のコンボとは全く違うモノになってしまっていることは、致し方ないだろうなと思う、結局、この異世界に残されたのは「残滓」でしかないのだから

…  
それにしても雷撃の身体だから頭に「稲妻」って入れたけど…妙に  
たっちさんの気に入りそうな技の名前になっちゃったな…という感  
想を抱いたのは、誰にも話していない。

イミーナがそうエルドに指示をすると、エルドの電撃が一段と強く  
迸り、光り輝く。

その電流の攻撃により、持続ダメージがエイン・ヘリアルに通つて  
いる中、空にまるで太陽でも現れたかのような…球状の巨大な雷球が  
出来上がる、それが落ちてこようものなら、正に「太陽落とし」だ。

その光景に、拘束を振りほどくことを早めようと決心したエイン・  
ヘリアルの好きにはさせないようと再びイミーナが指示を飛ばす  
と、エルドは、エイン・ヘリアルを羽交い絞めにしたまま、空に飛び  
あがる。

エイン・ヘリアルの表情自体は全く変化はないが、そこに落ちつき  
はなく、焦りを物語るように体に力を入れ、拘束から逃れようとして  
いる。

エルドは、長くは持たない拘束をそのままに、次第に落ちて来る太  
陽のような雷球へと、そのまま空を駆け突っ込んでいく…

そして…巨大な雷球に、エイン・ヘリアルごと突っ込んだエルドは、  
お互いに体力を削られ、焼かれながら…、地面にその「太陽」が落ち  
るままに身を任せる。

決して、エイン・ヘリアルを自由にはさせないという覚悟と共に…

☆☆☆

地面に、太陽が堕ち、地表に激突するとともに巻き起こった爆発に  
巻き込まれたエイン・ヘリアル。

巻き込まれるより前にかろうじて脱出に成功したエルド…。

太陽の消滅、爆発の消失と共に、残されたエイン・ヘリアルは、地面に横たわった状態のまま、霧のようにその体を失わせていった。

「ありがとう、エルド、よくやって…」

と、そこでイミーナが労いの言葉を紡ぎかけた瞬間、意図しない場所から、予測もしない言葉が闘技場内に轟き渡った。

「ペロロンチーノさまあああああああ  
!!!!!!」

次は「先鋒戦、エピソード」に続きたいと思います。

第58話 先鋒戦 シャルルティア VS ベル「エピソード」

それは突然、私の前に現れた。

私はその瞬間、自分の目を疑っていた。

自分が待ち焦がれ…決して叶わないだろうとずっと「無いものねだり」を向けていた相手。

そのお方と瓜二つの存在が現れて…いや、降臨されたと言った方がいいのだろうか？

あまりの衝撃に思考が追いつかない自分が情けなく思うも、それは仕方のないことかもしれないとも思う。

そう…それは自らの創造主と同じ…いや、かなり薄まっているが、その存在からは御方から感じていた確かな繋がり…至高なる御方々が例外なく纏っていた空気…雰囲気を感じ取れたのだから…

でもなぜ薄まっているのだろうか？

アインズ様でさえ、強大なお力をそのまま、その身にまとわせているというのに…

まるで、力を失い…今にでもその身が消えてしまいそうな儂さすら感じられた。

(まさか…相当のご無理をされて、この世界に顕現されたという事でありんしょうか？)

宙に浮かび、雷光の羽根を高速でエイン・ヘリアルに撃ちだしているそのお姿。

凛々しいその立ち姿が…。

麗しきその翼が…勇壮なるその羽ばたきが…。

その身からほとばしる、神々しいばかりの煌めく光の粒子。

雄々しい一挙手一投足に見惚れてしまう。

自分が生み出した存在、エイン・ヘリアルが消えていなくなった瞬間、「ハッ…」と我に帰った。



(そうでありんす！あの御方がここにお出でになられたのなら全霊を以って労いに行かねば創造された者として、顔向けが出来んせん！) そう…こんなどうでもいい存在のことなど構っている時間すら惜しいとばかりにベルの存在をわざと無視をするように顔を背け、雷光で形作られたバードマンそのものの姿をとったその者へと…飛び込もうと足を踏み込んだ時、自らの状態に目をやる事が出来たのは幸運だったかもしれない。

なにしろ、創造主様によって授けていただいた、この「真紅の鎧」それがこんなにも細かい傷を負い、所々損傷も見受けられた。

このままの状態で目の前に自分が現れたら…創造主様はどう思われるだろうか？

最高の理想像として生み出された自分が…普段の振る舞い、趣味嗜好…更に戦闘においても「理想」とされ創られたはずの今の自分の状態を見たら、失望されてしまわないだろうか？

そう思い当たると、どうしてもこのまままで飛び込んでいくコト自体はばかられる気がした。

(なら…この鎧を解除してしまって、元の「完成された体操服」に戻れば…あれならまだ傷もついていないから…問題はない筈…)

そう思い至り、装備を変更…というよりアンダーアーマー状態であった体操服姿に戻る為、防具である鎧を解除。

(よし、これで準備は万端でありんすね♪)

そうして、いよいよ待ち望んだ瞬間に胸を高鳴らせ…完全快復した白い翼をはためかせると、踏ん張った足で地面を蹴り、離れていた距離を一気に詰める。

シャルティアは、弾丸のような速さでそのまま目標を撃ち抜かんばかりの速度で、その胸へと飛び込んでいった。

「ペロロンチーノさまあああああああ  
!!!!!!」



イミーナは突然、耳に届いた声の方へと顔を向ける。

いきなり、自分が生み出した魔法的存在である：自分が命名した存在「エルド」、それに体当たりをぶちかましてきた存在が居たためだ。

その勢いはどこまでのものを内に秘めていたのか：エルドにタツクルの様に腰につつこんできた影は：そのまま後ろの方へと：闘技場の壁に背中がぶつかるまで止まることは無かった。

エルドの足を引きずった跡が、まるで電車の通った道の様に見事な直線となり、線路の様に地面に刻み込まれている。

（え？ いきなりなに？ 攻撃しにきたってこと？ 私と距離を離させることで各個撃破でも狙ったという事？ だとまずい、私とあの子ではレベル差があり過ぎる、多分一発でも攻撃が当たれば私はそのまま即死しちやいそう…）

そして、電流で作られた身体を持つエルドは、シャルティアにタツクルされたようでもあり、すがりついているようでもあるその行動に、ただただ無感情で立ち尽くしていた。

今のエルドの行動方針はただ一つ、自分を生み出す素材となった装備の所有者、もしくは装着者に降りかかる脅威を排除すること：それ一点のみだった。

イミーナ自身、エルドを使って力を行使しようなど、頭の片隅にも存在しない。

その為、親譲りの魔法を構成させる際のイメージトレーニングの応用で、生み出したエルドに、その一点だけを設定したのである。

しかしイミーナ自身は魔法は全く使えない。

そもそも、親の遺伝子を受け継いだはいいが、MPが全く遺伝しなかったのだ。

魔法を構成させる手順、イメージでなんとなく形成させることは出来るが：MPがない為、宝の持ち腐れなのである。

それがこんな形でどうにかできるようになるなど、イミーナ自身も思っていないかっただろう。

しばらく見た感じ、エルドに飛びついてきた存在は、ずっと抱きつ

いたまま攻撃の意思を見せることは無い。

エルドも、防具の所有者に危害が及ばないのであれば、行動に移す要因がない為、立ち尽くしているのみであった。

「ああああ…ペロロンチーノ様…我が創造主、至高の御方々の中でも私だけの特別な…待ち焦がれていた御君…この時をどれほど待ち望んだことか…ここまで近づけばわかりんす…確かに感じるこの波動、伝わる威厳、まさしく偉大なるただ一人のお方に相違ありんせん…疲れていんすなら、お力が戻るまでいくらでも休んでいてくんなまし…」

抱きつきながらもシャルティアは一人の世界に入り込む。

（ああ…この感じ…以前、ペロロンチーノさまも仰っておられた…全身を電流が走り抜ける程に惚れ込んだ、というやつでありんすね。つま先から脊髄を通り…脳髄に至るまで流れてきているこの刺激、全身にこの甘いしびれが味わえていい心地でありんす）

その光景を見て啞然としているのは、先程まで戦っていたベル当人である。

本当はNPC達が心の中ではどんな想いで居るのか、普段は押し込めているだけで実は解消することの出来ない負の感情があるのではないかとどこかで疑っていたのだ。

きつと含むところがあるのなら、いざという時になればそれが噴き出すのではないかと…そう思いシャルティアにその場を用意してみたのだが…予想とは全く違う展開になってしまっていた。

（アインズさんからはカルネ村の夜に聞かせて貰ってはいたけれど…ここまでNPCの想いが強いなんて…どうすればいいんだ？これ…）

そう思いながら、状況を見ていたベル…、そしてエルドに抱きついていたシャルティアが同時に、突然の変化を感じ取っていた。

（体が薄くなってきている？）

（痺れの感覚が弱くなってるんでありんすの？）

エルドの体を構成している雷の電流、それ自体が、先程の「稲妻太陽落とし」の際に使った『全魔力解放』により、自分の体を保つだけの力が失われてきているのだ。

それと気づいているベルと、そうとは知らないシャルティア…

両者の違いが真つ二つに割れて態度に現れる。

「いやああああ!!! ペロロンチーノ様あ!! 置いて行かないでくんなまし! また去られるおつもりなら…せめて…せめてこのシャルティアを…わらわを一緒に連れて行って欲しいであります! ペロロンチーノ様! ペロロンチーノさまああああ!!!」

体を保つことも出来ず…しっかりとつかもうとするシャルティアの手もすり抜ける様にエルドの体が景色に溶けていく。

何度も何度も、その手に…今にも消えそうな大切な人を掴もうとするシャルティアだが…その手は虚しく空を切ってしまう。

「ペロロンチーノ様!…せめて、この想いが叶わないのであれば、御君よりのお言葉だけでも…私だけに残していただけるお言葉だけでも!!」

すでにそこに先ほどまでのシャルティアの余裕はない。

創造主より決められている「間違った廓言葉」という設定でさえ、その焦りから使うことも忘れて叫ぶ。

そこに後ろから見ていたイミーナがいたたまれずに、シャルティアへと声をかけて来た。

「あの…き、取り込み中に悪いけど…エルドって、言葉、発したことないのよ…多分、話すって意識がまだ…」

とシャルティアからすれば慰めにもならないような言葉をかけられているその瞬間…

「……………ぶ……………」

シャルティアの前からすでに霞程度しか体を保てていないエルドから、音声が発せられる。

「ペロロンチーノ様!…わらわであります! 御君のご寵愛により生み出されたシャルティアであります、なにとぞ、なにとぞお言葉を、ペ

ロロンチーノ様からの直々のお言葉をおく！」

待ちに待った、「創造主からの言葉」

その念願が叶う、ムネを高鳴らせ、次に続く言葉をひたすら待ち受けるシャルティアに向けて…

エルドが発する初めての言葉が、シャルティア、イミーナ、そしてベルの耳に届く。

「……………ま……………」

凍り付くベルリバー

エルドが言葉を発するという異常事態に、驚きを隠せず、狼狽え、言葉の意味も理解できていないイミーナ。

そして、この場にただ一人、その意図を汲んだ存在が喜びの表情の中に悲しみの涙を湛え、必死に笑顔を取り繕いながら、声をかける。

「はい！ ペロロンチーノ様より賜りし、この完成された体操服、この場にて着用させていただきました！ もっと、もっとお声を…もっとそのお姿を…私の…私の為に…!!」

悲しみの慟哭と化しているその切なる願いがこもった言葉を最後に、エルドの姿が空気に混ざって消える。

空に手を伸ばし、必死に手を動かすも、その手になにも掴めない事実に、希望を見せられた直後の絶望、そして喪失感を味わい、地面にヒザと手をつき、アンデッドであるにも関わらず、とめどなく涙をこぼし続けるシャルティアを、イミーナだけが事情が分からずオロオロとして見ていた。

「あ…あの…さ…えと…」

何と言って声をかけていいかわからないイミーナが何とか絞り出してその言葉だけをシャルティアに発した直後、その様子に変化が現れた。

「お前でありんすね…？」

「……………え？」

唐突に問われた質問に、何のことが分からないイミーナが答えに窮

していると、ゆらりと立ち上がったシャルティアが、イミーナにその目を向けると、一気にまくしたてる。

「お前が……この世界に来る為に力を使い果たした、かの御方を封じたのでありんしょう!! どうやったのかまでは解かりんせんが、マジックアイテムでも使いんしたか! それともタレントといわず技かなにかでありんすかああ!!」

シャルティアの表情が一気に「本気モード」になっているのがベルには理解できた、もはや一刻の猶予も無い、一瞬でも戸惑えば、イミーナがその爪で首を飛ばされる。とイメージ出来た彼は……元から用意していたアイテムを懐から取り出し……シャルティアへと向け……その頭をポン……と軽くたたく。

シャルティア自身はそのアイテムに意識など向けていない、イミーナに対する敵対心、そして彼女を殺せば、きつと御方が囚われている封印が解けるはず、そうすればきつと元の主人に戻って、帰って来てくれるはず……自分の下に戻るはずだと確信めいた想いが先立ち、つゆほども疑っていない。

(なんかいきなり突拍子もない事を思いついたものだな……、そんなこと、全く考えもしていなかったけど、どうやったらあそこから決着まで持つて行くつもりだ? ベルリバーさん……ちよつと気になるな、もう少し見守ってしよう……)

審判として、空気となるべく務めているナインズは、この場においても全く動じていない、この戦いの終着点がどこに繋がっていくのか……少しワクワクし始めているのもあり、よほどのことが無い限り、観客に徹していようと行動方針を決めていた。

(まあ、シャルティアや、NPC、ベルリバーさんとかに致命的な被害が及びそうになったら割って入るけど……それまでは成り行きを楽しませてもらう。最終的には危険が及ばない範囲で決着させるってのは聞いているしね。)

そして、わずかにシャルティアが前かがみになりかけた時、シャルティアはどこからか声がかかる。

「やあー。シャルティア…元気でやってるか？」

それは、怒りの頂点に居たシャルティアですら、一気にその熱を冷ますのには十分な衝撃だった。

それは…何よりも待ち望んだ人、その者の声だったためだ。

「ペ…!!」

イミーナのことなど意識の外に追いやり、声のした方へと首を反転させる。

すると、そこには…ベルという男の手にある真つ黒な珠、そこから発せられる光の中に、クリスタル・モニターへ水晶の画面に似た、映像を投影する窓が映し出され、その中にシャルティアが待ち望む人物が映りこんでいる。

「ペロロンチーノ様!!」

シャルティアの顔が驚愕に彩られる。

(なぜ?あの時のペロロンチーノ様は淡くとは言え、間違いなく御方としての雰囲気を出されていた、それに今、目の前の画面にいるペロロンチーノ様からはなんの威光も、波動も感じられんせんのに…画面の方が本物だとわらわの女として…いや、創造物としての直感がそう訴えているであります。)

「惜しかったな、いいところまでは行っていたが…彼をここに留まらせたのは、私の方なのだよ…」

画面の中のペロロンチーノが次の言葉を言い出そうとした瞬間、その珠の頭にもう一度軽く手を乗せると、ペロロンチーノを映していた画面は消え、元のただの黒い珠へと戻ってしまふ。

「お前…それをどこで…いや、どうやって…、何故…いや、お前は一体何者なんでありませんか? 一体、どんな卑怯な手を使ったあ!!!」

頭の中の整理が追いつかず、いくつもの質問を同時にぶつけようとするも、自分でもどの質問を優先すればいいかわからず、思いつく順番でベルに問いをぶつけた。

「それをどこで手に入れた？」

「どうやって至高の御方を封じるなど出来る？」

「何故、途中でペロロンチーノ様を消した？」

その三つの質問は途中で問うのをやめ、後で聞いてもいいことだと判断し、最後の問いかけに繋げる方を選択する。

何故なら、まだ微量ではあるが、至高の御方、我が主人、ペロロンチーノ様の残り香は、未だに漂っている。

物理的に存在ごと消されたワケではないと信じられるために、それ以上の醜態をさらさずに済んでいた。

「卑怯な手とは人間きが悪い…、私はただ新鮮な…おっと、失礼、最盛期のままの彼の姿を衰えることの無い世界ですつと安寧に留まってもらっているだけ…、彼の為になっっていることなのですよ？」

外野で聞いていたアインズは、吹き出しそうになるのをこらえていた。

それというのも、彼が取り出していた真つ黒な珠に見覚えがあった為だ。

(あれってそれぞれのNPC達に宛てた、メッセージを記録させたアレだよな…確かあの珠には後半で「あの人」も一緒に記録していたはず…でも、ベルリバーさんも正直に「映像として記録している」って言えばいいのに、持って回った言い方をして…シャルティアをいじって楽しんでる?)

かつて、ユグドラシルで遊んでいた時、ベルリバー以外のギルメンのそれぞれが、一通りNPCを創造し終わった頃、ギルメンの誰かがふと漏らした言葉。

「せっかくここまでは創っても、ユグドラシルのサービスが終わる日が来たら…失っちゃうんですよ、それも寂しい気がします」

そんな言葉がポツリと漏れた時のこと、その言葉を「いつ言ってく



れるか」と待っていたベルリバーが発案して、催されたギルド内イベント、「自分で創ったNPC達に、それぞれに向けたメッセージを記録しよう!」と銘打った、ある意味『羞恥プレイ』が行われたことがあった。

複数のNPCを作成したプレイヤーも居たので、そういうギルメンには、作成した人数分、ちゃんと記録してもらっている。

一番苦勞してメッセージを吹き込んでいたのが、ヘロヘロ、ホワイトブリム、ク・ドウ・グラーズの3名、それぞれが作成した一般メイド達に対して、個別に一人一人名前を出して吹き込んでいたからだ。

一般メイド達一人一人の名前をきっちり記憶して、すらすらと3名で41人分、1人たりとも被らず、抜けもせず言いきった時は、さすがの発案者であるベルリバーも閉口したものだ。

(ヘロヘロだけは、さらに加えてソリユシャンにも伝えているので、正確には41人以上の名前が出ていたが…)

発案した、提案者であるベルリバーが、映像記録用のクリエイティブツール、及び、音声記録用のセットも含めて、予め40人分用意していた(半ば、自分がNPCを認めてもらえなかったことに対する仕返し)の側面も大きかったのだが、多数決の場に居なかったメンバーからすれば「とぼつちり」である)ので、さすがにその場でツールと宝珠の紐づけを40人分こなすのは難しい、と言うことで、後日、それぞれの個別ギルド内メールポストに添付して送ったことで完結しているはずと、みんなが思っていたのだが…。

(そっか、考えてみれば「添付」で送信したんだから、オリジナルは変わらず、ベルリバーさんの手元にあってもおかしくないんだよな、自分ほとんどインしてたから、手渡しで現物をもらえていたけど…まさか、コピーしてないですよね?ベルリバーさん!)

「ふざけるなよ、てめえ!今「新鮮な」って言ったなあ!お前…それを今すぐ渡せ!さもないと…」

すでに、沸点に達したシャルティアが、激高した言葉を投げかけるも、ベル自身は涼やかな風で答えを返す。

「手渡すのはいいですが、これ、一応マジックアイテム扱いですよ？あなたがその手で受け取っていいんですかね？ 大事なことを忘れていませんか？」

「……………!!!」

（そうだ、あれがマジックアイテムなのだとしたら…自分が直接触るわけにはいかなかった）

そう、それがシャルティアのデメリット、「カースドナイト」のクラスを所持する者が一定以上のレベルに達すると洩れなくついて来る「一定のレベル以下のマジックアイテムの破壊」だ。

無論、「真紅の鎧」も「スポイトランス」も大きく分ければマジックアイテムというくくりに入るのだが、どちらもレジェンド以上であるために、その対象に入らない。

今、着ている「体操服」はと言えば…、それはただ「LVいくつ生地」などの材料から作られた純粋な素材作成アイテム。

マジックアイテムではない以上、破壊されることは無い。

シャルティアの手持ちの中にはペロロンチーノの残した「課金して買った衣類、アクセ」もあるのだが、それも「課金装備」という扱いで、マジックアイテムとはならない為、それも壊れることは無い、無論いつも装備しているペロロンチーノから持たされた『即時蘇生の効果が発生する指輪』もそうだし、さらにいつものボールガウンも課金装備である。

しかし、ベルリバーが持つ映像投影装置は別だ。

魔法的な要素が、作成時に絡んで入れば、間違いなく「マジックアイテム」である。

軽くつまんだりする程度なら、発動しないこともあるが、しっかり手で持ったり、装備しようとしたりすれば…結果は推して知るべし、である。

「ぐ…ぐう…なら、シモベに持たせるわあ！」

（こっちには吸血鬼の花嫁がいるでありんすから、そいつらの誰かに持たせて操作なりさせればいいだけでありんすからねえ）

「そうか、なら、これをしっかり持ってみてもらえないかな？」

そういうと、シャルティアにポンと放り投げられた小手状のもの、この世界に来て初期に作った鉄でコーティングした木製のガントレット状のバックラーである。

「ん？…なんでありんすか？」

放り投げられたソレをしつかりと受け取るシャルティア…しかし、変化は無く、そのまま存在し続けている。

（ふむ…あれは一応「魔法」で作った現地素材100%の装備だから、どっち扱いなんだろうと持たせては見たが…壊れる様子はないな…こっちでは「魔法」での作成であつても『魔法金属』などが絡まなければ、マジックアイテムと判断されないのか…？ それとも…）

少しだけ思案して、アイテムボックスから新たに取り寄せた物をベルが、シャルティアに放つて寄こす。

「次はこっちも少し、持ってみてもらつていいかな？」

放つて寄こしたのは、バングルと呼ばれる腕輪の形をした装備、ユグドラシル時代、「持っていた方が何かと便利」と言われ、なんとなく持っていた数個の内の一つ、一番効果の低い方。

「装備生産効率上昇」と「装備生産速度上昇」の効果の宿ったデータクリスタルを入れた物。

地金となつている素材は単純な「LV金属」

（データクリスタルが「マジックアイテム」として大きく左右しているかどうかだな…、一番効果の低い方だし、ナザリックに戻ることになれば、装備の作成なら任せられるNPCが確か居たはずだしな…）

これが2個あつたので、ベルリバーとフレイラの2人で装備して、彼の鎧を新たに作れたが、そうでなければ作成系のクラスもスキルも持っていないベルリバーと、「作成者」というクラスを持っていても、装備に特化したクラスじゃないフレイラでは、間に合わせとは言え、鎧を作るとか…まず無理だつたらう。

それを受け取った瞬間にシャルティアの手の中で、その腕輪が砕け散る。

（予想通りと言うべきか、さらに検証することが増えたことに悩むべきか…だな）

「なんのつもりだ？あぁくん？ まさか、遊んでるんじゃないやねえよなあ？お前え？」

（シャルティアもそろそろ限界だな…、そろそろ渡すか…でもその前に…）

「大丈夫ですよ？万が一がないように、ちよつとした検証をしていただけですから…、あ、そうだ、これは返してくださいね？」

そう言つて、最初に渡した、小手状のバックラーをシャルティアの手から受け取ると、アイテムボックスにしまい込む。

そうして、次にアイテムボックスから有り余っているLV25金属を取り出し、〈道具作成クリエイト・アイテム〉を唱え、金属糸を作成し、さらにそれに同じ魔法をかけ、真つ黒な珠を包めるだけの大きさをした布を作り出す。

（とりあえず、魔法で作りに出した物でも、データクリスタルが入ってない状態では壊れないことだけは分かったからね、間に合わせだけど、これでシャルティアが持ち歩く時でも壊れることは無いだろう。）

そう思いながら、黒い珠をそのまま布で包みこみ、シャルティアの方へと腕を伸ばして見せてやる。

「こうすれば、あなたの手で持ち歩く時でも壊れることはないかなと…その検証をするためですよ。」

「それならそうと最初から言えばよかつたんじゃないかと思ひんすが？」

少し、落ち着きを取り戻したのか、言葉遣いが荒いものからいつもの言葉遣いに近いものへと変わっていく。

しかし、シャルティアがそれを受取ろうと手を伸ばした瞬間、ベルの腕はシャルティアの手に渡さないように、その包みを大きく持ち上げる。

「な…なんでありんすか？ 渡してくれるんじゃないやなかつたんでありんすか？」

「いや、コレは私の感じたところ、あなたにとってかなり価値のあるものと見ました。となれば…こっちの要求にも応えてくれないと割が合わないと思ひませんか？まさかタダで、これをもらおうと思つてい

たわけじやありませんよね？」

しずかに見下ろすようにシャルティアにそう告げると、うなるように黙り込んでしまう。

「う…う…、何が欲しいでありますか？ 何と交換なら、それを渡してくれるつもりでありますか？」

「話が早くて大変助かります、なあに、そんなに難しいことじやありませんよ、ただこちらの要求を一つだけ、飲んでもらいたいただけですから、それさえ了承してくれば、これはこのままお渡ししましょう。」

「一つだけ？ なんでありますか？ 何を望んでいるでありますか？」

「私が、このまま、これ以上ダメージを負わずに、傷もつかない状態のまま…」

（なんでありますか？ 私に負けを認めるとか…そんなことでありますか？ もしそうなら口惜しいでありますか…、いや、そうだった場合、ナザリックの…、ギルド、アインズ・ウール・ゴウンの名に傷をつけることに…もしそういう条件なら、アインズ様にお聞きした方が…）  
そうベルの言葉を聞きながらも、思考を巡らせるシャルティアに冷たい、静かな言葉が告げられる。

「私、ベルサイドの陣営の負けを受け入れ、負け星を1つ…という条件で、次の対戦相手との立ち合いを望みます。…端的に言いますと、私の負けを受け入れろ…つまりそう言いたいわけです。」

「はあ？… 勝ちが欲しいわけじやないんでありますか？ 負けを認めろ？ そんなことで、それを渡してくれるということでありんすか？」

信じられないという顔をするシャルティアに対して、ベルからの返答はさも当然という風に紡がれる。

「あなたのような化け物じみた…あ、いや失礼、魔神じみた、あ、いや…神にも迫る実力の方とこれ以上の交戦をしてもこちらの被害が大きくなるばかりですからね、それにあなたがさつきまで使っていた武器、ダメージの回復がされるのでしょ？」

「な…、なんのことでありますかえ？」

ぎこちない返答を返すシャルティアに対し、確信を持っている情報だがあえて、推測と言う風を装い、状況証拠を提示していく。

「隠さなくともわかりますよ、戦っている中、へ生命力<sup>リジエネ</sup>持続回復<sup>ト</sup>の魔法を使ったのは、ただの数度、それなのに、効果時間が切れても、あなたの傷は戦っているうちに自然に回復する場面が見受けられました、終盤はへ大<sup>グレート</sup>致<sup>ターリ</sup>死<sup>サル</sup>を一切唱えていないにも関わらず…です、つまりそこから導き出される結論はただ一つ…『回復効果のある武器』を所有している、違いますか?」

しっかりとシャルティアの方へと指をつきつけるベルに対し、苦い顔をするシャルティア。

そのやりとりに対して割って入ってきた存在が、間に入って言葉を投げかける。

「そこまでにしてももらえないかな? さすがにそれ以上の詮索はこちらとしても黙って観ている訳にはいかないというものだ。」

声のする方を両者が振り返り、そしてシャルティアはホツとする表情と共に、申し訳ないという顔になっていく。

「ア…、ナインズ様、申し訳ありません、この度のような見苦しい戦いをお見せしんして、恥じ入るばかりでありんす…。」

かしこまるシャルティアの横にいるベルが、やってきた相手に向き直って声をかける。

「ああ、こちらの支配者様直々にお出ましとは…決着の裁定でもしていただけるのでしょうか?」

(なんか言い慣れないな…支配者様…だなんて、どうにも言いにくい…早くいつもみたいに話しかけたいけど…今はまだ我慢、我慢)

ベルがそう声をかけると、ナインズと名乗っているアインズもまた、その言葉に対して返事をする。

「ああ、そうだな…、こちらとしては初戦のシャルティアで、戦う意思がポツキリと折れてしまわないかと、そこが心配だったのだが…まさか、『負けを認めろ』という条件で負け星を背負い、さらに次の対戦を望むとは…どこまでが計算なのだか…さっぱりだよ、食えない男だな、キミは…。」

(こつちも「キミは」だの「ベルと言ったかな?」だなんて呼びかけ、ハッキリ言って言いにくいですよ、早いとこ、守護者のみんななどすっ

ぱり対戦して、ネタ晴らししてくださいよ？もう…)

両者の想いを露知らず、守護者たちは、二人の芝居には全く気付かず、事の流れを見守っている。

「では、ここに『ナインズ・オウン・ゴール』の名において宣言する！  
第一回戦、ベルチーム対第一〜第三階層守護者シャルティアの決着はここに着いた！ 勝者は：シャルティア・ブラッドフォールンとする!!」

オオオオオオオオオオ〜！！！！

という歓声が観客席から沸き起こる。

観客席のほとんどを占めているのが、ゴーレム達の為、声の発生源はそこではない。

空いている席に座り、事の次第をつぶさに見ていた、他のシモベ達、さらにはこの闘技場で、準備や片付けなどを行っているドラゴンキン達、声を出せる種族のシモベ達からの歓声だ。

「さっきの言葉に対する私からの返答だが…何も気に病むことは無い、守護者の誰が何と言おうとシャルティアは良く戦った…私にはそう見えたし確信している…これからもお前の担当する階層は、侵入者に対する防波堤として大きな割合を占めることとなる…今回のようにすべてのMPのほとんどを回復に回す戦い方は持久戦と言う意味では大きな意味を持つ、これからもよろしく頼むぞ？シャルティア。」

そうねぎらいの言葉を投げかける支配者は、シャルティアの背をなでながら…『よくやったな』と褒める言葉も忘れていない。

ベルリバーからすると『ああいう所が、守護者たちを始め、NPC達の忠誠心の源になってるんだらうけど…気づいてなさそうだな…モモンガさん。あの人って昔からそういうの天然でやるところあるからな…計算してのことじゃないというのがタチが悪いんだよね、良くも悪くも…さ…』

と、また自分の首絞めるようなことを…という感想を持ちながら、

そのやり取りをみやりつつ「まあ、部下の忠誠心が高くなっていくことは悪いことじゃないかもな…」という想いも同時に浮かべていた。そんな感想を持ちながらも、そうとは口には出さず、シャルティアに提案したアイテムを、作成した包みごと、ナインズと名乗っているアインズへ手渡すようにする。

さすがにここまでお膳立てしておいて渡さないのも悪い気がしたからだ。

「それでは、敗者はおとなしく控え席の方へと下がらせていただきますよ」

「そうか…本来であれば強敵であるシャルティアとの健闘を称えて、タッチ・オブ・アンデス〈不死者の接触〉での副次効果によるHPかMPの吸出し…からのトランスロケーション・エナジー〈精気移行〉でも使って、このアイテムの礼としてシャルティアのMPを少しでも分けてやりたいところだが…キミが次の相手と戦うにあたり、MPの何割かが回復しきらない状態からどのように立ち回るのか…楽しみにしているよ。」

うなだれるシャルティアを伴い、アインズも自陣の控え席へと歩みを進めていく。

遠巻きに見ていると、慰めながら、シャルティアにあのペロロンさんのメッセージが込められた映像と音声データが入った宝珠を包みごと渡している。

その表情は、先程の沈痛な面持ちとは違い、少し、安らいだものへと変化した気がする。

それを見届けたベルはと言うと…立ち尽くしたままのイミーナに声をかける。

「さて、ボクらも控え席に戻りますか？」

そう声をかけるもイミーナからの返答は無く、ただただ立ち尽くしているだけ、よく見ると身動き一つしていない…一応呼吸の動作は体の動きから察知できるので死んでいる訳ではないのだろうか…？

「どうしました？イミーナさん…もしかして…あれですか？」



「……………う……………よ……………」

「良かった、辛うじて意識はあるみたいですね、前は意識がなくなっていたので、今回は慣れが幸いして意識が保てているみたいですが…、まあそれもこれから何度か経験すれば、きっと『生体細胞の電流活性化』の強化を使っても身動き一つとれなくなる状態からは解放される日もそう遠くないでしょう。」

(嬉しそうに言っていないで、とつとつ私を運びなさいよね!!)

なんて目で訴えているかのような眼光を浴びながら「仕方ないですね…」とわずかに肩をすくめたベルは、ひよいとイミーナを持ち上げると、肩にかつぐのは…お腹に負担がかかるだろうし、息苦しいかも…と悩みに悩み…一番無難な持ち方でイミーナを抱え込む。

小脇に抱えるという表現がぴったりの状態で敗者の側の控え席へと帰っていく。

(こんな雑な扱いして…あとで覚えていなさいよ?)

という心の声が聞こえたわけではないだろうが、そのタイミングでベルからもイミーナに声がかけられた。

「悪く思わないでくださいね? お姫さま抱っこなんてしてもどつたりしたら、あとでヘツケランさんになんて言われるか分かったものじゃないですからね、せめてこのくらいで我慢してください。」

その言葉にイミーナは納得したのか、していないのか…、とりあえず、気を失っているヘツケランはどうなってるかな? という程度には心配しながら、ベルは自分の控え席に戻るのであった。



「さて、ヘツケラン君の様子の方はどうだい? ロバーデイクさん。」  
「なんとか持ち直しますよ、さつきまで危なかったんですが、段々体温も戻ってきていますし、ひとまずは安心でしょう。」

ロバーデイクの言葉を聞き、少し安心したベルリバーは、ヘツケランの隣にイミーナも横にさせ、寝かせるようにした。

「やはり、あれを使用した後、効果時間が切れた直後はそうなるみたい

ですね。」

ロバーデイクも、あの時間経過の違う異空間にてその修行の経緯を見ていたのだ、最初は意識を失う程度で済んでいたので、気にならなかったが、どうやら何度か使用するうちに体が慣れてきている様子で、今は意識までは失っていないものの、身体全体の自由が利かないようだ。

「まあ、元々の限界値を超え、細胞レベルで反応速度や反射神経を無理やり引き上げる能力だからな…結果、すべての細胞が疲労困憊状態になって…今のこの状態…ということなんだろう、意識があるイミナーナの成長を褒めるべきだな、大した成長だよ」

（好き勝手言ってくれるのはいいけど、治療は…ダメね、確か治癒魔法とかだと、焼き切れた体の機能をむりやり叩き起こすような真似をする、後々もつと深刻なダメージを残すことになる…だったかしら？ベルさんが言ってたことだけど…明日の朝までに治ってれば「軽く済んだ」って感じよね、今までの経験から言ってる…。）

などと、身動きの取れない状態ながら思案にふけてっていると、すぐ横でベルが、懐をござごといじくりまわしている、どうやら何かアイテムでも探している様子だ、その仕草はいつものことなので、気にしないのだが、とんでもないものが「懐から」飛び出してくることがあるので、正直心臓に悪いことがある。

懐になんて、入りきらないでしょ？それ！

っていうのまで、ずるりと引きずり出すことがあるものだから…、最近はこのいうヤツだと慣れ始めてる自分に溜息もこぼれることもあるが、今回は何を出すつもりだろうか？

「さすがに、地べたにそのまま寝かせてるわけにもいかないだろう？少しは寝やすい場所を提供してやりたいと思ってるね、そんなに気を張らなくてもいいよ。」

そう言うと、懐から出したのは手の平サイズよりは一回り大きめのサイズのおもちゃのようなベッド。

まさか…ちよつと嫌な予感がする…

「さて…ホイっとー」

ベルが懐から取り出したおもちゃのようなベッドを放り投げると、地面に着地した瞬間にダブルベッドくらいの大サイズの物がいきなり現れた。

「さて、ちょうどダウンしてるのが二人だし、こんなもんだろ?」

(え?ちよつとまつて? え! ダブルベッドに?何? まさかヘツケランと一緒に? えええ?)

別段、チームとしてはヘツケランとの関係は「そういう関係」と言うのもあるんだし、イヤなわけではないが、周囲の目もあるというのに、敵地のだ真ん中で(身動きが全く取れないとは言え)ベッドを作り出し、そこに寝かされるというのは…相手の心情的に大丈夫なのだろうか?

という疑問が沸き起こる。

しかし、イミーナの内心をよそに、ベルは2人をベッドへと運び込んで、そつと布団を上から被せている。

まあ、ゆつくりと休んでおくといい…そんな言葉を残して。



「さて、そつちはどんな感じだ?シエイド?」

声をかけたのは、命令通り、自分がやめろと言うまですつと素振りを繰り返していたシエイド・ベールに対してだ。

「は!かれこれ、1000回を超えたくらいは振れたものと確信できております!」

「そうか…なら、それを渡してもらえないか? まだ確定ではないが、多分次の相手がボクの予想通りアイツなら…出来れば今回だけは自分が先発で挑みたいのだ。」

そう告げると、しばし迷った様子のもと、手に持っていた刀を差しだし、こう言葉を発することで応えていた。

「御身がそうお望みなのであればシモベの我が身から言うべきことなどありません、どの道この刀の所有者は御身でありますれば、頼まれなくとも一言、『使わせてもらおうぞ』、その一言だけで十分でございます」

そうシエイド・ベールから言われたベルは「無銘一刀 宜振」をその手に握り、数年ぶり（リアルでも道場の後を継ぐ者が絶えてからは握ってもいなかった）の手に持った感触に身を引き締めていた。

「頼んだぞ？わが愛刀よ、ずいぶんほったらかしにしてすまなかったが…これ以上ない活躍の舞台になりそうだ…どうか力を貸してくれ…。」

そう言って、目の前に持ってきた刀に語りかける様に言い聞かせている。

「予想と違う相手だったら、その時は一旦また戻すから、それまで戦える用意だけはしておいてくれよ？」

と、念のためシエイド・ベールにも「決して気を緩めないように」と伝えることも忘れない。

「は！承知いたしました！」

はたから見れば一介の人間が異形種を従えてる様にしか見えないので、ナザリツク陣営からどう見えているのかと言うのは気がかりではあったが、「それも成り行き次第で対応を変えて合わせていくしかないな」

と、先のことはその時考えようと決めて、次の対戦相手の現れるのを待ち受けていた。



「あの…ア…じゃなくてナインズ様？そ…それはどうするおつもりなのでありませんしようか？」

シャルティアが気にしているのは、先ほど、自分と対戦していた男が「ナインズ」へと手渡した、黒い宝珠のことである。

一度だけ、お願いして手で持たせてもらったが、しばらくしてアイ

ンズに取り戻されている。

なぜ、持ったままで居させてくれないのかがわからないシャルティアからすれば当たり前前の質問だ。

「ああ、これか、とりあえず私が見ている前でならシャルティアに持たせてもいいと判断したから包みごしに手で持たせはしたが…、もし取り扱いを間違えて万が一にも壊してしまつては二度と手に入らない可能性もある。その上、あり得ないとは思うが、どのようなトラップがこのアイテムに仕掛けられ、どんな条件で発動するのかそれすらもわからん…なので精査した後、今回の殊勲賞としてでも褒美として考へてはいるが…不服か？」

そう言われてしまえば、シャルティアにしてみればこれ以上ない正論だ。

込められたトラップ如きで自分が致命的な状況になるとは思えないが、万が一、そのトラップか何かが発動し、包んである金属糸で編まれた大判の布、それが燃えてしまつたりして、「素手で」自分がその宝珠を受け取つたりすれば、中の己の創造主をも、失つてしまう可能性はありえると、目の前の支配者は言っているのだ。

万が一を考へてくれた上、それに応じなければ、創造主ペロロンチーノの身の安全に大きく関わる事態に成り得る。そう言われてしまふと頷かざるをえなくなつてしまふ。

「いえ、ナインズ様のご決定に異を差し挟むような不心得者はこのナザリックにはおりんせん。…ただただ、その扱いをどのようにされるおつもりなのか…単純にそれだけが気になつただけでありんす。」

跪いて臣下の礼をとり、「非礼をお許しください」と謝罪するシャルティアに対し、アインズもそれに対して答えを返す。

「まあ、気になるのも仕方がない、お前の創造主だものな…実際にあの者が封印した本人かどうか…もしかしたら実はブラフで、中には実体のないただのデータだけが存在しているかも知れぬのだ、今からあまり過度に期待しては『そうでなかった場合』落胆も大きくなるろう、どのみちこれはヤツも言つた通り、お前の手元に来るのだ、そう慌てる事もあるまい。」

そう言われて、初めてホツとするシャルティア。

自分が何よりも大切に思っている存在を、自分と同等かそれ以上に思いやって取り扱おうとしてくれている支配者に感謝の念を抱きながら、再度、心の底からの「臣下の礼」で、今まで以上の忠義の形を示していた。

「失礼シマス、ナインズ様、一ツ、才聞キシテモヨロシイデシヨウカ？」  
「うむ、構わん、聞くだけ聞こうじゃないか、言ってみるといい」

「アノ者ハ、何者ナノデシヨウカ？アマリニモ、コチラニ対シテ脅威ト成リ得ル道具ヤアイテム類ノ数々：ソレヲ使ツテコチラヲ揺サブロウトモセズ、アマツサエ、負ケ星を背負ツテマデ尚、次ノ対戦ヲ望ムトハ：何ヲ得ル為ニアソコマデ身ヲ削ツテ戦オウトシテイルノカ：全ク意図ガ読メズ、ヒタスラ不気味デ御座イマス」

（んく…なんて答えるべきか…ヒント出し過ぎだよな…でもあのベルリバーさんが何の計算もなしにホイホイ身バレの危険を冒しているとは思えないしな…一応、フオローしておくか）

「私も、あの者の存在については興味が尽きぬ部分はある、先だつての「写真」の件でも皆、わかっているとは思うが、我がギルドに何らかの形で関わっていた線は濃厚だ、ひよつとしたら『期間限定』でギルド入りはしたが、正式メンバーには認められず、補欠扱いとなつたため、脱退した輩かもしれない…、ならば一時期でも我らと交流があつたという部分の説明はつくか…。」

「ナインズ様、貴重な思案の最中、口を差し挟む無礼をまずお許しください。」

「まだナインズ様がご思案の最中なのよ？ 勝手な言動は慎みなさい！デミウルゴス！」

「アルベドよ…なにもそこまでのことではない、私が何も言っていないのだ、お前がでしゃばる問題ではない、一先ずは控えておれ…。」  
「は…申し訳ございません…。」

一言だけそう告げ、頭を下げたアルベドは一步下がることで所定の位置まで戻って、指示に従う。

「さて、すまないなデミウルゴス、何か聞きたいことがあったのだろうか？…かまわん、どの道判断材料が足りん内はいくら考えようと結論は出ないのだ、『下手な考え、休むに似たり』と言うが…どうせ今は次の対戦までの休憩時間なのだし、誰がその時間をどう使おうとそれに文句などは言わせんよ、質問があれば言ってみるといい」

（頼むから、変なことは言い出さないでくれよ？ お願だから答えられる範囲の質問にしてくれないかな…デミウルゴスはただでさえ深読みしやすいタイプなんだから怖いんだよな…）

「至高なる御方々に『補欠』などという不敬な地位があつたのでしょうか？」

（良かった、そっちか、それなら答えられるぞ！ その範囲なら変な深読みも入らないだろう）

「うむ、これは敢えてお前たちには聞かせてなかつたことだから知らずとも仕方あるまい…この世界に転移するより以前は、我がギルドに加入しに来る者の中には、内部から情報漏洩を目論む輩や、ワールドアイテムや、超希少鉱石や金属など…様々な物を盗みに来るために加入しに来るヤツらも居たのだ…それを防ぐため、新人をしばらく泳がせ、正式なポジションではなく『補欠』という地位を作つて、様子見の期間を設けていたのだよ、その上で何ごとも無く、我らのギルドの損失にならない人材だと判断したその時に、正式にギルドの指輪を進呈していた…という歴史もあつたのだ。」

（本当は『補欠』なんて名称じゃなく「据え置き」とか「体験加入」とか表現してたけどな…。）

そこで、守護者ら全員の顔色が変わり、嫌悪感で一色に染まる。

「よもや、至高なる御方々が作りし、我らがギルドを内部から食い散らかそうなどと考える輩が居ようとは…そのようなヤツらは万死…いや、万年に渡つて恐怖公の元に置いておくべきでしょう。」

デミウルゴスがそう言うと、すかさずアウラからも発言が飛び出す。

「デミウルゴスは甘いんじゃない？そこはやっぱり餓食狐蟲王のところが一番じゃないの？」

「ぼ…僕もお姉ちゃんの言う通りだと思えます。」

その言葉を聞き、機嫌の良さそうな声でデミウルゴスが意見を返す。

「もちろんそれも候補に入れてあるさ、「万年」の時間があるのだから、全ての「最悪」の元に送り込んでそれぞれ千年ずつの時を過ごさせ、都度治療を施した後、残った数千年は私の牧場行きなどという道も考えずには居るのだが…いやはや、悩ましいね、どの順番でそれぞれをどう過ごさせる道程で手順を進めれば一番喜んでくれるだろうか？というのが…いや、敢えてこのナザリックでレベルを上げさせて…灰にならない程度に鍛えた後、「最悪」送りから始め、蘇生させて五体満足に戻してから再びどれから始めるかくじ引きで選ばせてから始める…という手もあるね。」

「それならば、万年といわず、数万年でも楽しませてもらえそうでありんすね。」

（なんで、みんなそういうえげつない方法を楽しそうに話すかな？  
まあ、こつちもナザリックに害を及ぼす存在を放置するつもりはないけど…さすがに守護者たちは行き過ぎな気がするよな…。）

「まあ、今はそいつらとて以前の世界に囚われたままであろう、恐らく今となつては生存してるかすら怪しいものだが…、もし何かの運命のいたずらでこつちに來ているのなら、相応の返礼をこつちの世界でもさせてもらうつもりではあるがな…」

（さすがにあつちの世界がとつくに破滅してるなんて言えないよな、そんなこと言ったら「他の40人の御方々は？」とか言い出しそうぞ怖いし…）

「さすがは愛しのナインズ様、それでこそ、我がナザリックの威厳が全世界に浸透し、全てを支配する日もそう遠くないかと愚考いたします。」

「アルベドの言い分もわかるが…私は以前にも言ったと思うが、「仇には仇」で返す主義だ、何もこちらに害を及ぼしても居ない者らにまでナザリックの厳しさを教えるつもりはない、こちらに頭こぶを垂れ、支配下に入るといふ事であれば相応の繁栄を約束する程度の度量はある



ぞ？」

(そう言わないと、どこまで被害を広げるつもりなのかわからないからな、その部分は今の内にきっちり釘を刺しておかないと、とりあえず、コキユートスの質問は何とか言い逃れることが出来そうだな…)「あ、見て？シャルティア！ あいつら、控え室の中にベッドなんて広げてるよ？どこから持ってきたのかな？」

「な…、なんてうら…いやけしからん者らでありんしょう！至高なる方々が作りし、この闘技場でその…いかがわしいことなど！」

シャルティアとアウラの会話を横で聞いていたマールがそれに対して遠慮がちに言葉をはさむ。

「あの…ベッドに横にされてる片方は、先程、ハムスケさんの武技で腕を落とされそうになってた人…ですよね？、多分まだ気を失っててそれどころじゃない気がします…あれはきつと、今は戦線離脱するという意味なんじゃ…？」

(ん…、多分マールはまだ年齢的にも「いかがわしい」の意味が分かかってないだろうから純粋な目で見ることが出来たんだろうな…普通にしてて、癒される守護者って実は少ないよな…茶釜さんはホント、さすがと言うべきか…)

「戦線を離脱して、しばらくは回復に専念する者にまで「地べたで寝てろ」と言うのはさすがに酷だろう、応急処置と言う意味でも…まあ、ニューロニストの部屋にも普通にベッドくらいあるのだから、安静にさせてやるという意味では仕方あるまい、それくらいは許してやろうではないか」

(ニューロニストの部屋にあるのは正確には『拷問用』として趣向が凝らされたベッドだから、安静にするという側面では真逆なんだけだな)

「…は！ 御身の御心のままに！…」

守護者一同の声が一斉に唱和して控え席に響いていた。

「…、さて、それではこの後、向こうの準備が整い次第、次の対戦に入

ることになるだろうが…先程も言った通り、次鋒に出てもらうことになるのは…コキュートス、用意の方は整っているか？」

「ハ！ イツデモ心身共ニ、戦イニ赴ク準備ノ方ハ整ツテオリマス！」  
「よし、ならば相手が所定の位置まで進み出てきたらこちらも出るとしよう、今回も審判の役目は私だ…、マーレ！先程のように私の身辺警護、サポートの方は頼んだぞ！」

「は…、はい、ぼ…ぼく、が…がんばります、ナインズ様」

「うむ、そう気張ることもないが、向こうの用意が出来るまでは我々も  
のんびりしていようではないか。」



「さて、これで傷の方は問題なく回復できたようですね…あ、わん」  
「いや、部外者のボク達の前でまで、無理に言葉を付け足さなくてもいいんじゃないか？」

「つつい、創造主に「こうあれ」として設定された言葉遣いを最後に忘れそうになっていたペストーニヤに対して、ベルが『無理をしなくてもいいんだぞ？』という意味で声をかけたが、戻ってきた言葉は  
淡々としていた。

「いえ、お気遣いなく、これは私のクセのようなもので、こうしなければ  
気が済まないからそうしているだけです…あ、わん。」

「まあ、貴女がそれでいいなら、そのままでも構わないけど…、いつでも  
普段通りにして構わないからね」

「気遣って、一応、そう声をかけるが、それに対しても快い返答では  
なかった。」

「いえ、私にとって、これが普段通りなのですわん。」

「そうか…、それならこれ以上は何も言わないけどね…。」

「いつも通りでいいと言われるならば…、失礼して、私から一つ、聞き

たいことがあるのですが、よろしいでしょうかわん？」

「ん？ ボクにかい？　なんでまた…答えられることならいいけど。」  
「あなたはなぜ、全力で戦おうとなさらないのですか？　自分から守護者の皆様との戦いを所望したにも関わらず…力を温存するような戦い方をしているように見えましたので…わん。」

「…、それはどうしてもココで答えなければならぬ質問かい？」

「いえ、どうしても答えたくないという事情であれば、無理には言いませんが…、明らかな敵意が無いにも拘らず、どうしてもそこまでして戦おうとされるのか、そこが気になりましたので…わん」

「…：そうだね…言わせてもらおうとするなら…、せめてもの罪滅ぼしさ…、これ以上は今はまだ言えない、この5戦が終わったら、自然と答えを告げることになるだろうから、それまでのお楽しみ…：という答えじゃ、足りないかい？」

「いえ、それならばいいのです、真実を告げることがすでに確定しているのであれば、今すぐに聞き出さなくても自ずと明らかになるでしょう、わん…。明らかに自分より戦力が上の存在を前にくじけずに戦える理由がそういうことならば、今は敢えてこれ以上は問わないでいましょう…わん。」

そうしてペストーニャは、顔の向きをフレイラの方へと向けた後、元の顔の向きへと戻して独り言をつぶやいた。

「そちらの方のコトについても、その時に話していただけると、こちらとしてもありがたいですわん。」

(ん…：やっぱりNPCはNPC同士、なにかしらの共感、同調波形のようなモノでもあるのかな？…気配だけで見分けてるみたいだし、セバスもソリユシャンも…疑うことなく受け入れてたみたいだしな…：同じギルド所属ってことで、通じてるものでもあるのかもしれない…。)

「そうだね、自分のことについての説明が終わって、まだ説明が必要だったら…って感じかな、多分その必要はないだろうと思うけどね。」

それに対してのペストーニャの言葉もまた、平坦なものであった。

「そうですか…わん」

(はあ…仕方ないよな、今は『外部からの侵入者』って位置づけなんだし、和やかに話せての方が無理な話なのはわかるけどさ…動物好きなの自分としては、その淡々とした対応ってどうにかならないものかなって思っっちゃうよな…、まあ侵入者と普通に話してくれるだけでも「善良」のカルマ具合は窺い知れるって感じだけ…)

「でも、傷を治してくれたことには感謝をしますよ、こちらに戻って来るたびにお世話になると思いますので、どうぞよろしくお願いします。」

(こういう時はペロロンチーノさんの蘊蓄<sup>うんちく</sup>って、変に役に立つよな…『好感度が稼げていないうちは無難な話題とか、共通する話を振ったりしてフラグを立てるのが進展への第一歩』でしたっけ?)

「…それは至高なる御方に命じられたので、命令でそうしているだけですわん。 気になさらないでください…わん」

「そうか…そういうえばそれもそうだったね。 それでも侵入者に施しをするなど、本来ならしたくもないことでしょうに、それなのにその気持ちを押し殺してまで仕えられるその忠義を評価させて下さい。」

「私どもは至高なる方々よりのお言葉こそ第一、自分の感情など取るに足らないことです…わん」

(取りつく島もないじゃないか! 話が進展しないですよ! ペロロンチーノさん、何とかしてくださいよ!)

などと現実逃避で、今ここには居ない相手に悪態をつくも…自分で何とかしなきゃいけないことだと思ひ直し、気合を入れ直す。

「ところで、こんな風におしゃべりに興じていていいのですか? 確か次に戦う相手との場に赴くのでは? わん」

「え?」

「え?」

最初がベルの返事、そして2番目がペストーニヤ、まさか疑問で返されるとは思ってたかったためだ。

(そうだったああああ!!! そういえば試合の形式やら、注意、警告、反則、敗北っていうルールとかばっかりに目を向けて、次の対戦相手

との立ち合いのタイミングを決めるの忘れてた！　こんなことなら負けた方から次の対戦では相手に先んじて…とか、勝った方から先に…とか決めておくべきだった…これじゃ、次がコキュートスかどうか不確定のまままで出なくちゃならないじゃないか！

「そ…そうだったね、相手の方から顔を出してくれるのかと思ってたから、のんびり構えてたよ」

「最初の取り決めで、あなた方のダメージや多少の精神的な回復時間のための休息を挟むことは聞いておりますが…、至高なる御方は、「休息時間」の長短はそちらにお任せになるというお話でしたわん、こちらとしてもあまり御方を無為にお待たせし続けているというのは正直、いい気分じゃないので、早い所、どっちから先に歩み出るか、とつと決めてもらえたらありがたいですわん。」

（う〜ん…言葉尻に、不機嫌な様子が所々見受けられるな…早いとこ話題を切り上げるか…）

「そう…ですね、それはこちらの手抜きでした。お詫びいたします。」

「出るのなら、早めに出た方がいいと思うわん、私は我慢できますが、守護者の方々の中には特に気が短くていらつしやる…というより御方を軽く見ていると判断したら即、行動に出られる性格の方もいらつしやいますので…わん」

（あ〜…そうかもしれないな…NPCのみんなの性格設定までは細かくは覚えてないけど、アルベドやデミウルゴスなんかは「悪魔種」だからな…そういう側面があってもおかしくない…カルマが「悪」に偏ってるのは多分確実だったろうし…早く出ていかなきゃだな。）

「重ね重ね、身に染み入る進言ありがたい限りです、では私はそろそろ出るとしましょう。」

「……………武運を…ですわん。」

「ありがとう…（多分表面だけだろうな…「お祈りしております」が省略されてたし…）」

（さてさて、次の次鋒戦は、先発として自分が出るとして…、最後の太

将戦を見据えて、共に戦いに出る人員を連れていくって前例を作つとかなきゃな：「こいつならそうして当たり前だろう」って前提を今の内に植え付けておかないと：大将戦までは誰が来るかっていう予想はある程度想像がつくんだけど大将に誰が出るのかが、ちよつと読めないからな：少し交渉してみるか：）

こうして、舞台に出る前、共にステージに立つことになる人選を考えながら、アインズ：もといナインズにへ伝言<sup>メッセージ</sup>の魔法を発動させるのだった。

第59話 次鋒1 コキュートス VS ベル (序編)

「ふむ…そうか…たしかにそれはそうであったな、ならばどう?…  
うむ…そう思うか、なるほど?」

支配者が突然の〈メッセージ伝言〉の魔法に対応している。

送ってきた相手は目の前の対戦相手である「ベル」と名乗る存在からだ。

どうやら、選手の入場について詳細を決めるのを忘れていたようで、この場になってようやくソコに気づいたようだった。

(これだから、下等生物という者は…愚物だということです…ここまでアインズ様が主導権を向こうに譲ってくださっているというのに…一度で決められない程度の頭脳しかないとは…)

すぐ横に「統括」として控えているアルベドが表情にこそ出さないものの、内心で苛立ちを募らせていた。

(慈悲深い御身だからこそ、許されているのだという「立場」というものを弁えず、理解も出来ない輩の相手をなさっている心中はいかばかりか…)

そうやって、対戦相手に心の中で愚痴をひたすらに展開している中、支配者と相手との通話が終了したようだ。

「すまんな、皆、待たせてしまったようだ」

通話を切り、こちらへと至高なる御方が「謝罪の言葉」を口にするというシモベとして仕える立場の自分たちには過ぎた心遣いをしてくださっていることに申し訳なきが募る。

「いいえ、これは全て、一時に全ての事項を取りまとめる能力すら欠如していた相手方の責任!御身がお謝りになられることなど露ほども存在いたしません。」

「そうでありんす、これらは全て頭の巡りの悪い低能な下等生物のせいでありんす!御身のせいではありんせん!」

(おお、その言葉、後々になって後悔することになるんじゃないか？ネタバラしが済んだ後、2人そろって自責の念に堪えかねて九階層のBarラウンジで飲んだくれたりしないでくれよ？シャルティアはともかくとして：アルベドがそうならデミウルゴスとパンドラしか運営面で他に頼れる存在居ないんだから：)

「ま：まあ、そう言ってやるな、そもそもはルールを決めるその場に居た私もそれは「相手が理解しているもの」と判断してしまったが故のミスだ、低能さという側面で言えば、相手に自分と同等の頭脳がある決めてかかってしまった私にこそ大いに責任があろう。」

「いいえ、そのようなことはございません」

二人で同じような言葉を同時に言いつのつた直後、前の方で立っていたデミウルゴスが呆れたように話し出す。

「いいかげんにしないかね2人共、そもそもニンゲンのような下等な存在がナインズ様と同じような領域にまで到達出来てないということは今更、論議するまでも無い事だと思いがね：『ナインズ様の責任ではない。』そんなことは言わなくても誰もが認識を共有している当たり前のことではないかと私は思うよ？」

(う：：やめてくれ、小卒の自分にそんな頭脳なんてないよ！ 学歴とかならよっぽどベルリバーさんの方が上なんだから、あの人：：中学まで行けるくらい頭よかったし経済的に恵まれてた方だったんだぞ？ うちら下層の民衆の中では：)

とは思いながらも、「自分はもう人間じゃなくなってアンデッドだからなあ」というどこか冷めた考えがあるも、デミウルゴスの言い分に、失っているはずの胃がキリキリするような幻痛を感じそうになる。

「そ：：そうでありんしたね、取り乱してしまいった：：アルベドも落ち着いたようでありんすね。」

「え、ええ：：お蔭様でね、わたくしとしたことが：：とんだ醜態を晒してしまい申し訳ありませんでした。」

「う：：うむ、アルベドの謝罪、素直に受け取るとしよう、皆に罪は無い。」



…それで、話は戻すが…」

「「「はい！ナインズ様！」」」

「今回、お互いに、相手側が先に出てきてくれるものだとばかり思っていて、無駄な時間が発生してしまった、相手側からすればその分MPの自然回復の時間が取れたという点では「無駄な時間」ではなかっただろうが、今後、そういう不測の事態を回避するため、次鋒戦は相手側から闘技場に進み出てくれるそうだな。」

「ナルホド、ソレデハ、コチラハ相手ガ出て来テカラノ出陣ト言ウ事デヨロシイノデシヨウカ？」

「いや、それでは一方的にこちらが相手に不利を強いてるようで心苦しい、「恩義」としての『返礼』と銘打っている以上、多少の融通はしてやりたいと思っている、ということ、中堅戦では勝敗に関わらずこちらから闘技場に現れるように提案しておいた。その代わり副将戦は相手方が先に出てきてくれるそうだし、無論、大将戦は再びこちらから…という流れになる…。」

そこまで言ってから、守護者たちがまだ聞く姿勢であるのに気付いたアインズは、思い付きでアドリブを展開させた。

「これは私から提案したことである！ その流れで皆も周知徹底し、事に臨むように！」

「「「ははあ!!」」」

（そう言わないと「下等生物ごときが至高なる御方に対してくくく…」とか言い出しそうだなんな…あとは何とかしてくださいよ？ベルリバーさん。）



「大丈夫？イミナーナ？ 何かあったら言っただけ？体が動かない間、私が身の回りの世話をする。」

「あ……………りが…………と、ア…………ル…………シエ…………」

「無理に話さない方がいい、今はしっかり休息をとることが先決。」

二人が会話をして居る所にナインズとの通話を終えたベルが二人

の下にやってきて問いかけた。

「やはりまだしばらくはかかりそうだな、不便なことがあったら助けられるかもしれん、何かあるか？」

「か……………く、……………ものを……………を。」

途切れ途切れながら話しているのもかなりしんどそうだな。

「わかった、書く物だな…あとは…指は動かせるか？ペンを使うにはどうしても指が動かなくてはならないだろうか？」

「う……………う……………か、……………ない。」

それを聞いたベルリバーが思案にふける、何かいいアイテムはないだろうか…と黙っている、他人で試していない機能があることに気付く。

ユグドラシルでの隠された機能…と言う程、気の利いた物じゃないが、無料コインとして広く浸透していたユグドラシルコインでの買い物で手軽に買っていた日用品で、「オートライティング」という『ペン』があった。

それは、コンソールを呼び出し、仮想キーボードを呼び出し、キーを打つて…という手順を省きたいというアークロジの上流階級の怠け脳をしてるヤツらに専ら受けの良かったアイテム。

首の後ろに接続端子を植え付け、ユグドラシルのゲームとの紐づけを依頼する際、料金を上乗せして脳内ニューロンに改造を施し、特殊な手間を省くことも可能な（もちろんユグドラシル以外、私生活でも有用であった）為、人気はあったのだが、下層階級の者たちからすれば、どう逆立ちしても手術費用など工面できないくらい高価な代物だったため、ベルリバーはその手術は受けていない。

だが、単純にペンとしての機能は普通に使っていた上、手術を受けている者なら手を使わずにペンを自動で動いているかのように脳からの指示で動かしたりもできるアイテムだった。

それと、ベルリバーがこっちの世界に来てから時々使う「ホワイトボード」にも似た『メッセージボード』。それを組み合わせられないか？と、いつだか実験をして立証が出来たこともあったな…とイミーナの姿を見て思い出せたのだ。

メッセージボードだけに関して言えば、向こうでは、そんな手間をかけなくてもコンソールのキーボードで打てばよかったので、深く追求したことは無かったが、それで単純に「文字を書く」のにも有効だったのはこっちの世界に来て、（思い付きで試して）知ったことだ。（もちろんインクなどは全く必要がない）

ユグドラシルではキーボード使用が当たり前だったため、使用頻度は多くなかったが、手書きのメッセージを書いたり、値札のPOPのように気の利いたデザインを外部ツールを使わず、手書きで使えたり、自分の絵をリアルで描くのと同じように描けるとするのは割と使いやすかったのだ。

今となつてはプロのマンガ家となつたホワイトブリムさんなんかは、デジタルの画像ソフトより手書きの方が「デザインをする際」という一点に関して言えばこのペンアイテムを愛用していた、細かい部分の装飾などを描くにはそっちの方が使いやすかったのだとか…。なので、人によつてはそれなりに使い道のあつた「オートライティング」という『ペンアイテム』

ボクの場合は、その名も「デイス・イズ・ア・ペン」とした。

それをイミナーに手渡し、同時に「メッセージボード」も貸してやり、簡単な使い方を教えていく。

すると、予想通り、MPは遺伝しなくても魔法の構築方法をイメージ出来るイミナーならば…と思つていたのがビンゴだった。

口で説明しただけだったのに、簡単にそのペンを浮かべることができ、手を使わずともメッセージボードに文字をかけるということにひたすら感動している。

言葉にすることは今は難しいが、ボードにしっかりと「ありがとう、助かった」とお礼を言つてもらえた。

（自分が使つても宙に浮かべたりとかはできないからな…それはきつとユグドラシルの仕様がそのままこの世界に引き継がれ、「自分には使えない」という状態で固定してしまつたんだろう…寂しいが、身体が動くようになったら、返してもらおう）

そう思いながら、なんとはなしにイミーナの様子をうかがっている…。

『鎧を脱ぐからアルシエが私の代わりに使ってちょうだい』  
と書き記している。

「何を弱気なこと…そんな要望は受け入れられない！」

「私はもうダメだから」

そういう意味で言ったのだと思ったのだろう、アルシエがそれに拒否の反応を示す。

すると、イミーナがその下に再び文字をすらすらと書き連ねていく。

「私を『鎧を着せたまま』寝かせとくつもり？意外に装備したまま寝てるのはしんどいんだけど」

という意味の言葉で伝えている。

（こっちの世界は便利だな…、会話は自動で翻訳されるし、文字なら読む程度であれば〈言語読解<sup>リドランゲージ</sup>〉でどうにかなるからな…あとは自分が書けるようになれば課題はクリアできるんだが…）

「そういうことなら、頭の中で装備が「パカーン」と自動で各種パーツが外れて、離れる感じをイメージしてごらん？今のキミならできると思うよ？」

ベルが寝ているイミーナに対してそう言うと、しばし目を閉じているイミーナ。

次の瞬間、ベッドの賭け布団が『ポフッ！』と膨れ上がったかと思ったらベッドの下へとパーツ分けされて身体から外れた「ペロロンアーマー」がボトボトとこぼれている。

「とりあえずさ…体が動かないんじゃないし、どうしようもないし、動くまでの間、アルシエに返しとくからさ、この鎧に最初に気に入られたのはアルシエなんだし、使い方もある程度わかるでしょ？」

と、文字を書ききったところで、「ちなみに、これ、消すのはどうするの？」とコツチに聞いてきたので、すすつと、手の平で画面を横にスライドさせてやる。

すると今まで書いた文字が一瞬で全部消えることに一同が驚愕し

ている。

「この消去方法は、誰でも出来るから空いてる人が代わりにやってあげてよ、って言っても2人は動けないから、アルシエちゃんか、ロバーさんかになるんだけどね。」

と言うと、ロバー・デイクさんが近寄ってきて、快く了承してくれた。「ヘッケランがベッドにいるなら、私もそばにいる必要があるでしょうし…もののついでですからね、私でもそのくらいはさせていただきますよ。」

横でそのやり取りを見ていたアルシエちゃんがぼそりとイミーナに声をかけている。

「イミーナの言いたいことは分かった…なら、動けるようになるまでの間、これはまた使わせてもらおう。」

そう言うのと、今まで地面に落ちていたペロロンアーマーのそれぞれのパーツが喜び勇んで、アルシエちゃんに縋りつくかのように「カシャ！ カシャカシャン！！ シャキーン！」とでも表現できそうな勢いで装着されていく。

（この鎧、本当はインテリジェンスアイテムとかなんじやないのか？…って言ってもユグドラシルでそんな気の利いた仕様で作成できるデータクリスタルなんてなかったんだけどさ…あまりにも高性能すぎるのは…作成者の趣味が濃厚に残ってしまったからなのか？）

じつは、先程の説明を聞いていたアルシエが「着る時もそれは応用できそう」と思い付き、イメージしてみた所、思い通りにいっただけ。という事情はあるのだが、そこまでは予想外だったようだ。

ベルリバー自身わずかに呆けたような時間が流れた…それは数瞬間のようにも数秒のようにも感じたような不思議な体感時間の間、後ろから声がかかる。

今まで、何も指示していないのにも関わらず、じつと黙したままで付き従っていたフレイラだ。

「マスター、次の対戦の際、誰を供回りとしてお連れになるかはお決めになりましたか？」

その声で、「は！」と我に返ったベルリバーが振り返り、その質問に

答える。

「うん、まだ次に出てくる相手が誰かわからないから、決めかねてるんだけど…一番レベルの高いフレイ？キミが来てくれないかな？」

「はーお望みとあらば、どのような場所であろうと全力でお供いたします。」

「すまないね…フレイには一番、しんどい役をやってもらおう流れになりそうだ…」

申し訳なさそうに告げるベルリバーに対し、フレイラからの返答は明瞭な意志のみであった。

「それならばご心配はいりません、どのような役目を与えられようと、それを成し遂げ、成就させるためにこそ私たちは生み出されました。

御身の為であればどのような難関であろうと突破するための活路くらいは切り開いてご覧に入れましょう。」

「そうか…すま…いや、これは『ありがとう』と言ってあげるべきかな。感謝するよ。」

『すまないね』そう言おうとしていたベルリバーは、それは違うな。と思いついて感謝の言葉へと切り替える。

「とんでもないですねー！感謝の言葉など…私どもは御身に尽くすべく創られた者、この身が擦り切れようと尽くして果てることこそが本懐、そのような心遣いは不要にございます。」

彼女自身、階層守護者に挑むというのがどういう結果になるかは覚悟しているのだろう。

創造主から常々、「命は無駄にするな」「その身を盾にしようなど考えるな」「剣として、盾として…そのような目的でお前を創った訳ではない。」そう言い聞かされているが、そのような甘えた考えでは、自分の身すら長くは守れないだろう。それが肌でわかるからこそ、普段から止められている言動と決意に及ぶ発言をしたのだ。

それこそ、自分一人が生き永らえ、創造主が死してしまうことなど…それこそ「生き恥」という自覚があるからだ。

その言葉に対して、創造主も今回は何も言っては来なかった。

生半可な立ち位置では、対抗することすら難しいだろう実力者ぞろ

いなだから、今回に限っては「そんな考えは持つな」とは言い切れなかったというのがベルリバーの内心で抱いていた焦りでもあった。(もつと戦闘向きの装備、持たせてやってれば良かったよな…、作成時の『あの時』じゃまさかNPC同士を戦わせる可能性なんて考えても居なかったし…、しかも自分の娘と階層守護者が…だなんてな…)。自嘲気味に口元を歪ませ、戦いの舞台へと歩みを進めようと…くると体の向きを変えた直後、再び後ろにした方から声がかかる。「待つて！…どうか私も連れて行ってほしい…。」

その声に驚き、後ろを振り返る。

見なくてもその声は聞き間違えようもなかった相手だが、確認せずにはいられなかったのだ。

「アル…シエ、ちゃん？」

出来れば「妹2人」を村に残して戦地に挑むことになった彼女を危険な場所に立たせるつもりはなかった。

万が一にもPOPモンスターに傷つけられないように『お守り』まで持たせたくらいには万全を期したつもりだったのに、その彼女自身が死地に向かおうとしている。

「いや、アルシエちゃんにはこの後、手伝ってもらうことがあって…」  
と言おうとしたベルに対し、アルシエからの決意が迎え討つ。

「言わせない、ベルさんの魂胆は見えている、思い通りになんてさせない。」

一瞬、何を言われたのかピンとこなかったベルが、言いよどんだ瞬間を狙ったように、矢継ぎ早の言葉が浴びせられた。

「私の身を案じてくれてるのはわかる、妹たちが天涯孤独に陥らないように心配してくれているのも嬉しい…だけど、メンバーが2人もやられて、私だけのうのうと構えてるわけにはいかない！イミーナとヘッケランの仇は私が撃つ！」

(いや、敵を討つって言ったってまだ二人は死んでないしな…イミーナだって、敵にやられたんじゃないやなくて装備品の効果で、ああなってるだけだしさ…それを言ったらイミーナの仇は自分ってことになるん

じゃないか?)」

「仲間がやられて、頭に血が上る気持ちは自分にも良く分かっている気持ちだと思うよ? アルシエちゃん: でもね、仇を討つていうことはだ: 相手に返り討ちに遭うって事態も想定しなくちゃダメだ、相手だって無抵抗で居てくれるわけじゃない: 相手を討とうとする者は、その相手から討たれる覚悟も同時に持つてなければいけないんだ: その覚悟も無いうちはそれを認める訳にはいかないよ?」

努めて冷静に振る舞い、なんとか理詰めであきらめてもらおうとするも、すでにその領域を軽く超えてしまっているアルシエには、熱を冷ますのには不十分だったようだ。

「かまわない、私が居なくなっただとしても妹たちが「友達」として選んだ存在が2人もいる。きっと私がどうにかなっても、そのうちの一人は絶対に力になってくれる!」

(二人: :か、それって、ネムちゃんと、アインズさんのこと言ってるんだろうな: :、でもこの場でそれを言い出すってことは、今回の墳墓の支配者が実は「アインズさん」本人だつてことは確証には至っていないようだけど: :きてなんて言おうか: :?)

「自分の身内を他人任せにしてもいいのかい? その頼れる「友人」だって今はそうかもしれないけど、彼女たち二人が成長して一人前の女性になったら、どう変わっていくか: :それを見極めていくというのも、残された親族であり、血のつながった: :たった一人の「姉」としての責任じゃないのかい?」

なんとか思いとどまってほしい一心で、そう問い詰めるも、悩んだのはほんの一瞬のこと、すぐに表情を引き締め、覚悟の瞳に移る。

「私は、妹の選んだ「友達」を信じる! 私はずっとあの子は人見知りです引つ込み思案だと思ってた。: :でもそれは違った、あの子の『瞳』に移っていたもの: :それはその人らの本質、それをこの前初めて教えてもらった: :だからその子が「友達」として選んだなら、きっと間違いはない。」

(完全に「妹を他人任せにする」という考えは認識してない感じだな: :知らないぞ? あの人友達想いなのは確かにそうだけど: :自分を遺し



て先立たれるのは嫌うだろうから、大人になったら「寿命の存在しない種族」とかに変えられても、責任持たないからな？」

「まあ…あらゆる場面で、その「友達」におんぶにだっこ状態なのは気にかかるが、決心は変わらないようだね…、でも気を付けることだ。

：『友達だろ?』と言って頼ろうとすり寄る性格が一度根付いたら…その性根を改めるのはそうそう簡単なことじゃない、だから、軽々に命を捨てるような真似はさせないよ?」

その言葉をどう受け取ったのか、アルシエは「ありがとう、今はそれでいい」とだけ返し、共に歩き始めた。

ベルが歩きながら、こめかみに指を持って行ってる事には、まだアルシエは気づいていなかった…。



歩きながら〈メッセージ〉の魔法を使い終え、通話を切ったベルリバーはなんとか不安材料を取り除くための舞台が整ったことに安堵していた。

正直、自分が戦闘向けとして作成したわけじゃない50LVのNPCを共に戦いの場に赴かせることになった点についてはかなり心配であったが、一応クレリックのLVは10、ミディアム霊媒師のレベルも合わせても15には満たないが…それなりに回復職と、死霊術の使い手としてこの現地基準で考えたらそれなりの実力はある。

ユグドラシルでは魔法専門職なら1レベル上がるごとに3個呪文を覚えるシステムだったからクレリックなら10LVだと30個。

その代わり、フレイラが取得しているシャーマニック・ウオーリア精霊加護闘士は、ある意味特殊で、1LV上がるごとに魔法なら2つ、そしてスキルかアビリティかを『通常の手段で得るスキルレベル等とは別に』1つだけ選んでレベルに即した能力を得るという変わった性質があった。

なので、シャーマニック・ウオーリア精霊加護闘士がLV10だから呪文は20、スキル、アビリティが専門技能10。

サラマンダーや、雷精の精霊力を吸い上げた能力のソウルステイラーがLV6

これも魔力系の職業であるものの精霊加護闘士シャーマニック・ウオーリア同様なので魔法数が12

そしてスキル、アビリティが、ソウルステイラー専用の技能で6個取得している。

アルケミストと作成者は戦闘向きじゃないからひとまず除外するとして。

精霊加護闘士シャーマニック・ウオーリア自体は精霊術の使い手で精霊使いでもあり、信仰系の魔法詠唱者の側面も持っている。

その為、信仰系の魔法を突き詰めるか、信仰系はそこそこで、精霊系魔法を取得するか、そこが悩みどころだった。

内訳で言えば、フレイラの能力を現地基準で判断すると…。

信仰系の魔法がクレリックLV10(LV8〜第二位階)、信仰系であり、かつ死霊術使いでもある霊媒師ミディアムが3LV(第二位階)、そこに精霊加護闘士の信仰系が多少加わったとして、せいぜい14LV分相当、位階としては第二位階を満たして、ギリギリ第三位階があるかどうか…ってところだ。

だが、魔法数としては30+9+α(アルファ)となる。少なくとも40個の魔法数では、信仰系魔法詠唱者としては7LV刻みだから14LVだと第二位階相当。

魔法専門で鍛え上げてきた神官と比べると、魔法数40程では、第二位階を修行中の人間、第三位階に手が届きそうなレベルの魔法数である。

魔力系の魔法詠唱者としては、ソウルステイラーの12個、アルケミストと作成者は両者とも3LVしか取得してないので、まだ戦闘向きな魔法は持ち得ておらず、主に作成系と補助系魔法がメインとなるが、敢えて魔力系というならば3LVが2種、9+9で18個。

ギリギリ10LV相当の魔法詠唱者と同じ魔法数となる程度、レベルでは14に届かないので、第二位階の修行中冒険者と同レベル

ル。

だが精霊加護闘士シャーマニック・ウオーリアを計算に入れると話が変わってくる。

精霊加護闘士シャーマニック・ウオーリアは精霊使いである。

召喚魔法を使って呼び出すことも出来るが、その場合は呼び出せるのは信仰系に属する精霊のみ、対して霊媒師ミディアムのクラススキルを併用するならば、『憑依』という手段を用い、自身の身体能力を上げる。

『憑依』という手段に限定させる精霊なのであれば魔力系に属する分類となり、計算も変わってくるのだ。

信仰系でありながら、魔力系でもあり、戦士のような専門職には及ばないが戦闘もできる。

仮に精霊加護闘士シャーマニック・ウオーリアの信仰系の部分を四割、精霊を憑依させる系統に特化させた魔法を六割という割合にするならば、「信8・魔12」という計算になって、最終的には…。

暫定的なザックリした計算ではあるが、

信仰系魔法 (最低でも)  $30 + 9 + 8 \parallel 47$   
クレリック ミディアム S・W

魔力系魔法  $30 + 12 \parallel 42$

魔法の数だけで言えば89となり、通常の魔法詠唱者の7LV刻みを基準とするなら第三位階魔法は5つ覚えている計算になる。

魔法詠唱者が特化で鍛え上げ、魔法を覚え続けた場合、100の魔法数に達するのは34レベル。

現地の基準で言えばそれは『難度99』を超えたと見えていい。

現状、フレイラは職業LV37でありながら、魔法の数が圧倒的に足りていないのだ。

結果的に、フレイラの使用できる位階魔法は、信仰系がクレリック10 + 霊媒師3 + 精霊加護闘士4と仮定するなら17LV相当。

普通の信仰系魔法詠唱者でも第三位階を9個程は覚えている計算となるのだ。

対して魔力系は「ソウルステイラー」の6LV（LV2～6は第二位階）

「アルケミスト」の3LV（第一位階）

「作成者」<sup>プリベア</sup>の3LV（第一位階）

そこに精霊加護闘士の6が加わると、計算上は魔力系が「18LV」という結果になって、魔法の数は42。

レベルの7刻みごとに位階が上がるならば、この「仮定」での計算だとフレイラは第三位階は魔力系が4LV分の8つ、信仰系を3LV分の6つ覚えていることとなる。

※ 結果的にフレイラの場合

第一位階 魔力系：20 信仰系：21

第二位階 魔力系：14 信仰系：20

第三位階 魔力系：8 信仰系：6

という具合になるわけだ。

フレイラの場合、魔力系の魔法の中でも第一位階だけだが「鍊金魔術」も覚えている。

それには基礎的な能力と、呪文<sup>ス</sup>：そして魔力的な補助も含めて鍊金術士としての心得、そして特殊技術<sup>ス</sup>等も含まれる。

どちらにしても第三位階魔法の修行中と大差はないレベルだし、魔法の数も本職と比べれば圧倒的に少ない。

だがそれは、純粋な魔法詠唱者と比べればの話だ。

フレイラには、仮にも戦闘ができるという強みがある。

魔法自体は使えないが「双手拳士」というクラスも（1LVだが）取得しており、普段の生活でも「アイアンスキン」が常時発動<sup>パッ</sup>型スキルなので、現地人の通り魔くらいでは刺し傷すら通らないのだ。

（他にも「コック LV1」もあるが、これは戦闘の役には立たない）  
身に着けている和風の着物風装備も、ユグドラシルでは50LVのプレイヤーが持っているでも不思議じゃない程度のレアリティの防御力は備えさせている。

しかしその装備が無かったとしても、こっちの世界の通常の武器ではフレイラには傷すらつけられない。

それが例え、総アダマンタイト製の武器であってもだ。

無論、ライカンスロープ人獣種ですらない「獣人」などという現地種族での爪や牙攻撃程度では傷もつかない。

ユグドラシル基準では

・ 最下級（ノーマル） N（店売りダガー、ソード、メイスなど）

・ 下級（ノーマル+） N+（敵のドロップ品素材から作る材料で鍛えた店売り装備の上級版）

・ 中級（ハイノーマル） HN（ミスリル、オリハルコン、アダマンタイトなど）

・ 上級（レア） R（HNをドロップ品素材から鍛えた上級装備）

ここまでのレアリティの武器までならどんな種類の武器でも傷はつかない。

（R未満のグレードでも銀で作られた武器であれば（種族由来のペナルティとして）ダメージは通ってしまう危険はある。）

…魔法で身体強化したとしてもそれは変わらず、武器に直接魔力を付与させたり、炎や氷属性などで攻撃属性を変化させた場合はまた別の話になるが…。

そんなことを取り留めもなく考えていたベルリバーは、改めてフレイラの戦力が現地世界で共に行動する分には英雄級前後で扱われる程度で済んでいることに安堵していた。

…とはいえ、ここ、ナザリックではそれではさしたる脅威にはなれない。

身を護れるかどうかも怪しい。

それを見越して、第六位階までの魔法攻撃なら大丈夫なように対策を与えてはいるのだが…その基準もこの大墳墓では微妙過ぎるラインだというのはとにかく不安だった。

さすがにモモンガさんに〈メッセージを

送って事情を説明した時は背後や周囲にNPC達が居たせいだろう、支配者ロールしてる声のままだったから、対戦相手の情報も聞き出すことはムリだった。

カルネ村で夜通し話をした時には「各階層ごとに順番に出すように話を進めてみますよ」と言ってくれてたのは覚えてるが：NPC達がどう反応してくるか：、ギルメンの提案をバツサリ切り捨てるようなことは無いと思っではいるけど：モモンガさんから確定の報告がないのが、すごく不安だ：ついネガティブな思考をしまいそうになる：。

順当通りに行けば、コキュートスが相手の予定だけど：

リアルでもよく言われたもんだよな、穴沢のやつに：「予定は未定であって決定では無い！」だったか：都合が悪くなると良くそう言ってたよな：アイツ。

ホント、今考えてみるとアイツとの思い出は嫌なことばかりだ。

落ち着いて考えてみると、アイツ：裏で暗躍してる集団の仲間入りをしたがためにボクを利用して：わざと致命的な情報を握らせた上で、自分の価値を認めさせるために闇討ちに：って算段だったのかな？

そうだとしたら、モノの見事に引かかった自分がバカみたいだ：まあでも、ウルベルトさんならあの情報、うまく活用して『美学の無い悪』を打ちのめしてくれていますよね？

なんてことを考えながら、闘技場の中央へと歩みを進めると、闘技場の貴賓席、その最上段から飛び出し落下してきた小さな影、おなじみになってしまったアウラだ。

「さて、みなさん、お待たせいたしましたあ！ 次に我々階層守護者に挑もうとやってきたのはこの命知らずの3名！」

アナウンス用のマイクを手に、実況は続けるアウラ。

内心で「腹の中にまだ外に4人程いるけどな」と思っているが口には出さない：ヘアスタイルはエルヤーのまま、外見は人間の状態、黒髪に擬態して見た目を誤魔化しているベル。

「今回も、てこわいのかててきそうしやの」

「私たちは、安全にサポートできるんですから、しつかり展開を見極めなければいけませんよ?」

「言われなくてもちやんとわかっているから大丈夫、ベルさんに最後に覚えておくように言われた呪文も準備万端だよ!」

「セピアは放っておくと、攻撃魔法しか覚えれないんですから:最後の魔法も、ベルさんが言わなかったら別の攻撃魔法、覚えようとしていたんでしょ?」

などと、ちよつと意識を向けただけで、腹の中で打ち解けた会話がなされていた。

老公も、この戦いが落ち着いたら、身の振り方を考えてあげないと:だな、武技とかで自分の持つてない種類のを覚えているのって、やっぱり経験の深いこの人じゃないと使えないのとか結構ありそうだし:

前回のシャルティアとの戦いで、一度だけうまくいった「紅竜牙突き」。

あれは、なんとか身体反応を反射的に合わせる事が出来たから、なんとか同時発動に間に合ったけど::意識しなくても普通にそれが出来るようにしなきゃ、コンマ何秒かの遅れが勝機に大きく響きそうだからな::必ずしも全部勝つ必要はないんだけど::せめて自分が言い出した2回くらいは勝っておきたいよな。

「そして、今回、迎え討ちますのは階層守護者の中でも、武器戦闘に於いて最強を誇る、この者!」

とアウラがアナウンスした瞬間、ゴゴゴゴゴ::と入場口から、格子状の障害が上へとせり上がり、奥からライトブルーの甲殻を輝かせ、冷気を吐き出しやって来る、2足歩行の蟲としか言えない異形の者が姿を現す。

「な::なに?あれ?」

さすがのアルシエちゃんも少し気圧されてるようだ。

「正直、気ハ進マヌガ:女子供トハ言エ、戦イノ場ニ赴イタ以上、手ハ抜カン! ソレデモ挑ミタイノナラバ:ドコカラデモカカツテクル

「ガイイ！」

（さすがに武人としての性格を色濃く設定されたコキユートス、挑まれるのなら迎え討つ、か…、とりあえず3人は多すぎるとかイチヤモンを付けられなくてよかつたけど…守護者ならその程度の誤差、問題にはしないか…ひとまずはルール通り「相手側の承認」は得られたものと判断しよう。）

★★★

そして、遅れてやってきた、審判であるナインズ。

その後ろから、名目上は副審であり、ナインズの身辺警護の役目としてそばに控える形となったマーレ。

その二人の立ち合いの下、ベルサイドの3名は、それぞれの持つことになる課金アイテムをフレイラ、アルシエの2名に3個ずつ手渡し、それを審判である支配者にも確認してもらった上で問題なし、と判断される。

「では…双方、準備は整ったようだな…では……始め!!」

人間形態のまま、2本の腕で挑むことになるベルリバー。

対して、4本の腕だが、武器は2つ、白銀のハルバードを持ち、逆側には目を見張るような輝きと、刀身に纏わりつく神秘的な眩さなどが備わっている、見るからに業物とわかる一品とを装備した偉丈夫。

武器という観点で言えばベルリバーも「シエイド・ベール」から取り戻した「無銘一刀 宜振」

そして、反対の手には初めから使っていた「天ノ魔ブレード」

手数と言う点では「無手」の状態である腕が2本あってフリーであるコキユートスの方が、余分な行動を不測の事態などにも対応させることが考えられるため、どんな状況下でも甘く見られる相手では無い。

（確か、コキユートスの持つてるのはコキユートス専用にと建御雷さんが熱心に作ってた断頭牙か…あと反対の手にあるのは、懐かしいな



…ナザリック攻略の時に使ってた「建御雷六式」か…)

「本来ナラバ、四本ノ腕スベテニ武器ヲ装備スル所ダガ…ドウヤラソレダケノ相手デハナサソウダ…ナノデ、二本デ相手ヲサセテモラオウ。」

対峙しているベルからしたら、ある意味複雑である。

コキュートスと自分が並べる実力か？と問われたら正直そこまで自身の評価は高くない。

しかし、2本の武器…つまり自分と同じ立場まで下りて来て、装備の武器の数すら手加減されるといいうのも気分的に微妙なのだ。

一応、男としてのプライドというものもある、これは戦闘で実力を可能な限り示すことで「自分の評価は誤りであった」とコキュートスに認めさせる必要はある。

と思うも、それと同時に本気にはさせない内に決着はつけたいという欲もある。

決して全勝が必要な訳では無いが、モモンガさんには自分から提案を持ちかけたのだ。

「2勝して、ナザリックに帰還します」と…。

言ってしまった手前、「2勝出来ませんでしたでしたが、帰還させてください」とは言い出しにくい。

先程の戦い、先鋒ではMPの続く限り、回復が可能+直接攻撃でも多少のHP回復も出来るシャルティアと持久戦ともなれば相性は絶望的だったので、すでに1敗が決定している。

次の戦闘ではアウラ単体なのか、それともマールも参戦するのかが今のところは読めない。

副将はデミウルゴスかアルベドか…どちらかだとして、大将が判断に困る。

モモンガさんが直接、自分と戦おうとするとは思えないけど…もしそうになったらモモンガさんは自分がナザリックに帰還することを拒絶してるって可能性も…と一瞬だけ頭に浮かぶも、それを頭を振ることで否定する。

アルベドは防御特化ではあるけど、自身で回復の手段は無いことも

無いんだよな。

だが、シャルティアと比べると回復の度合いは凶悪なほど段違いに低い。

防御特化とは言え、極振りではない、魔力の数値もあるにはあるが、シャルティア程は高くないのだ。

（問題は騎獣を召喚されて、それに乗る事での攻撃力上昇に攻撃手段の多様化か：そうだったら厄介なコトこの上無いんだが：まあ、今はコキュートスが相手だ、とにかく自分の持てる力をありつたけ出せる相手だ、なにしろあの建御雷さんの嫡子みたいなものだからな。）

結局、PVPで一度も圧倒して勝利することの出来なかった目標だった存在を思い出す。

そして、その面影を目の前のコキュートスに重ね、両手に持った武器を構えて、宣言をした。

「それではその評価、少しでも改めてもらえるように努力しましょう、「武人」のお相手をさせていただくのは誉れと言える又とない機会でしょうからね。」

一瞬の静寂がその場を支配し、ブシューという音と共に冷気を吐き出したコキュートスがその静寂を破る。

（コノ男…。）

コキュートスの、目の前に居る相手への警戒がわずかに上昇する。初めて相対した相手で、アウラの紹介でも自分の言葉にもどれにも発した覚えのない「武人」という言葉。

少なくとも今まで会って来たどの相手よりも観察眼：洞察する力は強そうだと認識を改める。

しかし、それだけだ。

自分の本気を全力でなりふり構わず振るえる相手か？と言われればまだ未知数だ。

決して相手を侮ることはしない、至高なる御方も「侮るのは良くない」と常に言っておられることは自分も解っている為それはしないが、だがそれを理由に相手を必要以上に叩きのめす必要は無いとも

思っている。

(共ニ高メ合エルヨウナ相手ガ居レバ、アルイハ全力デ戦エルノカモ知レヌガナ…)

人間で言えば自嘲するような仕草で、「ギチギチギチ…」という音を鳴らしながら目の前の男に意識を向ける。

「デハ、改メテ…名ヲ、聞カセテモラオウ。」

(そう言えばシャルティアの時も名乗るのってするの忘れたな…まあいっか、シャルティアもその辺、気にしてなかったみたいだし…)

「事情があつて、ワーカーとしての名しか今は明かせませんが…ベル||カウワ||スズリバー…参りますよ?」

「ソウカ…ナラバ今ハマダ深く詮索ハスマイ…ナラバ『ベル』トヤラ…イザ!」

「ええ…尋常に。」

「勝負!!」

そうして、静かに両者の立ち合いは始まるのであった。

第60話 次鋒2 コキユートス VS ベル (前編)

「フハハハハ、イイズ！ ソレデコソ『プレイヤー』ト言ツタ所カ！  
モットオ前ノ戦士トシテノ輝キヲ見セテクレ!!」

荒ぶる剣閃の応酬の中、まだまだ余裕ある感じでベルの剣撃をさば  
いているコキユートス。

やはりレアリテイ的に威力不足ということなのだろう。

天ノ魔ブレードはレジェンドですらなく、神聖属性が強みなのだか  
らコキユートスではその真価は充分発揮できそうにない。

もう一本の武器、「無銘一刀 宜振」

こつちの方はシャルティア戦の際、控室で、1000本ノックなら  
ぬ、1000本素振りを達成し、続きの素振り分も加わって攻撃力の  
上昇がされている、その分、武器の耐久値も底上げされている為、今  
の所こつちがメインで「実」の攻撃。 天ノ魔ブレードの方が「虚」の  
方を担当する形となっている。

レジェンドクラスの防御力を誇る「甲殻装甲」を身に纏っているコ  
キユートスに、天ノ魔ブレード程度の攻撃力では現状、ダメージを負  
わせるのは難しいが、隙を狙って装甲の継ぎ目、防御の薄い部分にな  
ら通じるのでは？と「実」の方の攻撃を織り交ぜながら「虚」の方で  
辛うじて攻撃の通じる幅を広げようと変化を繰り返している。

しかし、それすらもコキユートスの複眼にはあらゆる角度からの攻  
撃が見えているようで、余裕のある感じでないなされている。

ひどいになれば装甲の厚さだけで、弾かかれている攻撃だってあつ  
た。

(こつちまで差があるうちよつとへこむな…武器に差があるところも  
違ってくるなんて…でも「今の自分」ではこのくらいが限界だろうこ  
とは承知の上で…だけどね。)

こんな風に転移？だかなんだかって状態になるなら、イイ武器の1  
本でも残しておけば…と思うも後の祭り、サービス終了したらそもそ

も全部のデータが失われてしまうものと思って、ギルド長に最強の武器防具セットを預けちゃったんだしな」と、少しだけ後悔するも、こんな事態になるだなんて誰が想定出来ただろうか?とも思っていた。

結局、自分はゲームシステムでならそこそこ出来たが、実際に腕が4本あるというだけの差が目の前にそびえるだけで、こうも苦戦するのか:と現実の厳しさに歯がゆさを覚えた。

「フム:先程ノシャルティアトノ戦イヲ見タ限り、マダ手ノ内ヲ隠シテルト思ツタノダガ:見込ミ違イカ?」

(言ってくれるな、コキュートス:だがその言葉は今のところ、正当な評価だ:、天ノ魔ブレードは決め手に欠ける程度の攻撃力だから、普通に甲殻装甲で弾かれる:「実」の刀である『無銘一刀 宜振』は辛うじて、<sup>〃</sup>まともに当たれば<sup>〃</sup>傷くらいは作れるだろう攻撃力に達しようだが、コキュートスの断頭牙がごとごとく防いでいる状態:、まるで師範代を相手に「いつでも打ち込んで来い」と言われた剣術指南の時のようだ。)

刀も剣も片手ずつ装備している為、刀を両手で握っていた時のように武器へ『粘り』を持たせることが出来ない。

斬りつけようとした武器ごと:剣は装甲で、刀は断頭牙で弾かれる。

その為、大きく流されそうになるも、それは老公の〈即応反射〉で無理やり体勢を戻し、再び斬りつけるという事の繰り返しだった為、老公も疲れ始めてきている。

それだけやっても未だ、コキュートスの余裕を崩すには至っていない。

(いっそ大技を繰り出して:いや、それは悪手だな:、体勢も崩してない万全の相手にいきなり大技を繰り出しても:対処されるだけだろう。なら今はどうかしてコキュートスの構え:守りを崩す必要がある。だがそれをどうやるか:そこが一番の問題だ:。)

「イイノカ? 後ロニイル仲間ト同時デモ私ハマツタク構ワナイノダガ?」

余裕たっぷりと言つてのけるコキュートス。

だが、本心は1対1の戦いこそ武人としての本来の在り方だろうと思っていることは自分でもわかる。

「はい、そうですか」と複数で挑めば、スキルで範囲攻撃を出して来かねない。

まだLV50のフレイラなら耐えられるだろうが、手加減の度合いが及ばなければアルシエちゃんが一撃で沈んでしまいかねない。

距離を取っての援護射撃でも、意味はない、守護者は全員、飛び道具に対する耐性を得ていたはずだ。

第三位階相当の雷矢など、「弱い魔力」と判断され、スキル効果で打ち消されるのがオチ。

だからこそ、フレイラにアルシエちゃんのそばから動かないように…と<sup>メッセージ</sup>へ伝言で指示してあるのだ。

武人としての近距離戦が一番得意なのは当たり前だが、遠距離攻撃の手段もコキュートスは持ち合わせている。

(たしか、中距離の相手には<sup>ブリザードブレス</sup>冷気のブレスの手段もあったはずだし…) その標的にされた時、かばってあげて欲しいと言い含めてあるから、大きく逸脱はしないだろう。

とはいえ、自分の方も今のままでは打開策がない。

課金アイテムも、こんな最初から使うような局面は想定してなかった。

もう少し、いい勝負が出来ると思っていたのだが目算が甘かった。

元々、<sup>フレンドリィファイア</sup>同士討ちが出来ないようなシステムだったため、敵として戦う場合という想定はしていなかった。

しばし、こちらの動きを待っていてくれたコキュートスだったが、万全の守りの構えを解き、言葉を投げかけた。

「モウ手詰マリカ？ モウ少シ何カヲ仕掛ケテ来ルト思ツタンダガナ。」

“キチキチ”と音を立てて、フシユーと冷気を吐き出した。

落胆のため息でもついたのだろうか？

「ソノ程度ノ速度デイイノデアレバ、コチラトシテハ造作モナイゾ」  
そう言うなり、半歩前に出たコキユートスが、腕を伸ばし、所持している武器で最もリーチのある断頭牙を振るう。

それは今の自分でなんとか反応することがギリギリ間に合うか…と言った際どいものだが、それを調整してやっているのだとしたら、意外に「手加減慣れ」しているのかもしれない。

「ぐー・クークソ…」

軽口を間に挟む余裕すらない。

口から言葉を発する方に意識を少しでも傾けると、一気に押し込まれそうな未来が視えてしまうようで恐ろしい。

「ダガ…ナカナカニ粘ルモノダ…今マデニ会ツテ来タ強者達つわものノ中デハ…才前ガ一番カモシレンナ。」

一瞬でも気を緩めれば、傷を負いかねない状況で、攻め手となつているコキユートスには余裕がある。

こっちは受けに回るので、いっぱいいっぱいだというのに…。

（「そりやどうも」の軽口一つ言う暇もないとは…）

コキユートスはまだ一本しか武器を使っていないのにこれなのだ、ベルが武器二本で受けに回るのがに専念していると、止まぬ攻撃の中、ぼそりとコキユートスが呟いた。

「ソロソロカ…」

断頭牙の刃を受け続けるのに夢中でそっちに意識を割ける余裕がなかったせいもあるが、コキユートスの言葉に「まさか…」とそこに思い至るも、それはもう遅かった。

「パキン！」

あっけなく、小気味良い音を立てて天ノ魔ブレードが、剣の半ばで折れた。



「私たちは加勢しなくて構わないの？」

アルシエはベルとは距離を置いて後ろの方に立っている。

そう促したのはフレイラだ。

我が主人よりの〈伝言<sup>メッセージ</sup>〉で、そう指示されていたからだ。

『極力、自分だけで戦わせて欲しい…その間、巻き添えにならないように彼女の守りを頼む』

そう頼まれていたのだ。

「ええ、間違ってもむこうの剣技や魔法などの巻き添えにならないように…とのご判断です」

恐らくそうだろうとは思っていたアルシエからすれば、少し悔しさが滲み出る。

(まだ、私は足手まといでしかない…)

心のどこかでそれは解っていた。

守護者という存在が自分よりどれ程に実力の差、開きがあるかくらいは先の戦いを見ていて肌で感じたことだ。

あの速度を目で追うことも

突き出され、振るわれる武器を避けられるかという点でも

今の自分ではどうにもならないという事は理解している。

ならば何故あそこまで食い下がったのか…

それは少しでも防御の役に立てれば、と思ったのだ。

この戦いが始まる際、自動展開できる浮遊盾を準備しようとしたがフレイラさんに止められた。

「1体1の戦いであれば、今回の相手はむやみにこちらへと害を及ぼしたりはしないでしょう…ただ、歯向かってくるようであったり、割り込まれるようなことでもあればどう思われるかはわからなくなりますよ?」

そう言われたのが大きい。

陰ながら自動防御で助けがあるだけでも違うのではないだろうか?

そう内心で思っていると、フレイラが忠告を付け加えて来る。

「どっちにしてもその鎧の仕様自体…シ…先程の戦いで恐らく見破られているでしょう、ソレが割って入ればその源となるアルシエさんに危害が及ぶ恐れもありますから。」



そう言われれば、イミーナが防御のためとはいえ散々乱用しまくっていたのだ。

「実はベルさんの能力でした」

そんなその場しのぎは通じないだろう、見破られているというのは確かに覚悟しておく必要がある。

「でも何の助けにもなれないのは歯痒い」

後ろで立っているだけで何もできない自分。

戦力にすらなれない自分。

イミーナはそれなりに戦わせてもらえていたというのに…

その想いが胸の内を支配していく…。

しかし、それを見抜かれたのかフレイラさんが優しく背中をなでてくれた。

「大丈夫です、これは御方が自身の意思でそう決められたこと、ならば信じて待つのが…あのお方の力にもなる…そうして待つことこそが今の私たちに出来ることかと…。」

「…でも結構、押されてるように見える。」

戦士の戦いというものの駆け引きだのなんだのは、魔法詠唱者であるアルシエには良く解からない次元の話だ。

だが、それでも今のベルさんと対戦相手との実力差は開いているように見える。

防戦一方という感じに見えていた。

自分に出来ることなら、傷ついても…力になれるならば…と思いながらも、今の両者の間に入ればどうなるか…剣の勝負事に疎い自分でもどうなるかはハッキリわかる。

そこでもやはり、自分の無力さに打ちひしがれ、不意にうなだれるように顔を下に向けたアルシエは見てしまった。

自分の横に庇うように立っているフレイラさんの…私から見て遠い方の腕…その拳が強く握りしめられ、薄く血がにじむようになってるのが…

(フレイラさんも戦ってるんだ…)

そう感じると、悔しい想いでここに居るのは自分一人じゃないんだ。

と、思っている瞬間、それは訪れた。

「パキン…」

小さくだが、確かに高い音を立てて、ベルさんの武器が折れる音。それがアルシエとフレイラ、両者の耳へと届いた。



「武器破壊の技を使った訳ではなさそうですね…単純に耐久値を削られてしまった結果…ですか？」

ベルがコキユートスに対してそう告げた。

折れた自分の武器を軽く持ち上げ、「折れてしまった」という現実と直面している。

「ソウイウコトダナ、悪い剣デハ無いヨウダガ…ソノ程度ノ武器デハ私の断頭牙ヲ受ケ止メ続ケルニハ不足ダゾ？」

「貴方から見るとそうでしょうが、私からすればずっと手元にあつて、苦楽を共にし、元々は「友より託された」武器…想い入れだつてもう一つの武器と比べても遜色は無いのでね、例えそれが性能的に劣つていたとしても…」

折れた剣の、残された刀身に手を添え、持ち手の方向に滑らせると、刀身のみが消えるかのように収納される。それを腰の帯に挟むようにして身に着け直す。

「ソノ武器ハモハヤ使イ物ニナルマイ、ヨリ強イ武器ニ持チ替エテミタラドウダ？」

折れた瞬間に断頭牙での攻撃は一旦やんでいた。

どうやらこちらが万全と判断できるまで待つてくれるようだ。

「それには及ばない…と言わせてもらいましょう、ご忠告はありがたいが折れたからといってすぐに見切りをつけるようでは、武器の方も真の意味で私に信頼を寄せてはくれなくなるでしょう。今まで共に歩んできた愛剣を使い捨ての道具のように扱うつもりはありません

ん。」

そう言い放ち、ベルは刀を正眼に構え、自然体で立つ。

「出来れば、スキルだの武技だの…：そのような手段や邪道な戦い方はしないで居たかった部分はありますが…：どうやら素のままでの実力は明らかにそちらが上のようなのでこちらもその差を埋めるため、あらゆる手段を使わせてもらいますが、よろしいでしょうか？」

フシユウ…と、短く冷気を吐き出したコキユートスが感心したような言葉を返した。

「見事ダ…：武器二対スル敬意ハ申シ分ナイヨウダナ…：面白イ！、邪道ナ戦イ方トヤラ、見セテミルガイイ！」

へレイザー…：エツジ

ベルが発したスキルの名前、それはコキユートスも知っている。

同様の効果を持つ技をベルも覚えているということに好意的な言葉が発せられていた。

「才前モソレヲ覚エテ居タカ…：ヨカロウ、ドレ程ノモノニナツタカ…：存分ニ見セルガイイ！」

ベルにコキユートスの言葉自体は聞こえているものの、その実、少し意識は別の事に向けられていた。

ユグドラシルの時は、攻撃力を大幅に上げると同時に、攻撃する際の剣速も同様に上げてくれていたスキルなだけだったはずだ。

だが、さつき覚えた違和感…、へレイザーエツジ…！と一気に言おうとした瞬間、腰の帯に挟んでいた「天ノ魔ブレード」の柄が一瞬震えた気がしたのだ。

スキルの効果で、武器にそういう反応が出たのだとしたら、それもおかしい話だった。

なぜなら、自分が今…：手に持っている武器の方は全く震えた様な感触を感じなかったせいだ。

まさか…：と思うも、「エツジ」と言った瞬間、その震えの様な現象は止んでしまった。

（なにか仕掛けられてる？…それとも隠された何かの効果？…いや、あままさんのことだ、データクリスタルだけでは実現できない自分の

理想をテキストフレージャーに「こうなるのが夢」とばかりに書き込んでいるせいで起こった現象かもしれない：可能性として「無い」と言い切れないのがあの人だからな…。」

どちらにしろ、今は相手が目の前に居るのだ、いつまでも思考をよそに向けていてはコキュートスにも失礼だ。と思い直し、意識を切り替えた。

「ソチラモ「スキル」ヲ使ウ以上、コチラモ使ワセテモラオウ、加減ハスルガ：コノクライナラ防ゲルコトヲ期待スル。」

〈風斬〉！

小規模の竜巻に似た、コキュートスの得意とする技の一つ、スキルだ。

竜巻の周辺、外周部分に風の刃までもが渦巻いている為、接触する際に風属性のダメージと斬撃ダメージの両方が入るという設定となっていた。

それが今、ようやく現実として目の前に迫ってくることに一種の感動を覚えるも、瞬時に意識を切り替える。

「ここが勝負の分かれ目」

それがハツキリとイメージ出来たためだ。

だが：風（スキル）と風（魔法）の要素をぶつけた場合、どのよう  
に干渉しあうかというのはそう言えばまだ未検証だったという部分  
もあり、そこが一番不安ではあるが…

ここはやはり、懸念材料であろうと『賭けてみるべき』と判断する。  
意識下で、体の内に保護している4人組に意識を向け、語り掛ける。  
『時間が無いから手短に言うけど、ボクが魔法を使って、あの攻撃を大  
型にしてみる…もし出来ても出来なくても、一瞬は停止するはずだか  
ら、そしたらセピアの最後に覚えた魔法でアレの中心に、飛ばしてく  
れ！』

返事を待たずに意識を切り離す、一瞬一瞬がコキュートスとの戦い  
では綱渡りだ。

自分がモモンガさんの魔法に憧れて覚え始めた数々の魔法：結局  
あそこまでの取得魔法数には至らなかつたが…その中の一つ、彼の持

つ魔法の一段下にはなるが自分の持つ風属性で一番位階の高い魔法を〈風斬〉に被せるように発動させるイメージを作る。

そう：相殺させるのではない、あるポイントで〈風斬〉を僅かな間だけでも静止させるため：初めての試みなので「一か八か」の要素があるのはこの際、気にしてる余裕はない。

〈大竜巻〉  
サイクロン

自分のイメージする中ではぶつけるだけではダメだ。

回転の方も逆では意味がない。

回転の方向も同一。

発生させるポイントも寸分たがわず同じであるのがベスト。

「そこだー」

ある地点まで来た、迫りくる〈風斬〉。

その足元から突如、発生した竜巻：同じ方向に回転し、風斬を巻き上げて渦を巻く。

空に向かって打ち上げられるような勢いで発生した大竜巻は、コキュートスの〈風斬〉を

呑み込んで大型の竜巻へと変貌していく。

（だがそれも僅かな間だけ：威力という点でもコキュートスのスキルの方が明らかに上だからな…）

ベルの予想通り、威力としては〈風斬〉の方が上、しかし上空にまで広がった「範囲のみ」で言えば〈大竜巻〉サイクロンの方が上。

互いが互いに干渉し合い、「その場で」打ち上げられている〈大竜巻〉に引つ張られ、その場から先に動けなくなっている〈風斬〉を見て：

（ひとまず、コレに関しての『賭け』には勝ったな…）

そう考えていると自身に、魔法の発動の気配を感じる。

（セピアだな…）

そう思った次の瞬間、セピアの〈次元の移動〉ディメンショナルムーブが発動する。

自分が覚えてない訳では無い、今後を見据えてのMP節約のためだ。

すると視界が一転。

そこは〈風斬〉の中心地。

いわゆる台風の目というには明らかに狭い無風空間でしかなかったが、今はそれが好都合。

自然に腰のベルトが反応する。

「周囲に風の気配を感じたのだろう、そのベルトに組み込まれた最大の特徴が今、産声を上げた。」

左右の風車がうなりを上げて回転し始め、それと同時に周囲一帯に荒れ狂う「風斬」と「大竜巻」…それを一気に吸収、吸い込んでいく。

結果、コキユートスが繰り出した「風斬」は、相手にダメージを与えることなく、どこへともなく消えたようにしか見えない状況で終わる。

「又オ!!」

一瞬の驚きに、意図せずに唸ってしまったコキユートス。

(ナン…ダト?「風斬」ヲ…カキ消ケシタ? 相殺デハナク消失サセタトデモ?)

「どうしましたか?私がこの程度、どうにか出来ないとも? 随分見くびられたものですね…」

やれやれ…という仕草で肩を僅かばかり竦め、肩より少し上に、手の平を上に向けた感じで、大げさに顔を左右に振っておく。

それを挑発と受け取ったのか…コキユートスが少し嬉しげな…それでいて気の引き締めた様な張りのある声で、腰を落としてつつ構えを取った。

「ナラバ全力ノ「風斬」ヲ見舞ウトシヨウ! コレハドウ防グ!」



(あつちやく…コキユートス、完全にベルリバーさんの術中にはまっちゃってないか?)

審判の立場で戦いの採点をする立場である自分が、両者のどちらかに肩入れするというわけには行かない、そんなアインズからしてみれ

ば見守るしかないのが歯がゆい、ベルリバーもNPCも…どちらかを応援することも出来ないのだから、それはしかたないだろう。

（でもどうやったんだ？ 確かベルリバーさんって〈風斬〉を呑み込んじゃうようなアビリティやスキル、持ってたっけ？ 〈暴飲〉の方はMPが必要な技や魔法全般、それがスキルであつても一部MPが消費されるなら有効だけど… 〈風斬〉はMP必要ないし、そつちは関係ないよな…）

アインズはしばらく、思考に入る。

（対して〈暴食〉の方は、現在レベルを上限とした数値までの物理攻撃や、召喚、招来モンスター&眷属なんかを吸い込める能力だから…風で全体を構成された〈風斬〉とは相性が悪いと思つたんだが…本当にどうやったんだ？）

「悪イガ、コチラモ同ジスキルデ對抗サセテモラオウ！ヘレイザーエツジ…イクゾ！ 〈風斬〉」

コキュートスが構えを取つてまで繰り出した、全力の〈風斬〉。

先程のとは規模も何も違う…

（これがコキュートスの全力で振るつた〈風斬〉…か）

さっきの手加減〈風斬〉を吸い込めたことにより、「風車のベルト」の効果で第一段階のランプは緑に点灯している。

しかし第二段階を表すランプは緑の灯りが「点滅」している。

第二段階まであと少しだが、まだ少し足りない。

そういう表示だ。

（第一段階までは比較的楽に条件は満たされるんだけど…第二段階つて第一段階の2倍。そして第三段階になるには…多分それ以上は必要だろうな…）

そう…だからこそ、コキュートスの〈風斬〉は必要だったのだ。

対して、武人であるコキュートスからすると、手加減したとは言え自分のスキルで繰り出した技がダメージも与えずに消失してしまつたのだ。

力量が足りなかったのか、それとも相手との相性が悪かったのか…

まだ判然としないため、次は全力で行くことを決めていた。

「手加減して及ばなかったのであれば、全力で対するのが礼儀」  
それが武人として生み出された自らの矜持。

至高なる創造主より賜った自らの生き様である。

必然、全力でもう一度出してくれることになるだろう事はベルにも理解出来ていた。

さつきまでの第一段階まですら行ってなかった「風車のベルト」ではコキユートスの手加減〈風斬〉を正面から吸い込むことはまず難しかったろう。

無傷とはいかず、吸収しきれなかった分はダメージを受けたかもしれないからだ。

だから安全策を取って台風の目から吸い込む必要があった。

（竜巻の方はともかく、風の刃の方は吸い込めるか心配だったけど、無事に吸い込めたようだ。）

そして今、第一段階の強化は自分の中で済んでいる。

（腹の底、というべきか、下腹部：いや、臍下丹田から熱が込みあがって来ているかのような力の波動を感じられるな。）

今なら、〈風斬〉を正面から受け止めても吸い込めるだろう。

（さて：どれくらい風の力が溜まるのか：楽しみだな。）

迫りくる〈風斬〉の旋風撃。

それは実に、先ほどの〈風斬〉より少なくとも一回り以上は確実に大きかった。

風車のベルトによる第一段階の強化状態に入ってるベルは、今ならば…と決意し、組み込まれた機能を発動させる。

「吸い込めーッインスクリュー!!」

風車のベルトに内蔵されている、両側に左右1つずつ存在するプロペラが同時に、うなりを上げて回転し始め、目の前にまで迫った旋風を一気に吸い込んでいく。

そして、吸い込んだ風力を、そのまま自身の力へと変換していった。



すると、ベルの頭の中で、以前にも聞いたことのある声で新たな情報が増加されたというアナウンスが流れていく。

『第二段階に到達 … 全ステータスの第二段階の強化を適用しました。付随して左右の風車が本来の性能を発揮させたことにより「力」と「技」の2つのステータスが上限を超えて強化状態に入ります、吸い込んだ風力に応じて追加補正も加わりました。』

『第三段階に到達 … 全ステータスの第三段階の強化を適用しました。ベルトの「Dポイント」がエネルギーを充填させたことにより、シークレットモードに移行します。『26の秘密』が適用されました。名称と効果の記載されている全ての『必殺技』を使える様になりました。』

「え？…ちよー！」

（唐突にそんなこと言われても『なにそれ？』としか感じないよ？必殺技ってなに？ 26の秘密って？ 今更、新たな謎を盛り込まないでくれないかな？「力」と「技」のステータスが上がるのは知ってたけど…『第三段階』の説明は初耳だぞ？ … たつちさんか？ たつちさんのテキスト設定が猛威を振るってるのか？）

少し頭が痛くなってきたような気分になったベルは、頭を抱えそうになるのを必死に抑え、コキュートスに目を向ける。

すると、コキュートスは僅かな時間ながらも放心していたのか、視線を向けられたことで己を取り戻したようだった。

「フ…フフフ…イイズ…ソコマデトハ思ツテイナカツタガ、ヨモヤヘ風斬を無傷デ…シカモ吸イ込ンデシマウトハ…ココハ敢エテ謝罪スルトシヨウ！ドウヤラオ前の実力、ソレヲミクビツテイタヨウダ！」

なんとかコキュートスから「実力を認めよう」という意味の言葉を引き出すことが出来、ひとまずは正体が判明してもコキュートスに見くびられる心配は減ったことに安心するも、今以上に本気で来られた場合、どこまで対抗できるか…そこが問題だ…と気を引き締めた。

（どうにかして、コキュートスに対抗できる技を使いこなすことは出来ないか…、勝機があるとすればコキュートスが本気を出すより前に、こつちの高火力のスキルや、正体不明の『必殺技』とやらで削り

切るしか道はないんだけど……たっちさんが何か、ヒントとか言っ  
てなかつたかな？……思いだせ、何でもいい、思い出すんだ！」

かつて、ユグドラシルで『風車のベルト』をたっち・みーより受け  
取り、試運転がてら、性能実験をたっちの説明を受けて体験させても  
らっていた時の……今となっては遠い昔の場面を必死に記憶から掘り  
起こしていく。

「どうですか？ベルリバーさん、その「風車のベルト」の使い心地は？」  
そう聞いてきたのはこのベルトをわざわざ作ってくれた元クラン  
マスターだった、たっち・みーだ。

「これはすごいですね！上昇値の数値も桁外れですし、それが第3段  
階まであるだなんて……これって作るの苦労したんじゃないんですか  
？」

反応を返したのはかつての自分、ベルリバー。

もちろんユグドラシルをプレイ中での会話である。

「まあ……うちの娘もそろそろ入学の時期ですからね……お受験というの  
も大変でして……近々、イン率も低下しそうな感じなんですよ……嫁から  
も「いつ引退してくれるの？」って言われてますし……ならいっそ、自  
分が居たって言う確たる証……とでも言えばいいんでしょうかね？そ  
ういう物を残していきたくはたっちゃんですよ。」

寂しそうに顔を下げようになだれながら言葉を紡ぐたっち・み  
ー。

しかし、せつかく二人で居るのに雰囲気为重くなったのではいたた  
まれなれないと思つたベルリバーは少しだけ話題を投げかける。

「早いですね……この前、娘さんが生まれたとかでギルドパーティした  
ばっかだつて意識だつたんですが……そうですか……もう小学校……中学  
とか高校とかはどうするんですか？」

少しだけ顔を上げてくれたたっち・みーは空を見上げるようにして

言葉を出していく。

「もちろん、娘の為なら高校だろうが大学だろうが行かせたいんですけどね…そうなるとうちの近所だけでは…そうなるのと遠方の…：あ！すみません、こんな話…。」

「いやいや、イインですよ、こっちが聞いた質問なんですから、その返答に不快感を表したりししないですって、アーコロジーの事でしょ？」

これがさらにもう一人、ウルベルトが居たなら雰囲気はもう少し悪くなつたであろうが…今は自分とたちだけなのだ。

別段、腹を立てる内容だつたわけでもないのに、少し話題を変えてみる。

「そんなお忙しい中、ここまでのを創ってもらえたなんて嬉しいですよ…でもこれ、たちさんの方が使いたいんじゃないやありません？」

少し意地の悪い質問かな？とも思うが、ちよつとくらい今の雰囲気はどうにかしたかった。

「いえ、自分の装備、「コンプライアンス・ウイズ・ロー」は全身鎧扱いですからね、腰ベルトの装備箇所なんて確保できませんから、ベリバーさんが使つて下さい。」

明るく言う言葉にウソは無いようだ。

ユグドラシルでは表情の変化は作れないが、手や指の動きで今の心境を表すことは出来る。

拳を作つて親指を立てるたち・みーの仕草は、好意的な意識の顕れだ。

「あの時のことはたちさんのせいじゃないんですから、未だにそれを引きずつたりすることないんですが…、たちさんより、よっぽど「るし★ふぁー」さんに償ってもらいたいですよ、あの時のことはー。」

ちよつとだけ憤懣やるかたない雰囲気を出したベリバーにたち・みーからの返事が返される。

「それについては…本人から口止めされていたんですが、ここで言つて置きますね、決して彼にはこのこと言わないで欲しいんですが…彼もなんらかの装備を作つてるらしいですよ…あと、チョットした悪戯用のゴーレムとかも作成中らしいです。」

「え？あのるし★ふぁーさんが？その装備って悪戯とか仕掛けられてないですよね？」

いぶかし気な声で問う言葉に、たっちもしばし考えてから言葉に出していく。

「いや、そんなことは無いと思いますが…、あ、でも悪戯用のゴーレムには私達も製作に付き合わされちゃいましたね。」

「え?? まさか！ たっちさんが？」

るし★ふぁーとたっちの共同制作など初の事態なので、意表を突かれたベルリバーが素っ頓狂な声で反応してしまっていた。

「あ、私だけじゃありませんよ？ あまのまささんとかも特別監修で協力しているの…」

イヤな予感がしたベルリバーが不安な要素を思い浮かべ、それをたっちに問いかけた。

「まさか…ガルガンチュア並みかそれ以上の巨大なロボ調で、しかも合体変形とかなんかしませんよね？」

「ま…まままま、まさか！ そ…そんなこと…。 あ、ベルリバーさんはなんでそんなこと気になったんです？」

明らかに挙動のおかしくなったたっちの事はとりあえず深く追求しないこととして訊かれたことに応えることにした。

「たっちさんとあまのまささんがそろったら、とりあえずそっち方面を気にするでしょ？それにゴーレムクラフターのるし★ふぁーさんまでもが加わるんなら、「巨大ロボ」のジャンルは容易に行き着く結論じゃありません？」

腕を組みながら、たっち側の手で、人指し指をたっち・みーに向けてると、少ししたじろいだよな仕事をした後、「ここだけの話」ということでちよつとだけ聞かせてくれた。

曰く、以前戦隊もののコスチュームの製作をして集合写真を撮った「あの時」の遊びに「るし★ふぁー」は誘われなかったことに少し意趣返しをしたくなったらしく、製作を思い至ったらしい。

しかも、写真に映ったメンバーを仲間外れにして、それ以外のメン

バーにも声をかけるように共同開発を始めたらしいが、最初こそ「やめよう」と止めようとはしたらしいが、構想を聞いてるうちに作るだけ作りたくなってしまうた二人を巻き込んで、どんどんノリのいいメンバーが集まりだし、最後にはかなりの完成度になった為、たっちの主導の下、とある条件下でならそれが起動するようになる。という限定的な措置が取られたようだ。

たっち・みーからしてみれば、撮影の声はかかっていたが、仕事で都合がつかなくなったため、その日は参加できなかっただけで、一応声はかかっていたが、「写真に映っていない」という一点でたっち・みーに声をかけてきたるし★ふぁーに、敢えてそのことは伝えなかつたそう。

「だから、よほどじゃない限り、アレが動き出して騒ぎを起こすことはありませんよ」

「まあ…そういうことなら、その件はこの場だけの話としておきましよう」

ひとまず、その件はそれで終わりにしようと思つたベルリバーは当初の話をもう一度引つ張り出して、再度たっちに話し出した。

「それはそうと…このベルト、『強風地帯』だとかそういうエフェクトの存在するマップとかじゃないと恩恵に預かれないのは辛いですね。」

「それはそうなんです…その部分は私も譲れない要素でして…だからこそこの「風車のベルト」ってことで、許してください。」

「まあ…いいですけど…これで、モモンガさんの〈大顎の竜巻〉シャークスサイクロンだとかスキルの〈風斬〉だとかを吸い込んだりできればまだ使い勝手もいいんじゃないけど…」

何気なくそう呟いだベルリバーに、たっちからの言葉がまた帰ってくる。

「それはそうかもしれませんが、フレンドリイファイア同士の討ちの制限もありますから難しいでしょうね…かと言って敵からの攻撃を吸い込めるようなデータクリスタルなんて存在しませんし…」

「そこらへんは解っていますが…このベルトからレーザー砲とか撃つたり出来る仕様があれば面白かったかもしれないけど、攻撃に使えないのは残念ですね。」

答えが返ってくることを期待しての言葉では無かった眩きではあったが、たつちから衝撃的な言葉が帰って来た。

「攻撃ですか？ できなくはないですよ？」

「え??？」

いきなりなことにしばらくたつちの方を見たまま硬直してしまつたベルリバーの反応が少し面白かったのか、詳細について聞かせてくれた。

・溜め込んだ風の力を利用して、巨大な竜巻を作り出し、周囲の敵を薙ぎ払い、うち砕くほどの広範囲攻撃がそのベルトにはあるのとこの。

・一度、ソレを使うと、3時間の間、ベルトの機能は停止してしまい再起動まで時間がかかる。

・その技は、ベルトに内封される「26の秘密」の内の技の一つだという…。

一通り、立て板に水のような説明を聞いていたベルリバーはその情報を頭で反芻しながら、一つ、気になったことを聞いてみる。

「その能力って、なんて発声すれば効果を発動するんです？」

「ん？ …そうですね、いつそ『リバー・ツイントルネード』とでも名付けますか！」

「それって、思いつきり思い付きで今導き出したでしょ！ ひよっとして「風車のベルト」に込められてるんじゃないやなくて「元となった」物の情報じゃありませんか？」

「おお！さすがベルリバーさん！良く解かりましたね。」

「わかりますよ、3時間の再詠唱時間リキャストタイムはともかくとして、その間の冷却時間クールタイムは、さすがにユグドラシルのデータクリスタルでは再現不可能でしょ？」

「いやいや、わかりませんよ？まだ発見されてないだけで、どこかには存在するかもしれませんし」

「ワールドアイテムで運営に物申して、作ってもらって手段はあるかもしれませんが、それでも自分が入手できるかどうかはまた別問題じゃないですか？」

冷静に可能性を検討して導き出したベルリバーの言葉に反応して、たつちも驚いたような声音でその言葉に答える。

「いいですね！今から『五行相克』でも探しに行きますか？」

「やめてくださいよ。私だってしばらくはイン出来なくなるかもしれないんですから、変なイベント発生させないでください。」

少しの間、お互いに笑い合うかのような時間が過ぎた後、僅かな静寂が訪れ、どちらからともなく言葉が飛び出してくる。

「また、いつか会えるといいですね」

「ええ、きつと」

そして別れ際、たつちからベルリバーに最後となる言葉が投げかけられた。

「今度会った時には、絶対にそのベルト、返してくださいね！」

そう言っつて、たつちが手を振りログアウトして行った空間に向けて、ベルリバーも届くことのない言葉を返していた。

「ええ…いつか…きつと…」

お互いに、もう恐らくは会話を交わす機会などそうそう無いことに気付いているだろう中、「次があるなら…」という希望をつないでおきたい面もあったのだろう2人の言葉が風にさらわれて流されて行くのだった。

そして、意識を現実へと戻したベルはこう思っていた。

(使える情報がほとんどなかった!!)

しかし、確定している技の一つは思い出せたが…

恐らくたつち・ミーがテキストベースに詳細な設定をこれでもかと、文字数の許す限り詰め込んだのは想像に難くない、ならばこつちの世界でなら発動もするかもしれないが、デメリツトの方も反映してしまうだろう…

それならいきなりそれを使うことは最悪な展開になりそうな気がする。

そう思案していると、目の前にコキュートスが迫って来ていた。

「戦場ニオイテ、相手カラ意識ヲソラスナド、自殺行為ダト教エテオコウ！」

大きく上に振りかぶった武器に纏う「ヘイザーエツジ」の光。

それが振り下ろされるかと思つた瞬間、コキュートスの刀の側面に、湾曲した薄い鉄板の様な物が接触し、軌道がずらされ、辛うじてベルの肩を掠める程度に収まったが、掠めてはいたはずなのに傷がどこにもない。

意識を自分の中に向けているようにすると、自分の中に何か刻まれるような違和感があつた。

それは自分のスキル〈捕食〉の効果。

なにかを胃の中に入れ、「消化」「捕獲」のどちらかを選択した際、胃の中の存在は意識を手放す事になる、どちらにしる意識を保つては居られない。

しかし、『「消化」or「捕獲」?』の選択ウィンドウのような何かがある中に発生している状態で放置していると、胃の中に居る存在は意識を手放さずに、過ごすことが出来る。

ちようど、そのような感じで、自身の意識の中で何かが新しく刻まれているのがわかる。

そこに深く意識をむけると

「特殊強化筋肉発動中 — マシガン銃弾すら弾く特殊合成繊維製の筋肉。」

「特殊スプリング筋肉発動中 — 肩部のあらゆる衝撃を吸収する特殊筋肉で強度は特殊強化筋肉の10倍。」

「エナージ・コンバータ発動中 — 2つのスクリユーから吸い込ん



だ風力エネルギーの貯蔵装置。左右それぞれで2基分の性能を持つ。」

(そういうこと?なら残す秘密はあと…22か…メモでもした方がいいのかな?)

などと一瞬だけ意識を逸らせた刹那、コキユートスも別のことに意識を向けていた。

(コノ浮遊スル板ハ…シヤルティアトノ時モ使ワレテイタ物ダナ…)

「1対1ノ果シ合イノ最中、女子供トハ言エ、割ツテ入ルナド、無粋!!  
ピアーシング・アイシクル  
〈穿つ 氷弾〉」

コキユートスの突き出した手から、氷で固められた氷弾、その先端には鋭利に尖った塊がいくつも出現し、アルシエに向かい、撃ち出される。

アルシエの身に着けた装備はイミーナから譲渡され、装備し直した際に、浮遊盾に負ったダメージ、貫かれた穴などは修復された状態となっていた。

その為、耐久値も戻っているはずのだが、一枚の浮遊盾、それを4つ折りにした状態で防いでいても、その厚みさえ易々と貫通した氷弾が、勢いすら落とすことなく彼女を刺し貫くべく飛来する。

自分がそれに貫かれ、絶命する想像を視野に入れながら、身を硬くしている、目の前に黒い影が立ちはだかり、すぐ目の前でその氷弾が霧散し、消滅した。

「フレイラさん…」

「この者に危害を及ぼそうとするのなら、私の全力で以って防がせていただきます! 決して足手まといになどなりませんので、お気の済むまま、お臨み下さい!」

その声はアルシエに向けたものでは無いだろうということは理解してくれていたようだ。

そうフレイラには感じられた。

その言葉を向けられた本人にもそれは解っていて欲しいとも心で望んでいる。

きつと伝わっただろう。

その言葉に導かれるように、彼女らにとって一筋の希望がコキュートスの背へ予想外の衝撃として突き刺さる。

それは決して油断していた訳ではなく、いくつもあるコキュートスの眼により、油断なく周囲を伺って居てもなお、対処しきれぬ速度となつて追突を許してしまつていた。



「1対1ノ果シ合イノ最中<sup>サナカ</sup>、女子供トハ言エ、割ツテ入ルナド、無料!!」ベルを目の前にしたまま、コキュートスは少し体勢を半身にするようにして体の片側のみを目の前のベルに向け、油断なく断頭牙を突き付けている。

そして、残る半身で見据えているのは後方に位置しているアルシエ。

コキュートスには2つどころか複数の眼があるが、どちらも片側ずつ両方向を見据えように立ち、武器を持つていない手をアルシエに対して向けた。

(まずいー)

ベルは自らの失態を悔いた。

わずかに意識を逸らしてしまったために、自分をかばおうとしてくれた相手を窮地に追い込んでしまったためだ。

しかし、一応フレイラを護衛に残しているとはいえ、彼女に持たせているのは「骨竜<sup>スケリトル・コア</sup>の核石」というドロップアイテムから創り出したアクセサリ。

バングル状にしてあり、両手首に装備すれば第6位階までの魔法、自らに不利益を与えようとする効果のみを消失、無効化させるもの。

ベルはコキュートスの氷系の魔法で、好んで使われるのは第6、第7位階あたりだったように記憶していた。

(とは言え、それもプレイヤーVSノンプレイヤーでの攻防戦に於いて…だったから、自意識を持った今の状態ではどうなるかまでは何とも言えないけど…)

しかし、のんびり考えてる暇はない。

こちらへの意識を逸らさずにいるならば、少しでも自分が動かなければ下手をすればフレイラごと、アルシエちゃんも串刺しにされてしまいかねない。

そう判断を下し、ベルが足へと力を込める。

体を屈ませ、コキユートス相手に突進を見舞うべく一気に踏み出そうとした瞬間にソレは起こった。

目の前が灰色一色に染まる。

まるで時間停止が起きたかのような光景にも構うことなく、つま先に力を入れ、さらに踏み込みを強くさせると、再び先程のアナウンスが脳内に響いてきた。

“条件が満たされました。”

相手への攻撃の意思表示により、以下の攻撃手段が選択できます。

“

そう告げられると、脳内にいくつもの選択肢が流れていく。

正直、どうでもいいという心境だ。

どんな手段でもいいから今、コキユートスを止められなければ二人も傷つけることになる。

そう言う焦りも手伝い、灰色一色の世界で高らかに叫ぶ。

「なんでもいいから、一番最初のだ!!早く!」

そう叫ぶなり、脳内に響いていた声はその叫びを受け入れた。

“選択を受け付けました。”

選択肢1、26の秘密の一つ、ドリルアタックを遂行します”

その声が終わった瞬間に、自分の身体が吹き飛んだかと思うような勢いで踏み込みが成され、コキユートスに肩で体当たりしようとしていた自分の視界が歪み、世界が回る。

自身に何が起きたのか一瞬わからなかったが、どうやら体全体が肩の部分を中心として、技(?)の名称通り、ドリル回転を始めたよう

だ。

いきなりの速度上昇効果による突進により、断頭牙を向けていたコキユートスも、きりもみ回転をし続ける対象に武器攻撃で当てようとしても回転で反らされると判断したのか、それとも今までの速度とは段違いの射出から生み出された体当たりにより、予測していた以上の威力を感じたのか…、背中にある氷柱のような部分を犠牲にすることで、ドリルアタックを一番硬い部分で受け止め、最小限のダメージに抑えていた。

（う…まだ少し目が回る…だが、衝突する寸前、フレイラから何か声がかかっていた気がするが、それどころじゃなかったな…それに脚力がケタ違いに上がってる。今までの感覚で居ると全体のバランスが乱れすぎな気がする…自分で調整するか…）

ベルもコキユートスも、お互いに崩された体勢を起こしながら、再び目の前に居る相手に意識を向ける。

「戦場に於いて、相手から意識を逸らすなど、自殺行為…じゃなかったか？コキユートス？」

「ムウ…タシカニソレは先程、コチラガ忠告シタ言葉デアツタナ…シカシ、意識ヲソラシテハイナカツタツモリダガ…アノ2人ハ、ソナニ大事ナ存在カ？」

コキユートスに問われ、僅かの逡巡も無くベルの返事が響く。

「論じるまでもありませんね」

「ワカランナ…アノ者ハ、ドチラカトイエバ、コチラ側ニ近イト感じテイルノダガ…気付イテナイ訳デアアルマイ？」

（それは多分アルシエちゃんのことじゃなくフレイラの事だろうな…やはり同じ拠点で生まれたNPC同士…相通じる何かを感じているとしても不思議ではない…か…）

「フレイラのことか？ ああ…もちろん承知の上だ…だが、それがどうした？種族が違ったら仲間になってはいけないのか？住む世界が違ったら、敵対せねばならないのか？ 信頼を培い、絆を深めてはいけないとも言うつもりか？お前はどうか？コキユートス！ 自分とは別の種族とは分かり合えんとでも思っているか？」

（確か、コキユートスはリザードマン達を統治し、繁栄させる任を請け負ってると聞いてるしな…そこまで狭量では無いだろうが、まだ今の段階ではネタばらしは早い、まだもう少し隠させてもらおうぞ）

「我々ハ、人間ドモニ攻メ込マレタコトガアル…：コノ墳墓ニイル者ラノ殆ドハ人間ニ良イ印象ハ持チ合ワセヌノガ大半ダ…：分カリ合エント断言スルツモリハナイガ…：手放シテ受ケ入レラレル程、我等ガ抱エル人間ヘノ感情ハ易々ト消セルモノデモナイ。」

「そうですね、こっちも他の奴らみたいに『あの程度のくだらないクラス』を入手する為だけに目の色変えたようになって異形種狩りに没頭したり、数にものを言わせれば勝てる！とでも言いたげに、1500人もいれば陥落させられるだろうなんて思い込んで、無策でつつ込んで来るおめでたい連中と同列に見られるのは遺憾ですね…：ハツキリ言つてあんな連中、返り討ちにしてくれて溜飲が下がる想いだつたのは本心でしたよ。」

「ホオ…：人間種ニ肩入レシテイル訳デハ無イトイウコトカ？」

「当たり前ですよ、揃いも揃って、バカみたいに「異形種狩り」だの「ポイントゲット！」だのと浮かれて他人を犠牲にして…：中級者にもなっていない者らを虐げている事に快感を覚え、あまつさえ自分達が狩られる立場になった瞬間、命乞いや、恨み言を言い始め、自分らが今までしてきた行いを同様に返される可能性にすら気づこうとしていない連中になんて『仲間意識』のようなものを抱けると思うのです？

私はただただ胸糞悪いだけでしたね。」

「ナラバ、オ前ハ『アノクラス』ヲ所有シテイナイト…：ソウイウコトカ？」

「ええ…：多少異形種に対した際のステータスアップと、異形種特効のスキルをいくつか覚えられる程度のクラスでは興味などありはしませんでしたね…：次元断切はおろか現断並の攻撃力すら発揮できない程度、しかも攻撃以外では索敵や、感知に多少のボーナスが入るとは言え…：完全不可知化や、課金アイテムでの気配消しなどさえあればごまかせる程度の性能…：その程度じゃわざわざクラスレベル分の数字を潰してまで身につける意味など見いだせなかつたのですよ。」

レア度で言うならば余程、コキュートス、あなたの『ナイト・オブ・ニヴルヘイム』の前提職『ブリザード・ナイト』の方が耐性の上でも、破壊力の点でもクラスとしての格でもずっと上だったという事実からして…推して知るべし…だと思いませんか？ ヤツラはただ物珍しさに踊らされた愚者なだけでしたよ。」

「ナラバ、才前ナラソノ技ニ匹敵スル攻撃手段ガアルト？」

「匹敵するかどうかは何とも言えませんが…、とりあえずお目に掛けることは出来るかもしれませんね。」

「ホオ…ソレモ先程言ツテイタ『邪道』ナ戦イ方ノ一端トイウコトカ：ナラバ見セテモラオウカ!!」

「あまり期待されすぎても、お眼鏡にかなわなかった時、落胆させるのも申し訳ない気はしますので、あまり過度な期待はしないで下さいね」

（あんまり大見得切つといて予想が外れた時、かなり恥ずかしいからな…ハードルを上げ過ぎないようにしておこう）

そうして、ベルは初めての試みをこの場で披露する決心をした。

武技！〈阿修羅〉

（すまないな、コキュートス…お前の持つクラスの名前、少し借りる。ついに自分では取得できなかった憧れのクラスだ…せめて武技としての名前で使うくらいは許してくれ…）

ベルがその武技の名前を叫ぶと、脇の下からもう一对の両腕が突如出現した。

実を言うと、ベルリバーは新しい武技を習得などしていない。

エルヤーを捕食し、消化した際に身に着いた技ならば問題ないが、それ以外の武技を覚えた訳では無い、本来のアバターの姿、そのうちの一部、4本腕を披露するための苦肉の策である。

（さあ、これで腕は4本、本数だけなら互角になったが…装備の方が問題だな…）

現状、ベル自身が装備している武器は2本、しかし、その内の1本はすでに刀身が折られてしまっている。

しかし、彼には試してみたいことが残っていた。

（あの時の反応：そして「あまのまひとつ」さんが残した武器の名前、その想い入れから察するに「ブレード」という部分は譲れない一点だったのは明白：ならば、それに最初に反応を示したあの単語を結び付ければ：なにか起こるのかもしれない！）

そう判断したベル自身が、生み出したばかりの腕で、持ち手だけが残された『あまのまブレード』を持ち、少しだけ腰を落とす。

さらにその折れた刀身に4本目の腕を添え、頭の中に構築させた単語を発するとともに、添えた手を失われた剣の刃を再現するように滑らせて言った。

「レイザーブレード！」

すると、先程まで折られていた剣が今ひとつたび再現され、煌々と輝き、眩いばかりの剣が生み出されていた。

（やはりそうだったか：しかし該当するデータクリスタルも見当たらないし：これもこっちの世界に来た時の変化と判断するしかないか：どうせ、あの人の事だから「そう声に出すことで真の姿が現れ、あらゆる物をも切り裂くのも可能な光の剣となる。」とでも書いたのではなからうか：？）

審判であるナインズからの『注意』は出ていない。

装備の変更ではなく、内に秘められた性能を引き出しただけなのでから、ルールのにも最初に決めた通り、特別ペナルティとは見做されなかったのだろう。

そして、その『レイザーブレード』の持ち手を変え、上の方の腕に持ち替え、下の方の両腕は再びフリーとなる。

「さて、コキュートスよ、後出しですまないが、私本来のスタイルで戦わせてもらおうとしよう：かつての最強であった装備には及ばないが：その頃に近づけるよう悪あがきをさせてもらおう、お前さえ了承してくれるのであれば：だがな。」

審判と、コキュートス双方に事前に申告するという手に出たベルに、両方から了承が出て、先を促される。

しかし審判からは「追加の装備を別途で出現させるなら、「注意」になるぞ？」

と言われたので、そこはどうやら審判としての役割を徹底するらしい。

(ん〜…まあ、コキュートスとは堂々と裏工作なしで戦いたかった部分はあったんだけど、実際の戦闘経験の差は大きいな、日々の鍛錬も欠かしてなさそうな動きだし…、しかしさすがに武器が2本の相手に対し、4本で挑むというのも必死過ぎだろう？って気がするんだよな…まあ、武器じゃなくても杖の効果を腹の中から行使することは出来るから、それでなんとか喰らい付くか…)

なんてことを考えていると、思考が伝わってしまったのか、セピアとルチルの声が腹の中から脳内に響く。

「やっと出番って感じですね♪」

「ここちは森祭司<sup>ドレイド</sup>関連の魔法を何回か使ってるので、ベルさんの強化を手伝って3段階目の効果も杖から出ますよ、いつでも行けます。」(強化の方はありがたいけど、「風車のベルト」が神器級<sup>ゴッス</sup>だから、それ以下のランク魔法とかじゃ、多分効果は打ち消されてる可能性はあるけど…まあそれは言わない方が華…だな。)

『ああ、ありがとう、それじゃいつでも準備しててくれ、ルチルにディーネは回復の方に専念していてくれると助かる』

腹の中に居るエルフ3名に向けてそう伝え、もう1人の同居者にも念のため声をかける。

『ここまでお力添え感謝します、老公…ずいぶん無理をさせてしまいました、しばらく休んでいてください、ここからは自分でなんとかします。』

『おお…そりやねかってもないことしや…かなり無理をしたのでな…精神力かけんかいなんしやよ…』

『今までのご助力感謝します、ようやく私の望む形に届きましたので、あとは他の3人に任せてご休息を。』

『そう…させて、もらうとしよう…か、の…』

そこで会話が途切れた。

どうやら相当ムリをしてくれていたらしい、命を助けたのは確かだが、他のメンバーは助けられなかった自分の為に、そこまでして報い



てくれたことに内心で感謝をし、「いずれ、何かの形でその借りはお返しします。」と腹の中へと念を送った。



時は少し遡り、フレイラがコキユートスの<sup>ピアッシング・アイシクル</sup>へ穿つ氷弾を防いだ直後のこと。

「アルシエさん、ベルさ…んの心配をされるお気持ちは私にもわかりませんが、不用意な行動を無断でされては困ります、私が間に合わなければどうしていたのですか！」

フレイラから叱咤の声が飛ぶ。

「ごめん、危なそうに思ったからつい…気を付ける。」

「いけません、貴女のことにはベルさんから特に身の安全を…と頼まれています、その貴女に傷を負わせるような要因は一切看過出来ません！ 自重を頼みます。」

フレイラもそこを譲るつもりはなかった。

「気を付ける」程度ではいつまた同様のことをしでかすかわからないからだ。

「どうしても？」

「どうしても！です！」

自分の言ってることは御方の意思、創造主の意向、どちらにも沿っている。

ならば従わないという選択肢は存在しないフレイラにはどちらにしてもアルシエを危険にさらすつもりはなかった。

自分ならば、まだHPの残量がある限り、どんなダメージを負っても命を落とすことは無いだろう。

だがアルシエは別だ。

こちらの世界での一般的な「人間」

ユグドラシルの「人間種」ではないのだ。

同列に扱ってはアツという間に命を落としてかねない儂い命、ならばこそ少しの傷も許されないのだ。

「わかった…これから絶対には絶対に不用意な行動をすることは無い…それは約束する。」

「本当ですね？　ベルさんの身を案じてくれる貴女のお気持ちは私にもわかってますし、ありがたいとは思っています、ですがそれで貴女自身の命が失われては、悲しむ人が少なくとも6人はいるということを忘れないでください、貴女にはそれだけ大切な人が居て…そして大切にされている当人だという自覚もちゃんとお持ちください。私から言えることはそれだけです。」

言われた言葉に無意識に色々な親しい友人、知人、身内の顔が浮かんで消えていく。

「わかった。　…ならあと一つだけ…最後に私からの我儘を聞いてほしい。」

「…なんででしょう？」

フレイラが続きを促す、聞かずに勝手に行動されるより、聞いていた方がいい気がした。

幸いにも前方のコキュートスにも、己の創造主にも戦闘の気配は無い。

なにやら会話をしているようだ。

まだ多少の時間の猶予はあるだろう。

「あと一度、あと一度だけあの戦いの中に浮遊盾を割り込ませることを許してほしい。」

アルシエが真剣な瞳でフレイラにしがみつこうにすがりついていた。

「わかってますか？　あの蟲の方の攻撃がその身をかするだけでも貴女の身は消し飛んでしまいかねないのですよ？」

敢えて、強い口調で問い詰めた、まだ現実が分かってないのだろうか？　と思っただからだ。

だが、それは杞憂で終わった、アルシエ自身もそれは理解していたから、それ以上は言い分を押し通すような言葉を続けることは無く

なっていた。

「それは充分にわかっている、だから、フレイラさんが見て「あれは危険」と思うようなことがあったらすぐ言って欲しい、もし私の考えていることがうまくいけば、そのピンチがベルさんの身に降りかかることを無くせるかもしれないから…。」

真剣な目がお互いを見据え、どちらもその視線を外すようなこともなくしばしの時間が過ぎた。

「わかりました、どのような手段かはもうイメージ出来てらっしゃるようですね…なにをするつもりかはわかりませんが、根拠のない自信を持たれる方では無いことはわかっています。」

先に視線を外したのはフレイラ。

そして次に視線を伏せたのがアルシエだ。

「感謝する、これをしたら、きつと二度目は向こうも許してはくれないと思う、さつきとは違う攻撃で私を仕留めようとするかもしれない…その時は…申し訳ないけど、お願いしても…いい?」

フレイラに身の安全を頼むような言い方だが、頼まれなくても至高の二人にも頼まれているのだ。

彼女を護ることに依存などであろうはずがなかった。

「わかりました。この身がどうなろうと…手足の2〜3本が吹き飛ばすことになろうと…アルシエさんには傷1つ付けさせはしません!」

「ありがとう…この恩はきつと忘れない。」

その言葉にフレイラは何の答えも返さなかった。

すでにその時には意識を切り替え、己の創造主の方へと注意を向けていたからだ。

そして、その時、創造主から聞こえた言葉が辛うじて人獣種<sup>ライカンスロップ</sup>である自分の耳に届いた。

「さて…と、それではそろそろウォーミングアップは終わりの頃合いかい? コキユートス…。」

第61話 次鋒2 コキュートス VS ベル (後編)

「さて…と、それではそろそろウォーミングアップは終わりの頃合いかい？コキュートス…。」

今までとは違い、ベルと名乗るベルリバーが4本の腕を使い、感触を確かめるようにしながらコキュートスに声をかけた。

「ホオ…ソチラカラソウ問イカケタト言ウ事ハ…ソロソロコチラモノツモリデ臨ンデモ良イト…ソウ受け止メテ構ワナイノカ？」

少しだけが先ほどより声に弾みが出てきている。

コキュートス自身もそう出来たら…と言う心が無かった訳ではないが、望もうと叶わぬ現実もあると言う事実を受け止めることも必要か…と思っていた矢先に、急速な実力の向上を果たした者が今、目の前にいる…「その現実」に喜びの震えが沸き起こっていた。

自分の力を引き出してくれる相手が侵入してくる日は来ぬものか…と頭をかすめる日が無かったと言えば嘘になるもの、それを口にしては敬愛する至高なる御方々、それに自らを創造してくれた主や、今もなお君臨し、我らを導いてくださっているアインズ様にも失礼になると思い直したりもしていたのだが…

「フッフ…デハ少シダケダガ…ドレホド出来ルヨウニマデ上リ詰メタカ…見サセテモラウトシヨウ！」

コキュートスはそう言うなり、振り上げる仕草もかすんで見える程の速度で断頭牙を振りぬき、ズン！という音を響かせるように地面に突き立たせていた。

そしてそれは、先ほどまでベルが立っていた位置。

攻撃されたベル自身もまた、負けない速度で回避行動、〈縮地・改〉を用いて体の位置を立ったまま身動き一つすることなく横にスライドさせていた。

「フム…先程マデトハマルデ別人ノヨウナ動キダナ…ソレナラバ今マデヨリズツト楽シメソウダ！」

「お気に召していただけただけようで幸いです…ですが、ここまでにさせていたただいた以上、こちらとしても欲が出てしまいましたね…貴方の親父様には遂に一度も勝つことが叶わなかった身、せめて息子である貴方に勝つことで、彼への返礼とさせていただけましょう。」

今しがた、復活したばかりのレイザーブレードの切っ先をコキユートスに突きつけ、宣言をした。

それもわざと「親父様」という言葉を付け足すことでそのあとの反応も確かめてみるという意味も含めている、そしてその反応はコキユートスにとっては劇薬の如く、即座に現れることとなる。

「ナー…ナゼ！オ前ガソノ御方ノ事ヲ知ツテイル！オ前ハ本当ニ至高ナル御方々ノ『補欠』的ナ立場デアツタト言ウコトカ!!」

（補欠？…ああ、そういうえばそんな制度を作ろうって申し入れたことあつたな、運よく賛成派が多かったから採用されたけど、あの『補欠制度』が無かつたらギルド内の機密を外に漏洩するのを防げたかわからなかつたよな…。）

「そういうえばそんなこともあつたっけ」という懐かしい思い出に僅かな間ひたりながらも思考は止めることなく口を開く。

「ふ…まさか貴方からそのような言葉を問いかけられるとは…ですが敢えて言わせてもらいましょう、言葉での語らいにどれほどの意味があると思いますか？何ををもってそれを真実と受け止めます？「それ」をどう受け止め、何を信じるか…それは貴方次第ではないでしょうか？コキユートス」

「ソウカ…言葉デノ申シ開キナドタダノ無粋…ソウ言ウコトカ…ナラバ甘ンジテソノ言葉…受けテ立ツトシヨウ！」

コキユートスはゆっくりと腰を落とし、上体を前かがみにさせ、己の武器を体の側面に位置させる。

見て解るように「溜め」を作っているようだ。

（あの構えは…たしか。）

「モハヤ、ソコマデニナツタオ前ノ実力ヲ侮リ、中途半端ナ攻撃手段デ

応ジテハ対峙シテイル相手ニモ武人トシテノ『礼』ヲ失スル。 ……デ  
アルナラバ、コノ技<sup>テ</sup>応エルシカアルマイ！」

次第にコキュートスの身体に纏う鬨気のような空気が濃密なもの  
となり、まるで可視化されたような風にも見えていく。

そして、コキュートスから発せられている冷気と鬨気が交じり合っ  
たような独特な『気』が一定に圧縮されたかと思うと、背中にゆらり  
と…剣に炎をまとわせた憤怒の化身が現れる。

（まずい！ ……さすがにあれは何かで対処しないと、体一つで受け止  
めるにはダメージがでかすぎる！）

ベルリバーとしての経験で、それが何の技かを察した瞬間に、行動  
を移す。

自分の手持ちの技で対処するには「回数制限」のある技で対応する  
しかないが、それでもこの技をしのぎ切れるか？と言われれば、正直  
『どうだろう？』という懸念が無いわけではない。

ならば、確実に同じ火力、同じ威力で相殺できるくらいの『何か』で  
対応するのが何より理想的。

（それなら、今更、迷う必要などあるまい…ならば、少しでも力を蓄え  
させてやらないと…だな。）

コキュートスが気を溜めている今しか手段を講じる時間はない、と  
ばかりに、最初の一手を投じる。

「連鎖<sup>チェイン・ライトニング</sup>の雷撃」

第6位階に相当する魔力系魔法であり、第7位階魔法  
「連鎖<sup>チェイン・ドラゴンライトニング</sup>する龍雷」の威力をさらに上げる為にはとっておいた方が無  
難と言われていた魔法を、己の鎧の胸部に埋め込まれた精霊石に吸い  
込ませ、雷撃系の力を少しでも多く蓄えさせた。

すさまじい吸引力で幾数本もの雷撃が天空から降り注ぎ、唸りをあ  
げるような轟音を響かせる落雷が、目に見える勢いで吸い込まれてい  
く。

そして消えた瞬間、次の行動に移した。

「出でよ雷精！契約に従い、お前の力を全てこの身に宿らせ、わが力と  
なれ！」

そう言葉に出した瞬間、胸部に埋め込まれた精霊石が煌々と輝き、同時に頭上に蒼き体、その身の周囲にバチバチと弾ける雷撃を纏わせ、全身に「稲妻」を表すギザギザのマークがデザインとして刻まれている存在が現れ、ベルの首の後ろから吸い込ませるようにその身を同一のものとさせていった。

『わが身、わが力、かつての契約に従い、御身の刃、御身の盾、御身の力と成りて応えん！』

その力が、自らの身に宿ったと確信したと同時に、最大で、最強の技の名を宣言し、体現せよと意識で声をかける。

「超力！ 招来！！」

（とりあえず、『超力モード』には入れたが：ユグドラシルでの5ターンというのは、こっちではどのくらいの時間なんだかな：「あの修行場」での異空間ではユグドラシルに即したターン制の戦闘だったから判断が楽だったんだけど、こっちでは多分、一定時間過ぎたら消えるのだろうか：問題はその時間が来たら即座に消えるのか、それとも前兆があるのか：その違いだけでもあるのとないのとは雲泥の差がある。）

体に冷氣と闘気を纏わせるコキユートスと対照的に、全身に電流を纏わせるような状態となったベルが互いに対峙し、両者ほぼ同時に蓄えていた力を一気に開放した。

アチャラナータ・くりからけん  
〈不動明王撃！ 俱利伽羅剣！〉

アチャラナータ・くりからけん  
〈不動明王撃！ 俱利伽羅剣！〉



離れた場所から見ていたフレイラが危険を察知した。

それは過去の体験からではない、所謂「ケモノの勘」とでも言うべき、根拠は無いが、確信はある。そういう類いのモノだ。

両者とも同じ姿勢から、鏡写しで体現したかのような全く同時の奥義の準備態勢。

それを見たフレイラがアルシエに告げた。

「アルシエさん、あれは危険です、あれこそ、防がなければならない脅威です。」

「わかった。」

発したフレイラも、アルシエも決死の覚悟である。

ついさつき、ちよつかいをかけただけで死にかけたのだ、互いに死力を尽くして戦おうとしている二人に割って入ろうものならどうなるか…その結果は想像に難くない。

（さつきはギリギリ第6位階魔法だったから打ち消せはしましたが…、今度はきつと一段上の位階魔法で攻撃してくるはず…そうなればわが身を盾にしても…）

そう決意したフレイラが、アルシエの操る浮遊盾に〈不可視化〉をかける。

〈透明化〉で無く、〈不可視化〉にしたのは理由がある。

〈透明化〉は透明になるだけで実体が消えるわけではない為、周囲に光源でもあれば、影が発生してしまう。

それに対して〈不可視化〉は、そもそも実体があるが無かろうが、影が出ようが出まいが『不可視』、つまり見えなくさせるための魔法であるため、こっちの方が遥かに使い勝手は良いからという理由だ。

これで、課金アイテムや装備品の効果で視力強化をしていない限り、見破られることはないだろう、と考えての方法だ。

そのままのコキユートスの「視界の広さ」は甘く見ていいものではないことは、生み出された際に予め意識の中に書き込まれていた「常識」の範囲内で理解できていたせいもある。

「ありがとう…。」

短くアルシエが礼を告げると、見えない状態の浮遊盾が数枚飛んでいく。

一枚はコキユートスの〈ピアッシング・アイシクル穿つ氷弾〉で穴を開けられ、復帰は難しい。

残された3枚でやりくりするしかない。



見えない状態ではあるが、イメージで盾の形を変えていく。  
そしてわずかなら、寸法や大きさも変化させることができる為、コキュートスにしようとしている手段に即した大きさへと調整をしな  
がらどんだん距離を詰めていく。

(お願い！ 間に合って！)

焦る気持ちを抑えながら、確実に防げるような手段になるように、  
失敗の許されない「横やり」を構築していった。



〈超力招来〉の発動と共にその身に起こった感覚。

本来は雷精は敵キャラであり、特殊な条件を満たすことでNPCとして作ることでも可能だったという話は聞くが、プレイヤーとしての種族で使えたという情報はついぞ聞くとは無かったため、『精霊として身に宿す』という手段ができるということ初めて雷精から聞かされた際は驚いた、だが実際にそうしてみるとパッチを当てられ、修正された状態での【通称：超力モード】ではあったが、力押しで来る相手には特に有効だった。

レベルが36という低レベルの雷精であるにも関わらず、敵からの攻撃をカウンターで返す際の攻撃力は相手によって変動する仕様は健在だった。

そのため、こういう時の為にこの手段を温存していたのだ。

そして今、火が吹いた『不動明王撃』は、互いにぶつかり合い、お互いを相殺し合うかのように見えた。

しかし、そこでコキュートスに変化が表れる。

構えの姿勢から攻撃に転じる際、腕の関節、腱を伸ばそうとした瞬間、まるで伸縮が不可能なように固められたかのような状態になり、充分な勢いで振りぬくことが「途中から」できなくなっていたのだ。

「ナンダー！コレハ！ コノヨウナコト、今マデ起キタコトナド!!」

瞬間的に何が起きたか理解できないものの、それでもクラススキルにより、一瞬だがある程度のダメージを減少させる効果を発動させる。

一日に2回しか使えない強力なスキルだが、使いどころは見極めなければならぬ。

相手も『不動明王撃』を使ったことは予想外であったが、それでも多少の攻撃力の違いはあってもどちらも直撃するようなことになれば、ダメージを受けることは免れない。

そう、それが例え、伝説級クラス相当の守備力にまで上げた自分の甲殻装甲であつても……だ。

不十分な勢いのままでも、不発よりは出した方がいいと判断したコキュートスは、そのまま『利伽羅剣』を振って撃ち出した。

十分に勢いが乗って襲ってくる『不動明王撃』と、不十分なままで撃ち出された『不動明王撃』では必然的に勢いが乗った状態での『不動明王撃』の方に軍配は上がる。

コキュートスの攻撃を飲み込み、打ち消し合った結果、残された余波の明王撃がコキュートスを襲う。

「ヌオオオ!!!」

とつさに腕を出し、防御の姿勢を取る。

ともすれば、腕の一本くらいは覚悟するしかないか。そうも考えていた。

しかし、腕は落とされることは無く、その代わり、重い音が腕から外れ、ゴトンと見えない何かが地面に落下したような音がした。

コキュートスにももちろんダメージは発生しているが、それよりも今はダメージよりも正体不明の音の正体だ……とばかりにその音がした辺りを踏みつけた。

コキュートスの体重を乗せた踏みつけ……。

ベキリ!という音を立てて、その役目を終えた板状のなにかが、見えない状態から見える状態へと移り、コキュートスの目にも映りこんだ。

それは、少し前に自分が〈ピアーシング・アイシクル氷弾〉で打ち抜いた板状の浮遊す

る装備と同じもの。

(コレガ、私ノ腕ノドコカニ影響ヲ及ボシタトデモ言ウノカ…)

それを操る者は遙か後方にいる。

その者へと目を向けると、武器を持っていない方の手を突き出して、その相手へと告げた。

「言ツタハズダナ…、戦イノ場ニ踏ミ込ムナラバ手ハ抜カナイト!!」

コキュートスが魔法の準備に入る。

しかし、その相手はベルではない。ベルの後ろの向こうに居る者に狙いを定めていた。

ベルは現在展開させている【超力モード】の待機で待ち受けている状態だ、そのため、コキュートスの挙動に何の反応も今は示せない。それに反応：『自発的な攻撃行動』に移ろうとすれば、それは【超力モード】の解除を意味する。

一度解除したら、「一定時間が過ぎるまで」再度展開することは不可能となる、コキュートスが本気で攻勢に出るようであれば、解除したことが命取りになりかねない。

(アルシエちゃんのこととはフレイラに任せてある、いざとなれば…仕方ないか、だがどうにもならないと見届けてからだ)

そう判断して「待ち」を維持することを選んだベルに対して、コキュートスは魔法を発動させる。

〈アイスレラー氷柱〉

コキュートスから第7位階の魔法の発動が成される。

フレイラは、狙われるのは自分ではなくアルシエの方だと確信していた為、すぐに振り向けた。

そうすると、アルシエの足の下に、巨大な氷柱の先端が地面から盛り上がるように急速に持ち上がってきている。

その勢いはわずかな迷いも許されず、地面からとがった先端が見えたと気づいた時にはアルシエの股下にまで届こうとしていた。

「アルシエさん!!」

思いきり地面を蹴った後、アルシエを突き飛ばす。

虚を突かれ、なぜ突き飛ばされたのかまだよくわかってない表情のアルシエを救えたことを悟ったフレイラが安堵の表情を浮かべたのも束の間、入れ替わるように「アルシエが居た場所」を刺し貫くように全体が姿を現した〈氷柱〉<sup>アイスピラー</sup>が、フレイラの右腕をもぎ取って行った…。

「う…うあああああ!!!」

失われてしまった右腕の、引きちぎれた傷口を左手でかばいながら、うずくまるフレイラ。

「あ、あああ、フレイラさん、フレイラさん!!」

心配してそばまで近づこうとするフレイラが残された左手を突き出し、アルシエの足を止めさせる。

フレイラが左手でとっさに取り出した、課金アイテム。

主人であるベルリバーが持たせてくれた3つの内の一つ、「第6位階までのあらゆる魔法を封じ込められる」効果のある「ガラスで出来たような見た目の三角錐」それをアルシエの足元に叩きつけ、粉々に砕け散らせる。

すると、砕けた破片が周囲に散りばめられ、それと同時に発動した魔法でアルシエが包み込まれると、周囲にドーム状の光が現れ、ドーム内に居る限り、あらゆる「魔素」を必要とする効果を拒絶する空間が形作られる。

『アンテイマナ・コクーン  
「魔素拒絶の繭」』

デメリットとして、時間経過による魔力の回復も妨げてしまうが、その反面、魔力が介在するあらゆる効果を打ち消すことのできる空間、「魔素」がゼロの場を作り出し、範囲内の者を「あらゆる魔法から」守ることができる。

しかし、〈魔法解体〉<sup>マジックデストラクション</sup>を繭の外から発動させて消したり、魔法の

転移で内部には入れなくても、境界ギリギリにまで転移は可能な為、転移後、歩いて（魔法で構成されてない実体なら）中に入ることができたり、範囲魔法の炎で周囲を囲み、範囲外に広がる炎熱であぶってダメージを与えることも、〈隕石落下〉メテオ・フォールのように召喚された物でも、維持に魔素を必要としない構成物が直接ぶつかりに来たり、爆裂系の魔法で吹き飛んできた破片などを防ぐ効果は無い。

しかし、今回のような〈氷柱〉アイスピラーならば、発生時に魔素は必要な為、地面から突き出る瞬間に氷を構成させる際の魔素を散らして、具現化させることを防ぐのは可能。

「しばらく…その中に居てください。〈穿つ氷弾〉ピアッシング・アイシクルなら私が居る限り、どうにかできるでしょう。」

しかし、それには致命的な欠点があることも、アルシエには気が付いていた。

「でも…それには『両腕』のどちらのバングルもそろってないと第6位階の魔法は打ち消せないはず、左腕だけだと第3位階まで！」

「それは、内情を知っているアルシエさんだから…持ち得ている知識です、それを知らなかったなら、さすがのコキュートさ…さんでも、うろうろ…防いだ私がここに居ればおいそれとは使えないはずです。」

「わかった、これ以上、もう迷惑はかけない、これ以上フレイラさんを傷つけさせるような真似はもう私にはできそうもない…。」

アルシエから見れば、フレイラは居るだけで実力の違いが判る相手であり、太刀打ちできそうもないと感じられる相手なのだ、そのフレイラを事も無げにここまでできる相手では、これ以上のちよつかいをかけたら、自分の身はおろか、フレイラさんにも迷惑がかかる、そう思うと、言われた通りにおとなしくしているしか手段はないと思いき知らされたのだ。

「何カノ手段ヲ講ジタカ…ナラバ私カラノ行動ハ、モハヤ通ジナイ…ソウ考エテオイタ方ガイイダロウナ。」

そうコキュートスが考えていると、後ろを振り向けないベルリバー

の横に、ボトリと上から落下してきた何かが、視界の隅で確認できた。横目でチラリと見ると…、一瞬、体が硬直した。

認めたくはない…だがそれは自分がいつも見慣れていたもの…自分の創り出したNPCの「右腕」

その肘から先が空高く舞い上げられ、今ベルリバーのすぐそばまで飛ばされてきたのだ。

フレイラ…の腕…右腕…うで…うで…うで…

頭の中でその情報だけが埋め尽くしていく。

そして、その情報が脳内に染みわたり、現実のものとして認識した瞬間、何かがぷつん…と静かに弾けて切れた。

「コキュートス…やってくれたようだな…」

それはどよんとしたような瞳、さらにはその奥に狂気にも似た仄暗い火種が徐々に燃え盛り始めていた。

「戦いの場二居ル以上、命ノ…」

「そんなことあ、どうだっていいんだよ！」

今までは打って変わったような口調の変化に一瞬、コキュートスの言葉が止まる。

「お前はなー！…この俺が苦心して作り上げた理想の形に傷をつけてくれたんだ！それを薄ら笑い浮かべて黙って見ていられるほど、こつちや人間出来てねえんだよ！」

今までの役割演技での「私」でも無く、素の口調の「ボク」でも無い

感情に任せたままの発言で、意識してのセリフでは無い為、彼自身も「俺」という一人称を使っている自覚は無いかもしれない。

それ程に、今彼の目に映ったこの光景は、彼にとって許しがたいものでしかなかった。

ベルリバーにとって「フレイラ」という女性はNPCという存在以上の「何か」であった。

ユグドラシル時代、起動を認可されることなく、「動くマネキン」状態のNPCとしてのフレイラの挙動すら見た事がない彼からすれば、

この世界に来て、ギルド長に「専用NPCの起動」を特別に許してもらえた後、現実として目の当たりにし、さらに会話もし、初めて接した「生きているNPC」としてのフレイラは、他のプレイヤー以上に強い情念を宿してしまう結果へとつながった。

それが今、抗いがたいほどの激情となり、御しきれない感情の奔流となつて爆発したのだ。

「才前ト話ヲシテ時折、不思議ニ思ツテイタコトダガ…才前ハ、彼女ノ事トナルト口調モソウダガ…内面ノ方モドウヤラ荒ブリヤスイヨウダナ。」

「ああ、そうさ！これは俺の個人的な事情だ！ 一方的な感情でお前を打ちのめす！」

「ホオ…才前ガ？私ヲ倒セルト？」

「ああ…今まではずっと自分の罪滅ぼしのつもりで相対してきたが…アイツの身体に傷を付け、苦しませる存在が目の前に現れたのなら、容赦はしない！」

そう言い、ベルと名を偽るベルリバーが〈武技〉の発動という名目で現したもう一対の両腕。

その「両手首」にはめていた、『途中で鎖の切れた枷』のようなモノを引き抜いて、中空に出来た暗闇の中へと仕舞う。

それと同時に、一気に今までのとは違う空気が表れ始め、コキュートスでさえ一瞬緊張が走るような感覚にとらわれた。

「コ…コレハ…」

「今までは下手に芝居して見抜かれたりしたら…武人としてのお前は「私ヲ侮ルカ！」とでも思つて憤りを覚えるだろうと思つたからな、自然と実力に差ができるアクセサリを隠して装備することで上手く演出をする必要があつたんだが…、しかしそれを気にする必要はなくなつた。」

ベルが務めて怒りを抑え込むことで、なるべく理性的に話を通じるように、そしてすでに沸点を迎えている感情を爆発させるための『溜め』を行いつつ、説明をしていた。

更に「超力モード」は、自主的に『攻撃行動』に移らなければ、途中で体勢を変えたとしても、効果は維持されている。

もしもその最中に相手からの攻撃があれば、即座に反撃ができるようになっていくというのは検証済みだった。

なので、ベルからはまだ自発的な攻撃行動はとっていない。

この会話も、攻撃行動ではない訳だから、解除もされていないので、効果時間は継続しているはずだ。

…ならば、と答えを導き出す。

「これで、わかったらどう？　今までの私とはまた一段階上に移ったことに…。」

そして「ジャリ」という音と共に、自らの足の位置をわずかに変え、今までと違う姿勢に移った。

「お前は『今の』俺の家族とも言える大事な者に傷をつけた！　ならばこれはその傷をつけてくれたお前への「復讐」と取ってなくても構わない！　あくまでこれからすることは俺の自己満足だ！」

そうコキュートスに光の剣を向け、告げると、上側の左腕は光の剣を持ち、コキュートス側に少しだけ斜めに傾けて構える。そして、上側の右腕には刀を持ち、いつでも攻撃に対応できる態勢に移った。

「今から30秒だ…その30秒の間はお前の好きなように攻撃するといい、スキルの攻撃でも何でも…どんな手を使ってでも打ち込んで来い！　すべて叩き落してお前に対する意趣返しとさせてもらおう！」

その時、ベルリバーの頭にピコン！と何かが反応した。

まだコキュートスからの本格的な攻撃行動は見受けられない。

ならばまだいいか…と自分の中の意識を覗き見る。

『『家族の為の復讐心』を確立しました、リンクされている発動条件の一つが解放されます。』

なんのことかはつきり言っていないベルリバーは、「まあいいか…」とだけ結論付け、全神経をコキュートスに向け直した。







お互いに同じ威力、同じ効果を放つ技を出し合えるなら、互いに【五  
大明王撃】を打ち出し合えば、その効果は相手に直接あらわれる、コ  
キユートスはカルマが「中立」に位置しているから、効果は出ない。  
その代わり、戦っている相手が「マイナス」に傾いているカルマで  
あれば、即座に効果が表れてしまう。

「なるほど、お前も戦いの中で経験を積み、最適な手段の模索を導き出  
せるようになってると言うことか…さぞや、この墳墓の支配者も鼻が  
高いだろうよ。」

しかし、ベルリバーの中の炎はまだ消えてはいない。

だがその瞬間、体の内側から湧き出ていた【超力 招来】の効果が  
失われていく感覚に気が付き始めた。

（やはり…この世界での戦闘では10秒程が1ターンに相当すると見  
ていいようだな）

その身に残心を残し、攻撃を終えた後でも油断なく構えを解かない  
コキユートスを相手に【超力 招来】がどれほどの心理的效果を上げ  
たか、それはこれからどう反応してくれるかにもよるが…せめて腕の  
1本くらいは切り飛ばさないと、気が済まない。

狂気の中に踏み込んだような意識の中、不意に空腹感を覚える。

自らの内側から「ハラガヘツタ…」「タバタイ…」「ナンデモイイカラ、  
クイタイ。」「タリナイ、モットホシイ」そんな声が訴えてきている気  
がする。

だが、今はそつちに意識を持って行かれるわけには行かない、最優  
先は同じ目に遭わせてやることだ。と意識を強く持ち、内側からの声  
を振り払う。

（コキユートスの弱点は炎系の攻撃…普段なら完全耐性でも備えてい  
るだろうが…今はルールによって完全耐性未満の装備で挑むことを  
定義づけている…ならば、こうする方が効果的か…）

そう思い立つと、<sup>エンチャントウェポン・フレイム</sup>《魔化武装・炎属性》を発動させ、付与させる炎の  
位階に<sup>インフェルノ・バースト</sup>《大焦炎爆裂》を選択する。

これで、光の剣と、炎の剣、さらに第八位階の属性を魔化状態で付

与させることにより、戦闘中ならば何百ターン分の時間が過ぎようと効果が失われることは無い。

それに加え、「風車のベルト」としての神器級ゴッズのバフも攻撃力に加わっている。

腕に着けていた『枷』も外したので、今ならばコキュートスにも負けない実力に成れている自負はある。

だがそれが確定しているのは「力」と「技」に関してだけだ。

それ以外がどの程度上がったのか、どこまでコキュートスに食らいについていけるのか：

それだけが懸念材料だが、今はその不安を差し引いても、思い知らさなければ気が治まらない。

ならば…と思い至る。

せめてコキュートスの動きを事前にある程度読むことができれば…と。

その為の目が欲しい、そう感じた。

その瞬間、再び、脳内にピコンという音が聞こえた。

意識を向けるという作業にもそろそろ慣れて来たので、瞬間的に把握できるようになっていた。

“26の秘密として備わる機能、エレクトロアイ及びマトリックスアイを起動します。”

そう認識した次の瞬間、目の前の光景はガラリと一転する。

コキュートスの身体がまるでレントゲン画像のように体の内部情報まで見通せるようになり、かつ僅かな光や熱でもわかるようになる。という視覚自体に変化は表れたが、まだ何かが足りない気がする。

何故なら、見た限りコキュートスを視界に収めた色は全身が真っ青なのだから。

そこでベルリバーは自らの腹の中に居るエルフ達にも声をかけた。

「みんな…少し力を貸してほしいんだけど、大丈夫かな？」

（はい！大丈夫です、何かお力になれることがありますか？）

「ああ、すまないけど、3人で順番に交代しながらでいいから

〈インフラサイジョン熱源視覚化〉を使ってくれないかな？ボクの視覚と同調させるような感じで頼まれてくれると助かる。」

「はい、わかりました…でもベルさん、大丈夫ですか？さつきから…その…今のベルさんちよつとだけ、怖いです…」

「ん？ ああ…心配させちやつたかな？大丈夫だよ、キミらが居る限り、人間らしい心まで浸食などはさせたりしないさ」

「そうですか、それならいいのですが…くれぐれもその…気を付けてくださいね？ワタクシ達は、いつも通りのベルさんで居てくれればただそれだけでいいのですから…。」

「ああ、わかったよ、ルチルもみんなも…心配してくれてありがとう…だが、譲れない一点だけはボクの好きなようにさせて欲しい…力を貸してくれるかい？」

「まっかせてください！いつでも準備オツケーですから！いつでもズドンとやってやりましょう♪」

「ああ、それじゃ、〈インフラサイジョン熱源視覚化〉をお願いしていいかな？」

とだけ体の中に告げると、目に映る世界が再び違うものへと変わった。

コキュートスの体の中は変わらず、内側の状態を示している。

温度表示も真っ青で、目に映る表面温度も同様だ。

だが、そこに熱源視覚化で、微細な温度の違いも、色の変化で見取れるようになった。

（よし、これなら、動かそうと力を入れる兆候を見せれば、温度が多少変化するだろう、それが動く前兆となる。）

目線を外さずにいたコキュートスを目の前にして、ベルリバーとして芽生えた感情を初めてコキュートスに吐露することに決めた彼の宣告が始まる。

「これからは、こつちの番だ、邪道の戦いをどこまで凌ぎきることができかな？」

「ムウ…、ナラバ今度ハコチラガ受ケル番トイウコトダナ、良カロウ…イツデモ来ルガイイ!!」

武器を構え直したコキュートスを相手に、目の前で垂直ジャンプを

試みた。

土煙を残す強い踏み切りから、姿が消えるかと思えるほど瞬間的に、音だけを残して姿が見えなくなり、気が付くとその存在は遥か上空に位置していた。

(行くぞー！ルチル！)

(はい！ベルさん！)

彼女の持つ杖、自分が貸し渡した「ヤドリギの杖」、それに魔法を使用するたびに魔力の残滓を養分として吸わせ、杖に纏わせた分の全ての魔力を一度に発動させる。

〈真なる無〉  
トゥルダードーク

強化状態に及んだ身体能力を活かし、上空80mを超えた位置から直下に魔法を発動させ、コキュートスに直撃させる。

うまくいけば「暗闇」状態にして視界を奪うことも不可能ではないが、恐らくレジストされてしまうだろう。

(次はいよいよ、二人の合体技だ、セピア！)

(アレですね！任せてください！)

彼女ら3人娘だけにわかるように短く告げると、セピアにも貸し出している「コメットロッド」が最大の威力を発揮させた。

パワーレベリングの為に修行させていた異空間での戦闘で試してみた結果得られた隠された裏技。

セピアが第三位階の「彗星」コメットを自前の魔力で起動させる。

そして、そのタイミングで、ベルリバーも魔力を消費させることにより、第四位階〜第七位階までの「朱い大彗星」へと変化を遂げた。

しかも、杖の効果により、第四位階以上の消費は、MP消費が半分になる。

だが、杖の仕様により、第四、第五、第六、第七…とそれぞれ個別に消費させることになるので、コストとしては普通に第七位階魔法一発分と比べてトントンか、多少足が出てしまう程度となってしまう。

しかし、今のコキュートスは〈真なる無〉トゥルダードークの攻撃により、周囲が暗闇の波動に覆われ、存在ごと「無」とされるが如く、負の属性ダメージに蝕まれている最中だ、身動きが取れないうちに畳みかけさせても

らう。

「コメットインパクト！」

「朱い大彗星」となった際の落下スピードは、「彗星」が落ちる際に実に3倍の速度に相当する。

第七位階として使用できるのは一日一度きりなので、コメットロツドの最大の切り札をこの場で使ってしまったことになる。

あとは、第一位階から第三位階までの彗星なら、回数に制限はなく魔力が続く限り使用が可能。

その場合だけは、第二位階のみを選択、第三位階のみを選択して：という感じの魔力消費で済む親切設計だ。

そして、その直後、「朱い大彗星」の落下と合わせるように、上空80m以上の位置から、頭から後転をするような行動をし、そのまま空中でそれを高速回転させ、体当たりをしようとする。

（これはドリルアタックとは別扱いになるだろうが、どんな技が反応するかな？）

すると、高速回転が軌道に乗った辺りで、脳内に再び「ピコン」と音が発生した。

「摩擦熱の発生に及ぶ高速回転により26の秘密の一つ、レッドボーンパワーが発現しました。」

「レッドボーンパワーの発現に合わせ、レッドボーンリングが使用可能となります。」

頭の中に『使用しますか？ Y/N』

そんな選択肢が浮かんでいる感覚を覚えたので、そのままYESと選択すると、まるで業火に包まれたように変化し、そのまま、「朱い大彗星」の落下直後でダメージを受けているコキュートスに追加ダメージを与えることに成功した。

「グーグオオオオオ!!」

ダメージを立て続けに受け、苦悶の声を上げるコキュートスの目の前に降り立ったベルリバーは、ここでもう一押しが必要かと判断す

る、コキュートスの防御と魔法防御は相当高い、この程度ではそこま  
でダメージは受けては居まい、そう思ったからだ。

「これで決めさせてもらおうぞ！コキュートス！<sup>リリース</sup>解放！」

その声と共に、腰の「風車のベルト」が淡い輝きに包まれる。

「吹き飛ぶがいい！<sup>逆</sup>リバーズ・<sup>二重</sup>ツイントル<sup>大電</sup>ネード」

「風車のベルト」から解放された全ての風力がうなりをあげて吹き荒  
れた。

それは絡み合う龍の如く2本の竜巻が、一本の縄のようになり、コ  
キュートスを飲み込んで「し」の字を描くように天高く、2本の竜巻  
に翻弄され、堅牢な甲殻装甲が悲鳴を上げるような音を立てて、打ち  
上げられていく。

武人であるコキュートスは「地に足をつけて」という姿勢を最も好  
む。

足場がしっかりと確立されて居ないと自身の精神も揺るぎやすい  
ものとなる。

その為、普段から浮わついた精神で居てはならないと戒める為、宙  
に浮かぶという手段に出ることも無い。

それが今回は仇となり、空中で体勢を整えることもできず、天井ま  
で打ち上げられ、激しく叩きつけられたその後、抵抗らしい抵抗も出  
来ず、姿勢を保つことも難しくなり、今度は落下していく。

出来ることと言えば、ダメージ減少の為の、1日2回しか使えない  
大ダメージ用のスキル、最後の一度を使用するくらいだ。

このスキルの効果は一瞬だが、攻撃のエフェクトが長い時間に及ぶ  
のであれば、その分効果も延長される。

それを現在進行形で発動させているが、どこまでダメージを抑えら  
れるか、自分でもどこまでの被害が出るのか想像もできない攻撃だっ  
た。

そしてそのまま、ダメージ減少の効果が適用された後、地面に叩き  
つけられるが、ここでもその強固な鎧が仇となる。

これが弾力や柔軟性のある装備なら違っただろうが、コキュートス  
の皮膚とも言える甲殻装甲はとにかく硬い、その硬さのまま地面に高

い位置から叩きつけられれば、その衝撃は身体の内にもダメージを与えることとなる。

「グフオア！」

周囲に荒れ狂う風の乱流をもたらした2本の竜巻が消えると共に、「風車のベルト」から淡い光が失われていく。

（これで、3時間の使用不能か…だが、さらなる追撃で、こいつを仕留めきる！）

そう強く決断すると、また「ピコン」の音…、もうすっかり聞きなれてしまった。

「追撃の意思により26の秘密の技の一つ、火柱キックが候補にありました」

「主となる対応クラス『モンク』系の職業を取得していません。」

「対応策を検討、「キック」を「斬駆」の扱いとし、剣での攻撃に対応」

「26の秘密の一つ、改訂技、『火柱斬駆』を発動させます。」

その瞬間、右手に持っていた「無銘一刀 宜振」に纏わせていた大焦炭インフェルがさらに大きく膨れ上がり、それはまるで太陽の表面で踊る炎の帯、または炎の蛇と見紛うばかりのプロミネンスのように変化し、それと同時に自らの身体をもその炎が焼き尽くそうとジリジリと身を焦がしていく。

（これは…HP消費系の技か…ならグズグズはしてられないな…）

「くらえ！火柱斬駆!!」

コキュートスの腕の甲殻装甲の継ぎ目、黒く露出した細い部分に狙いを定め、一番防御力の低いだろう場所にそれをお見舞いするべく、「ズバン！」という音と共に、炎の化身となった刀が、コキュートスの上段の右腕を斬り落とした。

それと同時に、ベルリバーの残されているHPが一気に半分に減ってしまう。



(持続するだけでも継続ダメージ、さらに一度の攻撃で残りHPの半分を消費…か)

「まだだ、まだ終わらせない！ 〈流転三斬〉！」

エルヤーのオリジナル武技、彼の力量では初見殺しとしての一度きりしか発動できない大技で、しかもカウンターでのここ一番でしか、(恐らく精神力の消費という面もあったのだろうか…) そう何度も使うことが出来なかったようだが、今の自分にそれは関係ないだろう。

攻撃の技として使用して、流れるような三段攻撃で、残されていた上段の左腕、そして、下段の両腕も切り飛ばし、コキュートスの四腕を全て奪っていった。

残されたHPの48%がまず一段目の攻撃で24%へと減り、二段目の攻撃で12%、最後の三段目の攻撃では、とうとう残りHPは継続ダメージにより、5%へと減ってしまった。

それを察知したのだろう、ルチルとディーネが二人で治癒魔法を使用してくれたおかげで、敗北条件であった一割を切る。という局面は即座に回避され、現在は残り21%にまで回復されていた。

(これでトドメだ！)

大きく振り上げた業火の刀と、光の剣をそのまま切り下そうとしたその時、まるで自分の腕を後ろから絡め取られるような感覚に突然襲われた。

四本の腕を失ったコキュートスでは、自前で回復の手段はない。

尻尾の攻撃や体当たり、足蹴りなどの手段はあるだろうが、武器戦闘を得意とするコキュートスでは、その攻撃手段では大したダメージも出せないだろうとベルリバーは判断して、彼は後ろを振り返った。



「な…なんですか…これは！」

慌てているのはフレイラと同様に、近くにいるアルシエも、声が出

ないほど驚愕していた。

何故なら右腕が飛ばされた際、頭の中に響いた音がして、「リンクされている発動条件の一つ『右腕の喪失』が解放されます。」という声。自分の脳内に流れ、それからしばらくして「リンクされている発動条件の一つ『家族の為の復讐心』が解放されます。」という声まで聞こえ、次々に理解不能な現象に見舞われた。

だが、脳内で声が響くという現象だけで、別段何かが起きるといふ風でもなかったため、気にも留めていなかったが、自分の主が、自らのHPを犠牲にしてまで、業火に身を焼きながら修羅のように戦う姿は、そのまま倒れて、命まで失う危険を孕んでいるように見えた。

『止めなければ…』

そんな心境になるものの、アルシエのことも放り出していくことなど出来はしない、だが主のことも止めなければ、このままだと本当に自分の想像通りになってしまおうのではないか…そんな危機感に苛まれた。

『ここからでも届く、主を止めるための手段』さえあれば…』

そう思うも、そんな装備は今持ち合わせていない。

そんな風に思い悩んでいると、上部の両腕、下部の両腕の4本を斬り飛ばされた階層守護者のコキュートスに今にもトドメを刺そうとしている我が主を目にした瞬間に、心が焼き切れる程の勢いで離れている主まで意識を飛ばすイメージで、「ダメエエエエエエ!!」そう叫びながら訴えかけた。

それが現実のものとなってくればこの身さえ厭わない！そう思っているが…

その瞬間、フレイラの吹き飛ばされた右腕に突然の変化が訪れる。

まず、失われた右腕にまるで「8」の数字を形にしたようなデザイン。の硬質な武器とも防具とも判断の難しい部位装備。

見る人が見れば落花生の殻のようだという感想を持つ者もいるだろうが、その概念を持てる者は、この場には居ない。

そしてその「8」の数字を具現化したような部位装備の頭の部分に「？」をそのまま金属にしたような形の「鉤」と呼ばれるモノが発生し

ているが、フレイラの中にはそれに関しての知識もない。

だが、そんな戸惑いに関係なく、先ほどの『身を焦がす程の望み』を叶えるべく、それは唐突にベルリバーの方に向かって撃ち出された。

止め方もわからない彼女がためらっている間に、撃ち出された『鉤』の根本にはL V金属製の糸を編んで作られた縄が括り付けられており、右腕の「8」の字ともその縄は繋がっていて、今にも2本の剣を切り下そうとしていたベルリバーの両腕を絡め取っていたのだ。

(そうです、ここで今この不可思議な現象の検証をしている暇など無いのでした。今は最優先すべきは主の身の安全、それ以外は全て後回しにします！)

意識をそう切り替えたフレイラは、ベルリバーの両腕に絡ませたロープを引き絞り、振り下ろさせないようにグツツと腕を引きながら声を張り上げた。

「いけません！それ以上続けられては！ 私ならばこの通り、何も問題などありません！どうかお怒りをお鎮めください！そのままでは貴方様のお身体が…、どうかおやめになって下さい。」

それを後ろに振り返り、見ていたベルリバーの腕に握られていた剣から炎が消え去り、その身を焦がし続けていた業火も、静かに消えていく。

「フレイラ…お前…本当にか？ 無事なのか？ 腕の方は？その右腕は？」

オロオロしながらフレイラへと近づいていく、その彼の中にはもうコキユートスへの関心などどこかに消えてしまったかのように一瞥もせず、歩みを進めている。

「ええ、私が『止めなければ』と…そう強く願っていたら突然…なぜこうなったのかは私にもわかりませんが…これについての詮索、検証は後にしましょう。」

「そうだな…うん、確かにその通りだ、今はそれよりもこっちなな」  
そう言つて、フレイラに近づこうとする際に拾い上げた右腕を彼女

に手渡した。

「ありがとうございます。これは後程、治癒魔法で治してもらいましょう。」

「ソウダナ：ソウシテモラウ方ガイイ」

ベルリバーの後ろには、上下の両腕を失ったコキユートスが静かに立っていた。

「まだ続けるか？」

短く問いかける。

もうそこには先程までの狂気じみた気配はわずかにしか残されていなかった。

「イヤ、モウヤメテオコウ、ドノ道、腕ガ無イママデハ得意ノ武器ヲ持ツコトサエ出来ンカラナ：見事ダツタ、ベルトヤラ：オマエ自身ハ邪道ト言ツテイタガ、ソコマデ高メテイルノデアレバ、ソレハ正真正銘、オマエ自身ノ実力以外ノ何物デモナイ、潔ク私ノ敗北を認メルトシヨウ。 良イ戦イデアツタ！」

その発言が飛び出したことにより、審判役のアインズ。

今は「ナインズ・オウン・ゴール」と名を偽っている墳墓の支配者が勝ち名乗りを代行する。

「では、これにて勝負あり！ 勝者は挑戦者！ベルⅡカウワⅡスズリバーとする！」

ここに、正真正銘、最初から最後まで次鋒戦を初めから戦い抜いた両者の勝負に決着がついた。

（ようやく一勝か…、残す所はやっとあと一勝すれば…って感じだけでも…次は、姉の方か？それとも、姉と弟のコンビか…どっちが来るか…だな。）

そんな風に思案しながら、戦いにくそうな相手との今後の戦い方にも思案を巡らせる至高の御方の一人、ベルリバーであった。

## 第62話 両陣営、インターバル。

「さて、コキュートス…どうやら敗北に終わったようだな。」

支配者からの言葉に身を固くしたコキュートス。

「どうした？お前の望むように、好きに戦ってもらった結果が今回の敗北に繋がったわけだが…感想を聞かせてもらおうか。」

その声はどこか平坦な印象を受けた、怒りを抑えて…という感じでもなさそうだ…とコキュートスは感じていた。

「ハ、コノタビハ、ナザリック地下大墳墓ノ守護者トシテ、無様ナ姿ヲサラシテシマイ…」

跪いた姿勢のまま、頭を下げ、謝罪の気持ちで…栄えあるナザリックに属する者として、敗北で飾る結果となってしまうことに、罪悪感と、他の守護者に対する申し訳なき、さらには期待に応えられなかった至高なる支配者への言葉を必死に紡ごうとしていたのだが、その中、何かを言おうとアルベドが息を吸い込み

「コキュート…」

とアルベドが口を開こうとしていた時だ。

カッーン!!!

軽やかでいて、どこまでも澄んだ音。

支配者である御方が、自らの持つている杖で、地面をたたいた音だ。その瞬間、アルベドの脳裏にかつての記憶がよみがえる。

それはリザードマンの集落を襲撃し、コキュートス率いる軍勢が敗北で終わって、その謝罪をしていた時のことだ。

今の状況は正に、あの時と酷似している。

あの時も、支配者はコキュートスをたしなめていた自分を止めるような言動をされていたではないか。

そう思い出したアルベドは、口を開こうとしていたものの言葉が止

まり、臣下としての姿勢へと即座に移っていた。

「そうではないぞ？コキユートス。私は怒つてなどいないし、咎めて  
いるわけでもない……ただ単純に『存分に戦ってみた感想はどうだった  
？』と聞きたかっただけだ。正直に感じたまま答えることを許可す  
る、それに対して罰を与えるようなこともしないと我が名に於いて誓  
おう。……さて、それで？ どうだったのだ？コキユートス。」

口調にイラ立ちを抑えてる様子も感じない上、御方が自分にウソを  
つく必要性も無いか……と判断したコキユートスは感じた印象そのま  
まを伝えていく。

「一言デハ言イ表セマセヌ、戦イ始メタ時ハ『風』ノヨウナ男カトモ思  
イマシタガ……」

「ほお、『風』……か、面白い評価だな、それはなぜそう思った？」

「ハ！飄々トシテ掴ミドコロガ無ク、シカシ自ラノ信念ハ持チ、ソレ次  
第デハドノヨウニモ動キ、立チ位置ヲ変化サセテシマウダロウト……」  
「うむ、確かにそれはそうかもしれない、だがそれは戦い始めた時。そ  
う言っていたな、戦つてみて抱いた感想はどうだと思つたのだ？」

「序盤デハソコマデ強イ興味ハ覚エマセンデシタガ……アノ者ガ「仲間」  
ト信ジル者ニ危害ヲ加エタ瞬間、ソレハ姿ヲ変エ、炎ヲ巻キ上ゲ、ソ  
ノ身ニ纏ウ暴風ト成リマシタ。故ニ、内ニ炎ヲ宿シ燃エ盛ル機会ヲ  
常ニ窺ウ『気流』……時ニ荒ブル台風トモナリ、時ニ「涼」ヲモタラス  
心地良イ風ニモナル、ソノヨウナ印象ヲ受ケマシタ。」

「ふむ、コキユートス、お前にしては中々の高評価だな、それ程に気に  
入ったか？」

「ウ……ア……イエ……ソノヨウナコトハ……」

ナザリツク外の者、しかも人間相手にそのような考えを抱くなど明  
らかに不敬、そういう認識が周囲のナザリツクの者らからすれば当た  
り前の認識であることが理解できているコキユートスからしてみれ  
ば言葉に詰まってしまう。

続く言葉が言えずに居ると、ナインズと名乗る至高なる支配者も少  
し含み笑いの様な音を漏らした。

「フ、ふはは、構わん、すまんなコキユートス、少し意地悪な問いかけ

となつてしまつたようだ、私にお前を咎めるつもりは無いと先ほども言つた通り、そのような意図は無い。　…だが、そうだな…昔、私のそばにいた時のあの者は…『水』のような印象であつたのだが…、大切な者を得たことでより強さを増した…か？そう考えてもいいのかも知れんな。」

その呟きに即座に反応したのはデミウルゴスだ。

他の者でも気が付いてる者はもちろん居るだろうが、至高なる御方自らがついに声に出して断言したので。

“かつて『御方の近くに位置していた者』だということ”

デミウルゴスは高速で思考を巡らせる。

ともすれば、それは「補欠」という扱いでは無いのではなからうか。

と…

しかし、ならば何故、御方は「補欠」などという言い方をされたのか…ギルドから途中で除名された相手に対してなら、もつと不快な感情を持たれていても不思議ではないはず、かの温情あふれる慈悲深い御方であろうとも、こと『ギルド』に損害を与えた事実を持つ者に關してはその限りではなく、その扱いは『報復』と言われて差し支えないモノとなる。

であるのに、その声にはどこか懐かしい相手に対する想い出話を聞かせる時の様な印象を抱かせる。

ならば…と更に思考を加速させる。

百歩譲つて「補欠」という扱いの者からの出発であつたのだとしても、ギルドに損害を与え、追われた”のでは無く、何らかの形で穩便に『別の道』を歩むことになつたのか…

或いは、遠大かつ深淵なる智謀による大いなるご計画の一部に我々は巻き込まれ、未だその掌の上。

ひいてはその上で『何か』を試されている状態なのでは…？

その結論に至つてしまうと、なにもかもが合点が行くようにも感じられる。

思い返してみれば御方らしくなく、人間共に対してであるにもかかわらず、温厚すぎではなかつたか？



怪しげな仮面を被り、正体を現そうともしない相手に対して、警戒心が無さすぎに映るほどの振る舞いをされていなかったか？

「プレイヤースキル」という言葉が出た時も、『プレイヤーである』ことが確定したと言うのに、『人間種』としてのプレイヤー相手に、我がギルドに対して敵対したことは無かったか？などの推何すらされていなかったのは：実は最初から組み立てられていたご計画に沿った流れだったのでは？

そう考えれば考える程、それは真実味を帯びていく。

自分でもそのくらいは思い至れるのだ。

頭脳の面でも優秀で明晰な守護者統括殿がその結論に至れないはずはないが：表情に現さない辺り、流石と言わざるを得ない、だがまだ気づいていないという点はまずあり得ないだろう。

ならば私よりも先に気づいていた？

であれば、感情を誰よりも深く沈めねばならぬ程の何かを普段から抱えていると見るべきか？

その考えに至ると同時にデミウルゴスの背筋が一気に冷たいものに変わっていった。

アインズ様ならば、どのような隠し事であろうとも何の心配も起きはしない。

何故ならば、そこには「ナザリックの利益の為」という大前提が厳然として存在しているためだ。

だからデミウルゴスは今までも、ずっと至高なる御方が「何かをお隠しになられている」と感じてでもそれを追求することはしなかったし、「ご計画が無事結果として成されれば報告して下さるだろう」という信頼、更には『至高なる存在であられる方の計画が失敗するはずがない』という崇拜もあったのだが。

それに対してアルベドに対しては材料が少なすぎる為、何を内に秘めているのか：デミウルゴスは現時点ではそこに結論を導き出すことが出来ない。

その為、漠然とした不安が背に押し掛かってくるように感じているのだ。

(さすがに守護者統括ともあろう方が『獅子身中の虫』ということはないでしょうが…)

最も懸念しているのは、「何を企んでいるか」では無く、「その企みの矛先がどちらに向かうのか」の一点に尽きる。

自らが最も崇拜する創造主が遺せし、我が守護階層、ひいてはそこが存在するナザリック地下大墳墓。

そこそが、唯一、ウルベルト様が戻って来られるかも知れぬ無二の場所なのだ。

万が一にも、この場所の存在が危ぶまれる事態に発展しそうなことにもなれば、創造主が戻られる可能性すら失われてしまう。

それだけは何としてでも避けねばならないと決意を新たにするデミウルゴスは、その為ならば、最後に残られたたった一人の支配者の為に、例えこの身が塵と化すことになろうとも守り抜く…そう心の中で決断を下していた。

そんな中、短く言葉を発した者がいた。

「水…デゴザイマスカ？」

言葉を発したのはコキユートス。

どうやら御方の言葉に反応して、真意を聞きたくなくなったらしい。

「ああ、あの人はいつも慎重派でな、ギルド内で新しい挑戦を始めようとする、どうしても『万が一の事態』を提案してきて盛り上がっていた炎を鎮火してみたり…、率先してリーダーシップを取るタイプではなかったものの、どのような構成のグループにもすんなり溶け込むように馴染んだりしていた…まるでどのような器に入ろうとも、その器に応じた形へと姿を変える『水』のようにな…」

どこか懐かしさを漂わせるように中空を眺めつつ語る支配者を観察していたデミウルゴスは「やはり…」と確信を強める。

今、我々が相手にしているのは、我らがギルドにかつて敵対してい

た事がある訳でも、不利益を及ぼし追い出された輩でもないということ。

であるならば、何故このような茶番を？と疑問に思う。

至高なる御方の卓越した、端倪すべからざる頭脳をお持ちであらせられるアインズ様であれば、この墳墓にほぼ無傷で侵入し、かつ、ほとんどの損害を及ぼすことなく第六階層、しかも森林の区域でも迷わずアンファイアトルムまでたどり着き、その上、御方が常日頃から欲しておられた情報を事前に携え、それを的確に進呈して寄越すなど…あまりにもでき過ぎている。

しかも、墳墓の通路でアンデッドに囲まれていた際にも：  
遠隔視の鏡で見張っていた時に見た「あの姿」あれはもしかしたら、彼の真の姿だったのではないのだろうか？

（アインズ様は成長度合いによって、外見は同一のものとなる可能性はある。そうおっしゃられていましたが…『例の写真』の件といい、本来は異形の者でなければ入れないギルドであるアインズ・ウール・ゴウンに在籍していたことがあったという事実と言い…。）

それらを総合して考えれば、今見えているあの「人間然とした容姿」こそが偽り…真の姿はあの時に見えていた、あの一瞬だけ変化して、転移して見せたあの時の外見こそが全てなのではないだろうか？

（いや、それ以前にこのナザリック内では基本的に『転移系の魔法』などは常時阻害されている、彼女が管理している墳墓内に於いて無断で転移を可能とする手段など、たった一つ…だとするならば…まさか、もしや…？）

最後の疑問を自分の中で解消した瞬間、全身を貫かれたような衝撃的な想像を巡らせてしまうデミウルゴス、それは認めたくない事実でもあり、また待ち望んでいた可能性の一つでもあった為だ。

今まで、「点」と「点」でしかなかった要素が「点と線」で繋がったような感覚に捕らわれ、デミウルゴスが脳内でそんな結論を導き出している頃

「まあ、私の方よりも、お前の方はどうなのだ？ コキユートス：今回の戦いで得る物はあったか？」

やはり軽い問い掛けで、決して責めるような雰囲気は匂わせていない支配者の言葉にコキユートスも身体の緊張を少し和らげながら答えを返していく。

「ハ！ 畏レナガラ、我が身ノ未熟サヲ痛感イタシマシタ、更ニ言ウナラバ、空中ニ放リ出サレタ際ノ対処モコレカラハ身ニ着ケル必要ハアルカト…、宙ニ浮イテイヨウト取レル選択ノ幅ガ広クナレバ今回ノヨウナ失態ハ最早、アリエナイト思ワレマス。」

それを聞いたアインズは、わずかに沈黙した後、静かに目を前に向け、その相手に言葉を投げかける。

「失態か…：そうだな、失態を演じたのなら、それを払拭することは必要だな…：さらに、その失態を演じたそもその原因自体も真摯に受け止め、キチンと清算しなくては他の者にも示しが付かんと見えよう…：そうは思わんか？ コキユートス」

そう言われた瞬間、再び、コキユートスの身体に緊張が走る。

罰が怖いわけではない、何を言われようと、御身の意味こそが最優先、自分の保身など、以ての外。

ならば何故緊張したのかと言えば、御方がこのまま追求してこないのでは？とわずかにでも思った自分の浅ましさを見抜かれたように思ったせいだ。

己の至らない部分に恥じ入り頭を上げられず、「ハ！」と短くしか返答できなかったコキユートスを目にした支配者が、おもむろに観覧用として造られた玉座から立ち上がり、コキユートスの方へ歩みを進めてきていた。

「コキユートス…」

歩みを進めながら至高なる支配者が、ゆつくりとその手を自分の方へと伸ばしてくる気配を感じる。

それがどのような戒めであろうとも、自分が招いた事態である以上、受け入れる他あるまい、そう覚悟を決めていたコキユートスの肩に、そっと支配者の骨の手が置かれた。

「??」

なぜ、自分の肩に手を置かれたのか…それが主からの戒めなのか？  
意味が解らないコキュートスに、アインズが口を開いた。

「すまなかった、コキュートス…。」

思いがけない支配者からの言葉、あまりにも予想のしていなかった言葉にコキュートスも息をのむ。

「ア…アイ…イエ、ナインズ様、ナゼデシヨウカ？ 決シテ御身ガ謝ルコトナド…」

「いや、今回の事態はひとえに私が招いてしまった失態だ、こうなることを予想すら出来ず、お前の上下二対の両腕を斬り飛ばさせてしまったのだから…お前自身の…というよりは私が責められるべきだろう。…故に私は、コキュートス、お前に謝罪をせねばならん、『失態は償わなくてはならない』それに同意してくれたではないか…」

「アア、イエ、ソノヨウナ意図デハナク！ 精進ガ足リズニ栄エアルナザリックニ敗北ノ二文字ヲ初メニ刻ンデシマッタノハ自分ノ責任！ ナラバ、私コソガ裁カレルベキカト!!」

「確かにお前は栄えあるナザリックに初めて『敗北』の二文字を刻み込んでくれたな…そう言う意味では許し難い…だが、今回、最も許されざる失態を犯してしまったのは私自身なのだよ、コキュートス。」

「ナニヲ言ワレマス、ナインズ様！ソノヨウナコトハ決シテ…」

「いや、あったのだよコキュートス、私はな…審判としてあの場にいる立場でありながら、お前の一本目の腕が切り飛ばされた時、あまりの事態に現実を受け止めきれなかったのだ…お前の全ての腕が切り飛ばされたという事実にも…だが…、しかし、それと同時にあの者があそこまで苛烈に我らナザリックのNPCに対して攻勢に出るなど…あり得ない…お前の残り3本の腕が飛ばされるまで、止めに入るべき場面で身動き一つ取れなかった、審判として、主審として、あるまじき失態と言わざるを得まい。」

コキュートスの前で力なく言葉を紡ぐ支配者からは後悔の念の様なものが伺える。

「私は思うのだよ、あの時、自分は〈時間停止〉を使つてでも割つて入るべきではなかったのか：己を盾としてでも、すべての腕を失つたコキュートスに剣を振り下ろそうとする相手の前に出て、お前を安全な位置まで運んでやるべきだったのではないか：とな」

「ナインズ様！どうかそのようなこと、おつしやらないでください！御身はこの場に居てくれている事、それ自体に意味がございます！数々の至高なる御方々が『お隠れ』になられてしまった今、残された唯一の御方であられるナインズ様こそが、我らの希望、お仕えできるとたつた一つの光なのです！そのような危険な真似は全て我ら守護者にお命じ下さり、御身は安全な場所にて我らの忠義に応えていてくだされば：それ以上に我ら一同の望みなどありません！」

悲鳴とも言える声量での叫びにより訴えてきたのはアルベドだ、その声で、一気に今までの感情は抑制され、アインズの心は「後悔一色」から平坦なものへと移行してしまった。

「そうか：ならば…」

そう言いつつ、アインズは先程まで自分が座っていた、専用の観賞用「玉座」に座り直す。

その姿を見つめている一堂にゆっくりと視線を及ぼし、溜めを作ると、決定を下す。

「この度の対戦での失態はコキュートスにも、私にもある！ならばこれはどちらも同等に裁かれえるべきであり、どちらか一方だけ裁かれていいものではない！コキュートスを裁くべきと主張する者は、私にもその裁きを受けるべきだと胸中で抱えているものと見做す！故に問おう！私とコキュートス、共に有罪か、それとも否か？」

そう問いかけてくる支配者に応えられる者などいない、ここでコキュートスだけに：と声を出せば、それは支配者の意向を無視して、異議を唱えているのと同義。

支配者に翻意を抱いている、そう思われたとしても弁解のしようが無い。

しばしの沈黙が場を支配するのを見守っていたアインズは、それを『皆の総意』と受け止める。

「ではこの場にて総意は得られた、コキュートスにもそうだが、私にも受けるべき裁きの必要はない、それで構わんな？」

「！！！！！！」

(さてさて…ベルリバーさんがあそこまで烈火のように怒りを表し、自分を見失うなんて…初めて見る姿だったな…自分にとつてのパンドラなんかは…同じ状況になったとしても…そこまで怒る程か？…程度の認識なんだが…これは創作時の想いの差かな？それとも性別が左右してるのか？…ここはやっぱり同じ『モチない漢同盟』のメンバーのよしみで、温かく見守ってみよう…、自分も同盟員だったけど、NPCに対する愛着は分からないでもないしな…まあ、冷静に彼に戦ってもらうためにも、フレイラには手を出さなって指示は出しておいた方がいいのかな？)

そう考えながらも、支配者は次の対戦者として、アウラに声を掛け、アナウンスの役は弟のマーレに引き継がせることにして、その旨を伝えていた。



一方、場面は移り、こちらはベルリバー陣営。

(…：…やっちゃまった…)

ベルリバーは頭を抱えていた。

自分がしでかしたことは言え、あそこまでするつもりは「最初は」無かったはずだった。

「コキュートスの腕の1本くらいは奪わねばつり合いが取れない」

そう思っていたのも事実だったのだが…

それが気づけばすべての腕、4本とも斬り飛ばした上…足を生やしたダルマ状態のコキュートスに言うに事欠いて「トドメだ」などとい

うセリフまで叩きつけてしまったのだ。

あの時の自分は、本気でどうかしていた。

“自分の抑えが利かなくなっていた”という事実には、ベンチに座って心に余裕が出てきてから自分の行動を振り返った後に、ようやく気づいたと言える。

(あれはどういう精神状態だったんだ？ 種族的な本能に飲まれた形か？それとも頭の中に響いた「家族の為の復讐心」とかってクリア条件が引き起こした新しい特徴か何かか？)

そういえば…とベルリバーは思い出す。

(そうだ…たしか“リンクされている発動条件の一つが解放”とか言ってたはずだったな…『発動条件』ということは、何かを発動させるキツカケがそれだったと言うことがまず考えられるが…)

そこまで考え付いたが、さすがにそれ以上のことは何もわからない。

しかし、コキユートスとの戦いの最中に、意識を別のことに向け続けることは難しかったあの時とは違い、今は時間がある。

じっくりと自分の心の中で、意識を向け続けてもチーム間での回復タイムである今なら、遠慮なく内に意識を向け続けることが出来るではないか？そう考えた彼は、すぐさま自分の内側へと意識を沈ませる。

深く…深く…暗い意識のずっと奥底へと潜っていく。

すると何かとつながってような感覚を覚えた瞬間に、それは視えた。

### 『風車のベルト 概要』

そう読める。

目の前に広がるその項目に手の平で触れると、目の前にずらりと文字の羅列が展開されていく。

### 「風車のベルト 26の秘密」

その読めるページが広がったのを見ながら、彼は一つ一つ、その項



目を暗記するべく、読み進めていく。

今までぶつつけ本番で試してみても正解だった機能、そして判明している能力を始め、読んだ瞬間に愕然とするような性能まで…それが本当にこの異世界に転移した影響で現実になったのだとすれば…それは大変なことだ。

しかし、今は『26の秘密』の一つ

リバース・ツイントルネード<sup>逆</sup>を使用してしまったが為、3時間の使用停止となっているはず…26も技や能力が積まれていても、発動しなければ意味がない。

そう思っただけでその項目へと再確認のために目を向けた。

すると彼の眼には、信じられないことが書かれていた。

彼の想像を絶する文字がそこに書き込まれていたのである。

「この能力を使用した場合、風車のベルトに内封されている『変身』する能力が3時間の間、機能しなくなる」

と…。

へん………し………ん？

いや…、いやいやいや…おかしいだろ？変だろ？そもそもユグドラシルの世界で変身なんて能力、システムのにもあり得なかったら？と心の中で盛大にツッコミを入れていた。

(見なかったことにしよう…そう、変身なんてきつと文字だけのこと、たっちさんだって、本気でそんな機能をゲーム内で発揮させるつもりなんてなかったはずだ…。 そう…これはたっちさんの遊び心から来るちよつとした手違い…、そう思いたい)

そんな風に現実逃避をするベルリバーだが、目の前に厳然と書き込まれている文章、そしてその単語は何度見ても変わることが無い。 『変身』する能力が3時間の間、機能しなくなる”

つまり、それは…26の秘密が、3時間の間、封じられるわけではない。

『ベルトの能力が3時間の間、機能しなくなる』ではなく『変身』する能力が」と書かれている以上、自分の記憶が都合よく改ざんされてしまっており、かつてたっちさんが言っていたこと、そのものが文章

として目の前に残されてしまったと考える方が自然だ。

(なんて機能<sup>も</sup>、残してくれてるんですか！ たっちさん！)

自分は、決してヒーローオタクではない。

その自分に託す物として用意してくれたアイテム。

その気持ち自体は嬉しい。

だが、ここまで作りこみをすることは無いだろう…

自分はその変身の仕方すら知らないというのに…

どんなポーズで、どんな風にすれば『変身』と認識されるのか…その部分は文字にされてはいない。

全く闇の状態のまま。

(ならば仕方ない)

そう思考を切り替える。

(見なかったことにしよう…)

そうして、さらにその下へと能力の説明を読んでいたベルリバーは、またしても首をかしげることとなる。

『火柱キック』

“内蔵された小型原子炉で熱を発生して赤熱させる技、使用者の命(HPの25%)と引き換えに放つ危険な技でもある”

(HPの25%?…いや、さっき使った時は一撃で50%を持っていかれたはずだが…?)

26の技の最後に位置していた技が、『火柱キック』だったので、さらにその下へと目を落としていく。

「家族の為の復讐心」

“己の家族に害を成した者へと『復讐』の念を覚え、その意識一色に染まった時のみ発動。

『復讐』に支配されている間のみ、使用する技の効果を2倍に引き上げる。”

(これか…)

『技の効果を2倍に引き上げる』

(だから、消費するHPが一撃で50%も持っていかれたと…、となると、コキユートの腕を斬り飛ばした時の攻撃力も同様に、本来の2倍の効果があつたとみなすべきか?)

守備力の最も薄い甲殻装甲の継ぎ目を狙ったのだが、それでも守備力の数値は失われるわけではない。

何割か減少させてはいるかもしれないが、それでも一発で斬り飛ばしたりできたのはそのおかげと言えるかもしれない。

しかし…最後の方には、使用できる必殺技の名前も文字数の許す限り、ギリギリまで使って書かれていた。

(キツクの技が多いな…、しかしキツクの技は変更が利いて「斬駆」<sup>キツク</sup>になつて剣での攻撃にも使えるようになったはず…だが、パンチとかチョップは…多分どうにもならないだろうな…モンクのレベル取得してないもんな…)

ベルリバーは意識の中から、パンチの技とチョップ系の技を記憶から除外する。

多分、使えないだろう技を知識として覚えていても空しくなるだけだろうからだ。

(26の秘密の中にもチョップの技名あるから強いんだろうけどな…、変に期待するのは辞めておこう)

びつしりと文字と説明で埋められている技をたどり、いくつかの興味を惹かれる項目に目を留めた。

(マツハキツクに…カセットアーム…か…。)

いかにも強そうな名前だ、『マツハキツク』使用する時は『魔破』<sup>マツハ</sup>斬駆』<sup>キツク</sup>とでも変換されるのだろうか?

そう思いながらもその技の項目を手の平でそつと触れると、その技の説明が…と思っていると、真つ赤な文字が表れると共に「ぶつぶー!!」とでも言える音が響き、赤い文字ではこう書かれていた。

“特殊ユニット『ハリケーン』が存在しない為、現在 “自発的に” 発動させることは出来ません”

多分これはこの世界に来てようになった事例で、この部分には「文字数」の制限はかかっていないだろう。

たっちさんであれば、こんな夢のない文言をさらつと書くよりこの『ハリケーン』とやらを作り出す方に心血を注ぎそうな気がする。

確証は無いが「あの人」と、あまのまさんがこのベルトを制作した当事者であれば、必ずそういうノリに移っていき、謎のテンションで『いいですね、それ作っちゃいましょう』となるのが当たり前のように感じた。

だが、そうなっていないことを考えると、多分そこまで考えが及ばなかったのかも知れない。

それほどにこのベルトを創るのに要した時間、素材、ドロップさせた敵の討伐数はケタが違うのだろう。

（まあ、それならそれで面白い気持ちにさせられたからいいか…さすがにそこまで至れり尽くせりだったら『あの二人』という理由だけではつじつまとしては少々厳しいかもしれないから…）

そう思いつつ目を留めたもう一つの項目

“カセットアーム”

それに対して、手の平を伸ばし、タッチすると…

これもまた「ぶつぶー!!」という音が響き渡り、赤い文字で注意書きが表れる。

“現在、フレイラールアルアセンディアが装備中です”

それを読んだ瞬間にピンときた。

（あれか…）と。

あの一見ひょうたんかと思うようなデザイン、そして表面に走る模様  
の『落花生』感。

インパクトは充分だった。

その赤い文字が表示されたすぐ下に、白い文字で説明書きが事細かに描かれている。

・パワーアーム  
・ロープアーム（スウィングアーム、カメラアーム、ネットアームにも相互移行可能）

・カッターアーム  
・スモークアーム

・ドリルアーム

・マシンガンアーム

・オペレーションアーム

・ブラスタアーム（ファイヤーアーム、フリーザーショットアームにも相互移行可能）

・義手変換

（…一体、どれほどのデータクリスタルを乱用したというんだ？ いや、表記設定だけっていう可能性もある…さすがにそこまでの造りこみをしていた余裕があったとは思えないし、できれば考えたくはない…フレイラの生存率が高くなることは大歓迎だが…、妙に喜べないのは何故だろうな…？）

ベルリバーは一通りの項目に目を通し終え、『風車のベルト 概要』の項目を閉じた。

そして、意識を表面に浮上させるイメージで、内面に沈んでいた自分を現実世界へと引き戻し、抱えていたままの頭から手を放して、「ふう…」と短く一息つくくと、ベンチの背もたれに体を預けた。

「いかがされましたか？ やはりコキユートス様との交流戦はご負担が？」

少し離れていた場所から歩きながら問いかけてきたのはフレイラだ。

つい今しがたまで、ペストーニヤから右腕の治療を受けていたの

で、それが終わったのだろうか。

「右腕の調子はどうだ？　もういいのか？」

嫉妬マスクの5周年記念のアニバーサリーエディションを被ったままの「人間形態：ベル」の状態で話しかけた。

「ええ、もうすっかり…さすがはペストーニヤ様で御座います。斬り飛ばされた痛みすらすっかり消え失せて、元通りに治していただきました。」

「カセットアームの調子はどうだ？」

「かせつとあーむ？…とは、なんででしょう？」

「どうやら、自分で使った装備の名前までは記憶されていなかったらしい。」

「右腕を構えて、「カセットアーム」と意識してご覧？　それから『カッターアーム』と詠唱をすると解るよ」

そう教えると、素直に言われた通りの動作をし始めたフレイラ。

すると、今まで普通の状態であった自分の右腕が、特殊合金製の刀剣型の武器へと変化し、まるで自分の右腕自体が武器になったような感覚に捕らわれた。

「これは…先ほどのロープを出した時の装備の能力でしょうか？」

「ああ…、今まで、それについての概要説明を調べていたところだったんだ、今から一通りの説明を始めるから、ちょっとだけ付き合ってくれないか？」

そう言うと、すすつと静かに跪き、「仰せのままに」と、かすずいている。

(あ…と、その前に…)

ベルリバーは、手遅れになる前に…と、腹の中に居るセピアに話しかけ、「風迅の外套」の効果で周囲10mの範囲の空気をその場に封じ込めさせた。

こうすれば、封じ込められた空間内でどんな轟音が鳴り響いても、空間の外に音が漏れてしまうことがない。

どのような装備で、どんな起動をし、どんな音が発生するかわからないのだ。

その中でも名前からして一番危険性の高いと容易に予想できる「マシンガンアーム」なんてものを展開、発動させる前に、その対策を講じておかなければいけなかった。…でなければ後々、どんな展開に悩まされるかわからない。

展開が終わったとの声を腹の中から受け取ったベルリバーは、一つ、装備の名前をフレイラに教えていった。

それからは、装備としての実験を指示しているこつちも驚くほどの性能を発揮した「カセットアーム」

まずは、カッターアームの次に使わせた機能は「スモークアーム」その機能が発揮された瞬間、無音空間にしておいた範囲が、そのまま煙幕に包まれたので、そのままそれを利用して、色々な機能を試してみることにした。

催涙弾の方は、どうやら『状態異常耐性』を備えていればレジスト出来る程度らしい。

(ならこれは、現地民達に使用する程度か、使い道としては勝手が良くないな…)

一つの機能を調べ終わったら次の実験へと移行し…。

そして、その機能が判明すると、更にまた次の機能の試用運転に移る。

マシンガンアームは、連続で撃つことも可能なようだが、実弾の装填が不要な変わり、使用し続ける限りMPが持続的に消費されるらしいことが分かった。

維持コストとして、持続的に減っていくMPもそうだが、まとまった弾数をsetする必要がある場合、その都度、決まったMPを消費してしまうことで自動的に撃てるようになるらしい点も新たに判明していた。

ドリルアームは、電源として一定の電力が必要らしく、フレイラに魔力系魔法の〈雷撃〉ライトニングを唱えさせ、自分の右腕にその雷撃の威力を集

中させると、すぐさまその魔力が電力として変換されて充電されていった。

(バッテリー切れが起きるたびに充電が必要な携帯電話みたいだな…。)

現実になってしまった「機能」を、装備として使った場合、どのくらいの威力があるのか…

そして、それは自分だけじゃなく、使用するフレイラ自身にも体験させてみなくては戦いの場に於いて、彼女も不安が残るだろう。

それを取り除くためにも、すべての機能を体感させてみた。

オペレーションアームだけは『攻撃用』では無いようで、威力こそわからなかったが、形状からして修理する必要がある時に使えそうだった。

それら全てを使い終えた後、空間の無音状態を解除する。

すると、空間内の煙幕が、大気と混ざって霧散していった。

(さて…と、たしか「中堅」戦では、向こうから出てきてくれるように話してくれてるはずだから、向こうが動かない以上、まだMPの回復に努めておいた方がいいだろう)

カセットアームの仕様で、それなりにフレイラ自身のMPも消費してしまっている。

自他ともに、そして腹の中のメンバー4名のMPや精神力も回復させるために、適度の休息はとらせておいた方がいいだろう。

そう思っ、ベンチに座っていると声を掛けられた。

「あなたは回復しないで大丈夫なのですか？…あ、わん」

目の前までわざわざ移動して来てくれたのは、言わずと知れたパストーニヤだ。

「ああ、うん…いや、ボ…私まで回復しようと考えて下さっているとは…、さっきの戦い方からして、私に対し腹に据えかねるものがあつた



りするんじゃないかと思つて遠慮してたのですが…」

そういうことにして言い訳をしておく。

半分は本心なのだが、自分自身を抑えられなかった結果、コキユートスにしでかしてしまつたその内容が内容だけに、同じNPCとしては思うところがあるのでは…と考えると、軽々しく「回復頼めるかな？」とは言い出しにくかつたという理由もあつた。

「そのような事、考えるまでもない事です…わん、至高なる御方がお決めになられた事であれば、我らはそれに只々従うのみ…あ、わん」

ちよつと意外であつた。

てつきり善のカルマ持ち、しかも極端とも言えるペストーニヤであれば、身内をあれだけ傷つけられれば、何かしら思うところはあろうと思つていたのでが…。

「例え、私個人に『思うところ』があつたとしてもそれは別の話、個人の認識よりも優先されるのは御方のお望みかどうか、それだけ…そういうことです。…あ、わん」

やっぱり何か根に持たれてしまつたらしい…。

「で…では、個人的な感情は置いておくとして、至高なる御方より賜つたお役目の方は何より忘れてはならない最優先事項だから、回復の方はお願ひできると…そう思つてよろしいのでしょうか？」

コキユートスとの戦いでこの口調はとりあえず引つ込めて、エルヤー然とした口調を心掛けて会話を続けるようにしてみたのだが、あまり感触は良くないようである。

ペストーニヤも、ああは言つてもやはり感情の面はどうにもならないのだろう。

それでも、御方のお望みは絶対である。

ならば、事務的に徹しようとしても意識を切り替えたのだろう。

極めて事務的な口調になつているような気がした。

「では始めますわん」

間に少しの溜めや、呼吸の一拍すらない、ただただ棒読みにししか聞こえない一言。

意外に、餡ころもつちもちさんを冷めた性格にして、平坦な物言い

にさせればこんな人間になるのだろうか…？とつい思ってしまった。うになり、すぐ頭を振つてかなぐり捨てた。

なぜかペストーニヤにも餡ころもちさんにも申し訳ないような気持ちになったからだ。

「なにか…わん？」

いきなり頭を振り出した様子に、何か気がかりに感じたのか、短く問いかけてきたが、それに対して「イヤ、なんでもありませんよ」とだけ答えておく。

そして、そのまま体をペストーニヤに任せ、回復してもらうことにした。



「という訳で、今回はアルシェちゃんには遠慮してもらおうかと思う。」

その言葉を聞き、少し口を開きそうになり…だがやはりそこから声を出すことが出来ず、了承するそぶりを見せた。

「わかった…」

ちよつと申し訳ない気持ちになるが、彼女が死んでしまうよりは、ずつといいはず。

そう自分で無理やり納得させて、断る言い訳にしていた。

しかし、改めて考えてみると、今まで『運がよかった』だけだったのだ。

自分で設定した、ルール。

“一方が複数で対してきた場合は、相手も同数にしてよいものとする。”

それを今まで誰も逆手に取ろうとせず、「何人でも来ようと問題ない」とばかりに強者としての余裕で対峙してくれていた。

だがコキュートスに勝ってしまった以上、アウラはこれからどう対応してくるかかわからない。

今回、入場してくるのはアウラが先という話になっているはずだ

が、だからと言ってこちらが二人で入場したら、アウラが使役している魔獣を追加で増やしてくる可能性があった。

可能性で言えば、一番親愛度と調教度が高いフェンとクアドラシル辺りかも知れないが…

自分と一緒に参戦するのがフレイラだけであればそのどちらかの対処で済むが、もしもアルシエちゃんも参戦するようであれば、もう一匹増やしてしまうメリットを与えてしまうことになる。

アウラの強みは単体での戦闘では無く、「群れ」での数の暴力…つまりチームとしての連携。

その一点で言うならば、アウラはこのナザリック1、2を争うと言っている。

(恐怖公の眷属たちが『群れ』なのは間違いないが、あれを連携と言っているのかどうか悩むところだからな…)

ぶるっと、「あの群れ」を思い出し寒気を覚えたので、その想像も脳内から消すことに腐心した。

「しかし、そうなる…フレイ、今回だけその腕のやつ、アルシエちゃんと交換してやるというのはどうだ？」

そう提案した。

フレイラの両手首に装着させた『骨竜の核石』を素材にしたバングル。

それと、アルシエちゃんの装備している「お守り」として渡した腕輪。

「戦いに参加しないなら、ひとまずは第6位階までの不利益をもたらす魔法のみを打ち消すこの腕輪はアルシエちゃんが持ってた方がいい。」

そう言ってフレイラの手首から2つの腕輪を、するりと抜き取った。

「え？ そうしたら、フレイラさんが魔法に対して抵抗できなくなる…」

その発言を聞いて、「ああ、そうかそれを知らないのも当然か…」と、

フレイラとも視線を交わし頷き合う。

今度対戦するのは、「アウラ」

ならば魔法の類は心配するだけ無用。

状態異常の吐息などを使用されることはあるだろうが、魔法に関しては心得が無かったはずだ。

その認識は、アルシェ自身は「持ち合わせていない知識」。

「ああ、その点は大丈夫だ、今度出てくる相手は多分『魔法は使わない』だろうからね」

（もちろん、それはマールが出てこないという前提のもとで出している結論だ。もし姉弟で出場してきた場合、しかたない：即座に降参しよう。）

なにせ、マールが使用できる最高の位階は第10位階だ。

クラススキルまで使われたら、影響する範囲も広がるばかりでなく威力も上がる。

チームワーク戦闘のエキスパートと、広域範囲殲滅の戦闘に於いてはナザリック最強のマールと同時に相手取るなんて、自殺行為も甚だしい。

（いや…そう考えるのも早計か？フレンドリイファイアが解禁されているこの世界で、全方位とか：視界の及ぶ範囲に魔法効果範囲が広がったとして、間違いなくアウラの魔獣もその範囲に巻き込まれる：味方の魔獣まで巻き込むような戦い方をアウラが許容するか？こつちではガチャも出来ないし、高LV魔獣を探しに行くのも望みを持てない世界だ…。）

あ…

ベルリバーの脳に、それまで予想すらしていなかった可能性についての天啓が舞い降りた。

マールにも確か、かなり高レベルのドラゴンが2匹、いなかったか？しかもゴールドドラゴン！

あんなのが出てきたらフェンとかクアドラシルどころじゃないピンチだ。

なにしろあつちは「ドラゴンブレス」を吐ける上、マーレの魔法の効果範囲外に飛び上がってそのまま空中で静止し続けることも容易なのだ。

(甘かった、もしそうされたら詰む…、地上に居ればマーレの殲滅魔法、それに空からの「ドラゴンブレス」爆撃、空に逃げれば、ドラゴンとのガチ戦闘とか…空での戦いに慣れてない分こっちが不利だ。)

ベルリバーもフレイラも、〈飛行〉の魔法は使えるとはいえ、ドラゴンのように生まれてから生活の一部みたいに使いこなしたり条件反射的に旋回したり急降下、雫もみ飛行などが出来るわけじゃないのだ。

(今度機会を見つけて空を飛び回る練習でもしようかな…あ、そういえばシャルティアの時にも思ったけど、〈飛行〉を使いながら空を飛んで風を受ければ、『風車のベルト』に風の力を溜められないか試すって案も忘れてたけど、やってみる価値はあるかもしれないな…。)

だが、今は『風車のベルト』の変身機能は停止したまま、26の秘密の内、いくつかは使えると解っただけでもかなり気分は違うが…風力を溜めて自身にバフがかからなくなったのは地味にキツイかもしれない。

何しろ、「停止状態」では風車の部分が回らないのだから…

(神器級クラスのバフだからなく…有ると無しじゃ、まったく違ってくるよなく…)

などと考えていると、はた目から見たら放心してるようにしか見えなかった自分の代わりにフレイラが事情を説明してくれていたらしい、アルシエちゃんと腕輪の交換をすでに済ませていた。

「さて、フレイラ、こっちにおいで？ 課金アイテムの整頓をしよう、アウラ対策の持っている必要もあるだろうし…ちよつと見繕うの手伝ってくれないかな？」

そう呼ぶと、跳ねるように嬉しそうな感じでこっちへと近づいてくれている。

(しかし…フレイラと共に参戦する以上…、最悪、本当にマーレのゴードドラゴンだけでも出てくる可能性はある。対して、アウラは中距

離を保つてのムチ攻撃か、長距離からの弓攻撃のどちらかになるだろうから：その組み合わせだったら、前衛で戦うことになるのはドラゴンの方かもしれない：となれば竜の鱗を突破できるだけの武器がないと行けないが：)

手元にあるのは真の姿を現した「レイザーブレード」

そして、刀としての形状で造られた武器「無銘一刀 宜振」

コキュートスとの戦いが終わった時点で〈武技〉としての名目で見現させていた下段の方の両腕一対は時間切れを装って、体内に収納させている。

コキュートスとは、創造主との関係上、どうしても個人的なわがままで全力で正々堂々と一対一でやりたかったという部分があったから全力だったが：アウラと戦うのは：どうしてもやりづらい。

アウラの創造主のぶくぶく茶釜さんとは、本人にそのつもりは無かっただろうが、かなり世話になった記憶しかない：もちろんユグドラシル内での話だ。

(断じて言わせてもらおうが、下世話な意味を含んでいるつもりは全く無いぞ！)

脳内で含み笑いをしてるイメージが浮かんだ鳥頭に否定の言葉を浴びせる。

その鳥頭の『姉』が生み出した『娘』であるアウラと戦うことになるのはどうしても本気を出しにくい。

かと言って全力を出せずに戦っていれば「私の事、バカにしてんでしょ？」とでも言われかねない。

だからこそ、課金アイテムだけでも準備してなんとか対策を立てておきたい。

(しかし：そうになると、実力としては手を抜かず、だがアウラを必要以上に傷つけないような展開で戦いを進め、その上で、華を持たせる決着に落ち着かせる必要はあるか：)

とそうになると、審判である主審の協力も必要となる。

自分が思い描く展開で、理想通りにコトを進めるとするならば、どうしても必要不可欠な協力者を思い浮かべる。

だが、今〈伝言<sup>メッセージ</sup>〉の魔法で目立つ行動は避けたい。

自分から意図的に『結論』を誘導している最中だが、小出しにして行って、誰か頭のいいヤツ……ここで言うならばデミウルゴスが筆頭に挙げられるが……に、気づいてもらって、他の守護者に少しづつ受け入れてもらうしか方法はないとは言え……、なかなか難易度が高くなってしまうものだ。

だが、これで方向性が決まった。

可能性1、アウラとマーレが共に出場してきた場合。

解決策、頃合いを見計らって降参。

可能性2、アウラのみだが、フレイラの出場に合わせ、ゴールドドラゴンも出場した場合。

解決策、〈飛行<sup>フライ</sup>〉を使えないアウラを置き去りにして、ゴールドドラゴンと空で戦い、なんとか退けた後、余力が無い風を装って（装う必要は無いかも知れないが）自然と負ける形をとる。

可能性3、出場はアウラ+アウラの使役する魔獣の一体

解決策、フレイラに「レベル3」だけ取得させた上位種族へエルダーを発動して完全魔獣化してもらい、魔獣を引き付けてもらいつつ、アウラとは自分が戦う。

可能性4、アウラだけが自分とフレイラを相手にしてくれた場合。

解決策、審判の協力を仰いで、なんとかその場の流れで……という形になるが……

まあ、どちらにしろ、結局のところ、本気でアウラを傷つけるわけには行かないよな。

茶釜さんの娘だし、何より、NPCとはいえ、女の子なんだから…

穩便に行きましようかね、穩便に…

そう思いながらも、うまくいけばいいな…と内心、不安をぬぐい切れないベルリバーだった。